
英雄伝説 ~光と闇の軌跡~

sorano

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

英雄伝説 ～光と闇の軌跡～

【Zコード】

N7541P

【作者名】

sorano

【あらすじ】

導力というエネルギーで生活している大陸、ゼムリア大陸。そこに別世界の闇の英雄達がやってくる。彼らはゼムリア大陸の光になるか闇になるか、物語が今始まる タイトル名変えました。
旧作名：英雄伝説～闇夜の英雄達～

プロローグ（前書き）

ついにやってしまったへへ幻燐の姫将軍と書いてますが実際はVE
RITA後の話です。基本幻燐側しか出す気がないので戦女神キ
ヤラを期待している方は諦めて下さい……

プロローグ

かつて、一つの世界が融合して誕生したデイル＝リフィーナ。数ある大陸の中でもデイル＝リフィーナで2番目に大きい大陸、ラウルバー・シユ大陸のアヴァタール地方で邪竜復活による大きな戦いが起きた。戦いは多くの犠牲を出したが神殺しと半魔人とその使徒や仲間たちによつて邪竜は倒された。

そしてそれが違う道を歩み始めた中で半魔人でありレスペレント地方を収める国、メンフィル帝国の初代皇帝リウイ・マーシルンは亡き愛妻、正妃イリーナの魂を求めて息子シルヴァンに國を任せ、信頼ある仲間と旅に出ていたが、メンフィルを飛び出した孫娘、第一皇女リフィアとリフィアに連れられたメンフィルの客人、魔神エヴリースを捕まえメンフィルに戻し、また仲間と共に旅に出ようとした時リウイの最も信頼する家臣の一人であり混沌の女神、アーライナの神格者ペテレー・セラの体調が崩れ、診察をした所なんとリウイの子供を身籠つていたのだ。これを知つたリウイは一時旅に出るのを中断したのだ。そんなある日……

プロローグ（後書き）

紹介程度に書いたのですつゝじく短いです。更新は基本焰の軌跡を優先するのでかなり遅いと思いますのであまり期待しないで読んで下さい。

第1話

～メンフィル王都・ミルス城内～

新兵達の演習につきあつたリウイはある部屋に向かい、ドアの前に立ちノックした。

コンコン

「はい、どちら様でしよう?」

「俺だ、入つてもいいか?」

「ご主人様! ? どうぞ!」

ドアの中から慌てた声が返され、リウイは相変わらずだと苦笑し部屋に入った。

そこにはお茶の用意をしようとしているペテレーの姿があった。

「あ、ご主人様。今、お茶の用意を致しますので少々お待ち下さい。

」

その様子を見てリウイは呆れた。

「ペテレー……お前はもうすぐ子を産む身なのだから無理はする

な。」

「ですが、折角ご主人様に来ていただいたのに何も御出ししない訳には……」

「構わん。これは命令だ。今はその身を大事にしろ。」

「ご主人様……ありがとうございます。」

リウイの言葉にペテレーは顔を赤くし、椅子にすわり、リウイも椅子に座った。

そしてリウイはペテレーを見、体の調子を尋ねた。

「どうだ、体の調子は。」

「はい、今は大丈夫です。でもときどき赤ちゃんがお腹を蹴るんですよ。ふふ、早く出してくれって言つてゐるみたいです。」

「そりが……元気な子が生まれればいいな……」

「はい……」

ペテレー・ネはリウイの問いに答えた後、暗い顔をした。

「どうした、そのような暗い顔をして。」

「はい……リフィア様達を国に戻しこれからイリーナ様をお探しする矢先に私がこのようになってしまって、ご主人様の旅を中断してしまい申し訳ないんです。」

「そのことか……前にも言つたが気にするな。イリーナを探す旅はあてのない旅になるからな。数年中断した所で支障はでん。」「ですが……」

「くどい。それともお前は俺の子を産みたくないのか？」

「そんな！私にとつてご主人様の子供を授かるなんてこの上なく幸せなことです！」

リウイの言葉をペテレー・ネは慌てて否定した。

「ならばいいではないか。以前にも言つたが子供は多いほうがいい。それも信頼ある女性のなら尚更だ。」「ご主人様……」

「それにイリーナがもし、これを知つたら間違いなくお前についてると言うはずだ。だから今は安静にして

元気な子を産め。」

「ご主人様……はい、絶対に元気な子を産んでみせます！」

リウイの言葉にペテレー・ネは笑顔で答え、そんなペテレー・ネを見リウイは笑みを浮かべた。そしてそこにほかの来客が現れた。

「は～い、ペテレー・ネ！元気？」

「全くあなたときたりいつも騒々しい……少しばけペテレー・ネの性格を見習えないのかしら？」

元気よく部屋に入つて来たのはリフィアの祖母で、リウイの幼馴染

であり側室の一人で、上位悪魔と睡魔族を両親に持つ闇剣士カーリアンと、その後から入つて来たのはリウイの最も信頼する家臣の人であり、飛天魔族のメンフィル大將軍ファー・ミシルスだった。

。

「なによ～いちいち五月蠅いわね～やるつていうの～？」

「私は当然の事を言つたまでよ。あなたがかかつて来るならいつでも相手になるわよ？」

二人はどんどん険悪になり武器を構え始めた。それを見たリウイはいつものように2人を叱りつけた。

「いい加減にしろ、お前達。腹の子に悪影響だらうが。」

「申し訳御座いません、リウイ様。」

「ふう、今日のところはお腹の子に免じて収めてあげるわ。」

リウイの言葉に2人は武器を收めたが相変わらずお互いを牽制していた。それを見たリウイは相変わらずの様子に溜息をついた。

そしてカーリアンはペテレーネに話しかけた。

「よかつたわね、ペテレーネ。あなたずっとリウイの子供が欲しかったんでしょ。私、ずっと傍にいたあなたを出しねいてちょっと悪く思つっていたのよね。」

「そんな！恐れ多いです！私はカーリアン様なら素晴らしいお子様を産むと思つていましたし、そのお陰でリフィア様がいるではないですか。」

「ありがとう、ペテレーネ。」

カーリアンの言葉にペテレーネは慌てて否定した。そしてファーミシルスの方へ顔を向け申し訳ないような顔をした。

「それより、ファーミシルス様より早く子供を授かつて申し訳ない

です……」

「あら、気にしなくていいわ。幼い頃よりずっとリウイ様の傍にいたあなたなら私より早く産んで当然だと思っているわ。」

「ですが、私のような力不足の者が……」

「ペテレー、私はあなたを弱者だと思つたことはないわ。リウイ様のためだけに神格者にまで登りつめたその忠誠心、魔術の力は私を超えていると言つていいわ。もつと自分の力を誇りなさい。そしてリウイ様のためにも元気な子を産みなさい。」

「ファーミシルスの言うとおりだ。プリゾアもあの世できつとお前

を誇りに思つてゐるだろう。」

「ファーミシルス様、ご主人様……ありがとうございます！」

ファーミシルスからの思いがけない励ましにペテレーは自信を持った。

そこにさらに来客が来た。

「元氣であるか、ペテレー、」

「……気持ちよく寝てたのに……」

一人はリウイとカーリアンの孫であり、次期メンフィル皇帝第一候補である第一皇女リフィアともう一人は姫神フェミリンスと戦うために太古の魔術師ブレアードより召喚された魔神の一柱、深淵の楔魔第五位のエヴリースだつた。

「リフィア……もつ少し静かに入室できないのか。それにエヴリー、又を無理やり起してくる必要はないだろ？……」

リウイは相変わらずの孫の様子を見て呆れた。

「せつかく余の新たな妹か弟ができるのに大人しく入つて来れるものか。それにエヴリースにとつても妹か弟になるのだから連れて来て当然であるう！」

リウイの問いをリフィアは一蹴した。

「妹か弟つて……カミ リが産むわけじゃないんだから、正確にはあんたは叔母になるんじゃないの？」

カーリアンはリフィアから普段、婆と言われてた分、ついにリフィアが叔母と呼ばれるようになったのに気付きニヤついた。

「何を言つておるー生まれてくる子が伯父か叔母になるのじゃぞ？」

「全くこれだからカーリアン婆は……」

「だ〜れが婆ですつて〜！！」

「い、痛い、痛い！ 痛いのじゃ〜！！離すのじゃ〜！！！」

婆と言われ怒つたカーリアンはすかさずリフィアの後ろにまわりリフィアの頭を拳でグリグリし、それをされたリフィアは呻いた。

「そのぐら〜にしてやれ、リフィアも新たな命に興奮してるだけだら〜づ。」

「もう、リウイったら。相つ変わらずリフィアには甘いわね！」

リウイに諭されカーリアンは文句を言いつつリフィアを離した。

「ハアハア、死ぬかと思ったのじゃ。リウイ、大好き！」

「これに懲りたらもう少しカーリアンを親切にしてやれ……」

「うん、わかつた！」

リウイの言葉にリフィアは笑顔で答えた。

そしてリフィアはエヴリースとつしょにペテレーネに近寄った。

「エリに余とエヴリースの新たな兄妹があるのか……不思議じゃの。」

リフィアはペテレーネのお腹をマジマジと見、興味深そうに見た。

「お2人ともさわってみますか？」

「よいのか？」

「はい、お2人でしたら赤ちゃんも喜ぶでしょう。」

珍しく恐る恐る聞いたリフィアにペテレーは笑顔で答えた。

「そりか、では早速……おお！かすかだが動いてるぞ！エヴリー
ヌも触つてみるが良い！」

リフィアはペテレーのお腹に触り驚いた。

「ん……わあ、動いている……生きているの？」

「ええ、生きていますよ。この子が生まれたらエヴリーヌ様も姉に
なりますね。」

ペテレーの腹に触つて驚いているエヴリーヌに優しく言った。

「エヴリーヌがお姉ちゃん……ふふ、楽しみ……早く産んで元気
になつて……いつも作るお菓子も楽しみだから……」

「ええ、その時はまた作らせていただきます。」

さまざまの人から祝福されペテレーは幸せを感じ、また仲間もそ
れぞれ新たな命が産まれる時を待つていた……

第1話（後書き）

なんかペテレーネを凄く羨慕してしまった気分です……エヴリーヌ
やリフィアの口調がおかしくないかちょっと心配です……

～メンフィル王都・ミルス城内～

月日が経ちついに、ペテレーネはリウイの子を産んだ。

「ペテレーネ、無事か！」

お産の時部屋の外で待たされたりウイは新たな命の泣き声が聞こえるとすぐに部屋に入つた。

そこには幸せそうな顔で赤ん坊を抱いているペテレーネとそれを優しく見守っているカーリアンの姿があった。

「リウイ、少しばかり着きなさい。全くあなたたら子供が生まれるといつもそうなんだから……」

「ご主人様……はい、見ての通り無事です。それより見て下さい、この子がご主人様の子です……」

慌てている様子のリウイを見てカーリアンは呆れた。
そしてペテレーネは抱いていた子をリウイに見せた。

「仕方がなかろう。それよりこの子か……ほづ……元気な子だ……
それに魔力もリフィアに負けず劣らずあるようだな……きっと素晴らしい子に成長するだろう。性別はどうちだ？」

リウイは抱いていた子を渡されその子供の魔力を感じ取り驚いた。

「はい、女の子になります。」

「そりゃ……リフィアがいる以上恐らくこの子は王位継承者にはなれないが、正式な皇女扱いにはするから安心しておけ。」

「そんな！私はご主人様の子を授かれただけでも嬉しいのにそこまで気にして頂けるなんて……本当にありがとうございます！」
ペテレーネはリウイの優しさを感じ感謝した。

そしてリウイはある事に気が付き、ある提案をペテレーネにした。

「ペテレーネ、いつまでもその呼び方はやめてはビリだ?」「え、呼び方といいますと……?」

「その“ご主人様”だ。子供が産まれた以上その呼び方もおかしかろ?」

「え?」

「え……でもご主人様はご主人様ですし……」

ペテレーネはリウイからの突然の提案に戸惑った。

「子供にとつて父と母がお互い呼び合つのにはおかしかろ? お前ならば俺を呼び捨てにしてもいいのだぞ?」

「あら、それなら私も呼び捨てにしていいわよ? お互いリウイの子を産んだし、私とあなたは長年の仲間じゃない。」

「そんな! お2人を呼び捨てにするなんて恐れ多いです! その……せめて名前でしたら……」

ペテレーネは2人の提案に恐縮し、その後小さな声で呟いた。

それを見てカーリアンは感心し、リウイは笑みを浮かべた。

「あなたって本当遠慮気味ねえ……」

「ならばこれからは俺の事も名前で呼べ。これは命令だ。」

「はい、わかりました……その……リ、リウイ様……」

ペテレーネは恥ずかしげにリウイの名前を呼んだ。それを聞きリウイは笑みを浮かべた。

そしてカーリアンがある事に気付いた。

「そういえばその子の名前はどうするの?」

「ふむ……名か。ペテレーネ、お前がつけていいぞ。」

「え、私ですか!? よろしいのでしょうか?」

ペテレーネはリウイの言葉に驚いた。

「構わん。お前が産んだのだから当然だ。シルヴァンの時は俺がつけたがほかの子はその子の母につけさせたしな。」

「わかりました……では、プリネというのはどうでしょう?」

ペテレーネは少し考案子供の名を言った。

「プリネ……珍しい名だな。どこからその名が出た?」

リウイは新たな子の名を聞きペテレーネに名の由来を聞いた。

「はい、プリゾア様の名前から頂いた名です。私にとつてあの方はもう一人の母親のような方でしたから……女の子が生まれたらこの名前にしようかなとずつと思つていたんです。」

「なるほどな……わかつた、今日からこの子は「プリネ・マーシルン」だ。ペテレーネ、お前もマーシルンを名乗つてもいいぞ?」

「いえ、お気持ちはありがたいのですがそれだけはできません。リウイ様の妃でその名を名乗つていいのはイリーナ様だけであると私は思つていますから。」

「そうか……」

「そうね……ペテレーネの言つとおりだわ。」

王族の名を名乗つていいと言われたにも関わらずそれを断り、その断つた理由を知り

ペテレーネのその忠誠心にリウイは感心し、またカーリアンもその言葉に賛成した。

「ペテレーネ! 産まれたそうじゃの! 余の新たな妹はどこじゃ!」

「エヴリーヌの妹……どこ?……」

そこに新たな妹の誕生で興奮しているリフィアと秘かに期待しているエヴリーヌが部屋に入つて来て部屋は賑やかになった。

その後、ファーミシルスやシルヴァン等リウイの縁者や家臣が次々にやつて来て賀辞を述べた。

そして神格者の子で、帝国の新たな皇女の誕生にレスペレント地方の人々は喜び、記念に国を挙げた祭り等を行つたのでレスペレント地方は一時期賑やかになつた……

そして賑やかなレスペレント地方に一つの魂が彷徨つて来て太古の

迷宮、「ブレアードの迷宮」の中にある不思議な魔法陣に入り消えた……

（クロスベル自治州・ウルスラ病院）

同じ頃、デイル・リフィーナとはまた異なる世界の大陸、ゼムリア大陸の様々な貿易がされている自治州、クロスベルでも新たな生命が誕生した。

ある夫妻の夫は病室の前でうるうるしてゐる時、そこから新たな生命の初声が聞こえた時、

いてももたつてもいられなく病室の中に入り、子供を抱いている妻の姿を見て安心し、笑顔で妻に近づいた。

「よくやつた！本当にかわいい子だよ。……」

「ええ……見て、この金の瞳と髪はあなた似ね。……」

「そうか！でも女の子だからきっとお前に似て美人になるさー。」

「もう、あなたつたら……」

赤ん坊を見て赤ん坊の将来を語り合つてゐる夫妻が目を少し離して

いる間に別の世界から来て

彷徨つていた先ほどの魂が赤ん坊の中に入り、その事に気付かない夫妻は赤ん坊の名を考えていた。

「名前はどうしようか……？」

「一応、考えてあるわ。エリィ、セリース、イリーナ。どれがいいかしら？」

「どれもいい名だね。迷うな……」

夫は妻が提案した名前に迷い、一通り考へた後ある名前に決めた。

「そうだな……イリーナはどうだ？　なんとなくその名にしたらこの子は身分のある男性に嫁いで幸せになる気がするんだ。」

「イリーナ……いい名ね。偶然かしら、私もその名を口にした時、

そう思つたわ。」

「決まりだな！今日からこの子の名は「イリーナ」！「イリーナ・マグダエル」だ！」

夫は決めた名を口にし、妻もその名を口にし赤ん坊を祝福した。

名を決める時、妻が「イリーナ」の名を口にした時、赤ん坊が反応したのは誰も気づかなかつたことだつた……

そして数年後……

第2話（後書き）

オリジナルキャラ、プリネ登場です。今分、これからの中年でプリ
ネとリフィアが主体になると想います。ちなみにエリィは生まれま
すのでご心配なく……

→アヴァタール地方・冥き途

新たなメンフィル皇女、プリネが生まれて数年後リウイはペテレーネ、カーリアン、ファーミシルス、そして幼い娘のプリネを連れて死した命が集まる場所、冥き途にイリーナの魂の行方を門番に聞きに来た。

「あら、お久しぶりですね。またお妃様の行方を聞きに來たんですね？」

「……久し……ぶり……」

リウイ達の姿を見つけ、姿を現したのは冥き途の門番であり神殺しの使い魔であり、魔槍の使い手、リタ・セミソと、同じく神殺しの使い魔であり、ソロモン72柱の1柱、魔神ナベリウスが姿を現した。

姿を現した2人にリウイは魂の行方を聞いた。

「イリーナの魂はあれから何かわかつたか？」

「……何年か前に……北……行つて……消えた……場所……深い……そこで……魂……感じにくい……」

「数年前に北のほうへ行つて魂が消えたそうです。場所はどこか地下深くに潜つてしまつてそこから魂の反応が感じとりにくいうどうです。」

独特の話し方をするナベリウスを補佐するようにリタが説明した。

「消えたつて……もしかして、魂が消滅したつてこと！？」

カーリアンは説明を聞き焦つた。

「いえ、魂が消滅したのならナベリウスが感じ取ります。ナベリウ

スが存在を微かに感じましたから恐らくですが神の墓場のよつな別次元の世界に行つて彷徨つてゐるか、そこで新たな人間に転生したかもしません。」

「別次元の世界か……それにここから北の地方なら我が領土であり、地下深くならブレアードの迷宮に手がかりがあるかもしれんな。

「ええ、あそこは全ての階層は制覇しましたが、転移門に未だ謎の部分がありますから可能性はあるかもしませんね。」

リタの説明でリウイは場所を推測しました、ファーミシルスもリウイの考えに賛成した。

「そうだな……ならば国に戻り次第、迷宮の探索隊を再び結成し調べてみるか……」

リウイは少し考えた後これからの方針を決めた。

「あ……よければこれをどうぞ。」

ペテレー・ネは荷物からお菓子を出し門番の2人に渡した。

「……甘い……匂い……あり……がとう……」

「わあ、ありがとうございます。エクリアちゃんやマリー・ヤちゃんのお菓子もおいしいですけどこれもおいしいから気にいつてるんですよ。」

「気にいつて頂けたのなら何よりです。」

ペテレー・ネは2人の様子を見て笑顔になつた。

そこに興味深そうに周りをみていた母と同じ髪を持つ娘、ブリネが2人と母のところに来た。

「ねえねえおとうさま、おかあさま～この人達、だれ～」

娘の素朴な疑問を聞きペテレー・ネは優しく答えた。

「この人達はお母さん達の友達のようなものよ。ほら、挨拶をしますい。」

「わかつた～メンフィル皇女、ブリネ・マーシルンです～よろしく

おねがいします。」「

「よろしく……」「

「わあ、かわいい。ペテレーネちゃんの子供ですか？私はリタ、こ
っちはナベリウスよ。よろしくね。」

幼いながらもたどたどしい礼儀で挨拶をしたプリネに2人は自己紹介をし、少しの間おしゃべりをした。

「…………そろそろ国に戻るぞ。」

「はい、リウイ様。お2人ともお世話になりました。プリネ、帰りますよ。」

「わかつた！じゃあ、またね。リタちゃん、ナベリウスちゃん。」

「ええ、無事見つかる事をお祈りしておきます。」

「…………また……会つ…………」

門番の2人に別れを告げたリウイ一行は祖国、メンフィルに戻った

……

→ブレア　ド迷宮・地下100階層・野望の間→

広大なレスペント地方にある古代の迷宮”ブレア　ドの迷宮”に
帰還したリウイは調査隊を結成し
迷宮内の奥深くを調べて、そこでメンフィル機工軍団の団長、古代
の兵器でもある機工種族の
シェラ・エルサリスより報告をうけていた。

「謎の転移門だと？」

「ハ、調査隊の一部が調べましたところ、現在登録済みの転移門の
ほかに記録されてない新たな転移門が見つかり現在、その門の先を
探索中です。」

「そうか……では、ほかの調査隊をもそちらにも廻してその転移門
の先を重点的に調べるようにしておけ。」

「御意。」

淡々と報告するシオラにリウイは新たな命令を出した。

「メンフィル王都・ミルス城内」

そして数日が経ちリウイは謎の転移門から帰還した調査隊の隊長より報告を受けていた。

「……別次元の世界だと……？」

「ハ、謎の転移門の先を調べました所、別の世界につながつてありました。最初はほかの大陸かと我々は疑いましたが、調査しましたところ、この世界とはあまりにも違う文明が発達しておりました。さらにそこにも信仰されている神はいたのですが、空の女神エイドス^{マーズテリア}”という聞いたこともない神しか信仰されていなく”軍神等の他の神の名を出しましたが全く知らない様子でしたので別次元の世界だと我々は判断致しました。」

「光の勢力で最も知られている”軍神”も知らぬとはな……それは信憑性が高そうだな……ほかに報告はないか？」

リウイは新たな世界が存在することを知り、内心驚いたが心の奥深くに止め、先を促した。

「ハ、あの門には欠点がございました。」

「欠点だと？」

「我々先行隊より後に来た部下達が申すには我々とは異なった場所に出たようです。ただ、向こうからこちらに戻つてくる門は何か所かに固定されているというおかしな現象がございました。」

「その異なった場所というのは全く違うのか？」

「いえ、調べました所、”ロレント”という街の近くの森に全て出来ましたのでそれほど離れてはございませんでした。魔術師達の話ではもうすぐ出る場所の固定は出来るそうです。」

「そうか……御苦労、下がつていいで。」

「ハ！失礼いたします！」

隊長はリウイに一礼した後部屋を後にした。

「リウイ、やつたじやない！もしかするとそこにイリーナ様がいるかもしないわね。」

報告を聞いていたカーリアンは喜んだ。
「まだ、断定はできん。だが、可能性は出てきたな。しばらくはその世界に拠点を作り調べるとするか。」

カーリアンの言葉を否定しながらもリウイは微かな希望を持ち、笑みを浮かべた。

（ブレア ド迷宮・謎の転移門前）

そこにはリウイ一行のほか、リフィア、エヴリース、シェラとファーミシルスの副官、ティルーノエルフのルースがいた。

「では、これより別次元の世界の調査及び拠点作りに我々が先行する。みな、準備はいいか。」

「いつでもオッケーよ。」

「こちらも万全です。」

「ふふ、腕がなりますわ。」

3人の頼もしい言葉を聞きリウイはリフィアとエヴリースの方に顔を向けた。

「……どうしてもお前たちもついてくるのか？」

「当たり前であろう！別世界に余の名を知らしめしてくれる！」

「エヴリースはお兄ちゃんといつしょならなんでもいい……プリネとお留守番もいいけど、すぐ帰ってくるんでしちゃう……？」

「……仕方のないやつらだ。絶対に俺達から離れるなよ？」

おいていつてもついてきそうな2人にリウイは溜息をつき注意をした。そしてシェラとルースに顔を向けた。

「こつでも軍は出せるよつにしておいたか？」

「ハ、機工軍団は問題ありません。」

「こちらも問題なく迷宮の外に待機させています。みな、リウイ様の久しづりの出陣に勇んでおります。」

かく言ひ俺も楽しみなのです。」

淡々と報告するショラと年甲斐もなくワクワクしているルースの言葉にリウイは顎を背を向けていた。

「では、みな行くぞ！」

そしてリウイ達は門の先に進み光につつまれた……

第3話（後書き）

リタとナベリウスは出しておおかしくなつたので出しました。多分戦女神キャラはもう出ないかと……リウイ達がついた時の時代は”焰の軌跡”といつしょですのでいくつかの軌跡キャラの運命を改変いたしますので期待して待って下さい。

「ロレント市内」

「ズドーン！ダダダダダ！キヤア！助けてくれ！逃げろ！」
ディル・リフィーナとは異なる世界の大陸ゼムリア大陸にある小国、リベールの都市の一つロレント市内は戦場であつた。なぜそのような事になつたのは突如、エレボニア帝国がハーメルという村をリベル軍が襲つたと言い、戦争を仕掛けってきたのだ。リベール軍は劣勢ながらも軍人力シウス・ブライドが考えた作戦で反撃をし始めたのだ。この作戦でエレボニア帝国軍は崩れ始めたのだが、作戦により孤立した一部の部隊が半ばやけ気味にロレントを襲つたのだ。そしてあちこちで市民が戦闘に巻き込まれ、悲劇が生まれようとした。

「おかあさん！」

「に……げ……て……エ……ステル……」

瓦礫に埋もれている女性はカシウス・ブライドの妻レナで呼びかけているのはその娘、エステルだつた。

レナは砲撃によって崩れてきた瓦礫からエステルをかばい重傷を負い、正に命が風前の灯であつた。

「誰か」助けて！おかあさんが死んじゃう！」

エステルは必死で助けを呼んだが逃げる事に必死な市民達は誰も気が付かなかつた。

そこにリウイ達が転移してきた。

「ふうついたわね。あら、面白い事になつてるじゃない。」

カーリアンは周りの戦闘を見て不敵に笑つた。

「きやは、久しぶりに遊べそう……」

エヴリーヌも周囲の状況を見て遊ぶ相手を見つけたような顔をした。

「報告では街中に出るというのはなかつたんですね……」

ファーミシルスは街中に出たのに気付いて呆れた顔をした。

「まだ、転移の固定が出来てないのだから仕方ないだろ？……それより現状の把握をするぞ。」

リウイは周りを見て現状を把握しどう動くか考え始めたところ、その姿を見つけたエステルがリウイのマントをひっぱた。

「ねえ、おかあさんを助けて、お願ひ！」

「……なんだ、貴様は？」

マントをひっぱられた事に気付いたリウイはエステルに声をかけた。「お願い！あそこにいるおかあさんを助けて！おかあさんが死んじやう！」

エステルは瓦礫に埋もれているレナを指差してリウイに懇願した。

「リウイ！助けようぞ！それが余達王族の義務のひとつである！」「リフィアはレナを見てリウイに答えを求めた。

「（……母か）ああ。」

母の助けを懇願しているエステルを見て人間に追われ母に庇われた昔を思い出し、瓦礫のところに近寄った。

「さつさと片付けるぞ。カーリアン、ファーミシルス、悪いが手伝つてくれ。」

「しょがないわね～」

「ハ、了解しました。」

そして3人は協力して瓦礫からレナを出した。

「おかあさん！」

瓦礫から出された意識を失っているレナを見てエステルは縋りつくように泣いた。

「おかあさん！死なないで！お願ひ！」

「……リウイ様……」

それを見てペテレーネは懇願するような目でリウイを見つめた。

「わかつている。治療してやれ。」

「はい、わかりました！」

「余も力を貸そうぞ！」

リウイから許可をもらいペテレーネとリフィアはレナの所に近寄った。

「おかあさん、助けてくれるの？」

「ええ、今助けますからね。」

「安心するがよい。余の辞書に不可能という文字はない！」

泣きはらした顔をあげたエステルにペテレーネは優しく言つてリフィアと共に魔術を発動した。

「暗黒の癒しを……闇の息吹！……」

神格者であるペテレーネと、魔力の高いリフィアの手から放たれた紫色の光はレナの傷を完全に癒した。

そしてレナは目覚ました。

「う……ん？ あら、どうして傷が？」

レナは重傷だつた傷が治つてることに気付き不思議がつた。

「おかあさん！ よかつたよ。」

「エステル……ごめんね心配をかけて……」

目が覚めたレナにエステルは抱きつき、抱きつかれたレナは受け止めエステルの頭をなでた。そしてそれを見ていたリウイ達に気付いた話しかけた。

「あの……どちら様でしょうか？ 見た所帝国兵でもありませんし、かといってこちらに住んでいない方と見受けられていますが……」

「……ただの旅の者だ。」

レナの問いにリウイは適当に答えた。

「あのね、おかあさん。この人達がおかあさんを助けてくれたの。
「そうでしたか……本当にありがとうございました。」

「礼はいらぬ。それが余達の義務であるからな。」

エステルから事情聞いたレナはリウイ達にお礼を言つたがリフィアのおかしな言動と

翼についているファーミシルスを見てレナは疑問を持った。

「義務……？それにあなたは人間ですか？」

レナの疑問にどう説明するべきか考えていたリウイ達のところに複数の帝国兵達が包囲した。

「市民がいたぞ！殺せ！」

ズダダダダ！

帝国兵達は銃を構え一気に放ち、それを見たレナはエステルを抱きしめた。

「ハツ！」

「甘い！」

「遅いわよ！」

「させません！」

「させぬわ！」

「…………な…………」「…………」

放された銃弾はリウイのレイピア、カーリアンの双剣、ファーミシルスの連接剣にはじかれ
リウイ達の横を通り過ぎた銃弾はペテレーネとリフィアの簡易結界
に弾かれ兵達は驚愕した。

「まさか、いきなり攻撃してくるとはな……」

リウイが出す鬪気に戦士達は後ずさつた。

「ク……臆するな！かれ！」

「…………オオ……」「…………」

一人の兵の言葉に兵達はリウイ達の恐ろしさも知らずに襲いかかつた。

後にこの一人の兵の判断がエレボニア帝国の衰退の原因となつた…

第4話（後書き）

次回はリウイ達の躊躇です。といかりウイ達に勝てる人って英雄伝説シリーズはいないんですけどね……

第5話

突如襲いかかつた兵達にリウイ達は戦闘態勢に入った。

「みな迎撃するぞ！」

リウイはレイピアを兵達に向けて号令をし

「ハイ！リウイ様！」

ペテレーネは杖を構えて詠唱をし始め

「ハツ！」

ファーミシルスは連接剣を構え

「ふふ、楽しませてもらひつわよー」

カーリアンも双剣を構え

「力持たぬ者を攻撃した上、余達に剣を向けたその罪……死して悔
いるがよい！」

リフィアはペテレーネと並ぶような位置で杖を構えて詠唱をし始め

「きやは、遊んであげる……」

エヴリースは弓を虚空から出し、片手に魔力の矢を作りだした。

「「「死ね！」「」」

「炎を味わえ！フレインバル！」

ゴオ！

「「「ぐああ……」「」」

リウイに襲いかかつた兵達はリウイの炎を纏つたレイピアによつて
急所をつかれた上、その身を炎が跡形もなく焼いた。

「相手は女子供がほとんどだ！殺せ！」

「「「「オオツ！」「」」

「ふふ、ファーミ、何人殺せるか競争ね？それエ！」

「フン、こんな雑魚共相手に何を言つてるのかしら？……まあ、あ

なたには負けないけどね！」

ズバ！ドス！

「「ガ！」」

「「ガあ……」」

軽口を叩きながらもカーリアンとファーミシルスは次々と兵達を葬つていった。

「うふふ、みんな死んじゃえ！」

ドスドスドス！

「「「グ……ア……」」

遊び感覚のエヴリーヌが空中に向けて放つた矢は空中で分散し複数の兵達の眉間や喉元に当たり絶命させた。

「大いなる闇よ……ティルワンの死碟！」

「古より伝わりし純粹なる爆発よ……落ちよーエル＝アウエラ！」

ゴオオオオ……ズドーン！

「「「「ギ！」」」

ペテレーネの暗黒魔術とリフィアの純粹魔術によつて周りの兵達は跡形もなく消え去つた。

リウイ達の圧倒的な強さに帝国兵達はなすすべもなく命を落としついには突撃を命令した兵しか残らなかつた。

「……さて、残るは貴様だけのようだな。」

「ヒ！な、なんなんだよ……貴様らはあ！」

近づいて来るリウイに恐怖した兵は銃を何度も撃つたが、全てリウイの剣によつて弾かれ弾切れになつた。

「俺達く闇夜の眷族」に剣を向けた事をあの世で後悔するがいい！ズバ！

そして一瞬で相手に詰め寄つたリウイの剣が兵の首を通り、恐怖の顔をした兵の首が地面に落ちた。

「フン、雑魚が。あつけない。」

「ん、ちょっと物足りないわね。」

物足りなさそうな顔をしたカーリアンと死体に侮蔑の顔をむけたファーミシルスは武器を収め、ほかの仲間達も武器を収めた。

「あなたたちは一体……」

驚異的な強さを見せたりウイ達をエステルに死体を見せないように抱きしめたレナは呟いた。

「……いずれ我らく闇夜の巻族^ノを知る時が来るだろ。せっかく助かった命だ。娘共々さつさとここから離れるがいい。」

「……わかりました。命を助けて下さって本当にありがとうございました。」

リウイの警告にレナはリウイ達に頭を下げた後、エステルを抱いて戦場から走り去った。

「それでこれからどうするのリウイ？」

レナ達を見送ったカーリアンはリウイにワクワクした顔で何をするか聞いた。

「少し待て。ファーミシルス、確かにこの世界には3カ所の国があるそうだな？」

「ハツ、”カルバード共和国”、”エレボニア帝国”、そしてここ”ロレント”を持つ国”リベル王国”の3カ所の国が主体で、ほかは自治州等小国がちらばつているほどか。先ほど助けた女性の話から推測すると我らを襲つたのはエレボニア帝国兵か。」

「そうか……フ、この世界に拠点を作る手間が省けたな。」

「では……？」

リウイの言葉から先を予測しファーミシルスは不敵に笑つた。

「ああ、ここロレントを”一時的”に我がメンフィル”保護領”にしここを拠点にエレボニアに攻め入る。ファーミシルス、お前は一端戻つてルース達を連れて来い。戻る転移門の場所は知つてゐるだろう?」

「ハッ！すぐに連れて来てまいりますのでお待ち下さい！」
リウイの命令を受けたファーミシルスは翼を広げ空へ上がり転移門
がある森のほうへ向かった。

「フフ、國を攻めるなんて”幻燐戦争”以来じゃないの？」

「勘違いするな。俺達は”襲われた”から対処するだけだ。ロレン
トもいざれリベルに返還する。まあ、”条件”は付けさせてもら
うがな……」

久しぶりの戦争の気配で笑っているカーリアンの言葉をリウイは否
定しながらも笑みを浮かべた。そしてリフィアのほうに顔を真剣な
顔を向けた。

「リフィア、お前にとつてこれが初めての國同士の戦争になるだろ
う。怖いのなら国に戻つてもいいぞ？」

「余を誰だと思っているのじゃリウイ？余は次期メンフィル皇帝、
リフィア・イリーナ・マーシルン！余の辞書に後退の一文字はない
！あつても消し去ってくれる！此度の戦いで得た知識を余の力にし
てみようぞ！」

「そうか……ならばしっかり学べ。」

「当然じゃ！」

迷いのない顔で否定し、前向きな発言をしたリフィアにリウイは孫
娘の将来を期待した。

そしてそこに先ほどメンフィルに戻つたファーミシルスに先導され
たルース率いる陸兵軍団とシェラ率いる機工軍団が到着した。

「リウイ様！」
「指示通り我らメンフィル軍、いつでも出れますー！」
命令を！」

「指示を、リウイ様。」

命令を待つ2人にリウイは頷き、勇んでいる兵達の正面に立ち、レ
イピアを空高くへ振り上げ大きな声で号令をした。

「これより我らメンフィル軍はロレント市を”保護”しエレボニア帝国に進軍する!! 一般市民達の保護と建物の消火を最優先にしろ!! 力持たぬ一般市民を襲うエレボニア帝国兵に慈悲はいらぬ!! 行くぞ!!!!」

「オオオオオオオオツオオオオオオオツ!!!!!!」

リウイの叱咤激励を受け、武器を掲げ勇んだ兵達は帝国兵との戦闘や一般市民の保護を行い始め、わずか2刻で市内の戦闘は終了した。

そしてリウイ達は市内の戦闘後の処理をし、市内にいくつかの部隊を残し1日後には援軍と共に破竹の勢いで帝国軍が守るエレボニア帝国トリベルの国境、ハーケン門を突破しエレボニア帝国に侵攻をし始めた。

何の前触れもなく、突如現れたメンフィル軍はゼムリア大陸全ての国に激震を走らせた……

第5話（後書き）

やばい、どんどんアイティアが来ます。本編に入るまで下手したら
じつを更新し続ける気がします……

第6話

（エレボニア帝国・平原）

晴れ渡る平原に2つの軍が睨みあつていた。一つはエレボニア帝国でも5本の指に入る名将、ゼクス・ヴァンダール率いるエレボニア帝国軍でもう一つは突如どこからともなくロレントより現れ、ロレントの帝国兵を殲滅した後、破竹の勢いでハーケン門を突破し次々とエレボニア帝国領を制圧しているリウイ、ファーミシルス、シェラ、ルース率いる猛者揃いのメンフィル皇帝軍だった。

「（ク……リベル攻略だけでも手間取つてゐるのに、ここで我が國土に侵攻する強国が現れるとは……これもリベルに無実の罪を被せた我らの報いか……）全軍、ここで必ず押しとめるぞッ！――今こそ我らの忠誠を皇帝陛下に見せてみよ！――」「イエス、サー！！！」

目の前の謎の軍 メンフィル軍の強さを感じ取り自軍の劣勢を悟つたゼクスは自分を叱咤するよつに兵達に号令を挙げた。

「全軍突撃ツツッ！！」

「オオオオオツオオオオツ！！！」

ゼクスの命令で歩兵や導力戦車はメンフィル軍に向かつて突撃した。

その突撃を丘の上からリウイ達は見ていた。

「リウイ様、機工軍団、戦闘配置完了しました。ご指示を」機工軍団の戦闘配置を完了したショラは主君の命令を待つていた。

「よし、突撃してくる帝国兵どもを一掃しろ。」

「了解しました。 全軍に通達、第一戦闘準備。繰り返す

ウイイ シ……

リウイの命令を受けた軍団長シェラの指令に反応し、兵士たちが唸りにも似た騒動音を徐々に高めていた。

「（……なんだこの音は……まさか！）いかん！全軍後退せよ！」風に乗つて聞こえてきた騒動音に嫌な予感を感じ、ゼクスは後退の命令を出した。

「我が主、攻撃準備完了。」

「攻撃開始だ。」

「……攻撃開始。」

ズド ン！！！

「　　」 ツ！！！」「　　」

「なッ！！！」

しかしその命令は空しくリウイの命令によりシェラ率いる機工軍団が放つた砲撃は平原を轟かす大爆音と共に、業火と爆発が一瞬で突撃した敵兵を飲み込んだ。兵達の断末魔の叫びさえ焼き消し導力戦車さえも跡形もなく吹き飛ばした

機工軍団の一斉砲撃にゼクスは驚愕した。

「……目標攻撃範囲の生体反応が半減、残存した敵兵に動搖が見られます。」

「わかつた。御苦労。」

シェラの報告を聞きリウイは兵達の前に出て大声で号令をした。

「我らはこのまま田の前の帝国軍を突破し、エレボニア主要都市の一つに侵攻する！兵は将を良く補佐し、將は兵を震い立たせよ！何人たりとも遅れることは許さんぞッ！！」

「オオオオオオオオオオオオオオオオオオツツツ！！！」

リウイの叱咤激励に応じて勇ましい雄叫びを上げたメンフィル軍は一斉に突撃を開始し帝国兵達を蹂躪した。

動搖している帝国軍はなすすべもなく突撃したメンフィル兵に次々と討取られて行つた。

「…………まさかこれほどの強さとは…………全軍、退却せよ…………」
戦場の敗北を悟つたゼクスは退却命令を出し、退却をし始めたのが。

「ギャア！」
「グワア！」
「な、何が起こつた！」

次々と討取られて行く周りからの叫び声にゼクスはうろたえた。

「フフ、どこを見ているのかしら？」

「どこだ！どこにいる……馬鹿な！」

どこからともなく聞こえて来た声を探していただゼクスは空を見上げた時、降下してくるファーミシルス率いる親衛隊の飛行部隊に驚愕した。

「まさか、天使……」

「フン！あんな奴らと同等だなんて氣分が悪いわ。……見た所貴様が指揮官のようだからここで討取させてもらつわよ。」

ゼクスの呴いた言葉に降下したファーミシルスは鼻をならし連接剣を構えた。

「戦う前に聞きたい事がある……貴殿等は何者だ！なぜ、我が国土を侵攻した！」

「フフ……死に行くものに教えてやる義理はないけど、冥途の土産に教えて上げるわ。私はメンフィル大將軍ファーミシルス！誇り高き闇夜の巻族の国の将なり！貴様らによる我らが王を攻撃した罪、そして我らが王の悲願のため、貴様等には死を捧げて貰うわよ！」「メンフィル…………！？闇夜の巻族…………！？我らが貴殿等の王を襲つただと…………！？何を言つてはいるのか理解できんぞ！」「おしゃべりはここまでよ……ハツ！」

「ツー！」

ガン！

戸惑っているゼクスにファーミシルスは襲いかかったが咄嗟の判断で剣を抜いたゼクスは防御した。

「少しほどきるようね……楽しませて貰うわよ！」

「クツー！」

「ガン！ ギン！ ガン！ ヒュツ！」

人間でありながらファーミシルスの攻撃を捌き致命傷を避けていたゼクスだったが、メンフィルでも一、二の実力を争うファーミシルスには叶わず徐々に疲弊して行つた。

「ハアハア……（つ、強すぎると）の私が手も足もでんとは……）

「フフ……神格者でもない人間にしては中々やるようだけど、遊びはここまでよ、ハツ！」

「クツー！」

疲弊したゼクスは迫る連接剣を交わそうと動いたが、疲弊していた体は云う事を効かず少ししか動かなかつたので

攻撃を受けてしまつた。

「グアアアツツー！！」

「少将ツー！」

ファーミシルスの凶刃を受けて叫び声を上げたゼクスを見てファーミシルスの部隊と応戦していた兵士達は思わず悲鳴を上げた。

「だ、大丈夫だ……うろたえるな。」

「しかし少将、目が……！」

駆け寄つてくる兵達を片手で止めたゼクスだったが、もう片方の手で連接剣で斬られ血を流し続けている片方の目を押さえていた。

「フフ、疲弊しながらも致命傷をさけるとはやるじゃない……だが、ここまでよ……！」

それを見てファーミシルスは半分感心し、止めを刺すため連接剣を振るつた。

「グウツ！」

「な……！」

「あら。」

ゼクスは迫り狂う連接剣を見てもはやこれまでかと諦めたがほかの兵が楯になつたのを見て驚き、ファーミシルスも少しだけ驚いた。

「少……將……お逃げ……下さい……グフ！」

ファーミシルスの剣によって貫かれた兵は血を吐き事切れた。

「少將、今のうちにお逃げ下さい！」

「お前達をおいて逃げるものか……！やめろ、離せ！離せ……！」

わめくゼクスを兵達は抑え戦場から退避しようとした。

「チッ、逃がすか！」

「させるか！少将をお守りしろ！」

ズダダダダダダ！

追撃しようとしたファーミシルスを止めるため、周りの兵達は銃を撃つたが全てファーミシルスやファーミシルスの部下によつて防がれた。

「鬱陶しい！……闇に落ちよ！テイルワンの闇界！」

「アアアアアアッ……！！！」

「怯むな！少将を逃がす時間を稼ぐだけでいい！」

「オオツツ！……！」

ファーミシルスの暗黒魔術を喰らつた兵達は叫びを上げて事切れた。しかしそれでも将を守るために挫けずファーミシルス達に帝国兵達は襲いかかつた。

「どうやらよほど死にたいようね……いいわ、その心意氣を買つて上げるわ！親衛隊よ！まずはこいつらを皆殺しにしてその後逃げた将を追うわよ！」

「――ハツツツツ――！」

ファーミシルスを中心とした飛行部隊に周りの帝国兵は一矢も報いることができずわずか1刻で全滅した。

「フン、雑魚共があつけない！」

全滅した兵に侮蔑の顔を向けたファーミシルスは武器を収めた。そこに伝令を携えた副官のルースがやって来た。

「リウイ様より伝令です、ファーミシルス様！敵は全滅し街も制圧したこととでただちに部隊を戻すようにとのことです！」

「……そう。指揮官を討ち取れなかつたのは口惜しいがあの程度の者を逃がしたくらいで支障は出ないわ。親衛隊、ただちに帰還せよ！」

「――ハツツツツ――！」

ファーミシルスは指揮官が逃げた方向を見た後踵を返し、リウイ達の元へ向かつた。

……
この戦いでエレボニアは全兵力の4割と主要都市の一つが失われた

第6話（後書き）

今年最後の更新です。みなさんよいお年を…… 感想お待ちしております。

第7話（前書き）

あたましておむどうじいじゅうこまか。 これからもよみしへお願こします。

「グランセル城」

リベールの首都グランセル城内は今、新たな第3勢力謎の軍 メンフィル軍についての話し合いが行われた。

「……それで、現在ロレントに駐屯している謎の軍についてはわかりましたか？」

不安そうな顔で情報を聞いたのはリベールの全国民に慕われているリベールの女王、アリシア・フォン・アウスレーゼであった。そして報告を待つ人物の中にはロレントに妻と娘がいるリベールの英雄、「剣聖」カシウス・ブライトもいた。

カシウスは最初ロレントが謎の軍に制圧されたと聞き、一人で向かおうとしたが上司や部下達総動員で押しとどめられなんとかグランセルに留まつたのだ。ロレントの状況を最も知りたかったため、ロレントへ偵察に行つたカシウスの部下・リシャールが戻つた時は鬼気迫る顔で妻と娘の状況を聞き、リシャールを脅えさせ女王にたしなめられてようやく大人しくなつたのだ。

「ハッ！では報告いたします！現在ロレントに駐屯している謎の軍はメンフィル帝国軍という名前でございました！」

「メンフィル帝国……？エレボニアではないのか？」

聞いたこともない国の名前を出されリベールの将軍、モルガンは確認するように聞いた。

「間違いございません。町人の振りをし見回りを行つてゐる謎の兵に聞きました。念のためエレボニアの間違いではないかと聞きましたが強く否定されました。」

「君主の名前はなんという者ですか？」

アリシア女王は先を促すように聞いた。

「ハツ！現メンフィル皇帝はシルヴァン・マーシルン。そして現在軍を率いているのはその父リウイ・マーシルンという者だそうです。そしてリウイ・マーシルン率いるメンフィル皇帝軍はロレントを制圧後翌日には部隊を残しハーケン門へ向かつたとのことです。」

「……市民はどうなつていてる。」

最も聞きたかつた事をカシウスは心中で妻と娘の無事を祈るようにして聞いた。

「はい。市民達は少々とまどつてはいますが普通の生活をしてました。聞けば襲撃の混乱の最中に突如現れ、市民達の保護や建物の消火をしエレボニア兵達を皆殺しにしたそうです。戦闘後は食料、医療品の配給や市民の怪我人や病人の治療も行つていて、市内は至つて平和です。ただ……」

「ただ……とはなんだ？ハツキリ言え！」

「カシウス、落ち着け！」

リシャールの言葉を濁すような言い方にカシウスは我慢できず声を上げたがモルガンに窘められた。

「……取り乱して申し訳ございません、將軍。リシャール続きを。」

「ハツ！メンフィル兵の中には人ではない存在がいました。」

「人でない？どういうことですか？」

アリシア女王はリシャールの言葉に疑問を抱き聞いた。

「見た目は人なのですが翼や尻尾がついている者や明らかに人の姿ではない者がいました。メンフィル兵によると彼ら自身を含め自ら”闇夜の巻族”と名乗りました。」

「”闇夜の巻族”……聞いたこともない人種ですね。ほかにはありますか？」

アリシア女王は未知の人種名を聞き少しの間思考したがほかの情報を聞いた。

「はい。もうひとつございまして……こちらは我アリベールというよりゼムリア大陸全てが驚愕するようなことかと。」

「ゼムリア大陸全てだと？一体何なのだ？」

モルガンは先を促すように聞いた。

「……たまたまメンフィル軍による市民の治療を見たのですが、市民の治療をメンフィル軍のあるシスターがしていました。」

「……軍にシスターがいるとはな……それで？どこがおかしいんだ？」

カシウスは軍内にシスターがいたことに驚き理由を聞いた。

「はい。そのシスターが傷を癒す時手から光が出、光が収まった後は傷は跡形もなく消えていました。それを見た市民達は奇跡だと大騒ぎをしてメンフィル兵達によつてその場は収められました。

騒ぎは收まりましたがそのシスターは現在、市民から奇跡を起こす聖女として敬われています。……それでそのシスターに七曜教会の者かと聞いたのですが、否定されました。……混沌の女神アーライナの神官だそうです。」

「「混沌の女神！」？」

ゼムリア大陸唯一の信仰されている神、空の女神以外の神の名前が出来されその場にいた全員は驚いた。

「……続けます。そのシスターに治療され感謝した者やそれを見ていた市民達の一部がそのシスターに教義等を求め信徒となる者まで現れ、七曜教会の者達はどうすればいいのか戸惑っています。」

「……陛下、これは一度七曜教会の者を含め、メンフィルと話し合う必要がござりますな。」

驚愕したカシウスだったが気を取り直し女王に進言した。

「……そうですね。市民達に危害を加えていない上、治療もしているということは少なくとも話しあう余地はありますね。誰か、紙と筆を。」

「ハツ！」

報告していたリシャールは部屋の前を守つてゐる兵に紙と筆を持つ

てぐるよつに命じた。

そこにリシャールの部下、カノーネが慌てて入つて來た。

「重要会議中の所申し訳ありません！火急の情報が入つたので報告に参りました！」

「火急の情報とはなんですか？」

どんなことが知られてもいいように心構え、アリシア女王は先を促した。

「ハツ！偵察兵によるとメンフィル皇帝軍はハーケン門を破竹の勢いで突破後、エレボニア帝国領内に進軍し主要都市の一つやいくつかの帝国領を制圧しました！エレボニア帝国軍も抵抗はしたのですがなすすべもなく全滅あるいは敗退いたしました。かのゼクス・ヴァンダール率いる帝国の主力部隊も壊滅し�杰クス少将自身も重傷を負い撤退したことです！メンフィル軍はその後部隊を残し本軍はロレントに引き返したそうです！」

「――「なつ！？」「――」

カノーネの言葉に部屋は驚愕に包まれた。

「この短期間で主要都市を落とし、エレボニアでも5本の指に入る」というゼクス少将がなすすべもなく敗退するとは……メンフィル軍は一体どれほど強いのでしょうか……」

報告を聞いたリシャールは震えるように嘆いた。

「……それよりエレボニア帝国が今後どのように動くかだ。見ようによつてはリベールの逆襲とも見られてしまうぞ……」

モルガンはこれから先起こりそうなことを考え唸つた。

「……そうですね。陛下、一刻も早くリウイ・マーシルン殿と会見をする必要がござりますな。」

カシウスもモルガンの考えに同意し女王に進言した。

「……急いで教会の者に同行するよう連絡してください。そしてエレボニア大使館にも人をやって帝国侵攻は私達の仕業ではないと伝

えて下さい！準備ができ次第すぐにメンフィル軍本陣に私自身が向かいます！」

「陛下！危険なのは…！」

女王の命令にモルガンは慌てた。

「……人を信じることで信頼が生まれるのです。最初から私達が向こうを疑えば相手の本音を知ることができません。市民に危害を加えていないのです。相手は賢王なのでしょう。ですから心配は無用です。」

「……わかりました、陛下、ただし私もお連れ下さい。」

女王の決意を知りモルガンは諦めたような顔で護衛を申し出た。

「僭越ながら陛下、私も同行させて下さい。」

「わかりました。お願ひします。」

「ハツ！」

そして女王の命令の元、城内は慌ただしくなり準備ができた女王たちは陸路でロレントへ向かつた……

第7話（後書き）

感想お待ちしております。

第8話（前書き）

文章力がだんだん落ちて来た気がします……

「ロレント郊外・メンフィル皇帝軍本陣」

ロレントの郊外にあるメンフィル軍の本陣の前に女王達はつき、入口を守っている兵士に話しかけた。

「リベル国王、アリシア・フォン・アウスレーゼです。リウイ・マーシルン皇帝陛下に御取次をお願いします。」

「……少々お待ち下さい。」

女王の言葉を受け、判断がつかなかつた兵の一人が伝令を伝えに本陣の中へ走つていた。

そしてそこにロレントの探索から帰つてきたプリネを連れたリフィアが女王達の姿を見つけ近寄つた。

「なんじゃお主らは？余達になにかようか？」

「あなた達はどなたですか？見た所身分が高い方に見受けられますか……」

話しかけられた女王はリフィア達の服装を一目見て、位の高い者だと判断し、正体を聞いた。

「余か？余はメンフィル皇女にして次期皇帝、リフィア・イリーナ・マーシルン！謳われし闇王、リウイ・マーシルンの孫！」

「……メンフィル皇女、プリネ・マーシルンです。お父様に何か御用ですか？」

自身満々に紹介するリフィアと幼いながらもしつかり紹介したプリンセを見て女王達は驚いた。

「あなたが次期皇帝ですか……！それにそちらの方は父とおっしゃりましたが両親はどなたしょうか。」

「父はメンフィル初代皇帝、リウイ・マーシルン。母はアーライナの神官、ペテレーネ・セラです。」

「え……リフィア姫は今、リウイ皇帝陛下の孫とおっしゃっていましたが……」

女王達はリフィアとプリネを見比べて感つた。

「事実じや。ここにいるプリネは形式上には余の叔母じやが、余の後に産まれておるから実質余の妹のよつなものだ。」

「そうでしたか……紹介が遅れ申し訳ありません。リベル国王、アリシア・フォン・アウスレーゼです。

リウイ皇帝陛下に此度のロント制圧のことについてお聞きしたいことがあります、こうして参上してまいりました。」

「ふむ、そうか。一つだけ訂正しておこつ。余達はロントを制圧した覚えはない。あくまで”保護”だ。」

「”保護”ですか……詳しいことをお聞きしても？」

「それはリウイ本人に聞けばわかる。……どうやらお主たちの迎えが来たようだな。」

女王としばらく話していたリフィアは近づいてきてる気配を感じ、その方向に向いた。

「ペテレーネ、迎え御苦労。」

「おかえりなさいませ、リフィア様。それにプリネも。」

「ただいま戻りました、お母様。」

「おかえりなさいプリネ。……リフィア様、この場は私にまかせて本陣の中へ。」

「わかった。エヴリースのところに行くぞ、プリネ。」

「はい、リフィアお姉様。」

女王達を迎えてきた時、その場にリフィアとプリネを見つけたペテレーネは2人を本陣の中へやつた後

女王達の正面に立つた。

「お初にお目にかかります。アーライナの神官にしてリウイ様の側

室の一人、ペテレーネ・セラです。」

「貴殿がかの”聖女”か……」

モルガンは先ほど出会ったプリネ皇女の母であり、報告にあつた聖女だと気付き、少女と言つてもおかしくないペテレーネの若さに驚き呟いた。

「あの……その呼び名は恥ずかしいのでお止め下さい。みなさんが勝手におっしゃっているだけです。」

「……それで」「用件はリウイ様とお会いしたいことがあります。」

「はい。お会いできるでしょうか?」

「構いません……」」ちらです。」

そしてペテレーネは女王達をリウイの元へ案内した。

ペテレーネによつて案内された天幕の中に入り女王達はリウイと対面した。

「……メンフィル皇帝リウイ・マーシルンだ。まあ、今は隠居の身だがな。」

「（なんて霸氣……まさに霸王ですね……）リベル国王、アリシア・フォン・アウスレーゼです。使者も出さずのこきなりの訪問、お許し下さい。」

女王はリウイがさらけ出す霸気に飲み込まれないよう自分自身を保つて自己紹介をした。

「七曜教会より参りました者です。」

「リベル王国軍所属、モルガンです。」

「同じくリベル王国軍所属カシウス・ブライトです。とても孫がいるような年には見えないので失礼ながら本物ですか?」

「本物だ。これでも100年以上は生きてる。そこにいるペテレーネもそうだ。」

「ハツ……?」

リウイを見て年齢を疑つたカシウスだがリウイの言葉に理解ができず女王達と共に固まつた。

「ここの世界の人間が驚くのも無理はない。俺は半魔人でそこにいるペテレー・ネは神格者だからな。」

「ここの世界……？詳しいことをお聞きしたいのですが。」
一瞬思考が停止した女王はリウイ達の正体を聞き、リウイは語つた。
自分達は異世界の者でありその中で

人ならぬ者やその者と共に暮らす者を”闇夜の眷属”といい、異世界には複数の神が現存していることを語つた。

また、信仰する神より”神核”という力を承った者を”神格者”と呼び、神格者は半不老不死の存在であることも話した。

「異世界では不老不死の方法があるのですか……」

カシウスはペテレー・ネの容姿を見て、どう見ても年下にしか見えない少女が自分の倍以上生きてるようには思えなく驚愕した。

「複数の神が現存しているのですか……！そこには我らが神、エイドスはいらっしゃるのでしょうか？」

異世界の存在、神が現存していることに驚いた七曜教会の司祭は自らの神の存在を聞いた。

「生憎ながら聞いたことはない。まあ所詮異世界だ。いなくて当然だ。……世間話はここまでだ。要件を聞こうか。」

「では……異世界に来た目的、此度のロレント保護とエレボニア侵攻についてお聞かせ下さい。」

女王はリウイにここに来た理由を話した。

「……こちらに来た理由はある探し物だ。」

「……それはどのような物ですか？」

「それは教えることができん。國家機密と言つておひづ。」

「……わかりました。では続きをお願ひします。」

「まず、エレボニア侵攻はこちらの世界に来た時、いきなりエレボニア軍に襲いかかられたからだ。よって我らは身を守るためにこの

世界の拠点を作るためにエレボニアに侵攻しただけだ。ロレンント保護はそのついでだ。そちらに通達もなしで勝手ながら保護をしたのは謝罪する。」

「……いえ、聞けば市民の保護や食料の配給等もして下さったと聞きます。リベル国民を代表してお礼を言わせて下さい。民を守つて下さつてありがとうございます。」

アリシア女王はリウイに頭を下げた。それを見てモルガンは慌てた。「へ、陛下！ 他国の王族に簡単に頭を下げるなど……！」

「よいのです。民の命と比べられません。……それできれいに返還してほしのですが。」

「……条件がある。今回の保護で食料、医療薬などかなりの出費が出了。その条件を呑むのなら我ら

メンフィル軍はロレンントから兵を退けます。」

「その条件とは……？」

女王達はリウイから出された条件を固唾をのんで待つた。

そしてリウイが出した条件とは

1、ロレンントの近くにある森の一部にメンフィル大使館を作ることを許可すること。

2、導力技術の提供

3、メンフィルの国教の一つ、混沌の女神^{アーライナ}の教義を広めることの許可

だった。

「……以上の条件を呑むのならすぐ兵を退けます。よければ友好の証として現在占領されている都市の解放を手伝うが？」

「いえ、貴国にそこまでしていただくなればいきません。条件ですがアーライナ教を広めることにはすぐには頷けません。七曜教会との相談が必要ですのです。」

「……いいだろう。こちらに多少の非はあるしな。返事をもう一つまでは我らが責任を持つてロレンントを守りう。」

「……念のためにこちらの兵も置いてよろしいでしょうか？」

モルガンは情報等手に入れためリウイに兵の配置の許可を聞いた。
「かまわん。我らをよりよく知るにはちょうどいい方法だしな……」「ありがとうございます。……陛下、一度城に戻り会議を開かなくては。」

「そうですね……リウイ殿、私達はこの辺りで失礼します。」「一通り話し合いが終わつた女王達はその場を去りうとした時、シエラが入つて來た。

「会議中のところ、申し訳ありません。リウイ様、エレボニア兵がボース方面より迫つて來ています。」

「何……？ハーケン門にはファーミシルス達を配置したが。」

「敵兵勢力は数はありますが我らが圧倒的に優勢。ファーミシルス大將軍から伝令が来まして、現在ハーケン門にもボース方面から向かつてきたエレボニア兵を相手にしてることです。恐らくリベールの都市内を占領していた兵が2手に分かれなかと。」

「フン……ロレンントとエレボニア侵攻の兵の敵討ということか。出陣するぞ。シエラ、ペテレーネ。」

「御意。」

「はい、リウイ様。」

リウイは外套をペテレーネから受け取るとそれを羽織り、エレボニア兵の出現に驚いている女王達に顔を向け話した。

「我らはこれよりエレボニア兵の迎撃につづる。よければ我らの戦いを見ていくか？」

「よろしいのでしょうか？自国の戦い方を見せつけるなど。」

女王はリウイの提案に戸惑つた。

「かまわん。見られた所で貴殿等が我らの真似ができる訳ないしな。

「陛下、せつかくの好意を受けられるのがよいかと思われます。」

モルガンはリウイの言葉に内心、自國では真似できないと言われ憤つたがメンフィルの強さを知りたいため顔に出さず女王に進言した。

「陛下、將軍の意見に私も賛成です。陛下の身は我らが責任を持つてお守りしますので。」

「大佐まで……わかりました、リウイ殿、よければ後方で貴殿らの戦いを見せて貰つてもよろしいでしょつか?」

「ああ。」

そしてリウイはシェラやペテレーネと共に天幕から出て行き女王達もリウイ達について行つた……

第8話（後書き）

今、レンをどうしようか考え中なんですね……

一つは教団壊滅作戦の時リウイ達に保護されマーシルン王家入りする。もう一つは原作通り結社入りし王都襲撃カリベル＝アークの際リウイ達に敗北し、パテル＝マテルはリウイ達に破壊され心のよりどころをなくし、脅えたレンにリウイ達が止めをさそうとした所をエヌテルに庇われ、今まで嫌っていたエヌテルを大好きになりエヌテルの支えになることを決める。どっちがいいかみなさんのご意見待っています。

「メンフィル皇帝軍・本陣」

天幕から出た女王達はすでに整列して命令を待つてゐるメンフィル兵を見て驚いた。

「な……すでに出陣用意ができるといふとは……なんといつ早さだ……！」

モルガンはメンフィル兵達の行動の早さを知り驚いた。そしてリウイは兵達の前に立ち、命令を出した。

「我らはこれより街の防衛とエレボニア兵の迎撃につづる。第1部隊から第3部隊は市民を安全な場所に避難せしろ！」

第4部隊は……」

次々と命令を出すリウイに兵達はリウイに敬礼をした後それぞれの行動を移すために動き始めた。

そしてリウイ達は少數の兵を率いてボース方面の街道でエレボニア兵が来るのを待ち構えていた。そこにはリフィアやペテレー・ネモリウイと共にいた。

前線となる場所に皇女や衛生兵がいるのに驚きカシウスはリウイに自分の疑問を話した。

「リウイ殿、前線に皇女やシスターがいるのは危険なのでは……？
それにこの数では迎撃が難しいのでは？」

「カシウスと言つたか。何か勘違いしているようだが2人がいるからこそこの数で迎撃できるのだ。」

「ハッ……？」

カシウスはリウイの言葉に思わず呆けた。

「……今にわかる。シェラ、エレボニア兵はまだか？」

「少々お待ちを……複数の反応が近付いております。後、数分で姿

を表すかと。「

「わかつた。ペテレーネ、リフィア。」

「お任せを、リウイ様。」

「余に任せておけ！リベルの者達よ、余の戦いをその田でしかと
みるがよい！」

リウイの言葉を聞き、2人はそれぞれ詠唱を開始した。

「シエラ、お前も準備しておけ。」「

ハツ　　いつでせいけます。我が主の命令を

シユラもエレボニア兵が来る方向に攻撃できるように準備した。そしてついにエレボニア兵達がその姿を見せた。

「来たか……攻撃開始だ。」

攻擊開始。

「…………アーライナよ！私に力を……深淵なる混沌、ルナ＝アーラ

イナ!

「これが余に秘められし真なる力！ 究極なる光
ケロリスジエル！」

シラの包撃、フードアの田中卿大綱引の掛橋、ペント、二本の柱

強大な闇の奔流がエレボニア兵を呑みこみそれをうけた大半のエレボニア兵達は叫び声を上げずのも許されず消滅していった。

「……………」

それを見た女王達は驚愕した。

「敵兵力、攻撃前の兵力と比べ3割を切りました。」

「御苦勞。いくぞ! 一兵たりと先生かすな!」

「オオオオッ オオオオオッ ！ ！ ！ ！」

「フフ、やつと私の出番ね。行くわよー。」

リウイの号令でカーリアンを筆頭にメンゴ

ア達の攻撃を運良くのがれたエレボニア兵達を蹂躪した。

「神聖なる力よ！エクステンケービー！」

「ギヤあああ……」

リウイの聖なる力を宿したレイピアが複数の兵を消滅させ

「ふふ、行くわよ……奥義！桜花乱舞！」

「グワア！」

カーリアンの剣技は兵達の体を2つに分かれさせ

「古より伝わりし炎よ……落ちよ！メルカーナの轟炎！」

「ウワアアアア……」

ペテレーネの火炎魔術に兵達は叫び声を上げながら骨すら残さず炎に焼かれ

「出でよ！ソロモンに伝わりし魔槍！……封印王の槍！死愛の魔槍！」

「グッ、ガハ！」

リフィアが次々と出す暗黒魔術の槍が兵達を貫き絶命させた。そしてメンフィル兵達も雄叫びをあげ敵兵を討取つて行つた。

「……メンフィルは信じられない戦い方をしますな……まさか王自身も戦うとは……」

カシウスはシスターのペテレーネや皇女のリフィアの魔術攻撃、シエラの砲撃、またリウイ自身が戦つているのを見て驚愕した。

「王族達も強いが兵達自身、統率がどれ一人一人が強すぎる……これがメンフィルの強さか……」

モルガンはメンフィル兵達の統率のとれた攻撃に唸つた。

「……一般兵達がこれほど統率のとれた攻撃にうつれるのはやはり、リウイ殿の仁徳の良さですね……兵の一人一人がリウイ殿を信頼を超えて信仰に近い形で慕つているように見えます……私やクローディア、デュナンでは決して真似はできませんね……」

女王はリウイのカリスマを感じ、自分たちでは決して真似できないとわかり溜息をついた。

「それだけではなく、王自身が戦い自らの強さを見せることで兵達

の士氣も上げていいのでしょうか？」……本当にリウイ殿は隠居をなさっているのでしょうか？」

カシウスはリウイの強さは自分を超えていたと感じ、また先ほどのリウイの隠居しているという言葉に疑問を持った。そしてわずか一刻でエレボニア兵は全滅した。

メンフィル兵の勝利の雄叫びの中、驚愕している女王達のところにリウイ達が悠然と歩いてきた。

「いかがかな？ 我が軍は。」

「さすがエレボニアに侵攻するだけのことはありますね……それより、ロレントを守つて下さつてありがとうございます」といいました。

女王はロレントを守つたことをリウイにお礼を言った。

「気にする必要はない。力持たぬ者を守るのも我ら王族の務めだ。」「ご高説ありがとうございます。私達も見習わせていただきます。」

女王とリウイが会話を終えた時、今まで黙っていた七曜教会の司祭がペテレーに質問した。

「ペテレー殿、一つ質問はよろしいですか？」

「……はい、なんでしょうか。」

「なぜ、奇跡の力を戦争のために使うのですか？ 我々聖職者はそのような力を決して戦争に使つてはいけないはずです！」

「そう、申されましても……私はリウイ様のためにこの力を使っているだけです。」

司祭はペテレーの言葉に驚愕した。

「なつ……一個人のためだけに使うというのですか！ それでも神を敬う人間の一人ですか！？」

「……もちろん、我が主神、アーライナも敬つております。それにアーライナ様は混沌を司る女神。力をどのように使うかは個人の自由が我らの教えです。それに神核を頂いた時、アーライナ様は自分の思うがままにその力を使えとおっしゃられました。」

「 「 「 「 なつ…………」「 」

司祭と横で聞いていた女王達はペテレーネの言葉に絶句した。

「 一つだけ言わせてもらいます。あなた達の教義と我が主神アーライナの考えは違います。あなた達の考えといつしょにしないでください。」

ペテレーネは毅然とした態度で自分自身の考えを言つた。そして女王達の様子を見たりウイグロを開いた。

「 異世界の神官よ、一つだけ言わせてもらひ。ペテレーネは俺にとつても掛け替えのない存在だ。また、我が國にとつてもなくてはならない存在だ。この意味はわかるな?」

「 ……それはどうこうことでしょ?」

リウイの脅しともとれる言葉に司祭は震えながら聞いた。

「 確か貴殿等、七曜教会にも武装集団がいたな。……」 星杯騎士団

”と言つたが。

「 なつ…………」 その名を…?」

司祭は教会でも極秘とされる集団の名前を出され驚愕した。

「 」の世界はある程度調べさせてもらつた。もちろん貴殿等、七曜教会も詳しく述べ。ペテレーネは我が国メンフィルの神官長であり、王族である。ペテレーネや娘のプリネに手を出したりびつなるかわかるな?」

「 ツツつ…………」

司祭はリウイが星杯騎士団の実態を知っていることに気付き、王族でもあるペテレーネやプリネに騎士団が危害を加えることがあれば先ほどのHレボニア兵のようにメンフィル帝国に蹂躪されると思い、押し黙つた。

「 ……さて、我らは事後処理があるのでこれで失礼させてもいい。先ほどの条件、よい返事を待つておる。」

「 ……はい。では、私達はこれで失礼させてもらいます。」

メンフィルの強さを知った女王達はそれぞれが違った表情を出しながら、リウイの言葉に頷きその場をカシウス達と共に去つた。

～ロレント郊外・ブライト家～

リウイと会談を終え、グランセルに戻る女王達にカシウスは一日だけ家に戻ることの許可をとり、急いでブライト家に戻りドアを蹴破つた。

「レナ！ エステル！ 無事か！？」

ドアを開けたカシウスが見た光景は食事の支度をしているレナと、何かの本を読んでいるエステルだった。

「あら、おかえりなさい、あなた。」

「おかえり、おとうさん！」

いつもとかわらない愛妻と愛娘の姿にカシウスはホッとした。

「ああ、1日だけ家に戻れる許可がとれたので戻つたぞ。ケガはしてないか？ 食事はまともにとれているか？」

「ふふ、見ての通りよ。食事のほうはメンフィル軍が食料を配給してくれているおかげで大丈夫よ。」

「そうか…… そういえばエステル、何の本を読んでいるんだ？ 見た所聖書のようだが？」

元気そうなレナから現状を答えられカシウスはホッとし、エステルが聖書らしきものを読んでいるのを見て驚き聞いた。

「あのね、これはアーライナ教の教えと魔術の使い方が書いてあるの～」

「なつ……！ エステル、お前、アーライナ教の信者になつたのか！」

カシウスはエステルが異教の信者になつたのかと気付き顔色を変えた。

「ううん違うよ。あたしはただ、聖女様みたいに誰かを助ける力が欲しいから読んでいるだけだよ？」

「聖女様……!? エステル、ペテレーネ殿に会つたのか！？」

エステルから予想もしない人物の名が出、カシウスは驚いた。

「ほえ？ おどりさん、聖女様に会つたの？」

「ああ……陛下の会談の時にな。」

「すっご」 いーあたしも会つてお礼をしたかったな。聖女様、めつたに町に出てこない上に町に出てきたらみんなの人気者だから近づけないし……」

「お礼？ エステル、何かあつたのか？」

「うん、あのね……」

ペテレーネに会つたことにはしゃぐエステルにカシウスは事情を聞いた。それは死にそうになつたレナをペテレーネと誰かが魔術を使いレナの命を救つたことで、レナからはリウイ達が自分達をエレボニア兵から守つたことを聞いた。

そしてエステルは大好きな母を助けたペテレーネに憧れ、少しでも近づくためにアーライナ教の教義が載つている本をアーライナ信徒から貰つたことを言つた。

「そうだったのか……」

全てを聞き終えたカシウスは溜息をついた。そしてエステルに聞いた。

「エステル、お前はこれからどうしたい？ ペテレーネ殿を慕つてアーライナ教に入信するのか？」

「ううん。あたしにはスターなんて向いてないもん。でも聖女様のように誰かを助けるようになるために、あたし遊撃士になる！ そしてこの本に書いてある魔術を覚えて、それを使って聖女様のよう傷ついた人を助けるわ！」

「そりゃ……父さんは応援するぞ。」

「お母さんも応援しているわ。がんばりなさい、エステル。」

「うん！」

父と母に自分の夢を応援され、エステルは元気よく頷いた。

その後久しぶりの家族そろっての夕食に3人は楽しんだ。そしてエステルが寝かしつけた後、カシウスはレナと話をした。

「レナ……今回のことが片付いたら俺は軍人をやめて遊撃士になろうと思う。」

「あなた？」

「エステルとお前から話を聞いて痛感した……軍人では身近な人間は守れない。今回はリウイ殿達のお陰でお前達は無事だったが、次があるかもしないしな……だから俺はそうならないために遊撃士になる。」

「あなたがそう決めたのなら私はそれに従います。」

一家を預かる男として、職を手放すその行為にレナは笑顔で応援した。

そしてリベル王国はメンフィル帝国との条件を呑み、同盟を結んだ。異世界の宗教を広めることに七曜教会の

一部が反対したが、グランセルの司祭よりアーライナ教が広まる元となる人物は王族であり、またその人物より敵対する意思はないと伝えられ、星杯騎士団がメンフィル帝国を相手にする訳にもいかず、しぶしぶながらアーライナ教の布教を認めた。

その後、メンフィルの攻撃とリベルの反撃で疲弊したエレボニアはメンフィルとの仲介を条件にリベル侵攻を断念し、リベル、メンフィルと講和条約を結んだ。

こうして後に百日戦役と呼ばれる戦争は結果的に戦争を仕掛けたエレボニアが領土のいくつかを失い終結した。

また、ペテレーは今回の功績が評価されアーライナ自身がメンフィルに降臨し、ペテレーにさらなる力を授けるという異例の事態

が起こつた。

そして数年後……

第9話（後書き）

次はいよいよウイ達のパラメータを出します。まあ、反則的なパラメータですが。

設定1

<漆黒の神魔王>リウイ・マーシルン

LV500
HP70000
CP6000
ATK7000
DEF6000
ATS4000
ADF3000
SPD60
MOV20

装備

武器 ロイヤルバキュラ
防具 神魔の戦鎧（属性・魔神……空、時、幻以外の属性ダメージを半減する）

靴 ロイヤルブーツ

アクセサリー イリーナの首飾り（リウイ専用、回避30%上昇、5%の確率でダメージ無効）

マリアハート（全パラメータ20%上昇効果、HP +5000）

自らの身体能力のお陰で即死無効、また、一人出番が廻る」といってP300自動回復する。

ほか、パーティにカーリアン、リフィア、ペテレーネ、プリネがいるとお互いATK、DEF10%アップ

オープメント（無属性）並びはリシャールです。

クラフト フェヒテンアルザ 200 単体 5回攻撃

フェヒテンケニヒ 900 単体 ダメージ450%

戦闘指揮 100 全体 自分を含めた味方の回避、命中を20%アップ

マーリオン召喚 300 自分 サポートキャラ、マーリオンを召喚する（水属性の全体攻撃or味方全員20%回復）

ワインディング 400 小円 風属性130%攻撃

フレインバル 400 小円 火属性130%攻撃、火傷20%

メーテアルザ 400 小円 地属性130%攻撃

エクステンケニヒ 600 中円 空属性150%攻撃

Sクラフト フェヒテンカイザ 単体 レイピアによる驚異の連續突き

8回攻撃 ダメージ300%の

魔血の目覚め 全体 内に秘めたる魔の力を解放する究極奥義。 時属性のダメージ20000%

<燐武の戦妃>カーリアン

L V 500	H P 68000
C P 6500	A T K 8000
D E F 3500	A T S 3000
A D F 2000	A D F 2000

SPD70
MOV18

装備

武器 戦姫の双剣
防具 女剣士の肌着
靴 剣士の靴

アクセサリー 剣の耳飾り (CP + 500、SPD 3%アップ)

技力再生の指輪 (一人終わると)にCPが200

回復

味方のすぐ後に攻撃すれば1.5倍。また、常にクリティカル率20%、回避率50%で回避すればカウンター攻撃。

オーブメント(時属性)並びはジョゼットです。

クラフト 挑発 20 自分 敵の攻撃対象を自分に向ける

三段斬り 200 単体 3回攻撃

双葉崩し 100 単体 騒動&アーツ妨害

北斗斬り 300 単体 120%攻撃&マヒ

20%、遅延効果

淫魔の魅惑 500 全体 敵を50%で混乱させる

魂の接吻術 600 単体 敵の体力を奪い自分の体力

を回復させる

(ただし威力はATSに反映される)

乱舞 400 小円 140%の複数攻撃

冥府斬り 800 単体 200%攻撃&マヒ

ヒ30%、またこの攻撃の後すぐ自分の番になる。

Sクラフト 白露の桜吹雪 特殊 自らを中心とした中円攻撃。ダメージ800%

奥義・桜花乱舞 中円 武器から強力な衝撃波を出す技
の中の最終奥義。ダメージ1200%

<アーライナ聖女>ペテレーネ・セラ

(属性・神格……物理攻撃を含め全属性ダメージを70%にする)

LV490

HP35000

CP9500

ATK300

DEF2000

ATS9999

ADF8000

SPD45

MOV12

装備

武器 アーライナの聖杖（攻撃の際30%の確率で敵のいずれかの能力を下げる）

防具 混沌の聖衣（即死無効）

靴 混沌の聖靴（毒無効）

アクセサリー 杖の耳飾り（EP、CP+250 SPD3%アッシュ）

混沌の証（ペテレーネ専用、混乱・封魔・封技無効。
5%でダメージ無効）

一人終わることにCP、EPが500回復、10%で敵の攻撃を反射、リウイがいると本人のATK、DEF10%上昇

オープメント（時属性）ならびはレンです。

クラフト	連續闇弾	100	単体	2回攻撃の時属性攻撃
闇の息吹？	300	単体	味方のHPを全回復させる	
テイルワンの死礫	800	全体	180%の時属性攻撃	
死愛の魔槍	600	単体	時属性ダメージ150% &	
& HP吸收30%				
滅びの暗礁壁	700	特殊	指定した横3列全体に時属性攻撃	130% & 毒30%
トラキアの消沈	700	全体	敵全員のSPDを30%下げる	
アルテミスの祝福	500	全体	味方全員のSPDを30%上げる	
メルカーナの轟炎	800	小円	ダメージ180% & & 火傷30%の火属性攻撃	
ケシエスの聖炎	1500	全体	ダメージ140% & 火傷20%の火属性攻撃	
酸衝撃	600	特殊	指定した横3列全体に地属性攻撃	130% & 毒30%
イオールーン	300	小円	ダメージ110%の無属性攻撃	
レイルーン	400	中型直線	ダメージ130%の貫通する無属性攻撃	
ベーセフアセト	3000	全体	ダメージ200% & 混乱、毒40%の地属性攻撃	
アーライナ召喚	5000	全体	サポートキャラ、アーライナを召喚する。	(ダメージ1000% & amp; 混乱90%の全体攻撃 or 味方全員異常& 全回復)

Sクラフト ルナ＝アーライナ 全体 混沌の女神、アーライナ
の力を憑依させ、最大級の神力を放つ。ダメージ3000%

ペテレーネのクラフトは全てATSに反映される

<メンフィル帝国第一皇女> リフィア・イリーナ・マーシルン

LV400

HP25000

CP7500

ATK250

DEF1000

ATS7000

ADF6000

SPD30

装備

武器 プランセスロッド

防具 燐露の聖衣（空、幻属性の攻撃を半減する）

靴 燐露の靴

アクセサリー 賢者の石（一人廻るごとにCPが500回復）
マルウェンの腕輪（経験値が40%増加）

アーツ攻撃無効、敵に見つかりやすい

オープメント（空・時属性）並びはレンです。

クラフト 追尾弾 100 2回攻撃の無属性攻撃

イオールーン 300 小円 ダメージ110%の無

属性攻撃

レイルーン 400 中型直線 ダメージ130%の貫通する無属性攻撃

闇の息吹? 300 単体 味方のHPを80%回復させる

0%上昇
防護の光陣 500 全体 味方のDEF、ADFを30%HP吸収30%

死愛の魔槍 600 単体 時属性ダメージ150%&贖罪の光霞 800 全体 空属性ダメージ140%

ティルワンの闇界 700 全体 120%の時属性攻撃
エル・アウエラ 1200 全体 200%の無属性攻撃

Sクラフト クロースシエル 特大直線 内に秘めたる魔力を全解放する究極魔術の一つ。

ダメージ4000%

リフィアのクラフトは全てATSに反映される

<深淵の楔魔第五位>エヴリーヌ（属性・魔神）

LV380

HP40000

CP5500

ATK4000

DEF3000

ATS4000

ADF2800

SPD50

MOV10

装備

武器 蒼穹の魔神弓

防具 黎魔の戦衣

靴 閻の靴

アクセサリー 杖の耳飾り（EP、CP + 250 SPD 3% アップ）

黒の魔鏡（20%の確率で敵の攻撃を反射）

一人廻ることにCP、EPが300回復、常にクリティカル率10%、戦闘開始時10%で先制攻撃

オーブメント（時・風属性）並びはケビンです。

クラフト 三連射撃 300 単体 3回攻撃

贖罪の雷 200 直線 貫通する130%の風属性攻

撃、封技10%（ATSに反映）

テイルワンの闇界 700 全体 120%の時属性

攻撃（ATSに反映）

闇の息吹？ 300 単体 味方のHPを60%回復させる

制圧射撃 400 全体 110%の攻撃

精密射撃 350 単体 150%のアーツ&

騒動妨害、遅延攻撃

審判の轟雷 800 中円 150%の風属性攻撃、

封技25%（ATSに反映）

ケール・ファセット 900 単体 時属性ダメージ2

00% & HP 吸収 50%

(ATSに反映)

アン・セルヴォ 1000 中型直線 ダメージ300%

Sクラフト ゼロ・アンフィニ 大型直線 魔力の眼と鬪氣を最大限に出した一撃奥義

ダメージ2500%

<メンフィル大將軍>ファーミシルス

LV490

HP	65000
CP	6000
ATK	6000
DEF	4500
ATS	5000
ADF	3000
SPD	55
MOV	15

装備 ラクシユティール

防具 飛天魔の鎧（時属性ダメージを半減）

靴 飛天魔の靴

アクセサリー 大將軍の指輪（DEF40%上昇）

魔力再生の指輪（一人廻ることにCP、EPが30

0回復）

味方のすぐ後に攻撃すれば1・5倍、戦闘開始時20%で先制攻撃

オープメント（時属性）並びはヨシュア、ダドリーです。

クラフト 戦闘指揮 100 全体 自分を含めた味方のATK、SPDを20%アップ

連接剣伸張 200 直線 アーツ&#amp;・騒動妨害の貫通攻撃

闇の息吹？ 300 単体 味方のHPを40%回復させる

電撃剣 300 単体 140%の風属性攻撃、封技1

ティルワンの闇界 700 全体 120%の時属性攻撃（ATSに反映）

封印王の槍 400 単体 時属性攻撃ダメージ130%強酸の暗礁壁 700 特殊 指定した横3列全体に時属性攻撃、120%&#amp;・毒20%

連接剣双伸張 1000 直線 ダメージ300%の2回攻撃、この攻撃の後すぐ自分の番になる

Sクラフト 暗礁電撃剣 単体 電撃剣の上位奥義、ダメージ800%&#amp;・封技70%

暗礁回転剣武 大型直線 近づく者全てをチリにする最終奥義、ダメージ1500%

設定1（後書き）

強すぎです。特に前衛は正直言つてカシウスやレーザー・ビームかウロボロスの全戦力でも無理でしょう。原作知つてゐる人ならわかると思いますが、VERITA後だつたらこれぐらい強くても可笑くないはずです。HPの限界は軌跡シリーズを採用しています。後、CPはリウイ達に200とか少なすぎですし。というカリウイ達にオーブメントつて必要でしようか？全員、人間じゃないですから。オーブメントを使って身体能力上げたらとんでもないことに……それとペテレーネが純粹と地の魔術が使えるのはアーライナからさらなる力を貰つた時に使えるようになりました。

元々大地も司つていましたから使えてもおかしくないでしょうし。

後、更新はしばらくないかもしません。ここで一区切りができましたので、焰の軌跡に集中しようかなと思っています。

（国境）

「ハアハア……」

「イリーナ、エリイー、こつちよ！」

「はい、お母様！エリイ、急いで！」

「う、うん、お姉様！」

そこには一つの家族が何者かに追いかけられているように走っていた。

その家族は理由があつて家族離れ離れに暮らしていたが、年に一度だけ家族そろつて食事をしていたのだ。いつものように、決まったレストランで食事をしていたのだが突如何者かにそこが襲撃されたのだ。襲撃の時、運良く家族全員逃げれたのだが襲撃者達は逃亡者に気付き、執拗に追いかけたのだ。

「それにしてなぜこんなことが……」「

金の髪と瞳を持つ少女イリーナと姉とは逆に銀の髪と瞳を持つ少女エリイの母は息を切らせながら呟いた。

「もしかしたら、最近大陸中で流行っている幼児誘拐事件のグループの仕業かもしれないな……」

2人の父は最近の出来事を思い出し、妻の疑問に答えた。

「そんな……！」

妻は娘達の手を握り、震えた。

「もうひと頑張りしよう。あそこにある関所はメンフィル領の関所だ。噂ではメンフィル領では例の事件は起こっていないそうだから、メンフィル領に亡命すれば大丈夫だろう。」

「ええ、そうね……」

その家族が逃げようとした場所は百日戦役でメンフィル帝国領とな

つた場所であつた。なぜ、メンフィル領だけ事件が起こらなかつたのは、問題になつてゐる犯罪グループが自分達の教祖になつてもうためにペテレーネを勧誘しようとして活動目的を話しき断られ、強硬手段としてその場でペテレーネを攫おうとしたが同席していたリウイ達によつて討取られ、その犯罪グループの活動をブリネやリフィアにとつて危険と判断したリウイによつてメンフィル領と大使館があるロレントを徹底的に警戒させ、誘拐が起きても本国から呼び寄せた夜の活動を主としている闇夜の眷属によつて全て未遂に抑えられたのだ。

安堵をついている家族の所に突如どこからともなく飛んできたナイフが地面に刺さつた。

「「ひつ……！」」

突如刺さつたナイフにイリーナとエリイは悲鳴を上げた。

「クツ……もう、追いついてきてしまつたか！」

父は悔しげに嘆き、懐から護身用の銃を出した。

「イリーナ！ エリイを連れてあそこにある関所に逃げなさい！」「で、でもお父様とお母様は！？」

イリーナは母の言葉に驚き、2人に詰め寄つた。

「お父さん達はここで2人を攫おうとしている悪者と戦うよ。」「嫌よ！ 2人ともいつしょに逃げよう！？」

エリイは半泣きの顔で2人に懇願した。

「大丈夫よ。少ししたら追いつくわ。だから、2人はあそこにある関所の兵士に助けを呼んでお母さん達を助けて。」「で、でも……」

「イリーナ、お前は賢い子だからわかるだろ……このまま逃げても絶対に捕まつてしまつことに……だったら、誰かが助けを呼ぶ必要があるんだ。」

「お願ひ、2人とも聞きわけて……」

夫妻は娘達の手を握り諭した。

「…………わかりました。でも、2人とも絶対に無茶をしないでね……」

「ありがとう、イリーナ。」

そして夫妻は2人の娘の体を抱きしめた。

「「2人ともまた、会いましょう！」」

「絶対にだよ！エリイ、早く！」

「う、うん！お父様、お母様、どうかエイドス様の加護を……」
そしてイリーナはエリイを連れて関所に向かつて走った。

「…………君には辛い思いをさせたね。」

「いいえ、最後にあなたといつしょだからいいのですよ。」

夫の言葉に妻は微笑み、夫と同じように懷から銃を出し襲撃者の迎撃をしようとした。

そしてついに襲撃者達が迫りつき、姿を現した。

「…………子供達がいないだと？陽動のつもりか、余計な真似を……」

「ふん、ならばこいつらを殺して子供達を奪つまでだ。」

「そんなことは絶対させない！」

「例えこの命果てようとも、絶対にあの子達には手出しをさせないわ！」

そして夫妻達は銃を使って襲撃者達と戦闘を始めた。

（関所）

「ハアハア…………ついた…………エリイ、大丈夫？」

「う、うんお姉様。」

2人はようやくついた関所を見て安堵をつき、イリーナはエリイを連れて関所にいる兵士に話しかけた。

「「お願いします！お父様達を助けて下さい…………」」

「な、なんだお前達は…………？」

関所を守っているメンフィル兵士達は深夜に現れた子供達とその勢

いに押され戸惑つた。

「今、お父様達が戦っているんです！」

「！」のままじや、2人は死んじやうよー兵士さん、お願ひ助けて！

「ま、待て！順を追つて話してくれ！」

「……何かあつたのですか？」

そこに騒ぎを聞きつけた、幼いながらも関所の兵士達の慰問に来たプリネ皇女が姿を現した。

「ブ、プリネ様！」

「お休みの所、申し訳ありません！」

兵士達はプリネの姿を見ると姿勢を正した。

「……構いません。その子達が何か？」

「ハツ！父を助けると言つて場所や事情も判らずどうすればいいのか、判断がつかなかつたのです。」

「判りました……お二人とも何があつたのか話してくれませんか？」
兵士から事情を聞いたプリネは2人に近づき事情を聞いた。

「は、はい！実は……！」

同じ年に見えるプリネを見て安堵したイリーナは事情を話した。

「……なるほど。事情を話してくれてありがとうございます。」

プリネは事情を聞き、イリーナにお礼を言つた後真剣な顔をして兵士に命令した。

「……今すぐ、就寝している兵士の方々を起こしてこの子達の親の救出に向かつて下さい。万が一の事を考えて私も行きます！」

「し、しかし救出だけなら我々だけで十分です！プリネ様に万が一の事があつたら陛下やリフィア様に顔向けできません！」

「……こう見えて、お父様達から剣術や戦い方、魔術を習つています。だから護身ぐらいできます。それにもしあー人のご両親が怪我をしていたら、私を除いて治癒術ができる方はいらっしゃいますか？」

「そ、それは……」

プリネの言葉に兵士達は思わず口をつぐんだ。

「絶対に貴方達から離れたりしませんので、お願ひします！」

「わかりました……そこまで言つのでしたら、絶対に我々から離れないで下さい。おい、休んでいるやつら全員叩起こしてきてくれ！」

「ああ！」

そして一人の兵士が休んでいる兵士たちを起こしに閑所の中へ走つて行つた。

「お二人は閑所の中で休んでいて下さい。」

「そんな……！そんなことできません！」

「迷惑はかけませんので連れて行つて下さいー。」

「お願ひしますーー！」

プリネは2人の安全を考え閑所の中にいるように言つたが2人は強く否定した。

「……わかりました。では絶対に私達から離れないで下さいね。」

「「は、はい！ありがとうございますー！」

押し問答している時間がなかつたプリネは仕方なく2人の同行を許した。

そしてプリネは兵士達と共に助けを求めた少女を連れて2人の親が戦つているであろう場所に向かつた。

そしてプリネ達が閑所を出て少しした後、ある場所に夫は事切れ妻も大量の血を流して息絶え絶えになつて倒れていた。

「クソ……手間をとらせやがつて……」

「どうする？この先はメンフィル領だぞ？」

「構うものか。閑所にいる兵士なんて数えるぐらいだらつ。行くぞ！」

「「了解した。」

そして襲撃者達は閑所に向かおうとしたが、

「出でよ魔槍！狂氣の槍！！」

「プリネ様に続け！弓隊撃て！！」

「「「「オオツツ！！！」」」

プリネが放つた暗黒魔術の槍と続くようすに兵士達が撃つた矢が襲撃者達に命中した。

「「「グハツツ！！！」」

「全員、抜刀！！！」

「「「「オオツツ！！！」」」

「「「ギヤあああ…………！」」」

「「「お父様、お母様！！！」」

せらうにメンフィル兵士達は剣を抜き襲撃者達の命を刈り取った。

「「お父様、お母様！！！」」

一瞬で戦闘が終了し、イリーナとエリイは血を流して倒れている2人に近寄った。

(こちらの男性はもう……なら女性だけでも……)

2人の状態を見て男性はすでに死んでいると確信したプリネは女性に近づき治癒魔術を使つた。

「暗黒の癒しを……闇の息吹！！」

治癒術を発動したプリネだがその表情は芳しくなかつた。

(……ダメ……傷が深すぎるし血も流しそぎて……お母様がいなくて、せめてリフィアお姉様かエヴリーヌお姉様のどちらかがいれば……)

自分では女性を助けれないと悟つたプリネは悔しげに唇を噛んだ。そして女性はうつすらと眼を開けた。

「イリー……ナ……ヒ……リイ……」

「「お母様！－！」」

母親の目が覚めたことに気が付いたイリーナとエリイは母に何度も呼びかけた。

「よ……かつた……無事で……」

「気をしつかり持つて下さい！今、目を閉じたら死んでしまいます

！」

「あ……な……た……は……？」

薄れゆく意識の中、娘以外の声の持ち主を見て、呼びかけているのがイリーナと年が同じくらいの少女に気付き聞いた。

「メンフィル軍の者です！」

「メン……フィル軍……よ……かつた……お願い……しま……す……私達はもう……無理です……だか……ら」

「この子達……の……こと……を……お願い……しま……す」

「わかりました……私の名はプリネ・マーシルン！闇夜の眷属を束ねる名においてお一人は責任を持つて守ります！」

「マーシルン……よかつた……！」

母親はプリネがメンフィル王家の者だと知り、イリーナとエリイが王家に保護されたことに安心し涙を流し2人の名を呼んだ。

「イリーナ……エリイ……よく聞か……なさい……」

「お母様しつかり！」

「言つことなんでも聞くから死んじゃやだ！」

「「めんね……お父さんと……お母さんは……先に……ハイドス様の……所に……行くね……だから……」

「この人の……言つ事を……よく聞きなさい……2人とも……幸せにな……つてね……」

そして女性は事切れ皿を開いた。

「お父様、お母様……？嘘でしょ？……ねえ……返事を……してよ

……」

「うう……ひっく……おとうさま、おかあさま……」

「「わあああああああんつ……！」」

雲ひとつなく月明かりとメンフィル兵士の持つ照明の許で2つの大きな骸によりそつた少女達の泣き声が響いた……

第10話（後書き）

エリイ達の両親設定はほぼオリジナルです。後、エリイは原作通りになりますのでご安心を。感想お待ちしております。

その後、イリーナとエリイの両親を兵士の手を借りて手厚く葬った
プリネは2人を連れて関所に戻った。

「翌日」

「落ち着かれましたか？」

「……はい。お父様とお母様の御墓を建ててくれてありがとうございます……」

「う……ひつぐ……ありがとうございます……」

プリネの言葉に2人は沈みながらも答えた。

「……あの、あなたは本当にメンフィル帝国の皇女様なのですか？」
顔を下に向けイリーナはポツリと呟いた。そしてその疑問にプリネ
は答えた。

「ええ……」紹介が遅れ申し訳ありません。メンフィル皇女、プリ
ネ・マー・シルンです。」

「ひつぐ……エリイ・マグダエルです……」

「エリイの姉のイリーナ・マグダエルです……」

「イリーナ！？」

「あの……私の名に何か……？」

「……いえ。特に何もありません。（金の髪に金の瞳……おまけに
名前がイリーナ……それによく見ると肖像画のイリーナ様に似てい
るような……まさかね……）」

プリネはイリーナの名を聞いた後、驚きイリーナの容姿を見て父親
の目的の人物だと一瞬思ったがその考えを打ち消した。

「……ひょつとしてリウイ皇帝陛下と親しいですか？」

「え、ええ。リウイ・マー・シルンは私の父ですが……」

イリーナの疑問にプリネは戸惑いながらも答えた。

「だったらお願ひします！私達の家族を無茶苦茶にした人達を処罰

するために軍を動かすようリウイ皇帝陛下にお願いして下さい！！このお願いを聞いて頂けるのなら私にできることならなんでもします！」

「落ち着いて下さい。貴女達は今回の事件の終結と貴女達の親戚の方を見つけるまで

ロレントの大使館で保護するつもりですから、その時お父様と会わせますのでお父様に直接言って下さい。」

「はい、ありがとうございます……」

そしてプリネは2人を連れて兵士に守られながらロレントの大使館への帰途についた。

（ロレント郊外・メンフィル大使館内会議室）

そこではリウイやファーミシルスとルース、ペテーネ、カーリアン、そしてリフィアがショラの報告を聞いていた。

「……以上になります。子供達の誘拐の阻止はできたのですが、襲撃の際両親などに被害が出、孤児になる子供が増加しています。」

「……そうか。孤児となつた子供達のための孤児院や心の治療が必要だな……^{イーリュン}癒しの女神の信者達に協力を呼びかけてくれ。……ティアに信者達の先頭に立つよう俺から頼んでおこう。……誰かティアに至急城に戻るよう手配してくれ。」

「ハツ！！」

リウイの命令にルースはイーリュンの信者へ協力の要請とレスペレント地方で母の遺志を継ぎ皇女と云う身分でありながらイーリュンの信者として活動しているリウイと幻燐戦争でペテーネと共に衛生兵として活躍したイーリュンの信者であつたティナ・パリエの娘、ティア皇女をミルスに呼び戻すために会議室から出て行つた。そして入れ替わるようにプリネが会議室に入つて來た。

「お父様、お母様。プリネ・マーシルン、ただいま戻りました。」

「戻つたか、プリネ。」

「お帰りなさい、プリネ。」

「よく戻ったのプリネ。余とエヴリーヌも首を長くして待つておつたぞ。」

「ありがとうございます、リフィアお姉様。あの……帰つて早々にお願いがあるのですが……」

優しく迎えた両親にプリネは言いづらそうに願いを言った。

「お前が頼み事とは珍しいな……言つてみろ。」

「はい、実は……」

そしてプリネは関所で起こつた出来事、孤児になつた2人の少女を保護するようにリウイに頼んだ。

「……そうか。いいだろう、例の事件の終結とその2人の縁者が見つかるまでここで世話をする。みな、いいな？」

「リウイ様が決めたのなら従うまでです。」

「私もファー・ミシルス様と同じ意見です、リウイ様。」

「別にいいわよ。」

「妹の頼みを聞くのも姉として当然のことじゃ！」

「皆さん……ありがとうございます！」

全員から2人の滞在の許可を言われプリネは笑顔になりお礼を言った。

「あの……それから、保護した姉妹の姉の方がお父様に頼みがあると。」

「俺にか？……まあいい、会つて話をしよう。その2人を呼んでくれ。」

「はい。……いいですよ、入つて来て下さい。」

プリネの言葉を聞いて会議室のドアが開けられ、そこに立っていたのは緊張しているイリーナとその後ろに隠れているエリイだった。

イリーナとリウイが目を合わせた時、それぞれに衝撃が走つた。

（な……イリー……ナ……！？いや、ただ似ているだけかもしかんが……この雰囲気は……！？）

(何……この愛しい気持ちと胸の高まりは……？私、この人に会つたことあるの……？)

2人は見つめあいしばらくの間、沈黙が流れた。

「リウイ？何、その娘をボーッと見てるのよ？もしかして小さい子が趣味になつたの？」

「バカを言うな……プリネ、その一人が話に出ていた例の姉妹か？」
カーリアンの言葉に我に帰つたリウイは気を取り直しプリネに聞いた。

「はい。二人ともこの方が私のお父様であちらにいる女性が私のお母様です。」

「あの……もしかして、そちらの方はアーライナ教の聖女様ですか？」

エリィはプリネが紹介した女性を見て、新聞で載っていた異教を広める聖女だと気付き震えながら聞いた。

「あの……お願いですからその呼び名はやめて下さい……本当に恥ずかしいのですから……」

「お母様はゼムリア大陸でアーライナ教の神官長を務めております。巷では”闇の聖女”とも呼ばれています。」

「プリネまで……お願いだからその呼び名はやめて……」

「ふふ、ごめんなさいお母様。でもお母様は私にとつて女性の鑑だもの。」

「もう、この娘つたら……」

娘にまで恥ずかしい呼び名を言われペテレーにはやめるように言い、
プリネは上品に笑いながら謝つた。

「本当に聖女様なのですか！お願いします、奇跡の力でお父様とお母様を生き返して下さい！」

エリィはペテレーに詰め寄り懇願した。

「申し訳ありませんが、私が使える魔術で人を生き返す魔術は使えません。イーリュンの神格者の方でしたら可能かもしませんが、

魂と体が離れている以上、例え蘇生魔術を使っても生き返らせません。人を生き返すのはとても高度な事ですから……」

「そう……ですか……」

ペテレー・ネの言葉にエリイは暗い顔になり顔を下に向けた。

「さて……自己紹介をしようか。プリネの父でこの大使館を指揮している、リウイ・マー・シルンだ。」

「プリネの母、ペテレー・ネ・セラです。何か困ったことがあれば遠慮なく私に言って下さい。」

「カーリアンよ よろしくね。」

「メンフィル大将軍、ファーミシルスよ。武芸を学びたいのなら教えてあげてもいいわよ。」

「メンフィル機工軍団団長シェラ・エルサリス。」

「そして余こそが！メンフィル次期皇帝、リフィア・イリーナ・マーシルン！大事な妹の頼みじや、何か頼みたいことがあれば余に言ってみるがよい。願いにもよるが、余の器の大きさを見せてやろう！」

それぞれが自分の名を言った後、リフィアのフルネームを聞いた時エリイとイリーナは驚いた。

「え……イリーナ……！？」

「どうした、余の名が不服か？」

「いえ……私といつしょの名前だなと思つて……紹介が遅れ申し訳ありません。イリーナ・マグダエルです。」

「エリイ・マグダエルです……」

2人は自分達とは身分が遥かに違う者達に恐縮しながら自分の名を言った。

「何！？」

「え……！？」

「嘘！？」

「な……！？」

「……」

「まう……」

リウイ達はイリーナの名を聞き、驚愕しイリーナを見た。

「あの、プリネ様も私の名を聞いて驚いたのですが何があるんでしょうか？」

リウイ達の反応を見てイリーナはオロオロした。

「…………いや、その名は我らにとつて特別な名でな。驚かせてすまなかつたな。」

しばらくの間、黙つていたリウイだつたが気を取り直し理由を語つた。

「リウイの言つ通りじや。その名はリウイの正妃で人間でありながら闇夜の眷属との共存を願つた者の名前じや。国民達や余にもその思いを忘れぬよう余の名につけられたのがその名なのじや。……余トイリーナ様と同じ名を使うその心意氣、気にいったぞイリーナ！我らマーシルン家に仕えてみないか？お主を余やプリネ専属の者として重用してもよいぞ。」

「え……そんな……私のような者が王族の方達に仕えるなんて恐れ多い事を……」

イリーナはリフィアの言葉にうろたえた。

「リフィアお姉様……この方も混乱してこますからそれぐらいで……」

「プリネの言つ通りだ……まだ幼い者に仕えるよう言つのは酷だ。王族であるお前が言つたら断れなくなるだろつ。」

「そうか？いい考えじゃと思つたんじやがな。」

リウイとプリネに諫められリフィアは残念そつな顔をしつつ引き下がつた。

「…………そして、プリネの話では俺に何か願いたいことがあるわうだな？」

「やうでした……お願いしますーお父様とお母様の仇を取つて下さい！」

「仇だと？」

そしてイリーナはリウイに事情を話した。

「……………そうか、いいだろう。その願い確かに聞き届けた。」

「本当ですか！？」

「そろそろこちらも本格的に動くべきか迷っていた所だ。ペテレーネを攫おうとした時点で奴らを野放しにした俺たちにも多少その責はあるしな……」

「ありがとうございます！」

リウイの言葉にイリーナは頭を下げる。

「……………ペテレーネ、客室の用意を。プリネ、お前はこの2人の相手をしてやれ。」

「承知しました、リウイ様。」

「はい、お父様。それでは失礼します、2人とも行きましょう。紹介したい方もいますし。」

「は、はい！」

「余も行くぞ、プリネ。」

ペテレーネは2人の滞在用の部屋を用意するために出て行き、プリネは姉妹を伴つてリフィアと共に出て行つた。

「……………それで、あのイリーナという少女、いかがなさいますか？」「私もあるの子の容姿を見たけど、雰囲気とか髪や瞳とかイリーナ様そつくりじゃないの？」

リフィア達が完全に離れたのを見計らつてファーミシルスとカーリアンはリウイに聞いた。

「……………しばらくは様子見だ。ファーミシルス、お前はあの少女の産まれた年、家族を調べてくれ。」

「ハツ！」

「シェラ、例の事件、これ以上被害が出ぬよう夜の見回りの兵達を本国から呼び寄せさらに増やせ。犯人を見つけた際、前のように殺

害でかまわないと、できれば生け捕りにするように指示をしてくれ。

「御意。」

「リウイ様、件の組織はどのようにつづりますか?」

ファーミシルスはリウイの命令を受けた後、今後の方針を聞いた。
例の誘拐組織は一斉につづぶす必要がある。そのためには彼女に協力の手紙を書かなければな……」

「手紙つて誰に書くの?」

カーリアンはリウイの手紙の相手を聞いた。

「セリエルだ。彼女とメルの力は今回の事件の解決の鍵となる。」

「そつか、動物達に聞くのね。リウイ、一斉攻撃する時私も混ぜてね。子供達を攫うなんて趣味の悪いやつ、私は気にいらないもの。」

「ああ。」

イリーナの必死の願いを受けたメンフィル帝国は事件解決に向けてついに動き出した……！

第1-1話（後書き）

ついに生まれ変わったイリーナがリウイと出会いました。もっと感動的な再会を期待した方、ごめんなさい……ただ、このイリーナは魂の記憶は目覚めてないので完全なイリーナではないです。空の軌跡の間に記憶を取り戻しますのでそれまで期待して待つて下さい！ちなみにティアはシルフィアがシルヴァンを生むより早く生まれたリウイの娘、つまりシルヴァンの腹違いの姉というオリジナル設定です。セリエルは獣人族の血を継いでますからVERITA後でも生きている数少ないキャラだと思っています。感想お待ちしております。

リウイ達が動き始めて数日後、遊撃士協会を始めとし、各国でも事件解決や防止に向けて動いていたが一向に犯罪は減らなかつた
「グランセル城」

そこにはアリシア女王を始めとした、各國の大使館の人間や事件解決の指揮をしている人物達がさまざまな確執を捨て秘密裏に集まつていた。

「……あれから、子供達の行方や犯人の手掛かりは掴めたのでしょうか？」

アリシア女王は沈痛な顔をして各國の代表者に聞いた。

「……残念ながら、共和国では依然防げてない上、足取りもつかめません。」

カルバード大使館のエルザは悔しそうな顔をして答えた。

「……我らエレボニア帝国も巡回を増やしたりしているのだが答えは同じだ。」

メンフィルに大敗しながらも未だに少将という地位で収まっているエレボニア帝国のゼクス・ヴァンダールも進展しない今の状況に屈辱を感じ、重々しく答えた。

「……俺達、クロスベル警察は醜い上共の保身せいで、事件が起こつても内密にしようとしてさらに酷くなつて嫌になつてくるぜ。」
クロスベル警察からの代表者セルゲイは今の警察内部の状況を吐き捨てた。

「私達ギルドもA、B級を総動員して調べてはいるのですが中々尻尾を出さず悔しい思いをしております……」

遊撃士協会からはリベール軍をやめ遊撃士になつたカシウスが来ていて、自分の無力さを嘆いた。

「そういえば、例の異世界の方々は見えておられませんね。」

エルザはここにいる人物を見て疑問に思つたことを言つた。

「来ていなくて当然でしょう。メンフィルは文字通り異世界にある上、世界の移動の仕方はメンフィルしか知りませんからな。当然被害は受けないのでしょう。……それにしても、おかしいですな。メンフィルは以前の戦争でいくつかの都市を得たはずなのに、そこでは事件は起こらなかつたのでしょうか？」

リベルの將軍、モルガンはエルザの疑問に答え、あることに気付いたメンフィルに疑問を持った。

「……もちろん起こりました、將軍。ですがメンフィルは全て未遂に防いだとメンフィル領にある支部やメンフィル大使館があるロレント支部から報告が上がっています。」

「「な……！」

「なんと……」

「「いつたいどうやつて……！」

カシウスの答えた事にそれぞれ驚いた。

「報告によれば、メンフィル兵を本国から大量に呼び寄せ、さらに人でない存在　闇夜の眷属の中でも夜の活動を主にしている者達を巡回させ、未然に防いでいます。彼らの中には翼を持ち、空を自由自在に飛べる者や暗闇の中でも目が利く者等いるのですから誘拐に成功した犯人がいてもすぐに未然に収められるのです。」

「では、メンフィルなら何か情報があるので……！」

アリシア女王はカシウスの答えを聞き、希望を持ち聞いた。

「……メンフィルは犯人達をかなり危険視しているようで、犯人は我々遊撃士が駆け付ける前にメンフィル兵や闇夜の眷属によつてその場で殺害されております。ですが組織の名は判りました。メンフィルによると犯行グループの名は『D·G教団』という名でエイドスを否定する集団だそうです。」

「「「「「なつ……！」」」」

カシウスの報告にその場にいた者達はエイドスを否定するという集団に驚愕し、声を上げた。

「なぜ、エイドスを否定するためにはどのような凶行を……」

女王は震えながら嘆いた。

「それより、なぜメンフィルがそれほどの情報を持っている！エイドスを否定する教団ということはエイドスとは異なる宗教、アーライナ教が関係してくるのではないか！？アーライナ教が関わっているのだとすると此度の件、メンフィルの仕業ではないのか！…」

ゼクスは憎々しげに自分の意見を言った。

「まさか……リウイ殿やペテレーネ殿、帝位継承者であるリフィア殿とは何度も会談を通じて話しましたが3人とも人格ある方でそのようなことを考える方達には見えません。」

「陛下のおっしゃる通りそれはありません。例の教団はペテレーネ殿を勧誘し断られさらおうとしたそうです。もちろんその場でリウイ殿達によつて討取られたそうです。」

カシウスはメンフィルがある程度の事情を知つてている理由を言った。
「ほら、御覧なさい。私も一度だけ聖女殿とお話ししましたけどそんなことを考える人には見えませんでしたわ。評判通り正に聖女と言われても可笑しくない他者を労わる優しい方でしたわ。それに聖女殿とて幼い一人娘がいるのにそのようなことをするハズがないでしょ。これだから野蛮なエレボニアは……」

エルザはゼクスの言葉を否定し、さらに挑発した。

「貴様……！何が言いたい！」

ゼクスはエルザの言葉を受け、怒り心頭に聞いた。

「今、共和国で噂になっていますわよ。エレボニアはメンフィルに逆襲の機会を淡々と狙つていると。

無駄なあがきですわよね、以前の戦争でメンフィルによつて戦力の半数が壊滅した上、メンフィルは未知の技術、我々には使えないアーツに似た魔法、魔術を持つて戦つていてのですから。私自身、好戦的なエレボニアなどメンフィルに占領されてしまえばいいと思つていますもの。」

「我らを愚弄するか……！そういうそちらこそどうなんだ！？例の件のせいでそちらからメンフィル領へ亡命する市民が増えていると聞くぞ！」

「なんですつて……！それはそちらこそ同じじゃありませんか！」ゼクスとエルザはお互い睨みあつた。

「お、おいおい何喧嘩してんだよ。今はそれどころじゃないだろ。『お二人ともやめられよ！』

犬猿の仲である帝国と共和国の代表が喧嘩を始めたことで、慌ててセルゲイとモルガンは仲裁に入った。しかし、2人の罵倒は止まらず、女王も困ったように眉を顰めどうすればいいか迷っていた時力シウスが怒氣を猛烈に含み叫んだ。

「静肅に！――！」

その場にいた全員がカシウスを見た時、カシウスのさらけ出す怒氣に全員が震えあがつた。

「……権力をもつただの大人が……」

少しずつ咳くカシウス。その声が、不自然なほど室内に響き渡り力シウスの言葉ひとつひとつで全員は冷や汗をかいた。

「……自国の利益だけを醜く言い争う。」

「グッ……」

ゼクスは頬を赤くし、唸つた。

「そんなくだらない国の事情より、もつと大切なことがあるだろう！今、なお攫われた子供達はその幼い体を苦しめられているというのに！」

エルザはカシウスの言葉に痛い所をつかれ目を伏せた。

セルゲイも悔しそうに拳を握り顔を歪めた。

「我々に出来ることは最も簡単なこと。」

女王はカシウスと視線を交わして静かに頷いた。

「今こそ、1つに集い、事件解決のために必要なメンフィルに積極的な協力を願うよう頭を下げる覚悟をお願いしたい。」

頭を下げるカシウス。そして最初に席を立つたのはセルゲイ。

「クロスベル警察セルゲイ・ロウ以下2名。事件解決のために必要であればこんなオッサンの頭でよければいくらでも下げる。」

「幼い子供が助かるためにはこの老骨、いくらでも頭を下げさせて頂きたい。」

「私も同じ意見です、カシウス殿。」

続くようにモルガンと女王が賛同した。

カルバード共和国大使・エルザがしばらくの間思考した後ゆっくりと立ち上がった。

「我々も、力なき子供たちが犠牲になるのは見過せません。そのための協力、いくらでもさせて頂きます。」

そして最後となつたのはエレボニアのゼクスのみ。

「我々がこれまでやつてきた事は、外道と言われてもおかしくない。好戦的国家と言われても、メンフィルや闇の聖女から裁きの鉄槌を受けたと揶揄されても否定できない。」

正に外道と言われても可笑しくないことをエレボニアはやつてきた。リベール侵攻のために一つの村を犠牲にしたこと。

「だが、それでも幼い甥を持つ者としてこの事態は見過せない。そして席を立つ。」

「我々エレボニアも今はメンフィルへの恨みを捨てさせて、頭を下げさせて頂く。カシウス殿あなたが我らの代表者になつていただけないか?」

「私が……ですか?」

ゼクスの提案にカシウスは唖然とし、周囲を見たがみなゼクスの意見に頷いた。

「わかりました……このカシウス・ブライト、此度の事件解決のため必ずメンフィルとの共同作戦を実現させて頂きます!」

全員がその場でメンフィルへの協力要請の紙に調印し、カシウスはそれを大事に受け取り全員に敬礼した。

「ロレント郊外・ブライト家」

そこではレナと最近正遊撃士になつたシェラザードが今の状況を話していた。

「……そう、未だに事件解決は難しいのね……」

「はい……私も参加したいのですが今はC級以上の正遊撃士は受けれない状況です……」

レナは暗い顔をし、シェラザードも自分に力のなさを嘆き、悔しそうに唇をかんだ。そこにエステルが2階から降りて来た。

「あ、シェラ姉来てたんだ！いらっしゃい！」

「ちょっとね……ところでエステル、その格好は何？あんた、まさかどこかに出かける気？」

シェラザードはエステルの服装や持ち物を見て疑問に思った。

「そうだけど？」

「今は一人で外に出るのはやめなさいーーロレントはメンフィル大使館があるおかげでメンフィル兵や闇夜の眷属によつて市内は平和だけど

この辺りは昼とかそんなに見回りはされていないのよーー？」

「何よもうーー シェラ姉つたらーー それに今は一人で外に行かないしーー」

慌てたシェラザードの注意にエステルは口を尖らせた。

「じゃあ、お母さん行つてきます！」

「暗くならない内に帰つてくるのよ。」

「はーーい。」

「レ、レナさん！」

あつさり外出を許可したレナにシェラザードは慌てた。

「大丈夫よ。今は安心できる友達があの娘にはいるから。」

「それはいいたい……」

「すぐにわかるわ。エステル、今日はあの人挨拶をするわね。」

「うん、いいよ~」

そう言つとエステルは2階に上がつた。

「え……なんで外に行くのに2階へ……？」

ショラザードはエステルの行動に疑問を持った。

「まあ、ついで行けばわかるわよ。」

そして2人はエステルについて行き、ついでその先は2階のベランダだつた。

「いつたいどういう事……？」

「ふふ、最初はビックリするわよ、ショラちゃん。」

そしてエステルは眼を閉じて集中し両手を空にかざした。

「え~い!」

すると両手から紫色の弾が空に向けて放たれ、それが空中に弾けた。

「な……エステル、あんた魔術が使えるのー?」

ショラザードはエステルが魔術を使つたことに驚愕し聞いた。

「うん、でも今できるのはこれだけだよ?」

「これだけつて……あんた、わかってんのー?魔術はアーライナ教

の司祭以上の人かメンフィル出身の人しか使えないのよ!」

「むう、わかつてるわよ~。でも、あたしはできたよ?」

「できたって、いつたいどうやつて……」

「この聖書に書いてある、え~と……ひいんじゅつ?それのやり方にそつて練習したらできたんだよ~」

「いや、あたしもその本読んで魔術を使えるように頑張つたけど無理だつたわよ!~」

ショラザードが唖然とする中、空より翼を持つた睡魔族の娘、リストイがベランダに降りて來た。

「な……一闇夜の眷属!~?」

ショラザードはリストイを見て、驚愕した。

「今日もいつしょに遊ぼう、リストイ！」

「はいですぅ～」

エステルの誘いにリストイはほのぼのと答えた。

「リストイさん、今日も娘のことを守つて下さい。」

「エステルに近づく悪い人はリストイが懲らしますから、安心して下さい～」

「ありがとうございます。」

レナとリストイが普通に会話をしているのを見て、ショラザードは混乱した。

（嘘……レナさんも顔見知りなの！？ いつたい何がどうなつているの！？）

そして会話をしていたリストイは今の状況に驚いて固まっているエラザードに気付いた。

「そちらの人は誰ですか～？」

「こ～の人はショラ姉！ 遊撃士をやつているんだよ！ 深いでしょ！」

「……ショラザード・ハヴェイよ。一応エステルの姉みたいなものよ。」

「リストイですぅ。名前がショラザードですか～ショラ様の名前に似ていてややこしいですね～」

「ショラ様……か。その人は私達の知つている人かしら？」

ショラザードはほのぼのしているリストイが言つた言葉に引っ掛かり聞いた。

「どうでしょ～～？ でも、その人はたくさんの中隊に命令していくますよ～～」

「（兵を率いているといつことはメンフィル軍の中でも少なくとも隊長クラスね……）その人のフルネームはなんていうのかしら？」

「ショラ・エルサリス様ですよ～～」

「え……！？」

リストイが出したフルネームにレナとショラザードは驚いた。

「それって、メンフィル機工軍団団長の名前……！」
シェラザードは新聞に載っていたメンフィルの重鎮の名前を聞き驚いた。

「……そういうえば、リストレイさん。あなたは以前”ご主人様”的許で暮らしているって言つてましたよね。その方の名前は……？」
「ご主人様ですか？」「ご主人様はリウイ・マーシルン様ですよ」「「な……！」」

2人はリストレイの言つた言葉にさらに驚いた。

「むう～お母さん達つたらあたしにはわかんない話をしている～。
リストレイ、行こう！」

3人のやり取りが理解できなかつたエステルは膨れ先を促した。
「はいですう～それじゃあ、私にしつかりつかまつて下さいね～」「うん！」

そしてリストレイはエステルを抱きしめ空へ舞い上がつた。
「きやつほ～い！いつものことだけど凄いながめだわ～！エリッサ
やティオはなんで断るのかしら？すつごく気持ちいいのに…」
エステルは空を飛んでいることに歓声をあげた。

「今日はどこまで行きますか～？」

「今日はミストヴァルトの大樹があるところまで冒険よ～マーリオ
ンともお話したいし！」

「わかりましたです～～」

「ちょ、ちょっと！まだ聞きたいことが……！」

シェラザードはリストレイを引き留めようと大声を出したが、すでに
エステルを抱きしめた状態のリストレイは飛び去つていた。

その場にはしばらく沈黙が流れ、やがてシェラザードが口を開いた。
「レナさん、エステルはいつたいどうやってあの闇夜の眷属の人と
知り合つたんですか？」

「私も詳しいことはわからないんだけど、あの子が言つには森で寝

ていた彼女を見て話しかけて最近友達になつたそりよ。それにしてもまさかメンフィル皇帝と縁のある方だつたなんて……

「はあ……あたしの時と同じ、相変わらずあの子には驚かされますね……」

「ふふ、そうね。」

ショラザードは自分とエスティルの出来事を思い出し、思わず溜息をつきその後真剣な顔をした。

「レナさん、もし今日エスティルがあのリストイと云う人と帰ってきた時、引き留めもらえますか？いろいろと聞きたいことがあるので。」

「リストイさんはたまにこっしょに食事をしてくるからいいわよ。」

「あらがとうござります。」

レナに礼を言ったショラザードは事件解決に向けて何か進展ができるかと思い気を引き締めた……

第1・2話（後書き）

エステルは信仰による魔術ではなく秘印術によって暗黒魔術が使えるようになりました。まあ、アーライナにも目をかけられていますが。次回、エステルがあるキャラを召喚できるようになります。ちなみにそのキャラはZEROから出すつもりなのでお楽しみに……感想お待ちしております。

「ミストヴァルト」

木が深く茂っている中、開けた場所で大樹がと小さな泉がある場所にリストイは降り立つた。

「到着ですか？」

「ありがとうございます、リストイ。……すう……マーリオ ンー遊びに
来たよ ー！」

リストイに礼を言ったエステルは深く息をすつて最近友達になつたもう一人の人でない存在の名前を叫んだ。

「こん……にち……は、エステルさん……」

すると泉の中からリウイの使い魔 水精・マーリオンが出て来て、表情が見えないその顔をわずかに笑みに変えた。

「えへへ、こんにちは！」

「今日は何して遊ぶですか？」「

「リストイの翼に埋もれるのもいいし、釣りだつてできるし、冒険もしたいわね……悩むわ……よし、決めた！

全部やるわ、まずは釣りよ！」

そしてエステルは木の枝等を使い即席の釣り竿を作り泉で釣りを始めた。それをしばらく見ていたマーリオンはエステルに話しかけた。

「エステルさんは……どう……して……私達と……仲良く……でき
るん……ですか？」

「ほえ？どういう意味？」

「人間の方は……自分達とは……違う……姿を見て……普通……恐
がり……ます……でも……あなたは……最初に……出会つた時から……
私達と……気兼ねなく……話して……います……」

「うーん、あたしは特に何も考えてないな）。それにリストイとか
ただ単に翼と尻尾があるだけの人じゃない。」

エステルはそう言つと釣り竿を置き、リスティの翼に埋もれた。

「う～ん、気持ちいい……」

「くすぐったいですよ～」

リスティはそう言いながらも気持ちよさそうにした。

「それにさ、マーリオンとだつて今、こうして会話をしているでしょ？口orentの人以外で何人か闇夜の眷属の人を悪魔や魔物とか言うけど失礼しちゃうわね！確かに闇夜の眷属の人つて、ちょっと近寄りがたい雰囲気があるかもしれないけど、会話ができるんだから、こうやって友達になれるることをなんでわかつてくれないのかしら？」

リスティの翼を堪能した後、エステルはマーリオンの手を握った。

「あ……」

「うわあ～……マーリオンって本当に水で出来ているのね。冷たくて気持ちいいわ……でも、なんで水なのにこうやって手を握れるのかしら？」

「私の……体は……魔力によつて……固められて……います……から……」

「う～ん、よくわかんないわ。ま、いつか！よし、次は森の中を冒険よ！リスティ、行こ～！」

「はいですう～」

マーリオンの言葉に少しの間考えたエステルだつたが、理解できなく考えるのをやめた後、立ち上がりリスティを呼んだ。

「じゃあ、マーリオン。ちょっと行ってくるね！」

「はい……」

そしてリスティを連れたエステルを見送つた後、マーリオンは心中でいつかエステルが今言つた言葉をリウイの前でも言つことがあればいいのにと願つた。

そしてエステルはリスティとしばらくの間、森を歩いていた時、エステルが何かに気付いた。

「…………」

「ほえ、リストイ、呼んだ？」

「いいえ～」

誰かに呼ばれたような感じがしたエステルはリストイに振り向いたが違うようで、空耳かと思い気を取り直したがまた、自分では理解できない言葉が頭に響いた。

「…………」

「また、聞こえた！ねえ、あなたはどこにいるのー？」

エステルは辺りを見回し叫んだ。

「チ……カ……ク……」

するとわずかながら理解できる言葉が聞こえた。

「近くね！わかつたわ！」

「エステル、どうしたですかあ～？」

リストイはエステルの突飛な行動に疑問を持ち聞いた。

「誰かがあたしを呼んでるの！リストイ、いつしょに探して！」

「何がなんだかわかんないですけど、わかつたですう～」

そしてしばらく辺りを探すとそこにはエステルの拳ほどの大さきの羽の生えた小人が倒れていた。

「え……妖精さん！？」

エステルは倒れている小人を見て驚いた。

「その子は風の守護精霊ですねえ～。でも、どうしてこんなところにいるんでしょう～？」

リストイは呑気に答えたがなぜ異世界である場所にいるのかと疑問に思つた。

「それより、助けなくちゃ！妖精さん、目を覚まして！」

エステルは小人を両手ですくい、呼びかけたが目を覚まさなかつた。

「あやや……この子、異世界に来て慣れない魔力のせいで魔力が上手く維持できず、それが切れてしまつたんですね……」

リストイは小人の状態を見て悲しそうな表情に変えた。

「それじゃあ、この子どうなるの！？」

「それじゃあ、この子どうなるの！？」

「消えて、自然に還ってしまいますね……」

「それって死ぬってことじゃない！？ねえ、リストイ、どうにかならないの！」

エステルは悲痛な表情でリストイに懇願した。
「この子にエステルの魔力を分けて上げれば、一時しのぎにはなりますう！」

「それってどうすればいいの！？」

「いつもやっているみたいにこの子に魔術を使う感覚で魔力を集めてみて下さい～」

「わかったわ！」

そしてエステルは目を閉じて願った。

（お願い……目を覚まして……！）

すると、エステルの両手から淡い光が出てそれが小人を包んだ。そして小人は目を覚まし、自分が助かつたのはエステルのお陰だとわざり笑顔でエステルの周りを回った。

「わあ…………キレイ…………！」

エステルは飛び回っている小人を見て、思わず呟いた。

「…………」

「え、何？なんて言つてるの？」

エステルは頭に小人の声らしきものが聞こえたがわからず、聞いた。「助けてくれてありがとうと言つてますね～。それと私といつしょにいることをどうしてと聞いていますね～」

「リストイ、わかるの！？」

エステルはリストイが小人の言葉を訳していることに驚いた。
「一応私は風属性の睡魔ですから、それとこの子の名前はパズモ・メネシスだそうです。」

「名前はパズモって言つんだ……うん、いい名前ねーそれとさつきの答えだけどリストイとは友達だからいっしょにいるだけだよ？」

「…………！」

「闇夜の眷属である私やその子自身恐くないのかと言つてますね」「全然恐くないわ、むしろもつとたくさんの闇夜の眷属の人と友達になりたいわ！」

エステルの答えを聞いたパズモは少しの間、エステルの嘘についていない純粹な眼を見つめてまたエステルの頭の中に声を送った。

「……」

「え……」

「ほえ？ リスティ、なんて言つてるの？」

パズモの言葉を訳そうと思つたリスティが呆けた声を出したのに気付き、エステルは聞いた。

「エステルを守護する契約をして下さいと言つてるですう。」

「あたしを守護する契約ってなに？」

「言つたことそのままの通りですう。要するにエステルを主人と認めてエステルが死ぬまでずっと傍にいることですね～」

「え……あたしなんかとずっとといるなんて約束していいの…？」

エステルはリスティが言つた事に驚きパズモに聞いた。そしてまたエステルの頭の中に声を送つた。

「……」

「エステルじゃないと嫌と言つてますう～」

「そなんだ……あたしでよければその契約、受けて上げるわ～！」

「……！」

エステルの言葉を聞き、パズモは真剣な表情を笑顔に変え、またエステルの頭の中に声を送つた。

「契約を受けてくれてありがとうございますね～。」

リスティはパズモの喜び自分が喜んでいるように伝えた。

「あ！ ひとつだけ言い忘れたことがあるわ～！」

「……？」

思いついたかのように言い出したエステルにパズモは小さな首をか

しげた。

「あたしとパズモは主人と従者じゃなく友達よ！友達に命令するとかあたしが嫌だもん！」

エステルの言葉を受けて固まつたパズモだったが、やがてまた笑顔になりエステルの頭の中に声を送った。

「…………！」

「わかつたと言つてますね～。」

「えへへ、よかつた。それで契約つて何をすればいいの？」

「…………」

「エステルは何もしなくていいですよ～ただ、この子がエステルの魔力と同調するからエステルはそれを受け入れるだけですう～」

「わかつたわ…………いつでも来なさい！」

リストイから契約の仕方を聞き、エステルは両手を広げた。そしてパズモは勢いよくエステルの身体に入った。

「わ…………」

エステルは自分の身体にパズモが入ったことに最初は驚いたが、特に何も異常は感じずあたりを見回した。

「ねえ、パズモはどこにいつちゃつたの？」

「エステルの身体の中に入つてエステルの魔力と統合しただけですから、エステルが呼びかければまた出できますよお～」

「わかつた、やってみる……おいで！パズモ！」

エステルがパズモの名を言うと、エステルの目の前で小さな巻き起こりその中からパズモが姿を現した。

「えへへ……これからよろしくね、パズモ！」

（あなたをずっと守るね、エステル……）

「え……今の声はパズモ、あなたなの！？」

エステルは頭の中に響いた声に驚き、パズモに聞いた。

（そうよ……エステルと私は契約して繋がっているから精霊である私の声が聞こえてもおかしくないわ。）

「そりなんだ……パズモとおしゃべりができるようになつて嬉しいわ！」

（私もよ、エステル……！）

そしてパズモを加えてリストイとしばらく遊んだエステルはマーリオンにもパズモのことを報告し、その後行きと同じようにリストイにブライト家まで送つてもらつた。

かつて正義の大女神と神殺しに仕えた守護精靈は長年いつしょに旅をし、異世界に来た際途中にはぐれた友人の思いと同じ新たな幼い契約者に希望を持つた……

同じ頃、プリネもまた、誰かに呼ばれるように感じメンフィル大使館の敷地内を歩いていた。

（確か……この辺り……いた！）

そこには鳥翼族の娘が倒れていた。

「う～魔力がうまく取り込めないよ……ボク、このまま死んじゃうのかな……」

「あなたが私を呼んだのですね。」

「え……もしかして、ボクの呼びかけの答えてくれた人！？」

鳥翼族の娘はプリネを見て驚いた。

「ええ、異世界だから魔力がうまく取り込めなかつたんですね……少しの間、待つて下さい……」

プリネは鳥翼族の娘に近づき魔力を分けた。

「う～力がみなぎってきた……ボク、ふつかつ！」

鳥翼族の娘は魔力を分けられ元気になり、勢いよく起き上がつた。

「魔力を分けてくれてありがとう！」

「気にしないで下さい、私がやりたいと思つてやつたことですから……それより、どうしてこんな所にいるのですか？あなたはメンフ

イル兵やお父様が呼んだ闇夜の眷属の人にも見えませんが……」

「う……それは……！」

鳥翼族の娘は図星をつかれたように後退した。

「事情を話してくれませんか？このままだとあなたを侵入者としてメンフィル兵に突き出さなければなりません。」

「はい……実はボク、闇夜の眷属と人間が仲良く暮らす国を世界中を廻つて探していましたんだ。それで久ぶりに故郷に帰ろうと思って来た帰り道によつたレスペレント地方がいつのまにか、ボクが望んだ国になつていて、それでミルスで王様が新しい世界を見つけてそこと交流をし始めたつて聞いたから、そこもボク達闇夜の眷属を受け入れてくれるのかなと思って、友達といつしょに兵士の目を盗んで転移門に入つたんだけど、入る直前に兵士にみつかっちゃつて、焦つて起動してしまつたから友達ともばぐれて今の状況に……」

「なるほど……それで、お友達は見つかったのですか？」

「ううん……この世界は魔力の流れが違うからわからなくなつちゃつた……」

「……あなたのお名前は？」

「ボク？ボクの名前はペルル！」

「私の名前はプリネ・マーシルンです。」

「え、マーシルン！？それってメンフィル王家の名前……！」

ペルルはプリネのフルネームを聞き、驚いた。

「ええ、お父様はリウイ・マーシルン。闇夜の眷属と人間の共存の国を実現した偉大なるお方です。」

「あわわ……ボク、皇女様に失礼をしちやつた……『めんなさい…』ペルルは慌て、勢いよく頭を下げる謝った。

「フフ、気易く接してもらつてかまいません。それより友達を探すあてはあるのですか？」

「う……それが全然……おまけに魔力の波長も合いにくいし……」

プリネの疑問にペルルはこれからのことを考え肩を落とした。

「でしたら、これも縁だと思ってお友達が見つかるまで私の使い魔

になつてくれませんか？」

「え……皇女様みたいな偉い人がボクなんかを使い魔にしちやつていいの！？」

ペルルはプリネの言葉に驚き聞いた。

「皇女と言つても私は帝位継承権はほとんどありませんから……それにお父様とマーリオンのやり取りを見て、私もずっと傍にいる使い魔さんがほしいと思いましたから。……それでどうでしょうか？」

プリネの言葉を聞き少しの間考え真剣な顔でプリネに聞いた。

「一つだけ聞かせて……」プリネはボク達、闇夜の眷属と人間の共存を望んでいるの？」

「私とて魔神の血を引く闇夜の眷属の一人です。いずれ皇帝となるれるリフィアお姉様を手伝つて、広大なレスペレント地方を闇夜の眷属と人間が暮らすためのよりよい国にしていきたいと思ってます。……」こんな答えじゃダメですか？」

「ううん！ それだけ聞ければ充分！ ボクの方こそお願ひします！」

ペルルはプリネの答えを聞き笑顔になった。

「よかつた……では、契約を……」

「うん……！」

そしてプリネとペルルはお互いの手と翼を握り、ペルルが翼に伝わるプリネの魔力に溶け込むように消えた。

「契約完了ですね……ペルル、来て！」

「はーい！」

プリネが呼びかけるとプリネの身体から小さな光が出、その光の中からペルルが現れた。

「しばらくの間、お願ひしますね。ペルル。」

「うん！ こっちこそよろしくね、プリネ！」

こうして、ペルルもまた闇夜の眷属と人間の共存を願つた最初の主の思いと同じ新たな契約者にパズモと同じように希望を持った……

第1-3話（後書き）

感想者様の要望を受けて文を大幅に変えました。パズモ、ペルルは数少ない神聖魔術使い、お宝探し要員でしたがアムドシアスやナベリウス等が入ると即2軍行きしましたから、優遇しました。パズモの口調は今、ZEROの終章の紅き月神殿なんですが、一切しゃべらないので正直わかんないです……感想お待ちしております。

（プライト家）

夕方にさしかかりそうになつた頃、3国とクロスベルの代表になつたカシウスは妻にもそのことを報告するために一端、家に戻つた。

「今、帰つたぞ。」

「おかえりなさい、あなた。」

「お邪魔しています、先生。」

出迎えたのは夕食の準備をしているレナとテーブルにタロットカードを広げて占いをしているショラザードだつた。

「来ていたのか、ショラザード。」

「ええ、レナさんに例の事件でエステルに注意してもらつたためにお邪魔させてもらいました。」

「そうか……ところでエステルの姿が見えんが？」

「あの子なら友達と遊びに行つてますよ。」

「今大変なこの時期にか……はあ、こいつの氣も知らないでおの輻婆娘は……」

カシウスはレナからエステルの姿が見えない理由を言われ溜息を吐いた。

「ふふ、あの子の行動は誰にも止められませんよ。」

「レナさん、そんな呑気な……でも、レナさんの言つ通りですね。まあ、ここにロントはメンフィルのお陰でなんとか例の事件の影響を受けずにいますけどね……」

「そうだな……実はそのメンフィルのことでの、忙しい中帰つて來れたんだ。」

そしてカシウスは2人に事情を話した。

「メンフィルに大敗したエレボニア帝国までメンフィルに頭を下げるなんて信じられませんね……」

カシウスの話を聞き、ショラザードは驚愕し目を見開いた。

「それだけ深刻な問題なんでしょうね……あなた、いつ大使館のほうに行くの？」

レナは暗い顔をした後、気を取り直しカシウスに聞いた。

「ああ、ここで少し休憩したらすぐにでも行く気だ。」

「でも先生、相手は隠居しているとはいえ仮にも皇帝ですよ？ いくらなんでも約束もなしにそんな時間に行つたら門前払いされるんじゃ……」

「わかつていてる。それでも俺達の本気がメンフィルに伝わってほしいんだ。そのためなら下座でも何でもやってやる。」「あなた……」

レナはカシウスのことを心配そうな顔で見た。

「……そうだ、先生！ ひょっとしたらすぐに会えるかもかもしれませんよ！」

「何？ どういう事だ？」

ショラザードの提案にカシウスは驚き聞いた。

「その前にレナさん、さつきのことを話さないと……」

「そうね。あなた、驚かないで聞いてちょうだいね。実は……」

そしてレナはカシウスにカシウスが事件解決にリベルール中を奔走している中、エステルが闇夜の眷属と友達になりその友達がメンフィル皇帝縁の者であることを言った。

「まさかエステルがそんな人物と友達になるなんてな……魔術が使えることといい、本当にあの娘には驚かされるよ……」

「ふふ、そうね。」

カシウスが驚くという珍しい光景を見たレナは同意しながら笑った。

「それで先生、どうします？」

「渡りに船だ。その人物にできれば今日中にリウイ殿と接触できるように頼むつもりだ。」

「そう……私からもリストイさんに頼んでみるわ、あなた。」

「ありがとう、レナ。」

そして3人はリストイを確実に引き留めるためにいつも空から帰つてくるベランダで待っていた。半刻後、空からエステルを抱きしめたリストイが姿を見せ、ベランダに降り立つた。

「あ、おとうさん！帰つてたんだ！」

「ああ、お帰り、エステル。」

「えへへ、ただいま！あ、そうだ！みんなに紹介したい友達がいるんだ！」

「紹介したい友達というのはそちらの女性かな？」

エステルが嬉しそうにしていることをカシウスはリストイを見て聞いた。

「あ、おとうさんは初めて会うよね。この人はリストイ！あたしの親友の一人だよ！」

「リストイですぐ。よろしくお願いしまーす～」

「エステルの父のカシウス・ブライトだ。娘を守つてくれてありがとうございます。お陰で安心して娘を遊びに行かせれるよ。」

「リストイも楽しいから別にお礼なんていいですよそれよりエステル、パズモの事を報告しなくていいんですか～？」

「そうだ！おとうさん、おかあさん、シェラ姉！みんなにパズモのことを紹介するから広間に行こう！」

エステルは3人に守護精霊になつたパズモのことを紹介するために広間に行くよう促した。

「じゃあ、私は帰りますね～」

リストイが帰るために飛び立とつと翼を広げた時レナがリストイを呼び止めた。

「あの、リストイさん。今日はあなたの分の夕食も作りましたからよかつたらいっしょに食事をしませんか？」

「あ、大賛成！リストイ、いっしょに食べましょ！」

「はいですう～」

そして5人は広間に降りた。

「それで、エステル。パズモさんっていう人はどこにいるの？私達以外いないようだけ……」

レナは広間を見渡しエステルに聞いた。

「えへへ、今紹介するね……おいで！パズモ！」

広間の中で小さな竜巻が起こりその中からパズモが姿を現した。それを見た3人は驚愕した。

「え……妖精！？」

「な……！」

「な……エステル！今、あんたが呼んだからこの子が出たように見えたけどいつたい何をしたの！？」

「えへへ、パズモはあたしの守護精霊になつてくれたんだ！」

「守護精霊？エステル、いつたいそれはなんなんだ？」

カシウスはパズモを横目で見つつ、エステルに聞いた。

「う～んと……ずっとあたしの傍にいてくれる友達だよ！」

「それだけじゃちょっとわからないわね……リストイさん、守護精霊とは何か知っていますか？」

レナは困ったような顔をした後リストイに聞いた。

「はいですう～守護精霊とは～普段は契約した主の魔力と同調していますけど～こうやつて主が呼んだら出てくるんですよ～それで役割ですけど～その名の通り、主を守るために共に戦ってくれる精霊ですよお～ちなみに主が死ぬか契約を解除するまでは主の魔力で身体を保ちますから～致命傷を受けても時間をかけて、復活しますよ～」

「今、エステルの魔力で身体を保つてていると言つたがエステルに負担はかかるのかね？」

カシウスはリストイの言つたことに驚愕した後、心配そうな顔になりました。

「精霊の強さによつては～主に負担を掛けてしまつますけど～この

子だつたらずつと召喚しても特に問題ありませんよ～

「そうか……」

カシウスはリストイの言葉を聞きホツとした。

「でも、こんな小さな子が戦えるのかしら？」

ショラザードはパズモを興味深そうに見て呟いた。

（失礼ね！私はこれでも守護精霊の中では強いほうよ～）

パズモはムツとした顔でショラザードを睨んだ。

「あ～！ショラ姉、私は弱くないってパズモが怒っているよ～！」

「へ……この子、しゃべったように見えないんだけど、エステル、わかるの！？」

エステルがパズモの代わりに怒っているのを聞いてショラザードは驚き聞いた

「あたしはパズモとえーと……いつしんどうたい？なんだよ。だから、この子の怒った声が頭に響いて来るよ！」

「エステルとパズモは契約してつながっていますから、人間には聞こえない精霊の声がエステルに聞こえて当然ですよ～」

「もはや何もありね……それでどんな事ができるのかしら？」

ショラザードは溜息をついた後、パズモに聞いた。

（今、見せてあげるわ！……エステル、ちょっと手伝ってくれる？）

「うん、いいよー」

そしてエステル達は外に出て、エステルがパズモの言う通り、庭に壊れた小さな椅子をおいた。

「これでいい、パズモ？」

（ええ、それじゃあ、私の力見せてあげるね！……光よ、集え！光霞！）

パズモが椅子に手をむけると、椅子の周りに強烈な光が走り、光が収まつた頃には壊れた椅子が粉々になつていた。

「「「な……！」」

3人はその状態をみて驚愕した。

（光よ、かの者を守護する楯となれ！防護の光盾！）

今度はレナに手を向けるとレナの身体に淡い光が覆つた。

「レナ！？」

カシウスはレナに何かの魔術を掛けられたと思い、慌ててレナに駆け寄つた。

「あら……？ これはいつたい？」

レナは自分を覆つた淡い光を見て不思議がつた。

（魔術によつて少しの間だけ、身の守りを固くしたわ。物理防御、魔法防御共に抵抗力があがつたわ。）

「すつご～い！ あのね、魔術の力でおかあさんを少しの間だけ守つているんだつて！ 攻撃や魔法攻撃を受けてもある程度平氣らしいよ！」

エスティルは興奮した様子で3人に説明した。

「う～ん、そう言われても特に何も感じないわね…… そうだわ！」
レナは悩んだ後、家からペンを持つて来てペンの切つ先を思いつき
り自分の手に刺そうとしたが、

手に当たつた瞬間逆にペンの切つ先が折れてしまい、レナは自分に
全く痛みがなかつたことを感じた。

「「「…………！」」」

そしてレナを含めた3人は信じられないような顔で折れたペンの切
つ先を見た。

さらにパズモはカシウスにも手を向けて魔術を放つた。

（戦意よ、芽生えよ！…… 戰意の祝福！）

「む…………？」

カシウスも自分に何か起こつたかを感じた。

「なんだ……？ 体が羽のように軽く感じるぞ……？ それにこの感触
はどこかで感じたような……？」

（今度は戦う意識を底上げしたから、少しの間だけ体がいつもより
早く動かせるわ。）

「ふわあ～…… 今度はおとうさんがいつもより早く動けるんだつて

！」

エステルはパズモをキラキラした目で見つづ、説明した。

「そうか、この感触は時のアーツ、”クロックアップ”を使った感じに似ている。だから……」

カシウスはエステルの説明に納得した。

（私の使う魔術はこうやって味方を援護したり、敵の身体能力を下げたり敵を攻撃できたりするわ。）

「……だって、みんな！」

パズモの言葉を伝えたエステルはパズモのことを眞櫻の友達だと思った。

「あらあら、エステルに小さな騎士ナイトさんができたわね。」

驚いていたレナだつたが気を取り直し、パズモと目を合わせた。

「パズモさん、私達が見てないところでこの子が危ない目に合わないようお願いしますね。」

（当然、守るわ！）

パズモはレナにもわかるように小さな首を縦に振った。

「ありがとう。」

それを見たレナは笑顔でお礼を言つた。

「そうだと、言い忘れていました、風の守護精霊と契約しましたから、もしかしたら、その影響で風の魔術が使えるかもしませんよ？」

？

「本当…うんと…風よ起これー！」

リストイの言った言葉に目を輝かせたエステルは両手を広げて、試しに風を起こしそうとしたが特に何も起こらなかつた。

「あれ？」

（そんなすぐにはできないわ。でも、練習すれば使えるわよ。）

「本当…よし、かんばるわよー！」

パズモの言葉を聞きエステルはこれからのことと思い、張り切つた。

「はあ…あの子は私達をどれだけ驚かすつもりなんでしょうね

……

張り切つて いるエステルを後ろで見て いたシェラザードは溜息をついた。

「それがあの子の良さの一 つなんだろう…… 得てしまつた力は俺達が間違つた方向に進ませないよう教えるだけだ。」

「そうね…… もしかしたら、その内たくさんの闇夜の眷属の人と友達になるかも知れないわね。」

「レ、レナさん…… 今の状況を見たら『冗談に聞こえませんよ……』

レナの冗談にシェラザードは冷や汗を垂らした。

その後、新たな小さな家族を迎えたブライト家は賑やかな夕食となつた……

第14話（後書き）

エステルがどんどん原作より強くなつていいく気がする……このままだと軌跡キャラの中では最強キャラ化するかも……？今のところ、魔術が使えるキャラは空シリーズではエステル以外考えていらないんですね……感想お待ちしております。

（プライト家）

食後、しばらくの間パズモとリストイとおしゃべりしていたエスティルは目をこすり欠伸をした。

「ふわあ～……」

「エスティル、もう寝る？」

「うん……」

レナの言葉に答えたエスティルはパズモを呼んだ。

「パズモ。」

（わかつたわ。お休み、エスティル）

「おやすみ～」

そしてパズモは小さな光となつてエスティルの中に入った。

「じゃあ、あたしはもう寝るね～またね、リストイ。」

「はいですう～」

そしてエスティルはレナに連れられて二階に上がった

「それじゃあ、リストイも帰りますね～ご飯ありがとうございまし
た～」

「リストイさん、少し話があるんだが、聞いてくれないかね？」

「私ですか？」別にいいですよ～」

リストイを呼び止めたカシウスは真剣な顔で話しかけた。

「すまない……リストイさんは最近流行つていて『D G教団』と

いう犯行グループによる誘拐事件を知つてゐるかな？」

「ごめんなさい……リストイ、難しい話はわかんないですけど、ご主人様達がセリエル様を呼んで教団の拠点がどうとか言つてたのは覚えてます～」

「な……！まさか例の犯行グループの拠点を見つけたの！？」

シェラザードは驚いて椅子から立ち上がった。

「落ち着けシェラザード。……そのセリエル様というのはどなたか

な？」

カシウスは心中で驚き、顔に出さず先を促した。

「セリエル様ですか？」セリエル様は獣人族がたくさん住んでいる領、スリージを治めた前領主様で聖獣メルと同じ動物と意思を通じ合える方です～」

「動物と意思を通じ合える……か。」

カシウスはリストイの言った言葉を考え、ある結論に至った。
（まさか動物を使って、教団の拠点を見つけたのか！？だとすると一刻も早くリウイ殿と会わなければ！）

カシウスは姿勢を正しリストイに頭を深く下げた。

「リストイ殿、お願ひがあります。どうカリウイ殿とすぐ会えるよう口添えをお願いします～！」

「お願いします！」

カシウスにつられてショラザードも頭を下げた。

「あやや……困りました……どうしましよう……」

リストイは2人を見て困った顔をした。

「リストイさん、私からもお願ひします。」

そしてエステルを寝かしつけたレナも一階から降りて来て頭を下げた。

「エステルのお母さんまで……わかりました～取りあえずご主人様に話してみますう～」

「ありがとうございます、リストイ殿！」

リストイの答えを聞きカシウスは頬を緩めた。

「じゃあ、今ご主人様に伝えてきますね～」

そしてリストイは椅子から立ちドアを開け外に出た後、翼を広げ大使館へ飛び去った。三人は藁をすがむ思いでリストイが飛び去った空を見上げた。

（メンフィル大使館内会議室）

そこではメンフィルの主な人物達が机に何ヶ所かに印をつけた地図

を広げ話し合つてた。

「まさか、これほどの規模だつたとはな……」

リウイは大陸中にならばつてゐる教団の拠点である印がしてある地図を睨み咳いた。

「いかがなさいますか、リウイ様。今この世界にいる兵達を半分ほど使えば一斉攻撃は可能ですが。」

「いや……それは出来ん。他国の領地に勝手に兵を入れる訳にはいかん。」

ファーミシルスの意見をリウイは溜め息をついて否定した。

「それじゃあ、どうするの！？このままじゃ、子供達がどんどんあいつらの実験台に使われ続けられるわよ！？」

「そうじゃぞ、リウイ！力無き者のために動くのが我ら王族の務めであろう……！」

「リウイ様……」

教団の活動内容を知つたカーリアンとリフィアはリウイに詰め寄り、ペテレーも懇願するような目でリウイを見た。

「……とりあえず、遊撃士協会に相談してみるか。話はそれからだ。」

リウイは少しの間目を閉じて考えた後、目を開き答えを言った。

「そうですね……彼らは国家間の問題では中立の立場であるのでちようどよいかと。それに彼らも奴らの情報を欲しがつていきましたからね……」

ファーミシルスもリウイの考えに賛成した。

「シェラ、生け捕りにした犯人共はあれから口を割つたか。」

「ハッ……捕らえた教団員を尋問しましたが、全く口をわらはず、それどころか精神に異常が見られ会話が成り立ちません。」

「そうか……まあいい。拠点が判明した以上奴らに用はない。魔導鎧の実験に使うなり自由にしろ。元々奴らは生かす必要などないしな。」

「御意。では、実行のためこの場を離れます。」

リウイの処刑とも言える命令をシェラは実行するために部屋を出た。

そしてそこにリストイが部屋に入ってきた。

「ご主人様、エステルのお父さんがご主人様と話したいそうですが」「なんだリストイ、帰つてきていきなり……待て。エステル、だと？」

リウイはリストイの言葉に呆れたがエステルの名を聞き、リストイに聞いた。

「はいですう、エステルのお父さんがご主人様と今から話したいそうです」

「そのエステルって子つて、確かマーリオンが言つてた人間の友達じゃない？」

カーリアンはリストイから出た名前を思い出しリウイに聞いた。

「ああ。この世界の人間であるにもかかわらず俺達、闇夜の眷属に驚かず、逆にたくさんの闇夜の眷属と友人になりたいと言つてた変わつた娘とマーリオンが言つてたな……確かに父親は以前のリベールとの会談で何度か会つたカシウス・ブライトだつたな。」

「ハツ……カシウス・ブライト……人呼んで『剣聖』。我らがこの世界に来るまで大国、エレボニアの攻撃を凌ぎ、さらには反撃作戦を考えた勇将です。私もかの者と会談を通じて会いましたが、かの者はこの世界の人間では最強の部類だと思います。恐らく”幻燐戦争”時に共に戦つた同士達以上、あるいは神格者と同等の強さを持つていると私は感じました。……今は、軍を退き遊撃士協会に所属しています。」

ファーミシルスはゼムリア大陸で有名な武人の情報を入手しており、その情報をリウイに言った。

「遊撃士協会に所属か……ファーミシルス。その者、恐らくランクも高レベルだろう。」

「ハツ！おっしゃる通り、かの者の正遊撃士ランクは最高ランクのA級です。」

「だとすると、例の教団の事件に担当している可能性は高いな……ちゅうどいい。今からその者に会いに行く。ペテレーネ、その者の家に今から行くぞ。」

「承知しました、リウイ様。」

「こつちに呼ばないの、リウイ？』

カーリアンは王族であるリウイ達が自ら会いに行くのを珍しがり聞いた。

「今から使者をやつてこつちにこわせても一度手間になる。……それにそのエスティルと言う娘、少々興味があるしな……」

「そうね。あたし達、闇夜の眷属と進んで友達になりたい人間なんてこの世界じゃ初めてじゃないの？」

「ああ。……会う機会があればその者と話そつと思つていたのでな……まあ、この時間では寝ているかもしかんが。その時はまた、別の機会を待つだけだ。』

カーリアンの言葉にリウイは頷き、外に出かけるため立ち上がった。
「リウイ、余も行くぞ！余達、闇夜の眷属と友人の娘なら、余にとつても友人じや！余も会いたいぞ！」

リフィアはリウイ達の会話を聞き、自ら会いにいくため立ち上がった。

「ダメだ。お前はここで留守番している。』

「なぜじゃー？』

「こんな夜遅くに大人数で押し掛け相手を警戒させるだけだ。それに俺の不在時、この大使館を指揮できるのはまだお前だけだ。プリネにはまだ早いのはわかるだろ？』

「もうー……確かにそれも王族としての役割じやの。仕方あるまい

……今は大人しく引き下がるとするかの。』

リフィアはしばらくの間、唸り引き下がった。

セシル・カワイとペテレーネはブライト家に向かつた……

第15話（後書き）

エステル、本人が知らぬ内にメンフィルでは有名人に……言っておきますがいくらなんでもリウイとエステルをカップルにするという暴挙はしませんのでヨシュアファンはご安心を……感想お待ちしております。

「ブライト家」

ブライト家では3人がメンフィルからの迎えの使者が来るかもしないことに誰もが緊張していた。そして広間は時計の針の音だけの静寂な間であった。そこに入口のドアをノックする音が聞こえた。

コンコン

「…………はい！どなたですか？」

レナはノックの音を聞き、ハツと立ち上がりドアの外にいるであろう人物に用を聞いた。カシウスとショラザードも緊張した顔を見合わせ立ち上がった。

「メンフィル大使館の者です。先ほどリストイさんから知らされた件でこうして参上してまいりました。」

ドアの外から聞こえたのは兵士の声ではなく、穏やかな女性の声を聞きレナは戸惑つたが返事をした。

「今開けますのでお待ち下さい！」

そしてレナは急いでドアに近寄りドアを開けた。

「あ、あなたは…………！」

「な…………！」

「嘘…………闇の…………聖女…………！？」

ドアを開け姿を見せたペテレーネにレナは驚き開いた口をふさぐよう片手を当て、カシウスは予想外の人物に目を丸く開き、ショラザードは新聞でしか見なかつたアーライナ教を広める元となつた女性を見て驚愕した。

「こんばんわ、私はゼムリア大陸でアーライナ教の神官長を務めさせて頂いているペテレーネ・セラと申します。夜分遅くの訪問、お許し下さい。」

「顔を上げて下さい…………謝るのは私達のほうです！聖女様ほどの

方がわざわざ知らせに来るなんて……。ありがとうございます！」

頭を下げるペテレーネに恐縮したレナは慌てて頭を上げるよう言ひ

つた。

「ありがとうございます……あら？ もしかしてあなたとお会いしましたでしょ？ どこかで見たような……」

顔を上げたペテレーネはレナの顔を見て、見覚えのある顔だと気付いた。

「あの……ロントで起こったエレボニア帝国兵による襲撃の時、あなたに傷を癒してもらつた者です……あの時は本当にありがとうございました！」

「ああ……あの時の方でしたか……その後お変りはありませんか？」
レナの事を思い出したペテレーネはレナに体調を聞き、それをレナは恐縮しながら答えた。

「は、はい！ 貴方様のお陰でこうして元気に家族と共に幸せに暮らせております。……娘は特にあなたのことを探して置いて私の傷を癒すあなたを見て、自分も魔術を覚えて貴方様のように『人助けをするために遊撃士になる！』と言つて、時間がある時は貴方様が書いた聖書を読んで魔術の練習と、武術を練習しているんです。あの子に将来の目標が出来たのは貴方様のお陰でもあります。本当にありがとうございます！」

「そ、そんな……！ 私はただ、当然の事をしただけです……」

レナの言葉にペテレーネは顔を赤くし、慌てた。

「……なるほどな。あの時、助けを求めた少女がマーリオン達と友人になつた少女だつたとはな……案外世間とは狭いものなのだな……」

ペテレーネの横に並ぶよつにリウイが姿を現した。

「え……！」

「リ、リウイ殿！？」

「嘘……メンフィル皇帝……！」

3人はリウイの姿を見て生きている中で一番驚いた。

「……メンフィル大使、リウイ・マーシルンだ。貴殿とは”百日戦役”の講和条約の時以来だな。カシウス・ブライト。」

「……久しぶりでござりますな、リウイ殿。狭い家でござりますがどうぞこちらへ。」

「……失礼します。」

「……失礼する。」

そしてカシウス達はリウイとペテーネをテーブルの椅子へと案内した。

「……エステル・ブライトはやはりもう寝てしまったようだな。」

椅子に座つたリウイは2階にある部屋からリウイのみがわずかに聞こえる少女の規則正しい寝息を聞き、少しだけ残念そうな顔をした。

「あの……エステルが陛下に何か失礼をしてしまったのでしょうか？」

レナは心配そうな顔でリウイに聞いた。

「いや……人間でありながら我ら”闇夜の眷属”と進んで友人になろうとしている少女がどのような少女なのか直接話してみたかったのだがな……寝てしまっているのであればまたの機会を待とう。……子供は幼い時はよく眠るのも仕事の一つだからな。」

「そうでしたか……皇帝という忙しい毎日を送っていたのにもかかわらず子煩惱なリウイ殿を見て、失礼ながら少々意外と思い申し訳ありません。」

カシウスはリウイの子煩惱な所を以外そんな顔でみた後、謝った。

「いつも見えてたたくさんの方を持つ父親でもあるのでな。気にするな……」

（メンフィル皇帝にまで気にいられるなんて、あの子、どこままでたし達を驚かせる気よ……）

シェラザードはリウイがエステルの事を話す時、リウイがわずかに笑みを浮かべているのに気付き、心中で妹分の凄さに溜息を吐いた

た。

「さて……リストイから聞いたが何か俺に用があるそりだな？……

例の教団の件か？」

そしてリウイはここに来た直接の理由を言った。

「ハツ、理解が早くて助かります……レナ、シヨラザード。お前達は別の部屋で待機していなさい。」

「でも、先生……！」

「シヨラちゃん。今はこの人の言つ通りにしましょう……私達ができるのは子供達が一人でも無事に帰れるようにエイドスとアーライナに祈るだけよ……」

「はい……」

カシウスの言葉に反発しようとしたシヨラザードだったが、レナに諫められ自分の力の無さに怒りレナと共に別室に入った。

「さて……リウイ殿、まずはこちらをお読み下さい。」

レナとシヨラザードが別室に入ったのを見届けると、自分の鞄の中から何重にも保護された一枚の嘆願書を出し、それをリウイに渡した。

「拝見しよう。」

嘆願書を受け取つたリウイはそれを端から端まで丁寧に読んだ。

「……なるほど。3国を始めとし、遊撃士協会、クロスベル警察が一丸となつて異世界人である俺達に頭を下げさせるとはなりウイはカシウスの手際の良さに感心した。

「その嘆願書にも書いてあるように、事件解決のためにどうか協力を……！」

カシウスは机に両手をつけ、リウイに深く頭を下げた。

「……顔を上げてかまわん。こちらもその件に関して遊撃士協会に相談することがあつたのでな。……ペテレーね。」

「かしこまりました、リウイ様。」

リウイの意図がわかつていたペテレーは一枚の地図を懐から出し、

それを机に広げた。

「これは……まさか、教団の拠点ですか！？」

カシウスは地図に示してある印を食い入るように見て、驚愕した。

「なぜ、それがわかる……？……リストイか。ふう……あいつには情報の重要さを教えてやらねばな……」

リウイはカシウスが地図を見てすぐにわかつた原因がリストイだとわかり、溜息を吐き、話始めた。

「我らも領民の安寧のためにいい加減やつらとは決着をつけたかつたのでな……本格的に調べさせてもらつた結果がそれだ。拠点が他国に散らばっている以上、さすがに兵を勝手に動かす訳にはいかなかつたのでな……悩んだ結果、貴殿等遊撃士協会に仲介役にでもなつてもらおうと思つて来たのだがこの嘆願書を見る限り渡りに船のようだな。」

「ハツ！ ギルドを始めとし、クロスベル警察、3国も事件解決のために精銳を参加させてもらうつもりでいます！……それでリウイ殿、先ほどの嘆願書の件はいかがでしょう？ もし、よろしければこちらを頂くだけでもいいので良い返事をお願ひします！」

「王族として、また子を持つ親として当然我らメンフィル、教団壊滅作戦に全力を持つて参加させてもらおう。」

「愛する娘を持つ母として、微力ながら私も参加させて頂きます。」「ペテレーネ殿まで……」「協力、感謝いたします！」

2人の返事を聞き、カシウスは希望を持った顔で礼を言つた。

「代わりにと言つてはなんだが、貴殿等に頼みがある。」

「私共にできることなら、何でも致します。どうぞ、おっしゃて下さい。」

条件を出されたカシウスは一瞬緊張したが、気を取り直しリウイに聞いた。

そしてリウイは教団による襲撃によって孤児になってしまった子供達のために、孤児院を作り、心の治療のために光の神殿で唯一闇夜

の眷属の国、メンフィルと友好的な癒しの女神教の信者達をゼムリア大陸に来させ、子供達の心の治療にあてること、そしてイーリュン教の布教の許可の手配を頼んだ。

「今まで唯一の女神、空の女神を信仰していたそちらにとつてはこれ以上異教の信者が増えるのは我慢ならぬかもしけんが、頼まれてくれるか？」

「子供達のためによければいくらでも協力させて頂きます……！私共のほうから七曜教会に言つておきますので一日でも早く親をなくした子供達の心を癒してあげて下さい。」

「ああ。」

カシウスはイーリュン教の活動内容、その教えをリウイとペテレーネから聞き安心し七曜教会との仲介を約束した。そして話し合いの結果、詳しい作戦内容は代表者達を集めて後日ということになり、リウイとカシウスは友好の証の一つとしてカシウスと握手をした。

「では、今後とも協力、お願ひする。」

「ハツ！こちらをお願い致します！」

そして2人は3人に見送られようとした時、ペテレー・ネが懷から紫色のブローチを出し、それをレナに渡した。

「あの……よろしければこちらをエステルさんにお渡し下さい。」

「これは……？」

「それは私が魔力を込めて作った厄除けのお守りのようなものです。所有者の潜在魔力を少しだけ上げる効果と混乱と毒を抑える効果を持つています。……命に危険が晒される遊撃士を目指すのですから、状態異常に耐性を持つてたほうがよろしいでしょう。」

「え……そんな凄い物を貰つてもよろしいのですか……？」

レナは渡されたブローチの効果を聞き、驚き聞いた。

「信者の方にもお守りとして配つているものですから、それほど大した品ではありません。ですから、遠慮なく受け取つて下さい。」

「わかりました……きっとあの子も喜ぶと思います。」

そしてレナはペテレー・ネから貰つたブローチを大事そうに両手で包んだ。

そしてそれを見ていたシェラザードがペテレー・ネに真剣な顔で頭を下げる。

「あの……ペテレー・ネさん、お願いがあります！失礼と思いますがどうか、私に魔術を教えてもらえないませんか！」

「魔術ですか？なぜ私に……？」

ペテレー・ネはシェラザードの唐突な願いに目を丸くした後、聞いた。「私は今回の件で改めて、人を守る遊撃士として力の無さを感じました……ですから、力を補うためにも魔術の力が必要なのです！秘印術を使ってのアーライナの魔術は私には使えないと感じ、一度は諦めたのですが噂でペテレー・ネさんはアーライナの魔術以外も使うと聞いたことがあります！どうか、それを教えて頂けませんか！」

「確かに秘印術を使えば、神を信仰していない人間の方でも魔術も使えますがそれを教えたからと言って、あなたが私と同じ魔術を使えるとは限りませんよ？人それぞれ適正の属性の魔術がありますから。」

「それでもです……お願いします！」

ペテレー・ネは必死に何度も頭を下げるシェラザードを見て、リウイと永遠に生きるために必死に神殿で修行したかつての自分を思い出し笑顔で答えた。

「わかりました……魔術の適正属性を調べることぐらいでしたら私もできますので……それに例え私が使えない属性の魔術でも使えるようにある程度教えることはできますのでそれでもよければ、大使館の隣にある教会に来て下さい。時間がある時なら教えられますので。」

「ありがとうございます！」

シェラザードはペテレー・ネから返事を聞き笑顔でお礼を言った。

「では、戻るぞペテレー。」

「はい、リウイ様。」

そして2人はブライト家を去った。翌日目覚めたエステルは両親からペテレーネが来た事を聞き日を丸くした後、『聖女様が家に来たのにどうしておこしてくれなかつたのよ!』と膨れたが、憧れてい人が作ったブローチを母から渡され、機嫌が直りそれを宝物のように大事にした。

数日後、3国、遊撃士協会、クロスベル警察、そして異世界の国、メンフィルの精銳達を加えた教団壊滅作戦の最終会議が始まろうとした……！

第16話（後書き）

ショラザード……FCでは物理、アーツ共にできる万能キャラでしたがパラメーターが本格的に差別されるSC、3rdでは、物理アタッカーのアガット、ジン、アーツアタッカーのクローゼやオリビエ達と違つて中途半端な攻撃力しか持たなく、唯一の取り柄は味方の順番を上げるためにいるようなほぼ2軍キャラだったのでちょっとだけ優遇しました。……ちなみにエステル、ある幻燐キャラの魂を受け継いでいるのでさらに使える魔術の属性が増える予定です。やばい、エステルがセリカ並の反則キャラになってしまふかも…………？
…………それで、レンをどうしようかな？感想お待ちしております。

(某所)

そこには教団壊滅作戦の指揮を執る事になつたカシウス・ブライトを始めとした3国の名将、A級遊撃士、クロスベル警察の部署の中で最強と言われる部署の人物がある人物達の登場を待つていた。そしてついにその人物達が姿を現した。

「……失礼する。」

「……失礼します。」

「はい、よろしくね。」

「……失礼しますわ。」

その人物達とはリウイ達であった。リウイ達が姿を見せた時、ざわめきが大きくなつた。

(まさか皇帝自らが参加するとは……メンフィルは王族自身が戦い兵を鼓舞するというのは噂だけではなかつたのか……)

(へへ……聖女や將軍といいメンフィルは綺麗所だらけだな。あの皇帝、仏頂面に似合わずモテモテだな、アリオス。)

(……滅多なことを言うな、ガイ。)

(あれが我らエレボニア帝国を恐怖の底に叩き落とした悪魔共か……クソ！なぜやつらと共同作戦をとらねばならない！)

ざわめきの中でもエレボニアの軍人達はゼクスを除いてリウイ達を厳しい表情で見ていた。そして視線に気付いたファーミシルスはその中でゼクスの姿を見つけ、ニヤリとした。

「あらあら……どこかで見たと思えば、あの時部下全員を殺されたにも関わらずおめおめと逃げ帰った将じやない。よくこの作戦に参加できたわね。」

「貴様、少将を侮辱するのか！」

ゼクスの傍に控えていた軍人の一人が声を上げファーミシルスを睨んだ。

「あら、私は事実を言つたまでよ？……まあ、見た所貴方達エレボニアはそいつ以外は話にならない強さだつたわね。だつたら仕方ないわね。」

「我らを侮辱するか……！」

挑発され、怒りを顔に表したエレボニアの軍人達は武器に手を掛けたがゼクスが一喝した。

「バカ者！これから一丸となつて戦う同士に何故武器に手を掛ける！…」

「……しかし、少将！」

「聞こえなかつたのか！今すぐ武器から手を放せ！」

「……クッ……」

ゼクスに一喝された軍人達は悔しそうな顔で武器から手を放した。

「……部下共が失礼をして申し訳ございません、ファーミシルス殿。」

「……いいわ。私の方も多少言いすぎたようだしね。」

ゼクスが素直に謝つたのを見てファーミシルスは感心し、自分の非も認めた。

そしてざわめきが一通り収まるのを見計らつたカシウスが声を上げた。

「さて……全員揃いましたな。これより『D G教団壊滅作戦』を行いたいと思います！作戦は至つて単純です。こちらをご覧下さい！」

「この印をされているのはなんだい？カシウス殿。」

セルゲイはカシウスが広げた地図に至る所に印がされてある部分を聞いた。

「メンフィルによつて提供された、教団の”拠点”です。」

「へえ……たつた数日で大陸中にあるこれほどの数の拠点を見つけ

るなんて、ぜひその方法を俺達警察にも教えてもらえないですかね？」

セルゲイは捜査が専門の一つである自分達が出し抜かれた不甲斐なさに溜息をつきながら「冗談混じりにリウイに聞いた。

「……悪いが方法は教えられん。まあ、教えたとしてもお前達人間では決して真似できんが。」

「”闇夜の眷属”ならではの捜査方法ですか……羨ましいですな……」

セルゲイはリウイの遠回しな言い方で拠点を見つけた方法を推理し、メンフィル特有の人材の良さを羨ましく思った。

「では、続けさせて頂きます。具体的な作戦はこちらの拠点を一斉に制圧し、子供達を救出、そして犯人達の拘束です。みなさん、覚悟はよろしいですかな？」

カシウスの確認の言葉にその場にいる全員が頷いた。
「それでは具体的な各国の制圧メンバーの行く場所を今からいいます。まずこちらの A 拠点ですが……」

そしてカシウスは次々と各国の精銳達が行く拠点の場所を読み上げて行つた。

「最後にこの拠点ですが……メンフィルの方々にお願いしてもよろしいですかな？」

「ああ。」「お任せ下さい。」「腕がなりますわ。」「任せてよ！」

4人の頼もしい言葉に頷きカシウスは号令した。

「ではみなさんにエイドスとアーライナのご加護を！」

そして軍人や遊撃士達は出て行き、その場に残つたのはカシウスとリウイ達だけであった。

「……本当にこの拠点を俺達に当ててよかつたのか？そちらの調書にも書いてあるが”そこ”は拠点の中でも特別だぞ。」

リウイはカシウスにその拠点の特別さを強調して確認した。

「……その拠点に関係するであろう人物達のことを考えれば、その者達と関係がない貴殿等でなければ頼めません。……信じたくはないのですが”ここ”を襲撃した際、”客人”を庇うメンバーが出る恐れもありますので……」

カシウスはリウイの問いに目を閉じて答えた。

「そうか……それとカシウス・ブライト。先ほど貴殿は犯人を拘束してくれと言つたが、悪いが俺達は犯人を”客人”ごと滅し、子供達の保護をするつもりだ。」

「……下手に”客人”が生きていては後々国家間で問題になるので、そのほうがいいでしょう。子供達の救出を優先的にお願いします……」

「わかった。」

そしてリウイ達も出て行きその場に残つたのはカシウス一人だった。
「快樂のためだけに幼い子供達を汚す薄汚い権力者共が……！俺達は裁けないが彼らなら裁いてくれるだろう。では、俺も行くか……」
カシウスは怒りの言葉を呴いた後、自分も作戦に参加するため出て行つた。

深夜の森の中、リウイ達は拠点が見えると見張りに見つからないよう隠れて時間を待ち、ついにその時間が来た。

「……時間だ。行くぞ。」

「ええ！」

「ハツ！」

「かしこまりました！」「

3人の返事に頷いたリウイはあることに気付いていて、それをファ

－ミシルスとカーリアンに言った。

「……ファーミシルス、カーリアン。気付いているな？」

「ええ。この気配、人間にしては結構腕があるようね。」「

「いかがななさいますか？」「

「……警告だけしておけ。」

「ハツ！……闇に呑まれよ！ティルワンの闇界！！」

ファーミシルスは闇の奥に潜む存在に加減した魔術を放つた。そしてそれを察知できなかつたりウイ達を監視していた者達は回避もできず命中した。

「グハツ……！」

「くはつ！」「

魔術が命中した監視者達は思わず呻き声を上げた。

そしてファーミシルスは呻き声を上げた方向に向かつて叫んだ。

「今のは警告よ！私達の後をついてきたり、私達が戻つて来た際まだいるつもりなら、今度は本気で殺すわよ！！」

警告をしたファーミシルスはリウイ達の方に向き直つた。

「ではさつと終わらせましょう、リウイ様。」「

「ああ。」

そしてリウイ達は拠点へ進撃した。

一方ファーミシルスの魔術を受けた監視者　青年と少年は呻き声を上げながら起き上がつた。

「……ア、無事か？」「

「くつ……なんとか……まさか気配を悟られた上、僕達が攻撃を察知できないなんて……」

「……”闇夜の眷属”は人間より感覚が優れているというしな……それにこの暗闇の中であんな魔術を使われれば、例え察知能力が高いお前でも避けられまい……」

「それよりどうするの……エ。結社からはあの拠点の襲撃の命令を受けたけど、これじゃあ任務どころか返り討ちにあつてしまうよ……」

…？

「退くぞ……メンフィルがこの件に関わってきた際、『絶対に関わるな』。それも命令の一つだろ？』

「わかつた……」

そして少年は音もなく木に飛び移り消えた。

「…………あれがエレボニアを降したメンフィル皇帝か……機会があれば手合せを願いたいものだ。」

リウイ達が進撃した方向を見た青年は一言呟いた後、気配を消しここかへと消えた……

第17話（後書き）

アハハ……ここまでヒント出せば、リウイ達がどの拠点に行つたか
わかつちゃいますよね……ちなみにリウイ達は今回の件が終わり、
本編に移ればリフィアやプリネにバトンタッチしあまり出てきませ
んので、ご一承を……感想お待ちしております。

第1~8話（前書き）

注意ー今回の話は弱冠R15ですのでお気をつけ下さい。

（拠点内）

教団の中でも特別な拠点 今、そこはリウイ達の襲撃によつて阿鼻叫喚が飛び交つた。

「セアツ！！」

「グハツ……！」

リウイの持つ技でも高威力を持つ突剣技 フエヒテンケニヒによるレイピアの攻撃が教団員の腹に大きな風穴を空け 「行くわよ～それ、それ、それえツ！」

「あ……？ギャアアアア……！手が……足が……！」

カーリアンの目にも止まらない3連続攻撃を喰らつた教団員は自分の体の一部がなくなつたことに気付き叫びながら大量の血を流し死に 「行きます……！烈輝の陣！レイ＝ルーン！！」

「「「……ツ！！！？？」」「」「」「

ペテレーネの魔術は逃げようとした”客人”や教団員諸共巻き込み 消滅させ

「連接剣のお味はいかが？ハツ！」

「グツ……そんな……私を……誰だと……！」

同じようにその場から逃げようとした客人の心臓をファーミシルスが放つた連接剣が破壊し絶命させた。

「ファーミシルス！」

「ハツ！」

「お前は一端ここを出て、裏口や隠し扉等から逃げてゐるであろう」

教団員や客人達を滅せよ！」

「お任せを！……ハツ！！」

リウイの命令を受けたファーミシルスは逃亡者の追撃のため、広間で飛び上がり、天井を稻妻を帶びた連接剣で破壊してその場を離れ

た。

「カーリアン！俺とお前は一手に分かれて館内にいる奴らを一掃するぞ！もし、子供達がいたら優先的に保護をしろ！」

「わかつたわ！」

カーリアンもリウイの命令を受け違う広間から部屋へ向かった。

「ペテレー！お前は俺と共に来い！」

「はい！私は常にリウイ様のお傍にいます……！」

ペテレーもリウイの命令に頷きリウイと共に違う部屋へ向かった。

「ハアハア……どうして、こんなことに……！」

抛点の異変を感じいち早く逃げだした客の一人が息を切らせながら咳いた。

「クソ……！肝心な所では使えない奴らよ！とにかく我らは何事もなかつたかのように戻りましょ。」

一人の客人が悪態をついた後、その場にいる客人達に提案した。

「ええ、それがよろしいでしょ。」

提案に頷いた客人達は一刻も早く自分の屋敷に戻ろうとしたが、その時一人の客人が闇の魔槍に貫かれた。

「な……ガハ！」

貫かれた客人は血を大量に吐き絶命した。

「……ヒ、ヒイイイイ……！」

それを見たほかの客人達は慌て急いでその場から逃げようとしたが

「その身を溶かせ！強酸の暗礁壁！！」

「……何も見えない……！ギヤアアアア！体が……と……け……る

……」

空を飛んで追いついたファーミシルスが放った魔術を喰らい暗黒の壁に包まれた後、体がとけ消滅した。

「あ……あ……メンフィルの……墮天使……！」

ほかの客人達が殺され一人となつた客人はファーミシルスの姿を見て、正体がわかり腰をぬかしてしまつた。

「フン……墮天使ね……その呼び名を知っているといふことは、さてはエレボニアの貴族ね。……あの国も墮ちたものね。」

ファーミシルスは百日戦役の時、エレボニアから恐怖の対象としてある呼び名で呼ばれていたことを思い出し、目の前の客の正体を悟り鼻をならした。

「頼む！金ならいくらでも出す！だから、どうか見逃してくれ！」

客人はファーミシルスに何度も土下座をして命乞いをした。

「フフ、誇り高き”飛天魔族”である私には不要よ。……今、私が欲しいのは貴様のような人間とはいえない屑の命よ！魔の雷に呑まれなさい！ハアアアアア……！」

「ガアアアアアアア……！」

ファーミシルスの闇の雷を帯びた連接剣に体を裂かれた客人は叫びをあげながら消滅した。

「さて……そういえばまだ、逃げている連中が途中でいたわね……」

ハツ！

そしてファーミシルスは遠くへ逃げた客人達を追いかける途中でもほかの客人や教団員がいたのを思い出し殲滅するために飛び上がり戻つて行つた。、

「なぜです、聖女殿！混沌を望む女神の僕であるあなたがなぜ我々の邪魔をするのですか！？」

一方教団員と戦つている中でペテレーの姿を見た一人の教団員が叫んだ。

「……確かにあなた達のやつていることもアーライナ様が望んでいることの一つです……でも！私にとつての”混沌”とはリウイ様と永遠に生き、リウイ様とイリーナ様の理想である人間と闇夜の眷属が共に生きる争いのない世界を作ることです！”混沌”的考え方は自由！ですから、あなた達を許さないのも私の”混沌”です！」

教団員の叫びにペテレーは珍しく声を荒げ答えた。

「そういう訳だ。滅せよ！ メーテアルザ！ …」
「ギャアアア……！」

そしてリウイの技によって全身血だるまになり絶命した。

「クッ……かくなる上は！」

周りの死体を見てやけになつた教団員の一人が懐から薬を出しそれを飲んだ。

「おお！ 力が沸いてくる……！ ガア！ ? アアアアアアツ……！」
「え……！ ?」

「何！ ?」

リウイとペテレーネはもはや人間とはいえない姿になつた教団員を見て、驚いた。

「チ……カ……ラ……ガア！」

化け物ともいえる教団員がペテレーネに向かつて襲いかかつたが「……どうやら人を踏み外してしまつたようだな……ならば遠慮はせん！ ……我が魔の血よ！ 目覚めよ！ …」

「ガアアアアアア！ ?」

リウイが放つたすさましい鬪氣によりあっけなく消滅した。

「……ペテレーネ。今の薬に心当たりはないか？」

リウイはペテレーネにアーライナ教に伝授されている薬かと疑い聞いた。

「……混沌魔獸を作る上で必要な薬に少し似ているかと思います。ですけど材料もここ、ゼムリア大陸では手に入らないのに一体どうやってここまで薬を……」

リウイの疑問に答えたペテレーネは信じられないような顔で変貌した教団員の消滅後をしばらく見た。

「……今は考へている時間はない。子供達が優先だ。行くぞ。」

「はい、リウイ様！」

気を取り直したリウイはペテレーネと共に子供達を探しつつ教団員や客人達を殺していくた。

そしてリウイ達はある部屋に入った。

「これは……！」

「そんな……！」

そこはに子供達と思われる頭や体の一部が散乱し、死体として無事だつたものには白い液体らしきものがついていた。

部屋の惨状を見たりウイとペテレー^{クロス}ネは驚いた後、怒り悲しんだ。

「金によつて肥えた豚共が……あの時、奴らに恐怖をさら^{シテ}に植えつけて殺すべきだったな……！」

「じめんなさい……もつと私達が早くこれたら、こんなことにならなかつた……！」

「…………せめて、生存者がいるかどうかだけ確かめるぞ……」

「はい……」

悲痛な顔をしたリウイやペテレー^{クロス}ネは地獄絵図となつた部屋を散策すると体中に十字傷をつけ、倒れている少女を見つけた。

「もしかしてこの子……リウイ様！この子だけ生きています！」

少女に駆け寄つたペテレー^{クロス}ネは少女の微かな鼓動を聞き、生きていることに驚いた。

「……人間とはこんな幼く酷い姿になつても生きているのか……ペテレー^{クロス}ネ、回復を。」

「はい！……暗黒の癒しを……闇の息吹！」

ペテレー^{クロス}ネが少女に手をがさすと少女の傷が完全に治り、規則正しく呼吸をし出した。

「よかつた……それより、今の傷はなんだつたんでしょう……？あれではまるで自分で傷つけたような……」

少女が助かつたことに安心したペテレー^{クロス}ネは少女の傷に疑問を持つた。

「……先ほどの無数の十字傷。おまえの言う通り自分でつけたものだろう。恐らくこの惨状から自分を保つために……な。」

「そんな……！例え、両親が生きていてもこの子自身が両親を受け入れないので……それに両親も今この子を受け入れてくれる

かどうか……」

リウイの答えを聞きペテレー・ネは少女の未来を心配した。
そして少女が目覚めた。

「ん……お姉さん達は誰……？」

「気がついたのね……私達はあなたを助けにきたのよ……」
少女が目覚め、リウイ達のことを聞きそれをペテレー・ネが優しく答えた。

「レンを……？もしかして、本当のパパとママ……？やつと来てく
れたんだ……！」

「え……？」

ペテレー・ネは少女　　レンが自分達を父と母と言つたことに困惑つ
た。それを聞いてリウイがレンに聞いた。

「本当の……か。以前の両親はどうしたんだ、レン。」

「偽物のパパとママを知りたいの？嫌だけどパパの頼みだから話し
てあげる。」

レンは話すのも嫌かのように両親のことを語った。誰かに預けられ、
そして気付けば今に至ったことを。リウイとペテレー・ネは両親のこ
とを聞き、何も言えなくなつた。

「ねえ、あなた達がレンの本当のパパとママでしょ？つさつて言つ
てよ……」

黙つているリウイ達を見てレンが不安そうな顔で聞いた。

「……ああ。お前は俺達の娘だ。……事情があつてな、今まで会え
なかつたんだ。」

リウイが少女の言葉を認めたことに驚いたペテレー・ネは何か言おつ
としたがリウイの『何も言つな』と訴える視線で黙つた。

「よかつた……！やつとレンは幸せになれるのね……！」

リウイの言葉を聞き、レンは心の底から笑顔になつた。

「今は眠れ。疲れているだろう、おぶつてやる、ほら。」

「わあ……パパってば逞しい背中ね……気持ちいい……すう……」

リウイにおぶられたレンはその気持ちの良さに目を閉じ、眠った。

「あの……リウイ様、本当にこの子を育てるのですか？」

レンが完全に眠ったのを見てペテレーネはリウイに聞いた。

「ああ、いつかこの子が自立するまで育ててやろうと思つ。……プリンセスがいるのに相談もなしに勝手にお前の娘にしてしまつてしまんな。」

「そんな……！私もそうしようかなと迷つていた所です！……プリンセスもきっとこの子のことを受け入れてくれると思います。」

「そうだな……お前には苦労をかけるな、ペテレーネ。」

「いいえ、私にとつては大したことではございませんので大丈夫です。」

「フ、そつか……カーリアン達と合流し、ここに散らばる子供達を供養するか……行くぞ。」

「はい、リウイ様。」

レンをおぶつたリウイとペテレーネは一端部屋を出てカーリアンと合流した。

カーリアンはレンの事情を聞き耳を伏せた後『そつか。わかつたわ、リウイ！』と言つて笑顔で答えた後、

ちょうど戻つて来たファーミシルスを含めた4人で子供達の供養をして、最後に拠点をペテレーネの魔術で消滅させた後その場を去つた。

こうしてゼムリア大陸を揺るがした『D G教団事件』で助けられた子供達はリウイ達が助けた少女とクロスベル警察が助けた少女の、たつた2人という後味の悪い結果で終わつた……

第18話（後書き）

みなさんのご要望通り、レンはメンフィル陣営になりました。もちろん戦闘キャラとしても前衛でありながら魔術を使える数少ないキャラで、原作以上の強さとなります。ちなみにレンは”天才”です。どの魔術使えるかはみなさんなら予想できるかもしませんね。ただし、FCの間は少しだけしか出さないつもりなのでご了承を…：感想お待ちしております。

外伝～黒翼の少女～前篇（前書き）

外伝と書いてあつますが実質続きの話なので安心を。気分的にタイトルを外伝にしちゃいました。

ゼムリア大陸を揺るがした”D G教団”事件でわずかな生き残りの子供である内の一人、少女レンはリウイ達 マーシルン家に引き取られ、非公式ながらメンフィル帝国の皇女扱いとなつた。そしてもう一人の生き残りの少女は傷等を治癒するために医療の設備が最も発達している場所、クロスベル市にある聖ウルスラ病院に入院となつた。

→クロスベル州・聖ウルスラ病院→

「すみません、クロスベル警察のガイといいます。例の少女の見舞いに来ました。」

「いつも御苦労さまです。」

少女を助けた教団壊滅作戦に参加したクロスベル警察のガイは毎日かかさず、少女の見舞いに来ていた。

「あれから、どうですか?」

ガイは入院してから一向に目を覚まさない少女を心配し、何か進展があつたかを受付に聞いた。

「……いえ。ここに入院してから全く目を覚ましていません……」

「そうですか……」

暗い顔をした受付から今の状態を聞き、ガイも暗い顔になつた。

「部屋はいつものところですか?」

「はい〇〇〇号室です。」

「わかりました。」

気を取り直したガイが少女が入院している病室に向かいドアを開けた。

そこには看護婦を纏めている婦長、マーサと少女を見ている医師がいた。

そしてガイに気付いたマーサはガイに話しかけた。

「あら、ガイさんじやないかい。いつもすまないね。」

「いいんすよ。俺が勝手にやつてることですから。それで、先生。実際どうなんですか？」

「悔しいがこの病院にいる全ての医師を総動員させたのだが、目覚めない原因が全くわからないんだ……」

医師は悔しそうな顔をして今の現状を話した。

「よっぽどシヨックなことがあって目を覚ましたくないのかね……」

マーサは少女の今までの境遇を考え、思わず呟いた。

「それもあるが、問題はこれだ。」

医師は少女をうつ伏せにして、少女の病院服を背中の部分だけ脱がすと、そこには天使に生えているような小さな黒い翼が1対生えていた。

「レントゲンをとつてみてわかったのだが、見事に骨と接合しまっている。これでは翼だけを手術で取り除く事は不可能だ。……一体どうやって翼をつけたんだ？」

「恐らく奴らの”儀式”のせいでしょう……」

「なんて奴らだい……同じ人間だとは思えないよ……！」

医師の疑問をガイが答え、それを聞いたマーサは怒りを持った声で呟いた。

「それより、例えこの子が目をさまし成長した時、翼まで大きくなつたら隠しようがないぞ……」

医師は少女が将来、翼があることで恐がられ迫害されるかもしれないことを遠回しに言つた。

「それに関しては大丈夫だと思います。数年前ならともかく今は”闇夜の眷属”がいますから。最悪それで誤魔化すしかないでしょ。」

「ガイは医師の心配の内の一つの解決策を出した。

「それしかなか……では、後は目を覚ます方法だな。もしかしたらと思って、七曜教会の”法術”も試してみたがダメだったしな……」

……

医師は自分達とは違う方向で医療が発達している七曜教会を頼つてみたが、自分達と同じく手の施しようがない今の現状に溜息をついた。

「先生、それでした最近始まつた新しい宗教、癒しの女神教の方に頼つたらどうです？噂では彼らは癒しを専門とした魔術を使えるそうですから、もしかしたら少女が目覚めさせてくれるか、目を覚まさせる方法がわかるかもしませんよ？」

マーサは最近、看護婦の一部が信仰する宗教をイーリュン教に変えたこととイーリュンの教えと活動を聞いたのを思い出し、彼らに頼ることを提案した。

「私もそれを考えて、クロスベル市にいる信者から聞いたのだが実際に癒しの魔術が使えるのは極僅かでその者達は大陸中に広がつて活動しているらしい。……ダメ元で一応使い手を呼んでもらつたら何とか都合がついてな、明日には来てもらえる。」

「そうですか！だったら明日が楽しみですね……！」

ガイは医師の言葉を聞き、明日に希望を持った。

そして翌日ティアと同じく数少ないデイル・リフィーナ出身のイーリュン信者で癒しの魔術を使えるシスターが来て少女の容体を見た。

「……どうですかシスター、治りますか？」

ガイは3人の中で代表して聞いた。

「……深い闇が少女の頭の中を支配しています。それが原因で目が覚めないのでしょう。これを祓うには魔力が相当の術者が必要です。……申し訳ありませんが私では力不足のため無理です。下手に闇を払おうとすると死や永久に目が覚めない可能性もありますので

……

少女を見終わつたシスターは申し訳なさそうな顔で答えた。

「その凄い術者様つてのにシスターに心当たりはあるのですか？」

マーサは原因がわかりそれを取り除ける人物をシスターに聞いた。

「……2人ほど心当たりがいます。一人は私達の先頭に立つて活動しているティア様ですね。の方は魔神の血を引くお父様の強大な魔力を受け継いでいますから、私達人間が持つ魔力より強力な魔力を持つていますから可能でしょう。ただの方は力が強い分、よりたくさんの方を癒すために各地を点々と廻っている上、皇女という身分のため時には本国に戻らなければならない時もありますから……皇女であるの方が信者として活動できるのは陛下に願い、陛下の許しを得て活動していく、国の祭事等王族が参加しなければならない行事に今まであまり顔を出さなかつたことにも引け目に感じていましたからもし、父親であるリウイ皇帝陛下や現皇帝であるシリヴァン様から何かで呼ばれたら断りづらいでしょう……呼べるのは早くても半年か一年後になるかと思われます。」

「そうですか……それでもう一人は？」

ガイはシスターの答えを聞き、もう一人の少女を治せる人物を聞いた。

「もう一人の方は私達とは違う神を信仰している方です。どちらかというとティア様よりその方がここ、ゼムリア大陸では知られていますね。……名前はペテレーネ・セラ様です。の方は信仰する神は違いますが、他者を労わる気持ちは私達と同じだと思いますのできっと力になってくれると思います。」

「”闇の聖女”ですか……確かに彼女なら可能かもしませんが……」

医師はもう一人の名前を聞き、たつた一人の少女のために宗教の頂点に立つているであろう人物を呼び出せるのかわからず唸つた。

「……その人でもこの少女を治せるんですね？」

しばらくの間考えたガイはシスターに確認した。

「ええ。どちらかというと闇側の神を信仰している彼女のほうが治しやすいと思います。私達ができるのは光の加護で”祓う”ことなのでどうしてもその際、少女に苦痛を与えてしまうのですが、彼女

…

…

なら少女に苦痛を与える方法を知っていると思しますし、神格者なのでティア様以上に強大な魔力を持つていますから大丈夫だと思われます。」

「そうですか……すみません！俺、急用が出来たので失礼します！」「ちょっと待ちな、ガイさん！？」

シスターの話を聞いたガイはマーサの呼び止める声が聞こえる前に、病室を出て急いで警察署内にある自分の所属課の部屋に向かった。

「セルゲイさん、有給を使わしてくれ！」

ガイは警察署の自分達の所属課の部屋に入るなり言った。

「いきなりなんだ、ガイ。理由を言ってみろ。」

ガイの突然の言動に驚いたセルゲイはガイに聞いた。

そしてガイは今も目覚めない少女のためにペテレーネに治してもらうため、急遽リベルへ行くために休暇を取る事を言った。

「……今は例の事件の報告を纏めているだけだから休暇はいいんだがガイ、お前が会おうとしている人物は俺達みたいな身分のない奴がそうそう会えるとは思えない人物とわかっているのか？」

「大丈夫です、なんとかしてみます！すみません、急ぐのでこれで失礼します！」

「おい、ガイ！」

セルゲイの制止の声を聞かずガイは部屋を出て行つた。

そして後に残されたセルゲイとガイの同僚のアリオスはガイが出行つた扉をしばらく黙つて見た後、アリオスが口を開いた。

「……いいんですか、セルゲイさん。」

「いいも何も本人がいなきや俺達がグダグダ言つても無駄だろ？…

…」

セルゲイは一言嘆いた後、溜息をついた。

「それよりわかつてんのかね、あいつは、闇の聖女に会つのがどれほど難しいか。」

「……とこうと？」

「闇の聖女はアーライナ教のトップでさまざまに強力な魔術を使う術者として有名で忘れがちだが、メンフィル皇帝の側室でもあるんだから皇族でもあるんだぜ。そんな身分のある人物と会う約束もなしで会えると思うか？」

「まあ、案外会ってくれるかもしだれませんよ。あの作戦の時の自CD紹介を聞く限り身分に拘っている人物にも見えませんでしたが。」

「本人に会う前に門番とかが取り次いでくれるか心配なんだよな……」

「トラブルを起こさなきゃいいんだが……」

セルゲイはガイがメンフィルとトラブルを起こさないよう心の中で祈った。

外伝「黒翼の少女」前篇（後書き）

ここまで書けばわかると思いますが零のあのキャラは儀式の結果、純粹な人間から離れちゃいました。というか原作でも超感覚を手に入れるだけでよく体に異常がなかつたなと思いましたね。なのでこんな結果になつてもおかしくないと思います。それと『焰の軌跡』の続きを期待している方はもう少しだけお待ち下さい。エスティルやリフィアが旅立つ頃に一端区切ろうと思っていますので。感想お待ちしております。

（メンフィル大使館前）

「頼む、闇の聖女と会わしてくれ！」

ロレントにあるアーライナ教の聖堂を尋ねたガイだが今は大使館内にいることを聞き、大使館の門番に面会を希望した。

「なんだ貴様は！約束もなしにお忙しいペテレーネ様に会えると思つていいのか！」

門番は当然の」とぐガイの面会を断つた。

「人の命がかかっているんだ！頼む、会わしてくれ！」

「黙れ！これ以上騒ぐと痛い目にあうぞ！？」

「……さわがしいな。何があった。」

そこに仕事の息抜きをしていたリウイが騒ぎを聞き、門の所に来た。リウイを見た門番達は慌てて敬礼した。

「へ、陛下！」

「お騒がせして申し訳ありません！今すぐこの者をつまみ出しますので！」

「かまわん。そこにいる者が原因か。……うん？お前は確か教団の拠点制圧に参加したクロスベル警察の者だつたな。クロスベルからわざわざこんなところに何の用だ。」

「あんたはメンフィル皇帝！ちょうどよかつた、頼む！闇の聖女に会わしてくれ！」

「貴様、陛下に向かつてその口の聞き方と無礼はなんだ！？」
リウイに詰め寄ろうとし門番に取り押さえられながらもガイはリウイにペテレーネに会わすように必死で頼んだ。

「ペテレーネに用か？珍しいな。……放してやれ。」

「ハツ！」

リウイの命令を受けて門番達はガイを取り押さえるのをやめた。

「会わしてくれるのか！？」

門番に放されたガイは希望を持った顔でリウイに聞いた。

「こんなところで立ち話もなんだ。中で話を聞こう。」

そしてガイは会議室に入り、呼ばれたペテレーネを交えてここに来た経緯を話した。

「……とこいつ訳なんだ。頼む、忙しいのはわかっているが少女を助けてくれ！」

「……その症状でしたら確かに私がティアさんなら可能だと思いますが、リウイ様。よろしいでしょうか？」

ペテレーネはリウイに大使館を少しだけ離れる許可を聞いた。

「ああ。……ただし俺もついて行く。」儀式の影響で翼がついてしまったその少女に一言言いたいことがあるしな……（クロスベルか。ちょうどいい、あの二人の縁者もそこだったな。少女を治した後会いに行くか……）

「頼みを聞いてくれて感謝するー早速で悪いんだが今から来てくれねえか？」

「いいだろう。軽い旅支度をして行くぞ、ペテレーネ。」

「はい、リウイ様。」

2人から良い返事を貰つたガイは笑顔でお礼を言い、少女の所に向かうためにリウイ達と共に会議室を出た時、たまたま通りがかつたレンと出会つた。

「あ、パパとママーそこにいるお兄さんはだあれ？」

レンはリウイとペテレーネに近寄りガイのことを聞いた。

「……実はそこにいる男の妹が重い病にかかりてしまつてな……治せるのはペテレーネだけだそうだから、こうして頼みに来たそうだ。それでペテレーネは快く頼みを承諾してな、俺もそのつきそいで外国へ行つてくる。1週間ぐらい留守にするからそれまではプリネ達と共に留守番をしてくれ。何、連絡は通信を使って毎日するから、安心しろ。」

「はい。パパ達が帰つてくるまでレン、お姉様達といっしょに待つているからお土産よろしくね。」

リウイの頼みを聞いたレンは快く返事をした。

「ええ、だからいい子にして待つてね。」

ペテレー・ネはその場でしゃがみ、レンと目を合わせ頭を撫でた。

「（気持ちいい……）うん！レン、いい子にして待つているわ！」

頭を撫でられたレンは気持ちよさそうな顔をした後、笑顔で答えた。
「さつきから気になつてたんだが、この子もメンフィル皇帝、あんたの子供なのか？」

3人のやり取りを見ていたガイはリウイに聞いた。

「……ああ。レン、自己紹介を。」

「はい、パパ。……ご紹介が遅れ、申し訳ありません。メンフィル

皇女、レン・マーシルンです。どうぞよろしくお願ひします。」

リウイに自分の事を紹介するよう促されたレンは、短期間で身についた王族としての行儀作法でガイに挨拶をした。

「つと、これはご丁寧に……クロスベル警察のガイ・バニングスだ。ちょっとだけお父さんとお母さんを借りるのを許してくれ。」

「フフ、ママは奇跡を起こす聖女としても有名ですから仕方ありません。いつものことなので気にしないで下さい。」

ガイの軽い謝罪を受けたレンは上品に笑いながら、気にしていないことを見つた。

「それより、レン。どこかに向かっていたんじゃないの？」

「あ、いけない！ファーミシルスお姉さんやカーリアンお姉さんに戦い方を教えてもらつ約束の時間で早く教えてもらつために急いでたんだわ！……それでは失礼いたします。」

ペテレー・ネの言葉で本来の目的を思い出したレンは、ガイにお辞儀をした後その場を去つた。

「なあ、気付いたんだが今の娘、あの作戦でわずかに生き残つていてもう一人の少女じゃないのか？」

レンのことを見よ見て、あることに気が付いたガイはリウイ達に自分の持つている疑問を聞いた。

「……ああ、そうだ。あの娘は俺達と血の繋がりはない。」

「だったらどうして……あの娘にも親がいるんじゃねえのか?」

「……申し訳ありませんがあの娘にもいろいろ複雑な事情があるんです。……だからこれ以上の詮索はしないで下さい。」

ペテレーネの言葉を受けたガイは謝罪した。

「つと悪い。失言だつたな。すまねえ。」

「何、気にするな。」

そしてリウイ達は一般の飛行艇を使ってクロスベルへ向かった。

（ウルスラ病院内）

「失礼するぜ。」

「あら、ガイさん。昨日、急に飛び出しちまつてビックリしたけどどこに行つてたんだい?」

ガイに気付いたマーサは何をしていたか聞いた。

「ああ、ある人をここに連れてくるためにちょっとリベールまで行つてたんだ。」

「ある人?だれかね、その方は?」

ガイの言葉に疑問を持つた医師は聞いた。

「まあ、会えばわかるよ。……ここにいる少女がそうだ。頼む。」

「はい。」

「ああ。」

ガイの言葉を受けてリウイとペテレーネは病室に入った。2人の姿をみて、医師とマーサは驚愕した。

「おや、まあ……聖女様にメンフィルの皇帝様じゃない!」

「なんと……まさかたつた一人のために聖女殿がわざわざこんなところまで足を運んで下さるなんて……それにメンフィル皇帝殿まで……!」

「私がその子を治したいと思つて来ているだけですから気にしないで下さい。……なるほど、何があつたのかはわかりませんが強力な闇がこの子の頭の中に集中していますね……」

ペテレー・ネは少女に近づき状態を確かめた後、少女の額の所に両手をかざした。するとペテレー・ネの両手から紫色の光が出、やがて紫色の光は少女の体全体に広がり消えた。

「……今のはどういった治療の仕方なんでしょうか?」

医師はペテレー・ネの魔術を耳にして驚いた後、効果を聞いた。

「……この子の頭の中にあつた強力な闇を体全体に行き渡らすことで脳内にあつた闇をなくしました。恐らくもうすぐ耳を覚ますと思います。」

「今、闇を体全体に行き渡らすって言つたけど大丈夫なのか?」ガイはペテレー・ネの言葉を聞き、心配になつて聞いた。

「ええ。むしろ体全体に行き渡らすことで、闇の恩恵を受けれるようになりますから、私が使つているアーライナ教の魔術が恐らく使えるようになつてゐると思います。」

「へえ……」

答えを聞いたガイは感心した声を出した。そして少女が耳を覚ました。

「い……い……は……?」

「気がついたのか!」これは病院だ、もつ恐い耳に会わなくて済むんだぜ!」

少女が耳を覚ました事にいち早く気付いたガイは少女に話しかけた。

「病……院……?」

「ああ、そうだ。具合は悪くないかね?」

医師も少女に状態を聞いた。

「いえ……別に……今まで耳の前が真っ暗だつたのですがそれが取れたので耳を覚ませたと思います……体にも特に異常は……!?!?」

医師の質問に答えた少女は背中にある違和感があるのに気付き、そ

の部分を手で触つた。

「え……これ……は……翼……ー?」

少女は自分の背中に翼が生えている事に驚き、信じられないような顔をした。

「気の毒と思うんだけど……見てもらえばわかるわ。」

マーサは手鏡を少女に自分の背中が見えるようにした。そして自分の背中に黒い翼がついていることを認識した少女は渴いた声で笑つた。

「あはは……感覚が鋭くなつた上にこの翼……私……とうとう人間じゃなくなつたんですね……どうして私みたいな化け物が生きているのでしょうか……?」

「バカ野郎!」

少女の自虐の言葉を聞きガイが一喝した。

「え……?」

「命を粗末に扱うんじゃねえ! 感覚が鋭くなつた? 翼が生えた? そんなことよります、助かったことに喜べよ!」

「…………でも、この翼は今は小さいからいいですけど……大きくなつた時どうやって隠せれば……」

ガイに叱責され少女はしばらくの間、黙つていたが一言呴いた。

「…………その事に関してですけど、もしよければ翼を隠せる方法を教えてもいいですよ。」

少女を見兼ねたペテレー・ネがある提案をした。

「あなたは……?」

「私はアーライナの神官、ペテレー・ネ・セラです。あなたは?」

「…………ティオ・プラター……」

「ティオ……いい名前ですね。ティオさん、魔力を感じていませんか?」

「…………はい。何かが体を包んでいるのがわかります。魔力かどうかはわかりませんが……」

「幸か不幸かわからないけど、ティオさん。あなたには魔術師としての才能があります。今回の件でそれも目覚めてしまったようです。もし、短期間でもよければ私が魔術や魔力の使い方を教えます。」

「……それが翼を隠す方法と何か関係があるのですか……？」

少女 ティオはペテレーの提案に戸惑い聞いた。

「ええ。魔力を背中部分を覆うことによって翼が見えないようにし、最終的に幻影の魔術を使って普通の人間の背中に見えるようにします。……こんなことができる方はよっぽど限られてきますが、あなたなら練習すればできると思いますよ？」

「……そうですか。一応お願ひします……」

ティオは少しの間考えてペテレーの提案を受けた。

「はい、わかりました。……すみませんが1週間ほど、この病院で寝泊りをしてもよろしいでしょうか？」

ペテレーは医師やマーサに病院に寝泊りする許可を聞いた。

「聖女殿のような方がこの病院に寝泊りするなんて……！我々や患者達の励みにもなりますのでぜひ、お願ひします。」

「先生の言つ通り、お願ひします。」

2人は恐縮しながらも答えた。

「ありがとうございます……リウイ様、申し訳ありませんがクロスベルを発つ時までこの子に付きつきりで魔術を教えなくてはならないのですが、よろしいでしょうか？」

「かまわん。俺はクロスベル市にあるホテルにいるから、何かあればそこに連絡してくれ。」

「かしこまりました。」

そしてリウイはティオに近づいた。

「あの……？」

リウイを見上げたティオは戸惑った。

「ティオと言つたかもし、どうしても周りの環境になじめないといふのなら、ここを訪ねてこい。」

リウイは一枚の封筒をティオに手渡した。

「メンフィル大使館……？もしかしてあなた達は”闇夜の眷属”なのですか？」

ティオは手渡された封筒に書いてある住所を見てリウイに尋ねた。
「ああ。その封筒の中に入つてある手紙を門番にでもみせれば俺達に会えるようにしてある。……俺達”闇夜の眷属”は人間に迫害された存在の中でも秩序と調和を重んじる集まりである。……もし”人間”として生きれなく”闇夜の眷属”として生きたいのであればここを訪ねて來い。その時はお前を”仲間”として暖かく迎えてやる。」

「……………はい。その時はお願ひします……………」

ティオはリウイの言葉を受けて、視線を封筒に戻し少しの間黙つて

いたが、答えた。

「そうか。では俺はこれで失礼する。ペテレー・ネ、後は頼んだぞ。」

「はい、リウイ様。」

そしてリウイはティオのことをペテレー・ネに任せ病院から去った。

そしてティオは短期間でありながらもペテレー・ネに魔術や魔力の使い方を教えられ、必死に練習した結果ペテレー・ネがクロスベルを去る頃には、なんとか翼を隠せることに成功した。この練習が後に数年後にクロスベル警察のある部署の大きな助けとなる人物になる始まりの一歩目だった……………

外伝「黒翼の少女」後篇（後書き）

零の軌跡での魔術使い誕生です。ちなみにティオもエリイと同様原作通りにしますのでこちらもチートの予感……考えてみればティオって原作でも十分反則クラスですよね？オープメントは零では唯一の全連結でATSも零ではナンバー1で、敵の情報＆防御減少技に、複数の状態異常＆体力回復技、100%凍結技、そして最後は味方全員完全防御技を覚えるのですから、これに魔術を覚えたらどこまで強くなるんだろう……ティオのSKRAFTでVERITAのセリカの魔剣Mクラス技に似たものや魔導鎧の技まで考えちゃつてます^_^次も外伝を書くつもりですが一応続きものです。感想お待ちしております。

外伝／イリーナの決意／前篇

「クロスベル市内」
ペテレー・ネがティオに魔術を教えていた間、リウイは今もメンフィル大使館で預かっている少女達、イリーナとエリイの縁者、祖父のヘンリー・マグダエル市長宅に向かって着いてドアをノックした。

コンコン

ノックを聞き、市長に仕えているであろう執事がドアを開け姿を現した。

「……どちら様でしょうか？」

「メンフィル大使、リウイ・マーシルンだ。イリーナ・マグダエルとエリイ・マグダエルの件について話すことがあつたのでこいつして参上した。約束もなしで急で悪いが市長殿と会えるか？」

リウイが名乗り上げると執事は田を見開き驚いた。

「なんと……！メンフィルの皇帝陛下でござりましたか……！これは失礼して申し訳ありません！今すぐ主人に話して来ますので申し訳ありませんが少しの間だけお待ち下さい！」

「ああ。」

執事はリウイの返事を聞くと急いで書斎で仕事をしているマグダエル市長に報告した。

「旦那様、リウイ皇帝陛下がイリーナお嬢様とエリイお嬢様の件で話すことがあるので、今入口の所でお待ちになつております！」

「何ー？どうしてリウイ皇帝陛下がイリーナ達のことを……？とにかく会おう。すぐに客室にお通ししてくれ。私も今すぐ向かう！」

「かしこまりました！」

市長はリウイの突然の訪問と、最近行方がわからなかつた娘夫婦の子供達の件をなぜリウイが報告をしに来たのかと驚いたが気を取り

直し執事にリウイを客室に通すよう指示して、市長自身も密室へ向かつた。そして市長とリウイは対面した。

「……メンフィル大使、リウイ・マーシルンだ。連絡もなしに突然の訪問に答えてくれて感謝する。」

「そんな！これぐらいのことで陛下に感謝されるとは恐れ多いです……！……それで、孫達のことでリベールからはるばる来たとおっしゃいましたがあの子達の行方がわかつたのでしょうか？……実は最近娘夫婦と連絡が取れなくて探していたのですが……」

リウイの感謝に市長は恐縮した後、本題に入った。

「ああ。イリーナ・マグダエルとエリィ・マグダエルは今メンフィル大使館で預かっている。」

「なんと……！一体なぜそんなことに……？」

市長はリウイの言葉を聞いて驚いた後、メンフィルが孫達をなぜ預かつた経緯を聞いた。そしてリウイは話した。2人の両親が最近世間を騒がしていた子供達を誘拐していた犯行グループに殺されたこと。イリーナとエリィは幸運にもたまたまその場にいたリウイの娘であるプリネに保護され、プリネに2人を事件が解決するまで大使館で預かるように嘆願されたのでそれに答えたこと。そして事件が解決したのでこうして2人の無事を知らせに来たことを話した。

「そんな……！もう娘達がエイドスの所に召されていたなんて……

……！……どうりでいくら手紙や通信をしても連絡がない訳です……」

市長は娘夫婦の訃報を聞き、ショックを受け両手から力が抜けた後、顔を下に向けた。

「心中お察しする……預かつた2人の安全を考え、事件が解決するまで連絡しなかつたことには謝罪する。」

「……いえ、孫達のことを考えての行動としてはあの時はそちらの方が安全です。……孫達を救い今まで守ってくださつてありがとうございました……」

市長は孫達だけでも生きていることに希望を持ちリウイにお礼を言った。

「俺達は王族としての義務を果たしたままでだ……それで、2人をどうする？」

「当然私が育てます！迎えに行かせていただいてもよろしいでしょうか？」

「かまわん。ただ後2、3日ほどクロスベルで用事があるので待つてほしい。クロスベルを発つ時、必ず連絡はする。」

リヴィイは今は亡き愛妻が転生した可能性のある少女が自分の許を離れる事に一瞬だけ迷つたが、気を取り直し答えた。

「ああ。それで失礼する。

そしてリウイは市長邸を後にした。

ホテルへの帰り道、リウイは赤ん坊を抱いて幸せそうにしている夫婦に気付いた。

「うん? あれば……」

リウイはその家族を見て少しだけ驚いた。なぜなら、その夫婦は報

「ふふ、本当に可愛いね。お前にそつくりだよ。」

卷之三

女性は抱いている赤ん坊をあやしていた。

「ふふ、前の子はあんなことになってしまつたけれど……でもよか

女神様は私達をお見捨てにならなかつたんだね。

ナニヤニ

「あぶう、あぶう。

赤ん坊は女性に甘え、また女性も笑顔であやしていた。

(..... 下衆共が ! あの親子をどうするかはレン次第

だ。俺達がどうこう言う事ではない。俺達ができるのはあの子を見
守り立派な大人に育てるだけだ……
ヘイワーズ夫妻よ、今はいいがその子供が成長するに従つてお前達
はきっと捨てた娘のことを思い出し後悔する。その罪をどう償い、
捨てた娘とどう向き合つかはお前達次第だ……今は偽りの幸福をか
みしめるがいい……！）

リウイはレンを忘れようとしている実の両親を心の中で怒った後、
踵を返しホテルへ向かった……

外伝～イリーナの決意～前篇（後書き）

タイトルにイリーナとか書いてるくせに今回は出てこなくてすみません！後篇には出しますのでお待ち下さい。感想お待ちしております。

外伝／イリーナの決意／後篇

「メンフィル大使館」

ティオを治療したペテレー・ネと孫を迎えて来たマグダエル市長と共にリウイはメンフィル大使館に帰還した。

「今、戻つた。」

「御苦労様です。」

「お帰りなさいませ！陛下、ペテレー・ネ様！」

門番達はリウイとペテレー・ネに敬礼をした。

「この者は今、大使館で預かっている姉妹の縁者で姉妹を迎えて来たそうだ。通してやつてくれ。」

リウイは後ろにいた市長を通すように言った。

「ハツ……」

門番達はリウイの命令を忠実に聞き、門を開けた。そしてリウイ達は大使館内に入り兵士やメイドに姉妹がどこにいるかを聞き、プリネと共にいると聞いた後プリネの部屋に入った。

部屋にはプリネやリフィアと談笑していたイリーナとエリイがいた。

「入るぞ、プリネ、リフィア。」

「おお、リウイにペテレー・ネ！帰つたか。」

「あ、お父様にお母様。お帰りなさい。……そちらの方は？」

プリネは父と母に気付いた後、見知らぬ老紳士のことを聞いた。老紳士を見てイリーナとエリイは駆け寄つた。

「お爺様……」

「おお……イリーナ……エリイ……2人が無事でよかつた……！」

市長は駆け寄つた2人を強く抱きしめた。

「ひつぐ……お父様とお母様が……」

祖父と会つて安心したエリイは涙を流しながら両親の訃報を言った。

「陛下から一連の出来事は聞いているよ……これからはあの娘

達に変わつて私がお前達を育てる。いいかい？

「うん……！」

祖父の言葉を受けエリイは笑顔で答えたがイリーナは何かを考えているようで答えなかつた。

「どうしたんだい、イリーナ？」

イリーナの様子があかしく思い、市長はイリーナに何を考えているのかを聞いた。

「…………」「ごめんなさい、お爺様。私、やりたいことがあつてお爺様達といつしょに暮らせないわ。」

「お姉様！？」

エリイは姉から自分達といつしょに暮らせないことを聞き、驚いた。

「やりたいこと？一体なぜ、それで私達と暮らせないのかい？」

「…………うん、訳を話すからちょっとだけ待つて下さい。……リフ

イア様、あの時の勧誘はまだ有効ですか？」

「ふむ、あの時の勧誘とはなんじや？」

突然話をふられたリフィアは要領を得ずイリーナに聞いた。

「…………陛下達と初めて拝見した時、私の名前を聞いて私にマーシルン家に仕えてみないかという話です。」

「おお、その件か！もちろん、今でもその勧誘は有効じゃーお主の事は今でも気にいつておるしな！余の言葉に偽りはない！」

「そうですか……返事が遅くなりましたがその件、私なんかでよければお受けしてもよろしいでしちゃうか？」

「何……！？」

リウイは目を見開いて驚き

「え……」

ペテレー・ネも同じように驚き

「本気なのですか……？」

プリネは信じられないような顔をして驚き

「お姉様……！？」

エリイは思わず声を出し

「イリーナ！？」

市長はイリーナがなぜ、そんなことを言い出したのかが理解できず叫び

「おお、そうか！お主を歓迎するぞ、イリーナ！」

リフィアだけは笑顔で歓迎した。

「お姉様、どうして！？」

エリイはイリーナに詰め寄り理由を聞いた。

「うん……メンフィル帝国の方々に私の願いを聞いてもらつた恩を何かの形で返せればいいなとここに来てずっと考えてきたら、リフィア様の提案がちょうどよかつたの……」

「……その件に関して別に気にやむ必要はないぞ。どの道、俺達も例の事件の解決には乗り出すつもりでいたからな。……俺達のことは気にせず残された家族と幸せに暮らすがいい。」

気を取り直したリウイはイリーナに考え方を直すように言った。だがイリーナはリウイの言葉を否定するように首を横に振つて答えた。

「いいえ、それだけではありません。……両親が死んで塞ぎこんでいた私達をリフィア様やプリネ様、エヴリーヌ様にずっと励まされてきました。その恩にも報いたいのです！……それに私自身、見ず知らずの私達を暖かく受け入れてくれたマーシルンの方々に仕えたいのです！」

「イリーナ……」

「お姉様……」

イリーナの決意を持った言葉を聞き、市長とエリイは何も言い返せなくなつた。

(……マーシルン家に仕えたい……か……何があつたかはわからぬが見た所次期皇帝のリフィア様や、陛下の側室の一人でアーライナ教の教祖でもある”闇の聖女”殿のご息女であるプリネ様にこれほど気にいられているのなら、恐らく将来的にリフィア様かプリ

ネ様専属の侍女になる可能性もあるな……メンフィルはあるエレボニアすら破つた強国だ……そんな強国の王族に直接仕えるとなるとそれなりの身分にもなるし、身の安全も保障されるだろう……クロスベルで渦巻く混沌とした政治を見て育つより、仕えたいと思う人から大事にされ、王族から身分を保障される仕事に就ける事のほうが幸せかもしれないな……）

市長はイリーナの将来を考え、メンフィルに預けた方がいいと思い、溜息をついた後イリーナに確認した。

「イリーナ。本気でマーシルン家に仕えたいのかい？」

「はい！」

「王族に仕えるまでの道のりは決して楽ではないだろう。それでもいいのかい？」

「覚悟の上です……どんな苦しい道になろうとも私はプリネ様達に仕えたいのです！」

「イリーナさん……」

「つむ、良い心がけじゃ！…ますます気にいったぞ！」

イリーナが自分達に仕えたいとはつきり言つたことを聞き、プリネは感動し、リフィアはイリーナの事をさらについた。

「わかった……陛下、よろしいでしょうか？」

市長はイリーナの決意は覆らないと感じ、諦めてリウイにメンフィルにイリーナを預けてもいいかを聞いた。

「俺はかまわんが……いいのか？残された孫の片割れといっしょにいなくて。」

「はい。……孫が進みたい道を見つけたのなら私はそれを応援するまでです。」

「了解した……俺達に仕えたいたあの少女には一般教育はもちろんの事、侍女や淑女としても立派な教育をしておくし、もちろん身の安全も保障するから安心しろ。……リフィアも言つていたが将来、リフィアかプリネ専属の侍女として仕えてもらうことになる

だろう。その際はそれなりの身分も『えよつ』

「ありがとうございます。」

市長の頼みをリウイは内心イリーナが残ることに複雑な感情を持ったがそれを顔に出すことなく快く受けた。

そしてイリーナはイリーナに払つ賃金や大使館で働いているイリーナに連絡をとる際の手順や面会の手順を市長に説明しているリウイを見つめて思つた。

（嘘をついて『ごめんなさいお爺様、エリイ……』さつき言つたことは本当だけど、一番の理由はリウイ陛下の事を思うとなぜ、胸が張り裂けそうになり、愛しく思う気持ちになるかを知りたいの……！）
イリーナは人知れず早くなつている胸の鼓動を抑えるように胸を片手にあてた。

「お姉様？どうしたの？」

姉の異変を感じたエリイはイリーナに聞いた。

「……なんでもないわ。……それより『ごめんね、エリイ……』一緒に暮らせなくて……」

気を取り直しイリーナはエリイと一緒に暮らせないことを謝つた。

「ううん、いいの。リウイ陛下はもちろんの事、メンフィル王家の方々は私達みたいな身分がはるかに離れている子供に気易く接してくれて凄く優しかつたものね……お姉様の気持ち、わからなくはないわ。」

エリイは寂しそうな顔で笑つた。

「エリイ……毎日連絡を取るからあなたも私のように自分の進むべき道を見つけるよう頑張つてね！」

「うん……お姉様も頑張つて！」

姉妹は別れを惜しんだが、市長とエリイがロレントの空港で別れる時には2人とも笑顔で別れた。

そして数年後……

外伝／イリーナの決意～後篇（後書き）

みなさんも予想したと思いますがイリーナはメンフィル陣営に残りました。と言つてもFCではあまり出番がないのですが……といふかVERITAキャラやプリネを除いてリウイ達、旧幻燐キャラは基本、エステル達の冒険にはあまり出せません。エステル達について行く口実とかないです。というカリフィア達がいる上、エスティルが原作より強化されているだけでも反則なんですけどね……ちなみにどうでもいいのですがメンフィル大使館内のBGMは”高貴なる御所”か”英雄集結”でリウイのBGMはもちろん”霸道”です！”霸道”はVERITAの曲の中でも最も気にいつてる曲ですね。まさにリウイにピッタリの曲ですし正史ルートラスボスの曲でもありましたから。ただのダンジョン曲にしてはカッコよすぎだろ！ってつっこんじゃいました。……感想お待ちしております。

～ロレント郊外・ブライト家 朝～

チユンチユン……

朝の小鳥が鳴く声と朝日のもふしにエスティルは目覚めた。

「う～～まぶし。もう朝か……今日の当番はお母さんだつたわね。ヨシュアはまだ寝てるのかな……」

エスティルは目覚めた後、数年前に義弟になつたヨシュアがまだ寝てゐるのかを少し考え出すとハーモニカの音とが聞こえてきた。

「あは、もう起きているみたいね。よーし、あたしも支度しようっと。
……パズモ！」

エスティルがパズモを呼ぶといつものように小さな竜巻が起こり、その中からパズモが姿を現した。

「おはよう、パズモ！」
(おはよう、エスティル。)

「今日もよろしくね！」
(ええ。)

そしてエスティルはいつもの服に着替えるとパズモと共に2階のベランダに出た。そこには目の前にはハーモニカを吹いているヨシュアがいた。ヨシュアがハーモニカを吹き終わるとエスティルは拍手をした。

パチパチパチパチ……

「ひゅー、ひゅー、やるじゃないヨシュア。」

「おはよう、エスティル、パズモ。ごめん、もしかして起こしちゃつ

た？」

「ううん、ちょうど起きた所よ。でもヨシュアったら朝からキザなんだから～お姉さん、聞き惚れちゃつたわ～」
(そうね、確かに上手いわね。)

エスティルのからかいにヨシュアは呆れた。

「何がお姉さんだか。僕と同じ年のくせに……」

「チッチチチ、甘いわね。同じ年でもこの家ではあたしが先輩なんだからいふなれば姉弟子つてやつ?だからあたしがヨシュアの姉なのよ。」

「はーはー、よかつたね……」

ヨシュアは言つても無駄だと想い溜息を吐いた。

「それにしても、相変わらずハーモニカ吹くの上手いわね～あ～あ、あたしもうまく吹けたらいいんだけどな～簡単そうにみえて難しいのよね。」

エスティルはハーモニカが吹けるヨシュアを羨ましそうな顔で見た。

「君がやっている棒術や魔術よりはるかに簡単だと思つけど……ようは集中力だよ。僕が使えない魔術を君は独学で習得したんだからできると思うんだけど……」

「魔術は別よ！それに全身を使わない作業つて苦手なのよね～眠くなるし。ヨシュアもハーモニカはいいんだけどもつとアクティブに行動しなきや。ヨシュアの趣味つて後は読書と武器の手入れでしょ。そんなインドアばっかじや女の子のハートは掴めないわよ～？」

エスティルに趣味のことを軽く攻められたヨシュアは反撃した。

「悪かったね、ウケが悪くて。……そう言つエスティルだって女の子らしい趣味とは思えないよ？スニーカー集めとか、釣りとか、虫取りとか男の子がやる趣味じゃないかい？」

「失礼ね！虫取りは卒業したわよ！」

ヨシュアの反撃にエスティルは思わず叫んだ。

そこにカシウスが子供達を呼びに玄関を出た。

「おーい、2人とも朝食の用意ができたからレナが冷めない内に来いと言つてるぞ。」

「はーい

「わかつたよ、父さん」

そして2人はそれぞれ食卓に着き朝食を取り始めた。

「じちそうさま~」

「はい、おそまつさまでした。」

その後エステルは朝から良く食べ満足した。

「朝からよく食べるなあ……父さん並じやないか。」

ヨシコアはエステルの食べっぷりに感心した。

「いいじゃん、よく食うこととよく寝ることは大事よ それにお母さんのオムレツは大好きだし。」

(そうね。私も少しだけ分けてもらつたけど、確かに美味しいわね。

) 小さなお皿に乗つてゐる自分の体より大きな林檎の切り身を食べて
いたパズモもエステルの意見に同調した。

「そうでしょう! パズモもお母さんのオムレツは美味しいって言つ
てるよ!」

「ふふ、ありがとうエステル、パズモ。」

娘と幼い頃から娘を守る小さな妖精のほめ言葉にレナは笑顔で答えた。

「まあ、しつかり食つて気合を入れておくんだな。2人とも今日は
ギルドで研修の仕上げがあるんだろう?」

カシウスは今日のギルドである遊撃士の研修のことを2人に確認した。

「うん、そうね。ま、かるべく終わらせて準遊撃士になつてみせる
わ。」

「エステル、油断は禁物だよ最後の試験があるんだから。」

「え」？試験つてなに？」

「シェラさんが言つてたよ、合格できなかつたら追試だつて。」

「……やっぱ、完璧に忘れてたわ……（お願い、パズモ！いざとなつたら助けてね！）」

（ふう……長年エスティルを含めて3人の主を守つて来たけど、そんない時に助けてなんて言われたの初めてよ……）

ヨシュアから試験のことを聞いたエスティルは念話でパズモに試験を手伝うようにお願ひし、それを聞いたパズモは溜息を吐いた。

「エスティル……まさかとは思うけど、パズモを使ってカンニングとかなしだよ。」

エスティルと溜息を吐いているように見えるパズモの様子を見たヨシアはエスティルに一言釘をさした。

「う”！な、なんのことかしら？あたし、パズモに何も言つてないわよ……？」

団星をさされたようにエスティルは慌てた。

「シェラさんから聞いてるよ。精霊であるパズモは僕達とは話せないけど、パズモの主であるエスティルは頭の中に響く念話という形で話せるつて。だからパズモと協力してズルをしないようにじつかり見張つてくれと言われたよ。」

「う”！……シェラ姉つたら余計なことを……」

エスティルはヨシュアを恨みがましく見て、唸つた。

「エスティル……お前な、メンフィル出身の者以外は誰も契約できないと言われる使い魔や守護精霊を何だと思っているんだ？」

カシウスはエスティルの様子に呆れ、思わず呟いた。

「そんなの友達に決まってるじゃない！それに何度も言つようだけどあたしとパズモは主従の関係じやないわよ！」

エスティルはカシウスの言葉にムツとした後、言い返した。

「あら。それなら、もちろん試験の時は友達であるパズモに協力させないわよね？」

それを聞いたレナは笑顔でエスティルに確認した。

「う………と、当然よ！試験ぐらいかるく、クリアしてあげるわ！」

エステルは冷や汗をかきながら答えた。

（さすがレナだな。見事だ。）

（あれは僕も見習いたいな）

カシウスとヨシュアはエステルに見事に釘を刺したエステルに感心した。

「しようがない、エステルの言葉を信じてみるか……そろそろ時間だし、行こうエステル。」

「わかつたわ、ヨシュア。パズモ、行くわよ。」

（わかつたわ、エステル。）

主の言葉を聞いたパズモはエステルの肩に乗った。

「じゃあ、行ってきます。」

「行つて来るね、お父さん、お母さん！」

「行つてらっしゃい、気をつけてね。」

「頑張つて来い、2人とも。」

両親から応援の言葉を聞いた2人はドアを開け、ロレント市のギルドへ向かつて歩いた。

ロレント市への道のりの途中にあるメンフィル大使館や隣にあるアーライナ教会を見てエステルはいつも大事にしている紫色のブローチを握りしめて心中で思つた。

（聖女様……あたし、もうすぐ遊撃士になります……あたしなんかが聖女様のような人になれるとは思わないけれど……少しでも聖女様のように困つた人を助ける人に近づいてみせます…）

「エステル、どうしたんだい？」

エステルの様子を不思議に思つたヨシュアは話しかけた。

「試験に合格するようにアーライナに祈つてただけよ！気にしないで。」

「アーライナというかエステルの場合は”闇の聖女”さんに祈つてたんじゃないかい？……というかエステル。シェラさんが”闇の聖女”さんから直々に魔術を教わつてた時、どうして君もいつしょに教わりに行かなかつたんだい？シェラさんと同じく魔術を教わりに行くという口実があつたし、君がずっと憧れています人なのに。」

ヨシュアはエステルからペテレーネに憧れていますことを聞いてずつと思つていた疑問を聞いた。

「う……あたしもそれは考えたけど聖女様だつて普段の仕事で忙しいし、必死で魔術を習得しようとしていたシェラ姉の邪魔はできなもん。それに何よりその頃はあたしなんかが聖女様に会つていいくのかと思って気遅れしちゃつたもん……」

「エステルが人に会うのに気遅れするなんて珍しいね。”闇夜の眷属”の人とさえ気軽に接しているのに。」

「それとこれとは別よ！それより早く行きましょ、遅れちゃうわー！」

「はいはい。じゃあ、行こう。」

そして2人は再びギルドへ向かつた……

第1-9話（後書き）

焰の軌跡を楽しみにしている方、ホントすみませんー今はこっちの
アイディアがどんどん沸いてくるので止まらないんです……エステ
ル達がロレンツを旅立つ頃に区切れますのでもう少々お待ち下さい
……感想お待ちしております。

第20話（前書き）

ヤヴァーいなあ……おまけのつもりで書いていたのこいつのほうが本格的になつてゐる気がします……ああ、リウイが好きな自分が恨めしい！

（遊撃士協会・ロレント支部）

「アイナさん、おはよー！」

「おはようございます。」

「あら、おはようエステル、ヨシュア。」

ドアを開け挨拶をした2人に気付いた受付のアイナも挨拶をした。

「シーラ姉もう来てる？」

「ええ、2階で待ってるわ。今日の研修が終われば晴れてブレイサーの仲間入りね。2人とも合格するよう頑張って。」

「うん、ありがとう！」

「頑張ります。」

そして2人は2階に上がって行った。

2階では遊撃士の中でもメンフィルに関係する者以外は使えないと言われている魔術を使え、遊撃士としての評価も高い「風の銀閃」の異名を持つ遊撃士、シーラザードがタロットで占いをしていった。

「…………」「星」と「吊るし人」、「隠者」と「魔術師」に逆位置の「運命の輪」、そして

「皇帝」と「王妃」に正位置の「再会の輪」……「皇帝」は恐らくメンフィル大使ね……でも、「王妃」は一体誰のことを……？師匠は違うわね。師匠のことを示すとしたら呼び名通り「聖女」だろうし……これは難しいわね……どう読み解いたらいいのか……

シーラザードは占いの結果の難解さに頭を悩ませていた。

「シーラ姉、おはよーー！」

そこに元気よく声を上げたエステル達が上って来た。

「おはようございます、シーラさん。」

「あら、エステル、ヨシュア。あなた達がこんなに速く来るなんて珍しいわね。」

「えへへ、速くブレイサーになりたくて来ちゃつた。」

「はあ、いつも意氣込みだけはいいんだけど……まあ、いいわ。その意気込みを

組んで今日のまとめは厳しくいくからね。覚悟しどきなさい。」「え、そんなん。」

ショラザードの言葉にエステルは声を上げた。

「お・だ・ま・り。毎回毎回教えた事を次々と忘れてくれちゃつて……そのザルみたいな脳みそからこぼれ落ちないようにするためよ。全く、アーライナの聖書に書かれてある難解な秘印術や私が使える秘印術は覚えたのにそれより簡単なことをなんで忘れられるのかしら？それがわからないわ。」

ショラザードは理解できず溜息を吐いた。

「う……それとこれとは別よ。秘印術は体で覚えた感じのようこ、実際に何度も練習して覚えたような物だし……」

エステルはショラザードから視線を外すように横に向け、小さな声で呟いた。

「大丈夫ですよ、ショラさん。エステルって勉強が嫌いで予習も滅多にやらないうけど……ついでに無暗とお人好しで余計なお節介が大好きだけど……にカソの良さはピカイチだから魔術のようにオープメントも実戦で覚えますよ。」

(クスクス……ヨシュアったらわかっているじゃない。)

「はあ……」うなつたらそれに期待するしかないわね……」

エステルの性格を改めて思い返したショラザードは溜息をついた。

「ちょっとヨシュア……なんか全然フォローしているように聞こえないんですけど？それにパズモも聞こえているわよ？」「

エステルは2人をジトーッと睨んだ。

「心外だな、君の美点を言ったのに。」

(ヨシュアの言つ通りよ。それがエステルのいい所じゃない。)

ヨシュアは笑顔で答えパズモも笑顔で頷いた。

「全くもう……ところでシェラ姉タロットで何を占つていたの?」

溜息をついたエステルは机に出してあるタロットカードに気付いた。
「ああ、これね……近い将来起ることを漠然と占つてみたんだけ
ど……ちょっと調子が悪いみたい。読み解く事ができなかつたわ。

「読み解くことができない??」

「へえ、そんなこともあるんですね。」

シェラザードは気持ちを切り替え顔を引き締めた。

「ま、いいわ。それより2人とも最後の研修を始めるわよ。」

「「ハイ」」

そして2人は今までの復習をして最後にリベール王国について復習した。

「あたしたちの住む、このリベールは豊かな自然と伝統に育まれた
王国よ。大陸でも有数の七曜石セブチウムの産地でそれを利用したオーブメン
トの開発でも高度な技術を誇っているわ。また、10年前に突如現
れた異世界の大國、メンフィル帝国が唯一友好的に
接している国よ。」

「リベールとメンフィル帝国が仲良しなのは知ってるわ、シェラ姉。
メンフィル帝国がロレンツに現れたお陰で百日戦役が終わつたんだ
よね?それにお母さん言つてたよ、メンフィルの配給のお陰であた
し達ロレンツの市民は戦争中であるにも関わらずまともな食事がで
きて、病気も治療できたって。」

エステルは自分達、ロレンツの市民にとつて恩人とも言えるメンフ
ィル帝国の話が出ると反応した。

「そうね。当事者であるあんたも知つてると思つけどメンフィル
のロレンツ保護とエレボニア侵略によつて、リベールとメンフィル
が友好的になるきっかけになつて、またエレボニア帝国は自國の領

地が次々と占領された上、戦力も大幅に減らされたからリベル侵略を断念することになった原因の一つよ。メンフィルの出現はゼムリア大陸に衝撃を走らせたわ。人間とは似ているようで異なる種族、”闇夜の眷属”の出現、七曜教会とは異なる宗教、”アーライナ教”に”イーリュン教”……何より衝撃的なのはこの2つの宗教が信仰している女神は実在するそうよ。

「女神が実在するのですか……でも、日曜学校ではそんなこと教えてくれませんでしたよね？」

ヨシュアは神が実在することに驚き、なぜ七曜教会が開いている日曜学校で教えてくれなかつたのかを疑問に思った。

「そりやそうよ。遙か昔から信仰されているエイドスは実在しない、異世界の宗教の神が実在するなんて教えたら信者がそっちに行ってしまう恐れもあるからよ。只でさえアーライナの”闇の聖女”とイーリュンの”癒しの聖女”がいるお陰で信者が取られがちなんだから。まあ、あまり聞かせたくない話だけどこれ以上異世界の宗教に信者を取られないためという対策もあるわ。ちなみにこの事実を知っているのは七曜教会でも限られた人間だそうよ。」

「へえ……それならどうしてショラさんが……ってそうか。”闇の聖女”さんですね。」

ヨシュアは七曜教会でも限られた情報をなぜ遊撃士のショラザードが知っているのかと疑問に思つたがすぐにその疑問は解けた。

「まあね。ちなみにこれは師匠の受け入りよ。師匠自身はただアーライナの教えを広めたいだけで、遙か昔から信仰されているエイドスの信者まで取り上げるつもりはなかつたつて苦笑いしてたけどね……ちなみにイーリュン教も同じ考え方よ。あの宗教はただ、傷ついた全ての人間に癒しを与えるのが目的だからね。」

「うーん……でも、エイドスといっしょにほかの宗教を信仰している人とかいるのにどうしてそんなことをするんだろう……あたしもアーライナの聖書を読んだけど同時にほかの神を信仰してもかまわないって書いてあつたよ？それにアーライナ教やイーリュン教の信

徒になつた人とかでも今でもエイドスを信仰しているつて聞いたんだけどな……」

「まあ、いろいろあるのよ。（師匠は何も言わなかつたけど多分、エイドスだけを信仰しないのが許せないんでしょうね……）」

エスティルの疑問に答えにくかつたショラザードは笑つて誤魔化し、話題を変えた。

「話がそれたわね……リベルにとつてオープメントの技術は周辺の大國と渡り合うための大変な技術よ。メンフィル帝国と対等に渡り合つための技術もあるし、10年前の戦争の時もメンフィルに頼らずリベルの占領されている市を解放させた作戦も、導力機関オーバルエンジンで空を駆ける飛行船を利用した解放作戦よ。……まあ、エレボニア帝国とは今でも微妙な関係だけど、アリシア女王の優れた政治手腕やロレントにあるメンフィル大使館の影響もあって今のリベルは、おおむね平和と言えるわね。……さてと、復習はこのくらいで勘弁してあげるわ。今日はやることが山ほどあるんだからとつと実地研修に進むわよ。」

「ねえ、ショラ姉。実地研修って今までの研修と何が違うの？」
「簡単に言うと実際に遊撃士の仕事に必要なことを一通りやつてもらうわ。」

「それつてつまり、机でお勉強、じゃないってこと？」

エスティルは座学ではないことに希望を持ち確認した。

「ええ、もちろんよ。いろんなところに行つて体を動かして貰うんだから覚悟しておきなさい。」

「えへへ、助かつたわ。体を動かせるんなら今までの研修よりずっとラクだわ。」

エスティルは最後の研修に不安だった顔を手のひらを返したように笑顔になつた。

「なんだか、急に元気になつたよね。」

「その笑顔が最後まで続くといいんだけど……さてと、最初の実地

研修を始めるわよ。」

そしてエステル達は研修を次々と受けて行き、ついに研修も大詰めとなつた。

「さて、研修用の依頼にもあつたように地下水路にある搜索物を探すのが目的よ。水路は単純で迷わないだろうけど、本物の魔獣がうろうろしてゐるから油断してると痛い目に遭うからね。危なくなつたらこれを使いなさい。」

シェラザードはエステルに初步的な傷薬を渡した。

「サンキュー、シェラ姉！ あたし、アーライナの治癒魔術も使えるけど最近やつと使えるようになつたから、あまり上手く使えないせいで何度も使えないし、回復量も大したことないのよね~」

「あんたね……魔術の中でも高等とされる治癒魔術をえるだけでも凄いと思わないのかしら？」

「そうだよ、エステル。治癒魔術を使える人はイーリュン教の信徒の中でも限られてゐるといふし、アーライナ教の使い手は”闇の聖女”さんだけだよ？」

ヨシュアとシェラザードはエステルが自分自身の才能の凄さに鈍感なのを呆れた。

「はあ、まあいいわ……それとエステル、試験中はパズモを頼つてはダメよ。」

「へ……どうして？」

パズモと共に戦う氣でいたエステルはシェラザードの言葉に目を丸くして聞いた。

「この試験はエステル、あんた自身を試す試験よ。使い魔や守護精靈はいるだけでも心強いのに、パズモは特に支援に優れているからね。戦闘が初步なあんた達でもパズモと共に戦えば、正直言つて正遊撃士とも渡り合えるような戦力を覆せるような存在よ。実際の戦

闘では依頼を成功させるためにも共に戦うべきだけど、今回だけは頼るのをやめなさい。」

「わかつたわ、パズモ。」

（了解、頑張ってねエステル。）

ショラザードの説明に納得したエステルはパズモを一端自分の身体に戻した。

「よーし、ヨシュア。気合入れて行こつ！」

「そうだね。実戦など思つて慎重に行動しよう。」

そして2人は研修用の依頼を達成するために地下水路に潜つて行つた……

第20話（後書き）

最初軌跡キャラで魔術が使えるのはエステルだけの予定でしたがよく考えたほかにも使っても違和感ないキャラが続出してきたんですね……クロゼがイーリュンの魔術とか似合いすぎですし。元々回復アーツ専門のようなキャラでしたから。感想お待ちしております。

「ロレント・地下水道」

灯のオーブメントで照らされた道をエステルとヨシュアが歩いていた。

「ふふ、ん、ま、ちよろいもんよ」

「油断は禁物だよエステル。」

研修用の依頼の捜査対象物を2人は見事見つけ、エステルは上機嫌で帰っている途中だつたのだ。

「それにしても、オーブメントの扱いを実戦で覚えるなんてやつぱりエステルだね。」

「なによ、その言い方は。頭で覚えるより体で覚えたほうが速いに決まってるじゃない。」

「まあまあ、いいじゃないか。無事対象物は見つけたんだから。」

「そうね、これで、もうすぐブレイサーの仲間入りね。」

ヨシュアの言葉でエステルは膨れていたがもつすぐ依頼を達成できるという言葉に笑顔になつた。そこに魔獣が現れた。

「つと、行くよエステル。」

「ア、解！」

魔獣をみた2人は浮ついていた表情を引き締め武器を構え魔獣に攻撃を仕掛けた。

「セイ！」

先制攻撃に放つたヨシュアの双剣は一撃で魔獣を斬り伏せ

「とりやつ！」

続くように振るつたエステルの棒は蝙蝠のよつた魔獣を地面に叩き伏せ一度と起き上がらなくなつた。そこに倒された魔獣の血を嗅ぎつけ複数の魔獣が現れた。

「今度は結構数があるね……」

「あたしに任せて！…………闇よ敵を吹き飛ばせ！黒の衝撃！」

エステルが放つ暗黒魔術はすさまじい勢いで固まっていた魔獸達を吹き飛ばし、吹き飛ばされた魔獸は水路に落ち、氣絶した。

「相変わらず凄い威力だね……今の魔術ってそんなに威力がない奴だよね？」下手したら中級アーツ並なんじや……」

「シェラ姉が言うには魔術は使用者の魔力で威力が決まるらしいよ。でも、最初は苦労したわ～。魔力の制御が出来ないせいで数回使つただけで疲れるし……後、パズモが言うにはあたしの適性属性は無属性だからえ～と……自然界の四属性？は契約した守護精靈とかに影響されるらしいわ。だからどんどん友達を増やしていきたいわ～。あたしなら、後2、3体なら契約しても大丈夫って言つし。」

「ハハ……でも、エステル。使い魔や守護精靈は存在自体が珍しいからそんな簡単に見つからないと思うよ？」

エステルが自分の才能の凄さにイマイチわかつてないことを彼女らしいとヨシュアは苦笑した。

「まあね～。それに一つの属性に特化していない分、高度な魔術を使えるようにするにはほかの人より努力が数倍必要らしいから得をしているかわかんないわ～」

エステルはより高度な魔術を使うのにはさらに努力しなければならないと思つて溜息を吐いた。

そして街への道を再び歩こうとした2人の目の前で突如霧状の魔獸が複数現れ、突然攻撃してきた。

「ツツ！」

「わっ！」

2人は驚きながらも回避に成功した。

「何よこれ～！今まで倒した魔獸でこんな魔獸いなかつたわよ！？」

「下手をしたら手配魔獸かもしれないね……どうしよう……数はそんなにないけど僕達で倒せるかな？」

2人は武器を構え見た事のない魔獣を警戒した。

「もちろん、倒すわよ！それにこの上は街だし、このまま放つておく訳にはいかないわ！」

「確かにそうだね……行くよ、エステル！」

気を取り直した2人は新たな魔獣に武器で攻撃したが攻撃はすり抜けた。

「いつ！？」

攻撃が効いていないことにエステルは驚いて後退した。

「物理攻撃は効かないのか……なら！……時の刃よ！ソウルブラ

！！」

ヨシュアが放つたアーツが敵の一体にあたり、怯んだ。

「よし、効いてる！エステル、アーツや魔術主体で行くよ！」

「オッケー！……風よ切り裂け！旋刃！！」

エステルが放つた風の魔術は霧を切り裂くように重傷を与えた。そして2人はアーツや魔術を使って攻撃し、怪我をした時は薬やエステルの魔術で回復して、残り一体まで減らした。

「……今のでE.Pが最後か……エステル、後一体だけどそっちはどう？」

ヨシュアは自分のオープメントのE.Pが切れアーツが放てなくなつたことを確認した後、エステルの様子を聞いた。

「こつちもオープメントのE.Pは空よ。魔力も結構使ったから一気に決めるわ！」

エステルは勝負を決めるために棒で残り一体の魔獣に立ち向かった。

「エステル、何を！？」

物理攻撃が効かない魔獣にエステルが再び棒で攻撃しようとする無謀さにヨシュアはギョッとした。そしてヨシュアはエステルの棒に雷を帶びているのを見て驚いた。

「まあ、見てなさい！これで決める……ハアアアアアアアー！雷波！無双撃！」

雷を帶びた棒でエステルは残りの魔獣を連続で攻撃した。それをま

ともに喰らつた魔獸はその場にほかの倒された魔獸と同様セピスを残し、消えた。

「ま、こんなもんね ぶつつけ本番の技だつたけど上手くいったわ

」

「エステル、今のは？」

ヨシュアは今まで見た事のないエステルの技に驚き聞いた。

「今のはあたしが考えた魔術の力を帶びた武器攻撃よ！棒と魔術を合体できないかとずっと考えてカンで試しに使ってみたけど、案外いけるわね」

「武器と魔術を合体させるつて……エステルの野生のカンは本当に凄いな……」

ヨシュアは武器と魔術の力を合体させるという誰も考えないようなことを、やつてのけたエステルを感心した。

「さてと……行きましょ、ヨシュア！」

戦闘が終わりホッとしたエステルはヨシュアと共に戻るよう促した。

「いや……どうやら、まだいるみたいだよ……」

「へ……？」

新たな魔獸の気配を感じたヨシュアはエステルに警告し、その警告にエステルは目を丸くした。すると先ほど現れた霧状の魔獸より一際大きい同じ魔獸が現れた。

「い！？まだ残つてたの！？」

「ク……どうしよう……」

ヨシュアは劣勢を一瞬で悟り、どうするか考えた。

「……しょうがないわ……パズモ！」

（ようやく私の出番ね…）

エステルは溜息を吐いた後、『』の守護精靈を呼んだ。呼ばれたパズモは2人を守るように現れた。

「エステル、シラさんと言つてたことを忘れたのかい！？」

パズモを見たヨシュアは驚き、エステルに聞いた。

「覚えているわよ！でも、緊急事態だからシェラ姉も許してくれるつて！パズモ、お願いできるかしら！？」

（大丈夫！私に任せて！……光よ！我が仇名す者に裁きの鉄槌を！贖罪の光霞！！）

パズモが放つた魔術は薄暗い地下道全体を照らすような強力な光が走り、それをまともに受けた魔獣は消滅した。

「フウ！……助かったわ。ありがとう、パズモ。」

今度こそ戦闘が終了したと思ったエステルはパズモにお礼を言った。（フフ、あなたを守るのが私のやるべきことだから気にしないで。

！？エステル、ヨシュア！後ろ！）

お礼を言つたエステルにパズモは笑顔で答えた後、エステル達に襲いかかるとした魔獣に気付きエステルに警告した。

「へ……」

「しまつた……！」

警告されたエステルは後ろを振り向き、それに気付いたヨシュアも後ろに振り向いたとき魔獣はすでに2人に襲いかかろうとしていた。（ク……間に合つて……！）

パズモは焦りながらも魔獣に魔術を当てようとした時

「……雷よ落ちなさい！落雷！！」

魔獣に強烈な雷が落ち、雷を受けた黒焦げになつて息絶えた。そして2人は振り向いて雷を放つた術者であるシェラザードを見てホッとした。

「シェラ姉、来てくれたの！？」

「助かりました、シェラさん。」

「2人とも油断はするなつて言つたでしょ。遅いと思つて一応様子見に来て正解だつたようね。」

シェラザードは溜息を吐いた後、エステルの肩に乗つているパズモに気付いた。

「エステル、あんたね……私の言つたこと忘れたの？」

「う……これには訳が……」

シェラザードの言葉を聞いてのけ反つたエステルはヨシュアと共に理由を話した。

「ああ、それは『』く最近姿が見られた新しい魔獸よ。別に手配魔獸でもないわよ？」

エステル達が苦戦した魔獸のことを聞くとシェラザードはなんでもない風に言った。

「へ……じゃあ、どうして教えてくれなかつたのよ…? あんな魔獸がいるとは聞いてないわよ！？」

エステルは呆けた後、シェラザードに詰め寄つた。

「不足の事態や未知の魔獸と出会つても冷静に対処するのが遊撃士の心得の一つ。あたしが教えたこと、もう忘れたの？」

「(ギクッ！) そ、それぐらい覚えてるわよ…やあね、シェラ姉つたら、アハハ……」

シェラザードに理由は言われたエステルは渴いた声で笑い誤魔化した。

「エステル、今日は僕達のミスだよ。やつぱり今日は不合格でしょうか？」

納得したヨシュアは合否を聞いた。

「…………そうね。本来は不合格と言いたいところだけど、今回はいい勉強になつたつてことで特別に目をつぶつてあげるわ。」

シェラザードは少しの間だけ考えた後、答えた。

「ありがとう、シェラ姉！」

(よかつたわね、2人とも)

エステルはその言葉を聞いてホッとした。

「そんなことより、2人とも私が言つた捜索物を見つけたかしら？」

「うん、ハイ。」

「お願ひします。」

そして2人は捜査対象が入つた小箱をシェラザードに渡した。

「……うん、本物ね。途中で開いた形跡もなし、と。」

（あ、あぶな）（やつぱりね……）

シェラザードの言葉を聞き帰りの途中で中身が気になり箱を開けるのをヨシュアに止められたエステルは冷や汗をかき、ヨシュアは予測通りでよかつたと思った。

「2人とも、おめでとう。実技試験は合格よ。」

「ふふん、あのくらい楽勝よ。それでシェラ姉その小箱には何が入つてるの？」

エステルはすつと気になつてた小箱の中身を聞いた。

「まあ、それは研修が終わつてからのお楽しみよ。まあ、ギルドに戻りましょ。」

そして3人はギルドに戻り2人は無事試験に合格し準遊撃士になった。

そしてエステル達が準遊撃士になつてさまざまな出来事が起こつた数日後……

第21話（後書き）

エステルが使つた魔術・暗黒はオリジナルにしました。いくらなんでも初っ端から魔槍系やテイルワンの闇界とか使うのは反則すぎますし。それとちなみに気付いていると思いますが雷波無双撃はセリカ、リウイの魔剣技から考えました。原作のSクラフト、烈波無双撃に雷を帯びさせただけの単体技です。これがパワーアップするとさらに別の技名になる予定です……次は少しだけ原作を飛んでロレントを出て本格的な旅に出るあたりです。もちろんメンフィル側も……あ、ちなみにエステルはパズモを合わせて最終的に3、4体と契約する予定です。契約キャラは……作者は戦女神シリーズは幻想から始めて、戦女神1・2をやつたことがありません！かと言つて幻燐側からも出す気がありません！と言えばある程度しぼれるかと。大ヒントとして1体は第1世代からいて、VERITAで登場するキャラです。……感想お待ちしております。

第22話（前書き）

文章がおかしいかもしませんがそれでもよければどうぞ……

「メンフィル大使館」

一方リウイ達、メンフィルは数年の間特に何事もなく時を過ごした。そんな中、リウイを含めメンフィル建国時からいる忠臣や仲間達を悩ましている存在がいた。それは数年前から大使館で働いているイリーナだった。マーシルン家に恩を返したいイリーナはよくリウイ達に近くした。そのこと自体はいいのだが、問題は時間が経つにつれどんどん成長していくイリーナの姿や雰囲気、またちょっとした仕草だった。今年で18歳になるイリーナの姿はもはや、生前のリウイの愛妻、イリーナ・マーシルンと区別がつかないほど成長した。

「お仕事中すみません。陛下、お茶をお持ちしました。入ってもよろしいでしょうか？」

「え……!?」

「……っ。あ、ああ。入つて来てかまわん。」

執務室で仕事をしていたリウイは「き愛妻そつくりの声に一瞬戸惑つたが気を取り直し答えた。また、リウイの手伝いで書類整理をしていたペテレーネもイリーナの声を聞いて目を見開いて驚いた。

「……失礼します。」

入つて来たイリーナは一人前の淑女の足取りでリウイ達に近づきトレイに載せてあるカップに紅茶を入れ2人の前にいた。

「どうぞ。」

「いただこう。」

「ありがとう、イリーナさん。」

2人は仕事の手を休め出された紅茶を飲んだ。

「……ほう、よい香りだ。味もちょうどいい。城のメイド達が出している味と大して変わらないぞ。」

リウイは紅茶を飲み若いながらもリウイの舌を唸らせる紅茶を出したイリーナを感心した。

「……ありがとうございます。これもペテレーネ様の教育の賜物です。」

イリーナはリウイの贅沢を謙虚に受け、普段の仕事で忙しいながらも王族に仕える侍女としての教育をしてくれたペテレーネに感謝した。

「そ、そんな。私は基本的な事しか教えていません。イリーナさんの努力が実った成果が出ているだけです。」

ペテレーネはイリーナの感謝を聞き恥ずかしくなり、イリーナを正面から見られなくなり視線を外した。

「……お前がここで働くようになって、あれから5年か……時間が経つのは早いな。あの頃幼さがまだ残っていたお前も、今では立派な淑女と言われてもおかしくないだろう。」

リウイは飲み干したカップを置くと大使館で働き始めた当時のイリーナを思い返すように呟いた。

「お褒めに与かり光栄です。今の私があるのは陛下が私みたいな使人見習いにペテレーネ様を含め、さまざまな教育係を当ててくれたお陰です。……一般常識や淑女としての立ち振舞いを学んだ時、皇女であるプリネ様と机を並べて共に学んだことは中々慣れませんでしたが……」

イリーナは大使館に来て色々学んだ当時を思い出し、苦笑いをした。
「フ……俺達、マーシルン家はほかの王族と比べると色々型破りだから慣れておけ。それに一人ずつ教えていたら時間も非効率だしな。ここに来て色々と驚くことがあつただろう。」

「はい。例えば陛下やリフィア様達に出される食事にも驚きました。てっきり皇族専用の料理人がいらっしゃって豪華な料理をいつも食べていると思っていたのですが……実際はペテレーネ様が陛下達の

「食事を作つていましたし、料理も私達が食べているのと変わりなかつたので、本当に驚きました。」

たので、本当に驚きました。

イリーナはリウイ達、皇族に出されている食事が自分達使用人と大して変わらない料理に驚いたことを2人に話した。

「まあ、そこにはメンフィルに仕え初めの者達がよく驚くことだ。元々俺は豪華な料理はあまり好きじゃないし、いつもそんなのを食べていたら国費が嵩むだけだ。料理人も信頼する者に作つて貰う方が安心できるしな。」

そう言つてリウイはペテレーに顔を向けた。

「こ、光榮です。リウイ様……」

「我らの主は、この世界の運営を掌握する大魔術師だ。」

「うう、王妃た……いすれお前も俺達の食事を作ることになるかも知れないな。プリネ専属の正式な侍女を希望しているのだろう?」

「は、はい！いつか陛下に食事を出しても恥ずかしくないよう精進いたします！…………あの、ずっと聞きたかったのですが本当に私のような他国の、しかも身分のない人間が皇女であるプリンセ様に仕えてもよろしいのでしょうか？」

「リナは」「かりウイ達に食事を出すかも知れない」と考
えた。緊張した声で答えた後、ずっと疑問に思っていたことをリウイに聞
いた。

「そのことか……まあ、普通なら代々王家に仕える者の役目だが、我らメンフィルに限つては職務の採用に関しては平等だ。例えそれが王家に直接仕えることでも……な。……それに俺は王族に仕えるのに出身や身分で決めるのが必ずしもいいとは思わん。大事なのは仕えるべき者へどれほどの忠誠心があるか、それだけだ。」

〔...〕

イリーナはリウイ色々語つてゐるのを見惚れた。

(…………つーやだ……また、胸の鼓動が激しく…………お願い治まつて…………

⋮
⋮
⋮

イリーナは激しくなった胸の鼓動を抑えようつて両手を胸に当した。その様子を見たペトロ夫が頭をかねる。

「イリーナさん、どうかしましたか？具合でも悪くなつたんですか

「ハ、ハハえ！大丈夫です！陛下、それでは失礼ハたします！」

「あ、ああ。」

リウイはイリーナの様子を変に思つたが退出を許可した。そしてイリーナは執務室を出た後、両手で胸を抑えて天井を見上げた後、溜息を吐いた。

(はあ……どうして陛下と顔を会わしたらこつもこんな愛しい気持
ちになるんだじょ、年は歳く離れてこるし、陛下にはカーリア
ン様やペテーネ様もいるのにどうして……)

リウイを愛する自分がわからなくなつた。

(……つ。いけない、こんなことを考えちゃダメ……今日からプリ
ネ様達が自らの見聞を広めるためにしばらく大使館を離れるから、
離れている間プリネ様達のお世話をしなくていい代わりに、ペテレ
ーネ様のお手伝いをしなくてはならないから陛下とはほぼ毎日顔を
会わせちゃうわ……頑張って私！)

イリーナは自分を叱咤するように咳いた後、プリネ達の旅支度を手伝うためにその場を離れた。

一方リウイ達はイリーナが出て行つた扉をしばらく見つめた。そしてペテーネがポツリと呟いた。

「……………イリーナさん、一体ど

「わからん。ただ自分の状態が理解できないようにも見えたがな。」

リウイはイリーナの先ほどの様子がわからなく、溜息を吐いた。

「…………あの、リウイ様。もしかして体の奥底に眠るイリーナ様の魂が目覚め始めているのでは……？」

「…………なぜ、あの少女にイリーナが宿つていると言える？」

ペテレー・ネが呟いた言葉にリウイは気になり聞いた。

「お言葉ですが、それはリウイ様自身もわかつてているのでは。カリアン様やファーミシルス様もあの子をしばらく見て転生したイリーナ様だと気が付いていらしてました。」

「…………ああ、お前の言う通りだ。俺があいつを見間違うハズがない。容姿、仕草、表情……どれもあの頃のイリーナだ。決定的なのはあの少女の生まれた日がちょうど、冥き途の門番が言つてたイリーナの魂を感じにくくなつた日だからな。」

「そんな！ それだったらもうあの少女で決まりではないのですか！？ 教えなくてよろしいのですか？」

ペテレー・ネはイリーナが転生したイリーナであるとリウイがわかつていながら、何も行動を起こさないリウイに疑問を持ち聞いた。

「何をどう教えればいいのだ？ 今のイリーナはあのイリーナではないのだぞ？」

「それは……」

質問を返されたペテレー・ネは答えられず顔を下に向けた。

「…………今すぐにでもあいつを抱きしめてやりたい。だが魂が目覚めていない他人と言つても可笑しくないイリーナの人生を俺が勝手に決める訳にはいかん。それはあいつも望んでいないだろう。」

「…………リウイ様……」

辛そうにしているリウイを見て、ペテレー・ネは立ち上がり思わず後ろから抱きしめた。

「ペテレー・ネ？」

「挫けないで下さい、リウイ様。ずっと探していたイリーナ様が見つかり、目の届く場所にいるのです。それだけでも喜ばしいことじやないですか。今はイリーナ様が目覚めるのを待ちましょう。」

「フ、お前の言う通りだな……幸いにもあの少女自身、プリネに仕えたいと希望しているしな。長い年月の間探して来たんだ。気長に待とう。」

ペテレーに励まされたリウイは微笑を浮かべ、気を取り直した後立ち上がり正面からペテレーを抱きしめた。

「リ、リウイ様！？」

「お前には本当にずっと世話になってしまっているな。感謝する。「そんな……私はただリウイ様のお傍にいることだけが生きがいなのです。可愛いプリネも授かり、本当に私は幸せ者です。」

リウイに抱きしめられたペテレーは顔を真っ赤にしながらも答え、抱き返した。そして2人はしばらく見つめ合い、お互いの唇が合わさる所とした時、突然扉が開かれリフィア達が姿を現した。

「旅支度が出来たぞ、リウイ！……む？もう少し遅く来るべきじゃつたか？」

「…………お兄ちゃん達、何しているの？」

「お、お姉様！」

リフィアは自分達を見ている2人を察して、咳いた。エヴリーヌは何もわかつてない様子で、2人の様子から察したプリネは顔を真っ赤にしながらもリフィアを咎めた。

突然のリフィア達の登場に驚いたペテレーは思わずリウイから離れた。リウイはその様子を見て苦笑しながらも答えた。

「リフィア……お前は仮にも皇女なのだからノックぐらいしろ。」

「ずっと待ち続けた旅がようやくできるのじや！細かいことはなしじゃ！」

呆れた様子でリウイはリフィアを咎めたが、リフィア自身全く気にしていなかつた。

「まあいい。少し待て。」

3人に待つよう言つたリウイは執務室に備え付けてある通信機に手を取り、ある場所に掛けた。

「はい、こちら遊撃士協会・ロレント支部です。」

通信機から聞こえたのはロレント支部の受付、アイナの声だった。

「……メンフィル大使だ。例の依頼、準備ができたので連絡させてもらつた。指定した遊撃士の方はどうだ?」

「ご丁寧な連絡、わざわざありがとうございます。今、本人に推薦状を渡したのでそちらにご連絡を差し上げようとした所です。……あの、本当に指定した遊撃士でないとダメなのでしょうか? よければもつと実力のある遊撃士を用意できますが……」

通信機からはアイナの戸惑つた声が聞こえた。

「依頼の時も伝えたが、そう難しいことではない。むしろそちらにとつて大助かりだと思うが。それに同行者の3人は戦闘に関しては俺が保証するし、旅の間万が一怪我等しても責任を負わせるつもりはない。」

「…………わかりました。それではお待ちしております。」

「ああ。」

通信機からは半分諦めが混じつた声が聞こえた後、リウイは通信を切つた。

「…………向こうの準備も完了したそうだ。」

「おお! ついにエスティルに会えるのか!」

「旅行、楽しみ……」

「フフ、不謹慎ながら私も初めての旅が楽しみです。」

リウイが旅支度をした3人に伝えると3人共これからの旅を楽しみにした。

「リフィア。くれぐれも問題は起こすなよ? ここは他国だ、国際問題にもなりかねん。」

リウイはリフィアに念を持つて注意した。

「それぐらいわかつておる! 此度の旅を通じて祖国のためになる知識を余の力にしてくれる!」

注意されたりフィアは自信を持つてこれから旅への心構えを言つ

た。それを聞いたリウイは頷いた後、エヴリーヌにある頬み「」とした。

「エヴリーヌ……面倒と思うがこの2人が危ない日に会わないよう守つてやつてくれ。」

「ん……妹を守るのもお姉ちゃんの仕事だもんね……それにリフィアも友達だから守る……エヴリーヌ、がんばるね……」
エヴリーヌはリウイの頬み「」と微笑して頷いた。

「プリネ。お前も今回の旅でさまざまな事を学んで来い。」「はい、お父様。」

「……初めての旅での饗別だ。持つて行け。」

リウイは飾つてあつたレイピアの一つをプリネに渡した。

「これは……？見た所かなりの業物のようですが？」

プリネは渡されたレイピアを鞘から抜き、刃の状態を確かめて出所を聞いた。

「俺が昔使つていた剣だ。何度も鍛え直して使つていた剣だから切れ味や耐久性は保証する。」

「え……そんな剣を私なんかに……？ありがとうございます……！」
プリネは父が使つていた剣を貰い、喜んだ後笑顔でお礼を言つた。

「プリネ、これは私からの饗別よ。」

ペテレーネはある衣をプリネに渡した。

「この衣は……？魔力がかなり籠つているみたいですが……」

プリネは渡された衣を広げ、衣に宿つてゐる魔力に驚いた。

「それは私が神殿で修行してゐた時、着ていた衣よ。アーライナ様の魔力に加えて私の魔力も籠つてゐるから見た目の割には防御力があるわ。」

「お母様もありがとうございます！」

母の思いでの品といつてもいい衣を受け取り感動したプリネはリウイと同じようにお礼を言つた後、着ていた服を一枚脱ぎ渡された衣を羽織り鞘を腰に差した。

「後はこれも付けて行け。」

「これは……マーリオンの召喚石！？どうして私に？」
プリネはリウイから渡された指輪についている宝石に刻まれている印を見て驚いた。

「護衛のようなものだと思えばいい。」

「え……でも、それなら私にはペルルがいますが？」

「護衛の意味もあるがマーリオン自身、あの少女の旅を見てみたいそうだ。フ……ただひたすら俺に仕えていたマーリオンが俺以外の人と進んで関わるうとするとはな……マーリオンがそこまで見たいと言ったエステルと言う少女とゆっくり話したいものだ。」

「クス……お父様がそこまで言つ方なんて、これから会うのが楽しみです。」

渡された指輪を受けたプリネは父がある意味敬意を持つているエステルの人物像を思い浮かべた本人に会うのを楽しみにした。そして3人は大使館の入口でリウイ、ペテレーネ、レン、イリーナに見送られようとした。

「行つてらつしゃいませ、お嬢様方。」

「うむ。行つて来るぞ。」

「私達がいな間はお父様やレンのことをよろしくお願ひしますね、イリーナさん。」

「はい。」

自分達が留守の間、義妹の世話等をイリーナに託したプリネはレンにも話しかけた。

「レン、いい子にして待つているのよ？」

「むう～……レンもお姉様達といっしょに旅に出たかったな。」

レンは自分だけ仲間外れなことに頬を膨らませた。

「あなたにはまだ早いわ。その変わり帰つたら土産話をたくさん聞かせるからそれで我慢してくれないかしら？」

プリネはレンの機嫌が直るようにレンの頭を撫でた。頭を撫でられたレンはくすぐったそうにしながらもそれを心地よく感じた。

「うん！楽しみにしているね！それとお土産も忘れないでね！」
プリネに頭を撫でられ機嫌が直ったレンは笑顔で答えた。それに頷いたプリネはリフィアとエヴリーヌに先を促した。

「では、お姉様方。参りましょう。」

「うむ！」

「ん……」

「3人共、どのように成長するか楽しみにしているぞ。」

「みなさん、怪我や病気には気をつけて下さいね。」

「お帰りをいつでもお待ちしております。」

「いつてらっしゃ～い！お姉様方！」

「行つてらっしゃいませ！！！」

4人と門番に見送られた3人はしばらく行動を共にする遊撃士と合流するためにギルドへ向かった……

第22話（後書き）

多分次の更新をした後、プリネやエステル、シェラガードのステータスを出してしばらくの間更新は止まると思います。……感想お待ちしております。

(遊撃士協会・ロレント支部)

工ステル達は準遊撃士になつて、さまざまな依頼を達成した後起こつた強盗事件に関わつた。事件は犯人を逃がしたが、幸いにも奪われた物は取り返せた。また、カシウスが行方不明になるという信じられない情報が来て、最初はそれに驚いた工ステルだが気を取り直し母と同じく父の無事を信じた。そして今までの地道な功績を評価された2人は各地のギルドで貰える正遊撃士資格の推薦状を貰い、2人がそれぞれ喜んでいた所通信機が鳴つた。

「あら、誰かしら。ちょっと待つてね。」

そう言うとアイナは通信機を手に取つた。

「はい。こちら遊撃士協会・ロレント支部です。」

そしてアイナは相手が名乗り出ると驚いた。

「（ご）丁寧な連絡、わざわざありがとうございます。今、本人に推薦状を渡したのでそちらに（ご）連絡を差し上げようとした所です。……あの、本当に指定した遊撃士でないとダメなのでしょうか？ よければもっと実力のある遊撃士を用意できますが……」

「へ……今推薦状を貰つたのってあたし達の事だよね？」

会話を聞いていた工ステルは自分達の事だと気付き目を丸くした。

「恐らくそうだよね……話を聞く限り依頼で僕か工ステルを指名しているみたいだけど一体誰が……？」

「誰でもいいじゃない！ あたし達は遊撃士なんだから依頼を達成するだけよ！」

「工ステルは呑氣だなあ……」

準遊撃士に成り立ての自分達を指名して依頼を出すことをワシュアは怪しく思つたが、工ステルは全く気にせず答えたことに思わず苦笑いをした。

「…………わかりました。それではお待ちしております。」

アイナは諦めの表情で通信機を切った。

「アイナ、誰だったの今のは？依頼のようだけれど、エステル達のことと言つてなかつた？」

会話を聞いてある事に疑問に思つたショーラザードはアイナに聞いた。
「ええ……実はエステル達が準遊撃士になつた翌日にある方から依頼が来たの。しかも、エステルを指名で。」

「へ……あたし？」

自分の事を言われたエステルは思わず目を丸くし驚いた。

「アイナさん、そのある方といつ人は誰なんですか？」

ヨシュアは警戒するように真剣な顔をして依頼した人物の正体を聞いた。

「それは……」

依頼者の正体を聞かれたアイナは戸惑つた顔をして言い淀んだ。

「あんたが困惑するなんて珍しいこともあるものね。ちなみにどういう依頼なの？」

アイナの様子を珍しく思ったショーラザードはこのまま聞いても埒があかないと思い、肝心の依頼内容を聞いた。

「……その方の縁者3人とエステルが共に行動すること。期間はエステルが正遊撃士になるまでよ。後、遊撃士の仕事をサポートさせること。それが依頼内容よ。」

「えつと、それってどういうこと？？」

依頼内容の意味がわからなかつたエステルは質問した。

「要するに僕達の修行の旅に同行者が3人増えるつてことだよ。後、その人達が僕達の仕事を手伝ってくれるつてことだね。でも、いいいんですかアイナさん？」

僕達はまだ準遊撃士に成り立てですよ？それに一般の人達に僕達の仕事を手伝わせるのは無理なんじゃあ……遊撃士の仕事は荒事もありますし、正直僕達2人で

3人も守るなんて難しいことだと思いますよ。」

エステルに判り易く説明したヨシュアはアイナに依頼の難しさを訴えた。

「私だって最初は断るうつと思つたけど相手が相手だしね……本部にも一応聞いたけど、今回は特例よ。後、護衛に関しては一切心配しなくていいと思うわよ。多分、あなた達より実力があると思うし。」「あたし達より実力があるってどんな人達なの？」

同行者の3人が気になつたエステルは質問した。

「…………会えばわかると思うわ。ちなみに提示された報酬の金額はこんなにあるわ。」

3人はアイナから見せられた依頼書に書かれてある報酬の金額を見て驚愕した。

「いち、じゅう、ひゃく…………じ、10万ミラ~~~~~!!!!!!

！？？？な、何よこの金額！？？」

「信じられない金額ですね…………相手は貴族か商人ですか？」

「何よ、このバカげた金額は！？先生でもこんな報酬の仕事、滅多にないわよー？準遊撃士の報酬で10万ミラなんてありえないわ！？」

？

エステルとシェラザードは提示されてある金額に目を大きく見開き思わず叫び、ヨシュアは依頼者の正体を推理した。

「私も本当なら受けにしてもカシウスさんか最低でもB級と思つたんだけど、カシウスさんは行方不明だし、何より相手がエステルでないとダメつて言い張るのよ……」

「…………どうして、その依頼者はエステルを指名したんでしょうね？僕達はまだ準遊撃士の成り立てで父さんやシェラさんと違つて知名度はないのに。」

ヨシュアは最大限に警戒し、相手の思考を考えたがわからずアイナに聞いた。

「それはあんまり詳しく教えてくれなかつたけど、唯一教えてくれ

たのはエステル。あなたが”闇夜の眷属”と仲がいいからよ。」

「へ……？なんでそれが関係するの？？」

アイナに言われたことが理解できなかつたエステルは目を丸くした。
「……ちょっと待つてアイナ。”闇夜の眷属”が関係してあんたが
断れない相手でこんな金額を出せる人物つてもしかして……」
アイナから出たある言葉から依頼者を推理したシェラザードは信じ
られない人物が浮かび上がりそれを聞こうとした時、ギルドの扉が
開かれた……

第23話（後書き）

ちょっと短いかもしませんが、このまま出すと長くなりそうなので区切りました。なので次の更新は早いと思います。感想お待ちしております。

（遊撃士協会・ロレント支部）扉が開かれ入つて来た人物は先ほど大使館を旅立つたリフィア一行だつた。

「ほう！ここがギルドというものか！！」

リフィアは、ギルドに入つて興味深そうに周りを見て、初めて見る光景に喜びの声を上げ

「……ん、ここ、エヴリーヌの部屋より狭いね……」

「エ、エヴリーヌお姉様！そういう失礼な事は控えた方が……！」ギルドの広さを見て思わず呟いたエヴリーヌをプリネは慌てて咎めた。3人の登場に驚いた4人の中でシェラザードがプリネの姿を見て驚いた。

「あ、あなたはプリネさん！？」

「あ、シェラザードさん。お久しぶりです。あなたの活躍はファーミシリス様から聞いていますよ。時間があればお母様に会いに行つて下さい。お母様もあなたと話したがつていましたし。」

「ど、どうも……時間があれば窺わせてもらいます。」

プリネの言葉にシェラザードは恐縮しながら答えた。

「シェラ姉、一体どうしたの？この人あたし達と同じくらいの年に見えるけど？」

シェラザードの様子をおかしく思ったエステルは聞いた。

「バ、バカ！口を慎みなさい！この方を誰だと思っているのよ！？」エステルの言い方にシェラザードは思わず慌てた。そしてその様子を見たプリネは上品に笑つて答えた。

「クス……構いませんよ、シェラザードさん。これから、共に旅をする仲間となるんですから2人には気軽に接してもらつて構いません。」

「つー？じゃあ、やつぱり依頼者は……！」

「うむ！ シエラザードとやら、お前の思う通りじゃ！……それでギルドの受付よ、余達と共にする者はそこの2人か？」

シエラザードに答えたリフィアはアイナに自分達の同行者が、目を丸くして見ている2人かと聞いた。

「……はい、そうです。…………あなた方3人が同行者ですか？」

「うむ！」

アイナの言葉にリフィアは頷いた。

「ふうん、あなた達がこれからいつしょに旅をする仲間か……ま、いいわ。あたし、エステル・ブライト！ よろしくね！」

「…………ヨシュア・ブライトです。僕もエステルといつしょに旅をするのでよろしくお願ひします。」

あまり気にせず自己紹介をしたエステルと違い、3人を警戒しながらヨシュアは自己紹介をした。

「プリネ・マーシルンです。気軽に呼び捨てにしてもらって構いませんよ。」

「私、エヴリーヌ……よろしくね……」

「そして余の名は――リフィア・イリーナ・マーシルンじゃ！ プリネが言つてゐるようによ余やエヴリーヌのことを呼び捨てにするのを特別に許してやるから、気軽に呼ぶがいい！」

「あはは、なんか偉そうな子ね……ま、いいわ。よろしくね、プリンセス、エヴリーヌ、リフィア！」

エステルは3人の名前を聞いても特に何の反応もせず気軽に話しかけた。逆にプリネとリフィアのフルネームを聞いてヨシュアは顔を青くして、エステルの言動を諫めた。

「エ、エステル！ この人達、そんな気軽に呼んでいい人達じゃないよ！？」

「ほえ、なんで？」

「…………それはこの人達が王族の人達だからだよ。」

「へ……？ でも、確かに女王様の名前つてアウスレー、ゼだよね？？」

ヨシュアが慌てていいことに気付かないエステルは思わず聞き返した。その様子を見てシェラザードは呆れながらエステルに話した。

「……それはリベル王家の名よ。マーシルンはメンフィル皇帝の名よ……」

「え……じゃあ、あなた達つてもしかしてメンフィルの皇女様！？」

シェラザードからマーシルンの名がどれほどの名前か理解したエステルは驚愕に満ちた表情で3人を見た。

「付け加えておくとプリネさんは師匠……つまり”闇の聖女”の娘でもあるわ。」

「聖女様の……！？ そう言われてみれば聖女様によく似ているかも……！」

エステルは憧れていいる人の娘だとわかりさらに驚いた。

「でも、どうしてメンフィル王家の人達がエステルに直接依頼を出したんですか？」

「うむ！ それは余が答えてやるつ！ 一つはお主たち、ブレイサーの仕事を手伝うことと、余達の見聞を広めることじゅ一民の暮らしを知ることも王族の務めじやからな！」

そしてもう一つはエステル、お主がどのような人物かを余達、メンフィルは知りたいのじや！」

ヨシュアの疑問にリフィアは堂々と答え、それを聞いたエステルは目を丸くした。

「へ……あたしを知りたいってどういうこと？？」

「それはエステルさん。あなたの考えが我々メンフィル帝国が掲げる理想にとてもよく似ているのです。ですから、お父様 リウイ陛下があなたのことによく知りたいため

あなたに依頼を出し、私達があなたと行動を共にすることになったんです。」

「メンフィルの理想つて何？？」

プリネが答えたことが理解できなかつたエステルは聞き返した。

「私達メンフィル帝国が掲げる理想とは”人間”と”闇夜の眷属”の共存です。私達、”闇夜の眷属”は人間の方とは色々違うのであなた達ゼムリア大陸に住んでいる人達にとつて初めてみる私達は距離を取られて当然なのですが、あなたはそんなことを気にせず自ら進んで友達になつてくれましたよね？」

「あたしはただ、会話ができればどんな人でも仲好くできると思つただけだよ？……というか、皇女様があたしの友達で”闇夜の眷属”の人がいるつてどうして知つているの？？」

「フフ……それはこの子が教えてくれたんですよ……マーリオン！……」

プリネが指輪に呼びかけると指輪から光が走り、その場にマーリオンが現れた。

「え……マーリオン！？どうしてあなたがここに！？」

「お久ぶり……です……エステル……さんに……ヨシュア……さん……あなたの……こと……ご主人様に……話しました……あなた……なら……ご主人様……と……きっと……仲好く……なつて……くれる……と……思つた……から……」

「そなん……でも、マーリオンの主つてこの人？」

突然現れたマーリオンに驚いたエステルだったが理由がわかり、ずっと気になつていたマーリオンの主の正体を聞いた。

「いえ、私は一時的にマーリオンを使役しているだけです。マーリオンの本当の主はお父様　メンフィル初代皇帝、リウイ・マーシルンです。」

「あ、あんですつて～～～！？マーリオン、そんな凄い人の使い魔だつたの！？」

主の正体を知つたエステルは思わず叫んだ。

「ちなみにリストイもリウイに仕えてあるぞ。」

「嘘……あの呑気なリストイが……？信じられない……」

自分の友人達がメンフィル王家と深い繋がりがあることを知つたエステルは信じられない思いだつた。

「…………それで、エステル。どうするのこの依頼？」

アイナは心配そうな顔でエステルに依頼を受けるか聞いた。

「当然、受けたに決まっているじゃない！あたしは遊撃士よ！指名されたからにはどんな難しい依頼だつて、成功させてみるわ！！」

「うむ、よく言った！これから頼むぞ、エステル、それとヨシュアとやら！」

「ええ！」

「ハハ……さすがエステル……相手が王族とわかつても普通に接するんだ……」

（お父様、お母様……この人は私達の初めての友達にもなってくれそうです……）

エステルとリフィアはお互い、笑顔で握手した。その光景をヨシュアは苦笑しプリネは微笑ましそうに見ていた。

「ヨシュア、厳しいとは思うけどエステルをサポートして上げて。この依頼の報酬はエステルと半分にしといてあげるわ。」

エステルが依頼を受けたことに諦めの表情だったアイナは頼みの綱のヨシュアにエステルのことを頼んだ。

「ハハ……言われなくともそうするつもりでしたよ。下手したらそれこそ国際問題に発展するかもしませんしね……」

アイナの頼みをヨシュアは苦笑しながら引き受けた。そして一連の流れを見たシェラザードは自分もついて行くためにアイナに名乗りあげた。

「アイナ、空賊の件もあるからボースの修行と空賊の件が解決するまで私もエステル達について行くわ。」

「ええ、お願い。」

そしてヨシュアはある事が気になつた。

「…………あの、3人共戦闘は大丈夫でしょうか？ブレイサーの仕事の中には戦闘が避けられない場合もありますし。」

「ヨシュアさんでしたっけ？あなたもエスティルさんと同じように軽に接してもらつて構いませんよ。私達はしばらく寝食を共にするのですから。」

「…………わかつた。それで、どうなのプリネ？」

「その点は大丈夫です。私はお父様からは剣術、お母様やお姉様方からは魔術を教えて貰つていましたから。実戦もファーミシルス様やカーリアン様にも鍛えて頂いたので

足手まいにはなりません。接近戦、攻撃魔術、回復、補助、どれでもできますので任せ下さい。」

「ふえ～…………凄いわね…………そっちの2人はどうなの？」

エスティルはプリネの万能さに感心しながら2人の戦闘スタイルを聞いた。

「ん……エヴリーヌの武器はこれ…………」

エヴリーヌは虚空から弓を出した。

「わ…………！一体どうやつたのそれ…………？」

何もない空間から突如出て来た弓にエスティルは驚いた。

「これ…………？出したいから出しただけだよ…………？」

「いや、それだけじゃわかんないんだけど…………」

「余が特別に説明してやろう！エヴリーヌは弓を魔力で微粒子状にして利き腕に収納しているのじや。だから、いつでも武器が出せるのじや。」

「びりゅうしじょう…………？？さつぱりわかんないわ～…………ヨシュア、シェラ姉。わかる？」

リフィアの説明でさらに理解できなかつたエスティルは2人に聞いた。

「ごめん…………僕も全然わかんない。」

「わたしもよ…………」

「要するにエヴリーヌお姉さまは普段武器を持ち歩く必要がなく、いざ戦闘が起こった際にはいつでも武器を出せることです。」

唸つていた3人を見兼ねたプリネは簡単な説明をした。

「な～んだ、そういうことね…………なんとなくわかつたわ！」

「本当にわかつてゐるのかいエステル……でも、弓を使うということは当然矢があるはずだけど、見た所矢筒を背負つてないけど矢はどうしているんだい？」

プリネの説明で理解していいるエステルを怪しんだヨシュアは、弓を使うエヴリーヌが矢筒を背負つてないことに気付いた。

「矢はエヴリーヌお姉様の魔力で構成されているので、普通の矢は不要なのです。」

「それって魔力がある限り矢は無制限つてこと！？凄いといえば凄いけど、それだつたら魔力がすぐ尽くるんじや……」

普通の矢が必要ないことに驚いたシェラザードだったが、ある事に気付きそれも聞いた。それを聞いたプリネは上品に笑つて否定した。

「フフ、その心配は無用ですよ。エヴリーヌお姉様は”魔神”ですから。」

「嘘！？この娘が”魔神”！？信じられない……！」

「ショラさん、なんなんですかその”魔神”つていうのは？」

エヴリーヌが魔神ということを教えられたシェラザードは驚愕し、その様子を不思議に思ったヨシュアは聞いた。

「……師匠から教えて貰つたんだけど”魔神”つていうのは”闇夜の眷属”の中でも全てにおいて最強を誇る種族よ……その力は神にも匹敵すると言われるし魔力も無限のようにあると言われているわ……正に魔王と言われてもおかしくない強さだそうよ……ちなみにメンフィル皇帝も半分、魔神の血を引いているそうよ。多分、この娘が本気になつたらリベルは焼け野原になるんじやないかしら

……？」

「え！？それなら戦闘なんてことしたら不味いんじやあ……」

魔神のことを知つたエステルは思わず心配そうに言った。

「大丈夫だよ……エヴリーヌ、人間が好きだし、そんなことしたら疲れるしリウイお兄ちゃん達に嫌われるからそんなことしないよ……」

……

「そう願いたいわ……魔神だつたら魔術も使えるのよね？」

エヴリーヌはエステルの心配を無邪気に笑つて否定した。その様子を見たシェラザードは思わず溜息を吐いてエヴリーヌが本気になつて暴れることを祈つた。

「ええ、エヴリーヌお姉様は』の技に加えて強力な風と暗黒の魔術が使えます。」

「あはは……それは心強いわね……リフィアはどうなの？」

エステルは明らかに自分達と実力が違うエヴリーヌを知り、冷や汗を垂らし、渴いた声で笑つた後、最後の一人であるリフィアに聞いた。

「うむ、よくぞ聞いた！余は神聖、暗黒に加えて無属性である純粹魔術も使えるから後方からの攻撃や回復は余に任せるがよい！」

「へえ……以外ね。リフィアって攻撃あるのみ！っていう印象があるけど回復魔術もできるんだ……」

リフィアが傷の治療もできることを知ったエステルは意外そうな顔でリフィアを見た。

「傷ついた民を治療するのも王族としての義務じゃからなー！それに余はこれでも”百日戦役”のエレボニアによるロレント襲撃の際、瓦礫に埋もれて瀕死であつた一人の女性の命をペテレーネと共に救つたのじやぞ。」

「…………え…………」

リフィアの言葉を聞いたエステルは、かつて母の命を救つた際に見た憧れの女性であるペテレーネの優しげな笑顔と、自信満々な笑顔で絶望していた自分に母は助かると希望を持たせてくれ、ペテレーネと共に母の傷を癒した少女の顔を完全に思い出した。

「あなたがあの時、お母さんを助けてくれたもう一人だつたんだ……やつと……会えた……！」

リフィアを思い出し、母の命を救つた人物に再会し感激したエステルは嬉し涙を流した。

「エステル……！？どうしたんだい！？」

ヨシュアはエステルが涙を流していることに慌ててエステルに何があつたかを聞いた。

「うん……この人、聖女様といっしょにお母さんを助けてくれた人だつたの……」

「え……それってレナさんが言つてた命の恩人！？」

ショラザードはリフィアがレナの命を救つたことに驚いた。そしてエステルは涙を腕で力一杯拭き太陽のような笑顔でリフィアにお礼を言った。

「お礼が遅くなつたけど……リフィア、あの時、瓦礫に埋もれて瀕死だつたお母さんを助けてくれてありがとう！！」

「ほう、お主があの時の少女だつたのか……何、余は王族として、また一人の人として義務を果たしたまでじゃーあの時から余とエス

テルは出会うべき運命だつたのじやな！」

「ふふ、本当にその笑顔はあの時から変わらないわね。……友達としてもこれからよろしくね！」

「うむ！」

リフィアとエステルのやり取りを周囲の者達はしばらく微笑ましく見ていた。

「フフ、エステルさんとリフィアお姉様。お二人とも似た者同士だから本当に微笑ましいですね。」

「えつと……プリネ？似た者同士つてどういう意味かな……？」

思わず呟いた言葉に反応したヨシュアは嫌な予感がして自分の予感が当たらないようエイドスに願いつつ聞いた。そしてプリネはそんなヨシュアの願いを知らず見事に打ち碎いた。

「あの眩しい笑顔もそうですが、何より性格だと思います。お姉様は基本的に、人の話を聞かず思い立つたら即実行してしまつ……その、いわゆる暴走してしまつ部分がありますから。エステルさんもそんな風に見えたのですが、間違っていたでしょうか？」

「…………いや、君の言つ通りだよ…………はあ～…………（エステルだけでも手一杯なのにそれがもう一人増えるのか…………大丈夫かな、僕…………）」

リフィアの性格を知つたヨシュアはこれから旅に起りるであろうことを考え大きな溜息を吐き肩を落とした。

（ヨシュア…………準遊撃士になつたばかりのにきつい事を押しつけてごめんね…………せめて報酬は交渉して、もう少し多めに貰えるよう後で交渉してあげるわ…………）

（がんばりなさい、ヨシュア…………プリネさんはまだまともだから、いざとなつたら2人で協力してあの暴走コンビを抑えなさい…………）ヨシュアの様子を見てショーラザードとアイナはそれぞれ哀れに思つた。そしてプリネはある事を思い出し、エステル達にそれを言つた。「そうだ……私達の姓ですけど、”マーシルン”を名乗らず旅の間は”ルーハンス”を名乗りますのでその点を注意して下さい。」「さすがに王家の姓を名乗つたら色々問題が起こるだろうしね。後でエステルにも言い聞かせておくよ。」

「ありがとうございます。その受付の方もお願いしますね。」

「ええ、ほかの支部の受付達にもそのことは伝えておきます。」

アイナはプリネの言葉に頷き、ヨシュアはプリネの言葉に納得した後、プリネ達の正体をエステルがばらさないよう細心の注意を払うよう心の中で誓つた。

「さて…………いつもいらっしゃいられないわ！みんな、早くボースに向かうわよ！」「うわよ！」「了解。」「はいはい……」「うむ！」「ん……」

「フフ、しばらぐの間お姉様共々よろしくお願ひしますね。」そしてリフィア一行とシェラザードを加えたエステル、ヨシュアは次の推薦状を貰うためにボース市へ向かつた。

次世代の闇の英雄達と英雄への道を辿り始める遊撃士達の旅の幕が
今、開いた……！

第24話（後書き）

リフィア、エヴリーヌ、ブリネがエステル達のメンバー入りです。正直言つてこの3人いれば反則だろう！と思いますがこれでいきます。ただ、ところどころこの3人はある重要場面などで同行から外れる場合があります。ちなみにメンフィル勢が一人でも戦闘メンバーに入つていれば通常戦闘BGMはVERITAの”我が旗の元に”が流れると思つていて下さい。まあ、完全に空の軌跡と合っていないBGMですが……次はブリネ、エステル、シェラザードの設定を出します……感想お待ちしております。

設定2（前書き）

空の軌跡がついにアニメ化ですね！！紹介されているキャラを見た感じSFCもやるようですから今から超楽しみです！！空の軌跡のアブリ化に、今年も新たな軌跡が出るらしいですから、今年は軌跡シリーズ！ですね！

設定2

＜闇の申し子＞ プリネ・マーシルン

髪の色、容姿、体つきは完全にペテレーネ似。瞳は赤、髪型は腰まで伸ばしたロングストレート、魔の力を解放した際、髪の色が銀髪になる。

L V 4 0
H P 3 5 0 0
C P 8 0 0
A T K 4 4 0
D E F 3 0 0
A T S 5 5 0
A D F 4 2 0
S P D 2 2
M O V 7

装備

武器 ロイレイピア改（モルテニア決起から幻燐戦争終結までリウイが使った愛剣。クリティカル率25%）

防具 イブ・アーライナ改（混沌の女神アーライナと神格者、ペテーネの魔力を強く受けた混沌の神格者になるための修行用のローブ。火・地・時・幻属性ダメージ半減、さらに毒、混乱、即死防止靴 プリンセスヒール（メンフィル皇女専用の靴。護身の魔術がかかっている。封技、封魔防止）

アクセサリー アクアマリン（水精・マーリオンを封じた指輪。水属性ダメージ0、凍結防止）

マースティア（全パラメータ10%上昇効果、HP

+1000）

オープメント（時属性）並びはエリイです。

味方のすぐ後に攻撃すれば威力1・5倍、一人終わることにCP、EPが50回復する。

クラフト

フェヒティング 80 単体 3回攻撃&アーツ、駆動妨害

闇の息吹？ 40 単体 味方のHPを20%回復させる

狂気の槍 60 単体 時属性攻撃ダメージ110%（威力はATSに反映）

戦士の付術 30 単体 味方のATK&DEFを15%アップ、2回まで重ねられる。

魔術師の付術 30 単体 味方のATS&ADFを15%アップ、2回まで重ねられる。

ペルル召喚 60 自分 サポートキャラ、ペルル（HPは主の7割）を戦闘に参加させる（1~300%の単体攻撃。敵全員を30%で混乱。敵全員100%攻撃）ただし召喚した主は召喚している間、最大HP、CPが15%下がる、任意でペルルを自分の元に戻せる。

マーリオン召喚 100 自分 サポートキャラ、マーリオンを召喚する（援護内容はリウイと同じ）ただし、アクアマリンを装備していないと召喚できない。

イオールーン 150 小円 ダメージ100%の無属性攻撃（

威力はATSに反映）

フェヒテンバル 200 単体 ダメージ150%

黒の闇界 250 大円・地点指定 110%の時属性攻撃（威力はATSに反映）

魔力全解放 全部 自分 内に秘められし魔神と姫神の力を解放する。全パラメータ3倍。ただし、解放した際のCPによって効果時間が変わる。

Sクラフト 暗礁火炎剣 中円 閻の炎で敵を焼き尽くす魔剣技、400%攻撃&火傷70%

<闇を受け入れし少女> エステル・ブライト

レベル、パラメーター、オーブメントは原作通り。ただし、CPは400、ATS、ADFは原作の2倍

アクセサリー 混沌の印（混沌の女神、アーライナの信者達に配られているお守りにエスティルのためにペテレーネが魔力を込めた逸品。エスティル専用、ATS&ADF10%上昇、毒・混乱防止）それ以外の装備は全て原作通り

クラフト（原作以外）

パズモ召喚 30 自分 サポートキャラ、パズモ（HPは主の半分）に戦闘に参加させる（味方単体DEF&ADF20%上昇or味方全体SPD15%上昇or敵全体空属性130%攻撃、たまに400%攻撃）ただし召喚した主は召喚している間、最大HP、CPが5%下がる、任意でパズモを自分の元に戻せる。

黒の衝撃 50 中型直線 貫通する暗黒魔術、80%時属性攻撃&後退効果（威力はATSに反映）

旋刃 40 小円・地点指定 風の魔術 70%風属性攻撃

(威力はATSに反映)

闇の息吹? 45 単体 味方のHPを回復させる。ただし、回復量は5~25%とバラバラ

Sクラフト

雷波無双撃 単体 自ら編み出した魔棒技、威力はATK、ATS両方を合わせ、さらに烈波無双撃の1.5倍、封技50%。ただし、CPが200からないと使えない。MAX威力になるCPは400、任意で烈波無双撃か選べる。

「風の銀閃」 ショーラザード・ハヴェイ

レベル30でパラメーター、オープメント、装備は原作と同じ。ただし、CPは250、ATS、ADFは原作の1.5倍

クラフト(原作以外)

旋刃 40 小円・地点指定 風の魔術 70%風属性攻撃
(威力はATSに反映)

電撃 30 直線 貫通する風の魔術 60%風属性攻撃&封技10% (威力はATSに反映)

消沈 25 小円 範囲の敵のSPDを10%下げる、2回まで重ねられる。

戦意の祝福 65 全体 味方全員のSPDを15%上げる

落雷 55 小円 風の魔術 90%風属性攻撃&封技20% (威力はATSに反映)

大竜巻 60 中円・地点指定 風の魔術 85%風属性攻撃、混乱
乱15%（威力はATSに反映）

オマケ

＜皇族専属侍女見習い＞ イリーナ・マグダエル

髪の色、容姿、体つきは全て原作のイリーナ。髪型はVERITAのエクリア。服装は幻燐2の×××シーンで着ていたメイド服に似た服。

設定2（後書き）

プリネはリウイ達によつて鍛えられていくので相変わらずのメンフィル勢特有の反則な強さですへへショラザードのレベルですが……どう考へてもエステル達よりずっと長く遊撃士やつているんですから当然のレベルでしょ。ゲームバランスとはいえ先輩遊撃士達がエステル達よりちょっと高いぐらいじゃ正遊撃士とはいえないでしょうし……CPやATS系は魔力の使い方がわかつたのでプラスしました。エステルがなぜATSやCPが高いかは後のお話でわかります……関係のない話になりますが私もアプリの空の軌跡をやつているのでもし、やつている方がいらっしゃつたら仲好くしてもらえば幸いです。まあ、名前は違いますが……さて、ここで一端更新はしばらくないと想います。焰の軌跡もいい加減書いた方がいいですし、今月末には穢翼が……11が……そして4月には神採りが……！で夢中になる想いしますので次の更新はとんでもなく遅いかな……まあ、遅くとも6か7月には再開しようとは思っています。感想お待ちしております。

第25話（前書き）

生存報告代わりの更新です。仕事が自宅待機で時間があつたので焰の軌跡と同時に作れました。なので更新速度が戻るわけではありませんので……

（ミルヒ街道）

ボース市へ続く街道をリフィア一行を加えたエステル達は関所に向かつて歩いていた。

「あ、そういえば3人に紹介する子がいたわ……パズモ！」

歩いていたエステルはあることに気付き立ち止つてパズモを呼んだ。

「ん……この子、守護精霊だね……」

「ほう、まさか守護精霊とまで契約していたとは……さすがじゃ

な、エステル！」

パズモを見たエヴリーヌとリフィアは珍しがつてパズモを見た。

（へえ……この人、アムドシアスやハイシェラほどではないけどかなり上位の魔神ね……それに周りの2人も少しだけど魔神の血を引いているわね……）

見られたパズモは3人の力に気付き、3人がかなり強い力を持つていると想い呟いた。

（へ……パズモ、もしかして友達で魔神がいるの！？）

パズモの呟きが聞こえたエステルは思わず念話を送った。

（……前の主人が魔神を使い魔にしてしたり、魔神の協力を受けて凄い威力を持つ剣や鎧を手に入れたの。だから友達っていうほど仲はよくないけど、知り合いではあるわね。（最も向こうはもう、忘れてているかもしれないけどね……）

（ふわあ……パズモの前の主人、そんなに凄い人だつたんだ……ねえねえ、その人強いの？パズモの前の主に会つて話をしてみたいわ！）

（うーん……強いと言われば強いわね……でも、会うのはやめたほうがいいわ。）

（なんで？）

（ちょっと……ね。その内理由は教えるわ。（まあ、エステルなら

セリカの正体を知つても平氣で友達にならうとするかも知れないけれどね……）

（？？？うん、わかつたわ。）

エステルが前の主人のことを聞いた時、パズモは前の主が世界の敵であることは流石にエステルには言えず、誤魔化した。

そしてパズモを見たプリネはることに気付いた。

「（もしかしてこの子……）エステルさん。この子といつ契約したんですか？」

「えつと……結構前よ？ 6年前ぐらいかな……？」

「（6年前……もしかして……）ペルル！」

「はーい！」

プリネに呼ばれたペルルは姿を現した。そしてペルルは驚いた表情で自分を見ているパズモに気付いた。

「パズモ！？ よかつた、無事だつたんだ～！」

（ペルル……！ あなたも無事だつたのね！ どうしてその人の使い魔に？）

「うん、魔力がなくなつてこの人に魔力を分けて貰つたの。それでパズモが見つかるまで使い魔にならせてもらつて今まで、この世界で生きてこれたんだ。パズモはどうして？」

（あなたと同じよ。私もエステルに助けられてお礼にエステルの守護精靈になることにしたの。それにこの子、闇夜の眷属を友達って言つたの。だからそんなエステルを私は守りたいからいつしょにいるのよ。）

「そなんだ……ボクも同じだよ！ プリネといつしょにいたらボク達が目指していた理想郷を作るのに一番近いんだ！」

（そうね、メンフィル皇女といつしょにいるのなら確かに私達の理想郷を作る大きな一步になるわね。でも今は私はエステルといつしょにいたいからすぐにあなたといつしょに行動はできないの。ごめんね……）

「ううん、いいよ！ボクも最近プリネとずっといたいって思つていいから気にしていないよ！エステルって子は見た所人間だよね？だったら何十年だって待つよ！」

（ありがとう、ペルル。もし、エステルとの契約がなくなつた時そちらのメンフィル皇女の方と契約していいか聞いてくれないかしら？）

「了解、えっとプリネ。ちょっとといい？」

「……何でしようか、ペルル。」

ペルルに呼ばれたプリネはもしかしたら約束通り契約を解除するかもしれないことに寂しさを感じながら答えた。

「えつと、あのね。パズモのことなんだけど、エステルとの契約がなくなつた時プリネがパズモと契約してくれないかな？」

「別にいいですが……ペルル、私との契約のことはいいんですか？」

「うん！ボクなんかでよければメンフィルをより住みやすい国作りの手伝いのためにずっと使って！」

「ありがとうございます、ペルル。……エステルさん、もしあなたの寿命が来てパズモとの契約を解除した時、その子を引き取つてもよろしいでしょうか？」

ペルルがこれからもずっといてくれることに安心したプリネはエスティルに聞いた。

「別にいいけど……凄く後になるわよ？あたしはまだ16歳だし、もしあたしの寿命が来てパズモとの契約を解除した時とかプリネもおばあちゃんとかになつて寿命もあたしと変わらないんじゃないの？」

？」

「あはは……エステルさん、私も”闇夜の眷属”ですよ？多分數十年たつたぐらいでは私は若いままですか。」

エステルの言葉にプリネは苦笑いしながら答えた。

「そう言えばそうよね。ねえ、プリネ。ずっと疑問だつたんだけど聖女様つて何歳なの？？たまに遠目で見た事あるけど、聖女様が口

レントに来てから全然年をとっている風に見えないんだけど……？

「エステル、女性の年齢を聞くなんて失礼だよ。」

エステルがプリネに聞いたことをヨシュアは咎めた。

「まあまあ、ヨシュア。別にいいじゃない。私も師匠の若作りにはずっと疑問を持つてたわよ？最近師匠を見て、私の方が師匠より年上に思えてちょっとへこむのよね……」

「シエラさんまで……えっと実は言つと僕も気になつていたんだ。いいかな、プリネ？」

「別にいいですけどお母様の年ですか……すみません、正直いつて私は知りません。多分、お母様も自分が今何歳かわからないかもしませんね。」

「へ……なんで？」

エステルはペテレー自身が自分の年齢を把握していないことを不思議に思い聞き返した。

「”神格者”であるお母様には年齢など無意味ですか？」

「その”神格者”って言つのはなんなんだい？」

ヨシュアは聞いたこともない言葉が出て来てそれの意味を聞いた。そしてプリネはペテレーの年齢を知りたがっていた3人に神格者がどういう存在、そしてペテレーが神格者を目指した理由の一つを話した。

「ふわあ～……聖女様つて年をとらないんだ……さすが聖女様ね

」

エステルはペテレーが年をとらないことを知り呆然とした
「凄いな……よくおどぎ話とかで出てくる不老不死が本当にあるんだね……」

ヨシュアは不老不死があることに驚き

「永遠に年をとらず、ずっと好きな人の傍に居続ける……か。師匠の好きな人つてメンフィル皇帝でしょ？メンフィル皇帝は魔神の血を半分引いているお陰で不老の存在だって前に師匠から聞いたことがあるわ。……夫は皇帝でしかも両方とも若い姿のまま……女とし

ては羨ましい限りね……」

シェラザードは女として最高の幸せを手に入れたペテレーネを羨ましがつた。

「”魔神”ってそんなに凄いんだ……あれ? もしかして3人共あたしより凄く年上??」

エステルは感心しながらあることに気付き3人に聞いた。

「私は18になつたばかりですけど、ほかのお2人は……」

プリネはリフィアとエヴリースを見て言い淀んだ。

「エヴリースは何万年も封印されて眠つていたからよくわからんない……」

「な、何万年!? どれだけ凄いのよ……リフィアは?」

エヴリースの言葉にエステルは思わず叫んだ後、リフィアに聞いた
「む……余か。余もあまり年は気にしていないのじゃが、少なくとも
もシェラザードよりは年上のはずじゃ。」

「え! ? 背はあたしよりも低いのにシェラ姉より年上! ?」

「背のことは申すでない! 余も一応気にしているのじゃ! ……全く
なぜじや? 母やカーリアン婆はあれだけ体つきがいいのになぜ余だけ……ブツブツ……」

「えつと……リフィア? どうしちゃったの? ?」

急に独り言を言いだしたリフィアにエステルはわからなかつた。それを見たプリネは3人に小さな声で話した。

「リフィアお姉様……ああ見えて、家族の中で自分だけ背や胸が小さいことを凄く気にしているんです……だから、今後そのことは言わないで貰えると助かります……」

「あはは……了解。」

「うん、僕も絶対に誰にも言わないよ。」

「私も女として誰もが気にする事、絶対に言わない事を誓うわ。」

3人はプリネの頼みを苦笑し、真面目な表情で了解した。

「ん……? ……プリネ……あれ……」

魔獣に気付いたエヴリースはプリネの服を引っ張り魔獣の集団を指

差した。

「あら、魔獸ですね。リフィアお姉様！戦闘です！」

「ブツブツ……何!? フフフ……ちよつどいい、余の鬱憤を受けて
もらおうか……えーいっ……」

プリネに言われたりフィアは我に帰り素早く魔力でできた光の弾一
一追尾弾を放つた。光の弾に当たった魔獸は一撃でやられセピスを
落とした。

「凄つ……あんな小さな魔力の弾で魔獸が一撃……」

エステルはリフィアの魔力の高さを実感し驚いた。

「エステル、呆けてないで武器を構えて！」

「つと、そうね！」

ヨシュアに言われたエステルは武器を構え、魔獸の集団との戦闘を
開始した。

戦闘は終始エステル達の有利だった。エステル、ヨシュアの息がぴ
つたりな攻撃に加え、パズモの援護、シェラザードの鞭による攻撃
や魔術攻撃、何より新しく仲間になつたリフィア一行が圧倒的な強
さを見せた。

「余の風格を挙め！ 鋼輝の陣、イオールーン！！

リフィアの属性を選ばない純粹魔術はどの魔獸にも大ダメージを与
えるが消滅させ

「んつ。…………はい、どかーん」

エヴリースの弓矢による攻撃は魔獸を正確に射抜き、放つた上級の
風の魔術——『贖罪の雷』は地面をすさまじい勢いで走りそれに直
接当たつた魔獸は哀れにも一瞬で消滅し、

余波を受けた魔獸にもダメージを負わせ

「行きます！ ふつ、はつ、そこつ……出でよ魔槍！ 狂気の槍！
！」

プリネのレイピアによるリウイ直伝の突剣連續技——フェヒテング
で確実に魔獸を斬り伏せた後、魔術を使い離れた敵にも大ダメ

一ジを与える

「プリネには指一本触れさせないんだから！えーい！超ねこパーンチ！」

プリネを守るようにプリネの傍らでペルルは自らの翼を使って魔獣を仕留めていった。そして戦闘はあつと言ひ間に終結した。

「よし、バツチリね！……にしてもメンフィルのみんな、本当に強いわね。”魔神”や”闇夜の眷属”的”のエヴリーヌやペルルはともかく、プリネやリフィアとか皇女様とは思えない強さね……」

エステルは新しく仲間になつた同行者達が明らかに自分達より実力があることを知り、王族であるプリネ達がなぜ、そんなに強いか疑問に思った。

「王族とは民を守るため時には、先頭に立つて戦場に出る必要があるからの。じゃから余達が強いのは当然じや！」

「私もお姉様と同じ理由です。私は家族の中では戦闘が一番経験不足です。ですからそれを補うためにもお父様のほか、カーリアン様やファーミシルス様によく稽古をして頂きました。そのお陰でもありますね。」

「そ、うなんだ……2人ともあたしより凄いわ……」

自分と同じくらいの2人がすでに民のことを考えているのを知つてエステルは感心した。

「カーリアンって人はもしかして、強者揃いのメンフィルの中でも一、二の実力を持つと言われるあの女性剣士かい？同じ実力を持つファーミシルス大将軍にも稽古してもらうなんて、”闇の聖女”さん直々の魔術に加えて戦闘の稽古相手の凄さ……それは強くなるよ……メンフィル皇帝も大陸で最強の突剣使いつて言われているし。ヨシュアはプリネに戦闘指導をした人物の名前を知り、プリネが強い理由に納得した。

「確かにリウイは強いがそんなリウイを剣で追い詰めた相手がいるぞ。」

「はつ！？あのメンフィル皇帝に剣で追い詰めるつてどんな化け物

よー?「

ショラザードはリフィアの言葉に驚愕し、リウイを追い詰めた相手がどんな相手か想像できなかつた。

(もしかして……)

(セリカ～……なんでメンフィルの王様と戦つたの～……?そんなことしたらレスペント地方で賞金首や指名手配にされちゃうよ～?ただでさえセリカには敵が多いんだから……)

リウイを追い詰めた相手に心当たりのある守護精霊や使い魔はそれぞれ複雑な表情をした。

「ふむ、それは機会ある時に教えてやろう。それよりボース市とやらに早く行こうぞ!」

「そうね! 関所も見えてきたし、やつと半分ね! 先を急ぎまじょう!

そしてエスティル達は関所を越え、途中で会つた遊撃士——グラツの言葉に疑問を持ちつつボース市に到着した……

第25話（後書き）

久しぶりの2作同時更新です。まあこんな荒技、めったにできませんが。戦女神キャラはあまり出す気はないと言いましたが話を作っている上でリタ、ナベリウス以外でどうしても戦女神シリーズの主役クラスの2人を出す必要が出て来たんですよね……書けるかな？？？関係ない話ですが穢翼、11共に延期に……！！（泣）仕方ないとはいえショックです……感想お待ちしております。

エイプリルフール記念ネタ（前書き）

エイプリルフールで突如思いつき、2時間で書きあげた記念で書いたボツネタです。なので本編とは一切関係はほとんどありません。ただし、一つだけ『真実』が混じっています……なのでネタばれが嫌な人は今の内にお帰りの扉へ……後、R15も混じっているのでご注意を……

エイプリルフール記念ネタ

「えっと……あなたは誰？」

「わ、私の名は『水那』と、も、申します……！あ、危ないとこりを助けて頂いてありがとうございました！」

「あはは、いいわよ別に。あなたを守るのもあたし達、遊撃士の義務だからね！」

表情がほとんどわからないマーリオンと違い、恥ずかしそうにお礼を言つ、表情が豊かな水精にエステルは笑顔で答えた。

「え……で、でも、わ、私は人間ではないのにどうして……？」
「そんなの関係ないわ！あたしがあなたを守りたいと思つたから行動しただけよ！」

「（この人、なんとなく……さんに似ている。この人なら……！）
あ、あの！私をエステルさんの使い魔にしてもらつてもいいですか！？」

「へ……？なんで急にそんなことを……？」

エステルは水精が突如言い出した願いを聞いてわけがわからなかつた。

「そ、その……恩返しがしたいんですね……！そ、それに！あ、あなたとしばらく、い、いたいんです！」

「そつか……わかったわ……！これからよろしくね、『水那』！」
「は、はい！」

そしてエステルは新たな精霊と契約した……

「リウイ様、捕えた結社の幹部、『幻惑の鈴』とやらをいかがなさいますか？」

ファーミシルスは主が見守っていた女性を自分の知らぬところで妙な術をかけられて、未だ眠りからさめない状態にした結社の幹部をリウイ自身が怒りの鉄槌を下して、重傷を負わせ、牢に入れた者の処分をどうするか未だ怒りが収まっているように見えないリウイに聞いた。

「……オーラ共に犯させて処刑と言いたいところだが、腐つても謎の組織の幹部だ……戦力として使い道はある。魔導鎧の生贊にしあたほうが有益だろう……ショラ、確かに最近発掘された魔導鎧があつたな？」

それをその者に使って構わん。」

「御意……では、速やかに実行いたします。」

そしてショラは出て行き、牢に向かつた後、牢に捕えられた女性に封印されていた魔導鎧の力を解放した。

「いやあああっ！ああっ、なんのこれ！？や、やめてぇっ！！」女性は鎧から出て来た怪しげな触手に体中に絡みとられ悲鳴を上げた。触手は貪欲な魔物のように女性の体を自分が食するに値する肉体が吟味した。

「いやあああっ！ああっ！お願い、私の知っている結社のことなんでも話すからお願ひ！助けて！！」

「話す必要など不要……『幻惑の鈴』、あなたが忠実なるメンフィル最強の戦士として生まれ変わった時、貴殿を我が軍——機工軍団の副団長に迎える。その時にでも、情報を開示してもらいます……」女性の嘆願をショラは冷酷に断ち切った。

「だ……れが……メンフィルに……忠誠を……誓うのですか……！」いやあああっ！！！！！」

女性は最後まで抵抗しようとしたが、魔導鎧が体中に浸食した時の光がなくなりショラと同じく魔導鎧を全身に覆った女性になつた。

「…………浸食完了」シーラ団長、指示をお願いします。」

「…………これより我が主に生まれ変わったあなたを紹介する。私についてくるがいい。」

「了解……」

そして女性はメンフィル機工団の副団長となり、皮肉にも自分の前にいた組織の本部を魔導鎧の装備についている強力な魔導砲を使って建物ごと消滅させたのであった。

その知らせを聞いた他国の重役は複雑な思いをしつつ、組織の壊滅に胸をなでおろした。ある一人の女性の悲しみを知らずに……

「…………スを『…………の生から解放する』」

「えつ…………？」

美しい女性に見間違われるような男が女性にある言葉を呴くと、女性の中にあつた男との結合の魔力が失われた。

「ど、どうして…………」

女性は信頼していた主がなぜ、そんなことをしたのかわからず、また支えにしたもののがなくなり悲痛な表情をした。

「これでお前との約束を果たした。お前を殺す、というな。」

(…………フ……は死んだ。そして生まれ変わった。これからは使徒ではなく、まして……の娘でもない自分の人生を生きるのだ。)

男が女性に理由を言い、男が腰に下げている魔剣が女性に男の意図を伝えた。

「…………自分の、人生…………」

(そうじや。…………が…………に依存していること…………となるこ

とで安息を得ていたことは分かつておった。

じゃが今の……、依存せずとも生きていけよ。己の足で、自らの途を）

「あまり喋るな……」

自分の持つ魔剣に男は女性にペラペラと男の意図を話すことに目を閉じ、注意した。

「わ、私……なんと、申していいのか……いつつ……」

女性はついに涙を流し、それを隠すように両手を自分の顔に覆つた。そして落ち着いた女性を男はリウイとイリーナの元へと連れて行つた。

「しばらく……を預けていいか?」

「……それでいいのか?」

男の頼みをリウイは目を閉じて聞き返した。

「リフィアの後見人が、今後生まれてくるお前とイリーナの子の教育係に据えてやってくれ。ずっと望んでいたイリーナとの絆を取り戻すまでの間だけでいい。」

「承つた……」

「……力殿……ありがとうございます……」

リウイは男の頼みを受け、イリーナは涙を流しながら男に礼を言った。

「……様、わ、私……貴方にお仕えできて……幸せでした……その気持ちちは変わらない……ずっと……いつか……また……帰つていいですか？貴方のいる御屋敷に……？」

「好きにしろ。」

そう言つた男は元の世界に戻る門へ行こうとした時、男は振り返り女性に伝えた。

「俺はあそこにいる。ずっとな……お前が帰つてくるまで……ティを探す旅には出ない……」

そして男は背を再び向けて元の世界へ去つて行つた。

「黒き翼の少女よ……どうやら自分の居場所を見つけたようだな……」

「はい……今まで心配して下さりてありがとうございました……私の居場所はここです！」

少女はリウイに答えた後、今まで誰にも見せたことのなかつた最高の笑顔で自分を受け入れた仲間の内の若きリーダー——青年の右手に抱きついた。

「ちよつ……オ！？」

「……ちゃん！？」

「ヒュー～……やるじゃないか……助。」

少女に抱きつかれた少年は慌て、仲間の中でも年長の男性は口笛を吹き、女性は慌てて

「な、なら私も！」

「ちよつ……イ！？」

さらに女性も青年のもう片方の手に抱きついた。

「おお、お嬢も行つたか！（これは面白くなつてきたぜ……！）両手に花じゃねえか！しかも、お嬢の姉や皇族の義理の兄も認めているから一夫多妻が実現するじゃねえか！マジで羨ましいね……ド！」

「……イ！？ぐ、ぐぐ……絶対にあなたなんか認めませんわ……！」

女性が青年に抱きついたことに女性の親友は青年を睨みつけ、男性は青年を茶化し、非常時でもあるに関わらずしばらくなぞの間その場は賑やかになつた……

エイプリルフール記念ネタ（後書き）

やつちまつた……！でも、後悔はしていません。前書きにもあつた
ようにほとんど没ネタですがあるネタは『真実』です。これの意味
がわかるかたにはわかると思います……感想お待ちしております。

第26話（前書き）

お待たせしました！ 11、穢翼全クリ、神採りも1週目クリアして、小説を書く時間が少しだけできたので少し速いですが更新再開です！！ ただ、コエラ、エミリツタ終わってない上、仕事も忙しくなつてきただので今までのようないかず多分月に一回ペースぐらいしか更新できないと思いますが必ず完結を目指して頑張りますので応援よろしくお願いします！！

「ボース市」

「やつと到着したわね。ここがボース地方の中心地、商業都市ボースよ。」

ショラザードは目的地について一息ついた。

「うわ……いかにも都会つて感じね……」

エスティルはボース市の風景を見てロントでは見られない光景に驚いた。

「リベル五大都市の中では王都に次ぐ大きな街らしいね。確かにロントと比べると建物が石造りで大きい感じだな。」

ヨシュアは周囲の建物等見て、ボース市がロントより栄えていると納得した。

「ねえねえリフィア、プリネ。メンフィルにもこんな街あるの？」

「ふむ……メンフィルの商業都市か。メンフィルの商業都市と言えばそこに決まつておるな、プリネ。」

「はい、リフィアお姉様。」レスペント都市国家領”ですね。」

「”都市国家領”……その言い方だとかなり広いみたいだね？」

ヨシュアはプリネの言葉から、メンフィルの商業都市はかなり広いと推測した。

「うむ！メンフィルの中心地でもあるからな。王都・ミルスを含めて周りの王公領から来る名産物や食料はそこに集まり、そこからさまざまな場所へ運ばれていくからな。」

「広さはそうですね……少なくともリベルぐらいの広さの領ですね。」

「凄いね……」

「領一つでリベル全都市並……メンフィルってどれだけ広いのよ

」

ヨシュアとショラザードはプリネからメンフィルの商業都市の広さ

を知り、メンフィルの土地の広大さに驚き溜息をついた。

「ふわあ～…………メンフィルは本当に凄いわね…………ね、あそこでーんとあるメチャメチャ大きな建物、何かしら？」

エスティルは目の前に建っている一際大きな建物を指差した。

「あれはボースマーケット。色々な店が集まつた屋内市場ね。食料品、衣類、雑貨、書籍…………武器やオーブメントを除いた大抵の買物はあそこで出来るわ。」

「さすが商業都市って言われるだけあるわね～…………あーあ…………買物目的で遊びに来たかつたな…………」

エスティルはさまざま買物が出来ると知り、仕事でボース市に来た事に肩を落とした。

「一つの建物の中で市場を開く…………メンフィルにはないやり方ですね、お姉様。」

「うむ！屋内で市場を開く」とて天候にも買物が目的の民達の足が左右されない画期的な市場じゃー旅が終わつたら早速父に提案してみよう！」

プリネはリベルの商業都市のやり方に感心し、リフィアは祖国をより豊かにするため早速、メンフィルの屋内市場の構造等を考え旅が終われば父親である現皇帝シルヴァンに提案しようと思つた。

「さて、早速ギルドへ行こうか。」

ヨシコアの言葉に全員が領きボース市のギルドへ向かつた。

（遊撃士協会・ボース支部）

「おお、ショラザード。思つたより早く着いたな。ロレントからわざわざ歩いて御苦労じゃつたのう。」

ギルドの受付、ルグラン老人はエスティル達が予想以上に早くついたことに驚いた。

「お久しぶりね、ルグラン爺さん。もしかして、あたし達が来るつ

て、どう連絡があったの？」

「うむ、先ほどアイナからな。それでは、そここの嬢ちゃんと坊主がカシウスの子供達というわけか。」

シェラザードの言葉に答えたルグランはエステルとヨシュアを見た。

「えつと、初めまして。エステル・ブライトです。」

「ヨシュア・ブライトです。よろしくお願ひします。」

「わしはボース支部を預かるルグランというジジイじゃ。お前さん達の親父さんは色々懇意にさせてもらつてある。ルグラン爺さんと呼んでくれ。」

「うん、ルグラン爺さん。」

そしてエステル達はギルドの支部の移動手続きをした。

「これでお主たちはボース市で準遊撃士所属じゃ……さて、そこのお嬢ちゃん達が例のメンフィル大使のご令嬢達か？」

エステル達の手続きが済んだルグランはリフィア達を見てエステルに確認した。

「うん……3人共。」

エステルに促されて3人はルグランに自己紹介をした。

「はい……プリネ・ルーハンスです。色々到らない所があるでしょ
うが精一杯がんばらせていただきます。」

「私、エヴリーヌ……」

「余はリフィア・ルーハンス！――余にかかれればどのような難しい依頼もこなしてみようぞ！」

「うむ、よろしく頼みます……しかし、”闇夜の眷属”の……しか
も皇族の協力を得れる等ありがたいものじや。」

3人の自己紹介に頷いたルグランはリフィア達が遊撃士の仕事を手伝うことにありがたがつた。

「どうして、リフィア達があたし達ブレイサーの仕事を手伝うこと
がありがたいの？」

エステルはルグランが喜んでいる様子がわからず、その理由を聞いた。

「ブレイサーは基本、人手不足じゃからな……それがサポーターとは言え3人も入ってくれたら本当に大助かりじゃ。しかも、”闇夜の眷属”は身体能力がわしたち、人間より優れておるし魔術も使えるから実質正遊撃士クラスの強さな上、メンフィルの皇族達は種族の中でも最強と言われておるしの。喜びたくなるぞ。”闇夜の眷属”的遊撃士はいまだにおらんようじゃからな……これを期に誰かなつてくれんもんかのう?」

「ふむ……それは各自の考えじゃから仕方ないと言えば仕方ないな。

「ええ……さすがに私達がみなさんに遊撃士になるよう頼むわけにもいきませんものね……多分、お父様や私達が頼めばなつてくれるかもしぬせんが、それは私達

皇族が絶対にやつてはいけないことです。」

「うむ、個人の考え方我ら皇族が捻じ曲げる訳にもいかないしな。それは権力を悪用する薄汚い権力者共といっしょの行動になる。」ルグランの呴きにリフィアとプリネは難しい顔をして答えた。

「2人ともその年でもう、そんなこと考えているんだ。さすがね」
「それでルグラン爺さん、例のリンデ号の事件はどうなつたか
さつそく教えてくれない?」

エステルはプリネとリフィアを感心した後、ロレンントで知った飛行艇が行方不明になつた事件の事について聞いた。

「ウム、それなんじやが……王国軍による搜索活動はいまだに続けられているらしい。じゃが、軍の情報規制のせいで状況が全く伝わつて来ないのじゃ。

一般市民だけではなくギルドにも何の音沙汰なしでなあ……」
ルグランは溜息をついて情報が全く入つて来ないことを嘆いた。

「ええ～！？なんで！？軍とギルドって協力関係じゃないの？」

それを聞いたエステルは驚いた後、疑問に思つたことを聞いた。

「ま、それはあくまで建前つてやつよ。実際には、様々な局面で両

者が争うことがあるわ。」

「つまり、縄張り争いですね。」

ショラザードの言葉を補足するようにヨシュアはエステルにもわかりやすいよう説明した。

「そんな……ねえ、2人とも、メンフィルもそうなの？」

エステルはそれを聞いて悲痛な表情をした後、ブリネやリフィアに聞いた。

「メンフィル軍は基本的にこちらの世界で起こった事件等はギルドと連携しています。土地勘等は私達、異世界人ではわかりませんから。同盟国であり大使館があるリベルのロレント市は別にして、こちらのメンフィル領は”百日戦役”の際、占領した領ばかりですから民はあまり好意的ではないんです。その点、ブレイサーは普段から民の声を聞いていますから私達ではわからない民の情報もわかるんです。」

「うむ、これはリウイの意向もある。その土地で起こった事件はその土地の者達に解決させる……彼らの生活に土足で踏み込んでしまった異世界出身の余達は彼らの影となつて支えるのが筋というものがじゃ。」

「そなんだ……」

2人からメンフィルとギルドは諍いもないことを知つたエステルはホッとした。

ちなみにブリネ達は知らないことだが、メンフィルがエレボニア帝国領を制圧した当初はメンフィルは恐れられていたが、リウイの卓越した政治手腕により税はメンフィル領となる以前より低くなり、公共で利用できる医療機関の設立や軍による周期的な魔獣の討伐等、

領内に住む人々にとつて大きな助けとなり、だんだんと信用され始め、「メンフィル領になつてよかつた。」と言い始める人々も出て来てメンフィルは着実に領内の民からも慕われて来ているのだ。

「さすが大国の王の考えることは違うの……モルガン将軍も見習つてほしいものじや……」

メンフィルの寛容さにルグランは感心した後溜息をついた。

「げ、もしかして今回の件、モルガン将軍が関わっているの？」

シェラザードはある人物の名前がルグランから出たのに顔をしかめ確かめた。

「残念ながらその通りじや。」

「あつちや～……それは面倒なことになつたわね……」

シェラザードは嫌そうな表情になつた。それを見て、疑問に思ったエスティルはシェラザードに聞いた。

「なに、そのモルガン将軍つて？」

「10年前、エレボニアの侵略を撃退した功労者として有名な人さ。歴史の教科書にも出てたよ？」

エスティルに説明したヨシュアだったが肝心の本人はほとんどわからぬ様子だった。

「う～ん、見事なぐらい記憶に残つてないわね～あたしが覚えている歴史の教科書に出ていた人は聖女様だけだもん。それで、その将軍がどうしたの？」

「聞いた話だと、その将軍……大のブレイサー嫌いらしいのよ。遊撃士協会なんか必要ないつて日頃から主張してるらしいわ。」

「む、無茶苦茶なオッサンね～……じゃあ何、その将軍のせいで情報が入つてこないわけ？」

シェラザードからモルガンのことについて聞いたエスティルは怒りの表情になつた。

「……それどころではない。軍が調査している地域にはブレイサー

を立入禁止にしよる。おかげで、他の仕事にも支障を來しておるの
じゃよ。」

「まあ……それはいくらなんでもやりすぎではありますん……？」「全くじゃー権力の使い方を間違えておる！民の命や生活がかかつておるのじゃぞ！？私情に流されるなど……あの老将軍、それでも國を守る軍の長か！？」

「……エヴリーヌ達の邪魔するやつなら殺しちゃう……？」ルグランからモルガンがブレイサーの仕事を邪魔している事を聞いたプリネは遠回しにモルガンを非難し、リフィアは怒り心頭になり、エヴリーヌは物騒な言葉を言つた。

「エヴリーヌつたら何、物騒なことを言つてるんだよ…………あれ、リフィアつてもしかして將軍を知つていいの？」

ヨシュアはエヴリーヌの発言に冷や汗をかいだ後、リフィアがモルガンを知つているように見え聞いた。

「うむ、リベルとの同盟を組む会談や”百日戦役”の講和条約を結ぶ際の会談に会つたことはあるぞ。最も余はあまり興味がなかつたから挨拶程度にしか話しておらん。」

「そなんだ……ねえ、將軍と顔見知りのリフィアが頼めば話してくれるんじゃないの？それにメンフィルの皇女様でもあるし、さすがに將軍も同盟国の皇女様の頼みは無視できないんじゃないの？」エステルは名案が思いついたように顔なり、その案をリフィアに聞いた。

「ふむ……民のためならそれぐらい別にいいが…………しかし……」

エステルの案を聞いたリフィアは難しい表情になり考え込んだ。

「エステル……それはさすがにちよつとまづいと思うよ。」

ヨシュアはエステルの案はまづいと思い、それをエステルに言った。

「へ……なんで？」

「他国の……しかも皇族である私達が国の大事となる事件に口を挟んでしまつたら内政干渉になってしまいますから、できるだけその案はやめたほうがいいです。」

「内政干渉って何?」

ブリネの説明した意味がわからなかつたエステルはショラザードに聞いた。

「内政干渉とは他国の政治に介入すること……わかりやすく言えば要らぬ御節介を国のレベルで行う事よ。過去それが原因で戦争になつた国や州もあるわ。」

「せ、戦争……」

予想外の言葉が出て来てエステルは何も言えなくなつた。

「まあ、さすがにリベールとメンフィルが戦争になんてならないと思うわ。力の差は歴然だし、それに民の平和を願うアリシア女王が戦争なんてこと許さないし、そんな女王が向こうから持ちかけて来た同盟をわざわざ破棄するとは思わないもの。ちょっと大げさに言つただけだから安心しなさい。」

ショラザードはエステルに安心させるために大げさであつたことを言つた。

「ショラザードの言う通りじゃ。まあ、そう焦るでない。実は今回の事件に関してボースの市長から依頼が来てある。軍とは別に、ギルド方面でも事件を調査して欲しいとの話じや。」

「あら、それは心強いわね。ボース市長の正式な依頼があればこちらが動く大義名分になるわ。」

ルグランから依頼人に関して聞いた時、ショラザードは光明が見えた表情になつた。

「なるほど、渡りに船つてやつね。ルグラン爺さん、あたしたち、その依頼受けたわ。」

「うむ、いいじゃらう。詳しい話は市長に会つて聞いてくれ。」

「わかつたわ！」

そしてエスティル達はボースの市長に会つために市長邸に向かつた：

……

第26話（後書き）

神採り、2週目突入していますが相変わらずエウシェリーの作品はやりこみ度があつて面白くて最高です！！特に今回は中盤以降ストーリー やバトルフィールド等ヒロイン専用ルートになるのがまたいいですね！アpendデータで幻燐勢が出てくるのもよかったですし、何気に戦女神へ続く話も微妙にあつたのは驚きです！！それに神採りやつたお陰で悩んでいたエステルのある属性の召喚キャラを思いついた上、オリジナル武器を出すことも思いつきました！なので神採りのキャラも出したり、ウィルが作った武器とかも出す予定なので楽しみにしていて下さい！！ちなみに現在のエステルの最終的な召喚キャラの数は5体、プリネは3～4体です！とりあえず次話は9割できてるので明日には更新できると思います。……感想お待ちしております。

第27話（前書き）

最近、あるゲームの続きの新作が出ると知つて一瞬そのキャラをヒステルやプリネの仲間として加えようかなと思つちゃいました。
…クロスオーバーしているネタとは関係ないキャラを出すのはやめたほうがいいですかね？ちなみにそのキャラのキーワードはドラゴン幼女・声優が○○ゆいと言えばわかる人がいると思います。

市長に会うために市長邸に向かつたエステル達だが、生憎市長は留守にしていて時間の効率などを考えてエステル達は自分たちで探して会いに行く事にし、市長がいつもつれているメイドー・リラを探し見つけたのだが肝心の市長はボースマーケットに視察に行つたのでリラをつれてマーケットの方に向かつた。

「ボース市・ボースマーケット」

「はー、ずいぶん広いよね。市長さんはどこにいるのかな?」「何しろ目立つ方ですから、すぐに見つかると思います……」

周りを珍しそうに見ているエステルが呟いた言葉にリラは答え、あ

る一角の喧騒を見て溜息をついた。

「……ああ、やっぱり思つたとおり。恥ずかしながらあそこの女性が市長です……」

リラは溜息をついた後、商人の男性2人に説教をしている身なりがいい女性が市長だとエステル達に言つた。

「貴方たち、恥を知りなさい。この大変な時に食料を買い占めて、値をつり上げようとするとは……。ボース商人の風上にも置けなくてよ。」

「し、しかしあ嬢さん……」

「僕たちはボスマーケットの売り上げアップを考えてですね……」

2人の商人は及び腰で言い返したが、その言葉は市長にとつて火に油を注ぐ言葉で市長はさらに商人達に怒鳴つた。

「お黙りなさい！他の品ならいざ知らず、必需品で暴利を貪つたとあつては、わがマーケットの悪評にも繋がります。それにもしこのことがメンフィル大使にでも伝わつたら、ボースは利益だけを求める

ている薄汚い商人の集まりと思われて、生前のお父様の粘り強い交渉でようやく実現することができた異世界の国、メンフィル帝国との取引がなくなってしまうかもしませんのよ！？それを防ぐため、またお客様の生活のためにも即刻、元の値段に戻しなさい！

「は、はい……」

「わかりました……」

市長の一喝を受けた2人は肩を落として頷いた。市長はそれを見た後、市長に怒られて表情を暗くしている商人達を自分の意図を話した。

「…………わたくし、貴方たちのボースマーケットにかける情熱を疑っているわけではありませんわ。ただ、判つて欲しいのです。商売というものが、突き詰めれば、人と人の信頼関係で成立している事を。大丈夫、貴方たちだつたら立派なボース商人になれますから。」

「お、お嬢さん……」

「はい、頑張ります！」

市長から励まされた2人は元気が戻り、自分の持ち場に戻った。

（ほう…………あのが噂のボースの女傑か…………なかなかの為政者じゃな。）

（ええ…………政治家と商人、両方の考えを両立させれる方はそつそついませんものね…………もしかしたら将来、かつて娼館の経営と同時に都市國家長を務めた”幻燐戦争”の英雄の一人、”母神賢者”レニア様のような為政者になるかもしれませんね。）

喧騒の一部始終を見ていたリフィアとプリネはエスティル達には聞こえない小さな声で市長を評価していた。

「ふう……」

市長は2人を見送った後一息をついた。

「お嬢様……」

「リラ…………來ていたの。恥ずかしい所を見せてしまつたわね。」

リラに気付いた市長は照れながら答えた。

「いえ……相変わらず見事なお手並みです。それよりお嬢様。こちらの方々が用がおありだそうです。すぐにお屋敷にお戻りくださいませ。」

「あら、その紋章は……。ひょっとして依頼したブレイサーの方々かしら?」

エステルがつけていたバッジに気付いた市長はエステルに確認した。

「うん、そうだけど……」

「ひょっとして貴女が……」

「ふふ、申し遅れました。わたくしの名は、メイベル。このマーケットのオーナーにしてボース地方の市長を務めています。」

エステルとヨシュアの疑問に答えたボース市長——メイベルはエステル達に依頼内容を話すため、ボース市の高級レストラン、アンテローゼに案内した。

（レストラン・アンテローゼ）

「た、高そうなお店……」こんな感じで打ち合わせするの?」

エステルは周りの風景を見て、肩身を狭そうにしていた。

「よく商談に使います。味の方も、なかなかのものですわ。ちなみに父がリウイ陛下とメンフィル帝国との取引の話でもここを使いましたわ。」

（ふむ……確かに悪くない雰囲気だな。そう言えばリウイもボースから帰つて来た時言つておつたな。『小さな都市ながらも中々いい店がある』と。ロントの隣でもあるし旅が終わつた後レンを連れて行つてやるつ。）

（ふふ、それはいい考えですね。あの子もきっと喜びますね。）

（ん……お菓子、美味しそう……リフィア、頼んでいい……？）

（まあ、待て。この後、事件の事を聞くためにおそらくハーケン門へエステル達が行くだろ?から、その時に一端別行動にするからそれまで我慢じや。）

（わかつた……我慢した後のお菓子も美味しいからエヴリーヌ、今は我慢するね……）

アンテローゼの高級感溢れる雰囲気に戸惑っているエスティル達とは違つて、王城の生活で高級な雰囲気に慣れて堂々としているリフィア達は小声で会話をしていた。

「しかし、ボースの市長が女性なのは聞いていたけど……。」
「若いとは思わなかつたわね。」

「見たところ、あたしと4、5歳くらいしか違わなさそう。」
シェラザードとエスティルはメイベルの容姿から年齢等を予想し、若いながらも市長を務めるメイベルに感心した。

「実際、まだ若輩者に過ぎません。亡くなつた父が前市長で、ボースマーケットの事業権と共に政治基盤を引き継いだだけですね。」

「何というか……ずいぶん率直な自己評価ですね。」

自分のことあまり高くない評価をしているメイベルにヨシュアはそのことを指摘した。

「所詮は商人の娘ですし、気取つても仕方ありませんから。それは改めて、依頼内容を確認してもよろしいでしょうか？」

「うん、オッケーよ。」

メイベルの依頼を聞くためにエスティルは真面目に答え、小声で話していたりフィア達も話をやめてメイベルの依頼を聞く姿勢になつた。

「お願いしたいのは言つまでもなく、定期船消失事件の調査と解決です。わたくし、今回のような事件では軍よりもブレイサーの皆さんが結果を出してくれると思うのです。戦争をするわけではなく、謎を解き、解決するわけですから。」

「あら、光榮ね。買いかぶつてくれるじゃない？」
シェラザードがメイベル市長を見て目を少しきめた。

「商人としての目利きですわ。実際問題、消えた定期船にはボースの有力商人が乗っています。それにこのまま、王国軍によるボース

上空の飛行制限が続いたら、こちらの商売が成り立ちません。せつ
かくメンフィルとの取引も本格的になつて来て、女王生誕祭を前に
景気もかなり好調でしたのに……

「なるほど。経済的な要請といつ事ですね。」

「ええ、とても軍だけに任せたおくわけにはいきません。どうか、
お願ひできないでしようか?」

ヨシュアの言葉に頷いたメイベルはエステル達に依頼を受けてくれ
るか確かめた。

「こちらにも理由があるし、引き受けたい所ではあるけど……。今
回の事件に関しては軍が、あたしたちブレイサーを締め出さうどし
てるみたいなのよね。そのあたり、市長さんの立場から何とか働き
かけられないものかしら?」

「モルガン将軍ですわね……。の方、昔からブレイサーがお嫌い
でいらっしゃるから。」

ショラザードの言葉にメイベルは溜息をついた。

「あれ、市長さん。その将軍のことを知つてゐるの?」

エステルはメイベルがモルガンのことを知つてゐる風に話して
いたのでそのことを尋ねた。

「亡くなつた父の友人ですの。一応、顔見知りではありますわ。で
すから……何とかできるかもしません。……リリカ。」

「はい、お嬢様。」

「…………」

「…………」

「…………」

「…………」

「…………」

「…………」

「…………」

リラにペンと便箋を渡してもらい、その場で書状を書き、それをエ
ステルに渡した。

「なに、この手紙?」

エステルは渡された手紙がなんのかわからなかつたのでメイベル

に尋ねた。

「モルガン將軍への依頼状です。ボース地方の責任者として今回の事件についての情報を請求する函をしたためました。ある程度なら、軍が掴んだ情報を教えてくださると思いますわ。」

「なるほど……。でも、ブレイサー嫌いの將軍があたしたちに会つてくれるかな?」

「もちろん、皆さんの身分は伏せた方が無難だと思いますわ。ただ、市長からの使いだと名乗るだけでいいかと存じます。」

「う、ちょっとイヤかも。なんか騙しているみたいで……」

メイベルの提案にエステルはモルガンを騙すようなことにしてしまった。顔を顰めた。

「騙してるわけじゃないよ。本当のことを言わないだけさ。一刻を争う状況なんだから、ここには割り切るべきだと思つ。」

「うーん、確かにそうね。ところで、モルガン將軍つてどこに行けば会えるのかな?」

ヨシコアに諭されたエステルはモルガンがどこにいるのかメイベルに尋ねた。

「ボースの北、メンフィル・エレボニア帝国領方面の国境に『ハーケン門』という砦があります。そこに將軍はいらっしゃいますわ。」

「わかったわ。ありがとうございます、市長さん!」

「はい、くれぐれもお願ひします。……そう言えればそちらの御三方はどうぢらさままでしょ? 見た所遊撃士の紋章をつけていないようですが、それによく見るとそちらの方達が身につけている服の生地はメンフィルが取引で出している服の生地に似ていますね……? 耳も私達とは弱冠違つようですし、もしかして”闇夜の眷属”の方達でしょうか?」

メイベルはリフィア達が着ている服や容姿を見て、リフィア達の正体を尋ねた。

「え、えつとそれは……」

一方リフィア達のことをどう説明しようかエステルは困っていたが、ヨシュアがそれをフォローした。

「ええ、確かに彼女達は”闇夜の眷属”です。何か問題があるでしょうか？」

「いえ。”闇夜の眷属”はメンフィル大使——リウイ皇帝陛下に忠誠を誓つてゐるそうなので、メンフィル軍に協力的なのは知っていますが遊撃士に協力的なのは聞いたことがないので、なぜ遊撃士であるエステルさん達と共にいるのかわからなかつたので。」探るように自分達を見て呴くメイベルにリフィアは堂々と答えた。

「フム、それは民の生活を知り余達の見識を広めるために余達はエステル達——遊撃士と行動を共にしているのじや。」

「……その物言いですと、もしかしてメンフィル帝国の貴族の方でいらっしゃるのですか？見た所服の生地もメンフィルの数ある生地の中でもかなり高価な生地を使つてているように見えますし。」メイベルはリフィアの言動やリフィアとプリネの服装からリフィア達は身分が高い者達であると予想し聞いた。

「まあ、その通りじや。……余の名はリフィア・ルーハンス。そしてこ奴はエヴリーヌ。我がルーハンス家の食客じや。」

「……よろしくね……」

「同じくルーハンス家の娘、プリネと申します。リフィアお姉様とは腹違いになりますが血の繋がった姉妹になります。」

「そうでしたか、これは失礼しました。……先ほどにもご紹介をしましたと思ひますがボース市長のメイベルと申します。（リフィアにプリネ……どこかで聞いたことのある名前ね……）……差し支えがなければルーハンス家とはどのような家系か教えていただいてもよろしいでしょうか？」

メイベルはリフィア達の名前が頭の片隅に引っ掛かり、それを解くためにもリフィアに尋ねた。

「ルーハンス家とは代々皇家——マーシルン家に仕える古参の貴族じゃ。騎士、文官、メイド等さまざまな形で活躍しておる。余やブリネは政治を司る文官を田指して居ての。

窮屈な家では学べない民の生活や他国の商売等を学ぶために民と密接な仕事をする遊撃士——エステル達の仕事を手伝つておるのじや。余やブリネも護身はできるが念のためを持つてエヴリースを護衛としている。もちろんこのことは陛下にも許可を頂いておる。

「あら、そうするとルーハンス家とは名門貴族ですか？よく、『両親方が他国での行動を許可しましたね。』

メイベルはリフィアが説明した偽の情報とは知らず驚き尋ねた。

「ルーハンス家の名を知らない他国だからこそ行動するのが安全なのだ。こう見えてもルーハンスの名はメンフィルでは有名じやからな。それにリベルはゼムリア大陸では最も平和な国であると聞く。まあ、旅を始めた矢先このような事件が起つることは余達も少々驚いたがな。」

リフィアはメイベルを納得させるために弱冠真実を混ぜた事も説明した。

「……メンフィルにそのよつて評価されながらこのよつな事件が起こり、未だ解決できないことにはお恥ずかしい限りです。……世間話はここまでにして率直に聞きます。メンフィル帝国は今回の事件に関してどうお考えでしょうか？もしかして、『軍や』『闇夜の眷属』での調査の話も出ているのでしょうか？それでしたら私達も多少は安心できるのですが。」

「……中々大胆なことを言つ市長ね。自國の軍が他國の軍に劣つているようなことを言つてしまつていいのかしら？」

ショラザードはメイベルの言動に驚きを隠せず尋ねた。

「……確かに私の言動はある意味、自國の軍を信用していない言い方になるかもせんが、実際に人の命がかかっているのかも

しれないのです。今は自国のプライド等の問題ではないと考えています。それにメンフィルはリベルの同盟国でしょう？同盟国がリベルの一大事となる事件に協力してもどこもおかしいところはないと私は思っています。…………最もこのことを将軍が聞けば怒り心頭になるでしょうね。」

「ふむ…………民のために下らない誇りは捨て使える物は使おうとする考えは為政者としてよい考え方とは思つぞ。」

メイベルの考えを聞いてリフィアはメイベルの評価をさらに上げた。

「ありがとうございます…………それで実際どうなのでしょうか？」

「…………大使館を発つ時、リウイ陛下にそのことを聞いたが今の所は特に動くつもりはないそうじゃ。メンフィル領に住む民達が被害に遭つたりメンフィルの経済に影響が出ているわけでもないからな。ただ、リベルが要請をするのなら軍を動かす事や”闇夜の眷属”に協力を要請することも考えていいそうだ。」

「そうですか。貴重な情報をありがとうございます。」

リフィアが答えたことのある程度予想していたメイベルは当然のことと思つて、気持ちを切り替えた。

そしてエステル達はメイベル達と別れ、またリフィア達がモルガンと会うわけにもいかないので一端別行動にし、エステル、ヨシュア、ショラザードの3人でハーケン門に向かつた……

第27話（後書き）

碧の軌跡、前作と比べて超面白そりで楽しみですー何より銀が正式メンバー入りすることやアリオスが仲間になるらしいとの情報を知つて驚きました！特に大幅に変更した銀の姿を見て何があった！？と思いましたがまた、爆雷符の連射や麒麟功ができるのは嬉しいですね！あのクラフト、少量の消費CPの割には超凶悪な効果でしたから……にしてもアリアンロードって一瞬味方に見えましたがまさかの七柱だったとは……前作の七柱、ワイスマンと比べたらめちゃくちゃいいキャラに見える上に強そうで今から戦うのが楽しみです！ただ、ワイスマンと比べたらかなり苦戦しそうな予感が……まあ、そのためのアリオスや銀がいると思うと負担は楽ですし、いざとなつたらティオに闘魂ベルトつけてCP回復アイテムドーピングしてゼロ・フィールド戦法ありますしね。アリオスの強さは多分リシャールかそれ以上のチート的な強さでしょうね……未だ情報がないランディはラストダンジョンで合流すると信じています！そしてできればエステル、ヨシュア、レンも……！！前書きに書いてある件はみなさんの要望が多ければパーティインも考えてみます。……感想お待ちしております。

第28話（前書き）

いくつかストックして書いていたので後ろ話ぐらいは連日更新できると思います。まあ、それ以降はいつになるかわかりませんが……

エステル達と一緒に行動したリフィア達はエヴリーヌの希望通りアンテローゼで食事をした後、何かやることがないか聞くためにギルドに戻った。

（遊撃士協会・ボース支部）

「おや、メンフィルの嬢ちゃん達じゃないか。エステル達と市長に会いにいったんじゃないのか？」

受付で事務作業をしていたルグランは戻って来たリフィア達に気付き、なぜ戻って来たのかわからず聞いた。

「はい。そのことなんですが……あの後市長殿に会って事情を聞いた後、エステルさん達はモルガン將軍に一度面会することになりましたので、私達の正体を知っている將軍と会う訳には行きませんのでエステルさん達とは一端別行動にしました。それでエステルさん達を待っている間になにかやることはないか聞きましたんです。」

ルグランの疑問にプリネが順番に事情を話して説明した。

「確かにそうじゃな……おお、そうじゃ。実はお嬢ちゃん達に伝えることがあっての。」

「？ なんでしようか？」

「実は……」

疑問符を浮かべているプリネ達にルグランは先ほどロレント支部から掛ってきたプリネ達の依頼に弱冠の変更があることを伝えた。

「…………ということじゃ。悪いと思うが、変更を受け入れてもいいのかのう？」

実はエステル達を見送った後、アイナはあることに気が付きそのこと

について依頼人であるリウイと相談し依頼内容の変更をしてもらつたのだ。それは基本的にはエステル達と行動するがエステル達が受けた全ての仕事は手伝わず、ほかの遊撃士達の仕事もプリネ達が手伝うことだった。

「確かに私達がエステル達の仕事を全て手伝つてしまえば、エステルさん達の実力が上がらない可能性が出できますね……私はいですけど、お姉様方はいかがでしょう？」

依頼内容変更の理由を聞いたプリネは少しの間、考えて納得し2人に聞いた。

「エヴリーヌはどうちでもいいよ~」

「余も構わん！エステル達の成長を余達が妨げるわけにもいかんからの！それに基本的にはエステル達と行動を共にするのじゃからそれほど気にすることでもないしな！」

「おお、ありがたい。すまんの、こちらの都合で依頼内容を変えてしまつて。」

依頼内容の変更をあつさり受け入れたりファイア達を見てルグランは安心し、お礼を言った。

「気にしないで下さい。元々私達の無茶な依頼を受けてもらつたのですから、これぐらいは当たり前です。……とりあえずエステルさん達が帰つて来るまで何をすればいいでしょう？」

「ふむ……何をしてもらおうかの……？」

プリネの言葉にルグランはエステル達が戻つてくるまでの間、何をしてもうか考えていた所、ギルドの扉が開かれボース所属の2人の遊撃士達が帰つて来た。

「たつだいま～！ルグラン爺さん！」

「こつちも終わつたぜ。」

「…………こつちもだ。」

ギルドに依頼完了の報告をしに来たのは明るい性格に見える女性遊

撃士 アネラスとエステルやリフィア達がボースへ行く途中で出会った遊撃士 グラツツとリベールの遊撃士の中でも数少ないC級である正遊撃士、アガットであった。

「おお、アネラスにグラツツか。それにアガットも。ちょうどいいところに戻ってきたようじゃな。戻って早々で悪いが少し頼みごとをしていいじゃろうか？」

「別にいいが……もしかして、そこにいる3人をどこかへ護衛するのか？」

ルグランの頼みに頷いたグラツツはリフィア達に気付いて、聞いた。「いや、この3人の戦闘技能を3人がそれぞれ確かめてほしいのじや。ちょうど3人いることじやしな。」

「え？」

アネラスはルグランの言った言葉の意味がわからず、思わず呆けた。「は？ なんだそりや？ 爺さん、なんのために一般人の戦闘技能を調べる必要があるんだ？」

グラツツも意味がわからなかつたため、ルグランに理由を聞いた。「はあ？ おい、爺。ついにボケたか。」

アガットも一瞬呆けた後、ルグランの言ったことが本當か確認した。「まだ、そんな年じゃないわい……実はこの嬢ちゃん達はメンフィルのとある貴族のご令嬢でな。なんでも将来就く仕事のために民間人の生活を知る必要があつての。そのために民間人に接することが多い仕事 遊撃士のサポートをして学びたいそういうのじや。」ルグランはリフィア達の正体を隠して話をした。

「へ……じゃあ、あなた達って異世界の人なんだ！ 私はアネラス！ こう見えて正遊撃士だよ。えーと……貴族のあなた達はなんて呼べばいいのかな？」

アネラスはリフィア達が異世界人 メンフィル人であることを知

ると興味深そうに一人づつ順番にリフィア達を見た。

「はい。プリネ・ルーハンスと申します。気軽にプリネと呼んでもらって構いません。どうぞよろしくお願ひします。」

「私……エヴリーヌ……」

「余はリフィア・ルーハンスじゃ！余やエヴリーヌもプリネのよう

に気軽に接してもらつて構わん。今は貴族の娘ではなく、遊撃士の

サポートーの一人だからな。まあ、余達は無礼云々で目くじらを立

てるような心が狭い貴族共とは違うから、安心してよいぞ。」

「そつか。じゃあ、私も普段通りの態度でいかせてもらひうね！それ

にしても、みんな可愛いね！抱きしめていいかな！？」

3人の気さくな態度にアネラスは笑顔で打解けた。

「はあ～…………そこの嬢ちゃん達があの異世界の国の貴族なのか。
てつくり、エレボニアのようにプライドが高くて気難しい奴らかと思つたが、あんなに気さくな態度をとつてくるとは意外だな。けど、
爺さん。いいのか？もし、怪我とかしたらちよつと厄介なことにならねえか？」

グラツィはアネラスと談笑をし始めたリフィア達を以外そうな目で
見た後、あることに気付きルグランに聞いた。

「ああ、そこは心配しなくてもよい。両親からも彼女達が怪我等し
ても責任を負わせるつもりはないと言質をとつてあるから安心して
くれい。」

ルグランはグラツィの心配を苦笑しながら否定した。

「…………おい、爺。あの小娘共が俺達のサポートーをやるつてい
うのはマジで依頼なのか？見た所ガキも混じつているぞ。」

好意的な目で見ているアネラスやグラツィと違つて、アネラスと談
笑しているリフィア達を一人一人睨んでいたアガットはルグランに
聞いた。

「お主はもう少しその口の悪さはなんとかならんのか……嬢ちゃん

達は気にしないと思つが、下手したら大事になつてもおかしくないぞ……」

ルグランはアガツトの口の悪さに溜息をついて注意した。

「んなことは今は関係ねえ。それで、どうなんだ？」

「もちろん依頼じや。すでに依頼料も渡されているし協会本部も、このことを依頼と認めておる。それにこの依頼はすでにお前達とはほかの遊撃士が受けている。」

「ん？ ほかの遊撃士が受けているのにいいのか？」

グラツツはルグランの言葉に引っ掛かり聞いた。

「うむ……この依頼は少々特殊での。彼女達は基本、すでに依頼を受けている準遊撃士と共に行動することになつてゐるのじやが、彼女達の実力は明らかに依頼を受けた準遊撃士の実力を上回つてゐる。ずっと彼女達を準遊撃士のサポーターにつけていたら準遊撃士の実力が上がらなくなる恐れも出てくるから、依頼者にも許可を取りつてほかの遊撃士達の仕事も手伝つてもらつことにしたのじや。報酬はこの依頼を直接受けた準遊撃士が依頼終了をした時にお主たちにも別依頼扱いの報酬として支払われるから安心していいぞ。」「さすがに貴族だけあつて、羽振りがいいな……ん？ 今、依頼を受けた遊撃士より明らかに実力が上回つてていると言つていたよな？……あいつら、見かけによらず強いのか？」

グラツツはリフィア達の実力に興味が沸き聞いた。

「だから、それを今からお主たちに確かめてもう一つのじやよ。わしも彼女達の実力はまだよく知らんが彼女達は”闇夜の眷属”であると言えば実力はある程度わかるじやろ？」

「…なるほど……それは興味深いな……！」

噂でしか聞いたことのない闇夜の眷属の実力が見れることにグラツツは不敵な笑顔を浮かべた。

「爺、さつき準遊撃士が受けていると言つていたが、なんでひよっこがこんなややこしい依頼を受けるんだ？ 明らかにひよっこ共が

受けれるレベルじゃねえだろ。こんなややこしい依頼、ランクは相当高いんじゃねえのか？」

「そのことか……本部で見積もりした最低依頼ランクはこじや。「はあ！？」どう考へてもひよつこ共が受けれるレベルじゃねえだろ！？協会は何考へているんだ！？」

アガツトはルグランの言葉を聞いて机を叩いて怒鳴った。

「ちゃんと説明してやるからそつ、かつかするでない。…………実はこの依頼は依頼者　彼女達の両親から依頼を受ける遊撃士が指名されていたのじや。そして指名された遊撃士が準遊撃士であつた。それだけじや。」

「…………おい、爺。いつから依頼者の選り好みで受ける遊撃士を決めれるようになつたんだ？普通はそんなふざけたこと、許されねえんじやねえのか？」

ルグランから理由を聞いたアガツトは手を組めてルグランを睨んで聞いた。

「お主のこゝ通り、確かに通常なら許されないが依頼者がメンフィルの皇帝とも縁ある大貴族での。ほかの国と違つて事件があつた際素早く連携してくれるメンフィルとは協会としても細かいことあまり向こうと争いたくないのじや。協会本部で将来的にメンフィルの本国に支部を作る話も出ていての。これを機に異世界にも遊撃士協会を置く事をメンフィルに考えてもらうためにも、依頼者のある程度の要望を受けたのじや。」

「チッ……！そう言つとかよ……！中立の立場を謳つてゐる遊撃士協会が聞いて呆れるぜ……！」

協会本部の意向を知つたアガツトは舌打ちをした。

「お主はどうしてそう斜に構えるのじや。この依頼はある意味メンフィルの好意に近い依頼なのじやよ？もづ少し、素直に好意を受けなければいいじやないか。」

「余計なお世話だよ。……まあいい、爺の言つ通り実力を見てからこの素人共が俺達、ブレイサーのサポートをできるか判断してやるよ。で？俺は誰の実力を見ればいいんだ？」

気を取り直したアガットはルグランにリフィア達3人の誰と組むかを聞いた。

「ふむ……お主としては希望はないか？」

「希望か……おい、ガキ共。てめえらの中で一番弱いのは誰だ？俺がテメエらの中で一番マシな強さになるよう叩き直してやるから正直に答えな。」

質問を返されたアガットはアネラスと談笑していたリフィア達に近づき聞いた。

「が、ガキじやとー？余を子供扱いするでない！どいつもこいつも見てくれで判断しあつてからに！ぬぬぬぬっ……！実力があるのなら少しは目を凝らさぬか！」

アガットの言葉にリフィアは怒り、わずかでありながら全身に霸気を覆った。

「はっ！ガキがナマいって…………！？」

リフィアの言葉をアガットは鼻で笑おうとしたがリフィアの霸気と小さな身体に収められているであろう何かの”気配”に気付き息を飲んだ。また、横で話を聞いていたグラッソやアネラスもアガットの様子をおかしく思い、リフィアをよく見て息を飲んだ。

（な……ーー）の俺が気圧されるだと……！？何者だ、このガキ……！…）

アガットは自分が気圧されたことに驚き、驚愕の表情でリフィアを見た。

（わあ）……ほかの2人もわずかだけど、”強者”的の氣配がもれています。やっぱり可愛いのは正義だねー（うんーうんー）

アネラスはプリネやエヴリースが無意識に出している何かの”気配”にも気付き、リフィア達の容姿を見て見当違ひな答へで納得した。

（なるほどな……噂は本当だつたようだな……俺はぜひ、あの嬢ちゃんの実力を見たいもんだね……！）

グラツィはリフィアがただ者ではないと気付き、不敵に笑いリフィアの実力を自らの目で見たくなつた。

「どうやら余の偉大さがわかつたようじゃな？これにこりたら余を二度と子供扱いするでない！よいな？」

驚愕しているアガットの様子に満足したリフィアは杖をアガット達には見えない速度でアガットの顔の寸前で突きつけ警告した。

「グッ……ああ、わかつたよ……（クッ……動作が速すぎて反応ができねえ……！）」

リフィアの牽制攻撃に反応できなかつたアガットは悔しそうな表情で頷いた。リフィアはその様子を見て突きつけるのをやめた。

「アガット、これにこりたらもう少し丁寧な対応で嬢ちゃん達と話すんじやぞ？……さて2人は誰の戦闘技能を見たいか希望はあるか？」

ルグランは一連の流れを冷や汗をかいて見ていたがリフィアの機嫌が直つたことに安心してアガットを注意し、アナラスやグラツィに誰を選ぶか聞いた。

「じゃあ、俺はリフィアだな。さつきのアガットへの牽制攻撃……見事なもんだつたぜ。実戦はどうやって戦うのかも見て見たいしな。

」「ほう、グラツィとやら、中々見所があるようだなーよからうー余はグラツィに余の強さを見せてやろうぞ！」

グラツィの言葉に機嫌が良くなつたリフィアはグラツィに見てもらうことを宣言した。

「じゃあ、私はエヴリーヌちゃんかな？なんてつたつてこの中で一番気になるし…」

「なんで、エヴリーヌ……？」

アネラスの言葉にエヴリースは首を傾げた。

「それはもちろん美人と可愛さを両立させているからに決まっているよ！普通、可愛さと美人は両立させられないのにエヴリースちゃんはそれを両立させているんだもん！」

「なんか良くなきゃいけど、エヴリースを讃めているんならまあ、いいよ～。アネラスだけ？エヴリースの強さを見せてもらっと驚かせてあげる」

アネラスの理論を理解できなかつたエヴリースだったが、自分が讃められていることには気付いていたので特に気にせずアネラスに見てもううことにした。

「フフ、では余り者の私はアガットさんに見てもらつといふことですね。ある意味アガットさんの希望通りになりましたね。」

プリネは上品に笑いながら最後の一人は自分であることを名乗り出した。

「あん？どういう意味だ？」

プリネの言葉の意味がわからなかつたアガットは聞き返した。

「言葉通りの意味ですよ。私がこの中で最年少で実戦経験も一番少ないからですよ。」

「テメエが…………？まあいい、ブレイサーが素人に務まるのがどれだけ難しいか叩きこんでやる。」

3人の中で最年長と思っていたプリネが最年少であることに眉を潛めたアガットだったが、気を取り直していくものように厳しい態度で接した。

「フフ、お手柔らかにお願いしますね。」

アガットの脣しに近い言葉をプリネは上品に笑つて答えた。

「どうやら決まつたようじゃの。試験方法じゃが、ちょうど3種類の手配魔獣が確認されたからそれぞれ手配魔獣と戦つてもうつもりだから、それで判断してくれ。一人で戦わすもよし、共に戦つて

確かめるのもよし。それぞれの判断に任せるわい。」

ルグランはそう言って手配魔獣の姿や生息場所を書いた依頼書をアガット達、正遊撃士にそれぞれ配つた。

「どれどれ……私とエヴリーヌちゃんは東ボース街道か。」

「俺とリフィアはアンセル新道か。」

「……俺は西ボース街道か。」

依頼書を受け取った遊撃士達はそれぞれの相手に手配魔獣の特徴や生息場所の詳細な情報を伝え、それぞれギルドを出ようととした時、エヴリーヌがあることに気付きアナラスに聞いた。

「ん……？この東ボース街道ってエヴリーヌ達、一度通つたよ……？」

「え……？あ、そうか。エヴリーヌちゃん達ってメンフィル大使館があるロレントから飛行艇を使わず歩いて来たんだよね？だったらこの道は一度通っている筈だよ。」

アナラスはエヴリーヌの疑問に丁寧に答えた。

「ふうん……そっか。いいこと考えた。リフィア、プリネ。一番ノリは貰うよ。」

「それはどうかの？……肝心の魔獣を見つけなければ意味はないぞ？お主と余、どっちが一番最初に見つけるか競争だ！」

「キヤハッ その競争、のつた エヴリーヌ、負けないよ？」

「フフ、私はお姉様達を待たせないよう精一杯がんばりますね。」

「？おい、お前等何の話をしているんだ？」

エヴリーヌ達の会話の意味がわからなかつたアガットは声をかけた。

「すぐわかるよ……キヤハッ アナラス、ちょっとこっち来て。」

「？うん。」

エヴリーヌ呼ばれたアナラスはエヴリーヌに近寄つた。

「手、つないで。」

「いいよ～。ギュッとな！……わあ！エヴリーヌちゃんの手つてち

つちやくてすべすべしている！可愛い！」

「しつかり捕まつてよね。……転移つと。」

エヴリースの手を握つてはしゃいでいるアネラスと共にエヴリースは印象が深いロントとボースの街道を結ぶ関所前 ヴェルデ橋へ転移してその場から消えた。

「「「なつー？」」「」

それを見たルグラン達は驚愕した。

「では余も行くぞ！遅れるなよグラツツよ！フハハハハハハ

！」

驚愕しているルグラン達を気にせずリフィアは元気よく入口の扉を開け、走り出した。

「おい待て！今のはなんだつたんだ！？説明してくれ！つてもう、あんな所に！？クソッ……！俺も行つてくる！」

グラツツはリフィアの突飛な行動に驚き、リフィアに追いつくために全速力でリフィアを追つた。そして後に残つたのは呆けている2人と装備の確認をしているプリネだった。

「さて、私達も行きましょうか。アガットさん。」

装備の確認をし終えたプリネはアガットに話しかけた。

「あ、ああ……って今のはなんだつたんだよ！？」

プリネの言葉に無意識に反応したアガットだったが我に返りプリネに聞いた。

「今のといいますと……ああ、転移魔術のことですね。」

アガットの言葉を最初わからなかつたプリネだったが、あることに思い当たり一人納得し、説明をした。

「転移魔術とはその名の通り、術者が思い浮かべた場所に瞬間移動することです。転移魔術は普通地面に魔法陣を書く必要があるのでですが力が強い術者なら魔法陣なしで思い浮かべた場所ならどこでも

飛べるんです。」

「瞬間移動までできるとは魔術とやらはなんでもありじゃな……わしが知っている範囲では威力がアーツより強力といつゝとぐらいじやつたが……」

ブリネの説明を聞いたルグランは魔術の凄さを改めて知り、溜息をついた。

「おい……確かに前等は”闇夜の眷属”らしいな？お前を含めてほかの奴らもさつきみたいなことができるのか？」

「まさか。先ほども申しました通り、転移魔術は数ある魔術の中でも最高レベルの魔術です。よほどの魔力と才能、そして適正がないと魔法陣なしではできません。エヴリー・ヌお姉様は”闇夜の眷属”の中でも最強の種族である”魔神”ですからできるのです。」

アガツトの疑問にブリネは首を横に振って否定した。

「あん？”闇夜の眷属”ってのは全員同じ種族じゃないのか？」

ブリネの言葉に疑問を抱いたアガツトは聞き返した。

「…………少し思い違いをしているようですね。”闇夜の眷属”とは複数の種族を総じて呼ぶ呼び方で、また彼らと共に生活をする人間の方達も呼ばれるのです。ですから”闇夜の眷属”は決してみなが人間ではないということではないんです。」

「ふん、なるほどな…………で？”魔神”っていう種族はなんなんだ？さっきの口振りだとかなり強いようだが、本当に今の小娘が最強と呼ばれているのか？」

「”魔神”とは種族の中でも魔力、身体能力等全てにおいて”最強”を誇る種族です。貴方にわかりやすい例えでいえばよく御伽話で”魔王”が出てきますよね？あれと同じものだと思つてもうつて構いません。」

「なつ…………あの小娘がか！？信じられねえ…………」

「”闇夜の眷属”は見かけに騙されていては痛い目を見ると誓いつの本當のようじゃな…………」

魔神という種族を知ったアガットとルグランは驚愕した。

「付け加えて言うなら、私達の先祖の中で”魔神”の方がいらっしゃいましたのでリフィアお姉様や私にも弱冠ですが”魔神”的血が混じっています。ですから自慢をするみたいに聞こえて嫌なのです

が、私も眷属の中ではある程度の力は持っています。」

「フン……どうやら先祖が強ければ自分も強いと勘違いしているようだな？貴族として不自由もなくぬくぬくと育ってきたテメエの言葉がどれだけ間違っているか教えてやる。……行くぞ。」

「クス、わかりました。では私達も行つてきますね。」

「う、うむ。気を付けてな。」

アガットの挑発とも取れる言葉をプリネは上品に笑つて受け流し、ルグランに見送られアガット共にギルドを出た……

第28話（後書き）

最近の情報でテイルズの新作がまさかの碧の軌跡よりやや早いといふともない時期に……！…どっちを先にクリアすべきか非常に迷います……ああ、速く9月になつてほしい……！…ちょっとしたアンケートになるのですが、凄い先になりますがシルフィアを出せるネタがあります。よければ出すべきか出さないべきか意見お願ひします！感想お待ちしております。

「ヴェルデ橋・東ボース街道方面」

「ん、到着。」

ロレントとボースの街道をつなぐヴェルデ橋の関所から少し離れた所にギルドから転移してきたエヴリーヌとアネラスが降り立つた。「うーん……エヴリーヌちゃんの手を握っていたらいきなり今のようにわからない感覚が来たんだけどなんだつたんだろう……あれ？あれはヴェルデ橋……ってことは、ここって東ボース街道！？さつきまでギルドにいたのになんで！？」

アネラスは一瞬でギルドから東ボース街道に移動したことに気付き驚いた。

「じゃあ、紙に書いてあったのを探してわざわざおいで！」

「え……ちょっと待って、エヴリーヌちゃん！一体どうなっているの！？」

早速手配魔獸を探し始めるために歩き出したエヴリーヌにアネラスは急いで追いつきなぜ、ギルドからいきなり東ボース街道に移動したかを聞いた。

転移魔術のことを聞かれたエヴリーヌはめんどくさそうな表情をしながらも簡単な説明をし、アネラスを納得させた。ちなみにアネラスは「エヴリーヌちゃんが可愛いからできたんだ！」

やっぱり可愛いから凄いんだね！」という訳のわからない納得の仕方でエヴリーヌを困惑させた。そして2人がしばらく歩いていると手配魔獸と周囲にも複数の魔獸の姿を確認した。

「お、早速発見だね！じゃあ、エヴリーヌちゃん。今からあなたの力を見せて貰うね！とりあえず最初は一人で戦つてみて！危なくな

つたら私が助太刀してあげるからがんばって！」

「はーい。でも、すぐ終わらせるから助けなんて必要ないよ。」

エヴリーヌはまるで遠足に出かけるような物言いで返事をして虚空から弓を出し、片手に魔力で形成した矢を弓につがえた。

「うーで、あーし、むーねにあつたま……全部潰す！」

卷之三

一ヶオツ！？ケオオオオオオオオオオツ！？」

初撃の矢が弓を離れたと思った矢先、そこには新たな矢がつかえられていた。放たれた矢は分散し手配魔獣の四肢に刺さり、4か所からの痛みに耐えられず

「え！？」

アネラスはエヴリー・ヌが放った矢が魔獣に命中した後すでに次の矢が弓につがえられているのを見て驚愕し、その光景が信じられず思わず自分の目を疑つた。

「あーあ、つまんない。つまんないから全部消えていいよ！」

凶悪な顔でエヴリー・ヌは人間であるアネラスには決して見えない神速の動作で次々と矢をつがえては放つて行く。放たれた矢を受けた魔獣は四肢をつぶされるもの、一本の矢が空中で複数の矢に分かれ雨のように降り全身矢だらけになるもの、

一か所に3本の矢で集中攻撃されるもの、攻撃の動作をする寸前に攻撃されたもの、矢を受けたどの魔獣も矢が貫通した。その威力は足や腕を簡単に破壊し、エヴリーヌの一方的で残酷な攻撃はあつと、いつ間に手配魔獣を含め周囲は死屍累々になつた。

「… もうおしまい!」じゃあ最後にひとでおもひのいセイントを上げるから消えちやつてー。」

エヴリーヌはつまんない表情で横たわっている魔獣を見た後、とどめに大技を出すために眼に魔力を、矢には鬪気を宿らせ放った。

「キヤハツ エヴリーヌの敵はみんな消えちゃえ！ゼロ・アンフィ
ニ！！」

魔力と闘氣の力を纏つた一本の矢は巨大な衝撃波となり、地を走り死屍累々となつた魔獣達を吹き飛ばし消滅させた。

「はい、おしまーい。」

戦闘が終了し弓を虚空に閉まつたエヴリーヌは呆然としているアネラスに気付いた。

「…………何固まつてているの？終わつたよ？」

「ハツ！？エヴリーヌちゃん！今の技つてどうやつたの！？それに、弓矢の動作が速すぎて見えなかつたんだけど、どうやつたらあんなことできるの！？」

エヴリーヌに話かけられ我に帰つたアネラスはエヴリーヌに詰め寄つて聞いた。

「ここで説明するのもんどうだから、帰りながら話してあげるからさつきの街に歩いて帰るよ？思つたより早く終わつちゃつたからリフィアにハンデをあげるために歩いて帰りたいし。ハンデをもらつたつてわかつた時のリフィアの顔が今から楽しみ……キヤハツ」

そう言うとエヴリーヌはボースへ続く道にさつさと歩き始めた。

「あ、待つて！エヴリーヌちゃん！」

歩き始めたエヴリーヌに追いつくためアネラスは慌ててエヴリーヌを追つた。そして帰り道で出合つた雑魚魔獣もエヴリーヌは魔術で一瞬で終わらせアネラスをさらに驚かせた。

（アンセル新道）

「ぜえ……ぜえ……やつと、追いついたぜ……」
自分を待つていたリフィアに追いついたグラツィはギルドからずつと全速力で走つていたので息を激しく切らせていて。

「なんだ、これぐらいでバテるとはまだまだだな。余の走りに付いて来れないとは鍛え方が足りないぞ？」

グラツツを待つていたリフィアはグラツツの様子を見て呆れた。

「ぜえ……ぜえ……そういうお前はこれだけの距離を走つてるのになんで、息切れしないんだよ……（おいおい、ヴァレリア湖と琥珀の塔の分かれ道があるってことはかなりの距離を走つているぞ……この嬢ちゃん、この小さな身体のどこにこんな凄い体力が秘められているんだよ……）」

グラツツは自分と違い自分より速く走つたにも関わらず息切れをしていないリフィアを見て驚いた。

「余は幼少の頃よりメンファイルのあらゆる領内を見て回つたからな。そのおかげで自然と体力はついたぞ？」

「……とても貴族の娘がやることとは思えねえな……よくそんな危険なことを親が許したな？」

リフィアの今までの行動を聞きグラツツは疑問を持った。

「母は笑つて許してくれるが父を含めたほかの者達は心配して余が家を出たと分かるとすぐに追手を差し向けるのじゃ。母以外は皆心配性でな。……嬉しくもあり、悲しくもありだが。」

グラツツの疑問にリフィアは答え、毎回追つてくるリウイ達のことを思い出し溜息をついた。

「はあ……要するにお前が規格外なだけか……まあいい、それより手配魔獸を探すぞ。」

リフィアの答えを聞いたグラツツは溜息をついた後、気を取り直しリフィアと周囲を歩いて手配魔獸を探した。そしてある程度探すと手配魔獸の姿を確認した。

「お……いたか。じゃあ、試験開始だ。まず最初は一人で戦つてみな。」

「フフフ……グラツツよ、余の力を知つて腰を抜かすでないぞ？」

「ハハ……強気だな。まあ一応期待しておこうか。」

リフィアの言葉にグラッツは苦笑した。その様子を見たリフィアは少しだけ不機嫌な表情をした。

「なんだ？その顔は。さては余の言葉を信じていらないな？まあいい、その眼でしかと見るがよい！」

そしてリフィアは杖を構え魔術の詠唱をして、放った。

「…………罪人を処断せし聖なる光よ！我が仇名す者に裁きの鉄槌を！贖罪の光霞！！」

「――――――ツ――――――？」

リフィアが魔術は放つとは手配魔獸と周囲にいた魔獸に薄透明な壁が多い、強い光と爆音がその中で走った。光を受けた魔獸達は叫び声すらも光と爆音に焼き消され完全に消滅した。

「んな！？」

遊撃士も手こすると言われる手配魔獸が一瞬で片がついたのを見て、グラッツは驚愕した。さらにリフィアは範囲外で集団になっている魔獸を見つけ新たな魔術を放った。

「闇の彼方に沈め！……テイルワンの闇界！――」

リフィアが放つた暗黒魔術は先ほどの光の魔術とは逆に魔獸達のいる範囲が暗闇につつみこまれると魔獸達が叫びを上げた。

「――――ガアアアアアアアッ！――――？」

（な！今度も一撃かよ！？カルナに見せて貰った最高の威力を持つアーツとは格が違うすぎる……これが”魔術”か……）

暗闇がはれると事切れて死屍累々と横たわっている魔獸達がいた。一瞬で複数の魔獸達がやられていく様を見てグラッツは驚きすぎて、しばらくその場を動けなかつた。

「余がいれば負けはない！……さて、いつまでも突つ立てないでギルドに戻るぞ？」

リフィアは固まっているグラッツに声をかけた後、ボースに戻る道を歩き始めた。

「お、おう……」

リフィアに促されグラツは今起こったことがいまだに半分信じられない気分で、ギルドへ帰つて行つた。

（ボース西街道）

「いましたね。あの魔獸でいいんですね、アガットさん？」

「……ああ。」

2組より遅れて出発したアガットとプリネは街道をしばらく歩いていると手配魔獸の姿を見つけた。

「さて、どうしましよう？ ルグランさんは私一人で戦うなりアガットさんと協力して戦うかで試験をすることでしたが、私はどうすればいいでしょう？」

「……どちらも必要ない。」

「……それはどういう意味ですか？」

アガットの言葉にプリネはわからず聞き返した。

「すぐにわからせてやる。……オラア！」

背中に背負つている重剣を抜いたアガットは重剣を持った状態でジヤンプして手配魔獸に攻撃を叩きつけた。

「グエエエエッ！――!? ? ? ?」

重剣を叩きつけられた手配魔獸はあまりの痛さに叫び声を上げた。叫び声をあげ隙を見せた手配魔獸にアガットはすかさず、スクラフトを放つた。

「一気に行くぜ！ うおおおおー！ ダイナストー！ ゲイル！！」

普通の人間が持つのは難しいと言われる重剣をアガットは軽々と振り回し連続で攻撃した。そしてその攻撃によつて手配魔獸は完全に沈んだ。

「見事です。けど、私の試験はどうなるんでしょうか？ 何故、こんなことを？」

試験対象である魔獣を勝手にアガットが倒したのでプリネはアガットに理由を聞いた。理由を聞かれたアガットはプリネを睨み口を開いた。

「そんなのは当然テメエらみたいな素人どもが手配魔獣と戦わせないために決まつてんだろが。怪我でもされたらこいつちが迷惑なだけだ。それで試験方法だが、こういう事だ！」

プリネを睨んでいたアガットは手に持った重剣でプリネに襲いかかつた。

「！！」

襲いかかられたプリネは後ろに飛んで、アガットの攻撃を回避した。

「これはどういうことですか？」

回避されても攻撃の態勢を解かないアガットを見て、プリネは素早く鞘からレイピアを抜きアガットに向けて構え聞いた。

「今から俺とサシで戦え。それが試験内容だ。テメエらみたいな温室育ちで世間知らずの小娘共が俺達の仕事を手伝えるなんて二度と思えないよう、この”重剣”で教えてやる。」

「……なるほど、そういうことですか。出会った時から感じていましたのがアガットさんは私達にあまりいい印象を持つていませんね？」

「ハツ！ 前々からテメエらメンフィルの奴らは気にいらなかつたんだよ！」百日戦役”で襲撃されたロレントを救つたぐらいでかい態度をとりやがつてよ！」

プリネの言葉にアガットは鼻で笑つた後、今まで隠してきた自分の本音を叫んだ。アガットの本音を聞いたプリネはムツとした顔になりました。

「……大きな態度とは心外ですね。私達、メンフィルはリベルールを盟友と認め平等な取引をしています。あの時のロレントはどれだけ悲惨だったか知らないのですか？ それに我々の登場はほかの国々に対しても医療関係等生活に対して発達したはずです。特にイーリュ

ンの信者の登場は今まで助けられなかつた民の命を救つて来たのを
知らないのですか？」

「「いやいやひめせえーオラア！」

「……」

プリネの説明を聞く気がなかつたアガツトは再びプリネに攻撃をし
かけたが横に飛んで回避された。

「……どうしても”力”を示す必要があるみたいですね……仕方
ありません。お相手致します……！」

「ハッ！その言葉を吐いた事を後悔させてやる…………！」

こうしてアガツトとプリネが戦いを始めた…………！

第29話（後書き）

次のが最後になりますがストックしているので明日には更新できますので楽しみに待つて下さい。プリネとアガットの対戦ですが誰がプリネを鍛えたかを知ついたら結果はわかるでしょ？感想お待ちしております。

第30話（前書き）

最近気付いたのですが零の戦闘メンバーって空と比べたらクラフトが超高性能ですね？特にダドリーや銀のクラフトの即死率が即死専門だったレンを軽く凌駕するとか……ランディの即死も余裕でこえていますし……

（ボース西街道）

戦いは正遊撃士の中でも高ランクであるC級を持つアガツトの優勢かと思われたがプリネの優勢だった。アガツトの重い一撃をプリネは最小限の動きでかわしてアガツトの大ぶりな攻撃でできた隙を狙い、反撃しそれに驚いたアガツトは後退した。しかもプリネはさらに追撃をかけた。突きだけではなく斬撃も混ぜてくる予想外のプリネのレイピアでの攻撃に対処できずアガツトはだんだん擦り傷等を付け始めたのだ。

「そこッ！」

「チッ！」

プリネの素早く重い一撃の突剣技 フェヒテンバルが見えずアガツトは大きく後ろに飛んで回避した。

「……さすが正遊撃士といった所ですか。中々の腕です。」

「余計なお世話だ！（チッ……どうなつてやがんだ！？）この小娘……対人戦に戦い慣れていやがる上に実力もありやがる……！（）」

アガツトはプリネの予想外の強さに内心驚いた。自分は一番弱いと卑下するプリネだが、リウイからは剣術や戦術の指南を、ペテレーネやリフィアからは魔術の指南、メンファイルでも指折りの強さを持つカーリアンやファーミシルス、そして”魔神”であるエヴリースに実戦形式で鍛えられ、時には国内の盜賊討伐にも参加して兵達に見せた強さは本物で、精銳揃いのメンファイル兵も自分達が忠誠を誓う霸王の血を引く者として、また自分達を率いる将に相応しいと認める強者になりつつあつたのだ。そんなプリネの強さの秘密を知らないアガツトは自分が劣勢であることに苛立つた。

（クソ……一隙が見当たらねえ……！－メンファイルの奴らだけには絶対に負ける訳には行かないのに……チクショウツッ－！）

かつて”百日戦役”で妹を亡くしたアガットにとってその原因となつた王国軍を、また助けられなかつた自分を憎み、妹の死後に現れたメンファイルや”聖女”的存在を知つたアガットは「なぜ、もつと早く現れなかつた！」と見当違いな怒りを心の中で秘めメンファイルにはあまりいい印象を持つていなかつた。

その後妹を亡くしたアガットは自暴自棄になり市民を脅かす不良となつていたがある遊撃士 カシウス・ブライトに導かれ不良からは足を洗つた。自分の進む途に迷いながらも遊撃士として活躍していくアガットにとってゼムリア大陸真の霸者と言われる大国メンフィルで何の不自由もなく幸せに暮らしてきたであるつプリンに負ける訳にはいかなかつた。

「少し剣の腕がいいからと調子に乗るんじゃねえ！くらいやがれっ！」

「甘いですよッ！！」

アガットの持つ技の中でも隙が少なく常人ならよけられない技スパイラルエッジを放つたアガットだったが、対するプリネは旅に出る前は常日頃メンファイル皇女としてリウイ達に厳しい鍛錬をしてもらい、またプリネ自身も半魔人のため常人には回避できない攻撃をレイピアで受け流して回避した。

「チツ！」

攻撃が回避され反撃を警戒したアガットは後ろに大きく飛んで後退し普段はあまり使わないアーツを発動させた。

「燃えやがれっ！フレイムアロー－！」

発動したアーツは炎の槍となりはプリネの頭上に襲いかかろうとした。

「やがれせん！」

しかしアーツに気付いたプリネは片手で簡易結界を作り、結界を出している手を頭上に上げ防いだ。

- なーー!?

人間では決して防御できない攻撃
ツトは驚愕した。そしてプリネはその隙を逃さず手加減した魔術を
放つた。

「舞の圖」ノリヤマ

ルーン!!

1

本能で自らの危機を感じたアガツトは自分のいた位置から横に飛んだ。アガツトの判断は正しくアガツトが横に飛んで回避した瞬間アガツトのいた場所に少しの間だけ小さな渦が空間ができ爆発したのだ。それを見たアガツトは”アレ”を何度も撃たれれば自分に勝機はないと感じ短期決戦で戦闘を終わらすため自らの体力と引き換えに鬪気をためこむクラフト バッファーレイジを使った。

「うおおおおお、だあああああ！」

自らの体力と引き換えに鬪氣を得たアガットは現段階で自分の持つ中で最高のクラフトの構えをした。

「……………」重鎌に鬪氣を流し込むよこはアガットはその場で力をためた。どうやら、ム元そ

「……どうやら奥の手を使つようとすれば……ならば、和もそんなどうか？」アガットの様子からアガットが大技を使うと感じ、それに対抗するためプリネは自身に秘めたる真の力を解放した！

行脚記

自分の身体に眠る真の力を解放したプリネの姿は母譲りの夕焼けのような赤髪は闇エルフ達のような夜に輝く美しい銀髪になり、父譲

りの赤の瞳は妖しく輝き全身には闘氣と魔力が混合した氣を纏つた。そしてプリネが真の姿になると同時にアガットはクラフトを発動した！

「くらえつ！ ファイナル……ブレイク！！」
「ブラッシュ！！」

重剣に闘氣を流しこみ放つたアガットの重剣による衝撃波はプリネに向かって地を走った。そしてプリネはアガットが放つた衝撃波に強力な斬撃でできた衝撃波を放つてぶつからせて爆発させた。

「ハア……ハア……」

大技が決まったのを見てクラフトで体力を失つたアガットは息が切れ、疲労もピークに達していた。

「クソ……ここまで手こずるとは俺もまだまだだな……」
プリネに手間取つたことにアガットは舌打ちをして呟いた。
「勝手に終わつたことにして下さい。」

「え……なつ……！？」

だが、アガットの苦労をあざ笑うかのように爆発で出来た煙が晴れるとそこには銀髪のプリネが立つていた。

「バカな……無傷だと……！？ それにその姿はなんだ！？」

アガットはプリネの姿と全くダメージを受けていない姿を見て狼狽した。

「…………これが私の真の姿です。」

「真の……姿……だと……！？ どういうことだ！」

プリネの言葉にアガットは理解できず叫んだ。

「言葉通りの意味です。普段の私は力を抑えるためにあの姿ですが、今私の姿は力の枷をはずした状態ということです。」

「力を抑える……だと……まさか、今まで本気を出していなかつたのか……！ ……ざけんなあつ！」

手加減されたことにアガットは怒り疲労した体に鞭を打つて再びブ

リネに攻撃を仕掛けたが、疲労のせいか攻撃の勢いは目に見えて鈍かつたのでプリネは謝罪の意味もこめて本気で攻撃を仕掛けた。

「力を抑えていたことは謝ります。なので謝罪の意味をこめて今から本気を出させていただきます！」

「きやがれつ！！」

プリネの言葉を聞いたアガツトは自分を叱咤するように叫んだ。そしてプリネは残像が見えるほどの速さでアガツトに攻撃を仕掛けた！

「ハツ！セイツ！ヤアツ！..」

「しまつた！？」

「終わりです！！」

内に秘める真の力で放った突剣技 フェヒテningを重剣で防御していたアガツトだったが疲労した体では防げず、プリネの攻撃によって重剣はアガツトの手から離れ放物線を描き地面に刺さつた。その隙を逃がさずプリネはレイピアをアガツトの首筋に当たるギリギリの所で寸止めした。

「グッ……！」

「合格……でよろしいですか、アガツトさん？」

自分が負けたことに信じられない表情をしているアガツトにプリネはニッコリと笑って確認した。

「……ああ。俺の負けだ……！」

勝負事に関してはケジメを持っているアガツトにとって自分の発言を取り消す訳にはいかないので潔く自分の敗北を認め、両手をあげた。

「フウ……」

アガツトの敗北宣言を聞くとプリネは安心の溜息をはきレイピアを鞘に戻し、解放している力を抑えいつもの姿になつた。そしてアガツトの傷だらけの姿を見てアガツトに癒しの魔術を使つた。

「あ……いくつか擦り傷がありますね。治しておきます……癒

しの闇よ……闇の息吹！！

「……悪いな。（まさか）の俺が回復魔術を受けるハメになつたとはな……」

初めて体験した癒しの魔術にアガットはまさか自分が体験するとは思わず、戸惑いながらプリネの回復魔術を受けあることを疑問に思いいそれを聞いた。

「……いくつか聞きたいことがある。なんで最初から本気で来なかつた？それにテメエは貴族の娘なのになんでそんな強いんだ？」

「確かに私のあの姿を見たら普通そう思いますね……すぐにあの姿にならなかつたのはまだ完全に私の中に眠る力が目覚めてないからです。」

アガットの言葉にプリネは苦笑しながらも答えた。

「ハッ……？どういう意味だ？」

プリネの説明が理解できずアガットは聞き返した。

「あの時見せた姿は私の中に眠る力を無理やり出した姿です。ですから長時間あの姿ではいられないんです。」

「なるほどな……それでなんでお前はあんなに対人戦にも慣れてんだ？直接お前と対峙してわかつたが剣の腕はかなりだし、対人戦を想定した戦い方だつたぜ？」

「私にある程度の力があるのはお父様やお父様の臣下の方達に鍛えられたからでもありますが、一番の理由は兵を率いる者としても強くならないといけないのでです。」

「な……？まさかお前、私兵がいるのか！？」

アガットはプリネの兵を率いているという言葉を聞いて驚いてプリネを見た。

「はい。と言つてもお父様の私兵です。ですが将来その方々は私やリフィアお姉様に仕えることになります。その方々を失望させないため、また民の先頭に立つて行動する”メンフィル貴族”として強くなければならないのです。」

「……下の奴らを黙らせるためつていうのはわかつた。でもその“メンフィル貴族”としてつてのはどういう意味だ？」

「……私達貴族は民の税で生活をしていることはご存じですかね？」

貴族は普通戦争等には関わりませんが、私達メンフィルは違います。“力あるものは無暗にその力を震わず力無き者を守るために使う”

これは初代から始まり、今の皇帝、また次期皇帝となられる方のお考えです。皇帝の考えは当然私達貴族は従わなければなりませんし、民の血税で生活をしているのですから有事の際、私達が先頭に立つて民を守るのは当然の義務です。……例えそれが戦争であつても民を守るため兵を鼓舞し自らも戦う必要があるのです。」

「…………（完敗だ……）お前達をバカにしてたのは俺の間違いだったようだ。悪かった……」

アガットは自分より年下のプリネが自分と違い進むべき途を持つてそれに向かつて進み、戦うという覚悟をすでに持つてゐる言葉を聞いてプリネを見直し、頭を下げ謝つた。

「気にしないで下さい。普通はそう思われても仕方ありませんから……まあ、ギルドに戻りましそう！恐らくほかの2組も終わっているでしょう。」

アガットの謝罪を苦笑しつつ受け取つたプリネはギルドに戻ることを提案した。

「ああ。……それと今、一人になりたい気分でな……後で追いつくから先に行つてくれ……」

「？わかりました。」

アガットの様子を変だと思ったプリネだがアガットの言葉通り先にギルドに戻つた。プリネの姿が見えなくなるとアガットは何かを堪えるように呻いた。

「チクショウ……俺は年下の小娘にも劣るのか…………どこまで行つても俺は情けねえ兄だな…………ミーシャ…………」

呻いたアガツトは悔しさを発散するかのように突如空に向かつて吠えた！

「うおおおおおおおおおつ……！」

空に向かつて吠えた後、プリネに追いつくためアガツトはプリネが戻った道を走つて行つた……

第30話（後書き）

恐らくほとんどの方が予想していたと思いますが、案の定アガットはプリネに負けちゃいました というカリウイ達に鍛えられたプリネに勝てるのはカシウスや碧で出るアリアンロード（どれぐらい強いか知りませんがワイスマンと違つて前線系に見えたので少なくとも七柱の中では最強と思っています。）ぐらいだと思います。それ以外は強くても攻撃は捌けますし、パワー全開で行つたら誰にでも勝てると思います。どれだけ強くても相手は所詮人間ですし。そう、例えどこのかの組織の誰かさんにもです……感想お待ちしております。

第31話（前書き）

あるキャラクターを登場させるために更新している間に凄い勢いで作れました。なのでそのキャラクターが登場するまでは連続更新できます！！

一方リフィア達と別行動にしたエステル達はハーケン門に向かい、モルガン将軍からブレイサーであることを隠して情報がある程度、引き出せたのだがエステルがうつかり口を滑らせてしまったせいで、エステル達がブレイサーと分かるとモルガンは激昂し、エステル達を攻め、そのことに反応したシェラザードも未だに事件の解決への道を見つけていないことと、異国の軍、メンフィルのほうが優秀で協力的であることを持ちだし、そのことでモルガンをさらに怒らせ、今にも喧嘩をしそうな雰囲気であったが、ハーケン門の食堂で出会ったエレボニア帝国人の旅行者、オリビエ・レンハイムの突拍子のない演奏でそれぞれ拍子がぬけ、モルガンは取り巻きの兵を連れて持ち場に戻った。そしエステル達はギルドや市長に報告するため、モルガンとの仲裁をしてくれたオリビエをついでに護衛しながらボース市へ向かつた。そしてボース市でオリビエと別れ、エステル達は一端、ギルドに報告し、リフィア達と合流するためにギルドに向かつた。

（遊撃士協会・ボース支部）

「ただいま」

「おお、戻ってきたか。」

ルグランは戻ってきたエステル達に気づいた。

「あれ？ リフィア達は？」

ギルドで待っているはずのリフィア達の姿がなくそれを不思議に思ったエステルはルグランに聞いた。

「あの3人なら今は上で休憩している。……実はお主たちにも伝えることがあるっての。」

「なんでしょうか？」

ルグランの言葉が気になりヨシュアは聞き返した。そしてルグランはプリネ達にした説明をエステル達にもした。

「……とこうことじや。2人ともあまりあの3人を頼りにするんじゃないぞ？」

「……確かにその通りね。あの3人の強さは私達とは次元が違うわ。ainaの考え方通りずっとプリネさん達に頼っていたらあんた達が成長しなくなってしまうわね。特にエステル、わかるてるわね？ただでさえあんたにはパズモや魔術という反則技があるんだから、自分がどれだけ恵まれているかわかっているでしょ？」

ルグランの説明にシェラザードは頷き、エステルに念を押した。

「それぐらいわかっているわよ、シェラ姉。……でもリフィア達と仕事が毎回できないのはちょっと残念だけど、ルグラン爺さんの言う通りだわ！ヨシュアもいい？」

「了解。……というか基本的に気をつけるのは依頼を受けたエステルなんだけどね……」

エステルの言葉にヨシュアは苦笑して答えた。

「……それでも、猛者だけの闇夜の眷属達を束ねる王族の血は伊達ではなかつたようじやの……」

「……と/or?」

リフィア達の強さに驚きを隠していないルグランにヨシュアは気になつて聞いた。

「うむ……遊撃士として必要な最低限の戦闘能力を確かめるために、アネラスにはエヴリース嬢ちゃんと手配魔獣を倒しに行つてもらつたんじやが、結果を聞いて驚いたわい……まず、エヴリース嬢ちゃんは弓矢で目にも止まぬ速さで次々と手配魔獣や配下の魔獣を倒し、帰り道で出会つた魔獣も魔術で一撃だつたそうじやぞ……」

「…………僕も彼女の戦いをボースに向かっている途中の魔獣との戦鬪で少しだけ見ましたが、魔術も当然のことながら彼女の弓技は誰にも真似はできないでしょうね。」

「そりゃあ、そうでしょう。彼女は”魔神”なんだから私達とは体の創りからして違うし、あの外見で騙されてしまうけど私達の何千倍も生きているんだから実力も豊富なんでしょうね。」

ルグランとヨシュアの言葉にシェラザードは自分達とはあまりにもかけ離れている存在であるエヴリーヌに恐怖を持ちつつ答えた。

「あはは……ほかの2人はどうだったの、ルグラン爺さん？」

シェラザードの言葉にエステルは引きつった笑顔で笑った後気に入るほかの2人のことを聞いた。

「うむ……リフィア嬢ちゃんに至つてはたつた数秒で手配魔獣を含めて周囲の魔獣達を魔術で全滅させたそうじゃ……」

「例えアーツの数倍は勝つていると言われている魔術でも豊富な体力を持つ手配魔獣を一撃なんて私やエステルでは絶対にできないわ。とんでもない魔力がある証拠よ……プリネさんでさえ私達より上なんだから。やつぱりあのメンフィルの姫殿下達と私達は格が違うわね……」

シェラザードは改めてリフィアの凄さを知り溜息を吐いた。

「何を言つておる、魔術が使えるお主達も十分凄いではないか。魔術は基本的にメンフィルの出身者、あるいはアーライナやイーリュンの一部の信者達しか使えないのは2人とも知つていいじゃろ?」ルグランはシェラザードの溜息が贅沢な溜息に聞こえ指摘した。

「…………まあね。私は幸運にも師匠 閣の聖女様に師事をお願いする機会があつたから恵まれているとは思つていいわよ…………最もこの娘ほどではないけどね…………」

そう言ってシェラザードは横目でエステルを見た。
（？？なんで、あたしを一瞬だけ見たんだろう、シエラ姉…………）

(「この様子だとわかつていみたいだね……まあ、エステルらしいか。）

ペテレーネを含めてメンフィルから特別扱いされ、精靈の協力を得ている自分のことだとわかつていらないエステルをヨシュアはエステルらしいと思つた。

「……プリネ嬢ちゃんに關してなんじゃが……アガットの奴、手配魔獸はプリネ嬢ちゃんが信用できないと言つて自分で倒した後、試験と言つてプリネ嬢ちゃんにいきなり模擬戦を仕掛けたそんなんじやよ……」

「はあ！？あのバカ……何考えてんのよ！？下手したらよくて牢屋行き、悪くて死刑になつてもおかしくないわよ！？それどころか最悪ギルドが潰される可能性があつてもおかしくないわよ！？」

アガットがプリネを襲つたと聞いたシェラザードは声を上げた。

「全くじゃ……アガットの報告を聞いて正直、寿命が縮まると思つたわい……まあ、肝心の本人は笑つて「気にしないで下さい。いい訓練になりました。」と言つてたからよかつたのじやがな……」「

「ねえねえ、シェラ姉。そのアガットつていう人、シェラ姉知つているの？」

アガットを知つていてる風に話しているシェラザードに疑問を思つたエステルは聞いた。

「まあ、同じ先生に関わつた者同士ある程度はね……言つておくけど、かなりの凄腕よ。」

「ふうん……あれ？それだけ強いにも関わらずプリネに負けたつてルグラン爺さん、言わなかつた？」

「うむ。リベルの正遊撃士の中でも高レベルのアガットが負けたと聞いて、一瞬耳を疑つたぞい。」

「……まあ、プリネさんは大使館にいた頃は常日頃先生以上の達人達と手合させをしてたからね……アガットじや荷が重いと思うわ。

「へえ……シエラさん、まるでプリネの修行を見て来たかのように言つてますけど、やっぱり闇の聖女さん繫がりですか？」

プリネの強さにあまり驚いていないシエラザードを見てヨシュアは疑問に思つていたことを口に出した。

「ええ。プリネさんは師匠の娘だけあつてアーライナの信者達から御子扱いされてたからプリネさんの姿を拝見したいっていう信者達が多くてね……それに答えるためかよく親子揃つて仕事をしていてね、自然と話す機会も増えてね……第三者の視点での意見も欲しいからつてファーミシルス大将軍や異母のカーリアン様との修行も見せてもらつたのよ。」

「え！？プリネってアーライナの信者の人達からはそんな凄い扱いをされていたんだ！！」

アーライナ教でのプリネの立場を知つたエステルは驚いて声を出した。

「母親があれだけ信者の人達に慕われていたら特別扱いされるのは仕方ないと思うよ？……それで実際プリネの修行つてどうだつたんですか、ショラさん。」

驚いているエステルとは逆にプリネの立場を理解し納得しているヨシュアは肝心なことを聞いた。

「…………プリネさんが本気を出した時の手合わせを見せて貰つただけど……私達とは次元が違います」としかいじょうがないわ。」

「へ？プリネって今まで本気を出していなかつたの！？」

エステルは短期間ながらもプリネの実力は自分より確実に上とわかり、それが本気でないと知り驚いた。

「ええ。あんた達が知つてているプリネさんの姿は父親から受け継いでいる力……”魔神”の力は一切使っていないわよ？」

「…………その”魔神”としての力を使ったプリネの姿は違うんでしょうか？」

『シーウアの疑問にショーラザードは頷いて答えた。

「何も容姿や体が変わる訳ではないわ。」魔神としての力を解放した時、唯一違うのは髪の色が銀髪になるぐらじよ。」

「銀髪…………シーラ姉見たいな？」

「いえ、プリネさんの銀髪は私のと比べたらもうと美しいわよ。」

「ふえ…………いつか、見てみたいな…………」

エスティルは自分の髪に自慢を持っているショーラザードが誉めたプリネの銀髪に一目見たいと思つた。

「まあ、そんな訳じやから3人共文句なしの合格じやからな。お主達も彼女達に負けないよつ精進するのじやぞ？」

「うん！」

「はい。」

「ええ。」

ルグランの言葉に3人は頷いた。

「それより肝心の事件の事は何かわかつたかね？」

「うん、そのことだけど…………重大な情報を手に入れたよ！」

ルグランの言葉にエスティルは嬉しそうな表情で答えた。

「おお、そうか！じゃあ、上にいる3人も呼んで話して来てくれ！」

「じゃあ、僕が3人を呼んでくるね。」

そしてリフィア達も交えてエスティル達はモルガンから引き出した情報話を話した。

「空賊団の『カプア一家』…………それは確かに重大な情報じやな！これまで遊撃士協会としても方針が決められるといつものじや。しかし、モルガン将軍というのも噂以上に遊撃士嫌いらしいのう…………エスティル達の情報に驚いたルグランはモルガンの予想以上の遊撃士嫌いに溜息をついた。

「うん、ビックリしちゃった。遊撃士って、ロレントじゃみんなに親しまれてる職業だから、あそこまで嫌われるなんて……」

エステルは肩を落として答えた。

「エステルさん……元気を出して下さい。私達も民のために精一杯がんばらせていただくなつもりですから！」

「うむ！当然だ！エヴリーヌもよいな？」

「はーい。エヴリーヌ達がその空賊捕まえてその人間を驚かせよう？」

「プリネ、リフィア、エヴリーヌ……3人共、ありがとうございます！」

3人の励ましを受けたエステルは笑顔でお礼を言い、気を取り直した。

「まあ、モルガン将軍は例外じや。普段は王国軍とギルドも、それなりに協力関係を保つておる。ただ、今回ばかりはお前さんたちに余計な苦労をかけることになりそうじやの！」

ルグランはエステル達のやり取りを微笑ましげに見た後、エステル達にかかる負担を考えそれを咳き肩を落とした。

「ま、こちらが出来ることを地道にやっていくしかないわね。とりあえず市長にもこのことを報告してこれから捜査方針を考えてみるわ。」

シェラザードの言葉にエステルやリフィア達、5人が頷き市長にモルガンから得た情報を報告するため市長邸に向かつた……

第31話（後書き）

オリビエのイベントはあまり変わりませんのでじばせでいただきました。もちろん基本原作どおりなのでオリビエ再登場＆仲間になるので安心を……ただしフィア達がいるから一度やってみたいことがあるのであるイベントでフィア達は自分達自身を有効に活用しますのでお楽しみに……感想お待ちしております。

（ボース市長邸）

メイベル市長にモルガンから得た情報を報告しに来たエステル達だったが、市長邸の前でリラとエステル達が以前護衛した新聞記者とカメラマン ナイアルとドロシーがいた。

「なあ、お譲りちゃん。頼むからそこを通してくれよ。市長から一言、」

「メントをもらうだけでいいんだからさ。」

「そうそう、ついでに写真も撮っちゃいますけど」

「そう仰られましても……市長は多忙を極めておりまして。アポイントメントのない方はお引き取り願っているところです。どうかご了承ください。」

2人は市長との面会を希望していたがリラはあっさり断つた。

「そこを何とか！これほどの大事件なのに判つてることが口クにねえ……。読者に何か伝えてやりたいんだ！」

「ですが……」

断つても食い下がらないナイアルにリラは困った表情をして、内心どうするべきか迷っていた。

「そろそろ、そうですよー。噂の美人市長が表紙を飾れば部数倍増も間違ひナシですし」

「…………」

しかしどロシーの言葉を聞いて何かあると思ってリラは黙った。

「一、こらドロシー！なに失礼なこと言つてやがる！」

ドロシーの言葉にナイアルは慌てた。

「え、ナイアル先輩が言つたんじゃないですか？ネタがないんだつたらメンフィル大使館の美女達を取材できなかつた代わりに、美

人市長を密寄せのアイドルに仕立てて紙面を稼いじまえーつて。」
しかしどロシーは場を悪化させるかのように市長邸に来る前にドロシーにしか言つていこと言つた。

「わ、バカッ！」

「…………」

ナイアルはドロシーを制したが時既に遅く、リラは無言でナイアル達を見ていた。

「あ、あの、メイドさん？」

リラの様子をおかしいと思つたナイアルは恐る恐る尋ねた。

「ずいぶん面白いお客様ですね……。お2人の話は、出来るだけ詳細にメイベル市長に伝えておきますので。今日のところはお帰りください。」

「ま、待つてくれ！これはちよつとした誤解なん、」

完全に追い返すつもりのリラになんとか誤解を解こうとしたナイアルだつたが

「お・帰・り・下・さ・い」

「はい……」

リラが有無を言わさず言つたのでナイアルは肩を落として諦めた。

「あれ、美人市長の写真、撮らなくていいんですねか？」

さらにドロシーは空気を読まないかのごとく、ナイアルに質問した。

「頼む……頼むから……これ以上喋らないでくれ……」

「セ、センパーイー待つてくださいよ～！」

ドロシーの言葉にナイアルはさらに疲れすごす」と市長邸から離れ、ドロシーもナイアルを追うかのように市長邸を離れて行った。

「ふう…………あらっ？」

ナイアル達を追い返したリラは安堵の溜息を吐いた後、エステル達に気付いた。

「こんにちは、リラさん。」

6人を代表してエステルはリラに挨拶をした。

「まあ、ブレイサーの皆さん。ハーケン門からお戻りになつたのですか？」

「うん、まーね。ところで今の人たちって……」

ナイアル達がなぜ市長に会いに来たのか気になりリラに聞いたエステルだつたが、

「不届き者です。」

「へ……」

リラの言葉に目を丸くした。

「お嬢様を利用しようとする不逞の輩だと申し上げたのです。私の目の黒いうちは指一本たりとも触れさせません。」

「あ、あはは……そう」

「し、仕事熱心なんですね……」

リラの仕事ぶりにエステル達は苦笑した。一方リフィア達はリラの仕事っぷりを小声で評価していた。

（ほう……あのリラとやら中々の手際じゃな。）

（フフ、そうですね。……そう言えば今の方達、イリーナさんに追い返されてた人達じゃありませんでしたっけ？）

（言われてみればそうじやな？エヴリーヌも覚えてるか？）

（……お、思い出したくない。）

（エヴリーヌお姉様？）

微妙に震えているエヴリーヌにプリネは首を傾げた。

実はエステル達に護衛されたナイアル達はその後メイベル市長と同じように密寄せ用にペテレーネやメンフィルの武官達に真面目な記事を書く代わりに、ペテレーネ達に直接取材をさせてもらおうと大使館を訪ねたのだが、イリーナが対応したのだ。最初はナイアル達の言い分を真面目に聞きじゅうやって断ろうかと思案していたイリー

ナだつたのだが、ドロシーが言った「そうそう、美人で永遠に年をとらないと言われる噂の闇の聖女様や美女揃いのメンフィルの武官の方達を表紙に飾れば部数が数十倍増間違いナシですよ～」と言つ余計な言葉でイリーナは固まり無表情になつたのだ。それに慌てて弁明したナイアルだつたがさらにドロシーが闇の聖女の娘や次期皇帝も容姿淡麗という噂でペテレーネやカーリアン達と同時に載せればさらに売上が上がるなどと場を悪化させる言葉を言い、それを横で聞いていた門番の兵達もナイアルとドロシーを睨み、それに気付いたナイアルは誤解を解こうとしたが時すでに遅く、命の恩人であるプリネや自分を励ましてくれたリフィア達に強い感謝と高い忠誠心を持つイリーナは彼女達を下らない紙面に載せまいと笑顔で断つたのだ。なんとか食い下がるうとしたナイアルだつたのだが、誰もが見惚れるような笑顔でありながら迫力のあるイリーナの笑顔に負けすごすごと引き下がつたのだ。それを隠れて見ていたプリネ達はイリーナが戻つて来た後讃めて感謝したのだが、エヴリーヌは自分に向けられていないにも関わらずイリーナの迫力に恐怖感を覚え、人知れずイリーナを怒らせないようにしようと誓つたのだ。ちなみに同じようにナイアル達とイリーナのやり取りを隠れて見守つていたリウイは「そういう所まで受け継がれなくていいだろう……」と呴き冷や汗をかくと同時にやはり転生したイリーナだと感じ、新たに見せたかつてのイリーナの片鱗を見て複雑な思いになつたのだ。

「それが私の務めですから。さ、皆さんはどうぞ中へ。市長をお待ちになつています」

そんなリフィア達の様子に特に気にも止めずリラはメイベルの執務室に案内した。

「市民からの苦情の処理……ボース上空の飛行制限によるマーケット商品の納入遅れ……下水道設備の修理について……女王陛下への贈答品の選定……アンセル新道での魔獣被害……一時的な陸路でのメンフィルとの取引の詳細……」

メイベルは次々に問題になつていることが書かれてある書類を読み上げていってどうするか考えた。

「もうう、いつになつたら書類の処理が終わるんですのーー…しかし、あまりの多さに悲鳴を上げた。

「あのー……」

そこにリラに案内されたエステル達が入つて来て、エステルが恐る恐る話しかけた。

「あ、あら……？ オホホ、皆さん。戻つていらしたんですか？」

それに気付いたメイベルは氣不味そうな表情をして答えた。

「お忙しそうですけど……お邪魔してもよろしいですか？」

「コホン、もちろんですわ。モルガン将軍からの情報ですね？ 早速、伺わせていただきます」

ヨシュアの言葉にメイベルは一度咳払いをすると、報告を聞く姿勢になつた。そしてエステル達はモルガンから得た情報を報告した。

「……ご苦労様です。大体の状況は飲み込めました。空賊団によるハイジャック。そして身代金の要求ですか……。思つた以上に深刻な事態ですわね。」

「遊撃士だってバレなければ、他にも掴めたと思うんだけど……」メイベルが話を聞いて言つた後、エステルは申し訳なさそうな表情で肩を落として呟いた。

「いえ、墜落事故でないことが判明しただけでも助かりましたわ。これでボース市としても対策が立てられるというものです。早速、市民へのアナウンスと乗客の家族への対応を考えないと……」メイベルはそんなエステルを励ますようにお礼を言つた。

「大変ですね……ただでさえお忙しそうなのに。」

「ふふ、それが市長の責務ですわ。ところで、犯人の正体は明らかになつたわけですが……。引き続き、事件の調査と解決をお願いしてもよろしいでしょうか？」

ヨシュアの労いにメイベルは笑つて答え、調査の続行を嘆願した。

「もちろん、そのつもりよ。あたしたちも例の空賊団とは一度やり合つた因縁があるからね。遊撃士協会のメンツに賭けて、王国軍だけに任せたはおけないわ。」

「うん、そうだよね！父さんのこともあるし、今度こそ決着をつけなくちゃ…」「…………」

ショラザードとエステルは意氣込んだがヨシュアだけは黙つていた。

「ん、どうしたの？ 難しいカオしちゃつて……」

ヨシュアの様子に気付いたエステルはヨシュアに尋ねた。

「うん……色々と考えてみたんだけど。どう考へても信じられなくてさ。」「信じられない？」

ヨシュアの言つた言葉に理解できないエステルは聞き返した。

「あの父さんが空賊に遅れを取つたことだよ。ロレントに現れた連中だけで実力を判断するのも何だけど……」

「確かにそれは言えるわね。あの程度の集団だったら、先生なら軽くあしらえるはずよ。」

ヨシュアの言葉にショラザードも頷いて同意した。

「もー、ヨシュアもショラ姉も父さんを買いかぶりすぎだつて。確かに、けつこう腕は立つけど、集団相手じゃキツイと思うし……」

2人の様子にカシウスの実力を知らないエステルは笑つて否定した。

(リフィアお姉様、確かにエステルさんのお父様つて……)
(うむ、かの「剣聖」だ。他者の強さに厳しいファーミシルスも評価していた男が賊ごときで遅れをとるとは確かに思えんな……)

一方プリネとリフィアは3人の会話から疑問に思つたことを小声で会話した。

「あの、ちょっと宜しいかしら? エステルさんたちのお父様も例の船に乗つていらつしゃつたの?」

「あ、話してなかつたっけ……。恥ずかしながらそつなの。しかも遊撃士つだつたりして。カシウス・ブライトつていうんだけど……」

マイベルの疑問にエステルは恥ずかしそうに答えた。

「カシウス・ブライト……今、そうおつしゃいまして! ?」

「え……うん? ?ひょつとして知り合いとか?」

カシウスの名を聞いてマイベルは驚いて立ち上がり、それに驚いたエスティルはたじろいだ。

「直接の面識はありません。ですが、お話は伺っていますわ。そう……そうだったのですか……。これはひょつとして軍との交渉に使えるかも……」

「市長さん?」

独り言を言いだしたマイベルにエスティルは首をかしげて言った。

「……失礼しました。皆さんの胸中、お察ししますわ。事件の解決に役立つのなら、どのような協力でも惜しません。何かご入用になつた時には遠慮なく申しつけてくださいませ。」

エスティルの言葉にハツとしたマイベルは気を取り直して全面的な協力の言葉をエスティル達に言った。

その後市長邸を出たエスティル達は今後の方針を話しあい、エスティルの提案で新聞記者であるナイアル達が何か情報を持つていなか聞くため、

エスティル達は事件の手掛かりのためにナイアル達を探し始めた……

……

第32話（後書き）

ボース編もいいんですけど早くルーアン編を書きたいです……なんせ、ルーアン編では新たなクロスオーバーキャラを2人出すつもりですし、しばらく出番無しだった旧幻燐キャラも出せますから。ただ、ルーアン編とグランセル編はネタはあるんですけどツアイス編は全然ないのでいいかげんになるかもしません。感想お待ちしております。

～ボース市内・居酒屋『キルシ』～

ボース市内を探してようやく見つけたエステル達だったが、そこには酔っぱらって机に伏せているナイアルを見つけた。

「うーーーーチクショウウ……。つたく冗談じゃねーぞう……。
うーん……ヒック……」

「見つけはしたけど、ベロンベロンに酔ってるわね～。取材拒否されたことがそんなにショックだったのかな？」

昼間から酔っているナイアルにエステルは呆れて呟いた。

「男のクセにだらしないわね。酒は呑むものであって、呑まれるものじゃないのに。」

「全くじやな。」のよつな少量の安酒ぐらいで酔うとはだらしないの。

ナイアルの状態を見てショラザードは溜息をつき、酒瓶の匂いで判別したリフィアは呆れた。

「底なしのショラ姉と一緒にされてもねえ……」

「リフィアお姉様、さすがに私達が飲んでこると比べるのはちょっと……」

ショラザードの言葉にエステルはジト目でショラザードを見て呟き、皇族であるため良い種類のお酒以外はあまり飲んだことのないプリンセスはリフィアの言葉に苦笑した。

「失礼ね、底なしつていうのはアイナみたいな女をいつのよ。あの女、いくら飲んでも顔色変わらずに平然としてるしね。あたしもたまに気持ちよく酔っ払う酒飲みと一緒にしないでちょうどいい。」「よくゆーわよ。こくら酔つても潰れずに、ひたすら周囲を巻き込

むくせに。ねえプリネ、もしかしてショーラ姉、そつちでも迷惑をかけなかつた?」

「あはは……それを言つのは控えさせていただきます。」

「ショウさんガザルとしたら、アイナさんはタガつて感じかな。どちらも底なしには違いないと思ひますけど……」

「むう……」

エステルの言葉に反論したショーラザードだつたが、エステルとヨシコアの言葉と苦笑したプリネに黙つてしまつた。

そしてエステル達が騒いでいると机に付していたナイアルは起きた。

「…………うーん…………うー。ここは…………?」

「田、醒めたみたいですね。飲み過ぎは体に良くないですよ?」

「く……頭がズキズキしやがる…………ってなんだあ? 新米遊撃士どもじやねえか。おいおい、なんで俺がロレントなんかにいるんだ!? たしかボースまで歩いて……」

ヨシコアの心配する言葉に気付いて、エステル達を見たナイアルは酔つているせいか見当違ひな答えを言つた。

「なに寝惚けてんのよ。あたしたちもボースに来たの。」

ナイアルの様子にエステルは溜息をついて答えた。

「ふいーっ…………まったく驚かせやがるぜ…………。おっと、こらまた色っぽい姉ちゃんと一緒にだな。」

エステルの言葉に安堵をついたナイアルはショーラザードに気付いた。「初めまして、記者わん。ショーラザード・ハーヴィイよ。この子たちの先輩にあたるわ。」

「ショーラザード……。おい、もしかして『風の銀閃のショーラザード』か?」

ショーラザードの名前を聞いたナイアルは驚いてショーラザードを見た。

「あら、光榮ね。あたしの名前を知つているの?」

ナイアルの様子にショーラザードは嬉しそうにしながら答えた。

「ああ、噂くらいだがな。若手遊撃士の中じゃあ、1、2を争うことメンフィル関係者以外じゃ数少ない魔術の使い手らしいじゃねえか。噂によつてはあの”闇の聖女”的弟子つていう噂もあるんだが……ちょうど良い機会だ。あの噂は本当なのか？」

「ええ、そうよ。師匠とは6年ぐらいだけど魔術に関する事では師弟関係にあるわ。」

「マジかよ…………！－ちなみにこのことを記事にしていいか！？」
ショラザードの噂の真実を知ったナイアルはショラザードに記事を書いていいか尋ねた。

「私個人はいいんだけど、師匠がなんて答えるかしらねえ……記事を書くにしても師匠やメンフィル大使に許可を取つてもらわないとダメよ。」

「クソ、やつぱりか……許可なしで勝手に書いてメンフィルに抗議される訳にもいかないしな……かと言つてしまらく大使館には近寄れねえし……ハア……まあいい。そんな有名な遊撃士がボースにいるつてことになると、お前たちも例の事件を調べに来たわけだな？」

ショラザードの答えを聞いたナイアルは肩を落として溜息をついた後、気を取り直して聞いた。

「まあ、ね。そつちは何か情報集まつた？市長さんちの前で見かけたけど、なんだか困つてたみたいじゃない。」

「くそ、あれを見られてたのか……。ああ、そうだよ！ネタが無くて困つてたところぞ！－」

エスティルの答えと質問にナイアルは逆ギレした。

「あ、やつぱり？」

ナイアルの様子にエスティルは苦笑しながら答えた。

「なにせ、軍による情報規制のせいで事故かどうかも判らない状況なんだ。直接、モルガン将軍に会いにハーケン門に行こうとしたら検問に引っかかるし……ならせめて、噂の美人市長にインタビュー

しようと思つたら、メイドから門前払いを喰らう……。おまけに、あのトンチキ娘は事あるごとにヘマをしてかすし……メンフィル大使館の取材も記事は真面目にして、ついでに闇の聖女達の写真を入手して表紙にしようと思つていていたのにあのトンチキ娘は……！おお、女神よ！俺が何をしたっていうんですか！」

ナイアルは今まで溜まった鬱憤を晴らすかのように話した後悲壮な表情をした。

「追い詰められているわね～。そんなに情報が知りたければ、教えてあげないでもないけど……」「…………」

「へ……？」

エスティルの答えにナイアルは呆けた。

「あたしたち、メイベル市長に協力する形で事件を調べてるの。市長さんの紹介があつたから一応、モルガン将軍にも会つたわよ。」「…………マジで？」

エスティルの説明にナイアルは信じられない表情でエスティル達を見た。

「うん、マジで。」

ナイアルの様子にエスティルは得意げな表情をした。

「おおおおおお！これぞ女神の助けだぜっ！どうか頼む！その話、俺にも教えてくれっ！」

エスティルの答えを聞いたナイアルは目を輝かせ、喜びの叫び声を上げて深々と頭を下げた。

「それは構いませんけど……。ナイアルさん、こういつ時のルールを忘れていませんか？」

「…………え？」

ヨシュアの予想外な一言にナイアルは呆けた。

（フフ、ヨシュアさんってば遊撃士に成り立てなのによくわかっていますね。）

（フム。確かにあやつは取引の基本というのをわかつておるな。）
（キャハッ もしかして、これが裏の取引ってやつ？）

(H、エヴリーヌお姉様……それはちょっと違つと思います……)

エステル達の会話を黙つて聞いていたリフィア達はエステル達には聞こえないぐらいの小声で会話をしていた。

「フフ……情報はタダじゃないってこと。代価が必要だつて言つてるわけ。」

「ミ、ミラを取るつもりかよ？自慢じゃねえが、取材費なんぞひとつに使いきつちまつたんだ！」

ショラザードの答えにナイアルは青褪めて答えた。

「情報屋じゃないんですからミラを取つたりしませんよ。ナイアルさんは事件直後にボース入りしていましたよね？色々と、面白そうな話を耳にしているんじやないですか？」

ナイアルの様子にヨシュアは呆れながら尋ねた。

「チツ、大人しそうな顔をして、なかなか喰えない小僧だぜ。言つておぐが、こっちのネタはそれほど大したものじやねえぞ？」

ヨシュアの答えを聞いたナイアルは舌打ちをした後、念を押した。

「事件に関係あることだったら、どんな些細な情報でも構いません。ただし……出し惜しみは止めてくださいね？」

「わかった、わかりましたよ！こちらが出せるネタは2つある。そいつで手を打つてくれ！」

ヨシュアの冷ややかな答えにナイアルは必死に頼んだ。

「決まりですね。」

ナイアルの頼みにヨシュアは頷いて、エステル達もメモやペン等を出してナイアルの情報を聞く姿勢になつた。

「最初のネタは、西の方にあるラヴェンヌ村での目撃情報でな。ちょうどボースを訪れていた村人から聞いた話なんだが……。事件があつた夜、空飛ぶ大きな影がある村人によって目撃されたらしいんだ。」

「空飛ぶ大きな影？そ、それって……」

ナイアルの話にエステルは身を乗り出した。

「ああ、例の定期船だって誰が聞いたって思うだろ？だが実際、軍の部隊が行つても何も見つけられなかつたらし……」

「なーんだ。期待して損しちゃつた。」

「つまり、単なる見間違い？」

しかしナイアルの答えを聞いたエステルは肩を落とし、ショーラザーも溜息をついた。

「だから言つただろうが！大したネタじゃないって！こんなネタでも、情報規制下じゃ集めるのに苦労したんだからな！」

2人の様子を見たナイアルは吠えるように答えた。

「『』苦労をまです。それで、もう一つのネタは？」

「くつ……。もう一つは、軍の情報部が動き始めているらしいことだ。」

先を促すようにしたヨシュアの態度に弱冠の悔しさを覚えつつナイアルはもう一つの情報を話した。

「情報部？」

「噂は聞いたことがあるわね。最近、王國軍に新設されたばかりの情報収集・分析を行う集団だつて。」

なんのことかわからないエステルにショーラザードは説明した。

「ああ、王室親衛隊と並ぶほどのエリート組織だつて触れ込みだぜ。司令を任せているリシャール大佐という人物がこれまたキレ者っていう噂でな。今回の事件も、彼にかかりつたら解決確実と囁かれているらしい。」

(…………リフィアお姉様、ご存じでしたか？)

(…………いや、情報部やリシャールとやらは余も知らぬ。恐らく最近できたのであるづな。しかし「情報部」か……)

(…………念のためにお父様に調べて頂いたほうがいいのでは？)

(…………そうだな。まあ、例え情報部とやらが余達を探っていたと

しても、余達の弱みは握れまい。兵達の情報徹底はしているし大使館の警備も固いしな。）

（ええ……お父様の弱みとなるであります、傍にはお父様を含めメンフィル屈指の戦士達がいますし、その情報は私達を除いて”過去の方”を知っている人しか知りませんしね……）ナイアル達の会話を黙つて聞いていたプリネ達はきな臭さを感じて警戒する会話を小声でしていた。

「ふーん……。でも、あたしたちの捜査には役に立たない情報のよーな。」

プリネ達の会話に気付いていないエステルはナイアルの情報に辛辣な意見を言った。

「悪かったな、役に立たなくて！だが、約束は約束だ！お前たちも喋つてもらうからな！」

エステルの言葉にナイアルは叫んでエステル達を睨み、ヨシュアに記事の内容になるであろう情報の提供を求めた。

「ええ、それはご心配なく。」

ナイアルの言葉にヨシュアは冷静に答えてモルガンから得た情報を一通り伝えた。

「空賊団の『カプア一家』……王家と飛行船会社に身代金要求……メンフィルの静観。それだ！そーいう決定的なネタが死ぬほど欲しかったんだよっ！」

ヨシュアが話した情報にナイアルは満面の笑みを浮かべて立ち上がつた。

「気に入つてもらいましたか？」

ナイアルの様子からわかつていながらもヨシュアは尋ねた。

「おうよーこれで記事が書けるつてもんだ！こうじちゃいられねえ……ドロシーのヤツを見つけないと！それじゃあ、またなッ！」

そしてナイアルは店員に勘定を払うとその場から飛び出して行った。

「す、すつごい勢い……」

「よっぽどネタに困つて追い詰められてたんだううね。協力できて良かつたよ。」

ナイアルの行動にエステルは驚き、ヨシュアは笑顔で答えた。

「それよりあの記者の方から得た情報をどう扱いますか？」
これからの方針を考えるためにプリネは提案した。

「うん……それなんだけど、あたしは空飛ぶ大きな影の話、気になつたんだけどみんなは気にならなかつた？」

「ラヴェンヌ村の目撃情報だね。軍の調査が入つたってことは何もない可能性が高いと思うけど。」

エステルの質問にヨシュアはナイアルから得た情報から仮の結論を言った。

「でも、その調査が完璧とは限らないじゃない？ モルガン将軍じゃないけど、軍人つてアタマ堅そだから見落としてることもありそうだし。」

「確かに……。ダメもとで調べてみる価値はありそうだね。」

「ええ、私もエステルさんの考えには賛成です。」

「うむ、余もそう思うぞ。メンフィル領内で起こつた事件も軍では得れなかつたが遊撃士では得れた情報も過去数例あつたしなー！」

エステルの説明にヨシュアやプリネ、リフィアは賛成した。

「ふふ、あんたちも色々身に付いてきたじゃない。ラヴェンヌ村は、西にある果樹栽培が盛んな小さな村よ。西ボース街道の途中から北に向かう山道の先にあるわ。さつそく行つてみるとしますか。」「うん！」

そうして、エステルたちは空飛ぶ大きな影の真偽を確かめるためとさらなる情報の獲得のため、プリネ達には引き続きボース市内や市外にあるヴァレリア湖にある宿屋での聞き込みを頼みエステル達はラヴェンヌ村へと向かつた……

第33話（後書き）

感想お待ちしております。

第3・4話（前書き）

いよいよ、新クロスオーバーキャラ登場ですーー！

ナイアルの情報の真偽を確かめるためにエスティル達はボース西街道の先にあるラヴィンヌ村へ続く道、ラヴェンヌ山道を歩いていた。

（ラヴェンヌ山道）

「あれ……？」

「おつと……」

下つて来た人物 アガットもエスティル達に気が付いて立ち止まつた。

「シエラザードか。珍しいところで会うもんだな。」

エスティル達の中にシエラザードの姿を見たアガットは口を開いた。
「それはこっちの台詞だわ。王都方面からこっちに移つてきたって話は聞いたけど、あんたも事件を調べに来たクチ？」

「いや、ヤボ用でな……。そういうや、例の事件は空賊の仕業だつたらしいな？しかし、お前が来たんだつたら安心して任せられるつてもんだ。せいぜい頑張ってくれよ。」

「なによ、冷たいじゃないの。先生が捕まつたかもしけないって、あんたも聞いているはずでしょ？」

協力的でないアガットにシエラザードはムツとして言い返した。

「捕まつた？あのカシウス・ブライトが？はははッ、冗談キツイぜ！あの喰えないオッサンが空賊ごとに遅れをとるもんか！なんかの間違いに決まつてるさ。」

「あたしもそう信じたいけど……」

シエラザードの発言にアガットは笑い飛ばして否定し、言った本人であるシエラザードもあまり確信を持てなかつたため溜息をついた。

「（何なのかしら、）この人、……」

「（分からぬけど……遊撃士であるのは確かみたいだね。）」

エステルとヨシュアはアガットの正体を知らないため小声で何者かを話していた。そしてアガットはエステル達にも気が付き、シェラザードに聞いた。

「ところで……そのガキどもはなんだよ？見たところ、新入りみたいだが。」

「ふふん、聞いて驚きなさい。カシウス先生のお子さんよ。」

アガットの疑問にシェラザードは自慢をするように言った。

「こりや驚いた……あのオッサンの子供かよ。ふーん、こいつらがねえ……」

シェラザードの言葉に驚いたアガットはエステルとヨシュアを注意深く見た。

「な、なによ？じろじろ眺め回しちゃって……」

アガットの様子にエステルは戸惑った。

「黒髪の小僧はともかく……そっちの娘はドシロウトだな。本当に、オッサンの娘なのか？」

「あ、あんですつてー！？」

一通り見たアガットの結論にエステルはムツとした表情で声を上げた。

「彼女は正真正銘、カシウス・ブライトの娘です。僕の方は、養子ですけど。」

「そうよ。それにこの子はちょっと特別でね。」

「特別？どういうことだ？」

ヨシュアはアガットにエステルのことを説明し、シェラザードはそれに頷いた後意味ありげなことを言い、それを聞いたアガットは頭に疑問符を浮かべた。

「エステル、パズモのことを見せて上げたら？」

「あの子は見せ物じゃないんだけどな……まあ、いいわ。……お

いで！パズモ！

ヨシュアの言葉にエステルは溜息をついた後、パズモを召喚した。

（何か用？エステル。）

「ごめんね、ちょっとだけ」いつにあたし達の力を見てもらうため
に呼んじゃった。」

要件を聞くパズモにエステルは手を合わせて謝った。

「んな！？なんだ、こいつは！？どうやって現れた！？」

一方パズモを知らないアガットはパズモの登場の仕方と姿を見て驚
愕した。

「この子はあたしの守護精霊よ！？」

驚いている様子のアガットにエステルは胸を張つて答えた。

「守護精霊？なんだそりや？？」

エステルが言った言葉の意味がわからないアガットは聞き返した。
そしてパズモのことをエステル達はわかりやすいうように説明した。

「ふーん。要するにその小さいのはテメエがあまりにも弱いから情
けをかけているだけじゃねえか。そんなんにまで情けをかけられる
なんてドシロウトであるいい証拠じゃないか。」

「あ、あんですってー！？あたしとパズモの出会いも知らないくせ
にあたしとパズモの絆をバカにするようなことを言わないでちょう
だい！」

（そうよーー私はエステルのことが好きだから契約したのよーー）
アガットの言葉にエステルとパズモは怒つて睨んだ。

「ふーん……ま、そんな事はどうでもいいか。」

「ど、どつでもよくないッ！」

（もうよつーー今の発言、取り消しなさいーー）

エステル達の睨みを軽く流したアガットにエステルとパズモはアガ
ットをさらに睨んだ。

「じゃあな、シェラザード。ガキどもに足を引っ張られないよう、
せいぜい気を付けるんだな。」

「はいはい。あんたこそ突つ張りすぎて痛い目に遭わないよう注意なさい。…………あ。そう言えばもうあんた、一度痛い目見てるわね。」

「あん? どういう意味だそれは?」

去り際に放ったアガットの警告にシェラザードは呆れたように答えた後、あることに気付きそれを言った。一方それを言われたアガットは何のことかわからず去り掛けだつた足を止めてシェラザードの方へ向いた。

「聞いたわよ」 プリネさんに喧嘩売った拳句、返り討ちにあつちやつたつてこと』

シェラザードはからかう表情でアガットに言った。

「ぐー? クソッ ……あの爺つ……!! 余計なことを話しゃがつて!」

図星をつかれたアガットは一瞬顔を顰め、悪態をついた。

「そのことにこりたら、自分の腕を過信せず精進することね~」

「チツ……余計なお世話だよ!! あの小娘から受けた借りもリベンジしていつか返すつもりだから、せいぜい言ってろ!」

シェラザードの言葉にアガットは舌打ちをして、いつかプリネとまた再戦することを言った後エステル達の元から去つて行つた。

「あら~ ……あの様子だと懲りてないわねこりゃ。」

アガットの後ろ姿を見送つたシェラザードは呆れて呟いた。

「な、なんなのアイツ! ? めちゃめちゃムカつくんですけどー! ……つてあれ? さつきシェラ姉、今の失礼なヤツがプリネに負けたつて言ったよね? 確かその負けた人の名前つてアガット? だっけ?」「うん、そうだね……今の人『重剣のアガット』だね。」

最後まで自分達を認めなかつたアガットにエステルは頭にきて怒つた後、あることに気付きヨシュアはそのことに頷いた。

「『重剣のアガット』? シェラ姉の『風の銀閃』みたいに一つ名が

ついてるみたいだけど、あんなのが凄いの？」

「ええ。アガツト・クロスナー……遊撃士協会の正遊撃士よ。特定の所属支部を決めずに各地を回りながら活動してるわ。得物は、魔獸を一刀両断できるほどの質量のある大剣……以前にも言ったけど、かなりの凄腕よ。」

エステルの疑問にシェラザードは領いて説明した。

「ふん、凄腕だろうが失礼なヤツには違いないわよ。それにプリネに負けたんでしょ？ だったら大したことないんじゃないの？」

シェラザードからアガツトのことについて説明されたエステルは鼻をならしてそっぽを向いた。

「あんたね……プリネさんの場合は例外よ。あの人は”闇夜の眷属”である上普段から強豪揃いのメンフィルの中でも一、二を争う武人達や大陸最強と言われている父親に鍛えられているんだから、アガツトに勝つて当たり前よ。」

エステルの発言にシェラザードは呆れて言った。

「そうだよ、エステル。でもそう言えばの人、父さんの実力は認めているけど、好意的とはいえない態度だつたね。」

「そう言われてみればそうよね……なんか父さんの知り合いみたいだっただけど……」

シェラザードの言葉に頷いたヨシュアはあることに気付きそれを言い、またエステルもアガツトが父を知っている風のようなことを思い出そうとしたがヨシュアが呼び止めた。

「色々と事情があつてね……。先生に対しても張つてるのよ。」

「ふーん……。まあ、どうでもいいか。あんな失礼なヤツのことなんか。ラヴェンヌ村へ急ぎましょ！」

シェラザードの説明をエステルは聞き流した後、先に進むために歩き出そうとしたがヨシュアが呼び止めた。

「待った！ エステル！」

「どうしたの、ヨシュア？」

ヨシュアの呼び止める言葉に気付いたエステルはヨシュアに振り返つた。

「…………誰かに見られている気がするんだ……」

「へ……！？誰もいなきど？？」

ヨシュアの言葉に驚いたエステルは周囲を見回したが誰もいなかつたのでヨシュアにそれを言った。

「…………めん。ただの氣のせいだつたみたいだ。心配せでござめん。」

「もう、ヨシュアつたらビックリするようなことを言わないでよね」

周囲を全力で警戒したヨシュアだつたが敵意は感じられなく、すぐに視線の感触も消えたので警戒を解いてエステルに謝った。

「あんたはもう少しヨシュアを見習いなさい。あんたはガードがすぎるからね。」

「あら。うー……そういうわれても、あたし自身よくわからないのね」。

ショラザードはエステルに注意した後、エステルの額を指で軽く叩いた。ショラザードに注意されたエステルは唸つた。

「全く……パズモ、これからもこの暴走娘を頼むわね。」
(ええ。そのために私がいるんだから。)

エステルの様子に溜息をついたショラザードは常にエステルの傍にいるパズモにエステルのことを軽く頼んで、パズモはそれに頷いた。
「はは、その内身につけると思うよ。じゃあ、行こうか。」

「ええ、そうね！」

3人のやり取りにヨシュアは苦笑した後、先を促しエステルもそれに頷いて、パズモを一端自分の身体に戻した。そして3人は再びラヴィンヌ村へ向かつた。

エステル達がその場から離れた後、ヨシュアが言っていたエステル

達 正確にはパズモを召喚したエステルを見つめる存在が崖の上にいて、その存在は崖から飛び降りてエステル達が向かつた方向を見つめていた。

「…………」
その存在は鋭い瞳と牙や爪を持ち、そして炎を纏つたような見事な毛並みの狐であつたが、尾は数本あり体の大きさは普通の狐と比べると数倍は大きい狐であった。

「…………」
そしてその狐は素早い動きで崖を登り、エステル達を追うようにエステル達が向かつた方向へ走り去った。

第34話（後書き）

最初の新クロスオーバーキャラは序盤で仲間になり、再行動、遠距離攻撃、靈属性対策、探索要員に加えて戦闘能力も非の打ちどころなしの万能で、序盤では数少ない前衛かつ主力、そして切り込み隊長だったあのキャラです。本当お世話になりましたよ。……まあ、エウ娘を含めて2週目以降に仲間になるキャラ達や強化されるメインヒロイン達があまりにも反則なスキル、強さだつたため2週目以降は2軍落ちという悲しさでしたが……登場の仕方がどこかの狼に似ているのは気にはしないで下さい。……感想お待ちしております。

（ラヴィンヌ村）

「「」がラヴェンヌ村……ずいぶんのどかなところよね。あ、果樹園があるんだ。」

「果物の生産で知られてるけど、その昔は採掘で賑わったそうよ。北の方に、廃坑になつた七耀石の鉱山があるって聞いたわ。」

初めて見るラヴィンヌの風景に興味深そうに見ているエステルにシェラザードは説明した。

「ずいぶん詳しいですね。前にも来たことがあるんですか？」

「正遊撃士になるために、修行の旅をしていた頃にね。あの時は、飛行船に乗らずに王国全土を歩き回つたもんだわ。」

ヨシュアの疑問にシェラザードは昔を懐かしむような表情で答えた。

「え、どうして？ 飛行船を使つた方が便利なのに。」

一方エステルはシェラザードの行動がわからず、首を傾げた。

「『飛行船は確かに便利だが、五大都市しか行き来していない』『その便利さに慣れてしまつと他の場所に目が行き届かなくなる』『まずは、自分が守るべき場所を実際に歩きながら確かめてみろ……』そんな風にカシウス先生に勧められたのよ。」

「へえ、父さんが……」

「確かに、事件が起つた時、そこが行つたことのない場所だと手遅れになる可能性もありますね。あと、犯罪者を追いかける時にも地理を知つていた方が有利ですし……」

シェラザードの説明にエステルは感心し、ヨシュアは頷いて同意した。

「ふふ、そうじつ。さてと、それはともかく……。例の日撃情報について調べてみるとしようか。」

ショラザードに調査を促されたエステルだが、いきなり村の人全員に聞いて回るのも妖しいので村長に事情を話すこととした。そして村長からはある子供がエステル達が注目していた情報を持つているようなことを聞いて、エステル達はその子供を探した。しばらく村を歩きまわると池の桟橋に一人の男の子がいたので情報の元の少年かと思い近付いた。

「あれ、お姉ちゃんたち、見かけないカオだね……。フルーツ買いに来た商人さん？」

エステル達の足音に気付いた少年はエステル達の顔を見て疑問に思つたことを呟いた。

「ふつ、それが違うのよね。何を隠そつ、遊撃士よ！」

「ブレイサー？ アガットお兄ちゃんと同じ？ でもお姉ちゃん、そんなに強そうには見えないけど……」

気取つて答えたエステルに少年はエステル達を見て、呟いた。

「うぐつ。はつきり言つてくれちゃつて……。でも、この華麗な棒術を見て果たして同じことが言えるかしら…」

少年の呴きにエステルは団星をつかれた表情をした後、気を取り直し棒を取り出し、回転させた。

「わ、わわ！ クルクル回つてすごいや！」

「むふふ、思い知ったかね。それじゃ、もつと凄い技を……」

「エステル、はしゃぎすぎ。それよりも……もしかして君がルワイ君？」

驚いている少年にエステルは胸を張りさらに向かをしようとした時、ヨシュアはエステルの先の言葉を遮つて少年に確認するように話しかけた。

「あ、うん……。どうして名前を知ってるの？」

「村長さんに聞いたんだ。君が、空飛ぶ影を見たってね。その時のことを見きにきたんだ。」

自分の名前を言われた少年 ルゥイは首を傾げて答へ、ヨシュアはルゥイに話しかけた理由を言った。

「え、でも……。兵隊さんが調べて何も見つからなかつたって……」「うん、それでもいいんだ。僕たちにも教えてくれないかな？できる限り詳しく述べるね。」

自信なさげに答えるルゥイにヨシュアは諭すように言った。

「う、うん……」

ヨシュアの言葉にルゥイは頷いて少しの間考え、やがて口を開いた。

「あのね……ボク、星を見るのが好きなんだ。それで、夜中に家を抜け出して、ここで星を見たりするんだけど……。このあいだの夜、夜空に2つの影が動くのを見かけたの。」

「え、ちょっと待つて……。空飛ぶ影って2つもあったの？」

ルゥイの言葉とナイアルから得た情報が微妙に違っていることに気付いたエステルはルゥイに確認した。

「うん……。あつ、大きさは違つたよ。まるで親子連れみたいだった。」

「大きさの違う2つの影……」

「定期船と空賊艇……そう考へると辻褄が合つわね。」

「確かに、森に現れた船は定期船よりも小型でしたね。」

ルゥイの情報からエステルは考へるように呟き、ショラザードとヨシュアはその情報に正当性がありそうであることに頷いた。

「それで、その2つの影は北の方に飛んで行つちやつて……。そのまま見えなくなつちやつた。」

「北つていうと……」

「村の裏口からさらに山道が続いているわ。ずいぶん昔に廃坑になつた七耀石の鉱山があるみたいね。」

さらに続くルゥイの情報にエステルはショラザードに場所の確認をして、ショラザードはそれに答えた。

「兵隊さんたち、北の山道をテツティ的に調べたんだけど、なにも見つからなかつたつて……。だから、ボクが寝ぼけて夢を見たんだろうって言つて……。それで……バカにしたように笑つて……」ルウイは兵達にバカにされた嫌な記憶も思いだし、顔を下に向け瞳から涙が出始めた。

「ああ、もう……男の子が泣いたりしないのーあたしたちは兵隊とは違うよ。君の話が夢なんかじゃないって、ちゃんと証明してあげるんだから！」

「ほ、ホント……？」

エステルの慰めの言葉にルウイは顔を上げた。

「ホントもホント。どーんと任せなさいって！……そうだわ！重要な情報を渡してくれたお礼にいいものを見せて上げるわ……パズモ！！」

(今度は何かしら、エステル?)

ルウイの言葉にエステルは大きく頷いた後、パズモを召喚した。

「わあ……妖精さんだ！」

ルウイはパズモを見て目を輝かせた。

「ふふ～ん。こう見えてもお姉さんは妖精さんと仲良しなのよ。パズモ。（お願い、パズモ。少しの間だけでいいからこの子の周囲を飛び回つて上げて！）」

（わかつたわ、相変わらず優しいわね、エステル。）

エステルの念話にパズモは微笑して答え、ルウイの周りを飛び回つた。

「わ、わ、わ！凄い綺麗！お星様みたいだ！」

自分の周りを飛び回るパズモを見てルウイははしゃいだ。そしてある程度飛び回ったパズモはエステルの肩に座つた。

「妖精さんも君を励ましているんだから、君もべソかいちゃダメだからね？」

「う、うん……。お姉ちゃん達、いいヒトだね！」

エステルの言葉にルウェイは喜びの表情で答えた。

「（フフ、相変わらず子供に好かれやすいみたいね。それにパズモをあんな風に使役するとはね。）」

「（ええ……あれも人徳かもしませんね。それにあの場面でパズモを出して男の子のケアを頼んだのはブレイサーとしていい選択だと思います。）」

シリラザードとヨシュアはエステルの行動を微笑ましげに見て小声で会話をしていた。

「ん、どうしたの？」

エステルはヨシュア達が小声で会話をしているのに気付き振り向いた。

「いや、何でもないよ。それよりも、やるべき事は決まったみたいだね。」

「うん！早速、村の裏口から出て、北の山道を調べてみましょ！」
ヨシュアの言葉にエステルは頷き、ルウェイと分かれたエステル達は村の北にある山道の先にある廃鉱山へ向かつて行つた……

第35話（後書き）

感想お待ちしております。

第36話

ルウェイの情報の真偽を確かめるため、ラヴィンヌ村からさらに山道を登りエスティル達は廃鉱山についた。

（廃坑）

「（）」が廃坑の入口みたいだね。」

ヨシュアは頑丈な鎖が巻きつけてあり、南京錠によつて封鎖されている入口を見て頷いた。

「確かに、マルガ鉱山と同じよつた雰囲気は残つてゐるけど……。
（ずいぶん寂れちゃつてるわね）」

「（ずいぶん昔に閉鎖されたそよよ。鍵と鎖も錆び付いてゐるわ。最近、開かれたことは無さそうね。）」

エスティルの言葉に頷いたシェラザードは入口の状態を見て言った。
「（という事は、空賊たちが出入りした可能性もない……。だから軍も調べなかつたのかな？）」

ヨシュアはシェラザードの言葉から軍が調べなかつた理由を推測した。

「確かに、岩山の中を調べても、何かの手掛かりが見つかるわけ……。
（あれ？なんか、風が吹いてきてない？）」

「風つて、廃坑の奥から？」

エスティルの発言にシェラザードは不思議そうな表情をした。

「うん、そう。」

「ちょっと待つて……」

2人の会話を聞いたヨシュアは真偽を確かめるため、人差し指を口に含んでから、そつと立てた。

「…………本當だ……微かだけど風が吹いて来て

いる

ヨシュアは驚いた表情で呟いた。

「あ、やっぱり？」

「あんたって、時々驚くほどカンが冴えることがあるわねえ。さすが先生の娘つてところかしら。」

「父さんは関係ないってばあ。それヨリこの中……メチャメチャ気にならない？」

シェラザードの言葉に呆れたエステルは話を本題に戻した。

「確かに、どこかに通じてる可能性があるかもしれないね。調べてみる価値はありそうだ。」

「よーし、そうと決まつたら、さっそく鍵をブチ破つて……」
ヨシュアの言葉に同意したエステルは嬉しそうな表情で棒を出し、構えて棒に雷を流し始めた。

「こらこら、止めなさい。といつかそんなことしなくても、あんたしかできないことがあるでしちゃうが。」

エステルの行動をシェラザードは諫めた後、提案した。

「へ？ あたししかできなって？」

シェラザードに諫められたエステルは棒に雷を流すのを止めて、仕舞いシェラザードの提案に頭に疑問符を浮かべた。

「あ……そうか。エステル、パズモならこの入口の隙間を通して先にある光景がわかるんじゃないかい？」

ヨシュアはシェラザードの提案にいち早く気付きそれをエステルに説明した。

「あ、なるほど。オッケー、わかつたわ。……おいで、パズモ！」

ヨシュアに説明されたエステルは何かに閃いたような表情をした後、パズモを召喚した。

(どうしたの？ エステル？)

「ちょっとお願ひがあるんだけど、いいかな？」

(……話はエステルを通して聞いてたわ。ちょっと行ってくるねー。)

「うん、気を付けてね！」

エステルのお願いを聞いたパズモは小さな体で入口の合間を通り、奥へ飛んで行つた。そしてエステル達が少しの間、待つてるとパズモが廃坑の奥から戻つて來た。

「どうだつた？」

（一番奥が開けた所になつてているんだけど……そこに大きな飛行艇が一隻あつたわ！）

「え！？」

パズモの報告を聞いたエステルは驚いた。

「……その様子だと何かあつたようね。エステル、パズモはなんて？」

エステルの様子から何かあるとわかつたシェラザードはエステルに聞いた。

「……この奥に大きな飛行艇が一隻あつたって……」

「それって……」

エステルの報告を聞いたヨシュアは真剣な表情をして、シェラザードはその先の解答を答えた。

「定期船のことでしょうね……決まりね。急いで村に戻つて村長に相談してみましょ。鍵を持つているかもしれないわ。」

そしてエステル達は急いでラヴィンヌ村に戻り、村長に理由を話して鍵を借りて入口の鍵を開いてパズモの案内の元、廃坑の中を進んで行つた……

第36話（後書き）

今回は短くてすみません！——こで区切らないとす「——こ量になつてしまつので一端区切りました。もちろん、明日も更新できるので更新をお待ち下さい。感想お待ちしております。

（廃坑・奥）

「まぶし…………ん、あれって……」

廃坑を進み開けた所に出て、そこから太陽の光が差し込み、暗い廃坑を歩いていたエステルは太陽の眩しさに一瞬目を閉じた後、奥にある飛行船を2隻見つけた。

（静かに、エステル……）

声を出した時にエステルにヨシュアは囁いた。

（これは、大ビンゴね……）

シェラザードは2隻の飛行船を見て確信した。その2隻は行方不明の定期船『リンク』とロレンントで見た空賊艇であり、さらに空賊がいた！

「重い資材は放つておいて、食料品と貴重品を優先するんだ。できるだけ急げよ。グズグズしてると連中が来る。」

「…………がつてんだ、キール兄貴。」

以前エステル達がロレンントで戦った空賊の少女の2番目の兄、キールが部下達に指示をしていた。

（こ、こんな所に定期船が……あの子の話はやっぱり夢じゃなかつたんだ……）

エステルは前に見える光景を見て驚き小さな声で呟いた。

（ここは……露天掘りをしていた谷間ね……つまい隠し場所もあつたもんだわ。）

シェラザードは周囲の状況を見て納得した。

（あれ？パズモ、さつき飛行艇は一隻つて言つてなかつた？）

（ええ、私が見た時は大きな飛行艇だけで、あの小さな飛行艇

はなかつたわ。)

(..... つてことは、あいつら今来たといつてどこね。.....)

エステルは先行したパズモの情報が微妙に違つことに気付きパズモに念話で聞き、情報が違う理由を考えた。

(あれは、定期船の積荷を空賊艇に運び込んでいるのかな?)

ヨシュアは空賊達の行動を見て呟いた。

(そんなことよりまた逃げられる前に、なんとか捕まえなくちゃ!)

ヨシュアの疑問を置いておくことをエステルは小声で言つた後、武器を構え空賊達に近付いた。

「 はあ、これで三往復目かよ.....。まったく兄貴ときたら弟使いが荒くてたまらないぜ。まあいいや、これが終わったらゆっくりと身代金の交渉を..... 」

一通りの作業が終わり空賊達が集合しているといひでキールは一人嘆いた。

「 そこまでよつ! 」

そこにエステル達が乱入した。

「 なにつ! ? 」

キールと空賊たちは驚きながら振り向いた。

「 ここの世に悪が栄える限り、真つ赤に燃える正義は消えず..... ブレイサーブ、ただいま参上! 」

驚いているキール達に向かつてエステルは高らかに叫んだ。

「 」

しかし、エステル以外は全員静まり返った。

「 あり? 」

様子がおかしいと思ったエステルは周りを見た。

「 なんなの、ブレイサーブって..... 」

「 まったくもう。すぐ調子に乗るんだから。 」

(エステル、もうちよつとマシな名前はなかつたの.....)

「 な、なによう..... ちょっと外しちゃつただけじゃない 」

ヨシュアとシェラザード、パズモの呆れている様子にエステルは恥ずかしくなり顔が赤くなつた。

「お前たちは……ジョゼットがやり合つた連中！？は、話が違うじゃないか！どうしてこんな早く来るんだよ？」

キールはエステル達を見て焦つて口を滑らした。

「話が違う？早く来る？なにワケ判んないことを……」

キールの発言にエステルは首を傾げた。

「遊撃士協会の規定に基づき、定期船強奪、乗客拉致の疑いであなたたちを緊急逮捕するわ。覚悟はいいかしら？」

一方シェラザードはキール達に警告した。

「ちょ、ちょっと待て。ひょっとしてお前ら……3人だけで捕まえに来たのか？」

「何よ、見ればわかるでしょ？」

キールの発言が理解できずエステルは答えた。

「ふーん、なるほどね。あの連中とは関係ないわけか。だつたら話は早い……しばらく眠つっていてもらおうか！」

エステルの答えを聞いたキールは安堵の溜息をついた後、武器を構え部下達と共にエステル達に襲いかかろうとしたが

（……光よ、集え！光霞！）

「ウフ！？」

「――「ギヤあツ！？」」「――」

パズモが牽制代わりに空賊達の手前に放つた光の魔術は空賊達の目が眩ませ、衝撃を受けてのけ反らせた。

「ナイスよ、パズモ！よーし、あたしも……闇よ我が仇名す者を吹き飛ばせ！黒の衝撃！」

「――「グハツ！？」」「――」

そこをすかさずエステルは暗黒魔術を使って空賊達を吹き飛ばした。さらにエステル達に続くようにシェラザードも詠唱し魔術を放つた！

「これだけ広いとアレが使えるわね……ロントの借りを返させて
もううわよ！…………集いし怒りの風よ、吹きあがれ！！大竜巻！！」

「――「ウワアアアアアツ――――？？？？」」「――」

ショラザードが放つた魔術はエステルの魔術で吹き飛ばされ、呻いている空賊達の地面から竜巻ができ、その中にいた空賊達に悲鳴をあげさせながら空へ舞い上がらせた。

「グッ！？」

「――「グギヤツ！？」」「――」

竜巻がなくなり、空へ舞い上がっていた空賊達は地面に落ち、その衝撃に呻いた。

「クソ、やられっぱなしでいると……」

部下達が呻いている中キールはようよと立ちあがろうとしたが「そこまでです。」「――」

ヨシコアに首筋に武器をつけられ、固まつた。

「ふふうん、勝負ありね！」

自分達の勝利にエステルは得意げな表情をした。

「ク……なかなかやるじゃないか。まさか、魔術を使って来るとはな……ジョゼットを負かしただけはある。」

「おだてても何も出ないもんね。ほら、ひとつと降参して乗客たちを解放しなさいよ！」

痛々に顔を顰めているキールにエステルは乗客の解放を要求した。

「ははは！本当に何も知らないらしい。まったくおめでたい連中だぜ。」

しかし、キールは絶対的不利な中笑いだした。

「あ、あんですってー！？」

キールの笑いにエステルは怒つて叫んだ。

「これでもくらいなー！」

「――」

キールは隠し持っていた何かを地面に叩きつけた。すると突然煙が出て、エスティル達の視界を覆つた。

「な、なにこれ……」

「しまつた、煙幕！？」

「エスティル！！」

エスティルは煙に混乱し、ショラザードはしてやられた表情をした。また、ヨシュアはエスティルを心配して煙幕が出た瞬間エスティルの元に行つて、無事を確かめた。

「あーっははははは！積荷を残したのは残念だが、そのくらいは我慢してやるさ！あばよ、ブレイサーの諸君！」

エスティル達が煙幕で混乱している中、キールの高らかな声が響いた。そして視界が開けたときには、空賊艇は空を飛んでいた。

「じほつ、ゲホゲホ……。ちょっと田にしみた～……」

「大丈夫、毒性はない……普通の発煙筒だつたみたいだね。」

エスティルは咳き込んでいる中、ヨシュアは冷静に煙幕の正体を確かめて安心した。

「……見えなくなつたわね。やれやれ、一度ならず一一度までも取り逃がしたか。こりゃあ、あたしの方は降格されても文句言えないわね。」

ショラザードは逃げた空賊達の方向を見て溜息をついた。

「もう、ショラ姉つてば……。そんな風に、自分一人が悪いような言い方やめてよね」

「僕たちにだつて逃げられた責任はあります。悔やんでいる暇があつたら、今できる事をしておかないといふ」

「フフ、まったく……これじゃあ立場が逆だわね。幸い、定期船は取り戻せたし、さつそく調べてみるしますか。中に乗客がいるかもしれないわ。」

2人の慰めの言葉にショラザードは苦笑して言った。

「……うんー、とそうだ、パズモ！ありがとう！今は戻つて！」

(ええ！)

そしてエステルたちは定期船の中を調べ始めが、人や手掛かりもないのを見て肩を落としたが、空賊達のアジトをある程度予想できたのでアジトを見つけために軍に協力を仰ぐため、一端ギルドに戻つてそれらのことをルグランに相談するために定期船から出ると王国軍兵士が定期船を取り囲んでいた。

「え、ええーつー!?」「これってビッグコトーー!?」

「ハハ、これはさすがに予想外だね。」

「うーん、連絡する手間が省けたと喜ぶべきかしら……」

いつの間にか現れた軍にエステルは叫び、ヨシュアとショラザードは苦笑した。

「武器を持した不審なグループを発見！」

「お前たち！大人しく手を上げろ！」

兵士達は銃を構えエステル達に警告した。

「まつたく世も末だぜ。こんな女子供が空賊とは……」

「だ、誰が空賊ですってえー!?」この紋章が目に入らないのー!?

兵士の一人が呴いた言葉にエステルは怒り、遊撃士の紋章を見せた。

「フン、遊撃士の紋章か……。そのようなものが身の潔白の証になるものか。」

「モ、モルガン将軍ー!?」

「どうしてここに……」

しかしモルガンが現れエステルの言葉を否定し、エステルとヨシュアは現れたモルガンに驚いた。

「各部隊の報告に田を通じて調査が不十分と思われる場所を確かめに来たのだが……。まさか、おぬしらが空賊団と結託していたとは思わなんだぞ。」

「言いがかりをつけるのは止めていただけないかしら？我々は、そ

ちらより一足先にこの場所を捜し当てただけだわ。」

モルガンの言葉を聞いたシェラザードはモルガンを睨み反論した。

「空賊には後一步のところで逃げられてしましました……。人質の乗客もここにはいません。」

「フ、語るに落ちたな……。大方、我々がやって来ることをおぬしらが空賊に知らせたのだろう。」

ヨシコアは自分達は空賊でないと説明したが、それにモルガンは嘲笑して否定した。

「ちょ、ちょっとお！いいかげんにしてよねっ！」

モルガンの発言にエステルは叫んだ。

「それはこちらの台詞だ！者ども！こやつらを引っ捕らい！」しかしモルガンは聞く耳を持たず兵士達に命令してエステル達を拘束し、ハーケン門へ連行してしまった。

谷の上からそれらの出来事を見つめる存在がいて、その存在にはモルガンも気付かず去つて行つた。

「…………」

その存在はラヴィンヌ山道でエステル達を見つめいていた狐らしき存在で、エステル達が王国軍に連行され、その場からいなくなつたのを見ると踵を返してその場を去つた……

第37話（後書き）

碧のムービー第一弾を見て思つたことはランティイでよかつた～ですね！早くバトルシーンとかあるテモムービーがみたいですね……感想お待ちしております。

（ハーケン門・兵舎内の牢・深夜）

「明朝、將軍閣下自らの手で、あんたたちの尋問が行われる。そこで無実が証明されれば2、3日で釈放されるはずさ。ま、しばらくそこで頭を冷やしておくことだな。」

エスティル達を牢屋に入れた兵士はそう言つて去つて行つた。

「はあ、〔冗談じゃないわよ……。〕こちらの言つて分も聞かないで、こんな場所に放り込んでさ……」

「軍が空賊団を逮捕できれば疑いは晴らせるだらうけど……。」いつなると無理かもしれないな。」

牢屋に入れられたエスティルは溜息をつき、ヨシュアは頃垂れて呟いた。

「え、どうして？」

ヨシュアの言葉が気になつたエスティルは聞いた。

「廃坑で戦つた空賊リーダーの言葉を覚えているかい？『話が違つ、『来るのが早い』って。』

「そういえば、そんなこと言つてたかな。あ、まさかそれって……軍の部隊のことだったの！？」

「十中八九、そうだと思う。そしてそれが意味するのは……」

ヨシュアの説明を聞いてエスティルはある考へが浮かび、それを口にして驚きヨシュアはそれに頷いて遠回しに言おうとした所をショラザードが続けた。

「軍内部に空賊のスパイがいる。もしくは情報を流す協力者のような人物がいる…………つまり、そういうことね？」

「はい。」

ショラザードの言葉にヨシュアは頷いた。

「そ、それが本当だつたら絶対に捕まらないじゃない一やつぱり、あたしたちが頑張るしかないと……」

「八方塞がりつてやつね。こんな時に、先生だつたらどう切り抜け

るかしり……」

状況が分かつたエステルは青褪めて悔しがり、ショラザードも項垂れてどうするかべきか考えた時、隣の牢屋から声が聞こえて来た。

「フフフ……。どうやらお困りのようだね？」

「あれ……ヨシュア、何か言つた？」

「いや、僕は何も……」

「隣から聞こえてきたわ。しかも何だか聞き覚えのあるようなん……」

聞こえて来た声にエステルとヨシュアは首を傾げ、ショラザードは声の持ち主を思い出そうとした。

「おお、つれない事を言わないでくれたまえ。」この艶のある美声を

聞いたら誰だかすぐに判るだろうに……」

「」この根拠のない自信……

「そして自分に酔つた口調……」

青年の嘆くような声と言葉にエステルとヨシュアは疲れた表情で言葉を続けて

「ひょっとしなくとも、オリビエ？」

ショラザードがその名前を言つた。

「ピンポーン ああ、こんなところで再会することができるとな……。やはりボクとキミたちは運命で結ばれていらっしゃね。」

隣の牢屋にいる青年 オリビエは嬉しそうな表情で答えた。

「あ、あんた……どうしてここにいるのよ？ボースに案内したハズでしょ！」

「しかも、こんな牢屋に閉じ込められてるなんて……。一体、何をしでかしたわけ？」

牢屋にいる青年がオリビエとわかり、エステルは驚きショラザードはなぜここにいるかを尋ねた。

「まーまー、そう一度に質問しないでくれたまえよ。これには海よりも深く、山よりも高い事情があるのだ。」

「あつそ、だつたら聞かない。ていうか聞いたりものすゞく疲れそうな気がする。」

「偶然だね、エステル……僕もそんな予感がするんだ。」

「そういうわけで、話してくれなくとも結構よ。あたしたちの健康と美容のために。」

物語を語る詩人のような大げさな口調で話すオリビエにエステルはきつぱり断り、ヨシュアもそれに同意し、ショーラザードも断った。

「はつはつはつ。そんなに遠慮することはない。一部始終聞いてもららうよ……ボクの身に起きた悲劇的事件をね。」

だがオリビエはエステル達の否定の言葉を無視して、続きを話した。（聞いちやいない……）

得意げに話し始めたオリビエにエステルは溜息をついて、諦めた。

「キミたちと別れた後……。ボクは、マーケットを冷やかしてから、レストランの『アンテローゼ』に入った。そして、存分に舌鼓を打つた後、余興にグランドピアノを弾いたのさ。すると、レストランの支配人が身を震わさんばかりに感激してね……。レストラン専門のピアニストとして雇いたいと頼み込んで来たわけだよ。」

「どうでもいいけど……あんた、リコート弾きじゃないの？」

得意げに語るオリビエにエステルはオリビエと出会った当初、リコートを弾いていたのを思い出して、どうでもいいような表情で尋ねた。

「フツ、天才というのは得物を選ばないものだよ。それはともかく……ボクはある条件を出してそのオファーを受けたわけだ。ミラの代わりに、料理とワインを毎日タダでご馳走してくれってね。」

エステルの疑問にオリビエは髪をかきあげて答えた。

「何て言うか……オリビエさんらしいですね。でも、それがどうし

てこんな牢屋に入れられることに？」

オリビエの語りに苦笑したヨシュアは牢屋に入るに到つた理由を聞いた。

「ああ、ここからが聞くも涙、語るも涙の話なのさ。その夜、さつそくボクはシェフに作らせた鴨肉のソテーに舌鼓を打つていたのが……血を使ったソースがまたまらなく濃厚な味わいでねえ。どうしても普通の赤ワインでは物足りなく感じてしまったのだよ。」「なんか無性に殴りたくなってきたわね……。それであんたはどうしたの？」

オリビエの話し方にエステルは殴りたくなる衝動を抑えて聞いた。

「貯蔵庫の奥に保存されていた良さそうな一本を拝借したんだ……」

：『グラン＝シャリネ』 1183年物。

「『グラン＝シャリネ』……しかも1183年物ですって！？王都のオークションに出た幻のワインじゃない！」

オリビエが飲んだワインの名を聞いたシェラザードは驚いて叫んだ。

「ほひ、シェラ君はなかなか詳しいみたいだね。ボクも噂を聞いて、かねてから飲んでみたいと思っていたのさ。」

「オ、オークションって……どのくらい値段がついたの？」

シェラザードの言葉を聞いたオリビエは感心し、エステルは恐る恐る値段を聞いた。その答えをシェラザードが答えた。

「聞いた話じゃ……50万ミラで落札されたそうよ。」

「！」50万ミラ～！？たかがワイン一本に…？」

「とんでもない世界だね……。オリビエさん。まさかそのワインを

……」

値段を知ったエステルは驚き、ヨシュアも驚いた後、嫌な予感がしたヨシュアはそれを遠回しに聞いた。

「フッ、言うまでもない。美味しく頂かせてもらつたよ。……鼻腔をくすぐる馥郁たる香り。喉元を愛撫する芳醇な味わい……ねえキ

ミたち、信じられるかい？薔薇色に輝く時間と空間が確かにそこに

は存在したんだ……」

「ダメだこりや」

「……やっぱり疲れたね……」

「……呆れてモノも言えない……」

得意げに語り続けるオリビエは聞く必要はなかつたと後悔し、未だ語り続けるオリビエを無視して眠りについた。

「……それで……なんと……これがまた……」
エステル達の様子に気がつかないオリビエは一人喋り続けて高らかに言った。

「以上が、ボクをここに送つた涙なしでは語れぬ悲劇的事情さ……
さあ！思つ存分同情してくれたまえっ――！」

「……くーくー……」

「……すーすー……」

「……うン……バカ……」

しかしすでにエステル達は眠りにつき、オリビエの言葉は空しく牢屋に響いた。

「…………おや？ちよつとキミたち……。その『くー』とか『すー』とか『うン、バカ』というのはなんだね？いいかい？話はここから面白くなるのだよ？ここに連れてこられてからも更なる試練がボクを待ち受けて…………もしもーし？ちよつと聞いてますかー？」

エステル達の様子がおかしいと気付いたオリビエは呼びかけたが返事はなかつた。そして一夜が明けた。

（ハーケン門・兵舎内の牢・早朝）

「おーい！あんたたち、起きてくれ。
「うーん……ふわわ……。んー、眠いい～……」
「……どうしたんですか？」

「あふ…… じんな朝早くから尋問なの？ さすがに勘弁して欲しいわね。」

兵士の起こす声に気付いたエステルはあくびをし、ヨシュアも眠そうな表情で答え、シェラザードは嫌そうな表情で聞いた。

「いや、その反対だ。あんたたちを釈放する。」

「えつ…… ど、どうして急に……」

「何か理由もあるんですか？」

兵士の予想もしなかつた発言にエステルは驚きヨシュアは理由を聞いた。

「…… こういう訳ですね。」

するとメイベル市長をモルガン将軍がエステル達の目の前に現れた。

「し、市長さん！？」

「あらり。珍しい場所で会うじゃない。」

メイベルの姿を見たエステルは驚き、シェラザードは意外そうな表情でメイベルを見た。

「皆さん、大変でしたわね。ですが、もう安心して下さい。皆さん の疑いは晴れましたから。」

驚いているエステル達にメイベルは微笑んで答えた。そしてエステル達は牢屋から出た。

「フン、まだ完全に納得した訳ではないがな……。まあ、メイベル 嬢たつての頼みだ。せいぜい彼女に感謝するといい。」

牢屋から出たエステル達に納得していないモルガンは鼻をならして 答えた。

「えつと、それって……。市長さんが、あたしたちをかばってくれ たっていうコト？」

「かばつたわけではありませんわ。ただ、皆さん的事情について閣 下に説明しただけですから。」

「あたしたちの事情……？」

メイベルの説明にエステルは首を傾げた。

「……そここの2人。おぬしらに1つ質問がある。カシウス・ブライトの子供というのは本当なのか？」

「へつ……」

「はい、仰るとおりです。彼女はエステル・ブライト……。僕は養子のヨシュアといいます。」

突然のモルガンの質問にエステルは呆け、ヨシュアは冷静に答えた。

「そうか……。確かに、そちらの娘にはレナ殿に似ているな。」

ヨシュアの答えを聞き、モルガンはエステルの姿を見て納得した。

「え！――お母さんを知ってるの！？」

「ロレントの家を訪れた時に何度か手料理をこ馳走になった。フフ、赤ん坊だったおぬしにも会つたことがあるぞ。」

驚いているエステルにモルガンは昔を懐かしむように答えた。

「ちょ、ちょっと待つて……。モルガン将軍つて父さんの個人的な知り合い？父さんが昔、軍にいたのはあたしも知っているけど……」

「フン……遊撃士としてのヤツは知らん。わしが知っているのは軍人としてのカシウスだけだ。稀代の戦略家と呼ばれた、な。」

エステルの疑問にモルガンは鼻をならして答えた。

「戦略家？」

エステルはモルガンの答えを聞き、首を傾げた。

「まったく、何を好んで遊撃士協会などに……ええい！思い出すだけで腹の立つ！わしはこれで失礼する。」

モルガンはぶつぶつと独り言を言いながら退出した。

「ど、どうなつてんの？」

「フフ……。エステルさんのお父様は優秀な軍人だったそうですわね。退役する時、何度も引き留めたと將軍閣下から伺つたことがありますわ。」

モルガンの言葉を聞き困惑したエステルにメイベルは説明した。

「そ、そうだつたんだ……。なんだか信じられないけど。」

メイベルの説明を聞いたエステルは普段のカシウスの姿を思い出し、

信じられない表情をした。

「しかし、そうなると……。將軍の遊撃士嫌いは先生が原因かも知れないわね。目を掛けていた部下に去られた悔しさから来ているのかも……」

「なんかそれっぽいですね。」

モルガンとカシウスの関係を聞いたシェーラザードはある考へが浮かび、ヨシュアもその考へに同意した。

「じゃあ何、父さんのせいであたしたち苦労しているわけ？あ、あんの極道オヤジいーつ！」

それを聞いたエステルは拳を握つて身を震わせた。

「フフ……。さて、それでは皆さん。ボースに戻ると致しましょう。定期船が見つかった事で、事件は新たな局面を迎えるました。色々と相談したい事があるのであります。」

「あ、うん……」

メイベルの言葉に頷いたエステルは急に黙つた。

「あら、どうなさつたの？」

エステルの様子が変だと思つたメイベルは黙つてゐる理由を尋ねた。

「帰るのは賛成なんだけど、何かを忘れているような……」

「そういえば……」

「何だつたかしらね……？」

何かを思い出そうとしているエステルの咳きにヨシュアとシェーラザードも頭の片隅に残つてゐる何かを思い出そうとした。

「ああ……人は何と無情なのだろう。一夜を共にした仲間のことをいとも簡単に忘れ去るとは……。なんという悲劇……何というやるせなさ……。いいぞ、ボクはこの暗き煉獄で一人朽ち果てて行くとしよう……」

すると隣の牢屋からリュートを弾きながら嘆くオリビエの声が聞こえて來た。

「アレがいたか……」

「うーん……完全に忘れ去っていたわね」

「気の毒とは思うけど、さすがにどうすることも……」

エステルはやっかいそうな表情でオリビエを見て、ショラザードとヨシュアはそれぞれ違う表情で見た。

「そちらの方は……噂の演奏家の方ですかね？『グラン＝シャリネ』を勝手に飲んでしまったといつ。」

「フツ、いかにも……。しかしレティ。勘違いされでは困るな。あれは前払いだよ。華麗なるボクの演奏に対するね。」

メイベルの質問にオリビエは気障な動作でに答えた。

「フフ、面白い方ですわね。まあ、ついでですから貴方も釈放していただけるよう将軍に掛け合って差し上げますわ。」

「ほう……？」

しかしメイベルから出た以外な言葉にオリビエは驚いた。

「さ、さすがにそれは無理があるような……」

「レストラン側が訴えれば、少なくとも訴訟にはなるはずよ。」

メイベルの言葉にエステルは苦笑し、ショラザードも無理なことを言つた。

「ふふ……その心配はありませんわ。あのレストランのオーナーはわたくしですから。」

「え……」

しかしショラザードの言葉を否定するように言つた、メイベルの言葉にエステルは驚いた。

「あの『グラント・シャリネ』もわたくしが競り落としたもの。これならば問題ないでしょう？」

そしてオリビエもメイベルによって釈放された。釈放されたエステル達は一端ボース市に帰ろうとハーケン門の入口まで来たところ、そこに別行動をしていたリフィア達がやって來た。

「エステルさん！よかつた……釈放されたんですね……」

釈放されたエステル達を見てプリネは安心した。

「プリネ！リフィアにエヴリーヌも……どうしてここに？」

ボース市内にいるはずのプリネ達に疑問を持ったエステルは聞いた。「エステル達と別れて情報収集をしていた余達だつたんだが……ヴァレリア湖とやらにも足を延ばしての。そこである気になる情報があり、一晩ヴァレリア湖の宿屋に泊まって様子を見ていたんだが何もおこらくての。一端、ギルドに戻つてお前達とその情報について相談しようとしたんだが、受付からお前達が軍に捕まつたと聞いてな。急いでここまで来たのじゃ！」

「気になる情報つて？」

リフィアの説明を聞いたエステルは聞き返した。

「それは後で話す……ん？そやつは何者だ？」

リフィアはオリビエに気付いてエステル達に聞いた。

「あ～こいつは……」

リフィアの疑問にエステルは苦笑しながら答えようとしたといふ

「おお……清楚な雰囲気ながらどことなく漂う高貴な雰囲気……そして夕焼けのような流れる美しい髪に紅耀石のような瞳……まるで陰謀渦巻く貴族の中に咲く一輪のバラのようだ……ぜひ、ボクの貴女への愛の歌を一曲聞いてくれますか、レディ？」

（始まつた……）

（こじつは～！）

いつのまにかオリビエが紳士が淑女にダンスを誘うような動作でプリネに向かつて歯の浮くようなセリフを言つていた。それを見てヨシュアは溜息をつき、エステルは怒りに震えた。

「フフ……お気持ちは嬉しいですけど、時と場所を考えて下さいね？」

「ハハ……これは手厳しい。……しかし一度断られたからと言つて、このオリビエは諦めないよ むしろ、燃えちゃうね とこう

とでいつか一日、デートに付き合つて

だが、プリネは自分をナンパするオリビエに微笑してやんわりと断つた。一方断られたオリビエはめげずにプリネを口説いていた。

「……申し訳ありませんが、そういうことは一生を共にする伴侣以外はないと決めているのでお断りさせていただきます。」

「それは残念だ。では代わりにそこの冷たい雰囲気を持つリトルレディに付き合つてもらひとしようか。」

「……勝手に決めないで。エヴリーヌだつてそういうことはお兄ちゃんとしかしないつて決めているから。……後、今度プリネにそんな冗談みたいな態度で言い寄つたら潰すよ?」

プリネに断られたオリビエは今度はエヴリーヌを口説いたが、エヴリーヌは冷たい瞳でオリビエを見て言った。

「心外だな。冗談のつもりではなかつたんだが。」

「だからそれが余計にタチが悪いんじょーが!! 全くだからこいつとプリネ達は会わせたくなかつたのよね……」

意外そうな表情で語るオリビエにエステルは吠えた。

「案の定の行動だね……」

「はあ……すみません、師匠。大事な娘さんをこんなやつと関わらせてしまつて。」

ヨシュアは呆れショラザードは溜息をつきながら、ペテレーに謝つた。

「フフ、本当に面白い方ですね。」

メイベルはエステル達とオリビエのやり取りをみて微笑した。

「旅の演奏家のくせにして余の田の前でプリネに手を出やつとするとはなかなかいい度胸をしておるな?……まあいい、お主のその度胸に免じてこれから起じる面白い出来事の観客になることを許してやろう。」

「ほう? 一体それはどういふことかな?」

リフィアの言葉にオリビエは首を傾げて言った。

「すぐに見せてやる……みな、行くぞ。市長もついてくるがいい。お主が欲しい情報をあの老将軍からさうに引き出したり、軍による飛行制限を緩くしてやるつ。」

「え……いくらメンフィルの貴族とはいえ、さすがにそれは難しいのでは？」

リフィアに言われたメイベルは疑問に思つたことを尋ねた。

「フム、一つ言つておひづ。初見で会つた時お主に言つた名は偽名だ。」

「偽名？…でしたら本当の名はなんなのでしょつか？」

リフィアの言葉にメイベルは真剣な表情で尋ねた。

「それはあの老将軍の前で明かしてやるつ。……みな、余達についてくるがいい！」

そしてエステル達はモルガンのいる司令官室に向かつリフィア達について行つた……

第38話（後書き）

次回はリフィア達とモルガンの対面です！リフィア達は自分達の身分を存分に活用するので楽しみにして待つて下さい！感想お待ちしております。

「また、あんた達か。將軍は今は誰とも会わないよ。」
再び来たエステル達を見てモルガンの部屋の前にいる兵士が言った。
「雑兵ごときに用はない！そこをどけッ！！」

「なっ！？」

しかし、リフィアの痛烈な言葉に驚き固まつた。驚いている兵士を無視してリフィアはドアを思いつきり開けた。

（ハーケン門・司令官室）

バン！

「何事だ！」

「えと……お邪魔します？」

ドアの大きな音にモルガンは怒鳴り、そこにエステル達が遠慮気味に入つて來た。

「また、貴様達か……！メイベル嬢、いい加減にしてくれないか！
儂達はあなた達に付き合つてるほど暇ではないのだ！」

モルガンはエステルやメイベル達を見て怒鳴つた。

「……用があるのは、その者達ではなく余達だ。」

そこに怒りを抑えた表情をしているリフィアといつもの優しげな雰囲気はなくなり、どこか威厳があるプリネとこれから始まる知つていて、ニヤニヤしているエヴリーヌが入つて來た。

「なっ！？な、なぜこんなところに貴女様が……！」

モルガンはリフィアを見て信じられない表情をした。

「おい、あんた達！何勝手に入つているんだ！」

「そうだ！ここはお前たちのような民間人が入つて来ていい場所で

はない！」

そこに部屋を守っていた兵士が入つて来て注意し、モルガンの側に控えていた副官も注意した。

「ほう……余を知らぬか……本来ならお前達のような他国の雑兵ごときには教える義理などないのだが特別に教えてやる。余の名はリフィア！メンフィル皇女リフィア・イリーナ・マーシルン！メンフィル皇帝、シルヴァン・マーシルンの娘にして『謳われし闇王』リウイ・マーシルンとメンフィルの守護神と謳われた伝説の聖騎士、『断罪の聖騎士』シルフィア・ルーハンスの孫！」

「同じくメンフィル皇女ブリネ・マーシルン！メンフィル初代皇帝リウイの娘にして『アーライナ聖女』ペテレーネ・セラの娘！」
「キャハッ 2人ともはりきつているね ジゃあ、エヴリーヌも負けていられないね……『深淵の楔魔』の”魔神”にしてメンフィル客将の1人、エヴリーヌだよ」

リフィアとブリネは高らかに名乗り、またそれを真似してエヴリーヌも現在の自分の立場を明らかにした。

「えつ……！」

「ほう……」

リフィア達の真の名を知ったメイベルは驚き、オリビエは驚いた後探るような目でリフィア達を見ていた。

（ええ！リフィア達、正体を自分から言つちやつたけどどうしよう！？）

（しつ……リフィア達も考えがあつてあえて自分達の正体を言つたと思うよ。もしかしたら引き出せなかつた情報が聞けるかもしれないね。だから、もしリフィア達に話を振られたら彼女達に話を合してほうがいいよ。）

（ヨシュアの言つ通りよ……これはひょっとしたら面白いものが見れるかもしないわね……）

（う、うん……でも、面白いものってなんだろう？）

リフィア達が正体をモルガン達の前で言つたことにエステルは焦り、

小声でヨシュアに相談したがヨシュアはリフィア達の真意がある程度わかり、エステルにリフィア達と話を合わせるように言ってエステルはそれに頷き、ショラザードは口元に笑みを浮かべて驚愕しているモルガン達を見た。

「なつ……！？メン……ファイル……の皇女だと！？ふざけるのも大概にしろ！そんな身分の高い方達がこのようなどこにいるはずがないだろう！！」

一方リフィア達の名に驚いた副官だつたが気を取り直し、リフィア達の正体を否定した。

「ほう……余を偽物呼ばわりするか。……モルガン。貴様もそこの雑兵と同じことを言う氣か？」

偽物呼ばわりされたリフィアは不愉快そうな表情をしてモルガンを見た。

「め、滅相もございません！！私の教育が足りなかつたようです！…」これは私の顔に免じてどうかこの者達の無礼を許してやつて下さい……お前達！そこで何を呑氣につつ立つている！！この方達は正真正銘、我が同盟国メンフィルの皇族の方達だぞ！！」

話を振られたモルガンは顔を青褪めさせた後、椅子から立ち上がりつてリフィア達の正面に来て跪いて頭を下げ、跪いていない副官達に気付いて怒鳴つた。

「は、はい！」

「申し訳ありませんでした！」

上官に怒鳴られ、状況を理解した兵士や副官も青褪めた後、その場で跪きリフィア達に謝罪した。

「思い出しました……！リフィア、リフィア・イリーナ・マーシルン……メンフィル皇女にして大国メンフィルの次代の皇帝……！プリネ姫はリウイ皇帝陛下の『息女』であると同時にアーライナ教のトップ『闇の聖女』の『息女』……！」

リフィア達のことをようやく思い出したメイベルはリフィア達の正体を呟いた後、信じられない表情でリフィア達を見た。

「顔を上げよ、モルガン。余はそんな細かいことに一々目くじらをたてるほど心が狭くないからあまり氣にしておらぬ。……余達を偽物呼ばわりしたのは少々見逃せないことだが、今回はお前の顔に免じて水に流してやろう。」

「ハツ！お心遣い、感謝いたします！」

（うわあ～……あれだけ、あたし達に怒鳴っていた将軍がリフィア達にペコペコするなんて信じられない光景よね……）

（それだけリフィア達の身分が凄い証拠だよ……モルガン将軍は僕達と違つて”軍人”だからね。特に他国の王族に対しても慎重な態度になつて当然だよ。）

（ええ、加えてメンフィルはエレボニアを超える大国だからね。そんなん大国のメンフィルの皇族には慎重になつて当然よ……）
リフィア達の機嫌を損ねないよう跪いて頭を下げ続けているモルガンを見てエステルは目を丸くし、ヨシュア達を小声で会話をしていた。

そしてモルガンはエステル達の会話には気付かずリフィア達にさらに謝罪し、また、なぜこんな場所に来たかを聞いた。

「……このような場所に殿下達がいらっしゃるとは露知らず、歓迎の準備もせず部下達が失礼な態度を取つてしまい本当に申し訳ありません！」

「よい。今回の訪問は非公式だ。気にする必要はない。」

「ありがとうございます……して、此度は何用でこちらに参ったのでしょうか？」

「……お前達リベル軍が我が祖国とアーライナ教会を侮辱する行為を行つたと聞いてな。それを確かめるため、余はメンフィルの代表として、プリネは教会の代表としてこうして参上したのじゃ。」

「なつ！我らには身に覚えがありません！一体どこからそのような

情報が……

リフィアの言葉にモルガンは驚き、すぐに否定して情報の出所を聞いた。

「それはすぐにわかる……モルガンよ。そこにいる遊撃士、エスティル・ブライト以下3名を今、ボース市内を騒がしている空賊疑惑で拘束したことに相違ないか？」

「はつ……？ 何故、そのことが関係するのでしょうか……？」

予想外のリフィアの言葉にモルガンは戸惑い、聞いた。しかしリフィアはモルガンの言葉を無視して追及した。

「いいから答えよーそここの3名を空賊疑惑で拘束したのは正か！ 否か！」

「リフィア殿下のおっしゃる通り間違いないく、我々はそやつらを空賊に加担している疑惑で拘束しました。しかしそこにいるボース市長、メイベル嬢の嘆願を受け解放しましたがそれが何か……？」

「モルガン将軍、今の発言にあなたの誇りを持つて偽りではないと言えますか？」

「ハツ！ 我が軍旗、「シロハヤブサ」の紋章に誓つて偽りはないと断言します！」

プリネの確認する言葉にモルガンは胸を張つて答えた。

「準遊撃士エステル・ブライト並びにヨシュア・ブライト、正遊撃士ショーラザード・ハーヴェイ。今のモルガンの発言は間違つていないか？」

「え、えつと。間違つていないわよ。2人ともそうよね？」

どこか威厳のあるリフィアの言葉にエステルは戸惑いながら答え、ヨシュアとショーラザードに確認した。

「はい、リフィア様のおっしゃる通り相違ありません。」

「そこの2人の言つ通りです。『支える籠手』に誓つて断言できます。」

エスティルに話をふられたヨシュアは普段とは違う口調で答え、ショ

ラザードも丁寧な口調で答えた。

「ボース市長メイベル殿、エステル・ブライト以下3名に今回世間を騒がしている『定期船消失事件』の調査を依頼し、拘束された遊撃士3名を無実と訴え解放したのは間違いないか？」

「はい、間違いありませんわ。」

話をふられたメイベルも頭を軽く下げるて答えた。

「そうか……今ここでリベル軍が我が祖国メンフィルを侮辱したことを見ただと、メンフィル帝国第一皇女リフィア・イリーナ・マーシルンの名において断言する！」

「アーライナ神官長ペテレーネの娘、プリネ・マーシルンの名においてリベル軍がアーライナ教会を侮辱したことを教会を代表して真実だと断言します！」

「なつ！？それは一体どういうことですか！？失礼ながら詳しい説明を要求します！」

リフィアとプリネが高らかに言った発言にモルガンは驚いて説明を聞くことを嘆願した。跪いている副官や兵士も自分達が追い詰められていることに気付き青褪めた。

「よからう、お主達にもわかりやすいよう話してやろう。実は前々から異世界人であり人間でない我ら”闇夜の眷属”に物怖じもせず、自ら歩みによるエステル・ブライトが注目されていてな、件の少女をよく知るため、また余の見聞を広めるために今回、遊撃士協会に準遊撃士エステル・ブライトに遊撃士としての修行に同行することをリウイが依頼したのじゃ。エヴリーヌは余とプリネの護衛のためについて來たのだ。」

「リフィアの言う通り、リウイお兄ちゃんに頼まれたからエヴリーが特別にリフィア達を護衛しているんだよ。」

「なぜ、1人の民間人の少女を知ることだけのために皇帝陛下がわざわざ依頼をしたのでしょうか……？」

モルガンはリフィアの言葉が理解できず質問した。

「それほど難しい話ではない。単にリウイが個人として、また眷属を束ねる王としてエステル自身を知りたいだけだ。また余達異世界人を民間人に詳しく知つてもらつたため、我ら”闇夜の眷属”に理解があるエステルを通してお前達異世界の者達とさらなる密接な交流をするためだ。」

「……リフィア殿下のお話は理解しました。プリネ姫は先ほどアーライナ教会を代表してとおっしゃられていましたが、それは何故でしょう？」

たった1人の民間人のために皇族達が動いていることに信じられない思いを持っていたモルガンだったが、実際にリフィア自身が目の前にいるので、いまだ半分信じられない思いでいつつ納得し、プリンに聞いた。

「私は母の命によつてリフィアお姉様達と行動を共にしております。

「母君……と言つますと『闇の聖女』ペテレー・ネ殿ですか？ 一体何故……？」

「母 アーライナ教会神官長ペテレー・ネは、いつものアーライナ様への祈りの際、父 リウイからエステル・ブライトのことを聞きそれを報告し、それを知つたアーライナ様は件の少女に興味を示され、母に教会の誰かを使って少女を観察し報告するよう神託を受けたので、私が母の名代としてエステル・ブライトに同行しているのです。」

「えつ……！？」

プリネの説明にエステルは驚いて声を出した。

「…………女神自身が一人の少女に興味を示すなど、正直信じられませぬ。何か、証拠はございませんか？」

プリネの説明にモルガンは信じられず、エステルがアーライナに気にいられている確かな証拠を求めた。

「証拠ですか。エステルさん、少しそういですか？」

「う、うん！ 何かな？」

プリネに呼ばれたエステルは場の雰囲気に緊張しながら答えた。

「エステルさんは以前お母様からアーライナ様のご加護を受けたお守りを受け取つたと聞きます。今、それをお持ちですか？」

「う、うん。これがどうしたの……？」

エステルはいつも身につけているブローチを見せた。

「少しだけそちらを借りてもよろしくですか？」

「うん、いいよ。」

プリネの求めに応じてエステルは服についているブローチをはずし、プリネに手渡した。

「ありがとうございます……モルガン将軍、これが証拠になります。」

「それが……？ 一体それは何なのでしょうか？」

プリネに証拠を示されたモルガンは理解できず聞き返した。

「……この装飾品はアーライナ様のお傍に仕える巫女の候補に配られる証。すなわち教会でもこれを持つ者は教会からさまざま支援を受けられ、またそれと同時にアーライナ様の神託を受けられる証拠です！ この装飾品の裏に主神アーライナのお姿が彫られていますよね？ これが何よりの証拠です！」

プリネはブローチの裏に彫られているアーライナの姿をモルガンに見せて言った。

（え？！ 嘘、あれってただのお守りじゃなかったの！？）

一方プリネの説明を全て信じたエステルはいつも大事にしているブローチがどれほど重要な物か聞いて驚いた。

「……プリネ姫のお話も一応理解しました……まだ、信じられませぬがプリネ姫がここにいるのが何よりの証拠です……それで話が戻るのですが、一体それがなぜ我らがメンフィルやアーライナ教会を侮辱したことにな繋がるのでしょうか？」

プリネの説明にも強引に自分を納得させたモルガンは聞いた。モルガンに聞かれたリフィアは呆れた顔をした後、モルガンを睨んで答えた。

「まだわからぬか……件の少女、エステル・ブライトに皇帝であるリウイ直々が依頼を出した……エステル・ブライトはリウイの依頼を受けた時点で、我が祖国メンフィルから信頼ある者として認められているのだ！即ち、我らマーシルン家の客人と同然の扱いだ！また、エステルが所属する組織、遊撃士協会は我らメンフィルとは友好な存在！ここまで言えば余の言いたい事はわかるな？」

「そ、それは……」

リフィアに睨まれたモルガンはメンフィルの皇族から客人扱いされているエステル達を、自分の独断でメンフィルに断りもせずエステル達を賊と決めつけ、拘束してしまったこと、さらにはメンフィルが信頼している組織まで侮辱してしまったことを思い出し、青褪めた。

「加えて、エステルさんはアーライナ様の神託を受けられる可能性を持つお方……我々教会としても当然巫女候補としてさまざま支援をさせていただいております。またそこにいる正遊撃士、シェラザード・ハヴェイ殿は母、ペテレーネの一番弟子……これがどういうことかお分かりでしょう、将軍？」

「う……！」

アーライナ教会からも特別扱いをされているという情報が偽りとは気付かず、また教会のトップの人物の弟子に何をしてしまったという追い打ちをかけるようなプリネの言葉にモルガンはさらに呻き、顔を下に向けた。

「さて……何か、申し開きはあるか？先ほどのエステル達を賊と決めつけ拘束したというお前自身の発言は、撤回しようと思つてもできんぞ？さつき言つたな。『シロハヤブサ』の紋章に誓つて……と。お前達リベルの国の象徴であり、王家の紋章に誓つたことを嘘や

「冗談とは言わせんぞ？」

「……」

リフィアに問いかかけられたモルガンはリベルの象徴であり、王家の紋章に安易に誓つたことを思い出し、反論や言い訳も見つからず沈黙した。

「それとは別件でもう一つ個人的に余が怒つていることがある。」
以前リベルとの会談の際、余はアリシア女王陛下に尋ねた。軍と民間人の武装組織である遊撃士協会とはどんな関係とな。女王陛下はこうおっしゃていたぞ。『軍は大勢の民のために、遊撃士協会は個人のために動きますが事件があつた時は手を取り合つて協力し合う仲です。』とな。余やリウイはその言葉を信じて今まで協会と我らメンフィル軍は連携してさまざまな事件を遊撃士達と共に解決してきた。なのにその発言をした女王陛下の軍の長であるお前が今していることはなんだ？余やリウイは女王陛下に騙されたのか？』
「それはありません！陛下は殿下達を騙すような御方ではありません！」

リフィアの問いかけにモルガンは顔を上げ、声を荒げて否定した。

「ではどういう事だ？確かな理由がないと大使館を通して女王陛下に抗議させてもらうぞ？」

「グッ……！それは…………私の…………独断…………です…………」

リフィアの脅しとも取れる言葉にモルガンは呻き声を上げ、言いづらそうに答えた。

「お前の遊撃士協会に対する評価や態度の噂はここに来るまでに聞いた。まさか大局を見ずに軍の長であるお前が、私情に流されて軍を動かしているとはここにくるまで思わなかつたぞ？」

「…………」

リフィアの痛烈な言葉をモルガンは俯き耐えて聞いた。

「それ以上将軍を攻めないで下さい、リフィア殿下！」

「そうです！これには理由が…………」

尊敬している自分達の上官が攻め続けられるのを黙つて見る事ができず、副官や兵士は声を上げたが

「黙れ！誰がお前達の発言を許した！」

「しかし将軍！…」

「これ以上騒ぐな！これは上官命令だ！」

「クツ…！」

しかし顔を上げたモルガンの怒声に制され、悔しそうな顔をして俯いた。

「…………部下達の再度の無礼、どうかお許し下さい。」

顔を下に向けた兵士達を見て、モルガンはリフィアに向き直り謝罪した。

「よい。上官思いの部下であるところなどよくわかった。そのこと自体は余はいいと思つた？」

「…………ありがとうございます。リフィア殿下、プリネ姫。どうすれば我が軍が貴殿等にしてしまった無礼を取り消すためにどのような誠意を見せればよいでしょうか？」

「何、簡単なことだ。お前達が現時点で掴んでいる『定期船消失事件』の詳細を全てここで報告し、遊撃士協会には謝罪の文と事件の詳細な情報を提出すればメンフィルとアーライナ教会の抗議はここで収めてやる。プリネもいみな？」

「はい、リフィアお姉様。」

「エスティル、お前達はどうだ？」

「え！？えつと……」

リフィアから急に話をふられたエスティルは、惑つてどうもおつか惱んでいたが

「はい、僕達としては拘束されたことはあまり氣にしていませんが、事件解決のために軍から情報を貰うことには異論ありません。」

「ヨシコアの言つ通り、私達としては情報を貰えば文句は言つませんよ！」

ヨシュアが代わりに答え、ショラザードは口元に笑みを浮かべて答えた。

「メイベル殿、貴殿が余達に代わってエステル達を解放したこと、偉大なる王リウイに代わって感謝する。」

「とんでもございません。私は独自で動いただけですから。」

「ふむ、余としては何か礼をしないと気がすまないが何かないか? リフィアはメイベルに不敵な笑みで問いかけた。リフィアの笑みからモルガン達に会いに行く前に言つたりフィアの言葉を思い出し、察したメイベルは微笑して話を合わせるように答えた。

「でしたら王国軍による飛行制限をもう少しだけ緩めて頂けるよう、話をしてもらえませんか? 空輸が頼りのボースではそのようなことをされたら商売が成り立たず、市民の生活に支障が出でてしまいますので、市長として、また一商人として見逃せません。」

「…………だそうだ。軍によるボース領空の制限を緩めることで余自身の怒りも収めてやるわ。」

「なつ！？殿下、それはあまりにも無茶すぎます！！遊撃士協会に情報を渡すことは仕方ありませんが、領空制限を緩めてしまつては第2、第3の事件の発生の恐れが出てします！！」

リフィアが出した条件にモルガンは大きな声で反論した。

「それぐらいお前達ご自慢の警備艇を使って護衛でもして防げばよいだろう。」

モルガンの必死の反論をリフィアはスッパリと切り事件の予防策を言った。

「しかし…」

「…………どうしても無理というのなら余にも考えがあるぞ？」

尚も食い下がるつとするモルガンにリフィアは威厳ある雰囲気で話した。リフィアの言葉にモルガンは嫌な予感がして恐る恐る聞いた。

「…………何をお考えなのでしょうか…………？」

「何、我らメンフィル軍や”闇夜の眷属”達に空輸する飛行船の警備に当たらせるだけだ。さすがに警備艇はまだ開発中だが、我が軍には竜騎士ドラゴンナイツや空が飛べる眷属がいるしな。お前達に代わって民間人の護衛をしてやろう。なんならファーミシルスを指揮に当たらせてやってもよい。最近のあ奴は後身を育てることばかりで暇を持て余していたからな。メイベル殿は余の考えをどう思う?」

「私としては領空の制限を緩めていただけるならどんな条件でも構いません。それに精強なメンフィル軍の中でも『空の王者』とも言われる竜騎士やリウイ皇帝陛下の親衛隊長であり大將軍である名高いファーミシルス閣下直々に護衛してもらえば、我々としても安心して空輸を続けられます。」

リフィアに話をふられたメイベルは微笑して答えた。

「……だそうだぞ?」

「殿下! それは内政干渉になりますぞ! ? メイベル嬢も滅多なことを口にしないでもらいたい! !」

モルガンはリフィアの考へに賛成したメイベルを注意し、反論した。

「内政干渉? これはおかしなことを言つ。余は同盟国として善意で申し出ているのだぞ?」

「それが本當だとしてもまだありますー本当に殿下が軍を動かせるのですか! ?」

「モルガン、余を誰だと思つていてる。」

「それはもちろん存じ上げています。殿下は現皇帝シルヴァン陛下のご息女であり、次期……皇帝……」

リフィアに問い合わせられたモルガンはそれに答えてある事に気付いた。

「ま、まさか! !」

「お前が今何を考えているか知らんが、お前の予想通りであると言つておこづ。付け加えて言うなら皇位から退き隠居しているとはいえ、我が祖父リウイでも軍を指示できる。」

それは、”日日戦役”でお前も知っているだろ？

「…………」

「まあ、どうしてもというのなら女王陛下か女王陛下直系であるクローディア姫を連れてくるがよい。もしその際陛下達が反論するのなら余もその理由を聞こいつ。」

リフィアの言葉を自分なりに解釈し、リフィアには軍を動かせる権利があり、最悪リウイ自身が出てくる考えも浮かんだモルガンはそれが起きたことによつて、他国のリベルにに対する痛烈な評価を予想し、自分が反論しようにも相手が他国の王族の上皇帝直系の娘であり、次代の皇位につく事が約束されている人物なので武官である自分ではあまりにも役不足であることに気付き唇を噛んだ。

「さて、まだ何かあるか？」

（勝負ありね……）

その場の勝者がリフィア達であると語ったショーラザードは溜飲が下がる思いで小声で呟いた。

（うわあ～……ねえ、ヨシュア。いいのかな？）

モルガン達を皇女という身分で萎縮させているリフィア達を見てエステルは呆けた後、ヨシュアに小声で話しかけた。

（うーん……本当は不味いんだろうけど、今回は将軍の自業自得、情報不足と遊撃士協会を知らなさすぎたことが敗因だね。）

（言われてみればそうよね……あれ？遊撃士協会を知らないからってどういうこと？）

（……エステル……この間觸つたことだよ？……まあいいか、後で教えるよ。）

（何よ、ヨシュアったら～！絶対後で教えて貰うからね～）

エステルの疑問にヨシュアは呆れた後、溜息をついた。

「グッ……承知……しました……」

「将軍！？」

リフィアの要求に呻きながら了承したモルガンに元剣官達は信じられない表情で叫んだ。

「全く最初から遊撃士協会に素直に情報を渡していれば、こんなことにほならなかつただろ!」……まあいい、お前達が持つ情報をここで包み隠さず話してもううぞ? もちろん、出し惜しみなどは許さんからな?」

ようやく観念したモルガンを見てリフィアは溜息をついて呟き、モルガンに情報を話すよう促した。そしてモルガンはその場で最近の情報を話した。それはすでに空賊達に払う定期船の乗客達の身代金の話が出て来ていること、また身代金を女王自身が自分の資産から出す事、情報部が近々ボースに来て空賊達の情報を探すことが決定したことを話した。

「…………以上になります。」

モルガンは嫌悪している遊撃士達に大事な情報を渡したことの悔しさで拳を握りながらもそれを表情に出さず答えた。

「なるほど、さすが常に民の幸せを第一に考えるアリシア陛下だな。エステル、お前達から聞くことはもうないか?」

「う、うん。…………というかさすがにこれ以上は落ち込んでいる将軍が可哀想になつてくるからやめてあげてくれないかな?」

リフィアに問い合わせられたエステルは苦笑しながら答えた。

「お主は本当にお人よしだな……無実の罪で捕まえられたのだから普通、もっと怒つてもいいのだぞ?」

「うーん……そつなんだけど、將軍は將軍で事件を解決するために必死で動いているのはよくわかつたから、それぐらいにしてあげて。」

「フフ……自分を陥れた相手にも拘わらず相手の心配をするなんてエステルさんらしいですね。」

無実の罪で自分達を拘束したモルガンの心配をするエステルをプリネは微笑ましく思つて呟いた。

「リフィアお姉様、当事者であるエステルさんがこう言つているのです。話はこれぐらいにして私達もそろそろ行きましょう。」

「そうだな……では、余達はこれで失礼させてもらひだ。」

「お、お待ち下さい！せめてお見送りだけでも……！」

「よい。そのようなことに時間を使うより、此度の事件解決への時間に使つたほうが民のためになる。……領空制限の件と協会への情報提供の件、忘れるでないぞ。みな、行くぞ。」

「はい、お姉様。…………それでは失礼します。」

「ばいばーい。」

さつさとその場を去るやうとしたリフィア達を見送るためにモルガンは慌てて引き留めたが、リフィアにとつては自分達を見送るより事件解決のために裂く時間のほうが優先なので断り、プリネは軽く会釈し、エヴリーヌは手を軽く振つてエステル達と共に部屋を出た。

「閣下、どうするのですか？」「

未だその場で跪いて俯いているモルガンに副官は話しかけた。

「……ボースの領空制限を緩めるぞ。また、哨戒用の警備艇を一隻哨戒からボースに航行してくる飛行艇の護衛に当たらせる。」

そこのお前、今からわしが作成する謝罪の文と情報の書類を遊撃士協会に届けてくれ。」

モルガンは立ち上がり副官や兵士に指示をした。

「ハツ！」「

兵士は立ち上がり敬礼して命令を受けたが

「閣下！本当にあのメンフィルの姫殿下達の言いなりになつていいのですか！？」

副官は立ち上がりモルガンに反論した。

「……仕方がなかろう。相手は何といつても現皇帝の直系のご息女であるリフィア殿下やリウイ皇帝陛下と『闇の聖女』のご息女であるプリネ姫だ。今回の件を理由にメンフィルとの同盟を破棄され

る訳にはいかぬし、冗談抜きでメンフィルに此度の事件に介入されかねん。それにメンフィルと密接な関係にあるアーライナ教会の機嫌を損ねる訳にはいかぬ。アーライナ教会が出している治療薬は他の軍は大金を出して購入しているが、我が軍には無償提供されていることや我らリベルは他国と違い、メンフィルと密接な関係であることは理解しているな?」

副官の叫びにモルガンは辛そうに答えた。

「それは……」

モルガンの言葉に副官は言葉を失くして俯いた。

「…………とにかく、今は一刻も早く事件の解決のために動くぞ! 全員、粉骨碎身で空賊達を捜索せろ!」

「「ハツ!」

氣を取り直したモルガンの言葉に副官達は敬礼し、行動を始めた……

第39話（後書き）

カシウスが軍に戻つていなく遊撃士協会を嫌つていてエステル達を捕まえたモルガンを一度、権力でボツ「ボツ」コにしたかつたので書きました。後、リフィア達の強権発動も書きたかつたですしおみにこれで連日更新は終わりです。ストックが完全になくなりましたので。なるべく早く更新を心がけますが、遅くなるのはご了承お願いします……感想お待ちしております。

その後、ハーケン門を後にしたエステル達はボース市に戻り、市長邸で今後のこと話を話しあった。

（ボース市長邸）

「…………それにしても本当にモルガン将軍から情報を引き出せたり、領空制限を緩めちゃうとは、びっくりしたわ～」

「何、余は王族として民の生活を考えて当然の事をしたまでよ。」
市長邸に戻つてエステルの呴いた言葉にリフィアは何でもない風に装つた。

「あ、そうだ。ねえ、リフィア、プリネ。」

「何だ？」

「何でしょ？」「

あることを思い出したエステルは2人に話しかけた。

「あのさ、さつき2人が将軍の目の前で言つたことって本当？」

「それは一体どのような事でしょう？」

エステルに聞かれたプリネは首を傾げて答えた。

「え～と……あたしがメンフィルの皇族の客人とかアーライナ教の巫女がどうとかっていう……」

「ああ…………あれはほとんど嘘ですよ?」

「へ…………嘘？」

プリネの答えにエステルは呆けた。

「さすがに信者でもないエステルさんを勝手にアーライナ様の巫女候補なんてできませんし、そもそもアーライナ教には巫女という役職の存在はありません。あの場で将軍から情報を提供してもらつたために考へた嘘ですから、それほど気にしなくていいですよ。」

「もちろん、余がモルガンの前で言つたこともあ奴に余達の要求を通すために言つたことだから、ほとんど偽りだから気にしなくてよいぞ。」

「あ、あんですって～！！」

プリネとリフィアの説明にエステルは驚いて叫んだ。

「エステル……まさか、本当に信じていたんだ……」

「はあ……全くこの娘は……少し考えたらわかるでしょう。」

驚いているエステルを見てヨシュアとシェラザードは呆れて溜息をついて呟いた。

「だ、だつて将軍があれだけ簡単に信じてたんだもん……」

呆れて溜息をついているヨシュア達にエステルは頬を膨らませて答えた。

「確かにそうだけど、よく考えればわかることだよ？少なくとも、メンフィルと遊撃士協会が密接な関係であることは絶対にないといふことは、遊撃士協会を少しでも知っていたらすぐ気が付くことだよ？」

「ほえ？そーいえば、将軍のといひでも言つてたけどそれつてどついつこと？」

ヨシュアの言葉にエステルは首を傾げて聞き返した。

「遊撃士協会とは『国家権力の不干渉』を規約とする代わりに国家に所属しない民間組織である……そういうことだろ、ヨシュア君」

「…………その通りですけど、よくこの存じですね？」

得意げに語るオリビエをヨシュアは呆れた表情で見た。

「あ……そういえばそうだったわね！」

オリビエの答えにエステルは納得したような表情をした。

「遊撃士規約で必ず覚えておく必要があることなのに、案の定忘れてくれちゃって……これは再テストが必要かしら？」

「え～……やつと遊撃士になつたのにもう、テストはゴメンよ～！」

ショラザードの言葉に嫌な予感を感じたエステルは泣き声を言った。

「フフ……でも、エステルさんがアーライナ教会からさまざまな

援助を受けられる立場は変わりませんよ？」

「ほえ？ それってどういうこと？」

プリネの言葉にエステルは首を傾げた。

「エステルさんの付けているそのブローチはアーライナ教の信者の証にもなります。ですからそのブローチをゼムリア大陸中にあるアーライナ教会に見せれば、教会で販売している治療薬を通常の半額で販売してもらえますし、さまざまな薬品を売つてもらうことも可能です。……まあ、将軍の前では少し大げさに言って見ただけですから、アーライナ様の神託を受けれたり等はさすがにできませんよ？」

「え……信者でもないのにいいの！？」

ただのお守りと思っていた大切なブローチが持つ効果を知ったエステルは驚いて聞いた。

「ええ、構いませんよ。母は信者以外に個人的に気にいっている方にも渡していますから。……ほら、私はそのブローチを加工してもらつて髪飾りにしています。」

「あ……ホントだ。シェラ姉が持つてるのは知つていたけど、プリネも持つていたんだ。この髪飾り、どこかで見たと思ったけど、あたしのブローチと同じ物だったんだ……」

プリネが普段からつけている髪飾りの宝石と宝石の裏に彫られている女神 アーライナの姿を見て、エステルは呟いた。

「これつて、そんな意味もあつたのね……」

シェラザードもペテレーネの弟子になって数カ月後に初めて使えた魔術で祝い代わりにペテレーネから貰つたブローチを見て呟いた。

「……ねえ、プリネ。ずっと思つていたんだけど、なんで聖女様はこのブローチをあたしにくれたのかな？ 聖女様の弟子のシェラ姉や娘のプリネはわかるんだけど、あたしなんか一回会つたきりだよ？」

？それも会話なんかほとんどしなかつたし。」

「確かにお母様がエステルさんと直接会つて話したことがあるのは少ないです、以前にも言つたと思いますがエステルさんのことはマーリオンやリストイさんを通してお父様に報告されていましたから。多分お母様はエステルさんに主神・アーライナに気にいられる要素があると思って、渡したんだと思います。」

「へ……それってどういうこと？？」

「お忘れですか？アーライナ様は”混沌”を司る女神。エステルさんが普段私達”闇夜の眷属”への接し方を自分達”人間”と同じ態度で接することもまた”混沌”になります。ですから、エステルさんはそのブローチを持つ資格がありますから気兼ねなくそのブローチを利用してもらつて構いませんよ。」

「うむ！眷属の王であるリウイもお前と個人的に話をしたがつていたから、時間があれば我が大使館を訪ねてもらつて構わないぞ？その際はもちろん、お主にとつて憧れの対象であるペテレーネも同席させよ。」

「ホント！？じゃあ、正遊撃士になつたら絶対行くわ！”闇夜の眷属”の王様もどんな人か気になるし！」

ペテレーネと直に話せる機会があると知つたエステルは喜び意気込んだ。

「ハハ……じゃあ速く正遊撃士になるためにも、今は事件の解決をより頑張ろう、エステル。」

「うん！モチのロンよ！――」

ミシュアの言葉にエステルはより一層意気込んだ。

「フフ……まさか、カシウス・ブライト殿の『息女だけでなくメンフィルの皇族の方達や『闇の聖女』と密接な関係であるとは思いました……それにしてまさかリフィア殿下やプリネ姫が私の前にいるなんて、今でも信じられない思いです。」

意気込んでいるエステルを微笑ましそうに見たメイベルはリフィア

達を見て真剣な表情に戻して咳いた。

「偽名を語つたことは謝罪する、メイベル殿。余達の旅は一応お忍びになるからな。あまり周囲に余達のことを伝えないでもらうとありがたいが。」

「それはもちろん心がけております、殿下。それにボースの領空制限を緩めていただいたんですから、その恩を仇で返すことなんてできませんわ。」

「そうか、礼を言う。」

「ありがとうございます。」

メイベルの言葉にリフィアとプリネはお礼を言った。

「話は変わるけどよく釈放されたわね……」

「まったく、大した悪運だこと。」

市長達の話が終わつたのを見てエステルとショーラザードはちやつかり一緒についてきたオリビエを見て呆れた表情をした。

「はつはつはつ。そんなに誉めないでくれたまえ。だがそのお陰で容姿端麗と噂されるメンフィルの姫君達に会えるとは、これもボクの詩人としての運命の導きだね。」

周りの様子を全く気にせず、笑つたオリビエは満面の笑みでリフィア達を見た。

「言つとくけど……プリネ達に冗談でも手を出そうとしたらどうやすまさないからね！」

既にプリネとエヴリースをオリビエが口説いたことを思い出したエステルはオリビエをジト目で睨んで言つた。

「失敬な。ボクはいつも本気だよ？」

「だからそれが悪いんでしょうが……」

心外そうな表情で答えるオリビエを見て、ショーラザードは呆れた。

「わかつてるのは思いますけど……彼女達のことはもちろん黙つていて下さいね？後、僕達はご両親から彼女達のことを託されている身ですから、何かしようとしたらその時は遠慮はしませんよ？」

ヨシュアはそう言った後、笑顔で威圧感のよつたものを纏つた。

「はい、わかりました……（ヨシュア君、コワイ……）」

ヨシュアの威圧に脅えたオリビエはガツカリした態度で答えた。

「フフ……それでそちらの演奏家の方は今後どうしますか？」

エステル達のやり取りに思わず笑つたメイベルはオリビエに質問した。

「フム……許されたとは言え、タダでのワインを飲んだとあっては心が咎めるな。契約通り、レストランでピアノを弾かせていただこうか？」

「それは遠慮しておきますわ。さすがに、あの騒ぎの後だと色々と気まずいでしょうから。」

オリビエの申し出にメイベルはあっさり断つた。

（うーん、コイツだつたら全然気にしないと思つたび……）

（確かに団太そうだしね……）

メイベルの言葉を聞いたエステルは呆れた表情で、ヨシュアは苦笑してオリビエを見た。

「まあ、今回のこととはお互い不幸な事件と割り切りましょ。」

「しかし……それではボクの気が済まない。」

話を締めくくるうとしたメイベルにオリビエは話に割り込み、信じられない提案をした。

「ふむ、そうだな……。ちょうど、エステル君たちが何かの調査をしているようだね。ワインの礼に、彼らの手伝いをするといつのはどうだろ？」

「ハア？」

突拍子もなくいきなりのオリビエの提案にエステルは素つ頓狂な声をあげた。

「あら、それは面白いですわね。お願ひしてもいいでしょうか？」

一方メイベルは微笑して賛成した。

「フツ、お任せあれ。そう言つわけだ。キミたち、よろしく頼むよ。」

マイベルの言葉を聞いたオリビエは爽やかな態度でエステル達と同行することを言つた。

「ちょっと待つて……どーしてそつなるのよつ！？」

「素人に付いてこられても正直言つて迷惑なんだけど……。足手まといにならない自信は？」

一方エステルは真っ先に反対し、ショラザードは実力を尋ねた。

「銃とアーツにはいささか自信がある。無論、ボクの天才的な演奏と一緒にされても困つてしまふが。」

「そーいうセリフが激しく不安を誘うんですけど。」

「でも、悪くないかもしねないね。軍が當てにならない以上、リフイア達がいるけど僕たちも人手不足な気がするし。」

自己陶酔するようなオリビエの言葉にエステルは呆れたが、ヨシュアは賛成した。

「そうですね……ヨシュアさんの言つ通り、人手は多くても困りませんから別にいいですよ？」

「プリネ！？」

意外な人物からの賛成にエステルは驚いた。

「戦力的に考えてもそちらの方がおっしゃることが本当なら、戦闘の隊列もバランスがよくなると思いますし。」

「確かに……この中で完全な後方支援ができる人は少ないしね。」

ショラさんやプリネは後方支援としても優秀なのはわかるけど、できれば僕やエステルみたいに

前衛で戦つてくれたほうが心強いし。」

プリネの説明にヨシュアは納得し、オリビエの加入にせりに賛成した。

「けど、そいつがデマカセを言つてるかもしれないわよ？」

「まだ反対のエステルはオリビエをジト目で見た。」

「フツ……そう見つめないでくれ。照れるじゃないか。」

「やかましい！本当にこいつを連れて行つて大丈夫？？」

エステルに見られたオリビエは髪をかきあげて自己陶酔に陥り、エステルはそれを聞いて呆れた。

「その心配はないぞ。」

「え？」

しかし、リフィアの言葉にエステルは呆けた。

「ここに来るまでそやつの足運びや目動きを見ていたが、あれは銃や弓等遠距離攻撃を行う者達の動きによく似ていたぞ。」

「…………だね。少なくともただの人間じゃないね。まあ、エヴリー・ヌは樂になるから別にいいよ~」

「こいつが～？ねえ、シェラ姉。どうしよう？」

リフィアとエヴリーヌの評価にエステルは信じられなく、遊撃士として経験の長いシェラザードに聞いた。

「…………まあ、いいわ。協力してもらつてしますか。ただし、足手まといになると判断したら外れてもうつけど……。それでもいいかしら？」

少しの間、目を瞑つて考えていたシェラザードだったが賛成した。
「フツ、構わないよ。決して失望させたりしないから、どうか安心してくれたまえ。」

「うーん、失望するもなにも最初からそんなに期待してないし。」
オリビエの自信たっぷりの言葉にエステルは何気に酷い言葉を言った。

「そうだ……今更ですが、リフィア達と行動してもオリビエさんは大丈夫ですか？」

ヨシュアはあることに気付きオリビエに尋ねた。

「フム？ それはどういうことかね？」

「ほら、オリビエさんはエレボニア人じやですか。」百日戦役
”後リベルルにとってメンフィルは救世主ですけど、エレボニアに

とつてメンフィルは恐怖と恨みの対象じゃないですか。

メンフィルがエレボニア領を制圧した際、犠牲者がかなり出たと曰曜学校で習いましたけど。」

「あ……」

ヨシュアの説明にエステルは不安そうな表情をした。

「なんだそのことか。そんなこと、このオリビエは気にしないよ。大体犠牲者と言うけど、エレボニアがリベールに侵攻した時と違つてメンフィル軍は民間人には一切手を出していないし、犠牲が出たのはあくまで軍人だけだしね。まあ、平和なリベールに侵攻をした帝国の自業自得だ。だからボクには関係ないから安心していいよ。」「なんというか……他人事ですね。オリビエさんは愛国心とかはないんですか？」

自国の評価を悪く言うオリビエに疑問を持ち、ヨシュアは尋ねた。

「もちろんこのボクとて自分が生まれ育った国は好きだよ。」

「あっやらしいわね～？あんたの事だから『可愛い子がいるならどうでもオッケーだよ』とかいいそうなんだけどね……。」

オリビエの言葉が信じられなくエステルはジト目でオリビエを睨んで言つた。

「ほほう？ エステル君もわかつて來たじゃないか 同じ屋根の下、一晩過ごしたせいかな」

「他人が聞いたら勘違いしそうなことを言うな～！」

しかしオリビエのからかうような言葉にエステルは吠えた。

「フフ……話がまとまって何よりですわ。それはそうと、皆さんに報告する事があるのです。」

エステル達のやり取りを微笑ましそうに見たメイベルは話を変えた。「報告すること？」

メイベルの話にエステルは興味を示し、聞き返した。

「そいつえ、余達がヴァレリア湖から戻った際街が騒がしかつた気がするな。何かあったのか？」

「はい……。実は昨晩、ボースの南街区で大規模な強盗事件がありました。武器屋、オープメント工房をはじめ、何軒かの民家が被害に遭いました。」

リフィアの質問にマイベルは真剣な表情で答えた。

「ええつ！？」

「やっぱり……例の空賊たちの仕業ですか？」

新たな事件の発生にエステルは驚きヨシュアは犯人を聞いた。

「今のところは不明ですが、その可能性は高そうですね。現在、王国軍の部隊が調査を行っている最中ですわ。」

「なるほど、あたしたちもすぐに調査した方が良さそうね。」

マイベルの言葉にショラザードは頷いて、早速調査をするために市長邸を出た。

「また軍の連中に邪魔されそうな気がするけど……。ま、やうなつたらその時はリフィア達に頼むね！」

「余に任せておくがよい！余の風格をリベールの者達に思いしらせる良い機会もあるしな！」

「お、お姉様……ほどほどにしておいて下さいね……？お願いですからお父様やシルヴァンお兄様を困らせるなどだけはやめて下さいね……？」

エステルに頼まれたリフィアは不敵な笑みを浮かべて言い、それを聞いたプリネは苦笑しながらやりすぎないよう嘆願した。

「あ……思いつきの顔になっちゃったね。諦めた方がいいよ、プリネ。」

「ですが……」

「あの生き生きとしたリフィアを止められるのはリウイお兄ちゃんぐらいだよ。リフィアが生まれた頃から付き合ひてるからよくわかるもん。」

「わかりました……後はリフィアお姉様がリベール軍と揉め事を起さないことを祈るしかありませんね……ハア……」

エヴリーヌに言われたプリネは諦めて溜息をついた。

「邪魔されるのはともかく……。こちらが情報を掴んだとしても、軍には伝えない方がいいと思う。本当にスパイがいるとしたら空賊たちに筒抜けになるからね。」

「不本意だけど仕方ないわね。とにかく、慎重に行動しましょう。エステル達にヨシュアは警告し、シェラザードもそれに頷いた。

「フツ、それでは諸君。さっそく南街区に行くとしようか。」

そしてオリビエはタイミング良く場を仕切り始めた。

「だ～から～！どうしてあんたが仕切んのよ～！」

オリビエの仕切りにエステルは声を荒げたが時間が勿体無いと思い、追及をするのをやめた。

そしてエステル達は被害状況を調べるため、新たに仲間になつたオリビエと共に被害に遭つた南街区に向かつた……

第40話（後書き）

感想お待ちしております。

早速新たに起こつた強盗事件の調査を開始したエステル達だつたが、民家等はすでに軍による事情聴取があつたのでできなかつたので、すで軍が調査をし終えている武器屋やオーブメント工房を周つた。その際、ナイアル達と再会して聞いた空賊達が現れた場所の近くには市長邸やマーケットがあるにも関わらず民家に押し入つたことを聞き、首を傾げたが氣を取り直し調査を続行するために一端工房を出た。

（ボース南街区）

「おい、お前たち！」
兵を率いる士官がエステル達を見つけ呼び止めた。

「ん、どうしたの？」

「一言、忠告しようと思つてな。いくら市長の代理とはいえ、お前たちはあくまで民間人だ。我々が調査している最中にウロウロしないでもらおうか。」

「あ、あんですっ！」？

「忠告というよりも、警告ですね。」

士官の物言いにエステルはムツとし、ヨシュアは呆れた表情をした。「分をわきまえると言つてはいる。そんなに調べたいのだったら、我々が引き上げた後にするんだな。あまりワガママが過ぎると、また牢屋に招待させてもらつぞ？」

そんなエステル達を見て鼻をならした士官はエステル達を睨した。

「む……」

士官の物言いにエステルは士官を睨んだ。

「気にしないの、エステル。どうせ何もできやしないわ。」

「フツ、虎の威を借る狐とはよくぞ言ったものだね。」

「な、なにい！？」

シェラザードの冷ややかな物言いとオリビエのからかいの言葉に士官は顔を真っ赤にした。

「ほう……余達を牢屋に招待か……面白い冗談を言つな……」

「キヤハツ 逆にそつちが牢屋行きになるんじやない 」

「リ、リフィアお姉様！エヴリーヌお姉様も何も知らない方に挑発をするのはちょっと……」

さらに士官の脅しにリフィアは不敵に笑い、エヴリーヌは話を合わせるように士官をからかった。一方リフィア達の態度に冷や汗をかけたプリネはリフィア達を諫めた。

「なんだと？何を寝ぼけたことを言つてる。我らがお前達を捕えて牢屋行きだと？ハツ！民間人の分際で大口を叩いてくれる…どうやら公務執行妨害で逮捕されたいようだな……？」

士官が兵士達にエステル達を拘束する命令をしようとした時、

「……何をやつているのかね」

士官たちの後ろから黒服の軍人がやつて來た。

「こ、これは大佐どの！？」

黒服の軍人を見た士官は焦つて敬礼した。

「栄えある王国軍の軍人が善良な一般市民を脅す上、無実の罪を着せて拘束しようなどとは……。まったく、恥を知りたまえ。」

「で、ですがこいつらはただの民間人ではありません。ギルドの遊撃士どもです！」

黒服の軍人に注意された士官は慌てて言い訳を言つた。

「ほう、そうだったのか……。だったら尚更だろ？。軍とギルドは協力関係にある。対立を煽つてどうするのだ？」

しかし黒服の軍人は士官の言つたことを気にせず、さらに注意をした。

「し、しかし自分は將軍閣下の意を汲みまして……」

「……付け加えて言うなら彼らを拘束してしまったら君達は良くて牢屋行き、悪くて処刑になるぞ？」

「なつ！？それはどういう意味ですか！！」

黒服の軍人の言葉に士官は焦つて聞いた。また、士官につき従つている部下の兵士達も黒服の軍人の言葉にうろたえた。

「私は君達のためにも言つている。……モルガン将軍にも困つたものだ。ここは私が引き受けよう。君は部下を連れて撤収したまえ。」

「し、しかし……」

黒服の軍人の言葉に士官は納得がいかない様子を見せた。

「早朝から始めているのだ。もう充分に調査しだろう。將軍閣下には後で私が執り成しておく。それでも文句があるのかな？」

「りよ、了解しました……撤収！ハーケン門に戻るぞ！」

黒服の軍人の言葉に士官は戸惑つたが部下を連れてその場を去つた。

「さて、と……遊撃士の諸君。軍の人間が失礼をしたね。謝罪をさせてもらひよ。」

士官達を見送つた黒服の軍人はエステル達に向き直り謝罪をした。「これは、どうもご丁寧に。ま、こちらも挑発的だったし、お互いや様としておきましょ。」

黒服の軍人の言葉にショラザードは意外そうな表情をした後、気にしていなことを言つた。

「そう言つてくれると助かるよ。……先程も言つたように軍とギルドは協力関係にある。互いに欠けている部分を補い合うべき存在だと思うのだ。今回の、一連の事件に関しても君たちの働きには期待している。」

「フフ、失望させないようせいぜい頑張らせてもらうわ。」

黒服の軍人の言葉にショラザードは微笑みながら答えた。

（な、なんか……すゞくマトモそうな人ね）

（うん……誰なんだろう？）

黒服の軍人の態度にエステルは目を丸くしてヨシュアと小声で会話

をしていた。

「大佐……そろそろ定刻ですが。」

軍人の後ろに控えていた女性士官が軍人に言った。

「おお、そうか。だが、その前にやることがある。……カノーネ君。

」

「ハツ。」

軍人と女性士官 カノーネはリフィア達の正面に立ち、その場で跪き頭を下げて謝罪をした。

「……部下達の教育がなってなく申し訳ありません。リフィア殿下、プリネ姫、エヴリーヌ殿。」

「申し訳ありません。」

「……顔を上げて立つて構わん。ここでは人目につきやすい。」

自分達の正体を言いあてられたりフィアは本来の皇族としての態度で言つた。

「ハツ。」

リフィアに言われた軍人とカノーネは跪くのをやめて立つた。

「お前達の名は。」

「名乗り出るのが遅くなり申し訳ありません。王国軍大佐、リシャールと申します。」

「同じく王国軍大尉、カノーネと申します。リシャール大佐の副官を務めています。」

（……この方が「情報部」の……）

自分達の名を名乗ったリシャールをプリネはナイアルから聞いた情報を取り出し、エヴリーヌは何かの違和感を感じ、探るような視線でリシャール達を見た。

「リシャールにカノーネか。……ん?リシャールとやら、お前の顔はどこかで見たことがあるのだが余の気のせいか?」

「ハツ。以前の女王陛下とリウイ皇帝陛下との会談の際に若輩の身ながら女王陛下のお傍に控えさせていただきました。」

リフィアの質問にリシャールは敬意を持つて答えた。

「……思い出したぞ。あの時、モルガンやカシウスと共にアリシア陛下の傍にいた者か。それで余達に何のようだ？ 余達も忙しい身でな、あまりお前達に構つておらんのだ。」

「ハツ。先ほどの部下達の不手際、またモルガン将軍の不手際を重ねて謝罪させてもらうために、どうか殿下達の大切なお時間を少しだけいただいともよろしいでしょうか？」

「そのことか。よい、もうその件は余達の要求をあの老将軍が呑んだ時点で解決した。先ほどの件もあまり気にしておらぬ。関係のないお前達が謝る必要などない。」

リシャールの言葉にリフィアは気にしないことを言った。

「いえ、リベルとメンフィルが同盟国同士として、末永く付き合つて行くためにも謝罪はさせていただきたいのです。また貴国と密接な関係であり国教でもあるアーライナ教や、イーリュン教ともさらなる密接な関係を結ばせていただくためにも、殿下達のご不満をこの場で絶つておきたいのです。」

「……アーライナ教が我が祖国メンフィルと密接な関係であることはわかるのですが、なぜそこでイーリュン教も出てくるのでしょうか？ イーリュン教はメンフィルを含めて、どの国に対しても公平な態度を取っていますが？」

リシャールの言葉に疑問を持ったプリネは尋ねた。

「独自で調べた我が軍の情報ではかの『癒しの聖女』殿がリウイ皇帝陛下のご息女であり、プリネ姫や現皇帝、シルヴァン陛下の姉君だという情報がありますので、勝手ながら推測をさせていただきました。」

「ほう。まさかティア殿と我らの関係まで調べていたとはな……なかなかやるではないか。」

リフィアはリシャール達が叔母であるティアとメンフィルの関係まで調べ上げていることに弱冠の驚きを隠せず、リシャール達を評価した。

「ハツ。お褒めの言葉をあずかり、光栄です。」

「ただこれだけは言っておく。ティア殿は確かに我がマーシルン家の者だが、の方は一信者としてイーリュンの教えを全うしている。よつて余達の機嫌を取つても無駄だぞ。」

「わかりました。殿下の大切なお言葉、心に留めさせておきます。」

「やれやれ……モルガンとは違つた堅物だな……それよりそこの力ノーネとやらも言つていたが時間があまりないのであるう？・部下達を困らせないためにも行つてやれ。余達はもう氣にしておらぬ。」

「ハツ！それでは失礼いたします！……おつと、言い忘れる所だった。遊撃士諸君、何かあつたら連絡してくれたまえ。私でよかつたら相談に乗ろう。」

「……失礼いたします。」

リフィア達とエステル達にリシャールとカノーネは軽く会釈した後、その場を去つた……

第41話（後書き）

感想お待ちしております。

第42話（前書き）

久しぶりの連日投稿です。今回は懐かしい人物達の名前前がチラッと出てきます。それとエステルはすでに原作からかけ離れているキャラだと再認識できることが書いてあります。

（ボース南街区）

「リシャール大佐つて……どこかで聞いたことあるような。」

去つて行くリシャールの後ろ姿を見てエステルは咳いた。

「ナイアルさんが言つてた人だね。王国軍情報部を率いるキレ者の若手将校だつていう。」

「あ、そうだつた。うーん、軍人にしてはけつこう話が判るヒトだつたね。」

ヨシュアの言葉で完全に思い出したエステルはリシャールの自分達に対する態度を思い出し、感心した。

「ふむ、歳は三十半ばくらい、ルックスも悪くないと来たか。……。軍人より政治家に向いていそうね。」

シェラザードは自分なりにリシャールを解釈した。

「おーい、お前さんたち。今の黒服の軍人、誰なんだ？なんか見覚えがあるんだが……」

そこにナイアルが工房から出て来て首を傾げながらエステル達に尋ねた。

「なんだ、顔は知らないんだ。ナイアルが言つてた、情報部のリシャール大佐だつてさ。」

「な、なにーーーーー？ おいおい、そりやホントか？」

エステルの答えに驚いたナイアルは聞き返した。

「う、うん……。」

「本人がそう名乗つていたから間違いないと思いますけど……」

ナイアルの様子にエステルはたじろぎ、ヨシュアは丁寧に答えた。

「まさかこんなところで噂の人物に出くわすとは……。こ'うしちゃいられん！ ドロシー、追いかけるぞっ！」

「アイアイサー！ よくわかりませんけど～」

エステル達の答えを聞いたナイアルはドロシーと共にリシャールを探るために走り去った。

「は、張り切つてゐるわね～。インタビューでもするのかな？」

「ふふ、確かに記事にしたら受けそうな人物ではあるわね。」

ナイアル達の様子を見て眩いたエステルの言葉にシェラザードは笑つて答えた。

「…………ふむ…………」

「ん、どうしたの？ 珍しく真剣な顔しちやつて。」

オリビエの真剣な表情を珍しく思つたエステルは声をかけた。

「いや、今の大佐なんだが……。なかなかの男ぶりであるのはボクも認めるに^{やぶれ}おかではない……。しかし……」

「しかし……なんですか？」

続きが気になり、何があると思つたヨシュアはオリビエに尋ねた。

「ボクのライバルとなるにはまだ役者不足だと言えよ。より一層の精進を期待したいね。」

「聞くんじやなかつた……」

「その自信がどこから湧いてくるのか不思議ですね。」

しかしここで出たオリビエの言葉が全てを台無しにして、エステルとヨシュアは疲れた表情をした。

「そう言えば……さつき大佐達が言つてたけど、イーリュン教で有名でプリネのお母さんと同じ『聖女』の『癒しの聖女』さんがメンフィルの皇族というのは本当なのかい？」

話を変えるためにヨシュアはリシャールが言つていたある事をリフィア達は否定せず、認めたことが気になつて聞いた。

「ん？ ティア殿のことか？ さつきも言つたがティア殿は余の叔母上であり、プリネや父にとつては腹違ひの姉になるぞ。」

「おや？ 確か『癒しの聖女』の名前は『ティア・パリエ』だつたと思つただが……？」

「よく知つてるわね！」

オリビエがティアのフルネームを言つた時、エステルは怪しい者を見る目付きでオリビエを見た。

「フッ……そう讃めないでくれ。照れるじゃないか。」

「讃めてなんていわないわよ！どうせあんたの事だから、『癒しの聖女』っていう人も美人だから覚えていただけでしょーが。」

「ありえそうね……私も一度だけたまたま『癒しの聖女』がメンフィル大使のところに帰省した時、見たことがあるけど、師匠やメン

「ハハ……それでどうして『癒しの聖女』さんはリフィア達の名前を使わないんだい？」

エステル達とオリビエのやり取りに苦笑したヨシュアは本題を戻した。

「ティアお姉様は同じイーリュンの信者であつたお母様の遺志を継ぐ意味でお母様の名前で名乗つてているんです。それにマーシルンの名はどちらの世界でも有名すぎますから……もちろん必要と思つた場面では私達の名前を使つていてるそうですから、多分リシャール大佐達はその時の情報を手に入れたんでしょうね……」

「……ねえ。話を聞いてて思つたんだけどさ。プリネのお父さんつて聖女様を含めて何人奥さんがいるの？今までの話から考へると少なくとも3人はいるよね？」

プリネの説明を聞いていたエステルはある事に気付き聞いた。

「お父様の側室の数ですか？え～と……何人でしたっけ、お姉様？」

「正式に認められているのはアーライナ神官長ペテレーネ、闇剣士カーリアン、近衛騎士団長シルフィア、イーリュンの神官ティナに各王公領の姫君であつた、セルノ王女ラピス、バルジア王女リン、スリージ王女セリエル、フレスラント王女リオーネだからリウイの側室は8人だな！」

次々とリウイの側室の名前を言つリフィアの言葉にエステルは一瞬、

夜空の様な長く美しい黒髪をなびかせる女性と、その女性の横に並ぶように肩まで切りそろえた陽の光の様な輝く金髪の女性の後ろ姿が頭に浮かんだ。

(……え……？今、頭に浮かんだ2人は誰？何だろう？2人が自分のように思えるのはなんで……？？)

リフィアが口に出して言つたリウイの側室であり”幻燐戦争”的英雄達の知らないはずのある名前を聞き、頭に浮かんだ女性達の後ろ姿にエステルは何かが心に引っかかり、無造作に胸を抑え俯いた。

「8人って……いくら大国の皇帝とはいえ凄い数だね……」

一方ヨシュアはエステルの様子に気付かず、リウイの側室の数に驚いた。

「それがリウイの器の大きさよー世継ぎである子供を作るのも王としての務めだからな！」

「だからと言つて限度があるでしょうに……よく後継者争いとかにならなかつたわね？」

リウイのことを誇つているリフィアを見てショーラザードは溜息をつき呟いた。そしてショーラザードの言葉にブリネは微笑みながら答えた。

「フフ……確かに普通ならそう思いますが、お父様はああ見えて家族を大切にする方ですからお兄様方や側室の方々を誰一人ないがしろにせず、家族として大事に接してきました。また、側室の方同士仲がよかつたですから。そのおかげで私を含めてお兄様方はみんな仲がいいですし、それぞれの側室の方々の中には領主、あるいはその親族である方もいらっしゃいましたから、その方々のご子息やご息女は自分の母親の領を継ぎましたし、中には兄妹同士で結婚した方々もいらっしゃいますよ。」

「ほつ……半分とはいえ血が繋がっている兄妹同士が結ばれるとはこちらでは考えられないことだけど、それも異世界特有の文化かい

？」

兄妹同士が結婚した事に驚きを隠せていないオリビエはプリネに聞いた。

「……まあほとんどの神殿では兄妹同士の結婚は禁じられていますが、メンフィルと友好的な神殿では特に禁じられている訳ではありませんから。」

「ふむ……しかし夫婦の絆でもある子供は生まれるのかね？兄妹同士では生まれないと聞いたことがあるよ？」

「その心配は無用です。すでにその証拠はオリビエさんの田の前にありますよ？』

「ほう。どういふことかね？」

プリネの言葉にオリビエは首を傾げて聞いた。そしてオリビエの様子を見てリフィアは胸をはって答えた。

「その証拠とは余だ！」

「リフィアが？」

高らかに言つたリフィアをヨシュアは不思議そうな表情で見た。

「うむ！余の父 シルヴァンはリウイと側室の一人であり近衛騎士団長であったシルフィアの息子で、同じく母 カミ リはリウイと同じ側室のカーリアンの娘だ！」

「へえ……エステル？どうしたんだい？」

弱冠驚いたヨシュアは先ほどから黙つて俯いているエステルの様子がおかしいと思い、声をかけた。

「へ！何？？」

ヨシュアに呼ばれたエステルは驚いて顔を上げた。

「いや、エステルがさつきから黙つているからどうしたのかと思つて。」

「ちょっと考え事よ！それより、リフィアのお父さんが今のメンフィル皇帝だっけ？」

「うむ、それがどうかしたか？」

「さつきの話を聞くとリフィアのお父さん達のお母さんって側室なんだよね？」

「……ああ。」

エステルの言葉に何があると思つたリフィアは真面目な表情をして先を促した。

「気になつたんだけど……プリネのお父さん リウイって人だっけ？のえーと……正室の子供はいないの？」

「！」

エステルの言葉にリフィアは目を大きく開いて驚き

「…………」

エヴリーヌは複雑そうな表情をし

「…………それは…………」

プリネは悲しそうな表情で呟いた。

「え？え？何？あたしなにかマズイこと言つた??」

リフィア達の空気が凍つたことに気付いたエステルは慌てて聞いた。（どうしたんだよ、リフィア達。）

（私にもわかんないわよ……ただ、以前師匠にもメンフィル大使の正室の方はどんな方が聞いたことがあるんだけど、いつもはぐらかされるのよね……）

（ふむ……何か深い理由がありそうだね。）

リフィア達の様子がいつもと違つ事にヨシュア達は小声で会話をしていた。

「えっと……お父様の正室の方ですね。実は正室の方は若くして子を残さず死去されたのです。」

「あ……『メン……もしかしてあたしかなりマズイ』ことを言つたみたいだね……」

気を取り直したプリネの言葉にエステルは氣不味そうな表情をして謝った。

「いえ、気にしない下さい。知らなかつたのですから仕方ありません。……お父様と正妃様の出会いは決していいものではありませんでしたが、お互ひ惹かれ、愛し合い、周囲の者達が羨むような仲睦まじい夫婦で、誰もがお父様達の子を期待したのですが正妃様は若くして無念の死を遂げられたのです……」

「そう……だつたんだ……病気か何か？」

「……まあ、そのようなものだ。ちなみにプリネの母であるペテーネは当時、リウイと正妃様の傍で世話をする侍女として仕えていたのだ。」

「聖女様が……」

リウイの愛妻、イリーナの最後を誤魔化し話を変えたリフィアから聞いた、ペテーネの以外な過去にエステルは驚いた。

「まあ、それは今でも変わつておらぬがな。プリネを産んで側室といつ位を得たにもかかわらず、未だにあ奴は臣下の態度を取り続けているからな……リウイはもちろんのこと、余やファーミシルス、同じ側室であるカーリアンも気軽な態度をとることを認めていふるといふのに……」

リフィアはペテーネのリウイに対する普段の態度を思い出し溜息をついた。

「まあ今まで仕えている人、しかも皇帝に臣下の態度をなくすなんて本人にとつては難しいことだと思うわよ。……さて、話はここまでにして調査の再開をしましょうか。」

「うん、そうだね。そういうえばハーケン門でリフィア達がヴァレリア湖で何か気になることがあつたて聞いたけど何なの？」

シェラザードの言葉に頷いたエステルは調査を再開しようつと歩きかけた時、ある事を思い出しリフィア達に聞いた。

「おお、それを伝えるのをすっかり忘れていたな。」

エステルから聞かれたリフィアはエステル達がラヴィンヌ村に行き

軍に拘束されている間に手に入れた情報を話した。それはヴァアレリア湖で最近妖しい男女の2人組が現れ会話をしているというものだった。そしてその内の女性が学生服を着ていたことをエステル達に伝えるとエステル達は驚いた。

「学生服つて、まさか……」

「ジエニス王立学園かい！？」

リフィア達の情報にエステルは驚きヨシュアは確認した。

「余はそのジエニス王立学園とやらの制服は知らぬが少なくともやの情報を持っていた者は、学生服を着ていたと言つていたぞ？」

「……決まりね。早速ヴァレリア湖に行きましょう。」

ショラザードはリフィアの言葉に頷き、エステル達に目的地であるヴァレリア湖に向かうよう促し歩き出した。エステル達が歩き出しリフィアとブリネが仲良く会話をしている姿を、オリビエはエステル達が見た事もない意味ありげな眼差しで後ろから見つめた。

「……フツ…………（ボクとしたことが……らしくないことを考へてしまつた。）」

口元に笑みを浮かべた後、すぐについつもの表情に戻したオリビエはエスティル達の会話に混ざり、エステル達と共にヴァレリア湖に向かつた……

第42話（後書き）

今回の話で幻燐やつている人にとってはエステルに隠された真実がバレバレのような気がします。……今更ですが碧の軌跡の公式でキャラクター達が一挙公開されましたね！ランディ、再び仲間でよかつた……そしてノエルとワジはいつのまにやらメインキャラに昇格……ノエルはわかるんですがなぜ、ワジの所属が特務支援課に？？って思いましたよ……どっちにしろ期待がさらに大きくなりました 感想お待ちしております。

ノヴァレリア湖畔

「……」がヴァレリア湖の北岸か……。
なかなか雰囲気がいい場所ね」「
そうだね。宿も立派そうだし。」

そ二たね
宿も立派そ二たし

もエステルの言葉に頷いた。

一 前に仕事で泊まつた事あるわ。洒
句のつけられない宿だつたわね。

「ん。アンテ口リゼ? だつけ。あそことはまた違つた美味しさだつ

たよ。

「うむ！風景、宿の雰囲気、酒や料理……どれも素晴らしい物だった！余も個人的に何度も来たいと思うところであつたぞ。」

「うーん、遊びに来ただつたら話う」となしだつたんだけじ……」

た。

「あれ、違うのかい？ボクはそのつもりだつたけど。昼はボートに揺られうたた寝し、夜は酒と料理に舌鼓を打つ……。これぞバカン

「アーティスト」

卷二

卷之三

オリビエの言葉にエステルとリフィアは怒ったような表情でオリエを睨み、ヨシュアは呆れたような視線を送り、プリネは困ったような視線を送り、シェラザードとエヴリーヌは冷ややかな視線をぶつけた。

しめるが、空賊退治は今しか楽しめない。……」のオリビエ、優先順位はちゃんと弁えているつもりだよ。

エステル達に睨まれたオリビエは笑つて誤魔化した。

「楽しむ、楽しまないの問題じゃないと思うんだけど……」

脱力したエステルは溜息をついた。

「ふふ、まあいいわ。本気でやつてくれさえすれば。……さて、プリネさん達が言つてた目撃者を捜すわよ。」

そしてエステル達はプリネ達の情報の元となつた目撲者を探し始めた。

しばらく歩いて探していると桟橋で釣りをやつている男性がいた。

「あ……確かあの人です。そうですよね、リフィアお姉様？」

プリネは釣りをしている男性を見てリフィアに確認した。

「うむ。」

「じゃあ、早速声をかけて見ますか。あのー、ちょっとといいかな?」

「…………」

エステルは話を聞くために声をかけたが男性は釣りに夢中で全く気が付かなかつた。

「あれ?」

全く反応がない男性にエステルは首を傾げた。

「……エヴリーヌ達が話しかけた時も同じだったよ。釣りが終わるまで話しかけても無駄だと思うよ。」

「すごい集中力だね……魚以外目に入らないみたいだ。」

エヴリーヌの言葉を聞き、ヨシコアは男性の動作を見て感心した。

「フツ、仕方ない。ここはボクの出番のようだね。」

「へつ……」

オリビエが前に出て来、何かすると思つたエステルは場所を空けた。そしてオリビエは男性の傍に近づき耳に息を吹きかけた。

「…………ふうへつ…………」

「ひやああつ！？な、なんだね君たちは！？い、い、いつからそこ

につー？」

オリビエの行動に驚いた男性は飛び上がり、エステル達に気付いた。

「エ、エゲツな……」

「見ている「ツチも思わず鳥肌が立っちゃつたわね……」

「……プリネ、あいつの傍いつちゃダメだよ。」

「フフ、ありがとうござります。エヴリーヌお姉様。」

オリビエの行動にエステルとショラザードは呆れ、エヴリーヌはプリネを守るよう自分後ろに隠すためにプリネの前に移動した。

「やあ、じきげんよう。先程から声をかけていたんだが、さすがプロ、凄い集中力だねえ。」

驚かした張本人であるオリビエは悪びれもせず話しかけた。

「あなたがロイドさんですね？」

「あ、ああ、その通りだが。はて、どうして私の名を？」

ヨシュアの言葉に男性 ロイドは首を傾げた。

「ここにいる3人からあなたのことを聞いたのよ。少し時間をいただけないかしら？」

ショラザードはリフィア達をロイドに見えるようこどき、尋ねた。

「なるほど……そこのお嬢さん達から聞いたのか。ああ、確かに見たよ。おとといの夜、奇妙な連中をね。」

「やつぱり……。その話、あたしたちにも詳しく教えてくれないかな？」

「……その前に。君たちは遊撃士だつて？何か事件に関係することかい？」

エステルの質問にロイドは聞き返した。

「断言は出来ません。ですが、可能性はあります。」

「わかつた……そういう事なら協力しよう。」

ヨシュアの説明に頷いたロイドは話始めた。

「おとといの晩……ボートで夜釣りに出た時のことさ。ヌシとの格

闇に明け暮れた私はクタクタになつて宿に戻つてきてね。すっかり夜も更け、宿の者全員が眠りに就いていた。

「ちょっと待つて。……そのヌシっていうのは？」

ある言葉が気になりショーラザードは尋ねた。

「よくぞ聞いてくれました！」

ショーラザードの質問にロイドは目を輝かせて声を上げた。

「ヌシというのはこのヴァレリア湖に住む巨大マスのことですね！もう10年以上も前から我々釣り愛好家のあいだで恐怖されている魚なんだよっ！」

（しまつた……）

（マニア心に火をつけましたね……）

熱く語り出したロイドを見てショーラザードは後悔し、ヨシュアは溜息をついた。

「そ、そんな凄いヤツなんだ！？」

一方釣りが趣味であるエステルは興味心身で聞いた。

「ああ、私は5年近くヤツを追つているのだが……。なにせ、広大なヴァレリア湖をあつちに行つたりこつちに来たりと気まぐれにエサ場を変える魚でね。最近、この辺りに現れた事を知つて、私も王都から追つかけてきたわけや。」

「フッ、大した情熱だ。その気持ち、判らなくもないよ。ボクも気に入ったものがあつたら、何としても手に入れたくなる口でね……たとえば『グラン』『シャリネ』とか。」

「あれは手に入れたんじやなくて飲み逃げしたたげでしょーが。」ロイドの情熱に同じ気持ちのつもりのオリビエだったが、すかさずエステルが否定した。

「「ホン……話を戻すわよ。それで、ロイドさん。夜釣りから戻つてきてどつしたの？」

話を戻すためにショーラザードは咳払いをした後、再び尋ねた。

「あ、ああ……。それで、ボートを戻して宿の中に入ろうとしたん

だが……。奇妙な二人組が、宿の敷地から街道に出て行くのを見かけたんだよ。」

「街道つて……そんな真夜中にですか？」

ロイドの言葉に疑問を持ったヨシュアは尋ねた。

「ああ、間違いない。アンセル新道に出て行ったよ。最初は、街から遊びにきた連中が戻るところなのかと思つたけど……さすがに時間が遅すぎるし、次の日、宿の人間に聞いてみたらそんな連中知らんと言うじゃないか。幽靈でも見たんじゃないかつて思わず背中がゾーンとしたものさ。」

「ゆ、幽靈！？そ、そんなの出るの、ここ！？」

思い出して震えているロイドの言葉にエステルは悲鳴を上げた。

「はは、何せその二人組、若い男女のカップルだつたからね。もしかしたら、周囲に認められずに心中したカップルだつたのかも……」「あううう、や、やめてよう！」

怪談話をするようなロイドの雰囲気にエステルは悲鳴を上げて耳を塞いだ。

「やれやれ……相変わらず幽靈話には弱いのね。」

「そのクセ聞きたがるんですよ。怪談とか、世にも奇妙な物語とか。

「ふふ、エステル君もそうやって恐がつてる分には、なんとも可愛らしいじゃないか。寒さに震える子猫のようだよ。」

震えているエステルの様子にショーラザードは苦笑し、ヨシュアは面白そうな表情で話し、オリビエはからかった。

「ふーっ、噛み付くわよ！？」

オリビエの言葉に頭にきたエステルは振り向いてオリビエを睨んだ。（うーん……幽靈つてそんなに怖いものですかね？リタさんのことを考えたらそれほど怖くないのですが……？）

（プリネ、あ奴を比較対象にしてはダメだ。参考にならん。）
（ん。エヴリー・ヌ達の世界にいる不死者とか怨霊を見たら、普通の

人間は怖がると思うよ。）

幽霊を怖がっているエステルを見て、幼い頃に会つたことがある幽靈の少女のことを思い出したプリネは不思議がつたが、リフィアは比較する相手が違つことと言い、エヴリーヌもリフィアの言葉に頷いた。

「ははは……まあ、幽靈つていつのは冗談さ。だが、訳ありのカツブルというのはもしかしたら本当かもしないんだ。女の子が変わった服を着てたからね。」

エステル達のやりとりに苦笑したロイドは話を続けた。

「変わった服……というと？」

ロイドの言葉が気になつたヨシュアは聞き返した。

「そちらのお嬢さん達にも言つたが……後ろ姿から見て学生服を着てたみたいなんだ。」

「学生服つて、まさか……」

「ジニアス王立学園ですか？」

「ほひ、良く知つてゐるね。私の姪も通つてゐるんだが、それとソックリだつたよ。」

ヨシュアの答えにロイドは感心して答えた。

「どうやらアタリを引いたみたいね……」

「うん！あの生意氣娘、とうとう尻尾を掴んだわよ～っ」

ショラザードの言葉に頷いたエステルは以前空賊の娘にバカにされたことを思い出し、怒りを再熱させた。

「なんだ……君たちの知り合いだつたのか？だつたら、あの2人が思い詰めて早まつたことをしないよう注意してやつてくれ。たしか、今夜あたりにまた来るような事を話していたからね。」

「なるほど……。貴重な情報、感謝するわ。後は我々に任せてちょうだい。絶対に悪いようにしないから。」

「ホッ、そうか……そう言ってくれると助かる。何だか肩の荷が下りた気分だよ……安心したら今度はボート釣りがしたくなつてきた

な。こうしちゃこられん！君たち、私はこれで失礼するよ……あ

あ、そうだ！もう一つ伝え忘れるところだつた。」

シェラザードの言葉に安心したロイドはその場から走り去ろうとしたが、ある事を思い出し戻つて来た。

「何かしら？カップルの件で伝え忘れた事かしら？」

戻つて来たロイドにシェラザードはさらに情報があると思つて聞いた。

「いや、それとは関係のない話になるんだけど、伝えさせてもいいかな？」

「ええ、構わないわ。」

「わかった。……実はここ最近の噂なんだが、このヴァレリア湖に

”竜”がいるっていう噂があるんだ。」

”竜”ってあのよくお伽噺とかで出てくるやつ？大きな体で翼があつて炎を吐く。」

ロイドの話にエステルは半信半疑で聞いた。

「ああ。炎を吐くからはわからないが翼はあつて、巨大な体で後、湖の底から姿を現したという噂だ。」

「……そう、ありがとう。一応その情報も気にしておくわ。」

「遊撃士の人達にこの情報を伝えてよかつたよ。それじゃあ改めて失礼する！」

シェラザードにもう一つの情報を伝え、安心したロイドはその場を走り去つた。

「……湖の底から”竜”か……リベルも”竜”的伝承はあるけど湖の底から姿を現すつてのはないわね……エレボニアではどう？」

ロイドの情報の真偽を考えたシェラザードはオリビエにも聞いた。

「エレボニアも同じだね。”竜”は高い山脈で眠り、大空から姿を現すことが伝えられているね。」

「……3人共、メンフィルでは心当たりはない？」

情報の真偽がわからずヨシュアはリフィア達にも聞いた。

「……一つ、心当たりはあります。」

「つむ、恐らく先ほどロイドとやらが言つてた”竜”は”水竜”的ことだな。」

「”水竜”？何それ？？」

リフィアの言葉がわからなかつたエステルは詳しい説明は聞いた。

「”水竜”とはその名の通り、海や湖等水の中で生活する”竜”的一種です。”水竜”は賢く、自分が認めた者にはその背にのせ共に戦つてくれる心強い味方にもなりますから、騎馬代わりに乗る騎士も結構いるのです。」

「うむ、その者達は”水竜騎士”と呼ばれるのだ。”水竜騎士”は”飛竜”をあやつり大空をかける”竜騎士”とは逆に地上を駆け、さらには水上での戦闘も可能だからどの軍でも主力となるのだ。」

「ほう……メンフィル軍にもいるのかい？」

リフィア達の説明を感心して聞いたオリビエは質問した。

「もちろんメンフィル軍にも”水竜騎士”はいます。ただ少し気になることがあるんですね……」

「それはなんだい？」

考え込んでいたプリネが気になつたヨシュアは続きを聞いた。

「”水竜”は普通大蛇のような姿をしているんです。ですが先ほど

の男性の話では……」

「あ……”翼が生えてる”って言つてたよね！？」

プリネが考え込んでいた意味がわかつたエステルは声を上げて言った。

「つむ。翼が生えてる”水竜”もいることはいるが、その”水竜”は恐らく”水竜”の中でも相当高位に値する種族だな。」

「高位……つてことはかなり強いんだろうな～。でも、なんでこんな所にいるんだろ？？」

「エステル……ロイドさんの話はあくまで噂だよ。まことにかどり

かわからないじゃないか。」

すっかり噂の竜がいると思いこんでいるエステルにヨシュアは呆れて注意した。

「あ……そつか。」

「まあ、一応心にどどめておきましょ。それより例のカッフルを待つために今日はここで宿をとるわよ。」

シェラザードはヨシュアの言葉に頷き、今後の方針を言った。

「ふむ、先ほどから話によく出ていたそのカッフルがどう事件に絡んでくるんだい？事情を知らないボクにも懇切丁寧に教えてくれたまえ。」

そしてエステル達は事情を知らないオリビエに空賊達のことを説明した後、真夜中まで待つために宿を取ることにして、それぞれ一時の休憩に入った……

第43話（後書き）

もうお気づきかと思いますが今回の話ですでに新クロスオーバーキャラ2人目の話も出て来ています。まあ、わかる人にはわかるでしょうね……感想お待ちしております。

第44話（前書き）

今回はみなさんも予想していた新クロスオーバーキャラ2人目が出てきます！

宿屋の受付で部屋をとったエステル達は一端自由行動にした。ショラザードとオリビエは果実酒を飲みかわし、エステルとリフィアは釣りで勝負をして樂しみ、ヨシュアとブリネはそれぞれ宿屋のベランダにあるテーブルの傍にある椅子に座り読書をし、またエステルとブリネは使い魔達を召喚し自由に遊ばせ、エヴリーは適当な場所で日向ぼっこをして昼寝をした。樂しい時間はすぐに過ぎ、気がつくと夕方になっていた。

～ヴァレリア湖・夕方～

「ふう、もう夕方が……」

「む？ もう、そんな時間が。」

魚をまた釣つたエステルは辺りが夕焼けにそまつているのに気付き、リフィアはそれに気付いて残念そうな表情をした。

「うん！ なかなかの戦果ね。」

「むむむ……余が勝負事で負けるとは。次はこうは行かないぞ！」

「ふふうん いつでも受けて立つわよ。」

エステルが釣つた魚の数と自分が釣つた魚の数を見てリフィアは唸り、エステルは得意げな表情をした。

「見て見て、ヨシュア、ブリネ。こ～んなに釣っちゃったわよ！」

「ふふ、凄いですね。」

読書をしているヨシュア達に自慢するために振り向いたエステルだったが、そこにはブリネしかいなかつた。

「あり？ ヨシュアは？」

「ヨシュアさんでしたら、先ほど席を立つてどこかに行きましたよ。」

「ふうん……あれ、これって……」

机に近づいたエステルはテーブルの上に置いてある本　『実録・

百日戦役』を見つけた。

「あら。先ほどヨシュアさんが読んでいた本ですね。」

「じゃあ、ヨシュアの忘れものじゃない。いつも澄ましてるクセに割と抜けてるトコがあるのよね~。仕方ない、あたしが届けてやるか。」

「私達はエヴリーヌお姉様を起こして先に宿屋で待ってますね。」

「うん、わかった。」

そしてエステルはヨシュアを探して歩き周った。

（外れの桟橋）

そこにはヨシュアが無言で寂しそうに佇んでいた。

「よつ、少年。こんなところで何をたそがれてあるのかね？」

「はは……たそがれてなんかいないけどね。もう、釣りはいいの？ リフィアと勝負していたんじゃないの？」

エステルの声のかけかたに苦笑しながらヨシュアは振り向いた。

「うん、夕食の時間が近いから切り上げてきちゃった。もちろん、あたしの勝利でね。あ……そうだ。」

エステルはヨシュアに先ほど見つけた本を差し出した。

「も～、読書するとか言つて置きっぱなしにしちゃってさ。それに美人でスタイル抜群、おまけに器量よしと女の子として完璧な上、皇女様なプリネといつしょに読書をする機会なんて滅多にないわよ～。せつかく気を効かせて話しかけなかつたのに、ヨシュアったら読書に夢中でプリネには一回も話しかけないなんて勿体ないわね～。そんなんだから可愛い彼女ができるんだよ？」

「余計なお世話だよ。そういうエステルだつて皇女様と釣りで勝負するなんて、釣り勝負の中では前代未聞じゃないのかい？」

エステルのからかいの言葉にヨシュアは溜息をついた。

「まあいいや。……ちょうど読み終わつたばかりでさ。目が疲れた

から気分転換に散歩してたところなんだ。」

卷一

ヨシュアの様子に溜息をついたエステルは近付いた。

たに?

エステルが近付きヨシュアは珍しく焦つて一步下がった。

「まーた1人だけでなにか溜め込もうとしてるな? 分かるんだってば、そーいうの。」

卷之三

エスカルの言葉にミシーハは口を開けた。

「大体ね、フヨアじやないわよ、田シロアだつて、あたしが落ち込んだ時には慰めるクセに……あたしじゃ父さんみたいに頼りにはならないと思うけど……それでも、いつやって一緒にいてあげられるんだから。」

ヨシュアの隣に来たエステルは優しい笑顔でヨシュアに言った。

ノルマの発達とその発達過程で繰り返す

「いつには、ありがとう、でしょ？ ポシコアって頭はいいけど、心な」とが分かつてないんだから。

「はは、本当にそうだな。ありがとう……エステル。」

「うーん、まあいいか。」

「おおせのままで……『星の在り処』でいいかな?」

ハーモニカを取り出したヨシユアはなじみ深い曲でいいか尋ねた。

卷之三

エスティルが頷き、桟橋を支えている木の柱に座ったのを見て、ヨシユアはハーモニカを吹き始めた。

—

ヨシュアのハーモニカの曲は儂げながらも耳に残る曲で、ショラザードやオリビエ、ブリネ達を含めヴァレリア湖の客達も耳を傾けて聞いていた。ちなみにヨシュアのハーモニカの曲にブリネは驚いた表情で聞いていた。

「えへへ、なんでかな。ハーモニカの音つて夕焼けの中で聞くとなんだか泣けてくるよね。」

ヨシュアがハーモニカを吹き終わるとエステルは田元についていた涙を拭つた。

「…………相変わらず……何も聞かないんだね。」

「…………あは……約束したじやない。話していくれる気になるまであたしからは聞かないってね。」

エステルから田をそむけているヨシュアにエステルは苦笑して言った。

「それに5年も経つんだもん。なんか、ビーでも良くなつたし。」

「そう……5年もだよ。どうして何も聞かずに一緒に暮らせたりするんだい？あの日、父さんに抱き込まれたボロボロで傷だらけの子供を……昔のことをいつさい喋らない得体の知れない人間なんかをどうして君たちは受け入れてくれるんだい……？」

エステルの前向きな言葉にヨシュアは不思議に思い、真剣な表情でエステルを見た。

「よつと……そんなの当たり前じゃない。だつてヨシュアは家族だし。」

ヨシュアの言葉を気にせず、腰を上げて立つたエステルは事も無げに言った。

「…………」

エステルの言葉にヨシュアは呆気にとられたような表情をした。

「前にも言つたけど、あたし、ヨシュアのことつてかなーり色々と知ってるよね。本が好きで、武器オタクで、やたらと要領がよくて……人当たりはいいけど、他人行儀で人を寄せつけないところが

あつて……」

「ちよ。ちよっと……」

どんどん自分のことを言つエステルにヨシュアは制しよりと声を上げたが

「でも、面倒見は良くて実はかなりの寂しがり屋。」

「…………」

エステルの言葉に口を開いたまま黙つた。

「もちろん、過去も含めて全部知つてゐわけじゃないけど……それを言つなら、父さんやお母さんの過去や出来事にだつてあたし、あまりよく知らないのよね。だからと云つて、あたしと父さんやお母さんが家族であることに変わりはないじゃない？多分それは、父さん達の性格とか、クセとか、料理の好みとか……そういうた肌で感じられる部分をあたしがよく知つてるからだと思つ。ヨシュアだって、それと同じよ。」

言いたいことを言い終えたエステルは満面の笑みを浮かべてヨシュアを見た。

「…………本当に……君には敵わないな。初めて会つた時……飛び蹴りをくらつた時からね。」

「え……そ、そんな事したっけ？」

ヨシュアの言葉にエステルはたじろいだ。

「うん、ケガ人に向かつて何度もね。」

「あ、あはは……幼い頃のアヤマチつてことだ。」

ハツキリ言つたヨシュアにエステルは苦笑しながら言つた。

「はいはい。……ねえ、エステル。」

「なに、ヨシュア？」

「今回の事件、絶対に解決しよう。父さんが捕まつてゐるかどうか、まだハツキリしてないけど……。それでも、僕たちの手で、絶対に。」

「

「うん……モチのロソよー。」

ヨシュアの真剣な言葉にエステルは元気良く頷いた。

「ふふ……そろそろ宿に戻るつか？食事の用意もできる頃だらう

「うん、お腹ペコペコ。しつかりゴハンを食べて真夜中に備えなくせやね。」「

そしてヨシノ

そしてミニアとエスティルが宿に戻ることとした時の気配を感じて足を止めた。

「ふえ！？」
「！エスティル、
氣をつけて！」

一〇二

「……………！」
いつも戦闘ができるようにミシニアは双剣を構えたが、エステルは驚いて周囲を見渡した。すると湖の底から巨大で翼を持つ竜らしき生物が大きな水音を立て、現れた。

「な！
！」

湖の底から現れた竜のように見える生物を見て、二人は驚いて声を出した。

「まさか、噂が本当だつたなんて……もしかして、この竜？がプリ
ネ達が言つてた”水竜”なのかな？」

「みだしたね、どうするエステル？」

ヨシュアの言葉にエステルは判断がつかず、首を傾げた。すると水竜は長い首を動かし、エステルに顔を近づけた。

「エステル！！」

エステルに近づく水竜にヨシュアは焦つて双剣を構えて声を出した。

「待つて、ヨシュア。」

焦つて攻撃をしようとするヨシュアにエステルは片手で制した。エ

ステルの言葉通り、近付いてきた水竜の顔はエステルの目の前で止まり、エステルを見つめた。

「あたしに何か用?」

自分を見つめている水竜にエステルは言葉をかけた。

「…………」

しばらくエステルを見つめていた水竜はエステルから感じる僅かな懐かしい魔力やエステルの雰囲気に、水竜が子供の頃に出していた鳴声でエステルに甘えた。

「…………ク…………」

水竜が感じた僅かな魔力とは水竜がかつて契約した主と同じ魔力だつたのだ。なぜ、エステルにかつての主の魔力が僅かながら感じたのは、水竜と同じ主に仕えたことのあるパズモと契約した際、パズモに残っていたかつての主の僅かな魔力がエステルの魔力と混ざっていたのだ。

「わあ、見た目によらず結構可愛い鳴声ね」

一方理由がわからないエステルは水竜の鳴声に喜び、手を出した。すると水竜は懐くようにエステルの手に顔を擦りつけた。

「ふふ、くすぐったいわよ」

「やれやれ、相変わらず凄いな。エステルは……」

エステルと水竜のやりとりにヨシュアは安心して武器を収めた後、水竜と仲良くしているエステルを感心した表情で見た。そしてある事を考えたヨシュアはエステルに聞いた。

「エステル、もしかしてその水竜の言葉がわかるの?」

「ううん。契約している訳でもないし、この子の言葉はわかんないわよ。でも、なんとなくこの子は悪い子じゃないって感じるのよね…………」

答えたエステルは水竜の頭を優しく撫でた。エステルに撫でられた水竜は気持ちよさそうに甘えるような鳴声を出した。

「ク」

「ふふ、ここが気持ちいいのね……よしよし……」

少しの間エステルは水竜を撫でて遊んだ。そしてしばらくするとエシュアは口を開いた。

「……エステル、名残惜しいとは思うけど。」

「うん、わかってる。ゴメンね、あたし達はもう行かないダメなんだ。いつかまた会いに来るから、その時はいっぱい遊んで上げるね！だからそれまで、良い子にして大人しく待っているのよ？」

エステルの言葉を理解した水竜は名残惜しそうにエステルを見た後、エステルから離れて、静かに湖の底に潜つた。

「……さて、シェラ姉達のところに行こう、エシュア。」

水竜が潜つた場所を見続けたエステルはエシュアに宿に戻るよつ、促した。

「それはいいけど、さつきの水竜をエシュアさん達にどう説明しようか？」

「見たまんまのこと伝えればいいじゃない。少なくとも人を襲うような子じやないでしょ。」

「……そうだね。じゃあ、行こつか。」

「うん！」

そしてエステル達は宿に戻つて行つた。

「…………」

水竜とのやりとりをラヴィンヌ山道からエステルを観察していた狐らしき生物が見ていたことには気付かず……

第44話（後書き）

もつお気づきと思いますがエステルがどこかの誰かさんが契約を解除した召喚キャラとの契約フラグを作っていることにはつつこまないで下さい まあ、今回の話でこれからのお話で出てくる新クロスオーバーキャラも予想できますが。……感想お待ちしております。

その後、宿に戻り食事をしたエステル達だが、シェラザードが調子に乗つてオリビエに酒を飲ませまくつたので見回りの時間である深夜になると、オリビエはすでに泥酔してベッドに寝転がり起き上がらなかつた。

（ヴァレリア湖・宿屋川蝉亭・2階寝室）

「あー……うーん……げふへふ……」

「あーあ、完全にグロッキーね。さすがの超マイペース男も酔つた
シェラ姉には勝てなかつたか。」

ベッドで魔されているオリビエを見て、エステルは溜息をついた。
「いやあ、飲んだ飲んだ。最近色々あつて飲めなかつたから、久し
ぶりに堪能しちゃつたわ。」

「もう完全に素面だし……。シェラさん、何か特殊な訓練でも受け
ているんじゃないんですか？」

すでに酔いが覚めているシェラザードにヨシュアは疑問を持った。
「うーん、ゲテモノ酒のたぐいは一座にいた頃から飲んでたけど。
サソリ入りとか、マムシ入りとか。後、大使館で一年の終わりにする宴会にも師匠のお誘いで参加させてもらって、その時高級なお酒
を何本も呑んだこともあつたからね。それで酒に強くなつたのかし
ら？」

「いや……それは違うんじゃないかなあ。ていうか、シェラさん。
やつぱり大使館にも迷惑をかけたんですね……」

シェラザードの昔の行動をヨシュアは苦笑して違つことを指摘した
後、呆れた。

「何よ、やつぱりつて。だつて、せつかく誘つてもうつたのを断る
なんて失礼でしょ？」

「いやショラ姉の場合、意氣揚々と行きそなんですけど……」心外そうな顔をしているショラザードにエステルは呆れて、白い目で見た。

「う、うるさいわね。それにメンフィル大使も悪いのよ！今まで呑んだこともない美味しいお酒や滅多に手が出せない高級なお酒を湯水のように兵士や使用人にも振舞うんだから、つい私もそれに便乗して頂いたのよ！」

エステルとヨシュアに白い目で見られたショラザードは焦つて言い訳をした。

「……でもお兄ちゃん、呆れ半分で感心してたよ。『まさか、酒が苦手なペテレーが呼んだ客が一番酒を飲むとはな』って。」

「う…………」

しかし、ヒュリースに突かれショラザードは一步後退した。

「ま、まあ気にする必要はないですよ。お母様はお酒は苦手であります呑めませんし、カーリアン様やファーミシリス様も自分達と対等に飲み勝負ができる方がいらっしゃって、楽しんでおられましたし。」

「プリネは苦笑しながらショラザードをフォローした。

「うへ、この場の味方はプリネさんだけね…………」というか、プリネさんはやリフィアさんのほうも結構呑んでた割には平気な顔をしていかつたかしら？

「余やプリネは酒に強くて当然……いや、強くなくてはいけないからな。」

「それはどうしてだい？」

ショラザードの疑問に答えたリフィアの言葉にヨシュアは聞き返した。

「私達は”皇女”ですからね。お酒にやられて判断がつかないとこを狙われて”間違い”を起こしたり、覚えのない婚約を結ばせる訳にはいきませんから。」

「ま、”間違い”つて……」

プリネの言葉からある事を連想したエステルは顔を赤らめた。

「まあ、国内でそんなことを考える輩はいないが、他国との付き合いではどうしても酒は出てくるものだ。だから、余達 皇族は酒に慣れるために幼少の頃より必ず食事に酒は出されたし、判別の仕方等でも呑んだから自然と強くなつたのだ。……まあ、父達やリウイガ酒に強いのも関係していると思うがな。」

「なるほどね。……」

ヨシコアはリフィアやプリネの説明に納得して頷いた。

「それよりもコイツ、どうするの？ しばらく使い物にならないわよ。」
ベッドに寝込んでいるオリビエをエステルは一切心配せず、どうするか聞いた。

「このまま寝かせておきましょ。……ここから先は、空賊たちと直接対決になる可能性が高いわ。やっぱり、ただの民間人を巻き込むわけにはいかないからね。」

「え、もしかして……。付いて来させなくするために、わざとオリエ工を酔させたとか？」

シェラザードの言葉にエステルは驚いて聞いた。

「えつ……。…………。あ、当つたり前じゃない。」
深慮遠謀のタマモノってヤツよ。」

「その間は何なのよ。……」

「絶対ナチュラルに楽しんでたね。」

「絶対今の、嘘だね。」

「あはは……」

「やれやれ……。戸惑わずにすぐに答えばその嘘も本当に思えたものを……」

少しの間考えた後、笑顔で肯定したシェラザードにエステルやヨシコア、エヴリーヌは白い目で見て、プリネは苦笑し、リフィアは溜

息をついた。

そしてエステル達は真夜中に隠れて、見張っていたところイドの話通りのカツプル 空賊の兄妹が現れ、さらに黒装束の怪しい人間達と会話をし始めた。

ショラザードの提案でエステル達は空賊達が黒装束達と話をしている隙に、空賊艇を抑えるために一端、ヴァレリア湖から離れて飛行艇が停泊できそうな所を探していたところ、なんと昔からある遺跡琥珀の塔の前に空賊艇が停泊し、さらに空賊達がたき火をたいて自分達を纏めている人物達 キールやジョゼットを待っていた。

（琥珀の塔・入口前）

「なるほど『琥珀の塔』の前か。確かに街道から外れてるから停泊場所としてはうってつけね。」

岩陰に隠れながらショラザードはたき火を囲っている空賊達や空賊艇を見て、頷いた。

「『琥珀の塔』ってロレンントの『翡翠の塔』と同じような塔だったつけ？」

「『四輪の塔』と呼ばれている古代遺跡の一つだよ。」

エステルの素朴な疑問にヨシュアは簡単に説明した。

「みなさん……どうします？ 奇襲して制圧しますか？」

「そうね……。前に遭遇した時と較べて手下の人数が倍以上いるけど……（どうする……）むこうの数は多少上だけど、以前戦った時のあいつらの戦力を考慮すると下つ端を率いている男や少女を除けば一人一人ほとんど素人に近かつたし、加えてここにプリネさん達がいることや、

エステルやプリネさんの精霊や使い魔達を数に入れれば同等以上の数になる上、一瞬の制圧は可能……でも、下つ端達を捕まえてもあまり意味がないと思うのよね……」

プリネに提案され、ショラザードはどうするか悩んだ。

「大丈夫だつて。制圧できない数じゃないよ。」

「うむ。余がいるのだ！負けはない！！」

「キャハツ 殺さないよう手加減するのは面倒だけビエヴリーヌ

は遊べるなら、いつでもオッケーだよ！」

ショラザードが悩んでいる所エステルやリフィア、エヴリーヌが意
気込んでいたところ

「フツ……それはどうかと思つけどね」

いつのまにかオリビエが草陰から飛び出してきた。

「やあ、待たせてしまつたね」

酔っぱらつて寝込んでいたはずのオリビエは何事もなかつたのよう
に、いつもの調子のいい笑顔で言つた。

「オ、オリビ……むぐ。」

（ふう……）

オリビエの姿を見て驚いたエステルが大声を出そうとしたが、傍に
いたプリネが両手でエステルの口を塞いだので大声を出さずにすん
だ。

「静かに……あいつらに気付かれるよ。」

「…………（コクコク）」

ヨシュアの言葉にプリネに口を塞がれたままのエステルは頷いた。
それを見たプリネは安心して、エステルの口から手を離した。

「驚いたわね……。あの酔いつぶれた状態から、よくそこまで回復
したもんだわ。」

「うむ、さすがの余も驚いたぞ。一体どんな方法をとつたのだ？」

「フツ、任してくれたまえ。胃の中のものをすべて戻して、冷たい
水を頭からかぶつてきた。」

ショラザードやリフィアの感心した声にオリビエは得意げに語つた。

「あ、ありえない……」

「なんと言つが、執念ですね……」

オリビエが酔いから復活したやり方を聞いたエステルやヨシュアは呆れて溜息をついた。また、シェラザードやプリネ達も呆れや驚きなどの表情をオリビエに向けていた。エステル達の様子に気にせずオリビエは笑いながら話しつづけた。

「こんな面白そうな事を見逃すわけにはいかないからね。ちょうど宿から出たところで街道に出るキミたちを見かけて、よつやく追いついたという次第さ。」

「ツメが甘かつたわね……。火酒に一気飲みでもさせておけば良かつたかしら？」

「それは確実に死ねるんで勘弁してくれたまえ……」

しかし、シェラザードの言葉に顔面蒼白になつた。

「それよりもキミたち。ここで空賊たちと戦うのは少々面白くないと思わないか？」

「別に面白くなくてもいいの！」

理解できないオリビエの発言にエステルは怒った。しかしオリビエはエステルの怒りを気にせず、珍しく眞面目な表情で自分の意見を言つた。

「いや、これは眞面目な話。ここで戦つて、ついでにあの兄妹を捕らえたところでだ。彼らがアジトの場所について口を割らない可能性だつてある。それどころが、人質をタテに釈放を要求してくるかもしれない。」

「何事にもリスクは付きものだわ。それとも、リスクを回避できるいいアイデアもあるのかしら？」

オリビエのまともな意見にシェラザードは自分なりの考えを言つた後、尋ねた。

「フツフツフツ……諸君、耳を貸したまえ。」

シェラザードの言葉を待つてましたとばかり、オリビエは不敵な笑いを浮かべた。

「いいけど……。息を吹きかけたりしたら、マジでぶん殴るからね

?」

エステルが念を押した後、オリビエが自分のアイデアを説明し、オリビエのアイデアに賛成したエステル達は行動を開始した……オ

第45話（後書き）

実はボース編は書き終えてすでにルーアン編を書いてるんですけど、中々進まない……ルーアン編は新クロスオーバーキャラや旧幻燐キヤラが多数出てくる上、特に新クロスオーバーキャラはエステル達に深く関わらせるので、オリジナル部分が多く今までのようになんと元にして中々作れませんからその分1話が中々できない……なのでストックはしていますが週1～2ペースで出します……感想お待ちしております。

その後空賊達は帰つて来たキール達と合流した後、自分達のアジトに飛行艇で帰つて行つた。飛行艇の中に侵入者がいるとは気付かずには……

「空賊団アジト」

「ふわ～、眠い、眠い。ここに来てから昼夜逆転の生活だからな。」

「まあ、もう少しの辛抱でこんな生活ともオサラバさ。ドルンのお頭に付いていけば間違いなしつてもんだぜ。」

見張り役の空賊が欠伸をして愚痴を言つている所を、もう一人の見張り役の空賊が耐えるよつと云つた。そして空賊は思い出したかのように口を開いた。

「しかし最近のお頭……ちょっとばかり変じやねえか？おつかないつていうか気安く話せねえつていうか。」

「お前ね……そんな滅多なこと言つなよ。兄貴やお嬢に聞かれたらぶつ飛ばされるぞ？」

「で、でもよ……」

「寝不足で疲れてるんだよ。とつとつとづけを終わらせて、ゆっくり休むとしようぜ。」

相方の注意に空賊は反論をしようとしたが流された。そして2人が空賊艇の整備をしようとした時

「今すぐ休んでもオッケーだけど？」

オリビエのアイデアで空賊艇に忍び込み、潜んでいたエステル達が現れた！

「あ。」

「お前たちは……！」

一方それを知らずにエステル達を見た空賊達は驚いた。

「遅いってば！」

空賊達が驚いている隙を狙つてエステル達は戦闘を仕掛け、空賊達を氣絶させた！

「フツ、無事、潜入できたようだね。」

「まったく……こんなに上手いくとはね。今回ばかりはあんたに感謝しなくちゃいけないわね。」

ショラザードはオリビエのアイデアの成功に半信半疑だったが、実際成功したのを見て驚いた。

「で、でもさ）。メチャメチャ焦つたわよ。隠れてる所を発見されたらどうするつもりだつたの？」

「いや、発見されたとしても、その時は空賊艇を制圧すればいい。飛行船の内部は狭いから多数との戦いにも有利に働くしね。オリビエさん……そこまで考えていたんですか？」

エステルの疑問にヨシュアは答えた後、オリビエに尋ねた。

「いや、まったく。敵地潜入というシチュエーションが単に面白そうだと思つただけさ。」

「あ、あんたねえ……」

オリビエを見直したエステル達だが、オリビエの考えていたことを知ると脱力した。

「まあ、いいじゃない。こうして無事潜入できたんだし。それよりも……ここは『霧降り峡谷』みたいね。」

気を取り直したショラザードは周りの風景を見て場所の詳細を言った。

「『霧降り峡谷』ってボースとロレントの境にある？そつか……だから外が白く霞んでるのか。」

自分達がいる場所をギルドや街の住民の情報で知っていたエステルは霧が深い外を見て、納得した。

「それと、大型船は侵入できない高低差の激しい入り組んだ地形：

…。シエラさんの推測、どうやら当たってたみたいですね。

「ま、せつかくの推測もあまり役に立たなかつたけどね。」

ヨシュアの言葉にシェラザードは溜息をついた。

「そりいえば、プリネ達を置いてきちゃつてよかつたの、エヴリーヌ？」

空賊艇に侵入する際、あまり大人數だとばれる恐れがあつたのでプリネやリフィアはその場で残り、エヴリーヌだけをエステル達に行させたことを思い出したエステルは尋ねた。

「大丈夫。今連れてくるから。」

そう言つたエヴリーヌは転移して、プリネ達と共に再び転移して戻つて來た。

「え！」

「なつ……」

「ほう。」

エヴリーヌがその場で消えた後、一瞬でプリネ達を連れて來たことにエステル達は驚いた。

「こういふことだ！だから、後で追いつくと余も言つたであらう？」「驚いているエステル達にリフィアは胸をはつて答えた。

「ちよつ……今何！？」

驚きがまだなくなつていないエステルはプリネ達に詰め寄つて聞いた。

「フフ……時間もありませんから、簡単に説明しますね。」

そしてプリネは驚いているエステル達に簡単に転移魔術の事を説明した。

「ふえ～……魔術つてそんなこともできるんだ！」

「魔術はどんな場面でも役に立つて、本当に万能性があるね……」

「師匠から転移魔術のことも知識として教えてもらつたけど、實際にこうして見てみると驚きを隠せないわ……」

転移魔術の説明を聞き魔術が使えないヨシュアはもちろん、魔術が

使えるエステルやショラザードも驚きを隠せなかつた。

「ほほう……これはボクも本氣で魔術習得を考えよつかな

「ハア？ なんでアンタがそんなことを？」

オリビエの言葉に疑問を持つたエステルは聞いた。

「そんなの決まっているじゃないか その転移魔術ができればいつでも、ヨシュア君やショラ君、可愛い女の子達の傍にいけるんだよ

」

「……そんなことだらうと思いました。」

「あ、アンタってやつは……」

「あはは……」

「まさか、転移魔術をそのようなくだらないことに使うことを考える輩がいるとは……」

「……言つとくけど、エヴリーヌは教えないよ。」

冗談か本気かわからないオリビエの答えにヨシュアやエステルは呆れて白い目で見て、プリネは苦笑し、リフィアは呆れて溜息をつき、エヴリーヌは冷ややかな視線でオリビエを見た。

「ハア……さてと……あまりグズグズできないわ。空賊たちを制圧しつつ、監禁されている人質の安全を確保するわよ。もちろん……カシウス先生もね。」

「うん……！」

「了解です！」

「フツ……では行こうか！」

「フフフ……ついに余の異世界での活躍の時が来たか！」

「いやな予感……面倒なのはエヴリーヌ、嫌だよ。」

「リ、リフィアお姉様……お願いですから力の加減を間違つて皆を崩壊なんてことをしないで下さいね……」

溜息をついた後、気を取り直したショラザードの言葉に全員は頷いてアジト内部に潜入した。

「.....」

さうにさまざまな場所でエステルを観察し、エステル達が空賊艇に忍び込むのを見て、空賊艇が飛ぶ瞬間、船に飛び移り潜んでいた狐らしき生物も現れ、エステル達の後を追つて行つた.....

第46話（後書き）

感想お待ちしております。

ついに潜入した空賊団のアジトにエステル達は素早い行動でアジト内を進んで行つた。

（空賊団アジト内）

「…………」

「手下がいるみたいだね。……突入してみよいか？」

「モチのロンよ！」

アジト内を歩いていたヨシュアは部屋から話声が聞こえたことに気付き、ヨシュアは部屋に近づきドアの隙間から談笑している空賊達を見つけて、戦闘準備をするように全員に合図を送つた。
ヨシュアの合図に全員は武器を出して、ヨシュアとエステルを先頭に部屋に突入した！

「あん……？」

「なんだ、新入りか？」

「ガクッ……そんなわけないでしょ！」

「緊張感のない連中ねえ。」

エステル達の姿を確認して言つた言葉にエステルとショラガードは相手の呑氣さに呆れた。

「え、でもよ……それ以外に誰がいるって、」

「…………」

「…………あの、まさか侵入者？」

空賊達はお互いの顔を見合わせた後、恐る恐る聞いた。

「ピンポン」

これから驚くであろう空賊達の表情を考えた、オリビエは楽しそうに肯定した。

「遊撃士協会の者です。降伏した方が身のためですよ。」

「じょ、冗談じゃねえ！」

「返り討ちにしてやらあ！」

ヨシュアの宣言に怒った空賊達はエステル達に襲いかからうとしたが
「とりやつ！」

「はつ！」

「ギャツ！」

エステルの棒の一撃やヨシュアの双剣の攻撃がそれぞれ攻撃した空
賊を沈め

「フツ！」

「ウワアツ！？」

「モコリ！？」

「ギヤー！」

オリビエの銃での攻撃に怯んだ隙を逃さなかつたプリネのレイピア
の攻撃に悲鳴を上げて、気絶し

「余の風格を知るがよいつ！」

「キヤハツ！」

「――「ギヤアアア…………」」

リフィアやエヴリースが手加減した魔術　追尾弾やティルワンの
闇界を受けてしまつた空賊達は断末魔を上げて気絶し

「せいつ！」

「あう！」

ショラザードの鞭による攻撃に耐えられず、最後の一人は膝をつい
た。

「ちょっと一人質はどうにいけるの？正直に言わないと、ひどい目に
遭わすわよ！」

「か、勝手にしやがれ。誰が喋るもんかよ……」

痛みで呻いている空賊に尋ねたエステルだったが、空賊は情報を口
にしなかつた。

「あーーら、やつ。Hスチル、ぞいてなさい。」

「う、うん……」

ショラザードの言葉にHスチルは戸惑いながらぞいた。そしてショラザードは鞭を震つてさらに空賊を痛めつけた！

「ぎやつ……！」

「ふふ、手加減しているから簡単に気絶できないでしょ？・素直に話してくれればゆつくりと寝かせてあげるわ。」

悲鳴を上げた空賊にショラザードは鞭を床に叩いて脅迫した。

「ひ、ひいいい……。上の下の階にいるつー俺たちの仲間が守つてるんだ！」

ショラザードの本気の態度に恐れた空賊はあつさり大切な情報を手放した。

「素直でよろしい。キールとジョゼットっていう首領格の連中はどうにいの？」

「ふーん、人質はともかく自分たちのボスは売れないか。仕方ない、勘弁してあげるわ。」

自分達の首領の情報を頑なに話さうとしない空賊にショラザードは弱冠感心し、飛び掛かつて勢いよく鞭を空賊に振るつた！

「ぎやうつー……うーん……」

「つづわ～……相変わらず容赦ないわね。」

情報を引き出された後、容赦なく氣絶させられた空賊を見てエスチルは言つた。

「失礼ね。これでも手加減してるとなんだかい。」

エスチルの言葉にショラザードは心外そうな顔で反論した。

「確かに、そこはかとなく気持ちよさそうな感じではあるね。」

「あら、試してみる？」

「いや、またの機会に。」

オリビエの言葉にショラザードは鞭を構えたが、オリビエはキッパリと断つたので鞭をしまった。

「人質が監禁されているのは下の階のようですね。急ぎましょう。」
プリネの言葉に頷いたエステル達は下の階層へと進んだ。

「それにして……ここって一体なんのかな？あいつらが造ったにしては大きすぎるし、古めかしいけど。」

下の階層に降りてエステルはさつきから疑問に思っていたことを口に出した。

「大昔の城塞のような雰囲気ね。その頃の隠し砦を、アジトとして使っているんじゃないかしら？」

「『大崩壊』から数百年以上、戦乱の世が続いたそうだからねえ。こういうものが残っていてもそれほど不思議ではないだろう。」
エステルの疑問にショーラザードやオリビエはそれぞれの自分なりの答えを言つた。

「『大崩壊』？」

「1200年前にあつたっていう古代ゼムリア文明の崩壊のことだよ。天変地異が原因と言われているんだ。」

オリビエの言葉に首を傾げたエステルにヨシュアは説明した。

「ああ、前にアルバ教授が言つてた……」

ヨシュアの説明を聞いてエステルは以前護衛したことのある歴史学者の説明を思い出した。

「あら？ エステルさん、アルバ教授を知つていてるんですか？」

「うん、前に『翡翠の塔』まで行つた時、たまたま護衛もなしに一人で調べているのを見つけて街まで護衛したんだ。でも、なんでプリネが知つているの？」

エステルはなぜ、プリネがアルバ教授を知つているのか疑問に思つて聞いた。

「エステルさん達と同じ理由ですよ。エステルさん達がラヴィンヌ村に行つている間に、私達はヴァレリア湖へ行つたのですがリフィアお姉様が『琥珀の塔』に興味を示されて、探索をしたんですがその時にお会いして街道まで送つたのです。」

「そりなんだ……つていうか相変わらずね）。あの教授は……」
護衛をつけずに魔獣がいる危険な遺跡に一人で調査していたアルバ教授にエステルは溜息をついた。

「…………エステル、余の直感になるんだが奴とは関わり合いにならないほうがいい。」

「ほえ？ なんで？？」

リフィアの忠告が理解できずエステルは首を傾げた。

「…………なんとなくなんだが、奴は何かとんでもない謀を考えている気がするのだ。」

「…………リフィアの言つ通りだよ。あいつ、雰囲気がパイモンに似ていた気がするもん。」

「パイモンって誰？？」

リフィアやエヴリーヌの言葉に首を傾げた後、エヴリーヌが口にした知らない名前にエステルは聞いた。

「エヴリーヌと同じ『深淵の楔魔』の”魔神”だけど、今のエヴリーヌはあいつ、信用できない。リウイお兄ちゃんを人間達を怖がらせる魔王にしようと考えてたし。」

「ああ、あの不忠義者は余をも謀ろうとしていたからな……。プライネ、お前はどうだ？」

「…………そうですね。の方、隠してはいましたけど私達を後ろから探るような視線で見ていたのには気付いていました。……あの舐め回すような視線で見られた時、正直嫌な気分でした。」

「えつと……なんかその言い方だとアルバ教授が凄い悪者みたいな言い方なんだけど……？」

リフィア達の言葉にエステルは理解できず聞き返した。

「端的に言えば、そうなるな。」

「アルバ教授が？ まっさか）。リフィア達の気にしそぎだよー。」

「…………」

リフィアの言葉にエステルは笑い飛ばして否定したが、ヨシュアは

真剣な表情で聞いていた。

「……まあ、余達の氣のせいかもしだぬ。今のは心に止めておくべ
らいにしておいてくれ。」

「はいはい。それより早く人質達の監禁部屋を探そう!」「
そしてエステル達は監禁部屋を探した。しばらく歩くとまた、話声
が聞こえる部屋があつた。

「また話し声が聞こえる。……突入してみようか?」

「迷つてられないわ、行くわよ!」

再びエステル達は武器を構えて部屋に突入し、部屋にいた空賊達を
気絶させた後、奥の部屋に入った。そこにはリンデ号が行方不明に
なり、詳細が不明で空賊達に

人質にされていた飛行船の船長達や船客達がいた。

「みんな、無事!?」

「遊撃士協会の者よ。皆さんを救出しに来たわ。」

「ほ、ほんまか……ワイら、助かつたんか!?」

部屋に入つて来たエステル達が名乗り出た時、乗客の一人が期待し
たような目でエステル達を見た。

「見張りは片付けました。とりあえず安心してください。」

「ほ、本当か……!?

「た、助かつたの!?」

ヨシュアの言葉に人質達は半信半疑でありながらも、喜んだ。そし
て人質の中から船長らしき人物が名乗り出てエステル達にお礼を言
つた。

「私は、定期船の『リンデ号』の船長を務めるグラントという。本
当にありがとうございました。何と礼を言つたらいいか。」

「あれ?あれ?」

「いないみたいだね……」

「どうかしたのかね?」

「どうかしたのかね?」

誰かを探しているように見えるエステルやヨシュアに船長は声をかけた。

「え、えっと……。人質のヒトって、これで全部？」

「ああ、その通りだが……。『リンク号』に乗っていた乗客・乗員はこれで全部だよ」

戸惑いながら尋ねたエステルに船長はハツキリ答えた。

「うそ……」

グラントの答えを聞いたエステルは呆然とした。

「カシウス・ブライトという人が定期船に乗つていませんでしたか？遊撃士協会の人間なんですか……」

「カシウス・ブライト……？どこかで聞いたことがあるような。ヨシュアの言葉に船長は首を傾げて思い出そうとした。その時、一人の女性乗務員が思い出してグラントに言った。

「あ、あの船長……あのお客様じゃありませんか？離陸直前に船を降りられた……」

「ああ！ そう言えばそんな人がいたな。」

乗務員の言葉によつやく思い出した船長は手をポンと打つた。

「ど、どーゆうことー？」

船長達の会話を聞いたエステルは慌てて聞いた。

「いや、ボースを離陸する直前に船を降りたお姫さんがいたんだよ。王都から乗つてきた男性で確かに、そんな感じの名前だった。」

「あ、あんですつてー！ だ、だつて乗客名簿には……」

「なにせ離陸直前の下船だつたから、書類の手続きが間に合わなくてね。ロント到着後に手続きするはずが空賊に襲撃されて、そのままなんだ。」

「…………（パクパク）」

船長の説明に驚いたエステルだったが、さらに話された船長の説明を聞いて言葉を失くした。

「なるほど、そういう事ですか。父さんが空賊に捕まるなんて変だ

とは思つてゐたけど……」

「ふう……ようやく疑問が氷解したわね。」

「ハツハツハツ、それは重畳。」

「よかつたですね、エステルさん。お父様が捕まつていなくて。」「おめでとー。」

「道理でおかしいと思つた。……ファーミシルスも高評価する男が賊程度で遅れをとるとは到底思えなかつたからな……」

一方ヨシュア達は納得した後、安堵の溜息をついた。

「ちょ、ちょっと待つてよ。そ、それじゃ……父さんは何をしているわけ？これだけの騒ぎになつてゐるのにどうして連絡を寄越さないの！？」

「落ち着いて、エステル。確かにそれは気になるけど、今ここで考えても仕方がない。ここにいる人たちの安全を確保するのが優先だよ。」

未だ混乱しているエステルは周りの者達に意見を求めたが答えは帰つてこず、ヨシュアの意見だけが帰つて来た。

「あ……うん。わかつた、今は忘れる。」

そしてヨシュアの意見によつやくエステルは落ち着いた。落ち着いたエステルを横目で見た後、シェラザードは人質達に言った。

「皆さん、我々はこれから空賊のボスの逮捕に向かうわ。申し訳ないけど、もう少しだけここで辛抱していてちょうだい。」

「あ、ああ……どうかよろしくお願ひする。」

「こうなつたら腹くくつたわ。ワイらの命、アンタらに預けたる。せやから、あんじょう頑張りや！」

「うん、まかせて！」

船長や乗客の励ましの言葉にエステルは元気良く頷いたて、部屋を出て首領達がいる部屋を田指そつとした時、気絶している空賊達に気付いたエステルはある事を考えて、リフィア達に言った。

「そつだ……ねえ、リフィア達はここで氣絶したコイシラの見張りと船長さん達や乗客達を守つてくれないかな？」

「確かに……誰か守りを置く必要はあるね。」

エステルの意見にヨシュアは頷いて同意した。

「なるほど……私はいいですが、お姉様方はどうですか？」

「ふむ……賊の首領と直接対決できないのは口惜しいが民を守るのも皇族の務め。よからう、余達はここに残ろう！ エヴリーヌもよいな。」

「ん。エヴリーヌ達が抜けて、そつちが大丈夫ならいいよ。」

「モチのロンよー今までの直接対決ではあいつらには負けなかつたんだから！」

エステルの頼みにプリネは頷き、リフィアは残念そうな表情をしたが納得して頷いた。そしてエヴリーヌの疑問にエステルは胸を張つて答えた。

「オリビエさんはどうしますか？ なんならプリネ達と共に見張り役として残つてもいいですよ？」

ヨシュアは空賊の首領達と直接対決する前にオリビエをビリウスするか考え、提案した。

「フム……麗しきメンフィルの姫君達に囮まれるといつのは魅力的な提案だが、ヨシュア君達に同行しよ。」

「なんで？」

女性だけのプリネ達と共に残らないと言つたオリビエにエステルは疑問を持ち、聞いた。

「だつて、そつちのほうが面白そうだから。」

「ガクッ……こ、こいつは～！」

「ハア……まあいいわ、足手まといにだけはならないでよ。」

オリビエの答えにエステルは脱力した後拳を握つて怒りを抑え、呆れたショラザードは気を取り直し忠告をした。

「フツ……任せたまえ！」

「本当に大丈夫かしら……まあいいや！3人共行くわよ！」

「みんなのご武運をお祈りします！」

「余が守るのだ！」こは心配いらぬ！だから、思い切り戦つてくる
がいい！」

「がんばって。」

「うん！」

プリネ達の応援の言葉を受け、エスティル達は部屋を出た後首領格の
人物達がいる部屋を探した……

第47話（後書き）

碧の軌跡、公式サイトでどんどん情報が公開されていますね～……
…というかサイトに声があるのは驚きました！まさか、本当にしゃべるのでしょうか！？OPでリベルアーカークのようなダンジョンや
メルカパ？らしき画像を見て、今回はSFCクラスの大作の予感と思
いました！！OPの歌やムービーも相変わらずのよさで早くやりた
い～！…………感想お待ちしております。

プリネ達に人質の安全を任せたエステル達はさらに奥へと進み、終点らしき部屋を見つけ、そこから聞き覚えのある声が聞こえてきたので足を止めた。

（空賊団アジト内）

「……」

「うん……」「……」が首領の部屋みたいだね。」

エステルの言葉を続けるようにヨシュアは言った後、エステル達は様子を見てから踏み込むことにした。

「ぐふふ……女王が身代金を出しやがるか。これで貧乏暮らしもオサラバだな。」

空賊団の首領3兄妹の一一番上の兄、ドルン・カプアがこれからのことを考え、危険な瞳で笑っていた。

「兄貴、油断は禁物だぜ。身代金が入るのはこれからだ。」

「うん、まずは人質解放の段取りを決めなくちゃね。」

すでに勝利気分の兄にキールとジョゼットがそれぞれの意見を言った。

「人質解放？ おいおい、どうしてそんな面倒くさいことをしなくちやならねえんだ？」

「え……」

しかし不思議そうに言つドルンの言葉にジョゼットは呆けた。

「そんなんもん、ミラだけ頂いて皆殺しにするじゃ済む話じゃねえか。生かしておく必要はねえだろ。」

「ド、ドルン兄……？」

「じょ、冗談キツイぜ……」

ドルンの予想外の言葉にキールやジョゼットは信じられない表情をして焦った。

「連中には俺たちの顔をしつかり覚えられてるんだぜ？リベルから高飛びしても足がつくかもしねえだろ？」「

「だ、だって年寄りとか小さな子供だつているんだよ？本当に殺しちゃうつもりなの！？」

人質達を殺す氣でいるドルンにジョゼットは必死で反論して、引き止めた。

「まったく、おめえときたりいつまで経っても甘ちやんだな。ママゴトやつてんじゃねえんだぞ？」「

「そ、そんな……ボク……」

しかしドルンは妹の言葉に全く耳を貸さず、それがわかつたジョゼットは愕然として頃垂れた。

「兄貴……悪いが俺もそれだけは反対だ。そこまでやつちやあ混沌の女神アーライナはわからないが、空の女神ハイドスや癒しの女神イーリゴンだつて許しちゃくれん。それに……血塗れのミラで故郷を取り戻したくないんだよ。」キールも必死でドルンを真剣な表情で引き止めた。

「…………キールよ、おめえ…………いつからそんな偉くなつたんだ？」「

「えつ……」

静かに怒りを抑えるようなドルンの言葉にキールは呆けた。

「なめた口叩くんじゃねえ！」

そしてドルンは手元にあつた瓶をキールに投げつけた。

「がつ！」

「キール兄！？」

瓶に当たつたキールは呻き声を上げてうずくまり、ジョゼットはキールの元に駆け寄つた。

「がはは、なにが故郷だ！せっかく大金が入るのに今更あんなしみつたれた土地を取り戻してどうするつもりだよ？ハツ、南のリゾー

トあたりで豪遊するに決まつてゐるだらうが！」

「なん……だつて……？」

高笑いで言つドルンの言葉にキールはつづくまつたまま、信じられない表情でドルンを見た。

「それでミラが無くなつたら、また飛行船を強奪すりやあいい。それが、これから『カプア空賊団』つてやつだぜ。ぐわーつはつはつはつ……」

「ドルン兄……どうしちゃつたの……？ 本当にどうしちゃつたのさあ！」

あまりにも変貌した兄にジョゼットは叫んだ。

「お取り込み中のところを悪いんだけどさあ……兄妹ゲンカは後にしてくれんない？」

そこにエスティル達が武器を持つて突入した。

「あ、あんたたち！？」

「遊撃士どもつ！？ ど、どうしてこの場所に……？」

エスティル達の姿を見たジョゼットとキールは信じられない表情をした。

「フツ……薄情なこと言わないでくれ。キミたちがあの船で運んでくれたんじやないか。」

「バ、バカな……何をふざけたこと言つてる……まさか。」

オリビエの言葉に最初は理解できなかつたキールだったがある考えが浮かび、その考えを肯定するようにエスティルが笑いながら続けた。「琥珀の塔の前に飛行艇を泊めてたでしょ？ スキを見て忍び込んで船倉に隠れてたつてわけ。いわゆる密航つてやつね

「ず、ずつこいぞ！ この脳天氣オンナつ！？」

「だ、誰が脳天氣よ！ この生意氣ボクつ子！？」

ジョゼットの言葉にムツとしたエスティルは言い返した。

「な、なんだとつ！？ 単純オンナ、暴力オンナ！」

言い返されたジョゼットも黙つていられず、言い返した。

「あ、あんですって～！？」

「はいはい。ロゲンカはそのくらいで……人質は解放したし他のメンバーも倒しました。残るは、あなたたちだけです。」程度の低い口喧嘩に呆れたヨシュアは仲裁した後、遊撃士として宣言した。

「遊撃士協会の規定に基づき、あなたたちを逮捕・拘束するわ。逆らわない方が身のためよ。」

「うう……」

「くつ、くわー……」

ショラザードの言葉にキールとジョゼットは呻いた。

「キール、ジョゼット……。てめえら、何やつてやがる？」

「す、すまねえ兄貴、……」

「ゴメンなさい……」

ドルンの責めるような言葉に2人はすまなさそうな表情で謝った。「ぐふふ、まあいい。大目に見といてやるよ。」いつらをブツ殺せば、それで済むわけだからなあ。」

「あ、あんですって～！？」

ドルンの物騒な発言にエステルは怒つて叫んだ。

「がはは、馬鹿な連中だぜ！その程度の人数でこのドルン・カプアを捕まえようとするとはなあ！」

ドルンは高笑いをしながら机に飛び乗つて、大砲のような物を取り出しエステル達に向けて撃つた！

ズガーネン！！

「きやあ！？」

「導力砲を軽々と……！」

ドルンの攻撃にエステル達は驚いて回避した。

「がはは！逃げ惑え！……」

ドルンは高笑いをしながら狭い室内の周囲に導力砲を乱射しまくつ

た！砲弾は爆発し、爆発によってできた煙は室内を充満してエステル達の視界を奪つた。

「くつ……！」

「まざい……！これじゃあ、近づけない！」

導力砲の攻撃を回避しながら、ショラザードは悔しそうな表情をし、ヨシュアはどうするか迷つた。

「ちょつ……兄貴！！」

「やりすぎだよ！ボク達まで巻き添えになっちゃうよ！！」

一方、我を忘れて味方をも巻き添えにする攻撃にキールとジヨゼットは悲鳴を上げて、諫めようとしたがドルンは聞く耳を持たなかつた。

「くつ……！」んの……」

現状を打破するためにエステルは魔術を使おうとしたが

「がはは！隙だらけだぜ！！」

「！！」

「エステル！！」

動きが止まつたエステルを逃さなかつたドルンが導力砲をエステルに向け、それを見たエステルは驚いて硬直した。ヨシュアは叫んで警告したが、警告は空しく硬直した状態のエステルに向かつてドルンは導力砲を撃つた！

「喰らえ！！」

「やばつ……！キヤツ！？」

ドルンの砲撃を避けようと動いたエステルだったが、足が縛れてその場で転んだ。迫りくる砲弾にエステルは目をつむつた。その時、エステルの後ろから砲弾と同じくらいの火の玉が何個も飛んできて、砲弾にぶつかり火の玉が砲弾を押し返した後、引火した砲弾がドルンの目の前で爆発した！

「ドガー——ーン！！

「ぐわあ！？」

目の前で起じた爆発にドルンは怯んだ。ようやく収まつたドルンの砲撃に部屋内は静かになり、煙が晴れた。そして煙が晴れると、なんと今までエステルを観察した狐らしき生物がエステルを守るよう、そして戦闘ができるように飛び掛かる態勢でエステルの前にいた。

「……………」

「え……！？」

突如目の前に現れた狐らしき生物にエステルは驚いた。

「ほう……見事な毛並みな狐だね。」

「いや、狐にしては体があまりにも大きすぎます！それに尾が……！」

いつの間にか現れた狐らしき生物にオリビエは感嘆の声を上げたが、ヨシュアは体の大きさや何本もある尾を見て狐であることを否定した。

「考えるのは後にしなさい！首領達を拘束するわよ……！」

「う、うん！……」

「わかりました！』

「フツ……それでは反撃開始だ！」

状況を見て好機と判断したシェラザードの言葉にエステル達は再び武器を構えた。

「グツ……獸」ときがなめた真似をしてくれたじゃねえか！？キール、ジョゼットーもさと得物を取りやがれ！遊撃士共々血祭りにあげるぞ！……」

「う、うん！……」

「ほじほどにしてくれよ、兄貴！……」

ドルンの言葉にジョゼットは導力銃を、キールは長剣のように長い短剣を構え、エステル達に襲いかかつた……！

第48話（後書き）

感想お待ちしております。

第49話（前書き）

昨日と今日で3話できたので、ちょっと奮発して今日も投稿です

（空賊団アジト内）

ついに始まつた空賊 カプア一家との対決はエステル達の優勢だつた。導力砲を軽々と使う唯一やっかいなドルンには狐らしき生物が周囲を素早く駆け回り、時には懷に飛び込んで鋭い爪で攻撃し、さらには火の球を口から吐き攪乱したのでエステル達はそれぞれ首領達の相手をできた。

「くつ……じんのおつ！」

「ふつ、甘いよー。」

「いたつ！？」

ショラザードに銃で攻撃しようとしたジョゼットだが、オリビ工の精密な射撃のクラフト スナイプショットに銃を持っている手を打たれ、導力エネルギーの弾を受けたジョゼットは痛みで銃を落とした。

「戦闘中に武器を落とすなんてまだまだね！喰らいなさい！」

「あつ！？」

オリビ工の攻撃によつてできた隙を逃さずショラザードは鞭による鋭い一閃の攻撃をするクラフト シルフエンウェイップで攻撃した。鞭による攻撃にジョゼットはさらに呻いて後退した。

「ちつ……これでも喰らえ！」

「遅い！絶影！」

一方キールはヨシュアに小型の爆弾を投げたが、回避されいつの間にかキールの横を駆け抜け、駆け抜ける際に攻撃をされた。

「ぐつ！？」

ヨシュアの神速の攻撃にキールは呻いた。そこに後退したジョゼットがキールの背にぶつかつた。

「キール兄、どうしよう…」いつら……強すぎだよ…」

「泣き言を言うな…今はこいつらをなんとかして振り切るぞ…」

泣き言を言うジョゼットにキールは渴を入れたが、キール自身勝てる気がしなかつた。キールとジョゼットが2人揃つて纏まっているのを見たオリビエは特殊な銃弾に口づけをした後、それを銃に込めて撃つた！

「お見せしよう…美の真髓を…ハウリングバレット…！」

「きやああああ…！！？？」

「ぐわああああ…！！？？」

オリビエの放つた特殊な銃弾によるエネルギーは普通の導力銃が放つエネルギーの数倍の大きさがあり、キール達に命中した後エネルギーが爆発した！そしてオリビエの強力な攻撃にキールとジョゼットは膝をついて、立ち上がれなかつた。

「お休み、子猫ちゃん達」

キールとジョゼットを2人纏めて倒したオリビエは明後日の方向を見て、勝利のセリフを言った。

「チツ…役に立たねえ奴らだぜ。」

一方弟と妹の敗北を横目で見たドルンは舌打ちをした。

「ちょっと！あいつら、アンタの兄妹でしょ…？なんでそんなことが言えるの！？」

キール達のことを酷く言うドルンにエステルは怒つて叫んだ。そしてエステルの怒りにドルンは嘲笑して、さらにエステルが怒るようなことを言った。

「ハッ！あんな甘ちゃん共はカプア一家の恥だ！本当のことを言って何が悪い！」

「なつ…こ、こんのおー！」

さらに怒ったエステルは体を震わした。そこに狐らしき生物がエステルの横に並んだ。エステルはドルンを攪乱していた狐らしき生物の動きや、火の玉を吐いたことを思い出し、なんとか協力をしても

らおうと話しかけた。

「狐さん！あいつをブツ飛ばすために力を貸してちょうだい！お願い！」

（……“我が友”に似る少女よ。……私は狐ではない。）
「え！？」

突如頭に響いた聞き覚えのない声にエステルは驚いて、狐らしき生物を見た。

「今のは……もしかしてあなた！？狐じゃないとしたら、一体何？」

（私はサエラブ！“焰の仙狐”様の使いにして誇り高き“狐炎獣”！少女よ。本来なら我は我自身が認めた者にしか力を貸さぬが、お前はどうぞ）“我が友”に似ている……

我の頼みを後で聞くならば、今はお前の指示に従おう……）

「わかつたわ！あたしでできることならなんでもするわ！だから今は力を貸して！」

（……よからう。）

エステルの言葉にレスペレント地方の遙か南 セテトリ地方のある火山に住み、近くの町 ユイドラに住む人々からは聖獣扱いされている焰の幻獣サエラブは口元を僅かに笑みに変えて、エステルに協力することを伝えた。

「あ、それとあたしの名前はエステルよーこれからはちゃんと名前で呼んでよね、サエラブ！」

（フッ……いいだろう。我があの正気でない人間の動きを止めている間に、お前が勝負を決めるがいい……行くぞ！）

「オッケー！」

「さつきから一人で」こちやこちやと何を言つてゐる！死ねえ！」

エステルとサエラブの念話がわからず、エステルの独り言と思い業を煮やしたドルンは再び導力砲を構えたが

（“我が友”の妻が放つ“魔導砲”と比べれば砲撃の瞬間、速さが

遅すぎる上威力もなさずさる！自らの武器で傷つくがよい！）

ドルンの動作を見て、サエラブは口を開き再び火の玉を吐いた。火の玉はドルンの持つ導力砲の砲口に入り、砲弾に引火させて、引火した砲弾は導力砲の中で小規模な爆発をした！

「ぐわあ！？」

自らの武器による爆発によつてドルンは怯み、傷ついた。

（今だ、行け！）

「うん！」

ドルンが怯んでいる隙を逃さず、サエラブの念話に頷いたエステルは棒を構えて強烈なクラフトを放つた！

「これで決める……ハアアアアアア！烈波！無双撃！」

「ぐわあああああ！？？？グハツ！？」

エステルの強烈なクラフトを受けたドルンは吹っ飛ばされて、壁にぶつかり項垂れて立ちあがらなかつた。

「よーし！上出来！」

立ち上がりなくなり、気絶したドルンを見て、エステルは棒を自分の前で回転させた後、勝利のピースをした。

「つ、強い……。これが遊撃士か……」

「く、くつそ……こんな奴らに負けるなんて……」

ドルンをも倒し、自分達を完膚なきまでに敗北させたエステル達にキールは膝をつきながら諦め、ジョゼットは悔しがつた。

「ふふん、思い知ったか」

自分を何度もバカにしたジョゼットが悔しがつているのを見て、溜飲が下がつたエステルは胸をはつて答えた。

「それにも驚いたよ、エステル。意思の疎通ができる相手と連携するなんて……」

ヨシュアはエステルがサエラブと連携してドルンを倒したことを思い出し、感心した。

（……我をそこらの獣といつしょにするな、人間。）

「え……」

「ん？」

「なつ……今の声は！？」

サエラブの念話にヨシュア達は驚いて周囲を見回した。

「あれ？みんなもサエラブの声が聞こえるんだ。」

一方唯一サエラブの声を知っているエステルは不思議そうな表情をした。

「誰よ、そのサエラブって。」

知らない名前にシェラザードは首を傾げてエステルに聞き返した。

「さつきからシェラ姉達の目の前にいるじゃん。」

「え……つてまさか今の声って……！」

エステルの言葉から謎の声の正体がわかり、驚いたヨシュアはサエラブを見た。

（ふん。我は悠久の時を生きる誇り高き”狐炎獣”。契約をしなくとも念話をお前達に送ることなど容易いわ。）

驚きの表情のヨシュア達に見られたサエラブは気にしないようにした。

「……そんな誇り高く知恵がある存在が力を貸してくれるなんて本当にあんたには驚かされるわね……（ヴァレリア湖でも噂の水竜にも懐かれたらしいし、数年前に言つてたレナさんの『冗談が現実になりましたね……』）……まあいいわ。決着もついたし、大人しく降伏してもらうわよ。抵抗したりしたら……わかつてるでしょうね？」
サエラブの事を一先ず置いて優先すべき事をするために、シェラザードは鞭をしごいてジョゼット達に微笑んだ。

「ひつ……やだ、勘弁してくださいっ！」

「トホホ……こんな終わり方ありがよ……」

シェラザードの微笑みにジョゼットは怖がつて後ずさりをし、キールは悲壮な表情をした。その時氣絶していたドルンが目を覚ました。

「…………うーん…………あいたた…………どうなつてやがる。身体のあ

ちいぢが痛えぞ……なんで俺……導力砲なんぞ持つてんのだ？……

「さて？」

田を覚ましたドルンは壊れた導力砲を見て、首を傾げた。

「兄貴？」

「ドルン兄？」

理解できない」とを言つ兄にキールとジョゼットは不思議そうな表情でドルンを見た。

「おお、ジョゼット！ ロレンントから帰つてきたのか？」こんな卑く歸つてきたって事は、やつぱ上手くいかなかつたんだな。」

「ふえっ……？」

一方状況を理解していないドルンはジョゼットを見ると笑いだした。笑い出したドルンにジョゼットは驚いた。

「がつはつは、『まかすな。まあ、これに懲りたら荒事は俺たちに任せておけよ。ちまちました稼ぎだが、なあに、氣長にやりやあいい。』

「ド、ドルン兄、何言つてるの？」

「あ、兄貴、しつかりしろよ。ジョゼットはとひくロレンントから戻つてきただろ？ 定期船を襲つた直後に俺が迎えに行つたじゃないか？」

戦闘前と明らかに様子が変で、昔の事を言いだしたドルンに2人は焦り、笑つてゐるドルンにキールが説明した。

「はあ？ 定期船を襲つだとお？ なに夢みたいな話をしてやがる。そんな危ない橋、渡れるわけないだろ？ が。」

「……………」

以前と言つてゐることが全然違つドルンに兄妹達は口を開いたまま言葉が出なかつた。

(何言つてんの、コイツ？)

(うん……言い逃れじゃ なをやつだけど……)

(……傀儡の術が解けて正氣に戻ったか。……)

一方エステルも訳がわからずヨシュアに聞いたが、ヨシュアもわからなかつた。ドルンの状況をわかつていたサエラブは納得した。

「さつきから気になつていたんだが、この奇妙な連中は何者なんだよ？まさか新入りじやねえだらうな？」

そしてドルンはエステル達を見て、キール達に尋ねた。

「残念ながら違うわね。あたしたちは遊撃士協会の者よ。」

「はあ！？な、何でこんな所に遊撃士がいやがるんだ！？」

ショラザードの言葉に驚いたドルンは大きな声で叫び、信じられない表情をした。

「ダメだこりや……ホントに忘れてるみたいね。」

「ハツハツハツ。面白い展開になつてきたねえ。」

ドルンの様子にエステルは呆れて溜息をつき、オリビエは楽しそうに笑つた。

「忘れていいよ」といまいと、逮捕することに変わりないわ。定期船強奪、人質監禁、身代金要求など諸々の容疑でね。」「定期船強奪……人質監禁、身代金要求だと！？キール！ジョゼット！」「こりやあ何の[冗談だつ！]

ショラザードに睨まれたドルンは顔を青褪めさせて、兄妹に真実かどうか聞いた。

「ドルン兄い……」

焦っているドルンにジョゼットは呆れた。

「聞きたいのはこつちだよ……だが、兄貴のおかげで……チャンスができたぜ！」

キールも呆れたが、いつのまにか隠し持つっていた発煙筒を床に叩きつけた。呑きつけられた発煙筒は部屋中の視界を奪つた。

「ああつ！」

「しまつた！2度も同じ手に……」

「お、おい……！」

「キール兄！？」

「話は後だつ！とにかくこゝを脱出するぞ！」

視界を奪われている間になんとキールが2人の手を引いて、部屋から脱出した。

「（）ほ（）ほ……け、煙がノドに……」

（不覚……我としたことがこんな手に引っ掛けられるとは……）

発煙筒の煙にオリビエは咳こみ、サエラブは自分の不甲斐なさを呪つた。

「早く部屋から出ましょー！」

ヨシュアの言葉に全員が部屋から出た。

（くつ……あの戦いが終わって数年……しばしの平和で危険を感じる感覚が鈍つたか……）

「あいつら～。どこにいったの！？」

「上だ……飛行艇で逃げるつもりだよー！」

あたりを見回してドルン達を探すエステルにヨシュアは答えを言った。

「あ……！」

「ここまで追い詰めて取り逃がすわけにはいかないわ！全力で追いかけるわよー！」

「うん！！！」

「了解です！」

シェラザードの言葉にエステルとヨシュアは頷いた。そこにオリビエが咳込みながら部屋から出て来た。

「（）ほ（）ほ……た、助かった……ああ、何たる悲劇！ボクのデリケートな鼻腔が……」

「ほら、オリビエも！急がないと置いていくわよー！」

「あわわ……ま、待つてくれたまえ！」

咳込んだ後わざとらしく悲觀をくれていたオリビエだったが、エステルに急がされ慌ててエステル達と共に走つて行つた……

第49話（後書き）

サエラブの言葉で神採りのヒロインルートが誰になっているか、プレイした方ならわかつちゃうと思います。……感想お待ちしております。

第50話（前書き）

今凄いペースで次の話がどんどんできています……一話数もかなり溜まってきたので、しならくはかなり早いペースで更新できると思いますので楽しみにして下さい。

（空賊団アジト内）

「待ちな、てめえら！」

「ここから先には行かせねえ！」

ドルン達を追つたエステルだつたが、途中で倒したはずの下つ端達に行く手をさえぎられた。

「も、もう復活したの？」

「なかなかタフな連中だね。」

氣絶したはずの空賊達を見てエステルは驚き、ヨシュアは感心した。
「絶対にここは通さねえ……ぜ！？」

一人の空賊が意気込んでいたが、足元から水の柱が吹きあがり、吹きあがつた水の柱によつて意気込んでいた空賊は天井にぶつかり氣絶した。

「え……今は……！？」

何もしていないエステル達は驚いてあたりを見渡すと、いつの間にかエステル達の後ろにペルルとマーリオンがいた。

「ペルル、マーリオン！どうしてここに？」

「……プリネ様……に……頼ま……れて……援軍……に……来ま……

した。」

「部屋に空賊達の援軍が来ないように外で見張っていたプリネが敵を追つかけるエステル達を見て、自分達の持ち場は離れられないから、代わりにボク達をエステル達を追つて手伝つよつに指示したんだ！」

「フフ……親娘揃つて世話になつてしまつわね……！」とは任せてもいいかしら？

マーリオンとペルルの言葉にシェラザードは笑みを浮かべて尋ねた。

「おまかせ……下さい……！」

「マーリオンの言つ通り、ここはボク達に任せて、エステル達は敵のバスを追つて！」

「うん！」

「さつきから何を勝手なことを……数が増えたからと言つて絶対にここから先には行かねえぜ！」

空賊達は絶対にエステル達を通さないよう、先に進む道を塞いでいたが

「行つくよ……それえ！」

「うわあっ！？」

体全体を回転させて突進したペルルの攻撃に驚いて、横に回避した。

「今だよ！」

「わかった！」

ペルルの言葉に頷いたエステル達はペルルの横をすり抜け先に進んだ。

「あ、待て！」

「逃がさねえぞ！」

空賊達は慌ててエステル達を追いかけようとしたが

「超ねこパンチ！」

「水よ……」

「うわあ！？」

ペルルの翼による攻撃とマーリオンが放った水の魔術をうけて、後退した。

「ここは通さないよ！」

「エステルさん達……の……邪魔……は……させ……ません……」

「く、くそ…だけえ！」

エステル達を追うためにペルル達に襲いかかった空賊達だったが、相手は主と共に厳しい戦いを勝ち抜いて来た使い魔。数の優劣に関わらずペルル達によつて氣絶させられた。

ドルン達を追つてさらに進んだエステル達だったが、後少しで空賊艇がある場所に行く手前の部屋でまた下つ端達が行く手を遮つた。

「けつ、おいでなすつたか……」

「勝とうとなんて思うな！兄貴たちが逃げるまでの間、時間稼ぎができるばいいんだ！」

「ああ！兄貴たちにはいろいろ世話になつたからな。恩返しをさせてもらいうぜ！」

「フッ、自らを盾にして主人のためにつくすか……。愚かではあるが、なかなか天晴な心意氣だ。」

下つ端達の叫びにオリビエは感心した。そこにサエラブが前に出て来て、口を大きく開いて大声で吠えた！

「ウオオオオオオオオオオオツー！」

「――ウワアツー！」

サエラブの咆哮は強力な衝撃波となり、道を塞いでいた空賊達を吹き飛ばした。

「す、う、うん……！」

「吠えるだけであそこまでの威力、……！」

サエラブの咆哮による攻撃にエステル達は驚いた。

（何をしている！）「いづらは我が相手をしてやる！行け！）

驚いているエステル達に念話を送り、サエラブは頭をドルン達が逃げ去った方向に振り、エステル達に先に進むよう促した。

「う、うん……一人で大丈夫！？」

（悔るな！私は自らの悪を喰らいさらなる強さを手に入れた）善狐

”！）このよつな雑魚共相手に手間取る我ではない！）

「わかつたわ、気を付けてね！」

「お願ひします！」

「フッ……このボクに任せたまえ、狐くん！」

「行くわよ、3人共！」

サエラブの念話を頷いたエステル達は吹き飛んで壁にぶつかり、呻いている空賊達を無視してさらに先に進んだ。

（空賊団アジト・地上）

ようやく空賊艇がある地上に出たエステル達だが、なんとそこには王国軍の警備艇が停泊しており、ドルン達を拘束した王国軍兵士達がいて、さらにはナイアルとドロシーがいて、ドロシーがドルン達の写真を撮っていた。

「へつ……」

「これは……」

いつの間にか現れて空賊の首領達を拘束した王国軍兵士達にエステル達は驚いた。

「くそつ、まさか軍にここの場所を知られるとは！あの野郎、話が違つじやないか！」

「！」、「こらっ！ 気安くボクに触るなよつ！」

「おいおい……何がどうなつてゐんだあ！？」

拘束された空賊の首領達は連行されながら、さまざまな事を言った。「は～、あの人たちが空賊さんたちのボスですか。女の子もいるなんて、なんかビックリですねえ。」

「無駄口叩いてないで、とにかく撮りまくれっ！こんなスクープ、滅多にあるもんじゃねえ！」

「どうだ、ナイアル君。いい記事は書けそうかな？」

ドロシーに必死の形相で指示しているナイアルに兵士達を引き連れ、カノーネやモルガン達と共に来たリシャールが話しかけた。

「そ、そりやあもちろん！連れてきてくれて、ほんつとーに感謝してますよ！あつ、ついでですから大佐も撮らせてもうえませんかねえ？」

「ふむ……閣下、よろしいですか？」

頭を下げながらするナイアルの要求に答えるため、リシャールは上官であるモルガンに許可を聞いた。

「勝手にするがいい。今回の作戦はお前の立案だ。正直、大した手並みだつたぞ。」

「いや、情報部のスタッフの分析が正確だつたからです。それと、そこにいる諸君の協力のたまものでしょうね。」

「なに……？」

リシャールに言われたモルガンはエステル達に気付き、信じられない表情をした。

「ゆ、遊撃士ども！？なぜ貴様らがここにいる！？」

「念のため言つておくけど、また一足先に潜入していたの。このアジトもすでに制圧済みよ。」

「逃げた空賊の首領たちをここまで追つてきたんですが……。まさか王国軍の警備艇が来ているとは思いませんでした。」

怒鳴りながら尋ねたモルガンにシェラザードとヨシュアは落ち着いて説明した。

「ぐぬぬぬ……また出過ぎたマネをしあつて。……ハツ！ま、まさか！あの方達もここにいるのか！？」

（ん？あの方達……？一体誰だ？？）

エステル達が先に空賊団のアジトを見つけたことに悔しがったモルガンだったが、エステル達に同行しているはずのリフィア達の事も思い出し、顔を青褪めさせた。

ナイアルはそれがわからず、心の中でモルガンが慌てているほどの人物達が何者か考えた。

「お言葉ですが、閣下。彼らがいたから、我々の突入もここまで上手くいったのです。その功績は認めるべきかと。それにみだりにあの方達の事を口にしていただくのは困ります。あちらはあちらで恐らしくこちらに気を使ってこの場にいないのでしょうじ。」

「…………。まあよい。後の指揮はおぬしに任せせる。わしは一足先に船に戻つて空賊どもを締め上げてくるわ。…………くれぐれもある方達に失礼のないようにな。」

「承知しました。」

リシャールの正論と注意にモルガンは唸つた後、その場から引き上げて言った。

「相変わらず頑固オヤジね～。」

「悪い人ではないのだがね。いささか柔軟性には欠けるな。ところで、他の空賊たちと人質の方々はどこにいるんだね？」

去つて行くモルガンの後ろ姿を見て溜息をついたエステルに、リシャールは同意した後尋ねた。

「他の手下たちはそこらで転がっているはずよ。人質たちには、監禁されていた部屋で待機してもらつているわ。……ちなみに私達に同行者がいるんだけどその人達に人質達の身を守つてもらつているわ。」

「後、大きな狐が砦内にいると思いますが僕達の味方なので手は出さないで下さい。」

「そうか……いや、本当にご苦労だった。人質や積荷の移送を含め、後のことは我々に任せて欲しい。行くぞ、カノーネ大尉。」

「承知しましたわ。」

ショラザードとヨシュアの説明に頷いたリシャールはカノーネと共に兵を引き連れて砦内に入つて行つた。

「あ、ちょっと大佐！お前さんたちにもインタビューしたいんだが、今回ばかりはあっちが優先だ。機会があれば、よろしく頼むぜ！」

「まったくね～！エステルちゃん、ヨシュア君。」

去つて行くリシャールを見て慌ててナイアルヒドロシーが追つて行つた。

「いやはや、美味しいところを根こそぎ持つていかれた気分だね。」

「うーん、確かに……せつかくマーリオン達が頑張ってくれたのに

……」

リシャール達が去つた後呟いたオリビエに同意するようにエステルは残念そうな表情で頷いた。

「フフ、いいじゃないの。遊撃士の本分は縁の下の力持ちというものの、無用に目立つても仕方ないわ。それに彼らもきっとわかってくれるわ。」

残念そうな表情をしているエステルにシーラガードは本来のやるべきことは達成したと慰めた。

「確かにそうですね。父さんも、そのあたりには気を配っていたみたいですし。」

「あれ、そりだつたつけ?.....ああっ、父さん!」

「うん……その問題を考えなくちゃね。父さんが今、ゼリにて何をしているのか……どうして連絡をくれないのか。」

「うん……」

未だ消息がわからぬカシウスの事を思い出し、エステルとヨシュアは俯いた。

「ここにで、私達が出来ることは何も無いしそうね。とりあえず、プリネさん達と合流してボースに戻つて事件の報告をしておきましょう。先生の事を考えるのはそれからよ。」

その後王國軍兵士を見て、安心したプリネ達は後をリシャール達に任せた後エステル達のところに戻つて来て合流し、エステル達はボース市に戻つて行つた。また、サエラブはいつの間にか姿を消していた。

……………
こうして『定期船消失事件』はいくつかの謎を残して幕を閉じた。

第50話（後書き）

ついやく1章ももうすぐ終わりです。というかまだ1章の終わり。
長……！2章はどれだけ長くなるか想像もつかないです……ちなみに
2章は新クロスオーバーキャラ等原作以外のキャラが多数出てくる
ため、楽しみに待つて下さい！……感想お待ちしております。

（遊撃士協会・ボース支部）

「本当にご苦労さまでした。やっぱり、わたくしの目は間違つていなかつたようですね。みなさんだつたら絶対に解決してくれると思いましたわ。」

軍に空賊や人質達の事を任せたエステル達はギルドに戻り報告し、ルグランから事件が解決したことを聞いたメイベルがリラと共に直接ギルドに向いてエステル達に感謝し、褒め称えた。

「でも、軍に良い所を持つていかれちゃつたしなあ。解決したとはいえないかも……」

「そんなことはありませんわ。仮に、皆さんのがいなかつた場合、軍の突入も上手くいったかどうか。逆上した空賊たちに人質を傷つけられたかもせんから。」

「うむ、お前さんたちが潜入してアジトを制圧していたおかげじゃ。胸を張つてもいいと思うぞ。」

事件が自分達で解決できたかわからなく、納得しきれていないエステルにメイベルやルグランは褒めてフォローした。

「そ、そっかな……えへへ。」

2人に褒められたエステルは納得しきれてない表情から照れた表情になつた。

「確かに人質は解放されて空賊たちも逮捕されたけど……。幾つかの謎が、解明されぬまま残つてしまつたのが悔やまれるわね。」

「湖畔に現れた男たちと空賊の首領の奇妙な態度ですね。この事件、まだ裏があると考えた方がいいかもせん。」

「まあ、そのあたりは王国軍に任せらるしかなさそうじやのう。連中の身柄を拘束された以上、こちらとしては調べようがない。」

同じようにいくつかの謎が残つたことに後悔しているショーラザード

と『シュアにルグラは気持ちを切り替えるよ』と言つた。

「とにかく、人質たちが全員無事に戻ってきただけでも幸いですわ。空賊逮捕のニュースのおかげで街にも活気が戻りつつあります。感謝の気持ちに、少しばかり報酬に色をつけさせて頂きました。」

「え、いいの?」

報酬を上乗せしたメイベルにエステルは驚いて尋ねた。

「ふふ、もちろんですわ。オリビエさんも……本当にありがとうございます。」

「フツ……『グラン=シャリネ』分の働きが出来たのであればいいがね。」

「ええ、お釣りが来るほどですわ。」

オリビエにもお礼を言つたメイベルはリフィア達の方にも向いて、感謝した。

「リフィア殿下達も他国の事件だといつにありがとうございました。殿下達のおかげで飛行制限も緩くされ、ボースの経済もなんとか立て直せました。」

「気にしなくてもよい。例え他国だらうが民はみな同じだ。それにリベルはメンフィルにとってこの世界では唯一の盟友。余達は友に力を少し貸しただけだ。それにリベルには色々と世話になつたこのぐらいのことは当然だ。……だが、メイベル殿の感謝はありがたく受け取つておこう。」

「私もリフィアお姉様と同じです。私も今回の事件に関われたことによつて貴重な経験を得られました。メイベル様とも出会えてよかったです。」

「屋敷で出たお菓子結構美味しかつたよ。ありがとうございます。」

「フフ……お気遣いありがとうございます。」

リフィア達から逆に感謝の言葉を貰つたメイベルは上品に笑つて答えた。

「リフィアお姉様、アレは渡さなくていいのですか?」

「おお！すっかり忘れていた！……メイベル殿、よければこれを使つてくれ。」

「？」これは？「

プリネに促されリフィアは懐から手紙を出し、それをメイベルに手渡した。手渡されたメイベルは首を傾げて尋ねた。

「その手紙はリウイに会えるように書いた余とプリネの紹介状だ。メイベル殿 新しいボースの市長殿と今のボースの現状が書いてある。今後のボースの経済のためにも役立ててくれて構わん。」

「えつ……そのような重要な手紙を貰つてもよろしいのですか！？」

リフィアから聞いた手紙の効果にメイベルは驚いて聞き返した。

「構いません。ただ、それはあくまでお父様と会えるようにする紹介状なので、メンフィルとさらなる取引ができるかはメイベル様の腕によります。」

「うむ。双方にとつてよい取引をメイベル殿がリウイに提案するのを期待しているぞ。」

「ええ、それはもちろん私も同じ思いです。それに父が死去してからリウイ陛下に市長としてお会いしてなかつたので、私にとつてもちょうどいい機会です。殿下達の期待を裏切らないためにもこの紹介状は大切に使わせていただきます。……それでは皆さん、ご機嫌よう。何かあつたらまたお願ひします。」

「……失礼いたします。」

エステル達に会釈をしたメイベルとリラはギルドから去つて行つた。

「うーん、何だかものすごく感謝されちゃつたわね。」

市長であるメイベルに多大な感謝をうけたエステルは照ながら答えた。

「あれ以上事件が長引いていたらリフィア達のお陰で航空制限が緩くなつたとはい、流通を元通りにするのは難しくなつただろうからね。市長さんが喜ぶのも当然かもしれないな。」

「えへへ、何だか嬉しいな。あたしたちが頑張ったことでみんなの

お役に立てたんだつたら遊撃士冥利に尽きるつてもんよね

「フフ、ナマ言つちやつて。でも、確かにあんたたちももつ新人とは言えないわね。正直、今回は色々驚かされたわ。」

「えへへ、そつかな？」

喜んでいるエステルにシェラザードは嬉しそうにエステル達が予想以上に活躍したことを褒めた。

その後エステル達はルグランからメイベルからの多めの報酬を受け取つた後、さらにはボース支部の推薦状を貰つた。推薦状をもらつて喜んでいたエステルとヨシュアだったが、未だに連絡がつかないカシウスの事が心配になつた。しかしその後カシウスからしばらく帰れないことの便りを貰い安心した。また、カシウス宛の謎の小包で漆黒のオーブメントは小包に書いてあつた”R博士”を探して届けるためにエステル達が預かつた。その後シェラザードは事件が解決したのでロレンント支部に戻ることになり、ロレンントに観光に行くオリビエと共に定期船に乗つてロレンントに行くために見送りのエステル達と空港に行つた。

（ボース国際空港）

「それじゃ、あたしはこれでロレンントに戻るけど…………まあ、プリンネさん達がいるから心配は無用と思うけど無茶は禁物だからね？」

「もう、大丈夫だつてば。一応、正遊撃士を目指す旅だもん。シェラ姉つたら心配のし過ぎだよ。」

「エステルの言つ通り何とかやっていけますから、心配はしないで下さい。」

シェラザードの心配の言葉にエステルとヨシュアは大丈夫だと答えた。

「プリネさん、リフィアさん、エヴリーヌさん、本来なら私の役目なんですがエステル達のことをお願いします。」

「うむ！余達に任せるとよい！」

「エステルさん達が何か困った時があれば出来る限りの力になりますから、安心して下さい。」

「エヴリーヌ達がいるんだから、大船に乗った気持ちでいいよ。

「ありがとうございます。……あんたたちの歳で正遊撃士を目指すのは珍しいんだからくれぐれも無茶しないようにね。

それと、困ったことがあつたらブリネさん達に相談するかロレント支部に連絡するのよ。あんたたちがどこに居ようとすぐに駆けつけて行くからね。」

リフィア達にエステル達のことを託して安心したショラザードはいつでも相談するように言った。

「うん……ありがとね、ショラ姉。ショラ姉の方こそあんまり飲み過ぎないでよね。あたし、それだけが心配なんだから。」

「タハハ……まあ、気を付けておくわ。」

心配したエステルから逆に心配されたショラザードは苦笑しながら答えた。

「フツ、心配しないでくれたまえ。何といつてもショラ君にはこのボクが付いているのだから！」

そこにオリビエが出て来て胸をはつて答えた。オリビエの発言にオリビエ以外は全員脱力した。

「……で、どうしてあんたもロレントに行くわけ？しかもショラ姉と一緒に……」

「フツ、ボースの郷土料理はとりあえず全部味わったからね。そろそろ他の地方に足を向けてみようと思つてね。ロレントの料理は、野菜が絶品と聞いているし、ショラ君が噂の『闇の聖女』と深い知り合いだというから今から楽しみだよ。」

ジト目で睨んで尋ねたエステルの疑問にオリビエは楽しそうな表情で答えた。

「 てな感じで、美味しい店と師匠を紹介しゆつて言つて聞かないのよ。あんまりしつこいから居酒屋で酒に付き合つのを条件に付いてくることを許可しかやつた 」

「 ううわ～…… 」

「 オリビエさん……あの、本当に大丈夫なんですか？」

「 早まつた真似はよしたほうがいいですよ？」

生き生きとして答えるショーラザードを見て、エスティルやヨシュア、プリネが心配して言つた。

「 フツ、このオリビエ、美人と美食のためなら死ねるぞ。本當は、ヨシュア君やメンフィルの姫君達にも付いていきたいところなのだがね。迷つた拳句の苦しい選択だつた…… 」

「 迷われても困るんですけど。 」

「 あはは…… 」

「 プリネ、こんな奴相手にするだけ無駄だよ。 」

「 あれほどショーラザードに酒でやられたといつのこと、懲りない奴だな…… 」

相変わらずのオリビエの様子にヨシュアやリフィア、エヴリースは溜息をつき、プリネは苦笑した。

「 まったく懲りないヤツ……ロレントの治安を乱さないでよね。あと、仕事明けのショーラ姉つて本当にヨミッター外れちゃうから。マジで注意した方がいいわよ。 」

「 なによぅ、失礼ねえ。アイナは付き合つてくれるもん。 」

「 あの人だつて底ナシでしょ！」「リミッターが外れる？あの、それって……この前よりもズゴイのかい？」

エスティルとショーラザードの会話が気になつたオリビエはヨシュアに尋ねた。

「 何というか。比較にならないと思つます。 」

「 ふーん、そななんだ……え！？」

氣不味そうな表情のヨシュアの答えにオリビエは流しかけたが、ある事に気付き驚いた。その時定期船の離陸の放送が響いた。

ロレンント方面行き定期飛行船、まもなく離陸します。「利用の方はお急ぎください。

「あら、もう出発か。ほらオリビエ、急がないと。」

「シユ、シユラ君。ちょっと待ってくれたまえ。少し考える時間をくれると嬉しいな～って……」

発信の放送を聞いたショラザードはオリビエの服をつかみ、飛行船に乗るよう促したがオリビエは及び腰で少し待つよう嘆願した。

「出発直前になつて、な～にを言つてるのかしら……男だつたらグダグダ言うな！」

「ひえええ～っ！」

しかしショラザードはオリビエの願いを断ちきつて、情けない叫びを出すオリビエを飛行船のデッキへ引きずつていった。

「シユラ姉、まつたね～！ロレンントのみんなによろしく！」

「2人ともお元気で！」

「うむ、達者でな！」

「2人とも体には氣を付けて下さい！」

「ばいば～い！」

エスティル達の別れの挨拶と共にショラザードとオリビエを乗せた定期船は飛び立つていった……

第51話（後書き）

次回はエステル達は出てきません。原作知っている人ならわかると思します。……感想お待ちしております。

外伝／銀閃と黄金の軍馬の旅行者

（飛行船・デッキ）

「……以上が王国北方で起こった空賊事件の顛末さ。」

「まさか、没落した我が国の貴族がそちらにいるとはな……」

ロレントに向かつて飛行している定期船のデッキでオリビエは何かを耳にあててしゃべり、何かからも男性の声が聞こえて来た。

「ああ、没落した力プア一家の連中がこんなところに流れてくれるとはね。王国から問い合わせがあるかもしねりから適当にあしらつてくれ。」

「了解だ。ダヴィル大使にも言つておく。……それで肝心の”彼”には会えなかつたようだな？」

「うん、結局彼には会えなかつた。どうやらトラブルが発生したらしい。空賊事件との関係はいまだ不明だが別の勢力が動いているのは間違いない。」

「そうか……やはりそう簡単に事は運ばないな……」

オリビエが残念そうに語ると、何かからも落胆した声が聞こえた。

「フツ、それでもないのさ。面白い連中と知り合いになれたよ。」「面白い連中だと？」

「ああ、”彼”の家族に後”闇の聖女”の娘に”霸王”の孫娘にも会つちやつたよ。」

「ほつ……”彼”の……ん？待て、今何かとんでもない人物と出会つたと言わなかつたか？」

「え……ああ”闇の聖女”の娘に”霸王”の孫娘かい？」

「そう、それだ……つて何！？？？」

オリビエが話をしている男性らしき声はオリビエが会つた人物を告

げると一瞬絶句し、その後怒りを抑えたような声を出した。

「……まさか、貴様はいつもの調子でその方達と話をしたのか？」

「さすが我が親友 いやあ、噂通り容姿端麗なメンフィルの姫君達を見て、”闇の聖女”やメンフィルの武官達にも会いたくなつちやつたよ いつそ、こつそり大使館に侵入しちゃおうかな」

「この……お調子者が！ 万が一正体がばれて、他国の土地で同盟国の皇女に言い寄つたこと等が判明したら完全に外交問題だぞ！？ それに大使館に侵入して、捕まつたら貴様の身どころかエレボニアが滅んでしまうわ！ そのところをわかつていいのか！？」

「わかつた、わかつた。そんなに恐い声をださないでくれ。そちらの方は引き続き頼む。くれぐれも宰相殿に気付かれるな。」

怒鳴る男性らしき声にオリビエは適当に答えて言った。

「くつ……本当にわかつていいのだろうな？ ……まあいい、その件は了解だ。」

「また連絡するよ……親友。」

そしてオリビエは何かについているボタンを押して懷に戻した。

「フフ、相変わらずからかい甲斐のある男だな。融通の利かないところが可愛いというか何というか……」

「……携帯用の小型通信機ね。ずいぶん洒落たものを持ち歩いているじゃないの。」

飛行船から見える空を見て咳いたオリビエだが、その時背後からシヨラザードの声が聞こえ驚いて振り向いた。

「シ、シヨラ君……」

「ヴァイスの中央工房ですら実用化していないオーブメントを持っているなんてね……。あんた、いつたい何者なの？」

「フッ、水くさいことを言わないでくれたまえ。漂泊の詩人にして天才演奏家、オリビエ・レンハイムのことはキミも良く知っているはずだろ？ だが、もっと知りたいのであれば所謂ビロートークというやつで……」

「悪いけどマジなの。道化ゴッコは通用しないわよ。エレボニア帝國の諜報員さん。」

「フフ、『風の銀閃』の名はどつやらダテじやなさそうだね。エスティル君やメンフィルの姫君達の前では気付かぬフリをしていたわけか。」

ショラザードを誤魔化そうとしたオリビエだったが、真剣に自分を睨み仮の推測で自分の正体を言ったショラザードにオリビエは否定もせず、ショラザードに感心した。

「これ以上、あの子達やお世話になつてている人から任されたご息女に余計な心配をかけたくないもの。それじゃ、詳しいことをサクサクと喋つて貰おうかしら。あなたの目的は?どうやってリベルに潜入したの?」

「その前に……2つほど訂正させてくれるかな。まず、道化ゴッコはしていない。ボクの場合、これが地の性格でね。擬態でも何でもなかつたりする。」

「あー、そうでしょうね。ワインをダダ飲みしたのだつて飲みたいからやつたんでしょうよ。」

オリビエの答えにショラザードは溜息をつきながら納得したが、その後真剣な表情でオリビエを睨んだ。

「ただしその後、門に連行されて情報を集めることまで計算してね。私達と合流する事まで狙つていたとは思えないけど……」

「フフフ……そのあたりは想像にお任せするよ。……訂正するのはもう一つ……この装置はオープメントじゃない。帝国で出土した『古代遺物』^{アーティファクト}だ。あらゆる導力通信器と交信が可能で暗号化も可能だから傍受の心配もない。忙しい身には何かと重宝するのだよ。」

オリビエは懐から先ほどまで使つっていた装置らしき物を出して説明した。

「アーティファクト……七耀教会が管理している聖遺物か。ますますもつて、あんたの狙いが知りたくなってきたわね。あんたも知つ

てると思つけどリベルは唯一異世界の国であり、

”大陸最強”を誇るメンフィルと同盟を組んでいる国……まさか同盟を崩す工作や……それとも、自分達にとつてリベル侵攻を邪魔された恨みや仲間の仇であるメンフィルの重要人物の誘拐や暗殺かしら?」

オリビエの説明を聞いたシェラザードはますます警戒心をあげ、目を細めてオリビエを睨んだ。

「イヤン、バカン。シェラ君のエッチ。ミステリアスな美人の謎は無闇に詮索するものじゃなくてよ。」

「…………本物の女に近づきたい? あたしの鞭で手伝つてあげるけど。」

オリビエのふざけた態度にシェラザードは鞭を構え、笑顔で睨んで言つた。

「や、やだなあシェラ君。目が笑つてないんですけど……まあ、冗談は置いとくとして。」

シェラザードの様子に焦つたオリビエだったが、急に真面目な表情になつた。

「つたく。最初から素直に話なさいよ。」

「お察しの通り、ボクの立場は帝国の諜報員のようなものさ。だが、工作を仕掛けたり、極秘情報を盗むつもりはない。ましてや眠れる獅子より怖い物を起こすような真似なんてできやしないさ。知つているとは思うけどエレボニアは導力技術さえなかつたメンフィルに大敗したんだからね。そんなエレボニアが導力技術も手に入れたメンフィルに逆らう勇気や戦力なんてないよ。なんせエレボニアが誇る将軍、『焦眼のゼクス』中将さえ『メンフィルの墮天使』ファーミシルス大將軍に圧倒的な力の差を見せつけられた上、率いていた兵もほぼ全滅させられたんだしね。そりやあ逆らう気もなくすよ。ボクはただある人物達に会いに来ただけなんだ。」

「ある人物達……?」

シェラザードはオリビエの目的が気になり、先を促した。

「キミも良く知っている人物達だよ。一人は『王国軍にその人あり』と謳われた最高の剣士にして、稀代の戦略家。大陸に5人といない特別な称号を持つ遊撃士　『剣聖』　カシウス・ブライト。そしてもう一人は異世界の偉大なる王にして”大陸最強”と謳われている魔人。『剣聖』の上をも行くと言われるメンフィルの”霸王”『剣皇』　リウイ・マーシルン皇帝その人さ。」

オリビ工は詩人が物語を謳うような動作で自分が会いに来た人物達を語つた……

外伝「銀閃と黄金の軍馬の旅行者」（後書き）

ようやく1章が終わった！2章は原作も含めて新キャラが多数登場しますので楽しみに待つて下さい。……感想お待ちしております。

第52話（前書き）

いよいよ2章開始です！2章開始と同時に驚きの展開やあるキャラクターの話が出てきます！

ショラザード達を見送ったエステル達は次の推薦状を貰うために新たな街、ルーアンに向かつて歩いていた。

（西ボース街道）

「それにしても……本当に定期船は使わなくていいのかい？歩いて行つたらかなりの遠回りになると思うけど。」

「さつきも言つたけど、父さんの言葉も一理あるわよ。『まずは自分が守るべき場所を実際に歩いて確かめてみる』って言葉。定期船を使わず歩いてルーアンを目指すつもりのエステルにヨシュアは尋ねたが、エステルは笑つて答えた。

「まあ、僕はいいんだけどね。リフィア達のことも一応考えて言つてる？」

「あ……そう言えば、今更だけどリフィア達は歩いて次の街に行くのは大丈夫？結構歩くと思うけど……」

「余を誰だと思っている？幼少の頃より國中を駆けまわった余にとって造作もないわ！」

「歩くのはめんどくさいけど、みんなとおしゃべりできるからエヴァリーヌはいいよ。」

「私も鍛えていますから、大丈夫ですから心配は無用です。この旅はエステルさん達の修行でもあるんですから、私達のせいでお二人の修行内容を変えさせはしませんから安心して下さい。」

「そつか……そう言えばサエラブ、あれからどうしているんだろう？」

エステルは空賊団のアジトと共に戦い、いつの間にか姿を消していったサエラブのことを思い出して呟いた。

「僕達がリフィア達と合流する道すがらいなかつたから、きつと人を見つかる前にどこかに行つたんじゃないかな？下手したら僕達以上に知能がありそだから人間に姿を見られたら怖がられると思つたんじやないかい？」

「それはそうなんだけど……」

「ん？ エステル。お前、”炎狐”と出会つたのか？」

エステル達から聞き覚えのある懐かしい名前が出て来てリフィアは首を傾げて聞いた。

「うん。ボクつ娘達と戦つた時、いきなり現れていっしょに戦つてくれたんだ！」

「後、首領達を追つ時も道を塞ぐ手下達を相手にしてくれたんだ。……それにしてもリフィアが知つているといつことほそっちの世界の生物なのかい？」

リフィアの疑問にエステルは胸をはつて答え、ヨシュアはサエラブの事を知つていそうなリフィアに聞き返した。

「うむ。とは言つてもレスペレントに住む生物ではない。レスペレント、アヴァタール地方より遙か南 セテトリ地方の”工匠都市”ユイドラの近くの火山に住む幻獣だ。以前余とエヴリーヌが共に戦つた仲間 ウィルフレドと共に戦つていたからよく覚えている。

“”工匠都市””って何??”

リフィアから聞き覚えのない言葉が出て来て、エステルは聞き返した。

“”工匠都市””とはその名の通りさまざまな職人によつて治められているいる都市だ。ユイドラの近辺には”工匠会”に管理され、さまざまな材料の宝庫となる場所があるからな。余も時間があればもつと行つてみたかったものだ。”

「エヴリーヌもあそこは結構気にいつていたよ。葡萄が凄く甘いんだよね。……ん……思い出したら、セテトリ地方の葡萄が食べたくなっちゃつたよ！」

「へえ……職人によつて治められている都市か……ルーアンの次にある都市、ツァイス市に少し似ているね。」
リフィアの説明を聞き、ヨシュアは感心した様子で答えた。

「それだけではないぞ。今のユイドラはある意味メンフィルと同じ考え方をしているからいいのだ！」

「それってどんな考え方なの？」

胸をはつて答えるリフィアの言葉に疑問を持ったエステルは尋ねた。

「全ての種族と協力し合つて生活をする”。これが今のユイドラの領主であり”工匠”の中で最高の称号、”匠王” ウィルフレド・ディオンの考え方だ！余もかの者に依頼をしたことがあつたが、職人としての腕はもちろん、さまざまな種族を集め求心力、武芸も中々のものだつたぞ。特にお互い相容れないはずの天使と睡魔族が共に戦つているのを見た時はさすがの余も驚いたぞ。余とエヴリーヌが去つた後も我が祖国メンフィルが集めた情報によれば天使の中でも中位に冠する天使や精霊の中でも王族に値する精霊や”雷竜”、“歪魔”それに”死神”、果ては古代の”魔神”ソロモン72柱の一柱すら力を貸したというしな。」

「確かに話によるとエルフを娶つたそうですよね、リフィアお姉様。」

「うむ。ちなみに余があ奴らと会つた時からエルフと恋仲だつたぞ。それにすでに子も産まれたそうだからな。……あれほどの者が人間としての生を終えることを考へると残念なんだがな……」

「そうですね、特に妻となつたエルフの方にとつてはつらい事でしょうね……」

残念そうな表情のリフィアに同意したブリネは悲しそうな表情をした。

「うーん。 そうかな？」

一方エステルは首を傾げて答えた。

「ほう？ それはどういう意味だ、エステル。」

エステルの答えを聞いたリフィアは興味深そうに聞いた。

「えっと……その前に聞きたいんだけど、そのエルフって種族も長寿なのよね？」

「うむ。彼らは余達”闇夜の眷属”より”魔神”を除いて長寿とも言われておる。」

「そつか……確かに好きだった人がいなくなつて、自分だけ生き続けるのはつらいと思うよ？でも、あたしが思うに多分2人もそのことも考えた上で結婚したんじゃないかな。それにさ、そのウイルフレドっていう人の考えを奥さんがずっと覚え続けてくれるんじゃない？そして奥さんが住んでいる街も奥さんがいる限り、ずっと”全ての種族と共存して生活する。”の考えを守ってくれるんじゃないかな？」

それに子供だつているんでしょ？その子供を夫の代わりに母親としてずっと見守つていけるんだから、つらうことばかりじゃないとわたしは思うよ？」

「「「「」」「」」「」」

「あ、あれ？みんなびうしたの？？」

驚いた表情で自分を見るヨシュアやリフィア達を見て、エステルは慌てて聞き返した。

「いや……そんな前向きな考えがあるとは思わなくて、僕を含めてみんな驚いていたんだよ。」

「ええ。……フフ、私は自分の伴侶は寿命の関係で少なくとも人間の方はやめておこうかと思つていましたけど、エステルさんの考えを聞いたら少し考え方直そうと思いましたよ。人間でありながら異種族と結ばれた時の利点を思いつくなんて、さすがエステルさんですね。」

「や、やだなあ。照れるじゃない……」

ヨシュアやプリネに褒められたエステルは照れて笑った。

(……まさかあの2人が我や”仙狐様”を含め戦友達の前で結納を

挙げた際、我らの前で宣言した永遠の約束をお前が考え付くとは、さすがの我も驚いたぞ。エステル。）

「へ……あ！ サエラブじゃない！ いつの間に！？」

聞き覚えのある念話にエステルは驚き、振り向くといつの間にかエステル達の前にサエラブがいた。

「この方が話に聞いていた”炎狐”ですか……」

初めて見る幻獣にプリネは興味深そうに見た。

「おお、お前はウィルフレドの所にいた”炎狐”ではないか！ 久しぶりだな！」

「久しぶりだね。」

懐かしい人物の関係者にリフィアとエヴリーヌは話しかけた。

（……久しいな。それにしてもお前達が北の魔族大国の王族とは思わなかつたぞ。ウィルは少なくともお前が貴族の類であることには疑つていたがな……）

「正体を隠していたのは余達にとつてお忍びの旅になるからな。それに一応皇族として他国に許可もなく歩く廻る訳にもいかなつたらな。結局お前達には正体を明かさず去つてしまつて、すまなかつたな。」

（……別にいい、我には関係ないことだ。我がお前達の前に姿を現したのはエステル、お前に用があるからだ。）

「あ……ボクツ娘達と戦つた時の約束だね。何かあたしに頼みたいことがあるつて言つてたわよね？ あたしにできることならなんでもいいわ！ あたしの頼みを聞いてくれたつていう報酬を貰つているんだから遊撃士としてあなたの依頼を受けるわ！」

サエラブの念話にドルンと戦つた時の約束を思い出したエステルは何をすればいいか尋ねた。

（では、手短に用件だけ伝える。エステル、我と契約しろ。）

「へー？」

サエラブの念話にエステルは驚いて声を出した。

(どうした、そのような声を出して。以外か?)

「えっと……うん。とりあえずなんであたしと契約したいのか聞いていい?」

(いいだろう。心して聞くがよい。)

そしてサエラブはエステル達に語つた。サエラブは自分達“狐炎獣”を束ねる長”仙狐”が新たな世界の登場を、ほかの”仙狐”から聞き”仙狐”同士でその世界のことについて話し合い、自分達のような存在がその世界にいるか、またサエラブ達の長自身がどのような世界か知りたいために誇り高くあまり人間に友好的でない”狐炎獣”の中で唯一人間と交流をしたことがあり、一人の人間を友と認めたサエラブが選ばれ、ゼムリア大陸を調べるために来たことを語つた。

「……それにもよく異世界の存在を知りましたね?一応異世界の存在は関係者以外機密扱いにしていたんですが……」

プリネはサエラブ達が異世界の存在を知ったことに驚いて尋ねた。

(我らには我らなりの情報の集め方があるとだけ言っておこう。)

“狐炎獣”的情報の集め方やどうやって我が軍の監視の目を搔い潜つたか余も多少興味があるが今はそれどころではないな。それよりどうするのだ、エステル?」

「え!?う~ん……ねえ、一つ聞いていいかな?なんであたしをあなたの契約者として認めてくれたの?あなた自身も言つてたけどあなた達つてあたし達より賢くて、すつごく誇り高い性格をしているんでしょ?なのになんで??’

リフィアに尋ねられたエステルは迷つた後、なぜ自分がサエラブに選ばれたかを聞いた。

(……どこか”我が友”に似ているお前なら力を貸してやってもいいと直感で感じたのだ。それにどの道この世界の人間達の生活を知る必要がある。だったら魔族や精霊を怖がらず友人として扱い、共に戦うお前と契約し、大陸中を廻つたほうが効率がいい。お前と共に

に歩んでいるのなら人間達の目を気にする必要もないしな。お前は大陸中に散らばる”遊撃士”的なのだろう?)

「うん。……と言つてもまだ見習いだけね。正遊撃士になつたら

他国でも仕事が出来るから今は修行中よ!」

(ならない。それにあの赤毛の重剣士も言つていたがお前自身はまだだだからな。)

「あ、あんですつてーーなんでアガットが言つてたことを知つてい るのよ! ? 」

サエラブがアガットが言つてたことを出し、それに怒つたエステル は尋ねた。

(……崖の下で騒がしい会話をしていたからな。それで少々興味があつたからお前達の会話を聞いていただけだ。)

「 ……もしかしてラヴィンヌ山道で一瞬だけ視線を感じたのはあなただつたんですか? 」

一方サエラブの説明を聞いてある事を思い出したヨシュアは尋ねた。(そうだ。それにしてもあの時は驚いたぞ。この世界の人間が精霊と契約し、友人のように接していたことにな。それどころか”水竜”をも手なづけていたしな。)

「 ちょ、ちょっと! なんでヴァレリア湖のことまで…… 」

サエラブの念話にエステルは驚いて聞いた。

(山道で幼い頃に精霊と契約したと言つていたお前に少々興味があつてな…… さまざまな所で遠くからお前の行動を見ていた。)

「 なんで声をかけてくれないのよ……まあ、いいわ。それで期間はどれくらいかな? サエラブはこの世界を調べるよつに言つた人にいつか報告するんでしょ? 」

サエラブの説明にエステルは呆れた後、いつまで契約してくれるか尋ねた。

(お前が契約している精霊と同じよつにお前の生涯の最後まで付き合つてやろう。)

「え！？あたしまだ16歳なのにいいの！？」

(我を誰だと思っている？我は悠久の時を生き、遙か高み“仙狐”を目指す幻獣。高々数十年をお前のために使つても特に支障はない。“仙狐”様もいつまでに帰還してくることを誓わなかつたしな。それにお前のような存在がいたことを報告すれば“仙狐”様も気にいつている“我が友”的な者がいたことに喜ばれ、こちらの世界の人間のために他の“仙狐”を派遣することも考えるだらうしな。

「そつか……じゃあ、早速契約をお願いしていいかな？」

(その前に一つだけ聞いておく。エステル、お前は何のために自らに秘めたる力を揮い、我や風の精霊を使役する？)

「……あたしの“力”を揮う理由やあなた達と共に戦う理由は一つ！“闇の聖女”様のように、傷ついて困っている人達を助けるために使うこと！そしていつか聖女様に成長したあたしを見て貰つて、その時にお母さんを助けてくれたお礼を言うんだ！」

「エステルさん……」

（フツ……よりにもよって“混沌”を望む女神の僕に憧れるか。クク……“悪”を喰らつた我にはちょうどいい。……いいだろう！今より我、サエラブはお前の命果てるまで力になることを誓おう！我が炎、使いこなしてみるがよい！行くぞ！）

「オッケー！いつでも来なさい！」

エステルはかつてパズモと契約したように、両手を広げ胸をはつてサエラブを受け止めれるような姿勢なつた。そしてサエラブは前足をかがめた後、大きく跳躍してエステルに突つ込みエステルの魔力に同調して消えた。

「これが“契約”か……」

初めて見る使い魔の契約にヨシュアは興味深そうに見て呟いた。

「どうだ、エステル？体に異常はないか？」

リフィアも興味深そうに見た後、エステルの体調を尋ねた。

「うん……サエラブがあたしの魔力に同調した時、一瞬体中が炎が

宿つたみたいに凄く熱かつたわ。それに何か閃いたわ。……サエラブ！」

何かの感覚を掴んだエステルは生涯を共にする新たな仲間を呼んだ。契約主に呼ばれたサエラブはエステルの身体から光の玉として出て来た後、自分の体を覆うような炎を纏いながら炎の中から出て來た。

「これからよろしくね、サエラブ！」

（こ）の我が契約してやつたのだ。我が失望せぬよう精進するがよい。）

「相変わらずえらそうね……まあいいわ。ねえ、もしかしてあたし、あなたと契約したから炎の魔術が使えるの？」

サエラブの念話に苦笑したエステルはある事に気付きサエラブに尋ねた。

（私は炎の属性を司る幻獣。我と契約した影響は出て当然だ。試しこれ前なりの炎を浮かべて放つがよい。）

「わかったわ。…………えい！」

エステルはサエラブと共に戦つた時、サエラブが口から吐いた火の玉を思い浮かべ片手を前に突き出した。すると突き出した片手から拳ほどの火の玉が出て来て、近くの大きな石に当たつて消えた。

「ほう……火炎魔術の初級魔術の”火弾”だな。」

リフィアはエステルが放つた火の玉を見て、感心して呟いた。

「凄いな……思い浮かべるだけで新しい魔術が出来るなんて……エ

ステルの野生のカンは本当に驚かされるよ……」

「し、しつつれいね……でもいいわ。新しい属性の魔術も使えるようになつたし！」

感心して呟いたヨシュアにエステルは白目で睨んだ後、喜んだ。そこにプリネが真面目な表情で話しかけた。

「喜んでいるところ悪いんですが……エステルさん、火炎魔術は細心の注意を払つて使って下さい。私も魔力で武器に炎を宿す技を持

つているからわかるんですが……炎はこの世に留まり続いている邪靈や不死の者達を焼き払い、自然界の属性魔術の中で最も威力が高いのですが、使い方を間違えれば周囲の人達に甚大な被害を与えてしまう恐ろしい属性もあります。」

「……そう言えばシェラさんも言つてたね。アーツの属性の中で最も気を付けなければならないのは”火”的アーツだつて。」

「あ……そつか。使い方を間違つたら火事にもなるし、加減を間違えたら相手に大火傷させてしまうものね……」

プリネとヨシュアの説明に納得したエステルは魔術を放つ両手を見た。

(……炎の扱いは我がいるから、無理してお前が使う必要はないぞ。)

「うん……絶対使いこなして見せるわ。魔術が使えるとわかつたその時に父さんに言われたの。『得てしまつた力は間違つた方向に使わなければ、心強い力になる。』って。だからあたしに宿つた炎の力も正しいことに使ってみせるわ！」

(フツ……その意気だ。我が炎を見事使いこなせるか、見守らせてもらつぞ……)

「うん！」

こうしてエステルは新たな仲間と力を手に入れ、そして次の目的地ルーアンに向かつてヨシュアやプリネ達と共に歩き出した……

第52話（後書き）

サエラブの登場の仕方といい、仲間のなり方がどこかの狼さんのパクリとか突っ込まないで下さい……感想お待ちしております。

第53話（前書き）

神採りのアペンドきた――へへへ！今から凄く楽しみです！

ルーアンに向かって歩いて進んでいたエステル達は夕方になる頃に、ボースとルーアンを繋ぐ関所についた。

（クローネ峠・関所前）

「は～、やつと着いたみたい。あれが関所の建物なのかな？」

関所らしき建物を見たエステルは長い道のりを歩いて来たので、安堵の溜息をはいた。

「そうみたいだね。あれを越えたらルーアン地方だ。でも参ったな……もうすぐ日が暮れる。今日はここに泊めてもらつた方がいいかもしねない。」

「別にいいけど……。急いで峠を降りて、麓の宿に泊まる選択肢もあるんじゃない？」

日が暮れ始めていることに気付いたヨシュアは提案をし、エステルはそれに頷きながらもほかの選択肢を言つた。

「夜の峠越えは危険だよ。視界も悪ければ足場も悪い。夜行性の魔獣に襲われたら崖から落ちる可能性だってある。あんまりお勧めできないけどな。……それに旅をしているのは僕達だけではないんだよ。」

「あ……」

エステルに答えたヨシュアはリフィア達の方に向いた。ヨシュアに気付かされたエステルは思わず声を出した。

「エヴリーヌはフカフカのベッドで寝たいから、ここに泊まるのに賛成～。」

「余はどうやらでも構わん。夜の行軍などで慣れておるしな。」

「私もリフィアお姉様といつしょです。お父様達からは野営の訓練も受けていますし。」

「2人の気持ちはありがたいけど、ここはエヴリーヌの希望に沿つて休ませてもらいましょ。さすがにあたしも夜の峠越えは怖いし。そしてエステル達は関所に泊めてもらひことにし、門番の兵士達に近づいた。

「おつと、珍しいな。こんな時間にお客さんなんて。ハイキングに来て道に迷つちましたのか？」

兵士の一人がエステル達を見て、尋ねた。

「ううん、違うわ。あたしたち、一応、遊撃士なんだけど。」

兵士に答えたエステルは準遊撃士の紋章を見せた。

「へえ、あんたたちの歳で遊撃士つてのは驚きだなあ。それじゃあ、仕事で来たのかい？」

「いえ、実は正遊撃士を目指して王国各地を回るつもりなんです。」
「で、どうせだったら修行を兼ねて飛行船を使わずに歩こうかなって。」

「歩いて王国一周するのか！？はーっ、若いつて言つか氣合が入つているつて言うか。」

「えへへ、それほどでも。」

ヨシュアとエステルの答えに兵士は驚いて感心した。兵士に感心され、エステルは照れた。

「しかし、いくらなんでも今から峠を降りるのは危険だぞ。最近、このあたりではやたらと魔獣が発生してるからな。5人もいるとはいえ、油断は禁物だ。旅人用の休憩所があるから今夜はそこに泊まつていくといい。」

「やつた、ありがと」

「助かります。」

「ありがとうございます。」

「お主の好意に感謝する。」

「ありがとう。」

兵士の好意にエステル達はそれぞれ感謝の言葉を言った。

「なんのなんの。休憩所を使うときはウチの隊長に声をかけるといい。手前の詰所にいるからさ。」

そしてエステル達は関所の中に入つて行き、関所を守る兵士達を纏めている隊長から許可をもらい、休憩所の中に入った。

（関所内・休憩所）

「エリが旅行者用の部屋ね。」

「うん。まずは暖炉をつけようか。」

そしてヨシコアは暖炉に火をつけた。すると部屋中が暖炉の火によつて暖かくなつた。

「は～、あつたかい……。やっぱり薪を使った暖炉って落ち着く感じがする……」

「そうだね。導力ストーブも出回つてゐるけど、暖かさでは暖炉には敵わないかな。」

「ええ。大使館にも導力ストーブはありますが、私を含めほんどの方は暖炉を使用していますから、やはりこの辺のほうが落ち着きますね。」

「……あつたかくなつたら眠くなつちやつた。ベッドもあるし寝ようかな……」

「気持ちはわかるがせめて食事が終わつてからにしておけ。」

「おーい、お邪魔するだ。」

暖炉の火で暖かくなつた部屋で安心して、寛いでいるエステル達の所に関所の隊長の補佐をしている副長が入つて來た。

「隊長から話は聞いたぜ。今夜は泊まつていへんだつて？夕食、俺たちのメシと同じでよけりやご馳走するけど、どうする？」

「え、いいの？」

「すみません、何から向まで。」

副長の申し出にエステルは驚き、ヨシュアはお礼を言つた。

「なあに、定期船が就航してから通行人がめっきり減つてな。ヒマを持て余しているから正直、客人は大歓迎なのさ。」

「よし、それじゃあ少しの間待つてくれや。もつとも軍隊のメシだから、あまり味に期待しないでくれよ?」

エステルの答えを聞いて、領いた副長は料理を持つてくるために部屋から出て行つた。

「空賊団騒ぎでは王国軍と張り合つていたけど……。1人1人の兵士さんはやっぱり親切な人が多いよね。」

副長が出て行つた後、エステルは今まで会つて来た王国軍の兵士達を思い出して呟いた。

「確かにそうだね。まあ、軍人が親切なのはリベールくらいだと思うけど……」

「え?」

「…………」

しかしヨシュアの含みのある言葉にエステルは何のことかわからなく思わず声を出した。ヨシュアの言葉の意味がわかっているリフィアやブリネは何も言わず黙つていた。

「いや……とりあえず荷物を置こうか。」

そしてエステルに追及されないためにヨシュアは話題をそらし、荷物を置き始めた。しばらくすると副長が食事を持つて来てえ、エステル達は関所の兵士達に出される食事をたっぷりと堪能した。

「は〜、お腹いっぱい。期待しないでとか言ってたわりには、かなり美味しかったと思わない?」

「うん。デザートもあつたから、果物も出てそれも甘くて美味しかったから、エヴリーヌも驚いたよ。」

「そうだね。軍で出る食事とは思えないな。」

「ええ、普段の食事とほとんど変わりなくて私も驚きました。」

「ふむ。兵士達のことを考えるのも皇族としての務め……我が軍の

食事も改正する必要があるかもしけんな。」「ちょっと失礼するぞ。」

夕食の感想をそれぞれ言つているところに、副長が入つて來た。

「あ、副長さん。すつごく美味しかったわよ」「ご馳走さまでした。」

「美味しかったよ、ありがとう。」

「つむ、普段の食事と変わらぬ美味な料理であつたぞ。」

「美味しい料理ありがとうございました。」

副長を見て、エステル達はそれでお礼を言つた。

「お粗末さま。口に合つたようで何よりだ。ところでもう一人客が来たんだが、相部屋でも構わないかい?」

「来客……こんな夜中にですか?」

副長の言葉にヨシュアは首を傾げた。

「ずいぶん度胸があるヒトねえ。あたしたちは構わないけど?タダで泊めてもらつてる身分だし。」

「そう言つてくれると助かるよ。ま、嬢ちゃんたちの同業者だから気兼ねする必要はないだろうけどな。」

エステルの答えに副長は笑つて言つた。

「え?」

「同業者?」

「フン……どこかで見たような顔だぜ。」

エステルやヨシュアが首を傾げている所、部屋に新たな客 なん
とアガツトが入つて來た。

「あら……」

「む?どこかで見た顔だな?」

「…………ふわあ~あ…………」

「あ、あんた……」

「『重劍のアガツト』…………」

アガツトの姿を見てリフィアは首を傾げ、エステルやヨシュア、プ

リネは驚いた。アガットに興味がないエヴリーヌは欠伸をして、眠そうにしていた。

「なんだ、知り合いだったのか。ところで、アガット。お前さん、メシはどうする？」

驚いているエステル達を見て顔見知りと判断した副長はアガットに尋ねた。

「いや、せっかく다가さつき喰つちまつたばかりだ。寝床を貸してくれるだけでいい。」

「わかった。ベッドは適当に割り振ってくれよ。それじゃあ、おやすみ。」

アガットの答えに頷いた副長は部屋を出た。

「さてと……オッサンの子供たちだつたか。それにメンフィルの貴族共も。何だつてこんな場所に泊まってやがる？ シエラザードはどうしたんだ？ それにどうして小娘共がオッサンの子供達といつしょにいるんだ？」

副長が出て行くのを見届けたアガットは疑問に思っていたことを早速エステル達にぶつきらぼうな態度で尋ねた。

「シエラさんはロレント地方に帰りました。ブリネ達は僕達がメンフィルの方達に依頼で指名されているので共に旅をしているんです。今は僕たち5人で旅をしています。」

「正遊撃士を目指して王国各地を回りつゝと思つてるの。修行を兼ねて自分の足だけだね。」

「正遊撃士？ 歩いて王国一周だあ？ ずいぶんと呑気なガキどもだな。」

「エステルの答えにアガットは呆れた口調で言つた。

「あ、あんですつてー！？」

アガットの言い方にエステルは怒つて叫んだ。

「お前らみたいなガキが簡単に正遊撃士になれるわけねえだろ。常

識で考えろよ、常識で。しかもメンフィルの大貴族とやらはお前達を指名したのかよ。お前達みたいなヒヨックに依頼するなんて、貴族の考えていることは理解できねえな……」

「こ、これでもあたしたち空賊逮捕で活躍したんだから！推薦状だつて貰っているし、子供扱いするのやめてよねっ！それにあんたも遊撃士の一人なら依頼者の事を悪く言わないでよ！」

「フン、依頼者をどう思つかは俺の勝手だ。……それと空賊の件はルグラン爺さんから聞いたぜ。それじゃあ聞くが……仮にお前らしきなかつたらその事件、解決できたと思うか？シェラザードの手やそここのメンフィルの貴族共の手を借りずにお前たち自身の力だけでだぞ？」

「そ、それは……」

「……難しかつたと思います。」

アガットに反論したエステルだったが、正論を返されエステルとシュアは口ごもった。

「ま、当然だらうな。お前たちは新米で、しかもガキだ。力もなけりや、経験も足らねえ。とつさの判断も出来ねえはずだ。それを忘れて浮かれてるといつか必ず足元をすくわれるぞ。」

「う、浮かれてなんかないもん。あんたの方こそ、こんな時間に峠越えなんて危なつかしいことしちゃってさ。人のこと言えないんじやないの？」

アガットの忠告にエステルは言い返した。

「アホ、鍛え方が違うんだよ。それに俺の方は仕事だ。物見遊山の旅と一緒にすんな。」

「仕事？遊撃士協会のですか？」

アガットの答えが気になつたシュアは尋ねた。

「ああ、お前らのオヤジに強引に押し付けられた……」

「え……？」

「父さんが押し付けた？」

「…………さてと、明日は早いし、ひとつと休ませてもいいわ。お前らも喋つてないで寝ろや。」

ヨシコアの疑問に思わず答えようとしたアガットだったが、エスティルとヨシコアを見て口を開じベッドに寝転んだ。

「あー、じまかしたー!?

「そこまで露骨すぎる余計に気になるんですけど……」

アガットの態度にエステルは怒り、ヨシコアは呆れた。

「あーもう、うるせえな。ガキが余計なことに首を突っ込んだら火傷するぞ。とつととルーランに行つて掲示板の仕事でもしていやがれ。それが…………ふああ…………お前らにはお似合いだぜ…………」

2人の答えにアガットは面倒くさい表情をして答え、すぐに眠りについた。

「ちょ、ちょっと……」

「もう寝ちゃったみたいだね。エステル並みに寝つきがいいなあ。」

「一緒にしないでつてば! もー、何なのよコイツ! ? ケンカ売つてるとしか思えないんですけど! ?」

ヨシコアに自分とアガットの事をいつしょにされたエステルは怒つた後、疲れた表情になつた。

「まあまあ。もしかしたら、エステルさん達のことを心配してわざと厳しく言つてるのかもしだせんよ?」

怒つてつるエステルを宥めるようにプリネは言つた。

「…………ねえ、プリネ。ほんとーにそう思つ? 「あはは……すみません。正直、自信がありません。それよりそろそろ私達も寝ましようか。お姉様達はアガットさんに興味がなかつたのか、明日に備えてすでに眠りについていますし。」

「へ? あ、ホントだ。」

プリネに言われたエステルはいつの間にか、ベッドに入つて眠りについているリフィアやエヴリーヌを見た。

そしてエステルはアガットに悪戯しようとしたがヨシュアやプリネに止められ、納得しない表情をしながらも明日に備えて眠りにつこうとした時何かの物音が聞こえ、異変に気付いて起きたアガットやリフィア、エヴリーヌと共に物音がした場所に向かった……

第53話（後書き）

感想お待ちしております。

物音がした場所に向かつたエステル達が見たのは狼の群れと戦っている兵士達であった。

（ボース側関所前・深夜）

「狼の群れ……！」

ヨシュアは兵士達と戦つている正体を見て驚いた。

「た、大変！早く加勢しなくちゃ！」

エステルは慌てて棍を出した。

「……犬のクセに気持ちよく眠つっていたエヴリーヌを起こすなんてムカツクね。どんな鳴声を鳴かせてあげようかな……キヤハッ」

一方エヴリーヌは凶悪な顔で物騒な事を言つた後、虚空から『』を出した。

「……コラ、やめとけ。」

「エヴリーヌも武器をしまえ。余達の出番ではない。」

エステルとエヴリーヌが武器を出して狼の群れと戦おうとした時、アガットとリフィアが止めた。

「な、なんで止めるのよ！？あんた、それでも遊撃士なの！？」

「……なんで戦っちゃダメなの？リウイお兄ちゃん、いつも言つてるじゃない。力ある者は力無き者のために使え。」つて。

アガットとリフィアの制止の声にエステルは怒り、エヴリーヌは不思議そうな表情をした。

「勘違いするんじゃない。関所を守るのは軍の仕事だ。こここの連中は鍛度も高いからすぐに撃退できるだろうよ。余計なお節介つてモンだろうが。」

「アガットさんの言う通りです。エヴリーヌお姉様。彼らにも私達

”闇夜の眷属”のように王国を守る兵士としての誇りを持っているのですから、それを無下にしてはいけません。」

「…………」

「そ、そんな」と……

エヴリーヌはプリネの言葉を理解したのかつまらなさそうな表情で弓を虚空に戻したが、エステルは納得できない様子で呟いた。

「2人の言う通りだ！これは自分たちの仕事さ！」

「嬢ちゃんたちは中に入つてな！」

「で、でも……」

狼と戦つている隊長や副長が口々に手助けは無用であることを言ったが、エステルはまだ迷つていた時に突然警報がなつた。

ジリリリリリ！！

「…………ちいっ！」

警報にいち早く気付いたアガットは舌打ちをして、関所の奥へ向かつて行つた。

「ど、どうなつてるの！？」

「エステル、反対側だ。ルーアン方面の出口でも何かが起こつたらしい。」

「あ、あんですつて！？」

そしてエステル達もアガットを追つて行つた。

（ルーアン側関所前）

そこには狼の群れに力尽きて跪いている兵士が襲われようとしていた。最初に狼の群れが現れたボース側に戦力を割いたため、ルーアン側では一人で狼の群れと戦つていたため、数に圧されてしまったのだ。狼の群れから一匹兵士に向かつて飛び掛かった時

「おらつ！」

アガットが重剣で飛び掛かつた狼を一刀両断した。

「す、凄い……！」

「噂以上の破壊力だね。」

「ほう、中々の実力だな。」

「ん。まあ、お兄ちゃんほどじゃないけど。」

「お、お姉様……さすがにお父様と比べるのはちょっと……」

アガットの実力にエステルやヨシュア、リフィアは感心したが、エヴリーヌはリウイと比べたのでプリネは苦笑して比較対象が違うすぎることを言った。

そして仲間を斬り伏せたアガットに標的を変えた狼の群れはアガットを包囲した。

「ハッ、包囲するつもりかよ。犬ッコロのくせにわりと知恵が働くじゃねえか。」

自分を包囲した狼の群れにアガットは不敵に笑った。

「……加勢するわよっ！」

そこにエステルとヨシュアが飛び込み、アガットの背中を守るような戦闘配置に付き、武器を構えた。

「コラ、引っ込んでろ！」

「ふうんだ。あたしたちの勝手だもんね。」

「邪魔にならないように手伝わせてもらいますから。」

エステル達を見て怒鳴ったアガットだったが、2人は気にせず答えた。

「お姉様方！私達も援護を……！？」

狼の群れに飛び込んだエステル達を見て即座にレイピアを鞘から抜き、リフィアやエヴリーヌにエステル達の援護を呼びかけようとしたプリネだったが敵意をほかの場所から感じて口を閉ざした。

「プリネも気付いたか。…………どうやら向こうの襲撃は囮で、こちらの襲撃が本命だったようだな。」

「……だね。犬のクセに頭がいいようだね。……いい加減出てきたら！」エヴリーヌは見下されるのがムカツクの……！」

いつの間にか弓を出したエヴリーヌが放った矢は崖の一部を破壊するど、狼の群れが崖から降りて来て、リフィア達を囲んで攻撃する態勢になつて唸り声をあげた。

「――――――グルルルルル……」

「ほつ……よりもよつて余達に目をつけたか……余が直々に相手にすることを光榮に思うがいい。」

「自分達からエヴリーヌ達に向かつて来たんだから、跡形……残さなくていいよね……ウツフフフ」

自分達にも戦う相手がいるとわかつたりフィアは不敵に笑い、エヴリーヌは凶悪な表情で笑つた。

「チツ、どいつもこいつも……勝手にしやがれ。ヒヨツコ共！せいぜい、俺の『重剣』に巻き込まれないよう注意しどけよ！」

「来ます……！」

プリネの警告に答えるかのように狼の群れはそれぞれの目標に向かつて襲いかかつた！

襲いかかつた狼の群れは普通の魔獣よりは知恵が廻り、身も軽く強かつたが正遊撃士の中でも実力が高いアガット、これまでの経験で着実に強くなつていてるエステルとヨシュア、

世界を滅ぼしかねない邪悪な存在、”邪龍”をリウイ達や神殺し達と共に戦い倒したことのあるリフィアやエヴリーヌ、そして18という若さながらメンフィルの強豪達に鍛えられ、すでに達人以上のクラスに達しているプリネが相手では分が悪かつた。

「ふおらああああ！」

何匹かに固まつてている狼の群れに向かつてアガットは重剣に気合を込め、鬪氣で火炎を巻き起こし放つた豪快な一撃のクラフト フレイムスマッシュは固まつてている狼達を斬り伏せ

「せいつ、はつ！」

ヨシュアは一体一体を双剣の特徴である2回攻撃 双連撃で着実に仕留め

「はあああああ！」

エステルは自分自身を回転させて棍を振り回すクラフト 旋風輪で狼たちを吹っ飛ばした後、魔術の詠唱をした。

「……炎よ、行け！火弾！」

エステルの片手から放たれた火の玉は一匹の狼を燃やして倒し、さらに吹っ飛した狼たちに着実に狙いをつけて火の玉を放ち倒した。

「純粹なる魔の陣よ、出でよ！イオ＝ルーン！レイ＝ルーン！」

「全部……つぶす！制圧射撃！……まだまだ！行くよ……死んじゃえまあ！アン・セルヴォ！！」

一方エステル達とは離れた所で戦っているリフィアやエヴリースは魔術や弓技で次々と狼達を一撃で討取り

「闇よ！我が仇名す者達に絶望を！……黒の闇界！！」

プリネは自分が使える魔術の中でも威力があり、効果範囲も広い暗黒魔術で狼達を攻撃し重傷を負わせたところを

「そこつ！ハツ！」

レイピアで一体一体確実に仕留めて行つた。

「フム……まだ数は結構いるな。エヴリース、久しぶりに”アレ”をやるぞ。」
リフィアは自分達の攻撃範囲内に逃れて無事な狼達を見て、エヴリースに言った。

「そうだね、こいつら弱すぎてつまんなかったし、エヴリースもさつさと寝たいし決めちゃおうか。」「よし……始めるぞ！」

エヴリースの了承の意を聞くと、リフィアは杖を構えて詠唱を始めた。また、エヴリースも『』を虚空中にしまい両手を掲げリフィアと同じように詠唱を始めた。

「…………我等に眠る”魔”の力よ、我等に逆らう者達を滅せよ……

「血の肅清！！！」

「…………ガア…………！」

リフィアとエヴリーヌが協力して放った魔術は狼達の上空から魔力でできた槍が雨のように降り注ぎ、それに命中した狼達は断末魔を上げながら跡形もなく消滅していった。

「フフ、お姉様達も張り切っていますね。…………では私も！」

尊敬する姉達の活躍を見て、自分もさっさと勝負を決めようと思ったプリネは一体一体を確実に仕留めるのを止めて、一端後ろに跳んで後退しレイピアを斬撃をする構えにして、自らの魔力で剣に黒々と燃える闇の炎を宿らせた。

「全てを燃やしつくす暗黒の炎！…………魔劍奥義！暗礁！火炎剣！！」

「…………グオオオオオ…………！」

斬撃の構えで放った衝撃波は紫色に燃える妖しい炎と同化して狼達に襲い、狼達に断末魔を上げさせながら塵や骨も残さず焼き尽くした。そしてプリネの攻撃を最後にリフィア達を囲んでいた狼達は全滅した。

一方エスティル達の戦いも終盤に向かっていた。

「せいやつ！」

アガットの重剣による豪快な一撃は敵を真つ二つにし

「おおおお！」

冷たい視線で敵の動きを鈍らせて、さらに精神的に追い詰めるヨシユアのクラフト 魔眼で狼達にダメージを与えると共に動きを止めさせているところを

「…………風よ、切り裂け！旋刃！！」

エスティルの風の魔術で狼達を切り裂いて倒した。倒された狼達は魔獸が倒れた時と同じようにセピスを落として消滅していった。

「ふう…………なんとかやつつけたわね。」

「うん、数も多かったしなかなか手強い相手だつた。」

真夜中の戦闘がよつやく終了してエステルとヨシュアは一息ついた。そしてアガツトはしばらくの間エステル達を観察して、自分なりの正当な評価をした。

「…………」「フン……思つたよりもやるみたいだな。ま、あのオッサンの手解きを受けていたんだつたら当然か。……魔術に関してはサッパリわからねえがシェラザードには劣るが上手く使ってやがるな。」

「え。」

アガツトが自分達を少しだけ認めたことにエステルは驚いた。「勘違いするなよ。あくまで新米としてはだ。まだまだ正遊撃士には遠いぜ。」

驚いているエステルにアガツトは忠告した。

「おーい！そつちは大丈夫か！？」

そこにボース側の関所前で戦っていた隊長と副長がやってきた。

「ああ、問題ない。一匹残らず片付けたぞ。気絶していたヤツはどうだ？」

「思つたよりも軽傷だ。お前がいてくれて助かつたよ

「さすが『重剣のアガツト』だぜ。」

「大したことはしてねえよ。それに、このガキどもやそのメンフィル人どもがそこそこ働いてくれたからな。」

口ぐちアガツトを高評価した隊長や副長にアガツトはなんでもない風に装つて、エステル達の働きも言つた。

「そうなのか……嬢ちゃんたち、ありがとうな。」

「う、うん。」

副長のお礼の言葉をエステルは戸惑いながら受け取つた。

「へえ……嬢ちゃん達はメンフィル人だつたんだ……てことは”闇夜の眷属”なのか？」

隊長はリフィア達を興味深そうな表情で見て尋ねた。隊長の疑問にリフィア達を代表してプリネが答えた。

「ええ、余計なお世話かと思いましたが手伝わさせていただきまし

た。

「いやいや、こちらも嬢ちゃん達のおかげで本当に助かつた。ありがとう。」

「メンフィルとリベールは盟友だからな。困った時は手を取り合つのが当たり前だ。」

隊長のお礼の言葉にリフィアが答えた。

「ハハ、それは心強い。自分達も精強なメンフィル軍に負けないよう、より一層訓練を励まないとな……自分達は、念のため周辺をパトロールするつもりだ。君たちは中に入つてゆっくりと休んでくれ。」

「ああ、気をつけろよ。」

アガットがそう言つと、隊長と副長はパトロールを始めた。

「さてと、寝直すとするか。もう危険は去つたはずだ。お前らも大人しく寝ておきな。」

そしてエステル達に言いたい事だけ言つたアガットは関所の中へ入つて行つた。

「ど、どうなつてんの？あの口の悪いヤツがあたしたちを讃めるなんて。」

アガットに遠回しに褒められたことにエステルは意外そうな表情で呟いた。

「少しば、僕たちの実力を認めてくれたのかもしれないね。思ったよりも真っ直ぐな人なんじゃないかな？」

「ええ、私も少しだけ行動を共にしましたが決して悪い方ではありますよ。」

「うーん……とてもそれは思えないんだけど。……まあ、たしかにデカイ口を叩くだけはあるわね。」

ヨシュアとプリネの言葉にエステルはある程度納得した。

「そんなことより寝直すぞ。明日の峠越えに響かせる訳にもいかないしな。」

「賛成）……早く寝よう？」

リフィアとエヴリーヌの意見に頷いたエステル達は関所に入つて寝直した。

翌日起床したエステル達は関所の兵士達に一晩泊めてもらつたことに感謝の言葉を述べて、すでに関所から去つたアガットを追うかのようにルーアン地方に足を踏み入れた……

第54話（後書き）

次話からはかなり早いペースで新キャラが次々と出てくるので楽しみにして待つて下さい。……感想お待ちしております。

第55話（前書き）

いよいよルーアン編が本格的に始まる&いきなり新クロスオーバーキャラ登場です！

ルーアン市に向かつて歩いていたエステル達は山道を越えて、ルアン市に行く途中にある村、マノリア村に続く街道を進み始めた。

（マノリア間道）

「わあっ……！」

「エステル？」「

突然エステルが感動の声を上げたことにヨシュアは首を傾げた。

「見て見て、ヨシュア！ 海よ、海！」

「はいはい。言われなくとも判つてるよ。」

「フフ、高い場所から見る海は眺めがよくていいですね。」

「うん、それに風が気持ちいいね。」

「そうだな。リウイの故郷であるモルテニアからも海が見えるが、ここから見る海の景色はまた格別だな。」

はしゃいでいるエステルを見てヨシュアは呆れ気味の声で答え、ブリネ達はエステルの感動に微笑しながら同意した。

「青くてキラキラしてメチャメチャ広いわね～。それに潮騒の音と一面に漂う潮の香り……。うーん、これぞ海って感じよね。」

「エステル、海を見るのは初めて？」

海を見てはしゃいでいるエステルを見て、疑問に思ったことをヨシュアは尋ねた。

「昔、父さん達と定期船に乗った時、ちらつと見た記憶があるんだけど……。こんなに間近で見るのはひょっとしたら初めてかもしない。」

「そつか……。僕も海は久しぶりだな……。定期船を使わずに歩いたきた甲斐があつたね。」

「うんうん。何だか達成感があるよね！』

「フフ、達成感を感じているところ悪いですけど、旅はまだまだ終わっていませんよ？」

「うむ。まずは看板に書いてあったマノリア村とやうを田指すぞ。そしてエステル達はマノリア村に向かって海の景色を楽しみながら歩き始めた。

一方エステル達がマノリア間道を進んでいる間、間道の近くにある森で一人の女性が窮地に陥っていた。

（マノリア間道・森）

「――――――――――グルルルルル……」

「ハア……ハア……ハア……」

女性は見た目では人間と変わらない姿をしていたが、唯一足の部分は木の根がかくみついていた。その女性を囮のようにエステルやリフィア達が関所で戦つた狼達が唸りを上げながら女性を攻撃する態勢に入った。女性は最初、狼の群れが自分を標的にした時戦いを避けて逃げていたが、間の悪いことに逃げている最中に他の魔獣まで女性に襲いかかったのだ。魔獣に襲われた女性は自分の武器である弓や習得している魔術で対抗して倒していくが、魔獣との戦闘の中に狼達が追いつき魔獣との戦いが終わった頃には狼達が女性を囮んでいたのだ。

「ううつ……やっぱり異世界だと力が入らない……森出なんですねんじやなかつたです……」

自分の劣勢に女性は脅えた。本来なら女性は華奢な見た目に反してかなりの実力を持っているのだが、女性はリウイ達の世界 ディル・リフィー娜に生息する精霊の一種のため、異世界では魔力が合はない上本来力を貸してくれるはずの大地に住まう精霊達も答えなかつたため、自分の力のみで戦つていたのだ。

「――ガウ！」

「くつ…………降り注げ、大地の矢よ…………大地の援護射撃……！」

「「「ギャウ！？」」

襲いかかった狼達を女性はエヴリーヌが得意とする弓技に似ているが唯一違うのは大地の魔力と鬪氣を合わせた大技を放ち狼達を倒した。

「あつ…………力が…………」

しかし力を使い尽くしたのか女性は跪いて立てなくなつた。

「「「「グルルルル…………」」」

残つた狼達は獲物が弱つているとわかり、いつでも飛び掛かる態勢になつて唸つた。

「ひつ…………誰か～！助けて下さい～！」主人様～！山の主様～！」

絶体絶命になつた女性は助けを求めるように大声で叫んだ。

（マノリア間道）

「あれ？」

「どうしたんだい、エスティル？」

急に足を止めたエスティルにヨシュアは不思議に思つて尋ねた。

「うん…………今、誰かが助けを求めているような気がしたんだけど…………（なんだらう…………この不思議な感覚、パズモと出会つた時に似ている気がする…………）」

「？助けを求める声なんて聞こえないけど…………」

エスティルの言葉を信じてヨシュアは耳を澄ませたが何も聞こえなかつたので不思議に思つた。

「待つて下さい…………どなたか、その森の中から助けを求めています！」

同じように耳を澄ませたブリネは近くの森の中から聞こえる助けを求める声を聞き、顔色を変えた。

「余も聞こえたぞ…………かなり窮地に陥つていいようつだ。すぐに助けに行つたほうがいい。」

「…………あつちの方から聞こえたよ。」

プリネの答えにリフィアも頷き、エヴリーヌは声が聞こえた方向を指差した。

「え……」

自分以外は全員聞こえたことにヨシュアは驚いた。

「あつちね！…………サエラブ！」

（…………何用だ。）

そして驚いているヨシュアを気にせず、エステルは素早く助けを求める声の場所に行くために素早い動きをする幻獣 サエラブを呼んだ。

「お願い！助けを求めている人がいるの！あなたの背中に乗せて！」

（…………お前と契約して最初の指示がよりもよって、我的背に乗せろとはな…………）

「あなたの契約主としてまだまだあなたしが誇り高いあなたに背中を乗せてなんてことを頼むなんてどうかしてると思つけど、お願い！助けを求めている人がいるの！」

不愉快そうに聞こえるサエラブの念話にエステルは頭を下げて、一生懸命嘆願した。

（…………さつさと乗れ。急を要するのである？）

「いいの！？」

誇り高い性格のサエラブの以外な答えにエステルは頭を上げて驚いた。

（…………以前の我なら断固断つていたところだが、今の我はある程度の事に関しては寛大になつてゐるつもりだ。ただし、我的背に乗るのはお前かウイルしか許さないし、緊急時でない限りは乗せないからな。）

「うん、ありがとう！」

サエラブの念話に表情を明るくしたエステルは、サエラブの背に恐る恐る跨つた。

「エステル！一人では危険だよ！僕達も……！」

「ヨシュア達は後から追いついてきて！あっちの方向よ、お願い！」

（承知！）

ヨシュアの制止の声を聞かず、エステルはサエラブに助けを求める声がした方向を指差した。エステルの指示に頷いたサエラブは背にエステルを乗せているにも関わらず大きく跳躍して、森の中に入つて跳躍と走りを繰り返して助けを求める者を見つけるために進んだ……

第55話（後書き）

今回の話でもうお分かりだと思いますが、新クロスオーバーキャラは序盤の最後で仲間になり数少ない回復キャラとしても役立つあのキャラです……感想お待ちしております。

（マノリア間道・森）

「……………グルルルルル……………」「……………」

自分を囲んだ狼達は唸り声を上げながら飛び掛かる態勢になつた狼達を見て女性は悲鳴を上げた。

「ガウ！」

「いやあっ！（死にたくない！誰でもいいから助けて！）」
そしてついに狼達の中の一匹が女性に飛び掛かつた。女性はそれを見て悲鳴を上げて自分の人生はこれまでかと思つた。

「はっ！」

「ギヤン！？」

その時、サエラブに跨つたエステルが棍を震つて女性に飛び掛けた狼を攻撃した。棍に当たつた狼は頭に当たつた棍による痛みに悲鳴を上げて吹つ飛ばされた。

「えつ……………」

女性はエステルとサエラブの登場に驚いて声を出した。

「大丈夫！？怪我はない！？」

「は、はい。」

「よかつた……ってこの狼達は関所の時の！まだ仲間がいたのね…………よし、サエラブ！一網打尽にするわよ！」
(ああ。…………フン、こやつら狼の癖に人間の匂いが強くするな。
さては人間にしつけられたな。…………しつけられた狼等もはや犬と同
等！この我が本物の”獣”の恐ろしさを見せてやるつー！)

「行くわよ！」

エステルの掛け声を合図に戦闘が始まった！

「はああ、せいつ！」

「ガウ！？」

エステルの持つ棍の中でも急所を狙い、敵の溜め攻撃を無効化するクラフト　金剛撃に命中した狼は断末魔を上げて倒され（燃えよ！）

「「ウオオオオオン……！」」

サエラブが口から連續で吐いた火の玉に当たって体中が燃えた狼は悲鳴を上げながら消滅した。

「せいつ！……ふう、後少しね。」

棍に力を込めて震い、その震いでできた衝撃波——捻糸棍でまた一匹仕留めたエステルは残りの敵の数を見て一息ついた。

「オン！」

「やばつ！……」

そして油断しているエステルに隠れていた狼が襲いかかった。狼の奇襲に気付いたエステルは防御の態勢に入ろうとしたが

「やあ！」

「ギャン！？」

（フン！）

「ガツ！……」

守っていた女性が矢を放つて狼を撃ち落とし、撃ち落とされた狼の喉にサエラブは鋭い牙で噛みつき絶命させた。

「ありがとう、サエラブ！それにそこの人も！」

（フン、真の強者は目の前の戦いだけでなく周囲にも気を配るものだ。まだまだ修行が足りん。）

「力がなくなつて、山の主様達の加護がなくても矢を放つことぐらにはできます！どなたか知りませんが、援護させていただきます！」エステル達の登場と活躍に勇気づけられた女性はよろよろと立ちあがり、足元の木の根から弓の形をつくり、魔力でできた矢をつがえてエステル達の援護する態勢に入つて言った。

「よーし、ミシコア達が来る前に終わらせひきこましー。」

そしてエステルとサエラブは助けた女性の弓矢による援護を受けて、お互いの背後を守りながら、エステルは棍で、サエラブは素早い動きで狼達を翻弄しながら牙や爪で倒した。

一 はああああああああ！

(滅せー!)

エスティルが放つた旋風輪で傷を負つた残りの狼達をサエラフは炎を纏つて突進して倒した。

「チミロイ、チミロイ！」

よ」やく戦闘が終了してエヌアルは棍を自分の前で廻して勝利のセリフを言つた後、武器をしまつて女性の方を見た。

「あはは、助かるの走りが助かるやつだよ。

「そんな！助けられたのは私のほうです！危ない所を助けていただき

「本当にありがとうございました！」

えへへ……あれ、あなたの口

首を傾げて尋ねた。

「えっ、あ、その……（どうしよう……この子、この世界の人間の
ようだけど、木精ヨウチリを知つて怖がらないかな……見たところ、幻獣も
つれているから大丈夫かな……？）」

エステルに尋ねられた女性は戦闘が終了し安心したのか、本来の臆病な性格が出てエステルが自分の正体を知つて怖がることを恐れておどおどした。

（……そ奴は人間ではない。森に住まう木の妖精だ。）

だ。
）

「へ!? サエラブ、この人の事を知つてゐるの! ?」
サエラブの念話に驚いたエヌヌルは聞き返した。

(私はこの者の事は知らぬ。……以前話していた我が友 ウィル

に力を貸して共に戦っていた戦友の中で双子のユイチリ達がいたから、そ奴の正体がわかつただけだ。）

「そりなんだ……じゃあ、あなたはパズモと同じ、妖精なんだ！……でも同じ妖精なのにパズモとは全然違うわね……？念話を使わずあたしとこいつやって話せるし、見た目もあたし達と変わりないじゃない。」

「私達ユイチリは木々の願いによつて生まれ、同じ森に住むなじみ深い種族であるエルフを元に形成していますから……あれ？私の事、怖くないんですか？」

「？どうして、あなたを怖がるの？」

「だつて、私の姿はあなた達人間とは姿が違いますし。特にこゝは異世界ですから、私の姿を見慣れてないあなた達が私を見て魔物といつしょの扱いをすると思つてたんです……」

「あ、あのね～！どこをどう見たらあなたが魔獣に見えるのよ！？それにパズモと契約しているあたしがあなたを怖がるわけないでしょ！？」

女性の答えにエステルは呆れて溜息をついた。

「あの……さつきから気になつていたんですが、そこにいる幻獣の主はあなたなのですか？」

（勘違いするな。私は力を貸してやつてているだけだ。人間に従う犬に成り下がつた覚えはない！）

「ひつ～す、すみません！」

怒ったように聞こえたサエラブの念話に女性は怖がつた後、謝罪した。

「エステル　…じこにいるんだい！？」

そこにエステルを追つて來たヨシュア達の声がした。

「あ、ヨシュア達も追いついてきたんだ。……お　い！あたしはここだよ、ヨシュア！」

「……エステルさんの声があちらからしました。急ぎましょ～！」

自分を呼ぶ声に答えるかのようにエステルは大きな声で呼び返した。するとエステル達を見つけたヨシュア達も森の中から姿を現した。

「エステル！ 無事だつたんだね！ 一人で向かつたから、心配したよ

……」

「もう、ヨシュアつたら心配性ね……サエラブもいるんだからあたしが魔獸ごときにやられる訳ないでしょ？」

エステルの無事な姿を見て安堵の溜息をついたヨシュアにエステルは苦笑しながら答えた。

「あ、あなた達は！」

一方リフィアとエヴリーヌの姿を見て、女性は驚いて声を出した。

「あれ？ そいつ、どつかで見たような……？」

「む？ 確かに余もそこのコイチリに見覚えがあるぞ。……コイドラの時のコイチリ達は双子だつたから違つた。……そのコイチリ、お前の名は？」

女性を見てエヴリーヌは見覚えのある顔に首を傾げ、リフィアも頷いた後少しの間考えたが思い出せず、女性に尋ねた。

「テトリです！ 邪龍との戦いにいっしょに戦つた仲なのに、忘れるなんて酷いです！ ……うつ、ご主人様が私を忘れた事といい、私つて影が薄いんじょうか……」

女性 テトリはリフィア達が自分の事を忘れていた事に怒つた後、以前かつての主に会いに行つた時主の従者は自分の事を覚えていたが、肝心の主は忘れていた事を思い出していじけた。

「……そう言えば、そんな奴いたね。」

「おお、セリカの使い魔のコイチリか！ 久しぶりだな。なぜ、こんな所にいる？」

「…………その…………森出です。」

少しの間いじけていたテトリだが、リフィアの疑問に言いにくそうに答えた。

「森出？ 何それ？？」

テトリの言葉がわからずエステルは首を傾げた。

「あなた達人間にわかりやすいうなら、家出です。」

「家出！？ なんでそんな事したの？？」

テトリが説明した言葉の意味がわかつたエステルは声を上げて尋ねた。

「聞いて下さいますか！みんな、酷いんですよ！私の初めてを奪つたご主人様は邪龍との戦いが終わって、力を失くしてしまったので契約を解除のですが、久しぶりに会いに行つてみたら完全に私の事を忘れているし、山の主様は力が戻つたというのに何度も勝手に許可もなく私に憑依するし、あげくリタさんやナベリウスさんは私の死後、冥き途の門番にするとか私の意思も聞かず面白半分で提案するんですよ！？しかもタルタロス様まで2人の提案に賛成してましたし！いくら温厚な私でも怒るし、傷つきます！……だから傷心を癒す旅代わりに住んでいた森を出て、監視の目を苦労して掻い潜つて山の主様の影響もない木々が噂していた異世界に来たんです！」

「あはは……よくわからないけど、色々あつたみたいね……」

勢いよく事情を話すテトリを見て、エステルは苦笑いをした。

「……ハア……ハア……」

「！？どうしたの！？」

元気に見えたの急に顔色を悪くして崩れ落ちたテトリを見てエステルは駆け寄つて声をかけた。

「……やはりこの世界の魔力と合わなかつたようですね……特に世界の魔力で存在を保つていてる精霊がこの世界で生きるのは厳しいのに戦闘をして、さらに力を使つてしまつたようですね……エステルさん、まず魔力を供給してあげましょっ。」

「う、うん！」

倒れたテトリを見て原因がわかつたプリネの答えにエステルは頷いて、プリネと共に自分の魔力を供給した。

「フウ……助かりました……ありがとうございます。」

魔力が供給され、力が戻つて顔色が良くなつたテトリは立ち上がつ

てお礼を言った。

「気しないで。困った人を助けるのがたし達、遊撃士の仕事なんだから！それよりこれからどうするの？」

「はい。…………あの、もしよろしければ私をエステルさんの使い魔にしてくれませんか？」

「へー？」

「ほう、何故じゃ？お前はセリカに仕えていたのではないか？」
テトリの申し出にエステルは驚き、リフィアは不思議に思つて尋ねた。

「エステルさんには助けていただいた恩がありますし、しばらく元の世界には帰りたくないんです。……それとさつきも言いましたがご主人様との契約はもう解除されちゃいましたから……ご主人様が私を覚えていたら新たな契約を申し出なかつたかもしませんが、見事に私の事を忘れていましたからね……ですからご主人様の事はもういいんです。」

前の主の事を言われたテトリは寂しそうに笑つて答えた。

「テトリ……わかつたわ！ぜひ、あなたの力を貸して！弓の腕も凄かつたし、ぜひお願いするわ！この世界のよさをあたしがいつしょにいて、教えて上げるわ！」

「急な私の申し出を受けてくれてありがとうございます。…………では両手を出してくれませんか？」

「うん。」

テトリの言葉通り、エステルは両手をテトリの目の前に出した。そしてテトリはエステルの両手を握り、両手から伝わるエステルの魔力に溶け込むように消えた。

「……サエラブの時とはやり方が違うね。エステル、また新たな力を感じるのかい？」

「うん。……なんだろう、根強い大地の力を感じるわ。……テトリ

！」

少しの間、自分の両手を見た後、エステルは新たな仲間 テトリを召喚した。召喚されたテトリは光の中から地響きのような音と共に光の中から出て来た。

「これからよろしくね！」

「はい！母なる大地の力、エステルさんを助けるために役立てます！」

「ありがとうございます。そうだ、テトリの前の主の事、教えてくれないかな？」

「え？ どうしてですか？」

前の主の事を聞かれたテトリは首を傾げた。

「だつて、その人契約を解除したとはいえテトリの主だつたんじよ？ 同じ契約主として精靈が力を貸してくれる事がどれだけありがたい事とテトリがどれだけ傷ついたかを思い知らせるために、その人に会つたら今のテトリの主としてブツ飛ばしてあげるわ！」

「あわわ……私のためにそんな寿命を縮めるような事をしなくていいです！」

「つづ。 ふつくくく…… 神殺しをブツ飛ばすか。 お前は余も予測できなきことを言つから、本当に面白いな…… つづくくく！」

エステルの言葉にテトリは慌て、テトリの前の主の事を知つてているリフィアは声を押し殺して笑つた。そして新たなる仲間と力を手に入れたエステルはヨシュア達と共に次なる目的地、ルーアンに向かつて進み始めた……

第5・6話（後書き）

VERITAのユイチリ参入は早くから決定していたことによらず、出せました！ちなみに炎属性の召喚キャラは思いついていたのですが、そのキャラはあまりにも反則すぎるため出してもSCと決め、神採りが出たお陰で序盤に仲間になつてもおかしくない強さのキャラが思いついたのです！（まあ、基本エウシェリーキャラはみんな反則クラスですが＾＾）今日の夕方か夜にはエステルの現在のパラメーターを出します。……感想お待ちしております。

設定3

<精靈遊撃士> エステル・ブライト
レベル、パラメーター、オープメントは原作通り。ただし、CPは450、ATS、ADFは原作の2倍

クラフト（原作以外）

パズモ召喚 30 自分 サポートキャラ、パズモ（HPは主の半分）を戦闘に参加させる（防護の光盾（味方単体DEF& ; ADF20%上昇）or 戰意の祝福（味方全体SPD15%上昇）or 光霞（敵全体空属性130%攻撃）、たまに贖罪の光霞（40%攻撃））ただし召喚した主は召喚している間、最大HP5%、CPが10下がる、任意でパズモを自分の元に戻せる。

黒の衝撃 50 中型直線 贫通する暗黒魔術、80%時属性攻撃& ; 後退効果（威力はATSに反映）

旋刃 40 小円・地点指定 風の魔術 70%風属性攻撃（威力はATSに反映）

闇の息吹？ 45 単体 味方のHPを回復させる。ただし、回復量は5~25%とバラバラ

サエラブ召喚 40 自分 サポートキャラ、サエラブ（HPは主の9割）を戦闘に参加させる。（物理単体攻撃or連続火弾（火属性2回魔術攻撃& ; 火傷10%）or炎狐強襲（火属性物理全体攻撃120%& ; 火傷20%）or拡散咆哮（敵全体20%攻撃& ; 遅延、後退効果）、1回の出番で2回連續で行動する。ただし召喚した主は召喚している間、最大HP15%、CPが30下がる、任意でサエラブを自分の元に戻せる。

火弾 20 単体 火の魔術、90%火属性攻撃（威力はATSに反映）

テトリ召喚 35 パーティーキャラ、テトリを召喚する。ただし召喚した主は召喚している間、最大HP、CPが10%下がる、任意でテトリを自分の元に戻せる。

地脈の吸收 50 単体 地の魔術、70%地属性攻撃&、与えたダメージの30%吸收（威力はATSに反映）

<放浪のコイチリ> テトリ（属性・地……地属性攻撃を無効化する。）

LV200	HP14000	CP2500	ATK1400	DEF1000	ATS1700	ADF1200	SPD40	MOV8
-------	---------	--------	---------	---------	---------	---------	-------	------

装備

武器 イブ・コイチリ（コイチリ専用の弓、混乱30%攻撃）
防具 木精靈王女の戦衣（テトリ専用。女性コイチリの中でも力の持つた者しか羽織る事が許されない衣。風・地属性耐性100%&全状態異常無効）
靴 大地の力（コイチリ専用。また、コイチリはこれ以外の靴は装備できない。）
アクセサリー 必中の腕輪（テトリ専用。装備中絶対に攻撃を外さない。）

再生の指輪（一人終わることにHPが200回復）

味方のすぐ後に攻撃すれば1.5倍。一人終わるごとにCP、EPが100回復。回避30%上昇

オープメント（地属性）並びはリースです。

クラフト 二連射撃 100 単体 2回攻撃

地響き 250 指定した横3列全体に地属性攻撃110%、なお飛行系の敵には効かない（威力はATSに反映）

大地の恵み？ 200 単体 味方一人のHPを40%回復する

制圧射撃 400 全体 100%の攻撃

再生の風 500 全体 自分を含めた味方全体に傷を再生する膜を覆わせる。しばらくの間、一人廻るごとにHP5%回復

重酸の地響き 700 特殊 指定した横3列全体に地属性攻撃130% & 毒40%（威力はATSに反映）

地脈の抗体 1200 全体 自分を含めた味方全体に大地の力で守護の膜を覆う。戦闘不能 & 右化以外回復& amp; ;しばらくの間全員状態異常無効 & amp; ;一人廻るごとにHP10%回復

精密射撃 350 単体 120%のアーツ& amp;

駆動妨害、遅延攻撃

ベーセルファセット 2000 全体 ダメージ150% & amp; ;混乱、毒20%の地属性攻撃（威力はATSに反映）

Sクラフト 技魔代謝の風 全体 自分を含めた味方全体に全てを再生する膜を覆わせる。戦闘が終了するか戦闘不能になるまで一人廻るごとにHP30%回復、EP & amp; ;CP10%回復
大地の援護射撃 大円 魔力の眼と闘気を最大限に出したユイチリに伝わる一撃奥義 ダメージ率600%

設定3（後書き）

いつの間にかエステル、最強主人公セリカより万能性があり強くなつてきちゃいました。このままだとエステル、人外クラスの強さに……！テトリの強さがVERITA後のわりに弱いのはセリカが契約を解除した影響です。まあ、それでも軌跡シリーズでは相変わらずの反則クラスですが。……感想お待ちしております。

第57話（前書き）

軌跡をやつた方にとつてはお待ちかねのキャラが出てくるので、本日、特別に一日で2話更新です！

（マノリア村）

「は～っ。やつと人里に着いたわね。なんだか、白い花があちこちに咲いてるけど……」こって何ていう村だっけ？

ボース市から長い道のりを歩いてきて、ようやく人里に着いて一息ついたエステルは周囲の風景を見て呟いた。

「マノリア村だよ。街道沿いにある宿場村さ。あの白い花は、木蓮の一種だね。」

「ええ、いい香りです。おそらくあの白い花の香りなんでしょうね。」

「ふーん、キレイよね～。それに潮の香りに混じってかすかに甘い香りがするような。うーん……何だかお腹が空いてきちゃった。」ヨシュアの説明を聞いてプリネは息を大きく吸って漂つてくる白い花の僅かな香りを楽しんでいたが、エステルは違う事を言った。
「あはは、花の香りで食欲を刺激されるあたりがエステルらしいって言うか……。まさに花よりダンゴだね。」

エステルの言葉にヨシュアは苦笑した。

「だつて、育ち盛りなんだもん。ちょうどお腹だし、休憩がてらにランチにしない？」

「賛成」。関所から歩いてきたから、エヴリーヌもお腹がすいてきちゃった。

「いいけど……何か手持ちの食料はあったかな？」

「あ、ちょっとタンマ。どうせだつたら落ち着ける場所で、できたての料理を頼まない？せつかルーアン地方に来たんだし。」

「そうだな。地方独特の郷土料理を楽しむのも旅の醍醐味の一つだしな。早速宿酒場を探すぞ！」

エステルとリフィアの言葉に頷いたヨシュア達は村中を歩き回って

宿酒場を探した。

マノリア村宿酒場・白の木蓮亭

「ようこそ、『白の木蓮亭』へ。見かけない顔だけど、マノリアには観光で来たのかい？」

酒場のマスターは村では見かけないエステル達を見て尋ねた。

「ううん。ルーアン市に向かう途中なの。」

「ボース地方からクローネ峠を越えて来ましたです。」

「クローネ峠を越えた！？は～、あんな場所を通る人間が今時いるとは思わなかつたな。ひょっとして、山歩きが趣味だとか？」

エステルとヨシュアの答えにマスターは驚いて聞き返した。

「うーん……。そういう訳じやないんだけど。ところで、歩きっぱなしですっごくお腹が減つてゐるよな。」

「何かお勧めはありますか？」

「そうだな……今なら弁当がお勧めだけだ。」「お弁当？」

マスターのおススメの意外な料理にエステルは首を傾げた。

「町外れにある風車の前が景色のいい展望台になつていてね。昼食時は、うちで弁当を買ってそこで食べるお客様が多いんだ。」

「あ、それってナイスかも。聞いてるだけで美味しいそうな感じがするわ。」

「それじゃ、そうしようか。どんな種類の弁当があるんですか？」

マスターの言葉にエステルは楽しそうな表情で頷き、ヨシュアも同意してメニューを聞いた。

「スマートハムのサンドイッチと魚介類のパエリアの2種類だよ。どちらもウチのお勧めさ。」

「うーん、あたしはサンドイッチにしようかな。」

「それじゃ、僕はパエリアを。」

「まいどあり。しめて120ミラだよ。」

エステルとヨシコはそれぞれお金を払つて弁当を受け取つた。

「そこのお嬢さん達は何にするんだい？」

マスターはリフィア達がまだメニューを頼んでいないことに気付き、聞いた。

「ふむ。外の風景を楽しみながら食べる弁当も悪くないが余はこの『魅惑の魚介畠』とやらが気になるな。」

「私はこの『頑固パエリヤ』という料理が少し気になつています。」

「エヴリーヌは甘いお菓子が食べたいから、この『季節限定・フルーツケーキ』が食べたいな。」

「まいどあり。お嬢さん達の注文は今から作ることになるけど、いいかい？」

「ええ、私達は空いた席に座つて待つていてるのでお願いします。」リフィア達を代表して頼んだ料理のお金を払つたプリネはマスターの確認する言葉に答えた。

「リフィア達はここで食べるよしひね。じゃあ、あたし達は外の展望台で食べているから。」

「わかつた。余達はお前達が食べ終わつてここに来るのを待つている。」

エステルの言葉にリフィアは頷いて答えた。

「ああ、そうだ。ついでにサービスでハーブティーもつけておいたよ。これもウチの名物でね。」

「わ、ありがと」

マスターのサービスにエステルは喜んだ。

「それじゃ、展望台に行こうか？」

「うん！」

そしてエステルとヨシコは宿酒場を出た。

「（口）はさつき調べたばかりね。雑貨屋さんにも居なかつたし……

困つたわ……どこに行つちゃつたのかしら。」

宿酒場の前で制服を着た少女が何かを探していた。

「ヨシュア、ほらほら早く！」

「ちょっとエステル。前を向いて歩かないと……」

そこにヨシュアの方を見ながら前を見ず、宿酒場から出たエステルが少女にぶつかった。

「あうっ……」

「きやっ……」

ぶつかった2人は地面に手をついた。

「あいたた……。『、ごめんね、大丈夫！？あたしが前を見ていいなかつたから……』

「あ、いえ、大丈夫です。すみません、私の方こそよそ見をしてしまって……」

少女はエステルに起こされながら謝罪した。

「あ、そうなんだ。じゃあ、おあいこって事で」

「まったく……エステル、何やってるのぞ……」

早速人にぶつかってしまったエステルに呆れたヨシュアは制服の少女を見ていきなり黙つた。

「？？？」

「ヨシュア、どうしたの？」

ヨシュアの様子に少女は不思議そうな表情をし、エステルも不思議に思つて尋ねた。

「い、いや……。『めんね。連れが迷惑かけちゃって。どこにもケガはないかな？』

「はい、大丈夫です。私も人を捜していく……。それでよそ見をしてしまつて。」

「え、誰を捜してるの？」

少女の言葉が気になつたエステルは尋ねた。

「帽子をかぶつた10歳くらいの男なんですけど……。どこかで見

かけませんでした？」

「帽子をかぶつた男の子……。ヨシュア、見かけたりした？」

「いや、ちょっと見覚えがないな。」

「そうですか。どこに行っちゃったのかしら……。私、これで失礼します。どうもお手数をおかけしました。」

エステルとヨシュアの言葉を聞いた少女は軽く頭を下げた後、去つて行つた。

「ヨシュア？ ねえ、ヨシュアってば。」

去つて行く少女の後ろ姿を見て、呆けていたヨシュアをエステルは肩をゆすつて気付かせた。

「え、ああ……どうしたの。」

「どーしたもーーしたも……あ、もしかして……。なるほど、そーゆーことか。」

ヨシュアの様子に呆れたエステルだが、突然一人で納得した。

「……なんか、激しく勘違いしてない？」

エステルの様子から何か勘違いしていることを悟つたヨシュアは呆れた表情でエステルを見た。

「照れない、照れない 一皿会つたその時から恋の花咲くこともあらつてね。」

「ち・が・い・ま・す。ただ、昔の知り合いにほんの少し似ていただけだよ。それで、ちょっと驚いただけさ。」

案の定勘違いしているエステルにヨシュアは溜息をつきながら答えた。

「へえ、ほう、ふーん。昔の知り合いに似ているね。口説き文句

としては30点かな？」

「ところでエステル。あの子の制服、見覚えない？」

全然信じていないエステルにヨシュアは弱冠怒り氣味の口調で言った。

「そういえば……。ジョゼットが変装に使つてた何とか学園つてと

「うの制服！？」

「ジヒニス王立学園だよ。このルーアン地方にあるらしいから見かけても不思議じゃないけどね。」

「ふーん、今のが本物なんだ。なんか清楚で礼儀正しくて頭も良さ

「どうだつたわね～。生意氣ボクっ子とは大違いだわ。」

「何言つてるんだか。ジョゼットと最初に会つた時、完全に騙されていたくせに。」

「うつ……」

ヨシュアの言葉が言い返せず、エステルは黙つた。

「そういうや、あの時も僕の事をからかつていたよね。ま、それでもまんまと騙されたら世話ないんだけビ。」

反撃するかのようにヨシュアは正論を言つて、エステルに笑顔で言い返した。

「ううう……」

何も言い返せないエステルは唸るだけで反撃の言葉は出なかつた。
「人をからかう暇があつたら、もうちょっと観察力を養つた方がいいんじゃないの？」

「わかつた、わかりました！ もう、からかつたりしません！」

「分かればよろしい。」

ようやく降参して謝つたエステルをヨシュアは許した。

「さてと、それじゃ展望台でお昼ご飯にしようか？」

「ふあ～い。」

ヨシュアをからかつて、手痛い反撃の言葉を受けて精神が回復しきつていなエステルは元気がなさそうな返事をしてヨシュアと共に展望台に向かつた……

第57話（後書き）

現在学園祭編の中盤に差し掛かっています。なので全話投稿した頃にはひょっとしたらルーアン編は終わるかもしないので、楽しみに待つて下さい。ちなみにストックしている話の数はなんと15～6話です！……感想お待ちしております。

その後展望台につき、景色を楽しみながら食事をし終えたエステル達はリフィア達と合流するために宿酒場に行こうとした所、少女が探していた男の子らしき人物とエステルがぶつかった。その時、男の子に遊撃士の紋章を盗まれたと気付いたヨシュアはエステルにその事を指摘し、男の子を探して村の住民に聞いて廻った結果、近くの孤児院に住む男の子とわかり、遊撃士の紋章を取り返すためにエステルとヨシュアはマノリア村の近くにある孤児院に向かつた。

（マーシア孤児院）

エステルとヨシュアが孤児院の土地に入ると、そこにはエステルのバッジを盗んだ男の子を含め3人の子供がいた。

「クラムつたらどこに行つてたのよ、もう！クローゼお姉ちゃん、すごく心配してたんだからね！」

3人の中で唯一女の子のマリイが帽子を被つた男の子 クラムを怒っていた。

「へへ、まあいいじゃんか。おかげでスッゲエものが手に入つたんだからさ。」

「なんなの、クラムちゃん？」

得意げにしているクラムにもう一人の男の子 ダニエルが首を傾げて尋ねた。

「にひひ、見て驚くなよ。ノンキそつなお姉ちゃんから、まんまと拝借したんだけど……」

「……だくねがノンキですつて？」

「くつ……」

ダニエルとマリイに自慢しようとしていたクラムだったが、聞き覚えのある声に驚いて振り向いた。振り向くとそこには遊撃士の紋章

の持ち主であるエステルとヨシュアがいた。

「ゲッ、どうしてここに……！」

エステルの顔を見てクラムはあせつた。

「ふふん。遊撃士をなめないでよね。あんたみたいな悪ガキがどこに居るのかなんてすぐに対つちやうんだから！」

「ぐくそー……。捕まつてたまるかつてんだ！」

「ひひひ、待ちなさいー！」

クラムが逃げ出し、エステルが声を上げてクラムを追いかけ回した。

「あのう、お兄さん……。どうなつちやてるんですか？」

「クラムちゃん、また何かやつたの～？」

エステルに追いかけ回されているクラムを見て事情を知つていそうなヨシュアに2人は尋ねた。

「ええつと……騒がしくしちゃつて『ゴメンね。』

尋ねられたヨシュアは苦笑して答えた。そして逃げていたクラムがついにエステルに捕まつた。

「ちくしょー！離せつ、離せつてば～っ！児童ギヤクタイで訴えるぞつ！」

エステルに捕まえられたクラムは悪あがきをするかのように、暴れて叫んだ。

「な～にしゃらくさい事言つてくれちゃつてるかなあ。あたしの紋章、さつさと返しなさいっての～」

「オイラが取つたつていう証拠でもあんのかよー！」

「証拠はないけど……。こうして調べれば判るわよー！」

反論するクラムにエステルはクラムの脇腹をくすぐつた。

「ひやはは……や、やめるよーくすぐつたいだろーエッチー乱暴オンナ！」

「ほれほれ、抵抗はやめて出すもの出しなさいっての……」

少しの間、クラムの脇腹をくすぐつていたエステルだったがその時、少女の声がした。

「ジーク！」

少女の声がした後、白ハヤブサがエステルの田の前を通り過ぎた。
「わわつ！？ なんなの今の！？」

エステルは目の前に通った白ハヤブサに驚いてくすぐる手を止めて、
声がした方向を見た。するといつの間にか白ハヤブサを肩に止まら
せたマノリア村でぶつかった制服の少女が厳しい表情をエステルに
向けていた。

「その子から離れて下さい！ それ以上、乱暴をするなら私が相手に
なりま.....あら？」

少女はエステルの顔を見ると田を丸くした。

「あ、さつきの.....」

エステルも同じように田を丸くした。

「マノリアでお会いした.....」

「ピュイ？」

「助けて、クローゼお姉ちゃん！ オイラ、何もしてないのにこの姉
ちゃんがいじめるんだ！」

肩に乗つた白ハヤブサと共に首を傾げている少女 クロゼにクラ
ラムは助けを求めた。

「な、なにが何もしてないよ！ あたしの紋章を取つたくせに！」

「へん、だったら証拠を見せてみろよ！」

クラムの言葉に頭に来たエステルはまた捕まえようとしたが、クラ
ムは素早く避けた。

「あ、くすぐるのは無しかんな。」

「うぬぬぬ.....」

エステルは悔しそうな表情でクラムを見た。

「やあ、また会つたね。」

「あ、その節はどうも..... すみません、私でつきり強盗が入つた
のかと思つて.....。あの、それでどういった事情なんでしょう？」

クロ ゼは事情を知つていそうなヨシュアに困つた表情で尋ねた。

「クローゼお姉ちゃん。そんなの決まつてるわよ。どーせ、クラムがまた悪さでもしたんでしょう。」

「ねー、おねえちゃん。もうアップルパイできたー?」

そこにマリイが口をはさみ、ダニエルは今の状況とは関係のないことを言つた。

「あ、もうちょっと待つててね。焼き上がるまで時間がかかるの。」ダニエルにクロ ゼは微笑みながら答えた。そしてエステルとクラムが言い争いを始め、どうするべきか迷つていたヨシュア達のところに女性が孤児院から姿を現した。

「あらあら。何ですか、この騒ぎは……」

「テレサ先生！」

姿を現した女性は孤児院を経営するテレサ院長だった。

「詳しい事情は判りませんが……。どうやら、またクラムが何かしでかしたみたいですね。」

「し、失礼だなあ。オイラ、何もやつてないよ。この乱暴な姉ちゃんが言いがかりをつけてきたんだ。」

「だ、誰が乱暴な姉ちゃんよ！」

テレサに自分の事を言われたクラムは言い訳をしたが、エステルがクラムの言い方に青筋を立てて怒鳴つた。

「あらあら、困りましたね。クラム……本当にやつていないのでですか？」

「うん、あたりまえじゃん！」

困惑した表情で近付いて尋ねたテレサにクラムは笑顔で答えた。

「女神様にも誓えますか?」

「ち、誓えるよっ!」

「そつ……。さつき、バッジみたいな物が子供部屋に落ちていたけど……。あなたの物じゃありませんね?」

「え、だつてオイラ、ズボンのポケットに入れて……はつ!」

テレサの言葉にクラムは無意識に答え、誘導された事に気付いて氣

不味そうな表情をした。

「や、やっぱり～！」

「まあ……」

「見事な誘導ですね……」

バッジを盗んだ事を口にしたクラムにエステルは声を上げ、クロゼとヨシュアはテレサを感心した。

「クラム……。もう言い逃れはできませんよ。取ってしまった物をそちらの方にお返ししなさい。」

「うううううううう……。わかつたよ！返せばいいんだが、返せば！…」クラムは悔しそうな表情でバッジをポケットから出して、エステルに放り投げた。

「わっと……」

「フンだ、あばよつ！」

エステルにバッジを放り投げたクラムはその場から走り去った。

「あっ、クラム君！」

「大丈夫、頭が冷えたらちゃんと戻ってくるでしょう。」クラムを呼び止めようとしたクロゼにテレサは落ち着いた表情で諭して後、エステルとヨシュアに言った。

「それより……ここで立ち話をするのも何ですね。詳しい話は、お茶を飲みながら伺わせていただけないかしら？」

そしてエステル達はテレサに孤児院の中に招き入れられた……

第58話（後書き）

感想お待ちしております。

その後ハーブティーとアップルパイを駆走になつたエステルとヨシュアはしばらくの間、テレサやクローゼと世間話をした後宿酒場で待たせているリフィア達の事を思い出し、テレサに別れをつげてクローゼと共に孤児院を出た。

「マーシャ孤児院・入口」

「うーん、テレサ院長つてあつたかい感じのする人よね」

「そうだね……お母さんつて感じの人かな」

「ふふ、子供たちにとつては本当のお母さんと同じですから。」
3人がテレサの事について話していた時、白ハヤブサのジークが来てクローゼの肩に止まった。

「ジーク。待つてくれたの？」

「ピュイ」

「うん、そうなの。悪い人たちじやなかつたの。エステルさんとヨシュアさんつていつてね。あなたも覚えていてくれる？」

「ピューイ！」

「ふふ、いい子ね。」

「す、すごい。その子と喋れるの？」

ジークと会話している風に見えるクローゼを見てエステルは驚いた。
「さすがに喋れませんけど、何が言いたいのかは判ります。お互いの気持ちが通じ合つてるつていうか……」

「ほえ……」

クローゼの言葉にエステルは感心した。

「相思相愛つてわけだね。」

「はい。」

ヨシュアの言葉をクローゼは否定せず頷いた。

「こんにちは、ジーク。あたしエスティル、よろしくね」

「ピュイ？……ピュイ ッ」

ジークに話しかけたエスティルだつたがジークは飛び立つて行つた。

「あつ……。しくしく、フランケッタ。」

「はは、残念だつたね。」

「いいもん。あたしにはパズモ達がいるんだから、悔しくなんてないもん！」

ヨシュアの言葉にエスティルはすねながら答えた。

「あの……そのパズモという方はエスティルさんのお知り合いか何かですか？」

エスティルの言葉が気になつたクロ ゼは尋ねた。

「あ、そうだね。見て貰えばわかるわ。……パズモ、サエラブ、テトリ！みんな、出ておいで！」

エスティルは自分に同化している精霊達や幻獣を呼んだ。呼ばれたパズモ達はエスティル達の前に姿を現した。

「え！？これは一体……！」

初めて見る召喚されたパズモ達の姿の現れ方を見てクロ ゼは驚いた。

「えへへ……この子があたしが小さい時からずっとこいつしょにいてくれている友達のパズモよ！」

（よろしくね。）

「えつと……もしかして、妖精……なんですか？」

クロ ゼはパズモを見て驚いた表情で尋ねた。

「うん。と言つてもこの世界の精霊じゃないよ。パズモもそうだけど、こいつのサエラブやテトリもみんな異世界に住む幻獣や精霊なんだ！」

「まあ……！そだつたんですか！異世界に住む種族と言えば”闇夜の眷属”しか知りませんでしたが、そのようなお伽噺でしか出でこない存在もいたんですね……！」

「あはは……そんな風に言わると照れちゃいます。」「

(フン、ぐだらん。)

自分達の存在を感じているクロ ゼを見てテトロは照れ、サエラブは興味なさげに鼻をならした。

「えつ……今の声は……！？」

クロ ゼは頭に響く初めてのサエラブによる念話に驚いて辺りを見回した。

「あ、そうか。クロ ゼさんは念話の事を知らないんだつたわね。」

念話に驚いているクロ ゼにエステルが説明した。

「……そうなんですか。口にする」ともなく、お互いの気持ちを伝えあうなんで素敵ですね……！私もエステルさんのようにジークと直に話してみたいです。」

「えへへ、ちょっと照れちゃうな。」

念話の事を理解したクロ ゼはエステルを尊敬の眼差しで見て、見られたエステルは照れた。

「エステル……自慢する気持ちはわからないでもないけど、プリネ達の事を忘れていいない？」

「あ……いけない！みんな、出て来て早々で悪いんだけど一端戻つて！」

(はいはい。)

(……用もなく我を呼ぶでないぞ。)

「わかりました。」

パズモ達はそれぞまた、光の玉となつてエステルの身体に入った。

「じゃ、プリネ達を迎えて行きますか。」

「そうだね。クロ ゼさんもよかつたら途中まで送るよ。」

「ありがとうござります。あの……ルー・アンのギルドでしたら私、何回か行つた事があります。よかつたら案内しましょうか？」

「わ、いいの？すごく助かつちゃうけど。」

「君の方は大丈夫？すぐに学園に戻らなくて。」

クロ ゼの申し出にエステルは喜び、ヨシュアは確認した。

「はい。今日は外出許可を貰っていますから。夜までに戻れば大丈夫です。」

「それじゃ決まりね ジャあ、まずはプリネ達と合流しましょうか！」

「？さつきから気になっていたんですが、エステルさんとヨシュアさんのお二人で旅をしていたのではないのですか？」

エステルの言葉に疑問を持ったクロ ゼは尋ねた。

「うん。ちょっと事情があつてね。メンフィルの貴族の人達と旅をしているんだ！」

「メン……フィル……の……貴族の方……ですか。どうしてエステルさん達と？」

エステル達の同行者の身分を知ったクロ ゼは一瞬固まつた後、気を取り直して尋ねた。

「それは歩きながら話すわ。」

「そんなに緊張しなくても大丈夫だよ。プリネ達は”闇夜の眷属”で貴族だけど僕達と比べて見た目も変わりない人達だし、3人共気さくな人達だからクロ ゼさんも彼女達とすぐ打解けるよ。」

緊張しているように見えるクロ ゼにヨシュアは微笑しながら答えた。そしてクロ ゼを加えたエステル達は途中でその場からいなくなつたクラムから謝罪を受けた後、マノリア村の宿酒場に向かつた。

（マノリア村宿酒場・白の木蓮亭）

「おまたせ、3人共。結構待たせちゃつたかしら？」

「いいえ、大丈夫ですよ。今、食後の休憩をしていましたところでしたから。」

「ん……人が増えてるね。誰？」

エヴリーヌはクロ ゼを見て尋ねた。

「ジェニス王立学園に通うクロ ゼ・リンツと申します。エステル

さん達とは縁あつてルーアンの案内をする事にしました。」

「プリネ・ルーハンスです。将来就く仕事のためにエステルさん達といつしょに旅をしています。よろしくお願ひしますね。」

「……私、エヴリーヌ。」

「プリネの姉のリフィアだ。…………ん？クロ ゼといつたな。お前とはどこかで会つたような気がするんだが…………」

クロ ゼの顔をよく見たりフィアは首を傾げて呟いた。

「（え…………！？）どうしてリフィア殿下がここに…………！？じゃあもしかして、こちらの方はリウイ皇帝陛下とペテレーネ様のご息女…………！？）えっと……人違いだと思います。私の知り合いでの方にメンフィル出身の方はいらっしゃいませんから…………」

幼い頃、ある場所で祖母に促されてリフィアと会つて挨拶をして、リフィアの正体を知つていてるクロ ゼは表情には出さず心の中でリフィアが田の前にいる事に驚き、プリネの名を聞いた後メンフィル皇族の直系 マーシルン家の中で唯一自分と同じぐらいの年の皇后女の存在がいた事を思い出し、察しがついて驚いた。そして隠している自分の正体が悟られないために誤魔化した。

「ふむ、そうか。まあいい、それよりルーアンとやらに向かうぞ。今度はどんな街か今から楽しみだ。」

「了解、じゃあ行こうか。みんな。」

リフィアの言葉に頷いたヨシュアは全員にルーアンに向かうよう促した。そしてクロ ゼを加えたエステル達はルーアンに向かい始めた……

第59話（後書き）

次回はエステル達ではなく、あるキャラ達が初登場します。
感想お待ちしております。

⋮⋮⋮

外伝「幼き竜達」（前書き）

今回登場するキャラ達は多分、結構マイナーなキャラ達ですからわからない方が多数いるかもしれません。あとがきにこのキャラ達が出てくる作品名を書いておきますので気になつたら調べてみて下さい。

外伝「幼き竜達」

「マーシア孤児院」

エスティル達がマノリア村を出た頃、孤児院に住んでいる2人の少女がテレサに頼まれた買物から帰つて来た。

「た・まご　た・まご」　今日～はどんな料理になるかな
買った物が入つた籠を持つて無邪気に独自の歌を歌つてゐる少女の一人の容姿は太陽のように輝く黄金の長い髪をゆらして、紅耀石のような赤い瞳で誰からも可愛がられるような容姿をしていた。

「ミントちゃん、楽しそうだね。私も楽しい気持ちになっちゃいそ
う。」

「えへへ、だつて今日の晩御飯のおかずには卵があるんだよー・ミント、
卵が大好きだもん！」

歌を歌つてゐる少女　ミントの喜びを自分の喜びのよつと感じて
いる少女の容姿もミントにまけずどちらも可愛らしい容姿だが明るい
性格のミントとは逆に物静かに見え、髪や瞳も黄金の髪と赤い瞳の
ミントとは逆に、夜空の様な長く美しい黒髪と水耀石のような透き
通る青い瞳を持っていた。

「そつやつてはしゃぐのもいいけど、足元をよく見ていいないとこ
ちやうつよ?」

「大丈夫だよー・ミント、ツーヤちゃんと同じみんなの中では一番上
のお姉さんなんだもん!…………せやつ!」

黒髪の少女　ツーヤの言葉にミントは笑顔で答えた後、足元にあ
る出っ張った石につまずいた。

「ミントちゃん!」

つまづきかけたミントをツーヤは支えて、助けた。

「ありがとう、ツーヤちゃん!」

「だから言つたんだよ? 足元をちゃんとよく見て歩かないといつて。

でないとさつきみたいにつまずいて大好きな卵を割っちゃうよ？」

「ごめん、ごめん。でも、その時はツーヤちゃんが助けてくれるんでしょ？だったら大丈夫だよ！」

「もう、ミントちゃんつたら……」

ミントの言葉にツーヤは苦笑したが悪い気持ちではなかつた。実はこの2人の少女は”百日戦役”後森の中で倒れている所をテレサ夫妻に拾われ、ずっと孤児院のお世話になつて来た少女達なのだが耳は人間とは違ひ尖つていた。2人は同じ場所に倒れていてお互いの事は知らなく、また記憶がなかつたが孤児院で過ごす中記憶がないことを気にせず、お互に同じ境遇だったため、意気投合していくの間にか無二の親友になつていた。マーシア孤児院に住んで長い時が過ぎても全く成長しない2人の事をテレサはいくらなんでもおかしいと思ったが、2人の耳を見て”百日戦役”後に現れた異世界の種族”闇夜の眷属”と思い、人間とは異なる種族の”闇夜の眷属”は成長も自分達人間とは違うと思い、気にしなくなつたのだ。

「テレサ先生、ただいまー！」

「今戻りました。」

2人は孤児院のドアを開け、ミントは元気よく、ツーヤは落ち着いた口調で言った。

「あら、ミントにツーヤ。お帰りなさい。」

食器を洗つていたテレサは帰つて来た2人の声に気付き、手を止めて身につけているエプロンに手をふいた後、2人に近づいた。

「はい、先生に言われた物を買って來たよ！」

ミントは嬉しそうな表情で買物籠をテレサに手渡した。

「ふふ、ありがとう。…………うん、ちゃんとメモ通りの物を買つて來たようね。そうそう、今日クロゼが来てアップルパイを焼いてくれたわ。あなた達の分は残してテーブルの上に置いてあるわ。」「本当！？クロゼさんの焼いたアップルパイってすっごく甘くておいしいから、ミント、大好き！」

「2人とも帰つたらまづ、手を洗いなさい。」「はい。ミントちゃん、手を洗いに行こう。」

「うん！」

そして2人は手を洗つて来た後、テーブルの傍にある椅子に座つた。「はい、アップルパイにハーブティーよ。」

「ありがとうございます、先生。」

「わーい クロ ゼさんのアップルパイだ」

2人は皿にのつているアップルパイを美味しそうに食べた後、ハーブティーを飲んだ。

「あれ？」

「どうしたの、ミントちゃん？」

ハーブティーの入ったカップに口をつけたミントは呑むのをやめて、首を傾げた後集中した。いつもと違う様子の親友が気になりツーヤは声をかけた。

「こ」のカップ……ママの香りがする！先生、もしかしてミントのママがここに来た！？

ミントはカップについていた僅かな魔力に気付き、顔色を変えてテレサに尋ねた。ミントの持つていたカップは先ほどエステルが使っていたカップで、エステルがハーブティーを呑んだ際、エステルは無意識に微量な魔力を出していたのでその時、エステルの微量な魔力がカップに付着したのだ。

「ミントのお母さん……？」いいえ、今日ここに来た女性のお客様はクロ ゼと遊撃士のエステルさんですよ。」

ミントの言葉に首を傾げたテレサだったが、それらしき人物が思い当たらず今日孤児院に来た客の名前を告げた。

「エステルさん……」

一方テレサに告げられた客の名前をミントは忘れないように呟いた。

「ミントちゃん、もしかして……」

自分とミントしかわからないある事に察しがついたツーヤは驚いた

表情になつた。

「先生、そのエステルさんつて人はどうにかれるのー・ミント、会いたい！」

「……どうしたの、そんなに血相を変えて？いつも楽しそうにしているあなたらしいわよ？」

「そのエステルさんつて人、ミントのママの『』がするのー・ずっと待つていたママにミント、会いたいのー。」

「エステルさんがミントのお母さん…………～ミント、嘘についてはいけませんよ。」

エステルを思い浮かべたが、ミントの親とは思えずテレサはミントを諭した。

「先生！」

自分の言つている事が本気にしてもらえずミントは声を荒げた。

「……先生、お願ひします。そのエステルさんつて人とミントちゃんを会わせて下さい。」

「ツーヤ？あなたまで…………わかりました。明日、ギルドに連絡してエステルさんがこちらに来るよう頼んでみますね。だから、いい子にして待つていなさい。」

普段自分からは何も頼まないツーヤにまで嘆願されたテレサは少しの間考へて、答えた。

「本当！？ありがとう、先生！」

「よかつたね、ミントちゃん。」

「うん！ママつてどんな人なんだ？…………優しい人かな…………？」

エステルに会えるかもしれない事に喜んだミントは未だ姿がわからぬエステルの姿を幸せそうな表情で連想し、会うのを楽しみにした。予想外の早さで望んでいた形とは違う形でエステルと会つ事を知らずに……

外伝「幼き竜達」（後書き）

今回出て来たキャラ達の原作は「空を仰ぎて雲高く」と今月発売する新作「時を奏でる円舞曲」です。ちなみに最初、前作では脇役だったツーヤは出すつもりはなく、代わりに真ラスボスをミントといつしょに出すつもりでしたが、新作で主役レベルになつたので予定を変更してツーヤにしました。ツーヤには戦女神シリーズに出てくるあるキャラ達の技を使ってもらうつもりです。この2人はルーアン編が終わるとレギュラークラスの登場の頻度になるので楽しみに待つて下さい。後、2人は後に”成長”します。ちなみに原作の主人公は真ラスボスを拾つて本来ミントの位置になるはずの場所にしたと思つてもらつていいです。まあ、出す気はないですが。次回更新した時にクロスオーバー作品を追記します。……感想お待ちしております。

第60話（前書き）

今回は軌跡シリーズお馴染みの土下座が得意技（笑）のあのキャラの登場です。

クロ ゼを加えたエステル達は途中で出会つ魔獸も簡単に倒し、ようやく目的地であるルーアンに到着した。

「ルーアン市内・北街区」

「うわ～……。ここがルーアンか。なんていうか、キレイな街ね。」「海の青、建物の白……。眩しいくらいのコントラスト。まさに海港都市つて感じだね。」

「ええ……風景に合わせた建築物、素晴らしい街ですね……」

「ああ……我が祖国では決して見る事のできない景色だな……」「よくわかんないけど、エヴリーヌもこの街、キレイだと思つ。」

初めて見るルーアンの景色にエステル達は見惚れた。

「ふふ、色々と見所の多い街なんです。すぐ近くに、灯台のある海沿いの小公園もありますし。街の裏手にある教会堂も面白い形をしているんですよ。でも、やっぱり一番の見所は『ラングランド大橋』かしら。」

「『ラングランド大橋』？」

観光名所を挙げていったクロ ゼの言葉のある部分が気になつたエステルは首を傾げて尋ねた。

「こちらと、川向こうの南街区を結ぶ大きな橋です。巻き上げ装置を使った跳ね橋になつていてるんですよ。」

「跳ね橋か……。それはちょっと面白そうだな。」

「うむ。橋が上がる所をぜひ見なければな！」

クロ ゼの答えを聞いたヨシュアは興味深そうに咳き、リフィアもヨシュアの言葉に頷いた。

「あと、遊撃士協会の支部は表通りの真ん中にあります。ちょうど大橋の手前ですね。」

「オッケー。まずはそっちに寄つてみましょ。」

そしてエステル達はルーアンの支部に向かつた。

（遊撃士協会・ルーアン支部）

「こんにちは～、つて。あれ、受付の人は？」

元気よく挨拶をしながら入つて来たエステルは受付に誰もいないことに気付き、咳いた。

「おや、お嬢ちゃんたち。なにか依頼でもあるのかい？」

そこに掲示板を見ていた女性がエステル達に気付き尋ねた。

「あ……」

「受付のジャンは2階で客と打ち合わせ中なんだ。困ったことがあるならあたしが代わりに聞くけど？」

「えつと……。密じやないんだけど。」

女性はエステルの胸についている準遊撃士の紋章に気がついた。

「ん、その紋章……。なんだ、同業者じゃないか。あたしの名はカルナ。このルーアン支部に所属してる。見かけない顔だけど新人かい？」

「うん。あたしは準遊撃士のエステル。」

「同じく準遊撃士のヨシュアです。よろしくお願ひします。」

「エステルさん達の旅に同行させてもらつているプリネと申します。よろしくお願ひします。こちらは幼い頃から姉代わりになつてくれているエヴリーヌお姉様とリフィアお姉様です。」

「よろしく。」

「余がリフィアじゃ！カルナとやら、余の活躍を楽しみにしてるがよい！」

女性遊撃士 カルナにエステル達はそれぞれ名乗つた。

「エステルとヨシュア……それにプリネにエヴリーヌ、リフィア……

… そうか、あんたたちがロレントから来た新人とメンフィルのサポ

一タ一達だね？ボースじや、ショラザードと大活躍したそうじゃな
いか。」

カルナは少しの間考え、エステル達の事を思い出してエステル達を
褒めた。

「ほう……もう、余達の活躍が広まっているのか。」

「あ、あはは……。それほどでもないけど。」

「僕たちが来ることをご存じだったんですか？」

「ああ、ジャンのやつが有望な新人とサポートーが来るって言つて
たからね。しかし、転属手続きをするなら彼の用事が終わらないと
ダメだねえ。しばらく、街の見物でもして時間を潰してきたりどう
だい？」

「そうですね……。ただ待つていいだけも何ですし。」

「あたしも賛成！あ、そうだ……。ね、クロ ゼさん。良かつたら
もう少し付き合ってくれないかなあ？せつかく知り合いになれたの
にここでお別れも勿体ないし……」

カルナの提案にヨシュアとエステルは頷き、クロ ゼに尋ねた。

「あ……喜んで。お邪魔じやなかつたらゼひご一緒に緒させてください。」

「やつた」

「決まりだね。それじゃあ僕たち、ルーアン見物に行つてきます。
クロ ゼの答へにエステルは喜び、ヨシュアはカルナに出直す事を
言つた。

「ああ、楽しんでおいで。」

そしてエステル達はクロ ゼの案内でルーアン市内の見物を始めた。

その後クロ ゼの案内でさまざまな所を見て廻つたエステル達はギ
ルドに戻るために南街区と北街区を結ぶラングランド大橋に向か
うとした時、ガラの悪そうな男性3人に呼び止められた。

「待ちな、嬢ちゃんたち。」

「え、あたしたち?」

見覚えのない男性に呼び止められ、エステルは首を傾げた。

「おつと、こりゃあ確かにアタリみたいだな。」

男性の中で縁の髪を持つ不良 ディンがエステルやプリネ達の姿を見て喜んだ。

「ふん、珍しく女の声が聞こえてきたかと思えば……」

3人の中でリーダー格に見える不良 ロッコが鼻をならしてエス

テル達の顔を一人一人ジックリ見た。

「あの、なにか御用でしようか?」

「へへへ、さつきからここらをバラついてるからさ。ヒマだつたら俺たちと遊ばないかな~って。」

クロ ゼに尋ねられ、答えたディンは下品な口調で答えた。

「え、あの……」

「やれやれ……余達がお前達」ときと釣り合つと思つてゐるのか?」「寝言は寝て言え……だね』

「お、お一人とも!そんな角が立つような言い方をしなくても……」ディンの答えにクロ ゼは困惑し、リフィアとエヴリースは辛辣な事を言い、プリネは姉達の言動に慌てた。

「なによ、今時ナンパ? 悪いけど、あたしたちルー・アン見物の中なの。他をあたつてくれない?」

「お、その強気な態度。オレ、ちょっとタイプかも~」

呆れた様子で答えるエステルに最後の不良の一人 レイスも下品な顔と口調で答えた。

「ふえつ!~」

レイスの言葉にエステルは驚いて声を上げた。

「見物がしたいんだつたら俺たちが案内してやろうじゃねえか。そんな生つちろい小僧なんか放つておいて俺たちと楽しもうぜ。」

「……………」

ロッコ「がヨシュアを見て辛辣な事を言つた。辛辣な事を言われたヨシュアは何も言い返さず黙つていた。

「ちょ、ちょっと！何が生つちろい小僧よ！？あんたちみたいなド素人、束になつてもヨシュアには……」

「いいよ、エステル。別に気にしてないから。君が怒つても仕方ないだろ？」

ロッコの言葉に頭がきたエステルは怒つて言い返そとしだがヨシュアに制された。

「で、でも……」

ヨシュアに制されたエステルは納得がいかない表情をしていた。

「なに、このボク……。余裕かましてくれてんじやん。」

「むかつぐガキだぜ……。ガキの分際で上玉5人とイチャつきやがつて。」

「へへ、世間の厳しさつてヤツを教えてやる必要がありそうだねえ。」

「ロッコ達はゆづくりとヨシュアに歩み寄つた。

「ちょ、ちょっと……！」

「や、止めてください……！」

「「「……………」」

歩み寄つて来るロッコ達にエステルとクロゼは叫び、プリネは無言でレイピアをいつでも抜けるように剣の柄に手を置き、リフィアとエヴリーヌはロッコ達を睨んで片手に魔力をを集め始めた。

「……僕の態度が気に入らなかつたら謝りますけど。彼女たちに手を出したら……手加減、しませんよ。」

3人の大人の男性を相手にヨシュアは慌てず冷静に答えた後、威圧感を出して睨んだ。

「なつ……」

「な、なんだコイツ……」

「ハ、ハツタリだ、ハツタリ！」

ヨシュアの威圧に圧された3人は思わず恐怖感で後退した。

「へッ、女の前でカツコ付けたくなる気持ちも判るけどな。あんまり無理をしそうると大ケガすることになるぜ……」

恐怖から持ち直したティンがそう言つた時

「お前たち、何をしているんだ！」

身なりのいい青年が大きな声で叫んで、エステル達のところに近付いた。

「ゲツ……」

「うるせえヤツが来やがったな……」

レイスとロツコは青年の顔を見て面倒くさそうな表情をした。

「お前たちは懲りもせず、また騒動を起こしたりして……。いい年して恥ずかしいとは思わないのか！」

「う、うるせえ！てめえの知つたことかよ！」

「市長の腰巾着が……」

青年の言葉にロツコ達は恥々しそうな表情で青年を睨んだ。

「なんだと……」

「……おや、呼んだかね？」

ロツコ達の挑発する言葉に怒りで答えようとした青年の言葉を中断するように、身なりのいい男性がやって来た。

「ダ、ダルモア！？」

「ちつ……」

男性の顔を見たロツコ達は舌打ちをして、さらに面倒くさうな表情をした。

「（だ、誰なのかな……。すごく威厳ありそうな人だけど。）」

「（ルー・アン市長のダルモア氏です。お若い方は、秘書をされているギルバードさんといったかしら……）」

一方男性の事がわらかないエステルにクロゼは小声で囁いた。（ほう。あれがルー・アンの市長か……）

(……リフィアお姉様は「存じでなかつたのですか？）

（いや、会つた事もない。余が会つた事のある市長はメイベル殿を除いてロレントのクラウス市長ぐらいだ。）

メンフィルが異世界に進出してさまでまな公式の場でリウイやペテーネ、ファーミシルスと共に顔を出しているリフィアにプリネはルーアン市長　ダルモアの事を小声で尋ねたが、リフィアは首を横に振つて小声で返した。

「このルーアンは自由と伝統の街だ。君たちの服装や言動についてとやかく文句を言つつもりはない。しかし他人に、しかも旅行者に迷惑をかけるというなら話は別だ。」

「けつ、うるせえや。この貴族崩れの金満市長が。てめえに説教される覚えはねえ。」

諭すように答えるダルモアにティンはダルモアを睨んで荒い口調で答えた。

「ぶ、無礼な口を利くんじゃない！いい加減にしないと、また遊撃士協会に通報するぞ！？」

「フン……何かといふと遊撃士かよ。ちつたあ自分の力で何とかするつもりはないわけ？」

「たとえ通報されたとしても奴らが来るまで時間はある……。とりあえず、ひと暴れしてからトンズラしたつていいんだぜえ。」

青年　ギルバートの言葉にレイスは鼻をならし、ロッコは腰に差しているナイフを抜いて答えた。

「悪いんだけど……。通報するまでもなくすでにここに居たりして。」

「　「　「な、なに？」「」

しかしエステルの言葉に驚いた3人はエステルの方に向いた。

「はあ～、この期に及んでこの紋章に気付かないなんてね。あんた達、目が悪いんじゃない？」

驚いているロッコ達にエステルは溜息をつきながら左胸に飾った準

遊撃士の紋章を指差した。

「そ、それは……！？」

「遊撃士のバッジ！？」

「じゃあ、こっちの小僧も……」

3人は遊撃士の紋章に驚いた後、ヨシュアを見た。

「そういう事になりますね。」

3人に見られたヨシュアも同じように左胸に飾つてある遊撃士の紋章を指差して答えた。

（ど、どうすんだ？まさかこんなガキどもが遊撃士なんて……）

（なあに、構うもんか！遊撃士とはいえただの女子供じゃねえか！）

（ば、馬鹿野郎！見かけで判断するんじゃねえ！ついこの間、3人がかりで女遊撃士と戦つてのされちましたのを忘れたのか！？そ、それに何と言つても……”あの人”と同じなんだぞ！？）

一方、エステル達が遊撃士とわかつたロツコ達は焦つて小声でどうするか会話をして、ある決断をしてエステル達の方に向いて答えた。

「きょ、今日の所は見逃してやらあ！」

「今度会つたらタダじゃおかねえ！」

「ケツ、あばよ！」

捨て台詞を言ったロツコ達は逃げるようエステル達から離れて去つて行つた。

「なんて言つが……。めちゃめちゃ陳腐な捨て台詞ね。」

「まあ、ああいうのがお約束じゃないのかな？」

去つて行つたロツコを見てエステルとヨシュアは苦笑した。

「済まなかつたね、君たち。街の者が迷惑をかけてしまつた。申し遅れたが、私はルー・アン市の市長を務めているダルモアといつ。こちらは、私の秘書を務めてくれているギルバード君だ。」

「よろしく。君たちは遊撃士だそうだね？」

「あ、ロレント地方から来た遊撃士のエステルつていいます。」

「同じくヨシュアといいます。」

「エステルさん達の修行の旅に同行させてもらっているプリネと申します。」

「……エヴリーヌ。」

「プリネの姉のリフィアだ。」

話しかけて来たダルモアとギルバートにエステル達は自己紹介をした。

「そういえば、受付のジャン君が有望な新人やサポートーが来るようなことを言つていたが……。ひょっとして君たちのことかね？」

「えへへ……。有望かどうかは判らないけど。」

「しばらく、ルーアン地方で働かせて貰おうと思つています。」

「ほう。ジャンとやらもわかつてているではないか。」

ダルモアの言葉にエステルは照れ、ヨシュアは礼儀よく答え、リフィアは口元を笑みに変えた。

「おお、それは助かるよ。今、色々と大変な時期でね。君たちの力を借りることがあるかもしないから、その時はよろしく頼むよ。」「大変な時期……ですか？」

ダルモアの言葉が気になつたヨシュアは聞き返した。

「まあ、詳しい話はジャン君から聞いてくれたまえ。とにかくで、そちらのお嬢さんは王立学園の生徒のようだが……」

「はい、王立学園2年生のクローゼ・リンツと申します。お初にお目にかかります。」

「そうか、「リングズ学園長とは懇意にさせてもらつてゐるよ。そういうふうに、ギルバード君も王立学園の卒業生だったね?」

「ええ、そうです。クローゼ君だったかい？君の噂は色々と聞いているよ。生徒会長のジル君と一緒に主席の座を争つてゐるやうだね。優秀な後輩がいて僕もOBとして鼻が高いよ。」

「そんな……恐縮です。」

ギルバートの言葉にクローゼは自分の事を謙遜して答えた。

「ははは、今度の学園祭は私も非常に楽しみにしている。どうか、頑張ってくれたまえ。」

「はい、精一杯頑張ります。」

「うむ、それじゃあ私たちにはこれで失礼するよ。先ほどの連中が迷惑をかけたら私の所まで連絡してくれたまえ。ルーアン市長としてしかるべき対応をさせて頂こう。」

そう言って、ダルモアとギルバードは去つていった。

「うーん、何て言うかやたらと威厳がある人よね。」

「確かに、立ち居振る舞いといい市長としての貴禄は充分だね。」

去つて行つたダルモアの後ろ姿を見てエステルとヨシュアは感心した。

「ダルモア家といえばかつての大貴族の家柄ですから。貴族制が廃止されたとはいえ、いまだに上流貴族の代表者と言われている方だそうです。」

「ほえ？……なんか住む世界が違うわね。まあ、それを言つたらリフィア達もそなうなんだけどね。リフィアはもちろんだけど、ブリネも優しそうに見えていざという時にはなんていうか……近寄りがたい雰囲気を持っていたもんね。」

「そうだね。特にモルガン将軍に交渉した時なんて立ち振舞いや言葉遣いも含めて立派な貴族に見えたよ。」

クロゼの説明にエステルは呆けた後、リフィア達を見て咳き、ヨシュアも頷いた。

「あの……先ほどモルガン将軍とおっしゃりましたが、エステルさん達は將軍とお知り合いなのでですか？」

エステル達の会話で気になつたクロゼは恐る恐る尋ねた。

「うん。ほら少し前にあつたハイジャック事件をあたし達とあたしの先輩の遊撃士の人といつしょに担当していたんだ。」

「その時、モルガン将軍と一緒に着あつてね。プリネやリフィアが納めてくれたんだ。」

「は、はあ、そうなんですか……（将軍、一体何をもめたんでしょうか？将軍もリフィア殿下の事は」存じのはずなのに……）」
エスティルとヨシュアから軽く説明を聞いたクロ ゼは人知れず冷や汗をかいた。

「あはは……その事は持ち出さないでいただけますか？我ながらあの時はちょっと大き目に言いましたから、今でも恥ずかしいと思つてゐるんですよ。」

「何を謙遜している、プリネ。あの時のお前は我がルーハンス家の者として立派な立ち振舞いだつたぞ。」

「うん。いつもエヴリーヌ達の後を付いて来た可愛いプリネも成長したね。やっぱりエヴリーヌやリフィア、お兄ちゃん達の教育の賜物つてやつかな？」

「お、お二人共……本当に恥ずかしいのでこれ以上はやめて下さい……」

姉達に褒められたプリネは照れた母のように顔を真っ赤にして照れた。

「あはは、いつも冷静であたし達より大人なプリネもそんな顔をするんだね しかし、それにしてもガラの悪い連中もいたもんね。」

「そうですね。ちょっと驚いた。ごめんなさい、不用意な場所に案内してしまったみたいです。」

「君が謝ることはないよ。ただ、わざわざ彼らを挑発に行く必要はないさそうだね。倉庫区画の一一番奥を溜まり場にしていいみたいだからなるべく近づかないようにしよう。」

「うーん……。納得いかないけど仕方ないか。」

ヨシュアの言葉にエスティルは腑が落ちてない様子で頷いた後、エスティル達は一端、ギルドに戻つた……

第60話（後書き）

現在学園祭編もほぼラストまで書けました この調子なら全話投稿した頃にはひょっとしたらルーアン編が終わるかもしれません……感想お待ちしております。

（遊撃士協会・ルーアン支部）

「いらっしゃい。遊撃士協会へようこそーおや、クローゼ君じゃな
いか。」

エステル達がギルドに戻ると先ほど席を外していたルーアンの受付
ジャンがクローゼの姿を見て、声をかけた。

「こんにちは、ジャンさん。」

「また、学園長の頼みで魔獣退治の依頼に来たのかい？ああ、判つ
た！学園祭時の警備の依頼かな？」

「いえ、それはいずれ伺わせて頂くと思つんですけど。今日は、エ
ステルさんたちに付き合させて貰つていてる最中なんです。」

「あれ、そういえば……。学園の生徒じやなさそうだけど。……待
てよ、その紋章は……」

クローゼの言葉にジャンはエステル達の服装とエステルとヨシュア
の左胸についている準遊撃士の紋章に気が付いた。そしてエステル
達が自分達の顔がよく見えるように、受付に近付いた。

「初めまして。準遊撃士のエステルです。」

「同じく準遊撃士のヨシュアです。」

「お一人の旅に同行させてもらつてているプリネです。こちらは私の
姉代わりのエヴリー・ヌお姉様です。」

「ん、よろしく。」

「余がリフィアだ！ ジャンとやら、よろしく頼むぞ！」

「ああ、君達がエステル君とヨシュア君か！ それにあなた達がメン
フィルのひ……おつとと……失礼。君達がサポーターを申し出でく
れたメンフィルの方達だね。いや、ホント良く来てくれた！ ボー
ス支部から連絡があつて今か今かと待ちかねていたんだ。」

エステル達が来た事に嬉しいジャンは事情を知らないクローゼがい

ることに気付かず、思わずリフィア達の事を言ひそうになつたが、すぐに気付き言い直して答えた。

「そつか、ルグラン爺さん、ちゃんと連絡してくれたんだ。」

「感謝しなくちゃね。」

エステルとヨシュアはすでに連絡をしていたルグランに感謝した。
「僕の名前はジャン。ルーアン支部の受付をしている。君達の監督を含め、これから色々とサポートさせてもらうよ。5人とも、よろしくな。」

「うん！ よろしくね、ジャンさん。」

「よろしくお願ひします。」

「はい。」

「ん。」

「うむ！」

ジャンの言葉に5人は頷いた。

「はは、君達には色々と期待しているよ。何といっても、あの空賊事件を見事解決した立役者だからな。」

「空賊事件つて……。あのボース地方で起きた？ 私、『リベル通信』の最新号で読んだばかりです。……そう言えば先ほどエステルさん達がハイジャック事件を担当したとおっしゃっていましたが、あれ、エステルさんたちが解決なさつたんですか？」

ジャンの言葉を聞いたクロゼは驚いた表情でエステル達を見た。

「あはは、まさか……。手伝いをしただけだつてば。」

「実際に空賊を逮捕したのは王国軍の部隊だしね。」

「ええ、私達がした事は人質の安全を確保したぐらいです。」

クロゼに驚かれ、エステルは照れ、ヨシュアとプリネは実際自分達がやつた事を話した。

「謙遜することはない。ルグラン爺さんも誉めてたぞ。さつそく転属手続きをするから書類にサインしてくれるかい？ さあさあ、今す

ぐにでも。」

ジャンはいつの間にか書類を出して、エステル達を急かした。

「う、うん……？」

「それでは早速。」

「うんうん、これで君たちもルー・アン支部の所属というわけだ。いやあ、この忙しい時期によくルー・アンに来てくれたよ。ふふ……もう逃がさないからね。」

2人のサインを確認したジャンは含みのある言葉で笑った。

「な、なんかイヤな予感。」

「先ほどから聞いてるとかなり人手不足みたいですね。何か事件でもあつたんですか？」

ジャンの言葉を聞いたエステルは弱冠不安になり、ヨシュアは気になつて尋ねた。

「事件という程じゃないけどね。実は今、王家の偉い人がこのルーアン市に来ているのさ。」

「王家の偉い人……。も、もしかして女王様！？」

ジャンの言葉にエステルは受付に身を乗り出して期待した目で尋ねた。

「はは、まさか。王族の1人であるのは間違いないそうだけどね。何でも、ルー・アン市の視察にいらっしゃったんだとさ。」

（……お姉様、リベルの王族でアリシア女王陛下以外の方達は確か……）

（うむ。アリシア女王陛下の孫であるクローディア姫ともう一人は確か……甥のデュナン公爵という者だったな。）

エステルの疑問にジャンは苦笑しながら答えた。また、プリネはリフィアにリベル王家人間に關して小声で確認した。

「へー、そんな人がいるんだ。でも、それがどうして人手不足に繋がっちゃうの？」

「何と言つても王家の一員だ。万が一の事があるといけないとダル

モア市長がえらく心配してね。ルーアン市の警備を強化するよう依頼に来たんだよ。」

「なるほど、先ほど2階で話し合っていた一件ですね。それにしても市街の警備ですか。」

「まあ、確かに港の方には跳ねつ返りの連中がいるからね。そちらの方に目を光らせて欲しいという事だろう。」

ジャンはダルモアに頼まれた事を思い出し、溜息をついた。

「跳ねつ返りつて……。さつき絡んできた連中のことね。うーん、確かにあいつら何かしでかしそうな感じかも。」

「なんだ、知つているのかい？」

事情を知つている風に見えるエステルに不思議に思つたジャンは尋ねた。

「実は……」

そしてエステル達はジャンに先ほどの出来事を話した。

「そうか……。倉庫区画の奥に行つたのか。あそこは『レイヴン』と名乗つてゐる不良グループのたまり場なんだ。君たちに絡んできたのは、グループのリーダー格を務める青年たちだろう。」

「『レイヴン（渡りカラス）』ねえ……。なーにをカツコつけてんだか。」

ロッコ達のグループ名を知つたエステルはロッコ達がグループ名に負けていると思い、呆れた表情をした。

「少し前までは大人しかつたんだが最近、タガが緩んでるみたいでね。市長の心配ももつともなんだが、こちとら、地方全体をカバーしなくちゃならないんだ。……とまあ、そんなワケで本当に人手不足で困つていてね。君たちが来てくれて、感謝感激、雨あられなんだよ。……特にメンフィルのお嬢さん達には期待しているよ。なんたつて3人は僕達人間より身体能力が遙かに高く、魔術も使える“闇夜の眷属”なんだから。」

「フフ、まだまだ修行中の身ですが精一杯がんばらせていただきま

す。
」

「余がいるのだ！大船に乗つた気分でいるといい！」

「ま、疲れない程度にがんばつてあげる。」

「あたしとヨシュアも3人に負けないようがんばるわよ！それじゃあ、明日からさつそく手伝わせてもらつわ。」

「何かあつたら僕たちに遠慮なく言いつけてください。」

「ああ、よろしく頼むよ！』

そしてエスティル達は英氣を養つて明日に備えるため、ギルドを出てホテルに向かい、部屋を取つた後クロゼを街の入口まで送り、ホテルに戻つた……

第61話（後書き）

感想お待ちしております。

ホテルに戻ったエステル達は運良く取れた最上階の部屋のバルコニーで景色を見て、堪能している所部屋の中から聞き覚えのない声が聞こえて来た。

「ルーアン市内ホテル・ブランシエ・最上階へ

「ほほう……。なかなか良い部屋ではないか。」

「なに、今の？」

「うん、部屋の中から聞こえてきたみたいだけ……」

（ん……？どこかで聞き覚えのある声だな……？）

部屋の中から偉そうに話す男性の声にエステルとミシェアは首を傾げ、リフィアは聞き覚えのある声に訝しがだ。

「それなりの広さだし調度もいい。うむ、気に入った。滞在中はこのを使うことにする。」

「閣下、お待ちくださいませ。この部屋には既に利用客がいるとのこと……。予定通り、市長殿の屋敷に滞在なさつてはいかがですか？」

豪華な服を着ている男性に執事服を着た老人が自分の主である男性を諫めていた。

「黙れ、フィリップ！あそこは海が見えぬではないか。その点、この海沿いのホテルは景観もいいし潮風も爽やかだ。バルコニーにも出られるし……」

男性が執事 フィリップを怒鳴った後、バルコニーに向かおうとした時、バルコニーにいるエステル達の存在に気がついた。

「な、なんだお前たちは！？賊か！？私の命を狙う賊なのか！？」
「何をいきなりトチ狂ったこと言つてるのよ。オジサンたちこそ何者？勝手に部屋に入ってきたりして。」

(リベルの王族がルーアンに滞在していると聞いたが…………よ
りにもよつてこ奴か。道理で聞き覚えはあるが聞きたくない声だと
思った。)

エステル達の姿を見て慌てている男性にエステルは注意し、男性の
身なりと顔を見て男性の正体がわかつたリフィアは溜息をついた。
「オ、オジサン呼ばわりするでない！ フン、まあよい…………お前た
ちがこの部屋の利用客か？」こは私が、ルーアン滞在中のプライベ
ートルームとして使用する。とつとと出て行くが良い。」

「はあ？ 言つてることがゼンゼン判らないんですけど。どうして、
あたしたちが部屋を出て行かなくちゃならないわけ？」

「事情をお伺いしたいですね。」

「…………」「」

自分達に理不尽な命令をする男性にエステルとヨシュアは顔をしか
めて尋ねた。また、男性の言動にプリネは表情を硬くし、エヴリー
ヌとリフィアは男性を睨んだ。

「フツ、これだから無知蒙昧な庶民は困るのだ……。この私が誰だ
か判らぬというのか？」

「うん、全然。なんか変なアタマをしたオジサンにしか見えないん
だけど。」

自信を持つて答える男性にエステルはあっさりと否定した。

「へ、変なアタマだと……！」

「エステル……。いくら何でもそれは失礼だよ。個性的とか言つて
あげなくちゃ。」

「なるほど、物は言いよつね」

「キヤハツ 別にこんな人間にエヴリーヌ達が氣を使う必要はない
よ」

「つむー・Hガリーヌの言ひ通りだな！」

「み、みなさん…………お氣持ちはわかるのですが、そんな挑発をす
るような言葉はできればやめたほうが……」

普段礼儀のいいヨシュアまで遠回しに男性を貶したのでプリネが呆けている男性を横目で一瞬見た後、一人でエステル達を諫めようとした。

「ぐぬぬぬぬ……。フツ、まあ良い。耳をかっぽじって聞くが良い。……私の名は、デュナン・フォン・アウスレーゼ！リベル國主、アリシア？世[陸]下の甥にして公爵位を授けられし者である！」

怒りを抑えていたが、とうとう我慢できなく男性 デュナンは自分の身分と名前を威厳がある声で叫んだ。

「……………」

「……………誰？」

(……リフィアお姉様、今の方がおっしゃたことは本当なのですか？)

(ああ、残念ながらな……一度だけ会つた事はあるがあの横柄な態度や自分勝手な性格は全く変わっていないな……)

デュナンの名乗りを聞いたエステルとヨシュアは口を開けたまま何も言わず、エヴリーヌは首を傾げ、プリネはリフィアに小声で確認した。

「フフフ……。驚きのあまり声も出ないようだな。だが、これで判つただろう。部屋を譲れといつそのワケが？」

「ふつ……」

「はは……」

「キヤハ……」

「あはははははーオジサン、それ面白いーめちゃめちゃ笑えるかもーよりにもよって女王様の甥ですつてー！？」

「あはは、エステル。そんなに笑つたら悪いよ。この人も、場を和ませるために[冗談で]言つたのかもしれないし。」

「キヤハハハ……！」

デュナンは威厳ある声で言つたがエステルやヨシュア、エヴリーヌ

は笑いを抑えず大声で笑つた。

「イ、イ、イやつら……」

デュナンは笑つてゐるエステル達を見て、拳を握つて震えた。

「……誠に失礼ながら閣下の仰ることは眞実です。」

そこに今までデュナンの後ろに控えていたフィリップがエステル達の前に出て来て答えた。

「え……」

エステル達は笑うのをやめてフィリップを見た。

「これは申し遅れました。わたくし、公爵閣下のお世話をさせて頂いているフィリップと申す者……。閣下がお生まれになつた時からお世話をさせて頂いております。」

「は、はあ……」

フィリップの言葉にエステルは状況をよく呑みこめず聞き流していった。

「そのわたくしの名譽に賭けてしかど、保証させて頂きます。こちらにおわす方はデュナン公爵……。正真正銘、陛下の甥御にあります。」

（し、信じられないけど……。そのオジサンはともかく、あの執事さんはホンモノだわ）

（そういえばジャンさんが言つてたね……。ルーアンを視察に來ている王族の人人がいるつて……）

「ふはは、参つたか！次期国王に定められたこの私に部屋を譲る栄誉をくれてやるのだ。このような機会、滅多にあるものではないぞ！」

小声で会話をし始めたエステルとヨシュアを見て、デュナンは高笑いをしてエステル達に再び命令した。

「ふ、ふざけないでよね！いくら王族だからといってオジサンみたいな横柄な人なんかに……！それにこっちにだつて……」

「あいや、お嬢様がた…どうかお待ちくださいませ…」

「デュナンに言い返そうとしたエステルに、フイリップは駆けつけて大声で制した。

「え？」

「しばしお耳を拝借……」

そしてフイリップは「デュナンに聞こえないように壁際までエステルたちを誘導した。

「失礼ながら、お嬢様がたにお願いしたき儀がござります。これで部屋をお譲り頂けませぬか？」

フイリップは懐から札束になつたミラを取り出してエステル達に差し出した。

「し、執事さん……」

「何もそこまで……」

「閣下は一度言い出したらテコでも動かない御方……。それもこれも、閣下をお育てした私めの不徳の致すところ……。どうか、どうか……」

フイリップは土下座をする勢いで何度もエステル達に頭を下げた。

「……その執事。余の顔に見覚えはないか。」

フイリップが何度も頭を下げている所、今まで黙っていたリフィアが声をかけた。

「ハ……？」

リフィアの言葉にフイリップは頭を下げるのをやめて、リフィアの顔をよく見た後驚愕した。

「なつ……！？そ、そんな！？なぜ貴女様がここに……！？」

「今はそんなことはどうでもよい。あの放蕩者は一度会っているにも関わらず余の事をわからない上、今の発言……リベルは余を馬鹿にしているのか……？」

「そ、それは……」

威厳を纏つて語るリフィアを見て、フイリップは顔を青褪めさせた。

そしてフイリップはその場で土下座をしてリフィアに嘆願した。

「申し訳ありません……！これも閣下をお育てした私めの不徳の致すところ……ですので決して我が国は救世主であり、また同盟国の皇族であるリフィア殿下を貶してなどいません……ですから殿下の怒りは閣下に代わりまして私が全て受けます！どうか、どうか……！」

フィリップは土下座をした状態で床にぶつけるかの勢いで何度も頭を下げた。

「ふう、仕方ないか……。あんまり執事さんを困らせるわけにもいかないし。」

「リフィアも許してあげてくれないかな？全てフィリップさんが悪い訳ではないと思うよ？」

「…………お前達がそう言うのなら余も怒りをこじで収めるか……さすがにこのような素晴らしい部屋を血で染める訳にもいかぬしここで力や権力を振るえば余はあの放蕩者と同等になるしな……」

エスティルは溜息をついて部屋を譲る事を言い、ヨシュアに諫められたリフィアも溜息をついて答えた。

「エヴリーヌお姉様も我慢できないでしょうが、お願ひします。」「ん。お兄ちゃんからもいくらムカつく相手でも無暗に人を殺してはダメって言われているしね。」

「フィリップさんの誠意は十分僕達やリフィアに伝わりましたから、頭を上げて立つて下さい。部屋はお譲りします。ただ、そのミラは受け取れません。」

「し、しかしそれでは……」

「いいつていいつて リフィア達にとつては大した部屋じゃないかもしけないけど、あたしやヨシュアにはちょっと豪華すぎる部屋だし。あのオジサンのお守り大変とは思うけど頑張ってね」

「お、お嬢様がた……。どうも有り難うござります。」

フィリップはエスティル達の懐の広さに感動してお礼を言った。

その後最上階の部屋をデュナンに譲ったエスティル達はホテルの受付

に空き部屋を聞いたが部屋はなく、困っていた所をナイアルが通りかかりナイアルの好意でナイアルが取つている部屋に一晩泊めてもらつた。リフィア達がメンフィルの貴族と知ると、ナイアルは興味ありげな表情で追及したがヨシュアが誤魔化し、またリフィア達の取材の許可は大使館で取る必要があると言うと、引き下がつた。そしてその翌日ギルドに行くとマーシア孤児院が火事になつた知らせが届き、エステル達は孤児院に住むテレサや子供達の安否、火事の現場を調べるために急いでマーシア孤児院に向かつた……

第62話（後書き）

いや……自分で書いといて言つのもなんですが、リフィア達の存在は軌跡世界の身分ある人達にとってほとんどない存在ですね。
……感想お待ちしております。

第63話（前書き）

学園祭編を書き終わったので、記念にもう一話投稿です

エステル達がマーシア孤児院に着くと、孤児院は見るにも無残に崩れて焼け落ちて、周囲のハーブ畑は無茶苦茶に荒らされていた。

「マーシア孤児院」

「これは……」

「ひ、ひどい……」

「完全に焼け落ちてるね……」

「あれ、あんたたち……？」

「ひょっとして君たち遊撃士協会から来たのかい？」

そこに焼け跡の処理をしていたマノリア村の村民らしき男性達がエスティル達に気付いて話しかけた。

「う、うん……」

「皆さんはマノリアの方ですね？」

「ああ……。瓦礫の片付けをしているんだ。昨日の夜中に火事が起きて慌てて消火に来たんだけど……。まあ、ご覧の通り、ほぼ建物は焼け落ちちまつた。」

男性の一人が無念そうな表情で答えた。

「そ、それで……。院長先生と子供たちは！？」

「それが……何人かの子供たちが火傷を負つて煙をすつてしまつたようだ、無事だったのは院長先生と僅かな子供達で何人か重体で宿の一室で寝かしているんだ……」

「そ、そんな……！」

「……どのぐらい酷いのでしょうか……？」

男性の説明にエスティルは悲壮な表情をし、ヨシュアは辛そうな表情で尋ねた。

「正直言つてわからない……マノリアは小さい村だからね……それに加えて冒険者用に売っている火傷した時用の薬がちょうど切れていてね……ありつたけの傷薬で火傷は抑えたがあくまで傷薬だからね……村にはどの教会もないから、専門的な薬はないし処置の仕方もわからないんだ。……ただ、希望はあると思うよ。」

「一体それはなんなのでしょう?」

男性の言葉が気になり、ヨシュアは聞き返した。

「先ほど『白の木蓮亭』のマスターが傷や病氣等を治してくれるところ 愈しの専門であるルーアンのイーリュン教会に連絡したら、運良く癒しの魔術ができる信徒の中でも高度な術を使う方がいらっしゃって、急いでこっちに向かつて来てくれているらしいんだ。」

「イーリュンの……それはよかつた。」

(……ふむ。こちらの世界のイーリュン教の信徒で高度な治癒魔術をできる者等ティア殿しか思い当たらないのだがな……?まさかルーアンに来ているのか?)

男性の答えにヨシュアは安堵の溜息をはき、リフィアは首を傾げた。「俺たちはもう少し後片付けをするつもりだけど。あんたらはどうするつもりだい?」

「あ、さっそく宿屋に行つてあの子たちのお見舞いと傷の手当にて……」

「悪いけど、それは後回し。」

「ふえつ!?」

ヨシュアの言葉にエステルは驚いて声を出した。

「この現場、ざっと見ただけでも妙なことが多すぎる。そして、そういう手がかりは時間が経つと失われてしまうんだ。……君の気持ちもわかるけど今は現場検証の方を優先しよう。子供たちのことが心配なのはわかるけど、専門の人がこっちに向かつているんだ。素人な僕達はあまり手を出さない方がいい。下手に手を出して状態を悪くする訳にはいかないしね。」

「……………わかった……。あたしたち、遊撃士だもんね。何があつたのか突き止めないと。リファイア達もいいかな?」

「ああ……」

「はい、わかりました。」

「…………」

そしてエステル達は孤児院の敷地内を調べ廻った。孤児院を調べ廻つてわかつた事は何者かによつて放火されたという結論であつた。

「…………魔力の痕跡があるのは気になりますが、この痕跡で感じられる魔力では原因の一つではないでしょうね。炎の魔術を使つたなら炎属性の魔力が漂つているはずです。…………ハーブ畠や食料が入つた樽が荒らされていた事といい、恐らく全て人の手によつて起こされた事でしょうね……」

「ああ、それにこの辺りは特に油の匂いが強い。恐らく可燃性の高い油をこの辺りに撒いて火をつけたんだろうな。」

「…………だね。」

「そ、そんな…………」

プリネ達の結論を聞いたエステルは信じられない表情をした。

「プリネの言う通り、これは完全に何者かの仕業だと思うよ。」

「それ…………本当にですか…………?」

ヨシュアもリフィア達の結論に頷いた時、いつの間にかクローゼがいた。

「あ、クローゼさん!?

「來ていたのか…………」

「どうして…………誰が…………こんなことを…………。かけがえのない思い出が一杯につまつたこの場所を…………。どうして…………こんな…………酷いことができるんですか…………!?

「クローゼさん…………」

「…………」「…………」「…………」「…………」「…………」

取り乱して叫んでいるクローゼにエステル達はかける言葉はなく、

辛そうな表情で見た。

「…………。『めんなさい』。…………取り乱してしまって……。私わたし」

「取り乱すのも無理ないよ。知り合つたばかりのあたしだつてちょっとキツいから……。……信じられないよね。こんな事をする人がいるなんて。」

エスティルはぐくせの両手を握ってぐくせに同意した

「子供たちが怪我を負つたのは残念だつたけど…… イーリュンの人
がこつちに向かつてゐるからきつと大丈夫だよ。だから安心してい
いからね？」

「…………。ありがとう。少しだけ落ち着きました。朝の授業を受けていたらいきなり学園長がやつて来て…………。孤児院で火事が起きたらしいって教えてくれて…………。ここに来るまで……生きた心地がしませんでした。」

孤児院に来た経緯を話した。

そのか……」

「院長先生と子供たちはマノリアの宿屋にいるそうだよ。調査も終わったし、僕たちも一緒にお見舞いに付き合わせてくれるかな？」

「それじゃあ、さつそくマノリアに行くとしましょう。」
「あ、はい……。そうして頂けると嬉しいです。」

そしてエステル達はマノリア村の宿屋であり、酒場でもある『白の木蓮亭』に向かつた……

第63話（後書き）

あるキャラを登場させるために、悪いとは思いましたが孤児院の子供達には原作と違つて火事の影響を受けて貰いました。……というか、火事がおきて全員無傷とか、そっちの方がありえないでしょ？ 基本、英雄伝説は優しい世界だからありえた事です。……感想お待ちしております。

第64話（前書き）

碧の軌跡の「モムービー」がついに解禁されましたね！…内容を見ましたけど、軌跡シリーズの大作、SCを越えるのではないか！？と思っちゃいました。あ…早くアリオスやリーシャ、新コンビクラフトを使ってみたいですね…

～白の木蓮亭・宿屋の一室～

エスティル達がテレサ達がのいる部屋に入ると、そこにはベッドに寝かされ火傷の痛みと煙をすつた影響で苦しんでいる子供たちと無事だったテレサやクラム、マリイがイーリュンのシスター服を着た女性に嘆願していた。

「お願いします…どうかあの子達を助けてやつて下さい…」

「頼むよ! イーリュンのお姉ちゃんならどんな傷でもなおせるんでしょ?」

「お願いします!」

「……落ちついて下さい。この子達は母なるイーリュンに代わりまして私が責任を持つて癒します。ですから今はこの子達の無事を祈つてあげて下さい…」

「はい…」

女性に諭され、テレサはその場で手を組んで祈り、それを見てクラムやマリイも祈った。

「……まずは体内にある吸つてしまつた毒をなくさなくてはいけませんね。……イーリュンよ、かの者等に浄化のお力を……大いなる浄化の風!」

女性が強く祈ると苦しんでいる子供達を淡い光がつつみ、光がなくなると子供達は規則正しい寝息を始めた。

「……イーリュンよ、お力を……癒しの風!」

さうに女性がもう一度祈ると同じように寝息を立ててている子供達を淡い光がつつみ、光がなくなると子供達の火傷は綺麗に消えていた。

「ポーリイ、ダニエル、ミント、ツーヤ! ああ、よかつた……!」

「みんな!」

子供達が苦しまなくなり、完全に火傷が消えて安心したテレサは寝

ている子供達にクラムやマリイと共に駆け寄った。

「す、」「……！」一瞬でみんなの火傷が治っちゃった……！」

「あれがイーリュン教に伝わる癒しの魔術か……まるで奇跡だな……」

「よかつた……本当によかつた……」

一連の光景を見たエステルやヨシュアは初めて見るイーリュン教の癒しの魔術に驚き、クロゼは涙を流して安心した。

「えつ……」

「やはりか……」

「あれ……？」

一方女性の横顔や後ろ姿を見てプリネは驚き。リフィアは納得し、エヴリースは首を傾げた。そして女性はエステル達に気付いて振り向いた。

「あら……？」

「わっ。凄い美人……」

エステルは女性の容姿を正面で見て思わず声を出した。女性の容姿は一般の女性と比べるとかなり整つており、腰まで届くほどの澄んだ水のような美しい水色の長い髪をなびかせ、瞳は髪の色とは逆に赤であったが女性の容姿や髪、シスターの服装と合わせて逆に似合っていた。また、女性の耳はブリネやリフィアのように尖り、清楚ながらどこか高貴な雰囲気を纏っていた。

「お久しぶりですね、ティアお姉様。」

「久しいな、ティア殿。相変わらず見事な治癒術だな。余も見習わなくては。」

「やつほ。」

女性 リウイの娘でありイーリュンの神官のティアにブリネ達は滅多に会わない家族に親しげに話しかけた。

「リフィアさんにブリネさん。それにエヴリースさんも……お久しぶりですね。」

「えつ。リフィア達、この人の事を知っているの？」

ティアと親しげに話すリフィア達を見て、エステルは驚いた。

「……その人の事をリフィア達が知つてて当然だよ、エステル。」

「へ？それってどういう事。」

ヨシュアの言葉にエステルは首を傾げて聞き返した。

「エステル……日曜学校の授業で七曜教会以外の宗教の事を授業で習つた時、その人の顔を見た事なかつた？」

「へ…………あ…………！？聖女様の横に写つていた人だ！」

ちょっと待つて、聖女様が写つていた所つて確かアーライナ教やイーリュン教で有名な人が載つていたはず。…………つて事はもう一人の聖女様！？」

「『『癒しの聖女』ティア・パリエ様…………！』

ティアの顔を見て思い出したエステルは驚き、同じように学園の授業でティアの事を習つたクロ ゼも驚いた。

「はじめてまして、イーリュンの信徒の一人、ティア・パリエです。後…………できればその聖女と呼び方はやめていただけないでしょうか…………？私はペテレーネ様のように我が主神、イーリュン様の神核を承つてている訳ではありませんし、そんな風に呼ばれると恥ずかしいんです…………どうか気軽に”ティア”とお呼び下さい。」

「えつと、じゃあティアさん。みんなの火傷を治して早速で悪いんだけど、聞いていいかな？」

「構いませんが……あなた達は？」

「あ、自己紹介がまだだつたわね。準遊撃士のエステル・ブライトよ。」

「同じく準遊撃士のヨシュア・ブライトです。エステルとは義理の兄妹です。」

「…………ジニス王立学園のクロ ゼ・リンツと申します。昔、お世話になつた縁でマーシャ孤児院の手伝いをさせて貰っています。子供達の命を救つて下さつて本当にありがとうございました。」

「私は母なるイーリコンの教えに従つたまでです。ですからあまり私の事は気にしないで下さい。……それで遊撃士の方達が私に何の御用でしようか？依頼を出した覚えはないのですが……」

「あ、単に同じ治癒魔術を使う者として気になつただけ。だから、あまり気にしないで。」

「あなたが……？もしかしてアーライナ教の信徒の方ですか？こう見えてもゼムリア大陸のイーリコン教の神官長を務めさせていただいており、信徒の顔は全員覚えていて、エステルさんの顔は見た事がありませんから……」

エステルの言葉にティアは首を傾げて尋ねた。

「ううん。あたしはどの宗教の信徒でもないわ。」

「そうなのですか。という事は”秘印術”の使い手の方ですね。それで一体何をお聞きしたいのでしょうか？」

「うん。どうやつたらあんなに上手く治癒魔術ができるのかなーって。あたしも”闇の息吹”っていう治癒魔術ができるけど、回復量はバラバラでティアさんみたいにみんなを一遍に治したりできません。」

「……治癒魔術は魔術の中でも高度な魔術と言われていますが、それほど難解な魔術ではありません。要は相手をどれだけ思えるかですね。治癒魔術は魔力もそうですが使い手の精神状態によっても効果は変わりますから……それと申し訳ないんですが闇の神殿の治癒魔術についてはよくわからなくて何も申し上げる事はできません。すいません……」

ティアはエステルに申し訳なさそうな表情で頭を下げた。

「わわっ。あたしなんかにティアさんみたいな凄い人が頭を下げる必要なんてないよ。信者でもないあたしに治癒魔術の事について教えてくれてむしろ感謝しているわ。」

ティアの行動にエステルは慌てて答えた。

「そうですか、少しでもお役に立ててよかったです……ところどころでどうしてリフィアさん達がここに……」

「……………ハア……………ハア……………」

「ミント！？ツーヤ！？しつかり！」

「ミント姉ちゃん、お願ひだから田を覚ましていつものよつ明るい笑顔を見させてくれよう……」

「起きてツーヤお姉ちゃん…………でないとクラムを叱るのあたしだけになつちゃうよ…………そんなの嫌だよ！？」

ティアがリフィア達に尋ねようとした矢先、眠っていたミントとツーヤに異変が起こり、それに気付きテレサやクラム、マリイは焦つて何度も呼びかけた。

「え！？完全に治療したはずなのに…………すみません、ちょっと失礼します！」

容体が急変したミントやツーヤに驚き信じられない表情をしたティアはミントとツーヤに急いで近付いて状態を確かめた。

「……………これは！……………」

2人の状態を確かめてそれぞれに魔力を送ったティアはいくら魔力を送つても効果がない事に気付き、悲痛な表情をした。

「ティア様、2人の体に蝕んでいた毒を先ほど除去しきれてなかつたのですか…………？」

クローゼはティアの表情を見て、不安そうな表情で尋ねた。

「いえ、今のお二人は健康そのものです。」

「じゃあ、どうしてミント姉ちゃん達がうつなされているんだ！？」

ティアの答えにクラムは詰め寄った。

「クラム！恩がある方になんて口を聞くんですか！」

「あ…………」

テレサに怒られたクラムはティアに詰め寄るのをやめて、気不味そうな表情をした。

「…………話を続けます。確かにお一人は健康そののですが、…………の前にテレサさんに一つお聞きしたいのですが。」

「なんでしょうか？」

「ミントさんにツーヤさん……2人は最近魔力を使うような事はありませんでしたか？」

「魔力を使うような事とは……？」

「簡単に言えば魔術を使う事です。手から火や水を出したりや風をおこしたりなど、そういう不思議な事を2人はしませんでしたか？」

「そんな事をしている事は見た事が…………あ…………！」

「…………どうやら、心当たりがあるようですね。」

ティアに尋ねられ少しの間考えていたテレサは声を出した。

「先生、ミントちゃんとツーヤちゃんは魔術が使えたんですか？」

「2人が”闇夜の眷属”である事は知っていましたが……」

テレサの様子が気になつたクロ ゼは尋ねた。

「あれ？ そう言えば昨日はその2人は孤児院にいなかつたわよね？」

「…………あの時の子達はちょうどお使いに行っていましたから…………それでクロ ゼ、先ほどの質問に答えるけど、2人は今まで不思議な力を使つたりなんて事はしなかつたわ。でも…………あの時……」

「…………あの時は？」

テレサの言葉が気になつたヨシュアは尋ねた。

「…………孤児院が火事になつて逃げ場を失つた時、天井から私やクラム達に火のついた屋根の瓦礫が落ちて来た時、それに気付いた2人は両手を上にかざしたんですが……その時、2人の全身が光り、両手から大きな光の玉のような物が出て来て落ちて来た瓦礫を破壊したんです。…………そういえばその直後に2人は倒れたんです。あの時は煙を吸つてしまつたせいかと思つたんですが……」

「やはりそうですか……このお二人が今うなされている原因なのですが……魔力の枯渇です。」

「魔力の枯渇……？ それは一体何なのでしょうか……？」

ティアの答えにテレサは不安げな表情で尋ねた。

「魔力の枯渇とは体内にある魔力を使いきつてしまつとよく起る症状です。……軽い症状なら眩暈や気絶程度ですむんですが、重い症状だと最悪死に到ります。……」

「そんな……どうにかならないのですか！？」

血相を変えたテレサはティアに詰め寄つて嘆願した。

「……魔力が枯渇しているなら供給をして回復する事は無理なんですか？」

「もちろん、私もそれを考えて先ほど試しましたが……駄目なんです。魔力を2人にいくら供給しても私の魔力を受け付けなく、供給できなんですね。……もしかしたら、魔力の相性の問題があるかもしれません。」

ヨシュアの提案にティアは首を横に振つて悲痛そうな表情で答えた。
「そんな……！せつかくミントはエステルさんに会うのをあんなに楽しみにしていたのに……こんな事つて……！」

「え……その子があたしに会いたいってどういう事ですか？」

テレサの言葉に驚いたエステルはテレサに尋ねた。

「……エステルさん達が孤児院を去つた後この子達が帰つて来てアッブルパイとハーブティーを出して食べさせていた時、この子が急に昨日来たお客様の名前を聞き、エステルさんが自分のママだと言つてエステルさんに会いたいって言つたんです。」

「あ、あたしがこの子のママ！？」

テレサの説明を聞いたエステルはうなされていのミントを見て驚いた。

「ふーん、エステルつてこんな大きな子供がいたんだ。もしかしてエステルつて人間じゃなくて見かけによらず結構年を取つてているの？」

「ハ……！？……つてそんな訳ないでしょ！？あたしは正真正銘16歳の人間だし、子供を産んだ覚えもないわ！」

「エ、エヴリーヌお姉様……さすがにそれは無理がありますよ……」「やれやれ……」

エヴリーヌのとんでもない発言にエステルは驚いた後、顔を真っ赤にして否定した。エヴリーヌの発言にプリネは苦笑し、リフィアは溜息をついた。

「（……もしかして……）あの、エステルさん。この子にあなたの魔力を供給してあげてくれませんか？」

エステルが騒いでいる中、ティアはある事を思い付きエステルに頼んだ。

「へ？……わかった、やつてみるわ。…………」

ティアに言われ目を丸くしたエステルはすぐに表情を引き締め、ミントに近付きミントに自分の魔力を供給した。

「…………ハア…………ハア…………スウ…………スウ…………マ…………マ…………」

すると今までうなされていたのが嘘のよつこントは規則正しい寝息をし始めた。

「嘘…………！？魔力が供給できた！？」

「…………やはり…………」

自分より高度な術者であるティアに出来なかつた事が自分に出来た事にエステルは驚き、ティアは一人納得した。

「ミントさんにとってエステルさんの魔力が相性がよかつたのでしきょうね。おそらくミントさんは孤児院のどこかに漂つっていたエステルさんの僅かな魔力を感じて本能的にエステルさんに会いたがつたのでしきょうね……なぜ、エステルさんを母と感じたのはわかりませんが……」

「あたしの魔力が…………」

ティアの説明を聞いたエステルは自分の両手を見た。

「…………ハア…………ハア…………」

「ツーヤちゃん！？」

「そうだ……もう一人いたんだ……」

未だうなされているツーヤにクロ ゼは駆け寄り、ヨシュアはどうするべきか考えていた。

「だつたらあたしを含めて魔術を使える人がみんな試してみればいいじゃない。考えるのは後よ！」

「そうだね。プリネ、リフィア、エヴリース。お願ひしていいかな。

「エステルの意見に頷いたヨシュアはプリネ達を見た。

「うむ。」

「わかつた。」

「私の魔力で命が助かるのならいくらでも供給をして差し上げます

……」

ヨシュアの言葉に頷いたリフィア達はそれぞれ順番にツーヤに魔力を供給した。するとリフィアとエヴリースは供給できなかつたがプリネの魔力は供給できて魔力が供給され、回復して顔色がよくなつたツーヤはミントと同じように規則正しい寝息をし始めた。

「スウ…………スウ…………」主人様……

「よかつた……ありがとうございます、プリネさん……」

「いえ、力になれてよかつたです。」

ツーヤも助かつた事に安心したクロ ゼはプリネにお礼を言い、お礼を言われたプリネは謙遜して答えた。そして今まで眠つていたダニエルとポーリイが目覚めた。

「「う、うん……？」」

「ダニエル、ポーリイ！ 目覚めたのね！ どこか痛い所はない？」

目覚めた2人の子供にテレサは尋ねた。

「うん、さつきまで苦しくて痛かつたけど今はへーき。」

「えへへ、なんだか暖かかつたね。」

「良かった……本当に良かったね……」

元気そうな2人の子供を見てクロ ゼは安心した。

「やつ言えば遊撃士のお一人はどうしていながらに？私が目的でないとするとトレサさん達のお見舞いですか？」

「いえ、調査に来たついでお見舞いに寄らせて頂きました。」

ティアの疑問にヨシュアは丁寧に答えた。

「調査に来たつて……あの火事を調べに来たんだろう？なにか分かつたこと、あんの？」

「えつと……」

「何と言つたらいいのか……」

クラムの言葉にエスティル達はそれお互いの目を合わせて困つていた。

「ねえ、みんな。お腹は空いてないかしら？私、朝ゴハンを食べてなくて食堂で何か頬もつと思つた。ついでだから、みんなにも甘いものを」駆走してあげる。「

「え、ほんとぉ！？」

「ポーリイ、プリン食べたーー！」

エスティル達の空氣を読んだクローゼは子供たちの関心を別に向けるために提案をし、ダニエルやポーリイはクローゼの提案に喜んだ。で、でも姉ちゃん……」

「…………。行きましょ、クラム。」「え……」「え……」

「つべこべ言わずにわざと来なきつてば。クローゼお姉ちゃん、はやく下に行きましょ。」「ふふ、そうね。」

クラムは納得がいかない様子だったが空氣を読んだマリイに引っ張られてクローゼや起きていた子供達と一緒に部屋を出た。

「ティアお姉様、積もる話もあるでしょ？私達も下に行きませんか？」

「うむ。余もティア殿とは話したい気分だったしな。」「…………わかりました。」「

「エヴリーヌ、余達も部屋を出るわ。下で何か頼むといい。」

「本当? ジヤあ、下に行こひ。」

同じよひて空氣を読んだプリネやリフィアはティアやエヴリーヌと共に部屋を出た。

「ふう、助かっちやつた。あの子たちやイーリュンの信徒のティアさんにはあんまり聞かせたくないから……」

「そうだね。プリネ達やあのマリイって子は察してくれたみたいだけど……」

火事について聞かせたくない子供たちやティアが部屋を出た事にエスティルは安堵の溜息をはき、ヨシュアも頷いた。

「ふふ、良い子に恵まれて私は本当に幸せ者です……。それで、調査に来たとおっしゃっていましたね。どうぞ、何なりと聞いてください。」

「ご協力、感謝します。」

「えつと、それじゃあ……」

そしてエスティル達はテレサに調査の結果を伝え、テレサからは状況を聞き始めた……。

第64話（後書き）

リウイとティナの娘であり、オリジナルキャラ、ティアの登場です。ティアの姿はティナの瞳が赤くなつただけでほかは全て幻燐2のティナ似だと思ってもらつていいです。ちなみに使える魔術は『魔術・治癒』のSランクまでの術と『魔術・再生』の全部の術です……感想お待ちしております。

テレサから状況を聞いたエステル達は愉快犯の可能性を考え、見知らぬ人物を孤児院の周辺で

見なかつたと聞くと、火事が起こり逃げられなくなつた際、銀髪の青年がテレサ達を助けてくれただけで、テレサ達を助けた青年は関係ないと想い、続きを話そうとした所ヨシュアの様子がおかしかつた。ヨシュアの様子に不思議に思つたエステルはヨシュアに尋ねたがヨシュアは誤魔化した。そこにクローゼが部屋に入つて來た。

（白の木蓮亭・宿屋の一室）

「……失礼します。」

「あれ、クローゼさん？」

「あの子たちはどうしたの？」

下にいるはずのクローゼにエステルとヨシュアは首を傾げた。

「ふふ……。下でケーキを食べています。それとティア様達が子供達の相手をして下さつてます。あの、先生。お客様がいらっしゃいました」

「お客様？」

クローゼの言葉にテレサは不思議そうな表情をした。

「お邪魔するよ。」

「あ……！」

「ダルモア市長……」

そこにルーアンの市長ダルモアと秘書のギルバートが部屋に入つて來た。

「おや、昨日会つた遊撃士諸君も一緒だつたか。さすがはジャン君、手回しが早くて結構なことだ。さて……」

エステル達に気付いたダルモアは一人で感心した後、テレサの正面

に来た。

「お久しぶりだ、テレサ院長。先ほど、報せを聞いて慌てて飛んできた所なのだよ。だが、『ご無事で本当に良かった。』

「ありがとうございます、市長。お忙しい中を、わざわざ訪ねてくださつて恐縮です。」

「いや、これも地方を統括する市長の勤めといつものだからね。それよりも、誰だか知らんが許しがたい所業もあつたものだ。ジョセフのやつが愛していた建物が、あんなにも無残に……。心中、お察し申し上げる。」

「いえ……。子供たちが助かったのであればあの人も許してくれると思います。遺品が燃えてしまつたのが唯一の心残りですけれど……」

ダルモアの言葉に答えたテレサは残念そうに視線を下に落とした。

「テレサ先生……」

クロゼはテレサの様子に何も言えなかつた。

「遊撃士諸君。犯人の目処はつきそつかね？」

「調査を始めたばかりですから確かな事は言えませんが……。ひょ

つとしたら愉快犯の可能性もあります。」

ダルモアはエステル達に調査の状況を聞いたがヨシュアは芳しくない状況である事を話した。

「そうか……。何とも嘆かわしいことだな。この美しいルーアンの地にそんな心の醜い者がいるとは。」

「市長、失礼ですが……」

無念そうに語るダルモアにギルバートが話しかけた。

「ん、なんだね？」

「今回の件、もしかして彼らの仕業ではありませんか？」

「…………」

「ま、待つて！『彼ら』って誰のこと？」

ギルバートの言葉にダルモアは黙つたがエステルは反応して訪ねた。

「君たちも昨日絡まれただろう。ルーアンの倉庫区画にたむらしているチソピラビもさ。」

「あいつらが……」

「…………」

「失礼ですが……。どうして彼らが怪しいと？」

ロッコ達の事を思い出したエスティルは厳しい表情をし、クロゼは沈黙し、ヨシュアは冷静に尋ねた。

「昨日もそだつたが……。奴ら、いつも市長に楯突いて面倒ばかり起こしているんだ。市長に迷惑をかけることを楽しんでいるフシもある。だから市長が懇意にしているこちらの院長先生に……」

「ギルバード君！」

「は、はい！」

「憶測で、滅多なことを口にするのは止めたまえ。これは重大な犯罪だ。冤罪が許されるものではない。」

「も、申し訳ありません。考えが足りませんでした……」

調査を混乱しかねない情報をうつギルバートにダルモアは声を荒げた後、一喝した。

「余計なことを言わばずともこちらの遊撃士諸君が犯人を見つけてくれるだろ？ 期待してもいいだろ？ うね？」

「うん、まかせて！」

「全力を尽くさせてもらいます。」

「うむ、頼もしい返事だ。」

エスティルとヨシュアの返事に満足げに頷いたダルモアはテレサに尋ねた。

「ところでテレサ院長……。一つ伺いたいことがあるのだが。」

「なんでしょうか？」

「孤児院がああなつてしまつてこれからどうするおつもりかな？ 再建するにしても時間がかかるし、何よりもミラがかかるだろう。」

「…………。正直、困り果てています。当座の蓄

えはあります、建て直す費用などとも……」

「院長先生……」

「…………」

悲痛そうに語るテレサをエスティル達はただ見てはいるだけしかできなかつた。

「やはりそつか……。どうだらう。私に一つ提案があるのだが。」「…………なんでしょう?」

「実は、王都グランセルにわがダルモア家の別邸があつてね。たまに利用するだけで普段は空き家も同然なのだが……。しばらくの間、子供たちとそこで暮らしてはどうだらう?」

「え……」

「もちろん、ミラを取るなど無粋なことを言つつもりはない。再建の目処がつくまで幾らでも滞在してくれて構わない。」

「で、ですがそこまで迷惑をおかけするわけには……」

テレサはダルモアの申し出に戸惑つた後断りとした。

「どうせ使つていらない家だ。気がどがめるのであれば……。うん、屋敷の管理をして頂こう。もちろん謝礼もお出しする。」「あの……僕からも提案があります。」

「ほう? 一体それはなんだね?」

ギルバートの言葉に首を傾げたダルモアは続きを促した。

「その前にお聞きしたいのですが……こちらに来る際、下で子供たちと談笑しているイーリュンのシスターを見たんですが……もしかして院長がお呼びになつたのですか?」

「はい。子供達の傷が深かつたので宿屋の主人にお願いして呼んでもらつたのです。」

「そうですか。……僕の提案なんですが下にいるイーリュンの方に頼つてみてはいかがでしょうか?」

「ほう、何故だね?」

ギルバートの提案にダルモアは不思議に思い続きを促した。

「人から話伝手で聞いた事なんですが……イーリュン教はメンフィル帝国からの援助を受けてさまざまな街で孤児院を経営していると聞きます。ですから再建の目処が建つまでそちらでお世話になつたらいかがですか？孤児院には護衛として精強なメンフィル軍の兵士が門番として守つていると聞きますし、孤児院の周辺もメンフィル帝国兵がよく巡回している上子供達の教育もしていて、成長した子供達の希望があれば仕事を紹介してくれ、またその仕事に合つた勉強を子供の頃から教育してくれると聞きます。防犯や子供達の未来を考えたらこれほど環境が整つている孤児院はほかにはないと思いますよ？」

「ふむ……先ほどさまでまな街にあると言つたがリベールにもあるのかね？」

「はい。メンフィル大使館があるロレント市にもあります。特にあそこはあの”闇の聖女”もたまに顔を出して子供達のお世話をしてくれるそうですよ。それになんたつてあのメンフィル大使　リウイ・マーシルン皇帝陛下がいる街ですから、いざという時は10年前の”百日戦役”的にメンフィル軍が守つてくれると思います。」

「そうか……そう言えば遊撃士の諸君はロレントから来たと言つていたね。実際どうなのだい？」

ギルバートの言葉に頷いたダルモアはエステルやヨシュアに尋ねた。「え」と……そうね、秘書さんの言つてている事は大体合っているわよ。日曜学校に通つっていた時イーリュンの孤児院に住んでいる知り合いとかに聞いたけど、孤児院に務めている人達はみんな優しくて食事も美味しいし、将来に向けての勉強もさせてくれて樂しいって言つてたわ。もちろん遊ぶ時間も一杯あるそうよ。王国軍の兵士になりたいって言つてた男の子も毎週決まつた日にメンフィル軍の兵士に稽古をつけてもらえてるって嬉しそうに話していたわ。……今考えるとメンフィルつて太つ腹よね。他国の軍の兵士になりたいつ

て言つてる子供の面倒を見てくれるんだから。」

「それとロレント市内をメンフィル軍の兵士や闇夜の眷属の人達が見回りなのかよくロレントで見かけました。……普通同盟国とはいえ他国の軍の兵士がいれば街は緊張状態になるのですが、誰も気にせずむしろ街の警備もしてくれますからありがたがつてました。また孤児院に務めている人達はイーリュンの信徒だけではなく子供を病氣や事故等でなくした母親なども務めています。」

「おお、そうか。テレサ院長、そちらもいいと思うがどうかね？」エスティルとヨシュアの説明を聞いたダルモアは感心した声を出した後、テレサに提案した。

「市長…………。少し考えさせて頂けませんか？どちらもありがたい申し出ですけれど、いろいろな事が起こりすぎて少し混乱してしまって……」

「無理もない…………。ゆっくりお休みになるといい。今日のところはこれで失礼する。その気になつたらいつでも連絡して欲しい。イーリュンの孤児院の件に関してもロレント市長とは知り合いだから、彼に君達が孤児院に受け入れてもらえるようにイーリュンの方達に口添えしてもらつようと言つておひづ。

「はい……。どうもありがとうございます、ギルバード君、行くぞ。」

「はい！」

テレサの感謝の言葉を聞いたダルモアはギルバートを伴つて部屋を出た。

「は～、驚いた。メイベル市長もそうだつたけどめちゃめちゃ太つ腹なヒトよね。」

「そうだね……。元貴族っていうのも頷けるな。」

ダルモア達が出ていった後、エスティルとヨシュアはダルモアの申し出に感心していた。その一方でクロゼが不安げな表情でテレサに尋ねた。

「先生、市長さんの申し出やギルバートさんの提案、どうなるおつもりですか？」

「……。あなたはどう思いますか？」

「……………常識で考えるのなら受けたほうがいいと思います。特にイーリュンの孤児院はあのメンフィル帝国が援助しているのですから、生活の心配はないと思います。…………だけど……。一度王都やロレントに行ってしまったたら……。いえ……。なんでもありません。」

テレサに尋ねられたクロ ゼは辛そうな表情をしながら答えた。

「ふふ、あなたは昔から聞き分けがいい子でしたからね。いいのよ、クローゼ。正直に言つてちょうだい。」

「……………あのハーブ畠だつて世話する人がいなくなるし……。それに……それに……先生とジョセフおじさんには可愛がつてもらつた思い出が無くなつてしまつ氣がして……。ごめんなさい……。愚にも付かないわがままです。」

「ふふ、私も同じ気持ちです。あそこは、子供たちとあの人思い出が詰まった場所。でも、思い出よりも今を生きる」との方が大切なのは言つまでもあります。」

「はい……」

辛そうにしているクロ ゼにテレサは諭した。

「近いうちに結論を出さうと思います。あなたは、どうか学園祭の準備に集中してくださいね。ミントやツーヤ、そしてあの子たちも楽しみにしていますから。」

「……………はい。」

テレサの言葉にクロ ゼは先ほどの辛そうな表情はなくし、力強く頷いた。

「エスティルさん、ヨシコアさん申しわけありませんが……。調査の方、よろしくお願ひします。」

「お任せください。」

「絶対に犯人を捕まえて償いをさせてやりますからー。」

テレサの言葉に2人は力強く頷いた。

その後エステルとヨシュアは調査をどうするか考え、一端ギルドに戻つてジャンやプリネ達と相談して捜査方針を決めようとしたところ、エステルやダルモア達の会話を盗み聞きしたクラムが村を飛び出して『レイヴン』がいる倉庫に向かつたらしいという情報をマリイから聞き、

急いで追いつくため、リフィア達に子供達の世話やティアにもう少し残つてもらえるように頼んだ後、クロゼと共に急いでルーアンに向かつた……

第65話（後書き）

感想お待ちしております。

ルーアンに向かいながらクラムに追いつこうとしたエステル達だったが、姿を見る事もできずルーアンに到着した。ルーアンに到着し、ようやくクラムの姿を見たエステル達だが運悪くラングランド大橋が跳ね上がる直前にクラムは南街区に向かい、クロゼは呼びかけたがあまりにも距離があつたため制止の声はクラムには聞こえなかつた。困り果てているクロゼにエステルは街を案内してもらつた時、ホテルの裏手に貸しボートがあつたのを思い出し、ボートを管理している老人に頼みこみ、運良くボートを使う事に許可をもらい急いで『レイヴン』がアジト代わりにしている倉庫区画に向かい、ポートを止めた後倉庫に向かつた。

ヨルアン市内・倉庫区画最奥

「……とぼけるなよーお前たちがやつたんだろー? ゼットたいに許さないからなつー」

なにでんた。このガキは?」

「アハ、エリはお前みたいなお子ちゃんが来るとこじやねえぞ。ひとつと家に帰つて母ちゃんのオッパイでも飲んでな。」

「ひやはせ、そいつは二いいや。」

クニムは口々二連を怒鳴ったが、ローラーは首を仰げて、テイラーはクニムの怒りを流して馬鹿にし、レイスはティーンの言葉に同意して下品に笑つた。

「」のガキ……なにブチギレってんだあ？」

相手にされないと怒つて叫んだクラムはロツコ達に飛び掛かつて体をぶつけた。ロツコ達はクラムのいきなりの行動に戸惑い何も

しなかつた。

「母ちゃんが居ないからってバカにすんなよつ！ オイラには先生つていう母ちゃんがいるんだからなつ！ その先生の大切な家をよくも、よくも、よくもおつ！」

「ちつ……」

「あうつ……」

ロツコは面倒くさそうな表情でクラムを突き飛ばした。突き飛ばされたクラムは悲鳴をあげた。

「黙つて聞いてりやあいい気になりやがつて……」

「そこにデインが近付き、クラムの首を持ち上げた。

「黙つて聞いてりやあいい気になりやがつて……」

「どうやら、ちつとばかりオシオキが必要みてえだなあ。」

「お尻百たたきといきますか？ ひやーっははははー！」

「やめてください！」

「お、お前たちは……」

クラムに暴力を振るおうとしたロツコ達だが、クローゼを先頭に乱入してきたエスティル達に気付いて素早く短剣を構えた。クラムを持ち上げていたデインもクラムを後ろに投げ飛ばし短剣を構えた。

「けほけほ……。クローゼ……姉ちゃん？」

「子供相手に、遊び半分で暴力を振るうなんて……。最低です……。恥ずかしくないんですか。」

クラムは咳込みながらクローゼを見、クローゼは哀れそうにロツコ達を見て言った。

「な、なんだとー！」

「ようよう、お嬢ちゃん。ちつとばかり可愛いからって舐めた口、利きすぎじゃないの？」

「いくら遊撃士がいた所で、この人数相手に勝てると思つか？」
クローゼの言葉にデインは怒りの声をあげ、お気楽なレイスも怒り気味な声を出し、ロツコは余裕の笑みを浮かべた。

「クローゼさん、下がつてて！」

「僕たちが時間を稼ぐよ。その隙にあの子を助けて……」

エステルとヨシュアはクローゼに警告した。しかしクローゼは首を横に振つて答えた。

「……いいえ。私も戦させてください。」「へ……」

「本当は使いたくありませんでしたけど……。剣は、人を守るために振るうように教わりました。」

クローゼはスカートにベルトを撒いて止めていた鞄からレイピアを抜き、構えた。

「今が、その時だと思います。」「ええっ！？」

「護身用の細剣？」

クローゼの行動にエステルとヨシュアは驚いた。

「その子を放してください。さもなくば……実力行使させていただきます！」

「か、かつこいい……」「可憐だ……」

レイピアを構えたクローゼの姿にレイヴンの下つ端達は見惚れた。

「可憐だ、じゃねえだろ！」

「こんなアマツ子にまで舐められてたまるかつてんだ！」

「俺たち『レイヴン』の恐ろしさを思い知らせてやるぞ！」

見惚れている下つ端達に、テインは渴をいれ、レイスは怒り、ロッコは下つ端達に命令した。

「――ウイーツスー！」

下つ端達はロッコの命令に呼応し、エステル達に襲いかかった！

「相手は6人か……こっちの数もちょっと増やしたほうがいいわね。はあああ！ 旋風輪！」

「 「 「 ギヤツ！？」 「 「

「うわ！？」

襲いかかった下つ端達とレイスをエステルはクラフトを使って吹き飛ばした。ロッコはヨシュアが相手をし、ディンはクロ ゼガレイピアで応戦していた。

「 …… 来て！テトリ！！」

そしてエステルは味方の数を増やすためと後方の援護を任せられるテトリを召喚した。

「 あなたの力を貸して、テトリ！」

「 はい！」

召喚されたテトリは足元の木の根から「」を形造り、魔力の矢を片手で形成して弦に矢を通して構えた。

「 「 「 な！？」 「

「 な…… 一体なんだってんだ！？………… って今はそれどころじゃねえ！お前等、何を呆けて嫌がる！増えたとは言え、相手はアマだ！一気にたたみかけるぞ！」

「 「 「 ウィーツス！」 「

「 元、神殺しの使い魔を舐めないで下さい！やあっ！…！」

「 「 「 「 うわっ！？」 「 「 「

テトリは牽制代わりにレイスや下つ端達の真横をクラフト 射撃を放つてレイス達を驚かせ、動きを止めた。

「 …… 大地よ、怒れ！地響き！…！」

「 「 「 「 ぐわっ！？」 「 「

「 いてつ！？」

続けて撃つた手加減した魔術は地面から衝撃波が起きて、レイス達にダメージを与えた。

「 …… 吹き飛びなさい！黒の衝撃！…！」

「 「 「 「 ぐはっ！？」 「 「

テトリに続くように放ったエステルの魔術に当たったレイス達は、吹き飛んで壁にぶつかり立ち上がらなくなつた。

「おまえ！」

「甘い！ 薭！ ！」

「ベニ？」

ヨシュアはロツコの攻撃を回避し、一瞬でロツコの背後に移動して背中を攻撃して止めにシクラフトを放った。

卷之三

卷之三

Sクラフト 断骨剣を全て受けてしまつたロッカ五郎も、立ち止がらなくなつた。

セレクション

おれー!!

タマリの口では、金の矢を放つた。

「チッ。やつてくれるじやえか。お返しだ！」

テインは反撃に短剣をヶ口 せに突き出したが、ヶ口 せは華麗に回避してさらに攻撃を加えた。

卷之三

続けるように放つた華麗な連

続けるよう[放つた華麗な連續攻撃をするクラフト ショトウルムを回避できず受けてしまったデインは信じられない表情で跪き、立ち上がらなくなつた。

卷之三

「遊撃士どもはともかく、こいつた

それになんたよ そのアヤシい? しゃがむ現れた事とし そし

戦闘が終了し、膝をついたロッコやティンはエスティル達の強さに驚き、レイスはテトリを見て叫んだ。

「いや、まあ……実際私は人間ではなくてユイチリですし……」

レイスの叫びにテトロは苦笑しながら答えた。

「ありがとう、テトリー。一端戻つて。」

「はい。また何かあつたら呼んで下さいね。」

そしてテトリーはエステルの呼びかけに応じてエステルの身体に戻つた。

「す、すごいや姉ちゃん！」

「確かにクロ ゼさん、凄かつたわね。プリネとはまた違つたレイピアの使い方をしているけどクロ ゼさんも凄いわね。」

「その剣、名のある人に習つたものみたいだね。」

「いえ、まだまだ未熟です。それに同じ細剣使いならプリネさんの方が上手いですよ。」

クラムやエステルはクロ ゼの強さをはやしたて、ヨシュアも感心し、クロ ゼは照れて答えた。

「あの、これ以上の戦いは無意味だと思ひます。お願ひします……。どうかその子を放してください。」

「こ、このアーマ……」

「こ、ここまで口けにされてはいそうですかって渡せるかっ……！」

クロ ゼの言葉に逆上したロッコとティエンは叫んだ。その時

「……そこまでにしどけや。」

エステル達の背後から聞き覚えのある声がした。

「だ、誰だ！？」

「新手か！？」

エステル達以外の声に驚いたロッコ達は再び身構えた。そして声の主がエステル達とロッコ達の前に姿を現した。

「やれやれ、久々に来てみりや俺の声も忘れてはいるとはな……」

「ア、アガットの兄貴！」

「き、来てたんスか……」

「…………」

声の主 アガットにディエンやレイスは驚いた。驚いているロッコ達にアガットは無言で近付いた。

「ど、どうしてあんたが……。ていうか、こいつらの知り合いなの！？」

「…………レイス…………」

エステルの疑問には答えずアガットは静かな口調でレイスを呼んだ。

「は、はい、なんでしょう？」

レイスはアガットの雰囲気に恐れながら答えた。するとアガットはレイスの腹に強烈な拳による一撃を叩きこんだ！

「ふぎやつ！」

「お前ら……。何やつてんだ？ 女に絡むは、ガキを殴るは……。ちよつとタルみすぎじゃねえか？」

腹を抱えてうずくまるレイスを無視して、アガットはロッシー達を一瞥して言った。

「う、うるせえなー！ チームを抜けたアンタにいまさら指図されたく

……」

「フン！」

「ふぎやつー？」

アガットに反抗したロッシーだが、アガットは有無も言わせずロッシーを殴った。殴られたロッシーは悲鳴をあげて壁にぶつかり気絶した。

「…………何か言つたか？」

ロッシーを殴ったアガットは何もなかつたのよつに言つた。

「あ、兄貴、勘弁してくれ！ ガキならほら、解放するからよー。自分もレイスやロッシーのようになりたくないと思つたデインはクラムを解放した。

「クローゼ姉ちゃん！」

「よかつた……。もう大丈夫だからね……」

解放されたクラムはクローゼに駆け寄り、クローゼはクラムを抱きとめて安心した。

「フン、最初からそういうときやいいんだよ。」

「まつたく乱暴なんだから……。第一、どうしてあんたがタイミングよく現れるわけ？」

「ジャンのやつに聞いただけだ。ビジビのヒヨックビもが放火事件を捜査してゐるつてな。さてと……」

エスティルの疑問に答えたアガットはクラムの方に向いた。

「おい、坊主」

「な、なんだよ……？」

「一人で乗り込んで来るのはなかなか気合の入ったガキだ。だが少々、無茶しすぎたようだな。あんまり、おつ母さんに迷惑をかけるんじゃないねえぞ。」

アガットは入口の方を見て、クラムに言つた。アガットにつられたクラムは入口にいた人物を見て驚いた。

「え……」

「クラム……」

「せ、先生！？」

「どうしてここが……」

入口にはテレサがいて、マノリア村にいるはずのテレサにクローゼは驚いた。

「ギルドで事情を伺つてそちらの方に案内していただきました。クラム、あなたという子は……」

「こ、今度だけはオイラ、あやまんないからな！火をつけた犯人をゼッタイにオイラの手で……」

「クラム！」

強がつたクラムだったがテレサの怒鳴りに飛び上がつて黙つた。

「テレサ先生……。どうか叱らないであげて下さい。」

「いいえ。叱つているのではありませんよ。ねえ、クラム……。あなたの気持ちはよく判ります。みんなで一緒に暮らしたかけがえのない家でしたものね。でもね……。あなたが犯人に仕返ししたとしても燃えてしまった家は戻らないわ。」

クロゼのクラムを庇う言葉に首を横に振つたテレサはクラムを優しく諭した。

「あ

「あなたた

「あなたたちさえ無事なら先生は、もうそれだけでいいの。他には何も望まないから……。お願ひだから……危ない事はしないでちょうだい。」

先生……………！わああ――ん！」

ケラバはテレサに抱きこして泣いた

「……………」

はし……本當は無事でよがたた……」

クラムとテレサのやり取りにエスティルは感動して手拭い咳き、ケゼも同意した。

構いません」と……「アガツヒさんには、あるんですか?」

アガシトの言葉に詫した三ジニアは闇を遁した

「決まつてんだろ……このバカどもが犯人かどうか締め上げて確かめてやるんだよ！たつぱりと急を据えてからな！」

ヨシュアの疑問に答えたアガットはティンに近付き睨んで答え、ティ

「ソノハナツトの睨みと言葉に顔を青褪めさせ震えあがいた

「なるほど……。そういう事ならお邪魔したら悪そですね。」

そしてエスティル達はロッコ達の事はアガットに任せ、ヨシュアはボ

ア村まで送つた

第66話（後書き）

次回、いよいよエステルが別作品の主役と対面です。……感想お待ち
ちしております。

（マノリア村宿酒場・白の木蓮亭）

「あ、クラム！」

「先生…」「…」

宿屋の部屋に姿を現したクラムとテレサにティアやブリネ達と談笑していたマリイ達はクラムやテレサに駆け寄った。

「クラム…こんな状況でなんで、先生を困らせて…」

「……ぐ…」

マリイの言葉にクラムは言葉が詰まった。

「いつもいつもツーヤお姉ちゃんといつしょに言ひてゐじゃない！

もつと大人しくしなさいって……大体、あんたは……」

「そこまでにしておきなさい、マリイ。」

さらになたみかけるように口を開いたマリイをテレサは諭した。

「先生…でも…」

「今回の件はクラムも反省しています。だから許してあげてくれないかしら？」

「……はーい。」

テレサの言葉にマリイはまだ納得のいかない表情で答えた。そしてツーヤといっしょにプリネ達と会話していたミントはエステルに気付いた。

「……ママ…」

「へー?」

ミントはエステルを見ると嬉しそうな表情でエステルに駆け寄り、抱きついた。抱きついたミントをエステルは受け止めて驚いた。

「ようやく会えたね、ママ…ミント、いつかママがミントを迎えてくれると信じたよ…」

「……えへっと、ミントひひひんだっけ。一つ聞いていいかな？」

「何?」

「そのマダリでこうのは、一体どういった事かな?」

「?.ママはママだよ?」

エステルの言葉にミントちゃんは可憐に首を傾げて答えた。

「でもあたしとミントちゃんは初対面だよね。ミントちゃんはどうして、あたしをママだと思ったのかな?」

「それはママから、ママの優しく香りがするからだよ!」

「いや、全くわかんないですけど……」

ミントの説明にエステルは苦笑した後、どうするべきか迷った。そこにプリネが話しかけた。

「エステルさん、ちょっとといいですか?」

「あ、プリネ。どうしたの?」

「ミントさんがエステルさんの事をお母さんと呼んでいる件ですが

……」

「え、何かわかったの?」

プリネの言葉にエステルは以外そうな表情で聞き返した。

「はい。……ツーヤちゃん。」

「……はい、ご主人様。」

プリネに呼ばれたツーヤは静かにエステルの前に来た。

「え~っと……あなたは確かツーヤちゃんだったけ?」

「はい、私とミントちゃんは初めて出合ってから10年間ずっとこのしおにいる親友です。」

「そつか。それでミントちゃんがあたしをママって呼ぶ事なんだけど……」

「その事も含めて、先生やクロ ザキさんやみんなに私と一緒にすることを話します。」

「ツーヤちゃん? もしかして記憶が戻ったんですか!?」
ツーヤの言葉にクロ ザキは驚いて尋ねた。

「……え。ただ、私とミントちゃんの正体は何なのかを思い出せました。」

「2人の正体……？あなた達は”闇夜の眷属”ではなかつたのですか……？」

「……ごめんなさい先生……いつかご主人様が現れるまでは黙つておひつと思つたんです。」

テレサの質問にツーヤは氣不味そうな表情で答えた。

「ご主人様？ツーヤ、あなたはもしかして誰かに仕えていたのですか？」

「いいえ。……私達の正体ですが……私とミントちゃんはドラゴンです。」

「ド、ドラゴン！？ミントちゃんとツーヤちゃんが！？……全然そうには見えないんですけど……」

ツーヤの言葉にエステルはミントとツーヤの姿を見てヴァレリア湖で会つた水竜の事を思い出しながら、驚いた。

「事実です。……最も私やミントちゃんは今まで”パートナー”がいませんでしたから成長もせず、竜化もできなかつたんです。」

「”パートナー”って？」

「私達ドラゴンには生まれつき、共に生きるべき存在がいます。それが”パートナー”です。ドラゴンにとつて”パートナー”の存在は不可欠で、”パートナー”がないと魔力の供給もできない上満足に戦えないんです。誰が”パートナー”かは私達が直感的に感じられるのです。」

いつもミントちゃんは私に自分にとつての”パートナー”とは何か嬉しそうに話してくれたんですが……”パートナー”とは自分と最も親しい存在……つまりミントちゃんにとつては親だつたのです。」

「……そつだつたんだ……あれ、そう言えばツーヤちゃんはプリンセスの事を”ご主人様”って言つてたよね？それって……」

ツーヤの説明に驚きつつ納得したエステルは先ほどのツーヤがブリネに対してどう言つてたかを思い出して尋ねた。

「はい、こちらの方が私にとつての”パートナー”……つまり主
人様です。」

「……私も最初、ツーヤちゃんの説明を聞いて驚きました。まさか、
このような”竜”がいるとは思いませんでした。」

「うむ、世界は広いな。余もプリネのように自分の竜を見つけたい
ものだ！」

「エヴリーヌは友達でカファルーがいるから別にいいけどね。」
プリネの言葉にリフィアは頷き、エヴリーヌは興味なさげに言った。

「…………それで2人とも。”パートナー”を見つけたあなた達は
これからどうするのですか？」

テレサは静かにミントとツーヤに尋ねた。

「そんなのもちろん、ママといつしょにいるに決まっているよ。今
まで甘えられなかつた分、いっっぱい、甘えていいよね？ママ…」
「え！？え？？」

「私もミントちゃんと同じ答えです、先生。よつやくご主人様に会
えたのですから、もちろんご主人様と共に生きていきます。……今
までこの日をどんなに待ち侘びたことか……」

「ツーヤちゃん……」

ミントとツーヤの言葉にエステルは戸惑い、プリネはビックリるべき
か迷っていた。

「何を迷っている、プリネ。ツーヤはお前を慕い、共にいたいと言
つてしているのだから受け入れてやればいいではないか。」

「お姉様。ですが……」

「……リフィアさん、あなたの言つ事は最もですがもう少し周りを
見てから言つたらどうですか？」

「む……？」

ティアに言われたリフィアは周りを見ると、ミントとツーヤを孤児
院に住む子供達やクロゼガ不安げに見ていた。

「ミント姉ちやんにツーヤ姉ちやん……どつか行つちゃうの……？」

「…………」

「クラム。…………」

「マリイ。…………みんな。」

「…………グス…………お姉ちゃん達、どうか行けややだよ…………」

クラムは今にも泣きそうな表情でミントやツーヤを見て、マリイは何も言わず悲しげに黙つて2人を見て、ポーリイやダニエルは泣きべそをかきはじめた。子供達の表情に明るかつたミントもツーヤと同じように気不味そうな表情をした。

「…………すまなかつた。テレサ殿達の気持も考えず余はなんといつ自分勝手な事を…………」

「…………いえ、いいのです。リフィアさんと仰いましたね？私もあなたと同じ考え方ですから気にしないで下さい。」

「先生！？どうしてそんなことを…………－」

テレサの言葉にクロ ゼは信じられない表情になり、テレサに詰め寄つた。

「…………子はいすれ巣立つものです。2人はそれが少し早かつただけです。…………いつかクラム達も巣立つ時が来ることはあなたも理解していますね？ミントとツーヤは今がその時だと私は思うのです。それにクロ ゼ、あなたが小さい頃から知つていてこの子達はもう、エステルさん達やあなたと同じくらいの年である事はあなたもわかつていてるはずです。」

「…………それは…………」

テレサの言葉にクロ ゼは何も言えず黙つた。

「エステルさん、プリネさん。」

「は、はい。」

「何でじょうか。」

テレサに呼ばれた2人は姿勢を正した。

「…………2人のこれから未来をあなた達に託してもよろしいでし

ようか……？

「そ、それは……」

「…………」

「ママ……」

「…………ご主人様…………」

テレサの問いにエステルやプリネは即答できず黙り、その様子を見たミントやツーヤは不安げな表情をした。

「…………あの、少しだけ考える時間を持つてもよろしいでどうか？答えは近い内、必ず出しますので。」

「…………あたしもプリネといっしょで時間を費つてもいいですか？遅くともルーアンを発つまでは必ず答えは出します。」

「…………わかりました。ミント、ツーヤ。あなた達もいいですね？」

「…………はい。」

「…………わかりました、先生。」

そしてエステル達はルーアンに戻るついでに戦えないティアをルーアンまで護衛しながら、ルーアンに向かつた……

第6・7話（後書き）

次回はティアとの会話が主体です。ティナファンは楽しみにして下さい。……感想お待ちしております。

第68話（前書き）

今回の話では前回側室の話をした時、なぜ”あのキャラ”的な名前があがらなかつた理由がわかります。

（メ ヴエ海道）

「それにしてもまさかイーリュンの聖女様に会えるなんて、ビックリしたわ～。」

「あの……本当にその呼び名はやめて下さい……私はイーリュンの信徒として当然の事をしたまでです。」

海道を歩きながら呟いたエステルの言葉にティアは照れながら答えた。

「それでもイーリュンの信徒であるティア様がよくお一人でルアンからマノリアに来れましたね？確かにイーリュンの教えは『どんな相手でも決して傷つけてはいけない。』があつたと思うのですが……ですから、魔獣がいる海道をよくお一人で歩けましたね……」

「フフ……お父様から受け継いだ力のおかげで私、他の方より身体能力が高いのです。聖なる結界を身体に纏わせて魔獣達を寄せ付けなかつた事もありますが、身体能力が高いお陰で人間の方達の数倍の速さで走れますから、そのお陰でもありますね。」

クローゼの言葉にティアは恥ずかしそうに微笑みながら答えた。
「ねえねえ、ティアさんは”闇の聖女様”とも親しいの？」

「ペテレーネ様ですか？……そうですね……私が物心ついた時にはもう、アーライナ教の本神殿に修行に行つてらしてましたから、初めて顔を合わせたのは6年前こちらの世界に来た時です。……ですが同じ治癒術師としてペテレーネ様と親しかった母からペテレーネ様の事はよく聞きましたから、

ある程度の事は知っています。」

「へえ……闇の聖女様って昔、どんな人だったの？」

ティアの説明を聞き、興味が沸いたエステルはティアに尋ねた。

「今とそれほど変わらない方ですよ。ずっとお父様を慕い続ける一途な方で、困っている人や苦しんでいる人を見過ごせない優しい方ですよ。」

「ふえ……」

ティアが話した昔のペテレーネの性格を知ったエステルは感心し、さらに憧れた。

「あの…………さつきから気になつたんですがティア様はメンフィル大使 リウイ皇帝陛下を自分の父親のように仰っているのですが、もしかしてティア様はメンフィル帝国の皇族の方なんでしょうか？」「闇の聖女” ペテレーネ様の伴侣の方は確か、リウイ皇帝陛下の筈でしたし…………」

「ええ。私は当時、メンフィル国王だったお父様 リウイとイーリュンの神官であり側室の一人であつたお母様 ティナの娘で、お父様達の子供の中では最初に生まれた子供になります。」

「え…………という事は今のメンフィル皇帝、シルヴァン陛下の姉君とこう事になりますよね…………？皇位継承権はティア様が一番なのではないですか？メンフィルは男性でないと皇帝になれないと言つ訳ではありませんよね？確かに、次のメンフィル皇帝はシルヴァン陛下のご息女と聞きますし…………どうしてイーリュンの信徒として活動を

…………？」

ティアの言葉にクロ ゼは驚いて尋ねた。

「確かに普通はそう思いますね…………お母様は私には自由に生きてもらひ、また私が国を背負うには余りにも重すぎると思つてお父様に嘆願して、皇位継承権からは外してもらつたのです。そのお陰で私はこうしてイーリュンの信徒として活動できるのです。」

「その…………失礼を承知で聞きたいのですが、どうして皇女である事を捨てたんですか…………？自由に生きれるという事は当然、皇女として国を支える事はできたのではないでしょうか…………？」

「そうですね…………広大なレスペレント地方の霸權を握つたメンフ

イル皇女である事に重荷を感じていないと言わなければ嘘になりますが、決して皇女として民を思う心を捨てた訳ではありません。……

「自分のできる事で国を、民を支えるために母から教わった治癒魔術を活用できるイーリュンの信徒となりました。……それに正直な話、私は”王”になるのは余りにも力不足すぎると思つたのです。……それぞれの領の領主や領主の親族であつたラピス様、リン様、セリエル様、リオーネ様……すでに領主がいて、後継も産まれていたミレテティア領を混乱させないために公式上存在が隠されていたミレティア領前領主ティファーナ様の御子である腹違いの兄妹達や、今は伝説と化し、当時からも慕われていたシルフィア近衛騎士団長の血を引き、マーシルン家にとつて長男のシルヴァンさんにファーミシルス大將軍と同等の活躍をなさつたカーリアン様のご息女、カミリさん……みなさんのお母様は身分ある方や有名な方ばかりに対して、私のお母様は平民でただの神官の一人……そんな娘が皇帝になつてしまつたら、他国にも示しがつかない上せつかく平和になつてしまつた國が乱れるでしょう?……ですから私は皇位継承権を辞退し、せめて民達の支えとなれるためにイーリュンの信徒になつたのです。」

ティアは昔を思い出すかのように遠い目をして語つた。

「……………その……………ティア様は腹違いの兄妹の方達との仲はどうだつたんでしょうか…………?」

「兄妹仲は凄くよかつたですよ。みなさん、身分のない女の娘である私の事を一番上の姉としてとても慕つてくれましたし、他の側室の方達からも自分の子供と同じように凄く親身にしていただきました。それにシルヴァンさん達から直接頼まれて、シルヴァンさんとカミリさんの結婚式やラピス様の娘であるアリアさんとリン様の息子であるグラザさんの結婚式を仕切る司祭を務めました。ですから今でもみなさんは仲がいいですよ。」

「そつ……なんですか……それは素晴らしい事ですね……」

聞きづらそうな表情で尋ねたクロゼの質問にティアは微笑みながら

ら答えたので、クロ ゼはティアを眩しい物を見るよつた田で見た。

「そついえぱ……メンフィルの貴族であるリフィア達から聞いたんだけど、ティアさんはお母さんの遺志をついでイーリュンの神官になつたのつて本当なの？」

エステルはクロ ゼがいるため、さつきから何も言わず黙つているリフィア達をチラリと見た後尋ねた。

「ええ、民の支えとなるためにイーリュンの信徒になつたのは私自身の考えで、本当の理由は悲しみに囚われたお父様を陰から支えていたため、イーリュンの神官として広々と活動できなかつたお母様の思いを受け継いだ事が一番の理由になりますね。」

「ほえ？……あれ？ティアさんのお父さんって幸せじゃなかつたの？一杯奥さんや子供がいて、王様なんだからそれ以上の幸せつてないんじゃないのかな？」

ティアの言葉を聞いて感心したエステルはある事が疑問になり、尋ねた。

「…………」

「あれ？」

「ティア様？」

エステルの疑問には答えず、目を閉じ何も語らないティアにエステルやクロ ゼは不思議に思つた。

「…………リフィアさん、プリネさん。エステルさんにはどこまで話したのですか？」

「…………”あの方”の事を少しエステルに話した。」

「それとリウイ陛下と”あの方”的夫婦仲も話しましたね。」

静かに問い合わせるティアにリフィアとプリネも静かに答えた。

「…………そうですか。エステルさん、お父様と正妃様の事はリフィアさん達から聞きましたね？」

「あ、うん。なんか凄く夫婦仲はよかつたつて聞いたよ。後……その、正妃様が亡くなつてティアさんのお父さんが凄く悲しんだつて

事も……

確認するようなティアの言葉にエステルは言い辛そうに答えた。

「……そこまで知っているというのなら、お分かりと思うのですがお父様はまだ正妃様の事をずっと思い続けているのです。お母様は正妃様を亡くし、心に酷い傷を負つたお父様をほおつておけず、今まで精力的に色々な所でイーリュンの信徒としての活動をしていたのですが、正妃様が亡くなられてからは活動は王都内だけにして生涯お父様の傍にいて、傷ついたお父様の心をずっと支えていたんです。」

「その…………ティア様のお母様はリウイ陛下の事は……」「

「もちろん、一人の女としても愛していました。でなければいくら全ての傷ついた方を癒すイーリュンの信徒といえど、そこまではできません。」

「そう…………なんだ。…………いつか幸せになれるといいね、ティアさんのお父さん。」

「ええ…………最も、その日はすぐそこに来ているかもしませんが……」

「え？」

ティアの言葉にエステルは首を傾げた。

「…………なんでもありません。今のは私の空言です。…………それより私は何か聞きたいことがあるのではないか？エステルさん達がクラム君を追いかける時、私を引き止めておいて欲しいとの事だったのですが、一体何が聞きたいのでしょうか？」

「あつと…………すっかり聞くのを忘れていたわ。ティアさんを引き止めたのは聞きたい事でもあるけど、頼みみたいにもなるかな。」

「なんでしょう？私で力になれるのならできる限り協力しますが。そしてエステルはティアに住む家を失くしたマーシア孤児院の人達をイーリュンが運営している孤児院にお世話になれないか聞いた。「なるほど…………私に頼みたい事というのはテレサさん達の今後の

「話だつたのですね？」

「うん。ルーアンの市長さんはロレントの市長さんにロレントにあ
るイーリュンの孤児院の人達に口添えしてもらつよう頼むつて言つ
てたけど、イーリュンの信徒のティアさんに直接頼んだほうがいい
かな～つて。」

「テレサさん達が望むのなら、私は別に構いませんよ。」

「あの…………そんな簡単に決めても大丈夫なのでしょうか…………？」
テレサ達が来るかもしない事をあつさり許可したティアにクロ
ゼは驚いた後尋ねた。

「ええ。イーリュンは傷つき、困つている方ならどんな方にも慈悲
を与えるのですから、家を失くし困つているテレサさん達も当然受け
入れます。もし、ロレントの孤児院にお世話になりたいのでしたら
、私が手配しておきます。…………こう見えてモゼムリア大陸の各地
にあるイーリュンの孤児院の総院長を務めさせていただいておりま
すから、全ての孤児院に新しく来る人達の事を受け入れるよう手配
することは可能です。」

「ふえ～…………」

「…………」

ティアの説明にエステルは呆けた声を出し、クロ ゼは辛そうな表情をして黙つていた。

「そういうえば気になつたのだが、どうしてティア殿はルーアンに？
高度な治癒魔術が使えるティア殿はさぞまな国を廻つているが、
どうしてリベルに？リベルはこの世界では最も平和な国だが。」
「こちらに来たのは久しぶりに大使館に帰るために、船でこちらに
来たからです。以前いた街には飛行艇が通つてなく、一日に数本し
かない船でしか安全に他国に行く手段がなかつたのです。」

「ティアお姉様はいつまでこちらに滞在するのですか？」

「ルーアン地方にあるジェニス王立学園が近く学園祭をすると聞きます。準備等で怪我をする方もいらっしゃるでしょうから、学園祭

が終わるまではルーアンのイーリュン教会に滞在して活動するつもりです。ですからもし、学園祭の準備等で怪我をしたら私を呼んで下さい。その時は駆けつけて怪我を治療いたします。

「心強い言葉、ありがとうございます。」

リフィアやプリネの疑問に答えたティアはクロゼを見て言って、クロゼは辛そうな表情を消して微笑みながら答えた。

そしてルーアンまでティアを護衛したエステル達はティアと別れ、ヨシュアと合流する場所であり、火事やクラムの件を報告するためにギルドに向かった……

第68話（後書き）

今更思うのですが、ティナやイリーナってホント、心が広いですね……自分を凌○した相手を許し、逆に愛しているんですから。まあ、イリーナはそれとは別に幻焼1の頃から嫉妬深かつたですが。それと側室でティファーナについてはこういう形で收まりました。ですので決して、リウイの側室ではないという訳ではありません。ティファーナが好きな方はこれで納得してくれれば幸いです。後、あの2人の子供の名前に突っ込まれると思うのですが、すいません……マジで名前が思い付けません……感想お待ちしております。

第69話（前書き）

今日はいつもと比べるとちょっと短いです。話の切り分けって難しい……

その後ルーアンのギルドに戻つてコシュアと共に報告していたエスティル達だったが、そこにアガットが帰つて来てロッコ達は関係ない事を伝えると有無を言わさず孤児院の火事事件をエステル達から取り上げて、さつさと出て行つた。そしてエステル達は納得のいかない表情でジャンに今までの調査結果を報告をした。

（遊撃士協会・ルーアン支部）

「うん、良く調べてくれたみたいだね。でも、さつき言つた通り、今度の件には色々と事情があるんだ。申しわけないが、この報告で捜査は終了とさせてもらうよ。」

「で、でも……。院長先生とあの子たちのために何かしたいと思つてたのに……。……こんなのは……」

「エステル……」

「エステルさん……」

「…………」

冷静に言つジャンの言葉にエステルは落ち込んだ表情をし、エステルを見たコシュア達はかける言葉はなかつた。

「…………。あの、ジャンさん。遊撃士の方々と、いうのは民間の行事にも協力して頂けるんですね？」

「そこにしばらく黙つて考えていたクロゼがジャンに話しかけた。「ああ、内容にもよるけど。王立学園の学園祭なんか大勢のお客さんが来るらしいからうちが警備を担当してるしね。」

「でしたら……。エステルさん、コシュアさん。その延長で、私たちのお芝居を手伝つて頂けないでしょうか？」

「え……？」

「それって、どういふこと？」

クロ ゼの依頼にエステルとミシューは驚いた。

「毎年、学園祭の最後には講堂でお芝居があるんです。あの子たちも、とても楽しみにしてくれているんですけど……。とても重要な2つの役が今になつても決まらなくて……」

「も、もしかして……」

「その役を、僕たちが？」

「はい、このままだと今年の劇は中止になるかもしません。楽しみにしてくれているあの子たちに申しわけなくて……。そこで昨夜、学園の生徒会長にお2人のことを話したんです。そしたら、すごく乗り気になつて連れてくるように言われて……。あまり多くはないませんが、運営予算から謝礼も出るそうです。」

「ど、どうしてあたしたちなの? お芝居なんてやつた事ないよ?」

クロ ゼの説明に驚いたエステルは尋ねた。

「片方の、女の子が演じる役が武術に通じている必要があつて……。エステルさんだったら上手くこなせると思うんです。」

「な、なるほど……。うーん、武術だったらけつこつ自信はあるかも……でも、武術ができる女の子だったらプリネもそうだけど?」

「その事なんですか? 実はプリネさんにも手伝つていただきたいのです。」

「私が……ですか?」

エステルに説明したクロ ゼはプリネを見て答へ、プリネはクロ ゼの言葉に驚いた。

「はい。実はお芝居の武術なんですがレイピアを使ったお芝居になります。ですから、レイピアを武器に使うプリネさんにご教授の方をぜひ、お願いしたいのです。」

「別に私はいいのですがレイピアでしたらクロ ゼさんも使うのでは? お芝居の内容を知っているクロ ゼさんが教えた方がいいと思うのですが……」

「私は護身程度にできるぐらいですから……ですから私とエステルさん、両方を見てもらって教授をお願いしたいのです。」

「…………どうしましょつ、リフィアお姉様。」

クロ ゼの言葉にプリネは迷い、リフィアに聞いた。

「余はいいと思うぞ。それに同じ年頃の者達と協同して芝居を成功させる事はお前にとってもよい体験になるはずだ。ルーアン市内の事は余やエヴリーヌに任せてお前はエステル達と共に行くがよい。」

「ん。お姉ちゃんに任せと、プリネは楽しんできと。」

「お二人とも……ありがとうございます。フフ……学園生活には少しだけ憧れていたんですね。まさかこんな形で体験する事になるとは思いませんでした。」

リフィアやエヴリーヌの言葉にプリネは感謝し、これから行くジュニス王立学園で待っている芝居の準備に期待した。

「確かにエステルにピッタリだし、レイピアの使い手として上手いプリネが教えたなら成功率はあがるね。それでもうひとつ役は？」

「そ、それは……。私の口から言つのは……」

ヨシュアの疑問にクロ ゼは戸惑つた。クロ ゼの様子が気になり、ヨシュアは続きを促した。

「言つのは？」

「…………恥ずかしい、です。」

「そ、それってどういう意味？」

「もー、ヨシュアってば。しつこく聞くと嫌われるわよ。お祭りにも参加できるし、あの子たちも喜んでくれる……。しかもお仕事としてなら一石二鳥つてやつじやないー。」いや、やるつきやないよね

「

クロ ゼの答えに嫌な予感がしたヨシュアはさすがに尋ねたがすつかり立ち直ったエステルに流された。

「ちょ、ちょっと待つてよ。ジャンさん、いつものもアリなんで

すか？」

「もちろん、アリさ。民間への協力、地域への貢献、もうもう含めて立派な仕事だよ。リフィア君やエヴリーヌ君もいるし、アガットが来たおかげでそれなりに余裕も出来たし……。よかつたら行ってくるといい。」

慌ててジャンに尋ねたヨシュアだったが、ジャンは笑顔でクロ ゼの依頼を肯定した。

「やつたね」

「ふう……。何だかイヤな予感がするけど。あの子たちのためなら頑張らせてもららうしかないか。」

「フフ、今から楽しみです。」

ジャンの言葉にエステルは喜び、ヨシュアは溜息をついた後気持ちを切り替え、プリネは期待した。

「後の仕事は余やエヴリーヌが他の遊撃士を手伝って完遂しておこう。だからお前達は学園に向かうといい。」

「ん。」

「ありがとう、リフィア、エヴリーヌ。クロ ゼさん、道案内ようしくね」

「はい。」

そしてエステル達はクロ ゼが生活するジエニス王立学園に向かつた……

第69話（後書き）

いよいよ次回からルーアン編のメインイベントである学園祭編です！プリネがいる事で劇の内容も少しだけ変えましたので楽しみにして下さい。…感想お待ちしております。

第70話（前書き）

いよいよルーランのメインイベント、学園祭編スタートです！

その後ジエニス王立学園に着いたエステル達はまず学園長に挨拶するため、学園長室に向かつた。

（ジエニス王立学園・学園長室）

「学園長。ただいま戻りました」

「クローゼ君、戻つたか。おや、そちらの君たちは……」

ジエニス王立学園長 「コリングズはエステルやヨシュア、プリネに目をやつた。

「初めてまして、学園長さん。」

「遊撃士協会から來ました。」

「よろしくお願ひします。」

「ほう、まだ若いのに遊撃士とは大したものだ。孤児院で火事があつたそうだがもしや、その関係で來たのかね？」

「はい、実は……」

そしてクローゼはコリングズに火事の事件を含め、エステル達が学園に來た経緯を説明した。

「そうか……。大変なことになつたものだ。わしらも、何らかの形で力になれるといいのだが……。まずは、学園祭を成功させて子供たちを元氣づける」と……。そこから始めるしかないだろうな。」

「はい……。そこで、お芝居についてはエステルさんとヨシュアさん、そしてプリネさんに協力していただこうと思いまして。」

「いい考えだと思うよ。エステル君、ヨシュア君、プリネ君。どうかよろしくお願ひする。」

「あ、はい！」

「微力を尽くさせて頂きます。」

「私もできる限りの事はさせていただきます。」

「コリンズの言葉にエステル達は姿勢を正して答えた。

「劇に関しては、生徒会長のジル君に全てを任せている。監督も担当しているから詳しい話を聞くといいだろ？ わしの方からは……寮の手配をしておいつか。」

「「え……」「

「寮ですか？」

コリンズの言葉にエステルとプリネは驚き、ミシューは驚きながら尋ねた。

「何と言つても学園祭までほとどじ時間がない。おやうく毎日、夜遅くまで練習する必要があるだろ？ そうなると、泊まる場所が必要になるのではないか？」

「あ、なーるほど……」

「それは助かります。」

「ありがとうございます、学園長。」

キーン……パー……カーン……パー……

「ちよづど授業も終わりだな。さっそく、生徒会長に紹介してあげるといいだろ？」

学園のチャイムを聞いたコリンズはクローゼに叫んだ。

「はい。エステルさん、ミシューさん、プリネさん。次は生徒会室に案内しますね。」

「うん、それじゃ行きましょ。」

そしてエステル達は生徒会室に向かった。

～ジーンズ王立学園・生徒会室～

「はー、忙しい、忙しい。各出店のチケットと予算の割り当てはOK……。招待状の発送も問題なしと。」

生徒会長のバッジをつけた眼鏡をかけた制服の少女 ジルは書類を見て呟いた。

「残る問題は、芝居だけか……。このまま見つからなかつたら俺たちがやる羽目になるのかね。」

副会長のバッジをつけた制服の少年 ハンスは溜息をついた。

「私はともかく、あんたは問題外でしようが。衣装合わせをした時のおぞましい恰好といつたら……」

「言うなつての……。俺も思い出したくないんだから」

「ただいま。ジル、ハンス君。」

衣装合わせの事を思い出し身を震わせながら呟いたジルの言葉に同意して溜息をついている所にエステル達を連れたクロ ゼが生徒会室に入つて來た。

「あ、クローゼ！？火事の話、聞いたわよ。大変だつたそうじゃない。」

「院長先生とチビたちは大丈夫だつたのか？」

「ええ……。怪我をした子もいたけど運良くイーリュンの信徒の方がいらっしゃつて傷を治してくれて一応、みんな無事でした。ただ、孤児院の建物が完全に焼け落ちてしまつて……」

「そうか……」

「元気出しなさいよ。悩んでいたつて仕方ないわ。チビちゃんたちが楽しめるように学園祭を成功させないとね。」

クロ ゼの説明にハンスはかける言葉はなかつたがジルは前向きにクロ ゼを励ました。

「うん、テレサ先生にもそんな風に注意されちゃつた。だから、全力で頑張るつもり。」

「あんたが本気を出せば百人力だから期待してるわよ。ところで、さつきから気になつてるんだけど……。その人たち、ビビちらさま？ ジルはエステル達に目をやつて尋ねた。

「初めてまして。あたし、エステルっていうの。」

「ヨシュアです、よろしく。」

「プリネです。エステルさんとヨシュアさんの仕事をサポートさせていただいています。」

「それじゃ、あんたたちがクローゼの言つてた………」

ジルはエステル達が名乗り出ると驚いた。

「ふふ、約束通り連れてきたわ。2人とも協力してくださるって。それとプリネさんにはエステルさんにフェンシングを教えて貰うためにいつしょに来てもらつたわ。」

「いや～、助かつたわ！初めまして、エステルさん、ヨシュアさん、プリネさん。私、生徒会長を務めているジル・リードナーといいます。今回の劇の監督を担当してるわ。」

「俺は副会長のハンスだ。脚本と演出を担当している。よろしくな、3人共。」

「うん、じゅらじゅら。」

「よろしくお願ひします。」

「私は直接劇に関われないとおもいますがお手伝いする事があつたら何か遠慮なく言って下さい。」

「う～ん、それにしても……」

エステル達に自己紹介をしたジルはエステル達をじつくりと見た。

「な、なに？」

エステルは戸惑いながら尋ねた。

「さすが遊撃士だけあってスポーツも得意そうな感じね。エステルさん、剣は使える？」

「そんなに上手くないけど多分、大丈夫だと思つわ。棒術がメインだけど父さんに習つたこともあるし、それにプリネにも教えて貰うもん。」

「へ～…………ん？そういうばさつきクローゼも言つてたけど、プリネさん、フォンシングが出来るの？腰にさしてあるのってレイピアよね？」

ジルはプリネの腰にさしてあるレイピアに気付いて尋ねた。

「ええ。ただ、私の剣技はお父様譲りなので競技用ではなく実戦用ですが……」

「実戦つて……プリネさんの家庭つて剣術の道場か何かか？」

プリネの言葉に驚いたハンスは尋ねた。

「ううん。プリネはメンフィルの貴族なの。」

「彼女の父親は凄い剣士でもありますから、彼女は幼い頃から父親から護身用に教えてもらつたそうです。だから今の彼女の剣技は大人顔負けの腕をしています。」

「メンフィルの！？おいおい……じゃあ、もしかして彼女は”闇夜の眷属”なのか！？」

エステルとヨシュアはプリネの仮の正体を説明し、それに驚いたハンスは声を上げて興奮気味に尋ねた。

「ええ。」

プリネは恥ずかしそうにしながら答えた。

「すげーな、クローゼ……まさか、”闇夜の眷属”も連れてくるとは思わなかつたぜ。」

「そんな……私は何もしていません。ダメ元で頼んでみたらプリネさんが快く了解してくれただけですから……」

「…………閃いたわ！まずエステルさん。あなたには、クローゼと剣を使って決闘してもらうわ。」

「け、決闘！？」

「もちろんお芝居で、ですよ。」

何かに閃いたジルはまずエステルに劇の役割と何をするか言った。ジルの言葉にエステルは驚いたが、クローゼが補足した。

「クライマックスに2人の騎士の決闘があるのよ。まあ、劇の終盤を彩る迫力のあるシーンなんだけど……。クローゼと勝負できるくらい腕の立つ女の子がいなくてねえ。この子、フェンシング大会で男子を押しのけて優勝してるし。」

「へ～、すつ”い！」

ジルの説明にエステルは感心してクロ ゼを見た。

「ちなみに、決勝で負けたのはそこにいるハンスだけね～」「悪かつたな、負けちまって。ちなみに俺が弱いんじゃない。クロ一ゼが強すぎるんだよ。」

「あ、あくまで学生レベルの話ですから……。本職のエステルさんやプリネさんは足元にも及ばないと思います。」

溜息をつきながら話すハンスにクロ ゼは苦笑しながら、答えた。「またまた、謙遜しちゃって。でも、そういう事ならちよつとは協力できるかも。クロ一ゼさん、頑張ろうね」

「はい、よろしくお願ひします。」

「う～ん……クロ ゼさんがそこまでの腕なら正直私は必要ないと思うのですが……」

クロ ゼの腕を知ったプリネは苦笑いをしながら答えた。

「フツフツフ……そこは『心配なく！』プリネさんも当然劇に参加してもらうわ！」

「え……私が……劇に？」

ジルの言葉にプリネは驚いた。

「おい、ジル。余っている役なんてもうないだろ？」

ジルの様子を不審げに思つてハンスは尋ねた。

「今、閃いたのよ～蒼騎士オスカーと紅騎士コリウスの剣の師匠であり誰もが見惚れる騎士団長～名前はやうね……『剣帝ザムザ』の主人公、ザムザでどうかしら？」

「「「」」」

嬉しそうに説明をするジルをエステル達は呆けてジルを見た。そしていち早く立ち直ったハンスがジルに慌てた様子で尋ねた。

「おいおいおい……！ここで役を増やすとか何、考えてんだ！～ようやく役が揃つたってのにここで新しい役なんて増やしたら今までの練習がパアになるだろ！？」

「どうちみち、主役クラスが抜けてたから大した事ないわよ。今までの流れに少し加えるだけだし。」

ジルは涼しい表情でハンスの反論を打ち破った。

「でもな……！」

「あら、あなたは孤児院の子供達を喜ばせたくないの？役が増えればその分、さらに面白くなるのに。」

「グッ！」

ジルの言葉に図星をつかれたかのようにハンスはその場でのけ反つた。

「それにあんた、言つてたじやない。『せっかく今回の面白い趣向を先生方に認めて貰えたのに、学園生の中で”闇夜の眷属”がいなから少し残念だぜ。』って。」

「あーもう！ わかった！ わかりましたからこれ以上言つのはやめてくれ！」

「わかればいいのよ、わかれば！」

降参したハンスを見てジルは満足げに頷いた。

「あの……本当に大丈夫なのですか？ 急に役を増やしたりして……」

2人のやり取りを見て心配したプリネは尋ねた。

「大丈夫！ 必ず成功させるわ。だからプリネさんも急で悪いんだけどがんばつてもらえないかしら？」

「……わかりました。私にできる精一杯の力を出させていただきます……！」

「がんばろうね、プリネ！」

「はい、お互いがんばりましょう、エステルさん。」

「ハハ……それにしても……。女騎士の決闘なんて、なかなかユニークな内容だね。それに女性騎士団長なんて珍しくてお客の目を引きそうだね。」

エステルとプリネの会話に微笑ましく思つたヨシュアは劇の内容について仮の感想を言った。

「女騎士に女性騎士団長？3人に演じてもううのはれつきとした男の騎士役に騎士団長役だぜ？」

「え。」

ヨシュアの感想に以外そつな表情で答えたハンスの言葉にヨシュアは驚いた。

「しかし、ヨシュアさんは文句のつけようがないわね……。期待してもいいんじゃない？」

「ああ、悔しいが同感だぜ。」

「？？？」

「えつと、その劇……どういう筋書きなのかな？」

ヨシュアを見る田が妖しいジルの言葉にハンスは頷き、エステルは2人の言葉に首を傾げ、ヨシュアは嫌な予感がしながらも尋ねた。

「題名は『白き花のマドリガル』。貴族制度が廃止された頃の王都を舞台にした有名な話なの。貴族出身の騎士と平民出身の騎士による王家の姫君をめぐる恋の鞘当て……。しかもこの3人、身分は違うけどお互い幼なじみの関係にあってね。それに、貴族勢力と平民勢力の思惑と陰謀が絡んできちゃうわけよ。まあ、最後は大団円、文句なしのハッピーエンドだけね。」

「へ～、面白そうじゃない」

「ええ、中々いいお話ですね。」

「そ、それで……。どうして女の子が男性役を？」

劇の内容をジルが説明し、それを知ったエステルとブリネは期待したがヨシュアは不安そうな表情で尋ねた。

「それが、今回の学園祭ならではの独創的かつ刺激的なアレンジですね。男子と女子が、本来やるべき役をお互い交換するっていう趣向なのさ。」

「男女が役を入れ替える？へ～、そんなのよく先生たちが許してくれたわね。」

「性差別からの脱却！ジェンダーからの解放！そして新しく現れた

異世界の種族との協力！…………とかなんとか理屈をこねて無理矢理押し通したちゃつたわ。本当は面白そうっていう、それだけの理由なんだけど

「ジルつたらもう……」

「ほんと、こんなヤツが生徒会長とは世も末だよな。

力説した後、無邪気に笑うジルにクロ ゼは苦笑し、ハンスは溜息をついた。

「あはは うん、確かに面白そーかも。」

「エ、エステルさん。私達はいいかもしませんが、この流れで行くとヨシュアさんが……」

ジルの考えにエステルは笑つて同意したが、プリネは横目でヨシュアを見て言いかけた所にヨシュアが青褪めて会話に割つて入った。

「ちょ、ちょっと待つた！その話の流れで言つたら……。僕が演じなくちゃいけない『重要な役』つていうのは……」

「いやあ、ホント助かつたぜ」

「クローゼ、ありがとね。いい人たちを紹介してくれて」

「あ、あはは……。ごめんなさい、ヨシュアさん……」

そしてエステル達は早速衣装合わせや劇の練習をするために自分の役割を知り絶望したヨシュアを連れて、講堂へ向かった……

第70話（後書き）

軌跡ファンの方々がお待ちかねの『白きマドリガル』ですが、原作と違つて最後に驚く展開がありますので楽しみにしていて下さい。
……感想お待ちしております。

（ジユース王立学園・講堂内舞台）

「うーん、これが舞台衣装か。騎士っていうから鎧でも着るのかと思つてたけど。」

「さすがに甲冑だと演技に支障をきたすからね。現在の、王室親衛隊の制服をアレンジする方向で行つたのよ。」

赤を基調とした芝居用の騎士服を着たエステルは自分が着る服のあちこちを見て咳き、ジルが説明した。

「ふーん、そうなんだ。クローゼさんはショートだし、ハマリ役つて感じがするけど。」

「ふふ、ありがとうござります。エステルさんもとても良く似合つてますよ。」

「えへへ、そうかな？とこりで……。なんで色違になつてるの？エステルはクローゼの着る騎士服が蒼を基調とした服である事に気付いて尋ねた。

「私が演じるのは平民の『蒼騎士オスカー』。エステルさんが演じるのは貴族の『紅騎士コリウス』。それぞれの勢力のイメージカラーナんだす。」

「は～、なるほど。それじゃ、ヨシュアは……」

クローゼの説明に納得したエステルが言いかけた所ハンスの声が舞台わきからした。

「2人の騎士の身を案ずる王家の『白の姫セシリ亞』だ。さき姫、どうぞこちらへ。」

「ちょ、ちょっと待つた。……まだ心の準備が……」

ヨシュアは抵抗する言葉を言つたがハンスに無理やりエステル達の前に出された。

1

舞台に引き出されたヨシュアは腰まで届くウイッグを被り、白を基調としたドレスを着、頭にはティアラを着け、容姿も合わせて美しい深窓の姫君のように見えた。

.....

エステル達はヨシュアの姿に言葉を失くした。

頼むから何か言つて……」のまま放置されたのはちよびットもつぎう。

言葉を失くし黙っているエスティル達にヨシュアは居心地が悪く思い、
言つた。

「いやあ、何て言つか……。せんつぜん違和感ないわね

ひくらしあした。はあ、すゞぐ綺麗です……」

「姿ですね……」

「うんうん、自信持つていいぞ。事情を知らずにあんたを見たら、

ヨシュアの姫の姿にエステルとハンスは褒め称え、クロ
ネは見惚れていた。

「正直な感想、ありがとう。ぜんぜん嬉しいけど……」

エステル達の褒め称える感想にヨシュアは溜息を吐いた。

「ムフフ……。まさに私の狙い通り……。この配役なら、各方面からウケを取れること間違ひなしね……。ブリネさんの衣装はもう少しだけ待つてね。今、急いで作らせているから。」

「はい、ありがとうございます。」

「それじゃあ、みんな、一致団結して最高の舞台に立てるわよ～っ！」

「おーっ！」

「「はいっ！」」

「うーっす！」

「しくしく……」

ジルの場を盛り上げる言葉に一人悲しんでいるヨシュアを除いて、エステル達は拳を空にあげて乗った。

そして練習が終わった夜、エステルとプリネ、ヨシュアはそれぞれ女子寮と男子寮に泊まることになった。

（ジエニス王立学園・女子寮の一室）

「では……、エステルさん、プリネさん。申し訳ないんですけど……ベッドを2人で使ってもらう事になるのですがよろしいでしょうか？」

「はい、私は大丈夫です。」

「ベッドも広いし2人がいっしょに寝るには十分よ！それに一度プリネと一緒にベッドで寝ておしゃべりしたいと思つてたし。」

「フフ、私もです。」

エステルはプリネを見て言い、プリネはエステルに微笑んで答えた。「でも、クローゼさんとジルさんって同じ部屋なんだ。道理で仲がいいわけね。」

「ふふ……。学園に入つて以来の仲です。」

エステルの言葉にクローゼは微笑みながら答えた。

「ルームメイトにして腐れ縁つてところかしらね。ところで、エステルさん、プリネさん。1つ提案があるんだけど……」

「なに？」

「なんでしょう？」

ジルの言葉にエステルとプリネは首を傾げた。

「私のことは、ジルって呼び捨てにしてくれるかな？さん付けされるとなんだかムズ痒いのよね～。代わりに私も、エステルやプリネ

つて呼び捨てにさせてもらいうから。」

「あはは……。うん、そうさせてもいいわ。」

「うーん……私はこの口調が癖になっていますから難しいと思いま
すが、努力はしてみますね。」

「でしたら、私のこともどうか呼び捨てにしてください。その方が

自然な気がしますし……」

そこにクローゼも自分の事を呼び捨てにするように2人に言つた。

「そう? だつたら遠慮なく……。ジル、クローゼ。しばらくの間ブ
リネ共々、よろしくね。」

「はい、こちらこそ。」

「まあ、女所帯だし気軽に過ごしてもいいわよ。建物の中には限
りは男子の田も気にしなくていいし。」

「だからと言って、だらしないのは感心しないけど。」

ジルの言葉にクローゼは苦笑しながら答えた。

「はあ~、これだからいい子ちゃんは困るのよね。カマトアぶつち
やつてもう。」

「あ、ひどい。そんな事を言つ子にはお菓子焼いてもあげないから。」

「あ、うれうそ。クローゼ様。私が悪ついじゃござましたです。」

「だ一め、反省しなさい。」

「…………」「」

ジルとクローゼが楽しそうに会話をしているのをエステルとブリネは
その様子を黙つて見ていた。

「あら……?」「

「どうしたの、エステル、ブリネ? まじまじと見詰めたりして……」

「あはは、いやあ~……。なんだかうらやましいなって。」

「ええ、なんだかお二人が眩しく感じます。」

「うらやましい?」

エステルとブリネが自分達を羨ましがつているのがわからず、ジル

は首を傾げた。

「あたしも口レントに仲のいい友達はいるけど……。せいぜい、お互いの家にお泊りするだけだったのよね。こんな風に、気の合う友達と一緒に暮らせていいなって思つて。」

「ええ。私なんか今までの遊び相手は家族であるお姉様達しかいませんでしたし、赤の他人とこのような協同生活をした事がないんです。」

「…………クローゼ、どう思う?」

「どうつて言われても……。プリネさんはともかくエステルさんに羨ましがられるのはちょっと納得いかないよくな……」

「へ?」

ジルとクローゼの言葉の意味がわからず、エステルは首を傾げた。

「もしかして……」

「プリネはわかつたようね。そんで肝心の本人は、やつぱり?何言つてやがるんだこのアマは、つて感じよね。」「な、なんで!?

「あんたねえ……。自分が、誰と一緒に旅をしてるのかわかつてると?自宅では、一つ屋根の下で暮らしていたんじょーが。」「何もわかつていなく驚いているエステルにジルは首を横に振つて、溜息を吐いた。

「え……それつて。もしかしてヨシュアの話?」

「もしかしなくてもそうですよ。」

「あんな上玉の男の子といつも一緒にいるくせに女所帯を羨ましがるとは……。もつたいないオバケが出るわよ?」

「も~、何言つてるかなあ。ヨシュアはあたしの兄弟みたいなものだつてば。何年もの間、家族同然に暮らしてきたんだから。」
ジルの言葉にエステルは溜息を吐いた後、平然と答えた。しかしジルは目を妖しく光らせて尋ねた。

「ほほう、家族同然ね……。あんたがそのつもりでもヨシュア君の

方はどうかしり?」

「え。」

「あの年頃の男の子つて抑えが利かないって言つし。まして、あんたみたいな健康美あふれた子が傍にいたら色々とつらかたりして……加えてプリネみたいな自分よりちょっとお姉さんで清楚な雰囲気を持つている子が傍にいたらさらにつらいんじゃないかしら……?スタイルも私達とは比べ物にならないくらいいいし。」

ジルはプリネに近付いて突然プリネの胸を揉んだ。

「キヤツ!?

「ジ、ジル!?

ジルの行動にプリネは驚き、即座に胸の部分を両手で隠し、クロゼも驚いた。

「う~む、やはり胸も結構あるわね……腰も細い上容姿も抜群。女として完璧で妬ましいわね~……」

「あ、あはは……私の容姿はお母様譲りですから、そんな事を言われても……」

「…………」

「もう、ジル!ごめんなさい、エステルさん、プリネさん。ジルつてば、興が乗ると人をからかう悪癖があるんですよ。」

ジルの行動に固まつたクロゼだつたがすぐに立ち直つて、恥ずかしがつているプリネと口を開けて固まつているエステルに謝罪した。

「ぶーぶー。悪癖つてなんだよー。」

「何か文句でも?」

「や、滅相もないっす。」

クロゼの言葉に口を膨らませて反論したジルだったが、クロゼに睨まれたので反論するのをやめた。

「あ、あはは……。も~、ビックリさせないでよ。そんな、まさかねえ。ヨシュアが……だなんて。そ、それにプリネはプリネのお父さん達から信頼されてあたし達が預かって余計な虫が寄つて来ない

ようにしている事ぐらい、ヨシュアだつてわ、わかっているはずだ
し。」

(エステルさん、それだと丸つきり意識している事を2人に知らせて
いるようなものですよ……)

立ち直つたエステルだつたが、意識している事を隠せない表情で咳
き、プリネはエステルの表情と言動に苦笑した。

「意識してる、意識してる。」

「ジル！」

「おつと、忘れてたわ。寝る前に日報を先生に提出しなきや。それ
じゃ、おやすみ。先に寝ちゃつていいわよ。」

場を搔き乱しまくつたジルはクロ ゼの追及を逃れるためにそそく
さと部屋を出て行つた。

「まつたくもつ……。そうだ、エステルさん、プリネさん。私ので
よかつたらパジャマを貸しますけど……」

「ありがとうございます。お言葉に甘えて一着お願ひします。」

「…………」

「エステルさん、どうしました？」

「ふえつ！？」

呆然と立つてゐるエステルを不思議に思つたクロ ゼが声をかけ、
エステルは慌ててクロ ゼに振り向いた。

「あ、ああ、パジャマね。うん、何でもいいから貸して。」

こうして思わぬ形でエステル、ヨシュア、プリネの学園生活がスタ
ートした……

第7-1話（後書き）

感想お待ちしております。

第72話（前書き）

今回の話でプリネがただのオリジナルキャラでないことがわかります。

家族以外の同世代の仲間とともに起き、学び舎に行く朝……

午前中は、他の生徒と一緒に授業に参加させてもらい……

昼はランチを共にしながら他愛のないおしゃべりを楽しみ……

そして、放課後は厳しい稽古が夜まで続く……

忙しくも楽しい学園生活は瞬く間に過ぎていった。そんなある日。

（ジーニス王立学園・音楽教室）

「あーり?」

学園祭に使う楽器を運んでいたエステル達だったが、ある楽器を見つけたプリネが声をあげた。

「どうしたの、プリネ。」

「ええ……ヴァイオリン……この学園にも置いてあるんですね。」

ヨシコアの質問に答えたプリネはヴァイオリンを手に持つて感慨深く言った。

「吹奏楽部が演奏をする時に使いますから数は少ないんですが、置いてあるんです。もしかして、プリネさん。ヴァイオリンが弾けるんですか？」

「ええ。期間はそんなに長くありませんでしたが侍女見習いの方といつしょに、淑女の嗜みの一つとして楽器は一通り学びました。その中でも一番気について、今でもたまに弾いている楽器がヴァイオリンなんです。」

説明し尋ねたクロゼの言葉に答えたプリネは微笑んで答えた。

「へへ……ねえねえ、ちょっと弾いてもらつてもいいかな?」

「フフ、じゃあ1曲だけですよ?」

期待するような目をしているエステルに微笑んだプリネはヴァイオリンを弾き始めた。

（――――――――）

「なんて綺麗な旋律……」

プリネの演奏に耳を澄ませたクロゼは感動した。

「え……この曲って……」

「…………」

一方、ヴァイオリンを聞いていて曲がわかつたエステルは驚いた。また、ヨシュアは自分にとつて馴染み深い曲をヴァイオリンで弾いているプリネの姿を驚いて凝視した。

（――――――――）

（……なん……だ……わつ……？どこかで見た事ある光景なのに……思い出せない……）

ヴァイオリンを弾いているプリネの姿にヨシュアは既視感を感じ何かを思い出そうとしたが、頭の中に霧がかかり思いだせなかつた。

（――――――――）

（！？……今……のは……一体……）

ヴァイオリンを弾いているプリネの姿と一瞬自分と同じ琥珀の瞳を持ち、腰まで届いた美しい黒髪をなびかせ、ハーモニカを吹く優しげな女性の姿と重なつたようにみえたヨシュアは困惑した。そしてプリネの演奏が終わつた。

{ } { } { }

「……ふう。」静聴、ありがとうございました。

ヴァイオリンを弾き終わつたナリネは一礼した。

パチパチパチ

「アーリアはアーリアでアーリアだ。アーリアがアーリアをアーリアに育てる」

「すばらしい演奏でした……！」

トトローリーは初めて聞いたときに、この上

「フフ、ありがとうござります。」

感動したケロ。セの言葉と最大限に自分を称えるエヌテルの言葉に
プリネは照れた。

それはしてサクの曲はなんといふ曲なつてこいがたう。

「え? そんな曲名だつたんですね?」

…………？もしかしてカリネ、曲名もわからず弾いていたの！？「

の曲も今の曲ではなかつたのです。」

「なんと言えばいいのでしょうか……まるで昔から知っているみたいに今の曲が頭に浮かび、自然と弾けたのです。お父様が言うには『もしかしたら、お前にその曲の弾き手の魂が宿っているのかもしないな』らしいです。」

「へ……それにしても、『星の在り処』をプリネが弾けたのは

驚いたよね、ヨシュア？」

「…………」

「ヨシュア？」

プリネの言葉に呆けた声を出した後ヨシュアに言つたエステルだが、ヨシュアは何の返事もせずプリネを見続けていたのでエステルは首を傾げた。

「ヨシュア？ ねえ、ヨシュアってば。」

「…………！ どうしたの、エステル。」

エステルに肩をゆすられ我に帰つたヨシュアはエステルに聞き返した。

「どーしたも、こーしたも…… ヨシュア、さつきからプリネの姿をかなり凝視してたみたいに見えたよ？」

「ああ、その事か。………… プリネが一瞬昔の知り合いに見えたから思ひだしただけだよ。」

「またそれ～？ あつやしい～…………」

ヨシュアの言葉にエステルは疑つた。

「あの………… サつきから気になつたのですが、エステルさんとヨシュアさんは今の曲を知つているんですか？」

「うん。だつていつつもヨシュアがハーモニカで弾いていた曲だもん。」

「曲名は『星の在り処』だよ。」

2人の会話に割つて入つて尋ねたプリネの言葉に、エステルとヨシュアは頷いた。

「『星の在り処』………… そういうえば以前、ヴァレリア湖で休憩している時夕方に聞こえたハーモニカは…………」

「僕だよ。エステルに頼まれてね。」

「そなんですか。………… 同じ曲を知つているなんて、偶然つて身近にあるものなのですね。」

「

「そうだね、僕も驚いたよ。」

プリネの言葉にヨシュアは同意するよつに頷き、お互いの顔を見つめ合つた。

(…………あれ?なんだろう?…………?今、胸が締め付けられるよつな痛みがしたのはなんで……?)

見つめ合つているヨシュアとプリネを見てエステルは不思議そうに無造作に胸を抑えた。

「あの…………そろそろ作業を再開しませんか?速く持つて行かない」とジル達に妖しがれますし。」

「あ、そうですね。」

クロゼの言葉にハッとしたプリネは頷き、エステル達と共に作業を再開した。

そしてエステル達の学園生活はさりげなくて行き、ついに学園祭前日となつた……

第72話（後書き）

軌跡シリーズを知っている方にとっては今回の話は驚いたかもしませんね。言つておきますがこの話は基本原作通りにするので、主役のカツプリングを変えたりしませんから、ご安心を……まあ、もしかしたらあるキャラの運命を変える事になるかもしません。その人物は誰か、軌跡シリーズファンならわかるでしょう?……感想をお待ちしております。

（ジユース王立学園・講堂内舞台）

「わが友よ。こうなれば是非もない……。我々は、いつか雌雄を決する運命にあつたのだ。抜け！互いの背負うもののために！何よりも愛しき姫のために！」

紅騎士ユリウス エステルはレイピアを抜いてセリフを言った。

「運命とは自らの手で切り拓くもの……。背負うべき立場も姫の微笑みも、今は遠い……」

蒼騎士オスカー クロ ゼは辛そうな表情でセリフを言つて剣も抜かず立ち尽くした。

「臆したか、オスカー！」

「だが、この身に駆け抜け狂おしいまでの情熱は何だ？自分もまた、本気になつた君と戦いたくて仕方ないらしい……」

自分を叱るエステルに答えるかのようにクロ ゼはレイピアを抜いて構えた。

「革命という名の猛き嵐が全てを呑み込むその前に……。剣をもつて運命を決するべし！」

クロ ゼがレイピア構えるのを見て、エステルも構えた。

「おお、彼らの誇り高き一人の魂、女神達もご照覧あれ！！女神達よ……誇り高い2人の剣士達にどうか祝福を！……2人とも、用意はいいな！？」

エステルとクロ ゼの間にいた騎士団長ザムザ 白を基調とした芝居用の騎士服を着、純白のマントを羽織ったプリネがセリフを言ひながら両手を天井に向けて上げ、エステルとクロ ゼの顔を順番に見た。

「はっ！」

「応！」

「それでは……始めっ！」

「…………」

「…………」

「…………」

そして3人はその場で動かずジッとしていた。

「は～っ……」

「ふう……」

「ほつ……」

しばらくすると3人は一息ついた。

「やつた～つついに一回も間違わずにこここのシーンを乗り切ったわ！」

「ふふ、迫真の演技でしたよ。」

「ええ、これなら明日の本番も大丈夫ですね。」

「えへへ、クローゼやプリネにはぜんぜん敵わないけどね。セリフを間違えたこと、ほとんど無かったじゃない？」

自分を称えるクローゼやプリネの言葉にエステルは照れた後、言つた。

「私はずいぶん前から台本に目を通していましたから。」

「私の場合は主役のお一人と違つてセリフの数は少なかつたですから、なんとかすぐに覚えられただけです。」

「そんな……謙遜する事ないですよ。それより色々と稽古をつけてくれてありがとうございました、プリネさん。お陰でエステルさんの動きに付いていけそうです。」

「ふふ、私は少し助言しただけですよ。クローゼさんは基本がしっかりしていましたから。」

「うんうんーその気になれば、いつでも遊撃士資格を取れると思つよ?」

「ふふ、おだてないで下さい。」

プリネとエステルの言葉にクローゼは照れた。そして3人は椅子が

並べられた講堂を見渡した。

「……よ、明日は本番ですね。テレサ先生とあの子たち、楽しんでくれるでしょうか……」

「ふふ、本当に院長先生たちを大切に思つてるんだ……。まるで本当の家族みたい。」

「ええ、まるでテレサさん先生とは本当の親子のように見えましたし、子供達の本当の姉にも見えましたしね。」

「…………」

エステルとプリネの言葉にクロゼは突然黙つた。

「あ、『ゴメン。変なこと言つちやつた?』

「いえ……。エステルさんとプリネさんの言つ通りです。家族というものの大切さは先生たちから教わりました……。私、生まれて間もない時に両親を亡くしていますから。」

「え……」

「…………」

クローゼの言葉にエステルは驚き、プリネは眞面目な表情に直して黙つた。

「裕福な親戚に引き取られて何不自由ない生活でしたが……家族がどういうものなのか私はまったく知りませんでした。10年前のあの日……先生たちに会うまでは。」

「10年前……まさか『百日戦役』の時?」

「はい、あの時ちょうどドルーアンに来ていたんです。エレボニア帝国軍から逃れる最中に知つている人ともばぐれて……。テレサ先生と、旦那さんのジョセフさんに保護されました。」

「そうだったのですか……」

「戦争が終わつて、迎えが来るまでのたつた数ヶ月のことでしたけど……。テレサ先生とおじさんは本当にとても良くしてくれて……。その時、初めて知つたんです。お父さんとお母さんがどういう感じの人たちなのかを。家族が暮らす家というのがどんなに暖かいもの

なのかを……」

「クローゼ……」

「…………」

昔を懐かしむように語るクローゼにエスティルは何も言えず、リウイとペテレーネ、リフィア達に愛されて育つても、後継者がいながら初代皇帝の娘である自分がいれば本当なら後継者争いが起こつてもおかしくないのに、そういう事はなく、リフィアを含めシルヴァンやカミリ、ほかの腹違いの兄や姉達から可愛がられ正式な皇后に扱われている自分がどれだけ恵まれているかを理解しているプリネは黙つて耳を傾けていた。

「す、済みません……。つまらない話を長々と聞かせてしまって。」

「ううん、そんな事ない。明日の劇……頑張つて良い物にしようね！」

「私も精一杯がんばらせていただきますので、明日の劇……絶対に成功させましょう！」

「……はい！」

エスティルとプリネの心強い言葉にクローゼは微笑んで頷いた。そしてクローゼはある事を思い出し、2人に尋ねた。

「そういえば……ミントちゃんとツーヤちゃんの事……お一人はどうするか決められましたか……？」

「あ、そのことね。プリネやヨシコアと何度も相談してやつと決めたわ。」

「私はツーヤちゃん。エスティルさんはミントちゃんの”パートナー”になつてこれから的人生を共に歩むつもりです。」

「そう……なんですか……」

エスティルとプリネの答えにクローゼは表情を暗くした。

「クローゼや孤児院のみんなは寂しがると思うんだけど、これだけは譲れないわ。……どういえばいいんだろ？……？ミントちゃんに出会つてからなんとなくミントちゃんをずっと見守りたい気持ち

になるのよね。」

「ええ。それにツーヤちゃん達は私達をずっと待っていたんです。だったらそれに答えてあげるのが”パートナー”といつものでしょう?」

「……………エステルさん、プリネさん。」

少しの間目を閉じて考えたクロゼは口を開いた。

「はい。」

「何? クロゼ。」

「私が言うのは筋違いかもしだせませんが……………2人の事を…………大事にして下さー!……………」

「モチのロンよ! だつてあたしはミントちゃんにとつてはお母さんなんだから! まだ16歳のあたしが母親をやるなんて無理があるけど、ミントちゃんがいい大人になるよう頑張つて育てるわ! ヨシュアは最初、反対してたけど最後には納得してくれたから大丈夫よ! 「私もツーヤちゃんが立派な大人になれるようお父様達といつしょに大事に育てるつもりです。だから安心して下さい。」

「(エステルさんならきっとミントちゃんを大事に守ってくれるでしょうね……ツーヤちゃんの未来もメンフィル皇女のプリネさんの傍にいれば華々しく明るい未来になるでしょう)この人達なら……) ありがとうございます……………」

エステルとプリネの答えにクロゼは目に溜まっていた涙をぬぐつて笑顔で答えた。

その後ヒロイン役をするヨシュアの演技の上手さの話に花を咲かせていたエステル達はヨシュアやハンスと合流した後、明日の本番の景気づけにいっしょに夕食をするためにヨシュアとハンスを席をとつておいてもらうために先に食堂に行かせ、学園長に呼ばれたジルを迎えて笑顔で答えた……

第7-3話（後書き）

感想お待ちしております。

第74話（前書き）

今回は久しぶりのあのキャラが再登場します！

ジエニス王立学園・学園長室・夕方

「なるほど……。それはいいアイテアですよー。ですが学園長、冴えてますねえ。」「

「ははは……おたてても何も出んよ。それでは、リストの方は君に任せて構わないかね？」

「ワソズは尋ねた。

「はい、任せください！……あの……できれば例の異世界の大
使も呼べればなって思つてているんですが。」

世界との交流を始めてから、何度か招待状は送つてはいるが学園祭に一度も顔を出した事もなく、後日に多忙という理由で来れなかつた事の謝罪の返事の手紙が来るぐらいだからな。…………将来的に”闇夜の眷属”の子供達を学園に迎え入れて子供達同士仲好くなつて、種族や異世界人との隔たりをなくす礎になつてほしいものなのじやが……その提案を話す機会を作るためにも送つてはいるのじや……ジルの言葉こ「リシズは留念をつきながら答えた。

「そうですか……まあ、余り期待せず待っています。もしかしたら
今回に限って来てくれるかも知れませんし。」

「はい。」
「そうたといいのだからな。とにかくリストの件は任せぬよ。」

ジルとコリンズが会話をちょうど終えた時エステル達が入つて来た。

「失礼します。」

「あ、すみません……。まだお話中でしたか？」

「いやいや。ちょうど終わつたといふだよ。実はなあ……」

「ああ、学園長！喋つちゃダメですってば！明日の楽しみが減っちゃうじゃないですか！」

エステル達に先ほどの会話の内容を話そうとしたコリングズだつたがジルが慌てて口止めをした。

「な、なんなの？あからさまに怪しいわね。」

「ジルつたら……。また何か企んでいるの？」

ジルの様子を訝しげに思ったエステルとクロゼは首を傾げた。

「ふつふつふ……。それは明日のお楽しみよん。そうだ、プリネ！」「なんでしょう？」

「プリネは明日の学園祭の事……お父さん達に話してくる？」

「いえ。今は家を出てお姉様達といっしょに旅をしていますから知らないと思います。」

「ふ～ん……じゃあ、プリネのお姉さん達がプリネのお父さん達に話している可能性はあるんだ？」

「どうでしょ～？……もしかしたらお父様達に今回の学園祭の事を話しているかも知れませんが、それがどうかしましたか？」

「ううん！そんな大したことではないから気にしなくていいわ！（もしかしたら、プリネのお父さんが来るかも知れないわね……プリネは貴族らしいから、もしプリネのお父さん達が来たら寄付金が期待できるわね。）」

「？？」

ジルの意味ありげな言葉にプリネは首を傾げた。

「それより、ジルしたの？ひょっとして私に用？」

「ええ、実は……」

聞き返したジルにクロゼは明日の景気づけを兼ねて食堂で小さなパーティーをする事を言った。

「あら、いいじゃない。それじゃ、明日の学園祭の成功を祈つて騒ぐとしますか。パーティとやりましょ、パーティと…」

「ふふ、あまり羽目を外して明日に差し障りがないようにな。」

はしゃいでいるジルにコリンズは苦笑しながら言つた。

「はい。」

「それじゃ、ジル。食堂に行こつか。」

「ヨシコアさんやハンスさんも待っていますよ。」

「うん、行きましょ。」

そしてエステル達は食堂に向かい、にぎやかな一時を過ごし……最後に、劇の成功を祈つてソフトドリンクで乾杯した。その後寮に戻つてから、明日のために早めに眠りについた。

→メンフィル大使館・執務室・夜

「今日の分はこんなものか……」

ゼムリア大陸にあるメンフィル領の政務書類がある程度終わらせたリウイは一息ついた。そこにドアをノックする音が聞こえた。

コンコン

「誰だ?」

「私です、リウイ様。入つてもよろしいでしょうか?」

「ペテレーネか。入つて来て構わん。」

「失礼します……」

静かに入つて来たペテレーネは淹れ立ての紅茶が入つたカップをリウイの机に置いた。

「お疲れ様です。リウイ様。よろしければ、どうぞ。」

「すまないな。…………ふつ。」

「今日も一日、お疲れ様です。リウイ様。」

「お前もな。まあ、皇帝をやつていた頃に比べれば仕事の量は少ないがな……」

「フフ……シリヴァン陛下は今の倍以上の書類を捌いているそうで

すね。さすがリウイ様とシルフィア様のご子息様です。」

「シルヴァンには俺の後を継げるよう、俺自ら教育したからな……あれぐらい一人でこなしてもらわなければレスペレントの霸権を握る皇帝にはほど遠い。」

リウイの言葉にペテーネは微笑みながら答えた。そしてある事を思い出し、懐から手紙を出しそれをリウイに渡した。

「そういえば……」このよつた招待状が来ていましたが。

「見せてみる。…………」ああ、いつもの招待状か。もうそんな時期になつたのだな……」

「確かに毎年来ていますよね……？」ジェニス王立学園祭の招待状。

「ああ。こちらを拠点にしてから色々あつて、忙しかつたからな。今まで断つっていたが、今回はどうするか……」

リウイが考えていた時、執務室に備え付けてある通信機が鳴つた。

ジリン、ジリン！ジリン、ジリン！

「ん？こんな時間に誰だ？」

鳴り続ける通信機に首を傾げたリウイは受話器をとつた。

「……こちらメンフィル大使館、執務室。」

「久しぶりだな、リウイ！」

「……リフィアか。どこからここにかけた？」

「ん？今はルーアンのギルドの通信機でそちらにかけているが何かあるか？」

「いや、今はどこにいるか気になつただけだ。……それにしてももう、ルーアンか。件の少女の修行の旅は順調のようだな。それで俺に何の用だ？」

「うむ！実はな……」

リフィアは興奮した様子でプリネがエステル達といつしょに学園祭の劇に参加することを説明した。

「ほう、プリネが学園生活に参加した上、劇の役に……」

「うむ！一度だけ学園にプリネに会いに行つたが、学園生活を楽し
そつに話してくれたぞ。」

「フツ、そつか。後で学園長に礼の手紙を書かねばな……
リフィアの報告を聞いたリウイは口元に笑みを浮かべた。

「そんな事をするより、直接こちらに来て礼を言つたらどうだ？ち
ょうど明日はエステル達が受けた依頼内容を実行する学園祭だ。学
園祭は観光の一つで学園関係者以外の民達も客として来るそうだ
らな。ペテレーネを連れてこちらに来たらどうだ？ティア殿も帰省
のためにルーアンに来ているし、ティア殿を迎えて行くためにもど
うだ？」

「ほう……ティアもルーアンにいるのか……考えておひづ。」

「うむー。」

そしてリウイは受話器を置いた。

「あの、リウイ様。相手の方はリフィア様のようでしたが……」

「ああ。プリネがこの招待状に書かれてある学園祭で出す劇に役者
として参加するそつだ。」

「え！？どうしてそんな事に……？」

リウイの説明に驚いたペテレーネは聞き返した。そしてリウイはプリ
ネが学園祭に参加する経緯や学園で短期間学園で生活していた事
をペテレーネに伝えた。

「そうだったのですか……あの子もいい経験ができるようすで、何
よりです。」

「そうだな。…………ペテレーネ、急ぎの政務はあるか？」

「いえ。今のところは特にないです。」

「そつか……ふむ。毎年招待状を貰つてていることだし、今年は行
つてみるか？例の学園祭に。」

「え！？私も共にしてよろしいのですか！？」

リウイの提案にペテレーネは驚いて声を出した。

「あたりまえだ。お前の娘でもあるプリネが参加しているのだしな。
それにプリネが学園祭に参加することを言つてから、招待状に何度も目が行つてゐるぞ。」

「あう……すみません……」「

リウイに指摘されたペテレーネは顔を赤くして縮こまつた。

「気にするな。俺もプリネが劇に参加する事に少し興味が惹かれていたしな。息抜き代わりに行つてみるか。」

「はい！早速定期船のチケットの手配をしてきます！」

「おい、ひとつこの通信機を使えば……言つても無駄か。フツ……

……」「

リウイの言葉を聞いたペテレーネは自分の部屋に備え付けてある通信機を使って定期船のチケットを予約するために、急いで部屋を出た。その様子をリウイはいつもペテレーネらしくない行動に苦笑した。

そして学園祭当日……！

第74話（後書き）

とこり事で予告していた旧幻燃キャラはみなさんご期待のリウイで
す！リウイの出番はあまりありませんが、それでも要所要所で活躍
するので期待して下さい……感想お待ちしております。

まちに待つた学園祭の開始時間になると、劇が始まる時間になるとプリネはリフィアやエヴリースと共に学園を廻つて楽しみ、エスティルはヨシュアとクロ・ゼと共に学園を廻つて今までの旅で出会った人 ナイアル、メイベルとリラ、警備に来ている遊撃士のカルナに挨拶し、

フィリップと護衛の数名の私服を着ている親衛隊員を連れたデュナン公爵がいるのを見て苦笑した後、たまたま出会ったアルバ教授を社会科教室に案内した後、マーシャ孤児院の子供達と出会つた。

（ジエニス王立学園・正面玄関）

「あつ、姉ちゃんたち！」

クラムの声に気付いたエステル達は孤児院の子供達に近づいた。

「みんな……。来てくれたのね！」

クラム達を見てクロ・ゼは嬉しそうに答えた。

「ママ！」

「おつと。相変わらず甘えん坊ね、ミントちゃん。」

エステルの姿を見て抱きついたミントを受け止めたエステルはミントの頭を撫でながら言った。

「えへへ……だつてミント、ママに早く会いたかったもん。」

頭を撫でられて嬉しそミントは可愛らしい笑顔で答えた。

「あの……ご主人様は……？」

そこにエステル達の中にプリネの姿が確認できなかつたツーヤが尋ねた。

「プリネは今、他の人達と廻つてゐるわ。プリネに何か用？」

「はい。…………その”パートナー”の件がどうなつたか気になつて

……

「あ、そのことね。…………ミントちゅあん、ツーヤちゅあん。」

「はい。」

「ママ？」

真剣な表情になつたエステルにツーヤは緊張し背筋を伸ばし、ミントは首を傾げた。

「”パートナー”の件だけど……プリネ共々喜んで引き受けたわ。」

「本当！？わーい！」

「あの、本当にご主人様は私の”パートナー”になつてくれるって言つたんでしょうか？」

エステルのア承の言葉にミントは喜び、ツーヤは期待する田で確認した。

「うん。プリネも『私なんかでよければ、喜んでなります。』だつて。」

「そうですか…………よかつた…………」

「ふふ……。テレサ先生と一緒に来たの？」

一方ヨシュアといつしょにクラム達の相手をしていたクロゼは微笑みながら尋ねた。

「うん、そこで他の人と話をしてたけど……。あ、來た來た」「クラムは笑顔で後ろに向いた。そしてテレサがエステル達のところに近付いた。

「ふふ、こんにちは。」

「あ、テレサ先生！」

「先生……こんにちは。」

「今日は招待してくれて本当にありがとうございます。子供たちと一緒に楽しませてもらつてますよ。」

テレサは笑顔でエステル達に学園祭に招待してもらつたお礼を言った。そこにクラムとマリイが期待した田でクロゼに尋ねた。

「なあ、クローゼ姉ちゃん。姉ちゃんが出る劇つていづぐらいに始まるのです？」

「あたしたち、すつごく楽しみにしてるんだから」

「そうね……。まだ、ちょっとかかるかな。ちなみに、私だけじゃなくてエステルさんたちも出演するのよ?」

「ほんと? わあ、すつごく楽しみ~!」

「ヨシコちゃん、どんな役で出るのー?」

「えつと……何で言つたらいいのか……」

ポーリイの質問にヨシコは言葉を濁した。

「あはは……。見てのお楽しみみてね それより院長先生。まだ、マノリアにいるの?」

「はい、宿の方の」好意で格安で泊めて頂いています。ですが……

「??~」

閉口するテレサにエステルは首を傾げた。

「…………ねえ、みんな。劇の衣装、見たくない?
?綺麗なドレスとか騎士装束がいっぱいあるよ。」

「綺麗なドレス!~?」

「騎士しょーぞく!~?」

事情を大体察したヨシコは子供達に提案し、クラムやマリイが誰よりも早く期待した田で反応した。

「ふふ……。興味があるみたいだね。それじゃあ特別に劇の前に見せてあげるよ。」

「やつたあ!」

「ポーリイもいぐー。」

「ママ、ミントも行つていー?」

「うん。行つておいで。」

「わーい! ツーヤちゃんも行つー!」

「うん、ミントちゃん。」

(舞台の控え室にいるからあとからゆっくり来てよ。)

エステル達に小声で耳打ちしたヨシコは子供達を講堂に連れて行つた。

「ふふ、ヨシュアさんは本当に気が利く子ですね。ちょっと、子供たちの前では言ひづらうことだったのです……」

「それじゃ、ひょっとして……」

テレサが閉口していた意味がようやくわかったエステルは尋ねた。
「ええ、秘書の方が提案されたイーリュンの信徒の方々が経営する孤児院にお世話になる事に決心がつきました。これ以上、マノリアの方々に迷惑をかけられませんから。今日の学園祭が終わったらあの子たちにも打ち明けます。」

「そう……ですか……寂しくなるけど……仕方ありませんよね……」

テレサの決心にクロ ゼは暗い顔をして俯いた。

「ふふ、そんな顔をしないで。ロレントとはいっても飛行船を使えばすぐの距離です。それに私、ロレントに行ったら子供達の事はイーリュンの信徒の方々に任せて、仕事を捜そつと思っています。ミラを貯めて、いつかきっと孤児院を再建できるよう……」

「院長先生……」

「…………」

寂しそうな笑顔で話すテレサにエステルとクロ ゼはかける言葉がなく、黙っていた。

「そういえば、エステルさん。あなたとプリネさん、ミントヒツヤの事……決心してくれたようですね。」

「は、はい！あたしなんかがミントちゃんのママになれるか正直不安ですけど……頑張つてあの子を育てます！それとプリネはメンフィル帝国の大貴族の人ですから、プリネの傍にいるツーヤちゃんは輝かしい未来があると思いますから、安心して下さい！」

「そうですか……ありがとうございます、エステルさん。プリネさんにも後で改めてお願ひしに行くと伝えておいて下さい。さてと……。あの子たちの後を追いますか。ヨシュアさん一人に任せたおくわけにはいきませんからね。」

「

そしてエステル達は講堂の樂屋に向かったが、子供達だけがいてヨシュアはポーリイの銀髪の青年を見たという発言を聞くと、目を丸くした後出て行つた事を聞き、心配になつたエステルは子供達の事はテレサに任せ、クローゼと共にヨシュアを探した。

「ヨニス王立學園・旧校舎へ

「おかしいな……。確かに気配があつたはずなのに……でも、まさか……」

旧校舎の屋上でヨシュアは立ち尽くし、独り言を呟いていた。

「ヨシュア～！」

そこにヨシュアを見つけたエステルとクローゼが走つて近付いた。

「エステル、クローゼ……」

「もう、あんまり心配かけないでよね！ 銀髪男を追いかけたつていからビックリしちゃつたじゃない。」

「あれ……。何で知つてるんだい？」

「ポーリイちゃんが教えてくれたんです。あの子も見ていたらしく

……」

首を傾げてゐるヨシュアにクローゼが理由を答えた。

「そうか、鋭い子だな……。それらしい後姿を見かけてここまで追つてきたんだけど……。どうやら撒かれたみたいだ。」

「まあ……」

「ヨシュアを撒ぐなんて、そいつ、タダ者じゃないわね。いつたい何者なんだろ？」

「……わからない。ただ、孤児院放火の犯人じゃなさそうな気がする。あくまで、僕のカンだけどね。」

「そつか……。それにしても……どうして1人で行動するかな？」

「本当にそうですよ。私たちに伝言するなりしてくれればいいのに

……」

「「めん。心配かけたみたいだね。」

「

2人に軽く責められたヨシュアは謝罪した。

「べ、別に心配してないってば。あくまでチームワークの大切さを指摘しているだけであつて……」

素直に謝罪したヨシュアにエスティルは照れながら答えた。

「うふふ、ウソばっかり。さつきは、あんなに慌てていたじゃないですか？」

「そ、そんな事ないってば。そういうクローゼだつて真剣な顔してたクセにさ～。」

「そ、それは……」

「はは……。2人ともありがとう。」

2人の会話を聞き、ヨシュアは苦笑してお礼を言つた。その時、校内アナウンスが流れた。

「……連絡します。劇の出演者とスタッフは講堂で準備を始めてください。繰り返します。劇の出演者とスタッフは講堂で準備を始めてください。」

「そつか……。もうそんな時間なんだ。」

「はい、衣装の準備をしたらすぐに開演になると思います。」

「よーし、それじゃあいよいよ出陣つてわけね！あ、銀髪男の方はどうしよう？」

「そうだね……。カルナさんに伝えて注意してもらひしかなさそうだ」

その後エスティル達はカルナに銀髪の青年の情報を伝えた後、講堂に向かつた……

第75話（後書き）

もつたじぶるようですみませんが、次回はリフィアサイドの話です。ですから、みなさんお待ちかねのあのイベントは2日後に更新しますのでご了承下さい。……感想お待ちしております。

（ジエニス王立学園・中庭）

「……連絡します。劇の出演者とスタッフは講堂で準備を始めてください。繰り返します。劇の出演者とスタッフは講堂で準備を始めてください。」

「……どうやら、時間のようです。お姉様方。」

一方中庭でリフィアやエヴリーヌといっしょに軽くお茶をしながらおしゃべりしていたプリネは放送を聞き、緊張した。

「うむ！悔いのないよう、精一杯頑張つてくるがよい！」

「頑張つてね、プリネ。応援してるよ。」

「フフ、2人ともありがとうございます。では……行つてきます！」

リフィアの応援の言葉に微笑んだプリネは講堂に向かった。

「……お兄ちゃん達、来なかつたね。」

「うむ。……仕方ないと言えば仕方ないが、リウイやペテレーネにはぜひ観て貰いたかつたのだがな……」

プリネの走つて行く後ろ姿を見送り咳いたエヴリーヌの言葉にリフィアは残念そうな表情で溜息を吐き頷いた。

「……誰が来ないと言つた。」

「あ……」

「その声は……！」

大好きな人物の声が自分達の背後から聞こえ、期待した目をしたエヴリーヌとリフィアが振り向くとリウイとティア、髪を下し眼鏡をかけたペテレーネがいた。

「久しいな。2人とも。」

「お2人ともお元気そうで何よりです。」

「フフ、プリネさんが出でる劇には私も興味があつたのでこひりに来させていただきました。まさか、お父様とペテレー様もいらっしゃるとは思いませんでしたが……」

リウイとペテレーは相変わらずの2人に口元に笑みを浮かべ、ティアはなぜリウイ達といつしょにいるかの理由を説明した。

「お兄ちゃん!」

「おお、リウイ! それにティア殿も!ん? ペテレー、お前曰が悪かったか? 髮型もいつもと違うようだが……」

リウイ達の登場に喜びの声を上げたリフィアはこつもと違つ姿のペテレーに気付き首を傾げて尋ねた。

「あ、これは……その……変装です。」

「変装? なぜ、そんな事をする。」

「……無暗な混乱を起させないために一応念のためにさせた。」

.....ペテレーは日曜学校や新聞等で顔が割れているからな。」

「む? それを言つたら、リウイ。お前やティア殿もそうではないのか?」

リウイの説明にリフィアは不思議に思い、尋ねた。

「俺やティアは騒がれても対処できるが、ペテレーには難しいだろつからな……」

「あつ……すみません、リウイ様……」

「……別にいい。お前はこちらの世界に来るまで、公の場で皇族として出た事がなかつたのだから仕方ない。ゆつくりでいいから慣れていて。」

「リウイ様……」

自分を気遣うリウイの優しさにペテレーは顔を赤くした。

「フフ、お2人とも相変わらず仲がよくていいですね。それよりお父様。そろそろ向かいませんか? 劇ももうすぐ開演するようです。」

「そうだな。……一番後ろから観るぞ。その方が騒がれる可能性も少ないしな。」

ティアの言葉に頷いたリウイはペテレーネやリフィア達を連れて講堂に向かつた。

「ジニアス王立学園・講堂」

衣装に着替えたエステルは舞台脇からそっと観客達の様子を見た。
「うつわ～……。めちゃめちゃ人がいる～。あう～、何だか緊張しきた。」

「大丈夫ですよ、エステルさん。あれだけ練習したんですから。」「ええ、いつも通りやれば失敗はありません。」

用意されてある椅子が観客達によつてほぼ全て埋まっているのを確認し、緊張しているエステルに同じよつと衣装に着替えたクロゼやプリネが元気づけた。

「2人の言つ通りだよ。それに劇が始まつたら他のことは気にならなくなるさ。君つて、1つの事にしか集中できないタイプだからね。」

「む～、言つてくれるじゃない。でもまあ、そのカツゴじや何言わ
れても腹は立たないけど」

「う……」

エステルはセシリ亞姫の衣装を着ているヨシュアを見て笑つて答えた。まだ割りきれないヨシュアはエステルのからかう言葉に珍しく反撃できなかつた。

「はいはい。痴話ゲンカはそのくらいで。……今年の学園祭は大盛況よ。公爵だの市長だのお偉いさんがいるみたいだけど私たちが臆するこではないわ。練習通りにやればいいとのこと。」

「俺たち自身の手でここまで盛り上げてきた学園祭だ……。最後まで、根性入れて花を咲かせてやるとしようぜー。」

「お～!!!!!!」「お～!!!!!!」「お～!!!!!!」「お～!!!!!!」「ジルとハンスの言葉にエステル達は手を天井に上げて乗つた。そしてよいよ劇『白き花のマドリガル』が開演した……！」

第76話（後書き）

次回よりみなさんお待ちかねの『白き花のマドリガル』です。最後は驚く展開があるので楽しみに待っていて下さい。……感想お待ちしております。

～白き花のマドリガル～前篇

～ジユース王立学園・講堂～

ビ !

劇が始まる音がなると講堂内は暗くなり、アナウンスが入った。

「……大変お待たせしました。ただ今より、生徒会が主催する史劇、『白き花のマドリガル』を上演します。皆様、最後までじゅうくりお楽しみください……」

「……ちょうどいい時に入つて来れたようだな……」

そこにちょうどリウイ達が講堂に入つて来た。

「……椅子はもう埋まっちゃっているよ、お兄ちゃん。」

「ふむ、ならば適当な場所で立つて観るか。……2階に上がれるようだな。あそこなら観客達に気付かれにくいし、ちょうどいいな。そしてリウイ達は2階に移動して静かに劇が始まることを待つた。

しばらくすると語り手役のジルが出て来て劇のあらすじを語り始めた。

「時は七耀暦1100年代……。100年前のリベルールではいまだ貴族制が残っていました。一方、商人たちを中心とした平民勢力の台頭も著しく……貴族勢力と平民勢力の対立は日増しに激化していました。王家と協会による仲裁も功を奏しませんでした……。そんな時代……。時の国王が病で崩御されて一年が過ぎたくらいの頃……。早春の晩、グランセル城の屋上にある空中庭園からこの物語が始まります……」

語り終わったジルは舞台脇に引き上げ、照明が舞台を照らした。そこにはヨシュア セシリリア姫が舞台の真中に立っていた。

「街の光は、人々の輝き……。あの一つ一つにそれぞれの幸せがあるのですね。ああ、それなのにわたくしは……」

「姫様……。こんな所にいらっしゃいましたか。」

「そろそろお休みくださいませ。あまり夜更かしをされてはお身体に障りますわ。」

憂いの表情をしているセシリリアに侍女たちが近付いて来て気遣つた。「いいのです。わたくしなど病にかかりれば……。そうすれば、このリベルの火種とならずに済むのですから。」

「まあ、どうかそんな事を仰らないでくださいまし！」

「姫様はリベルの至宝……。よき旦那様と結ばれて王国を統べる方なのですから。」

「わたくし、結婚などしません。亡きお父様の遺言とはいえこればかりはどうしても……」

「どうしてで」「ぞこますか？　あのように立派な求婚者が2人もいらっしゃるのに……」

「1人は公爵家の嫡男にして近衛騎士副団長のユリウス様……」

「もう1人は、平民出身ながら帝国との紛争で功績を挙げられた猛将オスカー様……」

「「はあ～、どちらも素敵ですわ」」

侍女たちは声を揃えて憧れの声を出した。

「…………。彼らが素晴らしい人物であるのはわたくしが一番良く知っています。」

セリフを言いながらセシリリアは数歩前に出て、祈りの仕草をしてセリフを言った。

「ああ、オスカー、ユリウス……。わたくしは……どちらを選べばいいのでしょうか？」

（まあ、あのお姫様は……ヨシュアさんではありませんか。ふふ、男女の配役が逆とは……。ジルもなかなか考えましたわね。）

（はい、お嬢様。ただヨシュア様はともかく他のメイドの方はちょっと……）

劇の配役の一部を見たメイベルは微笑み、リラは侍女役の男性達に眉をしかめた。そして舞台の人物が代わり、今度はエステル 紅騎士ヨリウスとクロ ゼ 蒼騎士オスカーが出て来た。

「覚えているか、オスカー？幼き日、棒切れを手にしてこの路地裏を駆け回った日々のことを。」

「ヨリウス……。忘れることができようか。君と、セシリ亞様と無邪気に過ごしたあの日々……。かけがえのない自分の宝だ。」

「ふふ、あの時は驚いたものだ。お忍びで遊びに来ていたのが私だけではなかつたとはな……」

「舞い散る桜のごとき可憐さと清水のごとき潔さを備えた少女……。セシリ亞様はまさに自分たちにとつての太陽だつた。」

「だが、その輝きは日増しに翳りを帯びてきている。貴族勢力と平民勢力……。両者の対立は避けられぬ所まで来ている。姫の嘆きも無理はない……」

「そして……。ああ、何という事だろつ。その嘆きを深くしているのが他ならぬ我々の存在だとは……」

「2人ともこんな所にいたか。」

「『団長！』」「

語り合つてゐるヨリウスとオスカーの所にプリネ 騎士団長ザムザが近付いて來た。

「ヨリウス、公爵がお前を探してゐたぞ。」

「はつ……団長の手を煩わせてしまい……申し訳ありません！」

「オスカー、お前も議長がお呼びだつたぞ。」

「……申し訳ございません。すぐに参ります。」

ザムザの言葉にヨリウスとオスカーは敬礼して答えた。

「…………今、国は2つに分かれている。お前達がこうして顔を合わせ密談しているのはお前達にとってあまりいいことではないぞ。」

ザムザは厳かな口調で2人に忠告した。

「…………お言葉ですが、団長。私とオスカーは団長の元で共に剣を学んだ身……同門仲間と会話してはいけないのでしょうか？」

「…………」

コリウスの言葉にザムザは目を閉じて何も語らず去つて行つた。

(きやあきやあ！お姉ちゃんたちステキ！)

(ぐ、悔しいけど……男よりも格好いいかも……)

(ママ、カッコイイ！)

(ご主人様、凛々しいです……)

(ふふ……。静かに見ましょうね)

エスティル達の登場に小声で騒いでいる子供達にテレサは優しく諭した。

(あ……プリネです！リウイ様！)

(うむ！騎士団長役とは、さすが余の妹だな！)

(ん。エヴリーヌも鼻が高いよ。)

(わかっている、そうはしゃぐな。…………それにしても騎士団長役か…………中々役作りはできてるようだな。役といい、あの衣装服を見るとシルフィアを思い出すな……)

(フフ……シルフィア様を思い出せせるほどの演技と言われば、最高の褒め言葉ですよ、お父様。)

(…………)

一方プリネの登場に小声ではしゃいでいたペテレーネ達を諭したりウイだつたが、ティアの言葉に居心地が悪くなり押し黙つた。そしてまた舞台は変わり、貴族勢力筆頭の公爵とコリウスの会話の場面になつた。

「コリウスよ、判つておろうな。これ以上、平民どもの増長を許すわけにはいかんのだ。ましてや、我らが主と仰ぐ者が平民出身となつた日には……。伝統あるリベルの権威は地に落ちるであろう。」

「お言葉ですが、父上……。東に共和国が建国されてから一〇年ほど年の年月が流れました。最早、平民勢力の台頭も時代の流れなのではないかと。」

厳かな口調で話す公爵にコリウスは歩み寄つて答えた。

「おぞましいことを言うな！」

コリウスの言葉に公爵は席を立つて怒鳴つた。

「何が自由か！何が平等か！高貴も下賤もひとまとめにして伝統を捨てるそのあさましさ。帝国の軍門に下つた方がはるかにマシと言ふものよ……。」

公爵はコリウスに詰め寄つて怒鳴り続けた。

「父上！」

公爵の言葉にコリウスは信じられない表情で叫んだ。

「ヒック……。公爵の言つ事ももつともだ。平民どもに付け上がりせたら伝統は失われるばかりだからな。」

（閣下……。もう少し声を抑えめに……）

酔つているデュナンは劇の公爵の言葉に同意し、フィリップは慌てて諫めた。また、デュナンの言葉が聞こえたりウイは眉をひそめていた。そして舞台はオスカーと平民派代表の議長との会話の場面になつた。

「オスカー君。君には期待しているよ王家さえ味方に付けられれば貴族派を抑えることができる。そうすれば、我々平民派が名実ともに主導権を握れるのだ。」

議長は不敵な笑いをしながら言った。

「しかし議長……。自分は納得できません。」のよつた政治の駆け

引きにセシリ亞様を利用するなど……」

「フフ、なんとも無欲な事だな。いくら名目上の地位とはいえ王となるチャンスだというのに。君が拒否するといつのであれば流血の革命が起きるというだけ……。貴族はもちろん、王族の方々にも歴史の闇に消えて頂くだけのことだ。」

「議長！」

議長の言葉にオスカーは叫んだ。

（フム、大したものだ。時代考証もしつかりしている。最初、男女の役が逆と聞いていかがなものかと思いましたがな。）

（ふふ、生徒たち全員の努力のたまものでしそうな。それと協力をしてくれた若き遊撃士たちの……）

ダルモアの評価する言葉にコリングズは微笑みながら頷いた。そして舞台はオスカー一人の場面になった。

「流血の革命だけは起こさせるわけにはいかない……。ユリウスもセシリ亞様も死なせるわけにはいかない……。自分は……いつたいどうしたらしいんだ。」

惱むオスカーのところに酔っ払いが現れた。

「ういっく……。ううう……。だめだ……。気持ち悪い……」

「おつと、大丈夫か？あまり飲み過ぎるものではないな。いくら春とはいえこんな所で寝たら風邪を引くぞ。」

「うう……親切な騎士様……どうもありがとうございます。」

「騎士様はやめてくれ……。自分は大した人物ではない。何をすべきかも判らずに道に迷うだけの未熟者だ……」

酔っ払いの感謝の言葉にオスカーは暗い表情で答えた。

「まったくその通りだな。」

「なに？」

その時、酔っ払いがオスカーの腕をナイフで切った。

「くつ、利き腕が……」

オスカーは切られた腕を抑えて一步下がった。

「けけけ……。こいつには痺れ薬が塗つてある。大人しく觀念してもらおうか。」

「貴様……。何者かに雇われた刺客か！？」

「あなたが目障りというさる高貴な方のご命令でなあ。前払いも氣前が良かつたし、てめえには死んでもらうぜっ！」

（なーるほど……。なかなか見させてくれるじゃねえの。となるとこの次の展開は……。いかんいかん。危うく仕事を忘れるところだつたぜ。）

劇を見ていたナイアルは生徒達の演技や話の作りの上手さに感心した後、ある人物の監視を続けた。さらに舞台は変わりユリウスのセシリアへの求婚の場面に写つた。

「久しぶりですね、姫。」

「ユリウス……。本当に久しぶりです……。今日は……オスカーと一緒にではないのですね。お父様がご存命だったころ……宫廷であなた達が談笑するさまは侍女たちの憧れの的でしたのに。」

「……姫もご存じのように王国は存亡の危機を迎えていいます。私と彼が親しくすることは最早、かなわぬものかと……」

ユリウスの言葉にセシリアは目を伏せた。

「今日は姫に、あることをお願いしたく参上しました。」

「お願い……ですか？」

「私とオスカー……。近衛騎士団長と若き猛将との決闘を許していただきたいたいのです。そして勝者には……姫の夫たる幸運をお与えください。」

「……！」

ユリウスの求婚にセシリアは目を見開いた。

「……失礼します。」

そしてゴリウスは一礼し、去つた。

「…………ああ。…………どうとつこの日が来てしまつたのね…………どうすれば…………」

一人になつたセシリアは悲哀の表情になつた。そこに妖精役のパズモとマーリオンが舞台脇から現れた。

「まあ、あなた達はもしかして妖精さん！？」

パズモ達の登場にセシリアは驚いた。

（さて…………と。私も演技をしますか。）

パズモはセシリアの周囲を飛び回り、セシリアの肩に止まつた。

「セシリア様…………私達妖精は…………あなた達がまだ子供の頃から…………ずっと見てました。あなたの笑顔は…………私達妖精も…………何度元氣づけられ事か。…………今度は私達が…………恩を返す番です。…………どうかセシリア様が…………今したい行動を…………おつしやつて下さい。」

「…………ありがとう。じゃあ、一つお願ひしていいかしら？」

マーリオンの言葉にセシリアは微笑みながら答えた。

（あれは一体…………）

（わあ…………妖精さんだ！）

（学園長…………あの生物達は一体…………）

（…………わかりませぬ。お伽噺等で出てくる妖精のようにも見えますが…………そう言えばジル君が今回の劇は驚くところがあるから当田まで秘密と言つていたが、まさか妖精達を劇に出すとは…………一体どうやつたんだ？）

パズモとマーリオンの登場に講堂内は静かに騒ぎ出し、ダルモアの質問にコリンズは困惑しながら答えた。

（フツ…………まさか、マーリオンまで参加しているとは思わなかつたな…………）

小声で囁き合ひ観客達の声を気にせず、リウイは口元に笑みを浮かべた。

そしてこよこの劇『白き花のマドリガル』は終盤に差し掛かった……

～白き花のマドンガル～前篇（後書き）

感想お待ちしております。

～白き花のマドリガル～ 中篇（前半）

（ジユニス王立学園・講堂）

舞台の照明がいつたん消えて、語り手のジルを照らした。

「貴族勢力と平民勢力の争いに巻き込まれるようにして……親友同士だった2人の騎士はついに決闘することになりました。彼らの決意を悟った姫はもはや何も言えませんでした。そして決闘の日……。王都の王立競技場に2人の騎士の姿がありました。貴族、平民、中立勢力など大勢の人々が見届ける中……。セシリア姫の姿だけがそこには見られませんでした。」

語り終わったジルはまた舞台脇に引き上げ、照明が舞台を照らした。そこにはたくさん的人物達がユリウスとオスカー、そして審判役のザムザを見ていた。

「わが友よ。こうなれば是非もない……。我々は、いつか雌雄を決する運命にあつたのだ。抜け！互いの背負うもののために！何よりも愛しき姫のために！」

紅騎士ユリウスはレイピアを抜いてセリフを言った。

「運命とは自らの手で切り拓くもの……。背負うべき立場も姫の微笑みも、今は遠い……」

蒼騎士オスカーは辛そうな表情でセリフを言つて剣も抜かず立ち尽くした。

「臆したか、オスカー！」

「だが、この身に駆け抜ける狂おしいまでの情熱は何だ？自分もまた、本気になつた君と戦いたくて仕方ないらしい……」

自分を叱るユリウスに答えるかのようにオスカーはレイピアを抜いて構えた。

「革命という名の猛き嵐が全てを呑み込むその前に……。剣をもつ

て運命を決するべし！」

オスカーがレイピア構えるのを見て、コリウスも構えた。

「おお、彼らの誇り高き一人の魂、女神達もご照覧あれ！！女神達よ……誇り高い2人の剣士達にどうか祝福を！……2人とも、用意はいいな！？」

騎士団長ザムザがセリフを言いながら片手を天井に向けて上げ、コリウスとオスカーの顔を順番に見た。

「はつ！」

「応！」

「それでは……始めっ！」

ザムザの声と動作を合図にコリウスとオスカーは剣を交えた。

キン！キン！キン！キン！キン！キン！

2人は攻撃しては防御し、お互いの隙を狙つて攻撃したがどちらの攻撃もレイピアで防御され一撃が入らなかつた。

(……ほう。かの『剣聖』の娘だけあつて中々筋がいいな。得意な武器でないにも関わらずあそこまで動けるとは……。それにあの蒼騎士役をしている少女、あの者は確か……まあいい、今は一人の密として観させてもらおうか。)

リウイはエスティルの剣技に感心した後、クロゼの顔をよく見て、クロゼの正体がわかつたりウイはなぜクロゼが学園にいるのか首を傾げたが劇を観る事を優先し、気にしなかつた。

「やるな、コリウス……」

「それはこちらの台詞だ。だが、どうやら……いまだ迷いがあるようだな！」

2人は剣を交えながら語った。そしてコリウスが連続で攻撃を仕掛け、オスカーは攻撃を防ぐのに精一杯で反撃ができなかつた。

「くつ……。おおおおおおおお！」

オスカーは雄叫びを上げて何度も攻撃したが回避されたり、レイピアで防がれた。

「さすがだユリウス……。なんと華麗な剣捌きな事か。く……」

「オスカー、お前……。腕にケガをしているのか！？」

利き腕を抑えたオスカーにユリウスは不審に思つた後、ある事に気付き叫んだ。

「問題ない……カスリ傷だ。」

「いまだ我々の剣は互いを傷つけていない筈……。ま、まさか決闘の前に……」

強がるオスカーにユリウスは信じられない表情をした。その時控えていた議長が公爵に抗議した。

「卑怯だぞ、公爵！ 貴公のはかりごとか！？」

「ふふふ……言いがかりは止めてもらおうか。私の差し金という証拠はあるのか？」

議長の抗議の言葉に公爵は余裕の笑みを浮かべて答えた。

「父上……何ということを……！」

「いいのだ、ユリウス。これも自分の未熟さが招いた事。それにこの程度のケガ、戦場では当たり前のことだろ？」

「…………」

怒りを抑えているユリウスにオスカーは微笑みながら諭した。オスカーの微笑みを見たユリウスはかける言葉がなかつた。

「次の一撃で全てを決しよう。自分は……君を殺すつもりで行く。」

「オスカー、お前……。わかつた……。私も次の一撃に全てを賭ける。」

オスカーの決意にユリウスは静かに答えた。そして2人は同時に後ろに飛び退いてレイピアを試合前の構えにした。

「更なる生と、姫君の笑顔。そして王国の未来さえも……。生き残つた者が全ての責任を背負うのだ。」

「そして敗れた者は魂となつて見守つていいく……。それもまた騎士の誇りだらう。」

ユリウスの言葉にオスカーは頷いた。

1 応
運 遣しなし

卷之二十一

そして2人は互いに口を開いた後同時に口を見開いて力を溜めた。

「ハアッ！」

力を溜めた2人は

卷之三

セシリアが間に入つた。

「あ

如
題

2人の最後の一撃を受けて

2人の最後の一撃を受けてしまったセシリ亞は体をくずした。セシリ亞に気付いた2人は信じられない表情をした後、セシリ亞に駆け寄った。

「アーリー・スケル」

「セシリア、どうして……。君は欠席していたはずでは……それにこの決闘場には私達以外入らない用、兵達が封鎖していたのに……」セシリアの体を支えながら語りかけるオスカーにセシリアは優しく笑つて答えた。

「よ、よかつた。オスカー、ユリウス。あなたたちの決闘なんて見たくありませんでしたが。どうしても心配で……戦うのを止めて欲しくて……。ああ、間に合つてよかつた……妖精さん……私の……願い……聞いてくれて……ありがとう……」

十九
木ノ葉

(ヨシユアつたら、演技が本当に上手いわね……)

セシリ亞のために兵達を氣絶させた妖精達が悲しそうな表情でセシリ亞を見た。

「セシリ亞……」

「ひ、姫……」

ユリウスとオスカーはセシリ亞にかける言葉がなかつた。そしてセシリ亞は傷ついた体でその場にいる全員に語つた。

「皆も……聞いてください……。わたくしに免じて……どうか争いは止めてください……。皆……リベルの地を愛する大切な……仲間ではありませんか……。ただ……少しばかり……愛し方が違つただけのこと……。手を取り合えば……必ず分かり合えるはずです……」

「お、王女殿下……」

「もう……それ以上は仰いますな……」

セシリ亞の言葉に公爵と議長は膝を折つた。

「ああ……目がかすんで……。ねえ……2人とも……そこに……いますか……？」

「はい……」

「君の側にいる……」

ユリウスとオスカーはセシリ亞の手を握つた。

「不思議……あの風景が浮かんできます……。幼い頃……お城を抜け出して遊びに行つた……路地裏の……。オスカーも……ユリウスも……あんなに楽しそうに笑つて……。わたくしは……2人の笑顔が……だいすき……。だ……から……どうか……。いつも……笑つて……いて……。」

そしてセシリ亞は幸せそうな表情で力尽きたようにセシリ亞の腕から力が抜けた。

「姫……？嘘でしょう、姫！頼むから嘘だと言つてくれええ！」

「セシリ亞……自分は……」

ユリウスはセシリ亞の身体を何度も揺すつて呼びかけ、オスカーは

セシリアの身体を抱きしめた。

「姫様、おかわいそうに……」

「ああ、どうしてこんな事に……」

侍女たちは顔を伏せて悲しんだ。

「ク……私は結局何もできず、姫の命をお守りすることすらできなかつた……自分が情けない……！騎士団長失格だ……！」

ザムザは無念そうな表情で悲しんだ。

「殿下は命を捨ててまで我々の争いをお止めになつた……。その気高さと較べたら……貴族の誇りなど如何ほどの物か……。そもそも我々が争わなければこんな事にならなかつたのに……」

「人は、いつも手遅れになつてから己の過ちに気がつくもの……。これも魂と肉体に縛られた人の子としての宿命か……。エイドス、イーリュン、アーライナよ、大いなる女神達。お恨み申し上げますぞ……」

自分達の今までの行動でセシリアを苦しめた事を反省する公爵に同意した議長は空に向かつて呟いた。

「まだ……判つていないうですね。」

その時、空が明るく照らし出され、3つの光が出た。

「……確かに私はあなたたちに器としての肉体を与えました。しかし、人の子の魂はもつと氣高く自由であるはず。それをおどしめているのは他ならぬ、あなたたち自身です。」

「ま、眩しい……」

「何て綺麗な声……」

「おお……なんたること一方々、畏れ多くも女神達が降臨なさいましたぞ……」

見守っている貴族の娘達は感動し、王都の司教が叫んだ。また、ユリウスとオスカーを除いたその場にいる全ての者達が空を見上げた。

「これが女神……」

「なんという神々しさだ……」

ユリウスとオスカーも空を見上げた。

「若き騎士たちよ。あなたたちの勝負、私も見させてもらいました。
なかなかの勇壮さでしたが……肝心なものが欠けていましたね。」

「仰るとおりです……」

「全ては自分たちの未熟さが招いたこと……」

女神の言葉にユリウスとオスカーは無念そうに語った。

「議長よ……。あなたは、身分を憎むあまり貴族や王族が、同じ人である事を忘れてはいませんでしたか？」

「……面目次第もありません。」

「そして公爵よ……。あなたの罪は、あなた自身が一番良く判っているはずですね？」

「…………」

女神の一人、エイドスの言葉を受けた2人は自戒した。

「そして、今回の事態を傍観するだけだった者たち……。あなたたちもまた大切なものがかけていたはず。胸に手を当てて考えてごらん下さい。」

「…………」

侍女や貴族、その場にいる全員が黙つて考え込んだ。

「ふふ、それぞれの心に思い当たる所があるようですね。ならば、リベルにはまだ未来が残されているでしょう。今日という日のことを決して忘れる事がないように……イーリュン殿、アーライナ殿……今だけ力を貸し下さ……」

「わかりました……」

「……仕方ない。今回だけ特別に我が”混沌”が起こす奇跡を使つてやるつ……」

そして女神達の光は消えて行つた。

「ああ……」

「消えてしまわれた……」

「…………ん……」

女神達がいなくなつた事に肩を落とした侍女たちだが、その時セシリ亞が声を出し起き上がつた。

「あら……！」は

「ひ、姫！？」

「セシリ亞！？」

「セシリ亞様……！」

（さてと……長かつた劇もこれで終りね。）

目覚めたセシリ亞にユリウスとオスカーは驚いた表情で呼びかけ、マーリオンはセシリ亞に駆け寄り、パズモはセシリ亞の肩に止まつて心配げな表情でセシリ亞を見た。

「まあ……コリウス、オスカー……それに妖精さん達も。まさか、あなたたちまで天国に来てしまつたのですか？」

「――」

セシリ亞以外は驚いて言葉が出なかつた。

「――、これは……。これは紛う方なき奇跡ですぞ！」

セシリ亞が生き返つた事に司教は驚愕した。そして侍女たちがセシリ亞に駆け寄つた。

「姫様！」

「本当に、本当に良かつた……」

「きやつ……。どうしたのです2人とも……。あら……公爵……議

長までも……。わたくし……死んだはずでは……」

（まあ……エイドスだけでなく、我が主神イーリュンやアーライナまでお力に……フフ、お芝居とは言え違う考えを持つ女神達が力を合わせるなんて素敵ですね、ペテレーネ様。）

（ええ……幻燐戦争の時、ティナさんといつしょに傷ついた方達を癒すために戦場を駆け回つたあの頃を思い出します、……）

ティアとペテレーネは劇の内容の奇跡に微笑みを浮かべた。

「おお、女神達よ！よくセリベールの至宝を我らに返しちださつた！」

「大いなる慈悲に感謝しますぞ！」

公爵と議長は天を仰いだ。

「オスカー、ユリウス……。あの……どうなつているんでしょう？」

自分だけ事情がわかつていなセシリアは2人に尋ねた。

「セシリア様……。もう心配することはありません。永きに渡る対立は終わり……全てが良い方向に流れるでしょう。」

「甘いな、オスカー。我々の勝負の決着はまだ付いていないはずだろう？」

「ユリウス……」

「そんな……。まだ戦うというのですか？」

また決闘をしそうな言葉を聞いたセシリアは不安そうな表情をした。そしてユリウスは静かに首を横に振つて語つた。

「いえ……。今回の勝負はここまでです。何せ、そこにいる大馬鹿者が利き腕をケガしておりますゆえ。しかし、決闘騒ぎまで起こして勝者がいないのも恰好が付かない。ならば、ハンデを乗り越えて互角の勝負をした者に勝利を！」

「待て、ユリウス！」

「勘違いするな、オスカー。姫をあきらめたわけではないぞ。お前の傷が癒えたら、今度は木剣で決着をつけようではないか。幼き日のように、心ゆくまでな。」

「そうか……。ふふ……わかった、受けて立とう。」

ユリウスの言葉に驚いたオスカーだったが、不敵な笑みを浮かべて答えたユリウスに微笑んで頷いた。

「もう、2人とも……。わたくしの意見は無視ですか？」

「そ、そういうわけではありますんが……」

「ですが、姫……。今日の所は勝者へのキスを。皆がそれを期待しております。」

「……わかりました。」

そしてセシリ亞がオスカーに近付き、キスをした。

「きやあきやあ」

「お二人ともお似合いです」

「侍女たちはセシリ亞のキスしていくのをはやしたてた。

「女神達も照覧あれ！今日とこいつ起き上がりにつまでも続きますよつに！」

「リベルに永遠の平和を！」

「リベルに永遠の栄光を！」

「リベルに永遠の誇りを！」

ユリウスが叫んだ後、公爵や議長、ザムザがそれぞれ叫んだ。その

時……！

～白い花のマドンガル～ 中篇（前半）（後書き）

次回は驚く展開があるので楽しみにしておれ。……感想お待ちしております。

～白き花のマドンガル～中篇（後半）（前書き）

原作知っている人は前話で劇は終わっているはずなのに、まだ続きがある事に首を傾げていると思いますが今回の話を見ればわかります。

～白き花のマドリガル～中篇（後半）

ジエニス王立学園・講堂

「ヒック……ふざけるな！」

卷之三

一巻前回の戻り馬した酉
一 しる子 二三木不 恒 恒一 が 現 恒一 口
び、舞台に上がつて来た。いきなり現れた乱入者に生徒や観客達は

「何故平民」ときに勝利を譲らなければならぬ！王族である」の

な
な
」

酔ってエスティルを指差して叫ぶテュナンにエスティルはあまりにも驚いて声が出なかつた。そこにフィリップが慌てた様子でその場で立ち上がりつてテュナンに叫んだ。

「トセー！」

「黙れ、フィリッフ！！！親衛隊よ、あえい！！！」

ばれた親衛隊達は困惑しながら舞台に上がつて來た。

鉄槌を降せよ！」

「閣下！ それほいくらなんでも！」

デュナンの言葉に親衛達達は信じられない表情で反論した。

「デユ、デュナン公爵！？」

「なんという事を……」

テュナンの行動にタルモアは驚き、コリンズは信じられない表情をした。

(おいおいおい……！まさか学園祭でこんなスクープが出るとは思わなかつたぜ……！カメラは……クソ！そりいえ、講堂に入場した時に劇の間は撮影禁止だからって預けられたんだつた！これじや、記事にできねえ……！)

(あの方は……！どこまで閣下を困らせるつもり……！)

一方ナイアルは驚いた後、記事の証拠にするためにカメラを探したが持つて来てないことに気付き悔しがり、観客の一人として來ていたカノーネは表情を歪めた。

(なつ…………！あの…………放湯者が…………！プリネやエステルとヨシュア、そして生徒達がお互に協力しあい、成功したせつかくの劇を穢しおつて…………！)

(…………あいつ、殺していい？お兄ちゃん…………！)

(…………落ち着いて下さい、お一人とも！民衆や生徒達の田の前で血の雨を降らすつもりですか！？)

(しかし、ティア殿…………！）のまま指を加えて觀てゐる訳には……！

観客達がざわめいている中、デュナンの行動に驚き、怒りを抱いたリフィアとエヴリースはそれぞれの武器を出して、いつでもデュナン達を攻撃できる態勢に構えたがティアに諫められた。

(…………ペトレーネ、ティア。お前達はリフィア達を抑えていろ。)

(え！？)

(何をなさるつもりですか、お父様！？)

リウイの言葉にペトレーネとティアは驚き、リウイが何を考えているのか尋ねた。

(…………田には田を、歯には歯を……だ。何、殺したりはしない。王として少し炎を据えてやるだけだ。)

(あ、リウイ様！）

ペトレーネの驚きの声を背中に受けた後リウイは2階から飛び降り、

愛剣をいつでも抜けるよつた態勢で気配を消して舞台へ走った。

「ああ、まずはあのユリウスとやらを痛い目にあわすがよい！
「し、しかし……！」

「つべこべ言わずに行け！王族の命令に逆らつ氣か！？」

「く……（すまない、生徒達！命令に逆らえない自分達を存分に
呪つてくれ！……申し訳御座いません、ヨリア隊長！）ハツ！」「
デュナンの命令に逆らえない親衛隊の一人が悔しそうな表情で鞘から
レイピアを抜き、エステルに襲いかかった。

「くつ！何がなんだかわかんないけど、やつてやるわ！」「

「エステル！」

「エステルさん！」

（エステルさんをやらせはしません！）

レイピアを構えて迎撃の態勢に移つたエステルにヨシュアやクロ
ゼは役を忘れて叫び、プリネは競技用のレイピアを構えてエステル
に襲いかかつた親衛隊員を攻撃しようとしたその時

キン！

舞台上に乱入したリウイが愛剣で親衛隊の攻撃を防いだ。

「な！？」

「え……」

リウイの登場に攻撃を防がれた親衛隊員は驚き、エステルはレイピ
アを構えたまま呆けた。

「フツ！」

「うわ！？」

リウイと剣を交えた親衛隊員は鍔迫り合いに負けて吹き飛ばされた。

（お、お父様！どうしてここに……！？）

父の背中を見たプリネは、一目でリウイとわかり、驚いた。

「…………プリネ。舞台にいる生徒達全員を下がらせろ。」

驚いているプリネにリウイは静かに言った。

「（お父様……。）せめて、滅茶苦茶になつた劇の雰囲気を戻さないと！……確かに『剣帝ザムザ』の主人公のライバル役がいましたね。……よし、そのライバル役の名前でこの場を誤魔化しましょう。……お父様やエステルさん達が私の意図に気付いてくれればいいのですが……）おお！貴公は誰にも仕えない自由騎士として名高い黒騎士ミリガン！まさか、このよつやな窮地に助太刀してくれるとは……ありがたい！」

なんとか観客達に今の状況も演出することに思わせるために、プリネは一瞬で考えてリウイの役者名とセリフを言った。そしてプリネの意図に気付いたクロゼとヨシュアが即座に思い付いたセリフで劇の雰囲気を戻そうとした。

「なんと……！騎士団長以上の強さと言われるあの”黒騎士”……」

「まあ……！どうしてリベルルに……？」

セシリシア姫の口調でヨシュアはリウイが自分達の意図に気付いてくれる事を祈つてリウイに問いかけた。

「（…………フツ、なるほど。今の状況すら利用して劇を成功させるつもりか。……プリネも考えたな。……いいだろ？、ここは父親として娘の願いを聞いてやるか……）…………長年追つていたさまざまな国で王家を語る偽物の集団の足取りがよつやく掴めたから、今ここにいる……それだけだ。」

プリネ達の意図を理解したリウイは一瞬口元に笑みを浮かべた後、厳かな口調で言った。

「なつ！？この私が偽物だと！？」

リウイに偽物と言われたテュナンは顔を真っ赤にして怒った。

（なうんだ。芝居だつたのか。ビックリしたぜ〜。）

（…………本当に芝居かしら？）

（ママ……）

（「主人様……）

プリネ達のフォローのお陰で孤児院の子供達はある程度信じたが、マリイは疑い、ミントとツーヤは心配した。

(あら? の方は……!)

(リ、リウイ皇帝陛下! ? まさか、来ていらしていたとは……!)

(なんと……!)

(ん……? ……! ? おいおいおいおい! ! なんであんな大物があそこにいるんだ! ?)

リウイの乱入に驚いた後、リウイの姿を凝視したメイベルやコリンズにダルモア、ナイアルは驚愕した。

「(小父様……すみませんが、今回はあの子達のために心を鬼にさせでもります……! それにさすがに私自身も許せません……!) なんと! そのような輩がいたとは……! 王国を守る騎士の一人として援護致します!」

「いや……オスカー、お前は利き腕を負傷している。ミリガン殿の足手まいになるからやめておけ。」

「例え利き腕を負傷していたとしても、自分は戦えます!」

親衛隊員達やデュナンをリウイと共に迎撃しようと思つたクロゼはレイピアを抜いて言つたが、プリネの言葉に驚いた。

「オスカー、お前は騎士団長と共にこの場にいる全員を避難させろ。」

「ゴリウス! ? お前まで何を言つ!」

ようやく事情がわかつたエステルは自分なりに考えたセリフを言つて、クロゼを驚かせた。

「……賊は姫様や父上に議長、そして民達を狙つているのだ。この場で守れるのは自分とオスカー、そして騎士団長だけだ。騎士団長だけでは人手が足りない。だから、オスカー! お前は騎士団長と共に姫様や民達を護れ! ここは自分と黒騎士殿が抑える!」

「ゴリウス……わかった! 皆! 自分と騎士団長に着いて来てくれ! 命に代えても皆の命を自分が守る!」

自分達を避難させようとしているエステルの意図を理解したクロゼは迷つたが、エステル達に任せる事を決断して、生徒達やパズモ達に呼びかけた。

「コリウス！……気をつけろよ…」

「オスカー、お前もな！……団長、お願いします！」

「わかった。……まあ、姫様。こにはコリウスに任せて非難を…」

プリネはヨシュアに舞台脇に引っ込むように促した。

「コリウス！」

「……心配なさらないで下さい、姫。このコリウス、賊」ときでやられなどしません。必ず姫の元に参ります。」

「……約束……ですよ。」

そしてエステル、プリネ、リウイ以外は全員舞台脇に引っ込んだ。

「ミリガン殿！……こちらの剣を！」

プリネは自分が持っている競技用のレイピアを鞘に収めたままリウイに投げた。投げられた鞘をリウイは振り向いて取った。

「私は予備の剣があります！ですから私に代わり、賊達に裁きを…」

「（……フツ、なるほど。競技用で刃が落とされているから多少本気を出しても重傷を負わす心配はないな。観客達の事も考えたの上とは、なんとしても劇を成功させたいようだな。）ありがたく、団長殿の剣を今だけは使わせていただく。だから、団長殿は姫や民達の守りに専念するがよい。」

「はい！」

そしてプリネも舞台脇に引っ込んだ。リウイは、愛剣を鞘に収め競技用のレイピアを鞘から抜いて構えた。エステルもリウイの横に並ぶような位置でレイピアを構えた。そしてエステルは小声でリウイに話しかけた。

（どこの誰だか知らないけど、あたしも戦わせてもらうわー）

（……こんな雑魚共、俺一人で十分だ。なぜお前も戦う？）

（そんなの決まっているじゃない！今までみんなが楽しみにして

いたあたし達の劇を滅茶苦茶にしたあのオジサンが許せないに決まつていいでしょ！一発ブツ飛ばさないと気がすまないわ！）

（……そ、うか。武器はそれで大丈夫か？）

（う……実はちょっと自信がなかつたり……父さんやプリネに習つてある程度はできるけど、棒とは勝手が違うし……カーッとなつてついこの場に留まつちゃつたのよね……）

リウイの言葉にエスティルは図星をされたかのような表情で答えた。（……仕方ない。俺が戦いながら指示する。お前はそれに従つて戦え。）

（えー？あなたってそんな事できるのー？もしかして凄く強い？？）

（……話は終わりだ。俺は2人を相手にしてやる。お前は残りの1人を相手しろ。）

（あ、ちょっとーあなたの名前は？）

（何？この場で答える必要はないだろ？）

エスティルの言葉にリウイは疑問に思つて聞き返した。

（いっしょに戦う仲間なんだから、仲間の名前を知つて当然でしょ？あたしの名前はエスティル！エスティル・ブライトよ！あなたは？）

（…………リウイ。そう呼んでもらつて構わん。）

「（リウイね！（あれ？なんか、どつかで聞いた事があるような……？まあいいわ！））さあ、賊共をリベルから追い出しましょう、黒騎士殿！！」

「ああ…………行くぞ！」

今ここに少女と闇の英雄王の運命が交わり、そして2人の共闘が始まった…………！

～白き花のマドンガル～中篇（後半）（後書き）

ところで事でみなさんもこっちは期待していたであらう、リウイ、H
ステルの両雄共闘です！－いやあ～自分で書いててワクワクしまし
た！…感想お待ちしております。

～白き花のマドンガル～後篇（前書き）

今回のイベントバトルのBGMは”銀の意思”か”Formidable Enemy”、Inevitable Struggle”が流れていると思って下さい。

～白き花のマドリガル～後篇

王室親衛隊員達VSリウイとエステル。エステルにとつては慣れていない武器と初めて共に戦う仲間であり、どんな戦い方をするかわからないリウイがいる上、数も敵が上の状況で戦いは厳しいと思われた。しかし

（ジエニス王立学園・講堂）

「喰らえ！」

「甘い！」

「うわー？」

2対1という普通なら不利な状況でリウイは余裕の表情で親衛隊員達の攻撃を捌き、吹っ飛ばした。さらに

「左を狙つての突きがくるぞ！身体を右に傾けろ！」

「なっ！？」

「了解！」

親衛隊員の攻撃を読みとり、エステルに回避の指示をした後、反撃の指示をした。

「その状態から斬り上げろ！」

「ヤアツ！」

「グ……！」

エステルの反撃に親衛隊員は驚き、後退した。

「すかさず突けッ！」

「はっ！」

「くつ……！」

崩れた態勢を直そうとした所にリウイの指示によつてのエステルの攻撃に親衛隊員は驚いて、剣で防御した。

「くつ……挟み撃ちして交互に攻撃するぞ！」

「ああ！」

リウイの強さに2人の親衛隊員は素早くリウイを挟み撃ちした。そしてリウイの正面に移動した親衛隊員が攻撃を仕掛けた。

「セイツ！」

「フツ！」

「そこだつ！」

正面からの攻撃を防御しているリウイに背後から襲つた。しかし「狙いは悪くない。……しかし相手が悪かつたな！そこだつ！」

「カハツ！？」

武器を持つていない手で競技用のレイピアを収めていた鞘で背後の敵の腹を相手の勢いを利用して突きさした。勢いよく襲いかかった背後の親衛隊員は自らの勢いのよさのせいで腹に強烈な一撃が入り、剣を落として蹲つた。そしてリウイは落とした剣を足で舞台脇まで蹴り、目の前の敵を無力化するためにまず敵の武器の一点に集中攻撃した。

「行くぞ……！」

「うわわわ！（は、速すぎて攻撃が見えない……！）」

リウイの神速の連続突きに親衛隊員は慌てて防御したが、攻撃が見切れずリウイの攻撃によつて自分に伝わる衝撃に手が踊らされた。その隙を逃さずリウイは持つている武器に鬪気を込めて技を放つた！

「フェヒテンアルザ！！」

「なつ……！剣が……！」

リウイの一点集中攻撃に耐えられず、親衛隊員の持つていたレイピアが折れて武器として使い物にならなくなつた。武器が壊れて驚いている親衛隊員にリウイはすかさず強烈一撃を放つた！

「セアツ！」

「ガ……」

高威力を持つ突剣技 フェヒテンケニヒを正面から受けてしまつた親衛隊員はその場でくずれ落ち、一度と立ち上がらなかつた。そ

してリウイは武器に魔力を纏わせて魔法剣を自分が相手した2人に放つた！

「風よ！ ウィンディング！」

「ぐわっ！？」

風属性の魔法剣を受けた2人は悲鳴を上げて、デュナンの足元まで吹っ飛んだ。

「ひつ……！ な、何をしているのだ！ お前達は親衛隊員だろ！ なんとかしろ！」

自分の足元まで吹っ飛ばされた2人にデュナンは悲鳴を上げて、残りの一人に文句を言った。

「か、閣下……！ そんな無茶な……」

「隙あり！」

「うわ！？ しまった！…」

エステルの攻撃をレイピアで防いでいた最後の一人はデュナンの言葉に顔だけデュナンに向けて答えた。そしてエステルは防御が疎かになつた親衛隊員を逃さず、力を入れて親衛隊員をのけ反らせ、ある構えをした。

「確か、プリネがやつているクラフトってこんな構えだつたわね。…リウイつて人の技を見たお陰でちょっとと思いついたわ……いつちょ、やってみますか！」

共に戦つているプリネのクラフトの構えを思い出し、リウイのクラフトを真近で見たエステルは試しに先ほどのリウイが放つたクラフト フェヒテンアルザの攻撃前に似た構えをした。

（え！？あの構えは！）

舞台脇で生徒達といつしょにエステルとリウイの共闘を見守つていたプリネはエステルの構えを見て驚いた。

（おいおい……王国軍の中でも精銳の強さと言われる親衛隊員がみんなにあつたりやられるとか、エステルの横で戦つている人って何者だ！？）

一方ハンスはリウイの強さを目に驚愕した。

(…………まさか、の方が学園祭に来てらしてたなんてこの後、どうすれば…………)

リウイの正体がすぐにわかったクロ ゼは驚いた後、今後の事を考え不安そうな表情をした。

「行くわよ……！ フエヒテンイング！！」

「うわっ！？」

鬪気を纏つた連続攻撃のクラフトであり、メンフィル皇家に伝わる皇技 フエヒテンイングをエステルは最後の一人に向かつて放つた。親衛隊員はエステルの鬪気の籠つたクラフトを受けて膝をついた。そこを逃さず、エステルはさらに弱めの威力に調節して、レイピアに暗黒魔術を纏わせた。

「吹つ飛べ！ 黒の衝撃！」

「ぐはっ！」

エステルがレイピアを一振りすると、レイピアに纏つていた暗黒魔術が親衛隊員を襲い、デュナンの足元まで吹つ飛ばした！

「ひ、ひいい……！」

自分の護衛が全てやられた事を理解したデュナンは逃げようとしたが「部下をほおって、どこに行く気だ？」

「ひ！ い、一つの間に！？」

いつの間にかデュナンの背後にいたリウイにぶつかり、デュナンは腰を抜かしてうめいている親衛隊達のところまで情けない姿で後退した。

「さてと。邪魔者はそろそろ退散してもうひわよ……！ 行くわよ、

リウイ！」

「…………いいだろう！」

観客に聞こえないぐらいの声の大きさのエステルの呼びかけに頷いたリウイは、やや離れた場所で魔法剣を放った！

「舞い上がり！！」

「「「うわあつ！？」」

「お、おわ～！？」

魔法剣によつてできた風がデュナン達を襲い、デュナン達を空へ舞い上げた。

「せいっ！」

「「「ガハッ！？」」

舞い上がり、落ちて来たデュナン達にエステルは飛び上がって、クラフト 捻糸棍を放つ用法で剣で闘氣でできた衝撃波をデュナン達の頭上から放ち、デュナン達を叩き落とした！そして叩き落とされたデュナン達に向かつて着地したエステルはリウイと共に挟み撃ちして闘氣を込めたレイピアで息もつかぬ連撃を放つた！

「はああああああつ！」

「オオオオオオオオツ！」

エステルとリウイは叫びながら何度もデュナン達を斬りまくつた！2人の闘氣の籠つた斬撃は余波で衝撃波をうみ、その衝撃波がデュナン達を再び空中へと舞い上がらせた！

「「「ぐわあああ…………！」」

「ぎやあああつ…………！？？」

エステルとリウイの猛烈な攻撃にデュナン達は悲鳴を上げた。

「はあつ！」

「セアツ！」

2人の猛烈な攻撃はやがて終わり、最後の攻撃でデュナン達をまた空高くへと舞い上げた。そして2人は並び、同時に目を閉じた状態で突きの構えで魔力を剣に溜めた。

「はああああああつ！」

「オオオオオオオオツ！」

同時に目を見開き、魔力によつてエステルの剣には雷が、リウイの剣には暴風が宿り、2人は落ちてくるデュナン達に同時にそれぞれの渾身の一撃を放つた時、それらは併せ技となつた！光に生き、誰

からも愛された少女と、闇の中で生き、ほとんどの同族達からは半端者として忌み嫌われ、自分の事をひた向きに慕う少女の存在に気付かず孤独に育つた王が放つ嵐のような激しさの連撃と威力。その技の名は……！

「「奥義！太極嵐双剣！！」」

リウイが放つた暴風の魔法剣にエステルの放つた雷の魔法剣が混ざり、デュナン達に襲つた！

「「「ギヤあああ…………！」」」

暴風に混ざつた雷に感電したデュナン達は悲鳴をあげながら、暴風によつて観客達の頭上を越えて入口まで吹つ飛ばされた！

「…………！」

「「「「うわああああ…………ガ…………！」」」

「か、閣下…………！」

入口付近にいた銀髪の青年は吹つ飛ばされて来たデュナンに気付き、身体を少し横に向けて回避した。そして入口を越えたデュナン達は門がある壁まで吹つ飛び、氣絶した。そしてデュナンを心配したフイリップは吹つ飛ばされたデュナンを追つかのように、講堂から去つて行つた。

(おお！さすがリウイ！見事な裁きじや！それにまさか、エステルとの共闘が見れるとは…………！)

(さすがリウイお兄ちゃん！惚れ直しちゃいそ？…………キヤハッ！)

(もう！お父様つたらどこが『少し炎を据える』ですか！完全にやり過ぎではありますんか！…………すみません、ペテレーネ様。私はちよつと失礼します！)

リウイとエステルの活躍にリフィアとエヴリー・ヌは喜び、ティアはやり過ぎた攻撃に怒つて、その場から去りうとしたところをペテレーネが呼び止めた。

(あ、ティアさん…どちらへ行かれるつもりですか?)

(決まっていますーお父様達に追い出された方達の傷を癒します。

競技用の剣でしたから、傷は酷くないと思うのですが一応念のため

に癒しておきたいのです。)

(あ、でしたら私も手伝います。リフィア様、エヴリーヌ様。もつ、
お一人の怒りは收まりましたよね?)

(うむーここは心配ないから、お前はティア殿といっしょに行つて
くるがいい!)

(ありがとうございます。…ティアさん、行きましょう。)

(はいー)

そしてペテレーネとティアはその場を離れ、急いでテュナン達の元
に向かつた。

「…………俺の役割はここまでだ。後は任せせる…………」

剣を鞘に収めたりウイはエステルに剣を渡して言った。

「いつかまた、貴殿と会える日は来るだろうか…………?」

エステルは自分の役割を思いだし、再び紅騎士ヨリウスになりき
り、本心も込めたセリフを言った。

「…………縁があればまたいつか、会えるだろ?。(リフィア達の面
倒をもうしばらく頼む。…………お前との共闘…………短いながらも楽
しませて貰えた。…………こつか共に肩を並べて戦う日が来る事を楽し
みにしているぞ。)」

(え?)

リウイが去り際に言つた小声の言葉にエステルは呆けた。

「…………さらばだ。」

リウイはエステルに背を向けると入口に向かつて跳躍し、着地する
と近くにいながら、気配を隠していた銀髪の青年に田をやつた後、
入口から去つて行った。

「…………」

「ユリウス！」

去つて行つたリウイを見続けたエステル　ユリウスにクロ　ゼ
オスカーが役者全員を引き連れて声をかけた。

「クロ……おつと。オスカー！姫も！」

「心配しましたよ、ユリウス。」

セシリ亞が心配そうな表情で話しかけた。

「どうしてみながここに？」

「…………ミリガン殿が去つて行くのを見たからな、もう脅威は去つたと思ってお前を心配してこうして来たのだ。特にオスカーと姫が急かされて大変だったぞ……」

疑問を持ったユリウスにザムザが口元に笑みを浮かべて答えた。

「ザ、ザムザ！」

セシリ亞は恥ずかしそうな表情でザムザを咎めた。

「フフ……ありがとうございます、姫。此度のような試練がリベールに再び訪れても私達が斬り払う事をここに誓わせて下さい。」

「姫、私も誓わせて下さい。」

オスカーはユリウスと共に、セシリ亞の前で跪いて宣言した。セシリ亞は最初、2人の宣言に驚いたが、少しの間考えた後口を開いた。「ユリウス、オスカー……わかりました。セシリ亞・フォン・アウスレーゼの名において、2人の誓いを認めます！」

セシリ亞は肩手を上げて、宣言した。そしてザムザはそれを見て、最後の幕引きの言葉をユリウスの代わりに叫び、公爵や議長がザムザの言葉を続けた。

「女神達よ、再び照覧あれ！今日といつ良き日がいつまでも続きますように！」

「リベルに永遠の平和を！」

「リベルに永遠の栄光を！」

そして舞台の幕は閉じた。

「フフ……どのような事が起きてても、やはり最後は大団圓か。だが

……それでいい。（それにしても気配を最大限に消していた俺に気が付くとは、さすがは”大陸最強”。あの時も思ったが、剣士として、いつか本気で手合させを願いたいものだ……）

講堂の扉の前にいた銀髪の青年がそう呟いて講堂を出て行った。

こつして『白き花のマドリガル』はトラブルもあつたが、大好評のうちに幕を閉じた。

同時に、学園祭の終了を告げるアナウンスが鳴り響き……

来場客は、みな満足した表情で学園を後にすることだった……

～白き花のマドリガル～後篇（後書き）

これにて「白き花のマドリガル」終了です！一番苦労したのはエスティルとリウイのコンビクラフトの技の名が思い浮かべなかつた事ですね。ちなみにこの話を見てこの技名よりいい名があればそちらを採用するので良ければ感想で書いて下さい。……感想お待ちしております。

外伝～白き翼と闇王～前編（前書き）

タイトルでわかると思いますが、以外なキャラ同士が会話をするので次回を楽しみにして下さい

外伝／白き翼と闇王／前篇

（ジョニース王立学園・講堂・控室）

学園祭終了後、片づけを終えた後ブリネは用事があると言つて、急いで講堂から出て、エステルとヨシュアは控室でクロゼと共にジルやハンスに労われていた。

「いやー、ほんとお疲れ！監督の私が言つのも何だけど、最高の舞台だったわよっ！」

「最初、男女が逆ということで笑われてしまつたけれど……。みんな、劇が進むに連れて真剣に見てくれて本当によかつた。」

クロゼは笑顔で観客達の様子を語つた。

「うん、そうだね。あんな恰好した甲斐があつたよ。もう二度としあたくないけど……。」

「はは、そんなこと言つなよ。写真部の連中が劇のシーンを何枚か撮つていたけど……。お前さんの写真がどれだけ売れるか楽しみだぜ。」

「ハア、勘弁してよ……。」

女装から解放されて安堵の溜息を吐いたヨシュアだが、ハンスの言葉に顔を顰めて疲れた溜息を吐いた。

「エステルたちの写真もすつごく売れると思つわよ。男子はもちらん下級生の女の子あたりにもね。『お姉さま』なーんて呼ばれちゃつたりして」

「もう、ジルつたら…………」

からかうような口調で語るジルにエステルは苦笑した後、ある事を思い出し黙つた。

「あれ……。どうしたの、エステル？」

エステルの様子に首を傾げたヨシュアは尋ねた。

「あ、うん。ほら、劇の最後で公爵さんが邪魔した事を思い出しちやつて……」

「あ……」

エステルの言葉にクロ ゼは氣不味そうな表情で声を上げた。

「あの時はビックリしたね。……本当にどうなるかと思つたよ。」

「私も劇が滅茶苦茶になつて、本氣で心配したけどエステルを助けた男性が間に入ってくれてから、プリネが真っ先にカバーしてくれて本当にあの時は助かつたわ。」

エステルの言葉で思い出したヨシュアは頷き、ジルは劇の事を思い出し、安堵の溜息を吐いた。

「結局、誰だつたんだろうな？ エステルを助けた男性。……なんかどつかで見た事がある気がするんだよな……？」

「エステル、名前は聞いた？」

ハンスはリウイの事を思い出して首を傾げ、ヨシュアは尋ねた。

「うん。リウイって名乗つていたよ。」

「え……！？」

「嘘！？」

「マジかよ……！？」

「……」

エステルの口からリウイの名を聞き、ただ一人リウイを知つていて、黙つていたクロ ゼを除いてヨシュア達は驚いた。

「ど、どうしたの！？」

ヨシュア達の様子にエステルは慌てて聞き返した。

「エステル……エステルがいつしょに戦つた男性だけど……学園祭に観に来ていたのが信じられない人でみんな驚いたんだ。エステルはその人の名を聞いて、何も思わなかつたのかい？」

「う、うん。なんか、どつかで聞いた事はある名前なのよね……」
ヨシュアの質問にエステルは首を傾げながら答えた。

「……その名を名乗る事を許されているのは世界で唯一人。……」

異世界の王にして、”闇夜の眷属”を束ねる王。……前メンフィル皇帝、リウイ・マーシルン陛下唯一人です、エステルさん。

「あ、あ、あんですつて～！？」

クローゼの説明にエステルは信じられない表情で叫んだ。

「道理でどつかで見た事あると思つたぜ。……社会科を履修しているし、もちろんメンフィルの重要人物の事は全て覚えたのに、なんでもすぐにわからなかつたんだ俺は……！」

「しょうがないんぢやない？だつて、あんた教科書に載つていたりウイ皇帝陛下の顔に落書きしていたぢやない。」

「うぐ！それは……！」

ジルの言葉にハンスは後ずさつた。そしてクローゼは驚いた表情でハンスに尋ねた。

「まあ……どうしてそのような事を？」

「いや、まあ……なんというか……ほら、メンフィル皇帝の周りつて側室や大將軍、闇の聖女と女性だけでしかも全員美人じやねえか。しかも、高齢のアリシア女王より年上つて言われているのに俺達のちょっと上程度にしか見えない上、イケメンだし。ある意味男の敵だろ？嫉妬心でついやつちまつたんだよな……ヨシュアなら、俺の気持ち、わかってくれるよな！？」

「ごめん。全然わからない。」

ハンスに同意を求められたヨシュアは笑顔で否定した。

「この裏切り者め～」

「はいはい。」

ヨシュアの答えを聞いたハンスは恨みごとを呴きながら、ヨシュアを睨んだ。睨まれたヨシュアは相手にしなかつた。

「…………」

「エステルさん、どうしたんですか？」

リウイの正体を知り呆けているエステルを不思議に思つたクローゼが話しかけた。

「ふえつ！？な、何かな！？」

「エステルさん、リウイ皇帝陛下の事を知つてからずっと保けていましたけど、どうかしたんですか？」

「う、うん。ちょっとね……（なんだろう？初対面だったはずなのに、どつかで見た事あるのよね……それにあの人といつしょに戦つた時、黒髪の女人と金髪の女人があのリウイって人と肩を並べて戦っている後ろ姿が一瞬見えたのはなんだろ？……？）」

「？」

言葉を濁すエステルにクロ ゼは首を傾げた。そしてエステルは慌てて話題を変えた。

「そ、それにしても、さすがはメンフィル帝国の元、王様よね～。剣の腕も凄かつたけど、こう……なんていうか、纏っている雰囲気が桁違いに凄かつたわ……あの威張った公爵さんとは全然違うわ。……今考えるとまさに王様！って感じがしたもの。」

「2対1という普通なら不利な状況なのに、加えて相手が王室親衛隊員達だったのに余裕であしらっていたのを見て、あの時はマジで驚いたぜ……」

エステルとハンスはリウイの事に關してそれぞれ感想を言った。

「……リウイ皇帝陛下の武は”大陸最強”とまで称されるほどの強さだそうですから、いぐり王室親衛隊といえども、敵わないでしょう。」

「た、大陸最強！？それって誰も勝てないって事じゃない！あれ

?（ねえねえ、ヨシュア。）」

リウイの評価にエステルは驚いた後、ヨシュアに小声で話しかけた。（何？エステル。）

（さつきの男性がもしかしてプリネのお父さんだったのかな？）（もしかしなくてもそうだよ。ついでに君が憧れている”闇の聖女”さんの夫であるよ。）

エステルの鈍感さにヨシュアは呆れた後、答えた。

（聖女様の……でも、凄く若く見えたわよね？あたし達のちょっ

と上程度にしか見えなかつたし。それに確か、リフィアのお祖父ちゃんなのよね？全然、そうは見えなかつたわ……（そうだね。あれほどの腕を持っている人が直に教えたなら誰だつて

強くなるだろうね。プリネがいい例だよ。）

（そうね……）

エステルは年齢に合わない強さのプリネの事を思つて、ヨシュアの言葉に頷いた。

「……それにもしても、今回の件が問題にならないといいんだがな。」

「へ？ それってどういう事？？」

ハンスの言葉にエステルは首を傾げた。

「酔つていたとはいえ、リベールの王族が親衛隊に命じて、メンフィル皇帝に剣を向けさせた事つて大問題だと思うんだが……」

「あ……そつか。あの時、リウイ皇帝陛下が舞台に現れた時点で剣を引いて、観客達やリウイ皇帝陛下に謝れば大丈夫だつたと思うんだけど、そのまま戦闘に突入しちゃつたもんねえ……」

「…………」

意味がわかつていいないエステルにハンスは説明した。ハンスの説明にジルは横目で不安そうな表情をしているクローゼを一瞬見た後、氣不味そうな表情で答えた。

「最悪の予想だけど……良くて、同盟が解消……悪くて、今回の件が原因でメンフィルと戦争になる可能性も出て来てるよね……」

「…………」

「そ、そんな！？」

ヨシュアの予想にエステルは悲痛な表情で声を上げた。

「あくまで予想だよ、エステル。リウイ皇帝陛下はアリシア女王陛下のような人格者であるらしいから、今回の件ぐらいでそこまで發展しないと思うよ？」

「で、でも……」

ヨシュアに諭されたエステルだったが、まだ不安そうな表情をした。

そしてずっと黙つて聞いていたクローゼが決意を持った表情で口を開いた。

「あの……私、少し席を外します。だから、ちょっとだけ待つて下さい！」

「あ、クローゼ！」

呼び止めるエステルの声を背中に受け、クローゼは急いで講堂を出て、頼もしい友人を呼んだ。

「ジーク！」

「ピューライ！」

クローゼに呼ばれたジークは空から飛んできて、クローゼの肩に止まつた。

「…………プリネさんを探して貰えるかしら？ 校舎内のどこかにいると思つから。」

「ピュイ！」

クローゼの言葉を理解したジークは飛び立ち、クローゼ自身もプリンセスやリウイを走つて探し始めた。そしてしばらく探すと、フィリップや親衛隊員達に何度も頭を下げられ、それを優しく諭しているペテレーネとティアを見つけた。

（の方はもしや…………ペテレーネ様！？ それに横にいるのはティア様…………よかつた、まだリウイ陛下は去つていよいよですね…………）

リウイの側室であるペテレーネを見つけ驚いたクローゼだったが、常にリウイの傍にいるペテレーネを見て、リウイはまだ学園を去つていないと思い、安堵の溜息を吐いた。そしてフィリップと気絶したデュナンを背負つた親衛隊員達がペテレーネとティアに何度も頭を下げる後、学園から去つて行き、それを見送つたペテレーネとティアはどこかに向かつて歩き出した。

（…………もしかして、リウイ陛下の所かしら？ あの方向は確か…………
旧校舎ですね…………）

物陰に隠れてペテレーネとティアが歩いて行った方向を見送ったクローゼは2人の行き先を推測した。そこにジークが再びやって来てクローゼの肩に止まつた。

「ピューア！」

「ジーク！プリネさんを見つけたの？」

「ピュイ。」

クローゼの言葉に答えるようじークは飛び上がり、案内をするようになつくり飛んで進み始めた。

「……………（迷ついてはいけない…………よし！）」

もしリウイがプリネといつしょにいた時、自分の正体がバレてしまふ事を恐れて迷つていたクローゼだったが、迷いを振り切り、ジークを追いかけた……

外伝～白き翼と闇王～前編（後書き）

感想お待ちしております。

外伝／白き翼と闇王／後篇

「ジエニス王立学園・旧校舎内」

一方エステル達に用があると言つて講堂を出て行つたプリネはリフィアやエヴリーヌと合流し、またテレサ達からツーヤを少しの間だけ借りて、人気のない旧校舎内でリウイと久しぶりの会話を楽しんでいた。

「それにもしても、まさかお父様達までここに来るとは思いませんでした。リフィアお姉様、お父様達に知らせてくれてありがとうございます。」

「なに、余は姉としての義務を果たしたまでだ。」

「よかつたね、プリネ。お兄ちゃん達に見て貰えて。」

自分も参加した劇を両親に見て貰えた事に嬉しさを感じているプリネにリフィアやエヴリーヌは微笑んだ。

「……どうやら予想以上にいい経験をしているようだな、プリネ。」

「はい！民の普段の生活や困っている事……そういうた城や大使館では知りえない事がたくさんあって、本当に勉強になります！」

「そうか。それはよかつたな……」

嬉しそうに旅の事を話すプリネにリウイは口元に笑みを浮かべた。そしてプリネが連れて来たツーヤの事が気になり、尋ねた。

「……さつきから気になつたのだが、その少女は何者だ？……少なくとも人間ではないようだが。」

「…………」

リウイはツーヤの姿を見て咳き、見られたツーヤはプリネの後ろに隠れて恐る恐るリウイを見て、プリネに尋ねた。

「あの……ご主人様。この方は一体どなたですか……？」

「この方は私のお父様です、ツーヤちゃ……いえ……ツーヤ。」

「これからずっと自分の傍にいるツーヤに親しみの意味を込めて、プリネはツーヤを呼び捨てにしてリウイの事を紹介した。そしてプリネに促されたツーヤはリウイの正面に立つて、リウイを見上げた。

「……はじまして。ご主人様の”パートナー”的ツーヤと申します。

「リウイだ。…………ん？プリネが主だと？プリネ、これは一体どういう事だ？」

プリネの事を主と言つたツーヤにリウイは首を傾げた後、プリネに説明を求めた。

「はい。実は…………」

そしてプリネはリウイにツーヤの事を説明した。

「ほう…………まさかそのような”竜”がいるとはな…………」

プリネの説明にリウイは驚き、ツーヤを見た。ツーヤは緊張しながらも意思が強い瞳で正面からリウイを見た。

「…………いい眼だ。ツーヤといつたか。プリネを頼むぞ。」「

「はい。…………今は力はありませんが、いつかご主人様を守れるぐらい強くなります。」

「…………そうか。プリネと共に大使館に帰つて来る時を楽しみにしているぞ。その時には俺やファー・ミシルス達が鍛えてやろう。」「エヴリーヌも手伝つてあげる。」

「うむ！よかつたな、ツーヤ。リウイ達ほどの達人が直々に教える事等滅多にないぞ。」

そこにデュナン達の治療を終えたペテレーネとティアがやつて來た。

「お待ちして申し訳ありません、リウイ様。」「

「あ、お母様。」

ペテレーネに気付いたプリネは嬉しそうにツーヤを連れて、ツーヤの事を紹介し、学園生活の事を報告していた。そしてその様子をテ

ティアは微笑ましそうに見た後、リウイを咎めた。

「お父様、どこが『少し灸を据える』ですか！…さつきの方達……全身麻痺していた上、あちらこちらに傷がありましたよ！？」

「そう怒るな。……件の少女との共闘が予想以上に楽しめたのでな。それに最近は政務続きで身体がなまっていたからな。少し力加減を間違えた。」

「もう……イーリュンの信徒である私の目の前ではそういう人を傷つける行為はできればやめてほしいのですが……ハア。無理でしょうね。」

言つても無駄な事をつい口にしたティアは溜息をついた。

「フッ……どんな相手でも心配するその心を見ていると、ティナを思い出してしまったな……あいつには色々と世話になつた……久しぶりに会つて言つのもなんだが、そろそろ伴侶をとつたらどうだ？兄妹の中で結婚していないのは、お前とプリネだけだぞ？まだ18のプリネは別として、お前は伴侶をとつてもおかしくなからう。」

「お、お父様！今は関係ないことでしょー！」

昔を思い出すかのようにティナの事を思つていたリウイは話を変えてティアに尋ねた。尋ねられたティアは顔を真つ赤にして答えた。「だが、実際親としてはお前にも生涯共にする相手を見つけ、幸せになつてほしいぞ？別に俺は相手がどんな男でないと認めないとか、そういう固い事は言つ気はない。お互に愛し合つているのならそれでいい。」

「ですが、私はイーリュンに仕える身ですし……」

「それを言つたらお前の母であるティナはどうなんだ？ティナに聞いたが、イーリュンは結婚や恋愛を禁じている訳ではないのだろう？」

「それは……」

反論する言葉を封じられたティアは黙つて俯いた。

「それとも、今までお前に求婚する男はいなかつたのか？母譲りの

容姿のお前なら、言い寄つて来る男は山ほどいるだろつた。」

「……確かにそういう方達はいらっしゃいましたが、全てお断りさせていただきました。私にとつて理想の男性ではありませんし。

「ほう。お前にも理想とする男がいるのか。どんな男だ？」

「そ、それは秘密です！（もう……身近にこんな素敵な男性がいたら、なかなかほかの男性に心が動かない事をどうしてわかつてくれないのでしょう……はあ……）側室とはいえお父様と出会い、結ばれたお母様が羨ましいです……）」

幼い頃から王としての父の背中を見続けたティアにとって、リウイは理想の男性であったので、ほかの男性に心が動かない事にティアは男として完璧すぎる父親を心の中で弱冠恨んだ。ティアの様子にリウイは不思議に思つたが、ある気配に気づきティアの様子を頭の片隅に追いやり、気配が感じられた方向に向かつて静かに問い合わせた。

「…………そこで聞き耳を立ててているのは誰だ？入口の前にいるのはわかつてゐる。大人しく出でてくるがいい。」

リウイの言葉に全員旧校舎の入り口に注目した。すると入口のドアはゆっくり開けられ、そこには緊張したように見える表情のクロゼがいた。

「クロ ゼさん……どうしてここに……」

クロ ゼを見たプリネは驚いて、クロ ゼに問いかけた。

「……リウイ陛下にお話があつて、リウイ陛下のご息女であるプリネさんにリウイ陛下に御取次頂けるよう頼むために、探していたんですね……その必要はなかつたようです。」

「…………その言い方ですと最初に会つた時から、私の本当の身分を知つていらつしゃつたようですね……何者ですか、あなたは。」

クロ ゼの言動から自分がメンフィル皇女である事を知つてゐる風に聞こえたプリネは警戒した表情で尋ねた。

「……そう警戒してやるな、プリネ。相手はこの世界で唯一同盟を結んでいる国の姫だぞ。」

「え……！？」

リウイの言葉にプリネは驚いた表情をした。

「……同盟国の姫……思い出したぞ！お主、リベールの姫——クローディア姫ではないか！」

一方リウイの言葉でクローゼの本当の正体を思い出したリフィアは声を上げた。

「アリシア女王陛下の孫娘、クローディア・フォン・アウスレーゼ王女……まさか、クローゼさんがそうだったなんて……」

「クローゼさんガリベールの王女様……」

クローゼの正式な名前を言いながら、プリネは驚き、ツーヤは呆然とした。

「ふう……リフィア、お前も皇族の一人なら同盟国の姫の顔ぐらい覚えておけ。」

「む……仕方なかろう。余とクローディア姫が会ったのは一回限りだし、あの時はクローディア姫は幼かったからな。……ふむ、それにしてはマノリアで会った時、なぜ名乗り出なかつた？会つた事もないプリネを知つていた所を見ると、余の事も当然覚えていそうなのにな。」

「あの時は名乗りでなくすみません……今はクローゼ・リンツという一人の学生でありたかったので、王女である事は隠しておきたかったのです。」

リフィアに問い合わせられたクローゼは辛そうな表情で答えた。

「ふむ……その気持ちはわからなくはないな。かく言う余達も偽名を語ついていた事だし、正体を隠していた件に関しては双方気にしないほうがいいだろう。それでリウイに何の用だ？」

「それは……」

クローゼはツーヤを見て、言いづらそうな表情をした。

「ふむ。…………リフィア、エヴリーヌ。お前達はティアを連れて先に宿に戻つてくれないか？すでに部屋は取つてある。」

「む？わかった。エヴリーヌ、頼んだぞ。」

「了解）。じゃあ、2人共、エヴリーヌの近くに来て。」

「…………わかりました。お先に失礼をせてもらいますね、クローディア姫。」

リウイに言われたりフィアは弱冠納得がいっていない様子だつたが頷き、ティアは何も言わず頷き、クローディア姫に会釈した。

「2人共、集まつたね？それじゃ行くよ。」

そしてエヴリーヌは2人と共に、ルーアン市の入口付近まで転移した。

「プリネ、お前も行け。どうやらリベールの姫は俺に用があるようだからな。」

「…………わかりました。ツーヤ、行きましょう。テレサさんや孤児院のみなさんにななたが私と共に生きていく事をエステルさんやミン・トちゃんと一緒に知らせてあげましょ。」

「はい、ご主人様。」

「それでは……あ、そうだ……お母様、少しいいですか？」

「何？プリネ。」

ツーヤと共にその場を去ろうとしたプリネだったが、ある事を思い出して母の耳元に小声で囁いた。

（…………よければエステルさんと会つてもらつてもいいですか？エステルさん、ずっとお母様に会いたがつていましたし……）

（…………わかつたわ。ただ、私が会いに行つたらさすがにあなたの正体が生徒達にわかつてしまふでしょうから、ここに連れて来て貰えるかしら？）

（はい。必ず連れて来ますから、絶対待つて下さいね。）

（フフ……そんなに念を押さなくても大丈夫よ。）

プリネの念を押した言葉にペテレーネは微笑みながら答えた。それを見て安心したプリネはクローディアを見た後ツーヤと共に旧校舎から

出て行つた。

「…………」うして面と向かい合つて話すのは”百日戦役”後、アリシア女王と会談の後、女王がお前の事を紹介した時に会つたきりだから、9年ぶりといった所か。リベルの姫よ。」

「はい。…………お一方はお若いままですね。…………本日の学園祭にいらっしゃつて下さつて、ありがとうございます。」

「丁寧な挨拶、ありがとうございます、クローディア姫。これからこそ、娘のプリネがお世話になりました。あの子に貴重な体験をさせてくれて、母としてお礼を言わせて下さる。…………ありがとうございます。」

「いえ、私達もプリネさんにはたくさんお世話になりました。生徒を代表してお礼を言わせて下さる。…………ありがとうございます。」

「…………クローディア姫は大きくなられましたね。…………まだ幼かつた姫が今は、立派な淑女に見違えました。」

「そんな…………ペテレーネ様は相変わらず、以前会つた時のような美しさを保たれていて女性として羨ましいです。…………ペテレーネ様は年をとらない永遠の美女であるといつ噂が本当だという事が今ならよくわかります。」

「あつ…………私はただ単に神格者だから年をとらないだけなのですが…………永遠の美女だなんて、私には恐れ多いですからその呼び名はお願いですから止めて下さる。…………」

クローゼの言葉にペテレーネは顔を赤くして慌てている様子で答えた。

「は、はい。…………それにしても、このよつた所で陛下やペテレーネ様とお会いできるとは思いませんでした。」

「それはお互い様だ。まさか、この学園の生徒だつたとは思わなかつたぞ。なぜ、王族であるお前がここにいる?」

「…………それは……」

リウイの問いかけにクローゼは答えるのを躊躇つた。

「答えられないのか？……まあいい、アリシア女王の教育方針に他国の王である俺が口を挟む訳にもいかぬな。……それで何の用だ？」俺の姿を見かけたからただ、会いに来たわけでもあるまい。

「はい。……小父様のせいでお忙しい所、ロレントより足を運んで頂き、劇を観賞なさっていた陛下の御心を乱してしまった事……今この場にいない小父に代わって謝罪させて下さい。真に申し訳ありませんでした……」

申し訳なさそうな表情でクローゼはリウイに謝罪した。

「その件か。別にお前が謝罪する必要はないぞ。」

「ですが王族である小父様の責任は私の責任でもありますし……」

「ふう……わかつたからそう、悲痛そうな表情をするな。今回の件がきっかけで同盟を破棄したり、敵対をするつもりは全くないから安心しろ。今日の俺はただの親として娘が出演した劇を観に来ただけだ。」

「……寛大なお心遣い、感謝いたします。」

最悪の事態が回避された事にクローゼは肩の力が抜け、安堵の溜息をついた。

「……リベルやアリシア女王には導力技術や他宗教を広める事の許可の件等、それなりに世話になつているからそういう同盟を破る気はないが……あのデュナンとやらが何も変わらずアリシア女王の後を継ぐのなら、今後の付き合い方を考えさせてもらひつい。」

「…………」

リウイの言葉をクローゼは辛そうな表情で聞いていた。

「……女王直系の孫であるお前は王にならないのか？リベル王家は男児でないと王になれないと言う訳もあるまい。実際女王がいるのだしな。それに話によればアリシア女王はお前を次の国王に指名しようとしているらしいな？」

「…………情けない話になりますが、私自身まだ王位を継ぐ覚悟ができないのです。……正直、皇帝になる事に何の恐れも抱か

ず、誇らしげに私にその事を話してくれたリフィア殿下の事が羨ましいとも思いました。」

「あいつは例外だ。……シリヴァンも一時期は迷っていた。王位を継ぐ者なら誰にでもある事だ。気にしなくていい。」

女王になる事に躊躇つてゐるクローゼにリウイは励ましの言葉をかけた。

「……………ありがとうございます。こつか必ず答えは出すつもりです。できればそれまで、貴国とは今と変わらぬ関係であらせん下さい。」

決意を持った表情でクローゼはリウイを正面から見て言った。

「言われなくともそのつもりだ。お前の答えがどのような答えになるのか……楽しみに待たせてもらつぞ。」

「はい、陛下のご期待に添えるかまだ確約できませんが、必ず答えは出します。……それでは失礼します。」

クローゼはリウイ達に会釈した後、旧校舎を去つた。

「さて……俺達もそろそろ行くか。」

クローゼを見送つたリウイはペテレーネに言った。

「あ、リウイ様。少しだけ待つてもうひつてもよろしくでしょうか?」「何故だ?」

「……………プリネからエステルさんとぜひ会つてほしいと頼まれましたので……」

「……………やっぱ、件の少女はお前に憧れを持っているのだったな。

「

「はい、リウイ様も」存じかと思われますが、以前ブライト家にお邪魔した時、エステルさんの母親であるレナさんはそのように聞いております。プリネ達がお世話をなつておられるお礼もかねて、エステルさんは一度話してみたいのです。」

「……………わかった。俺は学園長と話をしに行くから、用事が終わればそのままルーアンのホテルに戻つてくれ。」

「かしこまりました。」

「

ペテレーネに指示をしたリウイは外套を翻し、旧校舎から去つて行つた

外伝～白き翼と闇王～後篇（後書き）

感想お待ちしております。

外伝「太陽の娘と混沌の聖女の邂逅」前篇

「ジニス王立学園・本校舎内」

「リングズにプリネを短期間、学園生活をさせてくれた事に礼を言つためにリウイは受付に聞いた。

「……失礼する。学園長に用があるのだが、学園長はどうしている?」「学園長ですか?恐らく学園長室にいると思われます。学園長室はあちら側の奥の部屋となつております。」

受付はリウイに学園長室の場所を片手で指し示した。

「そうか。感謝する。」

受付にそう言つて、リウイが学園長室に向かつとひょりび、学園長室から「コングスとジルやハンスが出て来た。そして「リングズはリウイに気付き、驚いた。

「おお……まさか、このような所で貴方様のような方にお会いするとは夢にも思ひませんでした。ジニス王立学園の学園長を務めさせていただいてる「リングズと申します。」

「……メンフィル大使、リウイだ。このような時間に挨拶をして申し訳ない。何分忙しい身でな。こちらに着いたのがちょうど劇が始まる頃だったので、劇が終わつてから挨拶をさせてもらつた。」

（すげえ……！本物のメンフィル皇帝だぜ、ジル！）

（それぐらいわかっているわ。それより、せつかくリウイ陛下が目の前にいるんだから、協力をお願いしないと。）

（ああ）

リウイが田の前にいる事に小声で会話をしていたハンスとジルは礼儀正しい姿勢になり、リウイに話しかけた。

「初めてまして、ジニス王立学園生徒会長のジルと申します。」

「同じく副会長のハンスです。お忙しい所申し訳ないのですが、少しよろしくでしょつか?」

「学園の生徒か。何の用だ？」

「はい。実は……」

ジルとハンスはリウイに毎年学園祭と同時にやっている活動の事を説明した。

「ほつ。この学園の生徒達は学生といつ身分ながら中々立派な事を考えるな、学園長。」

「イーリュンの孤児院の経営の経営の援助をなさつて、いる陛下にそつ言って頂けるとは、恐悦至極でござります。」

ジル達から説明を聞いたリウイは感心し、コリングズは謙遜した。

「それで恐れ多いのですが、できたら陛下にもご協力をしていただきたいのですが……」

ジルは期待を込めた目でリウイを見た。

「ふむ。市長達やあの公爵も寄付をしているのだから、他国とはいえ王である俺が拒む訳にもいかぬな。……生憎持ち合わせはあまりないから、これで代用してくれ。」

リウイは懐から宝石をいくつか出し、ジルに手渡した。

「え……これって琥珀！？」

「しかも、一個一個サイズが普通の琥珀より大きいし、こんなに透き通つて中まで見える琥珀、初めて見たぜ……」

ジルとハンスはリウイが手渡した宝石を見て、驚いた。

「俺達の世界ではそれなりの値段にしかならない物だが、こちらで鑑定してもらった所、一つにつき20万ミラは下らないそうだ。市内にある装飾店にでも持つて行けば、かなりの金額で買い取つてくれるだろつ。」

「一個で最低20万ミラ……じゃあ、ここに渡されたのが5個あるから……」

「最低100万ミラかよ……すっげ……今ある寄付金と同じ金額じゃないか……！」

宝石の値段を聞いたジルとハンスは驚いた。

「……よろしいのでしょうか？そのような高価な物を頂いても……」

「コンズは恐る恐るリウイに尋ねた。

「ああ。祖国に戻ればいくらでも手に入るしな。そんな物でよかつたら民のために役立ててくれ。」

「「ありがとうございます！」」

ジルとハンスは同時に頭を下げて、リウイに感謝した。

「さて……挨拶も済ませた事だし、今日の所はこれで失礼させてもらおう。」

「……申し訳ないのですが、少しだけお待ちいただいてもよろしいでしょうか？」

立ち去りうとしたリウイにコリンズが呼び止めた。

「ん？まだ何か用があるようだな。」

「はい。……少しだけ席を外してある方に会いに行かなくてはならないので、どこかで休んでお待ち頂いてもよろしいでしょうか？すぐに戻って来ますので。」

「それなら、ここで待たせてもらおう。」

そう言つてリウイは学園長室の入口の近くの壁にもたれかかり、懐から古文書を出して読み始めた。

「申し訳ございません。……すぐに戻りますので……行こうか、2人とも。」

「はい。」

「失礼します、陛下。」

「コンズに促されジルとハンスはリウイに会釈した後、急ぎ足で講堂に向かった。

（ジヒニス王立学園・講堂・控室）

その頃エステル達は戻つて来たプリネやクローゼと共にテレサ達の話相手をしていた。

「ママ、凄つ！」とか「よかつたよー。」

「ありがと、ミントちゃん。」

「えへへ……」

エステルに頭を撫でられたミントは嬉しそうに撫でられていた。またほかの子供達もヨシュア達にそれぞれ劇の感想を嬉しそうに話した。クロゼやプリネは笑顔で答えていたが、ヨシュアだけは引きつった笑顔で答えた。

「ふふ……みなさんには感謝しなくてはね。本当に、ルーアン地方でのいい思い出になりました。」

「先生……」

「この子たちにまだ……？」

静かに語るテレサの言葉から推測したクロゼとヨシュアは辛そうな表情で尋ねた。

「ええ……。マノリアに帰つてから話します。そして早ければ明日にでもミントとツーヤをエステルさんとプリネさんに託して発とうかと……」

「そ、そんな急に！？」

テレサの考えにエステルは声を上げた。

「ママ～。どうしたの？」

「なになに、何の話だよー？」

「失礼でしょ、クラム！大人の話にわりこんだりして。」

「ミントちゃんも。先生は今大事な話をしているみたいだから、後で聞こじう？」

ミントとクラムは興味ありげな表情でエステル達に尋ねたが、クラムにはマリイが怒り、ミントにはツーヤが言い聞かせた。

「いいのよ、マリイ、ツーヤ。でもとりあえずは宿屋に帰るとしましょうか。夕食を食べて……話はそれからでいいですね？」

「う、うん……？」

「？？」

「…………」

テレサに諭され、クラムは戸惑った表情で答え、ミントは可愛らしく首を傾げ、もうすぐ自分達はテレサ達と離れる事をわかっているツーヤは孤児院の子供達をこの場で悲しませないために黙っていた。

「それではクローゼ……エステルさんにヨシュアさん、プリネさんも。私たち、そろそろ失礼しますね。今日は本当にありがとうございます。素晴らしいものを見せて頂いて。」

「あ、ちょっと待つて。ジルたちが戻ってくるから……」

「……失礼するよ。」

立ち去ろうとしたテレサ達にエステルが呼び止めた所、ちょうどコリンズを連れたジルとハンスが戻って来た。

「まあ、コリンズ学園長……」

「久しぶりだのう、テレサ院長。せっかく来て頂いたのに挨拶が遅れて申しわけなかった。」

「とんでもありません……。本当に素晴らしいお祭りに招いていただいて感謝しますわ。」

「ふふ、生徒たちも頑張った甲斐があるというものだ。……事情はクローゼ君から聞いた。本当に大変なことになつたものだ。そこで、わしらも微力ながら力になれればと思つてな……」

「え……」

コリンズの言葉の意味がわからず、テレサは呆けた声を出した。

「ジル君。」

「はい。」

コリンズに呼ばれたジルは王立学園の紋章が入つた分厚い封筒をテレサに手渡した。

「どうぞ、お受け取りください。」

「これは……？」

封筒を渡されたテレサは訳がわからず、ジルに尋ねた。

「来場者から集まつた寄付金でちょうど100万ミラと先ほどリウ

イ皇帝陛下が寄付して下さった宝石がいくつあります。孤児院再建に役立ててください。」

「ひ、ひやく万ミラ……」

「すごい大金ですね……」

「リウイ皇帝陛下が……」

封筒の中身を知ったエステルとヨシュア、クロゼは驚いた。また、同じように驚いているプリネはテレサに話しかけた。

「あの……テレサさん。封筒の中に入っている宝石を見せていただけてもよろしいでしょうか?」

「は、はい。」

封筒から宝石を出したテレサは恐る恐るプリネに手渡した。

「…………これは……琥珀の宝石”……！」

「プリネ、その宝石の価値がわかるの?」

宝石の価値を知つていそつた様子を見て、ヨシュアは尋ねた。

「はー。この宝石は祖国メンフィルの装飾店等でよく見かける宝石なのですが……こちらの世界では珍しいらしく、かなりの値段がつくと聞いたことがあります。……確か一つ20万は下らないかと。」

「い、一個、20万!?」

「それが5個あるという事は最低でもその封筒に入っている金額と同額になるという事が……」

宝石の価値を知つたエステルやヨシュアは信じられない表情で驚いた。そしてプリネは見せて貰つた宝石をテレサに返した。

「どうぞ。……市内にある装飾店などでしたら、信用がある所ですから、その宝石を安く買い取られる事はなく、その宝石に見合つた価値で買い取つてくれるでしょう。」

「…………」

テレサは驚いた表情のまま、プリネから宝石を返してもう一度後、尋ねた。

「ど、どうしてこんな……?」

「今日は、公爵やボース市長、果てはあのメンフィル皇帝など多くの名士が来場したからのう。例年よりも多く集まつたのだよ。」

「学園長……」

「ワーンズの言葉を聞き、クローゼはワーンズ達がテレサ達のために活動いた事に感謝し、微笑んだ。

「そんな、いけません！こんなものは受け取れません！」

テレサは血相を変えて、受け取つた封筒と宝石を返そうとした。

「遠慮する必要ありませんよ。毎年、学園祭で集まつた寄付金は福祉活動に使われているんですから。」

「孤児院再建に使われるのなら寄付した方々も納得しますって。」

「でも……そんな……。ここまでして頂くわけには……」

ハンスとジルに説明されたが、テレサはまだ少し納得していなかつた。

「先生……どうか受け取つてください。」

「クローゼ……ですが……。」

「先生が戸惑う気持ちも判ります。でも……どうか考えてみて欲しいのです。それだけのミラや宝石があつたら孤児院を再建するのはもちろん、ロレントに行く必要もありません。あのハーブ畠だつて放つておかなくてもいいんです」

「…………」「…………」

クローゼの説明にテレサは黙つた。

「クローゼ君の言つ通りだ。亡きジョセフ君と何よりも子供たちのために……。あなたは拘りを捨ててそのミラと宝石を受け取るべきだろう。」

「…………。もう……何とお礼を言つていいのか……。ありがとうございます……本当にありがとうございます……」

「ワーンズにも諭され、ようやく受け取る事を決めたテレサは涙を流してワーンズ達に感謝した。

「グス……よかつたあ……」

「うん、これで一件落着だね。」

(お父様…………ありがとうございます……)

エステルとヨシュアは孤児院の再建の田処が立つた事に安心し、ブリネはこの場にいない尊敬する父に心の中で感謝した。

「な、なあ……。ロレントに行くつてなんだよ？何がどうなつちやつてるわけ？」

「いいのです……。もう心配しなくても……。あなたたちには本当に苦労をかけましたね……」

話を聞き、訳がわからなくなつたクラムはテレサに尋ねたが、テレサは涙を流しながら気にする必要が無い事を諭した。その様子を見てクラムは戸惑いながら納得し、テレサが涙を流している理由を尋ねた。

「べ、別に苦労なんてしたつもりはないけど……。それよりも先生……どうして泣いてるのさあ？」

「バカねえ、クラムつたら。そんなの嬉しいからに決まつてるじゃない」

「えへへ……よかつたね！先生、みんな！（みんな……元気でね……）」

（よかつたね……みんな……これであたしとミントちゃんは心置きなくご主人様達と……）

訳がわからない様子のクラムにマリイは笑つて答へ、ミントやツーヤは孤児院が再建される可能性が出て来た事に安心し、心置きなくエステル達についていける事に安堵した。

「……それでは失礼します。みんな、帰りますよ。」

「「「「はーい！」」」

「ママ、待つてるよー行こー、ツーヤちゃん。」

「うん。…………それではご主人様。ミントちゃんといっしょにご主人様がエステルさんと共に迎えに来てくれる日を待つています。」

「ええ、近い内、必ず迎えに行くわ。」

そしてテレサや孤児院の子供達は帰つて行つた。

「わい……そろそろ後片付けをしまじょうか。」

「うん、そうね。」

ジルの言葉に頷いたエステルは早速動こうとした所、プリネに呼び止められた。

「あの……エステルさん、少しいいですか？」

「?…どうしたの、プリネ。」

「エステルさんにぜひ会つて欲しい方がいるんですけど、少しだけ時間を見つてもいいでしようか？」

「いいけど……片づけが終わってからじゃ、ダメなの？」

プリネの言葉に首を傾げたエステルは尋ねた。

「すみません……何分多忙な方でして、あまり遅くまではいられないんですね。」

「うーん……ねえ、みんな。あたしとプリネ、少しだけ片づけを抜けてもいいかな？」

「ええ、いいわよ。何たつてあんた達のお陰で劇が成功したんだから。」

「ありがとう、ジル。じゃあ、ちょっと行って来るね！」

そしてエステルはプリネと共に一端、講堂を出た……

外伝「太陽の娘と混沌の聖女の邂逅」前篇（後書き）

感想お待ちしております。

外伝「太陽の娘と混沌の聖女の邂逅」後篇（前書き）

気付けば1ヶ月連続更新……！どこまで続けられるかな……？

（ジェニス王立学園・講堂前）

「ねえ、プリネ。あたしに会わせたい人って誰？」

エステルはプリネが会わせたがっている人物が思い浮かばず、講堂を出た時に尋ねた。

「フフ……それは会うまでのお楽しみです。」

エステルの疑問にプリネは微笑みながら答えた。

「？それでどこに行けばいいの？」

「旧校舎です。あそこなら人気はありませんから。」

「へ？なんで人気のないところにいるの？？」

プリネの言葉にエステルは首を傾げた。

「エステルさんに会わせたい方は世間では有名な方ですから、学園に混乱を起こさないためにも人気のない場所にいてもらっているんです。」

「ふうん、そうなんだ。とりあえず、行きましょうー。」

「ええ。」

そしてエステルとプリネは旧校舎に向かつた。

（ジェニス王立学園・旧校舎）

エステルとプリネが旧校舎に入ると、そこにはまだ変装を解いていないペテレーネがいた。

「…………待たせてしまって、すみません。」

「これぐらいの時間、大丈夫よ。」

プリネは母を待たせてしまった事を謝つたが、ペテレーネは微笑みながら答えた。

「？その人があたしに会わせたい人？（あれ……どつかで聞き覚え

のある声のよくな……？」

エステルは変装しているペテレーネを見て、聞き覚えのある声に首を傾げながら尋ねた。

「ええ、そうですが……もしかして、エステルさん。この方が誰かわからないのですか？」

「う、うん。顔つきとかプリネに似ているけど、もしかしてプリネのお姉さん？」

「いいえ。……お母様。いい加減、その変装を解いたらどうですか。

「フフ、そうね。すっかり忘れていたわ。」

プリネの言葉にペテレーネは微笑んだ後、下していた髪をいつものように左右に縛り、眼鏡を外した。

「え。」

変装を解いたペテレーネの姿を見て、エステルは呆けた声を出した。「では、エステルさん。入口で待っていますから好きなだけ、話してもらつて構いません。」

呆けた状態のエステルにプリネは囁いた後、旧校舎から出た。

「……あなたとこうして顔を合わせて話すのは10年ぶりになりますね、エステルさん。」

「…………」

「あの……エステルさん？」

話しかけたにも関わらず何も返事をせず、呆けた状態で自分を見るエステルを不思議に思い、ペテレーネは呼びかけた。

「ハツ……！せ、せ、聖女様！……ど、ど、どうしてここに……？」

ペテレーネに呼びかけられ、我に返ったエステルは驚いた。

「フフ……娘が出る劇を親が見に来てはいけませんか？」

「い、いえ！あ、あの、その……！あつあつ……」

心の準備もできず、長年憧っていたペテレーネと出会い、話しかけられた事にエステルは目をキヨロキヨロさせて、慌てた。

「フフ……そんなに緊張しなくても大丈夫ですよ。一度、深呼吸をしてみて下さい。そうしたら、少しは落ち着きますから。」

「は、はい！……スウ……ハア……」

ペテレー・ネに言われて深呼吸をしたエステルはようやく落ち着き、まっすぐとペテレー・ネを見た。

「えつと……聖女様。今更聞くのもなんなのですが、あたしの事、覚えているんですか？」

「ええ。エステルさんの事はマーリオンさんやリストイさんからよく聞かされましたから。お一人の話からは人間の少女である事しかわかりませんでしたが、以前ブライト家にお邪魔して、レナさんを見た時にあの時の女の子である事がわかりましたから。……そのお守り、まだ持つてくれたんですね。」

ペテレー・ネはエステルの服の胸部部分についているブローチに目を向けた。

「あ……はい！今でもこれはあたしにひとつ一番の宝物です！」

「フフ、そう言って貰えると嬉しいものですね。」

エステルの言葉にペテレー・ネは微笑みながら答えた。

「あの……聖女様……あたし、聖女様にいつか会えたら言おうと思つていた事があるんです。」

「ええ、私でよければ聞きます。」

ペテレー・ネの答えを聞き、エステルはもう一度深呼吸をした後、ずつと言いたかつた事を言った。

「聖女様、あの時お母さんを助けてくれてありがとうございました！」

「ふふ、私は私の出来る事をただけですよ。」

「あたし……あの時、聖女様がお母さんの命を救ったのを見て、自分の出来る事で聖女様みたいに誰かを助ける人になるために、遊撃士になりました！」

「そうだったのですか。……私なんかを目標にしてくれてありがと

う、エステルさん。

「あ、あつ……」

憧れの人物に笑顔を向けられたエステルは顔を赤くして俯いた。そしてある魔術を見てもらうために、エステルは顔を上げてペテレーネに尋ねた。

「あの、聖女様……見てほしい魔術があるのですけど、いいでしょっか？」

「構いませんが。その……さつきから気になっていたのですが、”聖女”という呼び名はなんとかあならないのでしょうか……？正直、その呼び名は恥ずかしいんです。」

「ふえ？でも、聖女様は聖女様だし……」

「もしよろしければ、名前で呼んでいただけますか？どうも、その呼び名は慣れていなくて……」

「う～ん……ごめんなさい。あたしにとつて聖女様は今でも憧れの存在ですから、名前で呼ぶなんてできないです。」

「フウ、わかりました。……プリネもお世話になっている事ですし、エステルさんの呼びたいように呼んで下さい。」

「えへへ……ありがとうございます。」

エステルの言葉に苦笑して溜息をついたペテレーネにエステルは恥ずかしそうに笑いながら答えた。

「それで、私に見てもらいたい魔術とはなんなのですか？」

「あ、はい。この魔術です……えい！」

エステルは未完成の魔術である”闇の息吹”をペテレーネに見せた。

「今のは”闇の息吹”ですね。……ただし不安定に見えましたが。

「

「はい。この魔術は旅立つ前にようやく出来た魔術なんですが、どんなにがんばってもプリネ達みたいに安定した回復力がないんですね

……」

ペテレーネの言葉にエステルは肩を落とした。

「なるほど……わかりました。もし、よければ私が教えますが。」「え！いいんですか！？」

ペテレー・ネ直々に教えて貰える事にエステルは驚いて尋ねた。

「ええ。といつてもそんなに時間はかかりません。その魔術の基礎はすでにできかけているだけですから、後は正しい形に直すだけですからすぐに終わります。」

「本当ですか！？じゃあ、お願ひします！」

「ええ。」

そしてエステルは長年憧れていたペテレー・ネから直々に今まで未完成であつた回復魔術の事を教わり、ついに完成了。

「癒しの闇よ……闇の息吹！……やつた！3回連続で安定した回復量になつた！」

「フフ、おめでとう、エステルさん。」

魔術が完成した事に喜んでいるエステルをペテレー・ネは微笑ましそうにみて、祝福した。

「えへへ……ありがとうございます、聖女様。」

「フフ、私は少し助言しただけですよ。すぐ出来るようになつたのはエステルさんの才能と努力の賜物です。……さて、私はそろそろ失礼しますね。」

「え……もう行っちゃうんですね？」

もつとペテレー・ネと話したかったエステルは残念そうな表情で尋ねた。

「ええ。学園長にプリネがお世話になつたお礼も言いに行かないといけませんし、それに私がこの学園にいる事がわかり、生徒達や教師の方々に無用な混乱を起させたくないんです。」

「そつか……いつか会いに行つてもいいですか？」

「ええ。気軽に来て貰つて大丈夫です。……これからもプリネと仲良くして下さいね。」

「はい！」

「ありがとう。……エステルさんにアーライナのご加護を……」
エステルの身の安全をその場で祈つたペテレー・ネは旧校舎から去つた。そしてエステルは旧校舎の入り口で待つてゐるプリネの所に行つた。

「おかれりなさい、エステルさん。お母様との会話はどうでしたか？」

「うん。言いたかった事も言えたし、満足よ……それにしても酷いわね、プリネったら。あたしが聖女様に憧れているって知つてて、黙つているんだから。」

エステルは頬を膨らませて、プリネを咎めた。

「フフ、ごめんなさい。エステルさんをビックリさせたかったので。

「もう……まあ、聖女様にも会えたし、いつか……さて、じゃあヨシュア達の所に行つて、片づけを手伝つとしますか！」

「ええ。」

そして、エステルとプリネは講堂に戻つて、後片付けに参加した。後片づけが終わつた頃にはすっかり夕方になつていて。その後エステル達はジルとハンスに見送られ、テレサ達と話すためにマノリア村へ行くクロ・ゼと共に短いながらも楽しい生活を送つた学園を去つた……

外伝「太陽の娘と混沌の聖女の邂逅」後篇（後書き）

感想お待ちしております。

第77話（前書き）

お待たせしました！ついにルーアン編のラストに突入です！

（メーヴェ海道）

ルーアン市とマノリア村に行く分かれ道でエステル達とクロ ゼはそれぞれの目的地に行くため、一端別れようとした。

「さてと、ここでお別れだね。」

「はい……。この数日間、本当にありがとうございました。」

ヨシュアの言葉に頷いたクロ ゼはエステル達にお礼を言った。

「そんな……私も素晴らしい学園生活を送らせてもらつて、本当にありがとうございました。」

「プリネの言う通り、あたしたちも楽しかったわ。それじゃあ先生とあの子たちによろしくね。……ミントちゃん達を連れて行く時、必ず連絡するからね。」

「はい、お願ひします。」

そしてエステル達とクロ ゼが別れようとした時、孤児院の片づけをしていた男性の一人が慌てた様子でエステル達に走つて近付いて来た。

「おお、あんたたちは！」

「あれ……」

「あなたは……確かにマノリアに住んでいる……」

男性の顔を見て、エステルとヨシュアは不思議そうな表情をした。

「そういうあんたたちは確かに遊撃士だったな！た、大変な事になつたんだ！」

「大変なこと……？」

男性の言葉にプリネは首を傾げた。

「はあはあはあ……。ちょ、ちょっと待つてくれ。い、息が切れでふーっ、ふーっ……。ふう……」

マノリアから全速力で走つて來たため、息が切れていた男性は深呼

吸をして落ち着いた後、話し始めた。

「……テレサ先生と子供たちがマノリアの近くで何者かに襲われた。

「な……！？」

「あ、あんですってーーー！？」

「なんだって……！」

男性の説明にプリネは信じられない表情をし、エステルやヨシュアは驚いた。

「……………あ……………」

クロ ゼは男性の説明を聞くと、糸が切れたように膝をおった。

「だ、大丈夫！？」

「…………しつかり。倒れている場合じやないよ。」

「ヨシュアさんの言つ通りです、クロ ゼさん。詳しい話を聞かな
いと。」

膝をおったクロ ゼをエステルが支え、ヨシュアとプリネが励まし
た。

「す、すみません……」

エステル達に励まれ、クロ ゼは立つて詳しい説明を男性の求め
た。

「お願いします……。詳しいことを教えてください」

「あ、ああ……。学園祭から帰つて来る途中で変な連中に襲われた
みたいでな。子供たちにケガは無かつたがテレサ先生と護衛の遊撃
士の姉ちゃんが気絶させられたみたいで……」

「ええっ、カルナさんも！？」

「相当の手練みたいだね……」

「そうですね……まさか、正遊撃士の方まで気絶させられるなんて

「……………」

男性の詳しい説明を聞き、エステルやヨシュア、プリネは信じられ

ない表情をし、クロ、ゼは悲痛そうな表情をした。

「それで、ギルドに連絡するはずが宿の通信器が壊れたみたいでな。仕方なく俺が大急ぎで走ってきたんだ。」

「そうですか……。協力、感謝します。ただ、できればこのままルーアンに行ってくれませんか？僕たちはこのままマノリアに急ぎますから。」

「ああ、わかった！」「

そして男性はルーアンに向かつて再び走り去った。

「さあ、僕たちも急いでーーー！」

「う、うん！」

「ええー！」

「…………はい！」

そしてエステル達は急いでマノリア村へ向かった。

（マノリア村宿酒場・白の木蓮亭の一室）

「あ……」

「ママ……」

「（主人様）……」

部屋に入つて来たエステル達にクラムは気付き、クラムの声で気が付いたミントはエステルを見て涙田でエステルに抱きつき、ツーヤは悲痛そうな表情をしてプリネに近寄つてプリネの服を掴んだ。

「う……ひっく……先生が……」

「あたし……みんなのお姉さんなのに何もできなかつた……」

ミントはエステルに抱きついてしゃくしゃくを上げて泣き、ツーヤは悔しそうな表情でプリネに言つた。

「ミントちゃん……」

「ツーヤ……いいの。……その気持ちがあるだけでテレサさんは嬉しいこと思つわ。」

泣いているミントにエステルは膝をついて抱きしめ、プリネはツーヤを優しく諭した。

「わあああん……」

「恐かったのーー！」

ミントやツーヤがエステル達に抱きついたのと同時に、ポーリイやダニエルがクロゼに近寄つて泣いた。

「良かつた……。みんなは無事みたいね。」

傷一つついていない子供達を見て、クロゼは安堵の溜息をついた。そしてヨシュアはテレサとカルナを看護しているマノリア村の女性に容体を真剣な表情で尋ねた。

「すみません。先生たちの容体は？」

「安心しなさい。2人とも大した怪我じゃないわ。ただ、目を醒まさないからちょっと心配なんだけど……」

「……ちょっと失礼します。」

女性の答えを聞き、ヨシュアはテレサとカルナの様子を調べた。

「間違いない……。睡眠薬を嗅がされたみたいだ。」

「す、睡眠薬う？」

確信を持ったヨシュアの答えにエステルは声を上げた。

「うん、かすかに刺激臭がする。副作用がないタイプだから安心してもいいと思うけど……」

「うーん……。ね、クラム。何があつたのか教えてくれる？」

「…………」

エステルはミントを抱きしめて、泣いているミントを慰めるように優しく頭を撫でながらクラムに事情を尋ねたがクラムは黙つて何も言わなかつた。

「あたしが説明します……」

黙つているクラムに代わつてマリイが話し始めた。

「あたしたち……遊撃士のお姉さんと一緒に海道を歩いていたんで

すけど……。いきなり、覆面をかぶつた変な人たちが現れて……。遊撃士のお姉さんが追い払おうとしたけど……。覆面の人たちにすぐには囲まれちゃって……。先生もあたしたちを守つてあいつらに向かっていって……。それで……ヒック……

「マリイちゃん……」

気丈に話していたマリイだったが、最後には目に涙を溜めたのでクロゼはマリイの頭を撫でて慰めた。

「…………あいつら……先生からあの封筒を奪つたんだ……。オイラ……取り戻そうとしたけど思いつき突き飛ばされて……。ヨシュア兄ちゃん……オイラ……守れなかつたよ……」

クラムは悔しそうな表情で涙をポロポロと流し始めた。

「…………そんなことないさ。君たちが無事でいるだけで先生はきっと嬉しいはずだから。だから……自分を責めちゃダメだ。」「でも……オイラ……オイラ……」

「ヒック　ヒック……」

「許せない……！　このどいつの仕業よ……」

泣いている子供達を見て、エステルは思わず叫んだ。

「…………。はつきりしているのは……犯人たちは相当の手練ということです。遊撃士の方がなす術もなく気絶させられたわけですから……」

「クローゼ……」

一番ショックが大きいクロゼが冷静に推測している様子にエステルは驚いた。

「…………そしてもう一つ……。計画的な犯行だと思います。狙いはもちろん先生の持っていた寄付金と宝石……。孤児院を放火したのもおそらくその人たちでしょう。」

「うん、その可能性が高そうだ。」

「クローゼさん……。やつと落ち着いたみたいですね。」

冷静になつたクロゼを見て、プリネは安心して尋ねた。

「はい……。落ち込んでいても仕方ありませんから。今はとにかく、

一刻も早く犯人の行方を突き止めないと……」

「……そいつは同感だな」

そこにアガットが部屋に入つて來た。

「あら……」

「あーっ！」

「アガットさん……」

アガットの姿を見てプリネは田を丸くし、エステルは声を上げて驚き、ヨシュアも驚いた。

「話はギルドで聞いたぜ。ずいぶんと厄介な事になつてゐるみたいじやねえか。」

「ひ、他人事みたいに言わないでよ！カルナさんだつてやられちゃつてるんだから！」

「判つてゐる……。きやんきやん騒ぐな。確かにカルナは一流だ。相当、やばい連中らしいな。大ざつぱでいいから一通りの事情を話してもらおうか。」

「はい……」

そしてエステル達は一通りの事情をアガットに説明した。

「ふん、なるほどな……。妙な事になつてきやがつたぜ。」

「妙つて、何がよ？」

アガットの意味深な言葉が気になり、エステルは尋ねた。

「ああ、実はな……。『レイヴン』の連中が港の倉庫から行方をくらました。」

「そ、それつて……。やっぱりあいつらが院長先生を襲つたんじや！？」

「いや、それはどうかな。彼ら程度に、カルナさんが遅れを取るとも思えない。」

「ええ。あの入達は意氣がつてはいましたが、戦いに関しては素人に感じられましたし……いくら複数でかかつても、正遊撃士の方には敵わないと思います。」

アガットの答えを聞きロッコ達を疑つたエステルだが、ヨシュアとプリネは冷静に否定した。

「そつか、確かに……。あの連中、口先だけでろくに鍛えてなかつたもんね。」

「しばらく睨みを利かせて大人しくなつたと思ったが……。今日になつていきなり姿をくらましやがつて……。そこに今度の事件と來たもんだ。」

「犯人かどうかはともかく何か関係がありそうですね。」

「ああ、だが今はそれを詐索してゐる場合じやない。新米ども、とつとと行くぞ。」

ヨシュアの答えに頷いたアガットはエステル達に自分について来るよう促した。

「なによ、いきなり……。いつたい、どこに行くの?」

「わかんねえヤツだな。犯行現場の海道に決まつてるだろ。あのバカどもがやつたかどうかはともかく……。できるだけ手がかりを掴んで犯人どもの行方を突き止めるんだ!」

「あ……なるほど。」

「分かりました、お供します。」

アガットの言葉にエステルとヨシュアは納得し、頷いた。

「あ、みなさん。私は念のためにこちらで残つておきますね。」

「確かに先生達が完全に安全になつたとは言いきれないからね……じゃあ、先生や子供達の事を頼むよ、プリネ。僕達より感覚が鋭い君なら大丈夫だと思つし。」

「はい。……そうだ!……ペルル!マーリオン!」

テレサ達を護るために残る事を提案し、任されたプリネは使い魔達を召喚した。

「はーい!」

「お呼びですか……プリネ様……」

「な、なんだあ！？こいつらは……！？」

召喚された使い魔達を見てアガットは驚いた。

「あの2人はプリネの使い魔達です。……以前エステルがアガットさん前にパズモ呼びましたよね？あの時と同じです。」「こいつらがか……！？」

ヨシュアの説明にアガットは驚いた。

「私の代わりにエステルさん達を手伝つてあげて下さい。」「うん！」

「了解……しました……」

主の言葉に使い魔達は頷いた。

「……という訳です。この2人も戦力として連れて行って下さい。」「ありがとう、助かるわ！」

プリネにお礼を言った後、エステルは心配そうな表情で自分を見ているミントと顔を合わせた。

「ママ……」

「ミントちゃん……先生達を酷い目に合わせた悪い奴らを今からとつちめてくるから、いい子にして待つてね。」

「うん……ミント、いい子にして待っているから無事に帰つて来てね、ママ。」

「モチのロンよー。」

心配そうな表情をしているミントを元気づけるようにエステルは明るい笑顔で答えた。

そしてエステル達はテレサ達を襲つた襲撃者達を調べるために一端外に出た……

第77話（後書き）

今回はしばらく出番がなかつたプリネの使い魔達を活躍させるので原作のイベントバトルを楽しみにして下さい。……感想お待ちしております。

（マノリア村宿酒場前・夜）

エステル達が宿を出ると、既に日が暮れていた。

「わっ、もうこんな時間！？」

「ち……マズイな。これだけ暗いとどこまで調べられるか……」

既に夜になっている事にエステルは驚き、アガットは舌打ちをした。

その時、鳥の鳴き声がした。

「ピューイ！」

「なんだ、今の鳴き声は……」

鳥の鳴き声にアガットは首を傾げたその時、ジークが空からやつて来てクローゼの肩に止まつた。

「まあ、ジーク……。どこに行つてたの？」

「な、なんだコイツは。」

「クローゼのお友達でシロハヤブサのジークよ。」

「はあ……お友達ねえ……」

エステルの説明にアガットは半信半疑でジークを見た。

「ピューイー！ピューイ、ピューイ！」

「そう……わかったわ。ありがとうね、ジーク。」

「ピューイ」

「まったく香氣なもんだぜ。で、お嬢ちゃん。そのお友達はなんだつて？」

ジークとクローゼの様子にアガットは溜息をつき、尋ねた。

「先生たちを襲つた犯人の行方を教えてくれるそうです。襲われた時にちょうど見ていたらしくて……」

「ははは！面白いジョークだぜ……」

「やつた…さすがジーク！」

「うん、お手柄だね。」

「ピューアーイ」

クローゼの言葉をアガットは笑い飛ばして否定したが、エステルやヨシュアは普通に信じたのを見て焦った。

「ちょ、ちょっと待て！お前ら、そんな口タ話をしんじてるんじゃねえだろうな？」

「僕たちは何度もこの田で確かめていますし。」

「うん。ジーク……だけ？その子がいつている事は本当だよ。」

「はあ？なんで会つた事もないお前が断言できるんだよ？」

アガットは自信を持つて答えたペルルに尋ねた。

「ボクを見てわからない？ボクは鳥翼族。仲間である鳥の言葉は当然聞こえるよ！」

ペルルは両方の翼をアガットにわかるように広げて見せた。

「…………」

ペルルの答えにアガットは呆けて声が出なかつた。

「信じないんだつたら付いて来なけりゃいいのよ。クローゼ、ジーク、マーリオン、行きましょ！」

「はい！」

「ピューアーイ！」

「了解……しました……」

そしてジークが飛び立ち、ゆつくりと先導し、アガットを残してエステル達はジークの後を追つた。

「…………えーと…………。」「、こりゃガキども、待ちやが

れ！」

しばらく呆けたアガットだが、我に帰りエステル達の後を慌てて追つた。

先導するジークの後を追つたエステル達はマノリア村の近くの灯台バレンヌ灯台に辿りついた。

（バレンヌ灯台）

「あの建物つて……」

「バレンヌ灯台……。ルーアン市が管理する建物だな。確か、灯台守のオッサンが一人で暮らしていたはずだが……」

灯台を見上げて呟いたエステルの言葉にアガットは灯台を睨みながら答えた。

「でも、間違いありません。先生たちを襲つた人たちはあの建物の中にいると思います。」

「となると、犯人に灯台内を占領されている可能性が高そうだね。確信を持つたクロ ゼの答えを聞き、ヨシュアは真剣な表情で灯台を見た。

「見たところ……入口はあそこだけみたい。とにかく入ってみるしかないか。」

「はい……」

エステルの言葉に頷いたクロ ゼはエステル達と共に進もうとした時、アガットに呼び止められた。

「ちょっと待ちな。嬢ちゃん、あんたは……」

「この目で確かめてみたいんです。」

「なにい？』

クロ ゼを村に帰そうと思ったアガットだったが、クロ ゼの言葉に首を傾げた。

「誰がどうして、先生たちをあんな酷い目に遭わせたのか……。だから……どうかお願いします。」

「そ、そつは言つてもな……」

「あーもう。ケチなこと言うんじゃないわよ。この場所が判つたのはクロ ゼたちの手柄なんだから。」

「彼女の腕は保証しますよ。少なくとも、足手まといになる心配はないと思います。」

一般市民であるクロ ゼがついて来る事に渋るアガットにエステル

とヨシュアが援護した。

「エステルさん、ヨシュアさん……」

「ち……勝手にしろ。だがな、相手はカルナを戦闘不能に追いやつた連中だ。くれぐれも注意しとけよ。」

押し問答している時間はないと思つたアガットは折れて、クロ ゼに忠告した。

「はい、肝に銘じます。」

「……その2人も大丈夫だろ? 怪我しても知らねえぞ?」

クロ ゼの答えを聞いたアガットはペルルやマーリオンにも忠告した。

「大丈夫! こういう事には慣れているから! それにボクはこう見えても、結構戦えるよ?」

「私達の事は……心配……ありません……」

「チツ、どいつもこいつも好きにしやがれ。」

2人の答えにアガットは諦めて舌打ちをした。

「それじゃ、決まりね。」

「うん……。さつそく中に入ろう。」

そしてエステル達は灯台の中へ入つた。

♪バレンヌ灯台内・1階♪

灯台に入るとそこには、レイヴンのメンバーがいた。

「こ、こいつら! ?」

「あ、あの時の人たち……」

レイヴンのメンバーを見てエステルとクロ ゼは驚いた。

「まさかとは思つたが……おい、てめえら……。こんな所で何やつてやがる! 」

アガットはレイヴンのメンバーに近付き、怒鳴つた。

「――」

「――」

「――」

「――」

「――」

レイヴンのメンバー達は虚ろな目でアガットを見た。

「お、おい……」

様子がおかしいレイヴン達にアガットは近付いた時、メンバーの一人であるデインがいきなりナイフを抜いてアガットに襲いかかった！

「アガットさん、危ない！」

キン！

ヨシュアが叫んだ時、アガットは反射的に重剣を抜いてデインの攻撃を受け止めた。

「こ、この力……！？」

デインの攻撃を受け止めたアガットは驚愕の表情でデインを見た。

「デイン、てめえ……」

「…………」

アガットはデインを睨んだが、デインは虚ろな目の状態で何も語らなかつた。

そして残りの下っ端の2人もナイフを抜いた。

「はつ、上等だ……。なにをラリッてるのかは知らねえが……。キツイのをくれて目を醒ませてやるぜ！」

そしてエステル達とデイン達の戦いが始まった！

「はつ！」

「…………」

「ふつ！」

「…………」

エステルとヨシュアは同時に下っ端達に攻撃を仕掛けたが、2人の攻撃はナイフで受け止められた。

「嘘！？」

「信じられない力だ……！」

受け止めて押し返そうとしている下っ端達の力にエステルとヨシュ

アは驚いた。

「行つぐよ……それえ！」

「…………」「」

下つ端達を狙つて体全体を回転させて突進したペルルの攻撃に気付いた下つ端達はエステル達に攻撃を押し返すのをやめて素早く後ろに回避した。

「嘘！？避けられちゃつた！？」

自分の攻撃が回避された事にペルルは驚いた。

「水よ……アクアブリード！」

「これでどう……ですか……水弾……！」

後方のクロ・ゼとマーリオンはそれぞれアーツや魔術を下つ端達に向けて放つた！

「…………！」「」

アーツや魔術によってできた水に下つ端達はのけ反つた。その隙を逃さず、ヨシユアはクラフトを放つた！

「おおおお！」

「…………！？」「」

クラフト 魔眼を受けた下つ端達の動きが鈍つた。動きが鈍つた下つ端達をエスティルとペルルが止めるクラフトを放つた！

「はああ、せいつ……！」

「超・ねこ、パンチ！！」

「…………！」「」

エスティルのクラフト 金剛撃とペルルのクラフトを受けた下つ端達は吹つ飛ばされて、壁にぶつかり気絶した。

「ふおらあああ！」

一方デインをしていたアガットは速攻で決めるために豪快な一撃のクラフト フレイムスマッシュを放つた。

「…………」「」

しかしデインは虚ろな目でアガットのクラフトを後ろに跳んで回避した。それを見たアガットは不敵に笑つた。

「へつ……馬鹿が……そこだあードラグナーエッジーー」

「…………!?」

後ろに着地したと同時にアガットの放った衝撃波に当たり、デインは下つ端達と同じように壁に当たつて気絶した。

「し、信じられない……。倉庫で戦つた時とはケタ違ひの強さじゃない！」

「様子も変でしたし……。どういう事なんでしょうか？」

戦闘が終わり、気絶したデイン達に近寄り、エステルはデイン達の強さに驚き、クロ ゼは様子がおかしかったことに不安げな表情でデイン達を見た。

「ふん……。どうやら何者かに操られていたみたいだな。」

「あ、操られていたって……」

氣絶したデイン達を睨みながら答えたアガットの言葉にエステルは驚いた。

「うん、間違いない……。薬品と暗示を併用した特殊な催眠誘導みたいだ。肉体的なポテンシャルも限界まで引き出されている。」

「そ、そんな事できるのー?」

デイン達を調べて言つたヨシュアの説明にエステルは驚いて尋ねた。「もちろん、相当な技術が必要になるのは間違いねえ。こいつはひょつとしたら……」

「心当たりがおありなんですか？」

何かを知つていそうなアガットにクロ ゼは尋ねた。

「ああ……ちよいとな。とにかく、上の階を目指すぞ。こいつらを操つている真犯人どもがいるはずだ。」

「うん、わかつた!……つとそつだ!パズモ!」

アガットの言葉に頷いたエステルはパズモを召喚した。

(何、エステル?)

「お願い、力を貸して!多分上にもレイヴンの奴らがいると思うんだけど、多分こいつらみたいにケタ違いの強さだと思つから、援護

してほしいの！」

（わかつたわ。じゃあ行こう、エステル。）

エステルの頬みに頷いたパズモはエステルの肩に乗った。

「ん？ そいつは以前の小さいのじゃねえか。……そんなんが役に立つのか？」

アガットはパズモを見て、胡散臭そうな表情でパズモを見た。

「ちょっと！ また、パズモをバカにしたわね～！ 見てなさい、パズモがいればあたし達は無敵なのを見せてあげるわ！ 賴んだわよ、パズモ！」

（ええ！）

そしてエステル達は途中にいるほかのレイヴンのメンバーをパズモやペルル、マーリオンの援護を受けて順調に倒し、最上階に向かつた……

第7・8話（後書き）

この後のイベントバトル後、驚きの展開があるので楽しみに待つて下さい……感想お待ちしております。

普通でないレイヴンのメンバー達を倒しつつ、最上階に向かつたエステル達は最上階へ続く階段の上から、人の話し声が聞こえたので階段で耳を澄ました。

「バレンヌ灯台・最上階」

「ふふふ……。君たち、良くやつてくれた。これで連中に罪をかぶせれば全ては万事解決というわけだね。」

声の主はなんとダルモアの秘書のギルバートであり、黒装束の男達を黒い笑みでほめた。

「我らの仕事ぶり、満足していただけたかな?」

「ああ、素晴らしい手際だ。念のため確認しておくが……証拠が残る事はないだろうね?」

「ふふ、安心するがいい。たとえ正気を取り戻しても我々の事は一切覚えていない。」

「そこに寝ている灯台守も朝まで目を醒まさないはずだ。」

ギルバートの疑問に黒装束の男達は自信を持つて答えた。

「それを聞いて安心したよ。これで、あの院長も孤児院再建を諦めるはず……。放火を含めた一連の事件もあのクズどもの仕業にできる。まさに一石二鳥……いや、院長共をイーリュンのお人好し共が引き取ってくれるからこっちの財産は一切減らない……一石三鳥だな。」

「喜んでもらつて何よりだ。」

「しかし、あんな孤児院を潰して何の得があるのやら……。理解に苦しむところではあるな。」

男の一人はギルバートの狙いに首を傾げた。それを見て、気分が良かったギルバートはさらに黒い笑みで答えた。

「ふふ、まあいい。君たちには特別に教えてやるつ。市長は、あの土地一帯を高級別荘地にするつもりなのさ。」

「ほう……？」

「風光明媚な海道沿いでルーアン市からも遠くない。別荘地としてはこれ以上はない立地条件だ。そこに豪勢な屋敷を建てて国内外の富豪に売りつける……。それが市長の計画といつわけさ。」

「ほう、なかなか豪勢な話だ。しかしどうして孤児院を潰す必要があるのだ？」

ダルモアの考えに黒装束の男は頷いた後、ダルモアの考えを聞いても解けなかつた事を尋ねた。男の疑問にギルバートは冷笑して答えた。

「はは、考へてもみたまえ。豪勢さが売りの別荘地の中になんな薄汚れた建物があつてみろ？おまけに、ガキどもの騒ぐ声が近くから聞こえてきた日には……」

「なるほどな……。別荘地としての価値半減か。しかし、危ない橋を渡るくらいなら買い上げた方がいいのではないか？」

ギルバートの答えに納得した男だつたが、まだ疑問が残つたので尋ねた。その疑問にギルバートは鼻をならして答えた。

「はつ、あのガンコな女が夫の残した土地を売るものか。だが、連中が不在のスキに焼け落ちた建物を撤去して別荘を建ててしまえばこちらのものさ。フフ、再建費用もないとすれば泣き寝入りするしかないだろうよ……」

「それが理由ですか……」

その時静かな怒りの少女の声がした。

「――！」

その声に驚いたギルバート達が声のした方向に向くと、そこには武器を構え、怒りの表情のエステル達がいた。

「き、君たちは……！？」

エステル達を見てギルバートは慌てた。

「そんな……つまらない事のために……先生たちを傷つけて……思
い出の場所を灰にして……。あの子たちの笑顔を奪つて……」

クロ ゼは顔を伏せ身体中を震わせながら言った。

「ど、どうしてここが判つた！？それより……あのクズどもは何を
してたんだ！」

「残念でした。みんなオネンネしてる最中よ。しつかし、まさか
市長が一連の事件の黒幕だつたとはね。しかも、どこかで見たよう
な連中も絡んでるみたいだし……」

焦つて尋ねたギルバートの疑問にエステルはしたり顔で答え、黒装
束の男達を見て言った。

「ほう……。娘、我々を知つていいのか？」

「そこの赤毛の遊撃士とは少しばかり面識はあるが……」

「ハツ、何が面識だ。ちよろちよろ逃げ回つた拳句、魔獣までけし
かけて来やがつて。だが、これでようやくてめえらの尻尾を掴める
ぜ。」

黒装束達の言葉にアガツトは鼻をならし、いつでも攻撃できる態勢
になつた。

「き、君たち！そいつらは全員皆殺しにしちゃーか、顔を見られたか
らには生かしておくれわけにはいかない！」

「先輩……本当に残念です……」

黒装束の男達に見苦しい態度で命令するギルバートの姿にクロ ゼ
は呟いた。

「まあ、クライアントの要望とあらば仕方あるまい。」

「相手をしてもらおうか。」

ギルバートの命令に黒装束の男達は溜息をついた後、両手について
いる短剣らしき刃物が爪のようについている手甲を構えた。

「ふん、望むところだつての！」

「たとえ雇われてやつたのでもあなたの方の罪は消えません……」

「『重劍』の威力……たつぱりと味わいやがれ！」

「来ます……！」

「行つくよー！」

（行くわよ！）

「参ります……！」

そしてエステル達と黒装束の男達の戦いが始まった！

黒装束達は強化されたレイヴン達と比べると身体能力は高くなかつたが、そこそこ腕前のためにエステル達は手間取つた。

「はつ！」

「フツ……」

エステルの攻撃を黒装束の男は無駄のない動きで回避した。

「こちらの番だ……！」

「！」

黒装束の男が武器を構え襲つてくるのを見てエステルが防御の態勢に入つた時

（光よ、かの者を守護する楯となれ！防護の光盾！）

すかさずパズモが魔術を使ってエステルに光の膜を覆わせた。光の膜は黒装束の男の攻撃を跳ね返した！

「何！？」

跳ね返つた衝撃で両手をあげられた黒装束の男は驚いた。

「そこだ……朧！」

「ぐつ！？」

隙を逃さず狙つたヨシュアのクラフトに男は呻いた。そこをさらに

次の魔術の詠唱を終えたパズモが魔術を放つた！

（……光よ、集え！光霞！）

「ぐわあつ！？」

パズモの魔術を喰らつてしまつた男は悲鳴をあげた。

「超・ねこ、パーンチ！」

「ぐはつ！？」

そこにペルルの攻撃が当たり、男はペルルの攻撃を受けて後退した。

そこに詠唱を終えたエステルの魔術が男に襲いかかつた！

「……大地の力よ、我が仇名す者の力を我の元に……！地脈の吸收！」

エステルが放つた地の魔術は男の足元から木の根が生えて、男の体中に巻き付いた。

「な、なんだこれは……！くそ、放せ……！」

巻きついた木の根に男は驚き木の根を振り払おうともがいたが、木の根はピクリとも動かずそして木の根全てが光った！

「ぐわあああ……！ち、力が……！」

木の根に男の力が吸い取られ、吸い取られた男はその場で膝をついで立ち上がらなくなり、役目を終えた木の根は光の玉となつてエステルの身体に入り、今までの戦いで傷ついたエステルの傷を癒した。

「へ……攻撃と同時に回復もできるなんて、これは使えるわね……さて、あつちは終わつたかな……？」

新しく使つた魔術の効果にエステルは両方の拳を見た後、握りしめて勝利の喜びを噛みしめた後残りの一人と戦つているアガツト、クロゼ、マーリオンを見た。

「おらつ！」

「くつ……」

アガツトの豪快でありながら粗いが正確な攻撃に黒装束の男は必死に避けていた。

「せいっ！」

「……つづー？」

そこにクロゼのレイピアによる突きの攻撃が男の脇腹を掠つた。

「くつ……調子に乗るなっ！」

一端後ろに跳んで後退した男は武器を構え、突進して來た。

「させません……！水よ……行け……！」

「ぐわあつー？」

しかし、マーリオンが放つた水の魔術　連續水弾をまともに受けてしまつたため、のけ反つてしまい動きが止まつた。

「……水流よ、吹きあがれ！……ブルーインパクト！」

「なあつ！？」

そこにクローゼのアーツが放たれ、アーツによつて起された水流が男の足元から吹きあがつて、男を宙に舞わせた。

「出でよ……荒ぶる水……！溺水……！」

「なつ……！ガハツ！？」

さらにマーリオンが放つた魔術は宙に舞つている男の真上から滝のような大量の水が発生し、男を地面に叩きつけた！

「そこだあ！ドラグナー・エッジ！！」

「ぐはつ！？」

そして止めに放つたアガットのクラフトが男を吹き飛ばし、吹き飛ばされた男は立ち上がらなくなつた……

第7-9話（後書き）

感想お待ちしております。

第80話（前書き）

今回は旧幻燃キャラが登場します！！

「バレンヌ灯台・最上階」

「そ、そんな馬鹿な……」

黒装束の男達がやられた事にギルバートは愕然とした。

「市長秘書ギルバード。及び、その黒坊主ども。遊撃士協会規約に基づき、てめえらを逮捕、拘束する。あきらめて投降しやがれ。」「ううう……」

アガットの宣言にギルバートは呻きながら後ずさった。

「なかなかやるな……。真っ向からの勝負ではやはり遊撃士は手強い。まさか、”闇夜の眷属”をも仲間にしているとは……」

「ああ、隊長の忠告通り油断すべきではなかつたか。」

エスティル達に負けた黒装束の男達はなんとか立ち上がり、冷静に言った。

「隊長……。ひょっとして空賊と交渉していた赤い仮面をかぶつた人ですか？」

「その事も知つているとは……」

「さすがギルドの犬ども。なかなか鼻が利くようだな……」

ヨシュアの言葉に男達は驚き、口元に笑みを浮かべた。

「負けたくせにな／＼に余裕かましてんのよ！いいから武器を置いてとつとと降伏しなさいよね！」

「フ、それはできんな。」

エスティルの叫びに男は冷笑し、ギルバートに近付き、銃を構えた。

「なつ！？」

「な、なんのつもりよ！？」

男の行動にギルバートは信じられない表情をし、エスティルは驚いて近付こうとしたが

「動くな。それ以上近寄ればこいつの頭が吹き飛ぶぞ。」

銃をギルバートの頭に突きつけながら脅迫した。

「き、君たち！？や、雇い主に向かつてどういうつもりだ！？」

銃を頭に突きつけられたギルバートは焦つて喚いた。

「勘違いするな、若造。我々の雇い主は市長であつて貴様ではない。

「市長にしたところで同じ」と。利害が一致していたから協力して
いたに過ぎん……」

「お前がここで死のうが我々は痛くも痒くもない。」

「ひ、ひいいい……。撃つな、撃たないでくれ！」

本気の様子の男達を見て、ギルバートは命乞いをした。

「コラ、いいかげんにしろや。そんな下手な芝居打つて逃げられる
と思つて……」

バン！

男達の行動をその場を逃れる芝居と思ったアガットは氣にもせず近付こうとしたその時、男の銃が火を吹いてギルバートの片足を撃ちぬいた。

「ぎやあああっ……。あ、足が……僕の足がああ……」

片足を撃ち抜かれ、撃たれた所から血が流れ出たギルバートは撃たれた足を庇つて悲鳴を上げた。

「せ、先輩！？」

「チツ……」

「どうやら本気みたいですね。」

男の行動にエスティル達は驚いた。

「これでも納得しないなら……。」ちらの灯台守の頭を撃ち抜いて
もいいのだが？」

そしてもう一人の男が、眠つている灯台守の老人の頭に銃を突きつけた。

「や、やめなさいよ！その人は関係ないでしょ…」「男の行動にエステルは思わず、叫んだ。

「ならば、しばらくの間離れていてもらおうか……。そうだな……階段の近くまで下がれ。」

「フン、仕方ねえな……」

男達の要求にアガットは舌打ちをして、エステル達と共に階段の近くまで下がった。

「ふふ、いいだろう。」

「それでは、さらばだ。」

そして男達は灯台の修理用の出口から撤退した。

「待ちなさいってーの！』

「逃がすか、オラあツ！」

男達が出口から出ると同時にエステル達は男達が逃げた出口に向かつて駆けて、出口を出た。しかし出口を出た時、男達の姿はなく、ワイヤ ロープのフックが灯台の手すりに引っ掛けっていた。

「脱出用のワイヤーロープ！？』

「な、なんて用意周到なやつらなの！？」

手すりにフックが引っ掛けているワイヤーロープを見て、ヨシュアとエステルは驚いた。

「…………。秘書野郎どバカどもの面倒は任せたぞ。」

「えつ……？」

「俺はこのまま連中を追う！お前らは、今回の事件をジャンに報告して指示を仰げ！」

エステル達にそう言い残したアガットはワイヤーロープで降りて行つた。

「ボクはルーアンに行つてリフィア達に伝えて先回りしてもらうから、プリネにすぐ戻つて来る事を伝えておいてね！」

「あ、ペルル！」

ペルルは夜闇の空へ飛び上がり、エステル達に伝えた後ルーアンに向かつて飛んで行つた。

そしてエステル達は奪われた寄付金を取り戻した後、ギルバートやレイヴン達を拘束してマノリアの風車小屋に連れて行つた。

メ ヴェ海道・夜

黒装束達が逃亡して少しした頃、そこにはペテレーネを先にホテルに帰らせて、コリンズと色々な話をして帰りが遅くなつたりウイグルーアンのホテルへの帰路についていた。

「予想以上に話が長引いてしまつたな……しかし、”闇夜の眷属”の子供達の留学……か。種族間の壁を取り払う策の一つとしては使えるかもしれません。……プリネが世話になつた礼もあるし、考えておくか。……ん？」

考え事をしながら独り言を呟いていたリウイだつたが、空から自分に近づいて来る気配がしたので、空を見上げると、そこにはペルルガリウイに近付いて來た。

「あ……見覚えのある後ろ姿だと思ったけど、プリネのお父さんだ！ルーアンのホテルに帰つたんじゃないの？」

「……プリネの使い魔か。学園長と少し話をしていてな。今帰るところだ。それで何の用だ。」

「うん、あのね……！」

そしてペルルは孤児院の放火事件や黒装束の男達について説明し、リフィア達に先回りしてもらうために逃亡している黒装束の男達を抜いて、ルーアンに知らせるために飛んでいたが、その途中で見覚えのある人影を見たので話しかけた事を言つた。

「……なるほど。それでその黒装束とやらの特徴はどんなものだ？」

「えつと……確か……」

ペルルはリウイに黒装束達の特徴を思い出しながら説明した。

「…………」

「えっと、どうしたんですか？」

黒装束の特徴を聞き、考え込んでいるリウイを不思議に思つてペルルは尋ねた。

「少し気になる事ができた。報告御苦労。お前はプリネの元に戻れ。

「え……でもリフィア達にまだ言つてないし……」

「あいつらの場合、やりすぎて殺してしまう可能性がある。そいつには少々用があるしな……俺自らが追おう。だから安心しろ。」「う、うん。じゃあ、お願ひします！」

リウイの答えに戸惑いながら頷いたペルルは再び空へ飛び上がり、主であるプリネの元へ飛んで行つた。ペルルが飛び上がるのを見送つた後、リウイ懐からメンフィル帝国が開発した導力技術と魔術、魔導技術によつてできた小型の通信機に魔力を流し込んだ後、ある人物と通信をした。

「俺だ。聞こえるか、ファーミシルス。」

「いかがなさいましたか、リウイ様。確か本日はペテレーネやティア様と共にルーアンに一泊するとの事でしたが、……」

「ああ。リフィア達の報告にあつた例の情報部とやらが動いた。」

「ああ……最近大使館の周りやロレント市民に我々の事をコソコソと嗅ぎまわっているネズミ共ですか。相手は一応同盟国そのため様子見をしていましたが、一体どんな動きをしたのですか？」

通信機からは黒装束達を嘲笑するようなファーミシルスの声がした。

「実はな……」

そしてリウイはファーミシルスにペルルから聞いた事を説明した。

「……なるほど。今回の件を利用すればリベルのネズミ共の目的がわかりますね。」

「ああ。何の罪もない一般市民達が住む住居を放火したり、直接襲

つた者達だ。これなら向こうから何か言われても大義名分が立つ上、遠慮なく拷問して奴らの狙いがわかるかもしれん。俺は今から奴らを追う。今から来れるか？

「はっ。こちらでリウイ様が持たれている通信機の現在地がわかりますので今から参ります。」

「ああ。」

そしてリウイは通信機を懐に仕舞つた後、気配を感じたので近くの木の影に身を潜めた。少しすると逃げて行く黒装束の男達とそれを追うアガツトが通り過ぎた。

「今の男の胸についていた紋章は遊撃士協会の……まあいい。気付かれぬ程度に追うか。」

姿を現したリウイはアガツトの服についていた紋章を思い出し少しの間考えていたが、優先すべき事のために考えるのをやめ、気配を消してアガツトの後を追つた……

第80話（後書き）

とこつ訳でリウイ、再び出番です！リウイがこの時の黒装束達を追う事によつてどんな事が起きるかは……みなさんの「想像にお任せします」……感想お待ちしております。

外伝「重剣の追跡」

（アイナ街道・夜）

リベルの名所でもあるエア＝レッテンに続く道に先ほどの黒装束の男達が息を切らせていた。

「はあはあ……」

「な、何でしつこいヤツだ！」

「おらおらおらッ！」

そこに勢いをもつたアガットが追いついた。

「あんな大剣をかつきながらどうして付いてこられるんだ！？」

黒装束の男達は逃げながらもアガットの身体能力に驚愕していた。

「ハッ、鍛え方が違うんだよ……らああああああっ！」

ズドン！！

アガットは近くにあつた岩にジャンプし、さうに勢いを持つて男達に攻撃を仕掛けた。

「クッ……これ以上は振り切れんか……」

「仕方ない、迎撃するぞ！」

男達は装備している武器を構えた。それを見てアガットは不敵に笑つた。

「ようやくその気になつてくれたみたいだな……てめえらとの鬼ごっこもここまで嬉しいぜ。」

「しつこく追つて来なければ、死なずにするだものを……」

「馬鹿な奴だ……、2対1で勝てると思うのか？」

「ハッ、勝てるに決まってるだろ。喧嘩は気合だ！！」

男達の言葉にアガットは不敵に笑つて答えた。

「なに……！？」

「ケンカは気合だ。気迫で負けたら終わりなんだよ。尻尾巻いて逃げ出した時点でめえらは負け犬決定ってわけさ。」

「ほ、ほざけ！ギルドの犬がッ！」

「2人がかりでなぶり殺しにしてやる！』

アガットの言葉に怒った男達は同時にアガットに襲いかかったが

「ふおらああああ！フレイムスマッシュ！」

「ぐああああああ……！」

アガットの強烈なクラフトによつて膝をついた。

「クツ……！」で捕まるわけには……」

「フン、とつと降伏して洗いざらい白状して貰おうか。てめえらが何者で何を企んでるのかをな……」

アガットが男達に近づこうとした時、聞いた事もない青年の声が男達の背後から聞こえた。

「…………それは困るな」

「なッ！？」

男達の背後からは仮面を被つた青年が現れた。

「い、いつのまに……」

仮面の青年の気配に気付けなかつた事にアガットは驚いた。

「た、隊長！？」

「来て下さつたんですか！」

青年の登場に男達は喜んだ。

「仕方のない連中だ。定時連絡に遅れた上こんなところで遊んでいるとは。」

「も、申し訳ありません。」

「いろいろと邪魔が入りまして……」

青年の嘆息に男達は焦つて言い訳をした。

「なるほどな……。てめえが親玉つてわけか？」

男達の態度からアガットは仮面の青年の正体を推測して言った。

「フフ、自分はただの現場責任者にすぎない……。部下たちの非礼は詫びよう。ここは見逃してもらえないか？」

「あ？ 今……なんて言った？」

青年の突拍子のない提案にアガットは一瞬呆けた。
「見逃して貰えないと言つた。」ちらりとしても遊撃士協会と事を構えたくないのでね。」

「アホか！んな都合のいい話があるか！」

繰り返すように言う青年の言葉をアガットは否定した。そしてアガットの答えに青年は溜息をついて、男達に指示をした。

「やれやれ……悪くない話だと思つたんだが……お前達、ここは自分が食い止める。早く合流地点に向かうがいい。」

「は、はい！」

「感謝いたします、隊長！」

そして男達は走り出した。

「逃がすか、おらあ！」

「…………」

アガットは追うよつに追撃をかけよつとしたが仮面の青年が邪魔をした。

「てめえ……。フン、まあいい。だつたら獲物を変えるまでだ。てめえが持つてる情報の方がはるかに重要そだからな……」

「フフ……。そう簡単に狩れるかな？」

「上等ッ！」

そしてアガットは重剣を、青年は長剣を構えて戦い始めた！

キンーガン！ シャツ！ ズドン！

アガットと仮面の青年はしばらく剣を交わしたりそれぞれの攻撃を回避した。

そしてお互ひ、ある程度の距離を持つた。

「フン、やるじやねえか。」

「抑えきれない激情を持つて鉄魂を振るうか……お前は自分と似たところがある。」

「……………なんだと？」

「己の無力さに打ちのめされた…… そんな眼をしているぞ。」

「……………クツクツクツ、いいねえ。どこの誰かは知らねえが気にい

「たせ

アガツトは何かを抑えるように笑った。

「自分もお前のような不器用な男は嫌いではない。お互い、このあ

黒一瞬し「一さ知力感が事

「フツ」

そしてお互いが力を溜めた。

「କବିତାରେଣ୍ଟିଙ୍ଗ」 -

「はああああああ！」

うりて一瞬の刹那、向者が交錯して、何時もいふべきの言葉が叫んで胸をこねた。

「...」

日本では、もはやヤッだ。ガルでござんして徹底的縮小主義である。

アガットが青年に近付いたその時、青年の姿が揺らいた。

「な、何だ？」

そして完全に青年の姿は消えた。その正体に感づいたアガツトは信じられない表情で叫んだ。

「……これは……分け身のクラフトー？」

そして暗い木々の中から声が聞こえてきた。

「アーッ……悪くない一撃だ。たかまた迷しかあるよ」たな、その

「な、何！？」

「修羅と化するなら全てを捨てる覚悟が必要だ……人として生きたいなら……怒りと悲しみは忘れるがいい。」

それでせりばだ……」「

そして完全に気配がなくなつた。

「忘れると、そんな事、できる訳ねえだろ。」

「うるるるるるるる」に住む地元の「うるる」に即して

その後アガットは一端報告をするために悔しき

アンのギルドに向かって夜闇の道を進んで行った……

外伝～重剣の追跡～（後書き）

次はみなさんお待ちかね、リウイの出番です！……感想お待ちしております。

外伝／激突！闇王と剣帝の邂逅／前篇（前書き）

気付けば話の数が100話越え……！FCは何話で終わるかな？？

外伝／激突！闇王と剣帝の邂逅／前篇

（アイナ街道・夜）

「ハア、ハア、どうにか無事につきそつだな。」

「ああ、これも隊長のお陰だな。」

そのころ、仮面の男に助けられた男たちは安堵の息をはいていた。

「残念だつたな。そうはさせん。」

「な、何！？」

突然自分達の背後から声が聞こえ、驚いた男達が振り向くとそこには鞘から愛劍を抜いて立っているリウイがいた。

「いつの間に……！」

「リベルの間諜達よ。一度だけ言つ。自分達のやつた罪を認め、武器を退き大人しく俺に降伏するがいい。命だけは保証してやるつ。」

「

「なつ！？」

「なぜ、我々の正体を知つてゐる……！」

リウイの宣言に黒装束の男達は驚いた。

「2度は言わぬ。是か否か。どちらだ。」

「何者かはわからぬが我等の正体を今の時点で知つて貰つては困る……！」

「閣下の悲願のために死んでもううぞ……！」

黒装束の男達 リベル軍大佐、リシャールが率いる情報部の兵、特務兵達は武器を構えてリウイに襲いかかつた！しかし

「……雑魚共が。俺に戦いを挑んだ事、後悔するがいい。メーテアルザ！？」

「「ぎやああああつ！？」」

無謀にもリウイに挑んだ特務兵達はリウイの魔法剣により、一撃で全身血達磨になり、悲鳴を上げて地面に倒れた。

「お前達には少々聞きたい事があるからな。急所は外してある。お前達の謀を聞かせてもらつと同時に罪なき者達を襲つた報いも受けてもらつぞ……お前達がやつた事、後悔するがいい。」

「く、くそ……」

「か、身体が動かない……！」

リウイの一撃で身体中の神経を傷つけられ、身体が動かない特務兵達は地面に伏せたまま呻いた。

「これは……」

そこに先ほどアガットと戦つた仮面の男がやつて来て、特務兵達の惨状を見て驚いた。

「た、隊長！」

「も、申し訳……ありま……せん……一どうか、撤退の援護を……！」

特務兵達は仮面の男に希望を持った顔を向けて助けを求めた。

「やれやれ……遊撃士協会の次はメンフィル帝国か。……今日は厄日だな。」

助けを求める特務兵達を一瞬だけ見た後、レイピアを構えているリウイから田を離さず溜息をついて呟いた後、リウイに交渉を持ちかけた。

「『』のような所で貴殿のような方に会えるとは夢にも思いませんでした。リウイ皇帝陛下。」

「なつ！？」

「た、隊長……今、なんと……！？」

仮面の男の言葉に倒れている特務兵達は驚愕の表情で仮面の男とリウイを見た。

「フン。お前が特務兵を率いる将の一人、ロランス少尉か。」

「フフ……”大陸最強”と讃えられる陛下に自分のような未熟者の事を知つていただいているとは、恐悦至極でござります。」

「世辞はいい。何の用だ。」

「ハツ……ここはお互見なかつた事にしていただけないでしようか？」

「ほつ……ならば今ここで大使館の周りでコソコソと嗅ぎまわるネズミ共を退かせる事を誓え。こちらとしては鬱陶しいし、こちらに来てから結びつけた同盟を女王の目を盗み、謀を考えているお前達のせいで崩すのは心苦しい。」

仮面の男

ロランスの交渉にリウイは余裕の笑みで答えた。

「ハツ。明日には連絡をして退かせましょう。なのでここは見逃してはいただけないでしょうか？」

「さて……な。お前達がなぜ、俺達を嗅ぎまわるか教えるのならば別にいいぞ。」

「わかりました。……自分達は同盟国の事をより深く知りたかつただけです。」

「フン。要は俺達の弱みを探つていたようなものではないか。……それで俺達の弱みは握れたか？」

ロランスの言葉を嘲笑したリウイは表情を余裕の笑みに変えて尋ねた。

「フフ、まさか。わかつた事は陛下は身分もない見知らぬ少女を重用している剛胆な方という事しかわかりませんでした。」

「ほつ……興味深い話だな。部下達にはみな平等に接していふつもりなのだな。」

ロランスの言葉が遠回しにイリーナの事を示している事に気付いたリウイは目を細めて、先を促した。

「確かにイリーナといふ少女でしたかな？大使館で使用人として働いているその少女だけ、こちらの出身である事がわかりました。……しかもその少女は陛下達のお世話をしているそうですね？」

「……何が言いたい。」

顔には出さず、リウイはロランスを最大限に警戒した。

「フフ、少し気になつただけですよ。陛下はその少女を大事にしているのか、少女が大使館を外出した際、メンフィル兵らしき私服の者達が隠れて護衛をしている所を見ましたから、何かあると思っただけです。」

「…………」

「ですから自分達は陛下に安心してもらうために、僭越ながら自分達がその少女を見守つていただけです。」

「余計なお世話だ。その者共も退かせろ。」

「フフ。今後自分達、情報部のする事にメンフィル帝国が関わらなければ貴殿等の事はもう調べない事を誓いましょう。」

「…………いいだろ？ 同盟国とはいえそこまで関わるつもりはなかつたしな。ただしあくまでメンフィル帝国が関わらないだけだ。個人が勝手に首を突っ込む事までは責任を持たんぞ。」

「フフ、それだけで十分です。では…………」

リウイの言葉にロランスは口元に笑みを浮かべて、呻いている特務兵達に近寄ろうとしたがリウイに阻まれた。

「…………どういひおつもりで？」

「そちらこそどういひおつもりだ？ そいつらは王である俺を襲つたのだぞ？ 拘束し、事情を聞くのは当然の事だろ？ それにその者達は放火や一般市民の襲撃を行つてゐる。王としてそいつらの事は見過ごせん。」

「…………陛下ともあろう御方が約定を反故されるつもりですか？」
「何を言つてゐる。俺はあくまでお前がここに現れた事を見逃し、そちらの謀に関与しないとしか言つていない。誰がこいつらを見逃すと言つた？」

「（クッ）やはり向こうの方が上手か。）…………仕方ありません。こう見えても部下思いなので、申し訳ありませんが力づくでもその者達を連れて行く事をお許し下さい…………！」

騙された事に気付いたロランスは心中で舌打ちをした後、長剣を

構えた。

「フツ……よく言つ。俺を見た時から、殺氣を向けていた事に気付いていないと思ったのか？」

「…………」

「まあいい。俺に一太刀でも浴びせればそいつらを解放してやるつ。ただし、逆にお前が戦闘不能まで陥れば、部下共々拘束させてもらひ、貴様等の謀を全て話してもらつぞ。」

「…………その言葉、偽りはないでしような？」

「誇り高き”闇夜の眷属”の王として、偽りはない事を誓おう。」ロランスの確認の言葉にリウイはレイピアの切っ先をロランスに向けて宣言した。

「フツ…………では…………！」

そしてリウイとロランスの戦いが始まった…………！

外伝／激突！闇王と剣帝の邂逅／前篇（後書き）

といふ事でみなさんお待ちかねのリウイVSレー・ヴェです！！勝敗の行方ですが……劣勢とはいえ、セリカとガチでバトルできたりウイが神格者でもない人間ごときに負けるとでも？次回はリウイ無双になるので楽しみに待つて下さい。レー・ヴェファンは……まあ、すみませんと先に謝つております。……感想お待ちしております。

外伝／激突！闇王と剣帝の邂逅／後篇（前書き）

今回は序盤に出でしばらく出てこなかつた原作キャラの現在の強さがちょっとだけわかります。

外伝／激突！闇王と剣帝の邂逅／後篇

（アイナ街道・夜）

正遊撃士の中でも実力が高いアガットを軽くあしらつたロランスだつたが、さすがに今回の相手は悪すぎた。

「フッ！」

「……！」

リウイの神速の突きの攻撃をロランスは必死で回避し続けた。

「ハツ！」

「クッ……！」

リウイの斬撃を正面から剣でロランスは受け止めた。

「普通の相手ならいい判断だ。だが半魔人の俺相手にそれは悪手だ

……！」

攻撃が受け止められても余裕の笑みでリウイは剣に力を入れ、ロランスを武器ごと真つ二つにするかのように押し返した。押し返そうとしたロランスだったが、全く押し返せず徐々にリウイの剣が自分の顔に近付いて来る事に危機を感じ、一端剣を退き後ろに跳んで後退した。

「そんな……！？」

「隊長が苦戦するなんて……！」

頼みの綱のロランスが苦戦している事に特務兵達は信じられない表情で驚いた。

「どうした。その程度の腕か？」

リウイは疲弊した様子を見せずレイピアの切っ先をピタリとロランスに向けて挑発した。

「…………やはり強い。だが、一撃は入れて見せる……今度は

こちらの番だ……！」

ロランスは剣を握りしめ、アガツトと戦つた時とは明らかに違う動きでリウイに襲いかかつた！

「はあっ…」

「……………」

キンキンキンキン！

本気になつたロランスの攻撃は隙がなく目にも止まらない速さだったが、リウイは冷静に攻撃を次々と捌いていた。

「セアツ！」

「！！」

隙がないはずの連続攻撃の最中に放つたリウイの反撃にロランスは驚き、咄嗟に剣で防いだがリウイの放つた攻撃 フェヒテンケニヒは勢いが凄過ぎたため、防御の体勢のままでロランスは吹っ飛ばされた！

「ふつ！」

吹っ飛ばされ岩に当たる寸前のロランスは受け身を取つて岩に当たるのを回避した。しかしその隙を逃さずロランスが着地した瞬間を狙つてリウイはクラフトを放つた！

「フヒヒテンアルザ！」

「くつ！？」

キンキンキン…ザシュ！

「つ！」

リウイの連続追撃を剣で捌いたり、回避していたロランスだつたが連續攻撃の最後の攻撃が脇腹を掠り、斬られた痛みに顔を一瞬顰めた後また後ろに跳んで後退し、クラフトを放つた！

「そこだつ！」

ロランスは剣から衝撃波でできた竜巻

零ストームをリウイに放

つた。

「ウインディング！」

しかしリウイの風の魔法剣によつて攻撃は相殺された。

「向かつてくる者全てを滅する剣にして”人”を護る剣……まさか修羅と理の剣を同時に扱うとはさすがは剣の王と言われた『剣皇』ですね……」

「そういう貴様こそ中々の腕だ。貴様の剣は”人”を捨て、修羅となるがための破壊の剣……ただの獵兵ではないな？」

「フフ……そこまで調べ上げているとはさすがはゼムリアの霸者、メンフィルですね……」

リウイの言葉にロランスは口元に笑みを浮かべて答えた。

「フッ。お前の実力なら我が軍の将となれるだろ？。どうだ？我等の軍門に降るのならかなりの待遇を約束してやろう。」

「フフ……魅力的な話ではあるが謹んで断らせていただこう。自分にはやらなければならない事があるのでね……！」

リウイの勧誘にロランスは口元に笑みを浮かべながら断つた。

「そうか。……さて、そろそろ決めさせてもらうぞ……！」

「…………」

そしてリウイとロランスはお互いを睨み、力を溜めた。

「オオオオオオッ！」

「はああああああっ！」

そして2人はそれぞれクラフトを放つた！

「我が魔の力に呑まれよ！……魔血の目覚め！！」

リウイが内に秘めたる力を剣に込めて震つた魔の力が籠つた衝撃波はまるで津波のようになり、それがロランスを襲つた！

「むんっ！受けて見る、荒ぶる炎の渦を……鬼炎斬！！」

対するロランスが放つた強烈な斬撃は炎を纏つたような衝撃波となり、それがリウイの放つた技とぶつかりあつた！

ドン！バキバキバキ……！

ぶつかりあつた衝撃波は周囲にも余波を生み、近くに生えていた木は音を立ててなぎ倒された。そしてぶつかりあつた衝撃波の内、リウイが放つた衝撃波がだんだんとロランスの放つた衝撃波を押した後、ロランスの衝撃波をも呑みこみ、ロランスを襲つた！

「ぐつ……おおおおつ！……ぐあつ！？」

リウイの衝撃波を受けてしまつたロランスは苦悶の声をあげながら押し返そうとした。しかし耐えきれず後ろに吹つ飛ばされた。

「終わりだつ！」

吹つ飛ばされたロランスを追つて、リウイはロランスに向けてレイピアを斬り上げた！

「ぐあああつ！？」

リウイのレイピアによつて斬られたロランスは斬られた部分から血飛沫を上げて、近くの川に落ちた！

ドボーン――

「た、隊長　！！」

「そ、そんな……隊長がやられるなんて……！」

倒れている特務兵達はロランスがやられた事に絶望した。

「……逃がしたか。」

いつまでもたつても川から浮かんでこないロランスを不審に思ったリウイは呟いた。

「フフ……よろしければこの私が追つて、止めをさして來ても構いませんわよ、リウイ様。」

そこにファーミシルスが夜闇の空より不敵な笑みを浮かべて、リウイの元に降り立つた。

「 unnecessary。奴から得られる必要な情報は得れた。約束通り、ここは見逃してやれ。……お前の事だ。俺がロランスと交渉を始めた時から、すでにいたのだろう？」

「フフ、リウイ様のご想像のままにと言つておきましょう……それで? そこに倒れている雑魚共が大使館の周りを嗅ぎまわっていたネズミ共ですか?」

リウイの言葉にファーミシルスは不敵に笑つた後、倒れている特務兵達に顔を向けて尋ねた。

「ああ。一応こいつらの大元である者の企みを知つておく必要があるから、生かしておいた。」

「なつ! ? 誰が貴様等ごときに我等の計画を話すものか!」

「た、企みだと! ? 閣下の崇高な計画をなんと思つて……」

「闇に落ちよ! ……ティルワーンの闇界! ! !」

「「ギヤアアアツ! ?」」

リウイに反論しようとした特務兵達はファーミシルスの魔術によつて、悲鳴を上げて地面に伏せ、何も言わなくなつた。

「……ファーミシルス。まだ、こいつらには聞きたい事が山ほどあるのだぞ?」

せっかく捕えた情報源を殺したと思つたリウイは溜息をついて、ファーミシルスを咎めた。

「ご安心を。死ぬ一歩手前に手加減してありますわ。このような者共がリウイ様に対し、無礼な口調をするものですからつい、手が出てしまいましたわ。」

咎められたファーミシルスは悪びれもせず、微笑しながら答えた。

「フウ。……まあいい。では、そいつらの事は頼んだぞ。……………」

決してティアの目に触れない所で拷問をしろ。」

「……相変わらずティア様には甘いですわね。いくらいーリュンの信徒とはいえ、ティア様はメンフィル皇女であり、リウイ様のご息女。母親と違い、生まれた時から皇族として教育されていたのですから、國のために必要である事は理解していると思いますが。」

リウイの指示にファーミシルスは溜息を吐きながら答えた。

「……別に甘い訳ではない。母親であるティナの性格によく似たあいつの事だ。俺達の目を盗んでこいつらを逃がす可能性もある。そ

ういった可能性もあるからティアにはこいつらと会わせてはいかん。

さすがに自分の娘を罰したくはないのでな。」

「……それが甘いというのですが……わかりました。こいつらは王城の牢屋に監禁して、拷問をいたします。あそこで行われている事はティア様も黙認していますから……それでは、失礼いたします。」

そしてファーミシルスは倒れている特務兵達を拘束した後、2人を両手を使ってそれぞれ抱え、夜闇の空へと舞い上がり、飛び去った。
「…………まさかイリーナに目をつけたとは思わなかつたな……リベルで運びうる暗躍が落ち着くまでイリーナが外に出る時、レンを共につけるか。ティファーナの娘から母親直伝の技を受け継ぎ、人間でありながら全属性の魔術を習得したあいつならあの程度の者達ごとき、なんなく撃退できるだろうしな。…………そろそろ行くか……」

ファーミシルスを見送り、ロランスが落ちた川を睨んだ後、リウイは外套を翻してルーアンのホテルに向かつて行つた。

（川下・岸）

そこにはリウイにやられた後、水中を泳いで撤退したロランスが岸に上がつて呻いた。

「ぐつ……ここまでやられるとは……」

ロランスはリウイに斬られた部分を手で押さえ呻いた後、持つていたオーブメントで回復アーツを発動した。

「水の力よ……ティアラル！」

発動したアーツはロランスの傷を癒した。傷が治つたロランスは立ち上がつた。

「…………あいつらが捕えられたのは痛かったが、まあいいだろ……メンフィルは関与しないと言質を取つたから問題はあるまい。…………懸念していた事の一つがなくなり、大佐も安心するだろ……」「…………

独り言を呟いたロランスは川上を見つめた。

「今の剣技が剣を極めし皇、『剣皇』の技か……フッ、手も足も出なかつた俺が『剣帝』を名乗る等、おこがまし過ぎるな……まだ修羅になりきれていない証拠か……」

そしてロランスは人間離れした動きでその場を去つた。

その後ファーミルスに拘束され、王城の牢屋でメンフィル兵達に拷問され、孤児院の放火やテレサ襲撃の報いを受けるかのように地獄を味わつた特務兵達は拷問によつて自分達の情報を吐かされた後、冥き途へと旅立つた……

外伝／激突！闇王と剣帝の邂逅／後篇（後書き）

最凶キャラと言わされたレー・ヴェが一方的に蹂躪されちゃいました。実を言ひつと、レー・ヴェがボコボコにされる話はこれだけではあります。先に言つておきますが作者はアンチレー・ヴェとかではないですかね！？クロスオーバーキャラ達があまりにもチートすぎるからこうなつてしまふんです。ちなみに話にもあつたようにレンの戦い方は原作に加えて同じ鎌使いのあのキャラの技+魔術という凶悪の強さになつちゃいました その内出すのでレンファンは楽しみに待つて下さい …… 感想お待ちしております。

第81話（前書き）

今回の話の最後ではとんでもない人物の名前が出てきます

（メーヴェ海道）

ギルバートやレイ、ヴィン達をマノリア村の風車小屋に拘禁し、目覚めたカルナと念のためにプリネに見張りをお願いしたエステル達は今回事件の詳細を報告するため、ルーアンのギルドへと急いでいた。「しかし、ダルモア市長が事件の黒幕だったなんて……。親切そうに振る舞っていたのも全部お芝居だったわけね！」

「ええ……貴族として決して許せません……！」

孤児院放火事件やテレサを襲撃することを命じた黒幕がダルモアとわかつたエステルは自分達を騙していた事に怒っていた。

「あの……。少し気になつたんですけど……。今回の件で、ダルモア市長を逮捕できるんでしょうか？」

「…………え？」

「そうだね……。難しいかもしない。遊撃士協会は、国家の内政に不干渉という原則があるからね。ルーアン地方の責任者である現職市長を逮捕するのは難しそうだ。」

クロゼの心配ごとにエステルは驚き、ヨシュアは暗い表情で答えた。

「ちょっと待つてよ！それっておかしくない！？」

ヨシュアの答えにエステルは顔色を変えてヨシュアに詰め寄った。

「おかしいけどそれが決まりだからね。この決まりがあるからこそギルドはエレボニア帝国やメンフィル帝国領にすら支部を持つことができたんだ。」

「そ、そ者は言つても……」

「とにかく、ギルドに行つてジャンさんと相談してみよう。良い知恵を貸してくれると思う。」「う、うん……」

「……………」

元気づけるコショアの言葉にエステルは腑に落ちない様子で納得し、クロゼは俯いたまま聞いていた。

「大丈夫、心配することないって！院長先生たちを苦しめたツケはきつちり払つてもらわないとね！」

「はい……そうですね。」

俯いているクロゼにエステルは元気づけた。しばらく歩いているとルーアン市とジニス王立学園に行く分かれ道に出た。

「…………あの…………」

「クローゼ、どうしたの？」

「あの、エステルさんたちはギルドに行かれるんですよね？私、やる事を思い出したので先に行つてもらえませんか？すぐに追いつきますから…………」

「構わないけど……いつたん学園に戻るのかい？」

「は、はい……。一応、学園長にも報告しておこうと思いまして。」

「そつか……。うん、わかったわ。ギルドで待つてるからね！」

そしてエステルとコショアはクロゼをその場に残して、ルーアン市に向かつた。

「ごめんなさい……。エステルさん、コショアさん。」

エステル達を見送ったクロゼは申し訳なさそうな表情で呟いた後、懐から手帳とペンを取り出して文字を書き連ねた。

「うん、これでいいわ。……ジーク！」

「ピューラー！」

クロゼに呼ばれたジークは空中より飛んできて、クロゼの肩に止まつた。

「これをコリアさんに届けてくれるかしりっ！」

「ピューラー。」

クロゼは先ほど書き連ねたページを破り、ジークの足に結び付けた。

「お願ひね、ジーク。」

「ピューイ！」

クロゼの言葉に頷いたジークはまた、空へと飛び立ちどこかへ去了つた。そしてジークを見送ったクロゼは急いでルーアンのギルドに向かつた。

（遊撃士協会・ルーアン支部）

「……話はわかつた。まさか、ダルモア市長が一連の事件の黒幕だつたとは。うーん、こいつは大事件だぞ……」

エスティル達から報告を聞いたジャンは首をひねつて、唸つた。

「それで、ジャンさん。市長を捕まえる事はできるの？」

「うーん……。残念だが逮捕は難しそうだな。現行犯だつたら、市長といえど問答無用で逮捕できるんだけどね。」

「やはりそうですか……」

「そ、そんな……。だつたらこのまま悪徳市長をのせぱらせてもらいてわけ！？」

無念そうな表情で答えたジャンの言葉にヨシュアは暗い顔で納得し、エスティルは納得できず怒つた。

「まあ、そう慌てなさんな。遊撃士協会が駄目でも……王国軍なら市長を逮捕できる。」

「あ……」

「エスティル君、ヨシュア君。これから市長邸に向かつて市長に事情聴取を行つてくれ。多少、怒らせてもいいからできるだけ時間を稼いで欲しい。」

「なるほど、その間に王国軍に連絡するんですね？」

ジャンの指示にヨシュアは確信を持った表情で尋ねた。

「うーん、軍に頼るのはシャクだけど仕方ないか……。そう言えばリフィア達は？」

軍に頼る事に弱冠抵抗があつたエスティルは気持ちを割り切つた後、

リフィア達がこの場にいない事に気付き、尋ねた。

「彼女達なら、今ちょうどロレントに戻る飛行船に乗るメンフィル大使達を見送るために空港に行っているよ。」

「そつか。ティアさんや聖女様に挨拶できるのは残念だけ仕方ないか……よし、クローゼが追いついたひさしそく市長邸に向かって……」

エステルがそう言つたその時、ドアが開いてそこには息を切らせたクローゼがいた。

「はあはあ……。お、お待たせしました……」

「学園に寄つた割にはずいぶんと早かったね？」

学園との距離を考え、不思議に思つたヨシュアはクローゼに尋ねた。「え、えつと……足には自信がありますから。それで……どういう事になりました？」

「ちょうど市長のところに乗り込むて話をしてたのよ。王國軍の連中が来るまで事情聴取して時間稼ぎをするの。」

「あ……そうですか……。……余計なことをしたかしら……」

エステルの言葉にクローゼはエステル達には聞こえない声で独り言を呟いた。クローゼの様子を不思議に思つたエステルは尋ねた。

「??えつと、クローゼも来るよね？」

「あ、はい。どうか一緒にさせてください。」

「ジャンさん、連絡の方はどうかよろしくお願ひします。」

「ああ、任せといてくれ！」

ギルドを出たエステル達は市長邸に向かい、接客をしているという市長に会うためにヨシュアがメイドに自分達も会う予定があると誤魔化した。そしてエステル達は市長と、市長が接客しているデュナン公爵がいる部屋に堂々と入つた。

（ルーアン発着場）

エステル達が市長がいる部屋に入つた同じ頃、リフィア達はロレントに戻るリウイ達と出発前の会話を楽しんでいた。

「ほつ……まさか神殺しの使い魔がそんな事になつていたとはな。リフィアからテトリの事を聞かされたりウイは弱冠驚きの声を出した。

「うむ。余も驚いたぞ。……それにしてもあの時のエステルの言葉が頭に離れられなくて思い出したら、笑いが止まらぬ。……ふつくくく……！」

「何を言つたんでしょうか？」

思い出し笑いをして『リフィアを不思議に思つて、ティアは尋ねた。

「エステルが神殺しをいつか殴るんだって。」

「何？」

「え！」

「あの……どうしてそんな事をエステルさんが……？」

リフィアに代わつて答えたエヴリーヌの言葉からありえない人物の事が出て、リウイは目を丸くし、ペテレーネは驚き、ティアはなぜそんな事になつたかを尋ねた。

「ふつくく……なんでもセリカが自分の使い魔の存在を忘れ、その事にテトリが傷ついた事を怒つていてな。だから今のテトリの契約主としてテトリを忘れた事が許せず、ブツ飛ばすそつだ……ふつくくー！」

ある事が気になつたペテレーネはリフィアに尋ねた。リフィアは笑いを押し殺しながら答えた。

「あの……エステルさんはセリカ様の正体の事は？」

「当然知つている訳がなかろう。エステルはセリカの事を自分の使ひ魔の存在を忘れる酷い契約者としか捉えておらぬ。」

「なぜ、奴の正体を言わない？」

「言つた所で信じないだろ？」「うし、どうせ会う事もないだろ？から言わなかつただけだ。」

リウイの疑問にリフィアは悪びれもなく答えた。

「…………確かに。」

リフィアの言葉にリウイは少しの間考えた後、納得した。

「ねえ、お兄ちゃん。」

「どうした、エヴリーヌ。」

「神殺しで思い出したんだけど、神殺しとフェミニンスの女の事はどうするの？ エヴリーヌ達のお家で働いているイリーナっていう人間がお兄ちゃんの探していた人なんでしょう？」

「…………」

エヴリーヌの疑問にリウイはしばらぐの間考えるかのように腕を組み、目を閉じて黙った。そしてリウイに代わってカリフィアが答えた。

「当然、放置だろう？ イリーナ様の魂はあるイリーナという少女に受け継がれているのだから、セリカやエクリアを狙つても意味がないのだからな。」

「…………まあな。イリーナが転生した以上、神殺しの力は必要ない上、依り代であるエクリアを狙つても意味がないからな。」

「…………よろしいのでしょうか？ エクリア様はその…………リウイ様にとって仇になりますが…………」

リウイの答えを聞き、ペテレーネは恐る恐る尋ねた。

「…………奴を許せると言えば嘘になるが、今更その事を蒸し返しても仕方あるまい。あの時の奴は姫神だったのだからな…………それに自分を殺したエクリアに恨みごとも言わず逝つたイリーナがそんな事を望むとはとても思わん…………最も、イリーナの魂が目覚めて元のイリーナになつた所で連絡するつもりはないが。」

「…………それでもお父様はセリカ様やエクリア様を狙わないのでしょうか？ 私はそれを聞いて安心しました。」

「ほう…………なぜだ？」

ティアの言葉が気になり、リウイは尋ねた。

「だつて、血のつながった家族同士が争うなんて私には耐えられませんから……」

「ふふ、本当に優しい方ですね、ティアさんは。ティアさんを見ていると、時折ティナさんの事を思い出してしまつほど成長されましたね。」

「ありがとうございます、ペテレーネ様。」

ペテレーネの言葉にティアは微笑んで答えた。

「……エクリアの件はわかるとして、神殺しを狙わない事に安心しているのはなぜだ？ 奴は現神にとつて忌まわしき敵であろう。」

「お父様……わかつておっしゃっているのですか？ イーリュンの愛は無限。……例えその相手が神殺しであろうと変わりはありません。私はただ純粋に人と人が争わない事に安心しているのです。」

「フツ……そうか……」

ティアの答えにリウイは口元に笑みを浮かべて答えた。その時定期船の離陸の放送が響いた。

ボース方面行き定期飛行船、まもなく離陸します。ご利用の方はお急ぎください。

「…………そろそろ時間か。プリネにはいい劇を見せてもらつたと云えておいでくれ。」

「うむ！」

「うん。お兄ちゃんが褒めてくれたって知つたら、きっとプリネも喜ぶしね。」

リウイの言葉にリフィアは力強く頷き、エヴリースはプリネの喜ぶ顔を予想して微笑んだ。

「さて……2人とも行くぞ。」

「はい。」

「わかりました、お父様。それではリフィアさん、エヴリースさん。怪我や病気には気をつけて下さいね。」

「うむ！ティア殿も元気でな！」

「ばいば～い！」

そしてリフィア達の別れの挨拶と共にリウイとペテレーネ、ティアを乗せた定期船は飛び立つていった……

第81話（後書き）

これにてリウイ達の出番はしばらくお休みです……が、FC内の話で他の旧幻熾キャラをエステル達と接触させる話が浮かんでいるので楽しみに待つて下さい……感想お待ちしております。

第82話

「ルーアン市長邸・2階大広間」

エスティル達が踏み込む寸前、そこにはダルモア市長とフィリップを傍に控えさせたデュナン公爵が会談をしていた。

「ヒック……。ふむ、なかなかいい話だ。確かにこのルーアンは別荘を持つには絶好の場所だ。しばらく滞在してよく判った。」

ダルモアに勧められ、酒を呑んで酔っているデュナンは上機嫌に答えた。

「ふふ、そうでしょうとも。その高級別荘地の中でもとりわけ素晴らしい場所に閣下の別荘を用意いたします。また、まだ交渉段階にも入ってはいませんが、将来的には閣下の別荘のお近くにあのメンフィル大使の別荘も用意する予定でございます。今後のメンフィルとの関係を強化するためにも必ずや気に入つて頂けるかと……」

「ふつふつふ……。おぬし、なかなか話が判るな。いいだろ?、ミラに糸目はつけん。次期国王にふさわしく、ロレントという片田舎に居を構えているくせに”英雄王”等というふざけた異名を持つメンフィル大使より豪華絢爛（じゅうかんらん）な別荘を用意するがいい。……そうだな、最低でもこの屋敷くらいは欲しいところだ。」

ダルモアの言葉に乗せられたデュナンは上機嫌に注文をした。

「閣下、しばしあ待ちを。女王陛下に相談もせずにそのような巨額の出費は……それに同盟国の皇族の方を下に見る言い方はどうかと

……」

「黙れ、フィリップ!私は次期国王だぞ!このくらいの買い物は当然だ!それにメンフィル大使が住む土地はリベルより借り受けている土地!それ即ち次期国王である私の土地を借り受けているのだから、私のほうが当然上であろう!」

フィリップに咎められたデュナンだったが全く耳を貸さず。リヴィ

がどういった経緯でロレントに居を構えたかも知らず、メンフィルの間者等に聞かれたら大事になる事を発言した。

「いやはや、公爵閣下ならば判つていただけると思いました。後で契約書を持つてこさせます。その前に、もう一献……」

「おつとつと……」

ダルモアがデュナンのグラスにワインを注いだ。そこにエステル達が現れた。

「ほんにちは。遊撃士協会の者です。」

会談中であるにも関わらず、エステルは堂々と名乗った。

「君たちは……」

「ヒック……。なんだお前たちは?...どこかで見たよつな顔だが……」

「おお、いつぞやの……」

「こんにちは、執事さん。ちなみに、今日はその市長さんにお話があつて来ただけだから。」

フィリップに挨拶したエステルは自分達を険しい表情で見ているダルモアを見た。

「困るな君たち……。ギルドの遊撃士ならば礼儀くらい弁えているだろう。大切な話をしているのだから出直してきてくれないかな?」「なにぶん緊急の話なので失礼の段は、ご容赦ください。実は、放火事件の犯人がようやく明らかになつたので……」

不機嫌な表情でエステル達を見ていたダルモアだったが、ヨシュアの答えに驚いた。

「!その件か……仕方あるまい。公爵閣下、しばし席を外してもよろしいでしょうか?」

「ヒック……。いや、ここで話すといい。どんな話なのか興味がある。」

「し、しかし……」

「いいじゃない 公爵さんもああ言つてゐるし。聞かれて困る話でもないでしょ?」

「まあ、それはそうだが……。そういうば夕べは、またもやテレサ院長が襲われたそうだな。放火事件と同じ犯人だつたのかね？」デュナンも事件の詳細について聞く事にダルモアは戸惑つたが、エスティルの言葉に納得して、尋ねた。

「その可能性が高そうです。残念ながら、実行犯の一部は逃亡している最中ですが……」

「そうか……。だが、犯人が判つただけでも良しとしなくてはならん。ちなみに誰が犯人だつたのかね？」

「うーん、それなんだけど。市長さんが考へている通りの人たちだと思うわよ。」

「そうか……残念だよ。いつか彼らを更正させる事ができると思つていたのだが……。单なる思い上がりに過ぎなかつたようだな……」

「あれ、市長さん。誰のことを言つてるの？」

無念そうに語つてゐるダルモアにエスティルは不思議そうに尋ねた。「誰つて、君……。『レイヴン』の連中に決まつてゐるだろうが。昨夜から、行方をくらませてゐるとも聞いてゐるしな……」

エスティルの疑問にダルモアは確信を持つた表情で答えた。

「残念ですが……彼らは犯人ではありません。むしろ今回に限つては被害者とも言えるでしょうね。」

「な、なに!?」

しかしヨシュアの答えに驚き、思わず声を上げた。

「今回の事件の犯人、それは……ダルモア市長、あんたよつ!」「!—!—!」

ヨシュアに続くようすにエスティルは声を張り上げて、ダルモアを睨んだ。エスティルの言葉にダルモアは厳しい表情のまま、固つた。
「秘書のギルバードさんはすでに現行犯で逮捕しました。あなたが実行犯を雇つて孤児院放火と、寄付金強奪を指示したという証言も取れています。この証言に間違いはありませんか?」

「で、でたらめだ!そんな黒装束の連中など知るものか!」

「あれ、おっかしいな。あたしたち、黒装束だなんて一言も言ってないんだけど。」

「うぐつ……。知らん、私は知らんぞー・全ては秘書が勝手にやつたことだ!」

「往生際の悪いオジサンねえ。」

以前のような紳士的な態度をなくし、悪あがきをしているダルモアを見てエステルは溜息を吐いた。そしてヨシコアは退路を断つかのように、話を続けた。

「高級別荘地を作る計画のために孤児院が邪魔だつたと聞いています。これでもまだ、容疑を否認しますか?」

「しつこいぞ、君たちつー確かに、ずいぶんと前から別荘地の開発は計画されている!だが、それはルーアン地方の今後を考えた事業の一環にすぎん!どうして犯罪に手を染めてまで性急に事を運ぶ必要があるのだ!?」

「そ、それは……」

ダルモアの叫びに答えられなかつたエステルが困つたその時

「……莫大な借金をかかえているからでしょ?」

いきなりナイアルが広間に入つて來た。

「ナ、ナイアル!?

「どうしてここに……」

ナイアルの姿を見て、エステルとヨシコアは驚いた。

「いやな、そこ市長さんを取材しようと屋敷まで來たらお前たちが入つていぐじゃねえか。こりや何かあるなと思つてお邪魔してみたらこの有様だ。いやー。一部始終聞かせてもらつたぜ」

ネタを見つけたかのようにナイアルは上機嫌で答えた。

「な、なんだね君は!?

「あ、『リベル通信』の記者、ナイアル・バーンズといいます。実はですねえ。最近のローン市の財政について調べさせてもらつたんですが……。ダルモア市長、あなた……市の予算を使い込んで

ますなあ？」

「……そ、それは……。別荘地造成の資金として……」

ナイアルの確認の言葉にダルモアは顔を青褪めさせた。

「そいつは通りませんぜ。まだ、工事は一切始まつてない。ちょっと妙だと思ったんで飛行船公社まで足を伸ばしてあなたの動向を調べたんですよ。すると、あ～ら驚き。1年ほど前に、共和国方面に度々いらっしゃりますねえ？」

「…………た、ただの観光だ……」

どんどん追い詰められている事に気付いたダルモアは無意識に両手の拳を握り、誤魔化したがナイアルはすぐに否定した。

「というのは表向きの理由。本当の理由は……あちらの相場に手を出して大火傷を負つたからでしょ？」「！」

「！――！」

「えつと……相場つてなに？」

言葉の意味がわからないエステルは周囲に尋ねた。

「市場の価格差を利用してミラを稼ぐ売買取引です。ある品が安い時に買いこんで高くなつたら売るような……」

「あ、なーるほど。それで、この市長さんはどれだけ損しちゃつたわけ？」

クローゼの説明で理解したエステルはナイアルに尋ねた。

「共和国にいる記者仲間に調べてもらつた限りでは……。およそ1億ミラってところらしい。」

「い、い、1億ミラあ～！――！」

「寄付金の100倍ですか……。確かに、犯罪に手を染めて不思議ではない金額ですね。」

ナイアルの答えにエステルは驚いて声を上げ、ヨシュアは驚いた後ダルモアが犯罪に手を染めた理由に納得した。

「ヒック、1億とはな……。私もミラ使いは荒い方だがさすがにおぬしには完敗だぞ。」

「くつ……」

逃げ場を完全に失ったダルモアは顔を歪めた。

「なうに競つてゐるんだか。」

エステルはデュナンの言葉に呆れて溜息を吐いた。

「まあ、そんなわけで……。莫大な借金を返すために市の予算に手を出したはいいが問題を先送りにしただけだ。どうするものかと思つていたらまさか放火や強盗までして別荘地を作ろうとするとはねえ。何とおっしゃいますか……行き当たりばつたりですな。」

「…………ふん、そんな証拠がどこにある。憶測だけで記事にしてみる。名誉毀損で訴えてやるからな!」

「あらま、開き直つた。」

強気になつたダルモアを見てナイアルは目を丸くした。

「貴様らもそうだ! 市長の私を逮捕する権利は遊撃士協会にはないはずだ! 今すぐここから出て行ぐがいい……!」

「む、やつぱりそう来たか。」

「さすがに自分の権利はちゃんと判つてゐるみたいだね。」

同じようにエステル達にダルモアは怒鳴つた。怒鳴られたエステルとヨシュアは厳しい表情でダルモアを見た。

「…………。市長、一つだけ……お伺いしてもよろしいですか?」

「なんだ君は! ? 王立学園の生徒のくせにこのような輩と付き合つて……。とつとと学園に戻りたまえ!」

「…………」

「うつ……」

静かに問いかけたクローゼを怒鳴つたダルモアだったが、クローゼの凛とした眼差しに見られて怯んだ。

「どうして、ご自分の財産で借金を返さなかつたんですか? 確かに1億ミラは大金ですが……。ダルモア家の資産があれば何とか返せる額だと思います。例えば、この屋敷などは1億ミラで売れそうで

「すよね？」

「ば、馬鹿なことを……！この屋敷は、先祖代々から受け継いだダルモア家の誇りだ！どうして売り払う事ができよう！」

「あの孤児院だつて同じことです。多くの想いが育まれてきた思い出深く愛おしい場所……。その想いを壊す権利なんて誰だつて持つていないので……。どうして貴方は……あんなことが出来たのですか？」

「あ、あのみすぼらしい建物とこの屋敷を一緒にするなあー！」
クローゼの言葉にダルモアは怒り心頭で吠えた。

「あなたは結局自分自身が可愛いだけ……。ルーアン市長としての自分とダルモア家の当主としての自分を愛しているだけに過ぎませ

くぞ言った、小娘が…………。…………こうなつたら後のことなど知つたこ
とか！」

クローゼに哀れみと軽蔑が込めた視線で見られたダルモアは凶悪な顔で笑い、立ちあがつて後ろの壁にあるスイッチを押した。すると壁の一部が動き、隠し部屋が出来た。

「ファン」「プロン」「ヒサの時間だ、出で！」
ダルモアが叫ぶと、隠し部屋から何かの足音が聞こえて来た。

一 獣の匂い……………！」

エスティルとヨシュアは隠し部屋から歩いて来る何かを警戒した。そして隠し部屋から2体の4足巨大魔獣が現れた！

「「グルルルル……」」

「な、なんだああッ！？」

巨大魔獸を見てナイアルは驚き

「…………ブクブクブク…………」魔晄炉の火が止まらない。

「公爵閣下！？」

魔獸を見て氣絶したデュナンにフイリップが駆け寄った。

「信じられません……。魔獸を飼つてゐるなんて……」

クローゼはダルモアを険しい表情で見て言った。

「くくく……。お前たちを皆殺しにすれば事実を知るものはいなくなる……。こいつらが喰い残した分は川に流してやるから安心したまえ。ひゃ

はっはっはっ！」

「く、狂つてやがる……」

狂つたように笑い叫ぶダルモアにナイアルは後ずさつた。

「ぐるるるるるう……」

「…………うるる…………」

2体の巨大魔獸は唸りながらエステル達に襲いかかる態勢になつた。

「こ、こんな屋敷の中で魔獸と戦うことになるなんて……」

「でも、これで現行犯として市長を逮捕することができる。」

「あなたたちに恨みはないけれど……。人を傷付けるつもりならば容赦はしません！」

そしてエステル達と2体の巨大魔獸の戦いが始まった……！

第82話（後書き）

感想お待ちしております。

「ルーアン市長邸・2階大広間」

ダルモアが飼っていた巨大魔獣達は手強く、手配魔獣並の強さであり、さすがのエステル達も苦戦した。

「ぐる！」

「くつ！」

「つつ！」

突進しながらの角での攻撃にエステルとヨシュアはそれぞれの武器で防御したが、魔獣達の力が強く押されていた。

「やば……！」

どんどん押されて、角が自分に迫っている事に気付いたエステルは焦った。

「エステル！一端下がろう！力比べでは僕達が不利だ！」

「わかった！」

ヨシュアの指示に頷いたエステルは武器を退いて、一端下がつたが

「ガウッ！」

「いたつ！？」

「くつ！？」

その隙を逃さず襲いかかった魔獣達の攻撃を受けてしまい、身体に傷が出来て苦悶の声を上げた。

「このつ！」

「せいつ！」

攻撃を受けた後、反撃をした2人だったが魔獣達は後ろに跳んで回避した。

「癒しの水よ……彼らの傷を癒したまえ……ラ・ティアラ！」

そこにクローゼの回復アーツが発動し、エステルとヨシュアの傷を治した。

「ありがとう、クローゼ。」

傷を治したクローゼにエステルはお礼を言った。

「いえ。……それでも2体の巨大魔獣はやっかいですね。……
「そうだね……何か手は……そだ！ エステル、召喚をしてくれないかい！？」

「いいけど……誰を召喚するの？」

「……目には目を。獣には獣だよ、エステル。」

「！ わかったわ！ ……サエラブ！」

(……我的出番か。)

ヨシュアの言葉を理解したエステルはサエラブを召喚した。

「一人で一体を任せてもいい！？ あいつら結構手強いのよ！」

(フン。のような人間に飼われた犬ごとき、我のみで十分だ！ 一体「）とさすくに葬るから、お前達も残りの一体をとつとと葬るがいい。」

「了解！」

そしてサエラブは魔獣の一匹に炎の玉をぶつけた！

(喰らえ！)

「ぐる！？」

炎の玉を受けた魔獣は悲鳴を上げてのけ反った。

「ガウッ！」

仲間が傷つけられた事に気付いたもう一體の魔獣がサエラブに襲いかかるこうとしたが

「いけ～！ 火弾！」

「ガウッ！ ……うるる……！」

エステルが放つた魔術を受けて、魔術を放つたエステルに標的を変えた。

「時の刃よ、水よ！！ ソウルブラー、アクアブリード！！」

「ガアツ！？」

さらにそこにヨシュアとクローゼが発動させたアーツが当たった。

「あなたの相手はこいつだよ！」

「つるるるる……！」

エステルの挑発を受けて、もう一体の魔獸は標的をエステル達に変えて襲いかかった。

「……大地の力よ、我が仇名す者の力を我の元に……！地脈の吸收！……」

「つるつ！？」

さらにエステルの魔術によつて、魔術によつて発生した木の根が魔獸に絡み付き魔獸は身動きが出来なかつた。

「はつ、臘！」

「えい、やあ、はあ！」

「つるつ！？」

そこにヨシュアとクローゼが挟み撃ちにするかのようにそれぞれクラフトを放つて傷を増やした。さらにそのすぐ後絡み付いている木の根が光つた。

「つるつ……！？ガアアアッ！？」

魔術の木の根によつて力を吸い取られた魔獸は叫び声を上げた。

「行くよ……！ふん！はつ……はつ……断骨剣！……」

「ガアツ！？」

そして追撃をするかのようにヨシュアのクラフトが全て決まり、魔獸に致命傷を与えた。

「……水流よ、吹きあがれ！……ブルーインパクト！」

「つるつ！？」

さらにクローゼのアーツが発動し、アーツによつてできた水流が魔獸を宙に浮き上がらせた後、水流がなくなると魔獸は地面に落ちて来た。さらに落ちて来た魔獸を狙つて、エステルが棒に魔力によつてできた雷を帯びさせてクラフトを放つた！

「これで決める……ハアアアアアアア！雷波！無双撃！」

「ガアアアアアツ！……！」

クローゼのアーツによつて全身濡れていた魔獸はエステルの放つた雷を帶びた攻撃によつて感電し、さらに技の威力も相まつて断末魔を上げながら消滅した。

一方一人で魔獸を相手にしていたサエラブは自分が相手をしている魔獸の異変を感じ取つた。

「ぐるつ！？ぐるるるるつ！」

（む？奴の気配が少し変わつた……！）

魔獸から違和感を感じて、サエラブは警戒した。

「ぐるつ！」

（むー先ほどより動きがよくなつただと！？）

動きがさつきより素早くなつた魔獸にサエラブは驚いたが、冷静に突進してくる魔獸を迎撃つた。

「ぐるつ！」

（むん！）

角による攻撃をサエラブは爪で受け止めた。サエラブの爪と魔獸の角はお互い押しあつて、自分の敵を攻撃しようとしたが、勝負は拮抗していた。

（……なるほど。先ほどエステル達が葬つた魔獸の咆哮によつて仲間を強化させたか……ただでは死なぬという訳か……）

サエラブは敵が強くなつた理由を冷静に推測した。そして勝負がつかないと思つた魔獸は一端後ろに飛び、角をサエラブに向けて助走をして突進する態勢に入つた。

（フン……一気に勝負をつける氣か……ならば、その選択がどれほど愚かである事を思いしらせてやるう……！）

魔獸の態勢を見て、サエラブは鼻をならした後飛び掛かる態勢になり、自らの身体に炎を纏つた！

「ぐるつ！」

（フン！）

助走した事によつてさらに勢いをました魔獸の突進攻撃にサエラブ

は炎を纏つた身体で飛び掛かつて応戦した。

「ギャン！？ガアアアアアツ！？」

サエラブの炎を纏つた突進クラフト　　”炎狐強襲”の威力に負けた魔獸は壁まで吹っ飛ばされた後、体が燃えて悲鳴をあげた。

（終わりだつ！）

「ガツ…………ガアアアアアツ…………！」

サエラブに喉元を噛まれた魔獸はエスティル達が倒した魔獸のように断末魔をあげながら消滅した。

（フン。…………どうやら、終わりのようだな…………）

魔獸の消滅を確認したサエラブはダルモアに武器を突きつけたエス

テル達を見た…………

第83話　（後書き）

感想お待ちしております。

「ルーアン市長邸・2階大広間」

「ば、馬鹿な……。私の可愛い番犬たちが……。貴様ら、よくもやつてくれたな！」

自分の飼っていた魔獣達がやられた事に、ダルモアは怒鳴った。

「ははは……。それはこっちの台詞だつての！」

「遊撃士協会規約に基づきあなたを現行犯で逮捕します。投降した方が身のためですよ。」

「ふふふふふ……。こうなつては仕方ない……奥の手を使わせてもらうぞ！」

エスティル達に追い詰められたダルモアは懐から杖を出した。

「え！？」

「杖……？」

何があると思つたエスティル達は慌ててダルモアを取り押さえようとしたが

「時よ、凍えよ！」

ダルモアが杖を掲げて叫ぶと、杖の宝石部分が妖しく光り、エスティル達の動きを止めた。

「か、身体が動かない……！」

(ぐつ……！体が……！)

「こ、これは……導力魔法なのか？」

「ち、違います……。これは恐らく『古代遺物』の力！」アーティファクト

「なんだあ、そりやあ！？」

身動きが出来なくなつたエスティルやサエラブは驚いた後なんとか体を動かそうとしたが動かなかつた。杖の光の正体をニヨシュアは信じられない顔で推測して言つたが、クローゼが確信を持った表情で答え、それを聞いたナイアルは驚いた。

「ほう、クローゼ君は博識だな。これぞ、わがダルモア家に伝わる家宝、アーティファクト『封じの宝杖』……。一定範囲内にいる者の動きを完全に停止する力があるのだよ。」

クローゼの説明にダルモアは凶悪な表情で感心した後、杖の正体を言った。

「な、なんて『デタラメな力』……」

「こんな強力なアーティファクトが教会に回収されずに残っていたのか……」

杖の力にエステルは驚き、ヨシュアはダルモアの予想外の切り札に無念を感じた。

「フフ、さすがは古代文明の叡智の結晶……。戦術オーブメントごときとは比較にならぬ力を備えている。もつとも、1つの機能しか持っていないのが難点だがね。」

杖を自慢したダルモアは懐から銃を出して、エステル達に近寄った。

「仕方ないから、君たちの始末は私自らの手で行つてあげよう。クク……光栄に思うのだな。まずはそつだな……生意気な小娘から始めて……」

ダルモアは凶悪な表情で銃をエステル突きつけて言った。

「むつ、何が生意気よ！」

(.....)

銃を突きつけられてもエステルは強気な態度で言い返した。契約者の窮地を救うためにもサエラブは冷静になり、ダルモアの隙を窺つた。

「最後に賢しらな小娘の息の根を止めるとしようか？」

(.....)

同じように銃を突きつけられたクローゼは動じず、ダルモアを厳しい表情で見た。

「ククク……やつきの威勢はどうした？命^いでもすれば助けてやらんでもないぞ？」

「だ、誰があんたなんかに……」

「汚い手で……るな……」

「なに？」

（む…………）の気配は…………

エステルにゆっくりと近付いて行くダルモアに向かってヨシュアは途切れ声で呴いた。ヨシュアの言葉が気になつたダルモアは聞き返し、サエラブはヨシュアからただならぬ気配を感じた。

「汚い手でエステルに触るな……。もしも……毛ほどでも傷付けてみろ……。ありとあらゆる方法を使ってあなたをハツ裂きにしてやる……」

ダルモアに向かつてヨシュアは誰にも見せた事のないような冷酷な眼差しでダルモアを睨んだ。

「な…………」

ヨシュアの睨みにダルモアは気圧されて後ずさつた。

「な、ヨシュア……」

「ヨシュアさん……」

（なんという強烈な負の氣…………！小僧…………貴様、何者だ…………！）

ヨシュアの言葉と表情にエステル達は驚き、サエラブはヨシュアの正体が何者か怪しく思つた。

「ゆ、指一本も動かせぬくせに意^いがりおつてからに……。いいだろつー貴様の始末を先にしてやる！」

後ずさつたダルモアは気を取り直して標的をヨシュアに変えた。

「や、止めなさいよつーヨシュアを傷付けたら絶対に許さないんだからねつー！」

「…………」

銃を突きつけられてもヨシュアは冷酷な表情でダルモアを睨み続けた。

「ミシコアさん！」

ヨシュアの窮地にクローゼは叫んだ。

死ね。

ダルモアが銃の引き金に指をかけた時

エステルが叫んだその時、エステルの胸元から黒い光が放たれた。

な
！

黒い光に夕川モアは驚き 後退した そして黒い光は部屋全体に広

卷之三

「身体の自由が 病つた?」

「エヌテル
……今の黒い光は？」

「うん……。父さん宛に届いたあの黒いオーブメント……」

エスティル達が動けるようになつた事にダルモアは驚き、ヨシュアの

疑問はアブテルは懐かぬカジヤフから預かれた謎の黒いトラン

トを出した

これが、かみたにかけと
て、リハ、馬鹿、。、

卷之三

飛び掛かつた！ 嘘いているダルモアの隙を狙つてサエラブは杖を持つ手に向かつて

「なつ……！」

ダルモアが気付くといつの間にか持っていた杖は強奪したサエラブ

「ナイスよ、サエラブ！」

「これでもうあなたの切り札は使えません……現実を見た方がいいんじゃありませんか？」

גַּעֲמָנִים

武器を構えたヨシュアに同じるようにエスティルは武器を構えた。

「ここのボートで追いかけよう！さあ、2人とも乗つて！」

近くにあつたボートを見つけたヨシュアはすぐに乗り込み、ボートのエンジンをかけてエスティル達にボートに乗るよう促した。

「オッケー！」

「はい！」

「こらーー！俺も乗せやがれってんだ！」

エスティルとクローゼは素早くボートに乗り込み、遅れてきたため、ボートに乗れなかつたナイアルの叫びを背に、たヨシュアはエンジンを全開にしてダルモアのヨットを追い掛けた。

～ルーアン市内～

エスティル達を乗せたボートはどんどんダルモアのヨットとの距離に少しづつ縮まつて行つた

「よーし、近づいてきた！」

「こちらの方が小型な分、船体は軽いみたいですね。」

エスティルやクローゼはダルモアに追いつけるかもしぬない事に表情を明るくした。

「くつ……しつこいやツらだ……。これでも喰らえッ！」

近付いて来るエスティル達に焦つたダルモアはエスティル達に向けて銃を何発も撃つた。しかし

「とりやあつ！」

エスティルは棒を自分の目の前で回転させて、銃弾を弾いた。

「な、なにいい！？」

銃弾が全て防がれた事にダルモアは驚いた。

「ふふん、遊撃士を舐めんじやないわよつーヨシュア、そのまま右側につけちゃつて！」

「了解。……あれつ？」

ヨシュアがコットの側面にボートをつけよつとしたその時、ダルモアを乗せたヨットが加速した。

「い、いきなり速くなつた！？」

「これは……沖合いを流れる風です！」

「まことに、こうなつたらヨットの方が断然有利だ……」

ヨットが速くなつた事にエステルは驚き、原因がわかつたクローゼが説明し、それを聞いたヨシュアが表情を険しくした。

「あ、あんですってー！？」

「わはは、女神エイドスは私の方に微笑みかけてくれたようだな！それではさらばだ、小姑娘ども！」

そしてダルモアは高笑いをしながらエステル達から逃げて行つた。

「冗談じゃないわよ！あと一歩のところであつ！」

「このままだと高飛びされかねない……。なにか手段は……」

ダルモアに追いつけなかつた事にエステルは悔しがり、ヨシュアはダルモアに追いつく手段を考えたその時、上空からエンジン音が聞こえて來た。

「な、なに……？」

「……來た」

謎のエンジン音にエステルは不思議な顔をし、クローゼは静かに咳いた。するとエステル達のボートの上を大きな飛行船が飛んで行つた。

「フン、逃げたはいいがこれからどうしたものか……。やはり、軍の手が回る前にエレボニアに高飛びするしかないか。なあに、しばらく我慢すれば『彼』が何とかしてくれる……」

一方逃亡が成功したと思ったダルモアは独り言を呴いた後、念の為に後ろを振り返ると大きな飛行船がダルモアのヨットに向かつてきた。

「な、な、なああああああつ！？」

飛行船はダルモアのヨットの進路を塞ぐように着水した。飛行船が着水した衝撃でできた水飛沫により、ダルモアのヨットが停止した。

「な、な、な……。うわあああつ！な、なんだこの飛行船は！王国

軍の……いや、この紋章は……」

「……王室親衛隊所属、高速巡洋艦『アルセイゴ』。それがこの艦の名前だ。」

飛行船に彫つてある紋章を見て驚くダルモアに答えるよつて、飛行船から王室親衛隊員達を連れた女性士官が現れて答えた。

「やれやれ……何とか間に合つたみたいだな。」

「蒼と白の軍服……女王陛下の親衛隊だと！？」

女性士官の軍服を見たダルモアは驚いて叫んだ。

「その通り。自分は中隊長を務めるユリア・シユバルツという。ルーアン市長、モーリス・ダルモア殿。放火、傷害、強盗、横領など諸々の容疑で貴殿を逮捕する。」

「これは夢だ……夢に決まっている……。うーん、ブクブクブク……」

女性士官　ユリアの宣告にダルモアはショックを受けてヨットの上で氣絶した。そのすぐあとにエステル達のボートが到着した。

「！」これって……どうなつちゃってるの？

「ジャンさんが連絡してくれた王国軍の応援だと思つけど……。それにしては来るのが早すぎるよつな……」

「……ふふ……」

状況を見てエステルとヨシュアは驚き、クローゼはその後ろで静かに笑っていた。

「やあ、遊撃士の諸君。諸君の協力を感謝する。後のこととは我々に任せてほしい。」

こうしてマーシア孤児院放火事件とテレサ襲撃を命じた黒幕、ルーアン市長ダルモアは親衛隊員によつて身柄を拘束された……

第84話（後書き）

感想お待ちしております。

（ルーアン発着場）

ダルモアの身柄が拘束された後に、エステル達はルーアン発着場に向かいユリアからその後の話を聞いた。

「先程、田を覚ました市長を問い合わせたのだが……。どうやら記憶が曖昧になっているようだな。放火や強盗の犯行についてもぼんやりとしか覚えてないらしい。」

「そ、そななんだ……。なんか空賊の首領みたい……」

「あの黒装束たちといい何か関係があるかもしねえね。」

ユリアの説明にエステルとヨシュアは顔を見合させ、驚いた。

「まあ、記憶が曖昧と言つても起こした罪は明白だからな……。秘書共々、厳重な取り調べが待っているのは言つまでもない。何か判明したら遊撃士協会にもお知らせしよう。」

「助かります。」

ユリアの言葉にヨシュアはお礼を言つた。

「そうだ……君達には謝らないといけないことがあつたな……」

「へ？」

思い出すように呴いたユリアの言葉にエステルは田を丸くした。

「……ジョニース王立学園祭の時、部下達が生徒達を含め無礼を働いてしまつた事だ。」

「ああ、あの時の……」

「……部下達に代わつて謝らせてもらひ。……申し訳なかつた。」

「ちょ、ちょっと！」

「頭をあげて下さい、中尉。」

頭を下げて謝罪するユリアを見てエステルは焦り、ヨシュアは諭した。

「あの時の親衛隊員達の方達は望んでやつた事ではないと僕達も理

解はしていますから。」

「そうよ！あればあの酔っぱらった公爵さんが悪いんだから、ユリアさんが謝る事なんてないわよ！」

「しかし君達を含め、生徒達が苦労して成功した劇を滅茶苦茶にしてしまったのは事実だ。また、安易にデュナン公爵の命令に従つた部下達にも責任はある。……今後一度と二度のような事がないよう、みんなに言い含めるから今回の件は目をつぶつてほしい。」

「う、うん。」

ユリアの言葉にエステルは戸惑いながら頷いた。

「僕達はいいのですが、メンフィルに対しても同じ訳をするのですか？……デュナン公爵が親衛隊員達に命じた時、メンフィル大使が現れた事はご存じですか？」

「その件か。最初リ・ウイ皇帝陛下に襲いかかった事を聞いてリベルの滅亡が思い浮かんだが話を聞く所、その後その話を聞いたクローディア姫が直々にリウイ陛下に謝罪に行つたところ、陛下は気にしていないとおっしゃっていたそうで、今回の件が原因で同盟の破棄や戦争の勃発にはしないと断言なさつたそうだ。だから、その件は安心してくれてかまわない。」

「よ、よかつた……それにしてもそのクローディア姫って人、凄い行動力をしているよね！あんな凄い雰囲気を出しているメンフィルの王様に一人で会いに行つたんだから。」

「…………」

ユリアの言葉にエステルは緊張がとれたように、肩の力が抜けて安心した。またクローゼはエステルの言葉に照れた表情をした。

「ところで中尉さん。一つお願いがあるんですがね。」

そこにちやつかりエステル達に着いて来て、その場にいるナイアルがユリアに尋ねた。

「なにかな、記者殿？」

「できれば俺も、そちらの船に乗せてくれませんかねえ？何と言つ

ても、ツァイス中央工房が世に送り出す最新鋭の飛行船だ。ぜひとも取材させて欲しいんですよ。」

「申しわけないがお断りさせていただこう。」この『アルセイコ』は先日、艦装かいていが終わつたばかりで試験飛行を行つてゐる段階なのだ。

正式なお披露目が行われるまでどうか報道は控えていただきたい。

「そ、そこを何とか！逮捕された市長や秘書からもコメントを貰いたいところだし……」

ユリアの断りの言葉にナイアルは食い下がつた。

「心配せずとも、判明した事実は王都の通信社にもお伝えしよう。そのあたりで勘弁して欲しい。」

「はあ～、仕方ないか。よし、こうしちゃいられん！記事を書いたら大急ぎで王都に戻るしかつ！そんじゃあ、失礼するぜ！」

ユリアの答えを聞いたナイアルは諦めて溜息をついた後、その場を走り去つた。

「相変わらず逞しいっていうかめげないっていうか……」

「はは……でもナイアルさんらしいね。」

ナイアルの行動にエスティルとヨシュアは苦笑した。

「『リベル通信』の発行部数は最近うなぎ上りだと聞いている。彼には、プロパガンダに囚われない記事を書いて欲しいものだが……」

「プロパガンダ
政治的宣伝……？」

「いや……」

首を傾げて気になつた言葉を繰り返したヨシュアを見て、ユリアは顔を伏せた。そこにカノーネを連れたリシャールが現れた。

「お手柄だつたようだね。シュバルツ中尉。」

「こ、これは大佐殿……！」

「ああっ！」

「リシャール大佐……」「

「ほう、いつぞやの……。なるほど、ギルドの連絡にあつた新人遊

撃士とは君たちのことだったか。」

リシャールはエステル達を見て頷いた。

「え……。ジャンさんが連絡したのってリシャール大佐のことだったの?」「

「ああ、王国軍の司令部があるレイストン要塞に連絡が入つてね。慌てて駆けつけてみればすでに事が終わっていたとはな。見事な手際だ、シユバルツ中尉。」

「は、恐縮です……」

「フフ、でも不思議ですこと。王都にいる親衛隊の方々がこんな所に来ているなんて……。どうやら、我々情報部も知らない独自のルートをお持ちのようですね?」

「お、お戯れを……」

カノーネの言葉にヨリアは目をそらし、クローゼは目を閉じて何も言わなかつた。

「はは、カノーネ大尉。あまり絡むものではないな。ただ、陛下をお守りする親衛隊が他の仕事をするのも感心はしない。後の調査は我々が引き継ぐからレイストン要塞に向かいました。そこで、市長たちの身柄を預からせてもらひとしよう。」

「は……了解しました。」

「我々はこれで失礼するよ。親衛隊と遊撃士の諸君。それから制服のお嬢さん……」

「…………」

リシャールは一瞬クローゼに意味ありげな顔を向けて言った。顔を向けられたクローゼは何も言わず笑顔で会釈をした。

「……機会があつたらまた会つことがあるだろう。それでは、さらばだ。」

「フフ、『きげんよう。』

そしてリシャールはカノーネを連れて発着場から去つた。

「気のせいかもしれないけど……。今、リシャール大佐、クローゼの方を見ていいなかつた？」

「そ、そうでしょうか？」

「…………。確かに、じつにう場所に君みたいな学生がいるのはあまりないことだらうからね。不思議に思われたのも無理ないよ。」

「あ、あはは……本当にうですよね。ちょっとと反省です……」

「うーん、そんな雰囲気じゃなかつたような……」

ヨシュアの言葉にクローゼは苦笑し、エステルは腑に落ちていない様子だった。

「……自分に言わせれば君たちだつて充分驚きの対象だ。いくら遊撃士とはいえその若さでここまで活躍するとは……。できれば親衛隊にスカウトしたいくらいや。」

「や、やだな）。そんなにおだてないで下さいよ。今度の事件だつて色んな人に助けてもらつたし。」

ユリアの賛辞にエステルは照れながら答えた。

「そう謙遜するものではない。まだ準遊撃士のようだが正遊撃士は目指さないのかな？」

「あ、今ちょうどそれを目指して修行中なんです。」

「女王生誕祭が始まるまで一通り国内を回つてみるつもりです。」

「そつか……自分も応援しているよ。」

その時、アルセイコから親衛隊員がユリアを呼んだ。

「ユリア隊長！出航の準備が整いました。」

「ああ、わかつた。エステル君、ヨシュア君。……それとクローゼ君も。そろそろ我々は失礼する。機会があつたらまた会おう。」

「あ、はい！」

「その時は宜しくお願ひします。」

「…………ありがとうございました。」

エスティル達の別れの言葉を聞いたユリアは親衛隊員達が待つアルセ

イユのデッキに戻った。

「隊士一同、敬礼！」

ユリアがそう言つと、ファンファーレを鳴らしながら、親衛隊員達が敬礼をした。

「わわっ……」

「王室親衛隊所屬艦、『アルセイユ』

離陸！
ティクオフ

そしてアルセイユはエステル達に見送られ、飛び立つて行つた……

第85話（後書き）

感想お待ちしております。

その後エステル達はダルモアの件を報告するためにギルドに戻った。

（遊撃士協会・ルーアン支部）

そこには事件解決の報を聞いて戻つて来たプリネとリウイ達を見送りに行つたりフィア達も戻つて来ていた。

「は～、まさか王都の親衛隊がやつて来るとはね。しかも噂の最新鋭艦、『アルセイユ』のお出ましとは。僕も受付の仕事が無かつたら見に行きたかったんだけどなあ。」

エステル達の報告を聞いてジャンは残念そうな表情で言った。

「ジャンさんつて意外にミーハーだったのね。でも、ジャンさんが連絡したのはリシャール大佐だったんでしょ？」

「ああ、レイストン要塞に彼がいたもんだからね。どうして親衛隊が駆けつけたのかは判らないが……。まあ、軍の連絡系統にも色々あるつてことなんだろうね。」

「通常の正規軍に加えて、国境師団、情報部、王室親衛隊……確かに複雑そうですよね。」

「うむ。それはどの国に対しても変わらないな。」

ヨシュアの言葉にリフィアは頷きながら答えた。

「へ～……メンフィル軍もいろんな部隊があるの？」

リフィアの言葉が気になつたエステルは尋ねた。

「ええ。正規軍はもちろんの事、ファーミシルス大將軍率いる親衛隊、シェラ軍團長率いる機工軍團。他には斥候部隊や魔道軍團があります。」

「魔道軍團？ 何ソレ？？」

プリネの説明にエステルは疑問を抱き、尋ねた。

「魔道軍團とはその名の通り、”魔術”を使える者達で構成された

軍団の事です。戦になればさもざまな魔術を使って敵を葬るメンフィルの主力軍団の一つです。」

「……魔術を軍団で撃てば威力はもちろんの事、相手に対してもかなりの被害を出すだろうね……」

「ええ。他には竜騎士で結成されている竜騎士軍団、水竜騎士で結成されている水竜騎士軍団、また各地の王公領にもメンフィルが帝国化した際、それぞれの王公領の軍団が正規軍化し、そのままそれぞれの王公領を守っています。」

「ふえ～相変わらずメンフィルって凄いわね……そう言えば、エヴリーヌは客将つて言つてたけど、エヴリーヌも軍人なの？」

メンフィルの凄さに改めて知つたエステルは驚いた後、モルガンとリフィア達の会話で思い出したエヴリーヌが名乗つた時の身分を思い出してエヴリーヌに聞いた。

「ううん。エヴリーヌは基本お兄ちゃん達の傍で戦うだけ。一応”魔神部隊”つていう部隊に所属している事になつていてるけどね。」

「”魔神部隊”……その言い方だとエヴリーヌ以外にも”魔神”がいるのかい？」

エヴリーヌの言葉が気になつたヨシュアは尋ねた。

「うん。ゼフィラとカファルーつていう2人だよ。」

「2人ともエヴリーヌみたいに強いの？」

「ん……ゼフィラはイマイチかもしれないけど、カファルーは結構強いよ。」

エステルの疑問にエヴリーヌは首を傾げて答えた。

「でも、今回の事件は事後処理が大変そうですね……。今後、ルーアン地方の行政はどうなつてしまふんでしょうか？」

「あ。そうか……。市長が逮捕されちゃつたし。」

「とりあえずは王都から市長代理が派遣されると思う。市長の有罪が確定すればいずれ選挙が行われるだろうね。そうそう、孤児院についてでは正式な補償が行われると思うよ。」

「そうですか……良かつた。これもみんなエステルさんたちのおかげです。本当に……ありがとうございます。」

ジャンの説明にクローゼは胸をなでおろしてエステル達に感謝した。

「や、やだな。水くさいこと言わないでよ。」

「そうだね。当然のこととしただけさ。それに僕たちだけじゃなくてアガットさんやペルル達の協力も大きかつたしね。」

「そ、そういうば！ね、ねえ、ジャンさん！アガットから何か連絡はあつた！？」

ヨシュアからアガットの名前が出て、黒装束達を追つて行ったアガットの事を思い出したエステルはジャンに尋ねた。

「ああ、それなんだが……。残念ながら、黒装束の連中は取り逃がしてしまつたらしい。他にも仲間がいたみたいでね。待ち伏せの襲撃にあつたそうだよ。」

「ええっ！？」

「大丈夫だつたんですか？」

ジャンの報告にアガットの強さを知つてゐるエステルやヨシュアは驚いた。

「ああ、何とか切り抜けたらしい。そのまま連中を追つてツアイス地方に向かうそうだ。今頃は、ルーアン地方から離れている頃じやないかな」

「な、なんか……ハードなことやつてるわね。……そういうばプライネ。」

「はい、何でしようか？」

「あの後、ペルルがリフィア達に知らせて先回りしてもうつて言つてたけど、リフィア達は行かなかつたの？」

「なぬ？ 初耳だぞ、それは。」

エステルの疑問にリフィアは首を傾げた。

「あ、はい。その事なんですが……話に聞くとお姉様達がいるルアンに向かっている途中でリウイ陛下を見かけたそうで、事情を話

したところ陛下自らがアガットさん達を追つたそうです。

「リウイ皇帝陛下が……それで、どうなつたんだい？」

プリネの説明にジャンは驚き、続きを促した。

「さあ……特に何も聞いておりません。お姉様方は陛下達がルーア

ンを去る際、何か言つてませんでしたか？」

「うん、プリネが参加してた劇が中々よかつたぐらいしか言わなかつたよ。」

「うむ。……それにしてもなぜリウイに報告した後、ペルルは余に報告しなかつたのだ？」

「陛下が言つにはお姉様達だと、その……手加減を忘れて殺してしまふからと……だからお姉様達と賊達と会わせたくなかつたそういうで、ペルルを私の所に戻るよう言つたそうです。」

「む、失礼な……いくら許せん相手とはいえ、加減を忘れるることは余はないぞ。」

「あはは……でも何の連絡もないという事は、アガットみたいに取り逃がしたのかな？」

リフィアの発言に苦笑したエステルはリフィア達に尋ねた。

「リウイに限つてそれはないと思うぞ。……時間があれば後で大使館に問い合わせて聞いて、お前達にも情報をやろう。」

「期待して待つていいよ。ちなみに、しばらく前からアガットはあの連中を追いかけているんだ。どうやら、君たちのお父さんに頼まれた仕事らしいけどね。」

「ど、父さんが！？」

「どうしてそういう事に？」

ジャンの言葉にエステルとヨシュアは驚いて尋ねた。

「ふふ、『レイヴン』にいたアガットを更正させたのは他ならぬ力シウスさんだからね。何だかんだ言つてあの人には頭が上がらないのさ。」

「ええっ、そうだったの！？」

アガットの過去にエステルは驚いた。

「なるほど……。僕たちに対する厳しい態度もそれが原因かもしないですね。」

「す、ぐそれっぽいわね～。って、やっぱり父ちゃんのとばつちりじやなのよっ！」

「くすくす……。あ、エステルさんたちのお父様といえば確かに……」

「え、どうしたの？」

クローゼの意味深な言葉にエステルは首を傾げた。

「あの、市長邸で黒い光が溢れた時に……」

「あ、それがあつたか！」

クローゼの言葉で思い出したエステルは懐から黒いオープメントを出した。

「色々ありすぎて、つい忘れちゃってたけど……。コレ、いつたい何のかしら……」

「それのおかげで助かつたけど、少し不気味な感じはするね……」
(お姉様、先ほどエステルさん達がアーティファクトの効果がいつの間にか消えたと言つていましたけど……)

(……恐らくあの黒いオープメントが原因だな。……しかし、アーティファクトの効果を打ち消すか……アーティファクトの力の源は導力。それを消すという事は……)

(導力を消滅させるオープメントのような物という事ですね……そのような物、一体どこから手に入れたんでしょう……)

エステル達の話を聞いたリフィアやブリネは黒いオープメントの出所を怪しがった。

「珍しい色のオープメントだね。どういった由来の物なんだい？」

「それが……」

黒いオープメントの出所を尋ねたジャンにエステルとコシコアは手入れた経緯を説明した。

「まあ……」

「ふーむ、R博士にKか……。ひょっとしたら……」

エステル達の説明にクローゼは驚き、ジャンは手を顎にあてて唸つた。

「え、知ってるの！？」

「いや、心当たりというほどじゃないんだが……。それを調べたければツアイス地方に向かつた方がいいかもしねない。」

「ツアイス地方？」

「知つての通り、ツアイス市はオープメント生産で有名な場所だ。『工房都市』とも言われており、博士の肩書きを持つている人も多い。」

「なるほど……。たとえ博士が見つからなくても、その黒いオープメントの正体が判るかも知れませんね。」

「うーん、でもあたしたちここで修行する必要もあるし。」

ジャンの説明でヨシュアは納得し、黒いオープメントの正体がわからかもしれないとわかつたエステルだったが、今の状況を思い出して肩を落とした。

「ふふ、こんな事もあらうかとちやあんと用意しておいたのさ。」エステルの様子を見た後、ジャンは正遊撃士資格の推薦状をエステルとヨシュアに渡した。

「ええっ……！」

「いいんですか？」

2人は驚きながら受け取った。

「はは、空賊事件の時と同じさ。これだけの大事件を解決されちゃ渡さないわけにはいかないからね。査定も報酬も用意してあるよ。」

「うわ～……学園祭の出演料まである……」

推薦状と同時に渡された報酬とその詳細を見たエステルは呟いた。

「何から何まで済みません。」

「なあに、正当な報酬さ。僕も、君たちには一刻も早く正遊撃士になつてももらいたい。その方が、君たちの力をもつと活かせると思うからね。」

「えへへ……。ありがと、ジャンさん。」

「期待に応えられるよう頑張ります。」

「おめでとうござります、2人とも。」

「おめでとう。」

「うむ！こんな短期間で半分以上の推薦状を貰うとはさすがはエスティルとヨシュアだな！」

「えへへ、ありがと。」

エスティルとヨシュアが推薦状を貰つた事にプリネ達はそれぞれ祝福して、それを聞いたエスティルは照れた。

「良かったですね。エスティルさん、ヨシュアさん。……ちょっと寂しくなつてしまいますけど……」

「クローゼ……」

「……そうだね。僕たちも名残惜しいよ。」

同じようにエスティル達を祝福したクローゼだがもうすぐエスティル達が旅立つ事に寂しそうな表情になつた。それを見た2人も寂しそうな表情をした。

「あは……。わがまま言つてごめんなさい。出発の日が決まつたら私も教えて頂けませんか？エア＝レッテンの関所まで見送らせていただきますから……」

クローゼは寂しそうに笑つて答えた。

「……エスティルさん。」

「何、プリネ？」

「ルーアンを出るといふのでしたら、あの子達を連れて行かないと

「……」

「……そうね。」

「あ……」

プリネとエスティルの会話から察したクローゼは表情を暗くした。

「クラム達には悪いと思つけど……迎えに行ひ。」

「ええ。」

そしてヒステル達はミントンとシーヤを迎えてマノリア村に向かった

……

第86話（後書き）

カファルーに関してはVERITA後、どうなったかわからないキヤラなので配下にしたという事にしました。それと今回の話でお気づきかと思いますが、次回、エステル達の旅の同行者が増えます
……感想お待ちしております。

外伝／もう一つの旅立ち

（マノリア村宿酒場・白の木蓮亭の一室）

その後エステル達はテレサに事件の詳細を話した後、ミントとツーヤを迎えた事を説明した。

「そうですか……ついにルーアンを去られるのですね。」

「……はい。」

「フフ、そんな暗い顔をしないで下さい。そんな顔をしていたらミントが心配しますよ。」

申し訳なさそうな表情をしているエステルにテレサは微笑んで励ました。

「…………先生、ただいま！」

そこに外で遊んでいた孤児院の子供達が帰つて來た。

「あ、ママ！」

「ご主人様！」

エステルとプリネの姿を見たミントとツーヤはそれぞれ駆け寄つた。

「お待たせ、ミントちゃん。迎えに來たよ。」

「本当！？じゃあ、これからはママといっしょにいらっしゃるんだ！」

エステルが迎えに來たと知つたミントは無邪気に喜んだ。

「…………ツーヤ、一つだけ確認していいかしら？」

「なんでしょうか、ご主人様？」

一方プリネは真剣な表情でツーヤに尋ねた。

「今はこうしてエステルさんと旅をしているからミントちゃんといっしょですけど、旅が終わればミントちゃんとも別れる事になります。その覚悟はある？」

「…………はい。それがわたしの進むべき道ですから。ミントちゃんもその事はわかっています。」

プリネに問いかけられたツーヤは凜とした表情で答えた。

「そう、わかったわ。」

「……みんな、ちよつといいかしさ。」

「先生?」

手を叩いてテレサは子供達に自分を注目させた。
「今日はお知らせがあるの。」

「お知らせ……?」

テレサの言葉にマリイは首を傾げた。

「……ミント、ツーヤ。」

「……うん。」

「……はい。」

テレサに促されミントとツーヤは静かに子供達の前に出た。

「前にも言ったと思うけど今日からこの2人はエステルさん達に引き取られ、みんなとお別れする事になりました。」

「え……」

「……」

テレサの説明にクラムは驚き、マリイは辛そうな表情になつた。
また、ポーリイやダニエルは今にも泣きそうな表情をした。

「うん、あのね……」

ミントとツーヤはクラム達に自分の正体、何故エステル達に引き取られるかを説明した。

「……という訳なんだ。だから、みんなとは別れなくちゃならない
んだ……」

「嫌だ!」

「クラム?」

「なんで2人と別れなくちゃいけないの!?」

「クラム、それはさつきミントちゃんと説明したでしょ……」

我儘を言つクラムにツーヤは諭した。

「オイラ、まだ子供だからわかるないよ!なあ、みんなもお姉ちゃん

ん達と別れるのは嫌だろー…？」

「「「う、うん……！」」

クラムの呼びかけにダーホルとポーリイは頷いた。

「…………」

「マリイ？ なんで何も言わないんだよ？」

一人だけ賛成しないマリイを不思議に思つてクラムは尋ねた。

「クラム、私はあなたの考えに反対よ。」

「なんでー！」

「お姉ちゃん達、言つてたじやない。近い内、みんなとお別れするつじ。……ぐす。」

「マリイ…………」

泣ぐのを堪えて田に涙を溜めていたマリイを慰めるよつこーやはマリイを抱きしめた。

「「「めんね、マリイ。…………これからはあなたとクラムが一番上よ。だから、みんなの事お願ひね……」」

「ひっく、うん……」

マリイはしゃべりをあげながら頷いた。

「どうかに行ひややだよ、ミント姉ちゃんー。」

「クラム…………」

涙目で詰め寄るクラムにミントは辛そうな表情をした。

「クラム……2人を困らせてはダメよ。」

そこにテレサがクラムを宥めた。

「2人は自分が望んだ人に引き取つて貰うの。ずっとここにいるより、そのほうが幸せである事はわかるでしょ、うー。」

「でも、でも…………！」

「クラムー…これで最後だつて言つ時に、何でお姉ちゃん達を困らせているのー…ずっとお姉ちゃん達にお世話をなつたんだから、最後は笑顔でお別れをしないとダメじゃないー。」

テレサの説得でも納得できなかつたクラムに涙をぬぐつたマリイが

叱つた。

「…………クラム。あなた達もいつか私の元から巣立つ時が来ます。2人は今がその時なのです。」

「…………」

テレサの言葉にクラムは顔を伏せた。

「クラム。」

「…………何、ミント姉ちゃん。」

「ミント達はこれから旅に出るけど……みんなの事は忘れないよ！いつか必ずみんなに会いに来るよ！」

「本当？」

「うん。約束をするから指を出して。」

「う、うん……」

ミントに促されクラムは指を出した。クラムの指にミントは自分の指をからませた。

「約束だよ、クラム！今日からクラムがみんなのお兄ちゃんだから、みんなを護つてね！ミントとジー・ヤちゃんは旅をしている間でも、みんなの事を思つてこいるよ！」

「…………うん！」

ミントの笑顔にクラムは強く頷いて、笑顔で答えた。

「…………ぐす、あたしこういうの弱いのよね…………」

2人と子供達の別れを見ていたエステルは涙ぐんだ。

「エステル。テレサさん達が大事にしていたミントを預かるんだ。責任重大だよ。」

「…………わかってる。あの子は絶対大事にして、いい子に育てるわ！ヨシコアの言葉にエステルは涙をぬぐつて頷いた。

「…………プリネ。お前もわかっているな？お前はこれからあのツーヤという一人の少女の一生を預かる身なのだ。余やエヴリー・ヌも気にかけておぐが、大事にしてやるのだぞ。」

「…………はい。特に私はエステルさんと違つて気の遠くなるような寿

命ですから……恐らく竜であるツーヤも私やお姉様並かそれ以上生きるのであるから、生涯を共にする”パートナー”として信頼を深め、大事にするつもりです。」

「がんばってね、プリネ。何か相談したい事があつたらエヴリーヌ達が相談にのるよ。」

「ふふ、ありがとうございます。エヴリーヌお姉様。」「一方リフィアやエヴリーヌもプリネを応援した。

「そうだ、最後にみんなに見て貰いたい事があるんだ!……ツーヤちゃん。」

「うん。みんな、あたしとミントちゃんについて来て。」「う、うん……」

ミントとツーヤの言葉にクラムは戸惑いながら頷いた。そしてエステル達は2人の少女についていき、ある場所に向かった。

（マーシア孤児院跡）

「到着!」

目的の場所に到着したミントは元気よく言った。

「ミント? 一体ここで何をするの?」

なぜ、ミント達がここに向かつたのが理解できなかつたテレサは尋ねた。

「今それを見せます、先生。……ミントちゃん。」

「うん。ママ、ちょっとこっちに来て。」

「ご主人様もお願ひします。」

「う、うん。」

「何をするの?」

ミントとツーヤに促され、エステルとプリネはそれぞれ2人の目の前に立つた。エステルとプリネが自分の目の前にいる事を確認したミントとツーヤは頷き、それぞれ両手を上に伸ばした。すると2人の身体が青い光に包まれた。

「え？」

「これは……」「……」

「うわあ……」「……」

「キレイ……」「……」

エステルとプリネはミントとツーヤの足元に魔法陣のよじつな形が浮かび上がったのを見て、驚いた。クラムやマリィを含む子供達は幻想的な風景に見惚れた。

「これはあたし達ドランゴン伝説の”契りの儀式”……」

“契りの儀式”？

ツーヤの言葉にプリネは首を傾げた。

「ママとミントがお互いの事を本当の”パートナー”である事を誓う儀式なんだ！」

「ほえ？……それで、あたしは何をすればいいの？？」

「えへへ、ちょっと待ってね。」

首を傾げるエステルとミントは可愛らしく微笑んで上げていた手を下げた。すると手には何かの紋章が浮かび上がっていた。ミントと同じように両手を下げたツーヤは額にミントとは異なる紋章が浮かび上がっていた。

「……今浮かび上がっているあたし達の紋章に口づけをしてやさしくなさい。そうすれば儀式は完了です。」

「く、口づけ！？そ、それって、キスじゃない！？」

ツーヤの説明にエステルは顔を真っ赤にして答えた。その様子をプリネは苦笑して答えた。

「エステルさん……キスと言つても頬や口ではないんですよ。」「で、でも……」

「フウ……でしたら私が先にしますから、エステルさんはそれに続いて下さい。」「う、うん。」「……」

プリネはツーヤの足元の魔法陣の中に入った。するとツーヤの身体から発せられる光がいつそう強くなつた。そしてプリネはその場でしゃがんでツーヤを見た。

「ツーヤ……これから共に生きるパートナーとしてよろしくね。
「はい。誠心誠意お仕えさせて頂きます。」

「ありがとう。」

そしてプリネは紋章が浮かび上がつてゐるツーヤの額に口づけをした。その瞬間、光は消え、ツーヤの紋章も消えた。

「（……暖かい。これがパートナーを得た証ですか……）エステルさん、次はあなたの番ですよ。」

「う、うん。……スウ……ハア……よし!」

プリネに続くようエステルは緊張した心を鎮めるために深呼吸をした後、表情を凜とさせたミントの足元の魔法陣の中に入った。エステルが魔法陣の中に入るとツーヤの時と同じようにミントの身体から発せられる光がいつそう強くなつた。そしてエステルはミントの前にしゃがんでミントと目を合わせた。

「まだ16歳のあたしがミントちゃんのママをやれるかわからないけど……精一杯がんばるわ！だから、いつしょに成長して行きましょ……ミントちゃ……いや……ミント！」

「うん！」

そしてエステルは紋章が浮かび上がつてゐる手の甲に口づけをした。その瞬間、光は消え、ミントの紋章も消えた。紋章が消えた瞬間、ミントはエステルに抱きついた。

「……よつと。これからよろしくね、ミント。」

「えへへ……ずっといっしょだよ、ママ！」

エステルに抱きあげられたミントは可愛らじこ笑顔で答えた。

「……エステルさん、プリネさん。」

「はい。」

「なんでしょう？」

テレサに呼ばれ、エステルはミントを降ろし、プリネと共に姿勢を正した。

「あなた達に渡すべき物があるので、少しだけ待つて下さい。」

「渡すべき物？」

テレサの言葉にエステルは首を傾げた。そしてテレサは崩れ落ちた孤児院の床についてる取っ手の部分を使って、床の一部をあげ、その中についた物を確認した。

「…………どうやらこれらは無事だつたようですね…………」

そしてテレサは床の下に隠されたそれぞれ鞘に収められている2本の剣を持って来て、エステルとプリネに渡した。

「これは……剣！？でも、折れているわね……」

「…………折れてもかなりの業物のようだね…………それに何か…………神々しい雰囲気があるね…………」

エステルは鞘から剣を抜いて折れた刀身に驚き、ヨシュアは折れた剣の刀身の輝きを見て評価をした。

「いやらは一体…………？剣のように見えますが、少し刀身が違いますね…………」

一方プリネは渡された鞘から剣を抜き、普通の剣より曲がっているように見える刀身を見つめた後首を傾げた。

「ほう…………それは恐らく”刀”というものだな。」

“刀”？確かにイスナフロディ独特の武器と聞いた事がありますが、まさかこれが？

「うむ。余やエヴリーヌも見た事がある。そうだろう、エヴリーヌ？」

「ん。ウイルフレドの仲間のユエラつていう人間が使っていた剣に結構似ているね。」

「あの…………先生…………どうして剣が孤児院に…………？」

孤児院に何度も足を運んでいるクローゼは孤児院とは無縁の剣が隠されてあつたのを見て、驚いて尋ねた。

「……ミント達を拾つた時、この子達の傍に落ちていた物です。記憶のない2人の手掛かりかと思って拾い、ずっと保管していたのです。」

「ほえ？……でも、折れていたら使えないわよね？もったいないわね～……」

「そうですね……そちらの剣もそうですが、この刀も僅かな聖なる気配だけあって本来の力が出ていないように見えます。もし、本来の力が出せれば、”聖剣”あるいは”神剣”の類だったでしょうね？」

剣の由来を聞いたエステルは呆けた後、折れた剣を見て残念がり、プリネは持つている刀の刀身と折れた剣が出す僅かな神氣を感じ取り残念そうな表情をした。

「ふむ、武器の修復か……余に一人、それができる人物の心当たりがあるぞ。」

「本当かい？でもこんな業物を元通りにできるほどの人なんて、そうそういないと思うんだけど……」

ヨシュアはリフィアの言葉に驚いた後、考え直した。

「安心せよ。腕も確かだ。そ奴に依頼すれば、期待通り真の力を引き出してくれるだろう。」

「もしかして……」

「エヴリーヌお姉様にも心当たりがあるのですか？」

リフィアが答えた人物の事をわかつていそうなエヴリーヌにプリネが尋ねた。

「うん。前にも話したと思うけど、ユイドラのウィルフレドつていう工匠なら大丈夫だと思つよ？リフィアが頼んだ結構難しい杖の作成もなんなく作つたし。」

「へ～……じゃあその人に頼みたいけど、どこにいるのかな？」

リフィア達が高評価する人物の事を聞き、エステルは期待を持った目で尋ねた。

「前にも言ったと思うが、ウィルは祖国メンフィルのはるか南方の

都市に住んでいる。会いに行くのは容易ではないぞ。」「

「あ……そつか。別世界にいるんじゃ、無理かな……」

リフィアの答えにエステルは肩を落として溜息をついた。

「ふむ。旅が終われば、余がウィルにその剣を元通りにするよう、手配しておいてもいいぞ？」

「いいの？じやあ、その時はお願ひするわ。」

「うむ。（さて……ウィルへの依頼が増えたな……まあ、あ奴なら見事、素晴らしい剣へと鍛え上げてくれるだろう。そういえば旅に出る前にウィルへ書状で2人の得物である棒と双剣の作成を頼んだが、書状がそろそろ届いている頃だな……）」

そしてエステルは折れた剣を鞘に入れた時、鞘に彫つてある文字に気付いた。

「あれ？なんか文字が彫つてあるわね？えっと……？H……R……ユ……S……ン……？うーん、いくつか削れてて読めないわ……」

「こちらの鞘にも文字が彫つてありますね……アルフ……？刀の名前でしょうか……？」

エステルとプリネは鞘に彫つてある文字を読んで、首を傾げた。

「エステル、プリネ。……名残惜しいとは思つけど、そろそろ行かないと。ツァイスへ行く準備や2人の装備を整えるためにルーアンである程度の時間が必要と思うし。」

「……そうね。じゃあ、ミント。行こうか。」

「うん。ツーヤちゃん。」

「うん。」

エステルに促されミントはツーヤといつしょにテレサと子供達の前に立ち、お辞儀をした。

「「今までお世話になりました、先生、みんな！10年間、私達を育ててくれてありがとうございましたー！」」

「ミント……ツーヤ……」

ミントとツーヤの別れの挨拶にテレサは自分と死別した夫が建てた

孤児院から子供達がとうとう巢立つ事を実感し、涙を流した後涙を拭つた。

「フフ……お礼なんて私のほうが言いたいぐらじよ……」リリはいつまでもあなた達の家です。だからいつでも帰つて来たいと思つた時に帰つてきなさい……その時はみんなといつしょに歓迎するわ。」

「はい！」

「元氣でね、2人とも……」

テレホは最後にノンエエシ

テレサは最後にエリザベスとシーヤを抱きしめた後、クラム達のところに戻った。そしてミントはエステルと、シーヤはプリネと手を繋ぎ、テレサやクラム達に空いた片手を振つて別れの言葉を言った。

「みんな！元気でね！！」

「ミント姉ちゃん、ツーヤ姉ちゃん！ いつか、帰つて来る時を待つてるから！ それまでずっと先生達やここのを守つていろから！ だから、絶対帰つて来てよ！」

「いつまでも元気でいてね、お姉ちゃん達！！」

こうして2人の竜の少女

こうして2人の童の少女は今までお世話をなつたテレサや子供達に見送られて孤児院跡を背にエスティル達と共に旅立つた……

外伝「もう一つの旅立ち」（後書き）

とこづ訳で、ミント&ツーヤ、エステル達の仲間として加入です！エステル達が手に入れた折れた剣の名前でピンと来る方がいるかもしれません。刀のほうはオリジナル設定です。ツーヤのバトルスタイルは原作で技があるミントと違つてオリジナルにしています。……感想お待ちしております。

その後、学園に戻るクローゼにルーアンを出発する時間を伝えてルーアンでヨシュア達には足りない道具や携帯食料の調達を頼み、ミントとツーヤの旅支度等を武器屋で仕入れていたエステルとブリネだつたが、2人からある事を頼まれて驚いた。

「ルーアン・ジョアン武器商会」

「剣が欲しいって……ミント、あなた戦う気なの！？」
「うん。」

驚くエステルにミントは頷いた。

「2人とも、戦闘経験はあるのですか？」

ブリネは凛とした表情で自分を見つめるツーヤに静かに問いかけた。
「いいえ。でも、あたしとミントちゃんはいつか現れる”パートナー”の足手まいにならないよう、みんなに内緒で丈夫な木の枝を使つて剣や素手での戦闘の特訓をしていました。だから、あたし達も戦わせて下さい。」

「うん……たつたそれだけの訓練で実戦をさせるのは正直反対です。」

「あたしもブリネに賛成よ。第一、2人は剣を持てるの？剣って一般的な武器だけど、結構重いわよ？」

ツーヤの説明を聞いても、ブリネとエステルは今まで戦闘とは無縁で平和に暮らしてきた2人を戦わす事に納得できなかつた。

「大丈夫だよー！ミント達、結構力持ちだからーねえ、お姉さん。この剣をちょっとだけ借りてもいい？」

「ええ、いいわよ。」

「……じゃあ、あたしも借りさせていただきます。」

店主から許可を得ると店に置いてある武器の中から、ミントは剣を、

ツーヤはリベルの東方にある国、カルバード共和国独特の武器刀を持つて、離れた場所で持つた武器を軽々と何度も振った。

「嘘！？」

「さすがは竜といったところですか……幼い身体でも力は私達と代わりないようですね……」

ミント達が苦もなく武器を素振りしているのを見てエステルとプリネは驚いた。

「ね！ミント達も戦えるから、剣を買って。ママ。」

「……どうしよう、プリネ。」

期待を込めた目で見られ、困ったエステルはプリネに相談した。

「そうですね……持たせてあげてはどうですか？」

「でも、こんな小さい子を戦わすなんて……」

「……エステルさん。あなたの職業はなんですか？」

「へ……？プリネったら何、変な事を言つてるの？遊撃士に決まつているじゃない。」

プリネの問いかけにエステルは首を傾げて答えた。

「では聞きますが、遊撃士の仕事とは？」

「そんなの決まっているじゃない。地域の平和と民間人の保護のために働く事よ。荷物の護衛や落とし物の捜索、他には手配魔獣の退あ。

……あ。

プリネに問い合わせられた事を答えたエステルだったが、ある事に気付き答えるのを止めた。

「気付いたようですね……遊撃士という仕事をやって行く上ではどうしても戦闘は避けられません。だから護身用に持たせるべきだと思ふんです。」

「う……それぐらい、あたし達が守ればいいんじゃないかな？」

「エステルさん……この子達、言つてましたよね？”パートナー”は契約した人と生涯を共にする相手だと。庇護するだけでは眞の”パートナー”とは言えないと思うんです。」

「う”。確かにそうね……」

プリネの言葉にエステルは唸り、少しの間考えた後ミントに近付いてミントの田線に合わせるようにしゃがんでミントをみつめて言った。

「ミント……絶対無茶はしないって約束してくれる?」

「うん!約束する!」

エステルの言葉にミントは元気よく頷いた。

「ツーヤ、あなたもよ。少し戦えるからって決して調子にのらないこと。実戦は命に関わるのですから。」

「はい、わかりました。」

ツーヤもプリネの言葉に頷いた。

「約束したからね?……じゃあ、好きなのを選んじゃっていいわよ。ただし、自分が使い易いと思つた剣よ?」

「うん!……じゃあ、これ!」

ミントは並んでいる剣の中から一本一本手にとつた後、一本の剣を店主に渡した。

「”グラディウス”ね。3000ミラよ。」

「はい、3000ミラ。」

「まいどあり。」

「…………あたしはこれをお願ひします。」

「これは”虎徹”ね。5000ミラと結構値が張るけど、大丈夫?」ツーヤが渡した刀の銘を見て、店主はプリネに確認した。

「大丈夫です。……これでいいですか?」

「4000……5000……うん、大丈夫ね。まいどあり。」

店主から購入した武器を渡されたエステルとプリネはそれぞれ、自分のパートナーとなつた少女に渡した。

「はい。わかつてるのは思うけど、普通の人向けたらダメだからね?」

「普通の人?先生を襲つた人みたいな悪い人だつたらどうするの?」

エステルの言葉にミントは首を傾げて尋ねた。

「そういう時は遠慮なく抜いて戦つていいわ！」

「わかった！ ありがとう、ママ！」

「エステルさんが言つてるように、魔獣や賊には抜いてもいいですが、決して民に剣を抜いて向けたりしてはいけませんよ？」

「はい、ご主人様。」

その後エステル達はヨシュア達と合流し、ホテルに戻つて一夜を明かした……

第87話（後書き）

と言つてミントのバトルスタイルはほぼ原作通り、ツーヤはオリジナルバトルスタイルです。後2話でルーアン編は終了し、ツァイス編に移ります。ツァイス編はFC最後の新クロスオーバーキャラが出るので楽しみにしていて下さい。ちなみに神採りから出演します……感想お待ちしております。

翌日エステル達は待ち合わせの場所であるラングランド大橋でクロゼを待っていた。

（ルーアン市内・ラングランド大橋）

「……やっぱりまだ来てないみたいね。早く来すぎちゃったかな？」

「そうだね、酒場で時間を潰そうか？」

「ううん、風も気持ちいいし、ここで待つことにしますよ。川の流れを見ているだけでも、なんか飽きない気がするし。」

ヨシュアの提案をエステルは首を振つて答えて、橋の手すりに手をかけて川の流れを見た。

「しかし、ルーアンもようやく落ち着きを取り戻した感じよね。ダルモア市長が逮捕されて一時は大騒ぎになつたけど……」

「現職の市長の逮捕なんて前代未聞の出来事だからね。ロレントでいえばクラウス市長が捕まつたのと同じことなわけだし。」

「うわ、それは確かにショックすぎるかも……。でも、そう考えてみるとルーアン市の人々は冷静よね。驚いてはいたみたいだけどショックは受けてないみたい。」

「まあ、ルーアン市は伝統的にダルモア家の当主が選ばれていたみたいだから。市長本人を慕つていたわけじゃなかつたのかもしれないね。」

「……民の幸せを考えず何の努力もせず、血筋のみで権力者になる者等ろくな奴はおらんからな。」

ヨシュアの言葉に頷くようにリフィアは意見を言った。

「次期皇帝のリフィアが言うと重みがあるわね……やっぱり、リフィアも皇帝になる努力とかしたの？」

リフィアの意見を聞いたエステルは感心した後尋ねた。

「当然だ。幼い頃より帝王学や護身術、他には戦術や兵達の指揮の仕方等を余は学び、それらを自分の知識とした。」

「凄いね……プリネもそなのかい？」

幼少の頃から皇帝として努力しているリフィアに驚いたヨシュアはプリネに尋ねた。

「ええ。私もリフィアお姉様と同じように王が必要とする知識は一通り学んで、自分の知識としました。私だけに限らず他の腹違いのお兄様やお姉様達はみんな同じ教育を受けています。ただ、リフィアお姉様は他の方達と違つて皇帝になりますから、私達以上の教育を受けたと聞いています。」

「ふえ？……あれ？ってことはティアさんもそうなの！？」

「そうですね。ティアお姉様も大体は学んでいますが、戦闘についての知識は一切学んでいません。」

「なんで？」

「ティアお姉様の生みの親であるティナ様の意向だそうです。イーリュンの信徒であったティナ様は自分の娘に人を傷つける術を知つてほしくなかつたのでお父様に嘆願して、ティアお姉様には最低限の護身以外教えないようにしてもらつていたんです。」

「そうなんだ……ねえ、リフィア、プリネ。」

「ん？」

「どうかしましたか？」

エスティルは、ダルモアが市民にあまり慕われていなかつた事である事が気になり、リフィア達に尋ねた。

「プリネのお父さん……リウイつて人はみんなに慕わっていたの？」

「お父様ですか？ええ、とても慕われていたと聞きます。」

「慕われていた？まるで過去の言い方だけど今はどうなんだい？」

プリネの答えにヨシュアは首を傾げた尋ねた。そしてヨシュアの答えにリフィアが答えた。

「父 シルヴァンに帝位を譲つた後リウイは表舞台から姿を消し、

それ以降民は今の皇帝は父であると認識し、リウイの事は民の間では過去にいた伝説上の王となつてゐるからだ。」

「伝説つて……あのリウイつて人、本当に凄い王様だつたんだ……」

「ちなみにお父様と結ばれた側室の方々も後に伝説化し、メンフィル国内の歴史で語られている有名な方達ばかりですよ。……ティアお姉様は母親であるティナ様があまり有名ではないとおっしゃいますが、そんな事はありません。ティア様は『慈愛聖女』と称されるほど、民達からとても慕われていました。またティア様はそれとは別に違つた意味で民達からとても慕われていました。」

「それは何なんだい？」

プリネの説明の先が気になつたヨシュアは先を促した。

「それはティナ様が『人々』『平民』であった事です。他の側室の方々は王族、神格者等民からすれば遠い存在でしたがティナ様だけは生粋の平民です。ですから民も自分達と同じ立場であったティナ様の事を身近に感じ、とても慕つていたそうです。それにティナ様自身、王都内でイーリュンの信徒として民によく接し、民の悩み等を聞いていましたからその事もありましたね。」

「ふえ……つくづくメンフィルの人達つて凄いわね。」

「うむ！余はそんなリウイ達を尊敬しているのじや！」

「はは……さすがはリフィアだね。普通それだけ凄い人が家族にいたら重荷になると思うんだけど、2人とも全然そんな風に見えないね。」

自身満々にリウイ達の事を自慢するリフィアにヨシュアは苦笑して呟いた。

「リウイ達が重荷？余は一度もそんな事を思つた事がないな。余にとつてリウイは目指すべき”王”だ。」

「私にとつてもそうです。私もいつかはお父様達のような人になりたいと思つていますから。」

「2人とも凄いわね……それに比べてあたしの父さんときたら…

……はあ、父さんもプリネ達のお父さん達を見習つてほしいものだわ。

（そんな事を言えるのは父さんの事を知らない君だけだよ……まあ、エスティルらしいといえばエスティルらしいかな。そういう點で言えばエスティルはリフィア達と似ているな……）

カシウスの功績も知らず溜息をついているエスティルを見て、ヨシュアは苦笑した。

「ふわあ～……プリネさん達つてお姫様だつたんだー凄いね、ツーヤちゃん！」

「うん。あたしも最初、その事を聞いてとても驚いたよ。」

一方リフィア達の身分を知つたミントは驚き、プリネのパートナーとなつたツーヤと話した。

（ねえ、リフィア。）

（ん？ ビうした、エヴリーヌ。）

（あのツーヤつて竜、お兄ちやん達の所に帰つたらビうかるの？）

（ふむ、それはどういう意味だ？）

小声で話しかけられたエヴリーヌの疑問の意味がわからず、リフィアは首を傾げて尋ねた。

（立場。プリネの傍にいるのならそれなりの立場がいると思つけど。）

（ああ、その事か。まあしばらくは侍女見習い、淑女、他には戦い方を教育した後、周囲が認める強さを持ち、然るべき時がくればリウイの側室の名前で現在誰も襲名していない名をやり、プリネ専属の侍女か騎士にする事をリウイや父に提案するつもりだ。）

（ふ～ん。リフィアもあの竜の事、考えてあげているんだね。）

（当然だ！大事な妹を護る者になるのだから、姉としては重用してやらないとな。）

（それで？どんな名前にするの？）

（……現在誰も名乗つていない名は父が帝位を継いだ事によつて誰も名乗らなくなつたルーハンス。現ミレティア領主に嫁いだため誰

も名乗らなくなつたルクセンベール。どちらがいいかの……？

その時、橋の上から聞き覚えのある鳥の声が聞こえた。

「ピューイー！」

「あ、ジーク！」

ジークは橋の上空から降りて来て橋の手すりに留まつた。さらに続くようにクローゼがエステル達の元に走つて来た。

「みなさん！」

さらに続くようにクローゼがエステル達の元に走つて來た。

「はあはあ……。」めんなさい、遅れてしまつて。」

エステル達の元に來たクローゼは息を切らせていた。

「いや、僕たちもちょうど來たところだよ。」

「も、もしかしてわざわざ走つて來たの？そんなに慌てることないのに。」

「いえ、お見送りをするのに遅れるわけにはいきませんから。教えてくれてどうもありがとうございました。」

「も～、クローゼつてば。お礼を言うのはこいつちだよ。ジークも…

…見送りに来てくれてありがと」

「ピューイー」

「はは、それじゃあ……わざわざ出発するとしようつか？」

「オッケー！」

「「「はー。」「」」

「うむ…」

「ん。」

「はーい！」

そしてエステル達はクローゼと共にルーラン市を出発した……

第88話（後書き）

感想お待ちしております。

クローゼと共にルーアンとツァイスを結ぶ関所、『エア＝レッテン』から始まる街道、『カルデア隧道』前まで来た。

「エア＝レッテン」

「……あれがカルデア隧道の入口だね。」
ツァイスへと続くトンネル道 カルデア隧道の入口を見て、ヨシユアは呟いた。

「うん……。…………そろそろお別れね。」

エステルは名残惜しそうな表情でクローゼを見た。

「はい……。あのエステルさんたちはこのまま王国を一周するんですね？ひょっとしたら王都でもまあお会いできるかもしません。」「え、そうなの！？」

「本当！？」

クローゼの言葉にエステルとミントは名残惜しそうだった表情を輝かせた。

「私、女王生誕祭の頃には王都に戻るつもりなんです。親戚の集まりのようなものに出席しなくてはならないので……」

「女王生誕祭というとたしか一ヶ月くらい先だね。確かに、その頃には王都に行つてるかもしないな。」

クローゼの答えにヨシユアは少しの間、考えた後頷いて言った。

「あ、じゃあ……。親戚の用事が終わったら王都のギルドに連絡してよ？そうすれば会えると思うから。」

「はい、必ず連絡しますね。エステルさん、ヨシユアさん、プリネさん、リフィアさん、エヴリースさん。本当に、ありがとうございます。みなさんがしてくださいましたこと、私、絶対に忘れませんか

「う……」

「や、やだな。水くさいってば～！」

「ひづらこそ、貴重な経験をさせていただいて本当にありがとうございました。」

「つむ。お主のおかげで妹の晴れ舞台を見れたしな。なあ、エヴリーヌ。」

「ん。エヴリーヌもお礼を言つておくね。……プリネの夢を適えさせてくれて、ありがと。」

「僕たちも西には色々と世話になつたしね。おあこつて事にしようよ。」

クローゼの感謝の言葉にエステルは照れ、プリネやリフィア、エヴリーヌは逆に感謝をし、ミシュアはプリネの言葉に続くように頷いた。

「とんでもありません。…………。あの時……市長と対決した時……。私は偉そうなことを言いました。『立場に囚われている』、『自分の身が可愛いだけ』って。でも……それは私も同じだつたんです。」

「えつ……？」

エステル達の感謝に謙遜しながら言つたクローゼの言葉にエステルは呆けた。

「私は逆に、自分の立場から逃げようとはかりしていました。孤児院にしても学園にしてもどこか逃げ場にしていました。でも……そんな私にエステルさんたちは教えてくれました。どんな時でも前向きに進んでいく決意を……。大切なものを守る強さを……。ありがとう、おかげで私も少しだけ勇気が出せそうです。」

「よ、よく判らないけど……。お役に立てたんだつたらあたしとしても嬉しいかな。」

クローゼの答えにエステルは首を傾げながら答えた後、クローゼの手を握った。

「あ……」

「えへへ……元氣でね、クローゼ。今度は王都で会こましょー」「はい……必ず。……ミントちゃん、ツーヤちゃん。元氣でね。

「はい。クローゼさんもお元氣で。」

「うんー!クローゼさんとまた会えるのか……ミント、王都に行く日が楽しみ!」

「ピュイピュイ。」

「あは、ジークも一緒に王都で会えるといいわね?」

「ピュイ

エステルの言葉に応えるようにジークは鳴いた。

「……って、あんた。本当に王都に来るつもり?」このあたりに住んでるんじゃないの?」

「ピューイ?」

エステルの疑問にジークは首を傾げた。

「ふふ、ジークは特別ですから。きっと会えると思こますよ。」

「うーん……。冗談で言つたんだけど。」

「はは、ジークには最後まで驚かされっぱなしだね。それじゃあ…

…そろそろ行くとしようか?」

ヨシュアは苦笑しながら、エステル達を促した。

「ん……そうね。」

「エステルさん、ヨシュアさん。修行の旅、頑張つてください。それから、お父様の行方が判ることをお祈りしています。」

「ピューイ」

「うん……ありがとー。」

「君たちも元氣で!」

「リフィアさん、プリネさん、エヴリースさん……本当にお世話になりました。いつか、本当の姿で会こましょー。」

「うむ。クローゼも息災でな。」

「また会ひ日を楽しみにしています。」

「ばーばー。」

「「やょうなら、クローゼさんー。」」

そしてエステル達はクローゼに見送られてルー・アン地方から去った。

「…………」

クローゼは去つて行くエステル達の背中を見えなくなるまで、名残惜しそうな表情で見送つた。

「ピュイ。」

「うん、そうね……。また会えるよね。」

ジークの鳴声にクローゼは頷いた。その時クローゼの背後から女性の声がクローゼを呼んだ。

「…………クローゼ。お待たせしました。」

「…………ゴリアさん。レイストン要塞から戻つたのですね？」

「ええ、予想以上に時間を取られてしましました。失礼ながら、その件に関してご報告をしようと参上した次第です。」

「ありがとうございました。」「苦労様でした。」

声の主　ゴリアを見るどジークは嬉しそうにゴリアの周りを飛んだ。

「「「」、こら、ジーク。じゃれつくんじゃない。お前、護衛の使命はちゃんと果たしているのだろうな？」

ある程度飛んで満足したジークは戸惑った顔をしているゴリアの肩に止まつた。

「ピュイピュイ。」

「うふふ、ジークにはいつも世話になつています。ね、ジーク？」

「ピュイ」

「まったく調子のいいヤツだ。」

ジークの様子に溜息をついたゴリアは姿勢を正し、クローゼに向き直つた。

「…………街道外れに『アルセイゴ』を停めています。報告の方はそちらで……」

「わかりました。……学園生活もしばらくお休みですね。王都に戻

る前に先生たちに挨拶しなくては……」

ユリアの言葉にクローゼは顔を暗くして元気なく答えた。そしてエステル達が去ったカルデア隧道を見た。

「（エステルさん、ヨシュアさん。おふたりに負けないよう……私は一杯頑張りますね。）」

暗かった表情を決意の表情に変えたクローゼはユリアとジークと共にその場を去つた……

第89話（後書き）

これにてローン編終了です！明日はエステル、ミント、ツーヤの
ステータスを出します。……感想お待ちしております。

設定4

<闇王の戦友> エステル・ブライト

レベル、パラメーター、オーブメントは原作通り。ただし、CPは470、ATS、ADFは原作の2倍

クラフト（原作以外）

パズモ召喚 30 自分 サポートキャラ、パズモ（HPは主の半分）を戦闘に参加させる（防護の光盾（味方単体DEF& ; ADF 20%上昇）or 戦意の祝福（味方全体SPD 15%上昇）or 光霞（敵全体空属性130%攻撃）、たまに贖罪の光霞（400%攻撃））ただし召喚した主は召喚している間、最大HP 5%、CPが10下がる、任意でパズモを自分の元に戻せる。

黒の衝撃 50 中型直線 贊通する暗黒魔術、80%時属性攻撃 & ; 後退効果（威力はATSに反映）

旋刃 40 小円・地点指定 風の魔術 70%風属性攻撃（威力はATSに反映）

闇の息吹？ 40 単体 ペテレーネの指導の元、安定した回復力を持つようになった魔術。味方一人のHPを15%回復する。

サエラブ召喚 40 自分 サポートキャラ、サエラブ（HPは主の9割）を戦闘に参加させる。（物理単体攻撃 or 連続火弾（火属性2回魔術攻撃& ; 火傷10%）or 炎狐強襲（火属性物理全体攻撃120%& ; 火傷20%）or 拡散咆哮（敵全体200%攻撃& ; 遅延、後退効果）、1回の出番で2回連續で行動する。ただし召喚した主は召喚している間、最大HP 15%、CPが30下がる、任意でサエラブを自分の元に戻せる。

火弾 20 単体 火の魔術、90%火属性攻撃& ; 火傷1

0%（威力はATSに反映）

テトリ召喚 35 パーティーキャラ、テトリを召喚する。ただし召喚した主は召喚している間、最大HP、CPが10%下がる、任意でテトリを自分の元に戻せる。

地脈の吸收 50 単体 地の魔術、70%地属性攻撃&；与えたダメージの30%吸收（威力はATSに反映）

Sクラフト

雷波無双撃 単体 自ら編み出した魔棒技、威力はATK、ATS両方を合わせ、さらに烈波無双撃の1.5倍、封技50%。ただし、CPが200からないと使えない。MAX威力になるCPは400、任意で烈波無双撃か選べる。

コンビクラフト

太極嵐双剣 200 中円 リウイと共に猛烈な連撃を敵に叩きこむ。威力は原作、『零の軌跡』のコンビクラフト、太極無双撃の3倍&封技100%。使用条件、リウイがバトルメンバーにいるかつ双方のCPが200あること。また、棒装備時は技の名は”太極嵐双撃”になる。

<幼竜> ミント（属性・幼竜……物理を除いた全属性の攻撃を5%軽減する。）

LV15	HP650	CP250	ATK130
------	-------	-------	--------

D E F 8 0
A T S 1 0 0
A D F 6 0
S P D 1 4
M O V 4

装備

武器 グラディウス
防具 マジッククロース
靴 ダブルスパイク
アクセサリー フェザーブローチ（気絶無効）
リリーネックレス（混乱無効）

オープメント（無属性）並びはエステル、ロイドです。

バトルメンバーにエステルがいるとミント、エステルのA T K & a
m p ; S P D 5 % 上昇

クラフト

応援 1 0 単体 しばらくの間、自分以外の味方単体のA T Kを
1 5 % 上昇 & C P 2 0 回復。 A T K 上昇は2回まで重ねら
れる。

ピアスドライブ 2 0 単体 真っ直ぐ行く突進攻撃。 駆動 &
m p ; アーツ妨害
ファイアショート 4 0 単体 拳ぐらいの大きさの炎が山なり
に目標に向かつて飛んで行く火属性の竜魔法。 6 0 % 火属性攻撃 &
a m p ; 火傷 1 0 % （威力はA T Sに反映）
アッパー ファンギ 3 0 単体 目標を一度攻撃した後さらに斬り

上げる2回攻撃。

アイスニードル 40 単体 敵の足元から氷を出す水属性の竜魔法。60%水属性攻撃& ;凍結10%（威力はATSに反映）
ストーンフォール 50 小円 敵の頭上に複数の岩を落として、ダメージを与える土属性の竜魔法。（威力はATSに反映）
バーストショット 25 単体 魔力が籠った蹴りで敵を蹴り飛ばす。後退& ;気絶10%攻撃。

サンダーボルト 40 直線 範囲内の敵の頭上に雷を落とす風属性の竜魔法。60%風属性攻撃& ;麻痺10%（威力はAT Sに反映）

Sクラフト

ソードファング 単体 目標を何度も斬りつける攻撃。威力は300%。

<幼水竜> ツーヤ（属性・幼水竜……水属性の攻撃を30%軽減する。）

LV15

HP600

CP300

ATK100

DEF70

ATS120

ADF90

SPD13

MOV4

装備

武器	脇差	虎徹（クリティカル10%）& 鱗の籠手
防具	マジッククロース	
靴	ダブルスパイク	
アクセサリー	パールイヤリング（封技無効）	
	ブラックバングル（睡眠無効）	

オープメント（水属性）並びはリースです。

バトルメンバーにプリネがいると、プリネ、ツーヤのATK& am p;ATS5%上昇

クラフト

溜め突き 20 単体 力を溜めて突きで攻撃する。駆動& am p;

アーツ妨害攻撃

Sアイスニードル 30 単体 敵の足元から氷を出す水属性の水竜魔法。80%水属性攻撃& am p;凍結15%（威力はATSに反映）

飛翔剣舞 30 単体 踊るように攻撃する。2回攻撃。

ヒールウォーター 50 単体 水の力で味方の傷を回復させる水竜魔法。HP25%回復。

キュアウォーター 40 単体 水の力で味方の状態異常の一部を回復させる水竜魔法。毒、麻痺、混乱回復。

延髓碎き 30 単体 敵の弱点を見極め攻撃する竜技。80%攻撃& am p;封技15%

円舞 50 特殊 自らを中心とした小円攻撃の剣技。

ラファガブリザード 60 特殊 自らを中心とした中円攻撃の竜魔法。120%水属性攻撃& am p;凍結20%（威力はATS

に反映)

十六夜”斬”? 40 特殊 未完成の剣技、目標と隣り合つている敵がいた場合、それらにもダメージを与える真横に斬る剣技。威力130%

Sクラフト

ダイヤモンドバーグ 単体 目標を氷の中に閉じ込めて滅多斬りにする技。威力は300%

設定4（後書き）

ツーヤのクラフトに関してですが、なんでそんなガキがあの3人の技が使えんだつ！？という文句はできればやめて下さい……ただ単に使わせたかったのです。ミントにもいくらかオリジナル技を持たせました。ミントのSクラフトは原作でもあるんですがシリーズ違いの技にしました。幼少から原作の最強系を使わす訳にもいきませんし……感想お待ちしております。

第90話（前書き）

いよいよソース編開始＆原作のあのキャラが登場しますー！

ツアイスへと続くトンネル道、カルデア隧道は暗さのせいもあり、オープメントの魔獸避けの灯で道を照らされていても道にはそこそこの数の魔獸がいて、エステル達を見つけると襲つて来た。これまでの旅で強くなつたエステルとヨシュア、歴戦の強さのリフィア達、見た目が幼いながらも竜のミントやツーヤにとつて苦戦する敵ではなかつた。

「カルデア隧道」

「はつ！」

「せいつ！」

魔獸の攻撃範囲外からエステルが棒で攻撃するとタイミングよくヨシュアが一瞬で魔獸に近付き、追撃をかけて次々と魔獸を倒し

「……ゆけい！」

「キヤハッ！」

リフィアとエヴリースは戦つている場所がトンネル道であるため、辺りに衝撃を与えるかねない強力な魔術を抑えて、下級魔術　追尾弾や弓技　精密射撃で一撃で魔獸を次々と葬り

「ふつ、はつ、セイ！……ハウ！」

プリネは魔獸達を皇技　フェヒティングやフェヒンバルで次々と華麗に倒していった。一方心配であつたミントとツーヤは予想以上に戦えてた。

「たあつ！」

「ハアッ！」

ミントが魔獸に剣で斬りつけ、ツーヤが刀で魔獸の手足の一部を斬つた所を

「やあつ！」

ミントが突きで突進するクラフト ピアスドライブで止めをさした。攻撃した後硬直していたミントに近くにいたを魔獸が襲つたが

「貫け！……アイスニードル！」

ツーヤが放つた魔法によつてミントを襲おうとした魔獸は足元から突然出て来た氷によつて貫かれ、致命傷を負つたところをミントがクラフト使つた。

「あつち行けえつー！」

身体を回転させた勢いの片足に魔力を纏わせて目標に傷を負わせると同時に吹つ飛ばすクラフト バーストショットによつて蹴り飛ばされた魔獸は壁に当たつた所を

「そこじつ！」

ツーヤは突きの構えで力を溜めて放つたクラフト 溜め突きで魔獸に止めを刺した。

「フウ。油断は禁物だよ、ミントちゃん。」

「えへへ……ありがとう、ツーヤちゃん！」

辺りの魔獸を倒し終えて安堵の溜息をついているツーヤにミントは笑顔でお礼を言つた。

「ふえ～。2人とも初めての戦いの割には結構戦えるわね……魔術まで使うとは思わなかつたわ……」

「そうだね。息もピッタリだつたし。」

戦闘が終わりミント達の戦いを横目で見ていたエステルは驚き、ヨシュアは2人のコンビネーションに感心していた。

「えへへ、だつてミントとツーヤちゃんは会つてからずっとといつしょにいる友達だもん！だからパパとママみたいに仲良くなれるんだ

！」

「え。」

「へーっちょっと待つて……ママはあたしの事だからいいとして、パパつてもしかして……ヨシュア？」

ミントの言葉にヨシュアは驚き、エステルは驚いた後尋ねた。

「違うの？パパの名前、ママと同じだからパパだと思つたんだけど……」

エステルの様子が不思議に思い、ミントは首を傾げながら答えた。
「ち・が・う・わ・よー。ヨシュアはあたしの弟！第一、あたしはまだ結婚なんてしてないわ！」

「そうなの？」

「ハハ……エステルの言つ通りだよ、ミント。」

「第一その……弟と結婚なんてできる訳ないでしょ。」

「何を言つておる。兄妹同士でも結婚できるで？。」

「へ？」

リフィアの言葉にエステルは目を丸くした。

「忘れたのか？余の両親は元々腹違いの兄妹の関係だったのだぞ。
加えてエステルさんとヨシュアさんは血が繋がった姉弟ではない
んですね？でしたら普通に結婚できると思いますが、……」

「…………」

「エステル？どうしたんだい、顔を俯かせて。」

「ママ、風邪をひいたの？顔が真っ赤だよ？」

リフィアやプリネに正論を言われ、ヨシュアと結婚した風景をつい
思い浮かべてしまつたエステルは顔を真っ赤にさせて俯き、ヨシュ
アはその様子を不思議に思い声をかけ、ミントはエステルに近寄つ
て顔が真っ赤になつてゐるエステルの顔を見て首を傾げた。

「な、なんでもないわよーそれよりこの話はお終い！ヨシュアはあ
たしのそのこ、恋人とかじゃなくて弟だからね！だからミント、パ
パとかいっちゃんダメよ！みんなに勘違ひされるんだからー！」

「うん。」

無理やり話を終わらせたエステルにミントは首を傾げながら頷いた。

「…………」
(ヨシュアさん、何だか辛そうにしていませんか、ご主人様。)
(そうね…………まさか。)

エステルの言葉を聞いて、どこか哀愁が漂つてゐるよみえるヨシュアを見てツーヤはプリネに囁き、囁かれたプリネはヨシュアの様子を見て感づいた。

（どうしてヨシュアさんが辛そうにしているかわかつたんですか、ご主人様。）

（ええ。……フフ、でも今のあなたにはまだちょっと早いかもしないわね。）

（よくわからないのですが……）

（その内あなたにもわかる時が来るわ……だから今はそつとしておきましょ。）

（？はい。）

微笑みながら答えたプリネの言葉にツーヤは首を傾げながら頷いた。（フム……あの2人の結婚式に参加した際の祝いの言葉を今から考える必要があるな……）

（うわー……リフィアの頭の中ではエステルとヨシュアが一緒になる事が決定してる……エヴリース、知りらないっと。）

一方早とちりしたリフィアは2人が未来には夫婦になると思い、小声で独り言を呴き、それが聞こえたエヴリースは面倒事を避けるために知らないフリをした。

「（ハア……全部、聞こえてるよ……）それよりそろそろ行こうか。昼ごろにはツアイスに着きたいし。」

プリネ達の小声の会話や独り言が聞こえていたヨシュアは心の中で溜息をつき、気を取り直してエステル達に言った。

「そうね。じゃあ、行きましょうか。」

そしてエステル達はツアイスに向かつて足を進めた。しばらく歩くとツアイス方面から走つて來る足音と声がした。

「はあはあ……。い、急がなくつけや……」

「あれ……？」

「……誰か来るみたいだね」

聞き覚えのない声が道の先から聞こえたエステル達は足を止めた。すると赤を基調とした作業着を着たミントやツーヤぐらいの体が小さい少女が走つて現れた。

「あ……」

少女はエステル達を見ると、立ち止まつた。

「やあ、こんにちは」

「どうしたの、そんなに急いで？」

「あ、はい、こんにちは。あの、お姉さんたち、この道を通つてきたんですか？」

ヨシュアやエステルに話しかけられた少女は礼儀正しく答えた後、尋ねた。

「うん、そうだけど？」

「あのあの、だつたら途中に消えた照明を見ませんでした？トンネルの壁についている照明のことなんですけど……」

「む～……」「めん。ちょっと気付かなかつたか。」

少女に尋ねられたエステルはすまなさそうな表情で答えた。
「消えた照明はなかつたけど、川を2つ越えたところで調子が悪そ
うなのは見かけたよ。」

「それですっ！や、やつぱり思つたとおりだよ～……。すみません
つ。わたし急がなくつちゃ！」

ヨシュアの答えを聞いた少女は慌ただしくルーアン方面に向かつて走つて行つた。

「ツァイスの女の子かな。変わつた格好をしてたね。ずいぶん慌て
ていたけど……」

「うーん。なんか気になるわね～。ね、ヨシュア。ちょっと追いか
けてみない？」

「そう言つと思つたよ。たしかに女の子を一人で行かせるのは危険
そつだからね。付いていった方が良さそうだ。」

「そうね……ミントやツーヤは事情が特殊だし、実際戦えるからい
いとして……あの子、どう見ても普通の女の子に見えたし心配だわ。」

「決まりですね。では、急ぎましょう。子供の足とせいで、油断はできません。」
「つむ！」
「ん。」
「はーい！」
「わかりました。」

そしてエスティル達は来た道を引き返して急いで女の子の後を追つた

.....

第90話（後書き）

みなさんお分かりであろう、原作の幼女登場です。後、ちょっと残念なお知らせです。今月発売のテイルズ、碧をプレイするのでそれらを終えるまでは更新はほとんどないです。現在、エルモ村のあたりまでは書けてますから、温泉のシーンと新クロスオーバーキャラが出る話は出せます。多分、来週あたりで更新はストップします。
……感想お待ちしております。

女の子を追つて急いで道を引き返したエステル達はしばらく戻ると
女の子を発見した。

「カルデア隧道」

「はうう～」

そこには女の子に気付かず消えかかっている照明に魔獣が群がっていた。女の子はその様子を見て、思わず声をあげた。

「も、もひこんなに集まつて来ちゃうなんて……。このままじゃ壊されちゃう……。い、いうなつたら……」

女の子はどこからともなく、ややサイズが小さい導力砲を取り出して魔獣に向けた。

「方向ヨシ、仰角20度……。導力充填率30%……。いっけええつ！」

魔獣の群れは野生の危機感で女の子が撃つた導力砲の砲弾を避けた。「そ、それ以上近づいたら今度は当てちゃうんだから！ほ、本当に、本気なんだから！」

女の子は導力砲を魔獣に向けて精一杯強がつたが、魔獣達は獲物を女の子に変えてじりじりと詰め寄つて来た。

「あう……。ぎや、逆効果だつたかも……」

詰め寄つて来る魔獣の群れを見て女の子は後ずさつた。そして群れの中の一匹の魔獣が女の子に襲いかかろうとした時

「てりやあああっ！」

エステルが飛び込んで棒で棒で女の子に襲いかかつた魔獣を吹っ飛ばした。そして続くようにヨシュアやプリネ達が女の子を守るような位置で武器を構えた。

「え……。あ、さっきの……！」

女の子はエステル達を見て驚いた。

「話はあとあと！いいから下がつてて！」

「とりあえずこいつらを追つ払つからね！」

「余に任せがよい！」

そしてエステル達は魔獣の群れと戦闘を開始した！

「ハアアア……！旋風輪！！」

「そこだ……！絶影！！」

エステルが棒で魔獣の群れを一気にダメージを与えるとヨシュアがすかさず止めを刺し

「とうつ！」

「出でよ、ソロモンの魔槍！……死愛の魔槍！！」

「暗黒の槍よ！……狂気の槍！！」

「落つちろ～！……サンダーボルト！！」

「貫け！……アイスニードル！！」

エヴリーヌは弓矢で、リフィアやプリネは暗黒魔術の槍で、ミントやツーヤは自分達しかできない独特の魔法でエステルやヨシュアの攻撃を受けてない魔獣達を仕留めたり、重傷を負わせた所を

「風よ、切り裂け……旋刃！！」

エステルの風の魔術によって残った敵を殲滅した。

「」「こわかつた～つ……。あのあの……ありがとうございます。おかげで助かりました。」

魔獣達が倒されて安心した女の子はエステル達にお礼を言った。

「あはは。無事で何よりだつたわね。でも……ちょっと感心しないわよ？魔獣を挑発するなんて危ないことしちゃダメじやない。」「あ、でもでも……。放つておいたら照明が壊されちゃうと思つて

……
エステルのちょっとした注意に女の子は申し訳なさそうな表情で答えた。

「そりいえば……。どうして、あの魔獸たち、消えた照明に群がっていたのかな？」

「前に街道灯を交換した時にも同じことがあつただろう？ オーブメントの中にある七耀石の回路は魔獸的好物だからね。だから街道灯には、魔獸よけの機能が付いているんだけど……。その機能が切れたら逆に狙われやすいつてわけさ。」

女の子の言葉からある事が気になつたエステルにヨシュアが説明した。

「あ、なーるほど。でも、それにしたつて無茶するにも程があるわよ。大ケガしたら危ないでしょ？」

「エステルの言う通りだ。無茶はほゞほゞにするのが一番だが、やりすぎてしまつと自らの身を滅ぼしてしまつぞ。」

「あう……」「ごめんなさい。」

ヨシュアの説明に納得したエステルだったが、女の子を再度リフィアと共に注意した。注意された女の子はしゅんとした。

「リフィアが無茶するなつて言つても説得できないと思つ。いつも、お兄ちゃん達やエヴリースを巻き込んで無茶をしているの。」「……聞こえておるぞ、エヴリース。余を鉄砲玉扱いするでない！」

「あ、あはは……」

エヴリースの呟きが聞こえたリフィアは怒り、プリネは何も言わず苦笑した。

「まあまあ、そのくらいで。第一、無茶するなど君が言つても説得力ないしね。」

「そこつ、水をささないのつ！ まいいいや……。あたし、エステルつていつの。」

「僕はヨシュア。2人とも、ギルドに所属している遊撃士なんだ。」

「わあ、それであんなに強かつたんだ……。それでそこの方達はどうなたなんでしょうか？」

エステルとヨシュアが遊撃士と知った女の子はミントに負けない可愛らしい笑顔で納得した後、リフィア達を見た。

「余の名はリフィア！しかと覚えておくといい！」

「……わたし、エヴリース。よろしくね。」

「プリネと申します。私達は事情があつてエステルさん達の仕事をお手伝いをさせて頂いているんです。」

「そうなんですか……遊撃士や軍人でもないのに強いんですね。」

「そりゃあそうよ。プリネ達はなんたつて”闇夜の眷属”なんだから…」

「なんで、そこで君が得意げになるんだか……」

「わあ……凄い！話には聞いていたけど”闇夜の眷属”に会ったのは初めてです！えっと……そちらの2人もそうなんですか？」

プリネ達が異世界の人種と知ると女の子はキラキラした顔でプリネ達を見た後、ミントやツーヤを見た。

「えっと、まあそんなもんよ…ミント。」

ミント達の正体をばぐらかしたエステルはミントに自己紹介するよう促した。

「はーい…ミントだよ…みるしくね！」

「……あたしの名前はツーヤ。プリネ様にお仕えしています。」

ミントは元気よく名乗り、ツーヤは静かに名乗り出た。

「あのあの、申し遅れました。わたし、ティータつていいます。ツアイスの中央工房で見習いをさせてもらつてます。」

（ん？ 聞き覚えのある名前だな……）

（お姉様もですか？ 実は私もそうなんです。）

そして最後に女の子 ティータは自己紹介をした。ティータの名前を聞き、リフィアとプリネは聞き覚えのある名前に首を傾げた。

「へー、それでそんな格好をしてるんだ。それじゃあ、ティータちゃん。ツアイスに戻るんだつたらあたしたちと一緒にに行かない？」

「そうだね。また魔獣が出たら大変だし。」

「ほ、ほんとですか？ ありがとうございます。えっと、ちょっとだけ待つてもらつてもいいですか？あの照明を修理しちゃいますか

「う。

エスティルとヨシュアの申し出にむかはれを言つたティータは消えかかっている照明を見て頬んだ。

「あ、たしかにこのまま放つておくのは危なそうだもんね。でも、どうしてここにこのまま放つておくのは危なそうだもんね。でも、

「あ、端末のデータベースを調べていたら偶然見つけて……。手違

いで、整備不良だったものがそのまま設置されたみたいなんです。「なるほど……。早く見つかって良かつたね。

「（端末？でーたベーす？）」

「？」

ティータの説明を聞き、興味がなく聞き流しているエヴリー以外、ヨシュア達は理解をしている様子だつたがエスティルやミント、ツーヤは何の事かわからず首を傾げていた。そしてティータは照明に近付いて作業をした。

「…………んじょつと。」

作業が終わり消えかかっていた照明がハツキリと点灯した。

「はい、これでいいです。お待たせしちゃいました。」

「わあ……ティータちゃんつて凄いんだ！」

「へえ～、凄い。ずいぶん手際良いのねえ。」

「うむ。見事な手際だな。」

「さすが、あの中央工房で見習いをしてるだけはあるね。」

「えへへ……。大したことはしてないです。クオーツの接続不良を直して導力圧を調整しただけですから。」

エスティル達に褒められたティータは照れながら説明した。

「????なんか充分、大した事のようにな聞こえちゃうんですけど……」

ティータの説明にエスティルは不思議そうな顔で尋ねた。

「そんなことないですよ。えですね。わかりやすく説明すると……オープメントの内部にはクオーツって言う結晶回路がはまつて

いるんですけど、それがきちんとコート部に接続されないと、生成された導力が行き場を失つてしまつて、結果的に想定された当初の機能が発揮できなくなつてしまふんです。それが街灯の場合は光と魔獣除けの…………

「ス、ストップ！」

詳細な説明をどんどん語るティーラの説明に耐えきれず、エスティルはティーラを制した。

「せ、説明はまたにしてそろそろ出発したいかな。うん。こんな所で立ち話もなんだし。」

「あ、それもそーですね。ちょっと残念ですけど……」

「（ホッ…………）」

説明を一端止めたティーラを見てエスティルは安堵の息を吐いた。

「はは、それじゃあ改めてツァイスに向かうとしようか。」

エスティルの様子を見て、ヨシュアは苦笑しながら全員に先に進もう促した。

「オッケー！」

「はいっ！」

「ええ。」

「うむ。」

「ん。」

「はーい！」

「はい。」

「はい。」

そしてエスティル達はティーラを護衛しながらツァイスに向かつた……

第91話（後書き）

明日はいよいよテイルズ発売ですね……感想お待ちしております。

ツァイスに到着後、エステル達は初めて見るツァイスの変わった風景や設備を珍しがつたり戸惑つたが一端、ギルドに行くため、ティータと別れて、ギルドに向かつた。

（遊撃士協会・ツァイス支部）

「「「こんにちは～！」」

「「「失礼します。」「」」

「失礼するぞ。」

「こんにちは。」

ギルドに入るとエステルとミントは本当の親娘のように2人揃つて元気よく挨拶をし、ヨシュアやプリネ、ツーヤは静かに挨拶をし、リフィアは興味深そうにギルド内を見ながら挨拶をし、エヴリーヌは普通に挨拶をした。ギルドの受付には東方風の衣装を着た女性が瞑想をしていた。

「…………」「…………

「あの～、あたしたち、」

瞑想している女性にエステル達は近付いて、エステルが声をかけると女性は目を開き、口を開いた。

「…………ようやくの「到着ね。エステル、ヨシュア、リフィア姫殿下、プリネ姫、エヴリーヌ。ツァイス支部へようこそ。」

「へつ……」

「僕たちをご存知なんですか？」

エステル達の事をすでにわかっている風に語った女性にエステルは驚き、ヨシュアは尋ねた。

「ルーアン支部のジャンからすでに連絡は受けていたから。栗色のツインテールに黒髪と琥珀の瞳、2つの房が着いている変わった帽

子と紅い瞳に腰までとどけている赤髪と紅い瞳、銀色のツインテールに薄緑の瞳……。まさにあなたたちのことね。」

「な、なるほど……」

次々とエステル達の特徴を言つた女性にエステルは圧倒されたかのようになりかけた。

「私の名前は、キリカ。ツァイス支部を任せられている。以後、お見知りおきを。」

「あ、はい、こちらこそ。」

「よろしくお願いします。」

「うむ、よろしくな。」

「よろしく。」

「さつそくだけど、所属変更の手続をしてもらつわ。これから書類にサインして。」

受付の女性 キリカはエステルとヨシュアに転属手続きの書類を渡した。

「うん、わかったわ。」

「……いいわ。これであなたたちもツァイス支部所属になつたけど……。今のところ、すぐにやつて欲しい急ぎの仕事は入つてないの。掲示板をチエックしながら自分たちのペースで働くことね。後、一つ聞きたいのだけどいいかしら?」

エステルとヨシュアのサインを確認したキリカはエステル達に尋ねた。

「うん、何かな?」

「そちらの金髪の女の子と黒髪の女の子はどういつた経緯であなた達といつしょにいるの?武装している所を見るとただの市民ではないようだけど……それにその子達、恐らく人間ではないわね?」

キリカはミントとツーヤの容姿や2人が装備している剣や刀を見て、エステル達に尋ねた。

「あ、そうね。実は……」

エステル達はキリカにミント達の事情を話した。

「……そう。それでその子達も戦力として常に連れて歩くつもりかしら？」

「うーん……本当はこんな小さい時からあんまり危ない事はしてほしくないんだけど、ギルドの人達にミント達の面倒を見て貰う訳にもいかないし、かと言つて行く先々の街でいきなりこの子を預けられるような信用のある人はいる訳がないし、何よりこの子の親として寂しい思いはさせたくないのが一番の理由なんだけど……やっぱダメかな？」

「ママ……」

「フフ、エステルさんつたらもうすっかり、ミントちゃんの本当のお母さんみたいになつていますよ？」

氣不味そうな表情でキリカに説明したエステルにミントは感動し、プリネは微笑んだ。

「うつ……いいじゃない！ミントにとつてあたしが母親である事は間違いないんだから。……それでどうかな、キリカさん？」

「一つだけ確認していいかしら。もうその子達は戦わせた事はあるの？」

「うん。カルデア隧道の魔獸達を何体か倒していたけど。」

「少なくとも自分の身は守れる腕でした。無茶はしないと約束させましたから大丈夫だと思います。」

キリカの疑問にエステルは答え、ヨシュアが補足した。

「そう、ならいいわ。その2人はリフィア姫殿下達と同じように協力員として登録しておくわね。」

「いいんですか？」

ミント達がエステル達の仕事を手伝う事を反対もせずあつさり許可したキリカにプリネは驚いて尋ねた。

「協力員は年齢制限がある訳ではないし、本人が希望するのなら拒む訳にもいかないから。戦闘能力もカルデア隧道の魔獸を倒せるぐらいあれば十分よ。」

「そつか。よかつたね、ミント。」

「うん！」

「いつしょにがんばりましようね、ツーヤ。」

「はい、『主人様。』」

「後でその2人の戦術オーブメントも用意しておくわ。ジャンからその2人の事の連絡はなかつた所から考へると、まだ持つていなゐね？」

「はい。……でもいいんですか？ 戦術オーブメントまで用意するなんて。」

戦術オーブメントまで用意してくれる事にヨシュアは驚いて、キリ力に尋ねた。

「ええ。協力員はある程度遊撃士と同じ待遇になるから。それにいくら魔術が使えるといつても、戦術オーブメントがないと戦闘は厳しいでしょ？」

「そうですね……戦術オーブメントには身体能力を高める機能もありますから、あつた方がいいですね。」

キリカの説明にヨシュアは頷いて納得した。

「これって、そんな効果があつたんだ。……そう言えばこれを持つてからいつもより力が出たり、体が軽くなつたの事が不思議に思つたんだけど……」

エヴリースは腰のベルトにつけていたオーブメントを手にとつて不思議そうな顔で呟いた。その様子を見たリフィアは溜息をついた後、尋ねた。

「やれやれ……リウイがお主にそれを渡した時、説明しなかつたか？」

「エヴリース、難しいお話は嫌いだから聞き流していたもん。」

「お、お姉様……せめて自分が身につけている物の効果ぐらいはわかつておいて下さい……」

「あはは……そうだキリカさん、聞きたいことがあるんだけど……」

リフィア達の会話に苦笑したエステルはキリカに尋ねたが

「カシウスさんのことね。」

「ひえっ！？」

「

「それもジャンさんからお聞きになつたんですか？」

エステルの疑問を先読みしたかのように答えたキリカにエステルやヨシュアは驚いた。

「一通りのことはね。残念だけど、カシウスさんはツアイス地方には居ないわね。少なくとも、ここ数ヶ月はこの支部を訪れていない。」

「は～っ、そつかあ……」

「残りは王都か、それとも……」

カシウスの手掛けりが相変わらず摑めない事にエステルとヨシュアは溜息をついた。

「ねえねえ、ママ。」

「どうしたの、ミント？』

「ママのパパとママってどんな人？」

「へ？ 父さんとお母さん…………ん～とね。お母さんは美人で凄つごく優しい人なんだけど、父さんはどこをほつつき歩いているかわからない不良中年よ！ 全くあの不良中年は今頃、何をしているんだが。」

ミントに両親の事を聞かれたエステルは心配する家族に何も連絡してこないカシウスに弱冠怒りを感じつつ説明した。

「ミントちゃん、どうしてエステルさんのお母さん達が気になつたの？」

ツーヤはミントが何故エステルの両親の事を聞いたかわからず、尋ねた。

「だって、ミントにとつてはお祖父ちゃんとお祖母ちゃんだもん。どんな人達が凄く気になるもん。」

「父さんとお母さんがと、年寄り扱い…………もしお母さん達が聞い

たらどうこうの反応をするんだろう……？

「ハハ……父さんは案外喜ぶかもしれないよ。母さんは……ちよつとわからないや。まあ、可愛がるとは思うけど孫娘として扱うか、娘として扱うかはわからないな……」

「うう……ミントとお母さんを会わした時、何を言われるか聞くのがなんだか怖くなつて来たわ……」

ミントの発言にエステルは驚いた後、レナがどうこうの反応をするかわからず怖くなり、ヨシュアは苦笑した。

「それとあなた達に渡す物があるわ。これを持つていきなさい。」

エステル達の会話が終わるのを見計らつたキリカが手紙を渡した。

「え、これって……？」

「中央工房の責任者であるマードック工房長への紹介状。このツアイス地方では市長と同じ立場にいる人ね。」

「ひょっとして……黒いオーブメントの件ですか？」

キリカが工房長への紹介状をエステル達に渡した理由を察したヨシアがキリカに尋ねた。

「市長邸での話を聞く限り、かなり謎めいた代物のようね。まずは工房長に会つて相談してみるといいでしょう。」

「な、なんかメチャメチャ用意いいわね～。キリカさん、超能力者とか？」

「あなた達遊撃士のサポートが私の仕事だから。届けられた情報を判断してしかるべき用意をしただけよ。」

「お、恐れ入りました。」

「助かります、本当に。」

(……プリネ、エヴリーヌ。気付いてあるか?)

(ん。ただの人間じゃないね。)

(ええ、あの方……恐らく達人クラスの強さを持っていますね。) キリカの用意の速さにエステルとヨシュアは驚いた後感謝し、リフィア達はキリカがただ者ではない事を悟つた。

そしてエスティル達は黒いオーブメントを調べてもらつために中央工房へ向かつた……

第92話（後書き）

感想お待ちしております。

その後中央工房に向かつたエステル達は受付嬢に紹介状を見せた後、工房長がいる部屋に向かつた。

～ツアイス市内・中央工房・工房長室～

「やあ、待つっていたよ。エステル君にヨシュア君だね。」

「あ、はい。初めまして、工房長さん。」

「お忙しいところを失礼します。」

工房長 マードックにエステルとヨシュアは会釈をした。

「いやいや。気にしないでくれたまえ。遊撃士協会には……特に力シウスさんにはお世話になつているからね。そのお子さんたちとなれば歓迎しないわけにはいかないぞ。」

「えっ！？工房長さんって父さんの知り合いなの！？」

「知り合いというかカシウスさんは大の恩人だよ。この中央工房は、大陸で最もオーブメント技術が進んでいる場所と言つても過言じゃない。当然、その技術をめぐつて色々とトラブルが絶えなくつてね。どうしても対応に困つた時にはロレント支部に連絡して彼に来ていただいていたんだ。」

「そ、そうだつたんだ……」

「はは、道理でいつも出張が多かつたわけだね。」

カシウスとマードックが知り合いである事にエステルは驚き、マードックの説明を聞いて2人は納得した。

「その恩人のお子さんたちが、わざわざ訪ねてきてくれたんだ。喜んで相談に乗らせてもらうよ」

「えへへ……。ありがとうございます、工房長さん。」

「少しひ話は長くなりますが……」

協力的なマードックにエステル達は黒いオーブメントを手に入れた

経緯を説明した。

「なるほど……。そんなことがあったのか……。そのオーブメントを拝見しても構わないかね？」

「うん、もちろんよ。」

エステルは荷物の中から黒いオーブメントを出してマードックに渡した。マードックはそのオーブメントをしばらく隅々と調べた。

「ううむ……確かに得体の知れない代物だ……。明らかに最近造られた物だが、どこにもキャリバーが刻まれていない……」

「キャリバー？？」

「オーブメントのフレームに刻まれている形式番号ですか？」

「うん、その通りだ。オーブメントには、ほぼ例外なくいつどこで造られたのかを表す形式番号が刻まれている。これは、リベルルだけでなく他の大陸諸国でも事情は同じでね。50年前に、オーブメントが発明された時からの伝統なのだよ。」

「へへ、そうだったんだ。」

マードックの説明を聞いたエステルは懐から戦術オーブメントを取り出して、フレームを調べた。

「……あ、ほんとだ。確かに番号が刻まれてるわ。」

「はあ……。今まで気付かなかつたのかい？」

「う、うつさいわね。でも、形式番号^{キャリバー}が無いのってそんなに不思議な事なんだ？」

呆れているロシュアに言い返したエステルは首を傾げてマードックに尋ねた。

「導力技術者にとってナンバリングすることは常識とも言えることだからねえ。試作品としてもそれは同じ……。となると、なにか後ろ暗い目的で造られた可能性が高いかもしれない。」

「後ろ暗い目的……」

「少なくとも真っ当な目的ではないでしょうね。」

マードックの言葉にエステルは真剣な表情をし、プリネも頷いた。

「まあ、はつきりとしたことは内部を調べないと判らないが、……」
マードックは黒いオーブメントの中身を見ようとフタを探したが、手が止まつた。

「まいつたな……。調整用のフタが見当たらない。よく見たら継ぎ目もないし……どうやって組み立てたんだろう?」「一ん、このままだと中を調べるのすら難しそうだな。」

「え、そんなあ……。あ、だったら外側のフレームを切断すればいいんじゃない?」

マードックの言葉に肩を落としたエステルはオーブメントの中身を見るための提案した。

「まあ、確かにそうするのが手取り早いかもしれないが……。でも、カシウスさんあてに届いたものを勝手に傷つけるのはちょっと気が引けるなあ。」

「そ、そつか……」

「…………。例の博士だつたら任せられると思つんだけど……」

「あ……同封されていたメモの……。確かに、その博士だつたら任せちゃつていいかもね。」「????」

エステルとヨシュアの会話が理解できなかつたマードックは首を傾げた。事情がわかつていないマードックにエステルはオーブメントといつしょに入つていた手紙を見せた。

「実は、そのオーブメントと一緒にこんなメモが入つてたんだけど

……」

「『R博士に調査を依頼……』」

「そのR博士という方に心当たりはありませんか?」

ヨシュアは手紙に書かれてある人物を知つてゐるか尋ねた。

「心当たりがあるもなにも……。頭文字がRで、カシウスさんの知り合いといったら『ラッセル博士』に間違ひないだろう。」

「やつぱりそうですか……」

「ラッセル博士? ていうか……ヨシュアの知り合いなの?」

「いや、面識はないけどね。オーブメント技術をリベルにもたらした人物として有名なんだ。」

「私も存じています。確かにメンフィルへの導力技術提供チームの代表であつた方ですね?」

「うむ。」

ラッセル博士の事がわからないエステルにヨシュアが説明し、プリンスはリフィアに確認した。

「ほう、よく知ってるね。オーブメントを発明したのはエプスタイン博士という人だが……。ラッセル博士はそのエプスタイン博士の直弟子の1人にあたるんだ。40年前、彼が持ち帰ったオーブメント技術のおかげでリベルは技術先進国となつた。いわば、リベルにおける導力革命の父といえるだろう。」

「ほええ……。そんなすごい人がいるんだ。父さんってば、つくづく意外な人脈を持つてるわねえ。」

ラッセル博士の事を知ったエステルはカシウスの人脈に驚いた。

「しかし、そのオーブメントを博士に任せるのは心配だな。どんな事になつてしまふのやら……」

「へ?」

「なんと言つか……良くも悪くも天才肌の人でね。一度、研究心に火がつくと色々なことを起こしてくれるんだ。そうだ……初めて導力飛行船を開発したときも……。ふう……」

ラッセル博士の事を説明し終えたマードックは思い出したくもない事を思い出し、遠い目をした。

（な、なんか遠い目をしてる……）

（色々とあつたみたいだね……）

（嫌な予感……リフィアみたいな人じゃないといいけど。）

（エヴリーヌ、それはどういう意味だ?）

(お、お姉様。抑えて下さい。)

マードックの様子を見てエステルやヨシュアは苦笑し、エヴリーヌの咳きが聞こえたリフィアはエヴリーヌを睨んでいる所をプリネが諫めた。

「……コホン、これは失礼。まあ、確かに博士ならそのオープメントの正体を必ずや突き止めてくれるだろ。紹介するから相談してみるといい

「ありがと、工房長さん！」

「どちらに行けば博士にお会いできますか？」

「そうだな……。ちょっと待っててくれたまえ。」

椅子に座っていたマードックは立ち上がり、部屋に備え付けてある通信機を操作した。

「もしもし……。おお、ちょうど良かつた。実は君のことを捜していてね。すまないが、こちらに来てもらえないかな?うん、うん、待っているよ。」

誰かを呼んだ風に聞こえたエステルはマードックに呼んだ人物の事を尋ねた。

「ひょっとして、そのラッセル博士を呼んだの？」

「いやいや、とんでもない。実はラッセル博士は町に個人工房を持つていてね。最新式の設備が揃っているから普段はそちらで研究しているんだ。」

「へへ。さすが天才博士って感じね。……あれ、それじゃあ今、呼んだのは?」

「うん、そのラッセル博士のお孫さんがここで働いているんだ。その子に君たちのことを案内してもいいおつと想つてね。」

「その”子”?」

マードックの言葉にエステルが首を傾げた時、見覚えのある作業着を着た女の子が部屋に入つて來た。

「えつと、失礼します。」

「あつ？」

「君は……」

「ティータちゃん！」

「どうしてここに？」

女の子 ティータが入つて来た事にエステルやヨシコアは驚き、ミントは笑顔になり、ツーヤはなぜここに来たのかを尋ねた。

「……思い出した。ティータ・ラッセル。ラッセル博士の孫娘だ。「どこかで聞いた名前かと思いましたが、まさかラッセル博士の孫娘だったとは……幼いながら一人でオーブメントを修理した技術を考えれば納得ですね。」

リフィアはティータの事を完全に思い出し、プリネはティータが幼いながらオーブメントの修理を一人で行つた事を思い出した後納得した。

「あれれ……みなさん？」

「なんだなんだ。ひょつとして顔見知りかね？」

お互いかつてているように見えたマードックは驚いた後、尋ねた。

「うん。知り合つたばかりだけだね。」

「それじゃあ彼女が博士のお孫さんなんですね。」

「うん、その通りだ。ティータ君。こちらのエステル君たちが博士に相談があるそなんだ。家まで案内してもらえるかね。」

「おじいちゃんに……。あ、はい、わかりましたっ！」

マードックの頼みにティータは礼儀正しく答えた。

「また会えたね、ティータちゃん。」

「よろしくね。」

「えへへ……うん！」

同年代に見えるミントとツーヤはティータとすぐに仲良くなつた。
「よろしく頼んだよ。そうそう、何か判つたら私にも教えてくれると嬉しいな。技術者はじくれとして、非常に興味をそそられるからね。」

「あはは、うん、わかつたわ。」

「それでは失礼します。」

そしてエステル達はティータと共に部屋を出た後、ティータの案内でラッセル家に向かつた……

第93話（後書き）

エクシリア面白すぎです……！OPが入るタイミングか凄くよかつたし、戦闘やシステムも全作品と比べるとかなり面白い！…さすが15周年記念で作り込んでいるだけはありますね！ただ、ちょっと気になるのは術覚えているミラが術を使わず魔技ばっか使って戦っている事なんですね……感想お待ちしております。

エステル達はティータに案内され、ある家に着いて中に入つて行つた。

（ツアイス市内・ラッセル家）

「えへへ……。これがわたしの家です。」

「ほう。ここがラッセル博士の住居か……」

「へへ、いいお家じゃない。」

「わあ……これがティータちゃんの家なんだ！」

リフィアは興味深そうに家中を見渡し、エステルやミントも同じように見渡した。

「ラッセル博士はどうにいらっしゃるのかな？」

「おじいちゃんなら工房の方にいると思います。その扉の向こう側です。」

ヨシュアの疑問にティータは玄関とは別に着いている扉を指し示した。

「それじゃあ早速、挨拶させてもらいますか。」

扉の中に入つて行き、ティータの案内で扉の先の部屋にある階段をエステル達は上つて行つた。

「おじいちゃん、ただいま。」

「……むむむ……。ここをこつして、いつすれば……。くぬぬぬぬつ……！……ぬおおおつ……」

そこにはティータの呼びかけにも答えず、椅子に座つて一心不乱に机の上にある導力器らしき物を熱心に作業している老人 ラッセル博士がいた。

「……あ。」

「あ、その人ね。」

博士の様子にティーエタは気不味そうな表情をした。ティーエタの様子に気付かず、エステルは博士に挨拶に向かつた。

「あの～、初めまして。あたし、遊撃士協会のエステル・ブライアつていいます。実は、博士に相談したいことが……」

「…………」

「…………あり？」

エステルの挨拶に何も答えず、ただ作業している博士にエステルは首を傾げた。その時博士が立ち上がりて大声を出した。

「で、できたあああ～！」

「ひえ～！？」

「ひやつ～！？」

「ツ～？」

博士の大声にエステルやミント、ツーヤは驚いた後一步後退した。

「わはは、やつたわい！ついに完成したぞおおお～！さすがワシ！すごいぞワシ～！うむ、こいつは早速、テストせねばなるまい～！」

博士はエステル達には一切気付かず、1階に降りて行つた。

「わあっ！な、なんなのよ～！？」

「ごめんなさい、エステルさん。おじいちゃん、発明に夢中になるとまわりが目に入らなくなつて……。数日前から造つていた装置がようやく完成したみたいなんです。」

「なるほど……。さすが天才って感じだね。」

「そ、そういう問題じゃないと思うんですけど……」

感心しているヨシコアにエステルは呆れて溜息を吐いた。

「め、面白いですぅ……」

エステルの言葉を聞いたティーエタは気不味そうな表情になつた。

「うわ～……それってリフィアとそっくりていう意味じゃない……

嫌な予感。」

「エヴリース、それはどういう意味だ？」

「お、お姉様。抑えて下さい。それより、ラッセル博士とは昔から

ああいう方だつたんですねか？」

博士の事を知り、思わず呟いたエヴリーヌを睨んでいるリフィアを宥めたプリネは話を変えるために博士の事を尋ねた。

「ああ。魔導技術の事を知った時、周りの技術者達に抑えられながらもリウイに魔導技術の詳細を迫つていたほどだ。興味がある事があれば周囲の目は一切入らないのは以前と全く変わっていないな。」

「なるほど。（確かにリフィアお姉様とよく似た方ですね…………）」

そしてエスティル達は博士を追い、1階に降りた。1階に降りると博士が何かの設計図らしき紙を見ていた。

「おじいちゃん、あのね。このお姉ちゃんたちが相談したいことがあって……」

「ん……？おお、ティータ！いいところに戻つてきたのうー・今からテストをするからデータ収集を手伝ってくれ。」

「え、でも、あのね……」

「今度の発明は、生体感知器を無効にするオーブメントじや。特殊な導力場を発生して走査を^{スキヤン}こまかすわけじゃな。」

「ほ、ほんとー？」

エスティル達のために博士の作業を止めようと声をかけたティータだつたが、博士の言葉に作業を止めさせる事を忘れてティータは興味深そうな表情をした。

「ホントもホント。掛け値なしの新発明じゃーほれほれ、いいから、起動テストの手伝いをせいー！」

「うんっー！」

そしてティータは博士と共に部屋に備え付けてある複雑そつな装置を動かし始めた。

「…………あの～。」

「うーん。しばらくかかりそうだね。」

博士達の様子を見てエスティルはジト目で声をかけたが答えは帰つて来ず、ヨシュアは苦笑した。その時博士は手を止め、振り向いて次

々とエステル達に指示をした。

「ほれ、そこの黒髪の！」

「え、僕のことですか？」

「他に誰がある? 2階の本棚から『導力場における斥力値』という

「其一」二三

博士の勢いに押されたヨシュ

一七九
セイヨウトシノアラ

「ま、ぬい。」

博士に言われた自分の特徴にエヌテルは怒つた

「ほんのひととこらんでテレホーでも淹れてほんか！」

ながんておがいか

「聞いてない。まあ、さういふがつがつぱり。」

「おひるぬき先生もアレゴリ。アマタ、アタマ」

話を聞かず一方的に指示をする博士と言い合ひをして無駄とわからず、留學生をついてミシナリ共に部屋を出だす。

「ほれ、そこの赤髪！」

「なんですか？」

一〇九

「は、せぬ」

「主人様、お手伝いします。」

「アリネは戸惑いながらツーヤと共に部屋を出た。

嫌な予感

へ、変な體子じゅと!?"これは余か氣にして、Nの體子なのじゅ

そ！？

「……」言わずにここに書いた物を道具屋から調達してこな

か！他の者達は動き回っているのにお前達だけサボるつもりか？」

怒っているリフィアを気にせず、博士はメモをリフィアに渡した。

「ぐぬ……妹が働いて、妹の手本となる余達が高みの見物する訳に

もいかぬか……全く何故余が人の使い等を……ブツブツ。」

「はあ……こんな事ならギルドでお留守番しつけばよかつた……

……

痛い所を突かれたりフィアとエヴリーヌは文句を言いながら部屋を出た。そしてティータが作業を終えた。

「…………うん、ばっかり おじいちゃん。」この設定は終わったよ。

「おお、さすが早いな」

「あれ……。そういえば……エステルさん達は？」

「誰じゃ、それ？」

「」

ティータの言葉に博士は首を傾げた。

「そういうば、見覚えのない若い助手どもがいたが……。はて、マードックのやつがよこした新人かの？？」

「お、おじいちゃあん……」

無関係のエステル達を手伝わせている事にティータは溜息をついた。

こうして、エステル達は成り行きで実験を手伝うことになり、実験が終わった頃にはすっかり夕方になっていた……

第94話（後書き）

感想お待ちしております。

「ラッセル家・夕方」

そして実験が終わり全員がリビングの椅子に座り改めての紹介をした。

「わはは、すまんすまん。すっかりお前さんたちを中央工房の新人かと思つてな。ついコキ使つてしまつた。」

ラッセル博士は人違いをしたことを豪快に笑っていた。

「つたく、笑いごとじやないわよ。コーヒーだけじやなくさんざん手伝いをさせてさー。それにリフィア達まで手伝わせるなんて思わなかつたわよ……」

「全くだ。世界広しと言えど、余達をこき使つたのは博士だけじやぞ?」

呆れているエスティルの言葉に頷くようリフィアは呆れて言った。
「まあまあ、貴重な体験をさせてもらつたと思えばいいじやない。新型オーブメントの起動実験なんて滅多にあるもんじやないんだし。」

「

「そうですよ、お姉様。新たな技術の実験に立ち会える事なんてあまりない事ですから、貴重な経験と思えぱいijiやないです。」

「ほう、お前さん達。なかなか判つておるようじやの。どうじや、遊撃士や皇女なんぞやめて導力学者への道を進んでみんか?」

エスティルやリフィアを宥めているコシコアやブリネに博士は冗談か本気かわからない提案をした。

「もう、おじいちゃんたら!『めんなさい、みなさん。なんだか、わたしも実験に夢中になっちゃつて……』

「あ、ティータちゃんは謝る必要はないんだからね?」「うん。ママといつしょにお手伝い出来て楽しかったよ!」

「あたしも!」主人様のお役に立てる機会を作ってくれて感謝してい

ます。」

謝るティーダにエステルは苦笑し、ミントやツーヤはエステルやブリネといつしょに働けた事に嬉しさを感じてお礼を言った。

「はあ、『導力革命の父』というからどんなスゴイ人かと思つたけど……。ここまでお調子者の爺さんとは思わなかつたわ……」

「わはは、そう讃めるでない。しかし、まさかカシウスの子供達やメンフィルの姫殿下達が訪ねてくるとはのう。わしの方もビックリじゃよ。」

「あ、やっぱり博士って父さんの知り合いだったんだ?」

「うむ、けつこう前からのな。あやつが軍にいた頃からじやから20年以上の付き合いになるか。」

「わたしも、カシウスさんと会つたことがありますよ。おヒゲの立派なおじさんですよね?」

「うーん、立派というか胡散臭いといつか……。そう言えれば博士はリフィアの事を知つていてるんだ?」

ティータから見たカシウスの印象をどう修正すべきか悩んだ後、博士が最初からリフィアを知つていてる風に話していたのが気になり尋ねた。

ねた。

「うむ、”百日戦役”後同盟条件の一つ、”導力技術の提供”を果たすためにわしが代表として何人かの技術者たちを連れて大使館に行つた際、会つたきりだからリフィア姫殿下とは9年ぶりといったところかの?」

「そうだな。まさか再会していいきなり手伝わされるとは余も驚いたがな。」

「わはは、それはすまなかつたです。ふむ、それにしても9年も経つてるので殿下は特に成長しているように見えませんが、闇夜の眷属とは成長の仕方も我々人間とは違うのですかな?」

博士は以前見た事があるリフィアが全く成長していない様子に首を傾げた。

「ふえつー? リフィアさんってわたしやミントちやん、シーヤちやんよりちょっと上くらいかなと思いました!」

「成長の事を申すでない! 余も一応氣にしているのだからな! それとティータといつたな? 余はこれでも30代だ! だから余は断じて子供ではないぞ!」

「ふ、ふええええつー?」

リフィアの注意にティータは驚いた後、プリネやエヴリーヌを見た。「ああの、もしかしてそちらのお一人は見た目以上にひとつ年をとつているんですか?」

「あはは……私は見た目通り18歳ですよ。」

「エヴリーヌは数えた事ないからわからんない。」

ティータの疑問にプリネは苦笑しながら答え、エヴリーヌは興味なさげに答えた。

「えつと、ティータちやん。」

「ふえつー? どうしたの、ミントちやん。」

言こずらやつにしてごるミントにてティータは首を傾げた。

「えつとね、ミントやシーヤちやんも実はティータちやんよりお姉さんなんだ。」

「あたしやミントちやんはいつも見えてもエステルさんやヨシュアさんと同じ年なの。」

「ふえつー? そなんだ……あの、じゃあ年上扱いしなくちゃダメなんだよね……2人とは友達になれると思つたんだけどな……」

ティータはミントやシーヤが同じ年ではないと知るとガツカリした。「ううん! それは大丈夫だよー! ミントやシーヤちやんはティータちゃんの事、友達だと思っている。」

「だからあたし達とは気軽に接してくれていよい。」

「えへへ……うん!」

「うんうん、ミント達に早速友達ができるあたしも嬉しいわ。……

でもリフィアや父さんの知り合いならアレを預けてもよさそうね。ミントとシーヤ、ティータの掛け合いで和んだ後、エステルはヨシ

コアに確認した。

「そうだね、問題ないと思うよ。」

「???」「

「なんじゃ、何があるのか？そつにえは、お前たち、わしに相談があるそつじやな？」

エステルとヨシュアの会話の意味がわからなかつたティータは首を傾げ、2人の会話の内容が気になつた博士はエステル達が自分を尋ねてきた理由を聞いた。

「うん、実はね……」

そしてエステル達はこれまでの経緯を説明した後、黒いオーブメントを取り出して机の上に置いた。

「…………ほづ」

「わあ…………真っ黒いオーブメント…………」

博士とティータは見た事もないオーブメントを見て声を上げた。

「ふむ、これは興味深いのう。形式番号^{キャリバー}がないのもそうだが、継ぎ目たぐいが見当たらん。しかもこのフレームは…………」

オープメントを手に取つてすみまで見た後、博士は腰のベルトから工作用のカッターを取り出した。そしてそのままオープメントの表面上にカッターの刃を強く押し当てた。

「な、なにをしてんの？」

「特殊合金製のカッター…………」

博士がした事がわからないエステルは首を傾げ、博士の持つている物に気付いたヨシュアは博士が持つている物の正体を呴いた。

「…………。やはりか…………。ほれ、見て

みるがいい。

博士に促されたエステル達は黒いオーブメントを見た。

「あれつ？」

「キズ1つ付いてない。」

「普通の金属でしたら刃物を当てれば、傷がつくのですが…………」

「……………どうやら、このフレームはわしが知っているどんな金属よりも硬い素材でできているようじゃ。リフィア姫殿下。そちらの世界で思い当たる金属はありますか？」

エステルやヨシュア、プリネはオープメントにキズが付いていない事に首を傾げ、博士は異世界出身のリフィア達なら心当たりがあるかと思つて尋ねた。

「確かにこちらの世界にはない頑丈な金属はある。コルシノ、パール、アルプネア、セトン、ミスリル、レイシアパール、ラミアス石、リエン石、金剛石……だが、このオープメントに使われている金属はどの金属にも値しないな。」

「ふむ、そうですか……切断して中を調べるのはかなり難しいかもしだんな。」

「そ、そんなにとんでもない代物なんだ……」

「切斷するのが難しいとなると困ったことになりましたね……」

博士の答えにエステルは驚き、ヨシュアはどうすればいいか考え込んだ。

「ま、フレームの切斷は時間をかければ出来るじゃろ。しかしその前に、測定装置にかけてみるべきかもしだんな。」

「ソクティ装置？」

「「？」」「？」

エステルは言われた言葉が理解できずポカンとし、ミントやツーヤも全くわからない様子で首を傾げた。それを見てティータが説明した。

「さつきの実験で使用したあの大きな装置の事です。導力波の動きをリアルタイムに測定するための装置なんですよ。」

「よ、よくわかんないんだけど、その装置を使えばこれの正体がわかるのよね？」

言われたことを全く理解できないエステルは考え、答えを聞いた。

「まあ、重要な手掛かりは得られる可能性があるな。」

「エステル、博士達に任せてみよう。何かわかるかもしだいし。」

「やうね、ヨシコア。じゃあ博士、お願ひします。」

「つむ、それじゃあ早速……」

博士は意気揚々と工房に行こうと立ちあがりかけたが、ティータに呼び止められた。

「でも、おじいちゃん。そろそろゴハンの時間だよ?」

「えー。」

博士は調べる時間が延びたことに思わず文句の声を出した。
「えーじゃないよおじいちゃん。あ、エステルさん達もよかつたら、
食べていって下さい。あんまり自信はないんですけど……」

「あ、それじゃあ遠慮なく」

「よかつたら僕達も手伝つよ。」

「人数も多いでしょから大変でしょうし、私達も手伝います。」

「ミントも手伝うよ!」

「あたしもいっしょに手伝うよ、ティータちゃん。」

「ふむ。皆が手伝つて余達だけ何も手伝わないという訳にもいかぬ
な。余やエヴリーヌも手伝おう。いいな、エヴリーヌ?」「
「仕方ないね……ブリネのお姉ちゃんとして見本を見せて上げる。
「ありがとうございます、みなさん。」

ティータに晩御飯を進められエステル達は快く受け、手伝いを申し出た。

「よし、それじゃあこいつよつ。食事の支度が済むまでわしの方は
ちょっとだけ……」
「だ、だめー。わたしだって見たいもん。抜け駆けはなしなんだか
ら。」

「ケチ。」

博士はそう言つてこつそり工房に行こうとしたがティータに見咎められた。それを見てエステル達は囁き合つた。
(なんていうか、この2人……)
(血は争えないってやつだね。)

(やれやれ……この祖父にしてこの孫ありといつたところか……)

(……プリネがペテレー似でよかつた。リフィアや博士みたいな人になつたら手がつけられないもの。)

(あ、あはは……)

(わあ……ティータちゃん、お祖父ちゃんとそつくりで羨ましいなー。ミントはママとそつくりなところがあるかな?)

(それは大丈夫だと思つよ。ミントちゃんもエスティルさんも明るい性格だもの。)

(えへへ……ありがと、ツーヤぢゃん!)

そして夕食が済みついに実験の時が来た……

第95話（後書き）

感想お待ちしております。

（ラッセル家・夜）

「『ホン……腹も膨れたことじやし早速始めるとしよう。』エスティル、例のオーブメントを台の上へ。」

「う、うん……」

博士の言葉でエスティルは緊張した顔で黒いオーブメントを測定器の台の上に置いた。

「これでいいの？」

「うむ。ティータや。そちらの用意はどうじや？」

博士はオーブメントを確認しティータに用意の状態を聞いた。

「うん、バツチリだよ。」

「よろしい。それでは『黒の導力器』の導力測定波実験を始める。』

「『黒の導力器』？」

「なんか、まんまなネーミングねえ。」

「全くだ。もう少しいい名はなかつたのか？」

博士が勝手につけた名前にエスティルやリフィアは呆れた。

「シンプル・イズ・ベストじゃ。とりあえず名前がないのは不便じやからの。」

「ドキドキ、ワクワク……」

ティータは期待の目で実験を待っていた。

「あーティータつたら凄いやる気の目ね。」

「ティータちゃん、凄く輝いているよ。」

「うん。ティータちゃん、凄い楽しそう。」

「あ……てへへ。」

エスティルやミント、ツーヤに言われたティータは恥ずかしがった。

「よし、それでは始めるぞ。ティータ。装置の起動を頼む。」

「うんっ！」

ティーラが装置の起動を始め、博士も操作をし始めた。

「出力を45%に固定……。各種測定器のスタンバイ開始。」

「了解……。うん。各種測定器、準備完了だよ。」

「さーて、ここからが本番じゃ。入出力が見当たらない以上、中の結晶回路に導力波をぶつけて反応を探るしかないわけじゃが……。そこで、この測定装置の真価が發揮されるというわけじゃ！」

博士は楽しそうに言つた。

「ノ、ノリノリねえ……」

「ええ、ああいう所を見ると興味がある時のリフィアお姉様そつくりですね。」

「おー、さすがプリネ。わかつているね。」

「むう……」

博士の様子にエステルは苦笑し、プリネやエヴリーヌの言葉に心当たりのあるリフィアは言い返せず唸つた。そして実験が始まり順調に進み始めた。

「よしよし、順調じゃ。ティーラや、測定器の反応はどうじゅ？」
順調に進んでいると感じた博士はティーラに測定器の様子を聞いた。
だが、ティーラは表情の曇つた顔で答えた。

「う、うん……なんだかヘンかも……」

「なぬ？」

「メーターの針がぶるぶる震えちゃって……あつ、ぐるぐる回り始めたよ！」

ティーラは慌てた様子で伝えた。

「なんじゃと！？」博士は予想外の答えに声を上げた。
そしてその時オーブメントが黒く光り始めた。

「な、なんじゃ！？」

「きやあ！」

黒い光に博士やティーラは驚いた。

「ヨシュア、これ……！？」

「あの時の黒い光……！」

見覚えのある光にエステルはヨシュアに確認した。

「ほう、これが例の黒い光か……」

「魔力じゃないなか変な力が感じるね。」

リフィアは初めて見る黒い光を珍しがり、エヴリーヌは光から感じられる力の正体に首を傾げた。

「ご主人様……」

「ママ……」

「大丈夫よ、ツーヤ。」

「そうよ、ミント。一度この光が出たけど特にあたし達を傷つけたりしなかつたわ。」

謎の光にツーヤはミントは不安がつてプリネやエステルの背中に隠れたが、プリネやエステルは優しく諭した。

そして黒い光はどんどん広がった。

「なんじゅとー？」

そして外の照明や家の光等導力器が次々と導力をなくし始め、市内は真っ暗になつた。その様子に気付いたエステル達は実験をする博士やティータをその場に残して市内を手分けして街中を見たがなんと街全体の導力器が止まり、街中がパニックになつていた。

「お、おじいちゃん、これ以上はダメだよーー測定装置を止めなくつちやー！」

「ええい、止めてくれるなーあと少しで何かが掴めそー……」

あたりの様子に気付いて測定を止めようとしているティータを振り切つて博士が測定を続けようとしたところ、エステルとミントが戻つて來た。

「ちょっとちよっとーー町中の照明が消えてるわよー？」

「みんな、灯りが消えて凄く騒いでいたよー？」

「ふえつーー？」

「なんと……。ええい、仕方ない！これにて実験終了じゃああつ！」「エステルとミントの言葉にティータは驚き、博士は悔しそうな表情で測定装置を止めた。すると消えていた照明がついた。

「あ……。も、元に戻った……」

「よかつた……」

「はうううう……」

「計器の方は……。ダメじゃ、何も記録しておらん。といふことは、生きていたのは『黒の導力器』が乗った本体のみ。あとは根こそぎ」ということか……」

照明がついたのを見て、エステル達は安堵の溜息をつき、博士は測定装置の結果を見て唸つた。

「よかつた……。実験を中止したみたいだね。」

「あ、ヨシュア！外の様子はどうなの？」

「うん……。照明は元通りになつたみたいだ。まだ騒ぎは収まつていなわけです。今、リフィア達に手分けして騒ぎを収めてもらつているところだよ。」

「そつか……。すぐにあたし達も行かなきゃね。でも、一体全体、何が起こつちゃつたつてわけ？」

エステルは『黒の導力器』が起こした出来事に首を傾げた。エステルの疑問に博士は少しの間考えた後、答えを言つた。

「そうじやな……。あえて表現するなら『導力停止現象』と言つべきか。」

「『導力停止現象』……」

「オープメント内を走る導力が働かなくなつたということですね。」

「えー、それってオープメントが使えないって事だよね？それは大変だよ！みんな、生活ができなくなっちゃうよー！」

「そうね、やつぱり、その『黒の導力器』が原因なのかな……？」

博士の説明を理解したヨシュアは確認し、ミントは驚き、エステルは頷いた後導力が停止した原因の『黒の導力器』を見た。

「うむ、間違はあるまご。しかし、これほど広範囲のオープメントを停止させるとは。むむむむむむむむ……こいつは予想以上の代

物じやぞ。面白こ、すいふる面白いわいー。」

「お、面白がってる場合じゃないと思つんですねけど……」

『黒の導力器』の効果範囲を知つて、目を輝かせている博士にエステルは白い目で見た。その時、誰かが部屋に入つて来た。

ハカセツ！」

怒りを隠し切れていない声を出しながら、部屋に入つて来た人物
マードックは博士に近付いた。

「ねえ、マーク。いいところに来たじゃないか。」

「…と、JIN、じゃありません！毎回毎回、新発明のたびにどんでもない騒ぎを起して！町中の照明を消すなんて今度は何をやつたんですかッ！？」

力器』の仕業じや。』

怒り心頭に昇る。少しひどい言葉に憎一回心外をながる性で答えた後、「黒の導力器」を指し示した。

「そ、それは例の……なるほど、それが原因ならこの異常事態も
うなづける…………だ、だからといってアンタが無関係といつこ
とがあるかあつー」

博士の説明に誤魔化されそうになつたマードックは少しの間考えた後、結局博士が関与している事に気付いて叫び、博士は誤魔化せなかつた事に舌打ちをした。

「なんかやたらと息が合つてるわね。」

喧嘩しているように見えるけど、仲良くなっているようにも見える

「…」

博士とマードックの掛け合いにエステル達は苦笑した後ティーエタに確認した。

「あう、恥ずかしながら……」
ティーエタは照れながら答えた。

その後エステル達は騒動を収めているリフィア達の所に戻つてそれぞれ手分けして騒動を收め、全て鎮まつた時には夜の遅い時間になりエステル達はラッセル家に泊めてもらうことになった……

第96話（後書き）

感想お待ちしております。

第97話（前書き）

碧の軌跡のロングプレイムービーはついに解禁されましたね！それを見て、思いましたが……BGMが前作よりさらにカッコよくなりましたね！まさか、通常戦闘であんな曲とは……アリオスは零でもあつたあの技が使って最高です それにさすがはS級に届くともいわれるブレイサー……クラフトの性能も凄いですし、何よりスクラフトがカッコよすぎです！！

ツアイス市中の導力停止現象から一夜明け、博士は改めて黒のオーブメントを調べていたが温泉で有名なエルモ旅館から温泉を汲み上げる導力ポンプが故障し、女将が博士に直しに来てほしいと依頼したのだがオープメントを調べている博士は忙しく、代わりにティータが行くことになりその護衛にエステル達がつくことになり8人はエルモ村へ足を向けた。

その後旅館である紅葉亭に向かつたエステル達はポンプ小屋の鍵をもらい、行つたのだが現場を見て動き出したティータを見て自分達はいても邪魔だと思いその場をティータに任せて一端紅葉亭に戻つたのだが、観光客が一人で街道に出たという知らせを聞き、そんなに人数はいらないので今まで仕事を手伝つてくれているリフィア達には観光を楽しんでもらい、エステル、ヨシュア、ミントの3人は急いで観光客の保護に向かつっていた。

～トライド平原～

「まさか護衛もつけずに街道に出る人がいるとはね……会つたら注意してやるわ！」

「ママの言う通りだよーミントだつて先生から『決して一人で街道を歩いてはダメよ』って言われてちゃんと守つているのに、ミントより大人な人がどうしてそんな事をするのかな？」

「まあまあ、エステル、ミント。そういう人も中にはいるよ。」

憤つているエステルとミントをヨシュアが宥めていた。

「ふえ〜ん、やだやだ、助けて〜」

街道の外れを探していたエステル達は助けを求める声を聞いた。

「今のは……」

「うん、近いね。」

「どうやらまだ魔獣んい襲われていないようだね、ママ。」

声に気付いた3人は声の発生源に近づこうとした時同じ声がまた聞こえてきた。

「エイドス様～！お父さん、お母さん～！ナイアルせんぱ～い、助けて下さいよ～！」

「こ～これつて……」

「想像通りだと思けど……とにかく、急げ！」

「？？（ママとヨシュアさんが知っている人なのかな？）」

声に聞き覚えがあつたエステルとヨシュアは苦い顔をし、唯一わからぬミントはエステル達の様子に首を傾げながら求めている声の元に向かつた。

そこには関所を襲つた狼の魔獣に囮まれた女性　　ドロシーがいた。
「ワ、ワンちゃんたち……。とりあえず話し合いましょ～？わたし
なんか食べたつて美味しくないと思うのですよ～。毎日12時間以
上寝てお野菜もしつかり食べててるからお肌もツルツルだしい……。
……つて、なにげにヘルシーで美味しそう！～？」

「～～～「グルルルル……」」

ドロシーの意味不明な命乞いと自爆を理解しない魔獣達はドロシー
に近寄つた。

「ひい～ん、こんな事なら給料前備して、おいしい物いつぱい食べておくんだった～」

「オン！」

「きやあ！」

ドロシーの後悔も聞かず魔獣達の一匹が襲いかかつた。

「せいっ！」

「ハッ！」

「燃えちゃ～～つ～ファ イアショート～」

その時エステル達が飛び込んで襲いかかるうとした魔獣の一匹にエ
ステルやヨシュアが致命傷を与えて、ミントは魔術で止めを刺した。

「ハツ……あ、あなたたちは～！」

ドロシーはエスティル達を見て驚いた。

「ふう…… やつぱり思つた通りね。

「ロード・シーカー、用心配ありますわんよ。」

卷之三

エステル達はドロシーを庇うようになり、ドロシーの前に出たが

「…………… これがわざでした、上へ」

「ほえつ？」

「遊擊士協会」

ドロシーの言葉にエステルとヨシュアは脱力し、ミントは首を傾げた。

「うふふ、冗談だつてばあ。エスティルちゃん、ヨシュア君。こんな所で会うなんて奇遇ねえ。そつちの女の子とは初めてだよね?リベル通信のドロシーだよ~。よろしくね~。」

「え、えりと……！」ソントだよ。がるしへ……でいいのかな？」

「せ、激しくやる返が……」ヒトがわざわざ、ドロシーに向かって

「スケルトン、アーヴィング、ハーリー、」

ヨシコアの警告の声と同時に魔獣が飛び掛ってきたのを見て、工ス
テルとミントは気を引き締めて魔獣達と戦い始めた！

「行くよ……せこつ一ぱつ一ぱつ」

「ギターン! ?」

戦闘開始早々、身のこなしが速いヨシコアは先制攻撃代わりにクラフト 双連撃で一匹の魔獣にダメージを与えてのけ反らせたところを

「やあっ！えいっ！」

ミントがすかさずクラフト アップアーファンジングで止めを刺した。

「オン！」

クラフトによつて自分も飛び上がつたため着地した瞬間隙があり、その隙を魔獸がミントの背中を狙つて襲つたが

「とりやつ！」

「ギャン！？」

ミントを守るかのようにエステルがミントの背中を守り、棒で襲つて来た魔獸を吹き飛ばした。

「貫いちやえ！……アイスニードル！」

「はっ、せいつ！」

吹き飛ばした魔獸にミントが目標の足元から氷を出す魔術で串刺しにしたところをヨシュアが急所をつくクラフト 脣で魔獸の息の根を止めた。

「大丈夫！？ミント！」

「うん！ありがとう、ママ！」

「2人とも油断はしないで！……出でよ、竜巻！エアリアル！」

戦闘中お互いの無事を確認し合つているエステルとミントに警告したヨシュアはアーツを発動させて、残りの魔獸達を一気に攻撃した。「降り注げ、炎の槍！……スペイラルフレア！！」

「当つたれ！……ストーンフォール！」

さらにエステルがアーツを、ミントが魔術を使って、ヨシュアのアーツによつて傷ついた魔獸達に止めを刺した。そして、残りは唯一アーツの攻撃範囲外にいて無事だつた魔獸が唸りながらエステル達を警戒した。

「グルルルル……」

「せいっ！」

「そこだつ……絶影！」

「ギャン！？」

警戒している残りの魔獸にエステルが衝撃波を放つクラフト 捻

糸棍でダメージを与え、ヨシュアが一瞬で魔獸の横を駆け抜けて致命傷を与えた。そしてミントが止めにスクラフトを放った！

「ミントのとつておき、見せて上げるーソードファング！！」

ミントは何度も駆け抜け魔獸を攻撃し、駆け抜けるスピードははじめよじょに速まり、スピードが上ると同時に攻撃の勢いも増して威力が高くなつた。そしてミントのスクラフトが終わつた時、魔獸は消滅した。

「わーい、勝つた！」

最後の魔獸に止めを刺したミントは勝利のセリフを言つた。

「はあ……。なんとか追つ払えたわね。」

「うん。みんな怪我がなくてよかつたね。」

戦闘が終わり、エステルやミントは安堵の溜息をついた。そしてヨシュアがエステルに話しかけた。

「エステル……気付いたかい？」

「うん……。峠の関所を襲つた魔獸ね。どうしてこんな所まで……」

「ねえ、ママ。何のお話？」

「ちょっとね……前にもこの魔獸と会つた事があるのよ。」

「ふーん、そうなんだ？」

「わ～、スゴイスゴイ。さつすが遊撃士だねえ。しばらくぶりねえ。エステルちゃん、ヨシュア君。まさか、こんなところに会えるとは思わなかつたよ～。はつ、これつてもしかして運命の出合つていうやつ！？」

倒した魔獸について話し合つてゐるエステル達のところに後ろで戦いを見ていたドロシーがエステル達に近付いた。

「なんの運命よ、なんの……」

ドロシーの言葉にエステルは脱力した。

「それにしても、エステルちゃんとヨシュア君つたらこいつの間にこんな大きな子供が出来たの？」

「なつ……違うわよ！」

脱力していたエステルだったがドロシーのとんでもない言葉に驚いて、強く否定した。

「どうして？ミントちゃんつたら、エステルちゃんの事、”ママ”って言つてるじゃない。」

「ミントはえ～と……そう！養子みたいなものよ！だからそんなんともない勘違いはやめてよねー？」

「ふうん、そうなんだ？」

エステルの言葉にドロシーはまだ納得がいかない表情で頷いた。

「ハハ……ところで、ドロシーさん。エルモの旅館に泊まっているお客様さんって、あなたですか？」

エステルとドロシーの会話に苦笑したヨシュアはドロシーに確認した。

「そうだけど……。あれ～、なんで知ってるの？」

首を傾げて立るドロシーにエステル達はエルモの旅館の女将に宿泊客の保護を依頼されたことを説明した。

「あ、そうなんだ～。それは大変だつたねえ。」

「な～に他人事みたいに言つてんのよ。で、こんな街道の外れでいつたい何をしていたわけ？」

呑気に答えるドロシーに呆れたエステルは何故一人で街道の外れにいたかを尋ねた。

「ちつちつち……。そんなことも分からぬの～？くすくす、エステルちゃんもまだまだ洞察力が足りないなあ。」

「あ、あんですつて～！？」

ドロシーにからかわれたエステルは怒つて声を上げた。

「正解は、今度の特集に使えそうな写真のネタを搜してた、でした～。あ、ちなみにナイアル先輩にやれつて言われた宿題なんだけどね。」

「なるほど、仕事だつたんですか。」

「だからって、こんな場所でネタ探しをしなくても……。ああもう、

なんか戦い以外で激しく疲れたような気がする……」

ドロシーの答えにヨシュアは納得し、エステルは脱力した。

「大丈夫、エステルちゃん？ 痛いの痛いの、とんだけー。」

「疲れさせた張本人がなにを抜かしとるかああっ！」

（エステルにここまで突つ込まれる人も珍しいな……）

「ママ、怖い……」

脱力させた張本人であるドロシーの言葉にエステルは怒り、その様子を見たミントは怖がつた。

「あ！ごめんね、ミント。怖がらせちゃって……」

ミントの様子に気付いたエステルは慌てて、怖がつてこるミントをあやすようにミントを抱き上げて笑顔で頭を撫でた。

「えへへ……大好きだよ、ママ！」

エステルに抱きあげられ、撫でられて機嫌がよくなつたミントは笑顔で言った。

「あ～もう一本当にミントつたら、可愛いくて癒されるわ～！」

「えへへ、くすぐつたいよ～ママ。」

ミントの笑顔に癒されたエステルはミントの頬と自分の頬をスリスリした。

「ねえ、エステル。とりあえずエルモに戻らない？ そろそろポンプ修理も終わっているかもしねないし。」

一通りの出来事を見守ったヨシュアが声をかけた。

「そうね。そういうわけで……ドロシーも一緒に戻るわよ。」

ヨシュアの言葉に頷いたエステルはミントを降ろして、ドロシーに言った。

「え～、まだ写真撮りたいのに～。」

「戻る・わ・よ。」

「エステルちゃん、コワイ……」

エステルの言葉に渋つたドロシーだったが、迫力のあるエステルの笑顔に気圧されて頷いた。そしてエステル達はドロシーを連れてエルモ村に戻つた……

1026

第97話（後書き）

みなさんお待ちかね？のお風呂シーンはもう少しだけ、お預けです。
次回はプリネ側の話になります。……感想お待ちしております。

一方エルモ村を観光をしていたプリネは誰かに呼ばれるような声を感じ、村と一緒に廻っていたツーヤと共に気配を追つて街道に出た。

（トライド平原）

「ご主人様、本当にこちらでいいんですか？」

「ええ。急ぎましよう。なんとなくなんだけど、声の主は切羽詰まつているようだつたから。」

2人がしばらく歩くとそこには魔獣の群れが何かを囮んでいた。

「ご主人様、あそこ……！」

「ええ、もしかしたらあそこに助けを求める声の主がいるかもしれません。まず、魔獣を退治しますよ！」

「はい！」

プリネとツーヤはそれぞれ武器を手に魔獣の群れに奇襲をした！

プリネ達が来る前、街道の外れでパズモとは違つた妖精が窮地に陥つていた。

「くつ……精霊王女であるこの私が……！」

その妖精はパズモと違い、身体の大きさはミントやツーヤの半分くらいはあるが小さな身体に反して胸は大きく、どこか高貴な雰囲気を纏わせて両手に自分の身体並に大きい槍を支えに跪いて、自分を囮む魔獣を睨んでいた。その妖精はパズモと違つて豊富な魔力を持つていたので異世界でも平気に活動していたのだが、魔力の供給が出来なくついにその時が来て弱っているところを魔獣が見つけてしまつたのだ。妖精は最初は抵抗して難なく倒していたが、弱つている身体は長持ちしなかつたので、ついに戦闘が出来なくなり無意識に念話で助けを呼んだのだ。

「メヘ！」

「くつ、魔獸」ときが汚い手でこの私に触れるな！粒子弾！！」

「メエ！？」

襲つて来た魔獸に精靈は片手から雷が籠つた魔力弾を放ち、消滅させた。

「くつ、力が……！ ウィル、私の初めてをあげたのですから助けに来なさい！（フフ、そんな事を言つても無駄なのに……お願い……！誰でもいいから私を助けなさい！）」

その妖精は妖精の中でも王族に値する種族でプライドが高く人間に興味はなかつたが、自分の領域に入つて来て自分を負かし、人間に興味がなかつた妖精自身が唯一興味を持ち、身体を許したある人物の名前をつい口に出し、異世界にいる人物がこんな所に来るはずがないとすぐに気付き、諦めた後念話で助けを求めた後弱っていた体に鞭をうつかのように飛び上がり、襲つてくる魔獸を槍で撃破していた。

「貫け！」

妖精が槍を震うと襲つて来た魔獸がまた一匹消滅した。妖精の強さに魔獸達は本能ですぐに襲いかかる訳にはいかぬと警戒し、その場は硬直していた。その時、警戒していた魔獸の群れが乱れた。

「そこっ！」

「たあっ！」

「！？」

魔獸の群れにレイピアと刀で奇襲して倒したプリネとツーヤは妖精を見つけて、妖精を守るように自分の背後に妖精を庇つた。妖精は突如現れた救援者に驚いた。

「あなたが助けを求めた声の主ですか？」

「え、ええ……貴女達は？」

プリネに尋ねられた妖精は戸惑いながら頷いて、プリネ達の正体を尋ねた。

「それは後で話します！ 貴女は自分の身を守る事だけに専念して下

さい！」

「……わかりましたわ。」

「来ます……！」

ツーヤの警告の言葉と同時に魔獸達はプリネ達に襲いかかった！

「はあああ……ラファガブリザード！！」

襲いかかって来た魔獸達はツーヤを中心とした吹雪によつて吹き飛ばされ、吹雪によつて氷漬けになる魔獸もいた。

「闇よ！我が仇名す者達に絶望を！……黒の闇界！！」

そこにプリネの魔術が命中し、魔獸達は全滅した。しかしそこに一際大きなミニズのような魔獸が現れた。

「これは……！」

「この魔獸はギルドの掲示板にあつた手配魔獸……！」

「（手配魔獸……魔獸の中でも手強く遊撃士の人も手こぼれる魔獸……）ご主人様、あたしに任せてもらえませんか？」

「ツーヤ！？何を言つているのー手配魔獸は普通の魔獸と違つのですよー？」

ツーヤの言葉にプリネは驚いて声を出した。

「はい、わかつています。」

「だつたらなぜ、そんな事を言つのー？貴女一人で倒すのはかなり難しいわよ！」

「自分一人の力を試してみたいんです。……ご主人様は大陸最強と言われるメンフィルの皇女様です。あたしはそんな凄いご主人様と肩を並べて戦いたいんです！護られてばかりは嫌なんです！」

「ツーヤ……わかつたわ。でも、不味いと思つたら手は出させてもらつからね？」

「はい。」

ツーヤの決意にプリネは驚いた後、ツーヤの意思を尊重し、一端弱つてゐる妖精と共に後方に下がつた。

「……！」

襲つて来た手配魔獸を見て、ツーヤは顔を引き締めて刀で防衛した後、クラフトを放つた。

「あつ！やあつ！」

クラフト 飛翔剣舞によつて2回斬られた魔獸はのけ反つた後、自分の身体を揺らして小規模な地震を起こした。

「キヤツ！？」

地震によつて足元から土が盛り上がり、それによつて傷ついたツーヤは悲鳴をあげた。

「ツーヤ！」

「大丈夫です！水よ、癒しの力を……ヒールウォーター！！」

プリネの心配する声に自分は無事である事を答えたツーヤは魔術で自分の傷を治した。

（傷つければ地震を起こして、反撃をする……か。だつたら一気に決める！）

魔獸の攻撃を分析したツーヤは刀を構えながらジリジリと魔獸の周りを歩いて、睨みあつていた。そして睨みあいに耐えきれなかつた魔獸は尻尾らしき所から稻妻のような光を放つた。

「（……今！）ハアツ！」

素早く魔獸の懷に入つて魔獸の攻撃を回避したツーヤは刀を片手に持ち、もう一方の籠手のしている手で魔獸の腹の部分らしき場所を攻撃した。

「！？」

クラフト 延髓碎きを受けた魔獸は腹に入った一撃のせいで身体が痺れた。さらにツーヤは片手に持つていた刀を両手に持ち、鬪氣を込めたクラフトを放つた。

「斬！」

鬪気が籠つた斬撃のクラフト 十六夜”斬”を受けた魔獸は尻尾の部分と身体が分かれた。さらにツーヤは一気に勝負を決めるために一端後退して片手を空へ掲げて叫んだ。

「決めます……！凍れ！」

ツーヤが片手を空へ掲げると、魔獸の周りに吹雪が吹き荒れ、吹雪によつてできた氷が魔獸を氷の中に閉じ込めた。そしてツーヤは刀で氷の中に閉じ込めている魔獸を氷ごと碎くように激しい攻撃を行つた！

「ハアアアアアアツ……！ダイヤモンド……バーグ……！」

氷の中に閉じ込められた魔獸はツーヤの滅多斬りによつて消滅した。

「勝てました……！」

魔獸の消滅を見て、ツーヤは刀を鞘に収めて自分一人で勝てた嬉しさをかみしめた。

「終わったようね。」

「（）主人様。」

戦闘が終わり、近付いて来たプリネにツーヤは嬉しそうな顔で駆け寄つた。

「もう……無茶はしないといったのに、いきなりこんな事をするなんて……」

「ごめんなさい……でも、あたし……」

呆れているように聞こえたプリネの声にツーヤは氣不味そうな表情で口ごもつた。

「フウ……まあいいわ。私にもあなたの気持がわかるし、今回は多めに見てあげましょ。」

「ありがとうございます。」

「でも、もうさつきみたいな無茶は許しませんからね？」

「はい。」

プリネに許してもらえたツーヤはホッとした後、プリネの注意に頷いた。

「ハア……ハア……私を狙う無礼者達を成敗した事は感謝します、

闇夜の眷属達よ。」

そこに息絶え絶えな妖精がフラフラと飛んできて、プリネ達の前に来た。

「あの……顔色が悪いようですが、やはり魔力が？」

「……ええ。今は……こつやつて飛んでいるだけが……精一杯なのですわ……！」

プリネの言葉に妖精は顔色を悪くしながら悔しそうな表情で答えた。

「待つて下さい。今、魔力を分けます。」

そしてプリネは自分の魔力を妖精に分け与えた。魔力が回復した妖精は顔色がよくなり、プリネにお礼を言った。

「……まさかこの私が闇夜の眷属から施しを受けるとは思わなかつたわ……礼を言っておきますわ。私はフィニーリイ。精霊の中でも王族に値するこの私が感謝しているのです。光榮に思いなさい。魔力が回復して元気が戻った妖精　　フィニーリイは高貴な雰囲気を纏わせて、プリネ達にお礼を言った。

「私はプリネ。プリネ・マーシルンと申します。この子はツーヤ。竜の子供です。」

「……初めてまして。」

ツーヤは妖精であるフィニーリイを興味深そうな目で見つつ、お辞儀をした。

「……マーシルンですって？どうして闇夜の眷属の皇族がこんなところにいるのよ？」

プリネのフルネームを聞いたフィニーリイは驚いた後、尋ねた。

「実は……」

そしてプリネはフィニーリイに事情を説明した。

「フーン……ウィルみたいな奇麗な人間がこっちの世界にもいるのですね……」

「あの……今、ウィルとおっしゃいましたが、もしかしてウィルフレド・ディオンという方の事ですか？」

「ええ。あら、貴女もウィルと知り合いなの？」

「いえ、姉が以前ユイドラに滞在した事があつて、その時お世話になつたのがウイルフレド様だつたので、その時の事を話してくれたんです。貴女はウイルフレド様の仲間なのですか？」

「……まあそんなところですわ。」

「それにしてもわざわざユイドラからどうしてここに？」

プリネはユイドラに住んでるであろうフイニリイはどうして異世界にいるかわからず、尋ねた。

「……最近ユイドラのユマ湖という場所に変なひずみを感じたました。精霊王女である私がそれを見に行つたのですが、そのひずみは異界に繋がつていてる事がわかりました。それで私はユイドラに住む人間や生物達がそれに入らないように、ひずみに入つてそのひずみが出てる元であるこの世界から封印しました。それとユマ湖に住む水精や土精達から湖を守つっていた幻獣がひずみが出来た際、その中に入つてしまつたと聞きましてね……探す義理はないのですが、元の世界に帰るついでにその幻獣を探して世界中を廻つていたのですわ。」

「なるほど……それで探し人は見つかったのですか？」

「いいえ。ま、精霊である私と違つて異世界でも平氣でいられる幻獣ですから、どこかで無事でいるでしょう。それに巨大な体をしていますからこちちらで誰かに見つかれば噂になりますわ。その内見つかるでしょう。」

「そうですか……それで貴女はこれからどうするのですか?よければ、私が元の世界に帰れるよう手配をしますが。」

「そうですね……」

プリネの提案にフイニリイはその場で考へた後、以外な事を申し出た。

「貴女、私と契約をする気はない?」

「え……それはありがたいのですが、いいのですか?」

フイニリイの申し出に驚いたプリネは再度確認した。

「ええ。助けて貰つた恩を返さずに去るのは精霊の中でも王族種で

あるこの私の誇りが許しませんわ。それにユイドラに戻った所で
る事もなく、無駄な時間を過ごしているだけですわ。それに貴女は
皇女ですから、精靈王女であるこの私と釣り合つてちょうどいいで
しょう。……とこ'うかこれは命令です。私と契約をしなさい。」

「は、はあ……では……」

強引に契約を迫るフイニーリイにプリネは戸惑いながら頷いた後、両手を出した。そしてフイニーリイは槍を虚空に仕舞つた後、小さな手でプリネの両手を握つた後、プリネの魔力に溶け込むようにその場から消えた。

「あの、ご主人様。さっきの妖精の方はどうちらに？」

一連の流れを見たツーヤは消えたフイニーリイの事を聞いた。

「フフ、今呼びますね……フイニーリイ！」

プリネが呼ぶと、プリネの身体から光の玉が出て来て、やがてその中からフイニーリイが現れた。

「これからよろしくお願ひしますね、フイニーリイ。」

「フフ、この私が力を貸す事、光栄に思いなさい。」

フイニーリイは小さな身体ながらも豊かな胸を張つて答えた。

こうしてプリネは新たな仲間、精靈王女フイニーリイと契約した。そしてツーヤと共にエルモ村に戻つた……

第98話（後書き）

と言ひ訳で最後の新クロスオーバーキャラは神採りの2週目で登場するキャラです！実はユイチリの双子にしようかなと思いましたが、テトリと被るし、いきに2人も増えたら大変ですからフィニリイにしました。後、お気づきかと思いますがもう一人の新クロスオーバーキャラの存在を匂わせています。ちなみにエステルの残りの召喚キャラですが一人は決定しますが、もう一人増やそうかなと悩んでいます。ちなみにそのキャラは今後出てくるであろうエステルの新召喚キャラといつおう相容れない存在です。まあ、残りの属性や種族考えたらなんとなくわかると思いますが……感想お待ちしております。

無事ドロシーを紅葉亭に送り届けたエステル達は修理を終えたティータと合流し、時間も遅くなつたので女将から泊まっていくことを提案されありがたく旅館に泊まることにした。女将に勧められ旅館に泊まることになつたエステル達は部屋に荷物を置いた後、旅館名物の温泉に入つていた。

（エルモ村・紅葉亭・夜）

「はあ～気持ちいい。温泉つて初めてだけど予想以上ね。こりゃ、病みつきになつても仕方がないわ～。」

「えへへ……ミント、こんなに広いお風呂初めて！気持ちいいね、ティータちゃん！」

「えへへ、わたしもかなり病みつきなんです。小さな頃から、おじいちゃんに連れてきてもらつてましたから。」

エステルの呟きやミントの喜びにティータは頷いた。そこにリフィア達が入つて來た。

「わあ……」

「ほう、ウィルが作つた温泉と比べれば狭いがこれはこれでいいな！」

「ねえ、プリネ。なんでタオルを体に巻いてなきゃダメなの？邪魔なんだけど。」

「お姉様、基本的に女性は例え同性と入る時でも体を洗う時以外はあまり肌を晒してはいけないんですよ……それにここには男女混浴の温泉もありますから……」

「……別にそんなの気にしないんだけど。ウィルと入つた時も裸だつたし。」

「え……ま、まさか、リフィアお姉様も……？」

ツーヤやリフィアは温泉の風景に目を輝かせ、タオルを邪魔そうにしているエヴリーヌにプリネが説明したが、エヴリーヌの言葉に固まつた。

「ん。難しい杖を作ってくれたお礼にエヴリーヌといっしょにウイルの背中を流してあげたよ。なんか、ウイルは遠慮してたけど強引にやつたよ？」

「…………（お、お姉様達らしいといえばらしいですが、……）…………とにかく、エステルさんやティータちゃんを見ればわかると思いますが、温泉に入る時は必ず体にタオルを巻くものだと理解していく下さい。」

「ウイルから教えて貰つた”かけ湯”みたいな決まり事みたいなものだね。わかつた。」

そしてリフィア達は桶を使って湯を身体にかけた後、温泉につかつた。

「気持ちいいです……」

「ええ……湯加減もちゅうどいいし、本当に気持ちいいわね……」

温泉に入つて気持ちよさそうにしているツーヤの咳きに頷くよつて、プリネも気持ちよさそうな表情で同意した。

「う……（わかつてはいたけど、プリネって腰が細い上、胸が大きいわね……下手したらシェラ姉以上かも……うう、たつた2歳年上なだけなのにどうしてこんなに違うのかな？）」

「わあ……プリネさんって、スタイルがいいですね。」

プリネが温泉に入った時、湯につかつた為タオルが体に張り付きよく見えるようになつたプリネの体つきを見て、エステルは内心羨ましがり、ティータは感嘆の声をあげた。

「あ、あの……できれば、そんなによく見ないで欲しいのですが……」

エステルやティータに見られたプリネは恥ずかしそうな表情で両手で胸を隠した。

「そんな事言つたつて、実際プリネって女性として完璧なスタイル

だもん。同じ女性として普通、一体何をしたらそなうなるか気になるわよ……」

「それは余も思つたな。余と同じ食事をしているの」「じつしてそんなに魅力的な体に成長したのだ?」

「リフィアお姉様まで……私は特に何もしておりません。恐らくお母様の遺伝かと思います。それにリフィアお姉様も十分魅力的な体だと思うのですが……」

「そりか?余としてはもう少し背と胸があつてほしいのだがな……」
プリネの答えにリフィアはあまり成長しない自分の体を見て、唸つた。

「遺伝かあ……じゃあたしは、将来はお母さんみたいなスタイルかな?」

エスティルは自分の将来の姿をレナと重ねて思い浮かべた。

「ねえねえ、ママ。」

「ん? どうしたの、ミント。」

「ミントもプリネさんみたいに胸が大きくなれるかな?」

「あはは……それは成長してからのお楽しみね。まあ、食事は好き嫌いなく食べて、規則正しい生活をしていたら大丈夫だと思うわ。」

「えへへ、そつか。ツーヤちゃんも大きくなれるといいね!」

「うん。あたしも」「主人様みたいな女性を目指そうと思つているもの。」

「フフ……ありがとう、ツーヤ。」

自分が見本にされた事に照れながらプリネはツーヤにお礼を言つた。
「そういえば、エスティルさん。わたし、エスティルさんに聞きたいことがあるんですけど。」

「聞きたいこと? なになに? 何でも聞いていいわよ?」

ティータの疑問にエスティルは答える姿勢に入った。

「えと、あの、その……。エスティルさんとヨシコアさんって結婚して何年なのかなあって。」

「……………」

しかし、ティータの疑問に驚き、笑顔の状態で固まつた。

「ドキドキ……」

「ワクワク……」

「ジー……」

エステルが答えるのをティータやミントは目を輝かせて待ち、ツーヤは興味深そうな表情で待つていた。

「えっと、ゴメン。聞き間違つちゃつたみたい。あたしとヨシュアが何だつて？」

「あう、ですからあ。結婚して何年になるのかな～つて。」

「な、な、な……。なんでそうなるワケ！？」

固まつっていたエステルだが、ティータの疑問は何かの間違いだと思い、を聞き返すために尋ねたが返つて来た答えに絶叫した。

「だ、だつて名字が同じだし……。兄妹にしては似ていなかつてつきりそなのかな～つて……それにミントちゃんがエステルさんの事、”ママ”つて言つてますし。」

「に、似てないのは血がつながつていなかつ！みょ、名字が同じなのはヨシュアが父さんの養子だから！それにミントはあたしの養女みたいな感じだから、そう言つてるだけ！」

ヨシュアと結婚していると思つた理由にエステルは即座にヨシュアと夫婦でない理由を答えた。

「あ、そーなんですか……。えへへ、ごめんなさい。ちょっと勘違かいしちゃいました。」

「と、とんだ勘違いだわ……。そもそも、あたしもヨシュアもまだ16歳なんだから。結婚なんて全然先の話だし、ミントみたいな大きな子供がいる訳ないでしょ？」

ティータの勘違いにエステルは呆れながら答えた。

「そ、そーですよね。いくらお互いが好きでもそんなに早く結婚しませんよね。」

「エステル、ヨシュアとの結婚式を行う際は必ず余達を呼ぶのだと？その際は、余が最高の祝いの言葉を贈るわ。」

「ねえ、ママ。ヨシュアさんはいつ、ミントのパパになるの？」

「ガクッ……。だ、だからあ！あたしとヨシュアは恋人でも何でもないの！ただの家族よ、家族！」

ティータやリフィア、ミントの言葉を聞いたエステルは再び絶叫した。

「そ、そーなんですか！？」

「そーなんですかって…………。ねえ、3

人共。あたしとヨシュアってそーいう雰囲気に見える？」

「そーいう雰囲気つて？」

エステルの疑問にティータは首を傾げて尋ねた。

「だ、だから……。こ、恋人同士みたいな雰囲気よ。らぶらぶとかあつあつとかいちゃいちゃとか、そういうの。」

ティータの疑問にエステルは照れながら答えた後、顔を背けた。

「あつ……そーいう感じはしませんけど。でもでも、いつも一緒に自然な感じだし、お互いのことを分かり合ってるような感じだし……」

「ティータちゃんのいう通りだよ、ママ。ミント、ママとヨシュアさんはいつもにして当然みたいな雰囲気を感じたもの。」

「うむ。ずっと旅をして思つていたが、エステルの伴侶はヨシュアしかいないと余は思つているぞ？」

「いや、それはまあ、少しあはうかもしないけど……。それって、家族とか親友でもありそうな雰囲気じゃない？だいたい、あたしとヨシュアってそんな雰囲気になつたことすら……（な、何思い出しどんのよ～！つていうか、あたし今まであんな恥ずかしいことを平氣で……）」

3人が言つた理由をエステルは誤魔化して否定しようとしたが、旅に出る前にした口arentの時計台での約束やマノリア村で昼食をとつていた時の出来事等思い出した後、顔を真っ赤にして黙つた。

(「JH人様、どうしてエステルさんの顔が急に赤くなつたのでしょうか（うへ）」)

(「フフ、どうしてでしょうね？（エステルさん、とうとうエシュアさんの事を意識し始めましたね……）」)

エステルの様子を不思議に思い、ツーヤはプリネに尋ねたがプリネは顔を真っ赤にして俯いているエステルを微笑ましそうに見ながら誤魔化した。

「？？？エステルさん？お顔、まつかですけど……」

「あわわ……何でもない、何でもないから！いやー、それにしても温泉つてホントーに効くよね！？血の巡りが良くなりすぎて頭がクラクラするつていうかっ！」

「は、はあ……」

勝手に慌てて居るエステルの様子にティータは首を傾げながら頷いた。

「や、そういうえば露天風呂があつたんだっけ？のぼせてきちゃつたし、あたしかよつと行つてくるね！」

「あ、ママーミントもいつしょに行く！」

「あ、はい……あ、そーいえば、エステルさん、露天風呂つて……。

……混浴なんですけど。」

慌てているエステルは温泉から立ち上がり、ティータの言葉を最後まで聞かずには逃げるように露天風呂に行つた。そしてミントもエステルを追うように露天風呂に行つた。

(どうせエステルの事だからなんか騒ぎを起こしそう……H・V・R・Yは知~らない。……気持ちいい……後で露天風呂にも行こう……どんな温泉かな？ウイルが作つた温泉みたいなのがいいな……)

(は～、あせつた……。心臓がバクバクいってん……。あたしこの前からどうじちやつたんだろ……。今まで、ヨシュアをそういう風に意識したことなんてなかつたのに……。ええい、悩むのやめつーあたしのキャラじやないしつー)

露天風呂がある場所に出たエステルは先ほどのティーラ達との会話を思い出して顔を真っ赤にした後、首を何度も横に振つて忘れた後表情を元に戻した。

「うわあ～……すっごく広いね、ママ～。」

「そうね。じゃあ、いつしょに浸かるつか。」

「うん！」

露天風呂の大きさに喜んでこるミントにエステルは微笑ましそうな表情で見た後、ミントといつしょに温泉に浸かつた。

「は～っ、いい気持ち～！中のお風呂もよかつたけど外のはまた力クベツよねえ。うーん、広くてのびのびできるし……」

「ねえ、ママ～！こんなに広いんだから、いつしょに泳げりよー。」

「そうね……誰もいないみたいだからこは……」

ミントの提案にエステルが頷こうとした時、湯気の向こうから声が聞こえてきた。

「……言つておくけど、泳いだりしたらダメだからね。」

「ギクッ……な、何を言つてるのかしら！？そ、そんなことしないわよ！いい、ミント？いくら広いと言つてもこにはお風呂なんだから、そんな事はしたら駄目よ？」

「はーい。」

湯気の向こうから聞こえて来た注意の声にエステルは団扇をされただかのような表情をした後、ミントを諭した。

「あれ、ちょっと待つて……今の声つて……。」

ミントを諭した後、エステルは湯気の向こう方聞こえた声の主を思い出した後、团扇をじらして湯気の向こうを見た。すると湯気は晴れ、そこにはヨシュアが温泉に浸かっていた。

「…………え。」

「あ、ヨシュアさん。」

「やあ、エステル、ミント。お先に入らせてもうひとつ入るよ。はは……」

この格好だとさすがにちょっと照れるね。」

ヨシュアを見て、エステルは口を開けたまま放心した。

「露天風呂つて広くてお星様が見えて素敵だね、ヨシュアさん！」

「ハハ、そうだね。」

ミントとヨシュアが和やかに会話をしている中、エステルは放心の状態から戻らなかつた。

「ママ? どうしたの??」

「えっと、その……。こういう状況で黙られると落ち着かないんですけど……」

エステルの様子にミントは首を傾げ、ヨシュアはエステルの様子を見て居辛そうに言つた。

「え、う、あ……。きやああああああああああ！」

ようやく我に返つたエステルは旅館全体に響き渡るほどの声を上げ、旅館の女将から注意をされた……

第99話（後書き）

みなさん気がなついているプリネのスタイルですが、上から88、56、85です。……感想お待ちしております。

第100話（前書き）

今回の話でみなさん、ヨシコアに殺意が沸くかもしれませんね。

その後、騒ぎを聞きつけたリフィア達も露天風呂に目を輝かせた後、エステル達といっしょに露天風呂に浸かつた。

（エルモ村・紅葉亭・夜）

「は……なんか思いつきり疲れた……。うーつ、それもこれも全部、ヨシュアのせいなんだからっ！」

女将から注意された事や女将の「女の肌つてのは見られてキレイになるもんだからね。」という「冗談を信じたティータやミント、ツーヤに冗談である事を指摘したエステルは溜息をついて、ヨシュアを睨んだ。

「なんで僕が……。結局、エステルが一人で大騒ぎしてただけじゃないか。脱衣場の張り紙も見てないし、日頃の注意力が足りない証拠だね。」

エステルのハツ当たりにヨシュアは呆れて答えた後、注意が足りない事を指摘した。

「よ、よけーなお世話！ほんとにもう、可愛くないんだからっ！」

「あー、そうですか。いいよ、別に。君に可愛いと思われたって嬉しくともなんともないからね。」

「あ、あんですって！？」

「大体、なんだよ。人を見るなり悲鳴を上げて……。そんな反応されるなんて……夢にも思わなかつたよ。」

「あ、あれはその……あまりにもタイミングが……。別にヨシュアと一緒にがイヤつてわけじゃないからね？」「

「いいよ、無理しないで。僕はもう上がるからみんなでゆっくり入つていきなよ。」

「無理してるなんて一言も言つてないでしょっ！ヨシュアのバカつ

！」

「む……バカはどつね。」

「ブツクククク……」

「「フフ……」」

「「クスクス……」」

「キヤハハハ……」

エステルとヨシュアの言ひ合いにリフィア達は笑いを抑えきれずそれぞれ笑い声をあげた。リフィア達の笑い声が聞こえたエステルとヨシュアは言い合いをやめて、固まつた。

「ほ、ほらー！ リフィア達どころかティーラちゃんにも笑われちゃつたじゃない！」

「だからなんで僕が……。」「「めんね。みつともなこと」」見せて。

「あ、ううう。笑つたりしてごめんなさい。ただ……うらやましいなって思つて。」

エステルのハツ当当たりに呆れたヨシュアはティーラに謝罪したが、ティーラは逆に笑つた事を謝罪した後エステルとヨシュアを眩しいものを見るかのような目で見た。

「う、うらやましい？」

「えつと……どうして？」

ティーラの言葉にエステルは驚き、ヨシュアは尋ねた。

「わたし、兄弟がいないからケンカとかしたことがないんです。おじいちゃんは優しいからあんまり叱られたことないし……。お父さんとお母さんはあんまり一緒にいられないから……」

「え……」

「あの、ティーラちゃんのお父さんとお母さんって……？」

寂しそうな表情で家族の事を語ったティーラにエステルは驚き、ヨシュアは尋ねた。

「博士の『』息女……確かに、エリカ・ラッセルだったか。夫のダン・

ラッセル共々導力技術者で他国でオーブメントの普及していない村や町で技術指導をしていると博士から聞いた事があるが、今でもそ
うなのか?」

「……あ、はい。だから、もう何年もツアイスに戻つて来てないんですね

ラッセル博士から家族の事を聞き、ティータの両親の事を覚えていたリフィアはティータに確認し、それに頷いたティータは寂びそうな表情で頷いた。

「そうだつたんだ……」

「それは寂しいね。」

「ティータちゃん、寂しくないの？」

あまり両親といつしょにいた事がない

ア、ツーヤは気不味そうな表情で見て、ミントは尋ねた。

「そんな」と、ないよ。おじいちゃんがいてくれるから。中央工房

の人たちもみんな親切でいい人ばかりだし。でも……エヌテルさん

蓮を見てくると妙に心地が良き感じになつて……

「エヴリーヌはなんとなくティータの気持ち、わかるよ。リウイー

兄ちゃんがエヴリーヌを引き取つてくれるまで、ほとんど一人ぼつちで凄く寂しかったから……」「

「エヴリーヌお姉様……」

ティータの気持ちに同意したエヴリーヌをプリネは何故血も繋がつ

ていな自分を妹として可愛がってくれるエヴリーヌの気持ちがなんなくわかり、見つめていた。

「ティータちゃん……」

笑顔の中に隠されている悲しみに気付いたヨシュアは何も言えなか
つ。¹¹

「 た
。」

一方黙つて考えていたエステルは口を開いた。

「え……」

「エステル?」

「あたしが、ティータちゃんのお姉さんになつてあげるわーちなみにヨシュアはお兄さん。」

「ふえつー?」

「わあ……！」

「はあ……また突拍子もないことを……」

エステルの提案にティータは驚き、ミントは顔を輝かせ、ヨシュアは呆れて溜息をついた。

「なによう、文句でもあるの?」

「いや……エステルらしいと思つてね。僕も異存はないよ。ティータちゃんさえよければね。」

自分の提案に反論がありそうな事に気付いたエステルの睨みにヨシュアは微笑ましそうな表情で首を横に振つてティータに確認した。

「…………あ…………あ、ありがとう……エステルさん、ヨシュアさん。わたし、わたし……なんだかすっごく嬉しいですっー！」

「よかつたね、ティータちゃん。」

尋ねられたティータは顔を輝かせ、最高の笑顔でお礼を言った。ツーヤはティータの喜びを自分のように感じて祝福した。

「それじゃあ、決定つ！ あ、そういう。もう『さん』付けはナシね？ 代わりにあたしたちも呼び捨てにさせてもらつから。」

「そうだね。あと、博士と話す時みたいに気軽に喋つてくれると嬉しいな。」

「あ、あひ……。せん付けはやめて気軽に……。」

エステルとヨシュアの言葉に頷いたティータはしばらぐの間考えて、エステル達の新しい呼び方を言った。

「エステルお姉ちゃん。それと、ヨシュアお兄ちゃん。……い、これでいいのかなあ？」

「うん、バツチリ！」

「あらためて、よろしくね。」

新しい呼び方に頷いたエステルに同意するよつこシコアも頷いた。

「ねえねえ、ママ。」

「ん？ どうしたの、ミント。」

「ママとヨシコアさんがティータちゃんのお姉さんだったら、ミントはどうなるの？」

「え？ えーと……」

ミントの疑問にエステルは唸りながら考えた。

「ふむ。エステルが姉でティータが妹だとすると、エステルの娘であるミントにどうしてティータは叔母になるんだ。」

「え。」

「ふ、ふえええっ！？」

唸っているエステルに代わって答えたリフィアの言葉にエステルやティータは驚いた。

「ねえ、ママ。ミント、ティータちゃんの事を叔母さんって言わなくちゃダメなの？」

「絶対駄目よ！ だから、今まで通りの呼び方で呼んであげなさい。ミントに尋ねられたエステルは驚きから立ち直った後、強く言った。

「うん。ごめんね、ティータちゃん。」

「あはは……あまり気にしていないから大丈夫だよ、ミントちゃん。」

申し訳なさそうに謝るミントにティータは苦笑しながら答えた。

「そうだ！ 妹になつた記念にティータに素敵な子と会わせてあげるわー！」

「ふえ？ エステルさん達以外にもいるんですか？」

エステルの言葉にティータは首を傾げた。

「うん。……パズモ！」

呼ばれたパズモはエステルの肩に止まつた。

「あーお芝居の時にいた妖精さんだ！ そうだよね、ツーヤちゃん。」「うん。エスティルさんの妖精さんだつたんだ……」

パズモの姿を見て、学園祭の劇で見た事のあるパズモを見てミントは目を輝かせていつしょに劇を見たツーヤに確認した。

「わあ……その子って妖精さんですか！？」

「ええ、パズモって名前よ。小さいけど凄く頼りになるあたしにとつて親友の一人よ！」

（よろしくね。）

パズモはティーエタの目の前に飛んで来て、笑顔を向けた。

「ねえねえ、ママ！」

「ん？ 今度は何？」

パズモを見て興奮が収まつていらない様子のミントに尋ねられたエステルは聞き返した。

「ママ、他の妖精さんともお友達なの？」

「ええ。……そうだわ！ こんなに広いんだし、他のみんなにもこここの温泉に浸かってもらつたほうがいいわね！ ティーエタにも紹介したいし、プリネもそうしなよ！」

「そうですね。では……」

エステルの提案にプリネは頷いた。そして2人はそれぞれ現在契約している者達を呼んだ。

「サエラブ！ テトリ！」

「ペルル！ マーリオン！ フイニリイ！」

2人に呼ばれた精霊や幻獣達は姿を現した。

「「わあ……！」

「こんなにいるんだ……！」

エステルやプリネが契約している精霊や幻獣達を見てティーエタやミントは目を輝かせ、ツーヤは数の多さに驚いた。

「あれ？ 一人、見た事がない子がいるようだけど……」

フイニリイを見てエステルは首を傾げた。

「ああ、その子はフイーリイと言ひて、今日契約した子なんです。」「へえ……」

プリネの説明を聞いたエステルはパズモやテトリーとは異なる妖精であるフイーリイを興味深そうな目で見ていた。

「あら、何故あなたがこんなところにいるんですの？」

（私は仙狐様の命によつてこの世界の探索を任せられ、世界を廻る上で我的存在に理解あるエステルと契約していれば効率的に世界を廻れるから今、ここにいるだけだ。そういうお前に何故こんなところにいる。）

「ま、私にも色々と事情がありますのよ。」

フイーリイはサエラブに気付き尋ね、尋ねられたサエラブは答えた後、逆に聞き返し、フイーリイは高貴な雰囲気を纏つて答えた。

「え、サエラブってそこの妖精と知り合いなの？」

（……まあな。）

お互い知り合いのように話すサエラブとフイーリイを見て、エステルは尋ねた。

「ちょっとそこの人間！私をただの精靈と思わないでよねー私は精靈の中でも王族種の”精靈王女”よ！」

「せ、精靈王女……プリネもなんか凄いのと契約したわね～……」

「フフ……ああこいつ風に高慢に見えますが、以外と優しいところはありますよ。」

エステルの感心した言葉にプリネは微笑みながら答えた。

「みなさんも温泉に入つたらどうですか？気持ちいいですよ。」

「サエラブやテトリも入つたら？」

（フン……）

「ありがとうござります。じゃあ、お言葉に甘えさせていただきますね。」

「フフ、私の魅力的な体を見て、驚くがいいわ。」

「うん！」

「プリネ様……水精の私は湯の影響を……受けてしまいますので……」

「戻させていただきます……」

「そうね、わかつたわ。」

マーリオンだけは戻り、プリネやエステルの申し出に頷いたサエラブはそのまま温泉の中に浸かり、テトリ達は来ている服を脱ぎだした。テトリ達の行動に気付いたヨシュアは慌ててテトリ達に背を向けた。

「う……（なんでプリネが契約している子達ってあんなにプロポーションがいいの！？フイニリイなんか、あんな小さい身体をしているのに胸はプリネやペルル並とか、どういう風に育つたのよ！？）

「エステルは服を脱いで露わになつたペルルやフイニリイの体を見て女性として、スタイルが圧倒的に違う事に唸つた。

「エステルさん？どうしたんですか？」

「な、何でもないわよ！（う……よく見たらテトリも結構胸があるわよね……エヴリーヌもわりとあるし……この中で胸が小さいのつてあたしとリフィアぐらいじゃない……）」

「どうしたんですか、エステルさん？私の体をそんなにじつと見て。」

テトリは自分の体を見て溜め息をついた、エステルを見て尋ねた。
「な、なんでもないわ！それより、テトリ達もタオルを付けないと！ここにはヨシュアもいるんだから……今、とつて来るわ！」

「あ、はい。ありがとうございます。」

そしてエステルはテトリ達の分のタオルを持って来て、体に付けさせた。また、パズモはエステルが桶に湯を組んで、それにパズモは服ごと浸かった。そしてエステル達は談笑し始めた。ヨシュアはその中に入るのは居心地が悪いと感じ、少し離れた所で湯に浸かっていた。そこにサエラブが静かに近付いて来た。

「やあ、サエラブ。君はあの中に入らないのかい？」

（……お前に少し聞きたいことがある。）

「僕に？ 一体何を聞きだいのかな？」

(小僧……貴様、何者だ。欲に溺れた市長がエステルに銃口を向けた時、出した殺氣……あれは人を殺した者しか出せない強力な負の気が混じった殺氣だつた。少なくともエステルのような、光の下で育つた人間ではないな?)

「…………何が言いたいんだい？」

サエラブの念話にヨシュアは目を閉じて黙つた後、静かに言つた。
(別にお前が何者だろうと我には関係ないことだが、これだけは言つておく。もし、貴様がエステルを害するような事があれば、我は全力を持つて貴様を排除する。……例え、エステルがそれを望まなくともな……)

「…………そんな事は絶対しないよ……だって、僕はエステルの事を…………」
サエラブの警告にヨシュアは首を横に振つて否定し、何かを言いかけたが辛そうな表情で言つのをやめた。
(小僧、もしやお前…………フン、そういう事か。まあいい、今のが言葉……心に刻んでおけ。)
「…………」

サエラブの念話にヨシュアは目を閉じて、黙つていた。

「おーい、サエラブー! こっちに来てよー! ティータ達、あなたと話をしたいんですけど!」
(フツ……相変わらず、騒がしい娘だ……だが……悪くない気分だ……)

そしてサエラブはヨシュアから離れて、エステル達のところに行つた。

「…………僕が何者……か。…………そんなの、僕が知りたいよ…………」
ヨシュアは夜空を見上げて、寂しそうに呟いた……

第100話（後書き）

と書いた訳でヨシュア、腹の立つ事にエステルやプリネ達だけでなく、テトリ達ともいつしょに温泉に入りました。後、今回の話でストックが切れたので更新はしばらくストップです。更新再開はまあ、テイルズと碧が終わるまでないと思います……感想お待ちしております。

第101話（前書き）

お久しぶりです！テイルズ1週目終わり、碧も今日クリアしました！なので連載再開です！！まあ、以前のような連日連載はできませんが、週1～2ペースで安定した出し方をしばらく続けて行くので楽しみにしていて下さい！ちなみに現在ツァイス編を終えて、グランセル編を書き始めているところです！

（ツアイス市・中央工房）

翌日、ツアイスに戻るドロシーを連れてエステル達はツアイス市に戻り、騒ぎが起こっているに気付き駆けつけて事情を聞けば、謎のガスが突如発生したラッセル博士の姿が見えないことに気付き、博士の捜索とガスの発生原因を探すためにティータを連れ、またリフィア達には非難した作業員達から詳しい情報収集を頼み、煙が充満している工房の中に入った。

「うわっ……これは確かに煙っぽいわね。……でも、そんなに息苦しくないのはなぜかしら？」

「前があんまり見えないよ。ママ……」

「大丈夫よ、ミント。あたしが絶対守つてあげるから離れないよう、あたしの手を握つていなさい！」

「うん！」

煙によつて前が見えにくいためミントだが、エステルの言葉を聞いて立ち直り、エステルの手を握つた。

「このモヤは……多分、撓乱用の煙だと思う。フロアのどこかに発煙筒が落ちていると思つ……」

「へつ？」

「ほえ？」

「ど、どうしてそんなものが……？」

ヨシュアの推理に3人は疑問を持つた。

「今は博士の無事を確認しよう。」

「……そうね。博士はやつぱり3階の工房室にいるのかしら？」

「う、うん……たぶんそうだと思つけど……」

エステルに尋ねられたティータは不安そうな表情で頷いた。

「ママ、急いで…ティータちゃんのお祖父ちゃんが心配だよ…」

「ええ、そうね！」

そして4人は3階の工房室に入ったがそこにはだれもいなく、機械だけが空しく動いていた。

「誰もいない……ていうか、どうして機械だけが動いているわけ?」「ど、とりあえず機械を止めなくっちゃ。」

ティータは急いで機械を止めた。

「ふう……おじいちゃん……どこにいらっしゃたのかな?」

ヨシュアはあたりを見回しあることに気付いた。

「博士もそうだけど……『黒の導力器』も見当たらぬ。これはひょつとすると……」

状況を見てヨシュアがある事を言おうとした時、ある人物が部屋に入つて來た。

「フン、ここにいやがつたか。」

「ア、アガット!？」

「どうしてこんな所に……?」

部屋に入つて來た人物 アガットにエステルとヨシュアは驚いた。
「そいつはこっちのセリフだぜ。騒ぎを聞いて来てみりやまた、お前らに先を越されるとはな。つたく半人前のくせにあちこち首突つ込みすぎなんだよ。」

「こ、こんの……あいかわらずハラが立つわねえ！」

アガットの言葉にエステルは腹が立つた。

「あの……お姉ちゃん達の知り合い?」

「アガットさんって言つてね。ギルドの先輩ブレイサーなんだ。」

「ふえ、そうなんだ。」

「じゃあ、もしかしてママのお仕事のお仲間さん?」

「あ、まあ、そうなるわね……」

ヨシュアとティータ、エステルとミントの会話でティータとミントの存在に気付いたアガットは顔色を変えた。

「おー、ちよつと待て。どうじでガキどもがこんなところにやがるー。」

そう言つてアガットはティータとミントを睨みつけた。

「…………ひつ…………」

「怖いよ、ママ……」

睨みつけられたティータは齧え、ミントはエステルの後ろに隠れた。「ちょ、ちょつとーなに女の子を齧かしてんの！？」

「…………。チツ…………。言いたいことは山ほどあるが後回しにしといてやる。それで、一体どうなつてるんだ？」

エステルの怒りを舌打ちをして流したアガットは状況を尋ねた。

「はい、実は……」

ヨシュアはラッセル博士の姿が見当たらぬことや発煙筒が置いてあつた事等を説明した。

「フン、発煙筒といい、ヤバい匂いがブンブンするぜ。時間が惜しい……。とつととその博士を探し出すぞ！」

「「うん！」

「了解です。」

「…………おじいちゃん…………」

アガットの言葉に頷いたエステル達はそれぞれ返事し博士を探した。

そしてある階層に入つた時声が聞こえてきた。

「…………待たせたな。最後の目標を確保した。」

「よし…………それでは脱出するぞ。」

「用意はできるだろうな？」

その声にエステル達は気付いた。

「今のは…………」

「急ぐぞ、エレベーターの方だ！」

そしてアガットは剣を抜きエステル達と共にエレベーターがある方に向かつた。

そこにはラッセル博士を拘束したルーアンの灯台で対峙した黒装束の男達と同じ姿をした男達がエレベーターに乗り込とした。

「いた……！」

「てめえらは……！」

「お、おじいちゃん！？」

「ティータちゃんのお祖父ちゃんをどうするの！？」

一瞬で状況を理解したエステル達は武器を構え警告した。

「むつ……アガツト・クロスナー！？」

「面倒な……ここはやり過いすぞ！」「

そして男達は博士を連れてエレベーターの中に入った。

「ま、待ちなさいよ！」

「逃がすか、オラア！」

しかし一步遅くエレベーターの扉は閉まった。

「クソ……間に合わなかつたか！」

「も、もう一步だつたのに……」

「そ、そんな……どうしておじいちゃんを……」

「ティータちゃん……」

「とにかく非常階段で下に降りましょ。」そのまま中央工房から脱出するつもりみたいです。」

「ああ、逃げるしたら、町かトンネル道のどちらかだ。急ぐぞ、ガキども！」

ヨシュアの推理に頷いたアガツトはエステル達を促した。

「言われなくても！」

そしてエステル達はリフィア達に事情を話した後、手分けして地道、街中を探したが黒装束の男達は親衛隊の軍服に着替え逃げたことしかわからず博士は見つからなかつた……

第101話（後書き）

前書きにも書きましたがテイルズ、碧共に全然やりこんでないので更新のスピードは相変わらず遅いのは勘弁して下さい。テイルズはミラ編クリアしていないし、碧は取り逃したレコード（特に？？？？？）撃破とか（強すぎて勝てないです（泣））とつてエクストラ解放したいですから！ちなみに私は一週で2100ポイント溜めましたなのでステータスや武器の類がほとんど引き継げる……よかつた……後、まさかの神採りアpend3の登場…………どれをやれと！？余談ですがエウショリーの過去作品を買いあさってやってみたのですが、とりあえず冥色のへは投げました。（オイ！）戦女神や幻燐とやり方が全然違うし、難し過ぎです！！姫狩りやりたいが全然そんな時間がない……

第102話（前書き）

今更思つたのですが、碧でガイ殺害の犯人がわかつた上エオリアや
リンのクラフトが判明してしまつた……焰の方をかなり書きなお
さなければならぬ事にかなり憂鬱です…………どうしよう……
：

第102話

(遊撃士協会・ツァイス支部)

結局博士は見つからず通報を受けた王国軍と中央工房にそのことを伝えた後、エスティル達はギルドに報告するため一端、ギルドに戻った。そこにキリカと遺跡を研究している教授、アルバ教授がいた。

「いい所に戻つてきたわね。」

「あれ? ...」

「あなたは...」

「...」

(「ご主人様、どうしたんでしょう?...?いつも優しい雰囲気を出しているのに、今はなんだか怖い雰囲気を出しています...」)

エスティルとヨシュアはギルドに予想外の人物 考古学者のアルバ教授がいたのを見て驚き。プリネ達は顔には出さず警戒し、ツーヤはプリネが出している雰囲気に首を傾げた。

「おや...エスティルさん、ヨシュアさん。それにあなた達は琥珀の塔の時のお嬢さん達...お久しぶりです、お元気でしたか?」

「ええ。」

「うむ。」

「...」

「アルバ教授じゃない。ツァイスに来てたんだ。なに、護衛を頼みに来たの?」

気軽に挨拶したアルバ教授にプリネ達は警戒しながら、最低限に挨拶を返し、エスティルはプリネ達の雰囲気に気付かず呑気に話しかけた。

「それどころじゃない。犯人たちの行方が判つたわ。この人はその目撃者。」

「へ……！？」

「なんだと！？」

教授が協会に来た理由を説明したキリカの言葉にエステルやアガツトは驚いた。

「つーん、やつぱりただ事じゃなかったんですね。いやはや、通報に来てよかつた。実は私、ついさっきまで塔の調査をしてたんですよ。」

「塔といつと……。例の『四輪の塔』の一つですね。以前のようこの塔を？」

「この辺りだと平原道の北にある『紅蓮の塔』だな……」
プリネが尋ね、アガツトはツァイス周辺の地理を思い出して、対象になる塔を声に出した。

「ええ、そしたら軍人が数名、中に入つてくるじゃないですか。最初は王国軍の調査でもあるのかと思ったんですが……。陰から様子をうかがっていると誘拐だの、逃走ルートだの、不穏な言葉が出てきましてねえ。気になつてしまつたので、こちらに通報に来たわけなんです。」

「その軍人たち……どんな軍服を着ていましたか？」

教授の説明を聞いて、ヨシュアは気になつていてる事を尋ねた。

「ええと、蒼と白を基調にした華麗な軍服を着ていましたが……。さすがは女王陛下の国。軍人までも洒落ていますねえ。」

「決まりだな……。『紅蓮の塔』に急ぐぞ！」

「うん！」

「わかりました！」

アガツトの言葉にエステルとヨシュアは頷いた。そこにティーエタが遠慮気味に話しかけた。

「あ、あの……お姉ちゃんたち、お願ひ……わ、わたしも連れていつて……！」

「ティーエタ……」

「それは……」

ティーラの懇願にエステル達は悩んだがアガットはすでに返事を決めていたようではなかった。

「いら、チビスケ。」

「ふえつ？」

「あのな……連れていけるわけねえだろが。常識で考えろよ、常識で。」

「で、でもでも……！おじいちゃんが攫われたのにわたし……わたし……！」

アガットの反対にティーラは食い下がろうとした。

「時間がねえからハツキリ言つておくぞ……足手まといだ、付いてくんna。」

「……つー！」

アガットの言葉にティーラは泣きそうな顔をした。

「ちょ、ちょっとー少しさは言い方つてもんが……」

「黙つてろ。てめえだつて判つてるはずだ。シロウトの、しかもガキの面倒見てる余裕なんざねえんだよ。」

「そ、それは……」

ティーラの様子を見兼ねたエステルがアガットを咎めたが、アガットの言葉に反論が見つからず黙り、ヨシュアに助けを求めた。

「ねえ、ヨシュア、何か言つてよー！」

「残念だけど……僕も反対だ。あの抜け目のない連中が追撃を予想してないわけがない。そんな危険な場所にティーラを連れて行くわけにはいかないよ。」

「ヨ、ヨシュアお兄ちゃん……」

「うーつ……」

ヨシュアの答えにティーラは泣きそうな表情をし、エステルは唸つた。そして申し訳なさそうな表情でティーラに謝った。

「……ごめん、ティーラ。やっぱ連れていけないみたい……」

「エ、エステルお姉ちゃん……。ひどい……ひどいよおつ……」

最後の頼みの綱であるエステルからも断られティータは泣きながらギルドを出て行つた。

「ティータちゃん！」

「あ、ミント！」

ティータを追いかけたミントを追いかけようとしたエステルだったが、ヨシュアに止められた。

「……待つた、エステル。今はミントに任せておこう。一刻も早く博士を助けて彼女を安心させてあげるんだ。それにどの道ミントとツーヤはティータと同じ理由で連れて行けないよ。彼女達はそれなりに実力はあると思うけど、あの連中相手にはキツイと思うし。」

「……わかった……。確かにそれしかないかも。」

ヨシュアの説明にエステルは頷いた。

「ご主人様……」

ツーヤは懇願するような目でプリネを見上げた。

「わかっているわ。2人を追いかけて。ティータちゃんが落ち着いたら、ギルドで待つてて。」

「……はい！」

プリネの答えに頷いたツーヤは急いでミントとティータを追いかけてた。

「プリネ、余達も行くぞ！」

「はい！」

「ん。」

「待つて。貴女達にはほかにやつてもらうべき事があるから。」

リフィアの言葉にプリネとエヴリースは頷いたが、キリカの言葉で留まつた。

「む？ 一体、それはなんだ？」

キリカの言葉にリフィアは首を傾げて尋ねた。

「ここからエルモ村まで護衛の依頼が来ているの。それもできれば、今すぐがいいそうよ。今、空いている遊撃士がいないから貴女達に

やつてほしいの。」

「もう……民の声を無視する訳にはいかぬな……すまぬが、エスティル。そう言ひ訳だから、お主達と共に博士を攫つた賊共は追えん。」

「大丈夫よ！本来だつたら、あたし達が受ける仕事をリフィア達が代わりにしてくれる事だけでも凄くありがたいのだから！そっちもがんばつて！」

「うむ！」

「はい！」

「……はい。これは遊撃士協会が貴女達を信用して、遊撃士の代わりに派遣してあることが書かれてある書状。依頼者に何か言われたらこれを見せて。」

キリカは書状を一枚プリネに渡した。

「ありがとうございます。」

「つたく……。余計な時間を取りらせやがつて。キリカ！軍への連絡は任せたぞ！」

「ええ、そちらも武運を。」

「どうやら大変なことが起じつているようですね……。くれぐれもお気を付けて。」

キリカとアルバの応援の言葉を背に受けたエステル達はギルドを出て、依頼者の元に行くりフィア達といったん別れて、紅蓮の塔へ急いだ。

（ラッセル家）

エステル達が紅蓮の塔へ、リフィア達が依頼者の元へ向かっている一方、ティータを追いかけたミントとツーヤはラッセル家のリビングで涙を流して泣いているティータを見つけた。

「ううう……ひっく……みんなひどいよ……」

「ティータちゃん……」「

泣いているティータを見て、ミントやツーヤはかける言葉がなく、

その場にずっと立っていた。そしてティータはミントとツーヤに気が付いて、泣きはらした顔でミント達に尋ねた。

「ひっく……ミントちゃん達も来るなって言いに来たの……？」

「違うよー!!ミントはただ、ティータちゃんが心配になつて追い掛けただけだよ！」

「あたしもミントちゃんと同じ理由。友達が泣いているのを知らないフリ、できないもの。」

「ミントちゃん、ツーヤちゃん……」

ミントとツーヤの言葉を聞いたティータは少しの間、2人をジッと見た後、涙を拭つて尋ねた。

「もし、エステルお姉ちゃんやブリネさんがお祖父ちゃんみたいな事になつたら、どうするの？」

「そんなのもちろん、助けに行くに決まつているよー。」

「……例え止められてもあたしは」主人様を助けに行く。あたしやミントちゃんによつて”パートナー”はあたし達の半身のような存在だから。」

「そう……なんだ。そうだよね…………！」

2人の答えを聞いたティータは決意を持つた表情で座つている椅子から離れ、立ち上がりつて2人を見た。

「2人ともお願ひ！お祖父ちゃんを助けに行かせてー私にとつてお祖父ちゃんはとっても大切な存在だから、待つていられない！」

「ティータちゃん……うん、わかった！」

「ミントちゃん！？」

ティータの頼みをあつさつ頷いたミントの言葉を聞いて、ツーヤは驚いた。

「その代わり、ミント達もいっしょに着いて行くね。ティータちゃん一人だけで行かせるのはとっても危ないもの。」

「うん、わかった！」

ミントの答えにティータは表情を明るくして答えた。

「ミントちゃん……本当にいいの？後でエステルさん達に怒られる

かもしけないよ。」

「……うん、わかっている。でも、ティータちゃんの事も放つておけないよ。この事はミントの我儘だからツーヤちゃんは無理して着いて来なくて済みントはツーヤちゃんの事、嫌いにならないよ。怒られるのはミントだけでいいし。」

「もう……あたしはそんな薄情じゃないよ。もちろん、あたしも着いて行くよ。」

ツーヤは溜息をついて答えた。

「ありがとう、ツーヤちゃん…じゃあ、ティータちゃん。紅蓮の塔への道のりを頼むね！」

「戦闘になつたらあたしとミントがティータちゃんの事、守るからティータちゃんは後ろから援護をお願い。」

「うん、わかったーじゃあ、行こう。」

そしてミント達はエステル達を追いつめ红莲の塔に向かった……

第102話（後書き）

次回はプリネ側の話です。ちなみに次回の話では以外なキャラが登場します。…………感想お待ちしております。

第103話（前書き）

今、エスティルの新Jクラフトを思案中なのですがひょっとしたら、零か碧の誰かのJクラフトをFJで出すかもしません……！

～ツァイス市内～

一方プリネ達はエルモ村までの護衛を依頼した依頼者と待ち合わせをしている場所に向かつた。そこには誰かを待つているように、時計を何度も見ている男性がいた。その男性が依頼者だと思い、プリネ達は男性に話しかけた。

「すみません、遊撃士協会の者ですが貴方が依頼者という事でよろしいでしょうか？」

「はい！すみません、急な依頼を出してしまって……」

男性は帯剣をしているプリネを見て、遊撃士と思い、表情を明るくした。

(…………ん？…………この顔…………どこかで見た事があるぞ…………？)

リフィアは男性の顔を見て首を傾げた。

「いいえ、気にしないで下さい。それでエルモ村までの護衛を依頼したとの事ですが……」

「はい。私はクロスベルで商業を営んでいる者なのですが今、リベルには家族旅行を来ていまして、ツァイス市の観光名所の一つとしてエルモ村の温泉に行きたくて……」少しひらはクロスベルのようバスがありませんでしたから、

どうやつて街道を越えてエルモ村に行こうか悩んで遊撃士協会に相談したら、受付の方が村までの護衛も仕事の一つとして請け負つて下さるという事で依頼を出させていただきました。

「そうなのですか……家族を大切になされて、家族の方達も幸せですね。」

「ハハ……ただ……私にはそんな事を言われる資格なんてないのです。」

プリネに褒められた男性は苦笑した後、一瞬表情を暗くした。

「え？」

男性の言葉にプリネは首を傾げた。

「おつとー今のは独り言ですから気にしないで下さい。」

「はあ……」

慌てて言い訳をする男性の事をプリネは不思議に思った。

「それで? 家族の人達はどこにいるの?」

「はい。今は別の所で待つてもらっていますので連れてきます。それで申し訳ないのですが、エルモ村方面に向かう出口で待つててもらつていいでしょうか?」

エヴリーヌの疑問に男性は申し訳なさそうな表情で尋ね返した。

「わかりました。そう言えば自己紹介がまだでしたね。プリネと申します。よろしくお願ひします。」

「余はプリネの姉のリフィアだ。」

「……私、エヴリーヌ。」

「これはご丁寧に。私はハロルド・ヘイワースという者です。それでは家族を連れてまいりますので、出口で待つて下さい。」

「はい、わかりました。(ヘイワース? 聞き覚えのある名前ですね?)」

「? ……どこで聞いたのでしょうか?」

「! ! !」

男性 ハロルドが名乗るとプリネは聞き覚えのある名前に心の中で首を傾げ、リフィアは声に出さず、驚いた。そしてハロルドはプリネ達の元から一端去った。

「リフィア、どうしたの? 出口の方に行くよ?」

驚いている風に見えるリフィアに首を傾げつつ、エヴリーヌはリフィアを促した。

「あ、ああ。」

エヴリーヌに言われて、我に返つたリフィアは気を取り直してプリネ達と共に街の出口まで行き、ハロルド達を待っていた。そしてし

ばらくすると、妻らしき女性と息子りしき男の子を連れたハロルドがプリネ達の所に来た。

「お待たせしました。こちらが妻のソフィアと息子のコリンです。」

「ソフィアと申します。本日はよろしくお願いします。」

「こんなちばへ、お姉ちゃん達。」

女性 ソフィアは軽く会釈をし、男の子 コリンは無邪気な笑顔で挨拶をした。

「よろしくお願ひします。じゃあ、早速ですが行きましょうか。」

「はい、よろしくお願ひします。」

そしてプリネが歩き出すとハロルド達はプリネについて行った。その様子をリフィアは後ろから複雑そうな表情で見ていた。

(…………まさかこんな所で会つ事になるとはな…………)

「リフィア、どうしたの? セツから考え事ばかりで今日のリフィア、変だよ?」

「少し……な。あの者達と別れてから理由を話す。行くぞ、エヴリーヌ。」

「ん。」

リフィアとエヴリーヌは急いでプリネ達の所に走って行つた。

（トライアード平原）

ツアイス市とリベルの名所の一つであるエルモ温泉とカルバード共和国を結ぶ関所、ウォルフ砦へ行く道がある平原をヘイワーズ親子を連れたプリネ達は歩きながら自分達の仮の事情を説明した。

「将来の仕事のために遊撃士のお仕事を……お若いながら、立派ですね。」

「ええ、それにみなさん女性なのに戦えるなんて、同じ女性として尊敬しますわ。」

プリネ達が遊撃士の仕事を手伝っている仮の理由を知ったハロルド達は感心していた。

「フフ、ありがとうございます。でも、最近は女性が戦えても不思議ではない時代だと思いますよ？例えばリベルの王室親衛隊長で名高いユリア中尉も女性ですし、”大陸最強”を誇るメンフィル帝国の大将軍も女性ですから。」

「ハハ……確かに最近の女性は勇ましい方が多いですね。」

プリネの言葉にハロルドは苦笑いしながら答えた。そしてしばらく歩くと魔獣が現れた。魔獣を見てハロルド達は表情が強張った。

「！ハロルドさん達は下がつて下さい。」

「はい、お願ひします。」

「みなさん、お気をつけて…… わあ、『リン。あなたもこっちにいらっしゃい。』

「うん~。」

プリネの言葉に頷き、ハロルド達はプリネ達のやや後方に下がつた。

「2人とも、行きますよ！」

「ああ。」

「ん。」

プリネは鞘からレイピアを抜いてリフィア達に声をかけた。そしてプリネ達は魔獣に戦闘を仕掛けた！

「闇に呑まれよ…… テイルワンの闇界！！鋼輝の陣…… イオール
ーン！」

次々と放つリフィアの魔術は一撃で魔獣達を纏めて次々と葬り

「遊んではげる！はい、どかーん。」

エヴリースは神速の速さで弓技 精密射撃や三連射撃で正確に魔獣を射抜いた後、強力な風の魔術 審判の轟雷でリフィアと同じように魔獣達を纏めて葬り

「ハアッ！…… まだまだ！フツ、ハツ、終わりです！」

プリネはリウイ直伝の剣技 フェヒテンバルやフェヒテンイングでリフィア達が撃ち漏らした魔獣達を葬つた。そして戦闘は終わつた。

「よし、終わりですね。ハロルドさん、もう大丈夫ですよ。」

あたりを見回して、魔獣達の全滅を確認したプリネはハロルド達を呼んだ。

「…………驚きました。あれだけいた魔獣をこんなに早く撃退できるなんて。」

「お姉ちゃん達、凄く強いね～。」

ハロルドは驚きの表情をしながらソフィアやコリンを連れてプリネ達に近付いた。また、コリンは無邪気に言つた。

「フフ、まだまだ修行中の身ですよ。」

「うむ。世界は広いからな。余が知っている強者等、世界を相手に戦えるとも言われておるからな。」

「ハハ……途方もない話ですね。…………でも、私達に貴女達の100分の1の強さでもいいから、あの時あればあの子はあんな事にはいや…………そんな事は関係ありませんね…………」

「…………」

プリネとリフィアの言葉にハロルドは苦笑いした後、小さい声で咳き、その咳きが聞こえたソフィアも暗い表情をした。

（あの子？ハロルドさん達の子供は田の前にいるのに……どうこう意味でしよう？）

魔神の力を受け継いだ影響で人間より耳がいいため、本来聞こえないはずのハロルドの咳きが聞こえたプリネは首を傾げた。

（…………ふむ。今の言葉からするとどうやらレンの事はまだ忘れてないようだな…………リウイの話では新たに生まれた子供をきっかけにレンの事を忘れようとしていたとの事だが…………）

一方同じようにハロルドの咳きが聞こえ、ハロルドやソフィアの表情を見たリフィアは考え込んでいた。そしてプリネ達はハロルド達をエルモ村まで無事護衛した。

（エルモ村・入口）

「着きました。ここがエルモ村です。」

「おお、ここが……どことなくアルモリカ村の雰囲気に似ていますね。」

ハロルドはのどかな風景のエルモ村を見て、呟いた。

「アルモリカ村？ 聞いた事がない村ですが、クロスベルの村ですか？」

「ええ。養蜜を主としたのどかな村でいつも御観覧にいらっしゃる村です。もしクロスベルに来る事があれば、お土産の一つとして蜂蜜がいいですよ。アルモリカ村の蜂蜜は絶品ですから。」

「へ……蜂蜜か。あれも甘くて大好きなんだよね。クロスベルつてところだね。覚えておくよ。」

「貴方、そろそろ……」

「おつと、そうだな。それではみなさん、本日はどうもありがとうございました。」

「ありがとうございました。ほら、コリンも。」

「うん~。ありがとうございます、お姉ちゃん達。」

ソフィアに促されたハロルドは礼儀正しくプリネ達に頭を下げ、ソフィアもコリンにお礼を言うよう促した後頭を下げた。

「どういたしまして。ちなみに帰りの護衛は大丈夫ですか？」

「はい。道は覚えましたので大丈夫です。それにイーリュン教で販売している魔獣避けの聖水もこちらに来る前に買いましたので大丈夫です。」

「そうですか。それではお気をつけて。」

「はい、それでは失礼します。」

「リフィア、ツアイスを出る前に考えていていた事を教えてもらつてい?なんか今日のリフィア、変だよ?の人達に会つてからずっとと考え込んでいる様子だつたし。」

ハロルド達の見送ったエヴリースはリフィアに尋ねた。

「まあな。2人とも。先ほど護衛した家族、ヘイワースの名前に聞

き覚えはないか？」

「エヴリーヌはわかんない。」

「……実は私も少しだけハロルドさん達の名前が気になつたのです。聞き覚えはあるのですが……リフィアお姉様はわかるのですか？」リフィアに尋ねられたエヴリーヌは首を横に振つて答え、プリネは考え込んでいる様子で答えた後、リフィアに尋ね返した。

「ああ。…………それでヘイワースといつ名前だが……ヘイ

ワースはレンの過去の名前だ。」

「え……という事は今の方達がレンの実の両親ですか！？」

「へ~。今の人間達が……」

リフィアの答えを聞き、エヴリーヌはあまり興味なさげだったが、プリネは驚いた。

「ああ、間違いない。どこかで見覚えのある顔だと思つたが、報告にあつたレンの両親だ。」

「そうだつたのですか……道理で聞き覚えのある名前だと思つたのですが……あら？それではハロルドさんが呟いた”あの子”というのは……！」

「十中八九レンの事だろ？。リウイの話では新たに生まれた子供をきつかけにレンの事を忘れようとしていたと聞いていたが、あの様子では今でもレンの事を後悔しているんだろうな。」

「…………レンの事を教えないよかつたのですか？」

プリネはハロルド達がレンの実の両親と氣付いていて、何も言わなかつたリフィアに尋ねた。

「忘れたか？リウイから自分から両親を知りたいと言つまでレンには決して教えるなと言われているだろ？？」

「…………そう言えば、そうでしたね。…………それにしてもまさか、この旅で会う事になるとは思いませんでした。」

リフィアに言われたプリネは複雑そうな表情をした。

「ん。じゃ、依頼も終わつたしギルドに戻ろつか？エステル達が戻つて来てるかもしねしいし。」

「そうだな。そろそろ日も暮れる。急いで戻るぞ。」

「はい。」

そしてリフィア達はエルモ村を去つた……

第103話（後書き）

と訳すで一回限りの登場でしたが特別ゲストとしてSCC以降（正確には3rdですが）必ず出ているあの一家が登場しました！次回はミント、Hスティルsideの話になります。……感想お待ちしております。

一方ミント達はティータを守りながら、エステル達が向かつた紅蓮の塔についた。

（紅蓮の塔）

「2人とも、ここの『紅蓮の塔』だよ。」

「あれ？ ミント、この建物に似たような形をしている建物を見た事があるよ？」

「2人は確かルーアンに住んでいたんだよね？ 多分『紺碧の塔』だと思うよ。グランセル以外のリベルの都市の周辺でこの『紅蓮の塔』みたいな建物があるから。」

「ふわあ～……こんな大きな建物がルーアンやツァイス以外でもあるんだ……」

ティータの説明を聞きながら、ミントは『紅蓮の塔』を見上げて咳いた。

「！ 2人とも気を付けて！ 何か来るよ！」

「！！」

「ふ、ふええ～！？」

敵の気配を感じて鞘から刀を抜いて警告したツーヤの言葉にミントは剣を構えて、いつでも戦闘に入れるようにし、ティータは慌てながらも導力砲を構えた。そして森の奥からトライド平原でドロシーを襲おうとした狼型の魔獣が唸りをあげながら現れた。

「――「グルルル……」」

「あ～この魔獣達、ドロシーさんを襲つた魔獣だよ～？」

「ミントちゃんも戦つた事があるんだ……あたしもフイーリィさんを助けるために戦つたよ。」

見覚えのある魔獣を見て、ミントは声をあげ、それを聞いたツーヤ

も頷いた。

「お祖父ちゃんを助けるのを邪魔しないで！……ええい！」

「「「ギヤン！？」」「」

ティータは導力砲から強力な煙幕弾で攻撃するクラフト　スモークカノンを放つた。クラフトによつて魔獸達は傷を負うと同時に視界が見えなくなり、うろたえた。

「ツーヤちゃん！」

「うん！」

隙だらけの魔獸達を一気に倒すためにミントはツーヤに声をかけ、ツーヤと同時に攻撃を仕掛けた！

「やあっ！』

「はつ！そこ！..」

「貫いちやえ！.....アイスードル！」

「ガッ！？」

ミントが剣で斬りつけた後、ツーヤが刀で素早く2回斬りのクラフト　飛翔剣舞を放つた後、ミントは足元から氷を出して敵を貫通させる水の魔術　アイスニードルで一匹に止めを刺した。

「えいつ！」

「「オン！？」

そしてティータは導力砲で残った2匹を同時に攻撃した。

「当つたれ！.....ストーンフォール！」

そこにすかさず、ミントは魔術で攻撃し

「行きます.....ハアアアツ！」

「「ギヤン！？」

ツーヤは魔獸達の中心に飛び込み、刀で回転斬りをして攻撃するクラフト　円舞で止めを刺した。

「ふええ～.....ド、ドキドキしちゃつた～.....」

戦闘が終わり、ティータは安堵の溜息を吐いた。

「.....」

「ツーヤちゃん、どうしたの？」

考え込んでいるツーヤにミントは首を傾げて、尋ねた。

「うん。以前ご主人様が言つてたんだけこの魔獸、クローネ峠にも出たんだって。ルーアンの魔獸がどうしてシアイスにいるのかなって思つたの。」

「そりなんだ。でもとりあえず、考えるのは後にして今は博士を助けるのを優先しよ！」

「……そうだね。じゃあ、行こうか。」

ミントの言葉にツーヤは考えるのをやめて、塔の中に入った。そして3人は襲いかかって来る魔獸を協力して倒し、塔の頂上へ続く階段に着き、頂上が見えそうになるとツーヤが進むのを止め3人は少しだけ顔を出し頂上の様子を窺つた。そこにはエステル達と飛行船を塔の頂上につけ、博士に銃をつけエステル達が邪魔をしないように牽制しているテレサ達を襲つた強盗に似た姿をした誘拐犯達がいた。

(ー……あの人達は先生達を襲つた人達……ー)

ミントは見覚えのある黒装束の男達を見て、剣を握る手を思わず強く握つた。

(落ち着いて、ミントちゃん！エステルさん達が動かない所を見ると、多分チャンスを狙つているんだと思う。だからエステルさん達が動くと同時にあたし達も攻撃を仕掛けよう！)

(うん、わかつた！ティータちゃんもい……い？)

ツーヤの提案に頷いたミントはティータにも言おうとしたが、ティータが居ない事に気付いた。

「あれ！？ティータちゃん、どこに行つたのー？」

「とにかく探そう、ミントちゃん！」

ティータがいないことに気付いたミントとツーヤは慌てて階段から降り、周りを見回したがいなかつた。

「もしかして……ミントちゃん、頂上に行くよー！」

「う、うん！」

嫌な予感がしたツーヤはミントと共に急いで階段を上り、頂上に上がった。そこには飛行船を導力砲で攻撃しているティータに銃を向け、それに気付いたティータが砲撃を止め硬直している状態だった。そして一人の黒装束の男がティータに向けて銃弾を放った。

「ティータ！」

「「ティータちゃん！」」

「……チイイイイッ！」

咄嗟の判断でアガットはティータをその場から避け、自ら銃弾を受けた。

「アガット！？」

「アガットさん！？」

「ツーヤちゃん！とりあえずアガットさんの傷の手当てを…」

「うん！」

それを見てエステルとヨシュアは慌てて、駆け寄った。また、ミントやツーヤもアガットに駆け寄り、ツーヤは回復魔術をアガットにかけ始めた。

「ミント！？それにツーヤも！貴方達も来ていたの！」

「ごめんなさい、ママ……」

ミントとツーヤに気付いたエステルは驚いた声を出し、ミントはシンとした表情で謝った。

「お、おい！子供を撃とうとするヤツがいるか！」

「しかもそいつはテスト用の……！」

「す、すまん……。船が落とされると思つて……」

一方男達は銃を撃つた仲間を非難し、非難された男はバツが悪そうに言つた。

「まあいい、このまま撤収するぞ！」

気を取り直した黒装束の男の内の一人の声で男たちがラッセル博士を抱え込んで、飛行艇に乗つた。

「させないんだから！落つちろー……！ムグ！」

男達に向かつて魔術を放とうとしたミントだが、回復魔術をアガットにかけていたツーヤに口を抑えられた。

「待つて、ミントちゃんー博士にも当たつちゃうよー。」

「あ……」

ツーヤの言葉にミントは魔術を放つのをやめた。

「では、我々はこれで失礼する。」

「あっ……一ま、待ちなさいよー。」

去ろうとする男達にエスティルは声を荒げたが、意味がなく飛行艇は去つて行つた。

「お、おじいちゃんああああん！」

そして飛行船はその場からいなくなり、ティータの叫びは空しく塔に響いた……

第104話（後書き）

感想お待ちしております。

（紅蓮の塔・屋上）

その後ティータはずつと泣き続けていた。

「うう、うううう……お祖父ちゃん……」

「ティータ……」

「「ティータちゃん……」」

それを見てエステルとミント、ツーヤは悲しそうな顔をした。

「とりあえず……いつたんツァイスに戻る。あの飛行艇のことをギルドに報告しなくちゃ……」

ヨシコアはつらそうな顔をしながら「これからの方針を決めるための提案をした。

「ティータ……つらいとは思ひけど……」

見かねたエステルがティータに話しかけた。

「……どうして、おじいちゃんが……ひどい……ひどいよお……」

エステルに話しかけられても泣き続けているティータにアガットは静かな声で話しかけた。

「おい、チビ。」

「……？」

パン！

意外な人物に話しかけられ呆けるティータにアガットは近づいてティータの顔に平手打ちをした。

「……あ……」

「ちょ、ちょっと！」

アガットの行動にエステルは驚愕の顔で見た。だがアガットは周りを気にせず話しだした。

「言つたはずだぜ……咲手まといは付いてくんなつて。お前が邪魔したおかげで爺さんを助けるタイミングを逃しちまつた……この責任……どう取るつもりだ？」

「あ……わたし……そ、そんなつもりじゃ……」

アガツトの静かな怒りを持つた言葉にティータは青褪めた。アガツトは追い打ちをかけるように言葉をさらに重ねた。

「おまけに下手な脅しかまして命を危険にさらしやがって……俺は

が、お前みたいに才無いせに出て、おまえがこの世で一番

「アーリー・ビッグヒットなんな盤い無いの？」

「 そうだよ！ テイー タちゃん、 家族が 攪わ れて 深く 悲しんで いるの に 今 の 言葉は 酷い よ！」

「2人に詰め寄られたアガツトは冷静に答えた。

「うべ」

「お前、」のままでここのか？爺さんのことを助けないで謹めちまつのか？」

ג' עיון עיון עיון עיון עיון

アガツトの言葉を否定するよつてティータは泣きながら首を横に振つた。

「だつたら腑抜けてないでシャキッとしてろ。泣いてもいい。喚いてもいい。まずは自分の足で立ち上がれ。てめえの面倒も見られねえヤツが人助けなんざできるわけねえだろ?」

アガルの言葉

アガツトの言葉にティータは泣き止んだ。
「それが出来ねえなら一度と俺達の邪魔を

「それが出来ねえなら一度と俺達の邪魔をせず、ガキらしく家に帰

つてメソメソするんだな。…… フン、俺はその方が楽なんだがな……

「…………」

「ティータ……」

「「ティータちゃん……」」

「…………大丈夫だよ……お姉ちゃん、ミントちゃん、ツーヤちゃん……わたし、ひとりで立てるから……」

ティータは完全に泣き止み自分で立った。それを見てアガットは笑みを浮かべた。

「へつ……やれば出来るじゃねえか。」

「本当に……『めんなさい』。わ、わたしのせいであの人達に逃げられちゃって……ミントちゃんツーヤちゃんも私の我儘につきあわせて、『『めんなさい』……』

ティータはその場にいる全員に謝った。

「バカ……謝ることなんてないわよ。」

「うん。ティータが無事でよかつた。」

「ミントとツーヤちゃんはお友達のお願いを聞いただけだよ。だから謝らないで。」

「うん。それよりアガットさんに叩かれた頬は痛くない？ 痛いのなら治癒魔術をかけるけど。」

「大丈夫だよ、ツーヤちゃん……それよりありがとう……お姉ちゃん、お兄ちゃん、ミントちゃん、ツーヤちゃん。」

4人の言葉にティータは笑顔になつた。そしてアガットにおどおどしながらも話した。

「あ、あの……アガットさん……」

「なんだ？ 文句なら受けねえぞ？」

「えと……あ、ありがとー『めんなさい』ます。危ない所を助けてくれて……」

ティータはアガットにお辞儀をした。

「それから……励ましてくれてありがとウ……」

「は、励ましたわけじゃねえ！メソメソしてるガキに活を入れてやつただけだ！」

アガットはティータの言葉に焦つた。それを見てティータは笑顔を見せた。

「ふふ……そーですね。」

「だًから、泣いてたくせになんでそこで笑うんだよ！？ちょ、調子の狂うガキだな……」

それを見てエステルは溜息をついた。

「あんたねえ、お礼くらい素直に受け取りなさいよ。」

「いや、アガットさん、単に照れてるだけじゃないかな。」

「なるほど……確かにそれは可愛いわね」

「そういえばアガットさんの顔、なんとなく緩んでいるね」

「クスクス……ミントちゃん、そういう事は本人の目の前で言つたら駄目だよ」

「そこ、つるせえぞ！」

4人からからかわれたアガットは照れ隠しに怒つた。

そして6人はギルドへ報告し、これからの方針を決めるためにツアイスへの帰り道を戻つていった……

第105話（後書き）

現在、着々と話が出来てます。ちなみに現在は武術大会編の予選終了後までかけてます。後、エウシュリー・キャラファンの方々にとつて嬉しいお知らせです。グランセル編ではエステル、プリネの使い魔達を総動員して活躍させる話と旧幻熾キャラを活躍させる話を考えているので楽しみにして下さい…………感想お待ちしております。

紅蓮の塔を出たエスティル達は帰り道に急にアガットが倒れたところに、エルモ村までの護衛を終えたリフィア達とカルバード共和国の遊撃士、ジンがたまたまその場に居合わせ、ジンにアガットを中央工房の医務室まで運んでもらい、アガットが倒れた原因は黒装束の男が撃つた銃弾が原因とわかり、それを治癒するの薬を七曜教会に求めたが、生憎材料を切らしていて、その材料を手に入れるためにまたまたソーサイスに泊まる予定だったジンやリフィアとエヴリーヌを加えたエスティル達7人は材料があると言われるカルデア隧道の鍾乳洞内の奥に向かつて行つた。また、アガットの体を蝕む毒を少しでも遅らせるために状態異常回復の魔術が使えるツーヤとツーヤに魔力が供給できるプリネはアガットの看病に残した。

「カルデア隧道・鍾乳洞内」

「ここがカルデア鍾乳洞か……神秘的な光景ね。」

エスティルは鍾乳洞に入つて見た光景に思わず呆けた。

「だが、奥の方から魔獣の気配がブンブンするぞ。なかなか歯ごたえがありそうだな。」

「ん。街道とかにいた雑魚より結構強い気配がするね。少しは楽しめそうかな、キヤハッ」

ジンとエヴリーヌは魔獣の気配と強さを感じ、警戒心を強めたり強敵の存在に笑みを浮かべた。

「ふ、ふえええ……」

2人の言葉を真に受けたティータは思わずよわよわしい声を出した。「ティータ、恐かったら戻つてもいいんだからね？あんまり無理しちゃダメよ。ミントもよ？紅蓮の塔の時みたいに無茶したら、今度はさすがに怒るからね？」

「だ、大丈夫だよ……恐いけど無理はしてないから。今は急いで薬の材料をとりに行こう？」

「うん！ミント、アガットさんが元気になるためにがんばる！」

「もし怪我を負つたら、余が傷跡もなく治してやろう！余がいるのだから、安心するがいい！」

「そうね……行くとしますか。」

ティータの様子を見て大丈夫と判断したエステル達は鍾乳洞の奥へ進んで行つた。

そして鍾乳洞内を歩きしばらくすると魔獣が現れた。

「みんな行くわよ！」

エステルの掛け声で7人は魔獣に挑んだ。鍾乳洞内の魔獣は手ごわかつたがエステルは棒や魔術で万能な戦い方で、ヨシュアは素早い動きで魔獣を翻弄しつつ、着実に敵の急所を狙つて対処し、ティータは無理せず後ろからアーツや導力砲で援護し、ジンは体術で一撃で魔獣を沈め、ミントは前衛のエステル達が取り逃がして後衛に襲いかかるうとした魔獣を斬り伏せ、魔術でエステル達を援護した。またエヴリーヌやリフィアは弓技や強力な魔術で援護した。

「闇よ、我が仇なす者を吹き飛ばせ！……黒の衝撃！！」

「行つけ！……サンダーボルト！」

「出でよ、烈輝の陣！レイ＝ルーン！！」

「消えちやえ！……贖罪の雷！！」

エステル達が放つた魔術で道を塞いでいた魔獣達が消滅し、セピスを落とした。

「相変わらず、凄い威力だな……」

「ふ、ふえええ……お姉ちゃん達、凄いな。アーツじゃ、こんな威力は出せないんじゃないかな？」

「…………」

エステル達の魔術の威力にヨシュアは感心し、ティータは魔術の威力に呆け、ジンは驚きの表情で見ていた。

「よ～し、終わりっ！あれ？どうしたの、みんな？」

戦闘が終了し、武器を仕舞つたエステルはヨシュア達を見て尋ねた。

「いや……魔術の威力にみんな驚いているんだよ。」

「うん。魔術は初めて見たけど、凄いね！オーブメントを使わず、どんな原理でんな事ができるのか、凄く気になっちゃうよ。」

「あはは……ティータらしいわね……」

「ティータちゃん、目が凄く輝いているね。」

興味津々ティータの言葉にエステルは苦笑し、ミントはティータの今の表情を言つた。

「えへへ、つい気になっちゃって……」

エステルとミントの言葉にティータは恥ずかしそうに笑つた。

「ん？ 確かジンと言つたな？ 余やエヴリースを見てたようだが、何か用か？」

「いや、少し気になつたのだが魔術とアーツは属性に関しては同じかどうか、気になつてな。」

「確かにそうですね……リフィア、そつちの世界の魔術は何種類あるんだい？」

「ん？ 属性の種類か。一般的な攻撃魔術の属性はアーツの属性で例えるなら火は火炎、水は冷却、風は電撃、地は地脈、時は暗黒、空は神聖だ。これに加えて余が使つている無属性の純粹、他には身体能力の強化等をする戦意や強化、そしてイーリュン教の信者達が得意とする再生や治癒だ。他にもあるが……まあ、それは知らなくていいだろう。」

ヨシュアに尋ねられたリフィアは次々とディル・リフィーナにある属性魔術の事を説明したが、ある属性の魔術も思い出し、その属性を言つのをためらつて誤魔化した。

「へえ……そんなにあるんだ。それだと、今あたしが使えるのは

火炎、電撃、地脈、暗黒か……あと2つで全属性の攻撃魔術ができるんだけど、どうやつたら使えるようになるのかな？」

「エステル……それだけ使って、まだ属性を増やしたいのかい？」

「いいじゃない！強くなりたいんだから！それでどうなの？」

「ふむ、エステルのオープメントや精靈や幻獸達と契約した際の影響の事を考えると、お前はどの属性にも属さない無属性だから、その属性に遭つた精靈や幻獸達と契約すれば使えるようになると思うぞ？」

期待した表情で自分を見ているエステルにリフィアは少しの間、考えて言った。

「やつぱり契約か……冷却属性はマーリオンみたいな子と契約すればいいってわかるけど、神聖属性はどんな子と契約すればいいの？」「む、神聖属性か……………神聖属性は恐らく天使とでも契約すれば使えるとは思うが…………」

期待した表情をしているエステルにリフィアは難しい表情をしながら答えた。

「天使！？そんなのもいるんだ！」

「ふええ～！？異世界には天使さんまでいるんですね！」

「ママ～ミント、天使さんともお話したい！絶対友達になつてね！」天使の存在を知ったエステルやティーダ、ミントは驚いた。

「…………」

「2人ともそんなに難しい表情をして、どうしたんだい？」

一方ヨシュアはリフィアやエヴリーヌが難しい表情をしているのに気付き、尋ねた。

「ん？ああ……今から言つ事はエステル達には決して言つでないぞ？」

「？うん。」

念を押すようなリフィアの言葉にヨシュアは戸惑いながら頷いた。

「天使達のような光側の者達にとつて余達闇側の者達……………闇夜の眷属”は決して相容れない存在なのだ。また、その逆もしかりだ。余は気にしないがたいがいの眷属達は天使を嫌つてゐる。もちろん

メンフィルは光と闇の共存を謳っているが、それでもメンフィル建国以来、天使がメンフィルの客として訪れた事はない。」

「そんなに根深い問題なんだ……もしかして、エヴリーヌも天使を嫌っているのかい？」

「…………正直、あんまり好きじゃない。でも昔と比べれば少しはマシになつたよ？昔は目にしただけで殺してやりたいぐらい、嫌いだつたもん。」

「フム……種族の違いによつて争いが起きる点は共和国と変わらないな。共和国は昔から移民を受け入れている分、争いが絶えないからな。」

エヴリーヌの言葉にジンは重々しく頷いた。

「そうなんだ……じゃあ、リフィア達と仲良くしているエステルに天使が契約してくれるなんて事は……」

「恐らくないな。よほり変わり種の天使だつたら契約してくれるかもしれないが、そもそも天使がメンフィルを訪れる事など今までなかつたのだから、ほほないと思つていいだろう。」

「そつか……でもなんとなくなんだけど、あの様子のエステルだつたら天使と出会つた時、契約を頼んで天使が嫌がつても『そんなのお互いの事を知らないからそうなのよ！』って言つて、何度も契約を迫つて最後には天使も諦めて契約しそうだけね。」

「…………確かにな。」

「あー、なんとなくそんな光景が思い浮かぶよ。」

ヨシュアの言葉にリフィアは口元に笑みを浮かべ、エヴリーヌは天使に契約を迫るエステルの光景が思い浮かんだ。

「ハハ……さて、おしゃべりはここまでにして先に進むぞ。」

カシウスからエステルの事を聞いていたジンはリフィア達の会話を聞いてカシウスから伝え聞いた通りの娘である事に思わず笑つた後、先に進むよう促した。そしてエステル達は奥に向かつて進み始めた

…………

第106話（後書き）

すでにお気づきの方もいると思いますが、次のエステルが契約する種族は幻燐、戦女神では基本的に敵勢力のあの種族です！ちなみにSCのヨシュア合流までには予定している全ての召喚キャラと契約する予定です！後、エステルの召喚キャラは以前より増やして、全部で6体にする予定です！残りの召喚キャラの種族は2体とも違う種族であると言つておきます……感想お待ちしております。

外伝「異世界に降り立つ天使」

リフィア達が天使について話していたその頃、一人の天使がある場所でくしゃみをした。

（メンフィル大使館・執務室）

「ハックション！ううん？誰かニールの噂でもしているのかな？靈氣で構造されている天使のニールが風邪なんて引くわけないのに。」

その天使はラウマカールで3対の翼のファーミシルスとは違い、一対の翼を持ち全身の到る所に光の輪を纏い、濃い撫子色の髪を腰まで伸ばしていた。また、容姿も街を歩けば十人中十人が振り向くような整った容姿をしており、女性としての体型も一般的の女性より優れた体型をしていた。

「…………さて、そろそろいいか？」

独り言をつぶやいている上級天使 能天使ニール・デュナミスにリウイは話しかけた。

「はい。なんでも聞いていいですよ。」

「…………シルヴァンから天使が俺に面会と異世界に出る許可を求めてと聞いて、一瞬耳を疑つたがまさか神殺しの使い魔を務めていた変わり種の天使であるお前が尋ねてくるとは思わなかつたぞ。それでわざわざ、異世界に何の用だ？」

「そろそろ新しい主を探そうと思つて噂になつっていた異世界に来るために貴方に面会と異世界に出る許可を求めました。」

「新しい主だと？お前は神殺しの使い魔だつたはずだろ？」「ニールの答えにリウイは首を傾げながら尋ねた。

「知つているとは思いますが、セリカは邪竜との戦いで力を失つたからニールを含めて、今まで契約していた子達と解除しました。あの戦いの後、ニールはしばらく世界中を廻つて旅していったけど噂で

メンフィルは魔導技術とは異なった技術を手に入れたって聞きました、気になつてメンフィルの王都のミルスに近付きましたら、ブレアード迷宮？でしたね。そこからディル・リフィーナとは異なる空気が感じられたから、それが気になつて貴方に会えるように、もし異世界と繋がつているのならそこに行けるように今のメンフィル皇帝に頼んだんです。それにしても王城に行つた時、門番の兵や周りの人達はどうしてニールを驚いた表情で見ていたんでしょう？」

ニールは王城でシルヴァンに会う事を望んだ時、門番の兵達やシルヴァンの臣下達が驚きの表情で自分を見ていた事を思い出し、リウイに言った。

「…………俺達を忌み嫌つてゐる光側の存在である天使が堂々と正面から会話を望む等、メンフィルでは前代未聞だからな。驚かれて当然だ。」

「あ、そうでしたね。セリカの使い魔をしていたから、そういう事は気にしなくなつたんですね～。」

「…………まあいい。メンフィルは光にも闇にも属さず中立を貫いている。断る理由もないし、異世界での活動を許可する。……ちなみにこれは邪龍を倒した仲間としての餞別だ。この土地の持ち主リベル王国の地図だ。持つて行くがいい。」

ニールの答えに半分呆れていたりウイだつたが、気を取り直して答えた後リベルの各都市が書かれてある地図をニールに渡した。

「ありがとうございます」ところでさつきの話の続きになりますけど、魔力があつて強い人間の女性とか知りませんか？ニール、今度の契約者は女性にしようと思つていますから。」

「…………お前が認めるほどの強さかどうかわからんが、一人だけ心当たりがある。」

「え！ 本当ですか！？ どんな人ですか！？」「リウイ？」

リウイの答えにニールは驚き、天使であるニールがリウイとの会見を望

んだ事に興味があつてその場に同席したカーリアンも目を丸くして驚いた。

「……その者は風の守護精霊、炎狐、そしてかつて神殺しが使い魔にしていたユイチリと契約している。また、竜の幼子がその者の事を”母”と慕い、竜の幼子がいた孤児院から引き取つてその幼子を育てているらしい。ユイチリに関しては恐らくお前も知っているのではないか？」

「セリカが使い魔にしていたユイチリって……もしかしてテトリ！ どうしてこちらに……まあいいですわ！ 竜の幼子に慕われ、誇り高い性格をしている炎狐まで契約している人間……フフ、興味が沸いてきましたわ！ 名前はなんという方ですか？」

「エステル・ブライト。異世界の者でありながら俺達”闇夜の眷属”を”友”と呼ぶ変わった娘だ。今は恐らくツァイスにいるだろうが……かの者の修行の終点であるグランセルに先回りした方がいいかもしけんな。ちなみにこれがエステル・ブライトだ。」

リウイは机の中から報告書に貼つてあるエステルの写真をニールに見せた。

「この子が……ありがとうございます！ それでは、失礼します！」
そしてニールはリウイ達にお辞儀をした後、部屋の窓から飛び去つた。

「リウイ？ なんであの天使にエステルって娘の事を教えたの？」
「ルーアンで楽しませてもらつた礼だ。遊撃士をやつしていく上で万能な戦いができる天使の力があれば、さらに戦力は充実するだろうしな。まあ、あの変わり者の天使に認められるかどうかはあの者次第だ。奴はあれでも上級天使だ……それより、また武術大会に出るのか？」

リウイは呆れた表情でカーリアンに尋ねた。

「当つたり前じゃない！ ここ最近、戦がないんだから凄つごく暇だもん！ 別に殺しはしていなんだから、いいでしょ？」

呆れた表情になつてゐるリウイにカーリアンは悪びれもなく答えた後、ある事に気付いた。

「そういえばエステル、だつけ？その娘も闘技大会に出るのかな？」

「……さあな。ただ過去の参加者を見る限り、遊撃士達も腕試しとして参加しているから、かの娘も参加する可能性はあるかもしけんが。……まさか。」

カーリアンの疑問に答えた後、リウイはある事に気付き、カーリアンを見た。

「そのままかよ。あの娘の父親も結構楽しませでもらえたから、期待できるしね。じゃあ明日、グランセルに行くわね。飛行船のチケットの手配、よろしく！」

「おい、カーリアン。今のリベルの状況がわかつて……まあ、あのじやじや馬娘に言った所で無駄か。」

リウイの制止の声を無視してカーリアンは部屋を出て行き、リウイは溜息をついた後、ペテレー・ネを呼んで一人分の飛行船のチケットの手配を頼み、政務に戻った……

外伝～異世界に降り立つ天使～（後書き）

という事でまたまたセリカの元・使い魔、登場です！メロディアーナやエリザスレイン、モナルカを出すにはさすがに無理がありますから、VERITAの天使に登場してもらいました！そして気付いているとは思いますが、グランセル編で出る旧幻燐キャラは幻燐シリーズでは準ヒロイン、VERITAではメインヒロインを務めたカーリアンです！カーリアンの出番はあの大会だけではないので、終章を楽しみにして下さい！……感想お待ちしております。

その後エステル達は材料を手に入れ、七曜教会の司祭にその材料を使つて薬を調合してもらつた後、それをアガットに呑ませ、薬を呑ませたアガットを今まで看病していたプリネやツーヤを休ませた後全員が交代で看病し、翌日にはグランセルへ行くジンを見送り、アガットの看病を続けるティータと分かれて一端、ギルドに報告など行つたエステル達に信じられない情報が入つた。それはたまたまツアイスの軍事施設、レイストン要塞にラッセル博士誘拐時に撮つた写真を返してもらいに行つたドロシーが写真の元となる感光クオーツを返してもらえず、代わりに兵士に黙つて要塞を撮つた時に写つた写真の中に博士をさらつた男達が乗つて行つた飛行艇が要塞の中に入る場面を撮つていたのだ。そして事情を聴くためにレイストン要塞へ行つた時、守備隊長シード少佐がエステル達に対応したがのらりくらりとかわされ、最後に立ち去る時に導力で動いている開閉装置が止まるという決定的な瞬間を見て、攫われたラッセル博士は要塞の中にはいると確信しエステル達はそれを報告するためにギルドへ戻つて行つた。

（遊撃士協会・ツアイス支部）

「ま、まさか王国軍が博士を攫うとは……中央工房は王国軍と長年協力関係を築いてきた。なぜこんなことを……」

中央工房の責任者のマードック工房長はエステル達から信じられないような顔で聞いた。

「王国軍とは言つても一枚岩ではありません。博士をさらつた時、親衛隊の服を着てたのもそれが原因かもしれませんね。」

「ええ、ヨシュアさんの言う事にも一理あります。」

ヨシュアの話に同意するようにブリネが頷いた。

「じゃあまさか、親衛隊が嵌められたってこと!?

「その可能性はありそうだな。何か事を起こそうとした時、真っ先に標的になるのが王家に絶対的な忠誠を誓い、選りすぐりの戦士達で結成されている王室親衛隊が一番最初に排除しておくべき存在だからな。」

親衛達が嵌められた事にエスティルは憤慨し、リフィアは嵌められた理由を説明した。

「つうむ、なんたることだ……しかし、どうして博士がそのような陰謀に巻き込まれたのか……」

エスティル達の会話を聞いてマーデックは唸つた。

「…………どうやら犯人どもの手がかりを掴んだみてえだな。」
そこにティータを連れたアガットが入つて來た。

「え……アガット!?

「もう意識を取り戻したんですね。」

「へ~。体力だけは結構あるようだね。」

アガットを見てエスティルは驚き、ヨシュアとエヴリーヌは感心した。

「ああ、ついさっきな。起きたら知らない場所で寝てたからビビッたぜ。」

「起きたばかりなのにもう動いて大丈夫ですか?」

ヨシュアは念のためにアガットに体調を聞いた。

「ああ、寝すぎたせいか、身体がなまつてしまたねえ。とにかく思いつきり身体を動かしたい気分だぜ。」

「で、でも無理しちゃダメですよ……毒が抜けたばかりだからしばらく安静にって先生が……」

「だから、大丈夫だつて何べんも言つてるだろうが。鍛え方が違うんだよ、鍛え方が。」

「う……」

ティータの心配をアガットは一蹴したがそれを聞いたティータは泣きそうになり、それを見たアガットは慌てた。

「う……わかつた、わかつたつての！本調子に戻るまでは無茶しなきやいいんだろ？」

「えへへ……はいっ。」

アガットの言葉にティータは笑顔になつた。

「つたく……これだからガキつてのは……」

「あはは、さすがのアンタもティータには形なしみたいね。」

「アガットさんからなんとなく優しい雰囲気が漂つているよ。アガットさんをこんな風にするなんて、ティータちゃん、凄いね！」

「ずっと付きつきりで看病してもらつた身としてはしばらく頭が上がりませんね。」

「クスクス……」

「ブツクククク……」

「キヤハハハ……」

2人の様子を見て、エステルやヨシュアはからかい、ミントはアガットの雰囲気が変わつた理由にティータが関係していると思いティータを尊敬するような眼差しで見、プリネやツーヤ、リフィアとエヴリー・ヌはティータに弱くなつたアガットを見て思わず笑つた。

「あ～もう、うるせえなつ。それより俺がくたばつてた時に色々と動きがあつたみたいだな。聞かせてもらおうじやねえか。」

そしてエステル達は博士がレイストン要塞にどうわれていることを2人に言つた。

「お、おじいちゃんがそんな所にいるなんて……」

「しかも、あの黒装束どもが軍関係者だつたとはな……フン、正体が判つてすつきりしたぜ。キッチリ落とし前を付けさせてもらひつことにするか。」

「落とし前つていうと？」

アガットの言葉にエステルが反応して聞いた。

「決まつてるだろう。レイストン要塞に忍び込む。博士を解放して奴らに一泡吹かせてやるのぞ。」

「あ、なるほど。それが一番手っ取り早そうね。」

アガツトの提案にエスティルは納得した。

「那么简单にはいかないわ。」

エスティル達の会話を聞いてキリカが割り込んだ。

「へつ？」

「ギルドの決まりとして各国の軍隊には不干渉の原則があるわ。協会規約第3項。『国家権力に対する不干渉』……『遊撃士協会は、国家主権及びそれが認めた公的機関に対して捜査権・逮捕権を行使できない。』……つまり、軍がシラを切る陰り、こちらに手を出す権利はないの。」

「チツ、そいつがあつたか……」

「そ、そんな……そんなのつておかしいわよー目の前で起きている悪事をそのまま見過ごせっていうわけ！？」

「そうだよ！先生を傷つけたり、ティータちゃんのお祖父ちゃんを攫つた悪い人を見逃すなんて、ミント、我慢できないよー。」

「あたしもあの人達の事は許せません……！」

「ツーヤ……」

キリカに規約の事を言われ、アガツトは舌打ちをして苦い顔をし、エスティルやミントは憤慨した。また、静かな怒りを抱いているツーヤを見て、プリネは複雑そうな表情でツーヤを見ていた。

「エスティル、確かにそうだが、どんな決まり事にも抜け道はある。例えそれが法律であるうとな。キリカとやら、恐らくギルドの規約にあるのだろう？」

皇位継承者のため、法律についてより詳しい事を知っているリフィアは落ち着いた声で話し、キリカに確認をした。

「ええ。協会規約第2項。『民間人に対する保護義務』……『遊撃士は、民間人の生命・権利が不当に脅かされようとしていた場合、これを保護する義務と責任を持つ。』……これが何を意味するかわかる？」

「なるほど……博士は役人でも軍人でもない。保護されるべき民間人ですね。」

キリカの話にヨシュアは確認するように聞いた。

「そ、それじゃあ……」

そして会話を聞いていたエステルは期待を持った。

「あとは……工房長さん、あなた次第ね。この件に関して王国軍と対立することになつてもラッセル博士を救出するつもりは？」

「……考えるまでもない。博士は中央工房の……いや、リベルにとつても欠かすことのできない人材だ。救出を依頼する。」

キリカに聞かれ、マードックは迷いなく答えた。

「工房長さん……！あ、ありがとうございます！」

「礼を言う事はないさ。博士は私にとつても恩人だしね。」

それを聞いたティータが笑顔でお礼を言った。

「これで大義名分は出来たわ。……遊撃士アガット。それからエスティルにヨシュア。レイストン要塞内に捕まっていると推測されるラッセル博士の救出を要請するわ。非公式ではあるけど遊撃士協会からの正式な要請よ。」

「了解しました。」

「そう来なくつちゃ！」

「フン、上等だ。そうと決まれば潜入方法を練る必要があるな。何しろ、レイストン要塞といえば難攻不落で有名な場所だ。」

キリカの要請に力強く頷いたアガットはレイストン要塞の攻略方法をどうするか考えた。

「そうですね。実際、かなりの警戒体制でした。侵入できそうなルートがどこにあるといいんですけど。」

「残念だけど……。あそこは警備は完璧に近いわ。導力センサーが周囲に張り巡らされているから湖からの侵入も難しそうね。」

「フン……。そんな事だらうと思つたぜ。」

「フム……。さすがは導力技術を誇るリベルの要塞といったところ

か……」

「正攻法では難しそうですね。」

キリカの答えにアガットは顔をしかめ、リフィアは納得し、ヨシュアは厳しい表情で答えた。

「ねえ、エヴリーヌ。」

「ん。どうしたの？」

ある事を思い付いたエステルはエヴリーヌに話しかけた。

「エヴリーヌが前やつた転移魔術? だつて。それであたし達をレイストン要塞の中へ転移とかできないの?」

「それは無理。」

「なんで??」

あつさり無理と言つたエヴリーヌにエステルは首を傾げた。

「転移魔術は一度行つた事がある場所でないと、転移する場所も思ひ浮かべれないから無理なんだ。」

「そつか…… そういえば、工房長さん。あのオレンジ色の飛行船つてレイストン要塞によく行くのよね?」

エヴリーヌの説明を聞いたエステルは残念そうな表情をしたが、また提案が思い付いてマードックに尋ねた。

「ああ……。工房船の『ライプニッソ号』だね。資材の搬入や設備の点検で定期的に要塞に行つているが……」

「だったら、それに隠れて要塞に潜入するつてのはダメ?」

「いや、基地に降りたクルーは全員チェックを受けるんだ。勝手に抜け出して行動するのは不可能に近いだろ? ……」

「ということは、積荷にまぎれて忍び込むのも無理かも?」

念の為に別方向での潜入の仕方をアガットは尋ねた。

「ああ、生体感知器によつて1個1個のコンテナが調べられる。この感知器というのがラッセル博士の開発したものでね。ネズミ1匹たりとも見逃さない優れ物なんだ。」

「うーん、やっぱりダメがあ……」

「…………！」

マードックの答えを聞いた工スティルは残念そうな表情をしたが、ティータはある事を思い付き、表情を明るくした。

「お姉ちゃん、覚えてない！？お姉ちゃんたちを案内した時、おじいちゃんが作ってた発明品！」

「あしたちを案内した時……。……ああっ！」

「そうか……。僕たちも実験を手伝つたあの新型オーブメントだね。

「うん、それだよ！あの装置、生体感知器の走査を妨害する導力場を発生するの！起動テストもしてあるから大丈夫……ちゃんと動かせるよ！」

「まあ……わすがはラッセル博士といったところですか。」

「なに……本当か！？」

ティータの説明にプリネは感心し、アガットは驚いた。

「まったく博士ときたらいつのまにそんなものを……。その装置はどこにあるのかね？」

ティータの説明を聞いたマードックは呆れた後、尋ねた。

「えと、たぶん研究室のどこかに置きっぱなしになつてると思いました。」

「なら、あなたたちは急いでその装置を取つてきて。その間に、レ

イストン要塞の詳細なデータを用意しておくれ。」

「わかった、頼むぜ。」

「工房長さんは、工房船の手配をよろしくお願ひするわ。」

「りょ、了解した。グスタフ整備長に相談しよう。準備が済んだら飛行場まで来てくれたまえ！」

そしてそれぞれ、博士救出のために動き出した……！

第107話（後書き）

感想お待ちしております。

その後装置を見つけたエステル達はギルドに戻つて来た。

「遊撃士協会・ヴァイス支部へ

「キリカさん。装置、取つてきたよ！」

「いひらも準備はできている。ちなみに、これから見せる物は他言無用にお願いするわ。」

キリカはエステル達に何かの地図を渡した。

「へッ、なかなか良いものを持っているじゃねーか。」

アガットはその図面に書いてある場所の名前 レイストン要塞の

図面である事を見て、笑みを浮かべた。

「これは……レイストン要塞の概略図ですか。」

「うわあ……。すげく広いんですね。」のびにおじいちゃんが

……

レイストン要塞の図面がある事にロシュアは驚き、ティータは真剣な表情で図面を見た。

「でも、いひこいつのつて軍事機密なんぢやないの。どうしてギルドにあるわけ？」

エステルはレイストン要塞を怪しきものを見るような目で見て、尋ねた。

「蛇の道は蛇つてね。とあるルートから入手したの。わたくしたち遊撃士協会には、いひこいつ面もある」と覚えておきなさい。」

「う、うん……」

キリカの答えにエステルは戸惑いながら頷いた。

「言つまでもないけど今回のケースはかなり特殊よ。本来、王国軍とギルドの関係は他国のそれと比べても友好的なの。遺恨を残さないためにも兵士との交戦は極力避けること。特にアガット……いい

「わね？」

「フン、仕方ねえな。だが、あの黒装束の連中は立ち塞がつたら容赦しねえぞ。軍人だろうがなんだろうが犯罪者には違いないんだからな。」

キリカに念を押されたアガツトは鼻をならして、答えた。

「好きにしなさい。ただし死なない程度でね。……後、できればリフィア達は今回の潜入に参加してほしくないのだけど……」

「フム、仕方ないか。」

「え、なんで?? エヴリーヌの転移魔術を使つたらここにいる全員を連れていけるのに。」

キリカの言葉にリフィアは納得し、エステルは首を傾げた。

「万が一王国軍に私達の姿を見られて、私達の正体がバレてしまえば国際問題に発展してしまった事をキリカさんは恐れているんです。私やエヴリーヌお姉様の顔はほとんど知られていませんが、リフィアお姉様はお父様に着いて行つてリベールとメンフィルのいろんな会談に参加しましたからリフィアお姉様の顔は軍の上層部の方達はほとんど知つていると思いますから。」

「そうだね。後、今回は潜入作戦だからあまり人は連れていけないよ。」

「ん。じゃあ、今回はエヴリーヌ達はお留守番していたほうがいいね。」

プリネの説明にヨシュアは頷きながら言つた言葉にエヴリーヌは頷いた。

「ねえ、ママ。ミントやツーヤちゃんもついて行つたら駄目?」

ミントは懇願するような表情でエステルを見て、尋ねた。

「うーん……ヨシュアも言つたけど、今回は軍の人達にあたし達が潜入している事がばれないためにもあまり人は連れて行けないから、悪いけどミント達は連れていけないわ。」

「そつか……」

「ミントちゃん……」

エステルの答えを聞いたミントは残念そうな表情で顔を下に向け、その様子を見たツーヤは同じ”パートナー”を持つ竜としてミントの気持ちが痛いほどわかった。

「ミント……」

俯いているミントを見てエステルは少しの間考えた後、しゃがんでミントを抱きしめた。

「ママ、ママ？嬉しいけど、どうしたの？」

抱きしめられたミントは戸惑いながら尋ねた。

「いいから聞いて。あたしはミントが子供だからって理由もあるけど……一番の理由はあなたの事が大事だから連れて行かないの。今回相手する人達は平気で人を殺そうとしたりする危険な人達なの。そんな所に大事なミントを連れていけないわ……」

「ママ…………うん、わかつた！でも、絶対無事に戻つて来てね！約束だよ！」

「ええ！」

「エステルさん、ミントちゃんの事、凄く大切にしていますね。エステルさんがミントちゃんの”パートナー”になつて、本当によかつたです。」

「あら、もしかして羨ましいの？よければ、抱きしめたり撫でてあげてもいいけど。」

「い、いえ……そ、その……」

笑顔に戻つたミントにエステルは頭を撫でた。その様子を見てツーヤは思わずプリネに言い、プリネの言葉にツーヤは顔を真つ赤にして、照れながら言い淀んだ。そしてミントの頭を撫でた後、エステルは立つてキリカからの言葉を待つた。

「エステル、ヨシュア。本来ならば準遊撃士のあなたたちにこんな仕事は任せたくないけど……」

「ちょ、ちょっと！そんなのつてないわよ！」

「乗りかかった船です。どうかやらせてください。」

キリカの言葉にエステルは反論し、ヨシュアも真剣な表情で懇願した。

「……ところども反対するのは止めにするわ。ちなみに、あなたたちはツァイス支部の監督下にある。万が一のことがあつてもわたしが責任を取るから安心なさい。」

「キ、キリカさん……」

「すみません……。ご迷惑をおかけします。」

「それから……ティーダ。遊撃士でないあなたにこう聞くのもなんだけど……。決心は変わらないのね？」

「あ……。……はい！」

キリカに話を振られたティーダは一瞬何の事かわからなかつたが、すぐにわかつて力強く頷いた。

「え、え？ それってどういふこと？」

「もしかして……」

キリカとティーダの会話の意味がわからなかつたエステルは首を傾げたが、ヨシュアは察しがついた。そしてティーダはエステル達に振り向いて説明した。

「あ、あのね……。この装置を動かせるのはたぶんわたしだけだと思うの。だから……わたしもお姉ちゃんたちと一緒に行くよ。」「ええっ！？」

「たしかに、複雑そうなオーブメントだつたけど……」

ティーダが同行する事にエステルは驚き、ヨシュアは複雑そうな表情をした。

「ごめんなさい……。わたし、迷惑にならないようちゃんと付いていくから……」

エステル達の様子を見てティーダは申し訳なさそうな表情で謝り、答えた。

「……ふざけんな。いら、チビスケ……。そんな話は聞いてねえぞ

……。こんなヤバイ仕事にガキを連れて行けるわけねえだろ？」「しかしあガットは納得できず、真っ先に反対した。

「で、でもでも……。わたしがやらなかつたら装置が動かせないですし……」

「だったらそんな方法はハナツから却下だ、却下！別の潜入方法を見つけるぞ！」

「…………。あんたねえ。いいかげんにしなさいよ。なに、意地を張つてるわけ？」

何が何でもティータの同行を認めようとしないアガットにエヌヌルは溜息を吐いた後、尋ねた。

「なにい……？」

「ティータも覚悟して協力するつて言つてるでしょ。それに協力してくれたらあたしたちも潜入しやすくなる。それつて、博士を助け出す可能性も上がるつてことよね？この期に及んで反対する余地がどこにあるつてゆーのよ？」

「てめえ……。民間人を、しかもガキを危険にさらせると思つてんのか？」

エヌヌルに尋ねられたアガットは威圧感を持つて、エヌヌルを睨んだ。

「そくならないようにあたしたちが守ればいいじゃない。それが遊撃士の仕事でしょ？」

「クツ……。たかが新米ごときが偉そうなことを抜かしやがつて……」

「……」

「……新米、ベテランはこの際、関係ないと私はいます。大切なものを守りたいという気持ちも遊撃士だけのものじゃありません。むしろ、そういう気持ちを支えるのが僕たちの仕事じゃないんですか？」

「…………」

エヌヌルとヨシュアの言葉にアガットはエヌヌル達を睨んだ。

「私からも言わせてもらいますが、ティータさんは連れて行くべきです。」

「『』主人様……？」

「ああん？ なんで遊撃士でもないテメエがそんな事を言える？」

エステル達の意見を賛成するプリネの意見にツーヤは首を傾げ、アガットはプリネを睨んだ。

「その前に一つお聞きしたいのですが……今回博士を助けた後、博士達の今後はどうなさるおつもりですか？」

「それは…………チツ、わかったよ。」

「へ……？ プリネ、今の言葉ってどういう意味？？」

プリネの言葉にあつさり折れたアガットにエステルは首を傾げた後、尋ねた。

「プリネが言いたいのは恐らく、リベルル軍内で暗躍している者達が捕まらない限り博士は狙われ続けるという事だ。それで博士の孫であるティータは隠れている博士をあぶり出すために、人質として誘拐される可能性も高いから博士を助けた出したと同時にティータも保護するべきと言いたいのだ。…………そうだろう、プリネ？」

「はい。」

「あ、そっか。」

「なるほど……助け出す事ばかりに目が行って、その後の事を考えていなかつたな……」

プリネの代わりに説明したリフィアの言葉にプリネは頷き、エステルやヨシュアは納得した。

「お姉ちゃん、お兄ちゃん……。あ、あの、アガットさん。ごめんなさい、困らせちゃって……。でも、わたし、おじいちゃんが大切だから……。ぜつたに助かつてほしいから……。だから、自分ができることがあればできる限りのことがしたいんです。」

「…………」

自分の存在がアガットを困らせている事に気付いたティータは申し訳なさそうな表情で答え、アガットは黙つて聞いていた。

「それに、アガットさんがわたしを助けてくれたように……。わた

しも、お姉ちやんや、お兄ちやんや、アガットさんの方になりたいんです……。ぜつたに無理はしません……。ちやんという事も聞きますから……。だから……どつかお願ひしますつー」

「ティータ……」

「そりが……。そこまで考えててくれたんだね。」

弱々しくも決意の表情で嘆願するティータの言葉にエステルやヨシコアは感心した。

「…………。フン、判つちやいねえな。力になる以上に足手まといになりそつだから付いてくるなと言つてるんだ。」「あうひ……」

「だがああ、他に潜入方法がなさそつな上今後の事も考えたら確かにだからな……。氣は進まねえが……。本当に氣は進まねえが、今回だけは特別に認めてやるよ。」

「あ……。ありがとひ、アガットさんー」

「礼を言われる筋合ひはねえ。足手まといになつたりしたら容赦なく見捨ててやるからな。覚悟しとけよ。」

「は、はいっ！」

アガットに認められ、ティータは笑顔で答えた。笑顔でお礼を言われたアガットはぶつきらぼうに答えた。

「ティータちゃん、よかつたね！」

「がんばって、ティータちゃん。あたし達はついていけないけど、博士を無事助け出せるよひ、祈つてゐるよ。」

「えへへ……ありがとひ、ミントちゃん、ツーヤちゃんー！」

「まつたくもひ……いちいち偉そうな男ねえ。素直に認めてあげなさいよね。」

「まあまあ、エステル。アガットさん、照れ隠しに憎まれ口を言つてるだけだから。」

「ブックククク……つっぱてている鬱には中々可愛ごとにうがあるではないか。」

「う、うるせえぞ、てめえら！」

エステルやヨシュア、リフィアにからかわれたアガットは声を上げた。

「クスクス……そうだ！…… フィーリイ！」

「わたくし私に何の用かしら？」

エステル達とアガットの様子にプリネは笑った後、フィーリイを召喚した。

「私に代わって、エステルさん達に助力してあげて下さい。」

「しようがありませんわね…………ま、この私が助力するのですから、大船に乗った気持ちでいなさい。」

プリネに頼まれたフィーリイは溜息を吐いた後胸を張つて、答えた。

「と言つて、フィーリイも連れて行つて下さい。フィーリイは体も小さいですから、『コントナの中に入る時もそんなに邪魔にならない』と思いますし。」

「ありがとうございます、プリネ！」

「助かるよ。ありがとうございます、プリネ。」

戦力の補充をしてくれたプリネにエステルやヨシュアはお礼を言った。

「フフ……。話がまとまつて何より。そろそろ工房船の準備が済んでいる頃でしょう。準備が済み次第、飛行場に向かうといいわ。」

「うん、わかった！」

「じゃあな、キリカ。軍への対応は任せたぜ。」

「ええ、問い合わせが来ても適当にあしらつておく。女神達の加護を。くれぐれも気を付けて。」

アガットの言葉にキリカは頷いた後、作戦の成功を祈った。

「ミントちゃん、ツーヤちゃん…………」

「?どうしたの、ティータちゃん??」

「あたし達に何か言いたい事があるの?」

ティータの言葉にミントやツーヤは首を傾げた。

「あのあの……多分しばらくミントちゃん達には会えないと思つた
ど……その…………それでも、友達でいてくれる？」

「あつたり前だよ！ミント達はいつまでも友達だよ！」

「うん、いつかまた会える日を楽しみにしているから、がんばって
！」

「えへへ……ありがとう、2人とも！」

ミントとシーヤの応援の言葉にティータは笑顔で答えた。

「よし……話も纏まった事だし、みんな、行くわよ！」

「了解！」

「おう！」

「はいっ！」

「フフ、精靈王女であるこの私の力を存分に見せて差し上げますわ
！」

「みなさん、がんばって下さい！」

「必ず博士の奪還を成功して、博士を攫つた不屈き者達に一泡吹か
せてやれ！」

「ん。まあ、エステル達ならやれると思つたけどね。」

「みんな、がんばってね！」

「みんなの無事をご主人様といつしょに祈つています！」

エステルの言葉にヨシュア達は力強く頷いた後、プリネ達の応援の
言葉を背中に受けて、潜入するための工房船が停まっている飛行場
へ向かつた……

感想お待ちしております。

その後、エステル達は工房船に乗り、整備長の協力のお陰で無事、レイストン要塞に潜入し、図面を見て博士がいそうな施設 研究棟に急いで向かった。

（レイストン要塞・研究棟前）

「あ……！」

「あいつらは……」

研究棟の入口で見張つている黒装束の男達を見て、ヨシュアとエステルは小さな声を上げた。また、近くには黒装束の男達が使っていた飛行艇が停まっていた。

「へつ……。やっぱりいやがったか。」

「あら？あの魔獸は私を襲つた……！どうやらあの人間達には飼い主としてこの私を襲つた罪を償わせる必要があるようですね……！」

黒装束の男達を見て、アガットは口元に笑みを浮かべた。また、フイーリイは黒装束の男達に控える狼系の魔獸を見て、男達を睨んだ。

「塔に現れた飛行艇……」

「やつぱりあいつら軍の関係者だったのね……。普通の兵士とはずいぶん違うみたいだけど……」「

一方ヨシュアは飛行艇に気付き、エステルは以前戦った時の事を思い出した。

「たぶん、破壊工作の訓練を受けた特殊部隊だらう。どうりで手強いわけだよ。」

エステルの疑問にヨシュアは推測した答えを言った。

「お、おじいちゃん、あそこに捕まっているの？」

ティータは不安そうな表情で研究棟を見て、言った。

「ああ、こよいよその可能性が高くなつてきた。だが……」」でやり合ひのはマズイな。」

「そうですね……。下手に騒ぎを起こしたら要塞中の兵士が駆けつけてくると思います。」

「何とか見つからずに建物の中に入れないかな?」

エステル達は研究棟の周囲を探り出した。そして探った結果、鉄格子がはまっている窓をエステルが見つけた。

「ねえねえ。ここから中に入れないかな?」

「いや……窓に鉄格子がはまっている。音を立てずに侵入するのはちょっと難しそうだな……」

「そうですね……私の魔術や槍技で鉄格子を壊すのは簡単ですが、どうしても音を立ててしましますわ。」

エステルの提案にヨシュアやフィニーリィは難しそうな表情で答えた。

「…………あっ！」

「こいつは大当たりだぜ……」

「え……」

何かに気付いたアガットとティーダの言葉にエステルは驚き、窓の傍に行つて聞き耳をたてた。

「ラッセル博士。本当にありがとうございました。よくぞ、」」の『ゴスペル』の制御方法を突き止めくださいました。情報部を代表して感謝しますよ。」

研究棟の中にいたのはエステル達も出会つた事のある人物 リシヤール大佐だった。また他にはカノーネ大尉やシード少佐がいた。

「ふん……。やはり貴様が黒幕じやつたか。情報部指令、リシャール大佐……。たしか貴様もカシウスの元部下だつたか?」

博士は憎々しげな表情でリシャールを見て、言った。

「おお、そういえば博士は彼と交友があつたのでしたね。カシウス・ブライトの行方は我々も捜しているのですがまだ突き止められなくてね。心当たりがあるのなら教えて頂きたいものですが……」

「知らん。知つたところで教えるものか。」

リシャールに尋ねられた博士は鼻をならして、答えた。

「フフ……まあいいでしょ。もし、この『ゴスペル』が彼の元に届けられていれば困つたことになつただろうが……。今さら彼が現れたとしてもこの流れを止めることはできない。」

「『黒の導力器』……いや、『ゴスペル』とか言つたか……。貴様ら、それを使って何をしでかすつもりじゃ？いや、そもそも……そんな得体のしれない代物をいつたいどこから手に入れた？」

「ある筋からと申し上げておこう。我々の目的は……まあ、すぐに明らかになりますよ。それが分かつた頃には博士を解放して差し上げますからそれまでゆっくりなさつてください。」

「貴様らの悪事を知る者を平氣で解放しようとするとは……。よつほど大それたマネをしでかすつもりらしいな？」

「ハハ、想像にお任せしよう。しかし事が成つたあかつきには個人的に、博士の研究を援助させていただくつもりです。新たな発明で、このリベルルをより豊かにして頂くために、そしてゆくゆくはあのメンフィルを越えるためにも……。」

博士に尋ねられたリシャールは勝ち誇った笑みを浮かべて答えた後、博士に今後の協力を求めた。

「けつ、お断りじやい。貴様らのような存在なんぞ、メンフィルやあの”霸王”からしてみれば田にもどまらん存在だ。無謀に挑んで、とつと敗北と後悔を味わうがいい。」

博士はリシャールの要請を鼻を鳴らして否定して、悪態をついた。

「博士。あまり聞き分けのないことをおつしやらないでくださいな。博士のお孫さんに万が一のことがあつた時に助けてあげられませんわよ？」

博士の悪態の言葉を聞き、カノーネは不敵な笑みで答えた後、尋ねた。

「「」、小娘が……。またそれでわしを脅すか……！」

カノーネの脅しの言葉に博士はカノーネを睨んだ。

「やれやれ、カノーネ君。君の交渉のやり方は、いささか優雅さに欠けるのではないかね？」

「うふふ……失礼しました。」

「彼女は、どうも特殊なヨーモアセンスの持ち主でね。誤解して欲しくないのですが我々はみな、国を憂える一介の軍人に過ぎないです。民間人を巻き込むつもりは一切ないと誓つておきましょう。」

「憂国の士氣取りか……。そして、あらゆる導力現象を停止させる漆黒のオープメント……。なるほど、貴様らの目的、何となくじやが見えてきたわい。」

「ほう……」

博士の言葉にリシャールは驚いて目を見開いた。そこにロランス少尉が部屋に入つて來た。

「……失礼する。」

「あら少尉。大佐は博士どゞ歓談中なの。邪魔するものではなくつてよ。」

「いや、構わんよ。ロランス君、報告したまえ。」

「グランセル王都で動きがありました。大佐の読み通り、白き翼が網にかかつた模様です。」

「それはそれは……」

「フフ……。これでチエックメイトだな。それでは博士。我々はこれまで失礼します。シード少佐。博士が不自由のないよう^に氣を配つてくれたまえ。」

「は……了解しました。」

ロランスの報告にカノーネは不敵な笑みを浮かべた。カノーネと同じように不敵な笑みを浮かべたリシャールはシードに指示した後、カノーネやロランスと共に部屋を出て行つた。

「ラッセル博士……何か入用のものはありますか。大抵のものなら揃えさせますが。」

「ふん、結構じや。お前さんは、連中と違つて骨のある男と思つておつたが……。どうやらわしの買いかぶりだったよつじやの。」

シードに尋ねられた博士は鼻をならして、皮肉を言つた。

「……恐縮です。博士は、ある反逆者によつて誘拐されたことになつています。それを踏まえて頂ければお孫さんへの手紙など届けさせていただきますが……」

「早くわしの前から消えろ！」

皮肉を言われても気にせらず、淡々と言つシードの言葉に頭が来た博士は怒鳴つた。

「……失礼します。」

そしてシードも研究棟から出て行つた。

「リシャール大佐……あの人気が黒幕だつたんだ。しかも父さんのことを捜しているみたいだけど……」

「ああ……どうしたことなんだろう。それに、あの仮面の男、……」
全ての黒幕がリシャールだつた事にエステルは驚き、ヨシュアはロランス少尉を凝視していた。

「あの野郎……やつぱり出やがつたか。むつ、行くみたいだな……」
ロランスが現れた事にアガットは表情を険しくした後、ロランス達が飛行艇に乗る事に気付いた。

「フツ……うまく切り抜けられるかな。」

ロランスは独り言を呴いた後飛行艇に乗り込んだ。そしてリシャール達を乗せた飛行艇は飛び去つた。

「よし……一氣に人気がなくなつたな。ヤツとは決着を付けたかつたが、まあいい、仕事の方が優先だ。」

飛び去つた飛行艇を見送つたアガットはエステル達に博士の奪還を開始する事を言つた。

「窓から入れない以上、見張りを倒すしかないわね。速攻でケリをつけましょ！」

「う、うんっ！」

「フフ、この私がいるのですから、すぐに終わらせあげますわ！」

アガットの言葉にエステルやティータは力強く頷き、フィーリイは勝ち誇った笑みで胸をはつていたがヨシュアは飛行艇が飛び立つていった方向をずっと見つめていた。

「ヨシュア？ ちょっと、聞いてるの？」

「あ……エステル？」

ヨシュアの様子に首を傾げたエステルは声をかけ、エステルの声でヨシュアは我に返った。

「だ、大丈夫？ ヨシュアお兄ちゃん……」

「おいおい、勘弁しろよ。クールなお前らしくもねえ。」

「ちょっと、何を放心しているんですの？ ここは敵地という事がわかつているのですか？」

いつもと違う様子のヨシュアにティータは心配し、アガットは首を傾げ、フィーリイは痛烈な言葉で注意をした。

「す、すみません。少しボーッとしてて……」

「ヨシュア……どこか調子でも悪いの？」

「大丈夫、問題ないよ。入口を守っている見張りを倒すんですね？」

心配するようなエステルの言葉にヨシュアは首を横に振つて答えた後、アガットに確認した。

「ああ……とつとと始めるぞ。」

そしてエスティル達は黒装束の男達 リシャールの部下である情報部の兵達や魔獣が守つている入口に向かつて行つた……

第109話（後書き）

感想お待ちしております。

（レイストン要塞・研究棟前）

「はあ、せつかく王都で大きな作戦があるのに……。こんなところで爺さんの見張りなんてな。」

「ぼやくな、ぼやくな。王国のため、そして理想のため大佐の手足となつて働くこと……。それが情報部の隠密隊員、『特務兵』の使命なんだからな。」

入口を守っている黒装束の男達　特務兵の一人が博士の見張りをしている事に溜息をついている所をもう一人の特務兵が慰めていた。

「フン。てめえらそんな大層な肩書だったのかよ。」

そこに聞き覚えのある声が聞こえたため、特務兵達は声がした方向を振り向いた。

「なに……？」

振り向くとそこには武器を構えたエスティル達がいた。

「ば、馬鹿な……！」

「アガット・クロスナー！？」

目の前にいる人物に特務兵達は信じられない表情をした。

「遅ええつ！」

そして驚いている特務兵達の隙を狙つて、アガット達は先制攻撃を仕掛けた！

「か、覚悟して下さい！ええいつ！」

「ぐわっ！？前が……！」

「ギヤン！？」

ティータの導力砲で煙幕弾を放つクラフト　スモーカカノンによって特務兵や特務兵達が調教した狼の魔獣は視界が真っ暗になり、うろたえた所を

「行きますわよ！雷よ、走れッ！……………ハアッ！」

「「「「ギヤアアアツ！？」」」

フィニーリイは槍の切つ先に溜めた雷を震う魔術 大放電を特務兵達に放つた！フィニーリイの魔術によつて特務兵達は叫び声をあげたところを

「はああ、せいつ！」

「くらいやがれっ！」

「「ぐはつ！？」」

エスティルとアガツトはそれぞれクラフト 金剛撃とスペイラルエッジを放つて、特務兵達を氣絶させた。

「やあつ！」

「せいっ、はつ！」

「はつ！そこつ！」

「「ギヤツ！？」」

残りの狼の魔獸にティータが導力砲で攻撃し、そこにヨシュアは一体に近付き、クラフト 双連撃で一体を葬り、フィニーリイは槍に雷を宿させて素早く2回攻撃するクラフト 電磁連槍撃で残りの一体を葬つた。

「ケツ……ざまあ見やがれ。散々コケにしてくれた借りは返してやつたからな。」

「フフ、力を取り戻しさえすればこのような者共、私の敵にはなりませんわ！」

電光石火で特務兵達を倒したアガツトは氣絶している特務兵達を見て、弱冠気分が晴れた。また、フィニーリイもブリネと契約したお陰で力を取り戻したので気分がよかつた。

「個人的な恨みが入りまくつてるわね～。」

エスティルは苦笑しながらアガツトを見た。

「ここからは時間との勝負だ。一刻も早く博士を連れて脱出しよつ。

「はいっ！」

「

そしてエステル達は研究棟の中に入つた。

研究棟内

「また来おつたか……。いい加減にせい！ 何もいらんと言ひたじやろ……」

ドアが開き、誰かが入つて来た事に気付いた博士はまた軍関係者と思ひ、振り返りながら怒鳴つた時、そこにはエステル達がいた。

「ティ、ティータ！？はて……わしは夢でも見ておるのか？」

「ううーかわああーー!!」が、かうひたあ。無事で一いつてえ

「うわああああああんー」

に抱きついた。

「やつはー、博士。わりと元氣そうじゃない?」

「マーク工房長の依頼で博士の救出に来ました。」

「なんと……。ここに潜入したのか。さすがカシウスの子供たち……。
」常識トレンダードを守らう。

博士はレイストン要塞に潜入した

博士はレイストン要塞に潜入したエスル達を見て、感心した。「よお、爺さん。悪いがひとつと脱出の准备をしてくれや。あんまり時間がなーいんでね。」

たいな顔をしあつて。

「……。あんだと、いのジジイー？」

博士の言葉に一瞬呆けたアガツトだが、我に返った後博士を怒つた。

「クスクス、言い得て妙ですわね。」

「あはは、博士ってばうまいことを言つわね～！」

「お、おじいちゃん。失礼なこと言つちゃダメだよ。この人はアガツトさん。ギルドの遊撃士さんでお姉ちゃんたちの先輩なの。」

アガツトに対する博士の言葉にフィーリィやエステルは笑い、ティータは慌ててアガツトの事を説明した。

「ほう、お前さんも遊撃士じやつたか。そういうや前に、カシウスから聞いたことがあるのつ。いつも拗ねすすてばかりいる不良あがりの若手があると。」

「あ、あんのヒゲオヤジ……！」

「まあまあ、アガツトさん。博士も、詳しい話は後にして急いで脱出の準備をしてください。何か持つていくものはありますか？」カシウスに対して怒りを抱いているアガツトを宥めたヨシュアは博士に尋ねた。

「そりか……。ならば、『カペル』の中核ユニットを運んで行ってくれんか？下手に置いていつたらまた連中に悪用されそうじや。」「わかりました。」

ヨシュアは機械についている装置を外して、博士に渡した。

「わしはそいつを使って『黒の導力器』の制御方法を研究させられていたんじや。構造そのものは解析できなかつたが、データと制御方法は弾き出してしまつた。これで連中は、いつでも好きな時に例の現象を起こすことができるじやろつ。」

「そつか……」

特務兵達が導力停止現象をいつでも起こせる事を知ったエステルは複雑そうな表情をした。

「すまん、エステル、ヨシュア。せつかくお前さんたちが届けてくれた品物じやつたのに……」

「どうか気にしないでください。ティータの身の安全を盾にされたら従うしかないのは当然でしょつ。」

「むしろ、あたしたちの方が博士たちを巻き込んだじやつたみたい。」

頭を下げる謝る博士にヨシュアとエステルは慰めた。

「だーつ！ウダウダ言つてゐるヒマはねえ！準備もできたし脱出する

ぞ！爺さんは、ギックリ腰にならない程度に急ぎやがれ！」

「フン、言いおつたな……。まだまだ若いモンに負けん所を見せてくれるわ！」

「も、もう、2人とも……」

ティータはまた言い合ひを始めた博士とアガットを見て、ティータは苦笑した。

「全くもう、揃いもそろつて……ここが敵地である事が理解していきますの？脱出するなら急いだほうがいいですわよ！」

博士やアガットの言い合ひを呆れた表情で見ていたフィニーリィは脱出を促した。そしてエスティル達は脱出するための小型の船を確保するためには止場へと向かった……

第110話（後書き）

感想お待ちしております。

その後中庭に出て、波止場から脱出しようとエステル達だったが、気絶しきつていなかった特務兵の最後のあがきで警報が鳴らされ、兵士達が厳戒態勢に見回りを始めたので、波止場に行くのを諦めて兵士達に見つからないように移動して、司令部に逃げ込んだ後地下に脱出路がないか探すために、地下へ続く階段に降りた。

（レイストン要塞・司令部・地下一階）

そこは牢屋となつており、またボースを騒がせた空賊 カプラー家が牢屋の中にいた。

「ね、ねえ……。なんだか外、騒がしくない？」

「あー、なんでも侵入者があつたらしいな。」

ジョゼットは外の様子に不安そうな表情をした。不安そうな表情をして、ジョゼットにキールは他人事のように説明した。

「なにイ、侵入者だと……。じつしちゃいられねえ！このスキに何とか脱出して……」

「兄貴、カンベンしてくれよ。そんな簡単に脱獄できるわけ……」

現在の状況に目が光つたドルンにキールは溜息をついた。その時牢獄にエステル達が姿を現した。

「ここは……。どうやら地下牢みたいだね。」

「へえ、ハーケン門の地下牢と比べると規模が大きいわね……」

地下に降りて、地下牢である事を理解したヨシュアやエステルは牢獄の広さに驚いた。そしてエステルがさらに歩みを進めると牢屋の中に入つて、ジョゼットと対面した。

「あれ……」

「あ。」

「「あああああああっ！？」」

エステルとジョゼットは同時に声を上げて、驚いた。

「お、お前たちは！？」

「あの時のガキどもか！？」

エステル達に気付いたキールとドルンは驚いた表情になつた。

「なんというか……。お久しぶりですね。」

ドルン達にヨシュアは苦笑しながら、久しぶりの再会の言葉を言った。

「そつか、あんたたち、ここに捕まつていたんだ。…………。
えっと、その、元気してる？」

エステルは哀れみの目でジョゼット達を見て、尋ねた。

「こ、こらあ！ 哀れみの目でボクを見るな！ 棒振り回すことしか能
がないノーテンキ女のくせにつ！」

「ゴメン……。何言われても平氣かも。それで気が済むんなら好き
なだけ罵つていーわよ。」

「む、むつかー！ なに余裕がましてんだよつー。」

「おこおこ、この連中、お前たちの知り合いかよ？」

ジョゼットは罵られても怒らないエステルに声を荒げて言った。ア
ガットはジョゼット達と知り合いのように会話しているエステル達
に驚いた後、ヨシュアに尋ねた。

「カプア空賊団……。定期船を奪つた犯人です。」

「ほつ、噂の連中か。かなり高性能な飛行艇を使つていたそうじや
の？ 帝国製と聞いていたがどのくらいのスペックかね？」

博士はジョゼット達の正体を知つた後、研究者らしい質問をした。

「あ、ああ、最高時速は2300セルジュで……。って、どうして
そんな事を答えなくちゃならないんだ！」

博士の質問に律儀に答えようとしたキールだったが、途中で話すの
をやめた。

「なんじや、ケチじやの一ー」

「お、おじこちやん。そんなこと聞いてる場合じゃなこと思つんだ

けど……」「

「ちょ、ちょっと待ちやがれ！そもそも遊撃士がなんでこんな所にいやがる？もしかして、さつきから鳴っているこのサイレンは……」「

」「

」「

」「

」「

」「

「……ええ、さつさと行きますわよ。」

ドルンの言葉に今の状況に気付いたエステル達は少しの間黙った後、その場を後にした。

「ああっ、ごまかしたあ！」

「侵入者ってのはお前らかよ……」

「こひ〜！俺たちもついでに解放しやがれ〜！」

ジョゼット達は去つて行くエステル達に牢屋から解放するよう喚いたが、エステル達は無視して地上に上がって行つた。

～レイストン要塞・司令部・1階～

「はあ……。ビックリしちゃつた。そういうえば、あいつらって黒装束の連中と関係があつたよね。なのに、リシャール大佐に逮捕されたってことは……」

「大佐の手柄になるように利用されたかもしれないね。ひょっとしたらルーアンのダルモア市長も……」

「ケツ、だからといって同情する必要はねえだろ？が。余計な時間を食つちました。他の脱出ルートを見つけるぞ。」

エステル達が司令部から出ようとした時、外から兵士の声が聞こえて來た。

「おい、見つけたか！？」

「いや、兵舎の方は一通り調べ終えたぞ！」「

「監視塔も異常なしだ！」

「……となると、残るはこの司令部だけのようだ。少佐に報告するついでにじりみ潰しに捜すとするか。」

「まずひーー！ひちに来るみたい！」

「クソッ……このままじゃ袋小路だぜ。」

「どうしますの？応戦するのなら、いつでもいいですわよ。」

「…………」

外から聞こえて来た声にエスティルやアガットは焦り、フイーリイはいつでも兵士達と応戦できるよう槍を虚空から出した。ヨシュアはどうするべきか考え込んだ。その時、司令部の奥から声がした。

「来いー！ひちだ！」

「今、なんか聞こえた？」

「う、うん……ひち来てつて言つてたような。」

エスティルやヨシュアは自分達を呼ぶ声に首を傾げた。そしてまたエスティル達を呼ぶ声が奥からした。

「…………時間がない！捕まりたくないんだひーー？」

「空耳ではなさそうじゃの。」

「こうなりや仕方ねえ！ダメもとで行つてみるぞ！」

そしてエスティル達は奥から聞こえてくる声に誘導されて、ある部屋に入った……

第111話（後書き）

感想お待ちしております。

第112話（前書き）

後数話でツアイス編が終わるので一気に連日更新します

声に導かれて入った部屋はなんと司令官室だった。

「レイストン要塞・司令官室」

「間一髪だったな。」

部屋の中に入ったエステル達を見たのはなんと、以前エステル達の追及を誤魔化したシード少佐だった。

「やつぱり……！」

エステルはシードの顔を見て、自分達を導いた聞き覚えのある声に納得した。

「さあ、念のため鍵を。」

「わかりました」

シードに促されたヨシュアは入って来たドアの鍵をかけた。

「フン、何のつもりじゃ？ レイストン要塞の守備隊長。リシャール大佐に、わしの監禁を命じられていたのではないのか？」

シードを見た博士は鼻をならして、シードを睨みながら言った。

「……その節は失礼しました。すでに王国軍は、大佐の率いる情報部によつて掌握されています。主だつた将官は、懐柔されるか、さもなくば自由を奪われる始末……。モルガン将軍も、ハーケン門に監禁されている状態なのです。」

「えええっ！？あのガンゴ爺さんが！？」

「大変なことになつていますね……」

「おじおい、一体どうしてそんな事になつちまつたんだ？ 王国軍つてのはそこまでモロい組織なのかよ。」

「全く……なさけないですわね。それで軍として成り立つている事に呆れますわ。」

シードから王国軍の現状を知られたエステルやヨシュアは驚き、

アガットやフイーリイは王国軍が組織としてあまりにも脆すぎている事に呆れた。

「残念ながら……。帝国との戦いが終わってから軍の規律は少しずつ乱れていった。特に将官クラスの者たちの間で横領・着服・収賄が絶えなかつた。そこをリシャール大佐に付け込まれてしまつたのだ。」

シードは今の現状を暗い表情で語つた。

「なるほどのう……。持ち前の情報力を駆使して弱みを握つたといふわけか。」

シードの説明を聞いた博士は納得するように頷いた。

「その通りです。モルガン将軍が監禁された今、リシャール大佐は王国軍の実質的なトップとなりました。」

「と、とんでもないわね……」

「アリシア女王はどうだ？ 王国軍の指揮権は、最終的に女王に帰属するんじゃないのか？」

リシャールが軍を牛耳っている事を知つたエステルは驚き、アガットはある事に気付いて尋ねた。

「不可解なことだが……女王陛下は沈黙を保つたままだ。陛下の直属である王室親衛隊も反逆罪の疑いで追われている……」

「は、反逆罪！？あのユリア中尉たちが！？」

「中央工房の襲撃事件を親衛隊の仕業に偽装したらしい。ご丁寧にも証拠写真まで用意したようだ。」

「ドロシーさんの写真か……」

シードの説明を聞いて、親衛隊が嵌められた写真の出所に心当たりがあつたヨシュアは思わず呟いた。

「そ、そんなのおかしーですっ！ 中央工房をめちゃくちゃにしておじいちゃんを掠つて……。アガットさんを撃つて死にそうな目に遭わせたのに……。それを人のせいにするなんて！」

「ああ……返す言葉もない。上官の命令は絶対だが……黙認した私

にも責任がある。だから……せめてもの罪滅ぼしをさせて欲しかった。」

珍しく怒りを表したティータにシードは申し訳なさそうな表情で言った。

「難儀な人だな、あんた。」

アガットは何も出来ないシードに同情した。

「フン、そういう事であれば無礼の数々は水に流してやる。その石頭を、スパナで叩くくらいで勘弁してやるわい。」

「きよ、恐縮です。」

「お、おじいちゃんつてばあ。」

「冗談じゃ。」

「ねえ……メンフィルは今回の件はどうするの？リベルの同盟国なんでしょう？」

エステルはある事に気付いて、シードに尋ねた。

「申し訳ないがそれはわからない。…………ただ、もしメンフィルが今回の件に介入してしまったら、恐らく周辺国からはリベルはメンフィルの支配国と見られてしまうだろう。」

正直、メンフィルには今回の件に介入してほしくないんだ……

「そつか……話はわかつたけど……。これからどうするつもりなの？ほどぼりが冷めるまであたしたちを置かくまってくれるの？」

自分にとって恩人であり、友人もいるメンフィルに介入されたくな事が言われている事に複雑な気持ちを抱いたエステルだったが、気を取り直して尋ねた。

「いや、それよりもはるかに安全な方法がある。君たちには、この部屋から要塞を脱出してもらいたい。」

「この部屋つて……」

シードの言葉が理解できず、エステルは周囲を見た。

「なるほど……。脱出口があるんですね？」

「ふふ、なかなか鋭いな。」

『シュアの言葉に笑みを浮かべたシードは部屋の壁を押した。すると隠し扉が現れた。

「わわっ……」

「さすが軍の司令室。なかなか凝つてるじゃねえか。」

「この緊急退避口を使えば要塞の裏にある水路に出られる。ボートが用意されているからそれを使って脱出できるはずだ。本来なら、部外者に明かしたら禁固10年は確定なのだが……。まあ、軍規は許してくれなくとも女神達は許してくれるだろうよ。」

「少佐さん……」

軍規を破つてまで自分達を助力してくれるシードをティータは心配そうな表情で見た。

「遠慮なく使わせてもらひつぜ。最初に俺が降りる。次に、爺さんとティータが来い。ヒステル、『シュア。しんがりはお前らに任せたぞ。後、そこの小さいのは適当についてこい。』」

「わかったわ！」

「了解です。」

「ちょっと一精霊王女であるこの私になんて口を聞いているのですか！？」「らー待ちなさい！」

アガットはエスティル達に指示した後、フィーリイの講義の言葉を無視して隠し扉の先に行つた。

「少佐、さらばじや。」

「えっと、あの……。ありがとー、じやこましたー！」

「まったくもつ…………まあいいですわ。…………『さきげんよつ。』」

そしてアガットに続き、博士やティータ、フィーリイが続いて行つた。

「さてと……。残りはあたしたちだけね。少佐、色々とありがとうございました。」

「お世話になりました。」

「いや、礼はよしてくれ。実のところ……君たちと最初に会つた時

にこうなることは予想していた。

「最初に会つた時……？」

「ゲートでお会いした時ですね？」

シードの言葉にエステルは首を傾げたが、ヨシュアは心当たりがあり、確認した。ヨシュアの言葉を肯定するようにシードは頷いた。

「ああ……。名字を聞いたときには。君たちは、カシウス大佐のお子さんたちなのだろう？」

「カシウス大佐って……。ええっ、父さんってそんなに偉い階級だつたの！？」

父の過去の階級を知つたエステルは信じられない表情で驚いた。

「私も、あのリシャール大佐も彼直属の部下だつたのだよ。10年前の侵略戦争でメンフィルに頼らず帝国軍を撃退した陰の英雄……。その子供たちならば必ずや、眞実を突き止めて博士を助けに来ると思つてね。」

「そ、そうだつたんだ……。でも、父さんが帝国軍を撃退した英雄つて……」

父が英雄である事が気になつたエステルはシードに尋ねよつとしたが、その時入口の扉が叩かれた。

「少佐、よろしいですか！どうやら侵入者が地下牢に來ていた模様です！まだ司令部に潜伏している可能性が高そうですが、いかがしますか！？」

「や、やっぱ……」

兵士が戻つて来た事を理解したエステルは焦つた。

「わかつた！すぐ行くからその場で待機！」

シードは部下が来ないよう指示した後、外の兵士には聞こえない声でエステル達に脱出するよう促した。

「さあ、早く行きたまえ。」

「う、うん……！」

「それでは失礼します。」

そしてエスティル達は隠し扉の先に行き、その先にあったボートの前で待っているアガツト達と合流した後、ボートでレイストン要塞を脱出した……

第1-1-2話（後書き）

現在FCのイベントの中でも”白き花のマドリガル”と並ぶ面白さのイベント、みなさんお待ちかねのあの大会の2日目ですがそれまでの話の数が15話を越えてしましました……！多分グランセル編はかなりの長丁場になりそうです！…………感想お待ちしております。

（レイストン要塞・ゲート前）

「ふつ……。何とか脱出できたわね。まだ、こいつの方まではパート
ホールに来てないみたい。」

見回りの兵士がいない事にエステルは安堵の溜息を吐いた。
「シード少佐が引き留めているのかもね。でも、グズグズしていた
ら追跡部隊が編成されると思う。ギルドでプリネも言ってたけど、
どこか安全な場所に博士たちを逃がさないと……」

「…………ふむ…………」

「お姉ちゃん、お兄ちゃん…………」

ヨシコアの言葉に博士は考え込み、ティータは心配そうな表情でエ
ステル達を見た。

「あ、心配することないからね。ティータと博士のことは絶対に守
つてあげるんだから。」

「フフ……この私がいれば、人間2人の護衛ぐらい余裕ですわ！」
心配そうにしているティータを安心させるようにエステルは言い、
フィニーリイは胸を張つて答えた。

「…………いや。お前らはここで手を引け」

「え…………？」

「どういうことですか？」

しかしアガットの言葉に驚き、エステル達は反論しようとした。

「今回の一件で、俺は完全に情報部の連中にマークされた。そして、
爺さんとティータも同じように追われ続けるはずだ。逃げるついで
に、あのメンフィルの小娘が言つてたように2人まとめて安全な場
所まで逃がしてやるよ。」

「アガットさん…………」

「なるほど、そう来たか。そうじやな。わしらに巻き込まれる人間

は少なければ少ない方がいい。本當なら、ティーラも巻き込みたくはなかつたが……。人質に取られることを考えると一緒に逃げた方がいいじゃろ？』

「おじいちゃん……」

「ちょ、ちょっと待つてよ！あたしたちだけ安全だなんてそんなの絶対に納得いかない！ヨシュアもそう思うでしょ？」

アガットの説明に博士やティーラは納得したが、エステルは納得できず反論して、ヨシュアやフィーリイに同意を求めた。

「いや……。ここはアガットさんが正しい。」

「ええ、確かに理に適っていますわ。」

しかしヨシュアやフィーリイは納得した表情で答えた。

「へつ……」

「逃亡・潜伏のセオリーだと一緒に行動する人間が多くなると、それだけ逃げ隠れがしくくなる。その意味では、アガットさんだけで博士を逃がした方がいいんだ。君の気持ちは分かるけど……ここはアガットさんに従おう。それにフィーリイはプリネが契約している精靈だよ？」

「ええ、私はこれでもプリネと契約している身ですから、契約者と長時間離れていたら、魔力の供給もできませんから、どの道私はついていけませんわ。」

「そ、そんな……」

「さすがだな、ヨシュア。よく分かってるじゃないか。エステル、ここは素直に引いてもらつぜ。」

「で、でも……。理屈では分かるんだけど……」

ヨシュアに説明されたエステルだったが、それでも納得できない様子だった。

「エステルお姉ちゃん……」

「ふむ、あくまで納得できない顔をしどのう。ならば、わしの代わりにある仕事を引き受けくれんか？」

エステルの様子を見てティータは何も言えなかつたが、見兼ねた博士がエステル達に提案をした。

「え……」

「まず、王都に向かつてほしい。そして、グラントセル城にいるアリシア女王陛下と面会してくれんか。」

「じょ、女王様に面会へーーー？」

「どういう事でしょうか？』

博士の提案にエステルとヨシュアは驚いて、尋ねた。

「例の『黒の導力器』じゃが……。あれは元々、リシャール大佐がどこからか入手した物らしい。彼は『黒の導力器』のことを『ゴスペル』と呼んでおつたよ。」

「福音……ですか。」

「ケツ……。ご大層な名前じやねえか。」

「あら、名前をつけるセンスはそこそこあるようですわね。」

黒の導力器の名前　ゴスペルを知つたヨシュアは考え込み、アガツトは鼻をならし、フィニーリイは以外そうな表情をした。

「どうやら、『ゴスペル』は何者かによつて情報部から持ち出されたらしい。恐らく、その持ち出した人間が小包でカシウス宛に送つたのじやろう。じゃが、あの導力停止現象で所在が情報部に知られてしまつた。あの黒装束　特務兵どもが中央工房を襲撃した真の理由はわしでも演算オーブメントでもない。あれを回収するためだつたのじや。」

「そ、そうだつたんだ……」

「なるほど……。それで色々納得できました。」

中央工房襲撃と博士誘拐の眞実を知つたエステルとヨシュアは眞剣な表情になつた。

「リシャール大佐は、あれを使つて王都で何かをしようとしておる。わしのカンが正しければ……非常にマズイことが起きるはずじや。その事を陛下に伝えて欲しくてな。」

「非常にマズイこと……。あの導力停止現象つてやつ?」

「いや……。おそらくそれを利用した……。すまん、これ以上はわしの口から言つわけにはいかん。とにかく、あの『ゴスペル』について陛下に直接伝えて欲しいのじや。逃亡するわしの代理としてな。」

「はあ……まつたくもひ。そんな風に言われたら断るに断れないじゃない。」

「僕たちでよければ引き受けさせてもらいます。」

博士の説明を聞き、エステルとヨシュアは表情を和らげて答えた。

「すまんな、よろしく頼んだぞ。」

「あ、あの……。エステルお姉ちゃん。……ヨシュアお兄ちゃん。……」

一方ティーダは寂しそうな表情でエステルとヨシュアを見た。

「ティーダ……。しばらくのお別れだね。」

「ごめんね……。付いててあげられなくて。」

エステルとヨシュアは名残惜しそうな表情で答えた。

「そ、そなんあ。あやまる事なんてないよう。わたし、お姉ちゃんたちに助けられてばっかりいて……。すく仲良くしてくれて、妹みたいに扱ってくれて……ミントちゃんやツーヤちゃんとも友達になれて。……うひ……えうひ……」

「ティーダ……」

別れに耐えられず泣きだしたティーダをエステルは痛ましそうな表情で見た。

「お、おじいちゃんのこと助けてくれてありがとひ……。うく、それから……仲良くしてくれてありがとひ……。……2人とも……大好きだよ……ミントちゃんやツーヤちゃんにも2人の事は離れていても大好きだつて、伝えてね……」

ティーダは思わずエステルに抱きついた。

「君と一緒にいられて僕たちも嬉しかった……。こちらこそありが

「うん。」

「うん……絶対伝えておくね……」

「…………あなたの願い、承りましたわ。あの黒髪の幼子にあなた
の思い、必ず伝えておきますわ。」

ティータの言葉にヨシュアは笑顔で答え、抱きついたティータの頭
をエステルは優しく撫でて答へ、フィニーリイは静かに答えた。

「…………。名残惜しいだろうが、そのくらいに
しておきな。涙なんぞ、また会えた時に取つておきやいいだろ?」「
「グス……もう……デリカシーがないんだから……。」

アガットの言葉に呆れたエステルはティータと離れた後、アガット
を見た。

「でも……あんたともしばらくお別れね。色々あつたけど、一緒に
仕事してすっごく良い経験になつたわ。ありがとね、アガット先輩。」

「ぞわわ……。気色悪い呼び方すんじゃねえ!」

エステルからありえない呼ばれ方をしたアガットは鳥肌が立つた。

「あはは、照れてやんの」

自分をからかつたエステルにアガットは溜息をついた後、ヨシュア
に言った。

「つたく……。さすがはオッサンの娘だぜ。ヨシュア、その跳ねつ
返りが暴走しないように気をつけとけよ。武術や魔術だけは一人前
だが、それ以外はどうも不安だからな。」

「フンだ、よけーなお世話。」

「ええ、任せてください。アガットさんも氣をつけて。博士とティ
ータのこと、どうかよろしくお願ひします」

「おお、任せておきな。それじゃあ……俺たちは先に行くぜ!」

「さらばじゃ!カシウスの子供たちよ。」

「げ、元気でねつ!お姉ちゃん、お兄ちゃん!」

「うん!ティータたちも!」

「女神達の加護を！くれぐれも気を付けて！」

「この私が手を貸したのですから、必ず逃げ切るのですよ！」

エスター達の応援の言葉を受けて、博士とティーラを連れたアガツトはその場から去った。こうして中央工房襲撃とラッセル博士誘拐事件は幕を閉じた……

第1-1-3話（後書き）

次はエスティル達やリフィア達でない別視点の話です。
待ちしております。

感想お

外伝／囚われる白き翼／

エステル達がレイストン要塞から博士奪還を成功させた翌日、王都から離宮へと続く街道 エルベ周遊道を学生服を着た少女 クロゼが親衛隊隊長 コリア中尉に誘導されていた。

「エルベ周遊道・入口」

「こちらです、クローゼ！」

「はあはあ……。何とか周遊道を抜けましたね。どうしましょうか、これから？」

ずっと走り続けたクロゼは息を切らせながら、コリアに尋ねた。
「このままキルシェ通りに出て王都グランセルに向かいください。部下たちの陽動によつて警備は手薄になつていてるはずです。そのお姿なら、気付かれずに遊撃士協会まで行けるでしょう。」

「分かりました……。あ。それではコリアさんは……？」
「ここで敵を食い止めます。少しの間ですが時間稼ぎにはなるでしょう。」

「そんな……そんなのダメです！私一人が逃げるなんて……。私もユリアさんと共に戦います！」

ユリア一人を残して逃げる事に納得できないクロゼは顔色を変えて答えた。

「……人はそれぞれ守るべきものがあります。私がここに留まるのはおのれの信念と責務のため。ですが、貴女の場合は、失礼ながらただの感傷に過ぎぬかと存じます。御身が御身なだけのものでないこと、どうかお忘れなきよう……」

「…………。わかりました、コリアさん。でも、約束してください。絶対に無茶なことはしないと……。それと、無事再会できたらお祖母さまが淹れた紅茶と一緒にご馳走になりまし

「う。私、新作のお菓子を焼きますから。」

決意のユリアを見て、説得できない事を理解したクロ ゼはユリアを激励した。

「それは楽しみです。さあ、お急ぎください。……ジーク！しつかりお守りするのだぞ！」

ユリアの言葉に頷いたクロ ゼはいつの間にか空よりやつてきた白ハヤブサ ジークと共に王都を目指して、走り出した。

「さてと……。そろそろ追いついてきたか……」

クロ ゼを見送ったユリアは自分達を追つてくる人物達に気付いて、振り向いた。そこには特務兵達と特務兵が訓練した魔獣が戦闘態勢に入っていた。

「3人……それに犬どもが5匹か。フ、甘く見られたものだ。あの方より教わりし剣……。存分に震う時が来たようだ。」

ユリアは敵の少なさを見て、口元に笑みを浮かべた後、得物である細剣レイピアを構えた。

「王室親衛隊、中隊長……。ユリア・シュバルツ 参るッ！」

→キルシェ通り・グランセル前

「はあはあ……。……ジーク、来て！」

「ピュイ？」

一方王都が見えて安心したクロ ゼはジークを呼んだ。

「私はもう大丈夫だからユリアさんのところに行つてあげて。このままだとユリアさんが……」

「ピューイ！」

「ありがとう、お願ひね。」

ジークを見送つたクロ ゼは王都を見た。

「ユリアさんの言った通り、こちらの警備は手薄みたい……。急いで遊撃士協会に行かないと……」

クロ ゼが独り言を呟いたその時、雨が降り出した。

「雨…………。そういうえば、エステルさん

たちもそろそろ王都に来る頃かしら……」

クロゼがエステル達の事を思い出したその時、上空から飛行艇のエンジンの音が聞こえて来た。

「まさか！？」

エンジン音を聞いてクロゼは表情を青褪めた。そして降りて来た飛行艇は紅蓮の塔やレイストン要塞に現れた特務兵の警備艇だつた。「情報部の特務艇…………！まさか、昼間のうちから王都の前に現れるなんて……」「

飛行艇から降りて来た特務兵達を見たクロゼは逃げようとしたが

「あっ……」

「…………」

ロランスが目の前に立ちふさがった。

「やあ、珍しい所で会うものだな。」「

そこに飛行艇からリシャールが降りて來た。

「ジェニス王立学園、社会科在籍 クローゼ・リンツ君…………。少々、話を聞かせてもらえるかね？」「

そしてクロゼは特務兵達に拘束されて、どこかに連れて行かれた。

（王都グランセル・エレボニア帝国大使館内）

「麗しの王都に暗雲立ちこめ、昏き情熱の序曲が鳴り響く…………。フフ……面白くなってきたじゃないか。」

クロゼが特務兵達に拘束された同じ頃、大使館の部屋の窓から外を見て、オリビエは独り言を呟いていた。

「…………相変わらずのお調子者だな。」

そこにエレボニア将校の服を着た男性が入つて來た。

「おお…………。ボクは夢でも見ていいのか？ミコラー、親愛なる友よ！多忙な君が、わざわざ帝都から訪ねて来てくれるとは。一体どういう風の吹き回しだい？」

「何をぬけぬけと……。貴様が連絡の一つもよじりすみにまつつき歩いているからだらうが。余計な手間を取らせるんぢやない。」

エレボニア将校 ミュラーはお居がかかつたよつて話すオリビエを睨んだ。

「フツ、照れることはない。口ではそう言いながらもボクの事が心配でしようがなくて飛んできてしまつたのだろう? 恋は眞田とはよく言つたものだ。」

「…………

「さあ、遠慮する」とはない。ボクの胸に飛び込んできたまえ! いつまでもふざけて居るオリビエを見て、ミュラーは静かに言った。「頼まれた情報をわざわざ持つてきただが……。どうやら知りたくないようだな。」

「ああん、つれない」とを言わないでくれたまえ。わかった。つまり誠意を見せると?」

「それが常識だと思うが。」

常識外の事ばかり行つて居るオリビエに言つても無駄と思いつつ、ミュラーは指摘した。

「そういう事ならお任せあれ。『ホン……』

オリビエはわざとらしく咳払いをすると

「お願ひします、『』主人様つ どうか教えてくださいませつ」

ポーズを決めて、猫撫で声でミュラーに情報を話すよう求めた。頼まれたミュラーは固まった。

「あれ、外したかな? それじゃあ、お次はこれだ。」

ミュラーの様子を見たオリビエはその場で跪いた。

「アニキー! 一生のお願いじやあああつ…どうか教えてくれええい!

!」

「もういい……。頭が悪くなりそつだ……。話してやるから黙つてろ。」

オリビエの態度に呆れ果て、とうとう折れたミュラーは言った。

「ワアイ。」

ミコラーの言葉を聞き、オリビエはすぐに立ちあがつた。

「例の『彼』だが……。ようやく足取りが見つかつた。どうやら一ヶ月前までエレボニアの遊撃士協会にいたらしい。」

「へえ……？」

ミコラーの情報にオリビエは首を傾げた。

「こゝ数ヶ月の間、エレボニア各地の協会支部が立て続けに襲撃された。その事件を調査していらっしゃい。」

「襲撃ねえ……。まさかとは思うけどどこかの部隊の仕業だつたりする？」

「さすがに……。10年前とは事情が違つた。俺の知る限り、どの部隊にも出動命令は下されていない。何者かに雇われた猟兵団の仕業だつた可能性が高そうだ。いずれにせよ、事件解決と同時に彼の足取りは途切れてしまった。」

ミコラーは真剣な表情で語つた。

「ふーむ……参つたな。せっかくリベルに来たのに完全に入れ違ひだつたわけか。」

「まあ、そういうことだ。目当ての人物がいない以上、この地に留まる必要はあるまい？ もう一人のほうも、身分を隠してそう簡単に会える人物でない事はわかっているだろう？ どうやら予想以上に激しい嵐が近づいているようだ。巻き込まれる前に帝都に戻るぞ。」

溜息を吐いているオリビエにミコラーは淡々と言つた。

「はつはつは、じ[冗談を。せっかく始まる極上のオペラに参加しないといふ手はあるまい？」

「……なに？ おい、まさかお前……」

嫌な予感がしたミコラーはオリビエを睨んで尋ねた。

「役者もそろいつつあるようだ。あいにく、主役は不在だが代役には心当たりがあつてね。あの5人なら、必ずや自力で舞台に上がつてきてくれるだろう。」

ミコラーの睨みを無視して、オリビエは静かに語つた。ついにリベ

ー
ルに渦巻く陰謀の歯車が着々と回り出した

.....

外伝「囚われる白き翼」（後書き）

これにてツアイス編、終了です！次回からはFC編終章のグランセル編です！！グランセル編は今までの話と違つて、クロスオーバーキャラ達が所々で活躍があるので楽しみにしていて下さい！！！
…感想お待ちしております。

第114話（前書き）

お待たせしましたー！よしよ終章、『王都繚乱』開幕ですーー！

博士を奪還した翌日、エステル達はギルドにマーデックやリフィア達、キリカに報告していた。

（遊撃士協会・ツアイス支部）

「そうか……。博士を無事救出してくれたか。演算器も取り戻してくれたし、何とお礼を言つたらいいのか……。ありがとうございます。エスター君、ヨシコア君。」

「うーん、あたしたちは大したことしてないんだけど。どちらかといふと、アガットの手伝いをただけだし。」

「お礼なら、博士たちを守つているアガットさんに言つてあげて下さい。」

「もちろん、彼にも感謝してるさ。無事、軍の捜索から逃げ切れるといいんだが……。」

マードックは特務兵達の捜索から隠れ続けているアガット達を心配した。

「今はアガットを信じるしかないでしょう。しかし、どうやらリシャール大佐は王都で何かをするつもりのようね。『ノスペル』と呼ばれる漆黒のオーブメントを使つて。」

「…………」「…………」

（まあ、お兄ちゃんからあんな事を聞かされたら2人があんな表情をしても仕方ないか……。）

キリカの推測の答えをある程度知つていてるリフィア達は真剣な表情で黙つていた。同じように事情を知つていてるエヴリー・ヌはその様子を見て、納得した。

「うん、どういう用途で使うのかは分からないけど……。その事を女王様に伝えるように博士から頼まれちゃったのよね。」

「つづむ、まさかそこで陛下の名前が出てくるとは……。確かに博士は、女王陛下と個人的な親交があつたはずだ。王国の機密に関することを知つてもおかしくはない。」

エステルの説明を聞いたマードックは唸りながら、答えた。

「そういう事情で、博士から正式に依頼を受けたんですが……。キリカさん、現状で僕たちが王都に行つても大丈夫ですか？」

「要塞に潜入したのがあなたたちである証拠はないから、今のところ問題はないでしょう。むしろ、追及される前に王都に向かつた方がいいわね。少なくとも、中央工房に査察が入る可能性はありますわ。」

「確かに……。今のうちに対策を立てなくては。エステル君、ヨシユア君。どうか気を付けて出発してくれ。博士の依頼、よろしくお願いする。」

「うん、任せておいて！必ず女王様に伝えるから。」

「工房長も、どうかお気をつけて。」

「ああ、みすみす軍の連中に尻尾をつかませるへマはせんさ。それでは失礼するよ。」

そしてマードックは今後の対策を立てるために、エステル達にお礼を言つた後中央工房に向かつた。

「さてと……。昨日、受付の通信を使って大使館と通信したようだけど……。その内容を私達にも教えてくれないかしら？多分、リシャール大佐達が何をしようとするのかメンフィル大使から何か聞いていいるんじゃないかな？」

「へつ……？」

キリカの言葉に驚いたエステル達はリフィア達を見た。

「ほう、何故わかる？」

リフィアは察しがいいキリカを感心した後、尋ねた。

「タイミングを考えればそれほど難しい事ではないわ。エステル達が潜入している間に通信をした事、先ほど私がリシャール大佐が何

かをしようとしている事を話した時、表情がいつもと違つたわよ。
それを考えれば察しがつくわ。」

「なるほど。……話してもいいが……エヴリーヌ。」

キリカの答えに頷いたリフィアはエヴリーヌに田配せをした。

「はい。……ミントにツーヤ、エヴリーヌとちょっと外に出る
よ。お菓子をどこ馳走してあげる。」

「本当ー?ママ、ちょっとだけエヴリーヌさんとお出かけしていい
?」

「う、うん。でもすぐに帰つて来るのよ?急いでツアイスを出発す
るから。」

「はーい。」

「ツーヤ、あなたもいつでらうしゃい。」

「あ、はい。」

そしてミントとツーヤはエヴリーヌに連れられてギルドを出た。

「……あの2人を外に行かせたつて言う事は、リフィア達が手に
入れた情報つていうのは子供達に聞かせるのはよっぽどまずい話な
のかい?」

エヴリーヌ達が出て行つた扉を見た後、ヨシュアはリフィア達に尋
ねた。

「……ええ。ルーアンの孤児院放火事件やテレサさんを襲撃した
犯人の件も関係していますから……」

「そうなんだ……それで、プリネ達は何を知つているの?」

プリネ達がリウイから聞いた情報が気になつたエステルは真剣な表
情で尋ねた。

「エステルさん、ルーアンを去る時、ギルドでお話しましたよね?お
姉様達に代わつてお父様が特務兵を追つた事を。」

「う、うん。」

「その様子だと、特務兵達を捕まえたのかい?」

プリネの説明にエステルは頷き、ヨシュアは先を促した。

「うむ。特務兵達を拘束して、奴らが何を計画しているのかある程

度は聞けたそうだ。まず先に言つておぐが、この情報を手に入れた方法はお前達、ギルドが許容できないやり方で手に入れた。それでもいいのか？」

「ギルドは基本的に軍人の身の安全に関して何も言わないわ。私達はあくまで民間人を守る事を理念としているから。それで情報部は何をたくらんでいるの？」

リフィアの確認するような言葉に頷いたキリカは先を促した。

「……情報部が計画している事……それは今のリベールの王アリシア女王を退位させ、代わりにデュナン公爵を国王にし、国王となつたデュナン公爵を傀儡とし、眞のリベールの指導者となる。……それが彼ら 情報部が目指している事です。」

「ええっ！？」

「それって……」

「……クーデターね。」

プリネが話した情報にエステルは驚き、ヨシュアとキリカは真剣そ
うな表情で答えた。

「ああ。奴らは最終的にこの平和なりベールを強大な軍事国家にする事を目標としているそうだ。」

「なるほど……それを聞いたらようやく事件の全貌が見えて来た
ね。」

リフィアの説明にヨシュアは頷いた。

「強大な軍事国家にする……。それって具体的にはどうするの？」

軍事国家になる事がどうなる事かあまり理解できていないエステルは首を傾げて尋ねた。そして政治に詳しいリフィアやプリネが静かに語つた。

「……大体予想できる。税率を上げて軍事費を拡大したり、大規模な徵兵制を採用する。……他にはリベルは導力兵器が盛んだから大量破壊を目的とした導力兵器を開発するというのもあるな。」

「後は大量の傭兵達との契約を合法化する……ですね。確かにリベルでは傭兵集団 獅兵団との契約を認めていないんですね？」

イエーガー

「そ、そんな……」

「確かに全て考えられそうな事ね……」

リフィアとプリネの説明を聞き、エステルは信じられない表情になり、キリカは考え込んだ。

「リフィア。気になつたんだけど、それほどの情報をどうやって彼らの口を割らせたんだい？今までの彼らの行動や言動を考えると尋問程度で話さないとと思うんだけど……」

ヨシュアはリフィア達が情報部にとつて機密情報ともなる情報を手に入れた方法が気になり、尋ねた。

「聞いたら後悔するかもしれないぞ？それでもいいのか？」

「うん、大丈夫。」

「あたしだつて大丈夫よ！」

リフィアに尋ねられ、ヨシュアやエステルは力強く頷いた。

「奴らから情報を手に入れた方法だが……」

「……拷問……」

「……………それもただの拷問ではありません。四肢を潰し、眠る事を許さず、死ぬ事も許さない…………まさに地獄に墮ちた者達が辿るような拷問です。」

リフィアの答えを聞いてエステルは信じられない表情で驚き、プリネはエステルの表情を見て辛そうな表情をした後、続きを言った。

「…………それでルーアンの特務兵達はどうなつたんだい？」

なんとなく答えがわかっているヨシュアはルーアンと対峙した特務兵達の末路を尋ねた。

「…………奴らは情報を吐いた後、処刑したそうだ。放火や強盗に加えて一般市民への襲撃…………余達、皇族にとつても見過ごせない事ばかりだつたからな。」

「そう…………なんだ…………あれだけの犯罪を犯したんだから、罪は償うべきだとは思つたけど…………」

「エステル…………」

複雑そうな表情になつたエステルを見て、ヨシュアは掛ける言葉がなかつた。

「…………もしかしてミントやツーヤに聞かせたくないから、エヴリーヌがあんな事を言つたのは2人のためを思つて……？」

「ああ、まだ幼い子供達には聞かせるべき事ではないからな。もしお前達にこの情報を話す時になつたら、2人をこの場から離れさせるよう、余があらかじめエヴリーヌに伝えておいた。」

エステルに尋ねられたりフィアは頷いた。

「そつか…………ありがとう、2人とも。そんな大事な情報を話してくれて。」

「あ、ああ。」

「え、ええ。…………その、エステルさんは何も思わないんですか？」

気を取り直して、お礼を言つたエステルを見て、リフィアは戸惑い、プリネは戸惑つた後尋ねた。

「それつてどういう意味？？」

「その…………私達メンフィルが拷問や処刑を行つてゐる事です。それを知つてエステルさんは私達メンフィルや闇夜の眷属が怖いとか、酷いとか…………」

「そんな事、絶対ないわ！そりや処刑や拷問が贊成つて言う訳には行かないけど、少なくともプリネ達はそんな事を望んで命令している人達じやないつてわかるもの！皇族でないあたしなんかじや背負えない事をプリネ達は背負つてゐるんでしょう？それがわからないでプリネ達を怖がつたりする事なんてできないわ！あたし達人間にだつて悪い人や良い人がいる…………それと同じようにメンフィル帝国にはそんな暗い部分があつたり、闇夜の眷属の人達にも良い人や悪い人がいるんでしょう？だからプリネ達がそんな心配をする必要なんてないわ！」

「エステルさん…………」

「フフ……今の言葉…………リウイが聞いたらどんな顔をするだろう

な？」

エステルの答えを聞いたプリネは驚いた後エステルを微笑ましい表情でみて、リフィアはエステルの今の言葉をリウイが聞いたらどんな表情をし、何を言うか気になった。

「ハハ、相変わらず君はたまに凄い事を言うな……」

「ちょっと……たまについて何よ！？たまについて。」

ヨシュアの言葉に反応したエステルはヨシュアを睨んだ。

「まあまあ。…………それでみなさん、今の情報を聞いてどうしますか？」

エステルを宥めたプリネはエステル達に尋ねた。

「そうね。キリカさん、あたし達はどうすればいい？」

プリネに宥められたエステルはこれからの方針をどうすればいいかをキリカに尋ねた。

「…………わかっているとは思うけど遊撃士は國家権力に対しても不干渉よ。ただ、何があつてもいいようにグランセルの受付に今回の情報を伝えておくわ。貴方達は博士の依頼通り女王陛下に今回の件とリフィア姫殿下達が提供してくれた情報を伝えて。女王陛下がその情報を知つて依頼を出してくれたらこちらも動けるわ。」

「了解しました。」

「よーし、そうとなれば早速出発ね！エヴリー・ヌ達と合流して急いで王都に行って、女王様に会わなくちゃ！」

「でしたら定期船を使つたほうがいいかもしませんね。王都まで歩いたら半日くらいかかるそうですが、飛行船なら1時間足らずで着くと聞いています。」

「そつか、確かに……。せつかく徒步で王国一周しようと思つたけど仕方ないか。」

プリネの提案を聞いたエステルは少しだけ残念そうな表情をした。

「だつたら、少し待ちなさい。」

エステル達の様子を見て、キリカは通信器でどこかにかけて話始めた。

「こちら遊撃士協会……。こんなにまば。いつもお世話をなつてゐるわ
ね。……ええ……お願ひするわ。王都行きを7枚……。ええ……請
求はいつものように。それではよろしく頼むわね。」

「???.どうしたの、キリカさん？」

「ひょっとして発着場の受付ですか？」

キリカの行動にエステルは首を傾げ、ヨシュアは会話相手を確認し
た。

「ええ、王都行きの定期船のチケットを確保したわ。代金はツァイス支
部が持つから受付で搭乗手続きだけすればいいわ。それと、こ
れを持つていきなさい。」

ヨシュアの疑問に頷いたキリカは正遊撃士資格の推薦状をエステル
とヨシュアに渡した。

「えええへー！」

「ず、ずいぶんと用意がいいんですね……」

推薦状を渡されたエステルとヨシュアは驚いた。

「定期船のチケットは博士の依頼に関する必要経費。推薦状は、博士救出という大仕事を達成したことへの評価。報酬といつしょに、胸を張つて受け取りなさい。」

「あ……うん！ありがとう、キリカさん！」

「本当に……何から何までみません。」

「短い間でしたが、お世話になりました。」

「うむ、世話になつた。この場にいないエヴリースもお主に感謝し
ているだろつ。」

「フフ、前にも言つたけどそれが私たち受付の仕事だから。さて……
王都行きの船は11時出発よ。早めに発着場に行つて搭乗手続
きをした方がいいわね。女神達の加護を。みんな、気を付けて行き
なさい。」

「はい！」

「お世話になりました。」

そしてエスティル達はエヴリーヌ達と合流して、ツァイスの空港に向かつた……

第114話（後書き）

感想お待ちしております。

その後エステル達は空港に向かつたが軍による検問がしかれた影響で定期船が遅れている事を知り、軍に見つからない安全路で行くため、エステル達は街道を使って王都に向かい王都とツァイスの国境セントハイム門に到着した。

（セントハイム門・入口）

「ようやく到着か。ミント、疲れていない？」

「うん。大丈夫だよ、ママ！」

セントハイム門に到着して一息ついたエステルはミントに疲れていないか尋ねたが、ミントは疲れを知らないかのように元気良く答えた。

「疲れたら必ず言つのよ？その時はおんぶしてあげるわ。」

「えへへ…………ありがとう、ママ！でもミント、こいつやつてママやツーヤちゃん達といつしょに歩くだけで楽しいよ！」

「あ～ん、もう！本当にミントは可愛くて良い子で癒されるわ～。」

「くすぐつたいよ～、ママ。」

可愛らしいミントの笑顔を見て、エステルはミントを抱きしめて頬をスリスリした。ミントはくすぐつたそうにしながらも気持ちよさそうな表情をした。

「ハハ、あいかわらずエステルはミントに甘いなあ。」

「ふふ、そうですね。……ツーヤは大丈夫？」

ミントを抱きしめているエステルを微笑ましそうに見ているヨシュアの言葉に同意したプリネはツーヤに尋ねた。

「はい、お気づかいありがとうございます。でも、大丈夫ですよ。あたしとミントちゃんはルーアンにいた頃はいつも走りまわって遊んでいましたから、これくらいの距離を歩く事は大丈夫ですよ。」

「へ～。そのところはプリネと似ていね。プリネが小さい頃はこっちが誘わないと城の外に出なかつたもんね。」

「ふむ、そうだな。外に出て民の生活を見るのもまた皇族の務めだぞ？」

「お姉様達がおっしゃつてゐる事は最もだと思いますが、自分の立場を考えたら小さい頃から城の外には一人で出れないですよ。幼かつた頃、お母様からも一人で外に出るときは必ず兵士の方達に護衛してもらつよう、言いつけられますし。」

エヴリーヌとリフィアの言葉を聞いたプリネは苦笑しながら答えた。「ペテレーネはお兄ちゃんとできた子供であるプリネを凄く甘やかしていたからね～。魔術の勉強や料理の作り方とか自分で教えていたもんね。」

「まあ、あ奴がリウイを慕う気持ちの強さはリウイの愛妻であつたイリーナ様やリウイが”テネイラ事件”の犯人ではないと最初から信じていたセルノ王女ラピスと並ぶほどと言われてあるからな。念願のリウイとの子供を授かつたと知つた時、嬉しさのあまり泣いていたからな。」

「……あたしもご主人様のお母様と少し話して思いましたけど、優しい人で凄くご主人様の事を大事にしているつていう思いが伝わつてきました。それにあたしみたいな見ず知らずな子供がご主人様に仕えたいつて伝えた時も凄く喜んでくれました。」

「あはは……でも、そのお陰で今の私がいます。お父様、お母様にたくさん尊敬できるお兄様、お姉様達に囲まれて、私は幸せ者です。」

エヴリーヌやリフィア、ツーヤのペテレーネに対する評価や思いを知つたプリネは恥ずかしそうにしながら答えた。

「ハハ、本当にプリネ達は姉妹仲がいいね。…………さて、そろそろ行こうか。」

ヨシュアに促され、エステル達は門の受付に行つた。

（セントハイム門・受付）

「やあ。セントハイム門によつて。王都に行きたいんだつたら通行手続をしてもらえるかな？」

受付の兵士はエステル達を見て、尋ねた。

「うん。通行手続をしてもらえる？」

「よし来た。この用紙にサインしてくれ。」

そしてエステル達は用紙に必要事項を書いた。

「しかしながら。最近の女の子は進んでいるつていうか度胸があるつていうか……。わざわざ街道を通つてハイキングかい？特に唯一男の子の君は肩身が狭くないかい？」

「ハハ、大丈夫ですよ。」

「いえ、修行の一環として王都まで歩いているんです。」

兵士の疑問にヨシュアは苦笑し、プリネは答えた。

「へ～。だとすると、武術大会にも出るのかい？」

「え、武術大会……？」

兵士の言葉を聞いて、エステルは首を傾げた。

「なんだ、知らないのかい。武術大会つてのは王都の『グランアリーナ王立競技場』で毎年開かれているイベントでね。王国軍の精銳を始め、腕に覚えのある人間が集まつて武術の腕を競い合う大会なんだ。たしか、今日の午後に予選が行われるはずだよ。」

「へえ～、なんだか面白そう！」

「はは、エステルが好きそうなイベントだね。」

「ふむ……」

（うわあ～…………あの表情はなんか、嫌な予感…………絶対めんどくさい事を考へてゐるよ…………）

兵士の答えを聞いたエステルは意氣込み、その様子を見たヨシュアは苦笑し、リフィアは何かを思い付いたような表情で考え込み、リフィアの表情を見たエヴリースは溜息を吐いた。

「女王陛下のはからいで入場料は割引されるし……。ああ、僕も勤

めがなかつたら見物に行つたんだけどねえ。」

兵士は武術大会が見れない事に溜息を吐いた。

「あはは、『愁傷様』でも、どうせだったら見物より参加がしたかつたな。今までの修行の成果も確かめられそうだし。」

「確かに……。でも、予選をしているなら参加するのは無理そうだな。依頼も受けているし見物だけでガマンしようよ。」

「ちえ、残念。」

「…………」

兵士はエステルとヨシュアのやり取りをジツと見ていた。その様子に気付いたエステルは兵士に尋ねた。

「ん、兵士さん? どうしたの。マジマジと見つめちゃって。」

「その胸のHンブレム……。若いから気付かなかつたけど君たち、ひょつとして遊撃士?」

「うん、そうだけど?」

「何か問題でもありますか?」

「いや、その……。問題というか何といつか……。参つたな。さすがにありえないと思つうけど……」

「……こら。勤務中の無駄口は感心せんな。」

エステル達に尋ねられ、兵士が口を濁していたその時、控室から隊長らしき人物が現れた。

「あ、隊長……」

「なんだ、問題でもあつたか?」

「そ、それがですね……。彼らが、その……遊撃士らしいので……」

「なに……」

隊長は兵士からエステル達が遊撃士である事を知ると、目を細めた。

「? ? ?」

(どうしたんでしょう?今までの関所の受付の態度を考えるとおかしいですよね?)

(…………恐らく博士奪還が関係しているんだろうな。…………さういふ…………)

ら余達が口を挟む必要が出て来たようだな。）

隊長の表情を見て、エステルは何の事からわからず首を傾げ、プリンセスとリフィアは小声で推測をしていた。

「あー、君たち。申しわけないが、少々時間をもらえるかな？」

「え、でもあたしたち、早く王都に行きたいんだけど。」

隊長の言葉にエステルは驚いた後、軽い反論をした。

「ほう、王都に、ねえ。参考までに聞くが、何をして行くつもりなのかね？」

「え、え？ その、頼まれた仕事で……」

「仕事の内容は？」

「えつと、博士の……。……じゃなくて……うへ、何て言えばいいのか？」

「申しわけありませんが、ギルドの規約があるのです。依頼人のプライベートにも関わるので内容を明かすのは勘弁してもらえないですか？」

仕事内容が軍に知られる訳にはいかない事に気付き、仕事内容が言えないエステルは唸り、ヨシュアが手助けをした。

「ふん……怪しいな。どうやら、色々と話を聞かせてもらひが必要がありそうだ。」

「どうしてミント達が調べられなくちゃならないの？ ねえ、どうして？」

「お願ひします、教えて下さい。」

「うつ…………。その、実は……。軍本部からの通達があつてね。あの王室親衛隊が、陛下に反逆して各地でテロ事件を起こしたらしいんだ。しかもどうやら遊撃士を装つて活動している連中もいるらしくてね……。念のため、遊撃士を名乗つた人間は取り調べの対象にしているのさ。」

子供であるミントやツーヤに嘆願され、兵士は純粹なミント達の眼差しに負けて理由を話した。

「あ、あんですつてーーー！」

兵士の言葉を聞いたエステルは驚いて、声を上げた。

「こり、余計なことを言つた。申しわけないがこれも上からの命令でね。身元が証明されるまでここに留まつてもらおうか。」

「じょ、【冗談じゃないわよ。なんであたしたちが……】」

隊長の言葉に反論をしようとしたその時、リフィアが口を挟んだ。

「ほう、余達を疑うか。お前達、どうなつても知らないぞ？」

「何？それはどういう意味だ。」

リフィアの言葉に隊長はリフィアを睨んで、尋ねた。

「…………お姉様の言葉通りの意味です。エステルさん達はメンフィル大使の依頼を受けて、私達を王都まで護衛しているんです。」

「メンフィル大使…………メンフィル皇帝のー？バカな、そんな事がある訳が…………確かに君達は闇夜の眷属のようだが…………」

リフィアに続いたプリネの言葉に驚いた隊長は、信じられない様子でいた。

「事実だ。余やプリネ、エヴリーヌ。後、そこにいる2人の子供はメンフィル貴族の子供でな。リベール全都市の観光と修行をしたい余達の願いを

寛大な陛下が聞いてくれてな。年も近いエステル達なら馴染みやすいと思って、陛下がエステル達に依頼したのだ。そうだな？」

「はい。」

「ん。」

「ほえ？ちが…………ムグ。」

(ミントちゃん、今は何も言わないでリフィアさん達の言つ通りに頷いておこう。)

(う、うん。)

リフィアの嘘も混じえた説明に話を合わせるようにプリネやエヴリーヌは頷いたが、ミントは首を傾げて声を出そうとしたがツーヤに口を抑えられ、ツーヤに小声で頷いたミントは疑問を口に出すのをやめた。

「確かに話の筋は通っているが…………証拠か何かはないのか？」

「証拠か。証拠なら余の名が証拠だ！」

「おい、この子の名前はどうだ。」

「あ、はい。この名前です。」

隊長に尋ねられ、兵士はリフィアが書いた通行手続き書を見せた。

「リフィア・ルーハンス…………この名前が何か？」

「ルーハンスとはリウイ陛下に嫁いだ側室の名前の一つだ。」

「なつ！？」

「では、王家に連なる貴族の方ですか！？」

リフィアの説明に隊長や兵士は驚いた後、信じられない表情でリフィアを見た。

「まだ疑うのなら大使館に問い合わせてもよいぞ？まあ、その時は覚悟してもららうからな。王家に連なる余達を疑つた事、リウイ陛下に手間をかけさせた事。これらを後に大使館を通してリベル王家に抗議させてもららう。その原因となつた

のがお前達とわかれれば、どうなるかは自分達自身がよくわかつているだろう？」

リフィアは不敵な笑みを浮かべて、隊長や兵士に答えた。

「…………つつ！た、隊長！どうしましょう…………？」

「う、うろたえるな！いいだろう！そこまで言つたら大使館に問い合わせて、確かめてみようじゃないか！」

リフィアの言葉に兵士は顔を青褪めさせ、うろたえて隊長に尋ねたが、隊長は震えそうになる体を必死に抑えて、うろたえている兵士を叱つた後、強がりで答えた。

「しかし隊長、もしそちらの方がおっしゃつている事が本当だつたら、我々は…………！」

「だが、我々誇り高き王国軍が脅しに屈する訳にもいかん…………。」

「あの…………そんな事をしなくても遊撃士協会に確かめてみたらどうですか？」

言い争つてゐる兵士と隊長を見兼ねたプリネは提案をした。

「え？」

「何？」

プリネの提案に隊長達は言い争つのをやめて、プリネを見た。

「先ほど説明したようにリ・ウイ陛下は遊撃士協会に私達の護衛の件等を依頼として出していますから、ギルドに確かめてもらえばすぐわかると思います。」

「！おい、すぐにツァイスのギルドに確認しろ！」

「ハツ！」

プリネの言葉に早く反応した隊長は兵士に命令した。そして兵士は受付に備え付けてある通信器を手にとつて、ツァイスのギルドと通信をした。

「……………はい、そうです。特徴は……………それで、そのリフィアという方が王家に連なる貴族だと……………え！？そ、それは本当なのですか！？……………はい、お手数をお掛けして申し訳ありません……………では……………」

兵士は通信器でキリカに尋ねた後、絶望したかのように顔を青褪めさせた状態で通信器を切つた。

「おい、どうだつたんだ？」

「……………はい。……………」

隊長にせかされた兵士は青褪めた表情で隊長にエステル達には聞こえない小声で説明した。

「……………なつ！？げ、現メンフィル皇帝の一人娘にして、リ・ウイ皇帝陛下の孫娘……………！」

兵士の説明を聞いた隊長は思わず声を出し、兵士と同じように顔を青褪めさせてリフィアを見た。

「ほう、ツァイスの受付は相変わらず話が速くて助かるな。説明をする手間が省けた。」

隊長の言動や表情を見て、リフィアはキリカが状況を理解して、あ

つさり自分の正体を説明した事に感心した。

「さて…………これで余が何者かやエステル達が依頼人の正体や仕事内容を言う事に口を閉ざした理由がわかつただろう?」

「「も、申し訳ございません!!」」

勝ち誇った笑みで尋ねたりフィアに隊長と兵士は揃つて、頭を深く下げる謝罪した。

「わかつたのなら、さつさと余やエステル達を通すがよい。そうすれば、今回の事は不問としよう。」

「はっ! 寛大なお心、ありがとうございます!…………君達、本当に申し訳なかつた。完全に自分の誤解だつたようだ。」

リフィアに感謝した隊長はエステル達に頭を下げて、謝罪した。

「うんうん、分かればいいのよ。」

「そちらも職務でしそうから、どうか気になさらぬでください。そしてエステル達は無事、セントハイム門を抜けた。」

♪キルシェ通り♪

「…………はあ。それにしてもさつきはリフィア達のお陰で助かつちゃつたわ。」

セントハイム門を出て、兵士達が見えないとこ今まで歩いたエステルは立ち止まって安堵の溜息を吐いてリフィア達を見た。

「けど、リフィアさん達って本当に凄いね、ツーヤちゃん! リフィアさんが皇女様つてわかるとミント達を足止めしようとしていた兵士さん達、みんな態度を変えちゃつたね。」

「うん。そんな凄いご主人様達のお傍にいられるよ、がんばらないと。」

ミントはリフィアの凄さを改めて知つて、はしゃぎ、ツーヤは同じメンフィル皇女であるブリネの傍にいて当然の存在になるよう、改めて誓つた。

「そうだね。キリカさんも状況を理解してリフィアの本当の正体を

話してくれたのも助かつたけど……本当によかつたのかい？

「む？ 何の事だ？」

エスティルの言葉に頷いたヨシュアに尋ねられたリフィアは何の事か理解できず、尋ねた。

「ヨシュアさんが言いたいのは王国軍にリフィアお姉様が王都に行く事がバレてしまった事です。恐らく情報部の耳にも入るでしょうし……」

「何だ、そんな事が。そんな事、今更であろう？すでにボースで余とリシャールは出会っている上、モルガンとも対峙した。余達が王都に行く事等、とっくに予測済みであろう。」

「確かにそうよね。…………でも、大佐達が何かしてこないといいんだけど。」

「それってどういう意味？」

エスティルの疑問にエヴリーヌは尋ねた。

「レイストン要塞でシード少佐が言つてたんだけど……大佐達は軍の上層部の人達の弱みを握つたり、家族を人質にとつたりして自分に逆らえないようにしたんだ。だから、特務兵達がリフィア達を襲撃とか誘拐みたいな真似をしなくちゃいいんだけど……」

「確かにそれは考えられるね。リフィア達の存在は大佐達にとつてもある意味、最もやっかいで動きを封じ込めたい存在になると思うし。」

「…………ご主人様は絶対、あたしが守ります。」

エスティルとヨシュアの言葉を聞いたツーヤは両方の拳を握つて、決意の瞳で答えた。

「フフ……ありがとう、ツーヤ。でも大丈夫よ。私はこう見えてもお父様達に鍛えられているから、特務兵にも遅れをとらないわ。それにリフィアお姉様やエヴリーヌお姉様もいますから、大丈夫です。」

「うむ！ 裏でコソコソ動き回るような輩に負ける余ではない！」

「ん。お兄ちゃん達からプリネ達の事を守るよう頼まれているからね。プリネ達を狙つてきたり容赦なくやつつけられたりだよ。」
プリネの言葉にリフィアは力強く頷き、エヴリーヌは物騒な言葉を言いながらも力強い言葉を言った。

「あはは……よく考えたら特務兵の実力じゃあ、リフィア達には勝てないわね。……さて、急いで王都に行きましょう!」

「了解。」

「はーい!」

「うむ!」

「はい。」

そしてエスティル達は陰謀という闇が静かに迫っている王都 ンセルに向かつた……

グラ

第115話（後書き）

リフィア達がいるお陰でどいかの誰かさんの再登場フラグも折っちゃいました 次回から舞台がいよいよグラントセルに移ります！楽しみに待つて下さい！……感想お待ちしております。

その後グランセルに到着したエステル達はギルドに向かった。エステル達がギルドに入ると、そこには今までの旅で出会った正遊撃士を含めた4人の正遊撃士達がグランセルの受付 エルナンから応援の言葉をもらっていた。

（遊撃士協会・グランセル支部）

「それでは武運を。まあ、皆さんだったら余裕で通過できると思いまます。」

「へへっ、分かつてんじやねえか。」

「出場するからには全力でいかせてもらうよ。」

「そうですね！軍の連中には負けられません。」

グラツィやカルナの言葉にアナラスは力強く頷いた。

「さてと……。そろそろ出かけるとしようか。…………ん？」

3人を促した正遊撃士 リベールN.Oと言われ、数少ないA級

正遊撃士クルツはエステル達に気付いた。

「えっと……」

「どうも、お邪魔します。」

エステルとヨシュアはクルツ達に挨拶をした。

「あんたたちは……エステルとヨシュアじゃないか。それにメンフィルのお嬢ちゃん達も。それに確かあんた達は孤児院の…………なんでここに？」

エステル達に気付いたカルナはミントやツーヤにも気付いて、首を傾げた。

「あ……ルーアンのカルナさん…」

「ここにちは！」

「お久しぶりです。少し事情があつて、エステルさん達といつしょ

に旅をしているんです。」

カルナがいる事に気付いたエステルは驚き、ミントやツーヤはペロリとお辞儀をした。

「そういうや、空賊騒ぎの時に一度会ったことがあつたっけな。たしか、シェラザードと一緒にいた新人たちだよな？それになんでメンフィルのお前さん達までいるんだ？」

グラツィはエステル達の顔を見て、思い出した後、リフィア達にも気付いて首を傾げた。

「それについては私から説明させていただきます。皆さん、早く行かないで間に合わなくなると思いますよ。」

「おつと、それもそうだね……。悪いね、2人とも。積もる話はまた後にしよう。」

「それじゃあ、俺たちはこれで失礼するぜ。」

「またね、新人君たちにエヴリーヌちゃん！」

「……失礼する。」

エルナンに促されたクルツ達はエステル達に声をかけた後、ギルドを出て行つた。

「は～、あれだけ遊撃士が揃うとなんだか壯觀つて感じよね。」

「ええ。それにしても遊撃士があれだけ揃うなんて滅多にないのではないですか？」

エステルは去つて行つたクルツ達を見て言つた事にプリネは同意した。

「うむ。しかも全員正遊撃士の紋章を付けていた。それに一人一人、中々の強さを感じられたな。」

「…………… そういうえばエステル達がつけている紋章と形がちょっと違つたね。あれがエステル達が目指している正遊撃士つてやつなの？」「リフィアは去つて行つたクルツ達を評価し、エヴリーヌはクルツ達がつけていた遊撃士の紋章がエステルとヨシュアがつけている紋章と形が異なる事に気付いて、尋ねた。

「そうだよ……。それにしてもみんな凄腕みたいだね。出場するとか言ってたからひょっとして……」

エヴリースの疑問に頷いたヨシュアが言いかけた所をエルナンが続けた。

「ええ、お察しの通りですよ。彼らはこれから武術大会の予選に出るんですよ」

「へ～つ……つて。す、すみません！ あたし、ツアイス支部から来たエステル・ブライトつていいます。」

「同じく、ヨシュア・ブライトです。」

「ミントです！ よろしくお願ひします！」

「あたしはツーヤと申します。精一杯がんばるのでよろしくお願ひします。」

「余の名はリフィア！ 余が来たからには大船に乗った気分でいるがいい！」

「私…………エヴリース。よろしく。」

「プリネと申します。お姉様共々よろしくお願ひします。」

エルナンにエステル達はそれぞれ自己紹介をした。

「私はエルナン。グランセル支部を任せています。キリカさんから連絡を頂いたのであなたたちの来訪は知っていました。早速ですが、転属手続をしていただけますか？」

「はい、わかりました。」

そしてエステル達は転属手続きの書類にサインをした。

「はい、結構です。遊撃士協会、グランセル支部によつこや。個人的に、あなた達が来るのをとても楽しみにしていたんですよ。たしか、カシウスさんのお子さんたちなんですよね？」

「あ、うん、そうだけど……。やっぱりエルナンさんも父さんの知り合いなのよね？」

「ええ、カシウスさんはいつもお世話になつています。聞いた話ですと、旅に出たきりお戻りになつていなうそですが？」

エステルの疑問に頷いたエルナンは逆に尋ねた。

「うん……。しばらく留守にするつて手紙はあつたんだけど……」

「具体的に、どこに行くかは書かれていなかつたんです。ロレントからツアイスまで一通り回つてみたんですけど父の消息は分かりませんでした」

「ふむ、そうなると国内にはいない可能性が高そうですね。しかし、参つたな……。現在、軍のテロ対策で王都で遊撃士のメンバーが活動しにくくなつているんです。キリカさんから聞いた件に対策するためにできればカシウスさんと連絡が取りたかつたんですが……そりいえばリフィアさん。貴女達にも尋ねたい事があるのですがよろしいでしょうか？」

カシウスと連絡が取れない事に溜息を吐いた後、リフィア達を見た。「ふむ。何を聞きたいのだ？」

エルナンの言葉にリフィアは首を傾げて、尋ねた。

「…………皇女である貴女達なら詳しいと思うのですが。…………率直に聞きます。今回の件 リシャール大佐達のクーデターに対して、メンフィル帝国はどのように動くのですか？」

エルナンは真剣な表情でリフィア達に尋ねた。

「その件か。リウイも言つていたが特に動く事はせず、今回の件は静観するそうだ。」

「え…………なんで!? メンフィルつてリベールの同盟国なんでしょう! ? 助けてくれないの! ?」

リフィアの答えにエステルは驚いて、リフィア達に尋ねた。

「エステルさん。…………申し上げにくいのですが今回の件はあくまでリベール国内の問題です。他国が侵攻して来た等でしたら援護する必要は出でますが、国自身の問題はあくまで国自身が解決すべき事が通例なんです。ですからメンフィル軍を派遣して、情報部の者達を拘束…………と言つた事は現状不可能です。」

「そりなんだ……」

申し訳なさそうな表情で語るプリネを見て、エステルは何も言えず、

黙つた。

「…………やはりそうですか。貴重な情報をありがとうございます。」

「それで、エルナンさん。僕達はどうすればいいですか？」

ヨシュアはこれからの方針をエルナンに尋ねた。

「遊撃士協会の性格上、軍への介入はできませんが……傍観できる状況でもなさそうです。とりあえず、あなたたちはラッセル博士の依頼を遂行していただけますか？」

「もちろん、そのつもりよ。ただ問題のは、どうやつたら、女王様に会えるかなんだけど……」

エスティルはどうやって、リベールの国王 アリシア女王に会うかを悩んだ。

「そうですね……。普段なら、協会の紹介状があれば取り次いでもらえるはずなんですが……」

「え、そうなの！？なーんだ 心配して損しちゃった。」

口を濁しながら言つエルナンの言葉にエスティルは反応して、明るい顔をしたがヨシュアは首を横に振つて答えた。

「エスティル……。そう簡単にはいかないとと思つ。何といつても、城を守る親衛隊がテロリスト扱いされているんだ。それが何を意味するか分かるかい？」

「え、それってつまり……紹介状を握りつぶされちゃう？」

「うん、その可能性が高そうだ。レイストン要塞と同じくグラナセル城もリシャール大佐に掌握されている可能性が高いと思う。」

「うう、やっぱりそつか……。そうなると、簡単には女王様に会えそうもないわね…………。そうだわ！ここにはリフィア達がいるじゃない！リフィア達が女王様に会いたいって言えば正面から堂々と入れてくれるんじゃない！？」

ヨシュアに言われたエスティルは唸つた後、名案を思いつたかのようになりフィア達を見て、言った。

「エステル、それはやめたほうがいいよ。」「なんで？」

「確かにリフィア達が名乗れば城には入れてくれるかもしないけど……下手をしたら、色々理由をつけられて女王様にも会わせてくれない上、城から出られない状況になってしまふよ。」

「あ、そつか。みすみす大佐達の手の平に乗るようなものね……理由がわかったエステルは残念そうな表情をした。

「まあ、わざと敵地に入つて目的は果たして、暴れながら脱出とうのもいいのだがな。」

「キヤハツ それ、賛成～。」

「あ、あの…………たすがにそれはちょっと…………」

プリネはリフィアとエヴリースの物騒な提案に冷や汗をかいだ。

「うーん……。ここで考えてても仕方ないから、とりあえずお城に行つてみない？うまくすれば、門番あたりから情報が聞き出せるかもしれないし。」

「それは構わないけど……、一つ注意しておくことがある。僕たちが女王陛下に面会しようとしていることは隠しておいた方がいいと思うんだ。リシャール大佐の耳に入つたら妨害される可能性が高いからね。」

「あ、なるほど……」

「確かに、当面は他の遊撃士にも伏せておいた方がよさそうですね。くれぐれも慎重に情報収集を行つてください。」

「わかつたわ、エルナンさん。」

「何か分かつたら報告します。」

そしてエステル達がギルドを出ようとした時、リフィアが呼びとめた。

「エステル。余達は少しやる事ができた。悪いがお前達だけで行つてくれないか？」「お姉様？」

「あ、なるほど……」

「ハア……嫌な予感。」

リフィアの提案にプリネは首を傾げ、エヴリーヌは溜息を吐いた。

「え？ う、うん。わかつたわ。行くわよ、ミント。」

「はーいー！ どんなお城かな？ ミント、とっても楽しみ！」

「ツーヤ、あなたも行つてらっしゃい。せつかく王都に来たのです

から、一度は城を見た方がいいですよ。」

「わかりました、ご主人様。」

そしてエステル達はギルドを出た。エステル達が出たのを見送ったリフィアはエルナンにある事を言った。

「さて……エルナンとやら。余達の用事の件だが……」

「…………え！ ？…………いいんですか？ そんな事をして。」

エルナンはリフィア達の用事を聞いて、驚いて尋ねた。

「うむ！ カーリアンも毎年出場している事だし、余達が出場してもおかしくなかろう。まあ、さすがにマーシルンの名は出さないから安心せよ！」

「ハア～…………やつぱり、めんどくさい事になつたよ。…………でも、遊べるからいつか。キヤハッ！」

「お、お姉様。私も出場するのですか…………？」

「当たり前であろう。何をおかしな事を言つてる。」

「フウ…………わかりました。気は進みませんがやるからには全力でやらせていただきます。」

リフィアに何を言つても無駄とわかっているプリネは諦めて溜息を吐いた後、気を取り直した。

「うむ。それでこそ、余の妹だ！ では、行くぞ！」

「はいはい。」

「はい。」

そしてリフィア達もギルドを出て、ある場所に向かった。

「…………やれやれ…………どうやら今年の大会は相当荒れそうですね」

「」

リフィア達を見送ったエルナンはクルツ達も参加しているある大会

がどうなるかわからず、溜息を吐いた

.....

第116話（後書き）

もうみなさんお分かりだと思いますがリフィア達は例の大会に出場します！！後、少し先の話を話しておきますと……決勝の組み合わせは原作通りにはなりません！と言つておきましょう……感想お待ちしております。

（武術大会・予選）前篇

その後エステル達は城まで見に行き、遊撃士の紋章を隠して旅行者を装つて城門を守っている兵士達から色々な情報を手に入れて話合つてゐるところフイリップを連れたデュナン公爵が城から出て来て、武術大会を行つてゐる王立競技場グラランアリーナに観戦に行つた。兵士達からデュナンが女王代理を務めている事を

知つていたエステル達はデュナンの動向を調べるため、グラランアリーナに向かつた。

（グラランアリーナ・観客席）

「うわあ……。いっぱい入つているわね～！」

「うん……。すごい熱気だね。予選からこの数つていうことはかなり大きなイベントみたいだ。」

「人が一杯いて、凄いね！ツーヤちゃん！」

「うん。本当に人がたくさんいるね……」

チケットを買ってグラランアリーナに入ったエステル達は観客席に行つて、ほぼ満席になつてゐる観客席を見て驚いた。

「予選試合、どこまで進んでいるのかな。」

エステルがそう呟いた時司会の声が聞こえて來た。

「お待たせしました。これより第（）試合を始めます。」「あ……始まつたみたい。」

「それじゃあ、どこか空いている所に座ろうか。」

「わかった。ほら、ミント、ツーヤ。はぐれないためにもいつしょに手を繋ぎましょ。」

「うん！」

「ありがとうございます。それではお言葉に甘えて……」

そしてエステル達は空いてゐる観客席を探して、座つた。

「南、蒼の組。国境警備隊、第1部隊所属。以下4名のチーム！」

片方の門から兵士達が現れた。

「あれ？……。試合って1対1じゃないんだ？」

「うん、団体戦だったみたいだね。僕の記憶だと確か個人戦だったはずだけど……」

団体戦である事にエステルは驚き、ヨシュアは首を傾げた。
「北、紅の組。遊撃士協会、グランセル支部。クルツ選手以下4名のチーム！」

そしてもう片方の門からクルツ達が現れた。

「あっ、カルナさんたちだわ！」

「危うく見逃すところだったね。」

「カルナさんって、どれだけ強いんだろうね、ツーヤちゃん！」

「正遊撃士だから少なくとも兵隊さんには負けないとあたしは思つな。」

クルツ達の登場にエステル達は興味津々でクルツ達を見た。

「これより武術大会、予選第4試合を行います。両チーム、開始位置についてください。」

審判の言葉に頷いた両チームは開始位置についた。

「双方、構え！」

両チームはそれぞれ武器を構えた。

「勝負始め！」

そして兵士達とクルツ達は試合を始めた！試合は終始クルツ達の有利で運び、結果はクルツ達の勝利となつた。

「勝負あり！紅の組、クルツチームの勝ち！」

「やつたあああーーーつ！すごいわ、カルナさんたち！」

「凄つごいいーーーつ！カルナさん達って、凄く強いね、ツーヤちゃん！」

「うん。それにほかの遊撃士の人達も凄く強いね。遊撃士の人達の

動きはとても参考になるよ。」

「うん、いい勝負だつたね。軍人たちもいい動きだつたけど連携攻撃と役割分担の上手さで遊撃士チームには及ばなかつたな。」

試合がクルツ達の勝利で終わつた事にエステル達が興奮しているところ、また司会の声が聞こえて来た。

「……続きまして、これより第5試合を始めます。南、蒼の組。チーム『レイヴン』所属。ベルフ選手以下4名のチーム！」

片方の門からかつてルーアンで操られていた不良集団 レイヴンの下つ端達が現れた。

「あ、あの連中！？」

「ルーアンの倉庫街にいた不良グループのメンバーだね。なるほど、普通の民間人にも開かれている大会なのか……」

「はあ、場違いもいいとこだわ……。戦闘や武術のプロが集まつているのにあんな連中が敵うわけないじゃない」

「なんか複雑な気持ちだね、ミントちゃん……ルーアンに住んでいた人達が出場したのは嬉しいけど、よりもよつてあの人達だなんて……」

「うん……確かにクラムに酷い事をしようとしていた人達なんだよね？ミント、そんな人達は応援できないよ……」

レイヴンの登場にエステルは溜息を吐き、ヨシュアは驚き、ツーヤやミントは複雑そうな表情をした。

「北、紅の組。隣国、カルバード共和国出身。武術家ジン選手以下1名のチーム！」

「ジ、ジンさん！？」

「また知り合いか……。世間は狭いって感じだね。でも、1人で出場なんてさすがに不利だと思うけど……」

「確かに……。いくら相手がチンピラでも囮まれちゃつたらマズイかも。」

アガットを助けるための薬の原料をとりに行く時、手伝ってくれた遊撃士 ジンの登場にエステル達は驚き、また1人で出場してい

る事に驚いた。その時、司会の説明が聞こえて来た。

「ジン選手は今回の予選でメンバーが揃わなかつたため1名のみでの出場となります。著しく不利な条件ではありますが本人の強い希望もあつたため今回の試合が成立した次第です。みなさま、どうかご了承ください。」

「これより武術大会、予選第5試合を行います。両チーム、開始位
置についてください。」

審判の言葉に頷いた両チームは開始位置についた。

西ノ山

「勝負始め！」

そしてジンとレイヴンの下つ端達は試合を始めた！

「オーラアツ！！！」

レイヴン達は同時に襲ってきたが、ジンは余裕の笑みを浮かべた後、何かを溜める動作をした。

するジンの両手から大きな鬪氣でできた弾ができた。

た
！

――グワアアアア！？」

まどもにシンの技を受けてしまつたレイヴン達は悲鳴を上げた後、その場に倒れて立ちあがらなくなつた。

観客達はたった一人で圧倒的にレイヴン達に勝利したジンに歓声をより大きくあげた。

「勝負あり！ 紅の組、ジン選手の勝ち！」

「ひやつほーーっ！さすがジンさん、圧倒的！」

「余計な心配だつたみたいだね。あの巨体で、動きも速いし、技の

キレも凄まじいものがある。ただ、さすがに本戦になつたら1対4は厳しいとは思うけど……」

「うーん、確かに……」

その時、また次の試合の組み合わせのアナウンスが入った。

「……続きまして、これより第6試合を始めます。南、蒼の組。王國正規軍所属、第1部隊所属。～以下4名のチーム！」

片方の門より、また王国軍の兵士達が現れた。

「北、紅の組。異世界の国、メンフィル帝国出身。冒険家リフィア選手以下2名のチーム！」

もう片方の門からは何と、リフィアとエヴリーヌが現れた。

「リフィア選手はジン選手と同じように今回の予選でメンバーが揃わなかつたため2名のみでの出場となります。著しく不利な条件ではあります。が本人の強い希望もあつたため今回の試合が成立した次第です。みなさま、どうかご了承ください。」

少女2人だけの出場にざわめいている観客達に司会は説明をした。

「リ、リフィア！？ い、いつのまに出場手続きをしちやつたんだろう……」

「彼女達の用事つてこの事だつたんだ……」

リフィアとエヴリーヌの登場にエステルとヨシュアは驚いた。

「あれ？ ご主人様はいませんね。リフィアさん達が出場するならいつしょに出場するかと思つたのですが……」

「あ、ツーヤちゃん。試合が始まるとみたいだよー。」

プリネを探していたツーヤだったが、ミントに言われてプリネを探すのをやめた後、すでに所定の位置についているリフィア達を見た。

「双方、構え！ 勝負始め！」

そしてリフィア達と兵士達は試合を始めた！

「例え相手が女子供であろうと大会に出ている上、相手は”大陸最強”を誇るメンフィル帝国の出身だ！ 油断や手加減はするな！ 行く

ぞ、お前達！」

「「「イエス、サー！！」」

隊長らしき人物の声に部下達は頷いて、リフィア達に攻撃をしようとしたが

「フフ、その心意気は評価しよう！だが！相手が余達だったのが残念だつたな！エヴリーヌ！」

「オッケー！久しぶりにやつちやおうか、キヤハツ！」

リフィアの言葉に頷いたエヴリーヌは弓を虚空にしまい両手を掲げ詠唱を開始した。またリフィアもエヴリーヌと同じように詠唱を始めた。

「……我等に眠る”魔”の力よ、我等に逆らう者達に滅びを！……血の肅清！！」

「「「グワアアアアア！？」」

リフィアとエヴリーヌが協力して放つた魔術は兵士達の上空から魔力でできた槍が雨のように降り注ぎ、それに命中した兵士達は断末魔を上げた後、倒れた。

「死ぬよう、手加減はしてある。安心せよ…」

「エスティル達との旅のお陰で昔と比べてかなり手加減できるようになつたから、リウイお兄ちゃんに『成長したな』って褒めてもらえるかな？キヤハツ！」

倒れて、ピクリともしない兵士達にリフィアやエヴリーヌはそれぞれ勝ち誇った笑みで言った。

「しょ、勝負あり！紅の組、リフィアペアの勝ち！救急部隊！今すぐ来てくれ！」

「オオオオオオオオオオオオ！」

観客達は見た目とは裏腹に圧倒的な強さを見せたりフィア達に驚愕した。ピクリともしない兵士達を見て審判は驚いた後、リフィアの勝ちを宣言した後、ピクリともしない兵士達をすぐに治療しないとまずいと思い、救急部隊を呼んだ。

そして救急部隊がやって来て、担架に一人一人乗せて、医務室に運

んで行つた。

「す、凄つ…………！」

「リフィア達の魔術は手加減してもすさまじい威力とはわかつていたけど、今のは今まで見た魔術でも最高の威力だな…………」

「ふえ～…………ミント達もがんばらないとね、ツーヤちゃん！」

「うん。（あれがあたしが目指すべき領域…………）主人様のお傍にいるためにも今まで以上にがんばらないと…）」

リフィア達が見せた魔術にエスティルやヨシュアは驚き、ミントはしゃぎ、ツーヤは決意の表情でリフィア達を見ていた。

そして次の試合の組み合わせのアナウンスが入つた…………

（武術大会・予選）前篇（後書き）

ついにエウシユリーの新作が発表されましたね！……ただ、今回
はデイル・リフィーナの話でない事にがっかりです……エウが作る
ソフトは間違いなく面白いのはわかっているんですけどね……次の
次の新作こそは戦姫シリーズが来てほしいものです。……感想お待
ちしております。

～武術大会・予選～後篇（前書き）

空の軌跡のOVAが発売されるまで後数日……それまでカウントダ
ウンの意味で連日更新します！……発売まで後2日…！

（武術大会・予選）後篇

（グラシアリーナ・観客席）

「……続きまして、これより第7試合を始めます。南、蒼の組。王国軍正規軍所属、第1部隊所属。（以下4名のチーム！）」

今までのように戦方の門より、また王国軍の兵士達が現れた。

「北、紅の組。異世界の国、メンフィル帝国出身。旅人プリネ選手以下4名のチーム！」

もう片方の門からはなんと、マーリオン、ペルル、フィニリイと共にプリネが現れた。

「あ！ プリネさんだ！」

「（ご主人様！？）

プリネの登場にミントは声を上げ、ツーヤは驚いた。

「嘘！？ プリネまで出場していたの！？」

「ハハ……顔見知りばかりの大会になってしまいそうだね……」

争いごとがあまり好きそうでないプリネまで出場している事にエヌテルは驚き、ヨシュアは自分達の知り合いばかりが出ている大会になる事に苦笑した。

「これより武術大会、予選第7試合を行います。両チーム、開始位置についてください。」

審判の言葉に頷いた両チームは今までと同じように開始位置についた。

「双方、構え！」

両チームはそれぞれ武器を構えた。

「勝負始め！」

そしてプリネ達と兵士達は試合を始めた！

「先の試合でやられた仲間達の思いを組むためにも、メンフィル帝

国に我等王国正規軍魂を見せてやれ！突撃！」

「「「イエス、サー！！！」」」

隊長の言葉に力強く返事した兵士達は武器を構えて、プリネ達に突撃して来た。

「もう……お姉様達つたら、やりすぎですよ…………」

隊長の言葉を聞いたプリネは溜息を吐いた後、気を取り直して迎撃の構えをした。

「全員、迎撃態勢！各個撃破で勝負を決めますよ！」

「了解……しました……！」

「うん！」

「フフ……わたくし私の魔術に翻弄されるがいいわ！」

プリネの号令にマーリオン達は頷いた後、それぞれ突撃してくる兵士達に向かつて行つた。

「喰らえっ！」

兵士の一人はマーリオンに向かつて銃剣を突きだしたが

「……無駄です。」

「なつ……？」

マーリオンが自分の目の前に出した水の結界に阻まれて攻撃できなかつた。

「水よ……」

そこにマーリオンは魔術 連続水弾を兵士に向けて放つた！

「ゲフ！？グハア！？」

マーリオンの魔術をまともに喰らつた兵士は自分達がいた開始位置のところまで吹き飛ばされた。

「終わりです……溺水……！」

「グツ！？」

そしてマーリオンが止めに放つた魔術を受けて、兵士は上から滝のように落ちて来た水に叩きつけられた後、立ち上がらなくなつた。

「敵、撃破……です。」

「「そこ」だつ！」

「おつと！」

「無駄ですわ！」

2人の兵士はそれぞれペルルとファーリイを攻撃したが、ペルルには回避され、ファーリイには槍で防がれた。

「今度はこっちの番だよ！超・ねこパンチ！」

「グギヤツー？ ガツ！？」

ペルルが放ったクラフトを受けた兵士はペルルのクラフトの威力のせいか、壁まで吹き飛ばされて、壁に当たつてするとその場に蹲つて立ち上がらなくなつた。

「あつちや～……最高の威力が出ちやつたみたいだね……！」めんね！」

ペルルは威力がバラバラなクラフトがたまたま最高の威力を出してしまつた事に気付いて、蹲つている兵士に頭を軽く下げて謝罪した。

「ウフフフフ……どれが本物かわかります？」

「な、なつ！？ これは一体！？」

一方ファーリイは得意としている幻術を自分が相手している兵士に放つた。ファーリイの幻術にはまつてしまつた兵士は自分の周りをたくさんのファーリイがいる事に錯覚して、うろたえた。

「フフ……魔術に対抗策も持つていない人間ごときにこんな初步的な魔術を破る事なんてできないでしょう？」

「ク、クソ！ 王国正規軍魂をなめるなあつ！」

たくさんのファーリイに笑われた兵士は頭に来て、近くにいたファーリイに攻撃したが、ファーリイは消えた。

「なつ！？」

「フフ……残念。それは偽物ですわ。まつ、遊びはここまでにして決めさせてもらいますわ！」

そしてたくさんにファーリイは持つている槍に雷を溜め始めた。

「ヒ、ヒィィィィ！？」

本能的に危険と感じた兵士は持つている銃剣を振り回してファーリ

イに攻撃したが、幻影のフイニリイが消えるだけで意味はなく、また幻影が消えてもまた新たな幻影が現れた。

「我が魔術にひれ伏しなさい！……大放電！！！」

幻影も含めたフィニーリイが放つ魔術を受けてしまった兵士は叫び声を上げながら崩れ落ちた。

「まつ、大衆に私の力を見せるのも悪くはありませんわね。」

「ハツ

「甘いですッ！」

一方隊長はアリネに向

卷之三

攻撃を防がれた様

レイピアで冷静にさばいていた。

「わながといたる」

何度も攻撃をしてもらちがあかないと思った隊長は勢いに任せて、力の入ったスリーピアを弾き飛ばすためこぶしひどい攻撃をした

一〇三

そこのビデオノハリウッド

プロは大ぶつでできました

ブリネは大ぶりでできた隙を逃さずクラフトを放ち、ブリネのクラフトをまともに受けてしまった隊長はその場に蹲つて立ち上がらなくなつた。

終わりのよこすな.....みなさん お疲れさまです

「勝負あり！紅の組、ブリネチームの勝ち！」

ふれおり……へりやさん達勝手ぢやうたね
「ややややん！」

三ツ子ヒジニヤがフリホの勝利になしや

していくプリネと目があつた。

(フフ……応援してくれたのね。ありがとう、ツーヤ。)

ツーヤに気付いたプリネはツーヤに向かつて軽く手を振つて、門へと消えて行つた。

「あ！今、ツーヤちゃんに向かつて手を振つてくれたよね！？」

「うん！ご主人様、あたしに気付いてくれたんだ……！」

ミントの言葉にツーヤは嬉しそうに答えた。

「ふええ～……！さすがプリネね！余裕勝ちじゃない！動きも洗練されていて、全く隙がなかつたし！」

「うん。さすが”大陸最強”と名高いメンフィルの武官や父親に鍛えられているだけはあるね。彼女達の使い魔達もかなり強いし、親衛隊クラスでないと相手にならないんじゃないかな。」

エステルはプリネの強さを改めて見て興奮し、ヨシュアは使い魔を含め、評価をしていた。

そしてまた次の試合の組み合わせのアナウンスが入つた。

「……続きまして、これより第8試合を始めます。なお、この試合をもちまして予選試合は終了となります。南、蒼の組。王国軍情報部、特務部隊所属。↓以下4名のチーム！」

片方の門からはなんとルーアン、ツァイスで対峙した特務兵達が現れた。

「あいつら……！」

「どうやら正体を隠すのはやめたようだね……」

「の人達は……！」

「…………！」

特務兵の登場にエステル達は驚いた。

「北、紅の組。異世界の国、メンフィル帝国出身。メンフィル帝国軍所属。闇剣士カーリアン選手以下1名のチーム！」

もう片方の門からはその場にいる男性達を魅了するような体つきと服装をした女性　　リウイの側室の一人であり、幻燐戦争の英雄の一人、そしてリフィアの祖母であるカーリアンが現れた。

「凄いカッコ…………ほんと下着しか着てないようなものじゃない！…………あれ？今思つたらさつきの人の名前に聞き覚えがあるんだけど…………（それにあの人、どっかで見た事があるような…………？）」
エステルはカーリアンの服装に驚いた後、聞き覚えのある名前や見覚えのある顔に首を傾げた。

「聞き覚えがあつて当然だよ、エステル。あの女性はリフィアにとって祖母にあたる人だよ。」

「あ、そうか。…………つて祖母！？どっからどう見てもそんな風には見えないわよ！？」

ヨシュアから言われたエステルは驚いた後、カーリアンの姿を信じられない表情で見ていた。

「ハハ…………エステル、忘れたのかい？闇夜の眷属の人達は寿命も僕達より遙かに長寿だし、しかも若い姿のままを保つていられる事を。」

「あ、そう言えばそうね。あのリウイット人もリフィアのお祖父ちゃんだったものね。それを考えたら不思議でもないか…………」

苦笑しながら言つたヨシュアの言葉にエステルは納得して、カーリアンを見た。

（ん？今誰か、私にとつて腹立つ事を言つた気がするわね…………リフィアかしら？）

一方カーリアンは何かに感づいて、周囲を見回した。その時、アナウンスが入つた。

「カーリアン選手はジン選手やリフィア選手と同じように今回の予選でメンバーが揃わなかつたため1名のみでの出場となります。著しく不利な条件ではありますが本人の強い希望もあつたため今回の試合が成立した次第です。みなさま、どうかご了承ください。」

「大陸最強”を誇るメンフィルの中でも1・2を争う実力を持つ人か…………多分特務兵達じゃあ、数がいても敵わないね。」

「そうね。確かプリネを鍛えた人の一人なのよね？どんな強さか気

になるわ～。」

「お姉さん～、がんばって～！そんな人達、あつという間にやつつけつちやつて～！」

「ハ～、ミントちゃん。いくら許せない相手だからって大声でそんな事を言つたら、さすがに少し不味いと思うよ。」

これから見せるであろうカーリアンの実力にヨシュアやエスティルは見逃すまいと試合に注目し、ツーヤはミントの応援に冷や汗をかいだ、ミントを宥めていた。

「これより武術大会、予選第8試合を行います。両チーム、開始位置についてください。」

審判の言葉に頷いた両チームは今までと同じように開始位置についた。

「双方、構え！」

両チームはそれぞれ武器を構えた。

「勝負始め！」

そしてカーリアンと特務兵達が試合を始めた！

「相手は1人とはいえ、油断するな！メンフィルに我等誇り高き特務部隊が最強の部隊である事を証明するぞ！」

「ハ～、イエス、サー！」

黒を基調とした服装をした隊長の言葉に特務兵は力強く頷いた。

「ふ～ん……あれがクーデターをたくらんでいる特務兵か……お手並み拝見といきますか！……それえつ！」

カーリアンは双剣を振つて、衝撃波を起こして特務兵達に向けて放つた！

「！全員、散開！」

「ハ～、ハツ！」

自分達に襲いかかつて来る強力な剣風に気付いた隊長は特務兵達に命令した後、特務兵達と同じようにその場を横に跳んで回避した。

「敵を囮めつ！相手は1人だ！」

「 「 「ハツ！」」

隊長の言葉に頷いた特務兵達は素早くカーリアンの攻撃範囲外らしき場所から3人で囮んだ。

「ふうん。 そこそこ鍛錬はされているようね。」

カーリアンは特務兵達の動きを見て、自分なりの評価をした。

「突撃！ 同時攻撃で一瞬で決めろっ！」

「 「 「ハツ！」」

特務兵達は3人同時にカーリアンに襲いかかつたが

「フフ……耐えられるかしら？ 激しいの、行くわよ…………白露

の桜吹雪！！」

「 「 「ギヤアアアツ！？…………」」

カーリアンの周囲を殲滅する衝撃波を出す強力なクラフト 白露の桜吹雪を受けて、断末魔をあげて、吹っ飛ばされた！ 吹っ飛ばされた特務兵達は壁に当たった後、重傷を負った状態で気絶した。

「え。」

一瞬の出来事に隊長は呆けた。

「フフ……戦場で余所見は厳禁よ。」

そこにカーリアンが一瞬で隊長の目の前に現れた。

「なつ！？」

「喰らうときなさいよ…冥府斬り！…！」

「ガアツ！？…………」

カーリアンのクラフトを受けた隊長は部下達と同じように一瞬で全身傷だらけになつた上、体中の神経もいくつか斬られて動かなくなり、その場に崩れ落ちて一度と立ち上がらなくなつた。

「フフ、ちょっとだけ楽しめたわ。ありがと。」

そしてカーリアンは倒れている特務兵達に投げキッスを送つて勝利のセリフを言った。

「しょ、勝負ありー紅の組、カーリアン選手の勝ちー救急部隊！ 今すぐ来てくれー！」

「オオオオオオオオオオオオオオ！」

観客達は圧倒的な強さを見せたカーリアンに驚愕した。重傷を負つて呻いている隊長や特務兵達を見て審判は驚いた後、カーリアンの勝ちを宣言した後、痛みで呻いている特務兵達をすぐに治療しないとまずいと思い、救急部隊を呼んだ。

そして救急部隊がやつて来て、担架に一人一人乗せて、医務室に運んで行つた。

「な、何あれ…………あたし達と次元が違うじゃない！？あいつらこそそこ強いのにあの人、苦もなく一瞬でやつつけたじゃない！」

「今までの参加者の中でも圧倒的な強さだね…………あれなら例え相手が4人いても関係ないね…………多分、彼女が優勝候補の一人に上がっているだろうね…………」

「すっ…………」「…………いや…………あの女人、凄く強いね、ツーヤちゃん！」

「うん。上には上がりいるつて聞くけど、あの人に勝てる人つているのかな？」

カーリアンの圧倒的な強さにエステルやヨシュアは驚き、ミントは興奮し、ツーヤはカーリアンに勝てる人物がいるのか疑問に思つた。その時、試合終了のアナウンスが聞こえて来た。

「ただ今の試合をもちまして予選試合は全て終了となりました。本戦出場チームは9組。明日から3日間にわたつて開かれる、トーナメント戦で優勝チームを決します。なお、先ほど行つた抽選によつてプリネチームはシード権取得となり、

プリネチームは2回戦からとなつております。それでは最後に、大会主催者であるデュナン公爵閣下から挨拶があります。」

そして特別席にいたデュナンが椅子から立ち上がりつて、喋り始めた。

「ウオッホン！あー、親愛なる市民諸君よ、本日はわざわざの観戦ご苦労だった。私は残念ながら、政務で忙しかつたため一部の試合を見逃してしまつたが……。私が見た試合はどれもレベルが高く非

常に楽しませてもらい、また興奮した！最近、テロ事件に陛下の健康不調と深刻なニースばかり続いているが……。だが、どうか安心して欲しい！陛下から政務を託された者としてこのデュナン・フォン・アウスレーゼ、身を粉にして諸君らの期待に応えよう！そして、この武術大会の活気が諸君らの気持ちを明るくするのに役立つてくれればと思う次第である！明日からの本戦を、どうか楽しみにしていて欲しい！」

デュナンの演説が終わると観客席から大きな拍手が起立った。

「あ、あの公爵さんにしては言つてることがマトモすぎる……」

「多分、情報部のスタッフが文面を考えているんだろうね。」

デュナンのまともな演説にエステルは驚き、ヨシコアは大体の事情を察した。

「はっはっは……。おお、そうだな。大会の優勝者には、賞金とは別に私からのプレゼントを用意しよう！」

一方デュナンは自分に向けられている拍手に気分をよくして、ある提案をした。

（か、閣下……。勝手によろしいのですか？）

そこにフィリップが後ろからささやいた。

（つむさい、黙つておれ。私の気前の良さを見せる良い機会だ。）

フィリップを黙らせたデュナンは向き直つて、ある事を宣言した。

「そのプレゼントとは……。3日後にグランセル城で行われる宮中晩餐会への招待状である！陛下は残念ながら出席されないが各界の名士が集う、最高の晩餐会だ。王侯貴族のみに許された、最高の料理ともてなしを約束しよう。今日勝ち残つた出場者は、どうか励みにして頑張つてほしい！」

デュナンの突然の提案に観客達は驚いた後、大きな拍手と歓声をデュナンに送つた。こうして武術大会予選試合は締めくくられた……

～武術大会・予選～後篇（後書き）

ついに幻燐1からいるキャラの一人、カーリアン登場です！！カーリアンはリウイ達と違つて、FCでもかなり活躍させるつもりなので幻燐ファンは楽しみにして下さい！！……感想お待ちしております。

第117話（前書き）

……発売まで後、一日！――

「グラシアリーナ・観客席」

「ねえねえ、ママープリネさん達に『おめでとう』を言いに行こう！」

「あの……あたしもミントちゃんといっしょですぐに主人様にお祝いの言葉を言いたいです。……ダメですか？」

ミントとシーヤの言葉にエスティルとヨシュアはお互いの顔を見て、相談した。

「ねえ、ヨシュア……。リフィア達に頼んだい方がよくなない？」

「うん、僕もそう思う。彼女達なら事情も知っているし、もし優勝できたら皇族と名乗らなくても正々堂々とグランセル城に入ることができる。例の事を、女王陛下に伝えるチャンスだってあるかもしれない。そういうことだね？」

「うん……。博士の依頼を他人任せにするのはイヤだけど……。それにリフィアと女王様は顔見知りらしいし、ひょっとしたら会えるかも知れないし。」だわつている場合じゃなさそう。

「僕は異存はないよ。まだギルドに戻っていないかもしれないし、選手室の控室に行ってみようか？」

「うん、そうね。じゃあ念のためにカルナさん達にも挨拶もして、今の件をお願いしましょ。」

「そうだね。」

エスティルとヨシュアはそれぞれ頷いた後、ミント達に向き直った。

「じゃあ、リフィア達に勝利のお祝いを言いに行きましょ。」

「うん！」

「はい！」

そして4人はリフィア達がいる控室に向かった。

（グラランアリーナ・控室）

そこにはリフィア達やクルツ達、そしてカーリアンがいた。

「みんな！予選突破、おめでとう！」

「あつ、新人君たちだ！」

「おや、あんたたちか。」

「よお、ひょっとして試合を見に来てくれたのか？」

エスティル達に気付いたアネラス、カルナ、グラツィはエスティル達に話しかけた。

「はい、ちょうど先輩方の試合を見ることができました。すごく良い試合でしたね。」

「ありがとうございます。そう言つてくれると嬉しいよ。今回はいきなり団体戦に変更されたから戸惑つたがね。」

ヨシュアのお祝いの言葉にクルツは苦笑しながら答えた。

「それにしてもリフィア達つたら、酷いわね～。あたし達に秘密で武術大会に参加しちゃって！今までそんなそぶりを見せた事なかつたから驚いたわよ～！」

「フツフツフ……本来余が驚かせる側なのにお主にはいつも驚かされてばかりだからな。ようやく、お主を驚かせたぞ！」

「それ、自慢になつていないよ。」

「あはは……」

エスティルはジト目でリフィア達を見たが、リフィアは悪びれも無く胸を張つて答え、リフィアの言葉を聞いたエヴリーヌは思わず突っ込み、プリネは苦笑した。

「ご主人様……あの……予選突破、おめでとうございます。」

「おめでとー！リフィアさん達、凄くカッコよかったですよ～！」

「フフ……2人とも、ありがとうございます。」

「うむ！余達にとつて予選突破は当然だが、お前達の祝福はありがたく受け取つておこう！」

ソーヤとミントのお祝いの言葉を聞き、プリネは微笑み、リフィア

は胸を張つて答えた。

「…………」

「ん？ アネラス、その子達をじつと見てこるみうだけど……じつはなんだい？」

カルナはアネラスがミントとツーヤを凝視している事に気付いた。

「可愛い！」

「ほえつ！？」

「えつと……？」

そしていきなりミントとツーヤを抱きしめた。

「ハア……また悪い癖が出たか…………」

「ハハ……まあ、これがアネラスだぜ？」

事情がわかつているクルツは溜息を吐き、クルツの言葉にグラツツは苦笑しながら答えた。

「人形みたいな可愛さに対照的な髪の色や瞳の色…………あ～ん、セツトでエヴリースちゃんといっしょにお持ち帰りしたいわ～！新人君達！この子達、持つて帰つていいかな！？」

「ダ、ダメよ～！」

「嫌。」

「あの…………これは一体…………？」

アネラスの言葉に逸早く反応したエステルは反対し、エヴリースははつきり断り、ヨシュアはクルツ達に尋ねた。

「アネラスは可愛いものに弱くてな…………普段人形とか買いあさつてるんだが、年下の女の子を見ると、たまにあんな事になるんだ。」

ヨシュアの疑問にグラツツは苦笑した後、事情を話した。

「そうだよ～可愛い」とは正義だもん！ 可愛く着飾った年下の女子に勝るものなし！」

そしてアネラスはミント達を抱きしめるのをやめた後、その場から立つて強く主張した。

「あ、あはは……」

アネラスの主張を聞いたエステルは苦笑した。

「そう言えば……先ほど団体戦になつて戸惑つたとおっしゃつていましたが、元々団体戦ではなかつたのですか？」

プリネはクルツの言葉を思い出して、尋ねた。

「ああ。例年の武術大会は元々1対1の個人戦なんだ。…………そちらの方は毎年出場しているから、今回の大会は異例であると気付いていると思うよ。」

プリネの疑問にクルツは答えた後、カーリアンを見た。

「ええ。私はこっちの世界に来てから毎年この大会に参加しているからわかるわ。今までの大会は個人戦だつたしね。まあ、相手が何人増えても私の敵じやないんだけどね」むしろ、面白くなつて来るから私にとつては今回の大会は楽しませて貰えそうで何よりよ」そう言つたカーリアンは一瞬エステルを見た後、クルツ達を好戦的な目で見て言つた。

「ハハ……お互い当たつた時はお手柔らかにお願いします。」
カーリアンの言葉を聞いて、クルツは苦笑した。

「それでもいきなりルールが変更されて、本当に焦りましたよね。」

「あたしたちはまだいいさ。何とかメンバーも揃つたんだ。ジンの旦那なんか正直、困つてるんじゃないかなえ。」

アネラスの言葉に頷くようにカルナがジンの現状を言つた。

「あ、カルナさんたちもジンさんの知り合いなんだ？」

「ま、知り合つて間もないけど名前だけは知つていたからねえ。『

不動のジン』って言つて共和国じや有名な遊撃士なのさ。」

「どうやら、武術大会に出るためにリベルにやつて来たらしいが……。さつきも言つたように大会が個人戦から団体戦にいきなり変更されてしまつたんだ。」

「これが、例の公爵閣下の付きだつたらしくてな。で、ジンの旦那は仕方なく1人で登録する羽目になつたわけさ。」

エステルの疑問にカルナは頷き、クルツはルールが変わった理由を答え、グラツはなぜジンが一人で参加しているかを答えた。

「そうだったんだ……。まったく、あの公爵ってのは口クでもないことばかりするわね。」

「はは、違いない。しかし、このまま彼の実力が發揮されないのは惜しそぎる。」

呆れて言うエステルの言葉にクルツは苦笑しながら、頷いた。

「だな。無名でもいいからある程度戦えるヤツがいれば……。おつー？」

同じように頷いていたグラツはある事に気付いて、エステル達を見た。

「おや……」

「ふむ」

「いいかも……」

カルナやクルツ、アナラスも同じようにエステル達を見た。

「????な、なんなの？マジマジと見ちゃって……」

クルツ達に見られたエステルは戸惑いながら尋ねた。

「いや、ものは相談だが……。君たち、ジンさんに協力して本戦から出場してみないか？」

「え……。えええええ～っ！」

「本戦からの参加つて……。そんなの大丈夫なんですか？」

クルツの提案にエステルは驚き、ヨシュアも同じように驚いた後尋ねた。

「それは大丈夫だろう！ 実際、その戦闘狂や余とエヴリー・ヌだけの参加も認められていたしな！」

「ちょっと……それ、誰の事を言っているのー？」

リフィアの言葉に反応したカーリアンはリフィアを睨んだ。カーリ

アンに睨まれたリフィアはカーリアンの睨みを無視して、エステル達に言った。

「あのジンとやらはかなりの実力を持っているようだが、さすがに一人で正遊撃士4人は厳しいだろう。だからエステル！お前達があの者に助力してやれ！」

「ジンの旦那も遊撃士の助つ人が他にいないかエルナンに頼んだみたいでな。ただ、シェラザードは忙しいらしいし、アガットのヤツとは連絡がとれない。他の連中も似たようなもんらしいぜ。」

「カシウスさんに至っては国内にいないみたいですからねえ。まあの人とジンさんが組んだら反則つていう気もしますけど……とうか、”大陸最強”と名高いメンフィル帝国でも1・2の実力を争う貴女の参加自体、反則なんですけどねえ……」

リフィアとグラツィの言葉に頷いたアネラスはカシウスとジンがいつしょに戦った時の事を思い浮かべて、絶対に勝てない事に苦笑した後、カーリアンを見た。

「あら 中々わかっているじゃない」

アネラスの言葉にカーリアンは機嫌を直して言った。

「はは、我々程度では万が一にも勝ち目はないだろうな。……そういうわけだから前向きに考えてみたらどうかな。今日中にジンさんと決めれば明日の選手登録に間に合はずだ。」

「う、うん……」

クルツに言われたエステルは放心した状態で頷いた。

「おつと……長話しそぎちまつたようだね。それぞれの依頼も抱えているし、あたしたちはこれで失礼するよ。」

「ばいばーい、新人君たち！」

「へへ、試合場で手合せできるのを楽しみにしてるぜ。」

そして仕事の時間が来た事に気付いたクルツ達はその場を去った……

第117話（後書き）

感想お待ちしております。

第118話（前書）

ついに空の軌跡のOVA、
発売！！

（グラシアリーナ・選手控室）

「……どうしよう、エステル？仕事の相談をするつもりが変な話になっちゃったけど……」

クルツ達が去つた後、ヨシュアは放心しているエステルに尋ねた。

「えへへ。……むふふ……」

しかしエステルは顔を下に向けて、ぶつぶつと何かを呟いていた。

「ママ？」

「エステル、だ、大丈夫？」

エステルの様子がおかしいことに気付いたミントやヨシュアが尋ねた時

「来た、来た……。キタ！」

「ぬおつ！？」

「キヤッ！？」

「いきなり声を上げて、うるさい……」

エステルは顔を上げて、絶叫した。エステルの奇声にリフィアやプリネ、ツーヤは驚き、エヴリーヌは顔をしかめた。

「そうよ、そうなのよ！やつぱりそこなくっちゃ！ああん、女神エイドス様に聖女様！大いなる加護を感謝いたします～！」

「…………。ヒ、エステルが壊れた……」

「マ、ママ……？何か変なものでも食べたの……？」

「へへ……話には聞いていたけど、本当にペテレーネの事を慕つているのね。」

エステルの様子をヨシュアは哀れなものを見るような目で見て、ミントは戸惑い、カーリアンはエステルを珍しいものを見るかのような目で見ていた。

「考へてもみなさいよ。武術大会に出られるのよ！？困つてるジンさん協力できる……。あたしたちは城に堂々と入れる……。ついでに白熱したバトルもできる……これぞまさに『一石三鳥』！」

「そ、そんなに出たかったのか……。まあ、優勝できると決まったわけじやないけど……。僕達の手で、依頼を達成できる可能性が出てきたのは嬉しいな。」

「依頼というと、女王陛下に会つ事ですか？」

エステルとヨシュアの言葉から察したプリネは尋ねた。

「うん！女王様に博士から頼ま……モガ。」

プリネに尋ねられたエステルにヨシュアは両手でエステルの口を塞いだ。

（ちょっと、何するのよ～！）

口を抑えられたエステルは抗議するように、ヨシュアを睨んだ。

（エステル、ここにいるのは僕達だけじゃないよ。）

（あ！）

ヨシュアに言われたエステルはカーリアンを見て、ヨシュアを睨むのをやめた。

「わざわざ私に秘密にしなくても大丈夫よ。大体の事情はプリネだから聞いたし、リウイから今のリベルの状況も聞いていて、知っているから。」

「あ、そうなんだ。」

「相談もなく事情を説明してしまって、すみません……せつかくカーリアン様がいらっしゃるのですから、今の状況が何とかならないかと思つたんです。」

プリネは申し訳なさそうな表情でエステルに謝った。

「大丈夫、問題ないわ！……そう言えれば自己紹介がまだ……えつと……いいんですね？」

エステルはカーリアンの身分を思い出して、言い直した。

「別に私の事も呼び捨てで呼んで貰つて構わないわよ？第一あなた確か、リウイの事も呼び捨てにしているんでしょ？だから私の事も

気軽に呼んでくれていいわ 」

「あ、そうなの？あたし、エステル・ブライト！」

「ヨシュア・ブライトです。よろしくお願ひします。」

「ミントだよ！」

「……プリネ様に仕えているツーヤと申します。」

カーリアンに言われ、エステルはすぐに気楽な態度で接し、ヨシュア達も自己紹介をした。

「カーリアンよ それで貴女がペテレーが嬉しそうに話していたツーヤね。」

「え……あたしの事、ご存じなのですか？」

カーリアンの言葉に驚いたツーヤは尋ねた。

「ええ。学園祭に行つた時の土産話に貴女の事をペテレーが嬉しそうに話していたわ。プリネを慕う娘がいるって。それにしてもリウイつたら酷いのよ！？プリネが参加している劇なんて面白い出来事を、この私に何も言わずに行つたんだから！もし、知つていたらついて行つたのに！」

「カーリアンを連れて行つたら、やつかいな事を仕出かすと思つて、リウイは言わなかつただけだと余は思つぞ？」

「なんですつて～！？いつも私達に迷惑かけているアンタにだけは言われたくないわ！」

カーリアンはリフィアに近付いて、リフィアの頭をグリグリした。

「い、痛い、痛い！痛いのじゃ～！」

「自業自得。」

カーリアンの行動にリフィアは呻いて、じたばたした。その様子をエヴリースは素知らぬ顔で呴いた。

「まあまあ、カーリアン様。エステルさんもいるんですから、そのくらいで……」

「全くしようがないわね～。」

プリネに宥められたカーリアンは溜息を吐いた後、リフィアから離

れた。

「リ、リフィアが一方的にやられている所なんて初めて見たわ～。」

「ハハ……さすがの彼女も肉親には弱いんだろうね。」

カーリアンとリフィアの様子を見たエステルは驚き、ヨシュアは苦笑した。

「それでエステルさん。先ほど仕事の相談とおっしゃいましたが……」

「あ、うん。その事なんだけど……」

そしてエステル達はリフィア達の所に来た理由を説明した。

「なるほどな……しかし、エステル。それなら先ほどの遊撃士達が言つていたように、お前達があのジンとやらに助力して、優勝すればいいのではないか？」

「ええ、そうよ！だから、この話はお終い！」

「ハハ……エステル、もう優勝した気分でいるんだ。」

「何よ～？今からそんな弱気になつて、どうするのよー。」

苦笑しているヨシュアをエステルは睨んで言った。

「フフ……今回の大会は今までの中でもかなり楽しい大会になりそうね。あなた達と対戦する時を期待して、待つているわ。」

「ふふ～んだ！相手が誰であろうと、絶対勝つて見せるわ～。」

カーリアンは挑戦的な目でエステルを見て言い、見られたエステルは胸を張つて答えた。

「余達も忘れてもらつては困るぞ？カーリアン、今度こそお主に敗北を味あわせてやろ～！」

「まつ、ほどほどに楽しませてもらひうね。」

「な～に、生意氣言つてるんだか。ま、いいわ。じゃあね 手合わせを楽しみにしておいてあげるわ。」

リフィアとエヴリーヌの言葉を聞いて溜息を吐いたカーリアンは気を取り直して、エステル達に軽く片手を振つた後、控室を出て行つた。

その後エスティル達は大会に向けて、街道で魔獣達と戦闘して自分達の状態を調整するリフィア達とブリネについて行ったツーヤと別れて、ジンを探し始めた……

第118話（後書き）

OVAを見て、とりあえず思つた事……アースウォール、効果範囲が広ッ！！そしてヨシュア、強すぎです！！ガチでのキャラと戦つて、重傷を負わすなんて……後、ヨシュアと戦つたあのキャラ、以外と弱く感じました。ヨシュアに滅多斬りにされるのはまだ納得できるんですが、ティータの攻撃に気付かない上喰らつたら、大ダメージつて（笑）。それにしても後1話でどうやつて、終わらせるんでしょう？・レーヴェとの対決があつたのを見る所、ラストまでは行くと思うんですが……そういえば、教授どころかケビンすら登場してねえ……果たしてケビンは登場するのでしょうか（笑）……

感想お待ちしております。

第1-19話（前書き）

今回の話は空の軌跡のムードメーカー＆変態（笑）が再登場です！

リフィア達と別れたエステル達はエルナンからジンの滞在場所を聞か、ジンの滞在場所である共和国大使館に行く途中、エステル達が通り過ぎようとした店からピアノが聞こえて来た。

~~~~~

「ほえ？」

「あ……。これって……ピアノ？」

「うん、レコードじゃないね。中で誰かが引いているみたいだ弾いているみたいだ。このメロディー、どこかで聞いた覚えがあるんだけど……」

ミントとエステルは急に聞こえてきたピアノの音に首を傾げ、ヨシコアも頷いた後、聞き覚えのあるメロディーに首を傾げた。

「凄く綺麗な音だね、ママ！」

「そ、そうね。でもなんかイヤな予感が……」

嫌な予感がしつつも気になつたエステル達はピアノが聞こえてきた居酒屋に入った。

～グランセル市内・居酒屋サニーベル・イン～

そこにはボースで別れたエレボニアの演奏家、オリビエがピアノを弾いていた。

~~~~~

(……やつぱりお調子者か。でも、演奏家なんてただの自称かと思つてたけど……)

(かなりの腕前みたいだね。プロの演奏家を名乗るだけはあるんじやないかな。)

(うん……。ちょっとじーんと来ちゃつかも。)

エステルとミントはオリビエの演奏に以外そつた表情をしながらも聞き入っていた。

(あれ? あの人、ママの知り合いなの?)

(あ~、まあね。正直、ミントの教育には悪いから会わせたくないつたんだけだな……)

ミントに尋ねられたエステルは溜息を吐いた。そしてピアノの演奏が終わった。

パチパチパチパチパチ……………!!

演奏が終わると拍手が起つた。

「……今のは『琥珀の愛』といってね。本来は、オペラに使われる間奏曲でしかないのだけど……。そこはそれ、愛と真心でカバー。尽きせぬ愛とともに君たちに贈りせてもらひよ。」

拍手が終わった後、オリビエは静かに曲名を説明した。

「相変わらずのマイペースつぱりねえ……。はあ……感動して損した気分だわ。」

「お久しぶりです、オリビエさん。王都に来ていたんですね。」

「お兄さん。演奏、凄く上手だね!」

そこにエステル達がオリビエに近付いて来て、エステルは溜息を吐き、ミントは挨拶をし、ミントはキラキラした表情でオリビエを見た。

「それはもちろん、大河に零れた人魚の涙が海に辿りつくよ(泣)……。いじしてボクは、黒髪の王子様と感動の再会を果たしたわけさ。」

オリビエは片手で髪をかき上げて、エステル達を見た。

「……本当に相変わらずですね。」

「あー、はいはい。タワゴトはそのくらいにしてあたしたちを席に案内しなさいよ。気障なカツコしてるクセに気が利かないつたらありやしない。」

オリビエのセリフと様子を見たヨシュアは呆れた後溜息を吐き、エステルはオリビエの言葉を流して、毒舌と共にオリビエに命令した。

「エ斯特ル君……なんだか手強くなつてない？」

そしてエ斯特ル達とオリビエは席に着いた。

「たしかオリビエ、シェラ姉と一緒にロレントの方に行つてたわよね？ いつから王都に来てるの？」

「うーん、一月前くらいかな？ 君たちと別れてからロレントの街で、シェラ君と共にしばらく甘い一時を過ごしたのさ。だが、所詮ボクは漂泊の詩人にして演奏家……。シェラ君が涙ながら引き留めるのを振り切つて麗しの王都に流れてきたわけだよ。」

「何と言つか……。信憑性ゼロの話ですね。」

「おおかた、シェラ姉の酒に毎晩付き合わされた挙句、たまらず逃げ出したんでしょ？」

オリビエの説明をヨシュアはさうと流し、エ斯特ルは得意げな表情で真実を言い当てた。

「ギクッ……」

エ斯特ルの言葉を聞いたオリビエは表情を強張らせた。

「あと、アイナさんにまで酒を付き合わされちゃつたとか？」

エ斯特ルからアイナの名前が出でてくると、オリビエは表情を静止させ、何も喋らなくなつた。

「あれ、オリビエってばアイナさんのこと知らないの？ シェラ姉の親友で、ロレント支部に受付やつてる人なんだけど。ウワバミ度で言えばシェラ姉を上回るという……」

オリビエの様子に首を傾げたエ斯特ルは尋ねたが

「……ハハハ。やだナア えするクン？ ソンナ名前ノ 人ナンカ

ミタコトモ キイタコトモ ナイヨ？」

なぜかオリビエは裏返つた声で片言で答えた。

「……声が完全に裏返ってるんですけど……」

「お兄さん。どうしたの？」

「Hステル、ミント……そのくらいにしどこへあげなよ。つらい事でもつらい事があったんだと思つ。」

カツラの髪を二つステッキで殴つたが、

オリビエの答へはエヌテリは笑へ込み ミントは喜ぶれ 事情を察したヨシコアは哀れなものを見るような目でオリビエを見た。

「ブツブツ、まさかショラ君以上に底ナシだつたなんて……。あああ……。穏やかに微笑みながら注ぎ込むのはやめ一

エスティル達の声が聞こえていないオリビエはロレントで植えつけられたトラウマを思い出して、叫んだ。

「ほえ？！？」

「アーティストのアート」

「アイガさん最強伝説が着実に出来上がりつつあるね……」

の感動したてに体が震えた。

「はあはあはあ……。まあ、それはともかく……。ヰヰたちは他の

「地方を回りながら王都まで来たんだろう? 何か面白いことはあつた…… ようだね。そろそろこのボクにもその可愛いリトルレディを紹介してくれないかな?」

我に返つて、氣を取り直したオリビエはミントを見て、エステル達に尋ねた。

「ハア……あんたにだけは会わせたくなかったんだけどな。」

「まあ、いいわ。」

お兄さん！」「お兄さん！」
「あーん！」

エステルに促されたミントは元気良く、自己紹介をした。

「フツ……漂泊の詩人にして愛の伝道者、オリビエ・レンハイムだ。

ボクの事は『オリビエお兄さん』と呼んでね』

オリビエは髪をかき上げて、ミントに流し眼を送つて言った。

「やめんかー！……全く、これだから純真で可愛いミントにコイツみたいな変態と会わせたくなかつたのよね！」

「ハハ……相変わらず、エステルはミントに過保護だなあ。」

オリビエの言葉に反応して叫んだエステルの独り言が聞こえたヨシユアは苦笑した。

「当り前よ！こんな奴、ミントに悪影響を『与えるだけの！存在だからね！」

「ハツハツハ！そう褒めないでくれよ。照れるじゃないか』

「褒めてないつづーの！……つ、疲れる……』

「ママ～、大丈夫？」

エステルの毒舌をオリビエは笑つて流し、エステルはすかさず突っ込んだ後、疲れて机にうつぶせた。ミントはうつぶせているエステルの体を揺すつて尋ねた。

「ほつ エステル君とヨシユア君……いつの間にこんな大きな子供を作つたのかな』

ミントのエステルに対する呼び方に反応したオリビエはからかう表情でエステル達を見た。

「それ、絶対言われると思ったわ……ミントはあたしの養子みたいなもの。だから、ミントはあたしの事『ママ』って言つてゐる訳。だから断じてヨシユアと結婚している訳でもないからね！？わかつた！？」

エステルは溜息を吐いた後、事情を説明した。

「ほつ…………… フム。」

エステルの説明に頷いたオリビエはミントを凝視した。

「ほえ？ミントの顔に何かついているの？」

「……………イヤな予感しかしないわ……』

「ハハ……奇遇だね。僕もそう思うよ。」

オリビエに見られたミントは首を傾げ、エステルはジト田でオリビエを見て、ヨシュアは苦笑しながら答えた。

「フム……今までこれだけ可愛いとするとエステル君達並に育てば

……フフ、今から楽しみだよ」

「予想通りの答えだね……」

「この…………変態がー！あたしの目が黒い内は絶対、アンタみたいな変態をミントに近付かせないからねー……もし、ミントに手を出したらただじゃすまないからね！」

オリビエの予想通りの答えにヨシュアは呆れ、エステルはミントを抱きしめてオリビエを睨んだ。

「ハツハツハ！それで今日はこのボクに会いに来てくれたのかな？」「なんでアンタみたいな奴にわざわざ会いに行かなくちゃならないのよ……人探しの途中でよっただけよ。」

オリビエの言葉にエステルは溜息を吐いて否定した後、答えた。

「へえ……。いつたい誰を捜してるんだい？」

「ジンさんといって、カルバード共和国から来た武術家の遊撃士です。よく酒場に来ているらしいのですけど、オリビエさん、ご存じありませんか？」

「ああ！あの熊のように大きな御仁か。何度かお目にかかった事はあるけど今日はまだ見かけてないねえ。」

ヨシュアに尋ねられたオリビエはジンの特徴を言いながら、答えた。

「そつか……。今日は酒場に来ないのかな？」

「カルバード共和国の大天使館にいる可能性が高そうだね。」

「それじゃあ、出発だね！」

「フツ……。早速、行ってみるとしようつか。」

そしてエステル達が居酒屋を出るとどうせくさに紛れてオリビエがエステル達について行こうとしていた。

「だから、なに自然な流れで付いてこようとしてんのよつ！？」
「だ、か、ら、なに自然な流れで付いてこようとしてんのよつ！？」
外出した時、オリビエがまだ自分達について来ている事に気付いた

エステルはオリビエを睨んだ。

「ハツハツハツ。つれない事を言つもんじゃないよ。旅は道連れともいうし、ボクも人探しを手伝おうと思つてね。それとも……。邪魔されたくないのかな？」

「な……！」

オリビエの言葉にエステルは驚いて、オリビエを見た。

「いやはや。初々しいつたらありやしない。薔である」と自覚したばかりで咲くのを恐れためらう乙女……。フフ、いい感じで色気が出てきたみたいだねえ。」

オリビエは目を妖しく輝かせて、エステルを見た。

「…………～～つ…………」

オリビエの言葉を聞いたエステルは顔を真っ赤に染まらせ、オリビエから視線を外した。

「？？？何を言つてるんですか？」

「ねえねえ、オリビエさん。どうしてママのお顔を真っ赤にしているの？？」

「フフフ、それはねえ……」

首を傾げているアシュアとミントにオリビエはもつたいぶるような口調で説明しようとしたところ

「せいやつ！」

「あ～れ～つ！」

エステルが素早く棒を出して、オリビエを店の中へ吹き飛ばした。

「うわああ、なんだ～つ！？」

「お、お客様さん、しつかり！」

「ダメじゃ……。白目をむいているわい……」

店の中は吹き飛ばされたオリビエのせいで慌ただしくなった。

「エステル……。何を怒つているのかしらないけど、ちよつとやりすぎなんじや……」

「うん。…………オリビエさん、大丈夫かな？」

エステルの行動にヨシュアは呆れながらエステルを責め、ミントはオリビエが吹っ飛ばされた方向をチラチラ見て、尋ねた。

「……インパクトをずらして派手に吹き飛ばしただけだもん。大したダメージじゃないわよ。」

「フフフ……。エステル君の……照れ屋さん……」

エステルの言葉に答えるかのように、オリビエの声が店の中から聞こえてきた。

「……確かに大丈夫そうだね。」

「オリビエさんって、凄く頑丈なんだね。」

オリビエの言葉を聞いたヨシュアは脱力し、ミントは珍しいものを見るかのような目でオリビエが吹っ飛ばされた方向を見て、言った。「ほらほら、人探し再開。グズグズしないでとつとと大使館に行くわよ。あ、ミントははぐれないためにあたしと手を繋ぎましょうね。」

「はーい！」

(……なんで僕だけ怒られるんだろう?)

エステルの理不尽さにヨシュアは訳がわからず、首を傾げた。そしてエステル達はジンを探して、共和国大使館に向かった……

第119話（後書き）

感想お待ちしております。

その後エステル達は大使館の情報でエルベ周遊道まで探しに行き、魔獸に襲われかけたシスターを助けた後、また魔獸が現れたがそこにジンが加勢して事なきを得た。その時、見回りの特務兵と出会ったがなんとかトラブルを避けた後、エステル達はジンを探していた理由を話した。そして落ち着いた場所で話し合うためにエステル達は先ほどの居酒屋に向かって、テーブルに座つて話し始めた。

～グラントセル市内・居酒屋サーベル・イン～

「……なるほど、そういう事かい。ひとつ聞いておくが、なんで武術大会に出たいんだ？」

ジンはエステル達に武術大会に出たい理由を尋ねた。
「えっと……。予選を見てたら身体がウズウズしてきちゃつて。手強い相手と、思いつきり戦いたくなっちゃつたのよね。」

「僕たちは、正遊撃士を目指して王国各地を旅してきました。今までの修行の成果を試してみたくなつたんです。……それに今ま僕達の旅を助けてくれたリフィア達や”大陸最強”と名高いメンフィルでも1・2の実力を争う将 カーリアンさんとも一度、手合わせをしたかつたんです。」

「ふーむ……。いいぜ。一緒に組むとしようや。明日、大会が始まると前に選手登録をすりゃあ大丈夫だ。」

エステル達の理由を聞いたジンは頷いて答えた。

「やつたあ……て、即答しちゃつてもいいわけ？」

「お前たちの腕前は前に見させてもらつてるからな。助つ人としては十分すぎるぜ。」

「えへへ……。ありがと、ジンさん！あたし、精一杯がんばるから

！」

「よろしくお願ひします。」

ジンの了承の言葉を聞いたエステルは喜び、ヨシュアは軽くお辞儀をした。

「ママー、ミント、応援するからね！」

「ありがと。ミントの応援の言葉を聞いたらパワー全開よ～！」

ミントの応援の言葉を聞いたエステルは元気良く答えた。

「こちらこそよろしくな。しかし、1人でどこまで通用するか挑戦してみるつもりだつたが……。助つ人が加わったからには優勝を目指さないと話にならんna。」

「モチのロンよ！出場するなら優勝あるのみ！」

「でも、そうなつて来ると1人足りないのは苦しいですね。団体戦の定員は4人ですから。」

ヨシュアは現状を考えて、難しそうな表情で答えた。

「ねえ、ママ。だったらミントも出たらダメ？」

エステル達のためにミントは自分も何か力にならうと思って、エステルを見て提案した。

「アハハ……さすがにミントにはまだ早いわ。心配してくれてありがとう。でも、大丈夫よ！いざとなつたらあたしが契約している子達の誰かを参加させればいいし！実際プリネもそれをして、数合わせをしていたから大丈夫でしょ。」

ミントの提案をエステルは苦笑しながら必要な事を言った後、名案を思い付いたかのように言った。

「そうか……それがあつたな。…………僕達のバトルスタイルを考えればテトリあたりが妥当かな？」

エステルの提案にヨシュアはハツとした後、呼びだす必要のある人物を言った。

「さつきから気になつていたんだが、契約している子がどうとか言つていてるがどういう事なんだ？」

一方事情がわからないジンはエステル達の会話を首を傾げて尋ねた。

「あ、ジンさんは知らなかつたわね。実は…………」

事情がわからないジンにエステル達はエステルが契約している精霊や幻獣の事を説明した。

「ほ……カシウスの旦那から話には聞いていたけど、魔術が使えるだけでなく、そんな事もできたのか。…………それでそのテトリとやらはどんな戦い方をするんだ?」

「うん。テトリの戦い方は後方支援よ。弓矢での攻撃に加えて地属性の攻撃魔術、それと治癒魔術も使えるわ!」

ジンに尋ねられたエステルは胸を張つて答えた。

「フム……確かに現時点での俺達のメンバーを考えれば、ピッタリの人物なんだが……気になつたのだが、その召喚とやらをして、お前さんに負担がかからないのか?」

「ん……まあ、召喚している間はちょっとだけど魔力とか落ちるわ。でも、大丈夫よ!今まで問題なかつたし!」

ジンの疑問にエステルは今までの戦闘を思い出しながら答えた。

「いや、上を^{ヨコ}指すんだつたら準備は万全にしておくべきだぜ。戦いつてのは^{ヨコ}拳^{パン}を交える前からすでに始まっているもんだ。」

「そうだよ、エステル。相手はクルツさん達だけでなく、リフィア達や”大陸最強”と名高いあのメンフィルの中でも指折りの実力を持つカーリアンさんが相手なんだよ。自分自身の力を弱めるような事をしないほうがいいと思うよ。」

「う……確かにそうかも。こういう時に、シェラ姉がいてくれたら心強いんだけど……。ね、エルナンさんに頼んでロレントに連絡してもらわない?」

ジンやヨシュアの言葉にたじろいだエステルは提案した。

「うーん、でもシェラさんもかなり忙しいと思うよ。父さんも、僕たちもいないからロレント支部は手薄だと思うし……」

「そ、そうだった……。あーもう、誰でもいいから協力してくれる人がいいかしら!」

エステルが絶叫したその時

／＼

「フッ……。その言葉を待っていたよ。」

階段からリコート鳴らして降りて来たオリビエが現れた。

「あ、オリビエさんだ！」

ミントはオリビエを見て、声を上げた。

「出たわね～。このスチャラカ演奏家。まさか2階に潜んでいたとは。」

「ひょっとして……。今のは、聞いていたんですか？」

呆れた表情でエステルはオリビエを睨み、ヨシコアは尋ねた。

「フフフ……。余すことなく聞かせてもらつたよ。これはボクの出来番だと思ってね。……あ、ミント君。すまないがエステル君の膝の上に移動してくれないかい？」

「はーい！」

オリビエは髪をかきあげながら降りて来た後、椅子に座つてくるミントを移動させて、ミントが座つていた椅子に座つた。

「あ、ちょっと……。なに勝手にミントを椅子からどかしているのよ？」

「ミント、ママの膝の上でも大丈夫だよ？ それとも、ミントがママの膝の上に乗るの、ダメ？」

ミントはお願いする時の表情でエステルを見上げた。

「う…………（そんな目で見られたら、断れないわよ～！ 全く、このスチャラカ演奏家め！ 純真で可愛いミントを利用しても！ 後でシメてやる！） そんな事ないわよ～！ ミントを肌で感じられるからあたしは嬉しいわよ～！」

「ホント！ えへへ…………」

オリビエに対する怒りを秘めたエステルに気付かず、ミントは笑顔になつた。

「たしか、ピアノを弾いてる演奏家の兄ちゃんだったな。お前さんたちの知り合いか？」

オリビエと知り合いのように話すエステル達にジンは尋ねた。

「知り合いつていうか、早くも腐れ縁というか……」

「……まだ知り合つてそんなに経つてないのにね。」

ジンの疑問にエステルはオリビエの出会いや共にした時、見せた行動を思い出して呆れながら答え、ヨシュアも苦笑しながらエステルの言葉に頷いた。

「ボクはオリビエ・レンハイム。エレボニア出身の旅の演奏家さ。エステル君とヨシュア君とは前にある事件で知り合つてね。それ以来、タダならぬ関係なのさ。」

「誤解を招く言い方はやめい！」

オリビエの紹介の仕方にすかさずエステルが突っ込んだ。

「ふーん、よく判らんが俺の方も名乗つておこうか。ジン・ヴァセツク。カルバード出身の遊撃士で武術の道を志している。あなたのピアノにはいつも楽しませてもらつてるよ。」

「フフ……。お誉めにあずかり光榮至極。ボクの方も、大会予選でのあなたの武勇は耳にしている。毎年優勝している美しく、扇情的なあの”戦妃”が予選で見せたように4人を相手にしてたつた1人で圧勝したそうだね？」

「特務兵相手に圧倒勝ちした”戦妃”ほどじゃないさ。素人相手で運が良かつただけだ。で、その演奏家さんが俺たちに何の用だい？」ジンが尋ねようとしたその時

「ちょっと待つたあああ！」

エステルが声を上げて話をさえぎった。

「オリビエさん……。ひとつ確認しておきますが……。ひょっとして最近、かなりヒマだつたりしますか？」

エステルと同じように次の展開が予想できたヨシュアはオリビエに尋ねた。

「さすがヨシュア君。鋭い質問じゃあないか。王都に来てから1月

あまり……。一通り観光をしてしまって残るはグランセル城くらい
だが無粋な兵士を入れてくれない……。他の地方にも行つてみたい
が生誕祭が迫つてゐるから今、王都から離れるのも忍びない……
「よーするに、かなりヒマだと。」

芝居をしているかのように話すオリビエの言葉をエステルは省略し
た。

「そこに降つて湧いたような定員が1人足りないといつ話……。さ
らにトドメに、優勝者には豪華な晩餐会へのご招待……。まさに女神の天啓といえようつ！」

「はあ……」

「そんな事だらうと思いました。」

案の定予想していた展開になり、エステルとヨシュアは溜息を吐いた。

「というわけで、ボクも武術大会の仲間に入ってくれないかな～つて。」

「いいんじゃねえのか？」

「わあ……それだつたら、4人揃うね！よかつたね、ママ！」

オリビエの頼みにジンは頷き、ミントは喜びの表情でエステルを見上げた。

「ちょ、ちょっとジンさん。そんな簡単に……。オリビエがどんな戦い方をするのかも知らないんでしよう？」

オリビエが最後のメンバーに入る事をあっさり了承したジンに驚いたエステルは尋ねた。

「得物は導力銃だろ？戦術の幅も広がるし、いいチームになるとと思うがね。」

「ええ～つ！」

武器も出していないオリビエの得物まで言いあてたジンにエステルは驚いて声をあげた。

「これは……驚いたな。やはり脇の下のふくらみと歩き方で判つて

しまつものかな？」

同じようにオリビエも驚いた後尋ねた。

「それと視線の動かし方だな。武術家だろうが剣士だろうが動く対象のとらえ方は線だが……。あんたは、相手の動きをポイント」とにとらえている。銃使いに特有の視線の動きさ。」

「ひょええええ、プロだわ……」

「なるほど……。確かに理屈ではそうなりますね。」

「ふえ……凄いね、ジンさん！」

言いあてた理由を話すジンにエステルは驚き、ヨシュアは納得した表情になり、ミントは尊敬の眼差しでジンを見た。

「フム……。今後、気を付けておくとしよう。で、その達人の目から見てボクは合格という事でいいのかな？」

「ああ、よろしく頼むぜ。」

「うーん。一抹の不安は残るけど……」

「オリビエさん。よろしくお願ひします。」

その後、エステルたちは明日からの大会に向けて、夕食を堪能した。そして翌日、エステル達は武術大会に参加するためにグランアリーナに向かつた……

第120話（後書き）

次回からいよいよ武術大会が本格的に始まります！楽しみにしていて下さい！！ちなみに今、決勝前まで書き終えるところですが、話の数が20を超えてしまっています……まだグランセル編の序盤なのに……何話で終われるだろ？……感想お待ちしております。

翌日、グラランアリーナの受付でジンのチームに入る事を登録したエステル達は観客席に行くミントと別れて、選手控室に向かった。

（グラランアリーナ・選手控室）

エステル達が控室に入るとそこには、クルツチーム、リフィアペアがいた。

「あ、クルツさん達にリフィア達だ！やつほ～。」
エステルは知り合いを見つけて、声をかけた。

「おお、エステル！どうやら出場はできたようだな！」
リフィアはエステル達に気付き、声をかけた。

「うん。今回は当たらないようだけど、次に当たつたら絶対勝つて見せるわよ～！」

「フツフツフ……望む所だ！」

「ま、その時はエヴリース達の強さを見て上げる。」

エステルの言葉にリフィアは不敵な笑みを浮かべ、エヴリースも同じように不敵な笑みを浮かべて答えた。

「あ、新人君達だ！」

「どうやら無事、登録ができたようだね。」

同じようにアナラスやカルナがエステル達に話しかけた。

「お前達の腕前……見せてもらうぜ。」

「ジンさん、お互い当たつたその時はよろしくお願ひします。」

グラツィはエステル達の実力を見るのが楽しみのような顔で見て、クルツはジンを見て軽く会釈して言った。

「ああ。その時はお互い全力をつくすぞ。」

「ええ。」

その時、試合開始のアナウンスが聞こえて来た。

「皆様……大変長らくお待たせしました。これより武術大会、本戦を始めます！」

「ワアアアアアアア…………！」

試合を待ちかねたように、アナウンスが入ると観客達は歓声を上げた。

「それでは早速、栄えある第一試合のカードを発表することにします。南、蒼の組 遊撃士協会、グラントセル支部。クルツ選手以下4名のチーム！北、紅の組 王国軍、突撃騎兵隊所属。ジエイド中尉以下4名のチーム！」

「よし……出番だな。みな、準備はいいか？」

「ああ！突撃騎兵隊といやあ、かなりの猛者揃いのはずだぜ。相手が”戦妃”じゃないのは残念だったが、相手にとつて不足はねえ。自分達の出番にクルツはメンバーに準備を確認し、グラツツは相手チームを聞いて不敵な笑みを浮かべた。

「いつでも行けるよ！」

「バッカリです！」

カルナやアネラスもそれぞれ武器を持って、力強く頷いた。

「カルナさんたち、頑張ってね！」

「先陣の名誉を受けたのだ！必ず勝利するのだぞ！」

「ああ、任せておきな。」

「それじゃあ、行つてくるね！」

エスティルとリフィアの応援の言葉を受け、クルツ達は試合会場に向かつた。

「これより武術大会、本戦第一試合を行います。両チーム、開始位置についてください。」

予選試合と同じようにクルツ達と王国軍の兵士達は配置に着いた。

「双方、構え！」

両チームはそれぞれ武器を構えた。

「勝負始め！」

そしてついに武術大会本戦が始まった！

試合は予選のようにグラツツ、アネラスが前衛として王国軍の兵士達と武器を交え、クルツは中衛の位置で自身が会得している東方の技の一つ”方術”で兵士達の戦闘で傷ついたグラツツ達の傷を癒したり、援護攻撃をし、カルナは強力なアーツで兵士達を纏めて攻撃したり、銃で正確な射撃で攻撃した。そして試合は終了し、クルツ達の勝利となつた。

「勝負あり！蒼の組、クルツチームの勝ち！」

「やつた！カルナさんたちの勝ちだわ！」

控室から試合を見て、結果がわかつたエステルは喜んだ。

「さすがはリベールの遊撃士つてどこか。揃いも揃つて大した腕前だぜ。」

「たしかに人数こそ少ないがそれぞれが一騎当千のようだね。」「もし試合で当たつたらかなり苦戦させられそうですね。」

ジン達はクルツ達の実力に感心していた。

「ふむ。……シェラザード以外の正遊撃士の実力は初めて見たが……なかなかやるではないか。あの実力ならファーミシルス自ら鍛えている親衛隊の者達と並ぶかもしけんな。」

「ん。あれなら多少手加減しても楽しめそうだね。」

クルツ達の実力を高評価しているリフィアの言葉を肯定するようにエヴリーヌは頷いた。そしてクルツ達が戻つて来た。

「先輩たち、ナイスファイト！」

「よう、いい勝負だつたぜ。」

「はは、『不動のジン』にそう言つてもらえるとは光榮だ。」「さすがに予選と違つてほとんど余裕はなかつたけどな。」

エステルやジンに勝利を祝われたクルツ達は余力を残しているかの表情で答えた。そして次の試合開始のアナウンスが入つた。

「続きまして、第二試合のカードを発表させていただきます。南、
蒼の組 カルバード共和国出身。武術家ジン以下4名のチーム
！北、紅の組 チーム『レイヴン』所属。ディン選手以下4名
のチーム！」

「あたし達の番だわ！」

「しかも相手はあの人たちか……」

「フフ、優雅さに欠ける相手だがなかなか面白い試合になりそうだ。

「よーし、アリーナに出るぞ！」

ジンの言葉に頷いたエスティル達はアリーナに出た……

第121話（後書き）

いきなりですが、戦女神シリーズを知っている方に質問です。アビルスって戦女神1で本当に死んでいるんですか？……あるキャラの登場を考え始めているので、アビルスが生きていたら登場はさせられないと思うので、知っている方がいればよければ感想にて答えをお願いします。……感想お待ちしております。

「武術大会・1回戦」前篇

「グラシアリーナ・観客席」

「あ、ママ達だ！」

観客席でプリネやツーヤといつしょに観戦していたミントは片方の門から入場して来るエステル達を見て、声をあげた。

「ツーヤ。エステルさん達の戦い方は傍で見ると、外から見るとでは見える視点が違つてくるわ。よく見ておきなさい。」

「はい、『ご主人様。』

プリネの言葉にツーヤは頷いた後、エステル達の動きを逃さないよう、しつかりと見た。

「グラシアリーナ」

「へへ……。早速リベンジの機会とはな。」

「たまには女神も粋なことをするもんだよな。」

「この前の事件で力不足を思い知った俺たちは死にものぐるいで特訓した……。その成果を見せてやるよ！」

エステル達と顔を合わせたルーアンの不良集団 レイヴンを率いるロツコ達は好戦的な目でエステル達を見て、言つた。

「フフン、その意氣やよし！ あたしたちも手加減ぬきで思いつきり行かせてもらうわ！」

ロツコ達の言葉を聞いたエステルはいきいきとした表情で答えた。

（うーん、エステル君てばいつになく活き活きしてるねえ。男らしいというか何と言つか。）

（エステルに聞かれたらまた、はたかれますよ……）

オリビエの呟きが聞こえたヨシュアは呆れた表情で忠告した。

「さて、そろそろ時間だな。」

ジンは自分達とレイヴン達の腕時計を見て顔を上げた審判を見て、もうすぐ試合が始まる事を悟った。

「これより武術大会、本戦第二試合を行います。両チーム、開始位置についてください。」

審判の言葉に頷いた両チームはそれぞれ、開始位置についた。

「双方、構え！」

両チームはそれぞれ武器を構えた。

「勝負始め！」

そしてエステル達とレイヴン達は試合を始めた！

「行くぞ、お前等っ！ 気合いれていけよ！」

「へいっ！」

「へへっ、当たり前だ！」

「俺達の力をあいつらに見せてやるうぜ！」

ロッコの号令にディンやレイスは不敵な笑みを浮かべて答え、下つ端は元気よく返事をした。

「威勢は相変わらずいいわね～。みんな、行くわよ～！」

「了解！」

「おう！」

「フツ……援護は任せたまえ！」

エステルの掛け声を合図に戦闘を開始した！

「「オラアッ！…」「

レイスと下つ端は同時にエステルに攻撃をしかけたが

「よつと！」

エステルは棒で2人の攻撃を防御した。

「横がガラ空きだぜっ！」

防御しているエステルを狙つてロッコはエステルの横から攻撃を仕掛けようとしたが

「せいつ！」

「チツ！」

ヨシュアの双剣に阻まれた。

「フツ！」

オリビエは銃で一番弱そうな下つ端を狙つて、攻撃した。

「ぐわつ！」

「せいつ！」

「ぐえつ！？」

オリビエの攻撃でのけ反つた下つ端を狙つてジンは籠手で重い一撃を腹に打ち込んだ。ジンの一撃により下つ端は崩れ落ちて、立ちあがらなくなつた。

「おおおお！」

「「「グッ……体が……」」

さらにはヨシュアはクラフト 魔眼でロツコ達の動きを止めた。それを狙つて、エステルとジンはそれぞれクラフトを放つた！

「とりやつ！雷神脚！」

「はあああああ！旋風輪！」

「「「グワツ！？」」

2人のクラフトを防御もできずに受けてしまい、大きなダメージを受けたロツコ達はその場で膝をついたが

「まだ……だつ！」

「へつ…………そんな簡単に…………やられて…………たまるかつ！」

「お前等にリベンジするために今まで……鍛えて……来たんだからなつ！」

ロツコ達は痛む体を無視して、気合で立ちあがつて武器を構えた。

「へ…………以前より打たれ強くなつてゐるじゃないの！」

「うん。それに以前と比べれば戦い方も少しよくなつていてる。」

立ちあがつたロツコ達を見てエステルとヨシュアは感心した。

「ハツハツハ！中々男氣がある人達だねえ。だつたらこれはどうかな！？それつ！クイックドロウ！！」

ロッコ達の根性に感心したオリビエは正確かつ、素早く指を動かして銃でロッコ達を攻撃した。

「「「グッ…………」」

オリビエの攻撃にロッコ達は呻いて、武器を落とした。

「これで決めるつーはつーはああああああーせい、やつ！ 桜花

！無双撃！

「マジ……かよ……」

「いくよーふん! 断……骨……剣！」

「ぐえつ…………」

「もうつたあー奥義！ でやあああーはあつーでやつー龍閃脚！」

「ち……くしょう…………」

さらにそこにエスティル達はそれぞれ強力なクラフトをロッコ達に放つた。強力なクラフトを受けたロッコ達もさすがに気合だけでは立ち上がり難く、その場に蹲つた。

「勝負あり！ 蒼の組、ジンチームの勝ち！」

そしてロッコ達の様子を見て、審判は試合終了の宣言をした。

「やつた————！ ママ達が勝つた！」

エスティル達の勝利に観客席から応援していたミントははしゃいだ。

「ツーヤ、あのがチームワークというものよ。仲間と戦えばあのように連携や補助と色々な利点があるんですね。」

「はー！ いつか私も、ご主人様達に背中を預けられるような存在になるよう、がんばります！」

「フフ、楽しみにしているわね。（……それにしても以前にも思いましたが、あのオリビエさんという方……何者でしょう？ 銃の腕といい、立ち振舞いといい、一般市民には見えないんですね……もしかして、どこかの貴族かしら？）」

さらなる精進を決意しているツーヤを微笑ましそうに見たブリネはアリーナに目をやって、オリビエの強さや会った時からオリビエ自身が出している雰囲気を感じて、首を傾げた。

「はあはあ……。やつぱり負けちまつたか……」

「き、キツイつす……」

一方負けたティンやレイスは結果をあらかじめ予想していたかのように、諦めていた。

「クソッ、クソクソクソ……」

ロッコだけは負けた悔しさで地面を何度も叩いていた。

「まあまあ……。そう氣を落とさないでよ。正直、驚いたわ。まともに強くなってるから。」

「僕も同感です。バレンヌ灯台で戦った時よりもはるかに手強く感じました。」

「そ、そつか……？」

しかしエステルとヨシュアに褒められ、地面を叩くのをやめて以外のような表情でロッコはエステル達を見た。

「あの時のことはあんま覚えてないんだけどね~。」

「何だか知らんがお互い、全力を出したんだ。胸を張って控室に戻るとしてよ。」

そしてエステル達は控室に戻つて行つた……

～武術大会・1回戦～前篇（後書き）

感想お待ちしております。

（グラシアリーナ・選手控室）

「はは、あのチンピラどもがあそこまで健闘するとはねえ。人間、変われば変わるもんだ。」

「勝負は見えていたがなかなかいい試合だつたぜ。」

試合から戻つて来たエステル達にレイヴンの事をよく知つているカルナはレイヴン達の事を見直し、グラツィはエステル達の勝利を祝つた。

「ハツハツハツ。ありがとう。まあ、彼らが心を入れ替えたのも全てボクの人徳のタマモノでね。」

「へー、そうなんだ？」

調子に乗つて嘘を語るオリビエの言葉はアナラスは信じた。「事情を知らない人相手になにテタラメ言つてるのよ……。ていうかアンタ、あの連中と面識はないでしょ！」

「恋に落ちるのは一瞬、加速するのは無限大だからね。」「意味不明すぎますね……」

嘘を教えるオリビエにエステルは突っ込み、ヨシュアは呆れた。

「それでは我々はこの後、仕事があるので失礼する。……君達との対戦を楽しみにしているよ。」

「じゃあね。」

「へへつ、今度は試合で会おうぜ。」「

「またね、新人君達！」

そしてクルツ達は控室を出て行つた。

「少し気になつたのだが……なぜここに3組のチームしかいないのだ？予選試合後、司会は出場するチームは9組と言つておつたからな。プリネ達を除けば4試合する事になるぞ？」

「言われてみればそうよね。なんで3組しかいないのかな？」

「確かに妙だね。」

クルツ達が去った後、ある事に気付いたリフィアの疑問にエステルとヨシュアも頷いた。

「ほら、キリキリ歩かないか！」

「つたぐ、うるせえな。そんなに急かすんじゃねえよ。」

「ああ……どうしてこんな事になつたんだろーな。」

「兄い、気合いを入れなよ！あいつらと当たつた時にそんなことどうすんのさ…！」

その時、廊下から声が聞こえてきた。

「ん？」

「なんか、聞き覚えのある声だね。」

「…………な（んか、イヤな予感…………」

廊下から聞こえてくる声にリフィアやエヴリー・ヌは首を傾げ、エステルは嫌な予感がした。そして控室に新たなチームが入つて来た。

「「あ。」」

入つて来たチームはなんと兵士に連れられたカプア一家だった。エステルとジョゼットはお互い顔を合わせると同時に呆けた。

「なんでボクツ娘達がここにいるのよー…？」

「それはこっちのセリフだ！」

そしてお互い言い争い始めた。

「てめえらは……」

「ふーん、初戦の相手はお前さんたちじゃ無かつたか。」

ドルンはエステル達を見て弱冠驚き、キールは少し残念そうな表情をした。

「ハツハツハツ…どこかで見た顔だと思つたら、ボースを騒がせた愉快な空賊君達じゃないか。」

「どうしてここに……」

ドルン達の登場にオリビエは楽しそうに笑い、ヨシュアは驚いた。

「誰が愉快な空賊だよ！？フン、まあいいや。あんたたちと戦ったら今度こそ、そこのホーテンキ女に思い知らせてやるわと思つたの！」

「あ、あんですって～？」

オリビエの言葉に反論したジョゼットは鼻をならして、エステル達を見て言つた。ジョゼットの言葉にエステルは頭に来て、怒つた。

「ゴラー！無駄口を叩くんじゃない！公爵閣下の温情があつて参加していることを忘れたか？」

「まあまあ兵士さん。そう曰くじらを立てないでくれよ。ここに連れて来られてから俺たちや、大人しかつただろ？？」

自分達に注意する兵士をキールは笑顔で宥めた。

「願わくば、また牢に戻るまでその態度を通して欲しいものだな。

「あんたたちも、こいつらとはなるべく口を利かないでほしい。面倒を起こしてもらつては困るのだ。」

「別に面倒を起こすつもりはないけど……」

兵士達に言われ、エステルは溜息を吐いた。

「判つてるのは思つたが、競技場には一個中隊の兵が警備についている。」

「逃げられると思つんじゃないぞ。」

「わかつてますつて。そんな馬鹿なマネはしませんよ。」

「フンだ。田障りだからとつとと行けばあ？」

兵士達の警告に笑顔で返し、ジョゼットは挑発した。

「このつ……」

「ガキの挑発に乗るなよ。いいな、ぐれぐれもおかしな事を考えるんじやないぞ。」

そして兵士達は控室を出た。

「ねえ……一体どうなつてゐるのよ。どうして、あんたたちが武術大会なんかに出てるわけ？」

「デュナン公爵あたりに出場しようと言われたんですか？」

「確かに、俺たちを出場させようとか言いだしたのはその何とかつていう公爵らしいぜ。試合に勝つたびに刑を軽くしてくれるんだってさ。」

エステルとヨシュアの疑問にキールは説明した。

「し、信じられないことするわね。」

「全くだ！あの放蕩者は何を考えているのだ！？」

「エヴリーヌは遊べる玩具が増えるから歓迎だよ、キャハッ」「ドルン達の出場にデュナンが関わっている事にエステルやリフィアは呆れ、エヴリーヌは凶悪な笑みを浮かべた。

「ふーむ、法治国家とも思えないような独断っぷりだな。」

「ハツハツハツ。何ともお茶目さんな公爵さんだ。」

「万が一、優勝なんてしたらどうするんだろ？ね……」

ジンは信じられない思いになつており、オリビエは笑い、ヨシュアは溜息を吐いた。

「まあ、せっかくの申し出だ。刑が決まつてムショに移される前にできるだけ稼いでおこうと思つてな。もつとも……それだけが理由じゃねえけどよ。」

「へ……どういづ」と？

ドルンの言葉が気になつたエステルは目を丸くして、尋ねた。

「うつさいなあ。あんたたちには関係ないだろ。ボクたちだつてそれなりの意地はあるんだよ。」

「僕たちと戦うために参加したんじゃないとすると……特務兵たちと戦うためですか？」

「な、なんで……」

誤魔化そうとしたジョゼットだったが、ヨシュアに言いつぶでられて、驚いた。

「くつ……その通りだぜ。あいつら、味方のフリして俺たちのことを使いやがつたんだ！情報部とやらの勢力を拡大するためのダシとして使い捨てやがつたのさ！」

「まあ、だまされた俺たちもマヌケといえばマヌケだけ……。それでも、エゲつなさすぎだぜ。」

本当の目的をヨシュアが言ひあてたので隠すのをやめたドルンやキールは本音を語った。

「うーん、確かに……。そう考えてみるとあなたたちも不憫よねえ。^{ふびん}

「だから、哀れみの目でボクたちを見るなってばあ！ボクたちに借りがあるクセにっ！」

「へ？ あんたたちに借りつて……？」

ジョゼットの言葉にエステルは首を傾げた。

「フフン、この前の出来事さ。お前さんたちが要塞にいたことを連中に知られるとマズイんじゃないのか？」

「あ……」

得意げに話すキールの言葉にエステルは表情を青褪めた。

「連中への恨みがあつたからてめえらのことは喋らなかつたんだ。がはは、せいぜい感謝しやがれよ。」

「うー……」「うー……」

「確かに……黙つていってくれたことは感謝します。」

ドルンの言葉を聞き、エステルは唸り、ヨシュアは目を伏せてお礼を言った。

「何だか面白そうな話をしてゐねえ。どうこう事情なのかお兄さんにも教えて欲しいなあ。」

「えーい、何でもないってばー！」

「おーと……。お取込み中のようだがそろそろ始まるみたいだぜ。事情を聞きだそつとするオリビエにエステルが怒つてているところをジンが会場内の空氣を感じ取つて、その場にいる全員に言つた。

「続きまして、第三試合のカードを発表をさせていただきます。南、蒼の組 メンフィル帝国出身。冒險家リフィア選手以下2名のチーム！北、紅の組 メンフィル帝国軍所属。闇剣士カーリア

ン選手以下1名のチーム！

「フツフツフ……こんなにも速く、カーリアン婆に口頃の恨みを晴らす時が来るとほな。」

自分達が相手をするのが口頃から痛い目に遭わされているカーリアンドと知つたリフィアは不敵な笑みを浮かべた。

「ま、熱くなりすぎてエヴリースの足を引っ張らないでよ。」「誰に言つておる！ そういうお主こそ、戦いに夢中になりすぎて余の足を引っ張るなよ？」

エヴリースに忠告されたリフィアは言い返した。

「がんばってね、2人とも！」

「相手は強敵だけど、応援しているよ。」

「うむ！ 行くぞ、エヴリース！」

「オッケー！」

エスティルとヨシュアの応援の言葉を背に受け、リフィア達はアリーナに向かつた……

第122話（後書き）

とこり訳で1回戦でまさかのリフィア＆エヴリーヌVSカーリアンです！……感想お待ちしております。

～グラシアリーナ～

「にしても初戦の相手はアンタ達か。…………悪いけど、勝たせてもらわよ。あのエステルって子や私と同じ控室にいた仮面を被つた人間とも戦いたいしね」

「フツフツフ……余はエステル達との旅のお陰でさらに強くなつた！今までのように行くと、思うなよ？」

「久しぶりに本気を出させてもらうね？キヤハッ」

不敵な笑みを浮かべているカーリアンに対し、リフィアやエヴリーヌも同じように不敵な笑みを浮かべて言い返した。

「これより武術大会、本戦第三試合を行います。両チーム、開始位置についてください。」

審判の言葉に頷いた両チームはそれぞれ、開始位置についた。

「双方、構え！」

両チームはそれぞれ武器を構えた。

「勝負始め！」

そしてリフィア達とカーリアンは試合を始めた！

「さあて……今までの旅でどれだけ強くなつたか、お姉さんが確かめてあげるわ！それえつ！」

試合開始早々、カーリアンは双剣を振つて、衝撃波をリフィア達に放つた！

「させぬわ！」

「ほい。」

リフィアは自分の目の前で結界を作つて、カーリアンが出した衝撃波を防ぎ、エヴリーヌは上空へ転移をして回避した。そして上空からエヴリーヌはいつの間にか弓矢を構えて、カーリアンに向けて放

つた！

「行くよ……えいつ！」

常人には見えない指の動きでエヴリーヌは3本の矢を連射して放つ
クラフト 三連射撃をカーリアンに放つ！

「それえつ！」

神速に迫りくる3本の矢に対してカーリアンは3回攻撃をするクラ
フト 3段斬りで対抗し、矢を全て撃ち落とした。

「ゆけいつ！」

「甘いわよ！」

そこにリフィアが魔術 追尾弾を放つた！襲いかかって来る魔力

の弾をカーリアンは鬪気を込めた双剣で真つ二つにした！

「古より伝わりし……」

「させないわよ…」

「ぬつ！？」

次の魔術の詠唱を始めたリフィアだが、ダメージを『えず、相
手の行動を無効化する特殊クラフト 双葉崩しを受けたため、詠
唱が中断された。

「えーい！」

詠唱が止められ、結界を展開していないリフィアの隙を狙つてカー
リアンは続けて攻撃しようとしたが

「させないよ…」

「…！」

エヴリーヌが上空から放ったクラフト 精密射撃に気付き、攻撃
するのをやめて、大きく後ろに飛んで一端後退した。

「オオオオオオオオオオオオオオ…！」

一進一退の互角の戦いに観客達は興奮して、声を上げた。

「へえ……動きが以前と比べて大分洗練されているわね。エヴリ
ー・ヌなんか以前は周りを考えないで攻撃していたのに、連携やフォ

口一をするようになつたじゃない」

「当然だ！余は常に成長し続けている！」

「フフ……お兄ちゃん、褒めてくれるかな？」

カーリアンの感心の言葉を聞き、リフィアは胸を張り、エヴリーヌはリウイが自分を褒めてくれる光景を思い、口元に笑みを浮かべた。
「ま、それでもまだ私には届かないわね。」

「フツフツフ……そう言ってられるのも、今の内だぞ。エヴリーヌ、余の力を受け取るがいい！」

「ん！」

不敵な笑みを浮かべたリフィアは地上に降りたエヴリーヌに大量の魔力を送った。リフィアに秘められている膨大な魔力を受けたエヴリーヌは弓を構え、クラフトを放つた！

「「粉々になっちゃえ（れ）！」」

リフィアがエヴリーヌに魔力を供給し、供給した魔力を利用して放つたエヴリーヌの一本の矢は数千本の矢に分かれ、カーリアンを襲つた！

「協力技か……当たれば結構な威力になりそただけど、そうはいかないわよ」

迫りくる数千本の矢を見て、カーリアンは恐れず、不敵な笑みを浮かべ、双剣を構えて強力なクラフトを放つた！

「激しいの、行くわよ……白露の桜吹雪！！」

カーリアンが自分の周りに放つた衝撃波は襲いかかつて来る数千本の矢とぶつかつた。衝撃波とぶつかつた矢は勢いがそがれて地面に落ち、消えて行つた。

「かかつたな それは囮だ！」

協力技が防御されたにも関わらず、リフィアは不敵な笑みを浮かべて、魔術を放つた！

「……罪人を処断せし聖なる光よ！我が仇名す者に裁きの鉄槌を！贖罪の光霞！！」

リフィアが魔術を放つとカーリアンを逃がさぬよう、薄透明な壁が

カーリアンを覆つた。

「！大地の盾！……アースガード！」

次に起ころる事を予測したカーリアンは持つてゐるオーブメントを駆動させ、絶対防壁を発動させた。そして光と爆音がカーリアンを襲つた！爆音はアリーナ全体に響き渡り、観客達を驚かせた。

「フハハハハハハ！さすがのカーリアン婆も魔術に対する抵抗力は低い上、威力の高い魔術を受ければただではすまないだろう！」

術がカーリアンに命中したのを確認したリフィアは、自分達の勝利を確信し、胸を張つて大声で笑つた。

「だゝれが、婆よ！」

しかし、光と爆音によつてできた煙が晴れると、そこには傷一つついていないカーリアンがリフィア達を睨んでいた。

「なぬ！？」

「なんで傷一つついていないの？」

カーリアンの姿を見てリフィアは驚き、エヴリーヌも驚いた後、尋ねた。

「アーツといつたかしら？これ、結構使えるわね」

驚いているリフィア達にカーリアンは得意げに自分が使つてゐるオーブメントをリフィア達に見せた。

「……アースガードか。剣を振る事しか能のないカーリアン婆がアーツを使うとはな……油断した。」

カーリアンが見せたオーブメントに装着されてある複数の地属性のクオーツを見て、即座にカーリアンが絶対防壁のアーツを使つた事に気付いたリフィアは苦い顔をした。

「あ～ん～た～ね～……！もう、怒つたわ！怪我を負わせるつもりはなかつたけど、少し痛い目に合つてもうわよ！」

リフィアの言葉に怒つたカーリアンは双剣を構えて、リフィア達に向かつて行つた！

「ぬ！」

「！！」

襲いかかって来るカーリアンを見て、リフィアとエヴリーヌは結界を張ろうとしたが

「遅いわよ！北斗斬り！！冥府斬り！！」

「なぬつ！？」

「きやつ！？」

一瞬で近付いたカーリアンが放ったクラフトを受け、それぞれ足に掠り、痛みに呻いた後跪いて、立ち上がらなくなつた。

「な、なぜ立てぬ！？」

「なんか……体中がピリピリする……」

立てない事にリフィアとエヴリーヌは呻いて、カーリアンを見た。「足の神経に少し傷つけて、立てなくしだけよ。治癒魔術でも使えばすぐ直るわ。これでも手加減してあげたんだから、感謝しどきなさいよ」

悔しそうに自分を見ているリフィアとエヴリーヌにカーリアンは得意げに説明した。

「勝負あり！紅の組、カーリアン選手の勝ち！！」

状況を見て、審判はカーリアンの勝利を宣言した。

「ワアアアアアア…………！」

圧倒的な強さを見せたりフィアとエヴリーヌをたつた一人で破ったカーリアンに観客達はより一層、歓声を上げた。

「リフィアさん達、負けちゃつた…………」

「あの2人が負けるなんて信じられないです…………」

観客席からリフィア達の試合を観戦していたミントは残念そうな表情をし、ツーヤは信じられない表情で見ていた。

「あはは……カーリアン様相手ではさすがのお姉様達も分が悪いですよ…………」

2人の様子を見て、プリネは苦笑しながら答えた。

「ご主人様……あたし、あの女人の人とご主人様達が戦う事になつた

ら、ご主人様が勝てるよう、精一杯応援します！」

「ミントも！だからプリネさん、がんばって！」

「フフ……ありがとう、2人とも。もしカーリアン様と当たる事になれば敵わないのはわかつていますが、勝利を諦めず、精一杯がんばってみますね。」

ツーヤとミントの励ましの言葉にプリネは微笑みながら答えた。そしてカーリアンは自分がいた控室へと戻つて行き、リフィアとエヴリースは自分達自身にそれぞれ治癒魔術をかけて、回復した後、カーリアンと同じように自分がいた控室へと戻つて行つた……。

～武術大会・1回戦～後篇（後書き）

という訳でリフィア達、まさかの1回戦敗退です。2回戦もまさかの組み合わせがあるので楽しみにしていて下さい……感想お待ちしております。

（グラシアーナ・選手控室）

控室にカーリアンに負け、俯いているリフィア達が戻つて來た。

「えと……あの、2人とも。氣を落とさないでね？凄くいい勝負だつたよ。」

俯いているリフィア達にエステルは遠慮気味に話しかけた。

「フフフフフ……」

「…………」

「2人も、大丈夫かい？」

俯きながら微妙に笑つているリフィアと、何も答えないエヴリーヌを不思議に思い、ヨシュアは話しかけた。

「フハハハハ！カーリアンめ、この程度で余達が負けを認めるとは思うなよ！次は必ず勝つ！！エヴリーヌ、憂さ晴らしに街道の魔獸達を一掃するぞ！」

「ん！！」

そしてリフィアは高笑いをしながら、エヴリーヌと共に控室を行つた。

「…………」

「ハハ……心配は必要ないみたいだつたね。」

あつという間にいなくなつたリフィア達をエステルは放心し、ヨシュアは苦笑した。

「ハツハツハ！あんな明るい姫君達がいるメンフィルは明るい未来が待つていそうだね。」

オリビエはリフィア達の前向きな思考に感心して、笑つた。そして次の試合を継げるアナウンスが入つた。

「続きまして、第四試合のカードを発表させていただきます。南、

蒼の組 空賊団『カプア一家』所属。ドルン選手以下4名のチーム！北、紅の組 王国軍情報部、特務部隊所属。ロランス少尉以下4名のチーム！

「おーし、とうとう来たか！」

「初戦であいつらと当たるなんて、ついているね。」

「あの黒坊主どもに目にも見せてやるぜ！」

自分達の出番にドルンは声をあげ、ジョゼットは初戦で特務兵達と当たった事に笑みを浮かべ、キールは意気込んだ。

「こうなったのも何かの縁ね。応援してあげるからめいっぱい頑張りなさいよ！」

「ロランス少尉は恐らくあの時いた仮面の隊長だろ？ね。……敵の隊長には気を付けて。彼さえ自由にさせなかつたら勝機は必ずあると思つ。」

「う、うん……。……じゃなくてよ、余計なお世話だよつ！」
エステルとヨシュアの応援の言葉をジョゼットは照れながら答えた
後、ドルン達と共にアリーナに向かつた。

→グランアリーナ

ザワザワザワ

「え、えーと……。事情を説明させていただきます。ご存知の方も多いとは思いますが、彼らはボース地方を騒がせた空賊団『カプア一家』の者たちです。正々堂々と戦うことでの武術大会を盛り上げたい……。そうすることで迷惑をかけた王国市民に償いたい……。その一心で、今回の武術大会への参加を強く希望したそうです。服役中の態度が真面目であつたため、主催者である公爵閣下のはからいで今回の出場が実現した次第であります。皆様、どうかご了承ください。」

ドルン達の登場にざわめいている観客達に司会は事情を説明した。

すると

「ワアアアアアアア…………！」

パチパチパチパチ…………！」

観客達は歓声と拍手を送った。

「よお、仮面の兄ちゃん。待ってたぜ。借りを返せる機会をな。」「へへ、あの公爵には感謝しなくちゃいけないな。」

「ふふ……」

ドルンとキールの不敵な笑みをロランスは口元に笑みを浮かべて返した。

「な、なにがおかしいのさ！？」

笑っているロランスをジョゼットは睨んで言った。

「エレボニアの没落貴族、カプア男爵家の遺児たち……。悪徳商人に領地を横取りされ、お家再興のために空賊稼業……。何とも涙ぐましい話だと思ってな。」

「て、てめえっ！？」

「どうして知ってるんだよ！？」

ロランスの言葉にドルンとキールは驚き、睨みながら尋ねた。

「我々が所属しているのが情報部だということを忘れたか？我々への復讐などあきらめて眞面目に服役した方が身のためだ。どうやらお前たちは、悪党に向いていないようだからな。」

「な、なんだとー！？」

「ずいぶんとまあ、さえす轉つてくれるじゃないの…………」

「てめえなんざ導力砲の餌食にしてやらあ！」

ロランスの挑発にジョゼットは声をあげ、キールは静かな怒りを見せ、ドルンはロランス達を睨んで怒つて言った。

「これより武術大会、本戦第四試合を行います。両チーム、開始位置についてください。」

審判の言葉に頷き、一端怒りを引っ込んだドルン達とロランス達両

チームはそれぞれ、開始位置についた。

「双方、構え！」

両チームはそれぞれ武器を構えた。

「勝負始め！」

そしてドルン達とロランス達は試合を始めた！

試合はドルン達は特務兵達相手に善戦していたが、ロランスが戦い始めるに、ロランスの圧倒的な強さになすすべもなく敗北した。

「勝負あり！紅の組、ロランスチームの勝ち！」

「む～……あの人達、勝つちゃった。」

「ハ、ミントちゃん。これは試合なんだから仕方ないよ。」

ロランス達の勝利にミントは頬を膨らませていることをツーヤが宥めていた。

「…………」

「（）主人様？どうしたんですか？」

「…なんでもないわ。だから気にしないで。」

「あ、はい。」

アリーナから退場して行くロランスを凝視していたプリネにツーヤは首を傾げて尋ねたが、ツーヤの言葉に我に返つて答えた。

（あの仮面の隊長を見た瞬間過つたこの懐かしい気持ちと心臓が掴まる感覚は一体…………いけない！もしかしたら次の試合は彼らかもしれないし、気を引き締めないと…）

プリネはロランスを見た瞬間、自分自身に起こった感覚がわからず、人知れず戸惑っていたが次の試合で当たる事になるかもしれない事い気付き、気を引き締めた。

（グラランアリーナ・選手控室）

「ああ……負けちゃったわ……」

「途中まではいい展開だったんだけどねえ。あの赤い隊長殿が動き始めたら崩れてしまったね。」

「ふーむ……底の知れん相手だな。あれで本気とも思えんし、いまいち実力が読み切れねえ。」

ドルン達が負けた事にエステルは残念そうな表情をし、オリビエは試合の流れを説明し、ジンはロランスが本気でない事を悟った。

「え……今ので全力じゃないの！？」

ジンの言葉にエステルは驚いて尋ねた。

「……たぶん、違うよ。最後の技を放ったあとも氣の集中が衰えていなかつた。まだ余力を残していると思う。」

「と、とんでもないわね……」

ジンの言葉を補足するように説明したヨシュアの言葉を聞いて、エステルは口を開けて放心した。そして負けたにも関わらず、他のチームと同じように真面目に、そして一生懸命試合をしていたので観客達から惜しみない拍手と歓声の中でドルン達が控室に戻つて來た。

「…………」

「…………」

「…………」

「…………」

兄妹揃つて無言でいるカプア一家にエステルは遠慮気味に話しかけた。

「なぐさめはいらねえ……。俺たちの完敗だつたぜ……」

「くそつ……俺のサポートが甘かつたからだ……」

「キール兄は悪くない……！ボクがあいつの斬り込みを崩せなかつたからだよ……！」

エステルの慰めの言葉をドルンは首を横に振つて自分達が完敗だった事に悔しさを露わにし、キールやジョゼットは自分達の力不足を口にして、悔しそうにしていた。

「…………。まあ、仕方ないでしょ。勝負は時の

運とも言つんだし。あなたたちの仇は、もしあたし達があいつらと当たつたらあたし達が絶対に討つてあげるわ！」

「なにイ……！？」

「おいおい……ずいぶん簡単に言つじやないか。」

自信ありげに胸をはるエステルにドルンやキールは驚いた。

「そんな安請け合いできる相手じやないと思つけど……」

「まあ、意気込みがないと勝てるモンも勝てなくなるからな。」

「フツ、根拠のない所がまたエステル君らしいねえ。」

エステルの自信にヨシュアは呆れ、ジンは感心し、オリビエは相変わらずのエステルらしさに口元に笑みを浮かべていた。

「フン……やつと終わってくれたようだな。」

その時、ドルン達を連れて来た兵士達が控室に入つて來た。

「ほら、グズグズするな！とつとと波止場に戻るぞ！」

「おいおい、冗談じやねえぞ。」

「闘つたばかりなんだから少しくらい休ませてくれよ。」

「フン……犯罪者の分際で甘えるな。」

兵士の言葉に反論したドルン達だが、兵士は鼻をならしてドルン達の頼みを否定した。

「ほら、さつさと来ないか！」

「チッ……」

「ああ、疲れたあ……」

「…………」

兵士に強く言われたドルンは舌打ちをし、キールは泣き言を言い、ジョゼットは黙つて控室に出ようとした時、ジョゼットは立ち止まつてエステル達の方に振り向いた。

「おい、あんたたち……」

「えつ……？」

ジョゼットに呼ばれ、エステルは首を傾げた。

「ボクたちはもう、明日からはここに来れないけど……。あんたた

ち、絶対に勝てよな！あんなふざけた連中に負けたりしたら許せないからねつ！」

「あ……。あつたりまえでしょー・任せておきなさいってばー！」

「絶対に……勝つてみせるよ。」

ジョゼットの応援の言葉にエスティルとヨシュアは力強く頷いた。

「……『気は済んだか。』

「ほら、手間を取らすんじやない。」

そしてカプア一家は兵士達に連れられて、去つて行つた

……

感想お待ちしております。

その後、一端ジンとオリビエと別れたエスティルとヨシュアは勝利を祝つてくれたミントやプリネ達に先にホテルに帰つて待つていてほしいと伝えた後、初戦突破をエルナンに報告しに行つた。

（遊撃士協会・グランセル支部）

「やあ。エスティルさん、ヨシュアさん。初戦突破、おめでとうござります。」

エスティル達がギルドに入るとエルナンは笑顔で出迎えた。

「えへへ、どーもどーも。ってエルナンさん。もう結果知つてたんだ？」

「先ほど、クルツさんたちが教えてくれましたからね。それで……どうです、手ごたえのほどは？」

「そうですね……。先輩たちもそうですが強敵ばかりが勝ち残つた感じです。」

2人はエルナンに特務兵のチーム、カーリアン、プリネのチームに關して説明した。また、空賊達も出場していた事を報告した。

「なるほど……。空賊達が出場を許可されたのは聞いていましたが特務部隊の隊長がそこまで凄腕とは思いませんでした。」

「ただの隊員も手強いけど、あの隊長は完全に別格だつたわ。大剣を片手で操る膂力りょりよくと豹みたいにしなやかな身のこなし……。得体の知れないヤツだとは思つたけどあそこまで強いとは思わなかつた。」「そうだね……。あの、エルナンさん。ロランス少尉の経歴について何か分かることはありますか？」

「うーん、残念ながら現状では分かりませんね。情報部は、新設部隊だけあってリシャール大佐が立ち上げの際に各方面から引き抜いたそうです。彼もその1人だと思いますが……」

ヨシュアに尋ねられたエルナンは申し訳なさそうな表情で答えた。

「そう、ですか……」

「ねえ、ヨシュア……。ずいぶん、あの赤いヤツにこだわってるみたいね。何か……気になることでもあるの？」

残念そうにしているヨシュアにエステルはいつものヨシュアでないことに気付き、尋ねた。

「いや、明らかにタダ者じやないからね。試合で当たる可能性もあるから詳しい戦力を知つておきたいんだ。」

「そつか、なるほどね。でも、もしかしたらあのカーリアンって人かプリネ達が倒してくれるかもしれないわよ。」

「ハハ……まあ、そなんだけね。一応念の為だよ。」

エステルはヨシュアの説明に納得した後、ロランス達がカーリアンかプリネ達に敗北する可能性もある事を言い、ヨシュアはその事に苦笑しながら頷いた。

「そういうえば、その少尉ではありませんが……今日の昼頃、軍用警備艇が王都の発着場に到着したそうです。降りてきたのは、大佐の副官のカノーネ大尉だったそうですよ。」

「それは気になる情報ですね。」

「カノーネ大尉ていうと……あの陰険そうな女ギッネか。ティータをネタにして博士を脅迫してた嫌なヤツ。」

エルナンの情報にヨシュアは真剣な表情で頷き、エステルはカノーネのした事を思い出して頬を膨らませた。

「何でも、五大都市を一通り回ってきたそうですよ。強引に発着場に着陸させるので定期船の運航スケジュールがずいぶん遅れてしまつたそうです。」

「まったく口クな事しないわね……」

「五大都市を一回りですか。博士たちを捜索するにしては少し大きすぎる気がしますね……」

カノーネの行動にエステルは呆れ、ヨシュアは驚いた。

「今、各地の支部で探つてもらつてゐる最中です。何か分かつたら連絡しましよう。あなた達は、このまま武術大会に専念してください。」

「うん、そうするわ。」

「それでは失礼します。」

そしてエステル達はプリネ達やリフィア達、自分達が泊まつてゐるホテルに向かつて行つた。

（ホテル・ローエンバウム）

「や～つと帰つてきやがつたか。あんまり待たすんじやねえつての。」
エステル達がホテルに入るとフロントから聞き覚えのある声が聞こえて來た。

「この声……」

2人が少し歩くとそこにはナイアルがいた。

「お久しごりです、ナイアルさん。」

「うわ～、ナイアルだ！何よ、あたしたちをわざわざ訪ねてきてくれたの？」

ナイアルとの再会にヨシュアは軽く挨拶をし、エステルはナイアルが自分達を尋ねて來たと思い、尋ねた。

「おお、わざわざ訪ねて来てやつたのよ。武術大会の取材をしてたヤツが少年少女の出場者の話をしててな。詳しく聞いてみりやあ、どう考へてもお前たちじゃねえか。」

こりや王都に來てるつてんでホテルで待ち伏せしてたわけさ。」

「はあ……相変わらず鼻が利くわねえ。」

「訪ねててくれたのは嬉しいんですけど……。ナイアルさんの事だから用があつて來たんですよ？」

ナイアルの理由を知つたエステルは呆れ半分に感心し、ヨシュアは確認した。

「かつ、何と嘆かわしい。利害拾得抜きに友情を温めようといつお兄さんの真心が伝わらんかね？」

「ウソくせー……」

「それに、お兄さんといつには歳が離れすぎでいるよつた氣も……演技がかかつたように見えるナイアルの態度にエステルはジト目で見、ヨシュアは遠慮氣味に言つた。

「ええい、黙りやがれ！ そいつわけでせつねく食事に出かけるぞ。」

「また唐突ですね……」

「別にいいけど当然、奢つおてくれるのよね？」

ナイアルの提案にヨシュアは呆れ、エステルはからかうような表情でナイアルを見た。

「ぐつ……まあいいだろ。……編集部の近くに行きつけの店があつてな。そこでメシを食うとしよう。」

そしてエステル達はホテルの受付にプリネ達に自分達はナイアルと食事する事を伝えるように言つた後、ナイアルに案内されて、リベル通信社の近くにあるカフェに向かった。

→「コーヒーハウス・パラル

「へへ、雰囲氣のいい店ね。酒場といつよりは喫茶店でカンジだけど。」

「この匂いはコーヒーですね。」

ナイアルに案内され、入ったカフェの雰囲氣にエステルとヨシュアは雰囲氣の良さを感じ取つた。

「ここ」のマスターが道楽でやつてる店でな。サイフオンで淹れる一杯は絶品としか言いようがねえ。あとは、本場のスペイスを使ったライスカレーがお勧めだな。まあ、食事とコーヒーは後で適当に頼んでおくとして……」

「ちょっと待つたあ！ あしたち、試合で身体を動かしてメチャメ

「 チヤお腹空いてるのよね。」

「 まずは夕食を『ご馳走になつてもいいですか?』

「 ぐぐつ……。可愛くないガキどもだぜ。ええい、こうなつたら好きだけお代わりしやがれ! それでスクープ取れるなりじゅうぶん元は取れるからなつ! 」

エステルとヨシュアの言葉にナイアルは唸つた後、やけ氣味にエス

テル達を連れて来た本音もいつしょに言つた。

「 やつぱりそれが狙いか。でも、こんな事ならミントやリフィア達も連れてくればよかつたな。」

「 ハハ、さすがにそれはナイアルさんが可哀想だよ。そういうえば、ドロシーさんは今日は一緒じゃないんですか?」

「 ああ、ヤツにはちよいと別の仕事を頼んでいてな……。まあいい、ひとつと頼みやがれ。」

そしてエステル達はナイアルの奢りで食事を楽しんだ……

感想お待ちしております。

「コーヒー・ハウス・パラル」

「は～、辛かつたけどさうじく美味しかったあ　トロッとしたヒレ肉とホクホクとしたジャガイモが何ともいえずマッチしてて……うん、今度くる時はミント達も連れてこようつと！」

「食後のコーヒーがまた絶品ですね。サイフォンで美味しく淹れるのは難しいって聞きましたけど……」

食事を終えたエステルとヨシュアはそれぞれ満足げに感想を言った。「つたく、人のミラだと思つてバカスカ食いやがつて……。記者の薄給をなんだと思ってやがる。」

「まーまー。とりあえず」馳走さまでした。それで……やつぱりネタに困つてるわけ？」

文句を言つているナイアルを宥めたエステルは尋ねた。

「フン……。ネタなら腐るほどあるさ。だが、親衛隊のテロ事件だの、アリシア女王の健康不調だの信憑性の乏しい情報ばかりでな。はつきり言つちまえば軍のフィルターを通していい生で新鮮な情報が欲しいのや。」

「…………」

ナイアルの言葉に2人は黙つた。

「ドロシーから、ツアイスでの誘拐事件について少し聞いたが……。单刀直入に聞くぞ。リシャール大佐の尻尾をお前たち、どこまで掘んでいる？」

「何て言うか、ホント直球ねえ。」

「そう質問してくるという事はある程度、予測できているみたいですね。」

ナイアルに尋ねられ、エステルはナイアルの質問の仕方に感心し、

ヨシュアは尋ねた。

「やっぱり大佐はクロか……。ウチの雑誌でインタビューして人気が出ちました手前、認めたくはなかつたが……。反逆者、一步手前つてどこか？」

2人の言葉を聞き、ナイアルは溜息を吐いた後、尋ねた。

「一步手前どころか、クーデターを謀論んでいるわ。」

「デュナン公爵を傀儡にしてリベルを軍事国家にする事を目標としているそうです。」

「おいおい、マジかよ……それにしても、デュナン公爵か……。陛下が不調なのをいいことにグランセル城の主人気取りで好き放題やつてるみたいだが……。不思議なのは、軍のお偉方がどうして動かないつてどこか……」

エスティル達の情報にナイアルは信じられない表情をした後、考え込んだ。

「うーん、それはねえ。……ねえヨシュア。話しちゃつてもいいのかなあ？」

エスティルはヨシュアを見て、尋ねた。

「そうだね……。僕たちとしてもできるだけ情報は欲しいところだ。ナイアルさんだったら協力してもらつてもいいと思う。」

尋ねられたヨシュアはエスティルの提案に頷いた。

「おいおい、なんだよ。そんなに良いネタを持つてんのか？」

2人の会話を聞き、ナイアルは食いついて来た。

「あらかじめ言つておきますけど……。今から話すことは、記事にしたくても出来ないような内容だと思います。」

「心の準備、しといてよね。」

ヨシュアとエスティルはナイアルに念を押した。

「クソッ……。何だかヤバそうな話じゃねえか。まあいい、ひとつと話しゃがれ。」

そしてエスティルたちは今までのリシャール大佐や情報部などについて

てこれまでの」との真相を話した。

「.....」

エスティル達の話を聞き終えたナイアルは無言のまま、目を閉じていた。

「あーあ、だから心の準備をしといてって言ったのに.....」

ナイアルの様子を見て、エスティルは溜息を吐いた。

「ありえねえ.....。おい.....ホントにマジか？」

「残念ながらマジです。空賊事件から、孤児院放火事件、中央工房の襲撃事件に至るまで.....。全ての事件に、情報部の特務兵たちが関与していましたんです。」

「で、軍の上層部は弱みを握られてモルガン将軍は監禁状態.....。親衛隊は無実の罪を被せられてテロリストとして追われてると.....信じられない様子でいるナイアルにヨシュアやエスティルは先ほど話した今までの事件の真相を繰り返した。

「あーもう一繰り返すんじゃねえ！チクショウ.....記事にできるわけねえだろ。最近ウチの雑誌にやあ軍の検閲が入ってるんだ.....。ゲラにした時点でお縛だぜ.....」

「そ、そうだつたんだ.....」

新聞社にまで情報部の手が伸びている事を知り、エスティルは驚いた。「仕方がないから、当たり障りのない武術大会の記事で埋めているんだが.....。って、そうか。お前らが大会に参加しててるのも何か理由があつての事なんだな？」

「ま、そういうこと。依頼内容にも関わるから詳しく述べないんだけど.....」

「事態を開拓するために動いていると思つてもうつて結構です。」

「そうか.....」

エスティルとヨシュアが武術大会に関わっている真の理由を知ったナ

「.....」

「……」

「…… よし、決めた。記者としては動けねえが…… 僕も一肌脱いでやわらじやねえか。ギルドでも調べられない事を独自のルートで調べてやらあ。」

「サンキュー、助かるわ。」

「軍を相手にするわけですから、かなり危険な仕事になると思います。それでも協力してくれますか？」

ナイアルの協力にエステルは感謝し、ヨシュアはナイアル自身を心配し、確認した。

「くどい、こいつは俺の戦いだ。このままペンが剣に負けるのを見過ごすわけにはいかねえんだよ！」

「ナイアル……」

「分かりました……。どうかよろしくお願ひします。」

ナイアルの言葉を聞き、エステルは初めてナイアルを見直し、ヨシュアはお礼を言った。

「おお、任せとけってんだ。それで、具体的にはどういう事が知りたいんだ？」

「そうねえ……。やつぱり軍の動きかしら。親衛隊の人たちは全員捕まっちゃったのとか……。モルガン将軍はどこに監禁されているのとか……メンフィルに関してはリフィア達に頼めば、話してくれるから大丈夫ね。」

ナイアルに尋ねられ、エステルは現在欲しい情報を並べて言った。

「なるほどな。俺もその辺は気になつた。それは調べておくとして他にはあるかよ？」

「…………あの……。情報部の人間の経歴なんて調べられないものどうか？」

「へつ……？」

「情報部員の経歴だと……？」

ヨシュアの言葉にエステルは目を丸くし、ナイアルは以外そうな表情をした。

「具体的には、中心人物と思われるリシャール大佐とカノーネ大尉、そしてロランス少尉の3人です。この先、彼らと対決するなら詳しい経験を知つておきたくて……」

「敵を知り、己を知れば百戦危うからずつてヤツか。」

「確かに、大佐もそうだけどあの少尉のことは知つておきたいわね。ヨシュアも言つてたけど、明日の試合が明後日の試合で当たることになるかもしねないし……」

ヨシュアの説明を聞き、ナイアルとエステルは納得して頷いた。

「ナイアルさん、お願ひできますか？」

「……軍には何人か知り合いがいる。機密情報ならともかく、単なるプロフィールだつたら調べてもられるかもしねえ。よし、何とか当たつてみてやるよ」

「サンキュー、助かるわ！」

「よろしくお願ひします。」

「なあに、いいつてことよ。その代わり、お前たちが優勝してグランセル城に招待されたら色々と話を聞かせてもらうからな。」

「やつぱりそう来たか……」

「分かりました。差し支えのない範囲なら。」

ちやつかり交換条件を出したナイアルにエステルは呆れ、ヨシュアはナイアルの交換条件に頷いた。

「…………にしてもこういつちゃあなんだが、優勝は正直難しいと思つぞ？」

「へ、なんで？？」

ナイアルの言葉にエステルは首を傾げた。

「リベルも選りすぐりの正遊撃士のチームに特務兵達、俺達人間とは遙かに身体能力が違う”闇夜の眷属”のチームもそうだが……なんといっても、メンフィルの”霸王”の側室の一人、”戦妃”

カーリアンがいるからな。お前達のチームにあの”不動”がいるとはい、正直勝つのはかなり難しいと思うぜ。」

「実力差が明らかなのはわかっています。でも僕達も依頼の件がありますから、何が何でも勝つてみます。」

「そうよ！それにそんなのやつてみなきやわかんないわよ！」

ナイアルにカーリアンとの実力差を指摘されたエステル達だったが、ヨシュアは決意を持った表情で優勝する事を言い、エステルは強く言い返した。

「はあ……”戦妃”的強さを知らないから、そんな事が言えるんだよ。」

2人の言葉を聞き、ナイアルは溜息を吐いた。

「ナイアルさんはカーリアンさんがどれだけの実力を持っているか知っているのですか？」

カーリアンの強さを知っているように語るナイアルを見て、ヨシュアは尋ねた。

「知っているも何も去年の武術大会の優勝者かつ、”百日戦役”後再開された武術大会に毎年出場して優勝しているメンフィルの皇族だからな。王都に住んでいたら嫌でも噂が聞こえてくるぜ。俺も一度だけ試合を見たが……俺みたいな素人でも次元が違う事ぐらいわかるぜ。」

「毎年優勝つて……凄いと思うけど、相手がそんな大した事ない相手ばかりだつたじゃないの？」

カーリアンの事を語るナイアルにエステルは何気に失礼な事を言った。

「いーや、それはない。なんせモルガン将軍には余裕勝ち、カシウス・ブライトとは激闘の末、あのカシウス・ブライトを地面に膝をつかせたんだからな。」

「ど、父さんを！？」

「それは確かに一筋縄ではいかなさそうですね……」

カシウスまで敗北した事にエステルは驚き、ヨシュアは気を引き締

めた。

「つていうか、父さんってそんなに強いの？？」

「エステル……」

「お前なあ……自分の父親がどんだけ強いか知らないから、そんな事が言えるんだよ……」

カシウスの強さをいまいちわかつていらないエステルにヨシュアとナイアルは呆れて溜息を吐いた。

「はあ……まあいい。とにかくだ。メンフィルの皇族、武官達は桁違いに強い。”姫の中の姫”と呼ばれるプリネ姫でさえ、達人クラスの剣の腕と豊富な魔術が使えると聞くしな。」

「”姫の中の姫”？？何それ？？」

巷に呼ばれているプリネの2つ名を聞いたエステルは首を傾げて尋ねた。

「その名の通り、最も姫らしい女性って事だ。家柄や”聖女”と呼ばれる母譲りの穏やかで優しい性格に容姿も母譲りの上、おまけに文武両道の上、家事能力もかなりのものらしい。他国の貴族や王族達はこぞって縁談を申し込んでいると聞くぜ。」

「プリネってそんなに凄い人だったんだ……そりや確かに女のあたしから見ても、プリネは凄く魅力的って事はわかっていたけど……」プリネの以外な情報を知ったエステルは信じられない様子で呟いた。

「エステル……！」

「へ……？あ、ヤバ！」

うつかりプリネを知り合いのように話すエステルにヨシュアは注意を促し、エステルはヨシュアの意図に気付いてうつかりナイアルの前でプリネの事を話した事を後悔した。

「もうお前達がメンフィルの姫君達と行動している事ぐらいとつくに知っているつーの。」

「あれ？ いつばれたの？？」

エステル達がメンフィルの皇族と共に行動している事に突っ込みます、

すでに知つてゐる風に話すナイアルにエステルは尋ねた。

「ルーアンでお前等と別れてからだ。以前ルーアンでお前達を俺の部屋に泊めた際、お前達言つてただろう。プリネ姫たちの事をメンフィルの貴族だつて。3人共聞き覚えのある名前の上、空賊団のアジトの中で人質達を守つていた3人に対してリシャール大佐やモルガン将軍が最大限に敬意をはらつていたからな。気になつて調べてみたら、案の定メンフィルの貴族どころか皇族に客将じやねえか。……つたく、”姫の中の姫”^{プリンセスオブプリンセス}どころか”聖魔皇女” リフィア姫殿下に”魔弓将” 客将エヴリーヌと行動にしているとか、どれだけ規格外なんだよ、お前達は！」

「あ、あはは……」

ナイアルの言葉にエステルは苦笑した。

「彼女達の正体を黙つていたのは謝ります。でも、両親や彼女達からはなるべく自分達の正体を公にしないでほしいと言われているので、わかつて下さい。」

「へいへい、わかつているよ。さすがに”ゼムリア大陸真の霸者”とも言われているメンフィルの皇族を勝手に取材して、睨まれでもしたら文字通り俺達が消滅しちまうからな。両親の許可もなく勝手に取材なんてできねーよ。」

ヨシュアに頼まれたナイアルは溜息をつきながら言つた。

「それにしても、リフィアやエヴリーヌにもシェラ姉やジンさんみたいな二つの名があるんだ。2人はどういった経緯でそう呼ばれているの？」

エステルはリフィアやエヴリーヌの二つの名の由来が気になつて尋ねた。

「……つたく、せつかく本人達と行動を共にしているんだから、それぐらい聞けば教えてくれるんじゃないか？」

「あはは……さすがに本人達に自分達の二つの名の由来とか聞きにくいやよ。」

溜息を吐いたナイアルの言葉にエステルは苦笑いをしながら答えた。

「……まあいい。二つ名の由来だが……”百日戦役”で2人は戦場での活躍からそのように呼ばれていると聞くぜ。」

「え！？リフィア達、”百日戦役”でエレボニアと戦ったの！？」

リフィア達が百日戦役に参加した事にエステルは驚き、尋ねた。

「エステル。2人は僕達と同じ年に見える風貌だけど、実際2人ともかなり年をとっている事を忘れたのかい？」

「あ……そういうえばそうね。すっかり忘れていたわ。」

ヨシュアの言葉にエステルは頷いた。

「続けるぞ。まず密将エヴリーヌが”魔弓将”と呼ばれた一番の由来は、誰にも見えない神速の弓捌きと強力な魔術で敵対する者達を慈悲もかけない魔王のように全て葬つて来た事から、そのように呼ばれているらしい。」

「確かに彼女の戦い様を見ていたら、そんな風に呼ばれてもおかしくないと思います。」

「そういうえば、エヴリーヌって敵に対しては容赦なかつたわよね。」

それでリフィアは？

「リフィア姫殿下が”聖魔皇女”と呼ばれる由来はずばり、彼女が使つ魔術だ。」

「へ？？」

ナイアルの情報にエステルは首を傾げた。

「……どうか。リフィアは、光と闇。両方の魔術が使えた事ですね。」

ナイアルの言葉から答えを得たヨシュアはナイアルに尋ねた。

「ああ。実際リフィア姫殿下が戦場に出ると、一瞬光が輝いた後エレボニア兵達が消滅したり、暗闇がエレボニア兵達を覆つた後、暗闇が晴れた頃には全員息絶えたと聞くぜ。後は性格だな。」

「性格？」

「リフィア姫殿下は敵国の民も自国の民と同じ扱いをしてい

るが、自分に敵対する者は容赦なく強力な魔術で葬つて行く事から、
そう呼ばれているらしい。」

「そう言えば空賊事件の時も、自国の民でもないボースの人達の事を
凄く親身に考えててくれたわね。」

「優しさと厳しさ、光と闇を扱う皇女……まさにリフィアの事だ
ね。」

過去のリフィアの言動や行動をエステルやヨシュアは思い出し、納
得した。

「ま、そつ言つて。ちなみにリフィア姫殿下もプリネ姫と同じ
ように各国の王族、貴族から山のような縁談が来ていると聞くぜ。」

「…………リフィアは次代のメンフィル皇帝ですからね。彼女の夫にな
れば、相当な地位が約束されますから縁談が山のように来るのは
当然でしょうね。」

「ふえ…………なんだカリフィア達が遠い存在に感じるわ…………」
ナイアルの情報にヨシュアは納得し、エステルは呆けた。

「だから、本来なら俺やお前等みたいな平民がそうそう会えるよう
な人物じゃ、ないつづーの！…………まあ、プリネ姫を含め、2人には
来ている縁談はメンフィル大使　　リウイ皇帝陛下が全て断つてい
るらしいがな。」

「え、そうなの？」

「皇族なら政略結婚が当たり前のに、以外ですね…………」

リフィア達の縁談を肉親であるリウイが全て断つている事を知り、
エステルとヨシュアは驚いた。

「ああ。エレボニアの帝位継承権が最も高い第一皇子の縁談も、に
べもなく断つたのはその業界では有名な話だぜ。」

「あ、あんですって！」

「あのエレボニアもメンフィルとの関係をなんとか繋ぎを持ちたい
んですね…………」

エレボニアの皇族の縁談まで断つた事をナイアルから聞いたエステ
ルは驚き、ヨシュアはエレボニアの思惑に驚いた。

「それで毎回断つている理由が2つあるんだが……一つは聞くと驚くぜ。」

「それってどんな理由？もつたいぶらないで教えてよ。」

エステルは期待を込めた表情でナイアルに続きを促した。

「一つ目の理由はプリネ姫達の夫になる条件が”闇夜の眷属”か”神格者”っていう奴である事だ。俺はこの2つの共通点がサッパリわからねえがお前達はわかるか？」

「うーん……共通点ねえ……ダメだわ。全然わからないわ。」

ナイアルに尋ねられ、エステルは考えたが思い浮かばなかった。

「……そうか。寿命の問題だよ、エステル。」

「……あ！ そうか！ そういう事ね！」

「ん？ どういう事だ？ 僕にも教えるよ。」

理由がわかつた風に見えるヨシュアとエステルにナイアルは興味津々で尋ねた。

「その前に確認したいのですが……ナイアルさん。”闇夜の眷属”達は僕達人間と遙かに寿命が違う事は知っていますか？」

「ああ。それは話に聞いた事がある。”神格者”っていうのはどういう意味か、サッパリわかんねえんだ。知っているのなら教えてくれるか？」

”神格者”っていう存在は不老不死の存在つてリフィア達から聞いたわよ。」

「…………？」

エステルの説明にナイアルはしばらくの間、呆けた。そして我に返つてエステル達に強く尋ねた。

「…………って、それ、マジかよ！」

「はい。母が”神格者”であるプリネから、そう聞きました。」

「プリネ姫の母親つて……”闇の聖女”か！…………それは

驚きの情報だぜ。道理で年をとっている風に見えない訳だぜ……」

「あたしもそれを聞いて、最初驚いたわよ。あたし達よりちょっと

上ぐらいにしか見えないのに、100年以上生きているらしいわよ
?」

「あの外見でか……異世界っていう場所はなんでもありなんだな
……」

ペテレーの風貌と年齢が合わない真の理由を知ったナイアルは呆
けた。

「ねえねえ、それよりもう一つの理由って何??」

「それなんだが……プリネ姫達の夫はプリネ姫達自身が選んだ男し
か、認めるつもりはないそうだぜ。」

「へ？ それって普通に恋愛して結婚するだけじゃない。 それのどこ
がおかしいの??」

もう一つの理由を知ったエステルは自分達にとつては当たり前の事
に首を傾げた。

「エステル……王族の女性っていうのは普通、政略結婚かお見合
いで結婚するのが当たり前なんだ。」

「そうなの！？」

ヨシュアは呆れて溜息を吐き、理由を話した。理由を知ったエステ
ルは驚いた。

「まあ、そういうことだ。……にしてもわざわざ寿命の事まで考え
るとか、エレボニアからは”魔王”と恐れられている割には案外、
娘達には甘いんだな……」

「そつかな？あのリウイって人、近寄りがたい雰囲気を持っている
けど、優しい雰囲気もあるように感じたわよ。」

「ハハ……そんな事を言えるのはエステルだけだよ……」

「…………ハ…………？」

自分一人だけ納得しているエステルにヨシュアは苦笑し、ナイアル
は口に咥えていた煙草を床に落とした。

「…………そうだ！すっかり忘れていたぜ！ そういうえばジェニス王立
学園でリウイ皇帝陛下とお前、共に親衛達達と戦つてたじやねえか

！ダルモア市長逮捕の件ですっかり忘れていたぜ！」

「あ、リウイとの共闘の事？別に大した事じゃないわよ。」

「”霸王”を呼び捨て！？お前、自分が何を言っているのかわかつているのか！？」

エステルがリウイの事を呼び捨てにしている事にナイアルは声を上げて、驚いた。

「別にそんなに騒ぐような事じゃないでしょ？あの時のリウイはメンフィルの王様じゃなくて、プリネのお父さんとして戦つていただけと思うわよ？あたしにとつてはあの後、プリネに連れられて闇の聖女様と直接お話しが出来た事が今までの旅で一番重要な出来事だったわ～。」

「それだけじゃないだろ？エステル？”癒しの聖女”さんとも出会えた事も十分凄いと思うけど……」

「あ、ティアさんね！今頃何をしているのかしら？」

「……もういい。これ以上聞くと眩暈がしてくる上、心臓に悪い。カレーとコーヒー代は払つておくから、先に出るぜ。……何か進展したら、教えてやる。」

エステル達の会話から次々と信じられない人物の名前が出て来て、エステル達の会話があまりにも信じられない内容ばかりで眩暈がしたナイアルは立ちあがつて、会計を済ませてフラフラとカフェを出て行つた。

「ナイアルの奴、寝不足なのかな？あんなフラフラして、大丈夫かしら？」

（さすがのナイアルさんもメンフィルの重要人物の事を気軽に話すエステルについていけないか……）

出て行つたナイアルの様子にエステルは首を傾げ、ヨシュアは心中でナイアルを哀れんだ。

その後、エステル達はホテルに戻つて早めに休むことにした。そして次の日…………！

1300

第125話（後書き）

なんか、プリネを凄い躊躇してしまった気分です。
ちしております。感想お待

翌日、ジンとオリビエと合流したエステル達はリフィア達やプリネ達と共にアリーナに向かった。

～グラランアリーナ・ホール～

「では余達はミント達と共に観客席でお前達を応援する。……余直々が応援するのだ。絶対に勝ち残るのだぞ！？」

「当然よ！」

「はい、ありがとうございます。」

リフィアの応援の言葉にエステルとプリネは頷いた。

「あの……がんばって下さい、『主人様。』

「フフ……ありがとうございます、ツーヤ。」

「がんばってね、ママーミント、一杯応援するね！」

「ありがとうございます、ミント。」

ツーヤとミントの応援の言葉にプリネとエステルは微笑んだ。

「よし、それでは観客席に行くぞ。」

「ん。」

「はい。」

「はーい！」

そしてリフィア達は観客席に向かった。リフィア達を見送ったエステル達は控室に向かおうとした所

「あ～、エステルちゃんたちだ！」

「あ、ドロシーじゃない！」

ドロシーがエステル達を呼び止めた。

「エステルさん、私は準備やペルル達と戦いの前の打ち合わせをしたいですから、先に行つてますね。」

「うん。」

そしてプリネは控室に向かった。

「お久しぶり……って言つぽどでもないですね。ツアイスで会つて以来ですから。」

「ホントにそうだね～。また生きて会えるなんて夢にも思つてなかつたよ～。エスティルちゃんたち、工房船に乗つて危ない所に行こうとしてたみたいだし～。」

「危ない所……？」

「ほほう、興味深い話だねえ。」

ドロシーの言葉にジンは首を傾げ、オリビエは目を光らせた。

「あわわ、ドロシー！その話はまた後でつてことだ。」

ドロシーの言葉に反応したジンとオリビエを見て、エスティルは慌てて続きを言わせるのを止めた。

「ほえ……？そりゃいえば、そこの人たちどこかで見たことがあるようだな～。」

一方ドロシーはジンとオリビエを見て、見覚えのある人物達である事に首を傾げた。

「フツ、一度ボースの街でお田にかかつたことがあるね。また会えて嬉しいよ。ユニークでチャーミングなお嬢さん。」

「俺の方とは、温泉の近くで一度すれ違つたことがあつたな。」

「ああ～、思い出しましたあ～！ワイン飲み逃げ事件の犯人さんと東方風のカツコした熊さんです！エスティルちゃんたち、この人たちと武術大会で一緒に戦つてるの～？」

オリビエとジンの言葉で思い出したドロシーは声をあげた後、エステル達に尋ねた。

「うん、やうよ。」

「この辺のジンさんにお願いして本戦から参加しているんですね。そういうえば、ドロシーさん。今日は取材に来たんですか。」

「うん～、昨日までは別の取材をしてたんだけどね～。今朝、ナイ

アル先輩に会つてエステルちゃんたちが武術大会に出ることを教えてもらつて。でも、先輩が言つてた通りかなり強そうなチームみたいね。これは良い写真が撮れそうかも。」

「あはは、期待してるわ。あれ……そういうえばナイアルは一緒にじゃないの？」

いつもいつしょにいるナイアルがいない事に気付いたエステルはドロシーに尋ねた。

「うん、なんだか大事な調べものがあるみたいでね。昨日は徹夜で資料と格闘してたみたいだし。今日は、昔の知り合いと会つて話をするんだって。」

「そつか……」

早速情報部について調べてくれているナイアルにエステルは心の中で感謝していた。

「あ、そうそう、先輩から、エステルちゃんたちに伝言があるの。今日の夕方くらいに編集部に来て欲しいんだって。なんか、大切な話があるみたいよ？」

「ん、わかった。」

「試合が終わつたら伺います。」

ドロシーの伝言にエステルとヨシュアは頷いた。

「大切な話……なんだかお安くないねえ。気になるなあ。『ロゴロロ、うにゃああん。』

「ちょ、ちょっとダメだつてば。オリビエには関係ない話なんだかちやつかり首を突つ込もうとしているオリビエにエステルは慌てて止めた。

「ひどいわっ、エステル君！ 昨日はあんなに激しく（試合で）燃えたのに！ 必要がなくなつたら『ロミ』のように捨てるのねっ！」
「だから、誤解を招く言い方はやめい！」
「はわわ～、エステルちゃん。いつのまにそんなオトナにな～？」
「あなたも信じるなっちゅーの～」

オリビエの人が聞いたら誤解するような言い方と、それを信じているドロシーにエステルはすかさず突っ込んだ。

「あ、それじゃあわたし、撮影ポジションを確保するから観客席の方に行くね。エステルちゃんたちのこと、応援しまくるから頑張つてね。」

そしてドロシーは観客席に向かった。

「なんというか……ユニークな嬢ちゃんだなあ。」

「はふ～っ……。オリビエとドロシーが揃うと2乗で疲れるような気がするわ……」

ドロシーが去った後、ジンは感嘆の声をあげ、エステルは疲れてゲッソリした。

「ハツハツハツ。試合前の緊張がほぐれたといつことで。」
疲れているエステルを見て、オリビエは人ごとのように笑つて言った。

「ドロシーさんは、カメラマンとしてかなりの腕前の持ち主みたいですよ。最近の『リベルル通信』の写真は彼女が撮った物ばかりだそうですから。」

「ほう、そりや凄いな。だつたら、そのカメラの前でブザマな戦いは見せられねえな。」

ヨシュアが話したドロシーに関しての情報を聞いたジンは氣を引き締めた。

「うん……確かに。誰と当たるかは判らないけど気合を入れるしかないわねっ！」

そしてエステル達は控室に向かった。

→グラランアリーナ・選手控室

控室に入るとそこには使い魔達を召喚したプリネ達がいた。

「あ、プリネ。」

「あら、みなさんもこちらの控室だつたんですね？」

プリネがいる事にエステルは驚き、プリネは尋ねた。

「うん。…………それにしてもプリネ達がここにいるって事はもしかしたら、明日の決勝戦で戦うかも知れないわね。」

「フフ、そうですね。その時はお互い、全力を出し合つて試合にしましようね。」

「うん！」

プリネとエステルが会話をもりあがつている所、試合開始のアナウンスが入った。

「皆様……大変長らくお待たせしました。これより武術大会、本戦2日目を始めます！早速ですが、本日最初の第五試合のカードを発表します。南、蒼の組 カルバード共和国出身。武術家ジン以下4名のチーム！北、紅の組 遊撃士協会、グランセル支部。クルツ選手以下4名のチーム！」

「来たつ！しかもカルナさんたちが相手だわ！」

「……強敵だね。僕たちが、ジンさんの足を引っ張らないようにしないと……」

クルツ達が相手と知つたエステルは目を輝かせ、ヨシュアは気を引き締めた。

「そう慎重になることはないさ。お前たちの実力はじゅうぶん正遊撃士に迫つてる。後は勝とうといつ氣合いだけだ。」

「うんつ！」

「頑張ります！」

「フツ……。いざ行かん、戦いの園へ！」

「みなさん、頑張つて下さい！」

「がんばつてね、みんな！」

「勝利を……祈っています……」

「ま、せいぜい頑張りなさい。」

プリネ達の応援の言葉を背に受け、エステル達はアリーナに向かつた

感想お待ちしております。

～武術大会・2回戦～前篇（前書き）

現在、決勝戦の中盤を書き終わる所です。後少しで武術大会編が終わる……！

「グラニアリーナ」

「来たね。エステル、ヨシュア。」

「新人君たち、やつほー！」

エステル達と顔を合わせたカルナは不敵な笑みを浮かべ、アネラスは元気良く言つた。

「えへへ。どーも、先輩たち。」

「胸を貸していただきます。」

エステルとヨシュアは軽くお辞儀をした。

「『不動のジン』……あんたとは一度やり合つてみたかったんだ。どれほどの腕かこの剣で確かめさせてもらうぜ！」

「フフン、いいだろう。こちらも全力でいかせてもらう。」

不敵な笑みを浮かべているグラツィにジンも不敵な笑みで返した。
「はは、出来れば決勝戦で戦いたかったものだが……。ここで当たつたのも運命だろう。」

「片や、ベランの遊撃士集団。片や、注目の新人コンビと武術家ブレイサーと天才演奏家との混合チーム。どちらが勝つかは女神達のみぞ知る、だね。」

決勝戦でエステル達と当たらなかつた事にクルツは苦笑し、オリビエはいつもの調子で言つた。

「これより武術大会、本戦第五試合を行います。両チーム、開始位置についてください。」

審判の言葉に頷き、エステル達とクルツ達両チームはそれぞれ、開始位置についた。

「双方、構え！」

両チームはそれぞれ武器を構えた。

「勝負始め！」

そしてエステル達とクルツ達は試合を始めた！

「みんな、後輩が相手とはいえ、あの”不動”がいるんだ！油断はするな！」

「はい！」

「ああ！」

「おう！」

クルツの号令にアネラス達はそれぞれ頷いた。

「方術……貫けぬこと鋼の如し！」

そしてクルツは東方に伝わる術 方術を使った。クルツの方術が発動すると、アネラス達に薄い光の膜が覆つた。

「あれが、東方に伝わる”方術”か。いきなり防御力を固めるなんてやつかいだね。」

クルツの方術に感心したヨシュアは双剣を構えながら、隙を狙つていた。

「ふむ。なら俺は東方出身として、”氣功”を見せてやろう。」

そしてジンはその場で精神統一をした。

「ぬあああああ、てやあ！」

氣功によって自らの身体能力を上げるクラフト 龍神功を使つたジンは全身に鬪気を纏つた。

「ほう……これが東方に伝わる”氣功”か……」

「凄い鬪気……！」

オリビエはジンの氣功に感心し、エステルはジンがさらけ出している鬪気に驚いた。そしてアネラス達は攻撃を仕掛けた来た！

「おらつ！」

「たあつ！」

グラツの大剣での攻撃にジンは籠手で対抗し

「はいっ！」

「せいっ！」

アネラスの刀での攻撃はヨシュアは双剣で防御し

「はあつ！」

「やつ！」

クルツの槍での攻撃は同じリーチの長いエステルの棒が防いだ。

「これはどうかな！？ それっ、クイックドロウ！！」

オリビ工は乱戦状態になっている中、味方のエステル達には当てず、精密な射撃でクルツ達にクラフトを放った。

「くつ」

「きやつ！」

「うつ！」

方術で身体を強化しても、身体に伝わる僅かな痛みにクルツ達は顔を顰めた。

「せえええい！」

「くつ！？」

そこにすかさずジンは突進力を利用して放つ拳のクラフト　月華掌を放つて防御したグラツツを吹つ飛ばした。

「はつ！」

「はあああああ！」

「きやつ！？」

「うつ！？」

同じようにヨシュアはクラフト　絶影をアネラスに、エステルは旋風輪をそれぞれが相手にしている者に放つた。2人の技を受けたアネラスとクルツは一端下がった。

「やるじゃないか…………けど、これならどうだい！？ 降り注げ炎の槍！…………スパイラルフレア！！」

「きやつ！？」

「くつ！？」

「ぐおつ！？」

後方から放つたカルナのアーツにエステル達はダメージを受けた。

「方術……

穏やかなること白波の如し！」

エステル達が攻撃を受けている間にクルツは方術を使って、自分達の傷を回復させた。

「んつふふ～、愛と真心を君たちに！それっ！」

エステル達への攻撃が終わるとオリビエは懐からバラの束を取り出し、それを空中に放り投げて銃で狙って撃つた。するとエステル達の傷が回復した。

「ありがと、オリビエ。……でも、今のでどうやってあたし達を回復させたの？」

傷を回復してくれたオリビエに礼を言つたエステルはオリビエの技に首を傾げた。

「フフ……今の技はハッピートリガーと言つてね。ボクの愛と真心を君達にあげる事によって、君達の傷を回復させるのさ！」

「何ソレ……」

「意味不明の謎の技ですね……」

酔いしれつているように説明するオリビエをエステルはジト目で見、ヨシュアは呆れた。

「まあ、実際回復したから細かい事は気にするな。……それより今はクルツ達だ。」方術”を使っての突撃攻撃……予想以上にやつかいだな……」

エステル達の会話を笑い飛ばしたジンは武器を構えて、今にも突撃してきそうなクルツ達を見て言った。

「ボーッとしている暇があると思うかい！？もう一発行くよー！？」

カルナはまたアーツを発動しようとしたその時

「ふつ、これは避けられまいっー！」

「ちつ！？」

オリビエが放つた精密な射撃クラフト　スナイプショットがカルナに命中し、カルナのアーツが中断された。

「おおおおー！」

「くつー？」

「きやつ！？」

「何！？」

「体が……動かない！？」

そこにはかさずヨシュアがクラフト 魔眼を放つて、クルツ達の動きを止めた。

「エステル！」

「わかつてる！」

ヨシュアの呼びかけに呼応したエステルは魔術の詠唱を始めた。

「武器の攻撃は効きにくいみたいだけど、魔術はどうかしら！？…

……風よ、切り裂け！旋刃！！」

「ぐつ！？」

「あうつ！？」

「くつ！？」

「くつ……まさかショラザード以外の遊撃士が”魔術”を使うとはね……」

エスティルの魔術に魔法攻撃に対する防御を強化していないクルツ達は呻き、カルナは痛みに顰めながらエステルを見た。

「とりやつ！」

痛みを耐え、武器を構えたクルツ達に向かつてジンは空高くヘジャンブし、クルツ達の中心に落ちて来た。

「せえええい！」

「くつ！？」

「あうつ！？」

「！！」

「ちつ！？」

天高くへ飛び上がり雷光のような蹴りを繰り出すジンのクラフト

雷神脚をグラツツ達は受けてしまつたが、逸早くジンの攻撃に気付いたクルツは回避に成功した。

「フツ、先ほどのアーツのお返しだ！……怒れる大地よ、震動せよ

！……タイターックロア……

「ぐつー？」

「く……そ……」

「きゅう~。」

「ち……このあたしが……」

オリビエが放った地属性最強であり、全体攻撃のアーツ タイタニックロアを受けてしまったクルツ達のチームはクルツを残して全員戦闘不能になつた。

「よし、これで後はクルツさんだけね！」

「フ……それはどうかな？」

エスティルの言葉にクルツは不敵な笑みを浮かべて答えた。

「エステル、油断はしたらダメだ！一気に決めるよ！」

「オッケー！」

ヨシュアの言葉に頷いたエステルはヨシュアとの一斉攻撃でクルツを攻撃しようと、クルツに向かつて走り出しが

「方術……返り咲く」と風花の如し…

「へつー？」

「…やはり…！」

クルツの放つた方術によつて、戦闘不能になつたアネラス達が立ち上がつた。

「くつ……わつときはよくもやつてくれたな。お返しだ！喰らえ！
グラッジスペシャル！」

「行くよつ……剣風閃！…はいつーはいつーはあいつー

「きやつー？」

「くつ……！」

グラッジとアネラスの反撃にエステルとヨシュアは苦悶の声を上げた。

「これでとじめだつ！降り注げ……」

「ふつ、そうはさせないよー！」

「ちつ！？また、あんたかい！」

エステル達に止めをさそとしたカルナはアーツを発動しようとしたがオリビエのクラフト　スナイプショットに妨害されて、発動できなかつた。

「せえええいつ！雷神脚！！」

「ぐおつ！？」

「あうつ！？」

さらにジンがクラフトを放つてグラツチとアネラスに攻撃を仕掛けた。傷がまだ完全に治りきっていないグラツチとアネラスはジンのクラフトを受けた痛みで顔をしかめて、一端下がつた。

「2人とも、援護ありがとう！」

「助かりました。」

エステルとヨシュアは援護してくれたオリビエとジンにお礼を言った。

「何、気にするな。」

「ハツハツハ！そんなに感謝しないでくれよ。照れるじゃないかジンは何でもない風に返し、オリビエは笑いながら答えた。

「方術……穏やかなること白波の如し！」

そしてまたクルツの方術でアネラス達は回復した。

「うげつ……また回復されたわ……」

「まず、クルツさんを何とかしないと駄目だね。」

回復していくアネラス達を見て、エステルは溜息を吐き、ヨシュアは真剣な表情でクルツを見た。

「ならこつちも万全の状態にしておかないとな。…………おおおお

おおおおお……養命功！！」

「大いなる癒しの水よ……ティアラル！！」

ジンは氣功でヨシュアを、オリビエはアーツでエステル達の傷を回復した。

「ありがとうございます。」

「助かつたわ。よし、傷も回復した事だし反撃開始と行きますか！」

「待つて、エステル。まず、クルツさんを何とかしないと。」

意気揚々と武器を構えるエステルにヨシュアは制止の声をかけた。

「そうね。…………ねえ、みんな。カルナさん達をしばらくの間、引きつけられる？魔術を使って、なんとかして見せるわ！」

「了解。」

「フツ、心得た！」

「期待しているぜ！」

エステルの言葉にヨシュア達は頷いて、攻撃を仕掛けでこようとするアネラス達にそれぞれ相手をした。そして中衛の位置で現状を見ていたクルツはエステルがオーブメントを駆動している事に気付き、妨害するためにクラフトを放った。

「方術…………夢幻の如し！」

（よし、クルツさんがわたしに狙いをつけた！…………チャンス！
！）

頭上に落ちてくる方術によつてできた槍に気付いたエステルはオーブメントの駆動を止めて、急いで回避して魔術を放つた！

「大地の力よ、我が仇名す者の力を我の元に……！地脈の吸收！！」

「！しまつた！アーツは囮か！」

エステルが魔術を発動させた事に気付いたクルツは顔をしかめて、どこからでも魔術が来ていよいよ最大限に警戒をはらつた。するとクルツの足元から木の根が生えて、クルツの体中に巻き付いた。

「くつ！…………まさか下からは……！」

「ジンさん、今！」

「応！……たあつ！！」

「ぐあつ！？」

エステルの呼びかけに答えたジンは普段の攻撃よりさらに力を入れたパンチでグラツツをオリビエと攻防を続けているカルナの元まで

ふつ飛ばし、木の根がからみついてもがいているクルツへSクラフトを放つた！

「もうったあーはあっ！でやあああーはあっ！でやっ！たあっ！」

「ぐあああああつー？」

強烈な蹴りを連続して放つジンのSクラフト 龍閃脚を受けたクルツは大ダメージを受け、悲鳴を上げた。そしてジンの攻撃が終わるとクルツに巻き付いている木の根が光った！！

「ぐああああつー？ち、力が……む、無念……」

木の根に残っている体力を全て吸い取られたクルツは木の根がなくなると、その場に蹲つて立ち上がらなくなつた。そして木の根は光となつて、エスティルの体に入り、エスティルを回復させた。

「よし、クルツさんを倒したわ！」

クルツが戦闘不能になつた事にエスティルは嬉しさの声を上げた。

「くつ、まさかクルツがやられるなんてー？」

カルナは戦闘不能になつたクルツを見て、信じられない様子でいた。

「俺がクルツにセラスの薬か血廉の滴を使うー！アネラス、お前は魔術を使うやつかいなエスティルを何とかしろつー！」

「了解ですー！」

グラツィの言葉に答えたアネラスはエスティルに攻撃を仕掛けに行つた。

「待ちなつー！不用意に動くんじゃ……！」

アネラスに制止の声をかけようとしたカルナだつたが

「お見せしようー！美の真髄をー！ハウリングバレットーー！」

カルナがオリビエに攻撃するのをやめた隙を狙つて、オリビエはSクラフトを放つた！

「ぐあああああつー？…………あたしとした事が…………」

オリビエのSクラフトを受けてしまつたカルナは戦闘不能になつてしまつた。

「くつ…………カルナまで…………待つてろ、クルツが復活さえすれば

……！」

「させません！」

「くつ、ヨシュアか！」

クルツの元に駆け寄る途中でカルナが戦闘不能になった事に気付いたグラツツは急いでクルツを回復させようとしたが一瞬で距離を詰められたヨシュアに道を阻まれた。ヨシュアを見てグラツツは顔をしかめた後、大剣でヨシュアを攻撃したがヨシュアは回避をし、Sクラフトを放つた！

「いくよーふん！はつ…………はつ…………セいやつー！」

「ぐつ！？しまった…………」

Sクラフト 断骨剣を全て受けてしまったグラツツもまだ跪き、立ち上がりなくなつた。

「どうやら警戒すべきなのはジンさんではなく、貴女だつたようね。エスティルちゃん！」

味方全員やられた原因の全てがエスティルの魔術から始まつた事を悟つたアネラスは刀を構えて、エスティルに言つた。

「あはは…………まあ、アネラスさん達があたしが魔術を使えるのを知らなかつたから仕方ないわよ。」

「フフ、まあそれもあるね…………でも、やられっぱなしでは先輩として黙つていられないよ！行くよ、剣技　　ハ葉滅殺ッ！」

アネラスは強烈な連撃のクラフト　　八葉滅殺をエスティルに放つた！

「まだまだまだまだまだあつー！」

「くつ…………」

強烈な連撃をエスティルは棒で防ぎながら、反撃の機会を窺つた。

「とじめつー！」

(今ーー)

連撃が終わり、飛び上がつたアネラスを見てエスティルは攻撃の構えをした。そしてアネラスの落ちてくる速度を利用した攻撃を回避した。

「えつ、嘘

とつておきの一撃が回避された事にアネラスは驚いた。

「これで決めるつ！ 桜花！ 無双撃！ はああああああああ！ せい、や

「……………」

そしてエスティルのスクラフトを受けて、アネラスも戦闘不能になつ

「勝負あり！蒼の組、ジンチームの勝ち！」

そして審判はクルツ達の状態を見て、エステル達の勝利を宣言した

～武術大会・2回戦～前篇（後書き）

最初はクルツ達をリフィア達が破つて、エステル達と戦うネタも考えていたのですが、さすがに邪龍討伐の英雄が2人も相手ではキツイかなと思ってやめました。……感想お待ちしております。

「グラシアーナ・観客席」

「やつた―――！また、ママ達が勝った！！」

エスティル達の勝利にミントは大喜びをした。

「カルナさん達に勝つなんて凄いね、エスティルさん達。」

エスティル達の強さに頷いたツーヤは真剣な表情で空を見ているリフィアとエヴリースに気付いた。

(……エヴリース、気付いているか?)

(ん。この気配は”天使”だね。しかも結構力のある奴だね。……)

なんで、この世界にいるのかな?)

(ああ。…………どうやら行つたようだな。何をしに来たのだ???)

2人は天使が何をしに来たのかわからず、揃つて首を傾げていた。

「あの…………どうかしたんですか?」

「ん?ああ。プリネ達の相手の事を考えると…………な。」

「残つているのはエヴリース達に勝つたあいつとあの変な仮面を被つた隊長のチームだけだからね。」

「あ…………」

話を誤魔化すリフィアとエヴリースの言葉にツーヤはプリネ達の相手が簡単に勝てない事を悟つた。

「そんな顔をするな。カーリアンはともかく、情報部相手ならプリネ達の敵ではない!」

「ん。エヴリースやお兄ちゃん達が一杯鍛えてあげたから、大丈夫だよ。」

心配そうな顔をしているツーヤにリフィアとエヴリースは元気づけた。

「ツーヤちゃん。ツーヤちゃんがそんな顔をしていたら、プリネさんに心配をかけてしまうよ?」

「…………やうだね。ありがと、ミントちゃん。リフィアさんとH
ヴリークさんもありがとうござります。」

ミントの言葉にツーヤは表情を和らげ、笑顔でミント達にお礼を言
つた。

「えへへ、お友達を元気づけるなんて当たり前だよ。」

「うむ！パートナーとしてプリネの事を、しつかり応援してやれ！」

「はいっ！」

そしてリフィア達はプリネ達の出番を待つた。

→グランアリーナ

「クッ……見事だ。」

「『不動のジン』……まさかここまで凄腕とは……」

跪きながらクルツとグラツはジンに称賛の言葉を贈った。

「お前さん達もさすがに手強かつたぜ。エステル達がいなかつたら
俺も勝ち田は無かつただろうな。」

称賛の言葉を贈られたジンは逆にクルツ達を称賛した。

「はあはあ……。あたしたち、勝つたの……？」

「うん、何とか……。足を引っ張らずにすんだね。」

エステルは息を切らせながら自分達がクルツ達に勝つた事に信じら
れないでいないとこりを、ヨシュアが肯定した。

「ふふ……。謙遜するんじゃないよ……。ジンの旦那もそうだがあ
んた達も充分手強かつた。特にエステル。魔術の腕だけならシェラ
ザードと並ぶと思うよ。」

「あはは……。あたしはシェラ姉みたいな強力な魔術は使えないわ
よ。使える属性の数でカバーしているようなもんだし。」

カルナの称賛にエステルは謙遜した。

「ふう、さすがはシェラ先輩の教え子だな……。それに、そこ
のお兄さんがそこまでやるとは思わなかつたよ……」

「フツ、お嬢さんの方もなかなか痺れさせてもらつたよ。よければ

試合の後にお互いの強さを讃えて乾杯でも……

「えーかげんにしどきなさい！」

場所を考えず、いつものようにアナラスをナンパしようとするオリビエをエステルは注意した。そしてエステル達は控室へ戻つて行った。

一方グランアリーナの空高くから、リフィア達が感づいた天使ニル・デュナミスがエステル達の試合を観戦し、試合が終わり退場して行くエステルを注視していた。

「…………あの子がエステル・ブライトか…………あの年齢にしては中々の腕を持つていいようだけど……フフ、明日の決勝戦後、折りを見てニル自らあの子に挑んでニルを従える器であるかどうかを見極めさせてもらいましょう。」

ニルは口元に笑みを浮かべた後、どこかへ飛び去った。

→グラ兰花リーナ・選手控室

「みなさん、決勝進出おめでとうございます！」

「おめでとう……『じやこ』ます……」

「おめでとうー！」

「…………中々やるではありますまんか。”炎狐”が認めるだけの強さはありますね。」

エステル達が控室に戻るとプリネ達が称賛の言葉を贈つた。

「ありがとう、みんな！……あれ？ そう言えばプリネ達を含めて試合をしていないのは3チームになっちゃったけど、どうなるんだろう？」

「その事は私も気になつて、受付の方に聞いたら今から行われる私達と当たるチームの試合が終わつて、休憩の時間をしばらく入れて、私達と当たつたチームの勝者のチームが残りのチームと試合をするそうです。」

プリネは首を傾げているエステルの疑問に答えた。

「という事はプリネ達が勝つたら、1日の間に2試合する事になるのか……体力とか大丈夫なのかい？」

「フフ、心配をしてくれてありがとうございます、ヨシュアさん。……でも大丈夫ですよ。体力も十分鍛えていますから。」

ヨシュアの心配をプリネは微笑みながら答えた。

「ハハ……連戦の心配をするのも結構だが、とりあえず、まずは一勝する事だ。」

「貴女達の勝利を祈っているよ、レディ。」

「フフ、ありがとうございます。」

「絶対勝とうね、プリネ！」

「プリネ様の勝利のために……全力を……出させて……頂きます……」

「精霊王女であるこの私がいるのです！敗北なんて、ありえませんわ！」

その時、次の試合のアナウンスが入った。

「続きまして、第六試合のカードを発表させていただきます。南、蒼の組 メンフィル帝国出身。旅人プリネ以下4名のチーム！
北、紅の組 王国軍情報部、特務部隊所属。ロランス少尉以下
4名のチーム！」

「あいつらが相手か……プリネ達が相手にするのは初めてだけど、大丈夫と思うわ！」

「隊長にだけは気を付けて。彼さえ自由にさせなかつたら勝機は必ずあると思う。」

「ええ。他の特務兵達はペルル達に任せて、あの仮面の方には私自ら相手します。」

ヨシュアの忠告にプリネは真剣な表情で頷いた。そしてプリネの号令を待つてペルル達の方に向いた。

「みなさん、行きますよー。」

「うん！」

「了解です……」

「ええ！」

そしてプリネ達はアリーナに向かつた。

「グラントアリーナ」

「　　」「　　」「　　」「　　」「　　」

（…………？殺氣…………？何か恨まれるような事をしたかしら？）

プリネ達と顔を合わせた特務兵達はロランスを除いて、殺氣を纏つた怒りの表情でプリネ達を睨んでいた。特務兵達の殺氣にプリネは首を傾げていた。

（お前達、気持ちはわかるがそつ殺氣立つな。あの少女が何者か知つていいだろ？）

（ですが、少尉！奴らは我らが同士の仇の娘なんですよ！？）

（だからだ。よしんばここでお前達の恨みがはらせても、その後はどうする。大佐が事を為すまで、メンフィル帝国に睨まれる訳にはいかないだろ？）

（（（（…………）解…………）））

（…………なるほど。そう言えばルーアンの時の特務兵達は拷問で……）

ロランスと特務兵達の小声の会話が聞こえたプリネは納得した。

「…………部下達が無礼を働いてしまって、申し訳ない。姫の中の姫。プリンセスオブプリンセス」

「…………いえ。事情は察していますので気にしないで下さい。…………それに”その程度”の殺氣ぐらいでは恐怖は感じませんので、ご安心を。」

ロランスの言葉にプリネは微笑みながら特務兵達を挑発した。

「なんだと…………！」

「我等を侮辱するか…………！」

「どうやら痛い目に遭いたいようだな……！」

プリネの言葉に特務兵達は逆上して、プリネを睨んだ。

「やめろ、お前達。…… フフ、”剣聖”の上をも行く”剣皇”の

”息女である貴女との手合わせも楽しみにさせて頂きました。」

「……私をお父様と同じに見られても困るのですが。……期待

に沿えるよう、全力で行かせて頂きます。それより一つ聞いていい

ですか？」

「なんなりと、私で答えられるような事でなら。」

プリネに尋ねられたロランスは口元に笑みを浮かべながら頷いた。

「貴方、私どこかで…………… いえ、今の質問はな

かつた事にして下さい。」

「わかりました。……………（何故だ。何故、”あいつ”と同じ霧囲気を……………）」

ロランスはプリネが纏っている霧囲気に表情に出さないよう、驚いていた。

「これより武術大会、本戦第六試合を行います。両チーム、開始位置についてください。」

審判の言葉に頷き、プリネ達とロランス達両チームはそれぞれ、開始位置についた。

「双方、構え！」

両チームはそれぞれ武器を構えた。

「勝負始め！」

そしてプリネ達とロランス達は試合を始めた！

この戦いが修羅の道を行く青年と優しき闇の少女の、運命の邂逅となつた……！

第127話（後書き）

ところで、ついで軌跡ファンも期待していたであろう、レーヴェとプリネがついに邂逅しました！ちなみにこの試合は2話に分けてるので、楽しみにしていて下さい！後、お気づきと思いますがエステルの4体目の使い魔は今までのようになり、会っていきなり契約という訳ではありません。次はテイルズ伝統の契約の仕方になると思います……感想お待ちしております。

～武術大会・2回戦～中篇（前半）

「グラシアリーナ」

「…………特務兵の中でも選りすぐりの兵である事を、闇夜の眷属達に思い知らせてやれ。」

「――ハツ！」

ロランスの言葉に特務兵達は威勢良く答えた。

「…………仮面の男は私が抑えます。みなさんは予選通り基本、各個撃破で。ですが、誰かが窮地に陥ついたら援護を忘れぬよう、お願いします。」

「わかった！ボクに任せて！」

「了解…………しました……」

「フフ…………誰に言つているのですか？私がいるのですから、敗北等ありえませんわ！」

プリネの作戦にペルルやマーリオンは頷き、フィーリィは胸を張つて答えた。

「期待していますよ。…………来ます！」

使い魔達の頼もしい言葉にプリネは微笑んだ後、自分達に攻撃を仕掛けてくる特務兵達に気付いて、真剣な表情でレイピアを構えた。

「えいっ！」

「せん！」

「水よ、行け…………！」

「――」

「行きなさい…………粒子弾！！」

「ハツ！」

ペルル達の攻撃を特務兵達はそれぞれ回避した。そしてそれぞれペルル達に向かつて、攻撃を仕掛けた。

「――行くぞ…………影縫い！！」「――」

「つづー」

「…………！」

「させませんわ！」

突進力を利用し、さもざまな状態異常を起こす特務兵達のクラフトをペルルは翼で、マーリオンは水の結界で、フィニーリイは槍で防御した。

「援護します！……戦士の付術！！魔術師の付術！！！」

ペルル達の後方にいたプリネは魔術でペルル達の能力を強化した。

「さて…………お手並み拝見だ。銀の楔よ…………我が敵を滅せよ…………シルバーソーン！！！」

攻防を続いている特務兵とペルル達を見たロランスが放ったアーツはプリネを閉じ込めるかのように次々と上空から宝石のついた銀色の楔が降って来た。

「！！！」

嫌な予感がしたプリネは急いでその場から離れ、銀色の楔の外に出た。するとプリネが楔の外に出ると同時に楔の宝石部分が光り、囲んでいる部分に怪しい紫色の光を放たれた。

「（あんなアーツ、あつたかしら？…………いけない！今は目の前の敵に集中すべきね！）烈輝の陣！！イオ＝ルーン！！！」

見覚えのないアーツに首を傾げたプリネだったが、戦闘中である事にすぐに気付き、魔術をロランスに放つた！

「！！！」

プリネが魔術を放つた事に気付いたロランスは横に飛んで、プリネの魔術を回避した。

「…………行くぞ！」

そしてロランスは最初の標的をプリネにするかのように、プリネを襲つた！

「せいっ！」

「ヤアツ！」

「ヤアツ！」

ロランスの剣での攻撃に対し、プリネはレイピアで対抗して、防御した。

「そこだつ！」

攻撃を防御されたロランスは一端下がってクラフト 零ストームをプリネに放つた！

「フツ！」

しかしプリネは持ち前の身体能力を生かして、自分に襲いかかって来る衝撃波の竜巻を回避した。

「フェヒテning! ! !

そして一瞬でロランスに詰め寄り、クラフトを放つた！

「せん！」

しかしロランスは連続するプリネの攻撃を全て捌き切った。
（…この男……強い！…どうやらペルル達の援護をしながらの戦いは無理そうですね…………）

クラフトが防御され、一端下がったプリネはロランスの強さに驚き、横目で特務兵達と戦っているペルル達を見て、援護はできない事を悟った。

「……さすが”剣皇”の娘。やはり最初から本気で行くべきだったな。大佐からは本気を出す事を止められていたが……今は特務兵の隊長ではなく一人の剣士として挑ませてもらおつ……行くぞ！」

「…！」

再び襲いかかって来るロランスを見て、プリネは氣を引き締めた。

「「ハアアアアアアアア…！」」

キンキンキンキン…ヒュッ…キンキンキン…ヒュッ…

乱戦の中、常人には見えないロランスの剣とプリネのレイピアによる激しい剣撃や回避の攻防が続けられた。

「……プリネったら、本気を出していないのかな？ただの人間相手にあんなに手間取っているなんて。」

一方観客席でプリネとロランスの戦いを見ていたエヴリーヌは、まだに勝負がつかないと、首を傾げていた。

「がんばって！プリネさん！！」

「ファイトですっ！…ご主人様っ！！」

ミントとツーヤは椅子から立ち上がり、大声でプリネ達を応援していた。

「……プリネの表情を見てみろ、エヴリーヌ。あれは本気を出している時の表情だ。……それにあのロランスという男、かなりの実力を持つてある。」

「……確かにそこそこの腕はあるようだけど、お兄ちゃんほどじやないでしよう？”力”を解放すれば簡単に勝てると思うけど。”リフィアのロランスに対する評価を聞いたエヴリーヌは少しの間、ロランスの動きを見て納得したが、プリネが”魔神”の力を解放すれば一瞬で勝負が決まるのに、それをしない事に首を傾げていた。

「恐らくだが、時間稼ぎをしながらその機会をどのタイミングで放つか考えているのだろう。”力”を放てば短期決戦で決めなければ、敗北は必須だからな。」

「ふうん……ま、プリネなら大丈夫だね。なんたってエヴリーヌ達が鍛えてあげたんだから。」

「うむ！妹を信じてやるのも姉の役目だぞ、エヴリーヌ。」

「ん。」

そしてリフィア達は激闘を続いているプリネ達の試合を再び、見始めた。

一方、特務兵達と戦っていたペルル達は決死の覚悟で襲いかかってきた特務兵達相手に多少手こずつたが、対するペルル達はみなそれデイル・リフィーナの英傑達と共に歴史に語られる激しい戦いを生き抜いて来た精霊や使い魔。だんだんと特務兵達を押し始めて

来た。

「超・ねこ、パーンチ!!」

「.....貫け.....水刃!」

「ハアツ!」

ペルルは翼でクラフトを、マーリオンは魔力の水でできた刃を、フイニーリイは槍による斬撃を地に這わせると共に雷を宿らせるクラフト 雷波走りを特務兵達に向けて放つた！

「ぐつ！？」

「ギャアツ！？」

「ぐあつ！？」

いつもより激しい動きをしたため、体力が低下し、疲弊した特務兵達はペルル達のクラフトを避けられず、受けてしまい、悲鳴を上げた。
「さ～て！久しづびりに使っちゃうよ……これで……どう」「――――――」

ペルルが放った魔術 淫魔の魅惑を受けてしまった特務兵達は正気を失くし、同士討ちを始めた。

「貴女、性魔術が使えたのですか。……まあ、そのお氣楽な性格は睡魔族とたいして変わりませんから、使えても可笑しくありますわね。」

「ちょっと～！それ、褒めてるの！？」

フイニーリイの言葉にペルルは怒って、フイニーリイを睨んだ。

「あの……敵が混乱している今が……好機なのでは……」

「おっと、そうだね。速くやつつけて、ブリネを援護しないと…」

「そうですね。さつさと決めますわよ！」

マーリオンの言葉に頷いたペルルとフイニーリイはそれぞれ攻撃の構えや魔術の詠唱を始めた。

「行つくよ……それえつ……」

「――ぐわわっ！？」

体全体を回転させて突進するクラフト “恐怖の逆ジジヒ” を受けた特務兵達は悲鳴をあげた。

”恐怖の逆ジジヒ” を

「出でよ……荒ぶる水……！溺水……！」

「「「ガハツ！？」」

そこにマーリオンの魔術が発動し、特務兵達の真上から滝のような大量の水が発生し、男を地面に叩きつけた！

「私の最高の魔術、ご覧あれ！……超越せし純粋よ、今ここに集い、我が仇名す愚か者達に滅びの鐘を奏でよつ！……ルン＝アウエラ！！」

「「「ガアアアアアアア！！！？？？」」

止めに放つたフィーリイが使える最強の魔術であり、純粋属性の中でも最高峰の一つに数えられる超越した爆発 ルン＝アウエラはアリーナ全体を響き渡せる大爆音を響かせ、特務兵達に断末魔をあげさせた。そして煙が晴れると焼け焦げ、体から煙が出ている特務兵達がピクリともせず、倒れていた。

「ウフフフフ！私が本気を出せば、こんなもんですわ！！！」

魔術が命中した事を確認したフィーリイは胸を張つて得意げに笑っていた。

「うわあ～………… わすがにあればちよつと、やりすぎだと思つんだけど……？死んでないよね？？」

ペルルは特務兵達の状態を見て、冷や汗を垂らしながら尋ねた。

「それは大丈夫ですわ。見た目は酷いように見えますが、せいぜい半殺し程度の威力に抑えてますわ。……まあ、心配だと思うなら回復してやりなさい。どの道、あの状態ならもう戦闘の続行は不可能でしょう。」

「では、私が回復を………… 愈しの雨！！！」

マーリオンは倒れて、ピクリともしない特務兵達の頭上に雨を降らした。すると特務兵達の傷跡がなくなつていった。

「これで……大丈夫です……」

「わかつた！じゃあ、プリネを援護しに行こつか！」

「ええ！さつさと試合を終わらせますわよ！」

そしてペルル達はロランスと激闘をしているプリネを援護をしに行

つ
た

～武術大会・2回戦～中篇（前半）（後書き）

フイニーリイは高位の精霊ですので、最強魔術の一つを使ってもおかしくないと思い、使わせませた。後、マーリオンの魔術も一部はオリジナルです。……感想お待ちしております。

～武術大会・2回戦～中篇（後半）（前書き）

前話で言い忘れた事なのですが、プリネチームVSロランスチームの戦闘BGMは3rdの黒騎士戦やカシウス戦で流れる”銀の意思”が流れていると思つて下さい。

「グラランアリーナ」

ペルル達が特務兵達を倒す少し前、プリネとロランスは一進一退の激しい攻防を続けていた。

「そこだつ！」

「ハツ！」

ロランスがクラフト

零ストームを放つとプリネは回避し

「出でよ魔槍！狂気の槍！！」

「せいつ！」

プリネが放つた魔術によつて空間から出た暗黒の槍がロランスを襲つたが、ロランスは持つている剣に闘氣を込めて弾き飛ばし

「闇よ、集え！！……黒の闇界！！」

「大地の盾！！……アースガード！！」

続けて放つたプリネの魔術を絶対防壁のアーツで防いだ跡、一気にプリネに詰め寄つて攻撃を仕掛けた！

「ハアアアアアア！」

「つ！」

ロランスの連續攻撃をプリネは必死に捌いていた。

「せいつ！」

「ハアツ！！」

連續攻撃をした後、最後に跳躍して攻撃するクラフト 破碎剣に対してプリネは重い一撃を放つクラフト フェヒテンバルで対抗した。お互いのクラフトがぶつかり合い、2人は鍔迫り合いの状態になつた。

「まさかここまで腕とは…………正直驚いた。」

鍔迫り合いをしながらロランスは口元に笑みを浮かべた。

「……これでもお父様達から鍛えられている身なので、そう簡単には負けません！（どうしてこんなにも心が痛いの…？まるで戦うのを拒否しているかのよう！）」

ロランスの称賛の言葉にプリネは悲痛な叫びをあげて、自分の心を顔に出さないよう、必死の形相で答えた。

「フツ……”姫の中の姫”と評されている姫にしては、中々勇ましい姫だ。（何故だ。何故今、”あいつ”的姿が頭の中に浮かぶ…！何故、奴を攻撃するなど人を捨てた俺の心が訴える…！）」

「余計なお世話です！」

一方ロランスも顔には出さず、プリネを攻撃する事を拒否している自分の心に戸惑っていた。

「……姫よ、いくつか尋ねたい事がある。」

「……今の状況で……何を……尋ねるつもりですかっ！」

鍔迫り合いをしながらロランスはプリネに尋ね、プリネは今の状況で質問をするロランスの狙いが理解できなかつた。

「……”ハーメル”。この名前に聞き覚えは？」

「……！何故、貴方がその名を……！その名はもう、この世に存在しないはずですっ！」

ロランスの言葉にプリネは信じられない表情で驚いた。

「ほう。さすがはメンフィル。その情報も手に入れていたか。（…やはり、俺の思い過ごしか…）では、もう一つ。”カリン”。この人物に心当たりは？」

プリネの答えにロランスは心中で失望した後、もう一つ尋ねた。

「え。……」

一方プリネはロランスの口から出たある言葉を聞くと、放心して力が抜けた。

「せいつ！」

「！…キヤッ！？」

力が緩んだプリネの隙を狙つて、ロランスはプリネを吹っ飛ばした！吹っ飛ばされたプリネは我に返り、空中で受け身を取つて着地し

た。

（カリントの名を聞いて、あの様子……プリネ姫。お前は一体……）
ロランスはレイピアを構えて攻撃の機会を探つてゐるプリネを睨みながら、プリネが何者か気になつた。

「くつ……戦闘中に放心するなんて私もまだまだですね……（今、頭の中には過つた女性がまるで自分のように感じたのは一体……）」

一方プリネもロランスからの反撃を警戒しながら、ロランスから聞いたある名前を聞いた時、腰までなびかせる美しい黒髪と琥珀の瞳をした優しげな女性が思い浮かんだ事に戸惑つてゐた。

「水よ、行け……！水弾……！」

「出でよ、烈輝の陣！レイ＝ルーン……！」

「……！」

その時、マーリオンとフィーリイがプリネの後方からロランス目がけて魔術を放つた。マーリオン達の魔術攻撃に気付いたロランスは素早くその場から離脱した。

「超・ねこ、パーンチ！！」

「フツ！」

そこにペルルが攻撃を仕掛けたが、ロランスは回避した。

「嘘！？ボクの攻撃は避けられないと思ったのに！？」

攻撃を回避されたペルルは驚いた。

「みなさん！特務兵達は倒したのですか？」

一方ペルル達の援護に驚いたプリネはペルル達に尋ねた。

「うん！結構手強かつたけど、ボク達にかかるば楽勝だよ！」

「よくそんな事が言えますわね。止めをさしたのはこの私ですよ

？」

「あの……まだ戦闘中なので……そんな水を差すような言葉は……」

「……」

胸を張つて得意げに語るペルルにフィーリイは呆れた表情で答えた。

また、マーリオンはフイーリイを諫めていた。

「選りすぐりの特務兵であるあいつらを倒したか。やはり”闇夜の眷属”は油断できんな。だが……これならどうかな？」

倒れている特務兵達を横目で見たロランスはなんと、分身のクラフトを使って、自分と同じ姿の分身を一人作った。

「え！？」

「同じ生命の息吹が……」

「幻術……ではありませんわね。恐らくあれが話に聞く所の”分け身”。まさか、こっちの世界の人間も使えるなんて……」

ロランスが分身した事にペルル達は驚いた。

「分身……ですか。本体を叩けば、恐らくなくなると思いますが……みなさんは分身の相手をお願いします。」

「うん！」

「はい……」

「フフ……わざと倒して、援護してあげますわ！」

プリネの作戦に頷いたペルル達は片方のロランスに向かつて攻撃を仕掛けた！

「やあっ！」

「いけ……連続水弾……！」

「ハツ！」

ペルルとフイーリイは翼や槍で攻撃を、マーリオンは魔術でロランスの分身に攻撃を仕掛けたが。

「フツ……」

本物のロランスと同じように回避して、逆にペルル達に攻撃を仕掛けた！

「甘いっ！」

「おつと！？」

「！…」

「させませんわっ！」

分身のロランスが放つたクラフト 零ストームをペルル達が回避した所を

「せいっ！」

「わっ！」

「くつ……」

「人間の癖に、この私に攻撃するなんて生意気ですわよ！」

分身のロランスは素早くペルル達に攻撃した。さすがのペルル達も分身とはいえ、ロランスが相手だったでの苦戦した。

「フツ……これで邪魔者はいなくなつたな。」

一方本物のロランスは分身と戦つているペルル達を横目で見た後、その場で剣を腰だめにして構えた。

（何か大技をするようですね……では私も……！）

ロランスの構えを見て、大技をする事を察したプリネはレイピアに魔力を流し始めた！

「ハアアアアアアアアアアッ！！」「

ロランスとプリネ、お互い武器に闘氣や魔力を流しこみ始めた！！

「むんっ！受けて見る、荒ぶる炎の渦を！！」

「全てを燃やしつくし、暗黒の炎よ……今、燃えがれッ！！」

ロランスの剣には闘氣によつてできた赤き業火が、プリネのレイピアには魔力によつて紫色に妖しく燃える妖炎が宿つた！

「鬼炎斬！！」

「暗礁！火炎剣！！」

そして2人は同時にSクラフトを放つた！2人が放つた技は拮抗し、そしてお互いの技は相殺して消えた！

「！－！」

「くつ！？」

相殺した際にできた衝撃波によつて、ロランスとプリネは吹つ飛ばされ、お互い空中で受け身を取つて着地した！

「……そこだつ！……凍てつく魂の叫び、その身に刻め……」

「暗礁！火炎剣！！」

そして2人は同時にSクラフトを放つた！2人が放つた技は拮抗し、

そしてお互いの技は相殺して消えた！

「！－！」

「くつ！？」

相殺した際にできた衝撃波によつて、ロランスとプリネは吹つ飛ばされ、お互い空中で受け身を取つて着地した！

「……そこだつ！……凍てつく魂の叫び、その身に刻め……」

おおおおおおおお・・・・・・

プリネが次の攻撃に移る前にロランスが放った剣に高めた劍氣が周囲の熱を奪い去り、碎き散らす絶技　冥皇剣が地面を凍らせながら、プリネを襲つた！

「くつ……体が……！」

足元から体全体が凍り始め、プリネは身動きがとれなくなつたところを

「絶！！」

「力ハツ！？」

技の最後に凍つた地面に放つたロランスの一撃が震動してプリネに命中し、プリネは呻いた。

「クツ……」

強力な一撃を受けたプリネだったが、何とかレイピアを構え直した。
「ほう、今のを喰らつても、まだ体力がもつか。（…………何だ？）この後悔感は…………」

心にプリネに強烈な一撃を当てた事を後悔している事を顔に出さず、ロランスは未だに戦闘の続行をしようとするプリネに感心した。

「この程度の傷で私を倒そうなんて、甘いです！」

「フツ……その強がりがどこまで続くかな？…………そろそろ終わりにしてやるうつ！」

プリネの言葉に不敵な笑みを浮かべたロランスはプリネに止めを刺すために襲いかかつた！

「（…………私はプリネ・マーシルン。誇り高き”闇王”と優しき混沌の”聖女”的娘！ソーヤの”パートナー”としても、孤児院の放火に関わった特務兵達に負ける訳にはいきませんっ！！例え心があの人を攻撃するなと訴えかけようと、迷つてはいけない！）行きます……ハアツ！！」

襲いかかつて来るロランスをプリネは静かに見て、自分が何者かを心中で確認し、悲痛な叫びをあげている心を無視するかのように決意の表情になつた後、自身に秘めたる真の力を解放した！

「！？（何だ！？この威圧感は……！）」

母譲りの夕焼けのような赤髪が美しい銀髪に、父親譲りの紅い瞳が妖しく光る覚醒したプリネの姿にロランスは驚いた後、プリネがさらけ出している”魔神”の力を感じ取り、威圧感に圧されて足が動かなくなつた。

「よしーついにプリネが”力”を解放したな！」

「キヤハッ これでもう勝負は決まつたもんだね！」

「わあ……………プリネさん、なんだか凄い気を纏つているね！」

一方観客席でプリネの覚醒した姿を見たリフィア達ははしゃいだ。

「ご主人様……………」

いつも纏つている優しい雰囲気がなくなり、威圧感だけしか感じられないプリネをツーヤは元のプリネに戻るか心配した。

「そんな顔をするな、ツーヤ。あれもプリネが持つ雰囲気の一つだ。元の姿に戻ればいつもの雰囲気に戻る。」

「はい。最初はびっくりしちゃいましたけど、今は大丈夫です。…

…いつも優しいご主人様にもあんな雰囲気を出せるんですね。」

リフィアの言葉にツーヤは頷いた後、銀髪のプリネを見ながら呟いた。

「うむー！プリネはああ見えて、猛者揃いの我が国の兵達を率いる必要がある者。優しいだけでは我が軍の兵士達はついてこんからな。」

「そうなんですか。（ご主人様の隣に並んで当然のドラゴンになれるよう、もつとがんばらないと…）」

リフィアの説明に頷いたツーヤはより一層強くなる事を決意した。

「ふえ～……………あれがプリネの”魔神”としての力を解放した時の姿か……………キレイ……………小さい時にお母さんが読んでくれた本で出て来る”白き魔女”みたい……………」

「おおっ！？美しい……………まるで夜闇の中で輝く月のようだ……………」

一方控室からプリネの覚醒した姿を見たエステルは以前にシェラザ

ードからプリネが”魔神”としての力を解放した時の説明された姿を思い出した後、プリネの美しい銀髪を見て思わず声に出した。また、オリビエはプリネの姿を魅入っていた。

「フム。まさかあんな隠し玉があつたとはな……纏つている気配や先ほどの剣撃といい、ただ者ではないな。」
ジンはプリネが纏つている気配を感じ取り、プリネがただ者ではない事を悟った。

「…………（クツ……どうしてあの2人の戦いを止めたがつているんだ……？それに今、見えている光景は一体…………）」

一方ヨシュアはプリネ達の戦いを辛そうな表情で見ていながら、プリネが黒髪と琥珀の瞳の女性に、ロランスが銀髪と紫の瞳の青年に見える自分に心中で戸惑つていた。

「どうしました？体が震えますよ？」

「！？」

プリネの言葉にロランスは無意識に震えている事と冷や汗が垂れている事に気付き、自分自身に驚いた。

「……正直、この”力”はカーリアン様と戦う時以外は使わないと思つていましたが……貴方を侮つていたようです。……申し訳ありませんが、一気に決めさせていただきます！」

そしてプリネは残像が見えるほどの神速でロランスに一気に詰め寄り、クラフトを放つた！

「ハツ、セイツ、ヤツツ！！」

「グツ！？（クツ…………一撃一撃が先ほどとは比べ物にならないぐらいの重さだ…………これが”剣皇”の娘の真の力か…………）」

プリネが放つた連続攻撃のクラフト フェヒティングを剣で防御しながら、ロランスは剣から伝わる振動に驚いた。

「ハアアアアアアア…………！！！」

「オオオオオ…………！！！」

次々と自分に来るプリネの激しく、重い攻撃をロランスは必死に捌

いていたが

「ハアッ！！」

「くつ！？しまった…………！剣が…………！」

普段の倍以上の威力と重い一撃を放つクラフト フュヒテンバルを片手では防御仕切れず、持っていた剣が弾き飛ばされた！

「これで決めます！！我に眠りし魔よ…………今ここに具現せよ…………！」

プリネが言い終わると黒々と燃える暗黒の細剣レイピアが異空間より武器を握つていらない片方のプリネの手に現れた。

「聖なる力よ……我が剣に宿れ…………！」

そしてプリネが持つているレイピアにはプリネに眠る僅かな姫神の力によつて、聖なる力が宿り、神々しい光をレイピアに纏わせた。

「我に眠りし、真なる血の力…………思いしがれっ！ブラッディ！！」

そしてプリネは相反する力を宿したレイピアでロランスを神官が十字架をきるかのように、ロランスの横を駆け抜けながら十字に斬つた！！

「クロス！！」

駆け抜けたプリネがロランスの背後に立つと、ロランスの背中から血が大量に出た！

「ガハッ！？…………見事だ…………！」

プリネに背中を斬られたロランスはその場で跪き、立ち上ががらなくなつた。一方ペルル達と戦つていたロランスの分身もロランスが跪くとその場で消えた。

「勝負あり！蒼の組、プリネチームの勝ち！」

そして審判はロランス達の状態を見て、プリネ達の勝利を宣言した

～武術大会・2回戦～中篇（後半）（後書き）

ところで、ここで本来決勝まで行くはずのロランステーム、まさかの2回戦敗退です。ちなみに話にも書いていますがプリネの銀髪はシリーズ違いで出てくる“あのキャラ”と同じ銀髪だと思って下さい。
……感想お待ちしております。

第128話（前書き）

現在、決勝戦を書き終わりました！長かった……

「グラシアリーナ」

「く、くそ…………」

「選り抜きの特務部隊を代表する我々がまさか2回戦で敗退するとは……」

氣絶から目覚めた特務兵達はすでに勝負が終わっている事を知り、悔しがった。

「へへ～んだ！セリ力達と激しい戦いを生き抜いたボクが君達なんかに負ける訳ないよ！」

「リウイ様の…………使い魔として…………私もそう簡単に…………負けません…………」

「ウフフフフ！精霊王女であるこの私の力、思い知つたかしら…………」
悔しがつていてる特務兵達を追い打ちをかけるかのようにペルルやフイニリイは得意げに胸を張り、マーリオンは淡々と答えた。

「…………癒しの闇よ。…………闇の息吹！！」

一方いつもの姿に戻ったプリネはロランスの傷を魔術で回復した。

「…………何故、俺に治癒魔術を…………？」

傷がなくなり、立ち上がったロランスはプリネが自分を回復した事がわからず、尋ねた。

「…………体が勝手に動いただけです。深い意味はありません…………」

「…………」

プリネとロランスはお互い見つめ合つたが、やがて踵を返し、2人はそれぞれ背中を向けて、控室に戻つて行こうとしたところを

「…………プリネ姫。」

ロランスがプリネに背中を向けたまま、静かでよく通る声でプリネを呼び止めた。

「…………なんでしょうか？」

一方呼び止められたプリネも同じようにロランスに背中を向けたまま、答えた。

「カリーン・アストレイ…………この名を”ハーメルの悲劇”を知る貴女に知つていてほしい…………」

「…………メンフィル皇女として、罪なき犠牲者のその名、覚えておきましよう…………」

そして2人はそれぞれ自分達がいた控室に戻った。

（グラントアリーナ・観客席）

「やつた――――――！プリネさん達も勝ったね、ツーヤちゃん！」

「うん…………ご主人様が先生を酷い目に合わせた人達に勝てて、本当によかつた…………！」

一方プリネ達の勝利にミントとツーヤは喜んでいた。

「うむ！さすがは余の妹だ！」

「…………勝つたのはいいけど、この後、大丈夫かな？次の相手はあいつだよ？さつきの戦いで結構”力”を使った影響が出なければいいけど…………」

ミント達と同じようにプリネ達の勝利にリフィアは自慢げにいたが、エヴリーヌは冷静に次の試合の事を言った。

「それは大丈夫だ！ホテルの部屋を出る前に、これと同じ物をプリネに渡したからな！今頃、これを使っているだろう！――」

エヴリーヌの疑問にリフィアは得意げに懐からある紋章入った護符を出した。

「それは…………それなら、次の試合も全力を出して、大丈夫そうだね。」

エヴリーヌはリフィアが見せた護符　　癒しの女神の力の一部が封じられている聖なる護符　　イーリュンの息吹を見て、納得した。

（グラシアリーナ・選手控室）

「おめでとう、プリネ！」

「まさか仮面の隊長にまで勝つなんて……正直、驚いたよ。」

アリーナから戻つて来たプリネにエスティルとヨシュアは称賛の言葉を贈った。

「フフ、ありがとうございます。……みんな、御苦労さま。次の試合は私一人で挑みますから、戻つてもうつて大丈夫です。」

「そつか。……実は今の戦いで結構疲れちゃったんだよね……がんばってね、プリネ！」

「例え相手がカーリアン様とはいっても、今はプリネ様の勝利を祈っています……」

「…………後は貴女に任せますわ。その代り、無様な戦いをしたら許しませんからね？」

プリネの言葉に頷いたペルル達はそれぞれプリネに応援の言葉を贈つた後、光となつてプリネの身体に戻つた。

「え……プリネ、もしかして次は1人で戦うの！？」

使い魔達を戻した事を見たエスティルは驚いて、尋ねた。

「はい。ペルル達も疲れていたようですし、無理はさせられません。」

「フム。貴女自身はどうなんだい、レディ。先ほどの戦い、ほとんど余裕が見られなかつたようだが……」

「そうだな。体力もそうだが、魔力？だつたか。それもかなり使つたんじゃないのか？」

オリビエとジンはプリネとロランスの戦いを思い出し、プリネ自身の状態を尋ねた。

「ジンさんはともかく……まさかアンタがその事に気付くなんて……なんとなく答えがわかるけど、なんでわかつたの？」

エスティルはオリビエをジト目で見ながら、オリビエがプリネの状態を言いつぶてた理由を尋ねた。

「ハツハツハ！」このオリビエにかかれば、女性の事は何でもお見通しさ！」

「やつぱりか……」

「予想通りの答えだね……」

得意げに語るオリビエを見て、エステルとヨシュアは呆れて溜息を吐いた。

「フフ……大丈夫ですよ。ホテルの部屋を出る際、リフィアお姉様からこれを渡されましたから。」

エステル達とオリビエのやり取りに微笑んだプリネは懐からイーリュンの息吹を出した。

「何ソレ？？」

「護符のようだけど……イーリュン教の紋章が入っているね。」

エステルとヨシュアは初めて見る道具に首を傾げた。

「まあ、すぐにわかります。」

そしてプリネはイーリュンの息吹を天井に向けて掲げた。すると護符が光を発し、プリネに癒しの光を纏わせて消えた。

「よし。……これで体力、魔力共に万全です。」

「へつ！？ねえ、プリネ。今使った道具つて何なの？？」

プリネが完全回復した事に驚いたエステルは尋ねた。

「今のは”イーリュンの息吹”という道具で、イーリュンの力の一部が封じられた護符なんです。使えば例え戦闘不能であろうと一気に傷や体力が回復する上、魔力も完全に回復してくれるイーリュン教が出している薬の中でも最高峰の治療道具なのです。」

「ほえ？……」

「凄いな。まさにイーリュン教の秘薬……はおかしいか。とにかく凄い道具だね。」

イーリュンの息吹の効果を知ったエステルとヨシュアは驚いた。

「フム……それにしては今まで聞いた事がない回復道具だね。そんな効果があれば、噂にもなると思うんだが……」

オリビエはイーリュンの息吹が一般に出回っていない事に首を傾げた。

「それは当然です。この道具はこちらの世界では滅多に手に入らない道具なので、一般には出回っていないんです。傷や体力の回復だけでしたら、”治癒の水”があれば十分ですし。」

「なんだ……」

プリネの説明を聞き、エステルは呆けた。

「エステル。僕達はリフィア達といっしょに観客席で応援しようか。

「そうね。……がんばってね、プリネ！決勝で会うのを楽しみにしているよ！」

ヨシュアの提案に頷いたエステルはプリネに応援の言葉を贈った。

「ありがとうございます。精一杯がんばってみますね。」

エステルの応援の言葉をプリネは微笑みながら受け取った。そしてエステル達は控室から出て行つた後、プリネは受付に次の試合は1人で挑む事を伝えた後、控室で静かに待つていた。そして数時間後、試合開始のアナウンスが入つた。

「皆様……大変長らくお待たせしました。これより第六試合のカードを発表します。

南、蒼の組 メンフィル帝国出身。旅人プリネ選手以下1名のチーム！北、紅の組 メンフィル帝国出身。メンフィル帝国軍所属。闇剣士カーリアン選手以下1名のチーム！」

「…………よし！」

静かに待っていたプリネは気合を入れた後、アリーナに向かつた……

第128話（後書き）

前書きにも書きましたが武術大会編は全て書き終わったので、一気に連日更新していきます！なので今年中には武術大会編は終わらせるので楽しみにして下さい！……感想お待ちしております。

～武術大会・2回戦～後篇

「グラシアリーナ」

「なお、今回の試合はプリネ選手の希望の通り従来通りのシングルバトルとなつておりますので、みなさま、どうかご了承下さい。」「ワアアアアアアア！」

「パチパチパチパチ…………！」

プリネが一人で出て来た事を同会が説明すると、観客達は歓声と拍手を送った。

「…………しても、あんたまで参加するとは思わなかつたわ、プリネ。

「フフ……成り行きで参加したようなものですよ。」

カーリアンと顔を合わせた際、珍しそうに自分を見て言つたカーリアンにプリネは微笑みながら答えた。

「どうせ、リフィアが原因なんでしょう？全く似てほしくない」とこばつか、似るんだから……」

「フフ……そう言つている割には顔が笑つていますよ、カーリアン様。やつぱり、血は争えませんね。」

溜息を吐きながらも顔が笑つているカーリアンをプリネは微笑みながら指摘した。

「あら。あの引っ越し思案のペテレーネの娘の割には言つじゃない。私が戦う予定だった情報部の仮面の隊長を破つた実力、……見せて貰うわよ」

「はい。これまでの旅の成果……お見せします！」

「これより武術大会、本戦第七試合を行います。両チーム、開始位置についてください。」

審判の言葉に頷き、プリネとカーリアン両チームはそれぞれ、開始位置についた。

「双方、構え！」

両チームはそれぞれ武器を構えた。

「勝負始め！」

そしてプリネとカーリアンは試合を始めた！

「先手必勝です！……出でよ、魔槍！！……狂氣の槍！！」

試合開始と同時にプリネはカーリアンに魔術を放つた！

「つと！！」

自分の襲いかかる魔槍をカーリアンは鬪気を込めた双剣で払い落とした！

「烈輝の陣！……イオ＝ルーン！！」

「！！」

続けて放ったプリネの魔術がどこに発動するかわかつっていたカーリアンは横に跳んで、回避した。

「力の加護を！！……戦士の付術！！」

そしてプリネはカーリアンが回避している隙を使って、自分自身を強化した。

「フフ……魔術の先制攻撃なんて、やつてくれるじゃない。今度はこっちの番よ！」

一方カーリアンはプリネが先制攻撃した事に口元に笑みを浮かべた後、プリネに襲いかかつた！

「それえ！」

「くつ！！！」

カーリアンの攻撃をプリネはなんとか回避に成功した。

「喰らうときなさいよ！」

「フツ！ハツ！セイツ！」

カーリアンの連續攻撃をするクラフト 3段斬りに対してプリネはクラフト フェヒティングイングで対抗して、カーリアンの攻撃を防御した。

「ドーリヤー！！！」

「ハアツ！！」

技を防御されても気にせず放つたカーリアンの技の中でもかなりの威力を持つクラフト　冥府斬りに対し、プリネはクラフトフェヒテンバルで対抗して、カーリアンと打ち合つた。

「へえ……以前と比べて、格段に動きがよくなつているわね」

「フフ、ありがとうございます。カーリアン様も最近は戦がないのに、腕は全然鈍つていませんね。」

感心するカーリアンの言葉にプリネは微笑みながら答えた。

「ありがと　でも今のは、小手調べ程度よ。ちょっと本気を出すけど、ついてこられるかしら？」

「…………」

カーリアンは不敵な笑みを浮かべ、双剣を構えた。それを見て、プリネは真剣な表情でカーリアンの動作に集中した。

「行くわよ…………どーりやあ！！！」

「！！」

キンキンキンキンキンキンキン！！

カーリアンの激しく隙のない攻撃にプリネはレイピアで必死で捌いていたが

「北斗斬り！！」

「キヤツ！？」

カーリアンが放つたクラフトをレイピアで防御した際、のクラフト威力に負けて吹っ飛ばされた！

「闇よ、集え！！黒の闇界！！」

「遅いわよつ！！」

吹っ飛ばされたプリネは吹っ飛ばされた時にできた距離を利用してカーリアンに魔術を放つたが、カーリアンはプリネに向かつて突進して回避した後

「いただきよつ！！」

「あうつ！？」

すかさず放つたカーリアンの一撃が武器を持っている利き手の甲を掠り、プリネは悲鳴をあげたが

「ヤアッ！」

卷之二

痛みに屈せずブリネは突きをカーリアンに放った。ブリネの攻撃を防護したカーリアンは一端下がった。

癒しの闇よ……闇の息吹！！！」

そしてフリネはカリアンが離れた隙を使って、和き手の傷を治癒した。

「ふうん……今のも耐えるか。うん、やっぱり成長しているわね、
プリネ」

「ありがとうございます、カリアン様。」

でもそろそろあんたも本気を出した空氣の人間達の動きを窺わせる
城には泡で二二きらめつ二二二四。

「わかりました。どの道カーリアン様相手に今の状態で勝てるとは思っていませんから……ハアツ！！」

カーリアンの言葉に頷いたブリネは、”魔神”の力を解放した姿になつた!!

「さあて………」から手加減なしでいくわよ、
プリネ。」

14

双剣を構えてカーリアンの不敵な笑みに対しブリネは真剣な表情でレイピアを構えた。その場に一瞬、静寂が訪れた後、2人は同時に動いた！

2人の戦いは残像を残すほどの信じられない速度と激しい剣撃の音と、武器と武器が打ち合つた時にできた光だけが観客達には見えず、プリネやカーリアンの姿はほとんど見えなかつた。

言つた時、最初驚いたわよ？てっきりペテレー・ネみたいに魔術師か僧侶を目指すと思っていたんだから。」

激しい戦いの中、カーリアンは楽しそうな表情でプリネに語りかけた。

「私はお父様の娘でも……あります……から……その点で……いえば！リフィアお姉様も……そうでは……ありませんか！シルヴァンお兄様はシルフィア様を……目指して！聖騎士の剣技と……神聖魔術……を！力ミリお姉様はカーリアン様譲りの剣技と……暗黒魔術や性魔術を……！収めているのに対しても！リフィアお姉様は……！純粹な魔術師……！タイプですから！」

プリネはカーリアンの攻撃を必死に捌きながら、途切れ途切れに答えた。

「ま、それはそうだけど！ある意味あの子はリウイやシルヴァン達の思いをわかっているみたいなようなものよ！」

「やはり”聖王妃”イリーナ様……ですか！」

2人は武器の打ち合いをやめて、鎧迫り合いをしながら会話をしていた。

「フフ、あんたもわかつてているじゃない。相反する光と闇の魔術を扱う事で、全ての種族との共存を願つたイリーナ様に少しでも近付けると思つてているんじゃない？全く、イリーナ様やリウイの事は尊敬する癖に、私に対してもんな邪剣な態度とか、今考えただけでも頭に来るわ～！」

「でも私にとつてはあれがリフィアお姉様なりのカーリアン様への敬意と思つていますよ？リフィアお姉様があんな態度を取るのはカーリアン様だけですから。」

「つたく、もしそれが本当だつたらもつと私を敬いなさいよね～……ビーリヤー！！」

「……」

鎧迫り合いをしていた2人だが、さらに力を入れたカーリアンに対しても、プリネはどんどん押されてきたので、危機を感じて武器を

退いて一端下がった。

「さ～て。そろそろ勝負を決めましょ～うか？”力”を解放していられる時間もそんなにないでしょ～う？」

「その事に気付いているなんて、さすがはカーリアン様ですね……これでも以前と比べて、解放していられる時間が長くなつたんですよ？」

「フフ……何年、あんたを鍛え続けたと思つていいのよ？それぐらいい、お見通しよ」

「そうですね……では、お望み通り次の一撃に全ての力をかけます！」

カーリアンの言葉に頷いたプリネはUクラフトの構えをした！

「これで決めます！！我に眠りし魔よ……今ここに具現せよ……！」

プリネが言い終わるとロランスの時と同じように黒々と燃える暗黒の細剣レイピアが異空間より武器を握っていない片方のプリネの手に現れた。

「聖なる力よ……我が剣に宿れ……！」

そしてプリネが持つているレイピアにはプリネに眠る僅かな姫神の力によつて、聖なる力が宿り、神々しい光をレイピアに纏わせた。

「我に眠りし、真なる血の力……思いしがれ！－ブラッデイ！－！」

相反する力を備えたレイピアを両手に、カーリアンに襲いかかつた！

「激しいの、行くわよ……白露の桜吹雪！－！」

「クロ……！え！？キヤアアアア……！」

しかしカーリアンが放つたUクラフトに吹っ飛ばされた！

「あうつ！？」

吹っ飛ばされたプリネはアリーナの壁にぶつかり、呻いた。また、ぶつかつた衝撃で魔力でできた暗黒の力を宿したレイピアは消え、神々しく輝いていた光もなくなり、ただのレイピアに戻つた。そしてプリネの髪や瞳もいつもの状態に戻つた。

「さて……勝負ありね」

「……」

そしていつの間にかプリネに接近していたカーリアンがプリネの首筋ギリギリに双剣を当てていた。

「……降参です。さすが、カーリアン様です。」

自分の敗北を悟ったプリネは降参する意味を込めるかのように持っていたレイピアを地面に落として、両手をあげた。

「勝負あり！紅の組、カーリアン選手の勝ち！」

そして審判はプリネが降参しているのを見て、カーリアンの勝利を宣言した……

～武術大会・2回戦～後篇（後書き）

という事で決勝戦はエステルチームVSカーリアンになりました！
決勝戦は驚きの展開や、かなりの数を分けて終わるので楽しみにして下さい！……感想お待ちしております。

「グラシアーナ」

「さてと……大丈夫？ プリネ。」

審判の宣言を聞いたカーリアンはプリネに手を差し出して尋ねた。
「はい。大丈夫です。…………つつ！？」

差し出された手を握つて、立ち上がったプリネは壁にぶつかつた衝撃に伝わつて来て、まだなくなつていらない痛みに顔を顰めた。

「あっちゃん……ちょっとやりすぎちゃつたかしら？」

痛みで顔をしかめているプリネを見て、カーリアンは気不味そうな表情をした。

「このくらいの痛み、大丈夫ですよ。鍛錬の時もそうですが、いつも心配をして下さつて、ありがとうございます。」

「あなたはペテレー似だからね～。あの子に攻撃しているみたいに感じて、ちょっと罪悪感を感じるのよ。」

「もう……これでもお父様の娘でもあるのですから、そんな甘やかし方はいいですよ……ファーミシルス様みたいに、もっと厳しく鍛えて頂いてもよかつたのですよ？」

カーリアンの言葉を聞いて、プリネは溜息を吐いた。

「ちょっと……あの冷血女と比べないでよね～。」

プリネの言葉を聞いたカーリアンは顔をしかめて答えた。

「フフ……すみません。決勝ですが、カーリアン様には悪いと思いますがエステルさん達を応援させてもらいますね。後、あまりやりすぎないで下さいね？」

「はいはい。そんなに心配しなくても大丈夫よ。じゃあね」

そして2人はそれぞれ控室に戻つた。

「グラシアーナ・観客席」

「ああ……負けちゃつた……」

「さすがのプリネも相手が悪かったか……」

観客席でプリネ達の試合を見て、プリネの敗北にエステルはがつかりし、ヨシュアは複雑そうな表情で答えた。

「おのれ、カーリアン婆め！ここは年寄りはひとつと引き込んで、未来を担うプリネに勝ちを譲るのが普通だといつて……全く、相変わらず大人げないな！」

（…………）の場合、エヴリーヌもそうなのかな？だとすると凄い複雑な気分……）

プリネが負けた事をリフィアが怒り、呴いた事を耳にしたエヴリー又はカーリアンやリウイより遙かに生きている自分が当てはまるかもしれない事に気付き、なんとも言えない表情になった。

「『主人様』…………」

「氣を落とさないでね、ツーヤちゃん。プリネさん、凄くいい試合をしていたよ。」

「うん……ありがと、ミントちゃん。」

一方プリネが負けた事に落ち込んでいるツーヤを見ていられなく、ミントはツーヤを慰めた。

「…………あたし、『主人様』が心配だからちよつと行つて来る……」

「あ、ツーヤちゃん！」

そしてツーヤはミントの制止の声を背中に受けて、観客席から控室に向かつて走り去った。

「ふむ。終盤は凄い試合だつたけど、とにかくこれで明日の試合の役者は揃つたね。」

「ああ。猛者だらけのメンフィルでも名高いあの”戦妃”と直にやりあえるんだ。腕がなる。」

オリビエの言葉にジンは不敵な笑みを浮かべて頷いた。

「激しい戦いに備えて鋭気を養う必要がありそうだな。そういうわけで……今日も酒場に繰り出すとするか！」「

「フツ、やつこなくては。お付き合いでさせてもらひつよ。」

そしてジンの提案にオリビエは笑顔で頷いた。

「さて……俺達は酒場に繰り出しがお前達はどうする?」

「フム……市井の酒を飲むのも悪くないな。余も付き合おう! 光

栄に思うがいい! 行くぞ、エヴリーヌ!」

「……やっぱりエヴリーヌも行くんだ……まあいいや。エステル達はどうする?」

「僕たちは用事があるので今夜も遠慮させてください。」

「うん。プリネを励ましたいし。」

ジン達の誘いをヨシュアやエステルは首を横に振って断った。

「おお、それじゃあな。明日の朝、フロントで待ってるぜ。」

「グンナイ、マイ・スイートハーツ」

「では、夜にホテルで会おうぞ!」

「……プリネにはエヴリーヌ達の分も含めて、慰めておいてね。」

そしてジン達は観客席から去った。

「ねえねえ、ママ。ツーヤちゃん、プリネさんの所に行つたから、ミント達も行こう?」

「そうね。直に戦つたプリネからあのカーリアンって人に対する攻略方法が何かないか、聞きたいし。」

「確かにそうだね……カーリアンさんをよく知る彼女なら、弱点が何かを知つていそうだし。」

ジン達が去つた後、ミントの提案にエステルとヨシュアは頷いた。

「じゃあ、控室に行きましょうか。」

「了解。」

「はーい!」

そして3人はプリネがいる控室に向かった。

（グラランアリーナ・選手控室）

「フウ……」

アリーナから戻つて来たプリネは疲労の溜息を吐いた。

「…………やはりそう何度も長時間解放するものではありませんね。まだまだ修行が必要ですね……」

そして身体全体にかかる負荷に呻き、顔を顰めた。

「ご主人様！！」

その時、血相を変えたツーヤが控室に入つて來た。

「ツーヤ？」

「ご主人様、お怪我はありませんか！？」

「フフ……心配してくれたのね。ありがとう。でも、大丈夫よ。」自分を心配するツーヤにプリネは微笑んで自分が平気である事を伝えた。

「それでも心配なんですか……あの、背中を見せて貰えますか？」主人様、壁に強く打つっていたようだし、痣になつていなか心配です

……」

「別にいいけど……ここで服を脱ぐの？」

「え……？あ……す、すみません！」

プリネに言われたツーヤは周囲を見渡し、誰かが入つて来てもおかしくない控室である事に気付き、謝つた。

「いいのよ。今ので今日の試合は終わりですから、多分誰も入つて来ないでしよう。…………はい。これでいい？」

そしてプリネは椅子に座つてきている服を脱いで、上半身だけ下着の姿になつた。

「はい。…………ああ……ご主人様の背中の一部が痣になつています……

……今、治しますね。水よ、癒しの力を……ヒールウォーター！！」

プリネの背中にいくつかついている痣を青褪めた表情で見た後、気を取り直してツーヤがプリネに治癒魔術を施していた時、エスティル達が入つて來た。

「お疲れ様～、プリ……へ！？」

「どうしたの、ママ？」

控室に入つて来たエステルは上半身だけ下着の姿になつているプリネを見て驚き、ミントはエステルの様子に首を傾げた。

「どうしたんだい、エステ……」

「……ヨシュアは入つてきたら、ダメーーー！」

「え？ ちよ、ちよつと……」

エステル達に続いて入つて来ようとしたヨシュアに気付いたエステルは、慌ててヨシュアの体を押して控室から出し、ドアの鍵を閉めた。

「ちょっと、エステル？ ここを開けてくれないと、僕だけ入れないんだけど……」

鍵がかかっている事に気付き、ドアの外からノックをしながらヨシュアはエステルに鍵を開けるよう頼んだ。

「今、プリネはツーヤに背中を治療してもらつているから上だけ下着姿なの！だから、入つて来ないで！」

「……そういう事か。了解。終わつたら、開けてよ？」

エステルは顔を赤らめて理由を説明し、それを聞いたヨシュアは納得してそれ以上何も言つて来なかつた。

「ふ……ごめんね、プリネ。いきなり入つて来て、ビックリしたでしょ？」

「別に気にしていませんよ。軽はずみな行動をした私が悪いのですから。」

「す、すみません、ご主人様！ あたしが何も考えずにあんな事を言うから、こんな事に……」

「いいのよ。あなたのその気持ちはどう嬉しいわ。だから、気にしないで。」

「は、はい！（普通なら怒られて当然なのに、ご主人様はあたしの事を一切責めずに、逆にあたしの事を気遣つてくれるなんて……あたしの”パートナー”がご主人様で本当によかつた……）

プリネの微笑みを見て、ツーヤは治療をしながら今更ながら、プリ

ネに仕えていた事に幸せいっぱいを感じていた。

「わあ～……温泉の時にも見たけど、プリネさんの胸って大きいね！それに肌も白くてとても綺麗だよ！」

「フフ……お母様譲りのこの肌はとても大事にしているの。褒めてくれて、ありがとうございます。」

「ミンントー外にヨシュアがいるんだから、そんな大きな声を出したらダメー！（うつ……今までハツキリ見なかつたけど、よく見たら下着もなんか豪華に見える……あたし達とそんなに変わらないように見えるけど、やっぱリプリネって、お姫様ね……）」

下着姿のプリネを見て感嘆な声をあげるミントーにエスティルは慌てて注意をした。また、プリネが付けていた白を基調とした高級感のある下着を見て、プリネの事を改めて皇女である事を認識した。

「…………終わりました、ご主人様。」「

「ありがとう、ツーヤ。」

背中の治療が終わり、プリネは脱いでいた服を着た。

「もう大丈夫ですよ。エスティルさん。」

「あ、うん。…………もう入つて来ていいよ、ヨシュア。」

そしてエスティルはドアを開けて、ヨシュアに言つた。そしてヨシュアも控室に入つて來た。

「すみません、ヨシュアさん。驚かせてしまつて。」

「いや、こっちこそ声もかけずに入つて来てごめん。」

「控室で服を脱いでいた私が悪いのですから気にしなくていいですよ。…………それより私に何か用ですか？」

プリネはエスティル達が自分に用があると思って、尋ねた。

「あ、うん。カーリアンとの試合、残念だつたね……」

「負けたのは残念だつたけど、凄くいい試合だつたよ。」「

「うん！最後の方なんか、何がなんだかわかんない内に終わっちゃつたもの！プリネさん、凄い！」

「フフ……慰めの言葉、ありがとうございます。」

エステルやヨシュアの慰め、ミントのはしゃぎ様を見てプリネは微笑みながらお礼を言った。

「それより、エステルさん達の方は大丈夫ですか？カーリアン様は今までの相手とは桁違いに強いですよ？」

「あ、その事なんだけど……」

そしてエステル達はプリネにカーリアンの攻略法がないか、尋ねた。

「カーリアン様の弱点か攻略方法…………ですか…………」

事情を聞いたプリネは難しそうな表情で考え込んだ。

「何かないかな？多分このままぶつかつてたら、負けるのはわかっているから何とかしたいんだ。」

「…………」

ヨシュアの言葉を聞いて、プリネは目を閉じて考え込み、やがて目を開けた。

「…………私なりにカーリアン様に対するエステルさん達ができる作戦を考えましたが、それでよければ聞きますか？」

「本当！？お願い、プリネ！」

プリネの言葉にエステルは期待するような目で、プリネを見た。

「…………まず一つは、絶対に一人では向かわない事です。正遊撃士がいるとはいえ、メンフィル建国時からお父様の右腕として仕えているファーミシルス様と同等の実力を持つカーリアン様相手には荷が重すぎます。」

「最低でも2人で立ち向かう事か……ジンさんは当然として、僕かエステルがジンさんのサポートをする形かな。」

「そうね。それで他には？」

プリネの提案を聞き、ヨシュアが呟いた言葉に頷いたエステルは他にはないか、尋ねた。

「後はそうですね……アーツや魔術を上手く使えば、勝機が見えるかもしれません。…………ですからエステルさん達の中の誰か二人がカーリアン様の相手をして、一人はアーツか魔術での攻撃やサポー

ト、一人は回復を主として、隙があれば遠距離からの攻撃に移る…
…これでどうですか?」

「うん。僕達のメンツを考えたら現状、それが一番いい作戦だと思
うよ。」

「そうね。ありがと、プリネ! ! !

「どういたしまして。この後私はツーヤといっしょに街中を見て廻
るつもりですが、エステルさん達はどうします?」

プリネはエステル達がこの後、どうするかを尋ねた。

「あ、その事なんだけど、あたし達用事があるからミントを預かつ
てくれないかな?」

「ママ、ミントはついていっちゃダメなの?」

エステルの言葉に反応したミントは首を傾げて尋ねた。

「うん……向こうはあたしとヨシュアだけが来ると思ってるから、我
子供のミントを連れてきたら相手も混乱するだろうから、今回は我
慢してくれない?」

「うん、わかった!でも、ミントが大きくなつたら絶対。いつで
もママの傍でお仕事をさせてね!」

「当たり前よ!あ~ん!いつも思つけど、ミントは素直で可愛くて、
本当に癒されるわ~。どつかの誰かさんは大違ひね!」

「えへへ……」

素直に言つ事を聞くミントを思わず抱きしめたエステルは、わざと
らしくヨシュアを見ながら言つた。一方抱きしめられたミントは氣
持ち良さそうな表情をしていた。

「悪かったね、素直でも可愛くなくて。それより待たせるのも悪い
し、急いだ方がいいかもしないね。」

ヨシュアは弱冠拗ねた後、遠回しに速くナイルの所に行つた方が
いい事を提案した。

「そうね。じゃあ、行きましょつか!」

そしてプリネ達にミントを預けたエステル達はナイルがいるリベ

ール通信社に向かつた

第129話（後書き）

感想お待ちしております。

リベル通信社に着いたエステルとヨシュアはナイアルがいる2階に上がつて行つた。

（リベル通信社・2階）

「おーい、ナイアル。」

「お邪魔します。」

「……おお、やつと来たか。ドロシーのヤツ、珍しくちやんと云言できたみたいだな。」

階段の入口にいたエステルとヨシュアはナイアルに近付いた。

「そういえばお前ら、今日も勝ったそうじゃねえか。ドロシーのヤツがはしゃぎながら帰つて來たぞ。」

「えへへ、まあね。」

ナイアルの言葉にエステルは得意げに答えた。

「それでナイアルさん。例のことなんですけど……」

「おつと、さつそく本題かよ。ほれ……主だった連中の経歴は集まつたぜ。」

ヨシュアに尋ねられ、ナイアルは一冊の黒いファイルをエステル達に差し出した。

「これって……王国軍の？」

差し出されたファイルを見て、エステルは驚きながら尋ねた。

「ああ、機密度は高くないが一応持ち出し禁止の書類らしい。無理を言つて軍の知り合いに借りたんだから、他言無用だぜ。」

「了解しました。」

「それじゃあ、ここで読みませともうつわね。」

そしてエステル達はファイルを読み始め、最初にリシャールの経歴を読み始めた。

「リシャール大佐について

アラン・リシャール大佐。七耀暦1168年、リベル王国、ルアン地方で生まれる。士官学校を首席で卒業した後カシウス・ブライト大佐率いる独立機動部隊に配属される。

1192年の『百日戦役』においてカシウス大佐の部下として反攻作戦で多大な戦功をあげる。カシウス大佐が退役した後、軍作戦本部のスタッフに抜擢され組織改革に多大な功績を残した。

1201年、情報部の設立を提案。アリシア女王陛下の承認を得て情報部の初代司令に就任する。

「何というか……エリートっていう感じねえ。首席だつて、首席。リシャールと自分達が辿っている道のりが全然違う事にエステルは溜息を吐いた。

「確かにキレ者つて感じだからね。シード少佐から聞いたとおり、10年前の戦争で、父さんの部下だったのは間違いなさそうだ。」ヨシュアはエステルの言葉に頷きながら、シードから聞いた情報を思い出して口にした。

「うーん、父さんつてホントに大佐だったんだ……。そんなに偉かつたのに何で辞めちゃったのかしら……」

カシウスが軍の重鎮であつた事にエステルは驚き、何故カシウスが軍をやめたのか気になつたが、あまり考え込むのはやめて、次の人

物 カノーネについての情報を読み始めた。

「カノーネ大尉について

カノーネ・アマルティア大尉。七耀暦1175年、リベル王国、王都グランセルに生まれる。士官学校を優秀な成績で卒業後、軍作戦本部のスタッフに抜擢される。

1201年、情報部の設立と同時にリシャール大佐の推薦で情報部に異動。以後、リシャール大佐の副官として作戦指揮の補佐をする

立場にある。

「『優秀な成績で卒業』ってこれまたエリートって感じねえ。」

「任官されてから、リシャール大佐の下でずっと働いてきたみたいだね。忠誠心は堅いみたいだな……」

カノーネの経歴を読み終わったエステルは自分達にとつて嫌みに感じ、ヨシュアはリシャールに対するカノーネの忠誠心はかなりのものだと感じた。そして最後にロランスについての情報を読み始めた。

「ロランス少尉について

ロランス・ベルガー少尉。年齢、国籍不明。傭兵部隊『ジエスター獵兵团』に所属していたところを、リシャール大佐の招きに応じて情報部の一員となつた。それ以前の経歴は不明。

「あの仮面のヤツって……リベールの人間じゃないんだ。しかも元傭兵で経歴不明ってどーいうことよ?」

ロランスがリベール出身でない事や経歴すらわからない事にエステルは驚いた。

「……判らない。『獵兵团』といえれば最高ランクの傭兵部隊にのみ与えられる称号のはずだけ……」

「へー、そなんだ。戦闘のエキスパートとして大佐が引き抜いたのかしら?」

ヨシュアの説明を聞き、エステルは首を傾げながらロランスが情報部に来た経歴を推測した。

「うん……そうかもしれないね。『ジエスター獵兵团』……どこかで聞いたことがあるような……」

エステルの推測に頷きながらヨシュアは、聞き覚えのある獵兵团の名前に首を傾げていた。そして読み終わったファイルを閉じて、ナイアルに返した。

「ありがと、ナイアル。何となく敵の姿が見えてきたわ。」

「お役に立てて何よりだぜ。こちらも、資料を調べているついに面白いことが色々と判つてな。」

「面白いこと……ですか?」

ナイアルが言つた”面白い”という情報にヨシュアは首を傾げた。

「たとえば指名手配されている親衛隊のヨリア中尉だが……。士官学校で、カノーネ大尉と同学年だつたらしいわ。」

「へえ、そうだったんだ。」

「そのわりには、あの2人、あまり仲が良さそうには見えませんでしたけど……」

カノーネとヨリアの以外な共通点にエステルは驚き、ヨシュアはルアンの空港で2人の会話等を思い出し、あまり仲が良くなかった事に首を傾げた。

「何でも、お互い主席を争うライバル同士だつたらしくてな。文のカノーネ、武のヨリアと好対照な2人だつたらしい。」

「なるほど……何となく想像できますね。」

「ヨリアさん、凜として昔の騎士みたいだつたもんね。」

具体的な理由をナイアルから説明され、2人は納得した。

「それから……これは軍とは関係ないんだが。お前ら、『クローディア姫』という名前は聞いたことはあるか?」

「クローディア姫……。どこかで聞いたことがあるわね?」

「確か、海難事故で亡くなつた王太子夫妻の忘れ形見ですね。女王陛下のお孫さんにあるたる……」

ナイアルが尋ねた人物 クローディア姫について尋ねられたエステルは聞き覚えのある名前に首を傾げ、ヨシュアはナイアルに確認した。

「ああ、あまり有名じやないが、直系中の直系ともいえる女性だ。いつもは、グラントセル城の女王宮で暮らしてゐるらしいが……。その姫殿下の見合い相手をある人物が捜しているらしい。」

「見合い相手か……。お金持ちの家は、そういうのも珍しくない

つていうけど……。何だかちょっと氣の毒よね。リフィア達みたいに女王様自らが断つてくれたらしいのにねえ……」

「エステル、論点はそこじゃないよ。この場合、『ある人物』というのが問題なのですよね？」

「フフ、さすが鋭いじゃねーか。」

ヨシュアに尋ねられたナイアルは口元に笑みを浮かべた。

「え、その人物って……リシャール大佐のこと?」

「ほう、なかなか鋭いな。実際に、他国に人を派遣して有力候補を捗そうとしているのはリシャール大佐らしいんだな。」

エステルの指摘にナイアルは感心しながら説明した。

「やつぱり……。でも、おかしくない?なんでリシャール大佐がお姫様の結婚相手を探すわけ?」

「だから面白そうな匂いがプンプンするんじゃねえか。というわけで……そのあたりの事は頼んだからな。」

「へ……?」

いきなりナイアルに頼まれた事にエステルは首を傾げた。

「……明日の試合に勝つてお城の晩餐会に招待されたらそのあたりの情報を探つてこい。つまり、そういうことですね?」

「あ、なるほどね……。まったく、道理で氣前よく色々と教えてくれるわけだわ。」

ヨシュア尋ねた事で納得したエステルはいつもなら難癖をつけるナイアルがあつさり情報を自分達に開示した理由がわかり、呆れた。「これだけ調べてやつたんだ。ギブ・アンド・テイクは当然だろ。」

「確かに、色々と助かりました。」

「仕方ないわね~。何か判つたら教えてあげるわよ。」

「へっ、そう来なくっちゃな。まあ、お前に頼らなくともうまく行けば今日中にも……」

ナイアルがエステル達に何かを言いかけようとしたその時、通信機が鳴った。

ジリンジリン！ジリンジリン！

「おっと……」

そしてナイアルは受話器を取った。

「もしもし。こちら『リベル通信社』……。おお、お前か！…ずっと連絡を待つてたんだぜ。なに……今から？ああ、わかった。これからそつちで落ち合おう。」

「なになに、どうしたの？」

通信の内容が気になつたエスティルは尋ねた。

「ちょっとしたヤボ用でな。今から人に会うことになつた。」

「大変ですね。もう日が落ちるのに……」

夕方から仕事に入るナイアルにヨシュアは驚いた。

「もともと俺は夜型でね。それを、あのマイペース娘の新人研修をしてるうちに、朝型に変えられちまつたんだ……。って、そんな事はどうでもいいか。俺はこれから出かけるが、お前らはゆっくりしていけよ。」

「ん、わかつたわ。お仕事、がんばってね」

「お前らも明日の試合、相手があの”戦妃”だりうと絶対に負けるんじやねーぞ！」

エスティル達に応援の言葉を贈つたナイアルは出かけて行つた。

「さてと……あたしたちはどうしようか？」

「そうだね……。とりあえずギルドに寄つてからホテルに帰るとしようか。ナイアルさんが調べてくれたことを報告しておいた方が良さそうだ。」

「ん、りょーかい。」

その後エスティル達はギルドに向かつて、エルナンに試合の事やナイアルから手に入れた情報を報告してギルドを出るとすでに日が暮れていた……

感想お待ちしております。

「グラントセル南街区」

「わつ……。もうこんな時間だわ。」

「早くホテルに帰ったほうがよさそうだね。」

ギルドを出た時、すでに夜になっている事にエステルは驚き、ヨシニアは早くホテルに帰るよう提案した。

「おい、そこの君たち！」

その時、兵士達がエステル達に近付いて声をかけた。

「あれ……兵士さんたちどうしたの？」

兵士に声をかけられ、エステルは首を傾げて尋ねた。

「我々は巡回中の者だ。テロリスト対策の一環として本日から、夜間のパトロールを強化することになつてな。」

「それに伴つて、夜間は外出はなるべく控えてもらひつ事になつた。君たちも、早く家に戻りたまえ。」

「夜間の外出を控えろつて……ちょっと不便すぎるんじゃない？」

兵士達の言葉にエステルは顔を顰めて、文句を言った。

「これも上の決定なのでね。」

「申しわけないが従つてもらおう。といひで……君たちはどこに住んでいいるのかね？」

「僕たちは、北街区にあるホテルに滞在しています。武術大会の期間中、そこに泊まつているので……」

「武術大会の期間中……。待てよ、君たちの顔、どこかで見たような気が……」

ヨシニアの説明を聞き、兵士の一人がエステル達の顔が見覚えのある顔と気付き、よく見た。

「ああっー」の子たち、武術大会の決勝に勝ち進んだ出場者じゃないか！

「言われてみれば……」

そしてもう一人の兵士がエステル達が武術大会の決勝戦で出る出場者だと気付き、声をあげ、もう一人の兵士も片方の兵士の言葉を聞きエステル達の顔を見て頷いた。

「あ、兵士さんたち、見物してくれてるんだ？」

「はは、警備のついでにね。特に今日の試合は白熱の展開で興奮させられたよ。」

「明日は決勝戦なんだろう？ ホテルまで送つていくからゆっくり休まなきゃダメだぜ。」

「え、えっと……」

「わかりました。お言葉に甘えます。」

好感的になつた兵士達の態度にエステルは戸惑つたが、ヨシュアが代わりに答えた。そしてエステル達は兵士達にホテルのフロントまで送られた。

♪ ホテル・ローエンバウム♪

「えつと……送つてくれてありがとうございます。」

「どうもお世話様でした。」

ホテルのロビーまで送つてくれた兵士達にエステル達はお礼を言った。

「なあに、自分たちは君たちのファンだからな。」

「いくら同盟国の中の英雄の一人とはいって、毎年彼女に優勝されているからな。リベルで生まれた者として、同じリベル人である君達には勝つてほしいのだよ。」

「そうそう、モルガン将軍でさえ勝てなかつたもんな。でも、今年はそつちは4人で向こうは1人だ。もしかしたら勝てるかもしれないし、期待しているぜ。」

「まあ、そんなわけで君たちの活躍には期待してるよ。」

「明日の試合、頑張ってくれよな！」

「あはは……ジーも。」

「精一杯頑張ります。」

兵士達の応援の言葉にエステルとヨシュアは笑顔で受け取った。そして兵士達はホテルを出て行つて、巡回に戻つた。

「じゃあ、部屋に戻るうか。多分、リフィア達も戻っているだろ？ し。」

「そうね。ミントも首を長くして待つていてるだろ？ から、一端部屋に戻つてその後、プリネ達の所に行つてミントを迎えてこきましょうか。」

そしてエステル達は自分とヨシュア、ミントが泊まっている部屋に向かつた。

（202号室）

コトン！ ……パタパタパタ

エステルが部屋を開けようとすると、中から何か音が聞こえてきた。
「あれ……。今、何か物音がしなかつた？」

「…………」

部屋の中から聞こえて来た物音にエステルは首を傾げ、ヨシュアは厳しい目つきで扉を見ていた。

（……部屋に入ると同時に臨戦態勢のまま状況確認を。）

（えつ……！？）

ヨシュアの囁きにエステルは驚いた。

（たぶん、侵入者だ。爆発物が仕掛けられている可能性もあるから気を付けて。）

（ちょ、ちょっと……〔冗談でしょ？〕）

ヨシュアの忠告にエステルは信じられない表情で尋ねた。（頼むから僕の言つとおりにして……。何だったらここで待つても構わない。）

(じょ、[冗談！]覺悟はできていのからとつとの中に踏み込みましょ

!)

(……了解。)

そしてエステル達は武器を構えて、部屋に突入した。

「あ……」

「逃げられたみたいだね。でも、おかしいな……。人のいた気配がない……。トラップも……仕掛けられてないみたいだ。」

しかし部屋の中には誰もいなく、部屋 자체も散らかっている様子はなく綺麗なままだった。

「そ、そんな事までわかるの？」

部屋の現状を見て、トラップが仕掛けっていない事にまで気付いているヨシュアにエステルは驚いた。一方ヨシュアは窓の下に手紙が落ちているのを見つけ、それを拾つた。

「……どうやら置き土産はこれだけみたいだ。」

「それって……手紙？」

ヨシュアは手紙の封を切つて、文面を読んだ。

「『 今夜10時。大聖堂まで来られたし。くれぐれも他言無用のこと。』」

「……って、それだけ？大聖堂つて、西街区にある大きな教会のことよね。今夜10時つていうことはもうすぐか……」

文面の少なさにエステルは驚き、部屋にある時計を見て、指定している時間がかなり近付いている事に気付いた。

「…………」

一方ヨシュアは目を閉じて考え込んでいた。

「うーん、あやしさ大爆発だけど虎穴に入らずんばとも言つしねえ、ヨシュア。ここはお誘いに乗つてみない？」

「駄目だ！」

エステルの提案を聞いたヨシュアは目を開けて、大声で否定した。

「ど、どうしたの？」

急に大声を出したヨシュアにエステルは驚いて、尋ねた。

「ごめん、大声を出して……。ほら、さつき兵士たちが夜のパトロールを強化してゐるって言つてただろう? 西街区までは離れているし、見咎められる可能性が高いよ。」

「あ、忘れてた。うーん、だからといつて放つておくのも気持ち悪いし……」

ヨシュアの説明を聞き、街には兵士達が巡回している事を思い出したエステルはどうするか考え込んだ。

「だから、僕一人で行つてくるよ。」

「へつ……?」

そしてヨシュアの提案にエステルは呆けた声を出した。

「こういう時は、2人よりも1人の方が行動しやすいからね。兵士達をやり過ごしながら大聖堂までたどり着けると思う。」

「…………」

「様子を確かめるだけなら僕一人で充分だと思うんだ。だから君はここでミントと待つてて……」

「『ミント』？」

ヨシュアの説明を黙つて聞いていたエステルだつたが、ヨシュアを睨んで話を遮つた。

「え……」

「あたしだつて遊撃士のはしぐれよ。自分のことは自分で面倒見るし、足を引っ張らない自身だつてあるわ。もつともらじここと言つてもこまかされないんだからね。」

「エステル……僕はそういうつもりじゃ。」

「あたしを信用してないワケじゃないのは分かつてる。心配していくついるんだろうけど多分、それだけでもない……。何か心当たりがあるつてトコ?」

「…………。そんな素振りを見せてないのにどうしてそこまで分かるんだい?」

ヨシュアは凶星を刺されたかの表情でエステルに尋ねた。

「そりゃあ、あたしはヨシュア観察の第一人者だもん。何となく分かつちやうんだってば。」

「…………。（…………）」

ヨシュアはエステルに聞こえないような声で呟いた。

「えつ？」

「わかった、もう止めないよ。指定の時間までもうすぐだし、急いで大聖堂に向かうとしよう。」

「あ……うん！」

「でも、約束して欲しいことがある。何かあつたら必ず僕の指示に従つてほしいんだ。一瞬のミスが命取りになるかもしない。」

「うん……わかった。それじゃあ急ぎましょ。」

そしてエステル達はプリネ達に事情を話して、エステル達が戻つて来るまでミントを預かってもらい、ホテルの外に出て巡回の兵士達の目を掻い潜つて大聖堂に向かつた……

第131話（後書き）

感想お待ちしております。

その後エステル達は巡回の兵士達の田を上手く掻い潜り、なんとか大聖堂の前に到着した。

(やつた、何とか到着したわ！)

大聖堂を目の前にエステルは安堵の溜息を吐いた。
(気を抜かないで、エステル……。先に僕が入るから後からついてきてくれ。)

(う、うん……)

そしてエステル達は大聖堂へ入つて行つた。

（七曜教会・大聖堂内）

「…………ごめん、エステル。僕の勘違いだつたみたいだ。」「え……？」

聖堂に入つて急に謝つたヨシュアにエステルは首を傾げた。

「…………フフ。来てくださいましたか。」

そして奥の方から女性の声が聞こえた。

「あなたは…………」

「ひょつとして…………周遊道で会つたシスター！？」

奥にいたのはなんと周遊道でジンといつしょに助けたシスターだった。

「その節はどうもありがとうございました。よく、あんな伝言でここまで来て下さいましたね。」

「あの手紙、シスターのものだつたんだ……。でも、一体どうしてこんな思わせぶりなこと……？」

「なるほど…………ようやく気付きました。貴女だつたんですか。」

「へつ…………？」

シスターの正体がわかつてないのに見えるヨシュアにエステルは

首を傾げた。

「フフ……。ヨシュア君はなかなか鋭いな。では、失礼して……暑苦しい服は脱がせてもらおう。」

納得しているヨシュアを見て、口元に笑みを浮かべたシスターは顔の部分を隠しているヴェールを外して顔を露わにした。

「ああっ！？」

エステルは露わになつたシスターの顔 親衛隊隊長コリア中尉を見て、驚いた。

「王室親衛隊、中隊長。コリア・シュバルツ中尉だ。久しづりだな。エステル君、ヨシュア君。来てくれる信じていたよ。」

「お久しづりです、コリア中尉。ルーアンの発着場でお別れして以来ですね。」

「ああ……そうだな。さほど経つていないのでずいぶんと昔のような気がするよ。」

「ちょ、ちょっと待つて……。なんでコリアさんがそんな恰好しているわけ？それと、どうしてあたしたちをこんな場所に呼んだりしたの？」

香気に世間話をしているヨシュアとコリアの会話を遮つて、エステルは一気に質問をした。

「一つ一つ答えさせてもらおう。まず、この恰好だが……七耀教会はリベル王家と昔から深い繋がりがあつてね。リシャール大佐の陰謀によつて追われることになつた我々を色々と助けてくれているのだよ。」

「そうだったんだ……」

「もう一つの疑問だが……君達を呼んだのは他でもない。明日の決勝で勝利したら城の晩餐会に招待されるだろう。その時に、グランセル城にいる女王陛下と接触して欲しいのだ。」

「…………」

ユリアの頼みを聞き、エステルとヨシュアはお互いの顔を見合せた。

「虫のいい頼みなのは判っている。だが、手配された我々にとつて城内に入り込む術は存在しない。もはや君達だけが頼りなのだ。」

ユリアは辛そうな表情で事情を説明し、エステル達に頼んだ。

「…………えっと。なんというか偶然ねえ。」

「僕たちは、陛下と会うために武術大会に出場しているのです。」

「え…………？」

エステルとヨシュアの言葉を聞き、ユリアは首を傾げた。そしてエステル達はレイストン要塞での事件とラッセル博士から女王あてに伝言を預かっていることを話した。

「そんな事があつたのか……。おお女神よ。大いなる慈悲に感謝します……。ならば、私の方から君達に頼むことはただひとつ。苦境にある陛下の相談に乗つて差し上げてほしいのだ。」

「うん、もちろんそのつもりよ。」

「内政不干渉が原則とはいえ、この事態はさすがに見過^{ハイドス}させません。できる限りのことをさせて頂くつもりです。」

ユリアの頼みにエステルとヨシュアは力強く頷いた。

「かたじけない……。それでは、これを持つていいくといいだらう。」

そしてユリアはエステルに手紙を渡した。

「城の女官長をされているヒルダ夫人という方への紹介状だ。たぶん陛下は、あの特務兵たちに厳重に監視されているとは思うが……。身の回りを任せている夫人なら君たちを陛下に引き合わせることが出来るかもしね。」

「へへ、そんな人がいるんだ。」

「わかりました。その人を捜して相談してみます。」

「よろしくお願ひする。フフ……情けないことだな。」

「へ……？」

目を閉じて自嘲するユリアにエステルは首を傾げた。

「奸計^{かんけい}におとしいれられて守るべき方を守れなかつた屈辱^{くじく}……。たとえこの命が果てようとも奸賊^{かんぞく}を討ち、陛下をお救いすることで晴らさんと誓つたばかりなのに……。君たちに力を借りるしかない無力な自分が情けなくてね……」

コリアは悔しそうな表情で自分の拳に力を入れた。

「そ、そんなに自分を追い詰めなくとも……。それに申しわけないけど明日の試合で、あたしたちが負ける可能性だつてあるんだし……」

「フフ……君たちなら例え相手があの”戦妃”殿でもきっと大丈夫な氣がするよ。あのカルバードの武術家殿も大した腕前の持ち主だが……。何といっても君達はあのカシウス大佐の子供なのだから。」「ええっ、コリアさんも父さんのこと知つてるの！？」

コリアもカシウスを知つていた事にエステルは驚いて尋ねた。

「王国軍^{くわくぐん}きつての智将にして『剣聖』と呼ばれた最高の剣士……。退役前に、士官学校の武術教官をなさつていた時に指南して頂いた。私の剣の師匠とも言えるお方さ。」

「し、信じられない……。父さん、棒術しか使わないのに。」

棒術の使い手であるはずのカシウスがコリアに剣術を教えていた事にエステルは驚いた。

「退役して遊撃士となつた時に剣は捨ててしまつたらしいな。ただ敵を断つだけでなく敵を挫^{くじ}き、弱きを扶^{たす}ける……。そういう精神の象徴として棒術を選ばれたと聞いている。」

「そうだつたんだ……。あたしの棒術にそんな意味があつたなんて

自分の武術に込められている意味を知つたエステルは驚きの溜息を吐いた。

「その精神は、間違いなく君にも受け継がれていると思うよ。誇りに思つてもいいんじゃないかな。」

「ヨシュア……」

「カシウス大佐が鍛えた君たちだ。必ずや優勝できると信じている。

「えへへ……。ユリアさんにそう言つてもうりゃると何だか自信がわいてきちゃつた。」

「全力を尽くします。」

ユリアの激励にエステルは笑顔になり、ヨシュアは力強く頷いた。その時、大聖堂の扉がノックされ、兵士の声が聞こえて来た。

「……失礼、王都警備隊です！現在、テロ対策の一環として主要施設の見回りをしております。夜分遅くに申しわけありませんが中を改めても構わないでしょつか？」

（やばつ……）

巡回の兵士が来た事にエステルは焦った。

「まあ……」苦労をまです。少々お待ちください。すぐに鍵を開けますから。」

兵士に答えたユリアは再びヴェールをかぶつて、顔があまり見えないよう隠した。そしてエステル達に小声で囁いた。

（祭壇部屋の方に外に通じている裏口がある。君たちはそこから行くといい。）

（うん、わかったわ！）

（ユリア中尉もどうか気を付けてください。）

そしてエステル達は裏口から大聖堂を出て、巡回の兵士達に見つからないようにホテルに向かつ途中で百貨店の近くにあるベンチで休憩した。

（グランセル東街区）

「はあ……なんか巡回を避けているうちにこんな所まで来ちゃつたわね。もう、こっちの方には兵士はいないみたいだけど……」

「うん……人の気配はないね。そもそも夜間のパトロールも終わり

みたいだ。少し休んでからホテルに戻ろうか。

「オッケー。」

ヨシュアの提案に頷いたエステルは近くのベンチに座った。
「う～、色々ありすぎてなんか頭がパニック状態かも……」「はは……確かに。まさか大聖堂で待っていたのがコリア中尉だと
は思わなかつたな。」

「あ、そーいえば……。結局、ヨシュアの心当たりはコリアさんじ
や無かつたのよね？ ひょっとして……前に会つたことのある人？」

「…………それは…………。…………」

エステルの疑問にヨシュアは辛そうな表情で俯いた。

「あ……。」めん、今のナシ。ルール違反、ルール違反。」

「エステル……」

事情を察してあまり深く追求しないエステルをヨシュアは驚いた表
情で見ていた。

「ヨシュアが話す気になるまで出会つ前のことは聞かない……。気
を付けてはいるんだけどついつい忘れちゃうのよね～。」

「…………。エステル、僕は……僕は、君と旅し
てきて少しば強くなれたと思つんだ。」

「え……？」

唐突に話を切り出してきたヨシュアにエステルは首を傾げた。

「同じ空の下で生きている様々の人々の、さまざま人生……響き
合う人々の想いと想い……。そんなものに触れることで亡くしたも
のを取り戻せる……。そんな気がしていたんだ……」

「…………ヨシュア……？」

「…………たぶんそれは錯覚なんだ。だけど、それでも僕は……。君と
一緒にいられることを感謝したいと思っている……。この空と、父
さんと……何よりもエステル……君に」

「ヨシュア……」

「だから……約束する。今回の事件が片づいて父さんも無事に帰つ

てきたり……。僕の過去……君と出合つ前のことを話すよ。

「ホ、ホント……？」

今まで何も語らなかつたヨシュアの過去を自分から話すと言つたヨシュアをエステルは信じられない表情で驚いた。

「うん。この星空にかけて約束する。」

「…………。よし、決めた！」

「エステル……？」

決意の表情でベンチから立ち上がつたエステルをヨシュアは不思議そうにしていた。

「何でいうか……モヤモヤが吹つ飛んじゃつた。あたしも、全部片づいたらヨシュアに話すことがあるから」

「え……ああ。もしかして、例の悩みのこと？」

「そうそう、それそれ。えへへ……覚悟してもうりづからねつ……」

「覚悟つて……こつでも出来るつもりだけど。だつたら今すぐにでも……」

「ダ、ダメだつてば一やつぱりそういうのつてタイミングがあると思つし……。うーん、シチュエーションはすこくいい感じなんだけど……」

「????よく分からぬけど……。落ち着いて話をするためにも明日の試合は負けられなくなつたね。」

何故か顔を赤らめているエステルをヨシュアは不思議に思つたが、気を取り直して言つた。

「モチのロンよ。……例えお母さんの命の恩人だつと、あたし達が行く道を阻むのならぶつとばす！」

「カーリアンさんが母さんの命の恩人……？エステル、それってどういう事なんだい？確かに話によると母さんの命を救つたのはリフィアと”闇の聖女”さんじやなかつたのかい？」

エステルの絶叫に驚いたヨシュアはカーリアンがレナの命の恩人である事に首を傾げ、尋ねた。

「あ、うん。本当はお母さんは聖女様やリフィアを含めて6人の人達に命を救つて貰つた事を、カーリアンの顔をよく見て昔を思い出したらそうだつたんだ。」

「それって一体どういう事なんだい？」

「うん……お母さんはあたしを庇つて崩れて来た瓦礫に埋もれたの。

……それであたしは助けを求めたんだけど、誰も答えてくれなくてね……今、考えたらみんな逃げるのに必死で答える余裕なんてなかつたのよね。」

「……それで？」

遠い目で昔を語るエステルの話を聞き、ヨシュアは続きを促した。

「……お母さんが死んじゃうかもしない事に絶望していた時に、急に目の前が光つたと思うと、そこには6人の人達がいたんだ。」

「それつてもしかして……」

なんとなく話の展開がわかつて来たヨシュアは確認するようにエステルに尋ねた。

「そう。リウイ達。…………道理でリウイやカーリアンに見覚えがあるはずよ。…………最初あたしは何がなんだか、わからなかつたけどお母さんを助ける事で頭が一杯になつていたから気にせず、リウイ達に助けを求めたんだ。…………それでリウイ達が瓦礫をどかして、聖女様とリフィアがお母さんの傷を治療してくれたつて訳。」

「そうだったんだ……けど、今エステル、6人つて言つたよね？　後の2人は誰なんだい。」

「1人はエヴリーヌ。昔を思い出してリフィア達に尋ねたら、あの後あたし達を襲おうとしたエレボニア兵達を倒したんだつて。」

「……後1人は？」

「えつとね……確かに背中に羽が一杯あつた人だつたな……リウイがその人の事をファー……なんとかいう名前で呼んでいたわ。」

「羽があつて名前がファー……まさかメンフィル大將軍、ファー・ミシリスかい！？」

うろ覚えのエステルの情報を整理した後、ある人物の事を思い当た

つたヨシュアは驚いた表情で尋ねた。

「あ、そうそう。そんな名前だったわ。……とにかくその6人があたしとお母さんにとって人生の恩人なわけ。いつか恩返しをしたいと思つていろんだけど、どんな恩返しをすればいいか、中々思い付かないのよね。……」

「…………僕が思つに、エステルはもうリフィア達に恩返しをしたと思つてているけどな。」

「え？」

ヨシュアの言葉にエステルは首を傾げた。

「最初にリフィア達と出会つた時、言つてたじやないか。メンフィルが掲げている理想は『人間と闇夜の眷属の共存』だつて。それでエステルは昔から闇夜の眷属の人達と仲がいいだろう？これつて、リフィア達の手伝いをしているようなものじやないかな？」

「…………うーん………… そうなのかな？ あたしにとつては当然の事だつたんだけど。」

ヨシュアの説明にエステルは考えこんだ後、首を傾げた。

「彼女達がリベールにとつて救世主である事も関係しているだろうけど、異種族との交流はそんな簡単なものじやないよ。エステルはそれを先頭に立つて、異種族の人達と交流をしている所を今まで出会つた人達に見せてたじやないか。それつて中々できるものじやないと思うよ？」

「………… 要は今まで以上に闇夜の眷属の人達と仲良くなればいいって事ね！」

ヨシュアの説明に納得したエステルは笑顔で言つた。

「後は明日の試合相手であるカーリアンさんには今出せる全ての力を見せる事が、カーリアンさんにとつての恩返しになると思うよ？ リフィア達の話を聞いた感じ、カーリアンさんは戦う事が一番好きだそだからね。」

「………… よし！ それを聞いたらさらにやる気が出て来たわー！ あの

時助けてくれたお陰で、あたしはここまで強くなつた事をカーリア
ンに見せてやるわ～！」

「うん、そうだね。じゃあ、ホテルに戻ろうか。ミント達も首を長
くして待つていてるだろうじ。」

「そうね。」

そしてエステル達はベンチから離れて、ホテルに向かつた。

「…………ふう。大した事をしたつもりじゃなかつたのに、あんな風
に思われていたなんて……ね。なんだか、体がくすぐつたいわ～。」
エステル達が去つた後、エステル達が座つていたベンチよりやや離
れた木にもたれかかつて、隠れて話を聞いていたカーリアンはエス
テル達を見送つた後、苦笑していた。

（…………にしても、あの子からなんとか、知つてゐる雰囲氣があつ
たのよね…………確かにあの雰囲氣は…………つて、そんな事がある訳ない
か。）

エステルから漂つっていた僅かな雰囲氣にカーリアンは”幻燐戦争”
の戦友であつたある2人の人物の顔が思い浮かんだが、すぐに自分
の考えを否定した。

「…………ま、何にせよ明日の試合が楽しみね 大会が終わつても面白
い事がありそудだし、今年はいろいろと楽しみね」

そして口元に笑みを浮かべたカーリアンはその場から去つた。

そして翌日、エステル達はリフィア達と共にアリーナに向かつた……

第132話（後書き）

感想お待ちしております。

「グラシアリーナ・ホール」

「さて……いつしょについて行けるのはここまでのようなだな。」

エステル達とアリーナに入つたりフィアはホールについて、呟いた。

「ママ！それにみんなもがんばってね！ミント、一杯応援するね！」

！

「あたしもミントちゃんといっしょに精一杯応援させてもらいます。

」

「ありがとう、2人とも。」

「2人の期待に答えるよう、精一杯がんばるね。」

ミントとツーヤの応援の言葉にエステルとヨシュアは笑顔で頷いた。
「フツ……こんな可愛いリトルレディ達に応援してもらえば、否
が応でも力が出るものだね。」

「ハハ、せつかく応援してくれるのだから、期待には答えないとな。

オリビエは酔いしけつたかのよつた表情で答え、ジンはオリビエの
言葉に苦笑しながら頷いた。

「最後まで諦めなければ、きっと勝機はどこにあると思います。
だから、頑張つて下さい！」

「ん。あいつに勝てたら、エヴリースも一杯褒めてあげるね。」

「うむ！お前達の強さにあの戦闘狂が驚く所を楽しみにしているぞ

！」

「3人共、ありがとう！絶対、勝つて見せるわー！」

プリネ達の応援の言葉に頷いたエステルは口元に笑みを浮かべて答
えた。

「では余達は観客席に行くか！」

「はーい！」

「ん。」

「「はい。」」

そしてリフィア達は観客席に向かつた。リフィア達を見送つたエス
テル達も控室に向かつた。

（グランアリーナ・選手控室）

「は～、あしたたちだけだとメチャメチャ広く感じるわねえ。」
エステルは自分達しかいない控室を見渡して言った。

「団体競技や、サークルなんかも出来るよう造られた場所だからね。
昔は、大型魔獣との戦いなんていうイベントも行われていたみたい
だよ。」

「へ～、だからこんなに大きな控室になつてるわけね。」

ヨシュアの説明に頷いたエステルは控室の広さに納得した。
「帝都のオペラ劇場に較べると設備の面では物足りないが……。屋
外コンサートなんていうのも悪くないかもしれないねえ。」

「何の話よ、何の……」

訳のわからない事を言つオリビエをエステルは呆れた表情で見てい
た。

「しかし、今日はじつぜん早く来すぎちまつたようだな。考えてみ
りや一試合だけだから始まる時間は遅いはずだ。」

「え、そうなの。うー、試合があるまでただ待つてるのは退屈かも
ね。」

……

ジンの説明を聞き、エステルは溜息を吐いた。

「だったら、試合が始まるまで場内を散策して来ようか？」

「ん、そうね。ジンさん、オリビエ。あしたたち散歩に行つてくる
わ。」

「おー。時間までは戻つてこいよ。」

ヨシュアの提案に頷いたエステルはジン達に伝えた後、一端控室を
出て行つた。

「…………」

「へえ。どういう風の吹き回しだ？お前さんのことだからてっきりついていくと思つたが。」

控室を出て行くエスティル達に着いていかず、黙つているオリビエをジンは珍しく思つて、尋ねた。

「いやね、2人の雰囲気が少し変わったような気がしてね。あれは何か進展があつたとみたね。」

「ほう、よく見ていいるじゃないか。確かにあの2人、この大会に妙なプレッシャーを感じていたみたいだが……。今日はどこか吹っ切れたようないい表情をしてやがつたな。いやあ、若いモンはうらやましいね。」

オリビエの観察眼にジンは感心した後、笑つた。

「でも、まだまだ仕込みは不十分といったところかな。もう少し进展した方が美味しく頂けるにちがいない。フフ……からかい甲斐がありそうだ。」

「やれやれ、悪趣味だねえ。」

オリビエの趣味の悪さにジンは呆れて、溜息を吐いた。

「ゾクッ……」

その頃、控室を出たエスティルが悪寒を感じたのか、突然身を震わせた。

「どうしたの？ひょっとして体調が悪い？」

エスティルの様子を見て、ヨシュアは首を傾げて尋ねた。

「ううん……。何だか邪悪な意志を感じて……。人をダシに楽しんでやううとう調子にのつたヨコシマな意志を……」

「……なんとなく誰だか見当は付きそうだね。」

エスティルの言葉から、ヨシュアの脳裏には控室で自分達の事で何か言つているであろうオリビエの姿が浮かんだ。

「グランアリーナ・ホール」

「おお……。そこにいるのはエステル君とヨシュア君か！」

「ああ、クラウス市長！？」

「どうしてこんな所に……？」

観客席を廻り、観客席にいたアルバやクルツ達に挨拶をしたエステル達がホールまで戻ると、そこにはロレントの市長 クラフスがエステル達を見つけて、エステル達の所に来た。

「いやあ、久しぶりじゃ のう。シェラザード君から話を聞いて王国各地を旅しているのは知っておったが……。2人とも、しばらく見ないうちにいい顔つきになつたじやないか。」

「はは……ありがとうございます。」

「つーん、自分じゃあんまり分からぬけど……。市長さんの方は相変わらず元気そうね。ちょっと安心しちゃつたわ。」

クラウスの賛辞にヨシュアやエステルは苦笑しながら答えた。

「はは、まだまだ若い者には負けてはおれんよ。それより、シェラザード君からリフィア殿下達と旅をしていると聞いて、最初は驚いたぞ。」

「あ、やつぱり市長さんはリフィア達の事を知つてゐるんだ。」

「つむ。……リウイ皇帝陛下も含め、わし達ロレントの住民は10年前からメンフィル帝国の方々に本当にお世話になつてゐる。君達が陛下直々から依頼を受けていると聞いて、驚いたと同時に君達の事を市長……いや、リベルに住む民の一人として誇りに思つたよ。」

「あはは……さすがにそれは言い過ぎよ。」

「僕達は遊撃士として、依頼を受けただけですから。」

クラウスの褒める言葉にエステルは苦笑し、ヨシュアは謙遜して答えた。

「はは、多分そんな所を陛下が気にいられて依頼を君達に出したのかもしないな。それよりも、武術大会に出場して決勝まで行つた

「いや、そうじゃないんだ。実は、グランセル城の晩餐会に突然、招待されてしまつてな。それで、今朝の定期船で王都に到着したばかりなんじゃ。」

「え、見物のためにロレントから来ててくれたの？」

「武術大会を見るためにロレントからわざわざ王都に来たクラウスをエスティルは驚き、尋ねた。

「いや、そうじゃないんだ。実は、グランセル城の晩餐会に突然、招待されてしまつてな。それで、今朝の定期船で王都に到着したばかりなんじゃ。」

「お城の晩餐会！？」

「なるほど…… そうだったんですねか。その晩餐会、デュナン公爵に招待されたものじゃありませんか？」

「よく知つておるのう？ 元々、生誕祭の式典には夫婦で出席するつもりじやつたから近いうちに来ていたはずじやが……。いきなり軍の女性士官がやって来て晩餐会に出るよう要請してきてなあ。」

（その女性士官つて……）

（カノーネ大尉だね、きっと。）

クラウスを招待した女性士官に思い当たつたエスティルとヨシュアは目配せをした。

「ただ、ミレーヌのやつは旅行の準備が整わなくてなあ。仕方がないでのわしだけ先に来たというわけじや。」

「そつか……ミレーヌおばさんは来てないんだ。」

「あの、市長。実は僕たちも、もしかしたらその晩餐会に出るかもしれません。」

「ほ……？」

ヨシュアの言葉にクラウスは驚いた。そして2人は公爵の提案で、武術大会の優勝者が晩餐会に招待されることを説明した。

「なるほど……。そういう事になつていたのか。陛下がご不調の折の晩餐会などあまり出たくなかったが……。君たちが一緒なら気が紛れるといったものじや。こりやあ、相手がロレントに恩人の一人のカーリアン様とはいえ、君たちには勝つてもらわなくてはなら

んのう。」

「あはは……うん、わかつたわ！」

「（）期待に添えるよう頑張ります。」

「頑張りたまえ。…………おお、そうだ。レナさんからエステル君に伝言を頼まれているんだつたな。」

「お母さんから？一体何を伝えるように言われたの？」

母から伝言がある事にエステルは首を傾げた。

「うむ。…………では伝えるぞ。…………『エステル、何でも娘ができたそうね？帰つたらじつくり！説明してもらうわよ？』だそうじゃ。」「なんでお母さんがミントの事を知っているの！？」

レナからの伝言を聞き、エステルはレナがミントの事を知っている事に驚いた。

「多分、アイナさんが伝えたんじゃないかな。キリカさんがミント達が僕達のサポートになつた事を他の受付の人達に伝えたと思うし。」

「あ、そつか。」

ヨシュアの推測にエステルは納得して、頷いた。

「よければ、わしにも事情を説明してくれんかの？」

（……どうしよう、ヨシュア？）

クラウスに尋ねられ、エステルは小声でヨシュアに相談した。

（さすがにミントが”竜”である事は黙つていたほうがいいよ。僕がちょっと脚色を変えた説明をするから、エステルはそれに頷いて。）

（りょーかい。）

ヨシュアの提案にエステルは頷いた。

「実は……」

ヨシュアはクラウスにミントが竜である事を伏せて、ミントの種族が本人が認めた人物を生涯を共にする事と、ミント自身はまだ幼いのでエステルの事を親のように慕つて居る事を伝えた。

「なるほど、そうじやつたのか。”闇夜の眷属”にも色々あるのじやな。……とりあえず、ロレントに帰つたらレナさんにちやんとした説明をしないと駄目じゃぞ? わしに言伝を伝えた時、レナさんは笑顔だつたが、なんとなく怒つてゐる風にも感じられたぞ?」

「あちやー……多分お母さん、相談もなべミントを引き取つた事に

怒つてゐるわ……ブルブル……！」

クラウスからレナの様子を伝えられたエステルはその場で身を震わせた。

(母さんには包み隠さず、正直に話さないと駄目だね。)

(わかつてゐるわよー……ううー……気が重いわー……)

「まあ、わしにはあまり詳しくはわからんが、とにかく君達ブライト家に家族が増えたといつ事でいいかの?」

「うん。そんな感じよ。」

クラウスの言葉にエステルは頷いた。

「つむ、そうか。では、帰つたらそのミント君といつ娘を君達ブライト性にして、ロレント市民として登録しておくよ。」

「え……ミント自身にも会つていないので……？」

クラウスの提案にエステルは驚いて、尋ねた。

「エステル君を親として慕つてゐる娘だ。きっと、良い子なのだろう。レナさんからも手続きを頼まれてゐる事だし、心配いらんよ。」「助かります。」

「ありがとう、クラウス市長!」

クラウスの好意にエステル達はお礼を言つた。

「それじゃあわしは観客席の方に行つておるよ。頑張つてな。エステル君、ヨシュア君。」

エステル達の様子には気付かず、クラウスは2人に激励の言葉を贈つた後、観客席に向かつた。

「まさか、クラウス市長も晚餐会に出席するなんて……。つて事は、メイベル市長なんかも呼ばれてるのかしら?」

「可能性は高そうだね。たぶん、有力者たちを集めて話があるんじやないかな。」

「うーん……まあいつか。何とか試合に勝つて晩餐会に出れば分かるもんねー。」「うふ、そうだね。そろそろ控室に戻らつか。もひすく開場の時間

だと思ひよ。」

「ん、りょーかい！」

ヨシュアの提案に頷いたエステルは、ヨシュアと共に控室に向かつた……

ちょっとしたアンケートです。ミントのカシウスとレナの呼び方に悩んでいます。現在は普通に『お祖父ちゃん、お祖母ちゃん』か『カシウスパパ、レナママ』です。よければ感想にてどちらがいいか、お答え下さい。個別で違う呼び方でもいいです。あるいはもつといい呼び方があれば、そちらも書いて下さい……感想お待ちしてります。

その後、エステル達は控室に戻つて来て、静かに待つていた。しばらく待つていると、リシャールやカノーネ、フイリップを伴つたデュナンが観戦席に現れた。

（グラランアリーナ・選手控室）

「あ……。今日はリシャール大佐も公爵と一緒に来てるみたい！」リシャールの姿を確認し、エステルは驚いた。

「そうだね……。公爵のお供のついでに噂に聞くカーリアンさんの実力がどれくらい凄いのか見に来たかもしねないね。」

ヨシュアはエステルの驚きに頷きながら、リシャールが現れた理由を推測した。

「ほう、あれが^{おまた}巷で人気の王国軍情報部のリーダーか。男前だが、風格を感じさせる、なかなかの人物みたいだな。」

「まあ……確かにそうなんだけどね。」

リシャールが漂わせている風格や容姿を見て、ジンは感心していたが、リシャール達の真実を知っているエステルは複雑そうな表情で溜息を吐いた。

「ふむ、ボースで見かけた時からさらなる風格を漂わせるようになつたみたいだね。フツ、こいつなつては仕方ない。このオリビエ・レンハイムのライバルと認定しようじやないか。」

「あんたにライバル視されてもねえ。」

オリビエの自意識過剰な発言にエステルは呆れて、ジト目でオリビエを見た。

「……始まるみたいだよ。」

審判がアリーナに現れたのを見て、ヨシュアはもうすぐ試合が始まる事を全員に言った。

「皆様……大変長らくお待たせしました。これより武術大会、本戦最終日を始めます！予選開始から1週間にわたって開催されてきた武術大会ですが……本日をもちましていよいよ最終日となりました。勝利と栄光を掴むのは一体、どちらのチームなのか……。それでは、決勝戦のカードを発表させていただきます。南、蒼の組 カルバード共和国出身。武術家ジン以下4名のチーム！北、紅の組メンフィル帝国出身。メンフィル帝国軍所屬。闇剣士カーリアン選手以下1名のチーム！」

「よっしゃあ、出番ね！」

「いよいよだ……」

「フツ、今回ばかりは本気で行かせてもらひつよ。」

自分達の出番が来た事にエスティル達は覚悟を決めた。

「泣いても笑つてもこれが最後だ……。気合を入れていくぞ！」

「うん！」

「はい！」

「ボク達の勝利と言ひ名のフィナーレで決めようか！」

ジンの号令に頷いたエスティル達はアリーナに向かつた。

（グラランアリーナ・観客席）

「あーママ達が出て來た！」

「いよいよ、始まるみたいだね、ミントちゃん。」

門から出て來たエスティル達を見て、ミントは声をあげ、ツーヤは緊張しながら言つた。

「ねえ、ツーヤちゃん！ドロシーさんがいる所で一緒に応援しない？そうしたらミント達の応援の声がママ達に届くかもしれないし…」「え？えっと……」

ミントの提案にツーヤは戸惑い、プリネを見た。

「私達はここで応援しているから、行つてらっしゃい。」
「はーい! 行こつ、ツーヤちゃん!」

「うん!」

そしてミントはツーヤと手を繋いで、観客席の一番前で陣取つてゐるドロシーの傍に行つた。

「フフ……相変わらずあの子達は元気ですね。…………？お姉様方？そんな難しい顔をしてどうしたのですか？」

天真爛漫なミントとそんなミントと仲がいいツーヤに微笑んだブリネは、考え込んでいるリフィアとエヴリースに気付き、首を傾げて尋ねた。

「…………お前はこの気配に気づかないのか、ブリネ？」

「え？…………！？この神聖な気配は…………まさか！？」

リフィアの言葉にブリネは何の事かわからず、首を傾げた後その場で集中し、感じられた気配に驚いた。

「…………この気配、昨日の奴と同じだね。…………とつ！…」

エヴリースはいきなり武器を構えて、一本の矢を空に向かつて放つた！空に向かつて放たれた矢は何かに当たり、エヴリースの傍に落ちて消えた。

「あ、危ないわね～。知らない仲でもないのに、いきなり攻撃するのはやめてよね！」

そして空からニールがリフィア達の所に降り立つた。

「やはり天使！…それも上級を冠する能天使がどうしてここに……

ブリネはニールの姿を見て、文献に伝えられている天使の種族を思い出し、驚いた。

「ぬ？ お主はセリカの使い魔だった天使ではないか。」

「…………道理でエヴリースやリフィア達に襲いかからなかつた訳だ。リフィアはニールの姿を見て驚き、エヴリースは自分達を忌み嫌つている天使が何故、何もして来なかつた理由に納得した。」

「久しぶり……あら？ 貴女は？ 見ない顔ね。」

「…………メンフィル第一皇女プリネ・マーシルンです。父は誇り高き闇王、リウイ・マーシルン。母は混沌の女神アーライナの神格者、ペテレーネ・セラです。」

プリネはニールを警戒しながら、自己紹介をした。

「フフ……そんなに警戒しなくても、何もしないよ。我が名はニール・デュナミス。これでもセリカの使い魔をしていた身だから貴女達、闇夜の眷属の事を嫌つていないよ。」

自分を警戒するプリネをニールは苦笑しながら答えた。

「セリカ…………まさか、”神殺し”セリカ・シルフィル！？」ニールから出て来たある人物に思い当たつたプリネは天使であるニールが現神が忌み嫌つている神殺しに仕えていた事に驚いた。

「久しいな。どうしてお主がここにいる？」

「フフ……あのエステル・ブライトという少女がニールを従える器であるかどうかを見極めに来たの。」

リフィアの疑問にニールは微笑みながら、答えた。

「…………じつちの世界に来るには当然、エヴリーヌ達のお家を通つて来ないと来れないはずだけど？」

「そんな警戒をしなくとも、正規の手続きを取つて、リウイ皇帝陛下に会つて許可は頂いているよ。だからそんな怖い顔で睨むのをやめてくれない？」

自分を睨んでいるエヴリーヌにニールは異世界に来た方法を説明した。

「今、エステルがお主を従える器であるかと言つたが、まさかお主

……」

「ええ。今度の新たな主はあのエステルという娘にしようかと、考
えているの。」

リフィアの言葉の続きを答えるかのように、ニールは頷いた。

「…………どういう風の吹きまわし？ 天使が人間に仕えるなんて。そ
れもエヴリーヌ達、”闇夜の眷属”と親しくしている人間に。」

エヴリーヌは人間であり自分達、闇夜の眷属と仲がいいエステルに仕える事を考へてゐるニールを怪しがつて、尋ねた。

「どういも何もニールはただ、強い人間が好きなだけだよ。それに異種族から慕われている人間なんて、面白そうじゃない

「は、はあ……それでエステルさんは貴女のお眼鏡に適つたのですか？」

ニールの答えにプリネは戸惑いながら、尋ねた。

「それを今日、見極めるつもりよ。……さて、さすがに天使であるニールの姿を他の人達に見られると騒ぎになりそうなので、ニールは空で観戦するので失礼するね。」

そしてニールは空へ飛び上がり、観客達が見えないとこままで上がつて行つた。

「フフ……相変わらずエステルには驚かされるな。まさか天使にまで気にいられるとはな。」

「そうだね。テトリ達の主が強い事に興味を示して、話を聞いている内にテトリやパズモに神殺しの剣技がどんなものかを聞いて、自分の技として使えないか真似しようとしていたのも驚いたけど。」

「それがエステルさんなのでしょうね。……どうやら試合が始まるようですよ、お姉様方。」

リフィアとエヴリーヌの言葉に頷いたプリネは整列している両チームに気付いて、言った。

「おお！ついに始まるのか！」

「カーリアンとどうやって戦うのが、興味あるね。」

プリネに言われた2人は興味津々で試合が始まることを待つた。

「グラランアリーナ」

「フフ……まさか、決勝で貴女達と戦う事になるとはね。女神達もたまには気のきく事をしたみたいね」

エステル達と顔を合わせたカーリアンは口元に笑みを浮かべて、言

つた。

「えへへ……あたし達にも優勝しないと駄目な理由があるから、絶対に勝つ！」

「4対1とはいえ、油断はしないつもりです。」

「フフ……あなた達の力……楽しませてもらひつわ 少しほどしきのもいるみたいだしね。」

エステルとヨシュアの言葉を聞いて、不敵な笑みを浮かべて答えた後、ジンを見た。

「”大陸最強”と名高いメンフィルの武将とは一度戦つてみたかつたんだ。俺の”泰斗流”……どこまで通じるか、試させてもらひつぜ。」

カーリアンに見られたジンは好戦的な笑みを浮かべて、答えた。

「おおう……近くで見るとより美しさと色気が感じられるよ。……」

「ゴクリ。」

一方オリビエはカーリアンを見て、だらしない表情になつた。

「試合中にもそんな様子だつたら、棒ではたいて正氣に戻らせるからね！？」

「失敬な。このオリビエ、いつでも正氣だよ？」

ジト目で忠告するエステルにオリビエは悪びれもなく答えた。

「あら？どこかで見た事あると思つたら、あなた、ペテレーネやティア、それと家のメイドに声をかけていた漂泊の詩人とやらじやない。」

カーリアンはオリビエの容姿を見て、オリビエがペテレーネやティア、イリーナに声をかけていた事を思い出した。

「あ、あんですつて～！？」

「本当に怖いもの知らずですね……よく、生きて王都に来れましたね……」

エステルは自分が憧れているペテレーネにオリビエが声をかけた事を知ると怒り、ヨシュアはオリビエの度胸に呆れて溜息を吐いた。

「フツ……麗しき女性に声をかけ、ボクの愛を捧げるのがこのオリビエの使命だからね。」

「何の使命よ！何の！？」

髪をかき上げ、訳のわからない事を言つオリビエは怒鳴つた。

「ゼムリア大陸の恥を見せてしまつて、すみません。」ヨシュアはオリビエの事を何気に酷く言つて、謝つた。

「別にいいわよ。見てて、面白かつたし。いや、いつも嫉妬される側のリウイがあんたを睨んでいたのを見て、笑つたわ～。」

「フツ……さすがの”霸王”もこのボクの美しさに嫉妬したようだね。」

「絶対！違うと思うわ。むしろ、あんたの事をメンフィルにとって害をなす愚か者とでも思つてゐるんじゃないの～？」

「どう考へても妻や娘、使用人に言い寄る軽薄な男を睨んでいただけだと思いますけど。」

酔いしれていいるオリビエにエステルとヨシュアは即座に否定した。

「まあその後、ペテレーネの教え子が鞭で思いつきり制裁していただけね。いや～、久しぶりに笑わせてもらつたわ～。」

「ブルブル……！それは思い出せないでくれたまえ！…………もうしませんからそれ以上、ぶたないで～！」

「あはは……さすがシェラ姉ね。」

オリビエにトラウマを植え付けさせたシェラザードはエステルは苦笑した。

「これより武術大会、決勝戦を行います。両チーム、開始位置についてください。」

会話をやめて審判の言葉に頷き、エステル達とカーリアン両チームはそれぞれ、開始位置についた。

「双方、構え！」

両チームはそれぞれ武器を構えた。

「女神達もご照覧あれ……………勝負始め！」

今ここに、英雄に挑む少女達の戦いが始まった

！

第1・3・4話（後書き）

いよいよ次話から決勝戦です！……余談ですが、オリビエ、ショラザードのお陰でメンフィル大使館に入れたのですが、いつもの調子でペテレーネやティアをナンパしました。もちろん”あのキャラ”もナンパされましたし、リウイもその場面をしつかり見ていました（笑）。……感想お待ちしております。

～武術大会・決勝戦～前篇（前半）（前書き）

戦闘BGMはZEROの”魔神来たりて天地を征す”か、零の”Inevitable Struggle”が流れると思つて下さい。

（武術大会・決勝戦）前篇（前半）

「グラシアリーナ」

「みんな、行くわよ！」

戦闘開始、エステルは掛け声をかけて、全員の闘志を高め
「ぬああああああ、てやあ！」

「風の守りよ……シルフェンガード！！」

ジンは気功によって自らの身体能力を上げるクラフト 龍神功を使い、全身に闘氣を纏つた。また、ヨシュアとオリビエはアーツを使つて、エステルとジンの回避能力を高めた。

「ふうん、最初に身体能力を上げて来たか。ま、悪くない判断ね」エステル達の行動を見て、カーリアンは口元に笑みを浮かべた。そしてエステルとジンが攻撃を仕掛けて来た！

「たあっ！」

「つと！」

「お返しよ！そ……

「せいつ！」

「！！」

ジンに反撃をしようしたカーリアンだったが、エステルの攻撃に気

付き、反撃するのをやめて、防御した。

「水流よ、吹きあがれ！……ブル インパクト！」

「きやつ！？」

そこにオリビエが発動したアーツがカーリアンに命中した！

「さらなる時の加護を！……クロックアップ改！！」

そしてヨシュアが放つたアーツはエステルの素早さを一時的に上げた。

「せえええい！」

「はああ、せいっ！」

そしてジンはクラフト 月華掌で攻撃を仕掛け、アーツのお陰で身体能力が上がったエステルはクラフト 金剛撃で達人クラスの動きをするジンについて行けたので、ジンと同時に攻撃を仕掛けた！
「させないわよ！」

「！！」

「嘘！？」

しかし、2人の攻撃はカーリアンの双剣にそれぞれ阻まれた。

「やつてくれるじゃない……ビーリヤーっ……！」

「おあっ！」

「うっ！」

そしてカーリアンが放つ複数攻撃を放つ剣技 亂舞を回避しきれず、受けてしまい、エステルとジンは呻いた。

「これで終わりじゃないわよ！？それ……」

「させない！……絶影！！」

「…ちつ！」

さらに追撃をかけようとしたカーリアンだったが、一瞬で迫つて来たヨシュアの攻撃に対処して、追撃はできなかつた。

「んつふふ～、愛と真心を君たちに！それっ！」

そしてオリビエはクラフト ハッピートリガーでエステルとジンの傷を回復した。

「ふうん……2人は私の相手をして、その隙に残りの2人が後方からアーツの攻撃でダメージを削り、前衛がピンチになれば回復や補助して、アーツで怯んだ私を前衛が止めを刺す戦法か……プリネあたりが考えた作戦かしら？」

「…！嘘！？見破られちゃつた！！」

「その上、この作戦を考えた人まで見破るなんて……！」
自分達の作戦が見破られた事にエステルは驚き、ヨシュアは作戦を考えた人物まで言い当てた事に驚いた。

「あなた達は絶対に優勝しないと駄目な理由があつたのを知つてい
たから、最大の障害である私相手に無策で来るのは思わなかつたか
らね。となると私の事をよく知つているリフィア達に対策を聞く
ぐらいだけど、リフィアは考えるにしても私の予想の斜め上の事を
考えそうだし、エヴリーヌは論外。となると、残りはプリネつて訳
よ」

「…………僕達の考えはお見通しと言つ訳ですか…………」

カーリアンの推測した事と早々に作戦が判明した事にヨシュアは苦
い顔をして、答えた。

「ま、作戦自体は悪くないわよ。…………でもその作戦の欠点に気付
いているかしら?」

「え?」

カーリアンの言葉がわからず、エステルは首を傾げた。

「フフ…………今、それを証明してあげるわ。…………魔術発動」

そしてカーリアンはエステル達を魔力が籠つた眼で見た。

「!—!」

「くつ…………」

カーリアンに見られたエステルとヨシュアは驚いたが、何も起こら
なかつた。

「おい、兄ちゃん!こつちは味方だぜ!—?」

その時ジンの驚きの声が聞こえて來た。エステル達がジンの方を見
ると、オリビエがジンに攻撃をしていて、ジンは必死で回避してい
た。

「オリビエ!—?何やつてんのよ、アイツは!—!」

「エステル…………多分、オリビエさんは今、カーリアンさんの眼を
見たせいで混乱したんだと思う。」

「あ、あんですつて!—?」

ヨシュアの説明に驚いたエステルはカーリアンを見た。

「フフ…………今の魔術は”淫魔の魅惑”って言つ魔術で、性魔術で

できる魔術の一つよ 」

「性魔術？何ソレ？リフィアからはそんな魔術、聞いた事がなかつたけど。」

カーリアンの説明を聞き、エステルは首を傾げた。

「お嬢ちゃんが知るにはまだ早いわよ 」

「ちょ、ちょっと……子供扱いしないでよ！」

からかうように言つたカーリアンの言葉にエステルは怒つた。

「フフ……私と会話をしていくのかしら？」

「あ！呑気には話をしている暇なんてなかつた！……水の力よ……」

カーリアンに気付かされたエステルはオリビエの混乱を治すためにアーツを発動させようとしたが

「させないわよ！」

「あう！？」

カーリアンが一瞬でエステルに詰め寄り、放つたクラフト

双葉

崩しでアーツの発動が妨害された。

「エステル！……おぼ……」

「甘いっての！」

「ぐ……くはつ！？」

「ヨシュアー？」

エステルの危機にヨシュアはカーリアン背後に一瞬で移動してクラフトを放とうとしたが、カーリアンが振り向いて反撃をし、何とか防御したヨシュアだつたが、双剣に伝わるカーリアンの攻撃の威力は相殺できず、アリーナの壁まで吹っ飛ばされて壁にぶつかって、呻いた。

「人の心配をしている場合かしら？」

「くつ……行くわよ……はつ……やあつ！」

「フフ……」

エステルは連續で攻撃を仕掛けたが、カーリアンは余裕の表情で回避していた。

「これで決める！はああああああ！」

そしてエステルはSクラフト 烈波無双撃をカーリアンに放つ！

「それ、それ、それ、それっ！！」

しかしカーリアンはエステルの連続攻撃を双剣で全て捌いていた。

「とおりやあああ！」

攻撃が捌かれてもエステルは気にせず、最後の一撃で勝負をかけた！

「そこよ！激しいの、行くわよ 白露の桜吹雪！！！」

「なつ キヤアアアアアアー！？」

しかし最後の一撃はカーリアンに回避され、逆にカーリアンのSクラフトを咄嗟に棒で防御したが真正面から喰らってしまったため、体中に傷を作り、吹っ飛ばされた！

「あうつ！？」

そしてドロシー達が陣取っている観客席側の壁にぶつかり、ぶつかった衝撃に呻いて気絶して、倒れてそのまま起き上がらなくなつた。

「ママ！？しつかりして！」

「起きて下さい、エステルさん！まだ試合は終わっていません！！」
氣絶したエステルを見て、ミントとツーヤは大声でエステルを呼んだ。

「エステル！！」

一方ヨシュアは氣絶し、起き上がらなくなつたエステルを見て、叫んだ。

「ヨシュア！氣持ちはわかるが、今はこっちを手伝ってくれ！」

「くつー（じめん、エステル。後で必ず治療するから！）」

今にもエステルの所にかけだしそうだったヨシュアだったが、ジンの言葉に我に返り、双剣を構えてカーリアンを睨んだ。

「フフ 次は貴方が相手をしてくれるのかしら？」

自分を睨むヨシュアにカーリアンは好戦的な笑みを浮かべて、言った。

「.....」

（あら あの年齢の割には一般兵でも出せない一人前な殺氣を出せ

るじゃない フフ、姉弟揃つて楽しませてもらえそうね（ヨシ）

ヨシュアは冷たい瞳で膨大な闘気を出した。一方カーリアンはヨシュアの闘気に混じった殺気に感心し、口元に笑みを浮かべた。

「これで終わりだ……はつ！」

そしてヨシュアは一瞬でカーリアンに攻撃を仕掛けた！

「つと……」

ヨシュアのJクラフト 漆黒の牙をカーリアンは武器で防御した。

「絶影！ 脣！ 双連撃！！」

Jクラフトが防御されてもヨシュアは気にせず、次々と常人離れし速さでさまざまな方向からカーリアンに攻撃を仕掛けて行つた。

「それ、それ、それ、それっ！！」

ヨシュアの激しい攻撃をカーリアンは楽しそうな表情で捌いていた。

「エアストライク！！」

「月華掌！！」

そこにアーツによつて発生した風の刃が、突進と共に拳がカーリアンを襲つた！

「ちよつ！？」

ヨシュアの攻撃に捌いていたカーリアンは回避や防御もできず、アーツと拳がカーリアンに命中した！

「え……」

自分以外の攻撃が命中した事にヨシュアは驚いて手を止めた後、一端下がつた。

「フッ……またせたね、ヨシュア君」

「ふう……こつちの苦労も知らずによくそんな事が言えるな……」

ヨシュアが一端下がると、そこにはいつもの調子のオリビエと、呆れている様子のジンがいた。

「オリビエさん！ 混乱から回復したんですね。…………それにしても、どうやつ…………？あの状況下じゃ、アーツは使えないと思うんですけど

が……」

混乱から回復しているオリビエに驚いたヨシュアはジンに尋ねた。

「”養命功”という氣功でな。傷を含め、さまざまな状態異常も回復してくれる氣功を銃弾を扱い潜って、この兄ちゃんに使ったのさ。」

「なるほど……」

ジンの説明にヨシュアは納得した。

「それえつ！？」

「！！散開しないつ！」

「はい！」

「おおつとー？」

そこにカーリアンが放つた衝撃波がヨシュア達を襲つた。衝撃波にいち早く気付いたジンは警告を出し、ヨシュア達は回避に成功した。「フフ……やつてくれるじゃない。今年の大会は一撃をもらうか無傷で終わると思ったけど、まさか3撃ももらつとは思わなかつたわ

」

カーリアンは好戦的な笑みを浮かべて、ヨシュア達に言った。

「……ヨシュア、悪いがエスティルを治療する事は後廻しにして、今は目の前の敵に集中しろ。」

「…………はい。」

「フッ……では、行こうか！」

そしてジン達はカーリアンとの戦闘を再び始めた……！

～武術大会・決勝戦～前篇（前半）（後書き）

次話から決勝戦の終わりまで驚きの展開が続くので楽しみにして下さい！……感想お待ちしております。

～武術大会・決勝戦～前篇（後半）（前書き）

！ ファルコムの完全新作、”那由他の軌跡”……どんなゲームかまだわかりませんが、軌跡シリーズの続刊物だったら、嬉しいですね

～武術大会・決勝戦～前篇（後半）

（？？？？）

（ヨシュア達、頑張つてゐるけど苦戦している…………あたし達、ここで負けるの……？）

一方ヨシュア達とカーリアンが激しい戦闘を行つてゐる中、氣絶しているエステルは謎の空間に浮かんでいて、カーリアンに苦戦しているヨシュア達を見て、悔しさに唇をかみしめた。

（そんなの駄目！博士やコリアさんの依頼が達成できない！依頼が達成できないなんて、遊撃士失格よ！）

（…………だつたら、カーリアン殿に頼めばいいのではないですか？）

（…………スお姉様の言つ通りだ。今のお前達では奴には勝てない。）

依頼が達成できないかもしない事にエステルが悔しがつてゐる時、

どこからか2人の女性の声がエステルの頭に響いて來た。

（だ……れ…………？）（何…………？）初めて聞く声なのに、どうして聞き覚えがあるんだろう…………？）

初めて聞く念話の声に悶わらず、聞き覚えのある声にエステルは声の主に問い合わせた。

（今は私達の事より、貴女の事よ。それで先ほどの私の質問に答えて頂いても、いい？）

（そんな人任せな事はできない！ずっと聖女様達に近付くために一杯頑張つたのに、こんな所で諦められない！）

（（…………））

エステルの決意を聞き、2人の女性の声はしばらく黙つていたがやがてまた、エステルの頭に声が聞こえて來た。

（フフ…………本当に負けず嫌いな娘ね。貴女にそつくりね……ン。）

（ラ……お姉様にそう言つて頂けるなんて光榮です。それを使うなら、どんな種族とも仲よくなるこの娘の性格は……ピ……お姉様の性格

譲りですよ。)

(フフ……それはこの娘の元々の性格だと思つわよ?)

(え、えっと? 一体何を話しているの? 貴女達は誰?)

2人の会話に訳がわからなかつたエステルは戸惑つた声で尋ねた。

(フフ……いつか、わかる時が来るわ。それよりカーリアン殿に勝ちたいのでしよう?)

(どうしても奴に勝ちたいのなら、私達の力を少しの間だけお前に貸してもいいぞ。……私達の力を使えば、勝てるかもしないぞ?)

(本当! ? だつたらお願ひ! 力を貸して! !)

2つの声の提案にエステルは驚き、嘆願した。

(その前にお前に一つだけ尋ねる。私達が力を貸せば、お前をお前として見なくなる者も現れるぞ。それでもいいのか?)

(その中にはペテレーネやリウイ皇帝陛下も含まれるかもしないわ。それでもいいの?)

(それって、貴女達が関係して来るの?)

2人の忠告にエステルは逆に聞き返した。

(……ええ。それよりどうするの?)

(……力を貸して!)

(……私と……スお姉様の忠告を聞いていなかつたのか?)

考える様子もなく、答えたエステルに声の一つは呆れている様子の声で尋ねた。

(もちろん、聞いていたわよ! でも、あたしは聖女様やリウイがそんな風にあたしを見る人じやないつて、わかるもん! それにその様子だと、貴女達の方があたしよりリウイ達の事を知つてはいるんでしょ? だつたら、そんな事を言つたら駄目よ! !)

(どうして、そう言いられる?)

(あたしが聖女様達の事を信じてはいるからよー後は女の勘よ!)

(())

エステルの言葉を聞いた2人はまた黙つた。

((フフ……))

そして突然、笑いを抑えた声が聞こえて来た。

(ちょっと！笑う事はないでしょ！?)

2つの笑い声にエステルは怒った。

(フフ…………ごめんなさい。でも、そうね。あの方達の事を貴女より、よく知っている私達がそんな事を言つてはいかないわね。)

(では、ラ……お姉様。)

(ええ。最初は私が戦うから、貴女は私の後をお願い。)

(はい！カーリアンを驚かせてやりましょうー。)

(え？え？)

2人の会話に再び訳がわからなくなつたエステルは戸惑つた。

(では、百数十年ぶりの戦友に挨拶に行きましょうか。……リン。)

(はい！ラピスお姉様！……我等の戦いをよく見て、自分の物にしてみる……我等の魂を継ぐ少女よ。)

そして美しい黒髪と翡翠の瞳を持つ女性と輝く金髪と紫紺の瞳を持つ女性の顔が一瞬見えた後、エステルの意識は途切れた。

♪グラランアリーナ♪

一方カーリアンと激しい戦いをしていたヨシュア達はアーツやクラフトを駆使して、自分達の身体能力を上げたり、カーリアンの身体能力を下げて最初はなんとか互角に戦えていたが、カーリアンがそれぞれの攻撃に対処し始めると、どんどん劣勢になつていった。

「喰らつときなさいよ！…」

「くはつ！？」

「ぬぐつ！？」

「ぐつ！？」

複数の敵を一瞬で攻撃する剣技

乱舞を喰らつてしまつたヨシュ

ア達は痛みに呻いた。

「フフ……結構粘るじゃない でも、さすがにそろそろ限界かしら？」

余裕の表情でカーリアンはボロボロになつていっても、いまだに立っているヨシュア達を見て感心した。

「くつ……ここまで強さとは……」「

「正直、勝てる気がしないよ……」

「3人がかりで攻撃しても、有効打を未だに入れられないとはな……さすが、カシウスの旦那を破つただけはあるな……」

カーリアンの強さにヨシュアは呻き、オリビエは泣き言を言い、ジンはカーリアンの強さに納得した。

「さて、そろそろ終わりにしようかしら？」

「くつ！？」

「さすがに今回は不味いかな……？」

「万事休すか……！」

双剣を構え、闘気を最大限に出しているカーリアンを見て、ヨシュア達は試合を諦めかけようとしたその時！

「水よ……！連続水弾！！」

「！！」

双剣を構えているカーリアンに魔術でできた水の弾が襲つた。自分に向かつてくる水の弾に気付いたカーリアンは構えを解き、回避した。

「魔術！？という事は……！」

カーリアンを襲つたのが魔術とわかつたヨシュアは期待した表情でエステルが倒れていた方に振り向いた。

「…………」

そこには異様な姿のエステルが静かに棒を槍を構えているかのよくな構えをしていた。

「エ……ス……テル……？」

「エステル君？ いつの間に髪と瞳の色を変えたんだい？」

（……本当にエステルか？ 余りにも気配が違うすぎる……）

母譲りの栗色の髪は美しい黒髪に変わり、父譲りの紅い瞳は澄んだ翡翠の瞳をしているエステルの姿にヨシュアは戸惑い、オリビエは驚き、ジンはエステルから漂う氣配が普段のエステルと余りにも違ひすぎる事に首を傾げた。

「水よ、我が刃となれ……」

黒髪のエステルが静かにそう呟くと、カーリアンに向いている棒の先端に水が宿り、ある武器に変わった。

「斧槍！？」

ヨシュアはエステルが持つている武器の形態を見て、驚いた。

「いくわ……剛進突破槍　！！！」

そしてカーリアン目掛けて、普段のエステルとは思えない達人クラスの動きで突進した！

「つと！？ いたつ！？」

エステルの動きに驚いたカーリアンだったが、双剣で防御した。しかし、水の刃と同時に衝撃波も襲つて来たため、それは回避できず、ダメージを受けた痛みに顔を顰めた。

「貴女、何者？ エステルじやないわね？」

「…………」

鍔迫り合いをしながらカーリアンは黒髪のエステルに尋ねたが、尋ねられた本人は黙つていた。

「だんまりか。じゃあ、力づくでもしゃべつてもううわよー・ビーリヤー！ 3段斬り！！」

カーリアンは常人では回避できない速さで攻撃を仕掛けた！

「3段突き。」

自分に襲いかかって来る連撃を黒髪のエステルはカーリアンの動きに着いていくかのようにクラフトを放つて、カーリアンの攻撃を相殺した。

「嘘！？ 今のは結構本気で攻撃したのに…………！」

攻撃が相殺された事と自分の動きに着いて行けた事にカーリアンは驚いた。そして黒髪のエステルはその隙を狙つて、大技を放つた！

「我が奥義、受けなさい！……我に眠りし命の守護よ……」
「来たれ！！」

黒髪のエステルが叫ぶと、水の刃がついた棒全体を水が覆い、水柱と化した！そして黒髪のエステルはそれをまるで踊りを舞うかのような動きでカーリアンに放つた！

「蒼流……演舞槍！！」

「なつ！？」

黒髪のエステルが放つた見覚えのある技を見ると同時に聞き覚えのある技名を聞いたカーリアンは驚いた。

「はああああああ！！」

黒髪のエステルは叫びながら、舞いながら水柱を連續でカーリアンに攻撃した。

「くつ…………やつてくれるじゃない！！」

驚いたせいで防御が遅れたカーリアンは黒髪のエステルが放つた大技の何発かを喰らい、痛みに顔を顰めた後、黒髪のエステルを睨んだ。

「黒髪に翡翠の瞳…………槍術に水の魔術。それに今の奥義はあの娘しかできないはず…………まさか！貴女…………ラピス！？」

黒髪のエステルの正体を、信じられない表情で言い当てた。

「百数十年ぶりですね、カーリアン殿。」

正体を言い当てられた黒髪のエステル ラピスは微笑みながら答えた。

今ここに”幻燐戦争”的英雄の一人であり、森をこよなく愛した”森の守護者”が異世界に降臨した…………！

～武術大会・決勝戦～前篇（後半）（後書き）

次回からエスティル？無双です！楽しみにしていて下さい！……感想
お待ちしております。

～武術大会・決勝戦～中篇（前半）（前書き）

IJIIからの戦闘BGMはInevitable Sturgothe
(碧ver)に変わったと思つて下さい

～武術大会・決勝戦～中篇（前半）

「グラシアリーナ」

「エステル……じゃない？ エステルはどこに行つたんだ！」

カーリアンの言葉を聞き、黒髪のエステルがエステルでない事にヨシュアは放心した後、エステル ラピスを睨んで叫んだ。

「今は少しの間だけ、眠つてているだけです。すぐに目覚めるから安心して構いません。」

自分を睨むヨシュアにラピスは優しい微笑みを見せながら言つた後、カーリアンの方に向いた。

「まさか、貴女まで転生していたなんて………… フフ、リウイが知つたらどういう顔をするかしらね？」

「私まで？ それはどういう意味ですか？」

カーリアンの言葉が理解できなかつたラピスはカーリアンに尋ねた。
「私達以外、教えては不味いから誰にも言う気はなかつたけど、貴女は別ね。………… 姫将軍の末妹が転生したと言つたらわかるでしょう？」

「……まさか、”あの方”が！？ それは本当なのですか！？」

カーリアンの情報にラピスは信じられない表情で驚いて尋ねた。

「今はメンフィル大使館 リウイの傍で使用人として仕えているわ。…………まあ、今は目覚めていないから他人のようなものだけど。
」

「 そうだったのですか………… よかつた。長く苦しみながらも、民達のために身を削つて働いて来た陛下にもようやく真の幸せが訪れるのですね…………」

カーリアンの言葉を聞き、ラピスは自分の喜びのように微笑んで答えた。

「貴女つて、相変わらずお人好しねえ………… 側室だったとは言え、

貴女が愛した男性が他の女性と幸せになると知つて、怒らないの？」「私は陛下のお陰で幸せに逝けました。今度は陛下が幸せになる番です。それに陛下の隣にいるべきなのは”の方”しかいないのですから……それを言うなら、カーリアン殿。貴女も当てはまるのではないかですか？」

「…………私はお姉さんとして、リウイの事が心配だから傍にいるだけよ。」

ラピスの言葉にカーリアンは居心地の悪そうな表情で答えた。

「フフ…………そういう事にしておきましょうか。それに今は過去を振り返つていい時ではありませんね。」

「そうね。…………貴女が相手なら、本気を出させてもらひうわよ！」

「参ります…………！」

カーリアンが双剣を構えると同時にラピスは水によつて斧槍化した棒を構えた！

「それえ！」

「これでっ！」

カーリアンの攻撃をラピスは武器で受け流した！

「それ、それ、それえっ！」

「ハツ！セイツ！ハアツ！」

続けて放つたカーリアンのクラフト 三段斬りに対し、ラピスはカーリアンのクラフトと同じ性能を持つ槍技 三段突きで対抗した。

「瞬散槍！！」

「つとー？」

そしてラピスが放つた素早い突きを広範囲に攻撃する槍技 瞬散槍に驚いたカーリアンだったが、冷静に武器で捌いた。

「今度はこっちの番よ！…………行くわよ～！」

「…………！」

大技をしそうなカーリアンの構えを見て、ラピスも同じように大技

瞬散

の構えをした。

「奥義！桜花乱舞！！」

「これで決める……奥義！桜花乱舞！！」

2人が放つた同じ技はぶつかりあって、相殺した。

「腕は落ちてないようで何よりね フフ…………楽しめてもらうわよ！」

「ハアアアアアアア！！」

本来のエステルなら一人でカーリアンと打ち合ひ事等不可能だつたが、今のエステルはカーリアンと同じ“幻燐戦争”の英雄の一人、ラピスであるため互角の戦いをしていた。

「エステル君、雰囲気や髪とか変わってから凄く強くなつたねえ。ボク達3人がかりでも勝てなかつたミセスと互角の戦いをしているじゃないか。」

「エステル…………」

一方2人の戦いをオリビエは感心しながら見ていて、ヨシュアは元のエステルに戻るのか心配した。

（ふうむ。まさか故郷で伝えられている言い伝えの一つである”輪廻転生”をこの眼で見る事になるとはな…………しかもそれが旦那の娘とはな…………）

ジンはカルバードに伝えられている言い伝えを間近に見て、驚いた。

「フフ…………こつして貴女と手合わせをする日が再び来るとは思わなかつたわ！」

ラピスと激しい攻防をしながらカーリアンは楽しそうな表情で言った。

「…………私だけがこの娘に転生したと思つてゐるのですか？」

「ハ？違わない…………でしょ！！！」

ラピスの答えに首を傾げたカーリアンだったが、尋ねながら強烈な一撃を放つた。

「くつ！？」

カーリアンの強烈な一撃によつて、吹き飛ばされたラピスは空中で受け身を取つて着地した。

「…………そろそろ時間のようね。」

そして水の刃が消えるのを見て、ラピスは静かに咳いた。
「あら？ もう終わり？？」

ラピスが武器の構えを解いた所を見て、カーリアンはラピスがエスティルに戻るのかと思い、残念そうな表情をした。

「ええ。…………後は任せたわよ、リン。」

「へー？」

ラピスが最後に咳いた言葉が聞こえたカーリアンは驚いた。そしてラピスが目を閉じると、エステルの黒髪が今度は太陽に輝く金髪に変わり、目を開くと瞳は紫紺の瞳に変わった。

「今度は私の番だぞ、カーリアン！」

金髪のエステルは不敵な笑みを浮かべて、カーリアンに言った。

「金髪に紫紺の瞳…………ラピスの言つていた通り、今度はリン、貴女ね！ フフ……貴女相手でも楽しめるからいらっしゃい！」

金髪のエステルの髪や瞳、そしてラピスが最後に咳いていた言葉から金髪のエステルの正体……”聖炎姫”リンである事を察したカーリアンは好戦的な笑みを浮かべて、正体を言い当てた。

（グランアリーナ・観客席）

「ラピスにリン…………ですって！ ? お姉様、まさか！」

「…………ああ。前セルノ領主の妹、ラピス・サウリンに前バルジア領主、リン・ファラ・バルジアーナ。髪や瞳も肖像画通りの色だったし、間違いないだろう。まさかイリーナ様のようにあの2人も転生していたとは…………！」

「…………道理でいつもエステルからな～んか、覚えのある雰囲気があつた訳だよ。」

一方観客席でエステル達の戦いを見ていて、耳がいいリフィアやプ

リネはカーリアンとラピス、リンの会話が聞こえ、驚いた。そしてエヴリースはリフィアの言葉を聞き、納得した。

「エヴリースお姉様？あの2人を知つていらっしゃるのですか？」

「……そう言えばお前はリウイの人間の側室達が生きていた時代から生きているのだったな。」

「ん。まあ、会つたのは数回ぐらいだけね。リンと会話した事はあんまりなかつたけど、ラピスなら結構あるね。」

「ほう？当時のお前はリウイの理想にまだ共感してなかつた時期と聞いていたのだが、何故人間であるラピスと会話をしたのだ？」

リフィアはエヴリースがラピスとの会話を覚えている事に驚いた後、尋ねた。

「……グラザお兄ちゃんを知つていたみたいだからね。それで話が弾んだんだ。」

「……まさかそこでリウイの父の話が出るとはな。……何故、ラピスはリウイの父を知つていたのだ？」

エヴリースの口から出た以外な人物 リウイの父であり、エヴリースと同じ”深淩の楔魔”の魔神グラザの話が出た事に驚き、“闇夜の眷属”が忌み嫌われ、迫害されていた時にラピスがグラザと親交をしていた事に首を傾げた。

「なんでも、ラピスの国がお祭りを開いた時、一度だけグラザお兄ちゃんを招待した事があつたんだって。」

「そう言えば……国の歴史を学んだ時に旧セルノ王国は当時から多種族に寛容な国だった事に記憶にあります。……イオーノ王は”闇夜の眷属”との親交のために温厚な魔神と噂されていたグラザ様を招待したのではないか？」

「……確かにその事は余の記憶にある。それを考えると王女であるラピスがグラザ様の事を知つてもおかしくないな。」

エヴリースの言葉を聞き、プリネに言われたりフィアは納得した。

「今はそんな事より、あの2人がエステルに転生した事が重要じやない？」

「そうだな……ふうむ。リウイに報告すべきか、すべきでないか悩むところだな……」

「そうですね……特にラピス様はイリーナ様が正妃となつていなければ、ラピス様が正妃になつっていたかもしれない女性であつたと聞きますしね……」

エヴリーヌに言われた2人は複雑そうな表情でエステルがラピスとリンの魂が宿つている事をリウイに報告すべきか悩んだ。

「そんな難しい事は後から考えればいいと思うよ?それより、せつかく面白くなつて来たんだから試合に注目しようよ。」

「…………そうだな。リウイ達と同じ”幻燐戦争”的英雄が2人もエステルに宿っているのだ。エステル達にも勝利の可能性が出て來たな!」

「ええ。達人クラスの強さを持つ正遊撃士にエステルさんの相棒であるヨシュアさん。オリビエさんも銃やアーツの腕もかなり優れているようですから、もしかしたら本当に勝利するかもしれませんね。」

エヴリーヌに言われ、2人は期待した表情でまた、試合を見始めた

～武術大会・決勝戦～中篇（前半）（後書き）

金髪のエステルのバトルスタイルを考えれば、今のエステルが持つている武器では戦えないと思っている方がいると思いますが、そこは大丈夫です。エステル、ちゃんと棒以外の武器を今までの旅で手に入れて、持っていますので。次回は”あのキャラ”お得意の例の技も出でてくるので楽しみにしていて下さい！…………感想お待ちしております。

～武術大会・決勝戦～中篇（後半）

「グラシアリーナ」

「フフ……貴女との手合わせするのは嬉しいけど、武器はそれでいいのかしら？貴女の得物じゃないでしょ。よかつたら、剣を一本貸しましょうか？」

「私に施しなど必要ない！……なれば、作ればいいだけの事！」カーリアンの申し出を断つたリンは強く否定して言った後、棒を尻し腰にさしていたルーアンでテレサに貰つた折れた剣を鞘から出して、構えた。

「ハ？ そんな折れた剣を出して何をする気？」

カーリアンはリンが出した折れた剣を見て、首を傾げた。

「我に眠りし命の炎よ……我が前へ！！」

リンがそう叫ぶと、壊れた剣に炎が宿り、欠けた部分は炎の刃と化して炎剣と化した！その炎は選ばれし者しか使えないと言われる聖なる炎！その炎の呼び名は……！

「まさか……”聖炎剣”！？」

カーリアンは剣に宿る炎を見て、リンの得意技を思い出して驚いた。

「我が奥義、聖炎剣！その身に刻め！！ハアツ！」

そしてリンは炎剣でカーリアンを攻撃した！

「くつ！？」

炎が宿つた剣と打ち合えば、炎が自分を襲う事をわかつていたカーリアンは一端後退して回避した。

「ブラッショ！？」

リンは後退したカーリアンに剣を震つて炎が宿つた衝撃波を出して放つた！

「それえつ！！……熱つ！？」

カーリアンも双剣を震つて衝撃波を出して、リンの技を相殺したが

炎は消し切れず、アリーナに吹いていた追い風によつて消し切れなかつた炎がカーリアンを襲い、カーリアンは炎の熱さに呻いた。

「これでも喰らえ！光霞！！」

「ちょつ！？」

続けて放つたリンの魔術がカーリアンに命中し、カーリアンは呻いた。

「剛震突き！！」

そしてリンはすかさず、突きの構えをしてカーリアンに突進した！

「くつ！？」

リンの技を双剣で防御したカーリアンだつたが、剣に宿る炎の熱さを間近で感じて呻いた。

「やつてくれるじゃない……ビーリヤーつ……」

「くつ！？」

そしてカーリアンは双剣に力を込めて、リンを後退させた。

「冥府斬り！！」

後退して武器を持つた片手を上げたまま硬直しているリンにカーリアンはすかさず、自分の持つ技の中でも強烈な威力を持つクラフトを放つた！

「一刀両断！！聖炎剣・剛！！」

しかしリンは上げたままの剣を両手に持ち、豪快に攻撃してカーリアンの技と打ち合つた！

「嘘ツ！？」

両手から伝わる力によつてさらに威力を増したリンの技の威力にまけたカーリアンは驚き、吹つ飛ばされ、空中で受け身をとつて着地をした。そしてリンは剣を再び構え直し、剣に力を込めた！

「真なる焰よ、燃え上がれつ！！」

リンが叫ぶと、リンが持つてゐる剣により一層炎が燃え上がり、炎によつて剣の長さが2倍になつた！

「ウオオオオオツ！！」

そしてリンは炎の長剣を両手で構えて、叫びながらカーリアン目掛け走った！

「フフ……面白いじゃない！！」

自分目掛けて襲いかかるリンを見て、カーリアンは不敵な笑みを浮かべた後、大技の構えをした。

「真なる焰の剣！！」

リンはカーリアンに接近すると炎の長剣を右方向から袈裟斬りに斬つた！！

「激しいの、行くわよ…………白露の桜吹雪！！」

「うああっ！？」

カーリアンのJクラフトが命中したリンはダメージに呻いた後、吹っ飛ばされた。

「はっ！」

しかし空中で受け身をとつて、ヨシュア達の所に着地した。

「くつ…………無傷ではいかなかつたようね…………」

カーリアンは火傷した片腕を抑えて呻いた。リンを吹っ飛ばす瞬間、軌道がずれたリンの炎の長剣がカーリアンの腕を掠つたため、カーリアンの腕を火傷させたのだ。

「…………時間のようだ。私達の力を使いこなしてみるがいい！」

そしてリンは目を閉じた。すると持っていた剣からは炎がなくなり、ただの欠けた剣になり、髪や瞳も元のエステルに戻った。

「みんな、おまたせ！…！」

「エステル！…！」

「どうやら目覚めたようだな。」

「フツ…………待っていたよ、エステル君」

元のエステルに戻った事にヨシュアは安心し、ジンやオリビエもヨシュアと同じようにエステルに近寄つて声を掛けた。

「3人共、あたしが抜けている間に大分怪我したみたいね。今、回復するわ！オーブメント駆動！……ラ・ティアラ！」

エステルがアーツを発動させると、エステル自身を含め、ヨシュア達の傷がある程度治つた。

「んつふふ～、愛と真心を君たちに！それっ！」

さらにオリビエが放つたクラフト ハッピートリガ で自分達の傷を完全に治癒した。

「エステル……その……さつき、手に持っている剣や棒を別の武器と化して戦つた事は覚えているかい？」

ヨシュアは言いにくそうな表情でエステルに尋ねた。

「あ、うん。なんて言つたらいいのかな？あたしが戦つているはまなのに、あたしはそれを見ていたような感じだつたの。」

「ほう……では、先ほどのような戦い方は無理か？」

エステルの説明に驚いたジンは尋ねた。

「うん。…………でも、なんか力がみなぎつて来たわ！…………ハアツ！！」

そしてエステルは自分自身に溢れだすほどの力に気付き、それを解放した！すると、栗色の髪は美しい黒髪に輝く金が混じり、片方の瞳は翡翠、もう片方の瞳は紫紺の瞳のオッドアイに変わつた！

「エ、エステル！？」

ヨシュアはまた異様な姿になつたエステルを見て、驚いた。

「大丈夫よ、特になんともないわ！だから安心して、ヨシュア！」

異様な姿になつたエステルはいつもの笑みを浮かべて、ヨシュアに言つた。

「そう言えば、さっきのこの剣……折れた部分を炎で欠けた部分を力バーしてたわね……さっきのを見たお陰である事を閃いちゃつたわ！（確かパズモの一番最初の主の人の剣の形状つてこんな形かな？）魔力よ……刃と化せ！！」

エステルは自分の頭の中でパズモから聞いたパズモの一番最初の主の剣を思い浮かべ、剣に魔力を込めるとき、欠けた部分がエステルの魔力によって、光の刃と化し、また魔力が剣を覆い、剣の形状も変わつた！その剣には僅かながらエステル以外の魔力 パズモやテ

トリに残っていた前の主の魔力が宿っていた！

(嘘!?その剣は……………その神氣は……………天秤の十字架!^{リブラクルース}!?)

エステルの身体の中にいたパズモはエステルが持っている剣の形状や剣に籠っている懐かしい僅かな神氣を宿した魔力に驚いた。

「さあ！みんな、行くわよ！！」

そしてエステルは片手に棒を、もう片方の手に剣を構えて号令をかけた。

「了解！」

「おう！」

「フツ……それでは反撃開始と行こうか！」

エステルの号令に答えたヨシュア達はそれぞれ武器を構え、カーリアン目掛けて突撃を始めた！

「……………」

一方カーリアンは再び異様な姿になつて武器を構え、突撃して来るエステルから、ラピスとリンが武器を構え、突撃して来る幻が一瞬見え、エステルを凝視していた。

「フフ…………最高に面白くなつて來たじゃない！楽しませてもらうわよ！！」

カーリアンは好戦的な笑みを浮かべた後、再び双剣を構え、自分目掛けて突撃してくるエステル達に向かつて、走り出した！

そして英雄と英雄の力を宿した少女と仲間達の戦いが始まった……！

～武術大会・決勝戦～ 中篇（後半）（後書き）

エステルが作り出した剣である人物が思い浮かばますが、エステルに決してその人物は転生してませんからね！あくまでどこかの誰かさんの魔力が影響しているだけです！最初は例の人物もエステルに転生している話も考えましたが、そんな事をしたら原作カップルが崩壊してしまう恐れもありましたから。……ちなみにエステル、次回ではエウシュリー、ファルコムの両作品の最強キャラクターの技を使いますので楽しみにしていて下さい！

～武術大会・決勝戦～後篇（前書き）

ここからの戦闘BGMはZEROの”聖なる裁きの炎”か、零、碧の名曲”Get Over The Barrier! - Roaring Version -”に変わるとと思つて下さい

（武術大会・決勝戦）後篇

幻熾戦争、深淵の楔魔との戦い、イスト村攻防戦、邪龍との戦いを生き抜いた歴戦の英雄の一人であるカーリアン。その強さはすでに魔神の領域まで達しており、例え片腕に負傷をさせても強かつたが対するエステルは幻熾戦争の英雄2人の力を宿し、出身が謎ながらも実力は正遊撃士に届くほどのヨシュア、一般人でありながらも正確無比な射撃に強力なアーツを扱うオリビエ、そして正遊撃士の中でも最高クラスと言われるA級正遊撃士であり、達人クラスの強さを持つジンという強者揃いのメンバーでの戦いは徐々にエステル達が押していく。

（グラニアリーナ）

「ハアッ！」
「せいっ！」
「たあっ！」
「それえっ！」

息ぴつたりなエステルの剣とヨシュアの双剣の攻撃とジンの籠手での攻撃をカーリアンは片方の剣で捌いた。そしてもう片方の剣で反撃をしようとしたが

「くつ……」

火傷した腕が思いのほか、動かせず反撃できなかつた。

「はああ、せいっ！」

そこに攻撃後、一端距離を取つたエステルが剣を鞘に収めた後、棒でクラフト 金剛撃を放つた！

「甘いわ！」

しかしカーリアンは双剣で防御した。

「月華掌！！」

「時の槍よ、今ここに具現せよ…………シャドウスピア……」

「炎の矢よ、具現せよ！…………フレアアロー……」

しかしそこにジンのクラフトが、ヨシュアとオリビエのアーツが命中した！

「きやあつー？やつてくれるじゃない！」

ヨシュア達の攻撃が命中し、呻いたカーリアンはエステル達を睨んだ。

「（…………先にあの娘を潰さないとまずいわね…………）行くわよつ！」

そしてカーリアンは近付けば、反撃がしにくい棒を武器としているエステルに攻撃した。

「させないわつ！」

「嘘！？」

しかしエステルは即座に棒を仕舞つた後、鞘から剣を抜いて防御し、カーリアンを驚かせた。

「たあつ！」

「双連撃！」

「フツ……これは避けられまい！」

そこにジンの拳が、ヨシュアのクラフトが、オリビエのクラフトがカーリアンを襲つた！

「ちつ！」

ヨシュア達の攻撃に気付いたカーリアンは舌打ちをした後、持つている武器で捌いた。

「ヤアツ！」

「！－！」

さらにエステルの剣での攻撃に気付き、カーリアンは横に跳んで回避した。そしてエステルのある構えを見て、驚いた。

「嘘！？その構えは！」

「行くわよ……！フェヒティング！！」

「くつ……… 3段斬り！！」

リウイ達しか使えないはずの技をエステルが使った事に驚いたカーリアンだったが、クラフトを放つて相殺した。クラフトを相殺されたエステルは今度は斬りの構えをした！

「アネラスさん、技を借りるね！さあ、行くわよ！！」

そしてエステルは2回戦でアネラスが見せた強烈な連撃のクラフト

八葉滅殺をカーリアンに放った！

「まだまだまだまだまだまだあつ！」

「くつ………」

普段なら隙を見つけて反撃するカーリアンだったが、片腕が火傷した影響であまり動かないため、防御するだけで精一杯だった。

「とじめつ！」

そしてエステルは最後の一撃をジャンプして、降下しながらカーリアンを攻撃しようとしたが

「そこよつ！冥府斬り！」

「キヤツ！？」

カーリアンが放つた強力な一撃のクラフトの威力に負けて、吹っ飛ばされた。

「続けて行くわよ！」

吹っ飛ばされたエステルを追撃しようとカーリアンは吹っ飛ばされて行くエステル目掛けて走ろうとしたが

「させるか！たあつ！」

「せいつ！」

「フツ！」

「ちつ！」

ジン達の攻撃に気付き、舌打ちをしてエステルを追撃するのを断念した。

「よつと！」

一方吹っ飛ばされたエステルだったが、空中で受け身を取つて着地

した。

「今のも駄目か……もつと、速く攻撃しないと駄目か。（そう言
えば、パズモやテトリーの前の主って凄い速さで舞うような剣技や剣
に闘氣を込めて衝撃波を出して戦っていたって聞いたわね。速さに
舞う、剣に闘氣を込める……か。よし！ 試してみよう！）」

エスティルはパズモやテトリーから聞いたパズモ達の前の主が使つてい
た剣技の特徴を思い出し、その場で少しの間瞑想した後、決意の表
情になつた後、持つてゐる剣を両手で掴んで、剣を振り上げて剣に
闘氣を込めた！

「ハアアアアアア……！」

エスティルが剣に闘氣を込めるごと、剣全体を闘氣が包み込んだ。そし
てエスティルは剣を振りおろして、剣に込められた闘氣を放つた！

「円舞剣！！」

「なつ！？ キヤアッ！？」

エスティルが放つた技名を聞いて驚いたカーリアンは、エスティルの技
に反応するのに遅れ、エスティルの技を受けてしまい、のけ反つた。
そしてヨシュア達は置みかけるようにクラフトを放つた！

「絶影！」

「ぬおおおおお！ 千手悔拳！…」

「それっ！ クイックドロウ！…」

「この…………やられっぱなしでいると思わないでよね！……白露の

桜吹雪！…」

ヨシュア達の攻撃を必死に捌いていたカーリアンはクラフトを放
つた！

「くつ！」

「ぐつ！」

「おあつ！」

カーリアンのクラフトによつて、ヨシュア達はダメージを受ける

と同時に吹つ飛ばされた！

「身妖舞！…」

「嘘つ！？」

しかしカーリアンの攻撃範囲外にいたエステルはUクラフトを放つて、硬直しているカーリアンに素早く、舞うかのように剣で2回斬りつけ、カーリアンにダメージを与えた。

（ふわ）……エステルさん、凄いです。ご主人様の剣技を真似するなんて……！」

（ほう……まさか、“飛燕剣”をこの目にする時が来るとは……クク、本当にお前は我を驚かせてくれるな、エステル。）

一方エステルの身体の中にいたテトリはエステルがかつての主の剣技 飛燕剣を使った事に驚いた。また、サエラブも伝説となっている東方の剣技を目にして、驚いた。

「みんな、大丈夫！？」

後ろに大きく飛んで後退したエステルはカーリアンのUクラフトを受けて、蹲つて呻いているヨシュア達に声をかけた。

「このくらいの傷では俺は倒れん……さ！」

ジンは体に伝わる痛みを平氣であるかのように、余裕の笑みを浮かべて立ち上がった。

「大丈夫つてほどじやないけど……まだ……行ける！」

ヨシュアは痛みに顰めながらも、未だ闘志が衰えない表情で立ち上がりつた。

「フッ……シェラ君にぶたれた鞭の痛みに比べればまだまだよ！……いたた……」

オリビエは強がった後、情けない表情で痛みにしかめながらも、立ち上がつた。

「それにしても、エステル。君つて、剣はそんなに得意じやなかつたんじや……」

「えへへ……今まで出会つた人達から技を借りただけよ！」ヨシュアの疑問にエステルは苦笑しながら答えた。

「ハハ……さすがに父さんの血を引いているだけはあるね。……そ

れにしても、さっきの剣技は見た事なかつたけど、誰の剣技なんだい？」

ヨシュアはエステルが相変わらず自分の才能に鈍感である事に苦笑した後、カーリアンにダメージを与えた剣技を尋ねた。

「あ、うん。”飛燕剣”って言うパズモ達の世界の東方の剣技でパズモやテトリの前の主の人が使つていた剣技なんだ！パズモ達からどういう剣技か、聞いて一か八かで真似してみたら、成功したのよ！」

「聞いただけで技を真似したって……」

「ほう……異世界にもカルバードのよつな”東方流”があるのだな。

「ハハ……さすがはエステル君だねえ。野生の勘と言つた所かい」エステルの説明を聞き、ヨシュアは驚き、ジンは異世界にも”東方流”がある事に感心し、オリビエは茶化した。

「エステル。さつきの剣技をもう少し詳しく教えてくれないかい？」

「”飛燕剣”の事？いいわよ。えっとね……」

そしてエステルはヨシュアにおおまかに”飛燕剣”的特徴を説明した。

「こんなところね！」

「……ありがとう、エステル。お陰で僕もその剣技を出来るかもしけ……」

エステルにお礼をいい、口を開いて何かを言いかけたヨシュアだったが

「それえつ！」

「！－やばつ！？」

「！－！」

「はつ！」

「おおつと！？」

そこにカーリアンが放った衝撃波がエステル達を襲い、それに気付いたエステル達は急いで回避した。

「フフ……まさかセリカとリウイ、2人の技を同時に使う人間が……しかもそれが異世界の人間だなんて、驚いたわ。それに正直、私がここまで追い詰められるとは思わなかつたわ。本当に貴女つて、最高よ！」

カーリアンは好戦的な笑みを浮かべて、エステル達に言った。

「へへ～んだ！ 言つたでしょ？ 誰が相手でも必ず勝つって！」

カーリアンにエステルは不敵な笑みを浮かべて答えた。

「フフ……貴女の言つた通り、さすがの私もヤバくなつて來たわ。でも、そう簡単には負けないわよ！」

そしてカーリアンはエステル達目掛けて、双剣を構えて走り出した！

「みんな！ 時間を少しだけ稼いでもらえる？」

エステルは再び、剣と棒をそれぞれ片手に持つてヨシュア達に言った。

「また何か思いついたようだね……了解！」

「期待しているぜ！」

「フツ……今回の美味しい所はエステル君に任せると……では、まずボクからだ！」

エステルの言葉にヨシュア達は力強く頷いた。そしてオリビエは背負つていたリュートを取り出した。

「この曲は貴女に捧げるレクイエムさつ！」

そしてリュートの弦を一回鳴らした後、懷からバラを一本取り出して放り投げた！ そしてカーリアンに一瞬だけ背中を向けた後、カーリアンの正面に向くとオリビエの両手になんと銃口があるリュートがあつた！

「ふつ……これは避けられまい！」

そしてオリビエはバラが散ると同時に銃口から怒涛の銃撃をカーリアンに放つた！

「ちつ……鬱陶しいわね！」

オリビエの怒涛の銃撃をカーリアンは足を止めて、捌いていた。

「それ、おまけだつ！」

そして怒涛の銃弾を撃ち終わつたオリビエは特大の銃弾をカーリアンに放つた！

「それえーー！」

特大の銃弾に当たればただでは済まないと思ったカーリアンは衝撃波を銃弾に当てた。衝撃波に当たつた銃弾はアリーナを響き渡らせるほどの爆音と眩い光で爆発した。

— ۱ —

そしてオリビエのSクラフト レクイエムハ ツの爆発の煙が晴
れると、そこには鬪氣を体全体に溜めこんでいるジンがいた。

一はめつ!!

ジンが叫ぶと、ジンの体全体に膨大な闘気が宿つた！

泰山.....玄武廟！！！」

そして拳を前に出して カリーナンに信じられない速さで突進した！

「カバツ!!?

ジンにとつて最大奥義となる「クラフト」泰山玄武靠を受けてしまったカーリアンは呻いたが、それでも立つたままだつた。カーリアンは目標を自分に最大の一撃を与えた後、鬪氣が霧散したジンに変えて、攻撃しようとしたが、殺氣と鬪氣を体全体に覆つて、双剣を構えているヨシュアに気付いた。

卷之三

「その技は通じないわよ！」

ヨシュアのUクラフト
断骨剣を試合で見て、対処方法がある力

「ハアツー、セーハー、セニヤハー！」

「なう!?

ヨシュアは一瞬で双剣を残像を残すほど速さでカーリアンに3回攻撃して、怪我をしてなかつたカーリアンの腕に傷を作らせ、いつ

の間にか元の場所に着地して、静かに新たな技名を呴いた後、さらに攻撃の構えをした。『飛燕剣』の技の一つ『蓬妖舞』が加えられたその技の名は……！

『断骨剣・妖の型』。…………はあああああ！！！

そしてヨシュアは双剣に自分の持つ鬪氣を始めた！

「はっ！」

双剣に鬪氣を溜め終えたヨシュアは信じられない速さでカーリアンに攻撃した。

「なつ！？剣が！？」

ヨシュアの神速の攻撃をなんとか両手が満足に動けないながらも防御したカーリアンだつたが、ヨシュアの双剣に籠っている鬪氣の一撃の威力にカーリアンの双剣が弾き飛ばされた！

研ぎ澄まされた漆黒の刃に速さに重視を置く『飛燕剣』の技の中でも珍しく、力を込め威力を重視する技『殲綱斬』が加えられたその技の名は……！

『漆黒の牙・斬の型』。…………後は頼むね、エステル…………

ヨシュアは静かに新たなクラフト名を呴いた後、力を使いはたしたヨシュアはその場で倒れて立ち上がらなくなつた。そこに剣を鞘に仕舞つて、棒を両手に構えたエステルが並んだ。

「みんな、ありがと！行くわよ…………！はあああ！」

エステルはその場で回転して、鬪氣と棒の遠心力によつてできた巨大な竜巻を作つた！

「いけ～！」

そしてその竜巻を棒を思いつきり振つて、カーリアン曰掛けて放つた！

（……これは、完全に私の負けね……）フフ……貴女達の最高の技、私に見せて頂戴！

カーリアンは自分に襲いかかる竜巻を見て、武器もない状態では何もできない上、体も今までの戦いの疲労や怪我で思うように動かなか

かつたため、諦めた後自分に止めをさす技がどんな技になるのか、
楽しそうな表情で叫んだ。そして闘氣でできた竜巻はカーリアンを
襲つた！

「つつ！？まだ……この程度では倒れないわ！」

竜巻によつてどんどん傷ついていくカーリアンは叫んだ。

「これが！あたしの！とつておき！我に眠りし命の炎よ……ここ
に来たれ！」

そしてエステルは鞘から剣を抜いて、片手で握り、もう片方の手には棒を握つて叫んだ！すると、剣は”聖炎剣”になり、棒は”聖炎”によつて刃が宿り、槍と化した！

「これで……終わりよ！」

エステルは両方の武器を構えて、そのままカーリアンを掛け突進した！その技は棒、槍、剣が合わさつた究極の技にして、聖なる炎を宿した奥義！

「聖技！！」

突進したエステルは槍と化した棒と剣で、カーリアンを十字に斬つた！！

「グランドクロス！！」

エステルがカーリアンの背後まで駆け抜け、叫ぶと闘氣と聖炎によつてできた十字架がカーリアンに刻まれた！

「カハツ！？まさかこの私が負ける……なんて……ね……見事……
よ。私の完敗……ね。」

エステルが放つた究極のグランドクロスの威力にカーリアンは呻いた後、地面に倒れ、立ち上がらなくなつた。

「はあ、はあ……ク！？まだ、倒れちゃ……駄目！！」

魔力、闘氣を共に使いはたして、体力も限界だつたエステルは元の姿に戻り、そのまま地面に倒れそうになつたが、元に戻つた棒を杖の代わりにするかのように地面にさして、倒れるのを踏みとどまつた。また、剣は元の折れた剣に戻つた。

「勝負ありー蒼の組、ジンチームの勝ち！」

そして審判はカーリアンの状態を見て、エステル達の勝利を宣言した……！

～武術大会・決勝戦～後篇（後書き）

という訳でエステル、それぞれの作品の最強キャラの技を習得しました！後、アナラスの技はおまけです。カシウスの娘であるエステルができるても違和感ないですし、それに私自身“八葉滅殺”が好きだからエステルに習得させました！それと最後に放ったSクラフトは現状では必要CPはMAX、放てばエステルのHPが1&lt;1ターン気絶（HPがピンチ状態で放った場合は戦闘不能）になるという条件付きです！そして4人目のエウシュリー技習得はヨシュアになりました！原作でも双剣で例の剣技を放つキャラがいましたから、大丈夫と思って使わせました……感想お待ちしております。

設定（特殊）

＜覚醒した少女＞エステル・ブライト

瞳は翡翠と紫紺のオッドアイ、髪の色は黒に加えて、先端の部分に
金が混じる

L V ? ? ?

H P	4 7 0 0 0
C P	4 5 0 0
A T K	4 6 0 0
D E F	3 0 0 0
A T S	4 2 0 0
A D F	3 0 0 0
S P D	5 5
M O V	1 0

装備

武器 原作の武器＆魔剣リブラクルース（エステルの魔力によつて
変化した別世界の3人の英雄が使つた元神剣。ただし、エステルが
元の姿に戻るとただの欠けた剣に戻る上、元の姿で刃を具現化して
も、欠けた部分に魔力の刃が足されるだけである。）

防具 原作通り

靴 原作通り

アクセサリー 混沌の印（混沌の女神、アーライナの信者達に配ら
れているお守りにエステルのためにペテレーネが魔力を込めた逸品。
エステル専用、A T S & A D F 1 0 % 上昇、毒・混乱防止）

闘魂ハチマキ

水、火属性攻撃を受けても無効化する。

クラフト

原作 + 今までに習得した魔術、召喚術

フェヒティング 80 単体 3回攻撃&アーツ、駆動

妨害

剣技・八葉滅殺 使用CP、攻撃範囲や威力はアネラスと同じ
身妖舞 20 単体 踊るように素早く2回攻撃する飛燕剣の初歩
剣技。ただし剣を持つていないと使えない。また、使えばHPが最大HPの5%減る。

円舞剣 30 直線 貫通する衝撃波を出す飛燕剣の基本技の一つ。
ただし剣を持つていないと使えない。また、使えばHPが最大HPの10%減る。

Sクラフト

雷波無双撃 単体 自ら編み出した魔棒技、威力はATK、ATS
両方を合わせ、さらに烈波無双撃の1.5倍、封技50%。ただし、
CPが200からないと使えない。MAX威力になるCPは40
0、任意で烈波無双撃か選べる。

聖技・グランドクロス 単体 棒、槍、剣を用いた上、“聖炎”も
使う究極の技。威力1000%。使用条件、CP MAX。使えば元
の姿に戻る上、HPが1になる。ピンチ状態で使えば戦闘不能。

<準遊撃士>ヨシュア・ブライト

装備、能力は原作通り

追加クラフト

殲絆斬 40 単体 飛燕剣の基本技の一つ。攻撃後敵のDEF15%低下。ただし使えばHPが最大HPの7%減る

蓬妖舞 50 単体 飛燕剣の基本技の一つ。威力150%&多段ヒット効果&使用後すぐに自分のターンになる。ただし使えばHPが最大HPの10%減る

紅燎剣 80 中型直線 贫通する飛燕剣の奥義の中の基本技。ただし使えばHPが最大HPの15%減る

Sクラフト

断骨剣・妖の型 単体 飛燕剣の技を取り込んだ断骨剣。一撃ごとに多数ヒット効果、威力は普通の断骨剣の1.5倍。ただし使えば、HPが最大HPの20%減る。

漆黒の牙・斬の型 全体 飛燕剣の技を取り込んだ漆黒の牙。威力は漆黒の牙の2倍&敵のDEF25%減少。ただし使えば、HPが最大HPの40%減る。

？？・？？？・？？？ 全体 飛燕剣の奥義の一つを取り込んだヨシュアの最終奥義。ある事情により、今は使えない。

「戦妃」カーリアン

LV????

HP35000

火100%
水100%
地100%

風 100%

メンフィルの英雄の一人。負傷した影響で弱っている。全力でたたみ掛ければ勝機は見えてくる！

設定（特殊）（後書き）

エスティルのパラメータがおかしい事になつていますが、これはあくまで一時的なものかつ今回限りで、元の姿に戻ればパラメータも戻ります。後、新Sクラフトはさすがに某聖女と同じ効果範囲ではありません。それとヨシュア、何気に新しいクラフトを習得しちゃいました。カーリアンのはクオーツ「情報」を持っていたら見える説明です。

「グラランアリーナ・観客席」

「やつ…………た――――――マダラが勝つた――――！」

「凄い……！エステルさん達、優勝したね！」

エステル達の勝利を見て、ミントやツーヤは大はしゃぎした。

「ううん、エステルちゃん達、凄く輝いていいね～。」

ドロシーはエステル達をカメラで写真を撮りまくっていた。

「まさか本当にカーリアン様に勝つなんて……！」

「うむ！さすがはエステルだ！それにカーリアン婆が負けるのをこの眼で見る事になるとは……ふくくく！駄目じや、笑いが止まらん

！フハハハハ！」

「エステル達、強くなつたね。エヴリーヌ、エステル達と遊びたくなつて來たよ、キヤハッ！」

一方プリネはエステル達の勝利に驚き、リフィアはカーリアンが負けた事に笑いを抑えられず大笑いをし、エヴリーヌはエステル達と戦いたくなつた。

「フフ……お見事。近い内必ず会いに行くわね、エステル。」

また、上空から試合を見ていたニールは口元に笑みを浮かべた後、どこかに飛び去つた。

「グラランアリーナ」

「はあ、はあ…………やつたああああっ！」

自分達の勝利を宣言され、安心したエステルは地面に倒れ込んだ後、地面に手をついたまま、嬉しさの絶叫をした。

「勝つた……勝てたのか……」

「はあはあ……。さ、さすがに疲れたねえ……」

地面からなんとか立ち上がったヨシュアは自分達の勝利に未だ信じられない思いでいて、オリビエはかなりの疲れた表情で息を切らせていた。

「ああ。まさかあの”戦妃”に勝てるとは本当に思わなかつたぜ！」ジンは嬉しそうな表情でカーリアンに勝てた事を信じられない思いでいた。

「フフ……見事よ。まさか私を破るなんて思わなかつたわ 優勝、おめでとう」

一方カーリアンはオープメントの回復アーツで自分を治癒した後、エスティル達に近付いて、エスティル達の勝利を称えた。

「えへへ……でも、なんで回復アーツや薬を使わなかつたの？そしたらあたし達に勝ち目はなかつたかもしれないのに。」

カーリアンの賛辞に照れたエスティルは立ち上がり、カーリアンが回復アーツを使わなかつた事に首を傾げて、尋ねた。

「今まで武術大会を連覇していたこの私が、そんな無粋な事をする訳ないでしょ？それにピンチになればなるほど、試合が面白くなるしね 後、貴女達にはやるべき事があるでしょ？」

「え……」

「もしかして僕達の事を考えてわざと負けたんですか？」

カーリアンの答えにエスティルとヨシュアは驚いた。

「半分当たりで半分はずれよ 一時とはいえ、本気を出したのは事実だし。それにここで私が完全に本気を出して、貴女達を負かしたら大人げない上、悪者でしょ？」

「む……なんか納得いかないんですけど……」

悪戯が成功したようなカーリアンの笑顔にエスティルは唸つた。

「フフ……でもこの私に一時とはいえ、本気を出させた事は誇るべき事よ。そんな貴女達に敬意を表して、最後に放つた貴女の最高の技を全て受けてあげた訳」

「む……次に戦う時は絶対、本気状態で倒してやるわ！」

カーリアンの言葉を聞き、エステルはカーリアンを睨んで宣言した。

「楽しみにしているわ さて……と。そろそろ行くわね。」

「ロレントに帰るんですか？」

カーリアンの言葉を聞き、ヨシュアは尋ねた。

「まあ、普通ならそうする所なんだけど……ね。今年の王都は色々と起こりそだから、もつちょっと滞在するつもりよ」

「それって……」

「…………」

カーリアンの答えを聞き、思い当たる事があるエステルは何かを言いかけたが、すぐに言ひのをやめた。また、ヨシュアは複雑そうな表情をしていた。

「フフ……私の力を借りたいなら、いつでも私が泊まっているホテルの部屋に来なさい プリネ達には私が泊まっている部屋を伝えてあるわ。言つてくれれば、力を貸してあげるわ」

「ホント!?」

「リウイ皇帝陛下の許可もなく、そんな事をしていいんですか？」

カーリアンの申し出にエステルは表情を明るくし、ヨシュアは驚いた表情で尋ねた。

「な~んて、この私がいちいちリウイの許可を取らなきゃなんないのよ。私がどうしようが私の勝手よ。」

ヨシュアの疑問にカーリアンは溜息を吐いて答えた。

「そういう問題じやないと思うんですけど……」

「本人がいいつて言つてるんだから、い~じやない!えっと……じゃあもし頼む時があつたら、遠慮なくお願ひするわね!」

カーリアンの答えに呆れて溜息を吐いているヨシュアにエステルは気にしないよう言つた後、カーリアンに頼んだ。

「ええ。……じゃあね 貴女達が私に声をかけるのを楽しみに待つているわ」

そしてカーリアンはエステル達にウインクした後、アリーナから去つて行つた。その後、優勝者であるエステル達の表彰式が始まつ

た。

「それではこれより、優勝チームに公爵閣下の祝福の言葉が贈られます。代表者、ジン・ヴァセック選手！どうぞ、前にお進みください」

「は。」

司会の言葉を聞き、ジンはデュナンに一礼してデュナンの前に出た。「おお、近くで見ると本当に大きいのだなあ……。東方人というのには皆、そなたのように大きいのか？」

デュナンはジンの体の大きさを見て驚き、尋ねた。

「いや、自分は規格外ですな。幼き頃より、良く食べ、良く眠り、鍛えていたら自然とこうなりました。生来、物事を深く考えない質ゆえ団体ばかり大きくなつたのでしょ？」

「ハツハツハツ、なるほどな。うむ！気に入つたぞ、ジンとやら！賞金10万ミラと晩餐会への招待状を贈るものとする！」

「ありがたき幸せ。」

そしてデュナンはジンに賞金10万ミラと晩餐会への招待状を渡した。

「そなたと、そなたの仲間に女神達の祝福と栄光を…さあ、親愛なる市民諸君！勝者に惜しみない拍手と喝采を…」

デュナンの宣言に応えるかのように観客達は惜しみない拍手をし、大きな喝采の声を上げた。

こうして、波乱に満ちた武術大会は幕を閉じた。

（グラントアリーナ・選手控室・紅の組）

「フフ、面白い者たちが優勝することになつたものだな。」

一方選手控室から表彰式を見守っていたリシャールは口元に笑みを浮かべた。

「まつたく……恥を知りなさい、ロランス少尉。決勝に行くどころか2回戦で、しかも他国の皇女に遅れを取つて閣下の顔に泥を塗るなんて……。田頃のふてぶてしい態度はどうやら口おとケ威おどしだったようね？」

「……恐縮です。」

カノーネはロランスがプリネに負けた事を責めた。責められたロランスは静かに頭を下げた。

「はは、カノーネ君。そう責めないでやつてくれ。実は私の方から、ロランス君に全力を出さないように頼んだのだ。」

「えつ……！」

「…………」

リシャールの言葉にカノーネは驚き、ロランスは黙っていた。

「情報部はその性質上、黒子の役に徹せねばならない。今回のように、華のあるチームが優勝する方が望ましいだらう。」

「なるほど……。公爵閣下も、あの東方人を予想以上に気に入られた様子……。田くらましにはもつてこいですわね。」

リシャールの説明を聞いて納得したカノーネは不敵な笑みを浮かべた。

「しかし……今年の大会は残念だったな。親衛隊のシユバルツ中尉やモルガン将軍たわむが参加していればもっと華やかだつただろうに。」

「うふふ、お戯たわむれを……。そういう事なら、閣下ご自身が出場なさればよろしかつたのに。あの小癩こじやくなユリアなど足元にも及ばぬ腕前なのでですから。それに閣下なら単独での目触りな”戦妃”に勝てるのではないですか？」

「はは、私はそれほど自信家ではないつもりだよ。本気を出したロランス君にもあまり勝てる気がしないからね。」

「……お戯れを。閣下は少々、私のことを買いかぶりすぎているようだ。軍人とは名ばかりの獵兵あがりの無骨者ぶつけしゃにすぎません。」自分に対するリシャールの評価を聞いたロランスは謙遜して答えた。

「これでも人を見る目は確かにつもりだ。君に対抗できるとすれば、それこそあの男やメンフィルの名高い武将達やリウイ皇帝陛下くらいだろうな。」

「…………」

リシャールの言葉を聞いたロランスは何も言わず黙っていた。

「その彼のことですが……。このままで、彼の子供たちがグランセル城に入ってしまいますわ。……それにメンフィルの重要人物達が4人も王都にいますが、何らかの処置を講じましょうか？」

「放つておきました。公爵閣下が約束してしまったことだ。今更、遊撃士協会が介入しても計画が止まることはありえない。それにいくら実力が飛びぬけているメンフィルの者達が介入した所で所詮は個人だ。大した事はない。」

「で、ですが……」

リシャールの説明を聞いても、未だにカノーネは納得していない様子で何かを言いかけたが、リシャールはカノーネから目線を外してロランスに尋ねた。

「……ロランス君。計画の進行度はどのくらいだ？」

「現在90%を越えました。一両日中には、最終地点へ閣下をご案内できるかと思います。」

「よし、いいぞ。」

ロランスの報告を聞き頃いたリシャールは数歩前に出た。

「……王国の夜明けは近い。たとえ逆賊の汚名を受けても……必ずやこの手で明日を切り拓くのみ。2人とも、これからもさらなる活躍を期待しているよ。」

リシャールは決意の表情になつた後、口元に笑みを浮かべてカノーネとロランスに声をかけた。

「ハッ。」

「どこまでも閣下に着いて行きます！……（さて……博士奪還を許したあの者達や武術大会で敗北したあの者達がいても邪魔なだけね……計画が完了するまで謹慎でも言い渡しておきましょう。）」

リシャールの言葉にロランスは軽く礼をし、カノーネも礼をした後、

心の中で博士奪還を許してしまった特務兵達や武術大会で敗北した特務兵達の処分を考えていた。

そしてリシャール達は表彰式が終わった後、デュナンを護衛しながら城に向かった……

第135話（後書き）

これにて武術大会編、終了です！でも、まだ序盤が終わつたばかり
……、先は長いなあ……後、今回の話で色々なフラグが立つてい
ます……感想お待ちしております。

「グラントアーナ前」

「ママ、優勝おめでとうー。」

「えへへ……ありがとう、ミントー！」

試合が終わり、グラントアーナの前にリフィア達と合流したエスティルは抱きついて来たミントを受け止め、ミントの称賛に笑顔を浮かべた。

「おめでとうございます、みなさん。」

「うむ！4人とはいえ、あのカーリアンを破ったのは凄い事だぞ！」

「おめでとう。」

「みなさん、凄かったです。…………あたし、みんなの事、尊敬しています。」

ミントに続くヨウヒリフィア達もそれぞれ祝福の言葉をかけた。

「みんなもありがとうございましたー。はあー、それにしても何ていうかすっごい戦いだつたわよね。カーリアン、想像以上に手強かつたし……」

「うん……よく勝てたと思う。今でも信じられないな……」

「ああ。向こうが回復アーツを使って来なかつたとはいえ、よく勝てたものだ。」

エスティルの言葉にヨシュアやジンは頷いた。

「さて…………晩餐会つてのはさつそく今夜あるみたいだな。結構遅くまであるらしいから部屋も用意してくれるみたいだぜ。」

「やれやれ、太つ腹なことだ。お偉方と同席というのは堅苦しいような気もするが……。やはり、リベル宫廷料理にありつけるのは楽しみで仕方ない。フツ、今から想像しただけでも涎よだれが出てしまいそうだよ、ジュルリ。」

ジンの言葉を聞き、オリビエは涎を垂らして答えた。

「出でる、出でるつてば。」

「オリビエさんに関するは何のプレッシャーも無さそうですね。」
オリビエが涎を垂らしている事にエステルはジト目で突っ込み、ヨシコ
シュアは全然緊張していないオリビエの様子に苦笑した。

「ハツハツハツ。それでは行こうじゃないかーボクたちをもてなして
くれる愛と希望のパラダイスにつー！」

「……………そ…う…事…が…運…ふ…と…思…づ…か…？」

オリビエが高らかに騒いでいる時に怒りを抑えた様子のエレボニア
将校 ヨシコラーがやつて来た。

「ハツ、君は……」

ヨシコラーを見て、オリビエは驚いた。

「貴様というやつは……………毎日毎日、ふらりと出かけて何をしてい
るのかと思えば……………まさか立場をわきまえずに武術大会に参加し
ていたとは……………」

ヨシコラーは今にも爆発しそうな様子で静かに言った。

「や、やだなあ、ヨシコラー君。そんなに怖い顔をするんじやあない
よ。笑う門には福来る。スマイル、スマイルっ」

「誰が怖い顔をさせているかッ！」

そしてオリビエのからかう言葉を聞き、とうとう怒りが爆発した。

（あの制服つて、もしかして……）

（うん……………エレボニア帝国の軍服だ……………）

（ふむ……………なかなかやりそうな兄さんだ。）

（ん……………そこそこ腕はありそうだね。）

（ヨシコラー……………か。どこかで聞いた名だな。）

（ええ……………どこの家の方か、ちょっとと思い出せないです……）

……エレボニア将校である事からして、恐らくエレボニアの有名な軍
人の家系だと思うのですが……………）

一方エステルとヨシコラー、リフィアとブリネはお互いヨシコラーの正
体を相談していた。ジンやエヴリースはヨシコラーの強さを感じた。

「……お初にお目にかかる。自分の名前はミコラー。先日、エレボニア大使館の駐在武官として赴任した者だ。そこのお調子者とはまあ、昔からの知り合いでな。」

「いわゆる幼なじみといつヤツでね。フフ、いつも厳めしい顔だがこれで可愛いところがあるのだよ。」

「い・い・か・ら・黙・れ！」

「ハイ……」

ミコラーの自己紹介を茶化したオリビエだったが、ミコラーの睨みと怒りの言葉にしゅんとして黙った。そしてミコラーは表情を戻して、咳払いをした後、話を続けた。

「コホン、失礼した。どうやら、このお調子者が迷惑をかけてしまつたようだな。エレボニア大使館を代表してお詫びする。」

「あ、ううん……迷惑つてほどじゃないけど。試合じや、オリビエの銃と魔法にずいぶん助けられちゃつたし……」

「あの、オリビエさん。武術大会に出ていたことを大使館に隠していましたか？」

「ハツハツハツ。別に隠してたわけじゃないさ。ただ、言わなかつただけだよ。」

「そういうのを隠していたと言つのだッ！」

表情を戻したミコラーだったが、オリビエの説明を聞き、また怒りが爆発した。

「ま、まあいい……。過ぎたことを言つても仕方ない。ひとつと大使館に戻るぞ。」

「へ……。ちょ、ちょっと待ちたまえ。ボクたちはこれからステキでゴージャスな晩餐会に招待されているんですけど……」

ミコラーの言葉を聞き、驚いたオリビエはエスティル達と一緒に行事を説明しようとしたが

「ステキにゴージャスだからなおさら出られると困るのだ。お前にはしばらく大使館で過ごしてもらつぞ。」

ミコラーはオリビエの言い訳をバッサリ切った。

「……………マジで?」

ミコラーの言葉を聞き、オリビエは信じられない様子で聞き返した。

「俺は冗談など言わん。」

そしてミコラーはハツキリ冗談ではない事を言つた。

「そ、そんな殺生な……。晩餐会だけを心の支えにここまで頑張ってきたのに……」

ミコラーの言葉を聞き、オリビエは情けない顔をしてミコラーに嘆願した。

「そ、れすがに……ちよつと可哀想じゃない?」

「晩餐会に出席するくらい、別に構わんのじゃないのか?」

「何か理由もあるんですか?」

「ねえねえ。オリビエお兄さん、ママ達のために凄く頑張ったんだから、お城でご飯を食べる事ぐらい許してくれないかな?」

「あたしもミントちゃんに賛成です。せっかくここまで頑張ったんですけどから、たまにはいいのではありますか?」

「そうだな。ここまで来たのだから、褒美代わりに城の晩餐会に参加するぐらい、許してやってもいいのではないか?」

「Hヴィーナスもそう思ひ。」

「みなさんのおっしゃる通り、晩餐会に参加するなんて滅多にない機会なのですから、許してあげてもいいのではないですか?」

オリビエの様子を見て、哀れに思ったエステル達はそれぞれオリビエのフォローをした。

「キミたち、ナイスフォロー! ああ、仲間といつのばはなんと美しいものなのだろうか……。どうぞの薄情な幼なじみとは比べ物にならない温かさだねえ。」

エステル達のフォローを受けたオリビエは無念そうだった表情が一転し、いつもの調子になつて言つた。

「……君たちは、事態の深刻さがいまいち理解できていよいよだ。いいか、想像してみる。王族が主催する、各地の有力者が集まる晩

餐会……。そこで立場もわきまえずに傍若無人にふるまつお調子者

。それがエレボニア帝国人だとわかつた日には……」

「…………」

「…………」

「…………」

「…………」

「…………」

「…………」

「…………」

「…………」

「…………」

「…………」

ミコラーに言われ、オリビエが晩餐会に参加した時の光景が思い浮かんだエステル達は黙つた。唯一理解できなかつたミントは首を傾げ、ツーヤは黙つているエステル達の顔を見て、何も言えなくなつた。

「ちょ、ちょっと皆さん。どうしてそこで黙るんデスカ？」
いきなり豹変したエステル達の様子にオリビエは慌てて尋ねた。

「……ごめん、オリビエ。その人の心配ももつともだわ。」

「さすがに、王城の晩餐会でいつものノリはまずいですね。」

「うーむ。国際問題に発展しかねんな。」

「そうだな。余達メンフィルにとつても、他人事ではなくなる。」

「まあ、元気出しなよ。」

「アハハ……すみません、オリビエさん。」

そして掌を返したかのように、エステル達はミコラーの味方になつた。

「うわっ、掌を返すよつにつけ！？」

一斉にミコラーの味方になつたエステル達をオリビエは叫んだ。
「終戦から10年目……。ただでさえ微妙な時期なのだ。我慢してもらうぞ、オリビエ。」

そしてミコラーはオリビエの首を掴んだ。

「ちよ、ちよっと待つてくださいよ、ミコラーさん。黙っていたことは謝るからセ……」

諦めきれないオリビエはなんとかミコラーを説得しようとしたが

「問答無用。」

「ボクの晩餐会ー！ボクの宫廷料理ー！」

哀れにもミコラーに引きずられて行った。

「えつと……いいのかなあ？」

「オリビエさん、ちよっと可哀想だつたな……」

オリビエを見送ったエステルは苦笑し、ミントはオリビエの事を可哀想に思つた。

「気の毒だけど……こういう事もあるよ、うん。」

「まあ、人間万事、塞翁さいおうが馬うまつてやつだ。せいぜい奴やつさんの分まで楽しんできてるよ。」

ヨシュアやジンは気にしないように助言をした。

「うーん……仕方ないか。それじゃあ、気を取り直してグランセル城に行きましょー！」

そしてエステルは気を取り直して言った。

「ねえ、ママ。ミントは行つたら駄目なの？」

「うーん……」「めんね、ミント……あたし達しか招待されていらないから、一緒に行けないの……」

ミントに尋ねられたエステルは唸つた後、申し訳なさそうな表情で謝つた。

「そつか……わかつたー！ミント、リフィアさん達とお留守番をしているから、早く帰つて来てね！」

「ミント……あーん！もうーなんて可愛くて、良い子なのかしらーあたしにはもつたいないぐらいよー！」

「えへへ……くすぐつたいよー、ママ。」

ミントの可愛さと聞き分けの良さにエステルは思わずミントを抱きしめて、顔をスリスリした。一方抱きしめられ、顔をスリスリされ

たミントは気持ち良さそうな表情をしていた。

「ハハ……じゃあ城での用事を済ませたら、ホテルに帰つたほう
がいいね、エステル。」

エヌヌーとミントの様子を見て、ヨシコアは苦笑した後、提案した。「モチのロンヌー・ミント。今日中に絶対帰つて来るから、帰つて来た時、一緒にベッドで寝て上げるからね。だから、待つてね！」

「本當!? 絶対だよ、ママ！」

(……………）

一方ツーヤは羨望の眼差しでエステルとミントを見ていた。
プリズ、プリズ。あの娘は羨ましがつていい娘だよ。

(そつだぞ、プリネ。)これはエステル達に負けぬよつ、お前ももつ

（）おーい！ おーい！ おーい！ おーい！ おーい！

エヴリーヌとリフィアに小声で言われたプリネは微笑んだ後、ツーヤに話しかけた。

田は二本手の道の方に一筋の川で運びよ

「え！？ いいんですか！？」

プリネに言われたツーヤは驚いた後、表情を明るくして尋ねた。

な事ぐらい、当たり前じやない。

「……はー。じゃあ、お畠葉にかえて、今日せよ願いを叶えよう。

「さて……と。じゃあ、あたし達は城に行つてゐるから、ミントの事

「お願いね、4人共。」

۱۰۷

「余に任せておけ！」

エスティルにミントの事を頼まれたプリネ達は力強く頷いた。

「よし……それじゃあ、グラントセル城に行きましょ！」

そしてエスティル達はミントをリフィア達に預けて別れた後、城に向かい、門番の兵達に晩餐会の招待状を見せて城の中に入った……

感想お待ちしております。

「グラント城内」

「うつわ……」「

「当然と言えば当然だけど……。今まで見てきたどの屋敷よりも圧倒的に豪華だね。」

「ただ豪華なだけじゃなくて歴史と伝統を感じさせる壯麗さ……。つくづく、旧き王国の格式と伝統を感じさせるねえ。」

城に入つたエステル達は城内の風景に感嘆の声を上げた。

「ようこそ、グラント城へ。ジン選手御一行でいらっしゃいますわね?」

そこにカノーネとメイドの一人がエステル達に近付いて来た。

(げげつ カノーネ大尉)

(予想してなかつたわけじゃないけど……)

カノーネの登場にエステルは嫌そうな顔をし、ヨシュアはカノーネを警戒した。

「ああ、そうだ。公爵さんの招待を受けて参上した。えっと……あんたは?」

一方、エステル達の様子に気付いていないジンはカノーネが何者かを尋ねた。

「うふふ、申し遅れました。グラント城の警備を担当する情報部のカノーネ大尉と申します。ジン選手御一行におかれましては御優勝、おめでとうございます。試合を拝見させていただきましたが凜々しくて、本当に素敵でしたわ。」

「いやあ、それほどでも。そちらこそ、その若さと美貌で軍の大尉とは本当に驚きですな。よほど優秀でいらっしゃるのだろう。」

「まあ……お上手でいらっしゃいます」と。でも、そちらの若き遊撃士殿ほどではありませんわ。」

ジンの賛辞を受けたカノーネは意味深な表情でエステルとヨシュアを見た。

「……！」

「…………」

カノーネに見られたエステルとヨシュアは何を言われてもいいように身構えた。

「エステル・ブライトさん。ヨシュア・ブライトさん。ヴァイスの事件以来ですかね？」

「……うん、そうね。」

「（）無沙汰していました。」

カノーネの当たり触りのない挨拶の言葉にエステルやヨシュアは笑顔で答えた。

「あいにくですが、ラッセル博士の一件はまだ解決していないのです。どうやら、博士と孫娘さんを誘拐した不届き者がいるらしくて。エステルさんたちにお心当たりはないかしら？」

「さ、さあ～。ぜんつぜん心当たりがないわねえ。」

「あの事件は正遊撃士に任せて僕たちは王都に向かいましたから。その後の続報も聞いていません。」

カノーネは意味深な表情でいきなりラッセル博士達の事を尋ねたが、エステルやヨシュアは知らないフリをした。

「そう……ふふ。それは本当に残念ですわ。まあ、情報部の力をもつてすれば誘拐犯の逮捕も時間の問題でしょう。楽しみに待つてくださいね。」

（（）この雌ギツネ（）……）

不敵な笑み浮かべて博士達を捕まえる事を宣言したカノーネを見て、エステルは内心怒り心頭だつた。

「わかりました。博士は僕たちにとつても恩人なのでよろしくお願いします。」

ヨシュアはエステルと違つて、笑顔で答えた。

「それはもちろん……。さて、それでは眞さんをお部屋まで」案内申し上げましょ。シアさん……あとはお任せしてもいいかしら?」「はい……お任せくださいませ。」

カノーネに言われ、カノーネと一緒に来たメイド シアが少し前に出て来た。

「念を押しておきますが……お客様に、つまらない話をして失礼をかけることがないよう」。いいですわね?」「は、はい……わかつております。」

カノーネの言葉にシアは恐縮しながら答えた。

「うふふ、それでよろしい。それでは皆さん。よき夕べをお過りください。わたくしは、これで失礼しますわ。」

そしてカノーネはどこかに去つて行つた。

「うーん、なかなかいい女だねえ。」

「ジンさん、悪趣味ねえ……。あんな雌ギツネっぽいのビニがいっていつのよ。」

「ああいう人がジンさんのタイプなんですか?」

カノーネに対するジンの評価にエステルは溜息を吐き、ミシコアは以外そうな表情で尋ねた。

「はは、ああいうのに限つて根が純情だつたりするんだよな。そのギャップが、またそそるつづーか。」

「ダメだこりや……。どうでもいいけど何だかオジサンっぽいわよ。」

「ガーン!」

エステルの言葉を聞き、ジンは大ショックを受けた。

「あ、あの……」

そこにシアが恐る恐るエステル達に話しかけた。

「あ、ゴメンゴメン。あたしたちを部屋まで案内してくれるんだつけ?」

「はい……。」案内させていただきます。申し遅れました。私、侍

女のシアと申します。今夜の晩餐会から明日までお世話をさせて頂きます。何か不便がございましたらいつでもお申し付けくださいませ。」

「ああ、よろしく頼むぜ。」

「それでは部屋まで案内していただけますか？」

「あ、はい。お部屋はお2階にございます。」

そしてエスティル達はシアの案内によつて、客室に着いた。

（グランセル城内・客室）

「うつわ……」

「こんな所に泊まれたなんてちょっと想像できなかつたな……」

「いやあ～、何ていうかいい土産話になりそつだぜ。」

エスティル達は客室の豪華さに驚いた。

「晩餐会が始まるまではらりあるかと存じます。城内は自由に見学して頂いて構いませんが、警備上の理由で立入禁止にしている区画があります。くれぐれも立入はご遠慮ください。」

「えつと、具体的にはどういう所がダメなわけ？」

どこが立入禁止になつている場所か気になつたエスティルはシアに尋ねた。

「まずは、女王陛下がいらっしゃる女王宮ですね。屋上にある空中庭園の一角に築かれた小宮殿ですわ。」

「空中庭園……。すごく綺麗そうな雰囲気ねえ。」

「うふふ、生誕祭の時にはそのテラスから王都の市民に陛下が挨拶してくださるんです。空中庭園に出るくらいなら大丈夫だと思いますよ。それと、他の立入禁止場所ですが……。1階にある親衛隊の詰所と地下の宝物庫がそつなつております。」

「親衛隊の詰所っていうと……」

「たしかテロリストとして指名手配されてる連中らしいな？」

浮かれ気分だつたエスティル達は親衛隊の話が出て来ると、表情を真

剣にし、ヨシコアやジンが尋ねた。

「は、はい……。現在、その場所は情報部の方々が使用されています。立入は禁じられているのでどうかご了承くださいませ。」

尋ねられたシアは言いくさうに答えた。

「だいたい判りました。ところで、晩餐会に招待されている他の方々はどうしているのですか?」

「すでに全員お見えになっていますわ。たぶん、それぞれのお部屋で寛いでいらっしゃるかと思います。」

「そうですか……」

「それじゃあ、もうクラウス市長も来てるんだ。」

「はい、先ほどいらっしゃったばかりですわ。それでは私は失礼しますが……。何か御用がございましたら1階の控室までご連絡ください。」

そしてシアは部屋から出て行った。

「う……ちょっと、惜しい事をしたわね……まさか、こんな豪華な部屋に泊まれるとは思わなかつたし……」

シアが出て行つた後、エステルは客室に泊まれない事を微妙に悔しく思った。

「ハハ……それだつたら、ここに泊まるかい?リフィア達にはパズモにも伝言を頼めばいいと思うし。」

悔しがつてゐるエステルを見て、ヨシコアは苦笑しながら提案した。

「そんなの駄目よー!ミントと約束したんだからーそれにミントと一緒に寝るベッドがあたしにとつて、最高のベッドよー!」

「ハハ……エステルらしいな。」

「そうだな。……いつも思うが、お前さんあの嬢ちゃんに対する愛情はそこらへんの親と比べ物にならないくらいの愛情だな。」

相変わらずミントを可愛がつてゐるエステルを見てヨシコアは苦笑し、ジンは感心した。

「当然よー!あたしはミントのお母さんなんだからー!」

2人に言われたエステルは自慢げな表情で胸を張つて答えた。

「さてと……」

そして表情を真剣に直したエステルはジンに気付かれないよう、ヨシュアに目配せをした。エステルの目配せに気付いたヨシュアも真剣な表情で頷いた。

「……ねえ、ジンさん。あたしたち、ちょっとお城の中を見物しに行きたいんだけど……」

「晩餐会が始まるまでには戻ります。」

「やれやれ、試合の後だつていうのに若いモンはタフだねえ。いいぜ、行つてきな。俺はメシまで、この豪勢な部屋でのんびりと休ませてもらうぜ。」

そしてエステルとヨシュアは部屋を出た後、招待客である各市の市長やルーアンの市長代理で来ているコリングズに挨拶をした後、女王宮がある空中庭園に向かった。

（→グランセル城・女王宮入口前）

「あ……」

「ここが女王宮みたいだね……」

空中庭園を歩いていたエステルとヨシュアは女王宮らしき建物を見つけた。しかし、そこには2人の特務兵が門番として女王宮の入口に立つっていた。

「む……なんだ貴様らは。」

「おい……こいつら……」

エステルに気付いた一人の特務兵は警戒し、もう一人の特務兵はエステル達が胸に付けている遊撃士の紋章に気付いた。

「えつと……あたしたち、公爵さんに招待された者なんだけど……」

「こちらは、陛下のいらっしゃる女王宮でいいんでしょうか？」

「……その通りだ。」

エステル達は普通に自分達が何者かや女王がいるかを尋ねた。尋ね

られた特務兵は普通に返した。

「だがここ数日、陛下は御不調でいらっしゃる。お通りを願つても無駄だぞ。」

「や、やだな。そんな大それたこと考えてないわよ。そりゃあ、ちょっとはお目にかかれたらなって思うけど。」

特務兵の注意にエステルは苦笑しながら答えた。

「ところで、クローディア姫もこちらにいらっしゃるんですか？」

「いや、こちらには……」

「……おい。」

「とび、それは熱心に陛下の看病をなさつていらっしゃるが。もちろん、お前たちの相手をなさる余裕などないからな」

ヨシュアが尋ねた事に思わず答えそうになつた特務兵はもう一人の特務兵の注意に慌てて誤魔化した。

「……こんな所で何をなさつていいのですか？」

その時、女王宮の中から中年の女性が現れた。

「夫人……」

「もうお帰りかな？」

「もうすぐ晩餐会ですからいっただく間に引き上げます。ところで、こちらのお客様は？」

中年の女性はエステル達に気付き、特務兵達に尋ねた。

「武術大会で優勝したチームの者です。たかが遊撃士の身分ですが一応、招待客とはいえるでしょつな。」

尋ねられた特務兵は嘲笑しながら答えた。

「ムツ、たかが遊撃士つて……！」

特務兵の嘲笑にエステルは怒りつとしたその時

「無礼者っ！」

中年の女性が特務兵達を大声で一喝した。

「あなた方は、王城の招待客を侮辱するつもりですか！」

「や……自分たちはその……」

女性の迫力に特務兵達はたじろいだ。

「たとえ招かれたのが公爵閣下でも城を来訪された方は、陛下のお客様！その事を忘れてもらつては困ります！」

「りょ、了解しました。」

（す、すごい迫力……）

（ひよつとしてこの人が……）

特務兵をたじろかせた女性を見て、エステルは驚き、ヨシュアは女性の正体を察した。

「ですが夫人……彼らを通すわけにはいきません。その事は、大佐の説明で分かつていただけたはずですね？」

「……その事は聞き飽きました。」

特務兵の言葉を聞いた女性は溜息を吐いた後、エステル達の前に出了た。

「申しわけありません、お客様。警備上の理由で、女王宮の付近に近づくことは禁じられています。できれば、晚餐会が始まるまでお部屋でお待ちくださいませんか？」

「あ……は、はい。」

「わかりました。そうした方が良さそうですね。……すみません。色々とお騒がせしました。」

頭を下げる女性を見てエステルは頷き、ヨシュアは特務兵達にも謝つた。

「フン……」

「分かればいいのだ、分かれば」

（ギロツ）

「……どうぞ、気を付けてお戻りください。」

ヨシュアの謝罪にいい気になつた特務兵達だったが、女性に睨まれると丁寧な物言いで言い直した。

そしてエステルとヨシュア、女性は空中庭園の広場に来た。

「……お客様の前で見苦しいところをお見せしましたね。申し遅れました。私の名はヒルダといいます。グランセル城の女官長として侍女の監督にあたっております。」

「やつぱり……」

「あなたがヒルダ夫人だつたんですね。」

女性 ヒルダが名乗り出ると、エステルとヨシュアは納得した。

「おや……。失礼ですが、面識がありましたでしょうか？」

2人が自分を知っているかのような様子にヒルダは驚いて、尋ねた。

「えつと……ある人から教えてもらつたんです。」

ヒルダの疑問に答えたエステルはユリアから貰つた紹介状をヒルダに手渡した。

「この筆跡は……」

紹介状を読んだヒルダは驚きの声を出した。

「あ、それだけで判るんだ。」

「その紹介状と、遊撃士の紋章が僕たちの身分証明となります。」

「わかりました……。ここでは何ですか侍女達の控室に参りましょ。そこで話を伺わせていただきます。」

そしてエステル達はヒルダの案内によつて侍女達の控室に向かつた

感想お待ちしております。

（グラント城内・侍女控室）

「……お話はわかりました。ラッセル博士の伝言を女王陛下に直接伝えたいと……つまり、そういう事ですわね？」「

エステルとヨシュアから話を聞き終えたヒルダは真剣な表情で尋ねた。

「はい……そうなんです。女王様が本当に調子が悪かつたらちょっと考え直しますけど……」

「それは問題ないでしょ？」「……。女王宮は、先ほどの特務兵によつて24時間監視されている状況です。中に入れるのは、公爵閣下と大佐殿、そして身の回りの世話を仰せつかつた私や侍女だけなのです。」

「ところでは、やっぱり面会するのは難しそうね……」「

女王に会つのがかなり難しい事をヒルダから聞いたエステルは溜息を吐いた。

「どうする、エステル？ 博士の伝言を、ヒルダ夫人に伝えてもらつ手もあるけど……」

「うーん、でもやっぱり直接会つて話がしたいかも……。デュナン公爵の狙いにリシャール大佐の真の目的……。リフィア達のはあくまでリフィア達の推測だし、まだ判らないことも多いしね。」

ヨシュアに尋ねられたエステルは唸つた後、溜息を吐いた。

「今、『リフィア』という名前が出て来ましたが……」

一方ヒルダはエステルから出て来たある人物の名前を尋ねた。

「あ、はい。…………どうしよう、ヨシュア？」

「ヒルダさんなら話してもいいと思つよ。」

「そうね。…………実はあたし達、メンフィル大使に依頼をされて、

リフィア達と旅をしているんです。」

「メンフィル大使……リウイ皇帝陛下から…? という事は先ほど
の『リフィア』という方はやはり、リフィア殿下ですか……」

「後、第2皇女のプリネもいっしょに旅をしています。」

「プリネ姫まで……」

リフィア達と旅をしている事を知つたヒルダは驚いた。

「あ。やっぱり、リフィア達の事を知つてあるんだ?」

「……プリネ姫とは面識がありませんが、リフィア殿下とは何度
か会つた事があります。リウイ皇帝陛下という“王”が傍にいるの
に関わらず自分なりの“王”を自指す独立独行な方で、自分の生ま
れを鼻にかけなく、常に民を思う素晴らしい跡継ぎだと私は思いま
した。プリネ姫も話に聞く所、リフィア殿下とはまた違つた素晴らしい
皇女であると聞きます。」

「あはは……リフィア達の評価つて相変わらず凄い事ばっかり聞く
わね。…………といつあえずこの話は置いておいて、今は女王様に会う
事ね。」

「……エステル殿、ヨシュア殿。私に少々考えがあります。晚餐会
が終わつたらまたここに来て頂けますか?」

「え、それつて……」

「僕たちが女王陛下にお会いできる手段があるといつことじょう
か?」

ヒルダの提案にエステルは驚き、ヨシュアは尋ねた。

「そう考えて頂いても結構です。難しいかもしませんが……試す
価値があるかもしれません。ただ、いささか用意が必要なので晚餐
会が終わつてからでもいいですか?」

「やつた、ラツキー!」

女王に会えるかもしない事にエステルは明るい表情をした。

「わかりました。晚餐会が終わつたら伺います。」

「お待ちしております。料理の下ごしらえが終わつたのでそろそろ
晚餐会も始まると思います。一度、お部屋に戻つた方がいいかもし
れませんね。」

そしてエステル達は自分達の客室に戻った。

（グランセル城内・客室）

「よう、エステル、ヨシュア。ずいぶんと遅かつたじゃないか。そろそろ晩餐会が始まる時間だぜ？」

「じめん、ジンさん。あちこち見物していたらつい時間を忘れちゃつてさー。それに、各地の市長さんたちと色々と話してきちゃつたの。」

待ちくたびれている様子のジンにエステルは謝った後、説明をした。「へえ、お前さんたち、お偉いさんと知り合いだつたのか？」

エステルの説明を聞き、ジンは驚いた後尋ねた。

「ロレントの市長さんは普段から親しくさせてもらつていてるんです。他の方たちとも、旅をしている時に知り合つた方々ばかりです。

「なるほどな。確かに、遊撃士の仕事をしてたらお偉いさんと知り合つ機会は多いか。しかし、その様子じゃ、ずいぶん活躍してるみたいじゃないか？」

ヨシュアの説明に納得した後、ジンはエステル達がさまざまな所で活躍している話を持ち出した。

「えへへ……それほどでも。ジンさんは、王都に来てから何か遊撃士の仕事はやつたの？たしか、他の国でも同じように仕事ができるのよね？」

「ああ、正遊撃士だつたら国籍に関係なく仕事ができるが……。予選だの、大使館の手続だので仕事を受けてるヒマはなかつたな。まあ、他にも遊撃士が4人いたから出る幕がなかつたとも言えるがね。」

エステルの疑問にジンは溜息を吐きながら答えた。

「確かにこれだけ遊撃士が集まつたら大抵の事件はすぐ解決しそうですね。ただ、王都に集中している分、他の地方支部は大変そうで

すけど……」

「わはは、そうかもしれんなあ。」

「うへ、なんだか今さら申しわけない気がしてきたわ。ショーラ姉、ロレントで今『うじうじ』してるのかしら……」

ヨシュアの言葉にジンは呑気に笑い、エステルは申し訳なさそうな表情をした。

「たしか前にもその名前を口にしていたが……。そのショーラ姉つてのはひょっとしてショーラザードのことか。」

「え……知ってるの！？」

ジンがショーラザードを知っている様子にエステルは驚いた。

「はい、僕たちの先輩で昔から親しくさせてもらっています。」

「なるほど、そうだったのか。前に彼女がカルバードに来た時に知り合ったことがあってな。いい師達に恵まれていたらしく、若いながらも見所がある娘だった。」

（その師達つて……）

（うん、父さんと闇の聖女さんのことだね。）

コンコン

その時、部屋がノックされてシアが入ってきた。

「失礼します。晩餐会の支度が整いました。ご案内してもよろしいでしょうか？」

「おお、待ちくたびれちまつたぜ。さてと、それじゃあタダメシにありつくとするかね。」

「うん、さすがに試合の後だからすつじくお腹が空いてきちゃった。さー、食べまくるわよ~」

「あの、2人とも……。一応、テーブルマナーなんかも忘れない方がいいと思うけど……」

ジンとエステルの様子にヨシュアは内心冷や汗を垂らして、苦笑しながら言つた。そしてエステル達はシアの案内によつて、晩餐会が

開催される広間に向かつた。

（グランセル城内・1階広間）

「えつと……。これって夕食会なのよね？どうして食器だけが並んで肝心の料理がないの？ナイフとフォークがいっぴ並べられてるし……」

目の前の光景に首を傾げたエステルはヨシュアに尋ねた。

「正式なディナーだからね。前菜から順番に色々な料理が出てくるんだ。あと、ナイフとフォークは外側から使っていくんだよ。」

「うぐつ……テーブルマナーってやつね。ちょっと緊張してきちゃつた。」

ヨシュアの説明を聞き、エステルは唸った後、緊張して溜息を吐いた。

「うふふ……。あまり気にする事ありませんわ。料理というものは美味しく頂くのが一番ですから。マナー や 礼儀作法は二の次ですわ。」

「そうじや そうじや。聞けば、君たち二人は出席しておる者たち全員と知り合いだそうじやないか。固くなる必要はなかろう。」

緊張しているエステルに招待客であるメイベルやクラウスは場を和ませた。

「あ、それもそつか

「それで納得しないでよ……」

あつさり納得したエステルにヨシュアは呆れて、溜息を吐いた。

「そういえば、そちらの方はナイフとフォークでよろしいんですの？東方の方々は、お箸の方が得意だと聞きましたけど。」

「ほう、よく存じですね。ですが、郷に入つては郷に従えとも言いますからな。不調法ながらナイフとフォークを使わせてもらいますよ。」

「まあ……」立派ですわ。さすが武術大会で優勝された達人の言葉

は違いますわねえ。」

「はつはつは。いやあ、それほどでも。

(つぐづく美人に弱いのねえ……)

(まあ、女好きって感じじゃないと思つけど……)

メイベルに感心され、照れているジンを見てエステルとヨシュアは苦笑した。

「それにしても……公爵閣下はずいぶん遅いですね。いつたい何をしてるんでしよう?」

「ふむ……確かに。それと上座は公爵閣下としてその席は誰が座るのじやろつか?」

マードックの呟きを聞き、クラウスも首を傾げた。

「そうですね……。クローディア姫という可能性もあるかもしねないが……」

ゴリンズはクラウスの言葉に頷きながら、推測をした。

「皆様……大変長らくお待たせしました。公爵閣下、ご入室でござります。」

そこにフィリップが入つて来て、礼をした後、入口の傍に控えた。するとデュナンを始めとし、リシャール、カノーネが入つて来た。「いやはや、諸君。待たせてしまつて申しわけない。少々、打ち合わせが長引いてしまつたものでな。彼はリシャール大佐。王国軍情報部の責任者でな。テロ事件を解決するために日夜、尽力してくれているので礼の意味も込めて招待した。」

「お初お目にかかります。王国軍情報部のリシャールです。公爵閣下の格別のご厚意で晩餐会に招待していただきました。

無粋な軍服で失礼ですがどうか同席をお許しいただきたい。」

デュナンはリシャールを紹介し、紹介されたリシャールは丁寧に自己紹介をした。そしてデュナンはフィリップを後ろに控えさせて上座に座り、リシャールはマードック達が気にしていた空席に座り、カノーネはリシャールの後に控えた。

（ま、まさか大佐と一緒にテーブルで食事するなんて……）
（予想はしていたけど、やっぱり少し緊張するね……）

リシャールが現れた事にエステルは嫌そうな顔をし、ヨシュアは表情を引き締めた。

そして晩餐会が始まつた……

第138話（後書き）

今日、明日、明後日は奮発して2話更新します！なので今日、もう一度更新しますので楽しみに待っていて下さい……感想お待ちしております。

その後、豪華な料理が次々と運ばれ、エステル達は滅多に食べれない料理を楽しんだ。

（グラント城内・1階広間）

「はつはつは、いや、愉快愉快。どうかね、メイベル市長。王城のグラントシェフの腕前は？ボースの『アンテローゼ』にも負けずとも劣らずの味ではないか？」

「ええ、素晴らしい腕前ですわ。ワインとの相性も完璧ですし、思わず引き抜きたくなりますわね。」

「はつはつは、そなたが言うとあながち冗談には聞こえないな。どうだ、ジンとやら。東方人のそなたの口には合うかな？」

メイベルの贅辞にいい気分でいたデュナンはジンに尋ねた。

「いや、大変結構ですな。不調法な自分の舌にも判る洗練された深みと味わい……。リベル料理の真髄を味わっているような心境です。」

「うんうん、そうだろう。どうだ、若き遊撃士たちよ。こんな豪勢な料理は今まで食べたことがない？」

感心しているジンを見て、デュナンは頷いた後、今度はエステル達に尋ねた。

「うーん、確かにメチャメチャ美味しいです。招待してくれた人はともかく、料理だけはホンモノかも……。」

「はつはつは。そうだろう、そうだろう……。……ん？」
エステルは笑顔で料理を褒めたが、サラッと遠回しにデュナンを悪く言い、デュナンはエステルの贅辞に弱冠引つ掛かった。

「ほ、本当に素晴らしい料理ですね。それに今まで、こういう正式な席に呼ばれる機会が無かつたのでとても勉強になります。招待し

「てぐださつて本当にありがとうございました。」

デュナンの様子を見て、ヨシュアは慌てて取り繕つた。

「はつはつは。なかなか殊勝でよろしい。しかし、執事から言われてようやく思い出したのだが……。そなた達とは、ルーアンの事件で一度顔を合わせていたのだな。何とも奇妙な縁があつたものだ。」

「は、はあ……そーですね。（執事さんから言われるまで思い出せなかつたわけね……あの様子じやあ、リウイの事も覚えてなさそうね……）」

エステルは自分の事をすっかり忘れていたデュナンに内心呆れた。

「さあ、今夜は無礼講だ！ 料理も酒もたつぶりあるから、遠慮なく追加を申し出るがいい！」

「公爵閣下……。その前に、例の話を済ませてしまつては如何ですか？」

デュナンが張り切つている所をリシャールが遠慮気味に申し出た。

「……おおーそうだ、その話があつたか。実は、王国を代表する諸君らに集まつてもらつたのは他でもない……。この晩餐会の席を借りてある重大な発表をしたかったのだ。」

リシャールの申し出に、デュナンはエステル達や招待客達にある事を申し出た。

「ほう、重大な発表……」

「それは一体……どのよづなお話でしようか？」

デュナンの言葉にクラウスは驚き、マードックは警戒するような表情で尋ねた。

「つむ。ここから先は、私の代わりにリシャール大佐に説明してもらおう。」

尋ねられたデュナンはリシャールに説明をするよう、促した。

「……恐縮です。女王陛下が御不調なのはすでにご存じのことかと思います。ですが、徐々に回復なさつてはいるため、すぐに元気な姿を見せてくださいでしょづ。」

「おお……それは良かった。」

「では、陛下へのお見舞いは許していただけるのかしら?」

リシャールの説明にクラウスは安心し、メイベルは女王への見舞いの許可を尋ねた。

「あいにくですが、陛下のこの意向でそれは遠慮して欲しいことですね。ただ数日中に、王都周辺を騒がすテロリストどもは一掃できる公算です。その事と合わせて、

女王生誕祭は予定通りに執り行われるでしょう。」

「ふむ……市民も楽しみにしているだろうからめでたいことではありますな。だが、話というのはそれだけではないのでしょうか?」

「……確かに、それだけならば連絡してくれれば済みますからな。コリンズの疑問に同意するように、マードックは頷いた。

「フフ、察しが良くて助かります。女王陛下が回復されつつあるのは先ほど述べた通りなのですが……。陛下は、今回のこの不調を理由にある決断をなされたのです。その決断とはすなわち

コリンズの疑問にリシャールは口元に笑みを浮かべて頷いた後、一端言葉を切り、表情を真剣にして、ある説明をした。

「この血縁の退位と、こちらに届く『ユナン公爵閣下への王位継承です。』

「な、なんですと!?」

「ほ、本当ですの!?」

リシャールの説明にマードックやメイベルは驚きの声を上げた。また、他の招待客達も驚きを隠せていない様子だった。

(ヨシュア、これって……!)

(うん……。リフィア達の情報通り、とうとう陰謀が姿を現したね。)

一方エステルは小声でヨシュアに話し掛け、ヨシュアは小声で頷いた。

「……私も戸惑つたのだが陛下が存外、弱気になられてな。無理も

ない、40年近くもの間、激動の時代に翻弄されたりベルを、さらには10年前に突如現れた異世界の大国 メンフィルとの関係を同盟というこの上なく素晴らしい形で女性の身で導いてくださったのだ。やつ思つと、この生誕祭を最後に俗事から解放させてさしあげたい……。王位継承権を持つ身としてはそう決意した次第なのだよ。」

「なんと……陛下がそこまでお悩みになつておられたとは……。毎年、お会いしているところに気付けなかつたとは情けない、……」「し、しかし……。このような酒の入つた席で聞くにはあまりにも重大な内容ですわ。失礼ですが、どこので現実性のあるお話なのでしょう？」

デュナンの演説を聞いたクラウスは自分自身を嘆いたが、メイベルは反論した。

「む……」

メイベルの反論にデュナンは不満そうな表情をした。

「ふむ、メイベル市長。閣下のお言葉が信用できないと……そう仰られるか？」

リシャールはメイベルに尋ねた。

「そ、そつは言つてしません！ただ、市長には選挙があるよつに王位継承にもかかるべき手続があるのでないかと、いう事です。」

「そうですな……」

「できれば、陛下から直接、今の話を伺いしたいのです。」

メイベルの主張にコリングズやマーデックは頷いた。

「う、うーむ……」

市長達の様子にデュナンはたじろいだ。

「皆さんの動揺も理解できます。ですが、どうか冷静になつて今的话を受け止めていただきたい。先ほど申し上げたように生誕祭には陛下ご自身の口から発表されることになるでしょう。眞偽はその時に確かめれば済むことではありませんか？」

「そ、それは……」

「……………」
リシャールの言葉を聞き、マーデックやコーンズは何も言えなくなつた。

「問題なのは、この件が発表された時に一般市民にどう影響を与えるかです。いたずらな混乱を避けるためにも各地の責任者である皆さんに前もつて事を伝えておきたい……。公爵閣下はそう判断なさつたのです。」

「ゴホン……。うむ、まあそういう事だな。」

リシャールの説明に同意するようにデュナンは咳払いをして頷いた。
「そして、陛下の退位ともなれば事態はリベル国内には留まりません。大陸諸国の目、とりわけ北の脅威たるエレボニアや同盟国たるメンフィルの反応も気がかりでしょ。まさに、ここにいる我々が新たなる国王陛下を盛り立てながら一致団結をしなくてはならない。そんな時期が迫っているのです。」

（な、何かもつともらしい事を言つてるんですけど……）

（うん……。大したアジテーターだね。）

リシャールの演説をエステルは怪しいものを見るよつ表情で小声でヨシュアに言い、ヨシュアはエステルの言葉に静かに頷いた。

「正式決定は、生誕祭の時に陛下から直接伺うとして……。心の準備をしておくようじと。つまり、そういう事ですか？」

「フフ……。理解していただいて幸いです。」

マードックの確認にリシャールは表情を笑みに変えて答えた。

「うーむ……。確かにそういう事になつたらわしらも忙しくなりそうじやな。」

「そうですね……。市民へのアナウンスもありますし。」

クラウスやメイベルが納得しかけた時

「……一つお伺いしたい。」

コリンズが尋ねた。

「公爵閣下に王位継承権があるのは私も存じておるが……。たしか、

同委の継承権を持つ方が他にもいらっしゃったはずですね？」

「そ、それは……」

コリンズの疑問にデュナンはすぐに答えられず、戸惑つた。

「陛下のお孫さんにあるクローディア殿下のことですね。確かに、王室典範上の規定では公爵閣下と同位ではあります……。まだ年端もいかないという理由で陛下は閣下の方を推されたようです。先ほどの話にもありましたが……。女性の身に余るほどの重責を姫に負わせたくないなかつたのでしょうか。」

「……しかし、それを言うならメンフィルはどうなのですか？かの国はエレボニアを越える大国ながら、次代の皇帝は現皇帝陛下直系の一人娘だと話に聞きますが……」

リシャールの説明にコリンズは他国で次代の皇帝になる女性であるリフィアの事を持ちだし、尋ねた。

「現皇帝シルヴァン陛下の一人娘であり、メンフィル大使 リウイ皇帝陛下の孫娘でもあられるリフィア殿下の事ですね。確かにリフィア殿下も女性という身ながら、大国を統べる皇帝という重責を負う事になりますが、そもそもリフィア殿下は我々“人間”と比べれば遙かな長い時を生きる”闇夜の眷属”。外見は幼い方ですが、既に40近くという年齢で王族としての経験もかなり詰めている様子であります。それに対してクロ ディア殿下はまだ成人していない……女王陛下も悩んだ末、クロ ディア殿下への王位継承を見送ったのです。」

「そうそう、そうなのだ！まあ、クローディアには良い縁談を探してやるつもりだ。非公式だが、すでに他国の王家から何件もの申し入れがあつてな……。ひょっとしたら今年中にも縁談が実現するかもしれないのだ。」

リシャールの説明にデュナンは頷いた後、クロ ディア姫の現状を説明した。

「まあ……！」

「……ふむ、お話は判りました。そうなるとお出したい話が2つも続くというわけですね。」

「つづむ……姫様が……。『結婚されるには少々若すぎるとは思うが……』

デュナンの説明を聞いたメイベルは驚き、ローリングズは一応納得し、クラウスは成人もしていないクローディア姫が結婚する事に戸惑つた。

「……ちょっと失礼。一つ質問してもいいですかね?」

そこに今まで黙っていたジンが話に入つて来た。

「ジ、ジンさん?」

突然話に入つて来たジンにエステルは驚いた。

「ほう……?構わん、言ってみるがいい。」

話に入つて来たジンをデュナンは以外そうな表情をした後、続きを促した。

「失礼だが、今耳にした話は自分たちのような部外者が聞いていい話とは思えません。まして、自分は王国人でもない。なのに、何故このような席でわざわざ発表されたのでしょうか?」

「それは、優勝した君たちが偶然にも遊撃士だつたからだ。陛下の退位という重大な情報はギルドにも事前に伝えたかった。そう私が閣下に提案したので聞いてもらつ事になつたのだよ。」

「なるほど……。リベルでは、軍とギルドが良い関係を結んでいりとこう話はどうやら本当だつたようですね。」

リシャールの説明を聞いたジンは納得した。

「はは、両帝国や共和国ほど軍事力が充実していらないからね。手を結ばざるを得ないというシビアな現実があるのだが……。いずれにせよ、真意はご理解いただけたかね?」

「ふむ……了解しました。今日、この席で知つた情報は王都支部にも伝えておきましょ。」

リシャールの確認するような言葉にジンは頷いた。

そして晩餐会の時は流れで行つた

.....

感想お待ちしております。

晩餐会が終わったその後、エステル達は自分達の部屋に戻った後、一端ジンと別れ、ヒルダが待っている侍女の控室に行く途中、以外な人物達に出くわした。

「グランセル城内・廊下」

「おや、君たちは……」

「あ……！」

「リシャール大佐……」

自分達に近付いて来た人物 リシャールと傍に着き従つている力ノーネを見たエステルとヨシュアは表情が強張った。

「フフ……。エステル君とヨシュア君か。こうして面と向かつて話すのは初めてではないかな？」

「え……」

「最後に言葉を交わしたのはダルモア市長逮捕の後でしたね。でも、大佐が僕たちのことを覚えているとは思いませんでした。」

リシャールが自分達の事を覚えている事に2人は驚いた。

「交わした言葉は少なかつたが君たちは非常に印象的だつたからね。気になつて調べてみたら驚いたよ。まさか、カシウス大佐のお子さんたちだつたとはね……」

「そ、その事も知つてたんだ」

自分がカシウスの子供である事を知つているリシャールにエステルは驚いた。

「はは、伊達に情報部を名乗つてはいるつもりはないよ。……カシウスさんは彼が軍にいた時にお世話になつた。それこそ……言葉では言い表せないほどね。」

「……」

エステルはリシャールが言つてゐる事が眞実かどうか、見極めようと真剣な表情で見ていた。

「どうだろう、これから少し話に付き合つてくれないだろうか？君たちとは、前から一度、個人的に話をしてみたかったのだ」「ええつ！？」

「…………」

リシャールの申し出にエステルは驚き、ヨシュアは警戒した。

「あ、あの、大佐殿……。これから公爵閣下との打ち合わせがあるので？」

また、傍にいたカノーネも驚き、慌てて尋ねた。

「少しくらい遅れても構わんよ。そうだな、話すのだったら奥の談話室を借りるとしようか。アルコール抜きのカクテルでも振舞させてもらうよ。」

「そ、それでしたら私がお作りしますわ！」

「いや、それには及ばない。君は公爵閣下の所に行つて私が遅れる旨を伝えてくれたまえ。」

「りょ、了解しました……」

リシャールの伝言にしぶしぶ納得したカノーネはエステル達を睨んだ。

「…………（ギロリ）」

（ゾクツ……）

カノーネに睨まれたエステルは冷や汗をかいだ。

「…………それでは失礼しますわ。」

そしてカノーネはどこかに去つた。

「さてと、私たちも談話室に向かうとしようか。それでは付いてきたまえ。」

またリシャールも談話室に向かつて、歩きはじめた。

「あ……。（ね、ねえヨシュア、どうしよう？）」

「（付き合つしかなさそだね……。少し遅れただけど夫人の所

には後で行こう。」

そして2人はリシャールに着いて行つた。

（グラント城内・談話室）

「……カシウスさんと出会つたのは私が士官学校をでたばかりのことだ。当時、彼が率いていた独立機動部隊に配属されてね……。それ以来、彼が軍を辞める時まで公私にわたつてお世話になつたんだ。

「ふ、ふーん……そうだったんですか……」

ナイアルによつて見せられた資料でリシャールの経歴を知つていたエステルは適当に相槌を打つた後、別の事を尋ねた。

「えつと、その頃のお父さんつて大佐から見てどんな感じでした？」

「一言でいうと『英雄』だつたかな。『剣聖』とまで言われた技の冴え。あらゆる戦況に柔軟に対応できる立体的かつ多面的な指揮能力……。

単なる戦術に留まらない、高度な戦略レベルでの部隊運用……。メンフィルの”霸王”リウイ皇帝陛下とファーミシルス大將軍を除いてどれをとっても並ぶ者はいなかつた。」

「な、なんだか別の人話を聞いてるみたいんですけど……」

「父が軍を辞めるまでというとあの『百日戦役』の時も一緒に？」

カシウスの過去を聞いたエステルは信じられない思いでいて、ヨシユアはある事が気になつて尋ねた。

「ああ……。カシウスさんの下で戦つたよ。今でも覚えている……。彼が立てた奇跡のような作戦を実行した時の熱氣と興奮を……。あの時のこと話をし始めるといくらあつても

時間が足りないからまたの機会にさせてもらうが……。ただ、これだけは断言できる。あの時、カシウス・ブライトという男が王国軍にいなかつたら、このリベルはメンフィルが現れるまでにエレボニアに吸収合併されてしまうだろう。」

「う、うそー？さすがにちょっと信じられませんけど……」

リシャールの言葉にエステルは信じられない思いで驚いた。

「フフ、信じられないような事を成し遂げたから『英雄』なのさ。もつとも、戦後すぐに退役して女王陛下の勲章すら固辞されたから名前が知られることはなかつたが……。今でも、一部の軍人の間ではカシウス大佐の名は英雄の代名詞だ。」

「うー……。あのヒゲ親父、そんな事、一言も教えてくれてないしつ！」

「まあ、娘にわざわざ語つて聞かせるような話じゃないさ。父さんを責めたら可哀想だよ。」

リシャールの話を聞き、エステルは何も教えてくれなかつたカシウスを怒り、ヨシュアはエステルを宥めた。

「か、可哀想なのはあたしの方！……つて、ヨシュアってばあんまり驚いてないみたいだけど。もしかして……今の話、知つてたりするわけ？」

「リシャール大佐が父さんの部下だつたことはさすがに知らなかつたけど……。まあ……おおむねのところは。」

「あ、あんですつて！？それじゃあヨシュアも共犯！？」

ヨシュアまでカシウスの過去を知つていた事にエステルは怒つた。
「お、落ち着いてよ、エステル。僕だつて別に、父さんから教えてもらつたわけじゃないよ。それに父さんから、君にわざわざ知らせることはないつて言われたんだ。」

「うー、納得いかないわね……。本当にもう、帰つてきたりとつちめてやるんだからっ！」

「フフ……」

2人の様子を見て、リシャールは思わず笑つた。

「えつと、その……」

「す、すみません。話の腰を折つてしまつて。」

リシャールの笑い声に気付いたエステルは恥ずかしそうにし、ヨシ

ヨアは謝った。

「いや……。君たちを見て少し安心した。カシウスさんが軍を辞める時、私は必死に引き留めたものだが……。どうやらその選択は彼にとつて正解だつたらしい。

カシウスさんはきっと、君達や奥さん　”家族”がいかに大切かに気付いたんだろう。」「

「リシャール大佐……」

リシャールのカシウスに対する思いを知ったエステルは驚き、ヨシアは真実かどうか見極めようと、リシャールを真剣な表情で見ていた。

「…………そうだ。話は変わらぬが、エステル君。君はリウイ皇帝陛下から直々に依頼を受けているようだが昔、何かあつたのかね？」

「ほえ？ どうしてそんな事を知りたいの？」

リシャールの質問にエステルは首を傾げて尋ねた。

「深い意味はないさ。『英雄』カシウス・ブライトを越える大英雄にして王の中の王　『英雄王』リウイ皇帝陛下がどうして一遊撃士である君に目をかけているのか、個人的に気になつてゐるんだよ。」「

「（……まあ、これは話しても問題ないわよね？）えつと……あたしもよくわかんないんだけど、リフィア達が言うにはあたしが”闇夜の眷属”と親しいからだつて。」「

「ほう。一体それが何に関係するのかね？」

エステルから話を聞いたリシャールは驚いて尋ねた。

「なんかあたしが普通にあたし達人間とは違う種族　”闇夜の眷属”と初めから親しくしている事が凄く珍しくつて、それであたしがどういう人物か知りたいんだそうよ？」

「ふむ。昔”闇夜の眷属”が君に何かして、それを恩に思つた君は”闇夜の眷属”と親しくしてゐるのかね？」

「ううん。あたしはただ会話ができれば、種族とか関係なく仲良く

なれるとと思つただけよ。……でもまあ、”闇夜の眷属”の人達に返し切れない恩があるのは事実よ。」

「ほう?やはり”百日戦役”でのエレボニア 帝国兵のロレント襲撃の際、メンフィルが君達ロレント市民を保護し、その後戦争が終わるまで配給や街の警護等をしてくれた件かね?」

エステルの説明にリシャールは自分なりの推測をして、それが正解かを尋ねた。

「うーん……その事もあるけど、一番の理由はお母さんの命を救つてくれた事かな?」

「奥さんの…………今は元氣でいらっしゃるが、やはりロレント襲撃で怪我を?」

闇夜の眷属がレナの命の恩人と知つたリシャールは驚き、尋ねた。
「うん。お母さん、あたしを庇つて崩れて来た瓦礫の下敷きになつたの。…………それをたまたま通りがかつたリウイ…皇帝陛下達が瓦礫をどけてくれて、”闇の聖女”様とリフィアが治癒魔術を使って、死にそうになつたお母さんの命を救つてくれたんだ。」

「そんな事が…………フフ、それにしても”闇の聖女”殿とリフィア姫殿下直々の治療を受けたなんて、それは光栄な事だよ。」

「やつぱりリフィア達って、凄い評価なの?」

一般的なリフィア達の評価が気になつたエステルはリシャールに尋ねた。

「当然だよ。”霸王”リウイ皇帝陛下を始めとし、”戦妃”カーリアン殿、”空の霸者”ファーミシルス大将軍、”破壊の女神”シェラ将軍、”霸王の狼”ルース将軍、”闇の聖女”ペテレーネ殿に、ペテレーネ殿と同じ”聖女”で評されている”癒しの聖女”ティア皇女等、

メンフィルの皇族や武将は一般的に知られる”生ける伝説”だよ。」

「あはは……こうやって改めてリフィア達の事を聞くと、リフィア達が遠い存在に思えてしまうわ。」

「ハア……遠い存在も何も、実際リフィア達は本当なら僕達なんかが一生に一度、その姿を挾めるかどうかわからない存在だよ？」リシャールの話を聞いたエステルは苦笑し、その様子を見たヨシュアは呆れて溜息を吐いた。

「フフ……君はカシウスさんはまた違つた大物になりそうだな。……さてと……付き合つてくれてありがとう。あまり公爵閣下を待たせるわけにはいかないから私はこれで失礼させてもらつよ。」そう言って、リシャールはソファーから立ち上がつた。

「あ……はい。」

「すみません、僕たちの方が話を聞かせてもらうばかりで……」

「いや、君たちは一番知りたかったことを教えてくれた。……これで未練はなくなつたよ」

リシャール大佐は一端目を閉じた。

「え……？」

「それはどういつ……」

「はは、近いうちにまた会う機会もあるだろう。その時には、カシウスさんとも一緒に話せるといいのだが……」

リシャールは意味深な言葉を残し、エステル達の元から去つて行つた。

た。

「えーと……今ここに居たのって本当にリシャール大佐だっけ？」

「あのね……なにを寝ぼけてるのさ。」

リシャールが去つた後、自分に尋ねて来たエステルにヨシュアは呆れた。

「だ、だつてあんな風に父さんの事を話すなんて……。なんていうか……イメージと違つたっていうか。」

「確かに。ただの悪人ではなさそうだね。でも、それとは別に彼が何かを企んでいるのも確かだ。父さんの事は、この際分けて考えなくちゃいけないと思うよ。」

「うん……それはそうなんだけど……」

ヨシュアの忠告をエステルは腑に落ちない様子で頷いた。

「イヤな言い方をするけど……。僕たちに見せた親しさだって何かの目的があるのかもしれない。彼みたいな情報将校にとつて僕たちみたいな子供をたぶら謨かすのは朝飯前だらうからね。」

「さ、さすがにそれは言いすぎなんじやないの？」

「うん……そうだね。疑うのは僕の役割だ。君は、自分の直感を信じていた方がいいと思つ。」

「え……」

ヨシュアの言葉にエステルは驚いた。

「ただ、あらゆる可能性に備えて油断だけはしないで欲しいんだ。

遊撃士の仕事といつのは……たぶんそういうものだと思うかい。」

「…………。うん、わかつた。ちゃんと心に留めておくわ。」

「…………ありがとう、エステル。」

「や～ねえ。何でヨシュアが礼を言うのよ。それよりも、さっそくヒルダさんの所に行きましょ。たぶん、待ちくたびれてるわ。」

「そうだね……。メイドたちの詰所に行こうか。」

そしてエステル達はヒルダに会いに、侍女の詰所に向かった……

第140話（後書き）

感想お待ちしております。

（グラントセル城内・侍女控室）

「エスティル殿、ヨシュア殿。お待ちしていましたよ。ずいぶんと遅うございましたね？」

「えへへ……ごめんなさい。なんかリシャール大佐に捕まっちゃって……」

「大佐に……ですか？」

「エスティル達がリシャールと話していた事にヒルダは驚いた。「僕達の父のことについて昔話を聞かせてもらいました。こちらの動きについては気付かれていないと私は思います。」

「そうですか……。紹介状によるとあなた方は、カシウス殿のお子さんということでしたね。リシャール大佐が感慨を抱くのも分かる気がします。」

そしてヨシュアの説明を聞き、ヒルダは納得した。

「あの、ヒルダさんも父さんを知つてゐるんですか？」

「昔は、モルガン将軍の副官として王城によく来てらっしゃいました。亡き王子……陛下の「」王子の「」学友だったとも聞いております。」

「エスティルの疑問にヒルダは昔を思い出すかのように、遠い田で語つた。

「亡き王子つて……」

「クローディア姫のお父上にあたるかたですね。」

「ええ、15年前の海難事故でお亡くなりになられました。王子さえ生きてらっしゃればこのような事態は起らなかつたでしょ？」

「……」
ヒルダはそう言って、つらそうな表情で目を伏せた。
「え……」

「……起きてしまったことを悔やんでも仕方ありませんね。夜も更けてまいりました。早速、支度をしていただきます。シア、いらっしゃい。」

気を取り直したヒルダは1人のメイドを呼んだ。そして控室の奥の扉からエステル達を案内したメイドであるシアが出て来た。

「あれ、あなたは……？」

「確かに、シアさんとおっしゃいましたね？」

「ど、どうも……エステル様、ヨシュア様。事情は伺わせていただきました。」

「この子のことは信用してくださつて結構です。姫様が城にいらっしゃる時にお世話をしている侍女ですから。」

シアの登場に疑問を浮かべているエステル達にヒルダは説明した。

「姫様つて……クローディア姫のことね。」

「それなら問題ありませんね。」

ヒルダの説明を聞いた2人は安心した。

「きょ、恐縮です……。では、用意した制服に袖を通していただけますか? リボンやカチューシャなど細かい所は、私が整えさせていただきます。」

「へ……」

「あの……ひょっとして?」

シアの言葉にエステルは驚き、察しがついたヨシュアはヒルダを見た。

「ええ、エステル殿には侍女と同じ恰好をしてもらつて女王宮に入つていただきます。多少、髪をいじらせて頂ければ、見張りにも気づかれないのでしょう。」

「なるほど……」

「たしかに、制服というのは個性を隠しやすいですからね。潜入するにはもつてこいかもしれません。」

ヒルダの説明を聞き、2人は納得した。

「へえ、メイドさんの制服があ。ワラさんとか見ていていいなあつて思つていたのよね。ヒラヒラして可愛いのにすごく動きやすそなんだもん。」

「ふふ、動きやすくないとお掃除の時に困りますから……」エスティルの言葉にシアは口元に手を当てて、上品に笑つた。

「あ、やつぱりそつなんだ? やつそく着せてもらおつと…」

「嬉しそうだなあ……。はしゃぐのはいいけど陛下に失礼のないようにな。今度ばかりは僕も付いてはいけないからね。」

「え、どうして? ヨシュアも着替えるんじょ?」

「……………え。」

エスティルの様子を微笑ましそうに見て、忠告したヨシュアだったが、エスティルの言葉を聞き、固まつた。

「エスティル殿?」

一方ヒルダも驚いて、エスティルを見た。

「だつてヨシュア、学園祭の劇でお姫様の恰好をしてたじやない。ドレスもメイド服と同じでしょ?」

「あ、あれはお芝居じゃないか。女王陛下にお会いするのに女装するなんて、ちょっと……」

「大丈夫、大丈夫。全然みつともなくないからーだつてヨシュアのお姫様姿、すつごく綺麗だつたもん!」

「ま、また……冗談はやめてよ。あの、ヒルダさんたちからも何か言ってやつてください。」

女装するように迫るエスティルを納得させれないヨシュアはヒルダとシアに助けを求めた。

「……………」

しかし2人は何も答えず、まじまじとヨシュアの容姿を見て、考えていた。

「あ、あの……?」

嫌な予感がしたヨシュアは2人に声をかけた。

「なるほど……。確かに問題なさそうですね。シア、たしか姫様のためのヘアピースがありましたね？」

「は、はい……一度も使われていないものが。長い黒髪ですからヨシュア様にもお似合いかと……」

「ちょ、ちょっと……」

既に女装をさせる気でいる2人を見て、ヨシュアは焦った。

「それじゃあ、3対1のファイナルアンサーってことじで」

「では、こちらにどうぞ。更衣室になつていていますので……」

「ちょっと待つてよ！僕は着替えるなんて一言も……」

そして反論するヨシュアを無視して、エステルは引っ張つて行き、シアは2人に着いて行つた。

「わかった、わかったから……。服くらい自分で脱げるつてば……。
え……シアさん……化粧までするんですか……！？」

「はあ……最近の若い子達ときたら……」

奥の部屋から聞こえてくる騒がしい会話にヒルダは溜息を吐いた。
そして少しするとエステル達が出て来た。

「まあ……」

「じゃ～ん。えへへ、どーでしようか？」

「うふふ……とつてもよくお似合いですわ。」

エステルのメイド姿を見てヒルダは驚き、エステルは自慢げに胸を張り、シアは褒めた。

「城働きに来たばかりの活発で朗らかな侍女見習い……。そんな説得力は十分ありますわね。髪も下ろしていますから気付かれることはないでしょ。何でしたらこのままグランセル城で働きますか？」

「ゆ、遊撃士の仕事もあるからそれはちょっと……。あ、それよりも。ちょっと、ヨシュア。早く出てきなさいってば～。」

ヒルダの勧誘を苦笑しながら断つたエステルは、未だ出てこないヨシュアを呼んだ。

「はあ……。どうしても出ないと駄目かな？」

「だ一め。ウダウダ言つてると引きずり出しちゃうわよ。」

「わかつたよ……。もう、しようがないな……」

そう言つたヨシコアはしぶしぶ、奥の部屋から出て来た。

「…………」

部屋から出て来た長い黒髪のメイド、ヨシコアは何も言わなかつた。

「これはまた……。怖いくらいにお似合いですね。」

「ですよねえ……まったく、女のあたしよりもサマになつてること

うのは一体どーゆうことなんかしら。」

「うふふ……。お化粧のしがいがありましたわ。」

「もういいです……何とでも言つてください……」

3人の会話を聞き、ヨシコアは哀しそうに咳いた。

「さて……。準備は整つたようですね。それではこれから女王宮へと案内をせん頂きます。あくまで侍女見習いとして扱いますので、そのおつもりで。」

「あ、はい、わかりました。『クッ……こよこよ女王様と会えるのね。』

「うん……ここが正念場だね。気を引き締めて何とか女王宮に入ら
ないとい。」

「ブツ、その恰好でシリアルスに言つても似合わないかも……」

女装とメイド姿で真剣な表情で言つヨシコアを見て、エステルは思
わず吹きだした。

「わ、悪かったね！シリアルスが似合わなくて……こんな恰好をさせと
いてよくもまあ、ぬけぬけと……」

「ゴメンゴメン。そんなに拗ねないでよ。今度、アイスクリームで
もオゴつてあげるからさ～。」

「ふん、君じゃないんだから食べ物でごまかされたりしないよ。」

「あ、あたしがいつ食べ物でごまかされたのよ？」

「うふふ……本当に仲がいいんですね。」

「時間がありません……。さつさと女王宮に行きますよ。」

エステルとヨシュアの掛け合いをシアは微笑ましそうに見て、ヒルダは溜息を吐いて女王宮に行くよう、促した。そしてエステル達はヒルダに連れられて女王宮に向かつた。

（グランセル城・女王宮入口前）

「これはヒルダ夫人……」

「こんな遅い時間に女王陛下に御用ですか？」

女王宮の入口で見張りをしている特務兵達はヒルダの登場に驚き、尋ねた。

「陛下に頼まれていた紅茶と食器類をお持ちしたのです。このような事態になつて陛下も何かと不自由なさつていらっしゃるようですからね。」

「これは手厳しい……」

「おや……。見たことのない顔ですが、そちらの侍女さんたちは？ヒルダの説明に一人の特務兵は苦笑し、もう一人の特務兵は見慣れぬメイド達 エステルとヨシュアに気付いた。

「公爵閣下の命令で補充した新米の侍女見習いです。今日、城に入つたばかりです。」

「ほう……」

「ふーむ。さすがに可憐ですね。」

ヒルダの嘘の説明を信じた特務兵達はエステル達の顔をよく見た。

「ど、どつも……」

「…………（ペコリ）」

特務兵達に見られた2人は軽くお辞儀をした。

「おや……？なんとなくどこかで見たような……」

（やばつ……！）

一人の特務兵がエステルの顔を見て、首を傾げ、その様子を見たエ

ステルは心の中で慌てた。

「……年頃の娘を、そんな風にジロジロ見るのは何事ですか。もしや、良からぬことを考へて居るのではないでしょうね？何かあつたら、公爵閣下や大佐殿に抗議させてもらいますよ。」

「と、とんでもない！」

「王国軍の精銳たる我々がそのような事は……」

ヒルダに睨まれ、忠告された特務兵達は慌てて言つた。

「ならばよいのです。ところで、いいかげん、通していただけないでしょうか？」

「これは失礼しました！」

「どうぞ、お通りください。」

そしてエステル達は女王宮の中への潜入に成功した……

第141話（後書き）

それではみなさん、よいお年を…… 感想お待ちしております。

第142話（前書き）

あけましておめでたございます。今年もよろしくお願ひします。

女王宮の中への潜入に成功したエステル達は女王宮の中にある部屋の一つでいつもの服に着替えて、女王がいる部屋に向かつた。

（女王宮内・アリシア女王の部屋前）

「陛下、失礼します。先ほどお話ししたエステル殿とヨシュア殿をお連れしました。」

ヒルダは扉をノックして、中の人物に用を伝えた。

「……ご苦労さまでした。どうぞ、入つて頂いて。」

中から優しそうな老婦人の声が聞こえて来た。

「かしこまりました。私はここで待たせていただきます。さあ、お2人はどうぞ中へ。」

「は、はい……！」

「失礼します……」

ヒルダに促され、2人は部屋に入つて行つた。

（女王宮内・アリシア女王の部屋）

「あ……」

エステル達が部屋に入るとそこには、リベールを統べる女王　アリシア女王が窓際で窓の外を見ていた。

「ふふ……。ようこそいらっしゃいましたね。わたくしの名はアリシア・フォン・アウスレーゼ。リベール王国、第26代国王です。エステル達に気付いた女王は優しそうな笑顔で自己紹介をした。

「あ、あの……。エステル・ブライトです。遊撃士協会の準遊撃士です。」

「同じく、準遊撃士のヨシュア・ブライトといいます。お初にお目

にかかります。」

「エステルさんとヨシュア殿ね。あなたたちに会えるのを本当に楽しみにしていました。大したもてなしはできませんが、お茶の用意くらいはできます。どうぞ、ゆっくりして行ってくださいな。」

そして、2人はアリシア女王にラッセル博士のことを含め、今までのことを話した。

「そつ……。ラッセル博士はそんな事を。あらゆる導力現象を停止させる漆黒のオーブメント……。そんなものを大佐は手に入れるのですか……？」

全ての話を聞き終えた女王は考え込んだ。

「博士は、女王陛下ならばリシャール大佐がそれを何に使うか分かるかもしないと言いました。何か……心当たりはありますか？」

「…………。ひとつだけ心当たりがあります。ですが、大佐がそれを知っているとは思えません。わたくしの思い過ごしであるといいのですが……」

「あの……その心当たりっていうのは？」

「……あなた達にならお話ししても構わないでしょうね。」

目を閉じて考え込んでいた女王だったが、やがて目を開いて話し始めた。

「十数年前、この王都の地下に巨大な導力反応が検出されたのです。その調査にあたってくれたのが中央工房のラッセル博士でした。」

「巨大な導力反応……」

「王都の地下ということは地下水路の近辺でしようか？」

女王の話を聞き、エステルは驚き、ヨシュアは真剣な表情で尋ねた。「いいえ、水路よりもさらに深い地下から検出されたようです。博士は、いまだ機能を失っていない古代文明の遺物が埋まっているのではないかと仰っていました。」

「古代文明の遺物つて……」

「『アーティファクト』と呼ばれる古代導力器のことだね。大半は、塔の頂上の装置みたいに機能が死んでしまっているけど……。まれ

に、ダルモア市長の家宝のように機能が生きている物もあるみたいだ。』

意味が余りわかつていなエステルにヨシュアは説明した。

「そんなものが王都の地下に……。あ、それじゃああの『ゴスペル』つてのは……」

「埋まつた遺物の機能を停止させるために使われる……。その可能性があるということですね？」

「ええ……。ですが、その遺物がどんなもので何のために埋められたものかははつきりしていないのです。ラッセル博士の調査自体も非公式で行われたものですし……。大佐がどこで存在を知ったのかわたくしには不思議でなりません。」

エステルとヨシュアの話に頷いた女王はリシャールがどうやって、機密にしていた情報を知つたのかわからない様子でいた。

「そうですか……。いずれにせよ、良くない事が起こる可能性がありそうですね。」

「まったく、ちょっと見直したのに口クな事を考えていないわね……。みんなに迷惑がかかるんだつたらまさしく遊撃士の出番だわ！ 何とかして大佐を阻止しないと！」

「ふふ……。さすがは……カシウス殿のお子さんたちね。」

エステルの意気込みを見て、女王は上品に笑つた。

「……！」

「陛下も父と面識があつたのんですか？」

女王までカシウスを知つてゐる事にエステルは驚き、ヨシュアは尋ねた。

「亡くなつた息子の友人でしたし、王国を救つた英雄ですからね。軍を辞めて遊撃士になつてからも依頼を通じてお世話をになりました。

「そ、そうだったんだ……」

「それは知りませんでした……」

カシウスが亡きリベルの王子の友人、そして女王自らがカシウスに何度も依頼をしていた事にエステルとヨシュアは驚いた。

「ならば、これはわたくしの役目なかもしませんね……。エステルさん、ヨシュア殿。少々、年寄りの昔話に付き合つていただけませんか？」

「あ……はい、もちろん！」

「拝聴させていただきます。」

そして女王は昔話を語り始めた。

「10年前の春のことです……。エレボニアの帝国の南部である痛ましい事件が起こりました。まだ原因が分かつていなかったため事件についての説明は省かせてもらいます……。その事件をきっかけに帝国はリベルに宣戦布告をしたのです。後に『百日戦役』と呼ばれる不幸な日々の始まりでした。帝国軍は、宣戦布告と同時に大兵力を持ってハーケン門を突破……。リベルは、王都を除いて瞬く間に全土を占領されました。侵攻してきた兵力は、王国軍のおよそ3倍だったと言われています。

カルバードからの援軍も間に合わず……もはや王都が占領されるのも時間の問題かと思われました。しかし、開戦から2ヶ月後……誰もが予想しなかった形で戦局が大きく変化したのです。当時開発されたばかりの警備飛行艇が各地を結ぶ関所を奪回し、帝国軍の連絡網を断ち切りました。そして、レイストン要塞から王国軍の総兵力が水上艇で出撃し、各地方を奪還していったのです。ツアイス、ルーアン、ボース、ロレント……。各地を占領していた帝国軍の師団は補給を断たれ、各個撃破されました。この反攻作戦を立案した人物こそカシウス・ブライト大佐。モルガン将軍の右腕であり、リシャール大佐の上官だったあなたたちのお父様だったのです。その後、遊撃士協会と七耀教会の仲裁、そしてエレボニアが自国の領土を次々と制圧し、派遣した軍をことごとく全滅に追いやったメンフィルの強さに恐れ、メンフィルとの仲裁を求めた事もあってようや

く戦争は終結を迎えるました。しかしこの時、カシウス殿は大切なものを失う所だったのです。それはレナ・ブライトさん……エステルさんのお母様、そしてエステルさん……あなた自身だったのです。あの時計塔は、反攻作戦によつて追い詰められた帝国軍師団の悪あがきによつて破壊されたのです。後はあなたも知つておる通り、レナさんが死ぬ寸前であつた所をリウイ皇帝陛下達がたまたま通りがかつて、レナさんの命を助け、メンフィル軍をロレント市内に展開して、市内のエレボニア軍を殲滅、そしてロレント市民の保護をしてくれたのです。」

「…………そんな事情だつたなんて……」

女王の話を聞いたエステルは信じられない想いでいた。

「……自分が立てた作戦が結果的に家族を死なせる所だった。その自責の念から、カシウス殿は軍を辞めて遊撃士の道に入りました。リウイ皇帝陛下達によつて運良く生き延びたあなた達、家族の側にいるために……。そして今度こそ、自分の手で愛する人々を守れるようにならねえ！」

「バカよ……父さん……。父さんのせいであたしとお母さんが死ぬ所だつたなんて……。そんな事あるわけないのに……」

「エステル……」

女王の話を聞き終えたエステルは辛そうな表情で咳き、ヨシュアはエステルの様子を辛そうに見ていた。

「ええ、そうですとも……。全ては、大切な民を守れなかつたこの力なき女王の責任なのです。ごめんなさい、エステルさん。同じ”王”のリウイ皇帝陛下と違い、あなた達を守ることができなくて……。そのことを……ずっと謝りたいと思つていました。」

エステルの言葉に頷いたアリシアは辛そうな表情で謝つた。

「あ、謝る必要なんてありません！女王様は、戻ってきた平和をずっと守つてくださつた……。父さんたちは必死になつてこの国を守つてくれた……。確かにお母さんは死ぬ所だったけど、聖女様達の

お陰で今でも元気にしています！……。それに……」んな言い方をしたら不謹慎ですが、”百日戦役”があつたからこそ、メンフィルトリベルが仲良くしているじゃないですか！」

「エステルさん……ありがとう、優しい子ね……。あなたに会うことが出来て……本当に良かった……。今、心からそう思えます。」

「女王様……」

女王の言葉にエステルは照れた。

「でも、だからこそ……だからこそ、あなたには危険な事をして欲しいはありません。これ以上、今回の事件に関わりを持つて欲しくはないのです。」

「え……！で、でもあたしたち、ユリアさんに女王様の助けになるように頼まれて……」

女王の申し出にエステルは驚いた。

「ありがとうございます。その心だけ頂いておきますね。カシウス殿の留守中にある間に万が一のことがあつたら今度は何とお詫びしていいのか……。どうか、ロレントのお家に帰つてお父様の帰りを待つていてください。」

「で、でもっ……！」

女王の言葉にエステルが何か言おうとした所、ヨシュアが尋ねた。
「ですが、女王陛下……。父カシウスが取り戻し、陛下が守り続けた平和が今までに揺らぐつとしています。」

「ヨシュア殿……」

「『ゴスペル』の件もそうですが……。このまま大佐の狙い通り公爵閣下が国王となつた場合、その平和はどうなるんでしょうか。それに公爵閣下や大佐の政治を見て、”霸王”リウイ皇帝陛下が、メンフィル帝国が今のように同盟を保つてくれるでしょうか。その事を考えて頂きたいんです。」

「…………」

ヨシュアの話を聞き、女王は辛そうな表情で考え込んだ。

「あ、あの、女王様……。あたし達、遊撃士になつて父さんの代理

で仕事をしました。それから、空賊事件に関わって手紙が届いて、変な小包を開けて、そのまま各地を旅してきました。

まるで、父さんに背中を押されてここまで来たような気がするんです。だから……あたしも守りたい。平和に暮らせる幸せな毎日を……。今まで知り合ったあたしの大好きな人たちを……。女王様や、父さん達みたいに、そしてお母さんの命を救ってくれた聖女様達みたいにあたしなりの方法で守りたいんです！」

「エステルさん……。本当に……あの子の言う通りだつたわね。」

「えつ……」

エステルの力強い言葉を聞き、女王が呟いた事にエステルは首を傾げた。

「私も覺悟を決めました。エステルさんたちを通じて遊撃士協会に、あることを依頼させてもらおうと思います。」

「女王様……！」

「陛下……何なりと仰ってください。」

女王が依頼を申し出た事に希望を持った2人は明るい表情をした。「依頼内容は、情報部によつて囚われている方々の救出です。これは、私の孫娘であるクローディアのことも含みます。」

「そつか、やっぱりお姫様もどこかに捕まってるんですね……」

女王から話を聞いたエステルはクローディア姫が城にいなかつた事に納得した。

「ええ……。思えば、今回のクーデターは私があの子を次期国王として推そうとした事から始まりました。」

「デュナン公爵ではなく、ですね。」

溜息を吐いている女王にヨシュアは真剣な表情で確認した。

「ええ、こういつては何ですが、我が甥ながら、デュナン公爵は色々と問題の多い人物でした。……そんな人物が王となつた時、メンフィルと今までの関係を保つていられるか、不安に思っています。

対して未熟ではあります、が孫娘には光るものがありました。王国の未来を考えた結果……私はクローディアを推そうと心に決めたのです。」

「えっと、姫様のことはほとんど知りませんけど……。それって、どう考へても正しい判断だと思いますよ。」

エスティルはデュナンの今までの行動や言動を思い出して、言った。「ですが、いつの世にも女性が権力を持つことに反対する向きはあるものです。ましてや、大国から侵略を受けた記憶もまだ新しい現在……。2代続けての女王による統治が結果的に国を弱くしてしまった……。そう考える人物が現れたとしても何ら不思議ではなかつたのです。」

「なるほど……。それがリシャール大佐ですか。」

女王の話を聞き、納得したヨシュアは確認した。

「その通りです。彼は、私がクローディアを次期国王に推そうとしていることをいつのまにか掴んでいました。そして、その事実を公爵に伝えて今回のクーデターを決行したのです。全ては、公爵を陰から操り、リベールを周辺の大國に劣らぬ強大な軍事国家にするため……」

「なるほど……。ようやく事件の全貌が見えてきました。」

「リフィア達の言つた通りね。」

「そうだね。」

「……あの。今、『リフィア』という名が出てきましたが……」

エスティルとヨシュアの会話からある人物の名前が出て来た事に女王は驚き、尋ねた。

「はい。女王様の推測通り、僕達はメンフィル大使 リウイ皇帝陛下に依頼されて、リフィア殿下と旅をしています。」

「他には聖女様の娘であるプリネやプリネ達の護衛役のエヴリーヌっていう娘とも旅をしています。」

「そうだったのですか……リフィア殿下達は今、王都に?」

ヨシュアとエステルの話を聞いた女王は驚き、尋ねた。

「はい。後、カーリアンさんも王都に来ています。」

「カーリアン殿まで……」

ヨシュアからカーリアンまで王都にいる事を聞き、女王は考え込んだ。

「女王様？」

「どうかされましたか？」

女王の様子に首を傾げた2人は尋ねた。

「いえ……リフィア殿下達が王都にいると知つて、大佐が何かしないか、少し恐れているんです。……特にリフィア殿下は皇位繼承者ですから、メンフィルに対しての人質としての価値は非常に高いです。プリネ姫もリフィア殿下に次ぐ皇位継承権を持つ方ですし

「あはは……それは心配いらないと思います。リフィア達が特務兵ごとに負けるほど、弱くないです。……むしろ、返り討ちにすると思います。」

女王の心配をエステルは苦笑しながら否定した。

「……確かにそうですね。……殿下達は今回の件をどこまで把握しているのですか？」

エステルの言葉に納得した女王はリフィア達がリシャール達の暗躍をどこまで知つているか気になつて、尋ねた。

「あたし達が話した情報全てを知つています。……それとリフィア達は自分達なりに大佐達の狙いを推測していました。」

「……もしよければ、殿下達の推測を教えてくれませんか？」

エステルから話を聞き、女王は尋ねた。そしてエステルに代わってヨシュアが答えた。

「税率を上げて軍事費を拡大……大量破壊を目的とした導力兵器を開発……大規模な徴兵制を採用……リベルでは認められていないイエーガー獵兵団との契約を合法化したりする事によってリベルを強大な軍事国家にする事を推測していました。」

「……さすがは聰明な殿下達ですね……殿下達の推測通り、まさに同じようなことを大佐は私に要求しました。それは、純粹な愛国心から来る発言だとは思えたのですが……。私は、どうしてもそれが正しいとは思えなかつたのです。國を守つてているのは軍事力だけではありません。他国と協調していく外交努力もそうですし……。技術交流や、経済交流を通じて諸国全体を豊かにする事だつて國を守ることに繋がるはずです。」

「……まさに陛下のおっしゃる通りだと思います。」

「うんうん！お互いが信じ合わなくちゃ！」

女王の考えを聞き、ヨシュアやエステルは賛成するように頷いた。

「ですが、大佐はその考えを女々しい理想論と断じました。そして、クローディアの安全とひきかえに退位を要求したのです。」

「！――！」

しかし続きの話を聞いたエステルは愕然とした。

「多くの者が、家族を人質に取られ大佐に逆らえなくされています。ですが、私は女王です。肉親への情けのために國の未来を売り渡すことはできません。ただ、そうは言つてもあの子は私のたつた一人の孫娘……。見殺しにはしたくないのです。」

女王は辛そうな表情で話終えた。

「女王様……どうか安心してください！」

「依頼の旨、しかと承りました。必ずや、姫殿下を含めた囚われの方々を救出いたします。」

女王を元気づけるためにエステルとヨシュアは力強く依頼を受ける事を言った。

「ありがとう……エステルさん、ヨシュア殿。これで、大佐の脅しにも最後まで屈せずにすみそうです。」

2人の力強い言葉を聞き、女王は憂いがなくなつたかのように穏やかに微笑んだ。

「あ、あの！他にも依頼はないんですか？『ゴスペル』の件もある

し……。ここから女王様を逃がすことだつて不可能じゃないと思つ
んです!」

「ありがとうございます、エスティルさん。ですが、私が逃げたところで事態が
変わるのはありません。それと、『ゴスペル』に関しては幾つ
か気になることがあります。私から、大佐に真意を聞いたとして
みようと思います。」

こうしてエスティル達は女王との会談を終えた……

第142話（後書き）

感想お待ちしております。

その後、エステル達はまたメイド服に着替えてヒルダに連れられて、女王宮を出た。

（グラントセル城・女王宮入口前）

「ヒルダ夫人。今日はもうお帰りですか？」

メイドに変装したエステル達を従えて、女王宮から出て来たヒルダを見て見張りの特務兵は尋ねた。

「ええ、そうさせて頂きます。ぐれぐれも陛下に失礼のないようお願いします。」

「これは手厳しい……。ですが、どうかご安心を。我々は愛国の士でありますから。」

ヒルダの言葉に特務兵は苦笑した後、胸を張つて答えた。

「頼もしいことで何よりです。それでは、私達はこれで失礼させて頂きます。」

「ど、どーも……」

「……失礼いたします。」

そしてエステル達が女王宮を後にしようとしたその時

「ああ、お嬢さんたち。」

特務兵がエステル達を呼び止めた。

「え……」

呼び止められたエステルは驚いて振り向いた。

「そういうえば名前を聞いてなかつたと思つてな。一応聞かせてもらえるか？」

「えつと、その……。サティアつていいます。」

特務兵に名前を尋ねられたエステルは咄嗟に思い浮かんだパズモの前の主の一人の名を名乗った。

「ほつ……なかなか良い名前だな。あなたの雰囲氣にも合っている。

「え、その……ありがとうございます。」

特務兵の贊辞にエステルは恥ずかしそうな表情で答えた。

「で、そちらの黒髪のお嬢さんは？」

そしてもう一人の特務兵が女装して、メイド姿のヨシュアに名前を尋ねた。

「……カリンと申します。」

ヨシュアは静かに偽名を名乗った。

「カリンというのか……。何というか、可憐な名前だ。」

「ありがとうございます。私もこの名前はとても気に入っています。」

ヨシュアの偽名を聞いた特務兵は贊辞し、ヨシュアは特務兵の贊辞に優しい微笑みで答えた。

「やうか……。そ、そうだ。自分は特務部隊の……」

ヨシュアに微笑まれた特務兵はヨシュアを見惚れた後、慌てて名乗る口調としたが

「そのくらいにして下さい。これ以上は下心ありと見なしますよ。」

ヒルダに話を遮られた特務兵達は言い訳をしようとしたが

「いや、自分たちは……」

ヒルダに話を遮られた特務兵達は言い訳をしようとしたが

「……………（キロッ）」

「…………どうぞ気を付けてお戻りください。」

有無も言わせないヒルダの睨みに怯み、言い訳をするのをやめた。

～グラント城内・廊下～

「はあ……。ヨシュアってばモテモテね。あの連中、ヨシュアが名乗つたら田の色変えてたもんね～。」

「そ、そんなこと無いってば。君だって結構、話が弾んでいたじゃない。」

グランセル城内の廊下まで戻ったエステルは溜息を吐いてヨシュアを恨みがましそうな表情で見て、エステルに見られたヨシュアは呆れた表情で言い返した。

「あたしの時は、あの連中、別に緊張してなかつたもん。ふう、何だかちよつと自信がなくなつちゃつたなあ。」

「え……？」

エステルの呟きにヨシュアが首を傾げた時

「ヒック……。何を騒いでおるのだ……」

談話室の扉が開き、酔っぱらっているデュナンとデュナンの後に着き従つているフィリップがエステル達に近付いた。

「これは公爵閣下……」

デュナンに気付いたヒルダは驚いた表情で会釈をした。

「何だ、女官長ではないか……。おや……なんだ、その侍女達は……。ヒック……見たことのない顔だが……」

見覚えのないメイドであるエステルとヨシュアを見て、デュナンは首を傾げた。

「新しく入つた侍女見習いのサティアとカリンと申します。まだ城内に不慣れなもので色々案内しているところです。」

「おや……？」

フィリップはエステル達の顔を見て、首を傾げた後エステル達に少し近付いて、エステル達の顔をよく見た。

「…………」

（あつ……気付かれた？）

（……まずいな。この人とは何度か会つているから気付かれてもおかしくない……）

フィリップに凝視された2人は正体がばれるか内心冷や汗をかいた。

「なんだ、フィリップ。まじまじと顔を見つめて……。わはは、堅

物のお前にしてはざいぶんと珍しいではないか。」

デュナンは今まで見た事がないフイリップの様子を見て、笑い飛ばした。

「これは失礼しました……。わたくしの姪に似ていたので一瞬、目を疑つてしまいまして。お嬢さん方。申し訳ございませんでしたな。

「あ、いえいえ。」

「どうかお気になさらずに……」

フイリップに謝られたエステル達は内心、正体が発覚しなかつた事に安心した後、答えた。

「ふむ、見ればどちらも中々の上玉ではないか……。特に栗色の髪の方は健康的ですごぶるいいの'づ。」
(ぞわわつ……)

デュナンの言葉を聞いたエステルは身を震わせた。

「黒髪の方は、もう少々、胸に張りが欲しい所だな……」
(きょ、恐縮です。)

デュナンの指摘にヨシュアは一瞬困惑したが、笑顔で答えた。
「ふむ、そうだな……。サティアとやら! 今夜の伽トキを申し付けるぞ!

そしてデュナンはエステルを見て、声を張り上げて命令した。

「――!」

(なつ!?)

(えつ!?)

(なんだとつ!?)

デュナンの命令を聞いたヨシュアは驚き、顔つきをこわばらせた。また、エステルの中で話を聞いていたパズモ達は驚き、それぞれエステルの身体の中からデュナンを睨んだ。

「へ……?」

一方、命令の意味がわかつていなエステルは呑気に首を傾げた。

「こ、公爵閣下！？」

（ねえ、伽つてなに？）

（えつと、何て言えばいいのか……）

デュナンの命令にフイリップが驚いている中、エステルはヨシュアに小声で尋ねたが、ヨシュアは言葉を濁した。

「閣下、いくらなんでもお戯れが過ぎますわよ……。城勤めの侍女は全て女王陛下に仕える身です。そのことをお忘れですか？」

ただ一人驚かなかつたヒルダはデュナンを睨んで、注意をした。

「わかつた、わかつた……。まったく冗談の通じないヤツだ。ヒック、どうせ一週間後にはこの城は私のものになるのだ。その時までのお楽しみにとつておくとしようつかのう……」

「…………」

ヒルダの注意に眉をしかめたデュナンだったが、自慢げに呟いた。その様子をヒルダは冷ややかな目線で睨んでいた。

「か、閣下！ いい加減になさいませ！ 暴飲暴食ならともかく、色に走るなど言語道断！」のフイリップ、一命を賭してお諫めさせていただけじゃ……」

「だから冗談だと呟つていろであるつがー・むつー・今夜はとつと休むぞ！」

フイリップの注意を五月蠅そうに聞いていたデュナンは命令を変えた。

「さ、さすがは閣下でいらっしゃいます。そちらが閣下の部屋です。足元にお気を付け下さい。」

そしてデュナンは酔つた足取りでフイリップが指定した部屋に歩いていたが、エステルの方に振り向いて呟つた。

「ういー……そうだ、サティアとやら。困ったことがあつたら遠慮なく私に相談するといい。次期国王みずから親身に相談に乗つてやろつ。」

「あは……はは……どうもありがとうございまス。」

（ふざけないで！ 絶対エステルを貴方なんかに近づけさせないわ！）

それに貴方がサティアの名前を口にするなんて、不愉快よ…）

（全くだ！もし、その色欲に走った目でエステルに迫つてみるのなら……我が炎でその身を消し炭も残さず焼き尽くしてくれる…）

（ま、まあまあ……落ちつきましょう、2人とも。）

デュナンの言葉をエステルは棒読みに答えた。一方エステルの身体の中にいたパズモやサエラブは憤り、テトリは2人を諫めていた。

「わはは、愛いやつじや。うむ、愉快愉快！」

そう言つたデュナンは部屋の中に入つた。

「どうもお騒がせしました。多分、閣下は明日の朝になれば何も覚えてらつしゃらないでしよう。どうかご安心くださいませ。」

「……そう願いたいものですねわね。」

フィリップの謝罪の言葉に対してヒルダは皮肉げに答えた。

「本当に申しわけありません。夫人、お嬢様がた。それでは失礼いたします。」

もう一度エステル達に頭を下げたフィリップはデュナンが入つた部屋に入った。

「ふう、あの男ときたら……。相変わらず余計な苦労を背負いこんでいるようですね……」

「あれ、ヒルダさんつてフィリップさんと知り合い？」

フィリップが去つた後溜息を吐いているヒルダを見て、エステルは尋ねた。

「幼い頃からの知り合いです。もっとも今では、仕える方も立場も隔たつていますが……」

「そうだつたんですか……」

「確かにフィリップさんつて見るからに苦労性つて感じよね。公爵が大佐に唆される状況にハラハラしてんじやないかしら。」

「その可能性は高そうだね……。そういえば、エステル。君だつてモテてるじゃないか。公爵は君の方が好みだつてさ。」

エステルの言葉に頷いたヨシュアはある事でエステルにからかわれ

た事を思い出し、仕返し代わりに言つた。

「ぞわわっ、何だかちっとも嬉しくないんですけど……。あ、ところで結局、『トギ』って何だったの？」

ヨシュアの仕返しに身を震わせたエステルは『テュナン』が言つたある言葉に首を傾げて、ヨシュアを尋ねた。

「そ、それは……」

一方尋ねられたヨシュアは答えずらうにしていた。

「エステル殿。そのようなことを殿方に聞いて困らせるものではありませんよ。」

「へっ？」

ヒルダの注意にエステルは首を傾げた。

「お耳を拝借。」

そしてヒルダはエステルにそつと耳打ちをした。

「…………」

ヒルダが離れるとエステルは顔を真っ赤にして、うつむいていた。

「理解できましたか？」

「あ、あつ……。…………ハイ…………」

ヒルダの確認の言葉にエステルは恥ずかしそうに頷いた。
(まったく無防備なんだから……)

エステルの様子を見て、ヨシュアは溜息を吐いた。

そしてエステル達は侍女控室に戻つて行つた……

第143話（後書き）

今日は奮発して、後1話夜に更新します
…………感想お待ちしております。

侍女控室に戻つていつもの服装に着替えたエステル達は、ヒルダとシアにお礼の言葉を言つた後、自分達の部屋に戻ろつとした所、ある人物に声をかけられた。

「グランセル城内・廊下」

「……こんな時間に何をしてらつしやるのかしら？」

エステル達に声をかけて来た人物はちょうど謁見の間から2人の特務兵を引き連れて出て来たカノーネだった。

「あ……！」

「カノーネ大尉……」

カノーネ達に気付いたエステル達は驚いた。

「うふふ、こんばんは。いくら招待客とはいえ、あまり感心しませんわね。子供が夜歩きするには遅すぎる時間ではないかしら？」

「申しわけありません。城内が珍しく見物していたらつい遅くなつてしまつて……」

「あら、それは結構だこと。では、30分ほど前までどこを見物していたのかしら？参考までに聞かせてくれませんこと？」

ヨシュアの言い訳に感心したカノーネはエステル達に尋ねた。

「えつと……メイドさん達がいる部屋に行つていました。」

下手に誤魔化しても無駄と感じたエステルは正直に答えた。

「……ふふ、なかなか素直で結構な事。……まあ、戯れはこのくらいにしておくとしましょたわむうか……。実は、あなたたちが何度もメイド部屋に入りしているのを見かけたという報告が入つているの。あんな場所を見物するなんておかしいと思いませんこと？」

「な……！」

カノーネの指摘にエステルは驚いた。

「知つてて質問するなんてずいぶん人がお悪いんですね。」

「うふふ、讃め言葉として受け取つておきましょう。それで、メイド部屋に何の用事があつたのかしら? 正直に答えた方がよくつてよ。」

ヨシュアの言葉を聞き、不敵な笑みを浮かべたままのカノーネは続きを促した。

「それは……」

この場を逃げる言い訳が思い浮かばなく、ヨシュアが必死に考えている所を

「おお～! エステル、ヨシュア! こんな所にいやがつたかあ～!」

「ジンさん……」

酔っている様子のジンがエステル達に近付いて来た。

「ふはあ～、染みわたるねえ!」

そしてエステル達の目の前で豪快に手に持つている手酌をした。

「うわ、へべれけ……」

ジンの行動にエステルは呆れた。そしてジンはカノーネ達に気付いた。

「おつと、こりやあ失礼。誰かと思えば、ベッピンの女士官どのもご一緒でしたか。いやあ～、なんと言いますか妙な偶然もあるもんですなあ。」

「そ、そうですね……」

突然ジンに話を振られたカノーネは戸惑いながら答えた。

「それで、どうしました?俺の未熟な弟子どもが迷惑をおかけしましたかね?」

「で、弟子つて……」

ジンの突拍子のない言葉にエステルは驚いた。

「いえ、彼らがメイド部屋にしばらくいたそので……。保安上の理由で、何をしていたのか聞かせてもらつていたのですわ。」

一方エスティル達の様子に気づかないカノーネはジンに事情を説明した。

「ああ、そりゃあ、アレですな。ちょうど酒のつまみがなくなつて取りに行かせてたんですよ！おい、ヨシュア。なんか食えるもんはあつたか？」

「いえ、もう料理の方々は帰つてしまつたみたいで……。侍の方に聞いたんですけど、すぐに用意できるようなツマミのたぐいはないそうです。」

そして話を振られたヨシュアはいつもの調子で答えた。

「はあ、仕方ねえな。ツマミ無しで我慢するか……。おっと……いいことを思い付いた。」

ヨシュアの答えを聞き溜息を吐いたジンはカノーネの顔を見て、カノーネに近寄つた。

「よかつたら、俺と酒に付き合つてもらえませんかねえ。わはは、美人の笑顔は最高の酒の肴さかなといいますしなあ！」

「に、任務があるので遠慮させていただきますわ。先ほどの一件は不問にいたしますけど……。今夜は、もう部屋に戻つてこれ以上出歩かないことね。不審な行動をした場合、取り調べさせてもらいますよ。」

ジンに近寄られたカノーネはジンから一歩下がつて断り、エスティル達を睨んで忠告をした。

「わ、わかりましたってば。」

「……家族や仲間がホテルで待つてるので、部屋に置いてある荷物を取つたら城を出るつもりです。」

「ふふ、素直でよろしい、では……我々はこれで失礼しますわ。」エスティルとヨシュアの答えを聞いたカノーネは特務兵達と共にビビリかに去つて行つた。

「あら、フランチャリタか……。仕方ねえ……とつとと部屋に戻るとするかね。」

「う、うん……」

「僕たちも一緒に戻ります。」

そしてエステル達は自分達の客室に戻つて行つた。

～グランセル城内・客室～

「やれやれ……。『うりやうり上手に』とか『まかせたみたいだな』

「え……ジンさん、酔つてたんじゃないの？」

部屋に戻つた瞬間いつもの口調に戻つたジンを見て、エステルは驚いた。

「ありや、演技だ演技。酒なんざ一滴も呑んでないぜ。」

「うそ！？顔だって赤かつたし……」

ジンの説明にエステルは驚いた。

「気を巡らせて血行を良くし醉つたように見せかける……。東方武術における『氣功』というもののじゃないですか？」

「ほう、そんな事まで知つているとは驚きだぜ。まあ、困つてみたいだからちょいと口出しさせてもらつた。どうだ、助かつただろう？」

ヨシコアの推測に感心したジンはエステル達に尋ねた。

「もー、ジンさんてばほんと人が悪いんだから。たしかに助かつたけど本当に驚いちゃつたんだからね。」

「はは、悪い悪い。それで、どうだつたんだ？」

「？？？どうだつたつて、何が？」

ジンに尋ねられたエステルは首を傾げて、尋ね返した。そしてジンから出た次の言葉にエステル達は驚いた。

「決まつてるだろ。女王陛下との会見のことや。」

「あ、あんですつて！？ど、ど、どうしてジンさんが！？」

「もしかして、エルナンさんから何か聞いていたんですか？」

事情を知つてゐるジンを見て、2人は信じられない様子で驚いた。

「受付の兄ちゃんからは何も教えてもらつてないぜ。まあ、カマをかけさせてもらつたというところかねえ。」

「カマつて……」

「……何の情報もなしにそんな憶測はできませんよ。ジンさん……あなたは何を知っているんですか？」

ジンの説明にエステルは呆れ、ヨシュアは冷静になつて尋ねた。

「ふふ……。ようやくコイツをお前さんたちに見せられるな。」

そしてジンは一通の手紙をエステルに渡した。

「て、手紙……？」

「この筆跡は……」

「まあ、とりあえずそいつを読んでみてくれ。だいたいの事情は判るはずだ。」

「う、うん……」

そしてエステルは手紙を開いて内容を読み始めた。

「拝啓、ジン・ヴァセック殿。

ご無沙汰しているがお元気だらうか。急いでいるので、ざつぐばらんな書き方になることを許して欲しい。実は、イエーガー獵兵团がらみの事件でエレボニア方面に向かつことになった。

しかし、リベル国内でも妙な勢力が動き始めているらしく、若手だけに任せるのは少々心許ない。そこで君に頼みがある。私の留守中、リベルの来て何かあつたら若い連中を助けてもらえないだろうか？

君はリベルが初めてらしいから物見遊山しながらでも構わない。女王生誕祭の前には、外国人も参加できる武術大会も開かれるからいいカモフラーージュになるだろつ。突然の話で戸惑われると思うが、もし手が空いていたらお願ひする。

女王生誕祭までには戻るからその時にはまた、一緒に番もつ。

追伸：

もしかしたら私の娘と息子に会つ機会があるかもしれない。ギルドの見習いをやつてるので、その時は遠慮なく鍛えてやつてくれ。少々の事なら、手を貸さずに自分の力で切り抜けさせてほしい。後、できればいつの間にかできた孫娘を守つてほしい。」

「…………」「これって……」

手紙の内容を読み終えたエステルは驚いた。

「ジンさんは、父に頼まれてリベルに来たんですか……。そして父は今……エレボニアの方にいるんですね。」

「まあ、そういう事になるな。」

「そういう事になるなつて……。よ、要するにジンさん、父さんとグルだつたんじゃない！というかミントの事をいつ知ったのよ、あの不良中年は～！」

今までジンに騙された事に気付いたエステルはジンを睨み、そしていつの間にかミントの事まで知っているこの場にはいないカシウスを怒った。

「グルとは人聞き悪いねえ。カシウスの旦那には、あの人ガカルバードに来た時に色々とお世話になつたんだ。いつか借りを返したかつたからこの手紙は渡りに舟だつたのさ。」

「そうだつたんだ……」

「いつ僕たちが父の子供だと判つたんですか？」

「最初に会つた時にエスティルが棒術具を持っていた事と、ミントがまだ16のお前さんを親のように慕つていた事からなんとなくピンと来てな……。キリ力に聞いて確信したわけだ。」

「まったく、一言くらい教えてくれてもよかつたのに……。あたしが、父さんの行方が判らないでずっとヤキモキしてたんだからね。」

「…………」「カシウスの行方を知つていたにも関わらず話してくれなかつたジン

をエステルは頬を膨らませて見た。

「それについては悪いと思っている。ただ、文面からカシウスの旦那がエレボニアに行くことを隠したがっているような気がしてな……。しかし、どうやらお前たちだけだけでかい仕事をやり遂げたみたいじゃないか？」

「あ、うん……。ねえ、ヨシュア。もう話しかやつてもいいよね？」
「うん、こうなつたら事情を話した方がよさそうだ。僕たちだけで済ませるにはあまりにも大きい話だからね。」

そしてエステル達はジンに今までの話と、女王の依頼 クローディア姫を救出する依頼を請けたことを話した。

「なるほどな……。晩餐会での話を聞いてキナ臭いとは思っていたが……。よし、その依頼、俺も手伝わせてもらひゅぜ。」「え、いいの！？」

ジンの申し出にエステルは驚いた。

「ああ、カシウスの旦那に恩返しする絶好の機会だからな。どうか俺にも協力させてくれ。」

「あ、あたし達の方からお願ひしたいくらいだつてば～。」「改めて、よろしくお願ひします。」

その後エステル達は城を出て、ホテルに戻った。

♪グラントセル城内・謎の地下部分♪

一方リシャール達はグラントセル城内のある場所を通つて、謎の広い地下空間にいた。

「い、ここは……」「い、こんな場所が存在していたなんて……」
リシャールに突き従つている特務兵達は周りの空間に驚いていた。
「フフ、予想以上の規模だな。口ランス少尉。最深部まで案内できるかね？」
「了解しました……」

リシャールの頼みに頷いたロランスが先に歩みを進み始めようとしたその時、機械兵器らしき存在がリシャール達の目の前に立ちふさがつた。

「おおっ！」

「き、機械の化物！？」

初めて見る自動で動く機械兵器に特務兵達は驚いた。

「ほつ……。古代の人形兵器オーバーマベットか。」

機械兵器を見て眩いたリシャールはロランスとほぼ同時に一閃で斬り伏せた！

「す、凄い……」

「あんな化物を一刀で……」

「フフ、君の方が反応が早かつたようだな。やはり、本気の君にはあまり勝てそうな気がしない。」

「『謙遜を。さすがは『剣聖』より受け継ぎし神速の居合い』……。しかと見せていただきました。」

特務兵達が自分達の強さに驚いている中、リシャールとロランスはお互いの腕を賛辞した。

「ふふ、まだまだ未熟だ。だが、時代の流れはあまりに早く未熟者の成長を待つてはくれない。何とか、このつたなき手で王国の明日を切り拓かなくては……」

憂いが籠った表情をしたリシャールだったが、決意の表情になり、特務兵達の方に向いて、号令をかけた。

「勇者たちよ！大いなる力への道は開いた！我らが愛するリベルルの輝ける夜明けはもうすぐだ！諸君の働きに期待する！」「

「了解であります！」

「われら特務兵、一丸となつて大佐のために尽くす所存です！」

「リベルルの栄光のために！リベルルの栄光のために！」

リシャールの号令に負けない特務兵達の大声が謎の地下空間に響いた。

（グランセル城内・特務部隊詰所）

「謹慎！？作戦がこれから最終段階に入るといつこの時期に、何故
！？」

一方グランセル城内のある部屋で特務兵を率いる部隊長　武術大
会で予選敗退した隊長がカノーネに言い渡された命令に反論がある
部下達を代表して、反論した。

「あら、当たり前でしょう？予選敗退にロランス少尉の補佐もできず、
呑気に氣絶するような足手纏いがいると、作戦に支障が出る可能性
があるのでしょう？貴方達がいても邪魔になるだけよ。」

隊長の反論にカノーネは当然のように言つた。

「しかし……！」

「言い訳は聞きませんわ。後、博士の奪還を許した貴方達。貴方達
も同じ処分よ。」

「そ、そんな……！」

突然自分達にまで話を振られたレイストン要塞で博士の見張りをし
ていた特務兵達も絶望した表情になつた。

「返事は？」

「イ、イエス、マム……」

カノーネに睨まれた特務兵達や隊長は悔しそうな表情で頷いた。

「よろしい。事が終わればまた任務に着かせてあげますわ。それで
は。」

そしてカノーネは部屋を出て行つた。

「…………」

カノーネが出て行き、部屋内は重苦しい雰囲気に包まれていた。

「ク……！大佐の崇高なる計画の最終作戦に参加できないなんて…

……なんとか、ならんのか！？」

隊長は無念そうな表情で呟いた。

「何か、手柄でもあるといいのですが……」

一人の特務兵が隊長の言葉に答えた。

「手柄……か。」

特務兵の言葉を聞いた隊長は少しの間、考え込んだ後やがてある事を思い付いた。

「そうだ……！大佐が現状恐れているメンフィルの重要人物を人質にできれば、手柄になるぞ！」

「おお……！」

「しかし、悔しいですが我々の実力では今王都にいるメンフィルの重要人物達には敵はないのでは……」

隊長の提案に何人もの特務兵達は表情を明るくしたが、一人の特務兵が表情を暗くして呟いた。

「確かに遺憾ながらメンフィルの皇族や武将には我々では敵わない。だが、それ以外ならどうだ？」

「それ以外……ですか？」

隊長の言葉に表情を暗くしていた特務兵は首を傾げた。

「ああ。実は少尉よりメンフィル大使館で働いているある人物には手を出すなという命令が来ていてな……その人物を攫えれば、我々の汚名を返上できるかもしれん。」

「し、しかしそれは命令違反なのでは？」

隊長の提案に特務兵は戸惑いながら尋ねた。

「……少尉も恐れるほどの人物だ。その人物を手中に收めれば、今までの汚名を返上できると思わないか？」

「確かにそれはそうですが……」

「……ついて来たくない者はついて来なくていい。これは命令違反になるからな。」

「……いえ、自分も着いて行きます……！」

隊長の言葉に迷っていた特務兵だったが、少しの間考えた後、決意を持った表情で返事をした。

「よし……明日、メンフィル帝国大使館で働いている使用人、『イリーナ・マグダエル』の確保を決行する！みな、覚悟はいいな

！？

「イエス、サー！！」

隊長の号令に特務兵達は姿勢を正して答えた。そして謹慎を言い渡された特務兵達は作戦の決行のために静かにロレントに向かった。その行動が自分達の命を散らす事も知らずに……

第144話（後書き）

とこう訳でみなさん「期待？」のオリジナルイベントがあります！オリジナルイベントでは軌跡ファン「期待の”あのキャラ”」が活躍するので楽しみに待っていて下さい！……感想お待ちしております。

ホーテル・ローエンバウム

「フウ……かなり遅い時間になっちゃつたけど、ミント、起きて
いるかしら？」

ホテルに戻り、自分達が泊まっている部屋の前に着いたエスティルはミントがまだ起きているか首を傾げた。

と誰かの声が聞こえるし。」

ヨシコアに言われたエステルは耳をすまし、誰かと楽しそうに会話をしている//シートの表に応付いた。

「とにかく部屋に入つて、確かめてみよう。」

そしてエスティルとヨシュアは部屋に入った。部屋に入るとそこにはミントが天使ニール・デュナミスと楽しそうに会話をしていた。

「アマゾンジャーナル」

エヌテル達に気付いたミントは嬉しそうな表情でエヌテルに抱き合った。

「ただいま、ミスト。遅くなっただけだよ。」

「二
ルを
」

ミントの口から出た知らない名前に首を傾げたエステルはミントと会話をしていた人物 ニルを見た。

「フフ……こんばんは。」

エステルに見られたニルは笑顔で挨拶をした。

「て、天使！？」

「本当に天使という存在もいたんだ……」

ニルの見た目から一目で天使とわかつたエステルは驚き、ヨシュアは天使の存在を直にみて、驚いた。

「初めまして。我が名はニル・デュナミス。貴女がエステル・ブライトね。会いに行くのが待ちきれないから、来させてもらつたわ」「え？ あたしに？」

「どうしてエステルの事を知つているんですか？」

エステルの事を知つている風に見えるニルを見てエステルは首を傾げ、ヨシュアは尋ねた。

「そうね。じゃあその子にも話して上げた事をもう一度話すわ。」そしてニルはエステルとヨシュアに事情を話した。

「へ……貴女の前の主の人つて、パズモやテトリと同じ人だつたんだ……凄い偶然ね。」

ニルの話を聞き終えたエステルはニルから出た主の名前を聞き、驚いた。

「あら。やつぱりコイチリってテトリの事だったのね。テトリ、元気にしているかしら？」

「うん。……テトリ！」

ニルに尋ねられたエステルは頷き、テトリを召喚した。

「何か御用ですか、エステルさん。」

「えつと、貴女の仲間が会いに来てくれたから、せつかくだから呼んだんだ。」

「仲間……？」

エステルの答えに首を傾げたテトリはニルを見て、驚いた。

「……ニルさん！？ どうしてここに……いえ、この世界に…？」

「やつほ、久しぶり。貴女こそ、自分の故郷に帰つたんじゃない

の？」「

「うう……実は……」

そしてテトリーはニールにエステルの使い魔になつた経緯や異世界にいる事情を説明した。

「あ、あはは……相変わらず貴女つて、苦労しているのね……」
テトリーの事情を知つたニールは苦笑いをした。

「うう……他人事だからそんな事が言えるのですよ。でも、今はエステルさんといつしょにいるおかげで毎日が楽しいですから、別にいいんです。」

「よかつたね、エステル。テトリーと仲がいい証拠じゃないか。」

「さすがママだね！ミントもママみたいになれるよう、がんばらなりと！」

「えへへ……そんな風に言わると照れちゃうわね。」

テトリーの言葉を聞き、ミシコアやミントの褒める言葉にエステルは照れた。

「フフ……仲がいこようで何よりだわ。さて……ど。じゃあ、本題に入ろうかしら。」

エステル達のやり取りをニールは微笑んだ後、エステルを見た。

「そうね。……えつと、さつきの話を聞いて、今更聞くのもなんだけど契約してくれるの？」

「ワクワク……」

ニールに見られたエステルは期待した表情でニールを見た。またミントも楽しみにしていた天使が仲間になるかもしれない事に期待の表情をした。

「そうね。貴女なら文句なしで契約してあげてもいいけど、最後にやる事があるわ。」「?何をするの？」

「?何をするの？」

ニールの言葉にエステルは首を傾げた。

「…………こには狭すぎて駄目ね。郊外に出ましょ。う。」

「？うん。」

「エステル、今は巡回の兵士がいるから外に出るのは不味いと思うよ？」

「あ、そうね。じゃあ、エヴリーヌに転移魔術をお願いしましょう。

」
そしてエステル達はリフィア達の部屋に行き、エヴリーヌに頼んでグランセル郊外の街道に転移した。また、プリネとツーヤは既に寝ていたのでそのままにしてリフィアも着いて来た。

（キルシェ通り）

その後エヴリーヌの魔術によつて街道に転移したエステル達はニルの先導によつて、開けた場所に出た。

「…………うん。この辺でいいわね。」

ニルは周囲の開けた風景を見て、一人納得した。

「…………いい加減教えてくれない？ エヴリーヌ、さつさとホテルに帰つて寝たいんだけど…………」

「ごめんね。…………リフィア、エステルに貴女の魔力を分けてくれない？」

「ぬ？ わかった。」

ニルに話を振られたリフィアは首を傾げた後、エステルに自分の魔力を分け与えた。

「…………どうだ、エステル。」

「…………うん。ありがと。リフィアのお陰で魔力は絶好調よ！」

リフィアに尋ねられたエステルはお礼を言った。

「体力や傷はどうかしら？」

「傷はあの後治療したし、体力も決勝戦で戦つて以降戦つていなから、完全に回復しているわ。」

「フフ、それは何より…………ね！」

そしてニルはいきなりエステルに自分の武器

連接剣でエステル

を攻撃した！

「わつ！？」

「二ルの攻撃に驚いたエステルだつたが、即座に回避した。

「ちょ……何のつもり！？」

「二ルさん！仲間になつてくれるんじやないの！？」

二ルの攻撃を回避したエステルは棒を構えた。ミントは二ルの攻撃に驚き、信じられない表情で尋ねた。また、ヨシュアやリフィア達も二ルの行動に驚いた後、それぞれの武器を構えた。

「フフ……これが二ルなりの契約者の見極め方よ。」

「…………それは一体どういう見極め方なんだい？」

二ルの答えにヨシュアは警戒した表情で尋ねた。

「その答えは一つ！契約者自身が二ルを納得させられる強さを持つかどうかよ！」

「…………天使の癖にエヴリーヌ達みたいな考え方にはいなんて変わっているね。」

二ルの答えを聞いたエヴリーヌは呆れて溜息を吐いた。

「な～んだ、そういう事か！オッケー！！あたしの強さ……見せてあげるわ！」

一方エステルは好戦的な笑みを浮かべて、棒を構え直した。

「フフ……できればそこの竜の少女と貴女が契約している子達全員でかかつて来てもらつていいかしら？」

「へ？そんな事したら、勝負が不公平になつてしまつんじゃないの？」

二ルの以外な申し出にエステルは驚き、尋ねた。

「フフ……それぐらいしないと、二ルには勝てないわよ？」

「むつか～！いいわ！そこまで言つなりやつてやうつじやない！」

後で後悔しても知らないわよ！？」

二ルの言葉に怒ったエステルは二ルを睨んで言った。

「天使に一言はないわ。」

「…………パズモ、サエラブ、テトリ！みんな、出て来て……」

ニルの答えを聞いたエステルはパズモ達を召喚した。

「みんな！協力して、あたし達の力をニルに見せてあげましょうー！」

(わかつたわ！)

(…………ほつ、能天使か。…………エリザスレインほどではないが、中級を冠する天使には違いない…………クク、面白い……)

「あつ～…………やっぱりこういう展開になつてしましましたか…………エステルの号令を聞き、パズモは領き、サエラブは久しぶりの強敵の存在に好戦的な笑みを浮かべ、ニルの性格を知つていたテトリは溜息を吐いた。

「ミント！行くわよ！！！」

「うん！勝つて、ニルさんとお友達になるうー！」

そしてミントも剣を抜き、戦闘態勢に入つた。

「ヨシュア、これはあたし達の戦いだから、手を出さないでくれる？」

「…………なんとなくそいつと思つたよ。でも、危なくなつたら僕も参戦するからね？」

「うん！」

エステルに戦闘に参加しないよう言われたヨシュアは苦笑しながら言った。

「エヴリース、周囲に戦闘の音がもれないよう、結界を張るぞ！」

「はいはい。めんどくさいけど、見回りの兵士達に戦闘の音が聞こえてこっちに来たら、もつとめんどくさい事になるしね。」

リフィアとエヴリースは協力して、周りに結界を張り始め、ヨシュアは念のためにリフィア達の護衛についた。

「フフ……これで貴女達の実力が見れるわね。…………改めて名乗るわ。…………我是能天使、ニル・デュナミス！人の子よ。…………天使である我を従えられる器であるかを、自らの武と絆の力を持つて我に示してみなさい！」

そしてニルは連接剣の切っ先をエステル達に突き付けて、厳かな口調で言った。

「みんな、行くわよ！」

「うん！」

（ええ！）

（うむ！）

「ニルさんは治癒魔術も使えます！それと強力な神聖魔術も使えるので注意して下さい！」

そしてエステル達とニルの戦いが始まった……！

第145話（後書き）

毎回会つただけですぐ契約……ところのもなんですから、こうこう展開にしてみましたまあ、今までの話で察している方もいらっしゃるとは思いますが……感想お待ちしております。

第146話（前書き）

戦闘BGMはFCの武術大会の戦闘で流れるBGM、“Challenger Invited”かVERITAのセリカsideの通常戦闘BGM、“疾風怒濤”か碧の“Conflicting Passions”（ラストダンジョンの通常戦闘BGM）が流れていると思って下さい

能天使ニル・デュナミスとの戦いは複数の味方がいるエステル達が優勢と思われたが、戦いは互角だつた。

（キルシエ通り）

「やつ！」

「やあつ！」

「甘い！」

（燃えよつ！）

（燃えよつ！）

後方よりサエラブは炎の玉を吐き、テトリは『矢で攻撃したがさせませんわ！』

ニルは武器を持つていらない片手で簡易結界を作り、防いだ。

（光よ、集え！……光霞！……）

そこにパズモが放つた魔術がニルに命中した！

「ナイスよ、パズモ！」

（……………）

ニルにダメージを与えたと思ったエステルはパズモを褒めたが、パズモは何も答えず、厳しい表情で魔術の爆発によつて姿が見えなくなつたニルがいる場所を見ていた。

「よし、一気に決めるわよ、ミントー！」

「うん！」

「2人とも、待つて下さい！ニルさんは天使です！恐らく今の魔術では……」

そしてエステルとミントは制止するテトリの声に気付かず、それぞれクラフトの構えをした後、爆発によつてできた煙が晴れるまでに

二ルがいる場所を攻撃した！

「ハアアアア……セ……」

「行つく……」

「光よ、集え！光霞……！」

「え……あう！？」

「やん！？」

パズモが放つた同じ魔術がエステルとミントに命中した！

「いつたく……ミント、大丈夫！？」

「う、うん……」

魔術を受けた2人は呻きながらも武器を構え直した後、一端サエラブ達の所まで後退した。そして煙が晴れると傷一つついていない二ルがいた。

「え……魔術が命中したのに、なんで傷一つついていないの！？」

「フフ……天使である二ルに神聖魔術、それも初歩の神聖魔術で攻撃しても無駄よ。」

傷一つついていない二ルを見てエステルは驚き、二ルは口元に笑みを浮かべて答えた。

「お二人とも、大丈夫ですか！？」

そこにテトリが慌ててエステルとミントに話しかけた。

「うん。ミント、今治してあげるね。……癒しの闇よ！……闇の息吹！！」

「あつたかい……ありがとう、ママ！」

テトリに答えたエステルはミントの傷を治癒した。

「エステルさんの傷も今治癒しますね。……母なる大地の力よ……

……大地の恵み！！」

「サンキュー、テトリ！……にしても、なんでパズモの魔術を受けたのに平気なのかしら？」

(当たり前だ。奴は”天使”。我自身が炎に強いと同じように、神圣属性の攻撃に関してはほとんど、無効化する体質を持っている。)

ニルに魔術が効かなかつた事に首を傾げているエステルにサエラブは説明した。

「 そうなの！？……ならパズモは攻撃から補助に切り替えて！」

（わかつたわ！）

「 光よ、降り注げ！……爆裂光弾！！」

エステルがパズモに指示した時、いつの間にか詠唱を終えたニルが魔術を放つた！

「 !上です！」

空から降り注ぐ光の弾に逸早く気付いたテトリはエステル達に警告した。

「 みんな、散つて！」

そしてエステル達は散開して、魔術を回避しようとした。

「 あうつー？」

「 やん！？」

（くつ……！）

「 ひやん！？」

しかし回避が間に合わず、降り注ぐ光の弾に被弾したエステル達はダメージを受けた。

（ぬん！）

また、持ち前の素早さで唯一回避に成功したサエラブは鋭い爪でニルに飛び掛かつた！

「 !ハツ！」

（チツー！）

しかしニルが震つた連接剣によつてサエラブの爪は弾き返され、ニルの攻撃の衝撃によつてサエラブはエステル達に所に着地した。（戦意よ、芽生えよ！戦意の祝福！…）

「 風よ、我らに癒しの祝福を！……再生の風！」

そしてパズモの援護魔術、テトリの傷ついた身体を時間と共に自動的に治癒させる魔術がエステル達を包み込んだ！

「貴いちゃえ！……アイスニードル！」

パズモ達に続くようミニントは魔術をニールに放つた！

「わつと！？」

足元から一きなり出現した氷の刃をニールは驚きながらも回避した。

「はつ！」

そしてエステルは棒でニールを攻撃した！

「させないわ！」

しかしニールは連接剣でエステルの攻撃を防御した。

「かかつたわね」

「え！？」

不敵な笑みを浮かべて言ったエステルの言葉にニールは驚いた。

「サエラブ！」

（ああ！）

そしてエステルの声で意図がわかつたサエラブは自らの体に炎を纏つて、ニールに突進した！

（フン！）

「キヤアツ！？」

サエラブのクラフト 炎狐強襲を受けたニールはダメージを受けると共に吹っ飛ばされた！

「闇よ、我が仇なす者を吹き飛ばせ！……黒の衝撃！…」

「クッ！？」

さらにエステルは魔術をニールに命中させ、さらに傷を作らせると同時に吹っ飛ばした！

「落つちろ！……サンダー・ボルト！…」

「キヤアアア！？」

そこに追い討ちをかけるかのようミニントの魔術がニールに命中した！

「よつし！やつぱり暗黒属性には弱いわね」

（何故、天使が暗黒属性に弱いとわかった？）

吹っ飛ばされたニールを見て得意げになっているエステルにサエラブ

は尋ねた。

「え？ 光に強いんだつたら、闇に弱いかな」と勘でなんとなく思つただけよ？」

（ま、まあそんなんだけど……けど、よく勘だけで天使の弱点を見極めたわね……）

「アハハ……相変わらず、エステルさんの天性の勘には驚かされちゃいますね。」

「凄いよ、ママ！」

エステルの答えを聞いたパズモやテトリは苦笑し、ミントはキラキラした表情でエステルを見た。

「癒しの光よ……癒しの息吹！！」

「い！？」

しかしニールが自分自身に治癒魔術を使い、せっかく与えた傷が治癒されるのを見たエステルは驚いた。

「フフ……見事な連携だけど、それではニールを倒せないわ。」

驚いているエステルにニールは不敵な笑みを浮かべて言った。

「強力な神聖魔術に治癒魔術、おまけに接近戦もできるようだし……凄い！ 万能な戦いができるじゃない！……うん！ 一緒に戦つたら、心強いわ！」

（エ、エステル……そういう事は勝利してから言いなさい……）

驚いていたエステルだつたがやがて明るい表情になり言つた言葉を聞いたパズモは呆れた。

「ハアッ！－」

そしてニールは連接剣を伸ばして、エステルを攻撃した！

「わつと！？」

ニールの攻撃にエステルは驚きながら防御した。

「そう言えばニールの武器つて初めて見る武器だけど、何アレ？ 伸びる剣とか聞いた事ないんだけど……」

「ニールさんが使つている剣は“連接剣”という伸縮が可能な特殊な剣で、距離を選ばない武器なんです。」

ニルの武器に首を傾げて立つエステルにテトリは説明した。

「へ……でも、それならこっちだつて……！せいつ！」

テトリの説明を聞いたエステルはクラフト 捻糸棍を放つた！

「フフ……」

しかしニルは簡易結界を張つて防いだ。

「……罪人を処断せし……」

そして魔術の詠唱を始めた。

「やばつ！？あの詠唱つて、パズモやリフィアが使つて立つ高位魔術じゃない！……でも……これは一つのチャンスかもしれないわね

……パズモ。」

ニルの詠唱の一部が聞こえたエステルは焦つたが、すぐに反撃を考え、パズモを呼んだ。

（何？ エステル。）

「ニルが今から放つ魔術……1回でいいから、防げるかな？」

（……1回は防げるけど、防いだ後は私はもう戦えないと思うわ。あの天使、上位を冠する天使だけあって、高位神聖魔術である”贖罪の光霞”の威力もさらに高くなつていてるだろうから、私に残つているほとんどの魔力を注ぎ込まないと防げないと思うわ。）

「十分よ！ サエラブ、テトリ！」

（……次は我等か。）

「私にできる事なら、なんでも言つて下さい……」

「えつとね……」

パズモに指示したエステルはサエラブとテトリを呼び、ニルには聞こえないよう小声でそれぞがするべき事を頼んだ。

「……お願いできるかな？」

（フン……我を誰だと思つて立つ？ それぐらいの指示、造作もないわ！）

「お任せ下さい！ 我が弓で貴女を勝利に導きます！」

エステルに頼まれた2人はそれぞれ力強く言った。

「ママー、ミントは何をすればいいの！？」

そして最後にミントは自分は何をすればいいのか、エステルに尋ねた。

「ミントはあたしが声をかけた時、ミントのとつておきの技をニールにお見舞いして！」

「うん！」

エステルの指示を聞いたミントは元気良く頷いた。そして全員、それぞれいつでも動けるような態勢になつた。

「（フフ……どうやら作戦会議は終わったようね……）贖罪の光霞！！」

エステル達の行動を詠唱しながら見ていたニールは口元に笑みを浮かべた後、魔術を放つた！

（聖なる護りの光よ、我等を守りたまえ！…………防護の光陣！！）ニールの魔術が放たれると同時にパズモは自分に残っている魔力のほとんどをエステル達を守る防護魔術に注ぎ込んだ！そして辺りを響き渡らすような轟音と爆発がエステル達を襲つた！！

「エステル！！みんな！！」

爆発と轟音の中に包み込まれたエステル達を見て、ヨシュアは声をあげた後、双剣を構えて走りだそうとしたが

「待て、ヨシュア。」

リフィアがヨシュアの目の前で片手を真横にして、制した。

「どいてくれ、リフィア！」

「やれやれ……普段はどんな時でも冷静な癖にエステルの事になると、冷静さをなくす癖はなくしたほうがいいぞ？少しは落ち着け。」「多分、まだ勝負は終わってないよ。」

「え……？」

リフィアとエヴリーヌの言葉に驚いたヨシュアは立ち止まり、爆発と轟音に包まれたエステル達を見た。やがて煙が晴れると、そこには無傷のエステル達がいた。

「嘘……！？今のを防ぐなんて、あの守護精霊……かなりの力の持ち主じゃない！」

自分が放った高位の魔術が防がれた事にニールは驚いた。

(クツ……悪いけど、私は休ませてもらわね……)

「ありがとう、パズモ！ ゆっくり休んで！」

そしてパズモはエステルの身体に戻った。

「さ～て……反撃開始よ！……サエラブ！！」

(ああ！)

エステルの呼びかけに頷いたサエラブは素早い動きでニールとの距離をある程度狭めて、クラフトを放つた！

「ウオオオオオオオツ！！」

「キヤツ！？」

サエラブのクラフト 拡散咆哮を近くで聞いてしまったニールは吹き飛ばされると同時に怯んだ。

「行つくわよ～……！ ハアアアアアアツ！！」

(フツ！)

そしてエステルは棒にいつも以上の鬪気を込めた！ また、サエラブは真横に跳んだ後、エステルの所に戻った。

「クツ……」

エステルの行動に気付いたニールは簡易結界を展開しようとしたが

「させません！」

「キヤツ！？」

テトリが放ったクラフト 精密射撃によって妨害された。

「とりやあつ！ 紅爆撃！！」

そしてエステルは棒に込められた鬪気を衝撃波に込めて放つた！

「グツ……！」

飛燕剣の技の一つを棒術に組み込んだエステルの新クラフト 紅

爆撃を受けたニールは襲いかかる衝撃を身体に受けて、痛みに顰めた。

「ミントのとつておき、見せて上げる！ ソードファング！！」

「痛ッ！？」

さらにエステルの技が放たれた直後に走り出して、ニールに近付いたミントはSクラフトを放ち、ニールにダメージを与えた！そしてミントはすぐにその場を離れた！

「猛る大地よ、我が矢に力を！……大地の援護射撃！！！」

そこにテトリがSクラフトをニールに目がけて放つた！

「好きにはさせないわっ！光よ、裁きの雷と共に我が剣に宿れ！…

・極光電撃剣！！」

襲いかかる鬪氣と大地の魔力が込められ、衝撃波と共に襲いかつて来る矢をニールは光と雷を宿した連接剣のSクラフト 極光電撃剣で振り払つた！

「フウ…………。！？」

テトリのSクラフトを防いだニールは安堵の溜息を吐いたが、サエラブに跨つて信じられない速さで近付いて来るエステルを見て驚いた。

「これで……終わりよつ！！」

そしてエステルはサエラブに跨つたまま、力を込めた棒を横薙ぎしてニールの腹に命中させた！

「カハッ！？」

棒が腹に命中したニールは呻いて、地面に蹲つた。

「いたた。…………！？」

腹から伝わる痛みにニールは呻いた後、顔を上げた時、自分にそれぞれの武器を突きつけているエステル達を見て驚いた。

「フフン、勝負ありね」

驚いているニールにエステルは得意げに言つた。

「フフ……お見事。ニールの負けね。貴女達の連携、恐れ入つたわ。」

「ありがとう。じゃあ……！」

「ええ。約束通り、貴女を契約者として認めます。両手を出して。「うん！」

ニールはエステルの両手を握り、両手から伝わるエステルの魔力に同調して、その場から消えた。

「……どうやら、終わつたようだね、エステル。彼女が放つた高位の魔術を君達が受けて、心配したけど、無用の心配だつたみたいだね。」

「まあ、パズモの力がなければ、多分負けていたわ。だから、みんなの勝利よ！」

ヨシュアの言葉を聞いたエステルは胸を張つて答えた。

「それでどうだ、エステル。天使と契約した感想は？」

「うん。ニルがあたしの身体に入つた時、教会に漂つてゐる空氣以上の凄く清らかな感じがしたわ！……ニル！」

リフィアに尋ねられたエステルはニルを召喚した。召喚されたニルは眩い光と共に姿を現した。

「これからよろしくね！」

「ええ！創造主様より頂いたこの力、貴女のために震いましょう！」

こうしてエステルは新たな仲間と力を手に入れた。

その後エヴリーヌの転移でホテルに戻つたエステル達は明日に備えて、疲れた身体を休ませた……

第146話（後書き）

という訳で、能天使ニル・デュナミス契約&・エステルの神聖魔術習得です！ちなみにプリネは外伝で、エステルはSC4章と6章で全員揃うことになります！……感想お待ちしております。

翌日エステル達は女王からの依頼を説明するためにジンと会流した後、ギルドに向かつた。

（遊撃士協会・グラントセル支部）

「状況は理解できました……。エステルさん、ヨシュアさん。本当によくやつてくれました。まさか、女王陛下直々の依頼を請けてきてくださるとは……」

エステルとヨシュアから全てを聞き終えたエルナンはエステルとヨシュアを労つた。

「あはは、運が良かつただけよ。でも、ここから先は運じゃ乗り切れないとかも……」

「うん……。気を引き締めてかからないとね。」

「それが判つているのであれば私から言つことは何もありません。ともかく、これでラッセル博士の依頼は達成ということになりますね。今後も何かとご入用でしうし、ここで報酬をお渡ししておきます。」

そしてエルナンは2人に報酬であるミリカを渡した。

「さて、それから……ジンさん。あなたがカシウスさんに招かれて来てくれたというのは僕偉的伟大でした。A級遊撃士としての力をどうか私たちに貸してください。」

「ああ、そのつもりだ。田那への借りを返す以前にこんな事件は放つておけんよ。最後まで手伝わせてもらひざ。」

エルナンに頼まれたジンは力強く頷いた。

「さすがジンさん、太っ腹！ところで……A級ってナニ？」

「正遊撃士の実力を表すランクのことだよ。一番下のGからAまでの7段階に分かれているんだ。」

「そ、それじゃあA級って最高のランクってことじゃない…ジンさんつて……そんな凄い遊撃士だったんだ。」

ジンのランクについての説明をヨシュアから聞いたエステルは驚いて、ジンを見た。

「ほう。お主、A級だつたのか。道理で強い訳だ。」

リフィアは感心した様子でジンを見た。

（ねえねえ、プリネ。A級の正遊撃士つてのはそんなに凄いの？）
（ええ。ゼムリア大陸全土で20人ほどしかいないと聞きます。）

（凄いです！そんな人があたし達の目の前にいるんですね……！）

一方エヴリーヌは小声でプリネに正遊撃士のランクを聞き、プリネの答えを横で聞いていたソーヤは尊敬の眼差しでジンを見た。

「はは、俺なんざA級の中でも下つ端の方さ。それにA級は、大陸全土で20人くらいはいるんだが……。その上に、実は非公式でS級というランクがあつてな。

これは国家的な事件を解決した遊撃士にしか贈られない称号なんだ。大陸全土でも4人しかいない。」

「ど、どれだけ凄いのか想像もできないんですけど……」

A級のさらに上の級がある事を知つたエステルはどれだけ強いか想像すらできなかつた。

「ハア、どうやらお前さん、何も知らないみたいだな……。その1人つてのがカシウスの旦那のことだぞ。」

エステルの答えに呆れたジンはカシウスの驚くべき事実を説明した。

「ええ――つ！？ま、まさかヨシュアもしつてたんじゃないわよね？」

「ゴメン、実は知つてた。5年前に、共和国での事件を解決してそうなつたみたいだね。」

「リフィア達は？」

「余達はファーミシルスが集めている情報で知つていた。あ奴は大陸全土で名のある軍人や遊撃士の情報を全て集めたからな。級まで

は覚えてなかつたが、お前の名があつた事は思い出したぞ。”不動

”のジン。”

「ハツハツハ。”大陸最強”と名高いメンフィルに名を知られてゐるなんて、光榮な事だな。」

不敵な笑みを浮かべて言つたリフィアの言葉を聞いたジンは笑つて答えた。

「はあ、もう……。いいかげん怒る氣もしないわ。王国軍大佐だの、陰の英雄だの剣聖だの、S級遊撃士だの……。そんなに凄かつたんだったらとつと帰つて、

今回の事件も解決してくれりやあいのに……」

「わあ……お祖父ちゃんつて凄いんだ！早く会いたいな！」

一方エスティルはさらに知つたカシウスの事実に呆れて溜息を吐いた後、この場にいないカシウスへの恨みごとを呟いた。一方ミントはカシウスに早く会いたくなつた。

「はは、その通りかもしれんな。そもそも、あの旦那がいたらここまで事件が大きくなる前にクーデターを潰していたのかもしれん。」

「…………」

「ヨシュア、どうしたの？」

ジンの言葉を聞き耳を伏せているヨシュアに首を傾げたエスティルは尋ねた。

「……少し妙だと思つてね。一連の事件は、全部父さんが旅立つてから起つたことだ。まるで、父さんの留守中を狙つてクーデターを起こしたような……そんな印象すら感じるんだ。」

「あ……」

「ふむ、旦那が帝国に向かつたのもクーデター計画の一環だつた……。つまり、そう言いたいわけか？」

ヨシュアの推測を聞いたジンは尋ねた。

「……いえ。さすがに考えすぎでしょう。あの父さんを、気付かせないよつに誘導するなんて可能とは思えない……。よほど、父さんの動きを把握してその裏をかける人物じゃない限り……」

「まあ。旦那の裏をかけるなんて例の大佐にも無理だりうよ。多分、2つの事件が偶然に重なつただけだらうな。」

「いずれにせよ、頼みの柱たるカシウスさんの力は借りられません。ですから、私も覚悟を決めました。これより遊撃士協会・王都支部は緊急体制に入りたいと思います。」

「き、緊急体制つて……」

エルナンから出た言葉を聞いたエステルは何をするかわからなかつた。

「何と言つても、女王陛下直々のご依頼です。規約第三項、『国家権力に対する不干涉』の枷かせはこの時点で無くなつたわけですが……。それでも軍とギルドでは根本的な戦力が違います。ジンさんはもちろん、王都にいる他の遊撃士全員にも協力していただきましょう。」

「なるほど……。確かに、情報部とケンカするくらいならそのくらいの戦力は欲しいわね。」

そしてエルナンの説明を聞いたエステルは納得した。
「できれば、他の国内支部にも協力してもらいたいのですが……。今日になつて、関所や発着場が軍によつて完全に封鎖されました。テロリスト対策という名目です。」

エルナンは真剣な表情で現状を説明した。

「ええっ！」

「実質上の戒厳令かいげんれいですね……」

「いよいよ、敵さんの動きも本格化してきたつてことだな。」

グランセルの現状を知つたエステルは驚き、ヨシュアやジンは真剣な表情になつた。

「おそらく、潜伏中の親衛隊や我々の動きを封じるつもりでしう。人質救出は、手持ちの戦力だけで行うしかありません。……そうだ。貴女達は今後どうするのですか、リフィア殿下。」

自分の推測をエステル達に話したエルナンはリフィア達を見て、尋

ねた。

(おい、今”殿下”って言わなかつたか?)

(うん……今まで黙つてたんだけど、リフィアとプリネットメンフィルの皇女様なんだ。)

(そりだつたのか!?)道理で”戦妃”と親しい訳だ……)

リフィアの事を小声でエステルに尋ねたジンは驚いた。

「もちろん、余達も参加するに決まっているだろう!善政を敷いているアリシア女王に剣を向ける愚か者達は余が裁きの鉄槌を与えてやろう!それにリベル王家は余達メンフィルにとつても恩がある相手だ。見過ごす事はできん!」

「よろしいのですか?メンフィルは静観するのでは?」

「それはあくまで”国”として動かない事だ。一個人が動く事に関してはリウイは何も言つてなかつたしな!」

念を押すよつに尋ねるエルナンにリフィアは胸を張つて答えた。
「ま、ここまで関わつたんだし、付き合つて上げるよ。それに遊べるしね……キヤハッ」

「微力ながら私の力もお使い下さい。」

「もちろんあたしも協力させて下さい。……それにあたしとミントちゃんだって、戦う理由はあります。」

「そうだよ!孤児院を火事にして、先生を襲つた人達……ミント、絶対許さない!」

「ありがとうございます。お言葉に甘えて頼りにさせて頂きます。」
遊撃士でないリフィア達の申し出にエルナンは表情を明るくしてお礼を言つた。

「ところで、人質が捕まつてるのは具体的にどこか見当がつきそう?」

「そうですね、先程から色々と考えてみたのですが……。やはり一番怪しいのは『エルベ離宮』だと思います。」

エステルの疑問にエルナンは少しの間考えた後、推測を答えた。

「『ヒルベ離宮』……。森の中にある王家の建物ね。」

「可能性は高そうですね。テロ対策といふ名目で特務兵たちが使つていたし……。それに、王族の女性をレイストン要塞のよつたな場所に監禁はできないと思います。」

「ただ、相手が軍なだけに確実な情報が欲しいところだな。間違いでしたで済む相手じやない。」

「ええ……その通りです。どちらにせよ、王都にいる他の遊撃士たちをここに集めなくてはなりません。そこで、彼らに声をかけながら情報を集めていただけませんか？たしか、エスティルさんたちは雑誌社の記者さんとお知り合いだったはずですね？」

エスティル達の言葉に頷いたエルナンはエスティルに尋ねた。

「あ、ナイアルのことね。」

「確かに、何か情報がないか聞いてみた方がよさそうだね。それと、潜伏中の親衛隊にもできれば協力を要請したい所です。こちらの線も当たつていただけると助かります。」

「ということは……シスターになりすましているコリアさんに連絡を取るのね。」

「紹介状の件で助けてもらつたし、一度報告した方がよさそうだね。じゃあ、大聖堂も訪ねてみようか。」

「王都にいる他の遊撃士はクルツさん、グラツィさん、カルナさん、アネラスさんの4名です。酒場や、普段使うお店、あとホテルなどにいると思います。見かけたら、ここに集まるよう伝えてください。」

「うん、オッケー！」

「それでは早速、出かけてきます。」

そしてエスティル達はギルドを出た。

（王都グランセル・南街区）

「あつと、そうだわ。リフィア達に頼みたい事があつたわ。」

「ん？なんだ？」

ギルドを出てすぐに立ち止まつたエステルはリフィア達に頼み「…」
がある事を思い出した。

「ちょっと、耳を貸してくれない？」

「ふむ？」

そしてエステルはリフィアに小声である頼み「…」を耳打ちした。

「本当に奴はそう言ったのか？」

「うん！ いつでも声をかけてくれって！」

「全く……相変わらずそういう事に関しては鼻が利くのだな、あの

戦闘狂は。」

（？）エステルさん、何をリフィアさんに頼んだのでしょうか？

（まさか……）

（ん~）エヴリーヌの遊び相手が取られなきゃいいんだけどな……

呆れて溜息を吐いているリフィアを見てツーヤは首を傾げ、プリンセスやエヴリーヌは察しがついた。

「じゃあ、お願ひね！」

「うむ！ プリネ、エヴリーヌ、ツーヤー行くぞ！」

「はい。」

「はいはい。」

そしてリフィア達はどこかに行つた。

「ねえ、ママ。リフィアさん達、何をしにどこかに行つたの？」

「すぐにわかるわ ジャあ、行きましょうか~」

「はーい~！」

「（なるほど……）“あの人”か。確かに“あの人”的協力があれば、心強いな……）了解。」

「おう。」

そしてエステル達もクルツ達やユリアへの協力、ナイアルから情報をもらうため行動を開始した……

1590

第147話（後書き）

感想お待ちしております。

第148話（前書き）

今日は奮発してもう1話更新です。

その後エステル達はナイアルやコリアを探したが、出会えず、クルツ達を探して、ギルドに集まるよう伝えた。クルツに伝えた時、クルツの様子があかしくなったがジンのお陰で元通りになり、事情を聞くとなんとクルツがカシウスの頼みで情報部を調べていた事や『ゴスペル』の送り主 Kであり、送り相手であるRがラッセル博士である事が判明したが、何故かゴスペルを送った直後のクルツの記憶がなくなっているという謎だけ残つた。そしてエステル達はギルドに向かつた。

（遊撃士協会・グランセル支部）

「他の遊撃士は全員集合したようですね。記者さんと、親衛隊の方には何とか連絡はつきましたか？」

ギルドに戻つて来たエステル達を見て、エルナンは尋ねた。

「残念だけど……両方とも連絡がつかなかつたの。」

「ですが、必要な情報はだいたい集まつたと思います。」

エステルとヨシュアはリベル通信社ではクローディア姫がエルベ離宮に”保護”されている事とナイアルがさらに情報を手に入れるためにエルベ離宮に向かつたまま消息不明になつた事、大聖堂ではコリアが出て行つた事を説明した。

「なるほど……。クローディア姫がエルベ離宮にいるのは間違いないさそうですね。親衛隊の方は残念ですが、捕まつていらない事が判つただけでも良しとしましよう。」

「それじゃあ、早速始めるかい？」

「ええ……。そういうればリフィア殿下達の姿が見当たりませんが……」

「リフィア達には別の用事を頼んでいるわ。多分、もうすぐ帰つて

来ると思うわ。」

「別の用事？一体それはなんなんですか？」

エスティルの答えを聞いたエルナンは首を傾げて尋ねた。

「後で説明するわ！」

そしてエスティル達はエルナンと共にクルツ達が集まっている部屋に上がった。

「……以上が、現在進行している情報部のクーデター計画の詳細です。それを踏まえた上で王都支部は、女王陛下の依頼をお受けしたいと思っています。」

エルナンは詳しい事情や経緯をクルツ達に説明した。

「まさか、そこまで大それた陰謀が進行していたとは……。見抜けなかつた自分の不甲斐なさが腹立たしい限りだ。」

「確かに、あの特務兵つて連中うさん臭そうだつたけど……。リシ

ヤール大佐が格好良かつたからつい信じちゃつてたみたい……」

「しかも、空賊事件やダルモア市長まで裏から操つていたとはねえ……。ずいぶんと遊撃士あたしらを舐めてくれるじゃないか、……」

「こりゃあ、落とし前を付けないとどうにも收まりがつかねえな……」

エルナンから事情を聞いたクルツは自分を責め立て、アネラスはリシャールを信用していた事を後悔し、カルナやグラツツは怒りを抑えきれないでいた。

「それでは皆さんも、協力して下さるとここと構いませんか？」

「もちろんだぜ！」

「遠慮なく口キ使つておくれ。」

「借りは……返させてもらひ。」

「あたしも喜んで！」

エルナンの確認にクルツ達は力強く頷いた。

「うわ～。凄いことになってきたわね！」

「うん……ですがに頼もしい限りだね。」

「これなら、絶対お姫様を助けられるね！」

腕利きの正遊撃士達が参加する事にエスティルやヨシュアは心強く感じ、ミントは救出作戦が上手いくと思った。

「それでは具体的な救出作戦を練ることにしましょう。人質の命がかかっている以上、あまり悠長な作戦にはできません。多少、力押しになりますが拠点攻略の形を取りたいと思います。」

「侵入ルートを探す時間はないし、確かにそれしか方法はなさそうだな。」

「しかし、離宮を攻略するとしたら役割分担はどうするつもりだい？」

エルナンの作戦にグラツィは頷き、カルナは疑問に思つた事を尋ねた。

「……陽動班と突入班の一二手に分けるのが確実だろう。何らかの騒ぎを起こして離宮にいる戦力を引き付けてからそのスキに別動隊が突入する……」

「しかし、相手は王国軍の中でも精鋭にあたる情報部の特務部隊だ。欲を言えば、陽動時の要撃班と突入時の攬乱班も欲しいところだな。」

「カルナの疑問にクルツは自分なりの作戦を提案した。またジンは戦力が足りない事を指摘した。

「えつと……それってどういうこと？」

「陽動して追いかけってきた敵を待ち伏せして叩くのが要撃班……。敵を混乱させて、突入をやりやすくするのが攬乱班だね。」

理解できていない様子のエステルにヨシュアは説明した。

「なるほど……。でも、この人数じゃあそんな役割分担は無理じやない？」

「ええ……残念ながら。他の支部にも連絡したのですが、発着場と関所が封鎖されているため遊撃士がこちらに来れない状況です。」

エスティルの指摘にエルナンは頷き、現状の戦力では厳しい事を説明

した。

「そつか……。じついう時に、シェラ姉やアガットがいてくれたらな……」

「……ジンさんの言う通り、陽動と突入の2班だけではあまりにも危険が大きすぎます。何か別の案を検討した方がいいかもしれません。」

エルナンが別の作戦を考えようとした時、下の階から声が聞こえて来た。

「いや、足りない戦力は我々が補わせていただこう。」

声の主 シスター姿のユリアが下の階から上がって来て、エスティル達の前に姿を現した。

「あ……！」

「ユリアさん……！」

「おお、周遊道で会つたあの時のシスターじゃないか。」

「ここにちは、シスターさん！」

ユリアの登場にエステルやヨシュアは明るい表情をし、ジンは驚き、ミントは挨拶をした。

「お初にお目にかかる。王室親衛隊、中隊長。ユリア・シユバルツ中尉だ。あなた方の作戦に親衛隊も協力させてほしい。」

そしてユリアはエルナンに親衛隊の現状を説明した。

「なるほど……。お話はわかりました。あなたを含めた9人の隊士が協力してくださるわけですね。」

「皆、それぞれの方法で王都に潜伏している最中だ。だが、1時間以内に全員を集結させることができるだろう。」

「そ、それはいいんだけど……。ユリアさん、どうしてあたしたちが人質を救出しようとしてるって分かったの？」

「僕たち、それを伝えようと/orして大聖堂に行つたんですけどユリアさんには会えなかつたんです。」

遊撃士協会の行動を最初からわかつていたユリアに驚いたエステル

とヨシコアは尋ねた。

「そ、うか……済まなかつたね。ただ、君たちが陛下から依頼を請けたことは知つていて。それも昨日の夜のうちにね。」

「昨日の夜！？それって、あたしたちが女王様と会つたすぐ後つてこと？」

ユリアが昨夜の時点でエステル達が依頼を受けた事を知つていた事にエステルは驚いた。

「ねえねえ。ユリアさんはどうやつてママ達が女王様に依頼された事を知つたの？」

「うーん。何と言つたらいいのか……」

ミントに尋ねられたユリアは言葉を濁した。

「まあ、そいつはいいだろう。大事なのは、要撃班と攪乱班が何とか確保できるつてことだ。」

「ええ、これで作戦の成功率が跳ね上がりました。早速、役割分担を決めてしまいましょう。」

ジンの言葉に頷いたエルナンが具体的な役割分担を説明しようとした時

「余達を忘れてもらつては困るぞ！」

リフィア達が下の階から上がって来て姿を現した。

「リフィア！」

リフィア達の登場にエステルは表情を明るくした。

「あ、貴女はリフィア殿下！？どうしてここに……？」

一方リフィア達の登場にユリアは驚いた。

「お前が名高いリベルの若き将、ユリア中尉か。僭越ながら余達も救出作戦に参加する事になつたから、よろしくな。」

「え！？よ、よろしいのでしょつか？これは我々リベルの問題なのに……」

リフィアの申し出にユリアは驚いて尋ねた。

「私達が参加するのは一個人として、貴女達リベルに協力したい

という意思なので気にしないで下さい。」「

「貴女は……？」

プリネの正体がわからなかつたユリアは尋ねた。

「申し遅れました。……私はメンフィル皇女、プリネ・マーシルン

です。父は”霸王”リウイ、母は”^{プリンセスオブリンクセス}闇の聖女”ペテレーネです。」

「あ、貴女があの”姫君の中の姫君”……！無礼をしてしまい、申し訳ありません！自分は王室親衛隊、中隊長、ユリア・シユバルツと申します！”姫君の中の姫君”と名高い貴女に会えて光榮です！」

プリネの正体を聞いたユリアは驚いた後、敬礼をした。

「えーーーー！プリネちゃんって、皇女様だったの！？それもあの

”剣皇”と”闇の聖女”的だなんて……！」

「これは驚いたね……！ただ者ではないと思つたけど……！」

一方プリネの正体を知つたアネラスやカルナは驚いた。

「ん？ そう言えればその隊長さんがリフィアの事を”殿下”って呼んだけど、まさか……」

そしてグラツィはコリアのリフィアに対しての呼び方に気付き、恐る恐るリフィアを見た。

「フム。これから共に戦う戦友となるのだ。余達の事も知つておいたほうがいいな。……余の名はリフィア！リフィア・イリーナ・マーシルン！現メンフィル皇帝シルヴァンの娘にして、メンフィルの未来の皇帝！」

「…………メンフィル客将、エヴリース。よろしく。」

「…………ツーヤと申します。プリネ様に仕えております。」

リフィアは胸を張つて答え、エヴリースやツーヤは軽く自己紹介をした。

「なんと……！」

「おいおい、マジかよ！？貴族どころか、皇族じゃねえか！それもメンフィル皇帝の跡継ぎとかとんでもねえ人物じゃねえか！……」

リフィア達の自己紹介を聞いたクルツやグラツィは目を見開いて驚

いた。

「ねえ、プリネ。”あの人”には声をかけてくれた?”
一方エステルはリフィア達を見て、ある人物がいないのを見て、尋ねた。

「ええ。」

「あの、エステルさん?”あの人”とは一体……?」
プリネとエステルの会話に首を傾げたエルナンは尋ねた時

「フフ……それは私の事よ」

下の階から上がつて来た人物 カーリアンがエルナン達の前に姿を現し、口元に笑みを浮かべて言った。

「え―――――――あ、貴女は――！」

「”戦妃”カーリアン殿――――！」

カーリアンの登場にアナラスやコリアは信じられない表情で驚いた。
また、クルツ達も信じられない様子で驚いていた。

「来てくれてありがとう、カーリアン!」

「フフ……言つたでしょ。声をかけてくれたら力を貸すって。」

お礼を言つエステルにカーリアンは口元に笑みを浮かべて答えた。

「あ、貴女も力を貸して下さるんですか……！？」

一方エルナンはカーリアンまで救出作戦に参加する氣でいる事に驚き、尋ねた。

「ええ。目の前に”戦”があると知つてて、ただの見物人でいるなんて”戦妃”の名が泣くわ。これは私個人の我儘だから、国としての迷惑は一切からんでいいから、安心していいわよ ま、リフィア達が世話になつたお礼代わりだと思ってもらえばいいわ

「そうですか……ありがとうございます。”大陸最強”と名高いメンフィル軍の中でも指折りの強さを持ち、カシウスさんを破るほど
の貴女の武……頼りにさせて頂きます。」

「ま、お姉さんに任せなさい」

エルナンの感謝の言葉にカーリアンはウインクをして答えた。

「まさかあの”戦妃”やメンフィルのお姫様達と肩を並べて戦う日が来るなんて思つてもみませんでした……！」

「ああ。だが、これなら作戦の成功率は飛躍的に上がるな……！」
カーリアン達が味方になつた事にアネラスは興奮し、クルツは救出作戦の成功の確率が飛躍的に上がる事に気付き、明るい表情をした。
「それとエルナンさん。戦力ならさらに増やせますよ？」

「え？ それはどういう事ですか？」

プリネの申し出にエルナンは驚き、尋ねた。

「…………ペルル、マーリオン、ファニー！――！」

そしてプリネはペルル達を召喚した。

「あ、なるほど！ その手があつたわね！ パズモ、サエラブ、テトリ、ニル！ みんな、出て来て――！」

プリネの行動を見てエステルも自分が契約している精霊や使い魔達を召喚した。

「――――――なつ！？」

使い魔や精霊、天使の召喚にエルナンやユリア達は驚いた。
「みんな！ 人質になつている人達を助けるためにみんなの力を貸してちょうだい！」

「戦いが苛烈になる今こそ、みんなの力を私達に貸して下さい。
(ええ！)

「ボクに任せて！ それにこの国はボク達”闇夜の眷属”を受け入れてくれているんだから、恩は返さないとね！」

「お任せ……下さい……」

「フフ、国の平和のためにこの力を使う日が来るとは思いませんでした。私の力でよければ、存分にお使い下さい。」

「どうやら早速ニルの力が必要になりそうね。一杯活躍するから、期待して！」

(フツ……人間、幻獣、精霊、天使、闇夜の眷属の協力……ウイル

達と共に戦った時を思い出すな……)

「あら、奇遇ですわね。わたくし私も同じ事を考えましたわ。」

エステルやプリネの頼みに使い魔達は力強く頷いた。また、サエラブとフィニーリイはかつての仲間達と戦った時を懐かしそうに思い出していた。

「これで戦力は7人増えました。これなら別グループに分けての陽動や考えていた陽動グループの援護が可能だと思います。」

「え、ええ。とにかくこれで作戦の成功率がさらに跳ね上がりました。……成功率は恐らくほぼ100%に近くなつたと思います。先ほど話が途切れましたが、役割分担を決めてしまいましょう。」
プリネの答えにエルナンは頷いた後、ユリアを見た。

「了解した。まずは陽動だが……。これは我々親衛隊のうちの5人のメンバーが担当しよう。」

「確かに、指名手配中のあんたたちが現れたとなれば敵も引っかかる可能性が高いな。」

「ああ、そういうことだ。具体的には周遊道の外れに停泊している情報部の特務飛行艇を狙つつもりだ。」

ジンの予想に頷いたユリアは説明を続けた。

「特務飛行艇つて……。特務兵たちが乗つてたアレ!?」

「周遊道の外れに停めてあつたんですか……」

「そういや、封鎖されて入れなかつた場所があつたな……」

「だからあの人達、いつも以上に怖い雰囲気を出していたんだ……」

ユリアの情報にエステルやヨシュアは驚き、ジンやミントは納得した。

「私の調査だと、数名の特務兵が常に見張りをしているようだ。これを叩いて、離宮に連絡させて応援部隊をそちらに向かわせる。」

「あ、なるほど……。その応援部隊を、要撃班が返り討ちにするってことね?」

ユリアの説明を聞いたエステルは次にする事を言葉に出した。

「ならば、要撃班は私たちが引き受けた方がよさそうだな。」

「たしかに、森での戦闘は魔獣退治で慣れっこだからな!」

「銃使いもここにいるし……。うつてつけじゃないかねえ。」「まさに適材適所だと思います。」

エステルの言葉を聞いたクルツ達は要撃班のメンバーになる事を申し出た。

「じゃあ私は要撃班に入るわ。そっちの方が敵が一杯来そうだしね

」

「ならば余、エヴリーヌ、プリネ、ツーヤも要撃班に加勢する！力

ーリアンばかりに活躍させる訳にもいかぬしな！3人共、よいな？」

「エヴリーヌは一杯遊べるならなんでもいいよ。キヤハツ」

「要撃班に敵の戦力が最も集中しますからね。わかりました。ツーヤ、私から離れないでね？」

「はい。絶対にご主人様のお傍を離れません。」

そしてカーリアンやリフィア達が要撃班に参加する事を申し出た。

「ペルル、マーリオン、フィーリイは私達を含めての要撃班の援護をお願いします。」

「任せて！」

「……後方からの援護は……お任せ……下さい……」

「我が槍と魔術の力を持つて、あの無礼者達を一掃してやりますわ！」

プリネの指示にペルル達は力強く頷いた。

「では、攬乱班と突入班ですが……」

「攬乱班は、陽動班と同じく親衛隊のメンバーが務めよう。その方が、特務兵たちの注意を引きつけられるはずだ。」

作戦内容の続きを考へようとしたエルナンにコリアは答えた。

「……ということは……」

「僕達が突入班として人質を解放するわけですね。」

ユリアの答えを聞き、エステルとヨシュアは自分達が何をするか察しがついた。

「じゃあ、パズモ達は攬乱班の人達の援護をしてあげて。4人共期

待しているわよ！」

（援護は私の得意分野よ！任せて！）

（フツ……撃乱は我にとつても得意分野の内に入るな……クク、
”獣”の真の恐ろしさ……敵に刻みこんでくれる！）

「わかりました。エステルさんも気をつけて下さい。」

「治癒魔術ができるニルとテト리는状況に応じて攻撃と回復に移る
わ。その方が効率がいいでしょ。」

エステルの指示を聞いたパズモ達はそれぞれ力強く頷いた。

「突入班はみんなのお膳立てがあつて初めて成立する大切な役割だ。
気合いを入れる必要があるぜ。」

「そ、そう言われるとちょっとプレッシャーかも……」

ジンに言われたエステルは緊張を感じた。

「フフ……。そう心配することはないさ。」

「何といつても武術大会の優勝メンバーだからねえ。」

「敵の大部分は私たちが何とかしよう。君たちは人質救出だけを考
えてくれればそれでいい。」

「ミント、ママ達のために一杯頑張るね！だから一緒に頑張ろう、
ママ！」

緊張しているエステルにクルツやアネラス、ユリアにミントが励ま
しの言葉をかけた。

「ユリアさん……先輩たち……ミント……」

「僕たちだけで人質を救うわけじゃない。力を合わせればきっと大
丈夫さ。」

「うん……！よし！やるつきやないわよね！」

ヨシュアの言葉に頷いたエステルは気合を入れ直した。

「おつと、いい気合いだな。」

「これで作戦会議は終了ですね。作戦決行は夜……。闇に紛れてが
望ましいでしょう。一度作戦が始まってしまえば市街地に戻る余裕
はありません。今のうちに、足りないものを揃えてきてはいかがで

すか？」

「あ、それもそうね。」

「私は、王都に潜伏している部下たちに連絡を取つてこよ。」

「それじゃあ、一旦ここで解散ですね。」

こうして救出作戦の会議は終わり、エスティル達は一端解散して、決行の時を待つた。

一方エスティル達が救出作戦を開始する前に、歴史の裏に隠れた知られざる戦いの時が迫っていた……

第148話（後書き）

ところ訳でみなさんも予想していたと思いますがカーリアン、エス
テル達と合流＆参戦です！次回はエステル達の話ではありませんが、
幻燐、軌跡ファンジー待望のキャラ達が再登場します！……感想お
待ちしております。

外伝～夕暮れの惨劇～前篇（前書き）

ついにみなさんお待ちかねのあの2人が再登場します！

外伝「夕暮れの惨劇」前篇

エステル達の作戦開始前、夕方に差し掛かった頃に大使館で働く女性 イリーナとイリーナの買物に付き合っていたメンフィル皇女 レンが大使館への帰り道を歩いていた。

「ロレント郊外・エリーズ街道・夕方」

「ハア……」

「？イリーナお姉さん、どうしたの？そんな溜息を吐いて。」

イリーナと一緒に歩いていたレンはイリーナの溜息を聞き、尋ねた。

「レン様……す、すみません。お見苦しい所をお見せしてしまって

……」

「うふふ……やっぱりパパ達やレンのお世話はプリネお姉様と比べれば勝手が違つて、大変かしら？」

「滅相も御座いません！私の希望で大使館に働かせてもらっているのに、そのような恐れ多い事、思つた事もありません！」

口元に笑みを浮かべて尋ねたレンを見て、イリーナは慌てて否定した。

「あら。そんな寂しい事を言わないでよ。イリーナお姉さんがここで働き始めて、結構経つているわよ？イリーナお姉さんも、今ではメンフィルにとってもなくてはならない人物だと思うわ。」

「……ありがとうございます。レン様からそのように思つて頂けているなんて、光栄です。」

「……前から思つていたんだけど、その呼び方……なんとかならないの？」

「え……？」

レンの指摘にイリーナは首を傾げた。

「”レン様”だなんて、他人行儀に聞こえるから、レンは嫌だわ。

もつとほかの呼び方はないのかしら?」

「え……でも、兵士やほかの使用人の方達と同じ呼び方をしていると思ひのですが……」

「フウ……レンは貴女にはそういうふうに言われたくないって言つていいの。」

イリーナの答えを聞いたレンは溜息を吐いた後、説明した。

「え? それは一体どういう意味ですか? ……?」

「うふふ、それは秘密よ(さすがにレンの未来のママの一人になるからだなんて言えないしね)」

首を傾げて尋ねるイリーナに、リウイ達からゼムリア大陸に来た真の目的を聞かされ、またリウイの正室 イリーナ・マーシルンの肖像画を見た後、イリーナの正体を察していたレンは笑つて誤魔化した。

「そんな事より、今は呼び方よ。なんとか変えてくれないかしら?」

「えつと……では”レンさん”はどうでしょうか?」

「うへん……まだ硬さが抜けていないけど、まあいいわ。これからはその呼び方でお願いね。後、口調ももう少し碎けた感じでお願いね」

「…………わかったわ。これでいい? レンさん。」

「うふふ……それで、どうしてさつき溜息を吐いたの? 疲れている訳ではないでしょ?」

イリーナの答えに満足したレンは尋ねた。

「そ、それは……」

レンに尋ねられたイリーナは言つのを躊躇つた。

「何か言いにくい悩みでもあるのかしら? レンでよかつたら聞くわ。臣下の悩みを聞くのも上に立つ者として当然の事だしね」

「…………あの、じゃあお言葉に甘えて聞いて貰つてもいいかしら?」

「…………その、みなさんには秘密という事でお願いしたいのだけど……」

「……」

「ええ。レンの心の中だけに秘めておくわ。メンフィル皇女レン・マーシルンの名の誇りにかけて、約束するわ。」

「ありがとう。…………実は…………」

そしてイリーナは幼い頃リウイと初めて出会った瞬間、好きになってしまい、時間が経つごとにどんどんリウイへの愛情が膨らんでいく自分に悩んでいる事を説明した。

「ふ～ん…………それって要するに一日惚れって事じゃない。ま、パパならしょうがないか～。パパ、とっても素敵だものね。（うふふ……どうやら、イリーナお姉さんがイリーナ“ママ”になる日が近いかもしねないわね）」

「レ、レンさん……笑い」とではないわよ…………私のような使用者が陛下に恋をするなんて、恐れ多いわ……それに年だって、凄く離れているし、カーリアン様やペテレーネ様だって許さないでしそし…………」

「あら。身分や年齢、ママ達の事は気にしないでいいと思つわよ？パパは不老不死の存在なんだから。ママ達だってみんな懐が広いから、イリーナお姉さんがパパの側室になる事も理解してくれると思うわ。身分だって、ティアお姉様のママは平民の神官だつたけど、特に責められるような事はなかつたと聞くわ。…………いつそパパに全てを告白して、抱かれたら？それで運良く子供ができたりしたら、側室にしてくれると思うわよ？パパ、ああ見えて子煩惱な人だから、中絶しろなんて酷い事は絶対言わないと思うわ。」

「な、ななななっ…………！？レ、レンさん！貴女、自分が何を言つているか分かっているの！？」

レンの口から出た信じられない提案にイリーナは顔を真っ赤にして、声を荒げて言つた。

「うふふ……もしかして側室じゃ不満？だったら正室になるしかないわね。幸い、パパの正室の座は空位のままだし。」

顔を真っ赤にしているイリーナを見て、レンは悪戯が成功したような小悪魔な笑みを浮かべて言つた。

「そういう問題ではありません！だ、抱かれるとか……」「、子供が
できたりとか……そ、そんな知識、一体どこで手に入れたの！？」

「あら。そういう知識は皇女として、知つておかないと駄目でしょ
う？レンも大人にちょっとずつ近付いているから、ママが教えてく
れたわ。イリーナお姉さんだって、レンのママからプリネお姉様と
一緒に教えてもらつたでしょう？」

「そ、それはそうだけど…………」「

反論ができなくなつたイリーナはまだ納得してない表情をしていた
が、責めるのをやめた。

「ま、レンはイリーナお姉さんの初恋、応援しているわよ」「

「ハ、ハア……ありがとう……でいいのかしら？」「

レンの励ましに聞こえる言葉を聞いたイリーナは戸惑いながらお礼
を言つたその時

「フン……まさかこんな小娘がメンフィル皇女だつたとはな
その娘を確保するつもりが、皇族まで一緒にいるとは…………ついで
いるな。」

なんと特務兵達がレン達の正面に現れた。

「！」「

「どこのどなたかしら？（……あの姿は…………へ…………パパの心配
が現実になつたみたいね…………）」

特務兵達を見たイリーナは身体が強張り、特務兵達の正体がすぐに
わかつたレンは知らないふりをしながら尋ねた。

「我等の正体を知る必要はない。……大人しく我らについて来ても
らうぞ、小姑娘。貴様等を手土産にして今までの失点を帳消しにし
てくれる。」「

「レ、レンさん……！」

「…………ロレントに逃げるわよ。さすがに街中で誘拐とかできない
だろうし。その後、ギルドにかくまつて貰つてパパ達に助けを求める
ればいいと思うわ。」

銃を構えた3人の特務兵達と4匹の軍用犬らしき狼の魔獣と共に現れた隊長らしき人物の言葉を聞いたイリーナはレンを見、レンは冷静に答え、イリーナと一緒にロレントに逃げようとしたその時

「させると思つていいのか？」

「！」

近接戦闘を主体とした5人の特務兵達がレン達の後方にいつの間にかいた。

「ふうん……レンの事を知つていいのなら、こんな事をしたら、自分達がどうなるかわかつていいのでしよう？」

退路が防がれたにも関わらず、動じないレンは冷静に尋ねた。

「ふん……閣下の崇高なる計画が成功すれば、メンフィルも恐れるに足りん！陰で護衛しているメンフィル兵達の存在が厄介と思ったが、運がいい事に何故かいないみたいだからな……助けを期待しても無駄だぞ。」

レンに指摘に特務兵の隊長は鼻をならし、得意げに答えた。

（……レンがここに残つて時間を稼ぐから、貴女は大使館に戻つて助けを呼んで、イリーナお姉さん。）

（そ、そんな！？使用者の私の事なんか気にしないでいいわ！…

…それにこの包囲網をどうやって抜けるの……？）

（それは大丈夫よ。こんな時のために持たしてもらつている物があるから。）

（え……？）

「何をコソコソ相談をしている。逃げ出そうと思つても、無駄だぞ。」

「レンとイリーナの小声の相談を見た隊長はレン達を睨んで言った。

「うふふ……異世界に関して何の知識もない癖にそんな事は言わないう方がいいわよ？恥ずかしい思いをするだけだし。」

「な、なんだと！？」

「小娘が……！閣下の手足である誇り高き我等を侮辱するか……！」

レンの挑発に隊長は怒り、特務兵の一人が怒りを抑えきれない様子で言つた。また、他の特務兵達も殺氣立つ。

「うふふ……レンは当然の事を言つたまで……よ！」

そしてレンは片方につけている耳飾りを外して、耳飾りに魔力を込めてイリーナに放り投げた！

「レンさん、何を……」

すると耳飾りは光を放ち、レンの行動に戸惑つてゐるイリーナの姿をその場から転移させた。

「なつ！？」

イリーナが消えた事に特務兵達は驚いた。

「うふふ……これで皇女であるレンに護衛の兵士達がいなかつた理由がわかつたでしよう？」

「クツ……異世界の技術か……！小瀕な真似を……！」

レンは不敵に笑い、イリーナがいなくなつた理由を察した隊長はレンを睨んだ。

“帰還の耳飾り”……”飛翔の耳飾り”の改良版で、登録した場所にすぐに戻れる非常帰還用として重用できるけど、唯一の欠点は一回限りしか使用できない事ね。これが何度も使えるようになつたら、便利になるんだけどな……”

隊長の睨みに気にせず、レンはイリーナに投げた同じ形のもう片方の耳飾り メンフィル帝国が開発した魔導具、”帰還の耳飾り”を触り、現在の状況からは見当違ひな事を呟いていた。

→メンフィル大使館・正面玄関へ

一方その頃、レンによつてイリーナが大使館の正面玄関に転移して来た。

「え……こには……大使館！な、なんで？どうなつているの……？」
大使館に転移したイリーナはいきなり変わつた周囲の風景を見て、混乱した。

「あら、イリーナさん。お帰りなさい。」

そこにペテレー・ネがイリーナの姿を見つけて、イリーナに近付いて來た。

「ペ、ペテレー・ネ様！大変です！怪しい人達がレン様を誘拐しようとして……！それでレン様が助けを呼んでほしいと……！」

「……一度落ちついて、イリーナさん。」

「は、はい。すみません……」

ペテレー・ネに諭されたイリーナは深呼吸をした。

「……やけに騒がしい声がすると思ったら、お前だつたか。お前が声を荒げるなんて、珍しい事もあるものだな。」

さらにリウイもイリーナに近付いて來た。

「へ、陛下……」

「リウイ様。」

「それで？怪しい者共がレンを誘拐する……等が聞こえて來たが、何があつた？」

「は、はい。実は……」

そしてイリーナはリウイ達に事情を話した。

「……申し訳ありません！レン様を置いて、私だけこちいらに戻つてくるなんて……どんな罰でも受ける所存であります……！」

事情を話したイリーナはリウイ達に深く頭を下げた。

「……気にする必要はない。それをしたのは他ならぬレンだ。俺もレンの判断に賛成だ。罰も何もないから、安心しろ。」「で、ですが……！」

「イリーナさん。リウイ様もおつしゃいましたが、貴女を逃がしたのはレンの意思です。だから、そんな事をおつしゃらないで下さい。」

「ペテレー・ネ様……」

レンを置いて自分だけ逃げて來た事に罪を感じていたイリーナにペテレー・ネは優しく諭し、ペテレー・ネの言葉を聞いたイリーナはペテ

レーネを見た。

「お前は俺達に賊が現れた事を知らせるという重大な役目を果たした。それだけで十分だ。……無事に戻つて来て安心したぞ。」

「陛下……」

自分の身を案じたりウイにイリーナは頬を染めた。

「……すぐに部隊を街道に送る。イリーナ、賊の特徴や賊が街道のどのあたりに出現したか教えてくれ。」

「は、はい！」

リウイの言葉に気を取り直したイリーナはリウイに特務兵達が現れた大まかな場所を伝えた。

「報告御苦労。お前は普段の業務に戻つて構わん。」

「は、はい！……それでは失礼します。」

リウイの指示にイリーナは答え、いつもやつている仕事に戻るために、リウイ達から離れていった。

「リウイ様。イリーナさんの話では賊の狙いはイリーナさんで、レンの事はついでだったようですが……」

イリーナの姿が見えなくなつた後、ペテレーネはリウイに尋ねた。
「特徴からして賊は恐らく特務兵だろう。レンの存在はこちらの世界ではほとんど知られないようにしていたからな。……それにしてもまさか、本当にイリーナを狙つて来るとはな……」

「…………いかがなさいますか？」

主君からあふれ出る鬪氣と怒りを感じたペテレーネは次の答えはわかつていたが、尋ねた。

「我が半身に手を出そうとした事……奴らに死という後悔を刻み込むつもりだ。……まあ、俺達が行つた頃には全てが終わつているだろうがな……ファーミシルスを呼んで来てくれ。」

「はい。」

そしてリウイは部隊を編成した後、ファーミシルスと共にレンと特務兵達がいる場所に向かつた。

（ロレント郊外・エリーズ街道）

「クツ……ならば貴様だけでも、捕らえてくれるー行くぞ、お前達！」

「イエス、サー！！」

顔を歪めた隊長は気を取り直し、特務兵達に指示をした。

「かかれつ！」

「ハツ！」

そして特務兵達はレンに襲いかかつたが

「ハアツ！！」

レンは異空間から自分の身体と変わらないほどの大きな鎌を出して震い、周囲に衝撃波を出した！

「グワアツ！？」

レンが出した衝撃波によつて襲いかかつて来た特務兵達は吹つ飛ばされた！

「なつ！？」

レンの攻撃に隊長は驚いた。

「うふふ……忘れたの？レン達、マーシルン家はイーリュンの神官であるティアお姉様を除いて、みんなある程度の武は持っているわ。

」驚いている様子の隊長にレンは凶悪そうな笑みを浮かべて答えた。

「さて……改めて自己紹介をしましちゃうか。メンフィル皇女レン・マーシルン。二つ名は”殲滅天使”。……これよりメンフィルに仇名す愚か者どもの殲滅の執行を開始するわ。覚悟はいいわね？」
レンの見せた無邪気ながらも殺氣が籠つた凶悪な笑顔　それはリウイ達に救われなければ、本来のレンの辿る道で手に入れるはずだった笑顔を特務兵達に向けた。

「クツ……相手は小娘一人だつーかかれつ！！」

「イエス、サー！！」

今ここに、”殲滅天使”による惨劇が始まつた…………！

1616

外伝～夕暮れの惨劇～前篇（後書き）

という訳でついに軌跡シリーズ大人気キャラ、レンの戦闘です！原作以上に強くなつたレン無双となるので、軌跡ファンは楽しみにしていて下さい！レンの2つ名は原作通りにしました！レンの二つ名といえば、”アレ”でしょう！…………感想お待ちしております。

外伝～夕暮れの惨劇～後篇（前書き）

戦闘BGMはVERITAの”宿業”かSCの執行者戦で流れるBGM”Fateful Confrontation”が流れていると思って下さい

外伝「夕暮れの惨劇」後篇

レン対特務兵達。一人のレンに対して数が圧倒的に勝る特務兵達の優勢かと思われたが、実際はその逆だった。幼いながらもプリネ達のように賊の討伐軍やブレア・ド迷宮探索軍に参加し、兵達に見せた強さは強者揃いのメンフィル兵士達も恐怖を持つ強さで、その強さで特務兵達を圧倒していた。

～ロレント郊外・エリーズ街道・夕方～

「ウフフフフフフフ！」

「――「グワアッ！？」」「――」

同時に襲いかかって来た特務兵達をレンは大鎌を振り回して、周囲の敵を攻撃するクラフト・ブラッドサークルを放つて、特務兵達を再度吹き飛ばした。

「クツ……これならビデウだつ！」

「「喰らえッ！」」

接近戦では敵わないと感じた特務兵の一人が銃でレンを攻撃した。また、他の特務兵達も仲間に続くように銃でレンを攻撃した。

「無駄よ。」

しかしレンは武器を持つていらない方の片手から簡易結界を作り出して、襲いかかる銃弾を防いだ。

「クツ……行けッ！」

「――「オン！！！」」

レンの強さに顔を歪めた隊長は軍用犬である狼の魔獣にレンを襲うよう、指示した。指示された魔獣達はレンに襲いかかりつつしたが「凍つけ！！凍結！！」

「――「…………！？」」「――」

レンの放った冷却魔術が魔獣達の周囲に吹雪が発生して、吹雪がや

むと魔獣達は氷漬けにされていた。

「大地の刃よ、我が敵を貫け！ 岩槍！！」

「「「「ガツ……！？」」「」」

レンはさらに地の魔術を続けて放つた！ レンが放つた魔術は氷漬けにされている魔獣達の足元から魔力によつてできた岩の槍が何本も生えて来て、魔獣達を串刺しにした！

「燃え尽きなさい！ 熱風！！」

「「「「ガアアアアアア！！…………」」「」」

そして止めに放つたレンの火炎魔術によつて、魔獣達は炎の竜巻の中で断末魔を上げながら、消滅した。

「バカなつ！？」

「そ、そんな…………軍用犬達があんなにあつさりやられるなんて……！」

自慢の軍用犬達が子供であるレン一人に殺された事に隊長は信じられない表情をし、特務兵達はうろたえた。

「ウフフ…………こんな弱い犬を軍用犬にしているなんて、貴方達の上司も大した事ないわね。」

「こ、小娘がつ！－ぬくぬくと育つて來た貴様ごときが大佐を愚弄するな－－！」

レンの挑発に隊長は顔を真つ赤にして、怒った。

「大佐……ねえ？ リベルで大佐で思い当たるとしたら、リシャール大佐しか思い浮かばないわねえ？」

「－！」

隊長の言葉から特務兵達の上司を推測したレンを見て、隊長はうつかり口を滑らした事に気付き、顔を青褪めさせた。

「グッ…………そこまで知られたからにはただですむと思つた－－我等どころか大佐まで愚弄した事……後悔するがいい！ 総員、死力を尽くしてあの小娘を撃破、そして確保しろっ－！」

「イエス、サ－－！」

隊長の号令を聞き、特務兵達は殺氣立つてそれぞれの武器を構えた！

「食ノルマ」

銃を持つた特務兵達はレンの足を狙つて撃といつとしたが
「させやーつ！」　虚構の撃撃！！！

ノンが放つた衝撃波で

反構の鉛筆

「…………」

攻撃を仕掛けたが

「…………死んじゃえ！」玄武の鎌奪！――

レンが放った地を這う斬撃の衝撃波のクラフト
玄武の鎌撃を喰

らい、攻撃を受けた部分から大量の血が噴出し、地面に倒れた

「クッ
小娘が
！」

「謹子に乗るなよ……………！」

「我等に運びた事、藏書の品だ。」

そしてレンは銃を構え直した特務兵達に暗黒魔術を放つ

「ギヤアアアッ！？」

魔術は命中した特務兵達は悲鳴をあげて地面に倒れた

さらにレンは雷を落とす電撃魔術を地面に倒れている特務兵達に放つた！

地面で呻いていた特務兵達は雷に

「ウフフ……消えちゃえつ！」

地面で呻いていた特務兵達は雷に直撃し、悲鳴を上げた。

そしてレンは止めに自分の指先に物質を消滅させるほどの光をともらせて放つ純粹魔術　死線を雷によつて黒焦げになつてゐる特務

「兵達に放つた！」

「「「ウギヤアアアアアアッ…………」」」

身体中が麻痺して黒焦げになっている特務兵達は避ける事もできず、レンの魔術によつて鎧は焼けこげさせて、絶命した。

「そ、そんな…………！」

仲間の絶命を見て、血を流して倒れている特務兵の一人が信じられない表情で驚き、やがてレンを睨んだ。

「貴様――！よくも我等が同士を！」

「ウフフ……すぐにお仲間の所に送つてあげるわ 裁きの光よ、罪人に光の罰を！……裁きの十字架！……」

特務兵の叫びをレンは凶悪な笑顔で答えた後、神聖魔術を放つた！

「「「「なつ…………！？」」「」「」「」

レンの神聖魔術によつて特務兵達は突如異空間より現れた光の十字架にそれぞれ貼り付けられた！そして十字架は光を走らせた後、爆発を起こした！

「「「「グワアアアアツ！？」」「」「」「」

「うふふ、逃げられないんだから！」「

光の爆発によつて特務兵達は断末魔を上げた。そしてそこに走りながら大鎌を構えたレンが落ちてくる特務兵達とすれ違う瞬間、死神が鎌を振るがごとく大鎌を震つた！その技は敵陣を駆け抜け、すれ違う命を摘み取る”殲滅天使”的処刑技！その名は……！

「それっ！レ・ラナンデス！！」

「「「「ガツ！…………」」「」「」

レンのSクラフト レ・ラナンデスによつて特務兵達は身体を2つに分かれさせられ、絶命した！

「あ、ああ…………！」

一方レンの魔術やクラフトを受けてなく、唯一無事だった隊長は恐怖でその場から動けなかつた。

「さて……と。後は貴方を殺せば、殲滅完了ね イリーナお姉さん

も心配しているだろうし、さつさと済ませてレンが無事だった事を知らせてあげないとね

「ば、化け物が……！貴様は人間ではない！悪魔だつ！」

凶悪な笑みを浮かべて自分を見るレンに隊長は叫んだ。

「失礼な人ね。レンはお姫様なんだから民には優しいわよ？この力は祖国メンフィルと民を苦しめる悪い人達をやつつけるためにしか使っていないんだから。……ま、軍人の貴方には関係ない話だけどね」

「ク、クソ――――リベルに、大佐の未来に永遠の栄光あれっ！」
そして隊長は自暴自棄になつて、懐から爆弾を取り出して自決しようとしたが

「うふふ……そつはさせないわ！」

「ギヤアツ――？」

レンは持つている大鎌を放擲するクラフト カラミティスロウで爆弾を持つている手ごと地面に落とした。そして放擲された大鎌はブーメランのように戻つて来て、レンの手に戻つた。

「ウギヤアアアツ――？手が、手が……！」

片手がなくなつた隊長はもう片方の片手でなくなつた部分から飛び出でくる大量の血を抑えて、悲鳴をあげた。

「うふふ……冥途の土産にレンが開発した魔術の最初の体験者としてその身に味わえる事……光栄に思いなさい！」

そしてレンは自分自身で開発した大魔術の詠唱を始めた！

「炎よ！氷よ！雷よ！大地よ！光よ！闇よ！今ここに全て具現せよ！」

レンが詠唱を終えると、レンの背後の空間が歪み、炎の玉、氷の剣、雷、岩の槍、光の矢、漆黒の霧がそれぞれ無数に現れた！

「ヒ、ヒイイイイツ――？？」

自分に向けられるさまざま自然現象や武器の形をした属性を見て、隊長は痛みも忘れて、レンに背中を向けて逃げようとしたが

「さあ！お茶会の始まりよ！…………虹のお茶会――」

レンボーパーティ

時既に遅し、レンは隊長に向かつて大魔術を放つた！炎の玉や雷は隊長の身体を焼き飛くし、氷の剣や岩の槍、光の矢はそれぞれ身体の到るところを貫き、そして漆黒の霧は地獄の苦痛を与えた！

「ギャアアア！？グフツ！？ウギヤアアアアアツ！？」

レンの魔術によるクラフト　　レインボー・パーティーをその身に受けた隊長は大量の血を流し、そして到るところを火傷しながら、断末魔を上げた！

「ふふ……これで終わりよつ！」

パチン！

「アアアアアア！…………」

そしてレンは指を鳴らした！すると純粹属性の爆発が隊長の中心で起こり、また近くに落ちていた爆弾も誘爆し、隊長の断末魔をも掻き消して辺りを響き渡らす轟音を上げた！そして爆発の煙が晴れると隊長がいた場所はクレーターとなつており、何も残つていなかつた。

「ウフフ……殲滅完了ね　みなさん、御機嫌よう　」

特務兵の全滅を確認したレンは大鎌を異空間に仕舞つて、淑女の動作で勝利を宣言した。

「…………どうやら俺達の手は必要なかつたようだな。」

「お見事です、レン様。マーシルンの名に恥じない素晴らしい戦いでしたわ。」

そこに一部隊を率いたリウイとファーミシルスがレンに近付いて來た。

「パパ！ファーミシルスお姉さんも！イリーナお姉さん、無事に知らせられたようね！」

リウイ達を見たレンは笑顔で答えた。

「ああ。…………お前を残して、自分だけ逃げれてしまつた事をずいぶ

ん気にしていたようだ。早く大使館に帰つて、無事な姿を見せて安心させるといい。……この処理は俺達が済ませておく。」

「はーい！……あ、そうだ！」

リウイに答えたレンは大使館に帰りうつしたが、立ち止まってリウイを見た。

「イリーナお姉さん、いつになつたらイリーナママになるの？」

「…………どういう意味だ？」

レンの言葉を聞いたリウイは驚いたが表情に出さず、レンの真意を尋ねた。

「え？ だつてイリーナお姉さんがパパ達が探していた”イリーナ様”なんでしょう？ レン、早く弟か妹が欲しいもの！」

「…………今のイリーナは俺達が求めるイリーナではない。だから今は現状維持だ。」

「ふうん……大人つて色々と難しいのね。ま、いいわ！ イリーナお姉さんがイリーナママになる日を楽しみに待つているね！」

「…………」

笑顔で大使館に帰つて行くレンをリウイは黙つて見ていた。そしてリウイは兵士達に特務兵達の遺体の処理や戦いによつて荒れた街道の整備を指示した。

「それにしてもまさか、レン様がイリーナ殿の正体に気が付いているとは思いませんでしたね……」

兵士達が作業をしている所を見守つているファーミシルスは自分と同じく見守つている主君に言つた。

「…………まあ、俺達の真の目的を知り、イリーナの肖像画を見たら大体の察しあつくだらうからな。レンは知つても問題はあるまい。」

「ハッ。…………話は変わりますがレン様には驚かされますね。全属性の魔術を扱い、そして自分だけの魔術を完成させると…………それにあの年齢で戦場に出ても、動じない優秀な戦士の上、軍略も中

々のものを考える方になつたのですから。……フフ、ルース以来の教えがいのある人物ですわ。レン様が人間でなかつたら、”大將軍”の後継者として鍛えていたかもせんわ。

「そうだな。………… そういえば、確かユイドラ領主にリフィアが依頼した武器は届いていたな？」

ファーミシルスの言葉に頷いたリウイは少しの間考えた後、ファーミシルスに尋ねた。

「ハツ。確かにリフィア様が件の遊撃士達が正遊撃士になつた際に祝い代わりに贈る予定だつた棒と双剣ですね。昨日届きました。……件の武器を見させて頂きましたが、リフィア様が送られた莫大な依頼料に見合づ以上の素晴らしい武器です。それがどうかしましたか？」

「……先ほどリフィアから連絡があつてな。できれば、今日か明日に件の遊撃士達に渡してほしいそうだ。」

「……なるほど。それらが必要になるほど、件の遊撃士達にとって強大な相手と思い、リフィア様はそう判断されたのですね。」リフィアの突然の心変わりをリウイから聞いたファーミシルスは現在のリベルの状況を考えて、察しがついた。

「それで、できればお前に例の武器を渡す役目をしてほしいのだが。

「私に……ですか？」

リウイの頼みにファーミシルスは驚いた。

「ああ。現在の状況では正攻法では届けられんからな。……届けた後はすぐに帰つて来なくともいいぞ。最近は大した戦がないから、腕がなまつているだろうしな。」

「なるほど。現在の王都は厳戒態勢に入つて、正攻法では届けられませんからね。……フフ、届けた後はお言葉に甘えて私の判断で本当に王都に留まつてもよろしいのでしょうか？」

リウイの遠回しの言い方に特務兵達と戦つて来て良い事を理解したファーミシルスは不敵な笑みを浮かべた。

「構わん。力を貸した所で得はあつても、損はあるまい。……本来なら契約を破つた報いとして、軍を差し向けてもいいぐらいなのだからな。」

「ハツ。では明日にでも出発させて頂きます。」

その後リウイ達は兵士達に混じつて、戦闘後の処理をした後、何事もなかつたかのように大使館に帰還した……

外伝～夕暮れの惨劇～後篇（後書き）

レン、原作でも強かつたのにさらに強くなつて、現状の軌跡メンバーの中ではほぼチートな強さになつちゃいました。それとレンのSクラフトと言えば、やはり『レ・ランナンデス』！何の対策もしてなければ、開始早々全滅させられてしまつ可能性がある恐怖のSクラフトは軌跡をプレイした人達にとって強く印象に残るあの技は残すべきだと思って、そのままにしました。それと今回の話でちょっとしたフラグも建っちゃいました。ファー・ミルス以外のあるキャラ達もエスティル達を手伝うために、王都に行きます！それが誰かは今後の話でわかりますのでた楽しみにしていて下さい……感想お待ちしております。

レンと特務兵達の戦いが終わり、夜が来たその頃、エステル達は救出作戦を開始するためにあらかじめ決めておいた集合場所に向かった。

「エルベ周遊道・夜」

「さてと……。集合場所はここでいいのよね？」

目印である石碑を見たエステルはヨシュアに確認した。

「琥珀石アンバーの石碑のある休憩所だからここで合っているはずだよ。問題は、ユリアさんたちが見つからずに来れるかだけど……」

「……その心配は無用さ。」

ヨシュアの心配に応えるかのように、ユリア率いる親衛隊達がエスティル達の後ろにいた。

「わっ、いつのまに……」

「はは、よくそれだけの数が王都に潜伏できていたもんだな。」

「ほう。それだけの数が潜伏できたとは、特務兵共も案外ぬけているのだな。」

「灯台元暗し……ですね。」

ユリア達の登場にエステルは驚き、ジンは感心し、リフィアの言葉にプリネは頷いた。

「我々の理解者は市民にも大勢いるものでね。こちらの準備はできている。いつでも作戦を始めてほしい。」

「よし……。エステル君。号令をお願いしたい。」

「え……？あ、あたしが！？」

クルツに言われたエステルは驚いた。

「元々、君たちが請けた女王陛下直々の依頼だ。」

「ああ、お前さんの号令で始めるのが筋つてもんだぜ。」

「で、でも……。あたし、まだ新米だし……」

クルツとグラツの言葉にエステルは及び腰で答えた。

「はは、関係ないさ。あんたなら文句はないよ。」

「ただし、あんまり大声を出さないようにね?」

「我々は手伝いだ。異存はまったくないよ。」

「私達もあくまで手伝いよ。ここには士気が高くなるのをお願いね。」

「ママ、頑張つて!」

「あたしも今回の作戦の号令はエステルさんがすべきだと思います。」

「あ、あつ……」

先輩遊撃士達やユリア、そしてカーリアンやミント達に押されたエステルは断れなかつた。

「エステル、自信を持つて。」

「細かいことは考えるなつて。」（ううのはノリさ、ノリ。）

（期待しているわよ、エステル！）

（うむ。）

「ファイトです、エステルさん。」

「フフ……どんな号令をするのか、楽しみよ。」

「ま、この場の主役は貴女ですね。」

「みんなの言う通り、ボクもそう思つよ。」

「号令をお願いします……エステルさん……」

「うん……。」

ヨシュアとジン、そして使い魔達の励ましに頷いたエステルは全員が見えるように、石碑の前に立つた。

「全作戦要員に告げる……。これより、エルベ離宮攻略、および人質救出作戦を開始する！」

こうして人質達の救出とエルベ離宮の攻略作戦が始まった！

「はあ……さすがに腹が減つたな。そろそろ交替時間じゃないか？」
飛行艇を守つている見張りの特務兵が暇そうにぼやいていた。

「おいおい、たるんでるぞ。いつ、潜伏中の親衛隊が現れるかもしれんのだからな。」

「逃亡してるのは10名にも満たない数だろ？そんな連中、大佐が本気になればあつというまに狩りつくせるさ。」

ぼやいている特務兵にもう一人の特務兵が注意をし、それを聞いた特務兵は気楽に笑つて言つた時

「……やれるものならやつてみるがいい。」

ユリア率いる陽動班が特務兵達の前に姿を現した。

「な……！」

「親衛隊中隊長、ユリア・シュバルツ！？」

そしてユリア達は見張りの特務兵達と戦闘を開始した！戦闘は終始、ユリア達の有利でユリア達は見張りを氣絶させた。

「何とか片づいたか……。むつ……」

戦闘が終了し、一端一息を吐いたユリアは多数の特務兵達や軍用犬達を率いる中隊長に気付いた。

「バカな連中だ……。飛行艇はロックされている。簡単に使うことはできんぞ。」

「…………」

中隊長の嘲笑をユリアは黙つて聞いていた。

「おとなしく大佐に従つておけば命だけは助かつたものを……。おのれの頑迷さを呪つて死んでいくがいい！かかれつ！」

中隊長が特務兵達に号令をかけたその時

「――グワアッ！？」

特務兵達の何名かが何者かに攻撃された！

「ゆ、遊撃士だと！？貴様ら、軍に歯向かうつもりか！？」
不意打ちに驚いた隊長は悲鳴が聞こえた方を振り向き、不意打ちの相手が遊撃士と気付き、クルツ達を睨んだ。

「あいにくだが……君たちはすでに違法的な存在だ」

「陛下のお墨付きがある以上、遠慮なく行かせてもらうよー。」

「クツ……敵は少數だ！一気に決めるぞ！」

クルツとカルナの言葉に顔を歪めた中隊長が命令したその時

「封印王の槍！……」

「狂気の槍！……」

「貫け！……アイスードル！……」

「キヤハツ」

「それえつ！……」

「……「ギヤアツ！？」」「」

リフィアやプリネ、ツーヤの魔術、エヴリースが放った矢やカーリアンが放った衝撃波が特務兵達に命中した！

「超・ねこ、パーンチ！……」

「水よ……行け……！連続水弾……！……」

「行きますわよ……大放電！……」

「……「ギヤンツ！？」」「」

さらにペルルのクラフトやマーリオン、フィニーリイの魔術が軍用犬を襲い、何匹かを倒した！

「なつ！？き、貴様は”戦妃”！……それに貴様等はメンフィル皇女！！メンフィルの武将や皇族がなぜ遊撃士や親衛隊達の味方をする！？」

カーリアンを見た中隊長はうろたえて、叫んだ。

「フフ……この私がただの見物人でいると思つたの？」

「お前達の企みもここまでだ！大人しく、縛につくがいい！」

「民の平和のため、”霸王”より受け継ぎし剣技……今ここで震いましょう！」

「ちょっとは耐えてよね？キヤハツ」

「貴方達の事は絶対許しません！覚悟して下さい！」

「君達の企みはここで終わりだよ！」

「我が魔術と槍術にひれ伏しなさい！」

「参り……ます……！」

こうして要撃班と特務兵達が戦い始めた！

（エルベ離宮前）

「よし、要撃班が動いたぞ。」

戦いの喧騒に気付いたジンは作戦の一部が開始された事を言った。
「まず自分たちが先行して前庭で残存兵力を引き付けます！その隙
に、あなた方は離宮内部に突入してください！」

「うん、わかつたわ！」

「女神達の加護を！」

「みんな、頑張って！」

そして親衛隊達が先に離宮に突入した。

（よし……我等も行くぞ！）

（ええ！行つてくるわね、エスティル！）

「みなさんも気を付けて下さい！」

「フフ……腕がなるわ。」

「うん！みんな、親衛隊の人達の援護、お願ひね！」

そしてパズモ達も親衛隊達に続くように、離宮に突入した！

「親衛隊が現れたぞ！擊破するぞ！」

「「「おう！！！」」

親衛隊の登場に離宮に残っていた見張りの特務兵達は親衛隊達と戦
闘を始めた。親衛隊達と特務兵達が戦闘を始めた時、パズモ達も離
宮に到着した。

「さて……二ル達も始めましょ、うー！」

（ええー！）

「はいっー！」

（ああー！）

そしてパズモ達は親衛隊達の援護や特務兵達との戦闘を始めた！し

ばらくするとエスティル達が武器を構えながら、離宮の前に突入した。

「よしよし……。やつてくれてるようだな。この隙に建物に突入するぞ。」

「オッケー！」

「了解です！」

「はーい！」

そしてエスティル達はエルベ離宮に突入し、見回りの特務兵達を倒しながら人質達が閉じ込められている部屋を探し始めた……

第149話（後書き）

もしかしたら、今日はもう一度更新するかもしません。ちなみに現在書けている所はラストダンジョンのカノーネ戦の途中です。C終了まで後、少し……！…………感想お待ちしております。F

人質達が閉じ込められている部屋を探していたが、一向に見つからなかつたが、ある談話室にいた執事よりナイアルも人質達と一緒に閉じ込められている事や人質達が閉じ込められている部屋の場所がわかり、向かつた。

「エルベ離宮」

「ママ、あの扉の先がそうじゃないかな！？」

「そうね。あそこなら奥に通じていそうね。」

そしてエステルは扉を開けようとしたが、扉には鍵がかかっていた。

「えー、そりゃないわよ！」

扉に鍵がかかっている事にエステルは声を上げた。

「かなり頑丈な鍵だね。どこからか見つけてこないと。」

「そんな悠長な事はしていられないわ！」

ヨシュアの提案にエステルは首を横に振つて答えた後、その場で詠唱を始めた。

「エ、エステル。ま、まさか……」

エステルの行動を見て、嫌な予感がしたヨシュアは冷や汗をたらしながら恐る恐る言つた。

「光よ、槍と化して、敵を貫け！……光槍！！」

そしてニルと契約した事によつて使えるようになつたエステルの新しい魔術

光槍は扉に刺さり、そして槍は光を走らせて爆発した
！爆発によつて扉は吹つ飛んだ！

「いつちよあがりね！」

「わあ……凄い、ママ！」

「ハツハツハ！さすが旦那の娘だな。」

「笑い」とじやないですよ。……………ハア……………」

扉を吹っ飛ばした事に胸を張っているエステルをミントは尊敬の眼差しでみて、ジンは豪快に笑い、ヨシュアは溜息を吐いた。そしてエステル達は先を進んだ。

「なんだ貴様ら……」

「どこかで見かけたような……。」

先を進むと見張りの特務兵達が扉の前にいて、エステル達に気付いた。

「こいつらー武術大会で優勝した……」

「遊撃士協会の連中か！？」

「ま、そういうことだ。」

自分達の存在に驚いている特務兵達にジンは戦闘態勢に入つて言った。

「素直に通してくれれば見逃してあげてもいいんだけど？」

「な、舐めるなア！」

「我らが鉄壁の守り、破れるものなら破つてみろ！」

そしてエステル達は見張りの特務兵達との戦闘を開始した。見張りの特務兵達は普通の特務兵達より手強かつたが、ヨシュアとジンが相手をしている間にエステルとミントが魔術を放ち、魔術を受けて怯んでいる隙に4人全員でクラフトを叩きこんで倒した。そしてエステル達は人質達が閉じ込められている部屋に入った。

（エルベ離宮・紋章の間）

「お、お前ら……！？」

部屋に入つて来たエステル達にナイアルが真っ先に気付き、驚いた。

「やつほー、助けに来たわよ。」

「ナイアルさん。無事だったみたいですね。」

「ナイアルさん、怪我とかしていない？』

ナイアルに気付いたエステルやヨシュア、ミントがそれぞれ声をか

けた。

「助けに来たって、マジか！？」

エステル達が助けて来た事にナイアルは驚いた。

「エステルさん、ヨシュアさん、ミントちゃん。こんな所で会えるなんて……」

「…………え？」

その時、奥にドレス姿の少女がいた。ドレス姿の少女がクロ ディ ア姫と思つたエステルやヨシュア達は少女に近付いた。

「あ、あなたがお姫様なんだ。初めてまして、あたしたち遊撃士協会の……」

(あれ？ミント、この人と会つのは本当に初めてなのかな？)
ドレス姿の少女にエステルは自己紹介をしようと、ミントは少女を見て首を傾げた。

「初めてまして、じゃないですよ。エステルさん、ヨシュアさん、ミントちゃん。やつと約束通り再会できましたね。」

「え……。…………」

「ほえ？…………」

優しそうな微笑みを浮かべて言つ少女の言葉に驚いたエステルとミントはしばらく沈黙した後、驚きの声を上げた。

「クロ ゼさん！」

「ああっ、クローゼじゃなー！」

「もう、2人とも。すぐに気付いてくれないなんてヒドイです。」

ドレス姿の少女 クロ ゼは驚いている様子のエステルとミントを見て、苦笑した。

「そ、そんな」と言われてもドレス着て、髪伸ばしてるし……。一体全体、どうしちゃったの？」

「クロ ゼさん、ドレス姿が似合つていて、とっても綺麗だね！まるでお姫様みたい！」

ドレス姿の少女がクロ ゼとわかつたエステルは驚き、ミントはは

しゃいだ。

「……ごめん、クローゼ。エステルって、あまり人を疑うこと知らないから。ミントもエステルを手本にしているようだから、こんな様子だよ……」

ヨシュアはクローゼに申し訳なさそうな表情で謝った。

「ちょっとーそれってどーいう意味よー」

「やうだよ、ヨシュアさん！ママのどこが悪いの？」

ヨシュアの言葉を聞いたエステルとミントは抗議の声を上げた。

「ふふ、それがエステルさんのいいところだと思いますから。そんなエステルさんを見本にしているミントちゃんも、将来素晴らしい大人になると思いますよ？それよりも、ヨシュアさん。まだ私を……その名で呼んでくれるんですね。」

「うん、君がそう望んでいるような気がしたから。本名の方が良かつたかな？」

「とんでもありません……。ありがとうございます。すこく嬉しいです。」

「???:?ところで、どうしてクローゼがここにいるわけ？それに、例のお姫様がどこにもいないんですけど……」

ヨシュアとクローゼの会話が理解できないエステルはクローゼイア姫がどこにいるのか、尋ねた。

「あのな、目の前にいるだろ。その方が、陛下の孫娘のクローゼイア姫殿下だつての。」

エステルの様子を見て呆れたナイアルがクローゼがクローゼイア姫である事を指摘した。

「…………え。ええええええっ！？」

「クローゼさん、お姫様だつたの！？」

クローゼがクローゼイア姫である事にエステルやミントは驚いた。「ごめんなさい、黙つていて……。本当は、エステルさんたちと王都で再会した時に打ち明けるつもりだったんですけど……。リシャール大佐に捕まってしまって……」

「え、でも、なんで？なんでお姫様が正体隠して普通の学校なんかに……！？そ、それにあたし、クローゼのことをどう呼んだらいいのか……」

「ミントもクローゼをんつて呼んだらいけないの？」

「どうかこのままクローゼと呼んでください。クローディア・フォン・アウスレーゼ……。本名の最初と最後を合わせた愛称なんです。」

「

混乱しているエステルとミントにクローゼは優しく答えた。

「そうだったんだ……。えっと、それじゃあその髪は？」

「あ、これはヘアピースです。さすがに同じ髪型だと、学園生活に支障をきたしそうだつたので……」

「まったく迂闊でしたよ……。そのお姿は、写真で拝見していたのに市長邸の事件で会つた時にはサッパリ気付きませんでしたからねえ。」

クローゼの変装が見破れなかつた事にナイアルは苦笑しながら言つた。

「うふふ、『めんなさい』。デュナン小父様や、ダルモア市長も氣付かなかつたみたいですし意外と効果はあつたみたいですね。」

「そつか、考えてみればあの公爵も親戚なのよね。…………あれ？ちょっと待つて……。学園祭での公爵が邪魔をした件で、クローディア姫がリウイに謝罪したつてコリアさんから聞いたけど、もしかして……」

「はい。劇が終わつた後私、すぐに席を外しましたよね？あの時にリウイ皇帝陛下に謝罪したんですね。…………最も陛下は特に怒つている様子もありませんでしたが……」

「そうだったんだ……ん？もしかしてクローゼ、リフィア達の事を最初から知つていたの？？」

クローゼから事情を聞いたエステルはある事に気付き、尋ねた。

「はい。マノリア村でリフィア殿下を紹介してもらつた時は本当に

驚きました。……実はリウイ皇帝陛下に行つた際、リフィア殿下達やツーヤちゃんもその場にいたんです。

「やうだつたの!?」

「え―――ツーヤちゃん、クロ ゼさんがお姫様だつて事、知つていたの!?」

「よく考えたらリフィアやプリネはクロ ゼと面識があつても、おかしくないね。」

クロ ゼの話をさらに聞いたエステルやミントは驚き、ヨシュアは皇女であるリフィアやプリネがクロ ゼと面識があつても可笑しくない事に納得した。

「全くもう……リフィア達も知つていたのなら、教えてくれてもよかつたのに……まあいいわ。今はそれどころじゃないわね!」

そしてエステル達は今までの経緯を一通り説明して、女王陛下の依頼で救出に来たことを説明した。

「そうだつたんですか……。エステルさん、ヨシュアさん、ミントちゃん。それにジンさんと仰いましたね。助けに来てくださつて本当にありがとうございました。」

「あはは、気にしないでよ。捕まつてたのがクローゼだと知ついたら頼まれなくとも助けに來たし。」

「そうだよ! お姫様とか関係ないよ!」

「エステルさん、ミントちゃん……」

エステルとミントの言葉を聞いたクロ ゼは2人を見つめた。

「確かにその通りだね。それに、僕たちよりも陛下に感謝した方がいいと思う。自分の身をかえりみずに君の救出を依頼したんだから。

「確かに、姫殿下さえ無事ならば大佐の要求を拒否すことができる……。死すら覚悟されているかもせんね。」

「はい……。お祖母さまはそういう方です。何とか手を打たないと今度はお祖母さまの身が……」

ヨシュアとジンの言葉にクロ ゼが頷いた時

「茶番はそのくらいにしてもらおうか……」

なんと特務兵の中隊長が銃をエステル達に向けながら現れ、また部下の特務兵が一人の幼い女の子に銃を突きつけていた。

「お、お姫さま～……」

女の子は泣きそうな表情でクロ ゼを見た。

「リアンヌちゃん！？」

見覚えのある女の子を見てクロ ゼは驚いた。

「な、なんで女の子が！？」

「モルガン将軍のお孫さんです……。ハーケン門に監禁された將軍を動かすために連れてこられたらしくて……」

女の子がなぜ特務兵に人質にされているかわからないエステルにクロ ゼは説明した。

「女王陛下に対する君と同じといふことが……」

クロ ゼの説明を聞いたヨシュアは納得した。

「言つておくが、ただの脅しと思つなよ……。我らが情報部員、理想のためなら鬼にも修羅にもなる！」

中隊長は鬼気迫るような表情でエステル達を睨んで言つた。

「そ、そんなことで威張つてるんじゃないわよ！」

「そうだよ！子供を人質に取るなんて、卑怯だよ！」

中隊長の言葉を聞いたエステルとミントは怒つた。

「中隊長、取引をしましょう。その子の代わりに私を人質にしてください。」

クロ ゼは冷静に自分とリアンヌを交換する事を提案した。

「おつと……。その手には乗りませんぞ。さすがに我々といえど王族を手にかける勇気はない。それと較べると、モルガン将軍の孫娘というのはちょうどよろしい。人質の価値もあるし傷つけても問題なさそうだ。」

「…………あなた方は……」

「……さいてー。」

「やれやれ、腐つた連中だぜ。」

「うう～…………！」

中隊長の考えを聞いたクロ ザやエステルは軽蔑の眼差しを向け。ジンは呆れ、ミントは悔しそうな表情で唸つた。

「フン、何とでもほざくがいい。そろそろキルシェ通りから巡回部隊が帰還する頃合いだ。親衛隊、遊撃士、もろともここで一網打尽にしてくれるわ！ついでにメンフィルの皇族達も人質にしてくれる！」

「あー、それは無理つてもんね。ここに来るときにあたし達が倒しちゃつたから。それにあんた達が束になつても、プリネさん達には敵わないわよ。」

得意げになつている中隊長の言葉を否定する声が、中隊長と特務兵の後方から聞こえてきた。

「雷よ、走れつ！……電撃！！！」

「ギヤアアアツ！？」

そしてリアンヌを捕まえている特務兵に魔術によつてできた雷が命中し、命中した特務兵は感電した瞬間、リアンヌを放した。

「せいつ！」

「ブギヤツ！？」

そしてショラザードが現れ、鞭を特務兵に震つた！鞭の攻撃によつて特務兵は吹っ飛ばされて氣絶した。

「な……！？」

突然の出来事に中隊長は驚いた。

「ひぐつ……うづ……。うわわあああああん！」

恐怖から解放されたリアンヌは泣き始めた。

「よしよし、もう大丈夫よ。エステル、ヨシュア。ずいぶん久しづりじゃない。」

泣いているリアンヌをあやしながらショラザードはエステルとヨシニアを懐かしそうな表情で言った。

「シヨ、シヨラ姉！？」

「来てくれたんですか……」

ショラザードの登場にエステルとヨシュアは驚いた。

「な、なにを悠長に挨拶しておるかああつ！」

自分の存在を忘れて呑気に再会を祝っているエステル達を見て、中隊長は怒鳴った。

「やれやれ、無粋の極みだね。」

その時中隊長に、導力の銃弾が命中した！

「うおつ……」

銃弾が命中した中隊長がよろけ始めた所を

「せいっ！」

「ガハッ！？」

ショラザードは中隊長に鞭を震つて、壁に激突させた。

「雷よ、落ちよ！……落雷！……」

そして止めに魔術による雷を中隊長に放つた！

「ギャアアアアアアッ！？……」

ショラザードの魔術を受けた中隊長は悲鳴を上げた後、気絶した。

「今のはオマケよ。」

「エ、エゲツな～。つて今撃つたのつて……」

ショラザードの容赦ない攻撃に冷や汗をかいだエステルはもう一人の味方の存在の正体を言いかけた所を

「……オリビエさんですか？」

ヨシュアが続けた。

「ピンポーン　いやいや。真打ち登場といった所かな。」

そしてオリビエがエステル達の前に姿を現した。

「はは、つづづく突拍子もない兄ちゃんだな。それに、ショラザード。ずいぶん久しぶりじゃないか。」

「どうも、ご無沙汰します。まさかジンさんがリベルに来てるなんてね。あなたがエステルについているつて聞いたからあんまり

心配してなかつたわ。」

「はは、そりやさすがに買いかぶりすきつてもんだぜ。しかしあ前もん……ずいぶん色っぽくなつたなあ。正直、見違えたぞ。」

「あ、あら、そうかしら?」

ジンの賛辞にショラザードは照れた。

「むむむ。そこはかとなくジョラシー。ボクのことを散々もてあそんでおいて『ミ』のように捨てるのねつー」

「ああ、オリビエ。アイナが会いたがつてたわよ。また一緒に呑もうだつてさ。」

「『めんなさい。ボクが悪い』わざいました。」

ショラザードとジンの余話にいつもの調子で入るつとしたオリビエだつたが、ショラザードの言葉を聞き、表情を青褪めさせて謝つた。「それであなたがミントちゃん…………でいいのかしら?」そしてショラザードはミントに向付いて、尋ねた。

「うん!お姉さんは誰?」

「あたしはショラザードって言つてね。エステル達の姉代わりよ。ショラお姉さんつて呼んでもくれると嬉しいわ」

「はーい!よろしくね、ショラお姉さん!」

「あら。話には聞いていたけど素直で可愛い娘ね。エステルの娘とは思えないくらい、可愛い娘じゃない。」

「ちよつと、ショラ姉! それ、どういう意味!?」

ショラザードの言葉に反応したエステルはショラザードを睨んだ。

「フフ……あんたに娘ができたつて聞いたから、どんな娘かと思つたけどまさかこんな素直で可愛い娘があんたの娘になるとは思わなくてね。」

「まったくもつ……。」

笑っているショラザードを見て、エステルは溜息を吐いた。

「でもショラさん。よく王都に来れましたね。王国軍に関所が封鎖されてしまふでしたか?」

「ええ、だからヴァレリア湖をポートを使って移動したわ。で、王都の波止場に上陸したわけ。」

「なるほど、考えましたね……」

「でも、どうしてまたスチャラカ演奏家と一緒になの?」

「王都のギルドでばつたり出くわしちゃってね。スッポンみたいに離れないから仕方なく連れてきたのよ……」

オリビエが同行して来た理由をショラザードは呆れの表情で溜息を吐きながら説明した。

「ハツハツハツ。こんな面白そうなことをボクが放つておくわけないだろ? とにかく、そちらのお嬢さんが……」

ショラザードの呆れと溜息を見ても、オリビエは気にせずいつもの中調子で笑った後、クローゼを見た。

「あ、紹介するわね。女王様のお孫さんにあるクローディア姫殿下よ。あたしとヨシコアの友達なの。」

「初めてまして、お二人とも。助けて来てくださって本当にありがとうございます。」

「お気になさらずに。これも遊撃士としての務めです。」

「フツ、美しき姫君を救うのは紳士としての誉れと言づからねえ。お会いできて光榮だ、プリンセス。」

クローゼにお礼を言われたショラザードとオリビエが会釈をしたその時

「クローゼ、」無事でしたか!」

「ピューイ!」

ユリアとジークが部屋に入つて來た。

「ユリアさん、ジーク!」

ユリアとジークの無事な姿を見たクローゼは微笑んだ。

「ピュイピュイ!ピュウーイ!」

「ふふ、よかつた。また会つことができて。」

「殿下、よくじ無事で……。本当に……本当に良かった……」

「ユリアさんも……元気そうでよかったです。」

その後要撃班であるリフィア達や遊撃士、親衛達達も合流し、救出が成功した今後の方針を決めるために状況確認を行つ事にした……

第150話（後書き）

原作と違つて、開かない扉は強行突破しました 所詮、ただの扉ですし。それと関係ない話ですが、今日、最近話題になつていて珍しく売り切れた上やたら評価の高いLeafの前編、後篇がセットになつているゲームが届いて、それをやり始めたのですが、OPとか無茶苦茶な画面になつてみれない上、ほつといいたらPCがフリーズしちゃいました……OPは必ず見ていたのに……まだ、普通のプレイができるだけマシですが。多分、PCのスペックが古すぎて、駄目なんでしょうがね。XPで動かないって、どれだけのハイスペックを必要としているんでしょう……今後の事を考えて新しいのに買わ替えないといけないなあ……下手したら次のエウシュリー新作の時に、支障をきたす可能性があるかもしませんし。……感想お待ちしております。

（エルベ離宮・応接室）

「本当に……申しわけありませんでした。私が不甲斐なかつたばかりにこのよつた苦労をおかけして……。出来ることなり、至らぬ我が身をこの手で引き裂いてやりたかった……」

「そんなこと言わないでください。お互に、こうして無事に再会できただけでも嬉しいです。助けにきてくれて……本当にありがとうございました。」

責任を感じているコリアにクロゼは優しい微笑みで諭した。

「殿下……」

「えつと、感動してるとこをちよつと悪いんですけど……。なんでジークがここにいるの？」

「ピュイ？』

エステルの疑問を聞いたジークは首を傾げた。

「はは、ジークは殿下の護衛であると同時に、親衛隊の伝令係でもあるんだ。君たちのホテルにも手紙を届かせただろう？」

「あ……あの夜の！」

「やっぱりそうだったんですね。それでは、女王陛下の依頼をユリアさんが知っていたのも……」

ユリアの説明を聞いたエステルは驚き、ヨシュアは納得した。

「ああ、女王宮の陛下から直接、ジークを介して教えていただいた。だが、殿下がいたあの広間にはジークの侵入できる窓が無くてね。連絡できなくて本当に心配したよ。」

「まったくもう……。驚かせてくれるじゃない。こら、ジーク。黙つて手紙を置いていくなんてちょっと薄情じゃないの？」

「やうだよ？ミントやジークちゃんにも教えてくれないなんて酷い

よ。

「まあまあ、ミントちゃん。ジークは話せないんだから、しょうがないよ。」

エステルの言葉に続くよつてミントは頬を弱冠膨らませですね、その様子を見たツーヤが宥めた。

「ピュイー……」

「ふふ……『ごめんよ』ですって。」

申し訳なさそうな鳴声をするジークの言葉をクロ ゼは上品に笑いながら代わりに答えた。

「あはは、まあいいか。とにかく、特務兵たちはもうほとんどじやつつけたの？」

「離宮に詰めていた部隊はほとんど拘束することができた。しかし、グランセル城内にはまだ相当数が残っているはずだ。」

「各地の王国軍も、いまだに情報部のコントロール下にある。下手をしたら、反乱軍としてこの場所を鎮圧されかねないわ。」

エステルの疑問にユリアは答えた後、真剣な表情になつた。そしてショラザードもユリアの情報を続けるように説明した。

「へ～……それならまだまだ楽しめそうね」

「キヤハッ 次は何人と遊べるかな」

「全く、この戦闘狂共が……」

ユリアやショラザードの情報を聞き、好戦的な笑みを浮かべているカーリアンやエヴリースを見たりフィアは呆れて溜息を吐いた。

「うわ……そこまでは考えてなかつたわね。」

「そうですね……。クローゼだけでも、別の場所に避難させた方がいいかもしません。」

「…………」

ヨシコアの提案を聞いたクロ ゼは黙つていた。

「ならば、エレボニア帝国か共和国の大使館に保護を求めてはどうかな?大使館内は治外法権……。簡単に手出しができないからね。」

「さつきの作戦で歯^{るかく}獲した飛行艇で亡命する手もあるな。根本的な

解決にはならんが、時間を稼ぐにはちょうどいい。

「フム。なんならエヴリーヌに頼んで、メンフィル大使館に送つてやつてもよいぞ？保護の件でのリウイへの口利きは余がしておこう。エヴリーヌ、よいな？」

「ん。別にいいよ。」

「そうだな……。どうお逃がしするべきか……」

オリビエやジン、リフィアの提案を聞いたコリアは考えた。

「…………。あの…………みなさん。この状況で、私が遊撃士の皆さんに依頼をすることは可能でしょうか？」

そこに黙っていたクロゼが意外な申し出をした。

「え……」

「人質救出のミッションは完了したから大丈夫だと思つよ。もちろん、依頼内容にもよるけどね。」

クロゼの申し出にエステルは驚き、ヨシュアは頷いた後、依頼を受ける事を言った。

「でしたら……無理を承知でお願いします。王城の解放と、陛下の救出を手伝つていただけないでしょうか？」

「で、殿下……」

クロゼの依頼を聞いたコリアは驚いた。

「そつか……そうよね。今度は女王様を助けないと！」

「正直言つて、その話にはなるんじゃないかと思つたぜ。だが、姫殿下……その依頼はかなりの難物だ。」

クロゼの依頼内容を聞いたエステルは納得し、ジンは難しそうな表情をした。

「そうね……。ソレにいる戦力を全員集めても正面から落とすのは不可能だわ。」

「あら。この私がいるのに、そんな事を言つのかしら？」

「余達を忘れるなよ、シェラザード？」

シェラザードの言葉を聞いたカーリアンやリフィアは意外そうな表

情をして尋ねた。

「そ、そういうえばそうでしたね……リフィアさん達はともかく、カーリアン様。貴女もクロ ディア姫の依頼を手伝ってくれるのですか?」

2人の言葉を聞いたショラザードは、惑いながら頷いた後、カーリアンを見て、恐る恐る尋ねた。

「ええ。リベル王家には結構世話になつたから、リウイ達の代わりに手伝つてあげるわよ」

尋ねられたカーリアンはウインクをして答えた。

「正面を落とせたとしても、正面を落としている間に女王陛下をどこかに移動されると厄介ですね。あの特務艇を使えば可能性はあると思いますが……。ただ、よほど上手い仕掛けが必要になりそうですね。」

「……私に考えがあります。皆さん、これを見て頂けますか?」ヨシュアの言葉を聞いたクロ ゼは一枚の古い地図を出した。

「これって……どこの地図?」

「王都の地下水路の内部構造を記した古文書です。これに、王城地下に通じる隠し水路の存在が記されています。」

そしてエスティル達はグランセル城解放と女王救出作戦の内容を話しあつた。

「…………以上が作戦内容となります。みなさん、よろしくお願ひします。」

作戦内容を話し終え、クロ ゼはエスティル達に頭を下げた。

「任せて!」

「了解。」

「ミントも頑張るね!頑張りうね、ツーヤちゃん!」

「うん!」

その時、現在の状況を通信でリウイに報告しに行つていたプリネが部屋に戻つて来た。

「…………遅くなつて申し訳ありません。それで、今後はビツするのですか？」

「うん。実は…………」

事情がわかつていなないプリネにエステルが説明した。

「…………なるほど、わかりました。…………そうだ、リフィアお姉様。例の物を渡す時間を早めるよう、お父様に頼んだそうですが…………？」

「うむ。確かに言つたぞ。それがどうかしたか？」

「えつと…………2人とも、何の話をしているの？？」

プリネとリフィアの会話内容が理解できなかつたエステルは尋ねた。

「それは秘密だ。まあ、その内わかる。」「

「？？」

リフィアの言葉を聞いたエステルは首を傾げた。

「それで、何か問題があつたのか？」

「いえ。ただお父様の話ではファーミシルス様に届けさせると…………」

「…………」

「ほう？」「

「げつ。何でファーミがこっちに来るのよ…………」

プリネの説明を聞いたリフィアは意外そうな顔をし、カーリアンは嫌そうな顔をして溜息を吐いた。

「あの…………プリネさん。話の内容はよくわかりませんが、ファーミ

シルス大将軍も王都に来られるのですか？」

一方プリネ達の会話からファーミシルスがグランセルに来る事に驚いたクロ ゼは尋ねた。

「はい。いつ頃に来るかは聞いていませんが、明日には来るそうです。」

「へー？でも、今王都は封鎖されているんじや…………」

プリネの説明を聞いたエステルは現在の王都の状況を思い出して、驚いた。

「まあ、正攻法では無理だな。…………だが、ファーミシルスには翼が

ある。ここまで言えばわかるな？」

「まさか空を跳んで、関所を越えてくるのかい！？」

リフィアの説明を聞き、ファーミシルスの王都への潜入方法がわかつたヨシュアは驚いた。

「ハハ。”闇夜の眷属”しかとれない方法だな。」

「ええ。……ファーミシルス大将軍まで来るなんて、思つてもいかつたわ。」

ジンの頷きに答えたショラザードはファーミシルスが来る事に心強さを感じた。

（で、殿下…………よろしいのでしょうか？）

他国の軍のトップであるファーミシルスが参戦するかもしない事にコリアは驚いた後、クロゼに小声で尋ねた。

（……恐らくメンフィルにも何か疑惑があつての事かもしませんが、せつかくのご好意ですし、今は一人でも多くの戦力が必要です。ここは素直に受けましょう。）

……”百日戦役”的”ロレント返還”の件や今までの付き合いを考えれば、そんな無茶な要求はして来ないと想います。）

（し、しかし……）

（……すみません、コリアさん。私はどうしてもお祖母様を助けたいのです……）

（殿下……）

申し訳なさそうにしているクロゼを見て、コリアは何も言えなくなつた。そしてエスティル達は見張りは親衛達達に任せ明日起え、戦いで疲れた身体を休めた。

「グランセル城内」

「ど、どうこう事ですのー？『エルベ離宮』との連絡が途絶えてしまつただなんて！」

一方その頃、カノーネはエルベ離宮と連絡できなかつた事につぶつた

え、ロランスを問いただしていた。

「親衛隊か遊撃士……。どちらかに落とされた可能性があると云つことかな。」

「ぬ、ぬけぬけと……。連中を指揮していたのは少尉、あなたでしょうに！」

冷静に答えるロランスをカノーネは睨んで責めた。

「これは面目ない。だが、済んでしまったことはとやかく言つても詮無きことだ。この上、陛下まで奪われぬよう城の守りを固めるべきだらうな。」

「い、言われなくともわかつていますわ！」「

ロランスの忠告を聞いたカノーネはロランスを睨んだ後、命令を待つている特務兵達に号令をかけた。

「城門を完全封鎖！誰が来ても入れないように！以後は、空からの襲撃にのみ備えることにしなさい！」

「了解しました！」

「それと、各地の部隊に連絡してエルベ離宮に向かわせること！名目は、王族を騙^{かた}ったテロリスト集団の鎮圧です！」

「イエス・マム！」

特務兵達はカノーネに敬礼をした後、早速行動に移るためにどこかに行つた。

「ふふ、見事なお手並みだ。」

「フン、当然でしょう。新参者のあなたとは違います。……閣下の留守はわたくしが絶対に守りますわ！」

ロランスの感心の言葉をカノーネは鼻をならして答えた後、決意の表情をした。

そして翌朝……！

第151話（後書き）

感想お待ちしております。

翌朝、救出作戦に参加した遊撃士や親衛隊、そして新たにシェラザードとオリビエが加わり、グランセル城解放作戦とアリシア女王救出作戦の内容をユリアが全員に説明を始めた。

「エルベ離宮・紋章の間」

「これよりグランセル城解放と女王陛下の救出作戦を説明する。」
そしてユリアは最初にヨシュア、ジン、オリビエ、そして3人の援護役のテトリを見て説明を始めた。

「まずはヨシュア殿以下、4名のチームが地下水路よりグランセル城地下へ侵入。親衛隊の詰所へと急行し、城門の開閉装置を起動する。」

「了解しました。」

「ま、でかい花火の点火役つてところだな。」

「フフ……いずれにせよ、最終幕の幕開けには違いない。」

ユリアの説明を聞いたヨシュア達は力強く頷いた。

「あう……まさか私がそんな大役の一人に選ばれるなんて緊張してしまいます……」

一方テトリは緊張していた。

「フツ……このボクがいるのだから、そう緊張せず、可愛い笑顔を見せてくれないかね？」

「ふ、ふえええっ！？」

オリビエの言葉にテトリは驚いた。

「こんな時にナンパとか、やめんかい！」

「せめて時と場所を考えて下さい……」

オリビエの行動を見てエステルは睨み、ヨシュアは呆れた。

「これは失礼。これがボクなりの緊張のほぐし方だったのさ」

「ハ、ハア……ありがとうございます。」

自分が励まされた事にテトリは苦笑しながら、一応オリビエにお礼を言った。そしてユリアは咳払いをした後、クルツ達や親衛隊達、そしてパズモやサエラブを見て続けた。

「コホン。……城門が開くのと同時に親衛隊全員と、遊撃士4名、パズモ殿とサエラブ殿が市街から城内へ突入。

なるべく派手に戦闘を行い、敵の動きを城内へ集中させる。

「ああ、任せてくれ。」

「よつしゃ、腕が鳴るぜえっ！」

（フフ……）ういっただ固体での戦いに参加するなんて、ハイショラと共に戦っていた時代を思い出すわね……）

（フッ……敵陣を駆け抜け、戦場を搔き乱してくれる！）

役割を聞いたクルツは力強く頷き、グラツツは自分自身に気合を入れ、パズモはかつての戦いを思い出し、サエラブは好戦的な笑みを浮かべた。そしてユリアはリフィア達を見て、説明を続けた。

「……次にリフィア殿下以下、7名のチームが人質達を守るためにこのエルベ離宮の防衛に着く事ですが……本当に勇ろしいのでしょうか？恐らくかなりの激戦となると思われるのですが……」「リフィア、プリネ、エヴリーヌ、ツーヤ、そしてプリネの使い魔達を見て、ユリアは尋ねた。

「余達がいるのだ！敵がどれほどしようと、全て余の魔術でひれ伏してくれる！」

「エヴリーヌ達が負ける訳ないでしょ？キヤハッ！」

リフィアは得意げに胸を張り、エヴリーヌは好戦的な笑みを浮かべて答えた。

「ツーヤ、絶対に無理をしては駄目よ？戦えないと思つたら、迷わず人質の方達が待機されている部屋まで撤退しなさい。いいわね？」

「はい。」

一方ツーヤの身を案じたプリネはツーヤに指示をし、プリネの指示

にツーヤは頷いた。そしてプリネはペルル達にも声をかけた。

「みなさんも無理はせず、危ないとthoughtたら私の中で休んで下さい。

「心配してくれて、ありがとう…でも、大丈夫だよ…みんなの事はボクが守るね！」

「ご主人様の…使い魔として…プリネ様達を守るため…最後まで…戦わせて頂きます…」

「精靈王女たるこの私には無用な心配ですわ。」

プリネの心配を使い魔達はそれぞれ力強い言葉を言い、頷いた。そしてユリアは最後に残りのメンバーであるエステル、シェラザード、ミント、カーリアン、ニル、ジエニス王立学園の制服に着替え、いつもの髪型になつたクロゼを見た。

「そして最後に……」

クロゼを見たユリアは辛そうな表情で言った。

「……殿下、やはり考え直して頂けませんか？」

ユリアの嘆願にクロゼは申し訳なさそうな表情で答えた。

「ごめんなさい……お祖母様は私が助けたいんです。それに私は一応、飛行機の操縦ができますから……どうか作戦に役立てて下さい。」

自分にも必要な役割があると思ったクロゼは最後は自信のある表情で自分も作戦に参加する意味はあると答えた。

「くつ……こんな事なら、操縦方法などお教えるのではなかつたか……」

「まあまあ、ユリアさん。クロゼのことならあたし達に任せ置いて。」

「そうだよー!ミント、ママ達と協力してクロゼさんを守るね!」

「”闇の聖女”の一番弟子として……そして”風の銀閃”の名に賭けて必ずやお守りすることを誓つわ。」

「人を守るのは私の性に合わないけど、その娘に襲いかかる敵は全

て斬り伏せてあげるわよ」

「能天使」の誇りにかけて、必ず守りぬきますわ。」

自分が教えたことが結果的に守るべき人を危険な作戦に参加させてしまった結果に後悔していたユリアにエスティル達はユリアが安心できるよう答えた。それを聞いたユリアはなんとか自分を納得させエスティル達にクローゼを守るよう頼んだ後最後のチームがやるべきことを説明した。

「わかつた……どうかお願ひする。城内に敵戦力が集中した直後、エスティル殿以下6名のチームが特務飛行艇で空中庭園に強行着陸。しかる後、女王宮に突入してアリシア女王陛下をお助けする。」

卷之三

「6人を代表してエスティルは元気よく返事をした。

それでは知曉、行動開始也!

ユリアの叱咤激励に全員が答えた。

いた。

「……ヨシュア、気を付けてよね。くれぐれも無理しちゃダメなんだから。……テトリ、ヨシュア達の事、頼んだわよ。」

ヨシュアの心配をエステルはした後、テトリーにヨシュア達の事を頼んだ。

「はい。エステルさんも気を付けて下さい。……一ルさん、一緒に戦えない私やパズモさん達に代わって、エステルさんの事をお願いします。」

テトリの言葉にニールは頷いた。

「うん、氣をつけるよ。だから、君の方もくれぐれも先走らないよ。」
うに。自分の力を過信しないでショーラさんやカーリアンさん達と協

力する」と。」

「うん……分かつてゐる。なんと言つても、例の約束だつてあるもんねーお互い、元気な姿でグラントセル城で会いましょー！」

「うん……必ず！」

（ほう……あの2人、以前より距離が近くなつたとは思わないか？）

（ええ……今までの旅や戦いを通じて、ただでさえ近い距離がさらに近くなりましたね……）

（？）主人様達、何の話をしているんだろう？……？）

エステルとヨシュアのやり取りをリフィアとブリネは微笑ましそうに見た後、小声で会話をし、2人の会話が聞こえたツーヤは首を傾げた。

「ヨシュアさん。隠された水路にはどんな魔獣がいるか判りません。どうか、気を付けてくださいね。」

「わかつた。くれぐれも気を付けるよ。」

クローゼの心配をヨシュアは礼を言つて受け取つた。

「エステルのことは心配しなさんな。あんたと今まで旅して色々と成長したみたいだからね。遊撃士としてだけじゃなくて女としても、みたいだけど」

「シヒ、シヒラ姉……」

ショラザードの言葉を聞いたエステルは照れた。

「（はは～ん……そういう事ね）フフ……」

「？ママ、顔が真っ赤だよ？もしかして風邪をひいたの？？」

エステルとヨシュアの雰囲気、ショラザードの言葉の意味に気付いたカーリアンは口元に笑みを浮かべ、ミントはエステルの様子に首を傾げた。

「？？？どういう事ですか？」

ショラザードの言葉の意味がわからなかつたヨシュアは尋ねた。

「ま、まだ判らなくていいの！後、別にあたしは元気よ！だから、心配は無用よ！」

「へーうん。」

照れながらヨシュアに注意したエステルはミントにも言った。言われたミントはエステルの様子がいつもと違う事に首を傾げながら頷いた。

「やれやれ、この非常事態に何とも頼もしいガキどもだぜ。」「はは、まったくだな。さて……そろそろ俺たちは行くぞ。」

ナイアルの言葉に頷いたジンはヨシュア達に促した。

「はいっ！」

「また会おう、仔猫ちゃんたち」

「女神達の加護を！」

そしてヨシュア達は王都に向けて、出発した。

「…………ヨシュア…………」

（ねえねえ、お姫さま……。やっぱりあの子達、旅先で何かあったのかしら？）

エステルの様子を見て、シェラザードはクロゼに耳打ちをした。

（……そうかもせんね。2人とも、とても良い顔をしてらっしゃいましたから……。……ちょっとぴり羨ましいかな……。）

シェラザードに答えたクロゼはエステルを羨ましそうな表情で見ていた。

そしてそれぞれの役割を果たすため、エステル達は行動を始めた……！

第152話（後書き）

ところで、グランセル城奪還作戦は、いつこう振り分けになりました。多分、気付いている方がいらっしゃると思いますが、どこの誰かさんがまたまた酷い目にあつ予定となっています（笑）。何度も言いますが、この小説はどこかの誰かさんをいじめる小説ではありませんから……彼の運が悪すぎただけです。……感想お待ちしております。

（王都グラントセル・南街区）

ヨシュア達が王都に到着すると、王都中は今まで一般兵が徘徊していたが今は特務兵の徘徊に変わっていた。

「……一般兵に代わって特務兵達が巡回していますね。」

「離宮を落とされて敵さんも必死なんだうた。しかし何とも物々しい雰囲気だぜ。」

「あう……あの人達、ピリピリしていて怖いです……できるだけ離れて歩きましょう。」

ヨシュアの言葉にジンは特務兵が巡回している理由を推測した後、華やかな街の物々しい雰囲気に溜息をついた。またテトリは特務兵達の雰囲気を怖がった。そしてそれを聞いていたオリビエは冗談か本気かわからないことを言い始めリュートを取り出そうとした。

「よし、じついう時こそボクのリュートで張り詰めた空氣を和ませて……」

「目立つことをしていると、またあの人気が飛んできますよ。確か、ミコラーさんでしたつけ？」

「そ、そうだった……。3人とも、帝国大使館には絶対に近寄らないでくれたまえ！」

呆れ顔のヨシュアにある事を言われたオリビエは必死に大使館に近づかないよう言った。

「はは、お互い大使館に寄つてるヒマは無さそうだな。準備を整えしだい、地下水路に降りるとして、」

そしてジンに言われたヨシュア達は装備やオープメントの確認をした後目的地である地下水路へ向かつた。

（王都地下水路・東区画）

地下水路に降りたヨシュア達はクロ
ゼに渡された地図を見ながら
隠し扉がある壁の所についた。

「あつた
……
これだ。」

壁を念入りに探っていたヨシュアは隠されてあつた仕掛けを解いた。すると壁は音を立てながら動き通路ができた。

お見事

「ふえ～……ヨシコアさん、凄いですね。ヨシコアさんの技術を見ていこう」とマイケル先生を想って出します。

「ふーん。大したものだ。こういう仕掛けを見つけるコツもあるのかい？」
ユアの技術をみてかつての主の使徒の一人を思い浮かべた。

「コツ」というか……単なる慣れだと思います。自然と指先が探し当てるんです。」

ヨシュアはなぜ、解けたか理解できなく戸惑いながら答えた。

たとか？活劇物とかに出てへるよつなやつ。」

半分面白がっているオリビエの言葉にヨシュアは呆れた。

「あのー、今は時間はあんまりないのでは……」

そこはエエリが遠慮気味に申し出た

テトリーの言葉にジンは促し、ミシコアとオリビエは話をやめて迅速

「アリババ」好評販売中

「ええ、さつきと同じ隠し扉のスイッチがあります。

先頭のミシエアが立ち止り壁を調べていいことに気付いたアービングはここが終点だと思い、ヨシコアに尋ねヨシコアはそれに答えた。「ふむ、だったら正午までここで待機した方が良さそうだな。」

「了解です。」

「やれやれ……それでは今の内に体を休めておくとするか……」

「ふえ~……早く時間が来てほしいです……」

ジンの提案に賛成したヨシュア達は一端その場で休憩した。

一方グランセル城前では攪乱する部隊——ユリア率いる少數の親衛隊とたクルツ達正遊撃士4人、そしてパズモとサエラブが物陰等に隠れた。

「よし……各員、そのまま待機。正午の鐘と同時に突入する。」

ユリアの言葉に頷いたクルツ達は静かに正午の鐘を待つた。

もう一方、女王救出の部隊——エスティル達は情報部が使っていた飛行艇が停泊している場所についた。

「情報部の特務艇……こんな形で乗るなんて。」

エスティルは複雑な気持ちで呟いた。

「なんていうか……やたら趣味の悪い飛行艇ね。あの空賊艇といい勝負だわ。」

「ホントだよ！こんな黒っぽい飛行艇で飛んでも、ミント、全然楽しくないよ！」

「二ルは飛べるから、乗らずに自分で飛んでついて行こうかしら？」「まあ使える物は使わなくちゃ、損よ。あんまり気にしないほうがいいわよ？」

特務艇を見て文句を言つシエラザードやミント、二ルを見てカーリアンは苦笑しながら言つた。

「でも、かなりのスペックであることは間違ひありません。こんな船を情報部は、どうやって調達したのか……」

クロゼはリシャール達がなぜ軍にある戦闘飛行艇以上の能力を持つ飛行艇を手に入れた理解できず呟いた。

「うーん、そりいえば。あの『ゴスペル』といい色々と謎が多いわね……」

クロ ゼの言葉を思い返したエステルは今までの出来事を振り返り、解決できていない事の多さに溜息をついた。

「やあ、殿下。お待ちしていましたよ。」

エステルが考えて唸っていた時、特務艇から男性が降りてきた。

「ペイトンさん。どうもお久しぶりです」

「えつと……この人は？」

男性の正体が判らなかつたエステルはクローゼに男性の正体を尋ねた。

「ペイトンさんといつて『アルセイゴ』の整備をしている方です」「といつても、中央工房から出向している技術要員ですけどね。『アルセイゴ』は試験飛行段階なので色々データを取る必要があるんです。」

「へえ、そなんだ。ルーアンで見た時はちゃんと飛んでいたけど……」

「もちろん、通常飛行は可能ですが、新型の導力機関オーバルエンジンが開発が遅れて旧型を載せているだけで本来の性能が引き出せていないんです。ともかく、『アルセイゴ』は情報部に奪われ、試験飛行も無期延期……。王都で途方に暮れていたところをコリアさんが呼んでくれたんです。」

「なるほど……」

ペイトンの事情を聞いたエステルは納得した。

「ふふ、よろしくお願ひね。」

「城まで頼むわね」

「お願いします！」

「期待していますわよ。」

「ま、任せて下さい！」

ショラザードやカーリアン、ミントヒールの期待の言葉に整備士は緊張しながらも答えた。

そして飛行艇の入口についたクロ ゼは5人に確認をした。

「もう正午まであまり時間はありません。乗り込んでエンジンを起動しますか？」

「ええ、急ぎましょ。」

「期待しているわよ、二郎。」

「ええ、任せて。」

「頑張りうね、ママ！クロ ゼさん！」

「ふふ……昨日の戦いの物足りなかつた分、暴れさせてもらひつわね」

「わかりました。……ペイントンさん。サポートをお願いします。」

エスティル達の心強い言葉を聞いたクロ ゼはペイントンに言った。

「シーラ姉、いよいよね……」

「ええ……。難しいミッションだけど、基本は何も変わらないわ。まあ、カーリアン様がいるから問題無く成功すると思うわよ？迅速に……そして着実にね。」

そして6人は飛行艇に乗り込み、正午を待つた。

そしてついに正午の鐘が鳴り親衛隊と遊撃士による反撃作戦が今、開始された……！

感想お待ちしております。

（王都グランセル・リベル通信社）

正午を示す鐘が鳴り響く中、新聞記者のナイアルとカメラマンのドロシーが急いで外に出る支度をして、鐘を聞きナイアルは舌打ちをしてドロシーを急がせた。

「ちつ……始まつちまつたか！ 行くぞ、ドロシー。見晴らしのいい場所を確保するだーー！」

「ま、待ってくださいよーー！ すぐに感光クオーツをセッティングしますからー！」

慌てているドロシーは泣き」と言いながらもカメラの準備をしていた。

「おいおい、どうしたのかね！ ？ 3日ぶりに顔を見せたと思つたら……」

ナイアル達がなぜ忙しそうにしているかわからない編集長が理由を尋ねた。

「スクープですーー『リベル通信』始まって以来のどでかいスクープなんですよー！」

（グランセル城内・地下）

正午の鐘がなると同時に城の地下の壁が動き、そこから待機していたヨシュア達が姿を現した。

「城門の開閉装置は親衛隊の詰所にありますーー南側の階段を登りましょうー！」

「応！」

「はーっ！」

「フツ、行くとしようかー！」

ヨシュア達は急いで親衛隊の詰所へ向かつた。扉が開き、その音で氣付いた特務兵達はヨシュア達の姿を見て驚いた。

「え……！」

「バカな、侵入者だと！？」

「侵入された方は必ずそう言つんだよね。」

オリビエは特務兵達の言葉を聞いて自分が聞くとは思わなかつた言葉を聞いて、面白いと思つた。

「ま、気持ちは判らんでもないが。」

「……行きます！ はつ！！」

「グワツ！？」

「ヤアツ！」

「グツ！？ ガツ！？ ……」

ヨシュアが先制攻撃代わりクラフト 絶影を放ち、さらにテトリがクラフト 2連射撃を放つた！ 2人の不意打ちを受けた特務兵は何が起こつたか理解もできずに氣絶した。それを見たほかの特務兵は驚いた。

「なあ！？」

「いつのまに！？」

「余所見をしている余裕はあるかな！ …… 開け闇の扉！ …… ホワ

イトヘゲナ！！」

「「グワアアアア …… ! ! ! 」」

驚いている特務兵にオリビエは強力な時のアーツを放つた。無防備状態でアーツを受けた特務兵達は思わず叫び声を上げ膝をついた。

「怒れる大地よ、今ここに猛れっ！ 地響き！！」

「「グギヤツ！？」」

そこにテトリが放つた魔術が特務兵達に命中し、特務兵達の傷を増やした。

「せいつ！ たあっ！」

「「グツ！ ガハツ！ 」」

そして止めにジンが拳で殴り、殴られた兵達は壁にぶつかり完全に沈黙した。

「よし、一丁上がりだ。」

「やれやれ、あっけない。」

「はう……緊張しました……」

「今から城門の開閉装置を操作します！ 敵が来たら撃退してください！」

ヨシュアが3人に頼みごとを言いながら城門の開閉装置を急いで操作し始めた。

「おお、任せとけ！『不動のジン』の名に賭けて誰一人として中には入れん！！」

ジンはいつもの余裕な顔を捨て、鬪気を体全体に纏つた後、敵がいつもいいように攻撃態勢を取り

「フッ、今こそ天上の門が開く時……。第1章の最終楽章の始まりだ！」

オリビエは髪をかきあげた後、ジンの援護のために銃を懐から出し、敵が来る方向に銃口を向けた。

「元・神殺しの使い魔の実力……今ここでお見せしましょー！」

テトリは珍しく強気になり、敵が来る方向に弓矢を構えた。

「グランセル城・正門」

特務兵達が守っていた正門はヨシュア達によつて開かれた。それがわからない見張りの特務兵の2人は扉が開いた事に不審に思つた。

「な、なんだ……？」

「おかしいな……。完全封鎖と聞いていたのに。」

そして2人は念のために後ろを振り向いた時、自分達に向かつて突撃してくるコリア率いる親衛隊と遊撃士の混合部隊に驚いた。

「なっ！？」

「馬鹿な……」

(光よ、集え！光霞……)

「「うわっ！？」」

驚いている特務兵達にパズモは特務兵達の目の前に魔術を放ち、特務兵達の目を眩ませた！

(燃えよつ！)

「「ウギヤアアアツ！？あ、熱い！だ、誰か水を……！」」

そこにサエラブが吐いた炎の玉が特務兵達に命中し、炎に包まれ、火傷した特務兵達はうろたえた。

「そんなに水が欲しければくれてやるよつ！クルツ！？」

「ああ！？」

そしてカルナとクルツはアーツの詠唱をして、放つた！！

「「水流よ、吹きあがれ！……ブルーインパクト！？」」

「「うおつー？」」

2人が放つたアーツによって特務兵達は空中に浮き上がった！そして落ちてくる瞬間にはなだれこむ親衛隊や遊撃士にぶつかって吹き飛ばされて堀に大きな水音を立てて落下した。

そして城内に入るとな次々と特務兵達がさまざま方向から現れた。

「よし、敵がどんどん来ている！……親衛隊の者達よ！今こそ、情報部の者共に我らに汚名を被せたことを後悔させてやるぞー！」

「「「「「イエス、マム！……」「」「」「」「」」

作戦が成功した事に口元に笑みを浮かべたユリアは親衛隊達の士気を高める号令をかけた！

「おっしゃあつ！……俺達遊撃士の底力、見せてやろうぜー！」

「ルーアンの借り……倍返しにして返してやるよつー！」

「八葉一刀流に伝わりし剣技……未熟者ですが、カシウスさんやアリオスさんに代わってお見せしましょー！」

ユリア達を見て、グラツツ達もそれぞれ士気を高めた！

「ああ！……方術、貫けぬこと鋼の如し！……みな、行くぞー！エステル君の仲間達や親衛隊の方達に遅れをとるなー！」

「「「了解ー！」「」「」

（戦意よ、芽生えよ！！……戦意の祝福！！）

クルツが味方の防御能力を上げるのを見て、パズモもクルツやユリア達の身体能力を上げる援護魔術を使つた。

（フン……誇り高き”炎狐”を敵に廻せばどれほど恐ろしいか……
その身に刻ませてくれる！！）

そしてユリアやクルツ達は特務兵の集団と戦闘を開始した……！

第154話（後書き）

みなさんに嬉しいお知らせです！今、F1編を全て書き終えました
！！なので最後まで連日更新できますので、毎日楽しみに待つてい
て下さい！！……感想お待ちしております。

エルベ離宮・前庭

「これより王族を騙ったテロリスト集団の鎮圧を行う！」

卷之三

一万二千人、敵の正門の前に進み、着しから正矢宣の一部が二千人、敵

「ハツ！」

その上

そして兵士達の隊長は命令をした！隊長の命令を聞いた兵士達は銃剣を構えてエルベ離宮に突入しようとしたが

「グワアッ！？」

突如兵士達の頭上から魔力の弾が隠り注ぎ
兵士達は怯んだ

突然の奇襲に驚いた隊長は辺りを見回すと、なんと建物の屋根にリフィアが杖を構えていた。

「！奴がテロリストだ！攻撃開始！」

隊長の命令に答えた兵士達は銃をリフィアに向けて攻撃しようとし

たが
はい、
。

「ギヤアアアアツー?」

空中で待機していたエヴリーヌが手加減して放つた魔術
豪雷を受けて、悲鳴を上げた後氣絶した。

「なつ！？」

部下が全員やられた事に隊長は信じられない様子で驚いた。

「ハアッ！！」

「！？しまつた！グツ！！」

そこに茂みに隠れていたツーヤがクラフト 溜め突きを放ち、ツーヤの奇襲に驚いた隊長は持っている武器でなんとか防御した。

「フツ！！」

「グハツ！！」

さらにプリネがツーヤが現れた逆方向の茂みから現れて、レイピアで攻撃し、プリネの攻撃によつて隊長は崩れ落ちた。そしてそこには魔力の弾が命中した！

「グワアアッ！？」

魔力の弾が命中した隊長は氣絶から覚めた後、悲鳴をあげて、また氣絶した。

「リフィアお姉様！今のはやりすぎですよ！」

プリネは魔力の弾を放つた主 リフィアを見て大声で非難した。

「真実の敵を見極められない愚かな兵にはこれぐらいの報いは必要であろう…！」

「もう、お姉様つたら……」

リフィアの返事を聞いたプリネは溜息を吐いた。

「あの、ご主人様。のびている兵士の方達はどうしましよう？」

そこにツーヤが遠慮気味にプリネに話しかけた。

「そうね。ちょっと氣の毒だけど、ロープか何かで拘束しておきましょう。……エヴリースお姉様、手伝つてもらつていいですか！」

「はいはい。」

プリネの呼びかけに答えたエヴリースはプリネやツーヤと協力して兵士達を縛つた。

「ご主人様、ペルルさん達は大丈夫でしょうか？」

作業を終えたツーヤはプリネに別働隊で動いているペルル達の事を尋ねた。

「大丈夫でしょう。みな、それぞれ歴史に残る戦いを生き抜いて来

た猛者なのですから。」

ツーヤに答えたプリネは空を見上げた。

(頑張つて下さい。エステルさん、ヨシュアさん……)

（エルベ周遊道）

「先行部隊の連絡が途絶えた……！テロリストは強大な敵だ。総員、氣を引き締めて行くぞ！」

「…………イエス、サー！…………」

プリネ達の戦闘が終了して少しした頃、別働隊の正規軍がエルベ離宮に向かおうとした。

「荒ぶる水よ…………溺水！！」

「…………グワツ！…………」

「ガハツ！？」

しかしそこに突如、大量の水が滝のように落ちて来て、隊長や兵士達を地面に叩きつけた！

「行きますわよ…………！大放電！！」

「…………ギヤアアアアツ！？」「…………」

そこに雷が襲い、隊長達は感電した後氣絶した。

「うふふふふ！精靈王女たるこの私の力、思い知つたかしら？『わたくし』

氣絶した隊長達に木の枝に止まつて雷を放つた主 フイニリイが飛んで近付いて来て、胸を張つた。

「あの…………拘束をした方がよろしいのでは…………？」

胸を張つているフイニリイに茂みに隠れて魔術を放つたマーリオンが近付いて来て、指摘した。

「必要ありませんわ。魔力が高いこの私の雷をまともに受ければ、半日は動けませんわ。しかも貴女の魔術で水も被りましたから、効果は倍増でしてよ。」

「はい…………」

フイニリイの説明を聞いたマーリオンは納得した。

「2人とも～！次は南の方から援軍が来るよ～！！」

そこに周辺の様子を空を飛んで周辺の様子を窺っていたペルルが降りて来て、援軍が来る事を忠告した。

「もう来ましたの。……まあいいですわ。今度は私が貴女の代わりをしてあげますわ。」

「うん、わかった！」

そしてフィニーリイはペルルの役目を交代して、ペルルと同じように空を飛んで他に援軍がないか調べ始めた。

「じゃあ、ボク達も行こう！少しでもプリネ達の負担を減らさないとね！」

「はい……！」

そしてペルルとマーリオンは援軍の兵士達を迎撃つために、行動を始めた。

（グランセル城・空中庭園）

「くっ、何たる失態……。閣下が戻られる前に何としても撃退せねば……」

カノーネは侵入してきた親衛隊や遊撃士の撃退方法を焦りながら必死に考えていた。

「た、大尉どの！」

「と、特務飛行艇が！」

カノーネの傍に控えていた2人が上空から近づいてきた飛行艇に気付いた。

「しまった！そちらが本命か！？」

カノーネは近づいてくる飛行艇が相手の作戦の本命だと気付き、まんまと騙されたことに悔しさを感じながら、女王宮への侵入を止めるため

いつでも戦えるようにした。そして着陸した飛行艇から出て来たエステル達を見て驚いた。

「エ、エステル・ブライト！？それに……クロ ディア殿下！？」

「カノーネ大尉！またお邪魔するわよ！」

「おばさん達の企みもここまでだよ！」

「お祖母さまを……解放していただきます！」

「お、おば……！な、舐めるなア、小娘ども！」

エステルとミント、クロ ゼの言葉にカノーネは怒鳴った。

「フフ……私を忘れてもらつては困るわね。」

「あら。能天使であるニールの存在も忘れてもらつては困るわ。」
そこにカーリアンとニールが不敵な笑みを浮かべて、飛行艇から出で
カノーネ達の前に姿を現した。

「バ、バ力な……！貴様は”戦妃”！！何故貴様が遊撃士どもとい
る！？メンフィルは静観しているはずなのに……！」

カーリアンを見たカノーネはうろたえた後、怒鳴った。

「フフ……戦場に言葉はいらないわ！奥義！桜花乱舞！！」

「光よ、降り注げ！……爆裂光弾！！」

そしてカーリアンやニールはうろたえているカノーネや特務兵達にS
クラフトや魔術を放つた！

「キヤアアアツ！？…………」

「グワアアアアツ！？…………」

2人の攻撃にカノーネや特務兵達は悲鳴を上げた後、気絶して地面
に倒れた。

「え、えげつな……」

「あ、あはは……でもカーリアン様が味方でいて、本当に心強いで
すね。」

エステルの呟きにクロ ゼは苦笑しながら答えた。

「ふわあ～……カーリアンお姉さん、凄いね！～ニールさんも凄いよ
！」

一方ミントはカーリアンやニールを尊敬の眼差しで見ていた。

「鬼気迫るというか……。妙におつかない女だつたわね。いつたい

何者なの？」

気絶したカノーネを見て、シェラザードはエステルに尋ねた。

「リシャール大佐の副官よ。典型的な雌ギツネって感じ。」

尋ねられたエステルは嫌そうな顔をして答えた。

「なるほど、そんな感じだわ。さてと……目指すは女王宮ね！」

「はい、急ぎましょう！」

そしてエステル達は女王宮へ向かつた……

第155話（後書き）

という事でカノーネ達は瞬殺されました（笑）カーリアンがいる時
点でカノーネ相手に戦闘がながびくとかありえませんし。……感
想お待ちしております。

（女王宮内）

カノーネ達を倒した後、入口を守っていた特務兵を一瞬で倒したエスティル達は女王がいるはずの女王の寝室に向かおうとした時、特務兵に守られながら歩いて来る今回のクーデターでリシャールに王座につけるという言葉にまんまとせられた女王の甥——デュナン公爵が通りかかり、エスティル達を見て驚いた。

「は、反逆者ども！このこと来あつたな！？私を新たなる国王と知つての狼藉か！？」

「冗談は髪型だけにしなさいよ。あんた、まだ国王になつたわけじゃないでしょ！」

「そうだよ！それにおじさんが王様になつても、誰も喜ばないよ！」「な、なぬう！？」

デュナンはエスティルとミントの言葉を聞いて、怒った。

「デュナン公爵閣下ですね。私たちは遊撃士協会の者です。クローディア殿下の依頼で女王陛下の救出に来ました。大人しくそこを通してくれるところちらも助かるんですけど。」

ショラザードは公爵にその場をどうよう笑顔で警告した。

「ク、クローディアだと！？あの小娘……余計なことをしあつて！」

「デュナンおじ小父様……。もう、終わりにしてください。小父様はリシャール大佐に利用されていただけなんです。」

「な、何だそなたは……。」

見知らぬ少女に小父と呼ばれた公爵はわけがわからず、クローゼをじつとよく見てある人物に似ている事に気付いた。

「ク、ク、ク、クローディアではないか！なんだその髪は！？その恰好は！？」

デュナンはクロゼを指差しのけ反りながら驚いて叫んだ。

「やつと氣付いたのか……。」(いや、ルーアンで会った時も氣付いてなかつたわけだわ。)「

エヌテルはデュナンの様子を見て呆れて溜息を吐いた。

「よく判らないけど、ずいぶんと抜けた人みたいね。」

典型的な貴族の小物ですね」「二の様子」二つの事うつらぬけ

「」の様子だと私の事も知らなさそうね。

あの、黙っていた私が悪かったんだと思いません……それにカリ
アン様を知らないのは仕方がないと思います。カーリアン様はリベ
ールとメンフィルの会談にはいらっしゃいませんでしたから……」「
シェラザードとニルのデュナンに対する低い評価や呆れている様子
のカーリアンを見て、クローゼは公爵を少しだけ庇つたが、色々言
われた公爵は怒りの表情で叫んだ。

「……この私をよくもたばかってくれたな！」だから女という生き物は信用がおけんのだ！ 小狡く、狭量で、ささいな事ですぐ目くじらを立て……。そんな下らぬ連中に王冠を渡してなるものか！」

その時空気が凍りエステル、シェラザード、ニルからは無表情で、クロゼは困ったような表情で、ミントは頬を膨らませ、カーリアは口元に笑みを浮かべていたが、目は笑っていない表情でデュナンを見た。

「え、あの」

6人から無言のプレッシャーを受けた公爵は思わず言い淀んだ。

「か、閣下……。今のはマズイのでは……」

「あ、謝つた方がいいかと……」

嫌な予感を感じた特務兵達は公爵に謝るよう促したが

「ふーん……下らない連中か……」

エステルは笑顔だったが目が笑つていなく

「いやはや、見直したわ。このご時世に、しかもこのメンツにそんな事を言つなんて大した度胸がある発言ね……」

ショラザードも同じ表情で

「フフ……その言葉、ファーミやリファイア達の前でも言つて貰つてもいいかしら?」

カーリアンも同じような表情で

「性別で差別するような愚か者には天罰が必要ですわね……」

二ルは連接剣の刃を鞭のように地面に叩きつけた後、切つ先をデュナンに向けて、睨み

「……クロゼさんのおじさんだから、酷い目には会わせるつもりはなかつたけど……ミント、怒つたから許さない!」

ミントも二ルのように剣の切つ先をデュナンに向けて、睨み

「じ、ごめんなさい小父様。今はちょっと……弁護できそうにありません。」

クロゼは申し訳なさそうな表情で謝り、エステル達と共にデュナン達に向かつて攻撃した。そしてエステル達の怒りを受けたデュナンを守つていた特務兵達はエステル達が出す怒りのオーラに悲鳴を上げながら、一瞬でボロボロにされて氣絶せられ、無事なのはデュナンだけになつた。

「はい、一ト上がりと一セーで、お次は公爵さんの番かしら?」
エステル達がデュナンを見ると、エステル達を恐れて徐々に後退していた。

「女じょときが振るう鞭の味、味わつてもりおりつかしらねえ?」
ショラザードは鞭を構え

「あ～！思い出した！おじわん、ママやクロ ゼさんが参加した劇に出て来た悪者だ～！悪者は退治しなくちゃ、駄目だね！」

ミントはデュナンが学園祭の劇を邪魔した張本人である事に気付いて、剣を構え

「さて……と。天罰を下す時間のよつね？」

二ルは片手に光の玉を収束し始め

「”戦妃”を侮辱した罪……重いわよ」

カーリアンは双剣を構えた。それを見たデュナンは悲鳴をあげた。

「ひ、ひえええええ……。寄るな、寄らないでくれええ！」

「あ、あの……。そのあたりで許してあげては……」

悲鳴をあげているデュナンをさすがに可哀想と思つたクロ ゼは遠慮がちにデュナンを許すよう言つた。

「くつ、こうなつたら陛下を盾にするしか……。……ええい、ままよー！」

そしてデュナンがエスティル達から逃げて女王を人質にしようと、走り出した時、階段の手すりに顔を思いつきりぶつけてしまった。

「あやうつ……」

手すりに思いつきりぶつかってしまったデュナンは呻き声をあげた後、気絶した。

「あぢやあ……。ちよつと脅しすぎたかも。」

エスティルは氣不味そうな顔をした。

「まあ、邪魔したのは事実だし、いい薬になつたんじゃない？」

「そうだよ！」

「当然の報いね！」

「フフ……ま、面白いぐらい怖がつてくれたから、許してあげるわ

シヨラザード達は同情している様子はなかつた。

「はー……。不幸な事故だと思います。でも、気絶した小父様をこのままにしておくわけにも……」

クロ ゼは氣絶したデュナンをどうしようか悩んでいた所

「……こ、公爵閣下！？」

フイリップが慌てた様子でデュナンに近寄った。

「あ、フイリップさん！」

エスティルはフイリップを見て声をあげた。

「エスティル様……。それにクローディア殿下……。それに貴女は力
一rian様！この度は、我が主が迷惑をおかけして申しわけありません！
せん！全ては、閣下をお育てしたわたくしの不徳の致すところ……。
どうか、これ以上の罰はわたくしめにお与えください！」

フイリップはエスティル達に向かつて頭を深く下げた。

「ちょ、ちょっと待つてよ！」

頭を下げられたエスティルはどうすればいいかわからず慌てたが

「フイリップさん……どうか頭をお上げください。私たちは、お祖
母さまを……陛下をお助けしに来ただけです。もとより、小父様に
何もするつもりはありません。どうか、私の部屋で小父様の手當て
をしてあげてください。」

「で、殿下……」

エスティル達の代わりにクロ ゼが寛大な処置を命じた。

「実際、大した傷はないわ。ぶつかったショックで氣絶しているだけだから大丈夫。」

「ミント、もう怒つていないよ！」

「面白いものが見れたから、別にいいわよ」

「みなさんが許しているのだから、天使のールが怒るわけにもいき
ませんわ。」

「み、皆様……本当にありがとうございます。この恩、決して忘
れませんぞ！」

エスティル達の寛大な心に感動したフイリップはデュナンをクロ ゼ
の部屋へ運んで行つた。

「カノーネ大尉！？しつかりして下さい！おい、こっちにも侵入者

がいるぞ！」

その時特務兵の声が女王宮の外から聞こえて来た。

「げつ。気付かれちゃったわ！」

「不味いわね……女王陛下を守っている特務兵もいるかもしれないから、下手したら挟み撃ちにあうわ。」

特務兵の声を聞いたエステルは焦った。シェラザードも難しそうな表情で考え込んだ。

「しようがないわね……私が相手をしてあげるから、貴女達は先に行きなさい。」

「一人だと撃ち漏らす事があるかもしれないし、ニールも付き合つわ。」
そしてカーリアンとニールが援軍の特務兵達の相手をする事を申し出た。

「わかった！」

「お願いします！」

カーリアンとニールに援軍の特務兵達の相手を任せたエステル達は再び女王の元へ急いだ。急いで女王の部屋に入ったエステル達だったが、そこには誰もいなく奥のテラスにいる可能性も考え、テラスに向かつた。

「女王宮・テラス」

「お祖母さま、大丈夫ですか？」

「助けに来ました、女王様！」

「クローディア……。それにエステルさんも……」

テラスにいたリベルル国王、アリシア女王は助けに來た人物を見て複雑な表情をした。なぜなら

「ようやく來たか……。待ちくたびれてしまつたぞ。」

自分が逃げないよう監視していた兵が、特務兵の中でもリシャール大佐以上の実力を持つと囁かれている仮面の男——ロランス少尉が

エステル達と戦うつもりであつたからだ。

「ロ、ロランス少尉！どうしてこんな所に……」

ロランスを見たエステルは驚いた。

「あー！！先生とカルナさんを襲つた人だ！！」

またミントはロランスを見て、テレサやカルナを襲つた人物の一人である事に気付いた。

「フフ……。私の任務は女王陛下の護衛だ。ここにいても不思議ではあるまい？」

「ふ、ふざけないでよねー。いくらあんたが腕が立つてもこいつちは4人もいるんだから！」

ロランスの言葉に反応したエステルは強がりを言った。

「なに、こいつ……。ずいぶん腕が立ちそうね。いったい何者なの？」

シェラザードはロランスの正体を知つていそうなエステルに何者か尋ねた。

「情報部、特務部隊隊長。ロランス・ベルガー少尉！もと猟兵あがりで大佐にスカウトされた男よ！」

「ほう、そこまで調べていたか。さすがはS級遊撃士、カシウス・ブライトの娘だ。」

「！――！」

「外部には公表されていない先生のランクを知つていいなんて……。こいつ、タダ者じゃないわね。」

シェラザードは遊撃士協会内部の情報まで手に入れているロランスを最大限に警戒した。

「フフ……。お前のことでも知つてているぞ。ランクC、『風の銀閃』シェラザード・ハーヴェイ。近々、ランクBに昇格予定らしいな。」

「…………」

ロランスの不敵な笑みを見て、シェラザードはロランスを睨んだ。

「その少女に関しても知つていてるぞ。マーシア孤児院出身の”闇夜の眷属”の少女、ミント。近々、ブライト家の一員として、ロレ

ント市民に登録されるらしいな。」

「…………」

口ランスに見られたミントはショーラガードと同じように睨んだ。

「あ、あの……。お祖母さまを返してください。もしもあなたが大佐に雇われただけなのならもう戦う理由などないはずです。」

エステル達が口ランスを警戒する中、クロ ゼは口ランスに女王を解放するように嘆願した。

「この世を動かすのは目に見えている物だけではない。クローツ盤だけを見ていっては歯車の動きが判らぬよ!」

「え……」

突如口ランスが語り出したことにクロ ゼはわけがわからなかつた。「心せよ、クローディア姫。国家というのは、巨大で複雑なオーブメントと同じだ。人々というクローツから力を引き出すあまたの組織・制度という歯車……。それを包む國土というフレーム……。その有様を把握できなければあなたに女王としての資格はない。」

「!?」

口ランスの意味深な言葉にクロ ゼは何か大事なことを言われたと気付き、それを必死に考えた。

「面白い^{たと}喻えをするのですね。ですが……確かにその通りなのかも知れません。まさか、この場で國家論を聞くとは思いませんでしがたけれど……」

ただ一人、女王だけは口ランスの言葉を理解し、その言葉を重く受け止めた。

「フ……これは失礼した。陛下には無用の説法でしたな。」

それを聞き口ランスは口元に笑みを浮かべた。

「な、なんかよく判らないけど……。要するに、女王様を解放する気はないってわけね。」

エステルは何がなんだか理解できなかつたが口ランスが女王を解放

する気ではないと思い、棒を構えいつでも戦えるよつにした。

「だとしたら……どうする?」

「決まつてゐる……。力づくでも返してもうわー！」

ロランスの挑発ともとれる言葉にエステルは強く言つ返し

「そつね……。こゝまで来て後には引けない。」

「孤児院を燃やし、先生を襲つて、みんなを悲しませた事……ミント、絶対に許さない！みんなに代わつて、みんなの悲しみと怒りをお兄さんにぶつけてやつつける！」

ショラザードとミントはエステルの言葉に呼応するよつにそれぞれロランスと戦つ意思を告げ

「あなたからは敵意は感じられませんけど……。お祖母さまを取り戻すためなら剣を向けさせていただきます！」

クロゼもレイピアを構えてロランスと戦おつとした。

「フフ、いいだろつ……。なりば、こちひも少し本領を出させてもらうや。」

「え……ー?」

エステルがロランスの言葉に驚いているとロランス少尉が仮面を放り投げて素顔を出した。

「…………」

「……銀髪……」

エステルは髪の色に驚き

「いや……アッショブロンドね……。ビツヤヒコツヒ……北方の生まれみたいだわ。」

ショラザードはロランスの容姿を見て出身地を予測した。

「フフ……。北であるのは間違いない。まあ、こゝからそれほど遠くはないがな。」

ショラザードの推測にロランスは口元に笑みを浮かべて答えた。そして剣を構えた！

「お前たちが女、子供であろうが手加減するつもつはない……行ぐぞ……」

そしてエスティル達とロランスの戦いが始まった.....！

第156話（後書き）

次回は初めてのレーヴェ無双です（笑）ただ、そんなに長続きしませんが……援軍の特務兵達を倒した2人が戻ってきたら……わかるでしょう？……感想お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7541p/>

英雄伝説 ~光と闇の軌跡~

2012年1月11日08時54分発行